天にみ栄え

宮城学院の百年

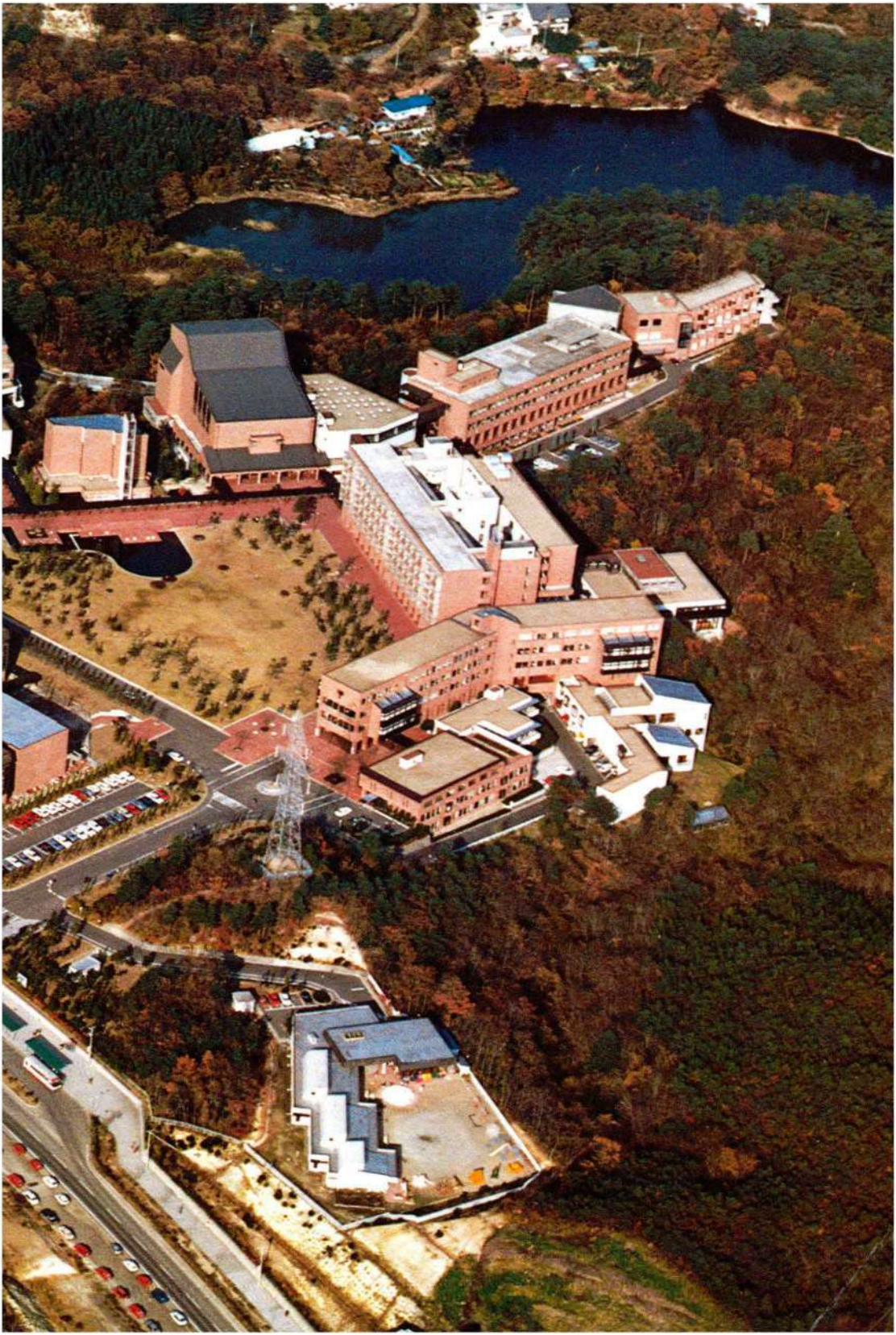
天にみ栄え

宮城学院の百年



神のなされることは皆その
時にかなって美しい。
神はまた人の心に永遠を思
う思いを授けられた。
それでもなお、人の心は神
のなされるわざを初めから
終りまで見きわめることは
できない。

（伝道の書　三・一一）









若き日の押川方義



1864（元治元）年頃の横浜居留地と港



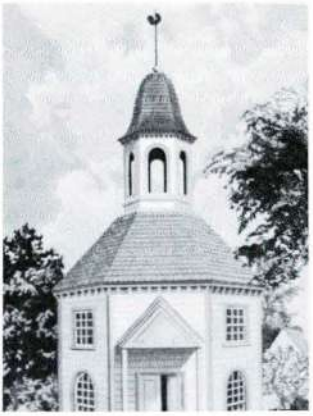
1887（明治 20 年）の第 1 回宮城中会



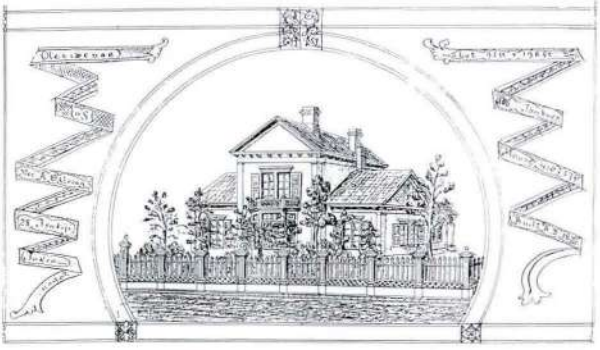
創立当時（1881 年 5 月）の仙台教会



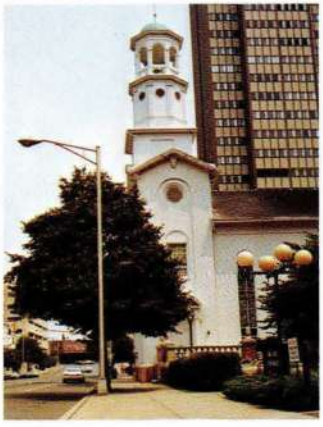
フランクリン・アンド・マーシャル大学



合衆国改革派最初の教会



東京築地 28 番地にあった最初の宣教師館



セイラム・リフォームド教会
（ハリスバーグ）



ランキャスター神学大学と公文書保存室



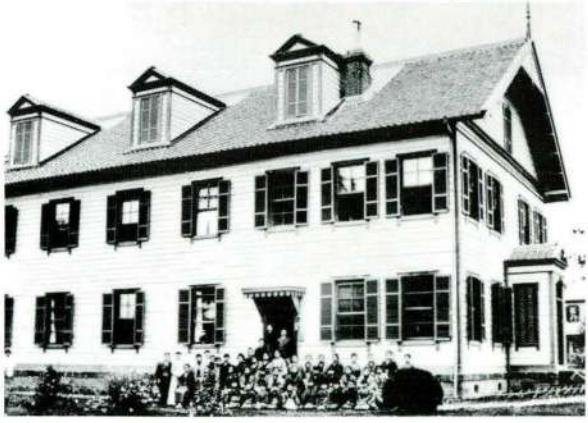
ホーイ夫妻



初代校長　E.R. ブールボー



最初の仮校舎，田辺氏別邸



東三番丁の最初の校舎



第2代校長
J.P. モール



不便をしのんだ
片平丁仮校舎



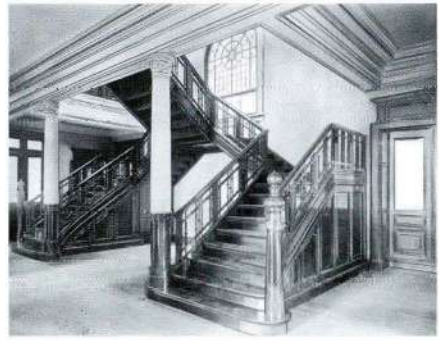
第3代校長 L. ズーフル



第5代校長
S.L. ワイドナー



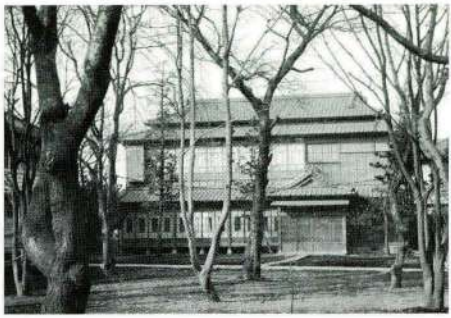
第4代校長
H.K. ミラー



第一校舎の内部



創立25周年祝賀式（第一校舎前）



ファウスト記念館



第6代校長
A.K. ファウスト



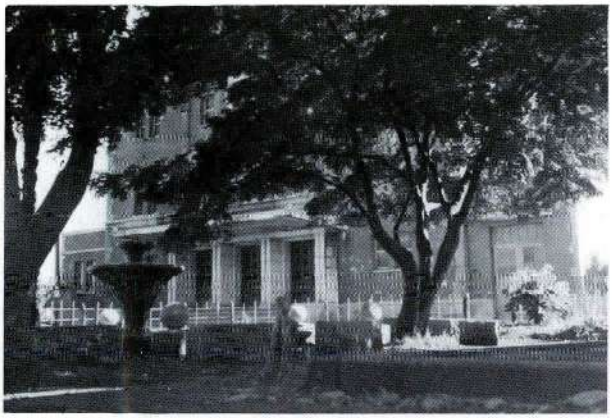
メイポールダンス



最初の理事会議事録



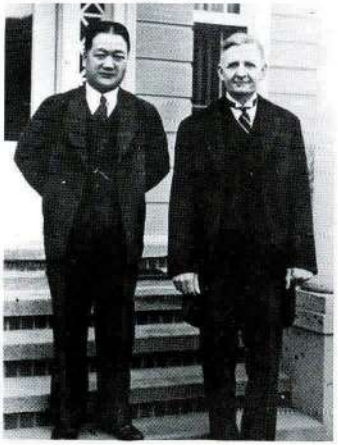
第二校舎献堂式



大講堂と噴水



師との語らい



西山貞（第８代）・C.D. クリーテ（第７代）両校長



奉安殿



初代学院長　西山貞



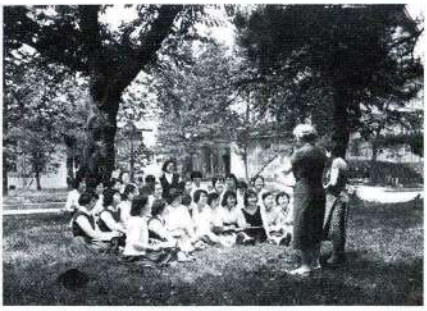
仙台空襲で焼失した第一校舎



復興急ピッチ，落成した本館



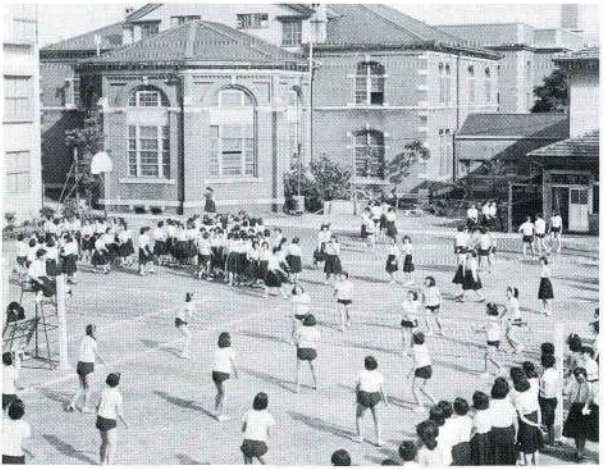
大学生（1955 年）



キャンパス内でのひとコマ



第 2 代学院長
小田信士



高校生（1967 年）



一号館



第４代学院長
清水二郎



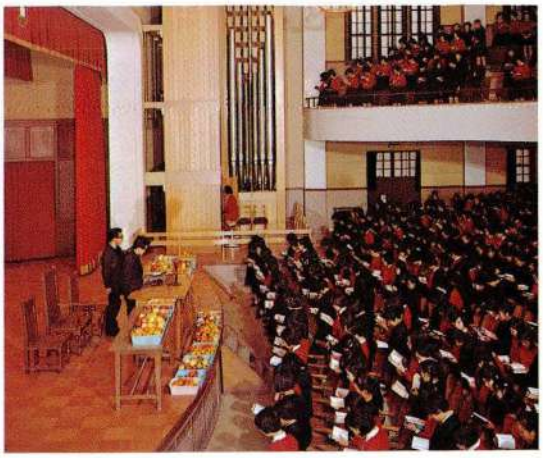
第３代学院長
佐藤昌彦



新キャンパスとなる丸田沢地区全景



一号館の日だまりで



中学校収穫感謝祭



移転直前の東三番丁キャンパス



創立百周年記念式典



学院長　早坂禮吾



理事長　佐藤利吉



事務局長
長谷川英敏



中学校
高等学校　校長
大沼　隆



女子大学
女子短期大学　学長
山形孝夫



東北学院・宮城学院創立百周年記念ＮＨＫ交響楽団演奏会



創立百周年記念オリジナルミュージカル「ハートバイハートツアー」

校歌



作詞　土井晩翠



作曲　K.I. ハンセン

一、天にみ栄え　地に平和
人にみ恵み　あけくれに
祈る尊き　み教えの
光を仰ぐ　姉妹

二、ああ曙よ　光明よ
春よ望と　愛と信
嵐も雨も　叢雲も
我には示す　明日の晴

三、わが名にしおう　宮城野の
錦の郷に　日々に織る
あやを心に　粧いつつ
聖なるわざに　いそしむ身

四、鳩のやさしみ　清浄の
操みどりの　橄欖の
色はとこしえ　人の世に
神のほまれを　あらわさん

はじめに

学院長　早坂禮吾

わが宮城学院は一九八六（昭和六十一）年九月十八日、創立満百年の記念すべき日を迎えました。この日、宮城学院に在籍する学生・生徒、在職する教職員はすべて四千五百、心を一つにして百年にわたる神の御導きに感謝し、先人のご努力とご指導に深い敬意を捧げました。私たちはその思いのあらわれとして、百年の歩みを顧み、更に第二の世紀を築き上げてゆくために、かねてから宮城学院百年の歴史を編むことを準備していました。

本学院の歴史の編纂は、過去にすでに幾度か試みられています。「私立宮城女学校一覧」（創立二十五周年記念）、「宮城女学校五十周年史」、「宮城学院七十年史」、「宮城学院八十年小誌」、「宮城学院最近十年小史」などがそれですが、私たちはこれらの先例をふまえて、更に新しい資料を発掘し、史実を究め、誤りを正して後世に申し継ぐものを生み出したいと願っていました。

桜ヶ丘キャンパスに新天地を開いた一九八〇（昭和五十五）年の秋、私たちは最初の仕事として「宮城学院資料室」を開設しましたが、これは同時に「宮城学院百年史編纂室」でもありました。一九四五（昭和二十）年の戦災で貴重な資料のほとんどを焼失した宮城学院にとっては実に新しい第一歩というべきものでした。

同時に開かれた同窓会館の資料室も活発に資料収集を開始しました。毎年、初夏に催されるホーム　カミングデー

を目標として、それぞれテーマをかかげて展示された記念品の類は見事なものであります。これに対して百年史のための資料室には専ら詳密な文献的資料が集められました。この二つの資料室は同窓生や旧教職員などの寄せる記録としての文書や写真などを中心に、いわば裏表の関係で協力しあい、新しい躍動をぐんぐんと示しはじめました。特に後者にあつて、開設以来室長として勤務した渡邉弘道氏を、過年、アメリカおよびイギリスに派遣し、枚数にして一万八千にも達しようという膨大な文献をコピーして持ち帰り得たことは画期的な事業でした。彼地では創立前から関係者が克明に記し、とりかわした公私の往復文書が十全に保存されており、氏が特に許されて閲覧・複写した資料は、まことに貴重なものばかりでした。これらによって従来の疑問が解明され、誤伝が正された例は、文字通り枚挙にいとまがありません。

しかし、記録されている歴史的事実を羅列してみても、それが直ちに「歴史」とはなり得ません。個々の歴史的事実が、歴史として安定した評価を得るまでにはなお多くの時間を要することでありましょう。そもそも「百年史」を百年目に編むということは、どだい無理なことであります。仮に百年を古代・中世・近代・現代と区分けしてみると、古代の部分はすでに歴史として定着し、日本の教育史、あるいは東北のキリスト教史と密接な関係が成立していますが、本学院の百年をかたちづくった「前史」にあたる部分の詳細は、大半がこのたび審らかにされたばかりですし、中世・近代にあたる部分は、未だ評価が定まりかねているところが多いのであります。最も新しい部分は、今懸命に資料を保存・収集し、整理するという段階です。そうして見ると、長い間「百年史」を目指して努力してきたにもかかわらず、「百年史」の名を冠するのは誠におおけなき所業であるとの思いが、時と共に募ってまいりました。

ひるがえって、自ら収集した資料を克明に読みすすめてみると、そこには人の思いをはるかに超えた、神の摂理がほのかに望まれてきました。そうした時、耳の底になじみ深い校歌の一節が鳴りひびいたのです。「天(あめ)にみ栄(さか)え、

地に平和……」。かくして私たちは『天にみ栄え』をそのまま書名として頂戴することにしたのでした。

今、ここに『天にみ栄え　――宮城学院の百年――』を多くの宮城学院を愛して下さる方々の机辺に送るにあたり、それぞれの持場、立場から協力を賜わった内外の方々に心から感謝を捧げたいと思います。未熟なものではありますが、この宮城学院百年の歩みの中に、真(まこと)の神の摂理の一端を読みとって頂けたならば、私たちの望外のしあわせと言わなければなりません。

〝百年史〟の仕事は曲りなりにも一応の結着を遂げましたが、宮城学院の歴史は終ったわけではありません。実はこれからが大事業なのです。そのためには常に資料室の充実をはかり、遠く二百年の日を望みながら途絶えることなく、やがては仙台の、東北の、そして日本のキリスト教史につらなるものとして完成させたいものであります。天の栄光は永遠なのでありますから――

一九八七年三月二十二日（復活節前第四主日）

天にみ栄え ――宮城学院の百年――《目　次》

はじめに

第一章　凡(すべ)ての造られしものに福音を……1
　プロテスタントの日本伝道
　はじめに　プロテスタントの外国伝道　プロテスタントの中国伝道　プロテスタントの日本伝道　ペリーの来日　「日米和親條約」　「日米修好通商條約」　各教派宣教師の来日

第二章　神のみ　奇(くす)しき事跡(みわざ)を……21
　パーム・押川・吉田の出合い
　J・H・バラと「日本基督公会」　S・R・ブラウン　「日本基督一致教会」　東北伝道の願い　押川方義の生い立ち　「エディンバラ医療伝道会」　T・A・パーム　パームの来日　パーム夫人の召天　パームの新潟着任　パームの

医療伝道　押川方義とパームの出合い　吉田亀太郎の生い立ち　吉田亀太郎の受洗

第三章　我は福音を恥とせず……63
開校への胎動
吉田亀太郎の願い　新潟大火とパームの決断　「東北を日本のスコットランドに！」　「仙台教会」創立　「合衆国改革派教会」　A・D・グリング　「在日宣教師社団」　伝道準備期間　グリングの伝道　J・P・モール　モールの来日　モール夫妻のバイブルクラス　「元大工町教会」　「番町教会」　グリング夫人の要望　女学校創設の気運　メアリー・B・オールト　エリザベス・R・プールボー　日本派遣婦人宣教師の選任　バラの提言　押川とグリングの会談　W・E・ホーイ　ホーイの「宣教師就任契約書」　江戸時代の女子教育　宮城県の教育状況

第四章　シオンの女子（むすめ）よ　喜び楽め……141
創立とプールボー校長
ホーイの来日　押川とホーイの出合い　押川の「日本基督一致教会」加入　仙

台神学校創立　日本派遣婦人宣教師の送別礼拝　プールボーとオールト横浜到着　女学校仙台に創設と決定　プールボーとオールト仙台着任　プールボーらの最初の住居　首藤陸三　開校準備　設立参画者　宮城女学校創立設置申請書類　宮城女学校開校　東華学校　校舎新築必要の訴え　プールボーらの伝道活動　在日宣教師社団会議　創立当時の状況　外国伝道局長報告　校地購入　第二年度開始　第二高等中学校　校舎・宣教師館の建築第二年度年次報告　第三年度開始　校舎献堂式　押川の欧米視察　「ノアの箱舟」　学則変更　プールボーの報告　メアリー・A・ケルカー記念蔵書　第五年度年次報告　第六年度開始　いわゆる「宮城女学校のストライキ」　黒光の回顧文　プールボー校長の報告内容　プールボー校長の辞意表明　第七年度年次報告　第一回卒業証書授与式　プールボー校長送別会　プールボー姉妹歓迎会

第五章　確(かた)くして揺(うご)くことなく……

発展と試錬

第二代校長モール就任　山形英語学校　橋本經光　第二回卒業式　バイブルウーマン　奨学金提供者　「婦人外国伝道会」　第三回卒業式　卒業生達の回顧　第十年度年次報告　ズーフル校長の活躍　押川、東北学院長辞任　バイブルハウス　教科課程改正　「私立学校令」他の公布　「文部省訓令第十二号」　外国人校主誕生　ワイドナーの来任　在日宣教師社団特別会議　校舎

全焼　片平丁の仮校舎　第十回卒業式　復興計画　片平丁時代　早坂哲郎　授業再開の延期　寄宿舎建築工事　新校舎の定礎式　第十八年度始業　新校舎竣工

第六章　凡(すべ)てのこと相働きて……381

躍進の十年

新校舎における教育　文部大臣の視察　宮城女学校ＹＷＣＡ　「宮城女学校運営委員会」　ミラー校長の就任　ワイドナー校長就任　「萩の下露」　校章制定　第十八回卒業式　予科の廃止　創立満二十五年記念式典　「私立宮城女学校一覧」　専攻科設置

第七章　錬達は希望を生ず……469

大正時代から昭和へ

明治から大正へ　「大正時代」　ファウスト校長　専攻科の充実　寄附行為制定と理事会の設置　第二校舎建設　「校報」と「橄欖」　創立四十周年　ファウスト記念館　クリーテ校長　恐慌とファシズム　創立五十周年　大講堂　軍国主義的風潮の強化　クリーテ校長の辞任と帰国

第八章　四方より患難（なやみ）を受くれども……565
戦禍と復興、西山学院長時代
戦時体制と財団法人化　「教育勅語ノ聖旨ヲ奉體シ」　戦災―終戦　フェニックスの羽ばたき　寄附行為の改正と新学制　教育体制の充実　学校法人としての拡充　創立七十周年　プロテスタント日本宣教百年

第九章　惟（ただ）エホバの旨（むね）のみ……595
拡充と「改革」
小田信士学院長　三つの方針とその具体化　施設の大拡充　「制度改革」
佐藤昌彦学院長　清水二郎学院長

第十章　神にむかひて歓びよばはれ……637
移転から「百周年」まで
新校地への始動　総合移転準備　新キャンパス建設　新校地の植物と鳥類
百周年記念事業　各校の現況　結び

付

同窓会小史……745
敷地及び校舎の変遷……813
歴代学校役員……821
旧教職員名簿……824
現学校役員……842
現任教職員名簿……844
土地・建物……849
略年表……850

おわりに

題字　早坂禮吾

第一章　凡（すべ）ての造られしものに福音を

そして彼らに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。」

（マルコによる福音書　第十六章十五―十六節）

プロテスタントの日本伝道

はじめに

宮城学院は一八八六（明治十九）年九月十八日、「宮城女学校」として創立を認可された。設置申請者である押川方義（おしかわまさよし）が同年九月六日に宮城県知事松平正直に提出した宮城女学校の「私立学校設置之儀ニ付申請」書によると、創立の目的は、「本校ハ女生徒教育ノ為ニ内外基督信徒有志ノ創設スル所ニシテ其目的トスル所ハ純（ママ）全タル基督教主義ノ道徳ヲ基トシ最良ノ方法ヲ以テ高等普通ノ学課ヲ女子ニ授ケ善良有智ノ婦人ヲ養成シ以テ女子タルニ愧ツルナカラシメントスルニアリ」ということである。この創立に至る経過を明らかにするためには、日本におけるプロテスタント・キリスト教伝道の歴史的背景を理解する必要がある。

わが国では一六〇三（慶長八）年に徳川家康によって開かれた徳川幕府が、その幕藩体制を維持するために、長い間、「鎖国攘夷」と「キリスト教禁教」の二政策をとり続けてきた。このようにしてわが国が封建社会体制下で鎖国政策をとっていた十七世紀中頃から十九世紀中頃までの間に、欧米諸国においては諸情勢が急速に大きな変化を示していた。すなわち、イギリスにおいては非国教徒への弾圧がひどく、いわゆるピルグリム・ファーザーズ（Pilgrim Fathers）と称されるピューリタン（Puritan）を初めとして信仰の自由を求めて新天地アメリカに移住する者が続出し、一七〇〇年代半ばにはアメリカ大陸東岸に十三州に及ぶイギリス領植民地が成立するに至った。彼らは神の導きを信じつつ新天地アメリカに自由な新世界を建設しようとの意気に燃えていたが、イギリス本国はこの植民地を本国への原料供給地並びに本国の商品販売市場と考え、貿易統制によって輸出入差額を蓄積しようとする重商主義政策を推進して植民地の商工業を圧迫し植民地との貿易を独占支配しようとした。特に本国は植民地に砂糖条例

をはじめとして次々と課税するに及び、本国のこの政策は植民地の不満をかい、いわゆる「ボストン茶会」(Boston Tea Party) 事件となって爆発し、これを武力で弾圧しようとする本国の高圧的態度に対して植民地十三州が反抗して遂に独立戦争「一七七三（安永二）―一七八三（天明三）年」がおこった。かくて一七七六（安永五）年にはアメリカ合衆国の「独立宣言」が発せられるに至った。

次にフランスではアンシャン・レジーム（Ancien Régime「旧制度」）と呼ばれる不合理な社会体制の下で、全国民二千五百万人の中僅かに三十万人たらずの第一身分の僧侶と第二身分の貴族とだけが諸種の特権をほしいままにし、国民の九十パーセントにあたる被支配階級である第三身分の平民（市民・農民）は政治的権利がなく、特に農民は貴族や大地主から負わされた封建的義務のため生活は苦しく、また、商工業に従事する市民も自由な活動を束縛されており、さらに労働者や職人も極めて苦しい生活を強いられていたので彼らはすべて現状打破を望むというように社会の不平等な状態は甚だしかった。そこでルイ十六世（Louis XVI 1754-1793）は、頻繁な対外戦争と豪奢な宮廷生活とによって破綻に瀕していたフランスの財政難を国民の力をかりて解決しようとし、一六一四（慶長十九）年以来閉ざされていた三部会を一七八九（寛政元）年五月ヴェルサイユ（Versailles）に召集した。第三身分の議員たちはこの機会に政治の改革をはかろうとして全国から集まったが、会議は冒頭から特権身分と第三身分の激しい対立となり、第三身分は三部会からわかれて国民議会を組織し、王も国民議会を認めるに至り、中世以来の三部会はここに解消し、国民議会は直ちに憲法の制定に着手した。しかし、王は貴族たちに動かされて軍隊をヴェルサイユに集めて国民議会を圧迫しようとしたので社会不安はより一層高まった。

このような情勢の下で、一七八九年七月十四日、パリの民衆は専制政治の象徴と見なされていたバスチーユ（Bastille）の牢獄を襲撃し「フランス革命」が勃発し、民衆の暴動は全国にひろまった。この間にも国民議会は憲法制定に努力し、一七八九年八月二十七日にはラファイエット（Marie J. LaFayette 1757-1834）らの起草した「人権宣

言」を公布して新憲法の基本精神を明確にした。その後、一七九一（寛政三）年九月に至って新憲法が制定された。このように「フランス革命」は社会矛盾の当然の結果として勃発したが、これを促進したのは啓蒙思想の普及とアメリカ合衆国の「独立宣言」の影響とであったと言えよう。

アメリカ合衆国の「独立宣言」に至る過程や「フランス革命」の進展などと時期を同じくして、十八世紀後半にイギリスでおこった産業革命はまたたく間にヨーロッパ大陸並びに北アメリカにも広まって行った。従来、手工業生産で行なわれていた紡績織物工業が蒸気機関を動力とする工場制機械工業生産に変化し、良質廉価な製品の生産量を飛躍的に増大させ、さらには他の諸工業部門、鉱山業、製鉄業等にも産業革命が及んでいった。このような産業の発展により、原料や製品が大量に輸送されることとなり、その需要に応えるべく蒸気機関車や蒸気船が発明されて運輸・交通面でも革命が行なわれた。このように産業革命と交通革命とが行なわれたことは、経済の発展を大いに助長することとなり、欧米諸国の諸船舶が競って海洋を往来することとなった。特に独立後間もないアメリカ合衆国が一八四八（嘉永元）年にメキシコ領のカリフォルニアを獲得して金鉱山が盛んに開発されるようになってからは、世界の目はアメリカ合衆国の太平洋岸にそそがれるようになり、アメリカ合衆国の西海岸の諸港を寄港地として中国の広東、香港などの諸港との間を航行する船舶数も多くなった。こうなると太平洋を航行する各国の船舶にとっては太平洋西側に位置するわが国の諸港は当然、燃料や飲料水などの補給を受けるのに重要な寄港地として考えられるようになり、イギリス、ロシアその他の諸国の船舶がわが国の近海を頻りに航行し、各国ともわが国に開国を迫ろうと考えるようになった。

プロテスタントの外国伝道　ところで福音主義プロテスタント・キリスト教においては、十八世紀になって、ドイツの敬虔主義者たちやイギリスのメソジスト運動者たちによって体験された内的な救いの信仰と、世俗的生活からの脱却と聖なる生活の実践とを世界中の人々に宣べ伝えようという運動がおこり、それはまたピューリタニ

14 ¶ *Afterward he appeared vnto the eleuen, as they ſate ‖ at meat, and vp-braided them with their vnbeliefe, and hardneſſe of heart, becauſe they beleeued not them, which had ſeene him after he was riſen.

15 *And he ſaid vnto them, Goe yee into all the world, and preach the Goſpel to euery creature.

16 He that beleeueth and is baptized, ſhalbe ſaued,* but he that beleeueth not, ſhall be damned.

「凡ての造られしものに」

ズムの精神とも通ずるところがあって、イギリスやアメリカのリヴァイヴァル運動（信仰復興運動）となり、プロテスタント諸教派が、ただキリストによる救いという恵みを、イエスを知らない人々に宣べ伝えることを唯一の使命とする機運となり、これが外国伝道というかたちをとるようになった。それはまずオランダ、デンマーク、イギリスなどの植民地に、そしてさらにその他の異教の国々へという順序で行なわれた。

初めて外国に宣教師を派遣した伝道会として著名なものは、ドイツのルター派神学者で且つ敬虔主義運動の指導者であるアウグスト・ヘルマン・フランケ（August Hermann Francke 1663-1727）の指導のもとに一七〇五（宝永二）年に設立された「デンマーク王立伝道会」（「デンマーク・ハルレ伝道会」）であると言われる。[註二] バルトロメウス・ツィーゲンバルク（Bartholomäus Ziegenbalg 1683-1719）とハインリッヒ・プリュッチャウ（Heinrich Plütschau 1678-1747）両宣教師を一七〇六年にインドの南東部沿岸にあるデンマーク領植民地トランクバール（Tranquebar）に派遣した。彼らはタミール語を習得して南インドの伝道活動に活躍した。

一七九二（寛政四）年に設立された「イギリス・バプテスト伝道会」（Particular Baptist Society for Propagating the Gospel among the Heathen. 現在の Baptist Missionary Society.）はウィリアム・ケアリ（William Carey 1761-1834）をインドのカルカッタの北セラムポール（Serampore）に派遣して伝道活動を行なった。この伝道成果がはげみになって一七九五（寛政七）年に「ロンドン伝道会（London Missionary Society; L.M.S.）が、一八一二（文化九）年には英国国教会によって「アフリカ東洋伝道会」（C・M・S）が、また、同年、アメリカの会衆派

によって「アメリカン・ボード」（American Board of Commissioners for Foreign Missions；A.B.C.F.M.）が設立され、それぞれ成果をあげた。南アフリカや中央アフリカの探検家として大活躍をし且つまた、伝道活動にも大きな成果をあげたかの有名なデーヴィッド・リヴィングストン（David Livingstone 1813-1873）は、一八一六（文化十三）年、「ロンドン伝道会」から南アフリカに派遣されて大きな伝道成果をあげたロバート・モファット（Robert Moffat 1795-1883）の女婿である。また、一八二二（文政五）年に設立された「パリ・プロテスタント伝道会」も東洋伝道を計画し、さらに一八二九（文政十二）年に「スコットランド一致長老教会」（United Presbyterian Church of Scotland）がインドに派遣した宣教師アレキサンダー・ダッフ（Alexander Duff 1806-1878）もカルカッタで学校を創立し三十有余年にわたって伝道活動並に教育に従事した。

このようにしてインドにおけるクリスチャンの数は一九〇一（明治三十四）年には約二百六十六万人に達し、さらに一九一一（明治四十四）年には約三百五十七万人となっている。また、十七世紀半ば[註二]から「オランダ改革派教会」が、又、十九世紀初頭から「バプテスト派伝道会」がそれぞれ伝道活動を行なったセイロン島並びにビルマなどの仏教国においても、一九一一年にはそれぞれ約四十万人並びに約七万人の信者を有するようになっている。

プロテスタントの中国伝道　ところで鎖国日本へのプロテスタント伝道の働きかけは、十九世紀初頭に行なわれはじめた。それは、具体的には、当時中国で伝道活動を行っていた欧米諸国の宣教師たちによって東洋伝道の一環として着手された。したがって、プロテスタント・キリスト教の日本伝道は、中国伝道の延長の感があり、中国在住の宣教師たちは一日も早く日本に伝道を開始しようと機会到来を待ちのぞんでいた。それ故、まず中国におけるプロテスタント・キリスト教伝道について概観しよう。

中国におけるプロテスタント・キリスト教の伝道は、一八〇七（嘉慶十二・文化四）年に、「ロンドン伝道会」派遣のロバート・モリソン（馬礼遜 Robert Morrison 1782-1834）が中国初のプロテスタント宣教師として澳門（マカオ）に到

着した時に始まると言って良い。モリソンが到着した当時の中国では、いわゆる「典礼問題」[註三]によって一七二三年以来禁教であったため、キリスト教の伝道活動をすすめることが困難であり、また、澳門のポルトガル政庁がモリソンの滞在を認めなかったため、モリソンは広東でアメリカの商事会社に勤務して中国語の学習や聖書の中国語訳に従事しつつ伝道開始に備えていたが、一八一三（嘉慶十八・文化十）年に澳門に到着した「ロンドン伝道会」派遣宣教師ウィリアム・ミルン（米憐 William Milne 1785-1822）と協力して一八一四（嘉慶十九・文化十一）年には新約聖書の中国語訳を完了した。モリソンは一八一五（嘉慶二十・文化十二）年からマレイ半島のマラッカで中国伝道の準備を続け、一八一八（嘉慶二十三・文政元）年にはミルンと協力してマラッカに「英華書院」（Anglo-Chinese College）を創設して華僑にキリスト教教育を行ないつつ中国伝道活動開始の日に備え、同時に聖書の中国語訳を続け、一八二二（道光二・文政五）年にはいわゆるマラッカ版とよばれる旧新約聖書の中国語訳を完了出版した。同じ頃にイギリスのバプテスト派宣教師マーシュマン（馬士曼 Joshua Marshman 1768-1837）がセランポールで中国語訳を完了して、いわゆるセランポール版とよばれる旧新約聖書を、また一八三六（道光十六・天保七）年にはギュッツラフ（郭実猟 Karl Friedrich August Gützlaff 1803-1851）が中国語訳した旧新約聖書をそれぞれ出版した。

ギュッツラフは「オランダ伝道会」（The Netherland Missionary Society）から派遣されて一八二六（道光六・文政九）年にオランダ領ジャヴァに到着し、そこでウォルター・ヘンリー・メドハースト（麥都思 Walter Henry Medhurst 1796-1857）から中国語を学び、一八三一（道光十一・天保二）年には海南島・厦門（アモイ）・台湾・山東・満洲



モリソン到着の澳門（マカオ）

など各地で伝道活動を行ない、一八三二（道光十二・天保三）年、一八三三（道光十三・天保四）年にもイギリス船に乗って中国沿岸各地で伝道活動を続けた。メドハーストは一八一七（嘉慶二十二・文化十四）年にマラッカに到着以来キリスト教文書出版事業並びに英華書院の教育でモリソン並びにミルンを援け、さらに一八二二（道光二・文政五）年からはバタヴィアで伝道活動を行なっていた。このようにモリソン、ミルン、ギュッツラフ、メドハーストなどの活躍の他にも一八三三（道光十三・天保四）年に「アメリカン・ボード」（「美国公理会」；A.B.C.F.M.）から派遣されて広東に到着した宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（衛三畏 Samuel Wells Williams 1814–1884）が福音伝道に、漂流日本人水夫の送還に、ペリー艦隊の通訳官としての任務に、聖書の日本語訳に、諸著書の出版にと大活躍をしたことや、一八三四（道光十四・天保五）年に同じく「アメリカン・ボード」から派遣されて広東に到着した宣教医師ピーター・パーカー（伯駕 Peter Parker 1804–1884）が広東に眼科病院を創設して献身的に医療伝道に活躍すると同時にイギリスやアメリカ各地を巡回して中国における医療伝道の必要を力説し、中国医療伝道の土台を確立したことをも忘れてはならない。また、この他にも各国の幾多の伝道会が中国伝道に意欲を燃やし、伝道を開始しているがそれらについては省略する。

他方、「米国長老教会」（Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America）は一八四二（道光二十二・天保十三）年、寧波・厦門・広東などで伝道を開始し、「米国改革派教会」（Board of Foreign Missions of the Reformed Church in America；R.C.A.〈Dutch〉）は一八四四（道光二十四・弘化元）年に厦門で、「米国メソディスト教会」（Methodist Episcopal Church〈North〉）は一八四七（道光二十七・弘化四）年に福州でそれぞれ伝道活動を開始した。しかしこれらはいずれも一八四二（道光二十二・天保十三）年の「南京條約」によって開港された広東・厦門・福州・寧波・上海の五港に伝道活動の根拠地を定め、中国内への伝道活動開始の準備をしていたのである。

さて前述の如く、中国（清朝）では十八世紀に入るとキリスト教を禁止し、また、貿易をも厳重に制限して一七五七年以降は、貿易港を広東だけに制限するようになったが、十八世紀後半から中国貿易を殆んど独占していたのはイギリスの東インド会社であった。東インド会社は貿易上の輸入超過打開のためインド産のアヘンを中国へ輸出する政策を採ったため、アヘン吸飲による社会問題並びに財政問題から遂にイギリスと中国の間にアヘン戦争がおこった。その結果一八四二（道光二十二・天保十三）年には前述の「南京條約」が締結され、中国は香港をイギリスに割譲し、広東・厦門・福州・寧波・上海の五港を外国貿易並びに外国人居住のために開くに至り、その後アメリカやフランスも同様の条約を結び、中国の植民地化が進められるに至った。すると、それまでは東南アジアを根拠地として中国伝道開始に備えていた各国各教派の宣教師たちはそれらの諸港に伝道の拠点を移すに至った。このような時に太平天国の乱（一八五〇〈道光三十年〉―一八六四〈同治三年〉年）がおこり、中国伝道に障害とはなったが、各教派の伝道会はそれに屈することなく熱心に伝道活動を行なった。

このようにして一八六〇（咸豊十・万延元）年頃までには二十以上もの伝道会が百五十名以上の宣教師を中国各地に在留させて伝道活動を行なっており、中国人信徒数も三百五十名を超すに至った。[注四]

なおここで特記すべきことを一、二あげれば、イギリス聖公会の「中国伝道会」（The Chinese Evangelization Society；C.E.S.）から派遣されて一八五四（咸豊四・安政元）年に上海に到着した宣教師ジェイムズ・ハドソン・テイラー（戴雅各 James Hudson Taylor 1832-1905）は、太平天国の乱による社会不安の情勢下でも伝道活動に努力し、一八六〇（咸豊十・万延元）年には一旦帰国して一八六五（同治四・慶応元）年に「中国の霊的必要と要請」を出版するなどして、中国伝道の緊急性を訴え、「中国奥地伝道会」（The Chinese Inland Mission）を創設し、一八六六（同治五・慶応二）年には再び中国に帰着して杭州・楊州で伝道活動を行ない、さらに山西・陝西・甘粛・四川・雲南・貴州など中国の遙か奥地にまで伝道の歩みを進めたこと、また、中国の東北地方、満洲にも「アイル

ランド長老教会」（The Irish Presbyterian Church）が一八六九（同治八・明治二）年、牛荘（ニューチョワン）において宣教を開始し、次いで一八七二（同治十一・明治五）年に芝罘（チーフー）に到着して山東で宣教を開始した「スコットランド一致長老教会」（United Presbyterian Church of Scotland）派遣の宣教師ジョン・ロス（John Ross 1842-1915）がのちに牛荘に移って満洲での伝道活動に活躍した（なお、このロスが最初の朝鮮語訳聖書を出版し、朝鮮伝道にも貢献するのである。）こと、並びに「奉天三十年」[註五]（矢内原忠雄訳）の著書でも知られる「スコットランド一致長老教会」会員であるデュガルド・クリスティ（Dugald Christie 1858-1927）が「エディンバラ医療伝道会」（Edinburgh Medical Missionary Society）から一八八三（光緒九・明治十六）年に宣教医師として中国へ派遣され、東北地方（満洲）の瀋陽（奉天）で医療伝道に献身的に活躍し、クリスティーがその使命達成のために一八八五（光緒十一・明治十八）年に創設した宣教医師養成所（The Christie Memorial Medical College, Moukden）がもとになって奉天医科大学が一九一二（中華民国紀元元・明治四十五）年に創設されたことである。特にクリスティーは奉天赴任当時「洋鬼」として嫌悪され、迫害を受けたのであるが医術とキリスト教の愛とをもって中国人の友として医療伝道にあたった結果、人々から聖者として尊敬されるようになった。このようにして中国各地にプロテスタント伝道が行なわれるようになったが、中国で伝道していた宣教師たちの中からやがてわが国への伝道を開始する者が出て来るのである。

プロテスタントの日本伝道　第十九世紀初頭、最初にわが国へプロテスタント伝道の働きかけを行なったのは、当時中国で伝道活動を行なっていた宣教師たちであった。例えば、一八一八（文政元）年、イギリス人ピーター・ゴルドン（Peter Gordon）が日本との貿易を行なおうとしてブラザーズ号で江戸湾の浦賀に来航したが幕府に拒絶された。しかしこの際、彼の船を見物しようとして群がり集まった日本人たちに中国語訳聖書二冊の他にキリスト教関係書籍を与えたと伝えられている。一八二八（文政十一）年には著名な宣教師ウォルター・ヘンリー・メドハー

スト（Walter Henry Medhurst 1794-1857）が日本伝道に着手しようと考えオランダ船で当時わが国唯一の開港地長崎に入港しようとしたが許可を得られなかった。それでも彼は機会あらば日本伝道に着手しようとの思いのもとに熱心に日本語の学習を続け、一八三〇（天保元）年には世界で最初の「英和・和英辞典」である“An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary”という辞書をジャワ島のバタヴィアで出版している。一八三七（天保八）年には中国在留のアメリカ人で、在中国商社オリファント商会の支配人であったチャールズ・W・キング（Charles W. King）が、漂流日本人水夫七名（音吉、久吉、岩吉、庄蔵、寿三郎、熊太郎、力松）をわが国へ送還しようとして、アメリカ船モリソン号で中国の澳門を出航し浦賀沖まで来航したが、「外国船打払令」のために退去せざるを得なかった。そしてさらに、鹿児島沖でも砲撃を受け、水夫たち七名はせっかく懐しい母国を目の前にしながら目的を果たすことが出来ずに、空しく引き揚げざるを得なかった。このモリソン号には、一八三三（天保四）年に広東に到着し一八三五（天保六）年からは澳門に居住していた「アメリカン・ボード」派遣宣教師サミュエル・W・ウィリアムズや、同じく「アメリカン・ボード」から一八三四（天保四）年に派遣されて広東で医療伝道を行なっていた宣教医師ピーター・パーカーや、一八二七（文政十）年に「オランダ海外伝道会」から派遣されてジャワ島のバタビア（ジャカルタ）に到着、その後、一八二九年に「ロンドン伝道会」に移ってシャムで伝道活動を行ない、一八三一（天保二）年には天津に拠点を移して中国伝道に活躍した後、やがて澳門に居住し、一八三五年にはモリソンのあとを継いでイギリス政庁の主席中国語通訳官となり且つまた、漂流日本人から学んだ日本語でヨハネ福音書の翻訳を行ない、一八三七（天保八）年に最初の日本語訳聖書「約翰福音之傳」を刊行したドイツ人宣教師カール・フリードリッヒ・アウグスト・ギュッツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff 1803-1851）などが同船していた。このモリソン号事件は、欧米諸国の東洋伝道熱が直接日本国土に及んだ最初の事件であると同時に、渡辺崋山や高野長英らの開国論となり、国内にも開国の機運を導き出すことになった事件として忘れられてはならな

い。ウィリアムズはのちにアメリカ東インド艦隊司令長官ペリー（Matthew Calbraith Perry 1794-1858）提督の通訳としてわが国に来り、「日米和親條約」締結に際して大きな働きをし、パーカーは、イギリスやアメリカの各地で、東洋における医療伝道の必要を力説し、さらにギュッツラフは最初の日本語聖書「約翰福音之傳」を刊行している。

なお七人の漂流日本人水夫は、いずれも日本帰国を断念し、ある者はウィリアムズと共に住み、また、ある者はギュッツラフと共に住んで、それぞれ日本語を教えたり、聖書の日本語訳を手伝ったり、あるいは印刷出版業務の手助けをしたりしつつ中国在留宣教師の日本伝道開始にそなえての諸準備のために重要な協力をしている。

ペリーの来日

ところで十九世紀も半ばになると、アメリカでは日本の開港を望む声がいよいよ高くなり、一八四六（弘化三）年にはアメリカ東インド艦隊司令長官ジェイムズ・ビッドル（James Biddle 1783-1848）が浦賀に来航し通商を求めたが幕府はこれを拒絶した。しかし日本開国を望むアメリカは一八五三（嘉永六）年六月三日（金曜日）、アメリカ東インド艦隊司令長官海軍准将（コモドール）マッシュー・カルブレイス・ペリーが、日本の開国を求める大統領フィルモア（Millard Fillmore 1800-1874）の国書を携え、軍艦四隻を率いて浦賀に入港した。

ペリーは熱心なクリスチャンであって航行中も日課として聖書を読み続けていた。浦賀に入港した翌々日、六月五日は丁度日曜日であったので、ペリーは日本人の来艦を断って、艦隊旗艦サスケハンナ号上に艦隊の将兵を集めて聖日礼拝を行なった。艦隊附牧師であるジョオンズは

「全地よ、主にむかいて喜ばしき声をあげよ、
喜びをいだきて主につかえ、
うたいつつそのみまえにきたれ。
知れ、主こそ神にますなれ、

我らを造る者は主にましませば、
我らはそのものなり。
われらはその民、その牧の羊なり。
感謝しつつ御門に入り、
ほめたたえつつその大庭にいれ、
感謝して御名をほめたたえよ。
主は恵みふかく、その憐みかぎりなく、
その真実よろず世におよぶべければなり。」

と、旧約聖書詩篇第百篇を朗読し、また、この第百篇にもとずいて作詞された

「よろずのくにびと、わが主にむかいて
こころのかぎりに　よろこびたたえよ。」

で始まる讃美歌（現行讃美歌四番）を全員で声高らかにうたい、その歌声は海岸にいた日本人にもきこえたといわれる。この聖日礼拝は禁教下の日本で守られたプロテスタント・キリスト教最初の礼拝であったといわれる。

ところでこの艦隊には既述の如く通訳としてサミュエル・W・ウィリアムズが乗りこんでいたが、彼は「アメリカン・ボード」から派遣されて一八三三年から中国で伝道関係のキリスト教書類印刷の責任者として活躍していたところ、ペリーの艦隊が日本へ向う途中、香港に寄港した際、日本語の通訳として採用されて来航したのである。ペリーはわが国に開国を強く求めたが、その態度は極めて強硬且つ熱心であった。幕府は一旦拒絶はしたものの遂に国書を受けとり、翌年に返書を手渡すことを約束したのでペリーの艦隊は六月十二日、帰国の途に着いた。

「日米和親條約」

ところが、ペリーより一カ月おくれて一八五三年七月十八日、軍艦四隻を率いて長崎に入港したロシアの使節、極東艦隊司令長官プチャーチン（Evfimii V. Putyatin 1803-1883）が千島・樺太の国境確定並びに通商開始をもとめる国書を携行したことを知ったペリーは急遽翌一八五四（安政元）年一月十六日に軍艦七隻を率いて再び神奈川沖に来航した。かくして幕府は遂に同年三月三日ペリーと「日本国米利堅合衆国和親條約」（「日米和親條約」）を締結調印した。

この條約の内容は、㈠下田・箱館（函館）の開港、㈡薪水・食糧の供給、㈢領事の下田駐留、㈣最恵国約定（片務的）などであって、「和親條約」と称せられるように、ペリー艦隊の来航目的の中には、わが国へのプロテスタント・キリスト教の伝道が考えられていたと思われる。というのは艦隊の乗組員の中には、ジョナサン・ゴーブル（Jonathan Goble 1827-1896）という「米国バプテスト自由伝道会」（American Baptist Free Mission Society）宣教師が宣教視察を目的として乗りこんでいたことから推測できる。ペリーの艦隊の日本派遣が計画された当時のアメリカでは、外国伝道の気運が各教派内に漲っていて、ペリー派遣の報告を耳にしたゴーブルは、さっそく、日本伝道の開拓者たらんとの決意で来日したことであろう。通訳として乗り組んだウィリアムズ、宣教視察を目的として乗り組んだゴーブルは共に、数年後に再来日して、それぞれの立場で日本伝道にたずさわるのである。「日米和親條約」によって、下田並びに箱館の二港が開かれ、一八五六（安政三）年八月にタウンゼント・ハリス（Townsend Harris 1804-1878）がアメリカの駐日総領事として来日し下田に駐在した。ハリスは聖公会に属する熱心なクリスチャンであって、日曜日には執務を休んで、書記官ヒュースケン（Henry C.J. Heusken 1832-1861）と共に聖日礼拝を守った。ハリスは一八五七（安政四）年十一月最初の江戸行の途中、二十八日に川崎の本陣に到着したのであるが、翌二十九日は日曜日であったので旅行を休んで聖日礼拝を守った。彼の日記には「余は此日吾が書記官にして会衆なるヒュースケン君と共に式文を読みて全礼拝を営み、名状し難き感情を経験した。江戸より僅かに十三哩

を距つる此地に於て、然かも、なほ国法が実に死を以て罰すべき基督教の礼拝を安息日に声高らかに営んだのは此が最初であったことに一点の疑いもない。」と記されている。

ところで「日米和親條約」の中には、キリスト教についての規定がない。しかしながら、わが国が開国を決意したことは、キリスト教禁教を解く方向へ歩み出したことであった。アメリカ駐日総領事タウンゼンド・ハリスの熱心な外交により遂に一八五八（安政五）年に「日米修好通商條約」が締結された。ハリスはその折衝過程において日本在留米国人の信仰行為の自由、礼拝所建立並びにその保護を求め、また、長いこと切支丹弾圧の手段として行なわれていた踏み絵の廃止を要求したが、それが日本側に受け入れられ同條約第八條に規定された。すなわち「日本に在る亜米利加人、自ら其国の宗法を念じ礼拝堂を居留場の内に置くも障りなし。並に其建物を破壊し亜米利加人宗法を自ら念ずるを妨ぐることなし。亜米利加人日本人の堂宮を毀傷することなく、又決して日本神仏の礼拝を妨げ、神体、仏像を毀つ事あるべからず。雙方の人民互に宗旨に付ての争論あるべからず。日本長崎役所に於て踏絵の仕末は既に廃せり。」と。

「日米修好通商條約」

「日米修好通商條約」が翌一八五九（安政六）年に批准され発効すると、アメリカのプロテスタント・キリスト教の宣教師がつぎつぎに来日するようになった。彼らの来日は、表向きには同国人の信仰生活の指導のためにではあったが、同時にまた、日本におけるキリスト教伝道の準備のためであった。

ペリー来航の際、二度とも通訳として同行し、「日米和親條約」締結に当って大任を果したS・W・ウィリアムズは、その後、一八五七年からは外交官となって中国で活躍していた。「日米修好通商條約」が締結されたことを知るや長崎に来て、わが国における伝道の見通しを視察したのち、時たまたま長崎入港中の「米国監督教会」の中国派遣宣教師エドワード・W・サイル（Edward W. Syle 1817-1890）などと協議し、アメリカの「米国監督教会」、「米

国長老教会」、「米国改革派（ダッチ）教会」の各外国伝道局に対して日本伝道のために立派な宣教師の派遣を要請した。ウィリアムズ自身としては、わが国において直接伝道活動をすることは無かったが、しかし、「日米和親條約」締結の際の他にも宣教師派遣の要請、「マタイによる福音書」他の翻訳並びにキリスト教関係書の印刷出版などを通して直接間接に日本のみならず東洋伝道に重要な働きをしたのである。

各教派宣教師の来日

さて、このようにしてウィリアムズから宣教師派遣の要請を受けたアメリカの三教派は、さっそくすぐれた宣教師を日本へ派遣した。すなわち一八五九（安政六）年に「米国監督教会」（The Protestant Episcopal Church of the U.S.A.）からのチャニング・ムーア・ウィリアムズ（Channing Moore Williams 1829-1910）、ジョン・リギンズ（John Liggins 1829-1912）は長崎に、「米国改革派（ダッチ）教会」からのギドー・ヘルマン・フリードリン・フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck 1830-1898）は長崎に、サミュエル・ロビンズ・ブラウン（Samuel Robbins Brown 1810-1880）、ドゥウェイン・B・シモンズ（Duane B. Simmons 1834-1889）、「米国長老教会」からのジェームズ・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn 1815-1911）は神奈川（横浜）にそれぞれ到着した。そしてさらに一八六〇（安政七・万延元）年には「米国バプテスト自由伝道会」からジョナサン・ゴーブルが、一八六一（万延二・文久元）年には「米国改革派（ダッチ）教会」からジェイムズ・ハミルトン・バラ（James Hamilton Ballagh 1832-1920）が到着した。彼等はいずれも公然とキリスト教の宣教師として来日したのである。



J.H. バラ

やがてアメリカの他の教派からは勿論、イギリスからも宣教師が派遣されて来たのであるが、一八五九（安政六）年から宮城女学校（宮城学院）創立の年、一八八六（明治十九）年までの間に、わが国に宣教師を派遣したプロテスタント・キリスト教の各教派を次に掲げておこう。(註六)

一、一八五九年　米国監督教会　PE　Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the U.S.A.　日本聖公会系

二、一八五九年　米国長老教会　PN　Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America　日本基督教会系

三、一八五九年　米国改革派（ダッチ）教会　RCA　Reformed Church in America〈Dutch〉　日本基督教会系

四、一八六〇年　米国浸礼自由伝道会社（米国バプテスト自由伝道会社）　ABFA　American Baptist Free Mission Society　バプテスト教会系

五、一八六九年　アメリカン・ボード・ミッション（米国伝道会社）　ABCFM　American Board of Commissioners for Foreign Missions　組合教会系

六、一八六九年　英国教会伝道会社　CMS　Church Missionary Society　英国聖公会系

七、一八七一年　米国婦人一致異邦国伝道協会　WU　Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Land　日本基督教会系

八、一八七三年　米国北部バプテスト外国伝道会社　ABM　American Baptist Missionary Union　バプテスト教会系

九、一八七三年　米国メソジスト監督教会（北部）　MEC　Methodist Episcopal Church〈North〉　メソジスト教会系

一〇、一八七三年　カナダ・メソジスト教会伝道会社　MCC　Mission of Methodist Church of Canada　カナダ・メソジスト教会系

一一、一八七三年　英国福音宣伝協会　SPG　Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts

一二、一八七四年　スコットランド一致長老教会　UPS　United Presbyterian Church of Scotland　日本基督教会系

一三、一八七四年　エディンバラ医療伝道会　EMMS　Edinburgh Medical Missionary Society　超教派

一四、一八七六年　米国福音教会　EA　Evangelical Association（Methodist）　メソジスト教会系

一五、一八七七年　米国カンバーランド長老教会　CPM　Cumberland Presbyterian Mission

一六、一八七九年　英国浸礼教会　EB　English Baptists　バプテスト教会系

一七、一八七九年　合衆国改革派（ジャーマン）教会　RCUS　Reformed Church in the United States〈German〉日本基督教会系
一八、一八八〇年　米国メソジスト・プロテスタント教会　MP　Board of Foreign Missions of the Methodist Protestant Church　美普教会系
一九、一八八三年　基督教会　UCMS　United Christian Missionary Society
二〇、一八八五年　フレンド教会　AFP　Mission Board of the Religious Society of Friends of Philadelphia
二一、一八八五年　米国南長老教会　PS　Executive Committee of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States　日本基督教会系
二二、一八八五年　独逸普及福音新教伝道会社　OAM　Ostasien Mission（East Asia Mission）　自由キリスト教会系
二三、一八八六年　米国南部メソジスト基督教会　MES　Board of Foreign Missions of Methodist Episcopal Church〈South〉メソジスト教会系

このように、一八五九（安政六）年以後、各教派の数多くの伝道会が宣教師を公然とわが国へ派遣して来たので、この一八五九（安政六）年を日本におけるプロテスタント・キリスト教史の出発点とする考えが一般的である。なお、この一八五九年から、切支丹禁制高札撤廃が布告される一八七三（明治六）年二月二十四日までの間にわが国に到来した宣教師（夫人をも含めて）の数は六十人を数え、その所属教派は次の通りである。

米国改革派（ダッチ）教会	十四人	米国監督教会	九人
米国長老教会	十一人	その他	十六人
アメリカン・ボード	十人		

以上記したところでわかるように、「米国改革派（ダッチ）教会」や「米国長老教会」などは、「日米修好通商條約」発効後間もなく宣教師をわが国へ派遣し、日本伝道開始に備えているが、宮城学院と直接かかわりのある「合衆国改革派（ジャーマン）教会」が日本伝道に着手するのは、同條約発効後約二十年の一八七九（明治十二）年のことである。しかしながら、宮城女学校創立者の一人である押川方義が青年時代にキリストの福音にふれて信仰へ導かれるようになるのは、最初に我国に来航した前記三教派の中、特に「米国改革派（ダッチ）教会」派遣宣教師たちの指導によってであることを忘れてはならない。

（註　一）これより早く東洋伝道が開始されていたと考えられる。たとえば Douglas Franciscus, "Faith of Our Fathers —— History of the Dutch Reformed Church in Sri Lanka (Ceylon)." Pragna Publishers, Colombo, 1983. の十頁に「『オランダ改革派教会』The Dutch Reformed Church が一六四二年十月六日にセイロンに創立された。」とある。

（註　二）（註一）参照。

（註　三）中国における天主教（ローマ・カトリック教）の伝道にあたり、中国人信徒が儒教の祭天・孔子崇拝・祖先崇拝の儀式（典礼）に参加することの可否をめぐる論争。

（註　四）一八一四年七月十六日にモリソンから洗礼を受けた蔡高が中国人最初の受洗者であると言われるが、アヘン戦争の頃には信徒数は約百名となった。その後二十年間に漸く三百五十名まで増加した。この時期の信徒数は量的に少ないのみならず、質的にもほとんどが無学文盲であったという。（山本澄子「中国キリスト教史研究」十七～十八頁）

（註　五）"Thirty Years in Moukden, 1883-1913, being the experience and recollections of Dugald Christie", edited by his wife, London, 1914.

（註　六）小澤三郎「日本プロテスタント史研究」七十頁以下参照。

第二章　神のみ　奇(くす)しき事跡(みわざ)を

イスラエルの神、主はほむべきかな。ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。

（詩篇　第七十二篇十八節）

パーム・押川・吉田の出合い

J・H・バラと「日本基督公会」

一八七一（明治四）年頃、横浜の豪商高島嘉右衛門が英学校を開設した際、ジェームズ・バラはその招きを受けて英語を教えた。しかしバラは元来、英語教育に当ることを使命としてはいなかったので、アメリカから弟ジョン・バラ（John Craig Ballagh 1842-1920）を呼び寄せて弟に英語教育をまかせることとし、自分は横浜居留地一六七番の小会堂で十数名の青年に英語教育の傍ら聖書を説くことに意を注ぐこととした。バラは熱烈な信仰の持主であったので、聖書の講解にあたっても声涙共に下るという燃えるばかりの熱誠をもって福音を説き、青年たちの救霊のために祈った。その講解の様子は、後年、一九〇一（明治三十四）年十一月に開かれたジェームズ・バラ博士来朝満四十年祝賀会の席上、押川が「余はバラ師から神学は伝えられない。ただ基督を愛することと基督につかえることとを教えられた。バラ師が真実無縫基督の道を信ずることの堅固なることに感服して、余もこの道に入るに至った。その時バラ師より受けた精神は今日といえども少しも変っていない。」と述べていることから推測出来る。すなわち、必ずしも日本語に堪能ではなかったバラが、熱烈旺盛な伝道精神に燃えて行なった説教、聖書講解、祈禱などは日曜礼拝や祈禱会に出席する青年たちに求道心をおこさせた。

やがて、我国の基督教会史上特筆大書されるべき事件が



横濱居留地 167 の小會堂

起った。それは一八七二（明治五）年二月九日〈旧暦一月一日〉からバラの指導によって開始された日本人最初の祈禱会である。当時、横浜では、横浜在留の宣教師や外国人たちが、世界中の教会が行なう新年初週祈禱会の主題と同一主題のもとに新年初週祈禱会を開くことになり、一八七二年一月一日から初週祈禱会が開かれた。我が国では改暦前の時代であったから従ってその日は、旧暦で言えば明治四年十一月二十一日に当る。これは、「万国福音同盟会」[註一]の主旨によるものであって、世界中の全教会が一緒にその主題の実現を祈るものであった。この年の主題は「日本における基督教禁令が早く解かれるように祈る。」というのであった。したがってバラ塾の青年たちは、小会堂に集った外国人たちが日本のために熱心に祈る姿に接して非常に奇異の感にうたれたが、やがてその祈禱会の精神を理解するようになった。押川方義も、バラが「神よ、我が日本国を救い給え。」と祈る姿に接して、押川自身が平生ゆかしく感じていた「日本」という言葉が外国人の口から出るのをきき、キリストの道というものはこの様に博愛万邦に及ぶものかと感動し、それまではひたすら英語研究のみに没頭していたことから一転して、キリスト教を研究しキリストの大人格にふれて見ようと思うようになった。

このようにして感激したバラ塾生の一人篠崎桂之助が発起人となって、バラ塾生有志も祈禱会を開きたいので指導して欲しい旨をバラに申出た。かくして日本人最初の祈禱会がバラの指導のもとに、旧暦による明治五年一月一日に開始された。そしてその翌日、横浜公会日誌の正月二日の條（くだり）に「今日ヨリ聖書使徒行傳講義始マル。バラン師出席前後祈禱之有」とある。植村正久によれば「明治五年正月バラ氏に乞ふて西洋人のなすが如く、初週の祈禱会を開けり。是れ日本国に於て祈禱会を催ふすの初めなり、之を開くの日、バラ氏は如何なることを感じたりけん。壁上の黒板に以賽亜三十二章十五節の一句を取り、聖霊の濺かる云々の文字を記し、使徒行伝を開講し、最も熱心にペンテコステの章を説明せり。会するもの凡そ三十名、今まで祈禱の声を発することなかりし甲祈り、乙之れに次ぎ、或は泣き、或は叫びて祈りするもの互ひに前後を争ふが如くにてありき。」とのことである。すなわちこれは、

日本の基督教会史上、ペンテコステとして記念されるべき出来事である。

この初週祈禱会は、当初一週間の予定で始められたが、出席者は二十名乃至四十名と意外に多く、また、祈禱につぐに祈禱をもってするということで感激の念・熱誠の情あふれるばかりの集会となり遂に半年間も続くこととなった。そしてその間、二月二日すなわち新暦によれば三月十日（日曜日）には九名の青年がバラから洗礼を受けることとなった。九名の中の最年長者が押川方義であり、松山藩から押川と共に上京して来た同郷の学友吉田信好、櫛部漸の二名も加わっていた。そして、すでに他で受洗していた小川義綏、仁村守三の二名を加えた十一名を会員としてその日の中に我が国最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」（「横浜公会」）が創立された。



S.R. ブラウン

S・R・ブラウン

このようにしてバラの指導のもとにクリスチャンとなった押川は一八七三（明治六）年秋、ブラウン塾に入塾した。ブラウン塾は単なる英学塾ではなくむしろ神学塾であった。押川によると、「サミュエル・R・ブラウン博士は偉大な人であった。私は博士が直接伝道事業に非常に熱心であったとは思わないが、それは伝道事業を本当に成功させる秘訣を博士が知っており、また、そのように活動されたためと考える。博士はいつも私たちに言われた。『私は日本に福音を伝える一番良い方法は日本の青年を教育することだと信じている。考えても見たまえ。二十人の日本人宣教師を私の学校で教育するとしたら、二十人のブラウンが世の中へ飛び出して行くことになるのではないか。これらの人々は私のするよりももっと立派なより大きな事業をすることが出来るのではなかろうか。これらの人々なら日本人の風俗もわきまえているし、日本語をしゃべれるのだが、私では日本の人々に対する理解も、言葉も極めて不充分である。こういう理由から私は青年の教育を行なったのである。』（中略）先生の清い高貴な人格こそは洵に無言の感化を私たちに垂れたのである。」という具合である。押川がブラウン塾在学中の一八七四（明治七）年夏、「日本基督公会」（「横浜公

会」）は伝道精神旺盛な青年学生を巡回伝道に派遣し、神の国の福音を人々に伝えさせたが、押川も篠崎桂之助と組んで篠崎の郷里である静岡県に実地伝道を行なった。この経験は、押川がやがてセオボールド・A・パームを応援して行なう北越地方伝道、次いで、吉田亀太郎の熱心な願いとパームの激励並びに応援を得て着手する東北地方伝道、そしてさらに、「合衆国改革派教会」派遣の宣教師ウィリアム・E・ホーイと協力して仙台の地で始める仙台神学校並びに宮城女学校におけるキリスト教主義教育などに活かされて行くのである。

ところで、この我が国最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」（「横浜公会」）の創立に直接関係があった教派は「米国長老教会」と「米国改革派教会」であって、その組織においては長老教会の制度を採ったが、長老教会にも改革派教会にも属することをせず、教会政治の点では外国のどの教派にも属しない日本独自の教会として発足した。すなわち宣教師たちの指導を受けてはいたが決して教派主義を採らなかったのである。その事は「公会条例」第二条の「公会基礎」に「我輩の公會は宗派に属せず唯主耶蘇キリストの名に依て建る所なれば、単に聖書を標準とし、是を信じ是を勉る者は、皆是キリストの僕、我儕の兄弟なれば、會中の各員、全世界の信者を同視して一家の親愛を盡すべし。是故に此會を基督公會と稱す。」と定めているところから明白なように無教派主義、聖書中心の福音主義を標榜したのである。このように無教派主義を標榜して創立された「日本基督公会」は会員の熱烈な信仰のもとに我が国にキリストの福音を宣揚しようとの意気極めて旺んなものがあった。それから約半年後の九月には横浜のヘボン邸において「米国長老教会」よりヘボン、タムソン、カロゾルスなど五名、「米国改革派教会」よりブラウン、バラ、フルベッキなど五名、「アメリカン・ボード」よりグリーン、ギュリッキなど五名をはじめ当時我が国で伝道していた各教派宣教師の大部分の者が集って第一回宣教師会議が約一週間にわたって開催されたが、彼等宣教師は「日本基督公会」の創立とその精神とに深く感動していたので種々討議ののち最終的にはブラウンの提案によって次のような決議を行ない、各教派とも無教派合同主義の立場で日本における福音主義キリスト教

の発展のため援助することにした。

「夫れキリストの教會はキリストに在りて一體たり。プロテスタント教徒間の諸派分立の如きは偶然の出来事にして、キリスト教徒の精神的一致を妨げず。然れども既にキリスト教會に於ても尚此れが爲め教會の一體たることを曖昧にするの嫌ひあり。況哉諸派分立の歴史を了解せざる異教國に於てをや。且それ吾等宣教々師はあまりに顯著なる差別より生ずる弊害を避けんが爲めに傳道の方法を一定せんことを希望するものなるが故に、吾等は本會議に由て與へられたる此の最初の機會を利用して自今吾等の援助に由て設立せらるべき日本の諸教會に於ては、成るべく其名稱及び組織を同一ならしむべく努力せんことに同意す。即ち其名稱は基督公會と言ふ公同的のものとなし、其組織は各教會の政治を其會員の協賛に由り、教師職及び長老職に由りて執行せらるべきものとす。右決議す。」

「日本基督一致教会」

このようにして日本のキリスト教会の将来は欧米の場合に見られるように様々の教派に分れるというような事がなく、無教派合同主義のもとに伝道が行なわれて行くであろうと思われた。そしてこの年にも「日本基督公會」にあってはさらに受洗者が相つぎ、それらの中には本多庸一や奥野昌綱なども含まれていた。そして翌年一八七三（明治六）年二月十九日には明治政府が切支丹禁制の高札を撤廃したのでキリスト教は黙許される状態になり、そのため伝道も盛んに行なわれ、井深梶之助、植村正久などをはじめ多くの受洗者があり、この年の末には「日本基督公会」の会員は七十五名（大人男女六十二名、小児十三名）となり、翌一八七四（明治七）年には百十九名に達した。なおこの間一八七三年九月二十日には「東京公会」も創立されたので「日本基督公会」は「横浜公会」と「東京公会」の両公会となった。と同時に切支丹禁制の高札撤去により、イギリスやアメリカから新しく諸教派の宣教師が続々来日して伝道を開始したので教派的傾向が見られるようにもなり、「米国長老教会」宣教師の中でもカロゾルスらは一八七三年十二月三十日に「日本長老公会」を創立するに至った。これに対処するため「日本基督公会」は一八七四（明治七）年一月十六日にあらためて決議を行ない、無教派

主義の主張を理解協力してもらうべく、押川方義、熊野雄七の両者が各宣教師の間を巡回して歩いたほどである。他方、関西地方でも一八七四年の四月並びに五月に神戸並びに大阪に公会が創立されたので、横浜・東京の両公会は神戸・大阪の両公会に対して「日本基督公会」への合同を提案したが、同年十一月にアメリカから帰朝した新島襄の関係する「アメリカン・ボード」との関係をもつ神戸・大阪両公会は提案に応ずることなく遂に合同には至らなかった。このような状況の中で「日本基督公会」や「日本長老公会」に属する諸教会が誕生した。そして「日本基督公会」関係者の中にも教派的傾向をもつ者も生じて来ると同時に、長老主義を採る教派は合同すべきであると考える者も多く、一八七六（明治九）年五月には「日本長老公会」に関係ある「米国長老教会」宣教師が、「日本基督公会」に関係ある「米国改革派教会」宣教師に対して行なった日本におけるアメリカの両教会の協力及び「日本基督公会」と「日本長老公会」の両公会の合同一致の提案が受けいれられ、両派の宣教師代表が、一八七四年三月から来日していた「スコットランド一致長老教会」宣教師代表をも加えて協議会を開催し、合同公会の名称・信仰箇条（信条）・教会政治（憲法）などの審議を行なって一八七六年六月に草案が作成され、翌一八七七（明治十）年にはこの草案を「日本基督公会」・「日本長老公会」がそれぞれ審議を行なって承認したのでさっそく同年十月三日両公会に属する各個教会の代表並びに協力宣教師らが横浜に集って合同教会を建設し「日本基督一致教会」が発足するに至った。なお、当時、「日本基督公会（横浜公会）」の長老であった押川方義は新潟において英国スコットランドの「エディンバラ医療伝道会」派遣宣教医師セオボールド・A・パームを援けて伝道に当っていたが、「日本基督公会」の伝統を尊重するが故に「日本基督一致教会」発足過程で定められた信仰箇条に賛成できないという理由から「日本基督一致教会」には加入せず、無教派主義を標榜して独自に伝道を続けて行くことになった。

東北伝道の願い

ところで仙台神学校（東北学院）や宮城女学校（宮城学院）の創立には、押川方義とウィリアム・E・ホーイとが大きな働きをしているが、創立に至る経過を具体的にふりかえってみると、

もしも四国出身の押川が仙台を中心にする東北地方のキリスト教伝道に着手していなかったなら、たとい押川がどこかでホーイと出合ったとしても、押川とホーイとが協力してキリスト教主義学校としての男子校並びに女子校をこの仙台に創立するということにはならなかったかもしれない。東北学院第二代学院長として東北地方、否、日本の伝道と教育に優れた活躍を行ない大きな業績をのこした「合衆国改革派教会」派遣宣教師デービッド・B・シュネーダー（David Bowman Schneder 1857-1938）は、「宮城県におけるキリスト教の伝道は、はるか彼方、日本海沿岸の新潟で始められたと言っても良い。すなわち、新潟においては神の忠実な僕（しもべ）であるスコットランドの宣教医師パーム博士と押川方義牧師と吉田亀太郎牧師とが熱心に伝道にあたっていた。そして、吉田亀太郎牧師は宮城県（ママ）の出身で、一八七七（明治十）年の年一年間、何とかして彼の出身地である宮城県（ママ）にキリストの福音が宣べ伝えられるようにと祈った。」と記している。[註三] このように、押川方義並びに押川の師であるセオボールド・A・パームに対して東北地方伝道の必要を熱心に説いた吉田亀太郎の存在と、北越地方（新潟地方）でパームの医療伝道を応援して東奔西走日夜熱心に活躍した「日本基督公会」（「横浜公会」）の長老押川に、熱烈な信仰と旺盛な伝道精神とすぐれた人格とをもって大きな感化を与え、正式に牧師になろうとの決意をおこさせ、神学並びに哲学を講じ、更に押川に按手礼を授け、しかも押川と吉田を激励して東北地方へ送り出すや、両者によって開始された東北地方の初期伝道を経済的にも応援したセオボールド・A・パームの存在とを忘れてはならない。それ故東北伝道にふれるに先立って押川方義とセオボールド・A・パームの出合い並びに押川方義と吉田亀太郎の出合いについてふれることとする。

若い押川に英学並びに聖書を講じつつその眼を広く世界へ向けさせると同時に教育の重要性を認識させたブラウン、熱烈な伝道精神と熱誠溢れる祈りをもって福音を説いて押川を信仰へ導いたバラ、優れた医術と敬虔な信仰とによって医療伝道に専念しつつ押川に神学を教授し押川をして正式に牧師になろうとの決意をなさしめたパーム、東北地方にキリスト教伝道の必要性を忍耐強く説き遂に押川を東北地方伝道に連れ出した吉田亀太郎、東北地方伝

道開始後、伝道になお一層成果をあげるには教育機関の創設が必要である事を力説した押川の構想に賛同し仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校（宮城学院）の創立に協力したホーイなどの人物に、もしも押川が出合うことがなかったなら、宮城学院が今日、この仙台の地に存在することにはならなかったかもしれない。宮城女学校の創立にあたって直接大きな役目を果した人物は、押川方義とウィリアム・E・ホーイである。四国松山出身の押川方義と米国ペンシルヴァニア州ミフリンバーグ出身の「合衆国改革派教会」派遣宣教師ウィリアム・E・ホーイが、それぞれ故郷を離れた仙台で、一致協力して学校を創立しキリスト教主義教育にあたったのである。そこで、まず押川方義の生い立ちについて記すこととする。

押川方義の生い立ち

押川方義は、嘉永四（一八五一）年〔嘉永二（一八四九）年とも言われる。[註四]〕十二月十六日、伊豫国松山藩久松侯の藩士橋本宅次（諱を昌之と称す）の三男として生れ、幼名を熊三郎と称した。父宅次は藩の大納戸役を勤め且つ剣道の達人であり、熊三郎に対する教育も極めて厳格であった。母只子は藩の監査役中村有平次の娘で橋本家に嫁して四男三女をもうけた。只子は仲々気丈な女性で、子女に対する教育では正直・正義・礼節の大事さを説き、夫宅次が一八六五（慶応元）年六月二十三日に、武士の体面を重んずる義のために割腹して死んだため未亡人となってからは、機織などをして独力で子女を育てた。一八五九（安政六）年、熊三郎は藩の儒者武知武右衛門、河東喜一郎に就いて漢学を学び始め、一八六四（文久四・元治元）年には松山藩立明教館に入学して漢学・歴史の修業の傍ら剣・槍・馬術並びに水練を修業し且つ家事を手伝った。熊三郎は向学心極めて強く、明教館に学ぶ傍ら小林小太郎に就いて英学をも修めた。此の間一八五七（安政四）年に熊三郎は、祖父橋本昌行が嘗て世話を受けた押川家の恩義に報いるため押川方至作右衛門の養子となり、且つこの頃から方義と名乗るようになった。この養父押川方至は松山藩の番目附であり且つ藩における槍道の師範代理であり、方義に対する教育の厳格さは実父以上であった。

このようにして幼少時代から、剣道の達人で厳格高潔の士である実父、槍道の師範代理で清廉剛直をもってなる武士気質の養父、孟母にも比すべき賢夫人の実母によって文武両道・礼儀作法などの教育指導を受けた押川は、さらに長ずるに及んで大学・中庸・論語・孟子など東洋の先哲の教えに接すると同時に英学の学習を通して西欧文化をも垣間見るに至るや真理探求の情熱いよいよ強く燃え、また同時に、その間にあっても鍛え続けた武道においては、剣は真神影流に、槍は疋田流においてそれぞれ真髄を究めたのみならず弓道や馬術においても非凡の域に達し、したがって行住坐臥・挙措進退においては満々たる気魄がおのずから備わり寸分の隙をも見せることのない青年に成長した。

このようにして幼少時代をおくり、壮大なる気宇を持つに至った押川は、一八六九（明治二）年に松山藩が江戸に留学させるべく広く藩内より選抜した俊秀十数名の一人に選ばれて開成所（開成学校、大学南校、東京帝国大学の前身）に入学した。一八七〇（明治三）年七月に「貢進生」[註五]の制度がしかれるや押川も貢進生となった。傍ら箕作秋坪並びにイギリス人ダラスに就いて英学を修業したが、豪放磊落・奔放不羈の押川は箕作塾三叉学舎の塾生中第一の乱暴者と呼ばれた。それは弱者を助け強者を挫くために時々喧嘩をし、しばしば鮮血淋漓として帰ったからであるが、しかしその場合といえども押川が相手とした者は決して小藩や弱藩の者ではなく、薩摩・肥後など大藩・強藩の者であったと言われる。

一八七一年七月、貢進生の制度が廃止されたが、押川はさらに英学を学ぼうとの考えから、押川と共に松山藩の貢進生として共に学んでいた吉田信好らと共に横浜に移り外国人に就くこととなった。これは、松山藩においては英語をより精確に学ぶためには、横浜に出て直接に西洋人に就く方が望ましいという判断をしたことが理由の一つになっていたとも考えられる。当時の横浜には優れた外国人宣教師が住んではいたが、何しろ切支丹禁制の時代であったので、彼らは伝道活動が可能になる日の到来を待ち望みつつ日本語研究・聖書和譯・医療活動・外国語教育

などに従事していた。横浜ではブラウンが修文館の教師であり、バラが高島英語学校の教師であった。

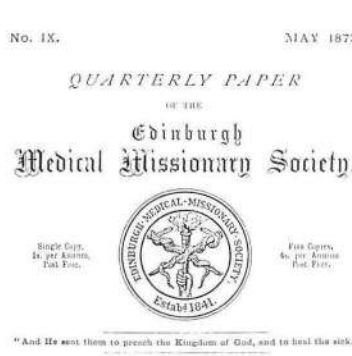
修文館とは、旧幕府時代に神奈川奉行所の諸役人の子弟に主として漢学を教授するために設立された学校であったが、明治維新後、英語学習希望者が激増したため、希望者の期待に応えられるようにすべく、当時、神奈川県当局が運上所（税関）の役人のために設立していた英語学校をも修文館に合併したほどであった。そして、この修文館には多くの青年たちが競って入学しようとしたが、それは気品ある天使のような人格と精神とをもった英語教師ブラウンが壮者をも凌ぐ矍鑠たる態度で熱心に青年たちを指導していたからであると言われる。

しかしブラウンは、一八七三（明治六）年夏、満三年間の契約期間満了とともに修文館を退職した。ところが、ブラウンの指導を熱望する青年たちが多いので、ブラウンはその懇願に応えて、同年秋、横浜山手二一番にブラウン塾を開設したところ、修文館から井深梶之助ら約十名の者が入塾したが、さらにバラのもとで英語や聖書などを学んでいた押川方義、植村正久、藤生金六、吉田信好などをはじめルーミスのもとで学んでいた山本秀煌や福井のワイコッフのもとで教えを受けた後、横浜に出て来ていた雨森信成なども入塾した。

「エディンバラ医療伝道会」　東北学院並びに宮城学院の母体となったのは仙台教会（現・仙台東一番丁教会）であるが、その創立並びに東北地方のキリスト教伝道の歴史を考える場合、どうしても新潟地方のキリスト教伝道の歴史にまで遡らなければならない。そして新潟地方のキリスト教伝道にふれる時、一八七五（明治八）年から新潟で医療伝道を行なった宣教医師セオボールド・エイドリアン・パーム並びに彼を日本へ派遣した「エディンバラ医療伝道会」（Edinburgh Medical Missionary Society）についてふれなければならない。[註六] それでは「エディンバラ医療伝道会」とはどのような団体であろうか。まずその設立に至る経過にふれよう。

一八三四（道光十四、天保五）年六月に「アメリカン・ボード」（「美国公理会」）から派遣された宣教医師ピーター・パーカーが広東に到着し眼科病院を創設して献身的に医療伝道に活躍したことは既に述べた。やがてパーカーは、そ

れより先に中国で医療活動を行なっていたイギリス東インド会社派遣の外科医師トーマス・リチャードソン・コリッジ（Thomas Richardson Colledge）と協力して医療伝道に奔走した。コリッジは中国における医療伝道の先駆者であって一八二七（道光七・文政十）年には既に澳門（マカオ）に慈善眼科病院を創設し、それが、世界で最も古い文明国の一つである中国の人々に白人がそれまでに贈った贈り物の中で最も慈善心に富んだ贈り物として喜ばれ、さらに一八二八（道光八・文政十一）年には広東にも施療所を開設するなどして処々方々の町々に群がる多くの病人たちの苦痛を醫す働きをしていた。このようなコリッジとパーカーとは全く意気投合し、中国のため、神の国のために心から協力しあう忠実な友、熱心な同労者となった。かくて一八三八（道光十八・天保九）年にはパーカーとコリッジの発議によって「中国医療伝道会」（Medical Missionary Society in China）が創立されるに至った。丁度その頃、イギリスと中国の間にアヘン戦争（一八四〇〈道光二十・天保十一〉～一八四二〈道光二十二・天保十三〉年）がおこり、パーカーは一時帰国することとなり、アメリカへの帰路、イギリス各地で「中国医療伝道会」の使命並びに中国における医療伝道の急務について遊説を行なった。このためイギリス内において医療伝道問題についての関心が大いに高まり、パーカーはロンドンその他で多くの人々から温かい歓迎を受けた。特にエディンバラにおいては一八四一（天保十二）年七月二十六日、エディンバラ市長ジェイムズ・シュピタール卿（Sir James Spital）が議長になって集会が開かれ、エディンバラ大学関係者、牧師、医師、実業家、銀行家などが多数出席し、「外国医療伝道会協力委員会」が結成されるに至った。そして同年十一月三十日のセイント・アンドリューズ・デーにはこの委員会の主催で開催された集会において「エディンバラ外国医療援助会」（Edinburgh Association for sending Medical Aid to Foreign Countries.）が創立され、会長にはスコットランド医師会会長ジョン・アバークロンビー（John Abercrombie）が選ばれた。そして二年後の一八四三（天保十四）年には「エディンバラ医療伝道会」（Edinburgh Medical Missionary Society；E.M.M.S.）と改称された。


No. IX. MAY 1873.

QUARTERLY PAPER
OF THE
Edinburgh
Medical Missionary Society.

"And He sent them to preach the Kingdom of God, and to heal the sick."

E.M.M.S. 季報表紙

「エディンバラ医療伝道会」は医療伝道に使命を感ずる医学生を訓練して宣教医師を養成し、英国内は勿論のこと世界各地に医療伝道会を設立して宣教医師を派遣し、「また神の国を宣べ伝え、かつ病気をなおすためにつかわし」("And He sent them to preach the Kingdom of God, and to heal the sick.") の聖句（「ルカによる福音書」第九章二節）を標語にして医療伝道を行なうことを目的とした団体である。そしてその理事会のメンバーは福音主義各教派に属する牧師や信徒によって構成されており、超教派的団体（an unsectarian Society）としての立場でその宣教医師養成所に医学生を迎え宣教医師の養成に当った。そして彼ら学生の所属教派が長老派であるか監督派であるかバプテスト派であるかということはあくまでも問題とせず、彼ら自身が真にキリストの愛にとらえられて召命感をもち、あらゆる教派の宣教師たちと協力して、未だ福音に接していない人々を主に導こうとして献身することを決意した者であることが大事な条件であった。また、「エディンバラ医療伝道会」は真の「福音同盟会」（Evangelical Alliance）であることを宣明し、主イエス・キリストを愛する人々は誰でも教派信条の如何を問わず協力し支援の手を差しのべてほしい旨を訴え、その協力支援が現在ほど必要とされる時はない旨を強調した。「エディンバラ医療伝道会」の管理・援助のもとに派遣された宣教医師の所属教派は、創立以来一九四一年までの合計で次の通りである。

The Church of Scotland (including the former United Presbyterian and Free Churches) 68
The London Missionary 55
The Church Missionary Society 36

The English Presbyterian Church ……	19	The Methodist Churches ……	18
The Baptist Missionary Society ……	19	Other Societies (including our own 〈E.M.M.S.〉) ……	86
The Irish Presbyterian Church ……	9	Total	310

なお、「エディンバラ医療伝道会」の出版物“A Century of Service 1841-1941”に記されているところによると、同会が派遣した数多くの宣教医師の中で海外での医療伝道並びにクリスチャン宣教医師養成の分野で極めて顕著な活動を行なった宣教師として二人の名前が挙げられている。一人は漢口を中心に活動したメイン（Dr. Duncan Main）であり、もう一人は奉天を中心に活動したクリスティー（Dr. Dugald Christie）である。これら両名とも中国内において彼らの使命達成のためにそれぞれ宣教医師養成所を創設したが、特にクリスティーの養成所である「奉天クリスティー記念医科大学」（The Christie Memorial Medical College, Moukden）は非常に大きな成果をあげたと記されているが、彼の活動については、わが国でもこのクリスティーの著書（クリスティー夫人編集）である岩波新書「奉天三十年」（矢内原忠雄訳）を通してその一部を知ることができる。

このようにして発足した「エディンバラ医療伝道会」は一八五三（嘉永六）年にはエディンバラ市内に英国国内医療伝道所を開設し、宣教医師のために必要な指導を開始した。そして一八五四（安政元）年に「エディンバラ医療伝道促進時報」を発刊（のち一八七一年に「エディンバラ医療伝道会季報」“Quarterly Paper of the Edinburgh Medical Missionary Society”に継承される。）して同会の活動状況を報道し、一般の理解と協力を得ることに努力した。諸種の計画が必ずしも順調に実施されたわけではなく、特に人材確保の問題や伝道資金調達の問題で失望の連続のように思われる状況におかれたこともあった。しかし、関係者一同は「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。」（「ルカによる福音書」第九章六二節）と考え、いささかもたじろぐ

ことはなかった。彼らの熱心な祈りは聞き入れられ、行き詰まりと思われたところから医療伝道のための新しい道がひらけて来た。まことに奇しき神のご計画によるところである。

かくて「エディンバラ医療伝道会」は一八五八（安政五）年にはエディンバラ市の中心部カウゲート通三九番のウィスキーショップを借り受けて改装し、「ペンテコステ」の日を期して施療所兼宣教医師養成所を開設したが、このために奔走したのはエディンバラ市で四十年にわたり医療活動を続けて来た著名な開業医であるピーター・ハンディサイド（Dr. Peter Handyside）であった。彼はエディンバラ大学医学部でも外科医学を講じ且つ貧しい人々のために全身全霊を傾けて活躍していた。特に貧民街の真中に施療所を開設して、時間と労力とを惜しむことなく奉仕的に活動したので、彼の博愛的・宗教的奉仕活動の協力者であったエディンバラ大学医学部学生の中から宣教医師になろうと決意する者が次々に輩出した。このようにして、医療伝道に使命を感ずる医学生を訓練して宣教医師を養成することと、世界各地に医療伝道会を設置して宣教医師を派遣し医療伝道を行なうこととの両面を一つにした活動を目的とする「エディンバラ医療伝道会」の目的が、伝道会にかゝわる若い学生達によって実行される日が到来した。すなわち、一八六一（文久元）年にはイスラエルのナザレの町に「丘の上病院」を開設し、更に又、ダマスコの町にも病院を建設し、多くの患者たちの肉体的精神的苦悩を癒す働きが始められた。

ここで当時のわが国の状況に若干ふれると、長いこと鎖国を守り続けて来たわが国は、既述の如く、ペリー来航によって一八五四（嘉永七・安政元）年に「日米和親条約」を締結して開国し、更に一八五八（安政五）年には「日米修好通商条約」が調印されて、翌一八五九（安政六）年には各教派の多くの伝道会の宣教師達がキリスト教宣教師として公然と来朝するに至った。当時はまだ日本人へのキリスト教伝道は厳禁されていたので、彼等宣教師達は、切支丹禁教令の撤廃乃至緩和の日の到来を持ちつつ、聖書和訳・英語教育・医療活動等に従事して伝道開始の日に備えていた。しかしこのような禁教下にありながら、彼等宣教師達に接しているうちにキリスト教を知り、遂には

矢野元隆（一八六四〈元治元〉年）、庄村助右ェ門（一八六六〈慶応二〉年）、村田若狭・綾部恭兄弟（一八六六年）などをはじめとして約二十名が神奈川・横浜・長崎などで信仰を告白して受洗した。そして画期的な出来事として押川方義はじめ九名の青年が一八七二（明治五）年三月十日に横浜でバラから洗礼を受け、同日直ちに、既に他で受洗していた二名小川義綏・仁村守三を加えた十一名でわが国最初のプロテスタント教会「日本基督公会」が創立された。

丁度これと時を同じうする頃、一八七二（明治五）年の九月に横浜在住宣教師ヘボン宅で開催された第一回宣教師会議における審議内容の様子などが「エディンバラ医療伝道会」にも伝えられ、同伝道会としても日本における医療伝道計画を相当具体的に審議検討しはじめた。その結果、日本に医療伝道会を設置して医療伝道病院、施療所、宣教医師養成大学を設立して医療伝道を推進しようという方針が立てられ、一八七三（明治六）年には、日本への医療伝道開始に備えて宣教医師の選考を開始した。ところが、全く時を同じくして、わが国では此の年、政府が切支丹禁制の高札を撤去したのである。そしてこの報は直ちに世界各国に伝わり、「エディンバラ医療伝道会」もこの報に接した。

このような経過を経て、日本派遣最初の宣教医師に選考された人物は、当時既に医学の修業を終え、日本での医療伝道を熱望しつつ宣教医師になる準備をしていたセオボールド・エイドリアン・パームであった。「エディンバラ医療伝道会」は、日本での医療伝道を開始するにあたり、超教派的団体として活動するものであることを再確認した上で、一八七三（明治六）年春の理事会でセオボールド・エイドリアン・パームを日本派遣最初の宣教医師に指名した。

T・A・パーム

それではセオボールド・エイドリアン・パーム（Theobald Adlian Palm 1848-1928）とはどのような人物であろうか。彼の祖父ジョン・デーヴィッド・パーム・シニアーも父ジョン・デー

ヴィッド・パーム・ジュニアーも牧師であり、父ジョン・デーヴィッド・パームは一八一六（文化十三）年の生れで、スコットランドのエディンバラ大学並びにオランダのユトレヒト大学に学んだのち、一八三九（天保十）年に按手礼を受けて牧師になった。その後、父親（従ってセオボールド・エイドリアン・パームの祖父）が牧会していたセイロン（現在のスリランカ）のコロンボ市ウォルフンダールにある「オランダ改革派教会」（Dutch Reformed Chuch, Wolfundahl, Colombo, Ceylon）で牧会にあたり、一八六一（文久元）年にはイギリスへ戻ってバークシャー州のハーストで七年間牧会に従事し、更にウィンチェスターで二年間軍隊附牧師として勤務したが、一八七〇（明治三）年から一八八五（明治十八）年までオランダのロッテルダムの「スコットランド人教会」で牧会活動を行なった。その後、イギリスへ戻りパークハーストで軍隊附臨時代理牧師を短期間勤めたりしたが一九〇九（明治四十二）年一月三十日に九十三才の長命で召天した。Father of the Church of Scotland の称号を送られた。このジョン・デーヴィッド・パームには五男二女の子女があった。セオボールド・エイドリアン・パームは次男であって（長男ロイド、三男は夭折、四男ウィリアム・スチュアート、五男ヒラリー、長女アリス、次女エマ）、一八四八（弘化五・嘉永元）年一月二十二日にセイロンのコロンボ市ウォルフンダールにおいて呱々の声をあげている。

このセオボールド・エイドリアン・パームが、長じて医学の修業をつむようになると、祖父並びに父が共に東洋のセイロンの「オランダ改革派教会」牧師として東洋人へのキリスト教伝道に従事したことから影響を受けたのであろうか、自分も東洋の日本で医療伝道に献身したいと考えるようになり、「エディンバラ医療伝道会」で宣教医師になる訓練を受けるようになった。そのようなパームが日本派遣最初の宣教医師という名誉ある任務に就くことになったのであるからさぞかし感激し大いに満足したことであろう。(註七)

丁度同じ頃、「スコットランド一致長老教会」が伝道団を日本へ派遣することとなり、その派遣員として経験豊かな優れた宣教医師二名が選ばれていることが報ぜられたので、「エディンバラ医療伝道会」としても、明治維新を経

てあらゆる面で急速に大きな変化がおこりつつあった異教の国日本で、「スコットランド一致長老教会」派遣の宣教医師と協力して伝道活動が出来ることを喜び、この医療伝道事業を神が必ず祝福し、医療伝道を通して次々とクリスチャンが生まれる事になるだろうと考えた。福音が医療伝道を通して東洋の地日本に宣べ伝えられるためにということで、多くの人々から献金が寄せられ、又、宣教医師派遣に必要な医療器具・医薬品・諸物質などが準備された。と同時に「エディンバラ医療伝道会」としては、既に、アメリカの「米国監督教会」、「米国改革派教会」、「米国長老教会」などさまざまの教派の伝道会から派遣された宣教師や宣教医師達が日本で伝道活動を行なってかなりの成果を挙げていることを承知していたので、そのことからも大きな励ましと希望とを与えられていた。そして、セオボールド・エイドリアン・パームの日本派遣に先立ち、一八五九（安政六）年以来既に十数年にわたって日本に滞在し、欧米にまで日本通の人物として知られていた「米国長老教会」宣教師ジェームズ・カーティス・ヘボンに書翰を送り、「エディンバラ医療伝道会」としては日本のどこに活動の拠点を定めて医療伝道を開始すべきかについて助言を乞うた。それに対するヘボンの回答書翰はまことに親切そのものであって、当時の日本における諸状況を記したのち、「エディンバラ医療伝道会」の医療伝道候補地域としては、函館か新潟かのいずれかが良いと思うが、ヘボンとしては函館の方が望ましいと思うことを記し、最終決断は「エディンバラ医療伝道会」が派遣する宣教医師のパームが日本に着いてから行なう方が良いと述べ、しかもパームの来日を心から歓迎し、出来るだけの援助を行なうつもりであることをも約束したものであった。

このような情報をも検討した上で、まさにその標語「また神の国を宣伝へしめ、人を医さしむるために之を遣はさん」のごとく愈々パームを日本へ派遣することになった。そして、日本での医療伝道の根拠地は日本到着後パームが自分で決定することになった。

パームの来日

「エディンバラ医療伝道会」日本派遣最初の宣教医師という名誉ある大役を担うことになった弱冠二十五歳のセオボールド・エイドリアン・パーム[注八]は非常な感激の裡に準備を行ない、翌一八七四（明治七）年二月十二日には、カンバーランド州メアリーポート出身で、教会学校の教師として献身的な奉仕活動を行なっていた伝道精神極めて旺盛な女性メアリーと結婚式を挙げ、夫妻協力して日本で医療伝道にあたることを誓いあった。パーム夫妻は結婚式後一カ月も経っていない一八七四（明治七）年三月十日にはイギリスを船出し、約二カ月余をついやして五月十五日（金曜日）の早朝に横浜に着いた。

「エディンバラ医療伝道会」季報一八七四年八月発刊第十四号は、パームが横浜到着後四日目の五月十八日に記した手紙を紹介しつつ次のような記事を掲載している[注九]。パームに寄せる信頼と期待が如何に大きかったかを知ることが出来る。

Our readers will be glad to learn that Dr. and Mrs. Palm have arrived safely in Japan, and have met with a very cordial reception from missonaries of all denominations. In entering upon this new undertaking, we are fully sensible of the great responsibility resting upon us, but we gratefully acknowledge the goodness of God in having hitherto guided us in all our arrangements, prepared, and chosen for His own service, our young friend and former studnet, Dr. Palm, and inclined the hearts of His own people to help us with their means in starting this mission.

We have confidence in Dr. Palm's ability, prudence, and devotedness, and have left it to himself, in consultation with missionary brethren on the spot, to select the locality best suited for carrying on the Medical Mission. Dr. Palm's first duty is to get a knowledge of the language, and, by the time, we doubt not, God, in His good providence, will direct him where and how to begin work. We commend our young missionary and his wife to the sympathy and prayers of our readers.

Dr. Palm, writing from Yokohama, May 18th, says:——

"We reached our destination at an early hour on Friday last, May 15th. Our first business was to call on Dr. Hepburn, to

whom I had written, asking him to secure accomodation for us. He received us very kindly. My letter had come to hand about ten days before we arrived. He had made enquiries for me, but found that the mission families happened, at present, to have no room in their houses for any one. His own house was undergoing repairs. We, however, secured quarters where we are at present staying. With the general appearance of the country and the climate we have been very favourably impressed. Yokohama itself is a beautiful place, and the people appear to be gentle, industrious, intelligent, and well- conducted, so far as I have seen. Among the Europeans and Americans we have already found some very kind friends.……

Dr. Hepburn and others have advised us to settle in Jeddo, at least for the present, and, possibly, permanently. The advantages of Jeddo appear to be, that there, we have the purest dialect, we shall be more among the natives, and less liable to interruptions from our fellow-countrymen by visits, and it well afford the best opportunities of looking out for the future. The difficulty is to find a residnece at Jeddo. Foreigners, who are not in Government employ, are restricted to a limited district in which they build their own houses. There is not a single English built house to be got. We have been recommended to try to get a native house as a temporary arrangement. I hope to go, next Wednesday afternoon, house-hunting. (Jeddo is seventeen miles from here.) We have had very strong appeals, from various quarters, to settle down, but our first duty is to learn the language, and, in due time, God will direct us where we shall permanently labour. I invested this morning in Dr. Hepburn's Japanese Dictionary and reading books, and have just engaged a teacher to give us lessons."

ベームは横浜到着後、直ちにくボンを訪ね、医療伝道開始に必要なことについて色々助言を仰いだ。そしてくボンの助言に従って先ず東京に住んで日本語の勉強に専念することとした。しかし当時は、外国人が東京に住居を借りることは極めて困難な事であり、且つ又、家賃も非常に高価であったので、結局は、米国人実業家が借りて住んでいた住宅の一部分を間借りすることになった。ところでその間、ベームは横浜到着後四日目に日本語の先生を決め、又、くボン著の和英辞典（「和英語林集成」）を購入しているが、此の事からベームが如何に早く医療伝道を開始しようとしていたかを知ることが出来る。

パームは住居がきまるや直ちに日本語の勉強を開始した。その教師は当時二十四歳の教養ある男子であったが、彼は英語を一言も知らないので、パームはヘボン著の辞書を用いつつ忍耐強く熱心に努力した。その努力の結果、二カ月後には、パームはこの調子で一年も勉強を続ければ日本語で自由に話をする事が出来、又、説教をも行なう事が出来るようになるだろうと考えるほどだった。そして相かわらず午前中は日本語を学ぶと同時に午後には四人の青年達（彼等はみな士族の、勤勉な青年でその中の一人が日本語教師陶山昶）に英語を教えつつ彼等からも日本語を学ぶように努力した。又、日曜日の午後には、聖書輪読会を始め彼等が英語の聖書を読み、日本語教師が漢訳聖書を参考にしつつ日本語で聖書注解をする方法をとった。

パーム夫人の召天

パームはこのようにして医療伝道開始の日に備えて着々と準備を進めていた時に、非常に悲しむべきことがおこった。それはパームの愛妻が女児を出産して喜んだのもひととき、出産後三日目の一八七五（明治八）年一月十九日に神のみもとに召され、誕生した女児も生後十二日で神のみもとに召されたのである。パームの心中は察するにあまりあることである。

パームの悲しむべき出来事を「エディンバラ医療伝道会季報」（一八七五年五月発刊号）は次のように報じている。(註一〇)

Death of Mrs. Palm.——It is with feelings of peculiar sadness, that we record the death of Mrs. Palm, the wife of our Medical Missionary in Japan. She died on the 19th of January, three days after the birth of her little daughter, who only survived her twelve days. God's dealings with His children are often very mysterious, but, in the night season of affliction, when the heart is stricken and desolate, how comforting to know that "Himself hath done it, "and, in the darkness, to recognise His voice, saying "It is I, be not afraid." We can only commend our brother to the tender sympathy of Him, who, "in all our afflictions is Himself afflicted," and pray that the gracious presence of the Comforter may be richly experienced by him in this season of sorrow.

Mrs. Palm was born in Maryport, but spent most of her life in Brattan in Wiltshire. From her earliest years, she took a great

interest in Missionary work, but, when in her fifteenth year, she found Jesus as her Saviour, the true Missionary spirit which she possessed began at once to manifest itself in efforts to win souls to Christ. Many who were then her young companions date their first religious impressions to her earnest conversations with them. Previous to her marriage, she was a devoted Sabbath School Teacher, and was greatly beloved by her scholars. She was married to Dr. Palm on the 12th of February 1874, and on the 10th of March, they sailed for Japan. During the voyage she made her influece felt among her fellow-passengers, and never, in her presence, could her Lord or His word be lightly spoken of. On her arrival in Japan, she began at once the study of the language, and endeavoured, as she had opportunity, to do good among her servants and those around her.

即ち「パーム夫人の死」という見出しのもとにメアリー並びに幼児が神のみもとに召されたこと、そして神の御導きを祈ること、そして更にメアリーの短い生涯における信仰的な歩みについてふれ、更に次のようなパームの書翰を紹介している。

"My dear Mary has ceased to suffer, but only to find peace and rest in the arms of her Saviour. She spoke much of Jesus, and said she was sure she loved Him, but wished to realise more of His presence, and often asked for a text, or gave me one. She did not, at this time, think that her sickness was unto death, and said, 'Somehow I feel that Jesus is to let me stay with you a little longer, I don't think I am going to die, and yet I do love Jesus very much.' Then she would ask me to talk to her about Jesus, as her Father would have done. At last, I could not conceal from myself that she was dying, and told her that I thought so ; she seemed as if she could hardly believe me, and said, 'I can scarcely realize it, do you really think so?' I then prayed with her, and she prayed herself 'Lord Jeusus receive my spirit.' Dr. Faulds came in, and after a little while he said, 'I think Jesus is going to take you to Himself, we have been hoping against hope.' She was perfectly calm, and thanked him, and then sent many messages to all her friends at home. She contrived to write a sweet little note to her brothers, and said 'Tell them I have been very happy here, and am thankful I came'. She sent for the two servants and said to them in Japanese. 'Your master is in great

grief, be very good to him.' Poor O' Tetsu was very much overcome, and promised she would do all she wished. We then called Suizama, the teacher, and she asked me to tell him 'not to read the Bible only as a book, but to remember that it is the Word of God.' 'Tell all these people,' she said, 'that I did want to teach them about Christ as soon as I knew the language.' She deplored that she was going away without having brought any of them to the Saviour. I feel sure, however, that she was the means of leading the two servants to Him, and it is impossible to say how much she has done in this heathen land, by showing the example of a Christian wife, a Christian mistress to her servants, and a Christian friend to all. Her holy, loving, Christ-like character, shown in acts and looks and words of broken Japanese, have made themselves felt, and have made her beloved by all who knew her, and while she learnt Japanese, her teacher learnt gospel truth. How much fruit her death may yet bring forth, we cannot say. Her's was the first death-bed among the Missionaries here —— he first calm, triumphant Christian death the natives here have witnessed.

When she had told me all she wished done, she said, 'Now talk to me about Jesus', and asked me to let her head rest on my shoulder. She then wished me to read the 14th Chapter of John, and the two last Chapters of Revelation. We repeated together the hymn ——

'Jesus lover of my soul
Let me to Thy bosom fly.'

and 'Abide with me, fast falls the even-tide.' She then said she wanted to see Jesus more clearly, but it was evident her powers were fast failing. The baby was brought, and she kissed it and blessed it fervently, and then breathed her last, with her head on my shoulder.

I have been wonderfully supported, I can only understand it when I remember the many prayers offered up on my behalf. This is my first great trial, but the Lord sustains me. I thought Mary too ripe for heaven to be with me long. God, make us faithful to struggle on, till He shall call us home."

ベームのこの手紙は、涙なしには読むことが出来ない。ベーム並びにメアリーの信仰の偉大さに頭が下がる。メ

アリーはイギリスのメアリーポートで生れ、主としてウィルトシャー州のブラットンで成長したが、幼少の頃からキリスト教の伝道に大変関心をもち、十五歳の時に信仰告白をしてからは、人々をキリストへ導こうと努力をするような伝道精神の旺盛な人物であり、教会学校の教師としても立派な働きをしたようである。パームと共に日本へ向う船中でも、同船した船客達がメアリーから大きな宗教的感化を受けている。メアリーは日本へ着くやパームの医療伝道の良き協力者となるべく直ちに日本語の勉強を始めたが、日本語の教師はメアリーの言動を通じて福音の真理にふれ、又、パーム宅で働いた調理人夫妻もメアリーの人格的感化を大いに受けている。

このように、立派な信仰的態度で、接する人々に大きな感化を与えたメアリー夫人の召天という悲しい出来事を通して、パームは彼の進み行く方向を確と示されることになるのである。異教の地日本での医療伝道開始の日を目前にして、最大の協力者である愛する夫人と誕生後間もない愛児とが相次いで神のみもとに召されたパームは、当初、いくら考えても何故神がパームをこのように扱われるのかが分らなかったという。しかしパームは、やがて「メアリーが召されたことは、私にとっての最初の大きな試練です。しかし、神は私を励ましてくださいます。私は、メアリーが天国へ行けるほどまでに充分円熟したので、これ以上長くこの地上に私と一緒に居ることができなかったのだと思っています。神は、私達を私達の魂の故郷である神のみ許にお召しになるまで、私達がこの地上での生活を苦労しながらも誠実にすごすようにしてくださるのです。」と理解できるようになり、いくら考えてもわからないこの大きな試練は、神が自分を訓練し、「すべての事が相働いて益となる。」という事を理解できるように教示してくださったのだと信ずるようになった。



セオボールド. A.
パーム

パームの新潟着任

パームは当初の計画としては医療伝道開始に先立って、ヘボンがすすめてくれた二つの候補地である函館と新潟との両都市を予備視察した上で、更に多くの人々の意見をも参考にして自分の伝道地を決定

するつもりであった。しかしメアリー並びに愛児の召天という全く予期せざる出来事に遭遇して、メアリーが常日頃話していた「最も困難な道を選ぼう。」という方針を採ることにした。それ故東京で伝道するようにと勧める者もあった中で、即座に新潟に赴任することを決心した。新潟は当時、開港場の中でただ一カ所、プロテスタント宣教師が定住していない都市であった。パームはパスポート（国内旅行許可証）入手その他の諸手続・諸準備にとりかかった。

一八七五（明治八）年四月九日、パームは英国聖公会派遣宣教師ジョン・パイパー（John Piper）と共に東京を出発し、雪がなおのこっている三国峠を経由し六日間にわたる難儀な徒歩旅行を続けて本州を横断し、四月十五日に新潟に到着した。日本語教師（陶山祝）や調理人夫妻（水谷惣五郎・てつ子）も同行したが、彼等はパームの夫人メアリーの臨終の枕辺にはべってパーム夫妻の信仰に心うたれ、敬愛するパームの医療伝道のためならばすべてを投げすてて全面的に協力しようと決意したからであった。

パームはこのように彼の医療伝道の拠点として新潟を選んだことについて、新潟到着から約一カ月余経った五月十九日にエディンバラ医療伝道会の幹事ジョン・ロウ博士に宛てて次のような内容の書翰を送っている。(註二)

すなわち「私達が日本に到着して満一年の記念日は三日前のことでした。この一年間は神の豊かな慈愛と恩寵の証拠であるさまざまのことを経験し、そして又、私の生涯の教訓となる厳しい精神的打撃を受けるなど、私にとってはまことに事件の多い一年でした。しかし私は、私のそばから遙か遠くへ私の愛する親しい友である最愛の妻メアリーを取り去りたもうた神ご自身が、常に私のすぐそば近くにいましたもうことを信じます。そして私が神のご栄光をあらわすために独りで苦労しつつ伝道にあたることが神のご意志なのであると信じます。私は神が私の家庭から取りあげてしまわれた私の喜びを、私がこれから始める医療伝道のなかでお与えくださるものであると信じます。」「私は当初予備視察の目的で新潟を訪問するつもりでした。しかし、私の愛する妻が神のみ許に召されてから

は、予備視察をする必要をあまり感じなくなりました。私は、新潟を訪れたことのある宣教師やその他の人々から聞いた情報だけで充分であると思っています。実際に私はあらゆることが私の任地として新潟を指し示しているだけでなく、私には新潟以外の土地への道は開かれていなかったと感じます。したがって私は調理人達を連れ、身のまわりのものを持って早速新潟へ赴任することとし、予備視察で二度も旅をくりかえすことによる時間や体力の無駄な浪費をしないことにしました。東京にいる多くの友人達は私のためには私が東京に留っている方が良いと思いながらも、私が伝道の地として新潟が重要であると考えたその考えを理解して、私の新潟赴任に賛成してくれました。そして私が新潟地方在住の最初のプロテスタント宣教医師となることを祝ってくれました。」と。

パームがもしもその任地として新潟以外の土地を選んでいたとすれば、押川方義が新潟へ応援に出向くことがなかったであろうし、又、新潟地方で石油事業に従事していた東北地方出身の吉田亀太郎がパームや押川に出合うこともなく、そして又、パームから洗礼を受けることもなかったであろう。そうなれば吉田亀太郎が押川方義を東北地方のキリスト教伝道に連れ出すこともなく、したがって東北地方におけるキリスト教の伝道の歴史もまた異ったものになっていて、押川とホーイとの協力による東北学院や宮城学院の創立もなかったかも知れない。こう考えると日本での伝道候補地として、函館と新潟の二都市をあげ何れにするかはパームが決定するのが良いと答えたヘボンの回答が一つの要因とはなるが、最終的にパームの決断の決定的契機となったパーム夫人の召天について特別の関心を持たざるを得ない。

新潟に着いたパームは、当時新潟で英語学校長をしていたマーチン・N・ワイコッフ（Martin N. Wyckoff 1850-1911）夫妻の心温かい歓迎を受け、住居が決定するまでワイコッフ宅の客となった。当時の新潟は開港場として門戸を開いて間もない頃であったが、パームは新潟に好印象を感じたので、この地こそ神が導き給うた地であるとの確信を深め、医療伝道開始に意欲をもやした。間もなく住居・施療所・病院とするに適した家屋を見つけて一ヵ月

五ドルの家賃で借り受け、五十四ドル十六セントをかけて若干の修理と家具の新調を行ない、早速移り住んだ。

ところでマーチン・N・ワイコッフが一八七二（明治五）年から二年間、福井藩の藩校で教鞭をとっていた当時、ワイコッフの許で教えを受け、更に横浜へ出て勉学を続け、一八七四（明治七）年に受洗した雨森信成という青年があった。彼はその後郷里福井に帰郷したところクリスチャンになったことの故に家族の反対にあって身のふりように窮し、恩師ワイコッフと相談して助言を受けようと、丁度バームが新潟に着いた数日後に新潟に辿り着き、バームが客となっていたワイコッフ宅にあらわれた。そして雨森はワイコッフの勧めもあってバームの助手となり、バームの医療伝道に協力したいと願い出た。この辺の事情についてバームは次のように報じている。[注11]

"I am very thankful to have met with a Christian young man who is willing to assist me. He was formerly a pupil of Mr. Wyckoff, when he was teacher in the adjoining province to this, and under his teaching became a Christian. He then went to Yokohama to continue his studies, joined the Church there, and was commencing a course of study for the ministry. Having lately visited his home, his family objected to his being a Christian, and to his returning to Yokohama. He then came to Niigata, to Mr. Wyckoff, hoping that, in some way, a door of usefulness would be opened to him, and arrived here a few days after I did. Mr. Wyckoff spoke so highly of him, and I was so favourably impressed with him, that I thought he was providentially sent to me in answer to my prayer, that I might find a young native Christian who could assist me, both as evangelist and in medical work. I spoke to him and Mr. W. about it, and they both thought that we were providentially brought together to be a mutual help, and he is now staying with me as my assistant. I offered him 10 dollars a month, but he thought 8 would be sufficient, and now I look for some Christian friend at home to be responsible for that amount. He is 17 years of age, has a good knowledge of English, is a diligent student of Scripture, eager to commence preaching. At our morning and evening prayers, I always ask him to follow up my explanations of the portion read, and he has shown that he has a good understanding of it himself, and, in an unassuming manner, he gives a little discourse, which I can tell from the faces of his hearers 'enters their hearts' as they say."

パーム自身も、丁度、日本人クリスチャンの助手を欲しいと願っていたところだったので、パームは彼の祈りがききいれられてこの雨森信成という十七歳の青年クリスチャンが神の導きによって自分のところへ派遣されて来たと考え、パーム宅に同居させて協力者にすることにした。まことに不思議な神の導きである。

パームの医療伝道

パームは、日本人が一般的に読書力があり、相当数の者は漢籍の読書力もあることを知って驚き、医療伝道を進めるためには聖書やキリスト教関係書籍を国民の間に行きわたらせることが大事であると考え、母国スコットランドの「エディンバラ医療伝道会」に対して医療器具・医薬品の発送を要請すると同時に漢譯聖書・漢訳聖書註解書・英譯聖書・キリスト教関係諸書籍を香港聖書協会に多数注文した。このようにしてパームは有能な助手雨森信成の協力を得て医療伝道を開始した。やがてパームの身近かにあって生活を共にしていた調理人夫妻水谷惣五郎・てつ子が一八七五（明治八）年六月一日、洗礼を受けてクリスチャンになった。新潟伝道の初穂である。更に続いて日本語教師陶山昶とパームの許で施療を受けている盲人患者との二名が受洗した。このようにしてパームの許には雨森信成、水谷惣五郎・てつ子夫妻、陶山昶、盲人患者某というように日本人のクリスチャンが五名になったので、パームは神の豊かな恵みと奇しき導きとを感謝しつつ、愈々日曜礼拝を開始した。パームはエディンバラへ次のように報じている。(註二二)

"I have begun, now that our Japanese Christians are five in number, a Sabbath morning service, and, last Sunday, gave them an address on, 'If ye continue in my word, then are ye my disciples indeed.' I intend to go through the Acts of the Apostles with them, because I think it is so important for a young body of believers to be well acquainted with it."

そして最初の日曜礼拝には「汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。」（ヨハネによる福音書第八章31）

という聖句にもとづいて説教をし、それ以後の日曜礼拝では、新しい信徒たちは使徒行伝をよく学ぶことが大切であると考えて、使徒行伝の講解説教を続けて行くことにした。

ところで当時日本では聖書全巻の日本語訳はまだ出版されておらず、一部分だけしか日本語になっていないことを非常に残念に思っていたパームは陶山昶の協力のもとに使徒行伝の翻訳を始めたのである。すなわち陶山が漢訳聖書を日本語に訳し、それをパームが原義により近いものになるように補正し、更に陶山がその日本語を推敲するという方法をとるのであるが、このようにして毎朝数節ずつ翻訳を続けている。これは当時横浜の聖書翻訳委員会で聖書和訳が始められてはいたが、それが完了出版されるまでには相当の年数を要すると思われたので、パームは信徒や求道者が一日も早く日本語訳聖書を手許に持てるようにしたいと考えたからであった。そういった中で、雨森も水谷夫妻も毎日飲食物を摂るのと同じように熱心に福音書を読んでいたので、パームは彼等に聖書講解をすることが非常に楽しみであった。

セオボールド・エードリアン・パームが新潟で活発に医療伝道を開始したので驚いたのは新潟の宗教界の人々であった。何しろ当時新潟の人口は三万八千人であったが、そこに四十三カ寺を擁するほどの佛教王国であったので、パームの集会所に集ってくる聴衆の大半は説教を聴こうとする者よりもむしろキリスト教に敵意を持つ者が多く、パームの説教に対して罵言を浴びせたり、又、無知な質問を投げかけたり、時には腕をまくって説教者パームにおどりかかろうとしたりするようなこともおこるような雰囲気の中で説教が続けられた。兎に角説教中に石を投げつけたり柏子木をうちならしたり大変な騒動であって、新潟市内がこのために殺気だったほどであるという。それにも拘わらずパームの集会はいつも聴衆が溢れるほどであった。そういった中、ある時の集会で聴衆の中に乱暴者が混じっており、パームが説教中に通訳の雨森信成を説教壇上から引きおろして集会所外に連れ出そうとした。これを見たパームはその騒ぎの中にわけ入ってようやくの事で雨森を連れ戻すことが出来た。このように礼拝や伝道集

会が迫害の中で続けられるので、雨森はやがて横浜へ帰ってしまった。「日本基督公会」（「横浜公会」）の会員としての伝道経験をも有し、語学にも長じている優れた協力者雨森に去られたパームは非常な不便を感ずるに至った。

押川方義とパームの出合い

そこでパームは早速横浜のサムエル・R・ブラウンに書翰を送ってパームの医療伝道に献身する青年を派遣して欲しいと要請した。ブラウンからこの事を聞いたバラはある日の祈禱会の席上でブラウン塾の熟生達にこの事を伝えて献身者が名乗り出るように訴えたが、雨森から新潟の状況を聞いていたためか、自ら進んでパームの許へ応援に行こうと決意する者が無かった。この時、突如一人の青年が立ち上り、「私が行きます。」と名乗り出た。この青年こそが、後に仙台教会（現・仙台東一番丁教会）の創立者となり、更に仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校（宮城学院）の創立者となる押川方義であった。バラは、誰一人バラの訴えに応じようとする者が無かった中で、決然起ってパームの新潟伝道応援のために献身することを表明した押川の前に進み行き、歓喜のあまり落涙しつつ押川と握手をかわし、又、感激の気が堂内に充ち満ちたという。この時の状況を植村正久は次のように記している。

「新潟に居られたパームと言う医師が同地の伝道事業急なりとて、横浜の同志に応援を催促すること矢の如く、行く人の無いので皆思ひ悩んで居ったとき、或る日祈禱会の最中にすっくと立ち上りて『然らば、我が輩が行くべし』と慨然申し出られたのは押川方義君であるが、之が為に後輩の余等をして神躍り、血湧くが如く感ぜしめたのも（その場所は）矢張共立女学校（横浜二百十二番）である。」と。かくてブラウンも押川の召命感に心うたれ早速パームへ宛てて押川の人物推薦状を認めたのである。

ブラウンがパームに宛てて認めた人物推薦状の内容はどのようなものであったのだろうか。押川が終生大恩師として尊敬したブラウンが弟子押川をどのように評価していたかということ並びに新潟へ向かった押川はどのような経路をとったかということを推測出来る書翰がある。それはこれより大分あとの事であるが一八七六（明治九）年

一月二十七日にブラウンが「米国改革派教会」外国伝道局総主事ジョン・M・フェリスに宛てて送った書翰であって、それには次のような文面がある。すなわち「わたしたちの神学生のひとりで、パーム博士を助けるため、新潟まで行っている者からの手紙よると、最近、十一名の者が洗礼を受けました。それで、回心者十四名がごく短期間にできたのです。この青年押川（方義）は、ここの教会の長老のひとりです。パーム博士から、日本人のキリスト者を、助手に頼みたいとの、熱心な懇請があったので、祈って考慮した結果、押川が、横浜基督公会から委嘱されて、応援に出かける結果になったのです。彼は有望な青年であり、聖霊に満たされています。新潟に行く途中、本州の裏側を形づくる山脈の反対側にある信州に、一晩とどまりました。そして、そこに、十誡を憲法として禁酒会を組織し、安息日を厳守し、聖書の一部を読むという、小人数のバンドを、彼は見たのです。このバンドは、押川を三日間ひきとめ、彼の口から福音を学びたいと申し出たのです。そこで、このバンドの一員で、聖霊に潔められた者が横浜に来て、信州に、福音を説く人を得たいと申し出るような事態に発展しました。その結果、横浜基督公会の、もうひとりの長老、篠崎（桂之助）が、その人といっしょに信州へ行く決心をしました。そのため、わたしの神学塾のいちばんすぐれた生徒ふたりを失ったのですが、しかし、こういう召命への懇請を、断わることはできません。」[註一四]と。これによれば、ブラウンは押川をブラウン塾の塾生の中で一番優れた生徒、聖霊に満たされている有望な青年として高く評価し、その前途を大いに嘱望していたことがわかる。この押川がブラウンの激励を受けて新潟へ向ったのであるから、パームは押川の新潟到着をさぞや一日千秋の思いで待っていたことであろう。

一八七五年十二月二十一日に横浜を出発した押川は信濃路をえらび、多分、横浜・品川・板橋・大宮・鴻の巣・熊谷・本庄・高崎・安中・碓氷峠・小諸・上田・長野・高田・柏崎・新潟というコースを進んだことと思われるが、横浜出発より十三日を費して、一八七六年一月三日に新潟の宣教医師パームの許に着いた。その時丁度パーム宅では聖書講義の最中であったので、調理人の水谷おてつが玄関に出て押川を迎えたのであるが、押川は横浜を出発す

る時にブラウンから貰ったブラウン愛用の洋服を着ていたので、おてつは、手もかくれるほどだぶついた大きな洋服を着ている奇妙な風体の青年を見て驚いたが、この青年がブラウンからの連絡のあった押川方義であることを知るやまたまた驚いた。押川は直ちに聖書講義の席へ招じ入れられたのである。かくの如くして四国伊豫国松山出身の押川方義とイギリス、スコットランドの「エディンバラ医療伝道会」派遣の宣教医師セオボールド・エードリアン・パームとは佛教王国新潟の地において、聖書講義の場において劇的な対面をしたのである。福音を説くためには一刻の猶予も許されるものではない。パームは挨拶も忽々にして、早速、押川に聖書講義を依頼したのである。その日の聖書講義のテキストは「ローマ人への手紙」第八章二十二節以下の部分であった。押川はパームの依頼を受けて、一刻の休養をとることもせず、直ちにパームに代って聖書講義を開始した。その説くところ、異様な風体とは全く異なり、真に壮重なる威儀と大理石彫刻像の如き姿勢で、誠に明快適切であり、しかも火のでるような弁舌をふるって講義がなされたので、一同は粛として耳を傾けるだけであったという。押川がパーム宅の玄関で案内を乞うた時に出迎えに出た水谷おてつは、のちに押川が創立した仙台教会（のちの日本基督一致教会仙台教会、更に仙台日本基督教会、現仙台東一番丁教会）において婦人伝道者として活躍する人物となるのであるから、神の導きはまことに奇しきものである。

さてこのようにして開始された押川の協力によるパームの伝道は大いに成果をあげ、間もなく十名の者が受洗するに至った。押川の新潟到着後八日目の一八七六年一月十一日にパームが「エディンバラ医療伝道会」に宛てて送った書翰でパームは「うれしいニュースをお知らせします。私は大変明るい見通しをもって新しい年の歩みをはじめました。」とか「神様は横浜基督公会の長老であり、牧師になるための勉強をしていた押川を私のところへ遣わして下さって、私の期待をはるかに上まわる援助で私の祈りにこたえて下さった。」とか記した後、ブラウンの認めた人物推薦状に記されていた通りにすばらしい人物である事をも記し、更に「押川は仲々優れた雄弁家であって、大変

真面目に熱情をもって説教する非常に純粋な性格の人物です。聖書にも充分精通しており、伝道に召命感をいだいています。私はこのように優れた協力者を与えられたことを心から感謝しています。」とも記している。パームも押川も奇しき神の導きを得て積極的に伝道のために奮戦したので大いに成果があがった。このようにしてパームと押川とは新潟県内各地へまさに南船北馬、医療伝道の活動を続けた。

吉田亀太郎の生い立ち

次に忘れてはならない人物として、吉田亀太郎にふれなければならない。(註一五) 東北学院、宮城学院の創立者となる押川を東北地方へ、しかも仙台へ導き出すことに大きな役割を果した吉田亀太郎という人物が、新潟において、パームや押川と出合うことがなかったならば、押川が東北伝道に着手することもなかったかもしれないし、したがってまた、のちに押川とウィリアム・E・ホーイとが出合って東北学院や宮城学院を創立するということもなかったかもしれない。このようなことを考えると、パームや押川に出合ってキリストの福音にふれて、パームから洗礼を受け、押川の激励でパーム塾の塾生となり、且つキリストの教えを両親の居る東北地方へ宣べ伝えるべく祈り、遂に四国松山出身の押川を東北の地、仙台へ導き出すために大きな役割を果した吉田亀太郎は、宮城学院の創立を考える時に決して忘れてはならない人物なのである。


吉田　亀太郎

吉田亀太郎の父雄吉は一八三一（天保二）年、宮城県亘理町の伊達藩士族新妻興左衛門の四男として生れた。彼は浪人の身となったので北海道に渡って僧侶になるべく北上の途次、岩手県花巻の問屋に立ち寄った時、そこの主人吉田栄作に見こまれて栄作の次女さわの婿養子となった。そして鎧や刀剣を造ることに従事し相当の蓄財もできた。この吉田雄吉・さわの長男として一八五八（安政五）年九月に誕生したのが吉田亀太郎である。

ところで亀太郎の父雄吉は、明治維新後、新時代において大いに活躍すべく思い、商業に手をそめたり、また、鉱山業などを営んだりもしたのであるが、いずれも失

敗に帰して遂には家財全部を失うに至った。雄吉は婿としても立場上具合が悪くなり、遂に花巻を出て、叔父白金繁三郎を頼って宮城県石巻に来り、親子三人で一時石巻に落着いた。このことが、のちに吉田亀太郎が押川方義を石巻目ざして連れ出そうとする大きな理由になるのであるから、神の導きは人知をもってははかり知ることが出来ない。石巻に落ち着いた雄吉は、時あたかも町村制が敷かれ、渡波町・流留村・根岸村が合併して、役場が渡波町に置かれたので、渡波町役場で助役として働くことになった。なお、生活苦もあったので亀太郎の母さわは、一時親元、花巻へ帰っていた。ところで明治維新以後の社会制度の変革につれて、戸籍簿の作成などがおこなわれることとなり、印鑑が必要となったので、雄吉は印判屋を開業し、時代の流れにのって大いに繁昌した。かくて雄吉は経済的にも豊かになったので親元、花巻へ帰っていた妻さわを呼び戻し、また石巻の商家へ奉公に出していた亀太郎をも手許へ連れ戻し、吉田雄吉一家全員が揃った。

一八七三（明治六）年、吉田亀太郎十五才の時、吉田は祖母並びに伯母に連れられて上京した。伯母の夫は岡本監輔という漢学者であったので、吉田は上京後数ヵ月間はこの岡本家に滞在していた。その後、吉田は二條家が経営する銅駄屋に勤務することとなった。この銅駄屋の主人大村維虎は二條家の重役であったがその盡力で吉田にとって新しい道が開けることになった。すなわち、かねてから化学を勉強したいという強い希望を持っていた吉田の希望をきいた大村維虎の推薦で吉田は佐屋重光の主宰する築地新港町の化学研究所で研究に従事することとなった。ところでその化学研究所は「米国長老教会」宣教師カロゾルスの家に隣接しており、集会が行なわれると讃美歌や説教などが化学研究所まで聞こえ、また、カロゾルスが説教している姿も見えるという具合で、吉田はキリスト教の香りのするところで化学の研究に従事していた。吉田はこの化学研究所に勤務していた老人夫妻を通して「イエス伝」を手にすることとなり、ナザレのイエスが世界人類の救いのために十字架につけられたという内容を読んで涙を流して感激し、はじめてイエスの教えに接したが、しかしまだ特別の関心をもつには至らなかった。ちょう

どそのような時一八七五（明治八）年、日本橋から火災がおこり、遂に築地一帯まで延焼した。鎮火後、吉田は焼けあとに残っていた一冊の洋書に「東京第一長老教会カロゾルス」という印が捺されているのを発見したが、その洋書（英文聖書）を読むには至らずただ預っておいた。

火災後三日程たって、当時十七才の吉田は時の右大臣岩倉具視の招きを受け、石油精製事業の実情を聞かされた。それは吉田の勤務する化学研究所の石油精製方法成功の報が各方面に反響を与えており、ちょうど遣外大使として欧米諸国の視察から帰国した岩倉具視の耳に入ったからである。岩倉はもしわが国において国産石油の生産量が増えるならばそれだけわが国のために貢献するものであることを力説して、吉田が新潟で石油精製事業に当たるようにと激励した。岩倉は九條家塩小路光実から千円、東本願寺川奈邊甚平から千円、二條家佐屋重光から千円の合計三千円を吉田のためにととのえたので吉田一行は三千円という大金をもって一八七五（明治八）年十二月上旬新潟へ向って勇躍出発した。かくて十二月中旬に新潟県中條町の江口宇吉宅に落着き、一八七六（明治九）年の春から石油精製事業に着手した。事業の前途は洋々たるものであったが、事業関係者の中の会計係の不正事件に憤慨した吉田は事業から手をひき東京へ戻ってしまった。ところが当時、太政大臣三條実美の下に居った高根幸寛が新潟から戻って来た吉田に目をつけ、是非石油精製事業に協力して欲しい旨の申入れをして来た。吉田は高根の熱心な申入れを受けとめ、高根と共に四千円の資金を準備して再び新潟県中條町へ出向き、事業を開始した。高根の申入れがあった時、吉田がその申入れを受け入れることをせず、そのまま東京に留まったならば、吉田がパーム並びに押川と中條町において出合うということがおこらず、従って吉田が押川を仙台へ連れ出すことにもならず、東北学院や宮城学院も創立されなかったであろう。神の導きはまことに奇しきものである。

吉田亀太郎の受洗

さて、吉田は再度、中條町に着任して石油精製事業に着手したのであるが、他方、セオボールド・A・パームの要請に応えて押川が一八七六（明治九）年一月三日に横浜から新潟に着

任し、直ちにパームを助けて積極的に伝道を開始していた。熱烈な信仰の持主、優れた協力者押川方義の応援を得てパームの伝道は大いに成果をあげ、やがて一八七七（明治十）年に入るや、パームは医療伝道を新潟市以外の町村へ向けても開始し、伝道圏を広めて行った。このようにして、パーム並びに押川による伝道は中條町においても行なわれるようになったが、この中條町で行なわれていたパーム並びに押川による伝道説教を吉田が傍聴することになったのである。吉田がのちに押川の次男押川清に話したところによると次の通りである。

「其頃僕は或る工業家（高根幸寛）と共に或る事（石油精製事業）を志し、之れを大成して國利民福を謀らんと考えて居った。時偶々或人の話に『近頃押川と云ふ耶蘇坊主が、切支丹邪宗門の宣伝をして居る。此男中々（ママ）の雄辯で其の為めに此邪宗に歸依心を起しそうなものが可也あるそうだ。』と云ふことを聞いたので、『それは怪しからん、一つ僕が行って耶蘇の化の皮を剝いでやらう。』と勢込んで出掛けて行って、其説く所を聽いて見て驚いた。『今まで僕の思って居った切支丹は全然認識が間違って居って、其説く所と其人物に非常に感服して仕舞い、これは國の為め、人の為めに盡すには、此教へに入って、此人と共にやらなくてはならないと、深く心に誓ったのだ。』と。」

すなわち、耶蘇の化の皮を剝いでやらうと思って出かけて行った吉田が基督教の熱烈な伝道者押川を通してキリストの福音にふれたのである。吉田は「新潟よりパーム氏と押川氏の両人来たりて伝道説教をしたことがあったが、私はいつも人を連れてそれを傍聴に行ったものである。それをパーム氏も押川氏も非常に喜んで居られた。」と記している。そしてそれ以後、吉田は中條町での伝道集会には友人を連れて出席するようになった。やがて吉田は中條町から新潟へ移転して石油精製事業の他に製鹽事業をも行なうようになり、仲々多忙をきわめるようになった。その後、吉田は一時石巻の両親のもとですごした後、再び新潟に戻り事業に従事した。そしてパームの弟子小林瀧太郎という医学生の勧めをうけて、遂に一八七八（明治十一）年十一月にパームより洗礼を受けるに至った。洗礼を受けた後の吉田は相変らず事業に従事していたが、毎週日曜日に必ず礼拝に出席するために事業を休むので、吉田

と一緒に事業を行なっていた高根はそのことを面白からず思うようになり、基督教の信仰をすてることを望んだ。しかし受洗後の吉田は尚一層熱心な信仰の持主となったので、宗教上、信仰上のことでどうしても意見が一致せず、遂に吉田は高根と袂を分つこととなった。そこで吉田は事業から手を引き東京へ戻る決心をし、この決心をパーム並びに押川に伝えたので吉田の送別会が開かれることになった。此の送別会をきっかけとして思いもかけぬことが起った。すなわち、送別会に出席した押川が送別会の翌日朝早く吉田の家を訪れて吉田を押川の家に連れて行き、東京へ帰ることを思いとどまり、パーム塾の塾生となって、勉強をし是非伝道者になってほしいことを熱心に説き勧告した。押川の熱心な勧告を受けた吉田は押川と相当の時間をかけて論議した。この押川と吉田との論議は実に重大な話しあいであった。この説得勧告こそが吉田の進路を変更させることにしたのである。そして吉田の進路変更の故にこそ、のちに押川が吉田と協力して仙台の地で伝道を開始して仙台教会を創立し、ひいては東北学院や宮城学院が創立されることにもなるのであるから、神の導きはまことに奇しきものであると言わねばならない。

さて、押川の説得勧告を受けた吉田は一体どのような判断をしたのであろうか。吉田の記すところによると次の通りである。「私は之に対して快諾しなかった。そして答へた。『私は長男で両親を養う責任もあり、これから妻も持てば子供も出来る事であらうし、伝道者になるなどは御免を被る。』とばかりに早速はねつけた。すると押川氏が言ふには『それでは君は天地萬物を創り給うた神様を信じるや否や。』と尋ねた。勿論私は『それは信ずる。』と答へた。すると押川先生曰く『天地萬物を造りたる神は貴君を養い得ないというのか。』と突込まれて、私は答ふる言葉もなく黙って居たが、心の中では考へてゐた。これは理屈では到底かなはないから、とにかく避けるが一の手だと思うて、ともかくその場限りのいゝ加減な返事をした。そして『お勧め承知しました。それでは只の三日間だけ伝道者になりませう。』と答へた。すると押川先生は『三日でも宜しい。』と言はれるので、私は内心大いに驚いた。心の中では、こんな事をいったら多分『三日位で伝道者になれるものか、そんなものは到底駄目だからもう帰れ。』

とでも言ふに違いないと思ってゐたのである。所が意外な事には『それで宜しいからパーム先生の處へ行け。』といふではないか。それで私は仕方なしに、そんなら三日間だけ伝道者養成所の飯を食ったら、四日目にはサヨナラをする積りで、とにかくパーム先生の所へ行く事にした。そしてその翌日之迄の会社へは上京の事にして暇を取り、小さな荷物を持って直ちにパーム先生の處へ訪ねた。パーム先生は快よく『お入りなさい。』と迎えてくれた。入って二三の話の後『君は誰から伝道者になれと勧められたか。』と尋ねられたので、私はこの問に対して早速右手を高く上げて天を指し『それは神よりだ。』と答へてしまった。本来『昨日、押川先生より勧められていや〳〵ながら参りました。』と答ふべきであるのに、どういふ心理であったものか、手と口とが同時に滑り出して、『神より。』と答へてしまったのである。

パーム先生はやゝ暫時し首を垂れて何も言はなかったが、やがて頭を上げて『宜しい、二階に行き給へ。君の為に席があらう。』と申さるので、私は二階に上って見ると、其處には五六人の書生が居って迎へてくれた。私と差し向ひになって座することになった人は葛岡宗吉といふ私より年の若い者であった。とにかく此處に来ては見たものゝ一体どんな教科書が出るのか、又どんな風にして教はるのか全く分からないので、たゞ想像して色々考へながらその日は送った。一夜過して翌朝になると、階段をギウ〳〵音を立てながら昇ってくる人があった。いふまでもなくそれはパーム先生である。先生は私の部屋の障子を開けて言ふには『吉田さん、下に客が来て居るからどうぞ説教をお願ひします。』との事であった。私は無雑作に『はい。』と返事はして見たものゝ、考へて見るとこれ迄説教や演説などといふものは全く試みた事のない男である。困った事になったと思ったが、例へ三日なりとも伝道者の学校に入った者が、一座の説教も出来ないなどゝいふ事はあまりに卑屈な事だと思ったので、とにかく出て試みてやらうと階下に降りて来て見ると其處には四五十人の患者が集ってゐた。醫者であったパーム先生は、診察を始める前に先づ基督教の説教をして、その後に療治に取り掛るのを常としてゐた。集ってゐる者の中には紳士あり、淑

女あり、多くは自分より年の多い人達であった。それで私も言はんとする事が中々(なかなか)意の如くならず、その中脚がふるへてくる、脇の下から汗が流れる、顔は火の様に熱くなってくるといふ有様で、その時は何を話したのか自分も分らずに壇を降りたのであった。漸くホッとして部屋に帰ってくると、今度は明日の事が気になって来た。明日又来られたら大変だ。その時になって狼狽せずに用意して置くに如くはないと思って、一生懸命になって明日の事を準備し出した。翌日になると又靴音がしてパーム先生が見えられ『吉田さん、どうぞ今日も患者に話して下さい。』といふのであった。そこで私は『それ来た。』とばかりに直ぐ立ってパーム先生に従うて下に降りて見ると、前日にも劣らぬ澤山の人々が来てゐた。こんなに多勢の人々に対してお話する自分の説教が、いかにも貧弱なものである事を深く感ずると、前日にもまさって脚はわく〳〵ふるひ、又汗の出方も一層激しいといふ有様で、一体何を話したのか自分ながら記憶しておらぬ程狼狽してゐた。然し兎にも角にも時間だけは辯じて引揚たが、さあ明日も来られるのかと思ふと、もうぢっとして居られず、その時の説教の準備にあらん限りの腦漿を絞って考へる、書物を読む、祈るといふわけで、茶を喫するにも歩くにも、何をするにも説教の事ばかりを考へてゐた。私の頭はもう翌日の説教の事でいっぱいになってゐたのである。かうして三日も過ぎ、四日も過ぎたのに、パーム先生は相変らず毎日来られ『吉田さん、どうぞ説教を。』といふので、三日間だけ伝道者になるといふ約束はいつの間にか忘れ、たゞもう熱心に説教の事ばかりを考へてゐた。そしてそれが一ヶ月を経過し、一ヶ年を経過して、遂には今日まで五十年餘の歳月を経ることになったのである。若しあのパーム先生の追撃がなかったならば、三日目にしてほんとうにやめてしまったかも知れなかった。」

すなわち、押川の説得と勧告とがあまりにも熱心であったので、吉田はそれを無下に断るわけにもゆかず、三日間だけパーム塾ですごしたら東京へ行くつもりでパームのところを訪れたのであるが、その結果は吉田の意図するところとは全く違う方向へ進むこととなったのである。

（註一）The Evangelical Alliance. 一八四六年、ロンドンに世界各国の教会より八百名の代表が集って開かれた大会において創立された団体で、世界におけるあらゆる福音主義教会の一致協力を計ることを目的とする。

（註二）吉田亀太郎の父雄吉は、現・宮城県亘理町の伊達藩士族新妻與左衛門の四男であるが、現・岩手県花巻市の南部藩問屋吉田榮作次女さわの婿養子となった。亀太郎は一八五八（安政五）年九月、雄吉・さわの長男として花巻で生れた。

（註三）D.B. Schneder, "Evangelistic Work in Miyagi Ken". (Miller, H.K., "History of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States 1879-1904" Board of Foreign Missions, Philadelphia, 1904.) p. 18

（註四）昭和三年一月十三日午後一時より東京・青山齋場で執行された押川方義の葬儀で萩原信行によって朗讀された履歴では「嘉永二年」。（昭和三年一月二十六日発行「福音新報」第一千六百九十二号、九頁。）。昭和三年一月二十八日、東北学院中学部講堂で執行された押川方義追悼式で五十嵐正によって朗讀された略歴では「嘉永四年」。（昭和三年三月一日発行「東北学院時報」第七十五号、三頁。）。明治三十三（一九〇〇）年七月二十三日付青木周蔵外務大臣発行の押川方義の「旅券」（東北学院図書館所蔵）に記されている押川の年齢は「四十八年八ヶ月」とあり、これによれば「嘉永四年」生れである。ここでは押川自筆の履歴書によった。

（註五）年齢十六歳以上二十歳未満の優秀な人物を各藩から選抜して各藩の学費負担で大学南校に学ばせる学生制度。一八七〇（明治三）年七月に設けられ、三百十名が貢進生となったが、翌年七月大学南校の閉鎖により廃止された。

（註六）詳細は "A Century of Service 1841-1941" (A Sketch of the Contribution made by the Edinburgh Medical Missionary Society to the Extension of the Kingdom of God at Home and Abroad. Compiled by H.F. Lechmere Taylor) 参照。

（註七）セオボールド・エイドリアン・パームはバプテスト派の信者であった。それは一八七三年六月十四日開催の「エディンバラ医療伝道会」理事会の議事録中にある次の記録から知ることが出来る。

The Secretary mentioned that he had ascertained by conversation with Mr. Palm that if sent out to Japan by this Board he would avoid all endeavours to proselytize in behalf of his own denomination as a Baptist. Mr. Watson spoke of Mr. Palm in the warmest terms and urged the importance of missionaries being located in fields towards which their hearts are already drawn —— as is the case with Mr. Palm and the Japan islands. (「エディンバラ医療伝道会理事会議事録」二百三十～二百三十一頁)

（註八）「エディンバラ医療伝道会」関係資料中でパームの名が最初に見られるのは、一八六九年九月二十三日開催の同会理事会の

議事録中にである。すなわち、Mr. Burns Thomson brought forward the case of Mr. Palm from Winchester an applicant for admission into the Training Institution. Mr. Palm who is at present residing there had called for a number of the Directors, but had succeeded in seeing only the secretary. The evidence in his favor including the testimony of Mr. Burns Thomson, being very satisfactory, it was agreed to accept him as a student of the society. と。（「エディンバラ医療伝道会理事会議事録」六十一～六十一頁。）

（註　九）"Quarterly Paper of the Edinburgh Medical Missionary Society" No. XIV. August 1874, pp. 216－217.（以下 "Q.P." と略記す。）

（註一〇）"Q.P." No. 1. New Series, May 1875, pp. 4～5.

（註一一）"Q.P." No. 2. N.S., August 1875, pp. 20－21.

（註一二）Ibid., pp. 21－22.

（註一三）"Q.P." No. 4. N.S., Feb. 1876, p. 55.

（註一四）高谷道男編訳（S・R・ブラウン書簡集 ―― 幕末明治初期宣教記録 ――」三百二十六～三百二十七頁。

（註一五）詳細は吉田栄「吉田亀太郎追憶集」（昭和八年僕會出版部発行）参照。

第三章　我は福音を恥とせず

わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

（ローマ人への手紙　第一章十六節）

開校への胎動

吉田亀太郎の願い

かくして伝道者の道を歩むこととなった吉田は伝道に専心するようになると、このすばらしいキリストの教えを両親に伝えたいと思うようになった。すなわち、吉田の記すところによると次の通りである。「何にせよ、伝道心の燃ゆる所から、私の心の中には東北伝道の願いが勃々として起って来た。殊に両親が未だ信仰の域に入って居らないことを思ふと、是非両親も導きたいと思ふし、どうかして自分の國元や其の他の東北の天地に此の福音を伝へたいものだと祈ってゐた。然し當時未だ若輩の私がたった一人で働くといふ事は未だ不安でもあったので、これには先輩の押川先生を勧めて東北の地に連れて行くに如かずと思ひ、先づ自分の國の實状を見せる事が先決問題だと考えて、或時押川先生を説いて一度石巻まで視察として行って貰ふ事にした。この押川先生の石巻行には私は同道しなかったが新潟教会の信者がお伴をして私の家を訪れて下され、私の両親に説き教へてくれたので、両親も押川先生のお話に大いに感激し、私の行動に反対せぬのみか、大いに賛成してくれるやうになった。其後間もなく押川先生は新潟へ帰って来られたが、その時の話に『東北は大変自分の気に入った所だ。』といふので、それで私は早速『そんなら東北に行って伝道してくれませぬか。』といふと『自分は東北へ行ってもよいけれども、パーム先生が承知せぬだらうから駄目だ。』といふのである。そこで私はパーム先生に押川先生の東北行の可否を尋ねて見ると、『押川氏に行かれては困る。寧ろ私が行って働いて見たいと思ふがどうだろう。』といふ事であった。然るに信者達はこの事を漏れ聞いて『吉田は我々の押川牧師を東北に連れて行かうとしてゐるが、それは絶対に不可ぬ。』と大反対せられるので、若し押川先生連出し運動が困難であるならばパーム先生でもよろし

いと思ふて、早速に先づパーム先生の入るべき所を見出す為に仙台や山形の病院に交渉して見た。ところが仙台では獨逸帰りの赤星研造といふ人があるからパーム先生を入れる餘地はないと断ってくるし、山形では外國人を雇うて入れるといふ様な大膽な事は出来ないといふので、其の時は仙台も山形も駄目であった。」

このように吉田亀太郎は何とかして東北地方に、そして特に石巻に住んでいる両親にキリスト教の教えを伝えたいと熱心に考え、押川かパームかを東北地方へ連れ出そうと努力した。その具体的な動きの第一が、一八七九（明治十二）年六月、吉田自身が新潟を出発して、聖書を販売しキリスト教の講話を行ないながら石巻をはじめ仙台・古川・一関・山形・酒田・鶴岡・米沢など各地を巡遊踏査して九月下旬に新潟に戻り、東北地方各地の様子を押川並びにパームに報告し、東北地方、特に仙台・石巻地方に伝道が必要であることを熱心に主張したことである。第二が、前述のごとく同年十月、吉田の熱心な主張と勧めとを受けとめた押川が新潟教会員前山某を伴って新潟を出発し山形および仙台を経て石巻に至り途中、小国峠・赤湯・上山・山形・笹谷峠・仙台などを視察しつ、会津を経て、同年十一月に新潟に帰任したことである。第三が、一八八〇（明治十三）年四月、押川が吉田を伴って巡遊した伝道視察であって、これは新潟・十三峠・米沢・山形・二口峠・秋保・仙台・松島・石巻・白石・七ヶ宿・高畠・米沢・檜原峠・会津若松・津川・新潟というコースであったと思われる。このような数次にわたる伝道視察の結果、押川方義も吉田亀太郎も共に仙台地方に伝道を開始しようとの希望を非常に強くいだくようになったのである。この視察伝道旅行というのは風呂敷に聖書を包んで背負い、道々聖書を販売して歩きつつ、各地でキリスト教の講話を行なったり、あるいは信仰上の問題についての質疑応答や論戦を行なったりしつつ、各地における伝道の必要性、可能性等を視察するものであった。この聖書販売ということでは、吉田は東北地方における先駆者とも言うべく、米国聖書会社から吉田亀太郎に贈られた聖書に“Presented to Rev. K.B. Yoshida by the American Bible Society Tokyo, in view of the fact that he was one of the first Bible sellers in Japan. March 6, 1925”と記されている(註二)

ことがそれを証明していると言えよう。

新潟大火とパームの決断　さて既述の如く、当時、新潟教会においては、パームも教会員一同も、押川が新潟を離れることには不賛成であって、他方又、仙台でも山形でもパームを受け入れる態勢がととのっておらず、吉田の希望は到底叶えられる見込みもなかった。ところが押川と吉田との両名が伝道地視察を終えて新潟に帰り着いた直後の一八八〇（明治十三）年八月七日午前一時、新潟市に大火災が発生し、市の大半を焼きつくしてしまったのである。明治十三年八月二十一日発行「新潟新聞」第千二号によれば「去ル七日火災ノ概略ハ余輩既ニ二回ノ號外ヲ發兌シテ讀者ニ報道シタレハ其本港古来未曾有ノ大火タリシハ讀者既ニ之ヲ知ラン爾来日ヲ経ルコト十有四日東西南北至ル所トシテ之レ無キハアラサリシ火災ノ評判モ何時シカ消ヘ失セ今ト為テハ唯タ茫々タル燒跡ノ四方ニ連ナル有ルノミ……」との事である。新潟市の全戸数一万二百七十七戸中の六十パーセントに当る六千百七十五戸を焼失するという新潟にとって未曾有の大火災であった。この大火災についてパームは同年八月十二日付書翰でエディンバラへ次のように報じている。(註二)

"I am sorry to inform you that Niigata has been visited with a destructive fire, in which three-fourth of the town—that is, about 10,000 houses; some say 7,000 have been reduced to ashes. My house, dispensary, and hospital are all destroyed. We have, however, much reason for thankfulness to God, that we have not only escaped without injury, but have saved our more necessary and valuable goods, and through the kindness of friends have suffered comparatively little inconvenience. From the dispensary and hospital scarcely anything was saved; all the furnishings, medicines, and some of the surgical instruments which were kept there for daily use were lost. The inpatients, happily few at the time, were all removed to a place of safety.

The fire occurred at midnight on the 6th inst., and, within an hour of being aroused by the alarm, our house and dispensary (two doors off) were in flames. There was a strong wind blowing,and as we had a scorching sun and no rain for over a month,

the houses, which are all built of wood, burned like tinder ; the flames spread rapidly across streets and canals, and did not cease until the limit of the town was reached, the whole work of destruction being completed in about twenty hours.……"

すなわちこの大火災で新潟市の四分の三が灰燼に帰し、ベームの住居も施療所も病院も焼失してしまった。このような未曾有の大火災にあって、ベームは、押川は、そして吉田は如何に悲しんだことであろう。しかし、彼等はただ悲しんでだけいるような人物ではなかった。「神は火を以て漸々大なることをなし給くるが、げにかの新潟伝道に一頓座を来さしめて以つて仙台地方開拓の折をば與く給」うたのである。ここで、押川が一八七六（明治九）年一月に新潟のベームのもとに着いてから、ベームの協力者として如何に精力的にベームの医療伝道の一翼を担って活躍したかをベーム自身の数通の書簡を通して眺めておこう。この北越伝道での押川の経験が、やがて始まる東北地方伝道に活かされることになるのである。すなわちベームは次のような報告を行なっている。

"I am sorry to have to tell you, that I have been suspended from all work since September 16th by illness, and have been confined to bed from then till three days ago, but now I am in the fair way of recovery. Although my medical work has necessarily been suspended, the preaching has been continued as usual every evening by Oshikawa and my teacher, assisted, to some extent, by the other young men." （一八七六年十月五日付書簡(押川)）

"Our chief worker has been Oshikawa, who has been labouring here up to last month. He has been supported as an evangelist here by my father's church. He is now on a visit to his home in the South of Japan, but will, if God permit, return to his work here early in spring. While here, he prepared a translation of a chapter in one of my books on the duties of church members.

It consists mainly of a summary of passages of Scripture, bearing on the subject, and, as many of these have not yet been translated into Japanese, he thought it would be useful to his fellow Christians. I revised his translation, and it is now being

printed. I hope, in a few weeks, to have an edition of 500 copies ready, which I shall be able to sell at something less than a shilling, as in Japanese it forms quite a little volume." (一八七六年一一月一九日付書翰(注四))

"In a summary of the year's work, I should not forget to mention the visits paid to Sado, first by myself, and then by Oshikawa, of which I have already sent you an account. We have two or three applications from fresh places in the country." (一八七八年五月発刊「エディンバラ医療伝道会季報」所載書翰(注五))

"In the country, we have kept up, fourteen preaching stations, services being held in some three or four times every month, and in some only once. The attendance at these has varied from eight up to two hundred. On my rounds in the country, I preach at most of these places once a month, and Mr. Oshikawa, who is a most devoted and indefatigable fellow labourer has borne the greater part of the work. So the year has been mainly one of sowing, the fruits of which we shall surely see after many days." (一八七九年五月~一八八三年一月「エディンバラ医療伝道会季報」所載書翰(注六))

"In April, my wife accompanied me. A foreign lady proved an attraction, especially as we were able to sing hymns to the accompaniment of a harmonium, so that, at preaching places, we had larger audiences than usual in the evening. The native doctors in the different places, treated us with every courtesy, and did all in their power to make my wife's visit pleasant. At one place, quite a number of ladies assembled to hear the harmonium and foreign singing, and Otetsu (our housekeeper) took the opportunity of giving them an address, which she is well able to do. Oshikawa, on hin return from the same place, subsequently reported, that her address had awakened an interest among the women, and suggested that, in company with Mrs. Palm, she might do a good work amongst the women. It is our wish that Otetsu should give herself to evangelistic work, as a Biblewoman. She has had exceptionally good opportunities of being taught in the Scriptures, and by Christian experience and motherly character, is well fitted for the work. My wife is at present studying the language, and will, I hope, before long be able to conduct meetings for the women along with Otetsu." (前記と同(まつ)じ)

"It is a comfort to me to think that all those about me, who have to deal with the patients, are Christian men and women. Another was the wife of the Evangelist who is living Nakajo ; another, a young woman from the island of Sado, who was brought through the instrumentality of one of the Christian women who has spent the winter over there. The last is a man of sixty-nine years of age, from Murakami, a place beyond treaty limits, where Oshikawa has been preaching once or twice a month for some

time. This old man was interested from the first, and has never missed an opportunity of hearing." (一八八〇年五月二十四日付書翰(註八))

"I have now been more than five years in Niigata; it has passed quickly. I have been permitted to see some fruits of my work, but I hope to see much greater results. We have need of patience, and with it a zeal that will not let us settle down into routine.

My fellow-worker, Mr. Oshikawa, contemplates making a lengthened stay at Sendai, where he thinks there is a more urgent call for an evangelist than here. I am sorry to lose his help, but believe that we shall be no losers by scattering more widely. It will, I hope, call forth more effort among the other Christians, who will have to carry on his work here, and I, too, shall have more devolving upon me. One of our Christians who is employed as a Colporteur by the Bible Society of Scotland, has gone on a tour to the very south of Japan, in company with Mr. Thomson of that Society." (前記と同じ(註九))

すなわち、押川は、パームが疲労のため長い間病床にあった時にも、パームにかわって毎晩の説教を担当しており、又、押川はパームの蔵書の翻訳をも行ない、パームの校訂で出版したりもしたが、パームは押川のあらゆる面における活躍を高く評価し、「押川は私達の主要な働き人として活躍を続けている」と報告している。そのように高く評価されている押川の根気強い献身的な協力と活躍とによってパームは伝道圏を新潟市以外の各町村(はるか佐渡へも)にまでも広げることが出来、各地でパームの医療を受け、伝道説教に耳を傾ける者が多くなって来た。播かれた福音の種子が着々と実を結びはじめたのである。そしてパームが新しく迎えた夫人も伝道戦線に加わってオルガンで讃美歌の伴奏をするにおよび、パームの医療伝道は非常な成果を挙げて来た。なお、この間の押川の伝道活動のために、パームの父が牧会していたオランダのロッテルダムにあるスコットランド人教会の会員達が献金を送金して支援したり、又、押川は、彼がクリスチャンになったために、長いこと同居することが出来ないでいた夫人常子をパームの理解と盡力とによって迎えることになり、一八七六(明治九)年十二月に松山へ帰省して夫人を

新潟へ連れて来たのである。パームが如何に押川を高く評価し、押川のために配慮しているかを知ることが出来る。

なお、パームが来日直後の一八七四（明治七）年六月にパームの許で働くことになった調理人水谷惣五郎・おてつ夫妻は、医療伝道のための力強い協力者として家事を担当しつつ求道を続け、既述のごとく新潟で最初の受洗者として洗礼を授けられたが、この水谷惣五郎は熱心に聖書の研究を続け、やがて伝道者としてパームの施療所の待合室で患者達に聖書を説きあかし更には新潟近郊の町村へも定期的に聖書の普及頒布を続けながら福音の種子を播いてあるくようになった。彼は非常に熱心に愛情をこめて福音を説いたので、信仰を持つに至った者は口をそろえて彼の指導を感謝したのである。このようにして縦横無尽の活躍を続けていた水谷惣五郎は、或る日パームの施療所で説教の最中に心臓に痛みを覚え、講壇を降りるや天に召された。まことに残念なことであった。このように熱心な信仰の持主水谷惣五郎を天に送った妻おてつも夫に劣らぬ人物であった。彼女も夫同様、元来は調理人としてパームの許で医療伝道に協力していた者であるが、パーム夫妻の導き、特にパーム夫人の臨終の枕辺に侍ってから、求道心が強くおこり、やがて信仰をもつようになったのであるが、それ以後は夫惣五郎同様に聖書の研究を熱心に続け、パームが新夫人を迎えた頃にはおてつもパーム新夫人と共にパームや押川並びに吉田らによる伝道を支援すべく伝道戦線に加わったのである。パームはおてつの性格や信仰に至る経過から判断して、おてつが伝道者に適すると思われるので、是非婦人伝道者になってパーム新夫人と協力し婦人会の諸集会で活躍してほしいと考えるに至った。（このおてつがのちに押川方義が創立した仙台教会で婦人伝道者として活躍することになるのである。）

このようにして新潟地方におけるパームの医療伝道が次第に大きな成果を挙げつつあった時に前述の如き大火が発生したのである。多くの人々に非常な不幸をもたらした事は事実である。しかしこのような苦難に遭遇してもパームは気落ちすることなく勇敢に立ちあがった。そして医療伝道再開のために必要な準備に着手すると同時に東北地方への伝道開始という新しい道へも第一歩を踏み出す決断をしたのである。吉田によれば、「多くの人々に非常な不

幸をもたらした此の火事は、私にとっては実に不思議なる一つの導きとなった。先づ第一に、此火事は私の病気を取去って無病な者としてくれた。不思議な事に此の火事で受けた一大衝動と、心身の疲労を征服して働いた私の活動は、私の病を一掃してくれたかの如くであった。第二は、此火事に依って一ヵ年も願うて居た、押川先生を東北伝道に連出して行きたいといふ念願が聴かれた事であった。或る時パーム先生が私を呼んでいふには『此の大火災の後であって見れば、ここ二年位はとても元通りの新潟に復することは困難であらうから、かねて君が願ってゐたやうに押川先生を君の希望通りにお上げしよう。』といふ事であった。この時の私の喜びは非常なもので、雀躍(こおど)りせんばかりであった。そして心から神に感謝して、祈りの無駄でなかった事を喜んだ。」ということである。パームの医療伝道の前途多難が予想された時に、パームは自分の苦難遭遇をものともせず、吉田のかねてからの熱望に応えて押川の東北地方派遣を決断したのである。吉田はのちに「思へばかのパームといふ先生は、実に度量の大きい人で、また主に仕へるに熱心な人であった。それが為に、私の下手糞の説教もよく忍耐して之れを煉られたのである。それが先生の教育であった。実物教育であった。人を愛せよといふと自らが愛して見せたのであった。教会の集会にはいつもパーム先生と押川先生と相並んで座するのであったが、あの太腹の押川先生もパーム先生の前には消えて終ふのであった。或はシュネーダー博士から『パームさんと押川さんとはどんな風であったらうか。』と聞かれたので、私はかう申上げた。『パームさんは実に象の様に大きく、其前には押川さんも象の前の動物の様に見える。』と言った事があった。あの秀才の押川先生もパーム先生よりギリシャ語を学んだ時は、例のパーム先生の追撃に逢うて、汗を流して苦しんでゐたのである。」と記しており、このように実に度量の大きいパームであったからこそ、パーム自身が最も困難な状況におかれた時に、吉田の切なる願い、熱烈な祈りに応えて、自分の最も信頼できる力強い協力者押川を東北地方へ派遣しようという度量の大きい決断ができたのであろう。

「東北を日本のスコットランドに！」

とにかく、新潟大火はパームの医療伝道に一時は一頓座を来さしめるかの如く思われたようであるが、しかし此の試練を通してパーム・押川・吉田らは従来に倍する強い伝道心を燃やして伝道にあたった。そして「東洋の空気中に東洋の水を飲んで生長した人だけあって、英国人であっても東洋人に対しては深い同情を持ち、大きい愛の心を持ってゐた。殊に日本人の武士的な所とスコットランド人の気風とは全く似通ふた点もあるので、日本人とは性格的にも通うものがあったらしい。それで押川先生の様な古武士的な精神とはピッタリと合ふのであったらう。而もその心は実に大きくあった。」と吉田が評しているパームは、パームが最も困難に直面した筈の新潟大火の直後に、自分の医療伝道の再出発の手順を考えると同時に、かねてから吉田が熱心に願っていた吉田の両親への伝道をも含めて、東北地方伝道のために、パームが高く評価し最も力強い協力者として全幅の信頼をよせていた優れた伝道者押川を東北地方へ一年乃至二年間派遣しようという決断をしたのである。吉田の熱望に応えたパームの決断によって吉田の両親の居る宮城県をはじめ東北地方各地への伝道が開始されることになった。押川は、パームのこの勇断に感激したのであろうか、東北へ向って出発するまでの僅かの期間に、新潟市を中心に近隣各町村での最後の伝道に全身全霊をふるって大いに活躍し多くの求道者が洗礼を受けるに至った。押川並びに吉田は、新潟の地に名残りを惜しみつつも、パーム並びに新潟の信者達の激励を受けて勇躍東北地方伝道のために新潟をあとにした。かねてからの熱望が満たされて愈々東北地方伝道に着手できることになったとはいえ、押川、吉田は恩師パームを焼土と化した新潟にのこして東北地方へ出発するには後髪を引かれる思いもあってその心中まことに複雑であったと思われる。しかしパームが押川を派遣して東北地方の伝道を開始させようと考えたことは、宗教改革者ジョン・ノックスがスコットランドに福音主義キリスト教を宣揚して人心を一新し、国運を隆盛に導くに至った事を心深く思いつつ祈って決断したものであった。押川はそのパームの人格を心から尊敬すると同時に、パームの期待に是非とも応えて奮戦し、キリスト教伝道の処女地「東北をして日本のスコッ

トランドたらしめん。」との召命感に満たされた。押川は感激の裡に若き熱血漢吉田の先導で一八八〇（明治十三）年九月六日新潟を出発した。時に押川方義満二十八才。吉田亀太郎満二十二才である。パーム夫人はこの間の様子を「エディンバラ医療伝道会」へ次のように書き送っている。

"Mr. Oshikawa, Dr. Palm's friend and fellow labourer, who has been working here and in the neighbouring country districts for four years, took leave of us, with his wife and two children, on the 6th of September for Sendai, a port on the east coast of Japan. Yoshida, a young evangelist, who was brought to Christ by means of Oshikawa's preaching, went with them. They are going to work there for Jesus one year, and perhaps two. What I wish more particularly to tell you about, is Oshikawa's farewell meeting at Nakajo with the country Christians."

吉田の先導で東北伝道に着手することになった押川は夫人常子（当時懐妊中）、長男方存（まさあり）（数え年五才）、次女克子（数え年二才）[註一〇]、吉田亀太郎、水谷おてつ（婦人伝道師）、石黒まち子（横浜共立女学校生徒。のちの吉田亀太郎夫人）の一行七名で、パーム夫妻をはじめ新潟の信者達に送られて一八八〇（明治十三）年九月六日に新潟を出発して吉田の両親の住んでいる石巻へ向った。吉田の手記[註一一]には石巻へ向う途中の様子その他が次のように記されている。

「自分と押川氏一家は仙台に行く者、水谷鉄子姉は東京へ行く者、石黒待子は横浜共立女学校に帰する者にてありき。この日は新潟県今町新丁、古屋源七方旅館に泊す。金一円八十七銭　宿料、金十銭　センベイ、金壹銭五厘　茶代、金六銭　茶代、金十三銭　ソバ二つ、金弐銭　茶代、金五十七銭　人力車、金壱銭五厘　茶代、金壱銭弐厘　わらじ、金十三銭　ワラヂ、金五十七銭　人力車、金壱銭五厘　茶代、金二十七銭　人力車、金四十五銭　新井より

関山人力車、金五十八銭　人力車。明治十三年九月十五日は上田を発足して馬や人力車に乗り、婦人と共に運ぶこととなる。僕等は徒歩にて行く。軽井沢に泊る。十六日前橋着。旅館に入る。翌日は朝五時に馬車に乗り出発。（中略）宮城県の寒風沢と云ふ港に投錨して塩釜に上陸したるは正に九月二十六日、石巻へ行くべく新潟を発したる我らなれど塩釜に上陸したる以上は仙台の方は五里、最も近く且つ東北の都なれば押川の奥様に見物さするつもりで其日仙台へ人力車で安藤利兵ヱ方へ投宿し、其翌日は仙台見物、船中の苦しみを癒して石巻へ行くつもりなり。

さて仙台を見物して見た所、いやこれは中々広い所だ、此の大なる所を後にして小なる町へ行くと云ふことは考物だ。吾ら二人の心に起りたる考えなりき。

さて仙台に居を定めたとなると僕には容易でない。どうして食ふて行くかまず先決問題だ。それで只神助け給ふなりと信じて聖書を売り金を得ながら伝道せねばならぬのであった。それで仙台市中一軒一軒聖書を販売して歩けども中々仙台斗りではそう売れないので、地方へ出て石巻、古川、角田、白石、大河原、村田、相馬、金山、北は一ノ関辺まで売り歩いた。サテ吾らは仙台を定住の地と定めたれば適当なる家をさがし早速講義所の看板を掛けて伝道せざるべからずと仙台中歩き廻りて見たが三四日見て歩く中に北三番丁木町通り角に下きく（ママ）と云ふ（註一二）人の家を借りることとなって早速それに移り看板をかけた。これ十月十日であった。ここに三ヶ月も居ったが更に来る者はなく誠に淋しい。これは町の真中に出る方がよかるべしと遂に国分町一丁目山下といふ人の家を借りて入り、店を開きてサンビカに説教をするやうになった。はじめは五、六人しか入りはなかったがだんだん増加して来た。これは明治十四年二月のことであった。（下略）」



押川常子

北越地方伝道から東北地方伝道へ向う押川らの旅は、何しろ懐妊中の押川夫人常子をはじめ幼い子女（方存五才、克子二才）や押川並びに吉田の良き協力者水谷おてつ、石黒まち子も同道しての旅行であったため、「押川吉田両氏交々子女を背に負

ひつゝ山を越え谷を渉り備に艱苦を嘗め」つつ信州を経て東京に出るという陸路であったので、常子夫人だけが人力車に乗り他は皆徒歩で旅を続けるという具合で、その苦労は今日では想像できぬほどのものであったと思われる。東京から横浜に出た一行は水谷おてつ、石黒まち子を横浜にのこし、海路三日間の船旅を汽船高砂丸（約五百トン）ですごした後、九月二十六日松島湾内の寒風沢島に到着、直ちに小船に乗りかえて塩釜に上陸、仙台に向い、国分町の安藤利兵衛旅館に旅装を解いた。実に新潟出発以来二十一日間の旅行であった。仙台到着の翌日、押川と吉田の二人は仙台市内を見物しつつ仙台の地形、風物、人情等をつぶさに観察し、その夜、二人の観察の結果をもとに、東北地方伝道開始の拠点地について熱心に語り合い祈りをささげた。元来二人が目指す都市は吉田の両親の住む石巻であった。吉田がのちに「私共は最初は私の国元たる石巻に行く積りで立って来たが、然し今自分達の目の前にある此の大都会を棄て、小なる石巻の地に行くといふ事は果して神意であらふか、最初の目的地であった石巻に行く事を止めて仙臺の地にしたらどうか、先ず祈って見よう。そして確乎と心に教へられた方に決めようといふので、二人は座敷の真中に座して暫し一生懸命祈った。やがて二人共に声を同うして『仙臺、仙臺』と叫んだ。二人の心の中には全く同じ事が感じられたので、石巻行を変更して仙臺に定住し、此処で傳道を開始せんと決心したのである。」と記している。押川らは安藤旅館を出たあと片平町の森信夫といふ士族屋敷に暫し下宿して数日間仙台市内に講義所とすべき家屋をさがして奔走した。やっとのことで北三番丁、木町通角屋敷の志茂きく宅を借りることが出来、十月十日にここに移って「基督教講義所」という看板を掲げて伝道を開始した。そして日曜日ごとに集会を開き説教を行なうこととしたが、当時はまだキリスト教の教えを真面目に聞こうとする者が殆んどなく、「日曜の夜毎に燈火は空しく点ぜられ」押川の「説教も準備の甲斐なくして終ること屢々にて講義所の前に掲ぐる看板も時々悪漢の為めに溝中に投ぜられ翌日遙かの下流に於て発見せらるゝ事など珍しからざりき。」という状況であった。そこで押川と吉田とは聴衆の来るのを空しく待つよりは市内の一軒一軒を訪ね歩いて聖書を売りつつ伝道することに力

を注いだが、ある時は天保銭一枚を出されて立ち去れと言われたり、あるいはまた取り出した聖書を足で蹴られたりするなどということもあり、二人の苦労は並大抵のことではなかった。然し迫害が強ければ強いほど二人の意気は益々盛んに燃え、風呂敷包を背負って市内をくまなく歩きながら聖書を売り歩き、路傍で伝道説教を行ない、更に仙台市内のみならず遠く石巻、岩沼、角田、吉岡、古川等へまでも歩きめぐり悪戦苦闘の限りをつくし物心両面の困難とたたかいつつ伝道を続けた結果、やがて講義所での集会にも聴衆が若干集まるようになり、希望が湧いて来た。多分その様子を押川は恩師パームへ書き送ったのであろう。一八八〇(明治十三)年十一月二十九日付のパームの書翰には、

"Oshikawa and Yoshida have commenced work in Sendai, and write hopefully."

と記されている(注一三)。

「仙台教会」創立

このようにして二人は仙台市内並びに宮城県各地に聖書販売と伝道を熱心に行ない、吉田が石巻、岩沼、角田、丸森、金山等の各地を一巡して仙台へ戻ると、代って押川が七北田、吉岡、三本木、古川方面を一巡するという具合に、交互に伝道旅行を行なった。やがて一八八一(明治十四)年二月二日、国分町一丁目七十三番地の小西宅に講義所を移し、地の利をも得て、毎夜伝道集会を開くことが出来るようになった。とは言え、新潟のパームからの送金は押川の伝道旅費や講義所の家賃等に用いられ、経済的には窮乏生活をおくらざるを得なかった。しかし、このように伝道集会が次第に盛んになろうとしていた大事な時に、前月(一月)に男児(次男清)を出産したばかりの押川夫人常子は、栄養を充分に摂れない上に心身の過労も加わって授乳も出来ないほどに衰弱してしまい、同時に又、押川も腸チブスにおかされて約三ヶ月間も臥床せざるを得ないとい

うまことに惨憺たる状態になってしまった。このような場面に遭遇して、吉田は全身全霊をつくして押川夫妻の看護にあたると同時に家事一切をも担当したので、押川の病状芳しからざる時には吉田は一ヶ月以上もの間、蒲団に横臥したことがない程の大活躍をした。押川は病臥中にも室内に地図を掛けて日夜これを眺め、病気が全快した暁には全国をキリストへ導くべく伝道を開始しようとの意気ごみに溢れ、押川の病臥中の信仰が押川の主治医にも大きな感化を与え、のちに洗礼を受けるに至ったほどである。頑健な体格の持主吉田が、押川一家にとってのこの一大試練をのりこえるために全力をつくした甲斐があって、やがて押川も快癒し再び力強く伝道を開始するに至った。そして遂に一八八一（明治十四）年五月一日、横山覺、伊藤悌三の二名が東北地方伝道の初穂として受洗するに至り、この日仙台教会（現在の仙台東一番丁教会の前身）が創立されたのである。すなわち押川方義、吉田亀太郎が北三番丁、木町通角屋敷に「基督教講義所」の看板を掲げて伝道を開始してから七ヶ月後のことである。なお、ここで厳粛な思いをもってふれておかなければならないことがある。それは、病臥中であった押川の病状が快方へ向うのとは反対に、同じ病気[註一四]に罹った押川の次女（当時三才）の克子は、病状が次第に悪化して仙台教会創立の日から約二週間後の五月十三日に神のみもとに召されたことである。東北地方伝道最初の召天者である。吉田はのちに次のように記している。「先生の重病が不思議に快方に向ってくると、それにつれお嬢さんの方が次第に悪くなって来て先立たれてしまったのは、全く父の身代りになったやうに思はれた。神様が人間に子供を下さるのは、たゞ其の子を生長せしむるばかりでなく、或る場合は両親の身代わりとなって犠牲になる事もあるやうに思ふ。克子さんが仙臺の地で亡くなられたのは、父をして仙臺に腰を落着けて働かせしむべく、そして更に神の御祝福を受けつゝ此の地で活動さるゝの基礎を置かしむべく召されたものであると思はれた。」と。又、押川、吉田によって開始された東北地方伝道のために絶えず祈っていた彼等の恩師パームは父の牧するオランダのロッテルダム教会の信者達からのパームへの送金をそのまま押川の伝道のために送金していた事をも忘れてはならない。パームは押川が仙台で

着々進めている伝道の様子を次のように報じている[註一五]。

"At Sendai, my former assistant here, Mr. Oshikawa, has met with a rich blessing on his labours. He went, as you may remember, in the latter end of last year, and at once commenced preaching in the town of Sendai, and itinerating in the neighbourhood. He has this year been laid aside for nearly three months by an attack of typhoid fever, in which he appears to have been well attended by the native hospital doctor of the place, and has, I am thankful to say, made a complete recovery. He writes to me, from time to time, in Japanese, very interesting accounts of his work. He has baptized in all about forty persons, and the last I heard of them is, that they are paying the rent of their preaching place, and hope to raise enough, in a short time, to support their own pastor, and propose to invite Mr. Yoshida, who accompanied Oshikawa as colporteur, to become their pastor temporarily. Oshikawa writes that he has many enquirers, and that the Christians are doing their utmost. This result justifies the step that was taken in commencing the work in Sendai. Sorry as I was to lose so valuable and loved a fellowworker as Oshikawa, I felt sure that God was calling him to the work there. You will remember that Mr. Oshikawa has been mainly supported by friends in Rotterdam, a collection made in the Scotch church, and a contribution made by the Ladies' Missionary Auxiliary there, through Mrs. Herklots, being given for this purpose. To these friends this news will be particularly gratifying."

バームは自分が一番困難な事態に直面していた時に、最も信頼すべき協力者押川を東北地方伝道のために派遣し、さまざまの試練を経て創立されるに至った仙台教会がやがて五年後には仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校（宮城学院）の母体となるのであるから、セオボールド・A・バーム、押川方義、吉田亀太郎らの献身的な伝道精神、熱誠あふれる信仰を忘れてはならない。

さて押川と吉田とによる伝道は、その後も困難な状況下にあっても着実な歩みを続け、仙台市内のみならず仙台市外各方面で盛んに集会を行ない、更には一八八三（明治十六）年「リバイバル」の波にも乗って東北地方各地で

つぎつぎに受洗者が生れ、教勢も進んだ。押川は吉田と二人だけで東北地方全域の伝道のために東奔西走するだけでは人材も資力も不足であることを痛感し、嘗て押川の師ブラウンが「私は日本に福音を伝える一番良い方法は日本の青年を教育することだと信じている。考えても見たまえ。二十人の日本人伝道者を私の学校で教育するとしたら、二十人のブラウンが世の中へ飛び出して行くことになるのではないか。これらの人々は私がするよりももっと立派なより大きな事業をすることが出来るのではなかろうか。これらの人々なら国民の風俗もわきまえているし、日本語も話せるのだが、私では国民に対する理解も、言葉も極めて不充分である。この理由から私は日本の青年の教育にあたったのである。」と言ったことを思いおこし、福音を宣揚することは教育事業と相俟ってこそ成果を挙げうるものであると考えるに至った。

「合衆国改革派教会」

次に、宮城女学校（宮城学院）の創立にあたって直接大きな役目を果したもう一人の人物、ウィリアム・E・ホーイを日本へ派遣した「合衆国改革派（ジャーマン・リフォームド）教会」（The Reformed Church in the United States）について概観して見よう。[注一六]

「リフォームド教会」即ち「改革派教会」についてふれる場合、十六世紀のヨーロッパにおける「宗教改革」にまで遡るべきであるが、ここでは主として、宮城女学校（宮城学院）の創立に直接関わりをもった教派、「合衆国改革派教会」について述べることとする。

アメリカでは、オランダからの最初の植民者達の間に、すなわちオランダ植民地であったニューアムステルダム（現在のニューヨーク）にオランダの改革派教会が移された。それは、一六二八（寛永五）年にアメリカに到着したヨーナス・ミカエリウス牧師（Rev. Jonas Michaelius）が植民地司政官ピーター・ミヌート（Peter Minuit）と協力して創設したのである。この教会が一八一九（文政二）年に「リフォームド・プロテスタント・ダッチ・チャーチ」となり、更に一八六七（慶応三）年には「米国改革派教会」（The Reformed Churchi in America）と改称し

た。今日、いわゆる「米国オランダ改革派教会」、或いは「米国ダッチ・リフォームド教会」と呼ばれる教派であって、押川が横浜で教えを受けたS・R・ブラウンやJ・H・バラは此の教派から日本へ派遣されて来たのである。

ところで「合衆国改革派教会」はこの「米国改革派教会（米国ダッチ・リフォームド教会）」にくらべると大分おくれて創設された。すなわちドイツからアメリカ大陸東部地方に移住した植民者達が、スイス人でオランダ改革派教会から派遣されて来たミカエル・シュラッター（Michael Schlatter）を中心にして一七四七（延享四）年九月二十九日にペンシルヴァニア州フィラデルフィアのシュラッターの家に集り最初の総会を開き、いわゆる「中会」（Coetus）を組織した。このようにして新しい歩みを始めた「中会」の最初の頃の教会政治はオランダ改革派教会のもとにあったが、一七九三（寛政五）年に独立して「北米合衆国ドイツ改革派教会」（The German Reformed Church in the United States of North America）と称するようになり、更に一八二六（文政九）年には伝道局を創設し且つ定期刊行物（英文版「ザ・ミッショナリー・マガジン」へのちに「ザ・リフォームド・チャーチ・メッセンジャー」と改称される。）並びに独文版「ディ・クリストリッヘ・ツァイトシュリフト」）の発行をも開始して伝道を活発に行なうに至った。一八三八（天保九）年には外国伝道局が創設されるに至り、併せて米国プロテスタントの超教派外国伝道機関である「アメリカン・ボード」と協力提携して外国伝道推進案を検討することとなった。

なお、「合衆国改革派教会外国伝道局」（The Foreign Missionary Board of the German Reformed Church in the United States of America）の規約によると、㈠、正式名称は「北米合衆国ドイツ改革派教会外国伝道局」、㈡、目的は、「直接伝道・学校教育・文書出版の三手段によって異教の地の人々にキリストの福音を宣べ伝える。」、㈢、組織は「外国伝道局は牧師並びに長老の中から総会で選出された十二名によって構成される。」と定められている。

その後、一八六六（慶応二）年に至って「アメリカン・ボード」との協力提携伝道というやり方をやめて、「北米合衆国ドイツ改革派教会」独力で独自の外国伝道を開始することに方針を変え、適当な候補地案が総会に再三再四

提案されたが、その候補地として考えられたのは南米（特にアマゾン河流域）、北米合衆国インディアン、中国、東インド、日本などであった。候補地についての審議が進められて行くうちに、一八七三（明治六）年四月十五日にペンシルヴァニア州の州都ハリスバーグのケルカー（Rudolf F. Kelker）宅で開催された会合において「日本という国は、伝道の機会が開かれたからには、我が『合衆国改革派教会』が伝道を開始すべき国である。」という声が強くなり、日本に対する関心が非常に強まり、いわゆる東洋伝道として中国か日本かいずれかの国にミッションすなわちその地に伝道拠点を置く宣教師社団（たとえば在中国宣教師社団とか在日宣教師社団）を設置して伝道を開始しようというところまで来た。そしてそのいずれの国を選ぶかの最後の調査が外国伝道局長デーヴィッド・ヴァンホーン（David Van Horne）博士に委嘱された。ところでここに至るまでの過程において外国伝道局総幹事ジョンストン博士は、「米国改革派教会（米国ダッチリフォームド教会）」外国伝道局渉外幹事ジョン・メイソン・フェリス（J.M. Ferris）博士と一八七〇（明治三）年以来数次にわたって相談をしていたのであるが、この日もフェリス並びに「アメリカン・ボード」の援助のもとに小アジア地方のブローサ（Broosa）で伝道をしていたベンジャミン・シュナイダー（Benjamin Schneider）の両博士に陪席をもとめていた。そして多くの審議と熟考とが続けられたが、フェリスの「日本こそがキリストの福音の種子が播かれ、収穫されることを待ちのぞんでいる国である。」との言葉により、日本を特に東洋伝道開始地域と決定した。そしてその際、決定理由としてあげられたことは次のようであった。[註一七]

すなわち、㈠、キリスト教禁教の高札が撤去されたこと。㈡、日本政府が宣教師の入国を認めるに至ったこと。㈢、日本政府がすぐれた教育者の来日を望んでいること。㈣、既に日本伝道に着手していた「米国改革派教会（米国ダッチリフォームド教会）」が協力応援してくれようとしていること。㈤、適当な人物が選任されれば「合衆国改革派教会（米国ジャーマンリフォームド教会）」としては全教会をあげて日本伝道に力をそそぐ見通しがついたこと

などであった。更に、一八七六（明治九）年の総会では、総会議長チャールズ・H・ラインバッハ博士が「我々が新しい伝道の地と定めた日本は優れた宣教師が一日も早く派遣されて来ることを待ちのぞんでいる。そして当分の間は『米国改革派教会』と提携して伝道を行なうことにした。」と述べている。

しかし、このように日本伝道を決定したにもかかわらず「合衆国改革派教会（米国ジャーマンリフォームド教会）」の外国伝道局が仲々伝道を開始しなかったのは、伝道資金が充分に無かったためではなくて日本へ派遣する適当な人物がえられなかったからである。外国伝道局は、日本伝道を決定してからは毎年の予算に外国伝道費を計上しており、一八七三年四月にはその額が既に五千二百九十六ドル三十九セント[註一八]に達していたのであるから、宣教師一名を日本へ派遣することは可能であったが、外国伝道局が一八七三年以来、「合衆国改革派教会」所属の牧師や神学生の中から日本伝道のための献身者を募り続けていたにもかかわらず、これに応募する者が無かったのである。

A・D・グリング

しかしながら、一八七八（明治十一）年になって、日本伝道に献身しようという者が遂に名乗り出て来た。そこで外国伝道局は同年九月三十日にハリスバーグで会議を開き、四名の応募者の中からアンブローズ・ダニエル・グリングを最初の日本派遣宣教師に選出した。

アンブローズ・ダニエル・グリング（Ambrose Daniel Gring）は一八四九（嘉永二）年十二月八日、「合衆国改革派教会」牧師ダニエル・グリングの次男としてペンシルヴァニア州パラダイスに誕生した。幼時より伝道者になることに使命を感じていたグリングは長じて、ペンシルヴァニア州ランキャスターのフランクリン・アンド・マーシャル大学を卒業した後、コネティカット州ニューヘイブンのイェール神学大学に学び伝道者への道を進んだ。

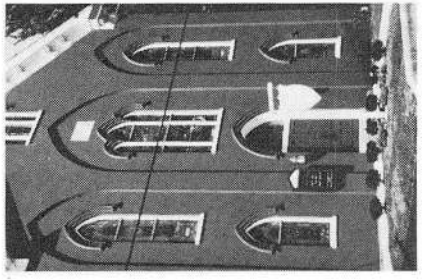
一八七八年十月二十三日から二十九日にかけてペンシルヴァニア州イーストンで開催された「合衆国改革派教会」第百三十二回総会（年会）の第三日目、十月二十五日（金）にグリングは按手礼を受け、正式に最初の日本派遣宣教師に任命された。一七四七年に最初の総会が開かれて「中会」を組織し、「ドイツ改革派教会」が米国に創立され

た年から数えて実に百三十二年目に日本伝道に着手する最初の宣教師が任命されたのである。

この記念すべき総会には、大学時代からグリングと親しかったジャイラス・P・モールが夫人と共に出席していて、グリングが光栄ある大役を担うことになったので非常な感動を受けた。モールは次のように記している。(註一九)

"At the meeting of the Eastern Synod of the Reformed Church at Easton, Pa., in the fall of 1878, the first missionary the Rev. Ambrose D. Gring, was ordained as missionary to Japan. With my wife I was present at the meeting, and we were both much impressed. Mr. Gring had been a collegemate of mine at Franklin and Marshall College, Lancaster, Pa., and a member of the same Literary Society, so that I knew him well. That he and his young wife should be willing to go to Japan and be so enthusiastic about it, as his speech at the time indicated, aroused my interest and sympathy so much that before we parted, I invited him and Mrs. Gring to visit us at Millersville, Pa., where I was pastor at that time.

It was on a weekday that they came to see us and, therefore, they had no opportunity to appear before my people ; but they remained over two days and, as a matter of course, the principal topic of conversation was Japan. I remember that either Mr. Gring or Mrs. Gring said, at the time of parting, 'Perhaps you will some day come to Japan' ; upon which my wife replied, 'I am ready' ; but I simply laughed at the idea, thinking it more of a joke than anything else."



ミラースヴィル教会

グリング夫妻が日本伝道に献身しようとしている決意の表明を聞きその言葉の端々から感じとったグリング夫妻の熱烈な伝道精神にふれて、モール夫妻ははるか彼方の異教の地、日本へ出向こうとするグリング夫妻に敬意を表すると同時に、非常な困難が予想される外国伝道に当ろうとしているグリング夫妻に対して心から同情し、夫妻を激励すべく、当時モールが牧師をしていた教会のあるペンシルヴァニア州

のミラースヴィルのモールの家にグリング夫妻を招待し、日本伝道に関して数日間語り合った。

グリング夫妻はモールの家を辞去する際、「モールさん、あなたもその内に日本へ伝道にやって来ることになるのではないでしょうか。」と話すと、これに対してモール夫人は「私はその心がまえが出来ています。」と答えた。然しモール自身は、その時点では、自分がまさか日本伝道に関わりを持つ第二番目の宣教師になるなどということは全く考えてもいなかった。

このようにして大学時代の親しい友人が太平洋をはさんで東と西とでそれぞれの任務に専念することになった。しかし、このモール夫妻が四年後には太平洋を渡り、グリング夫妻と協力して日本での伝道に活躍することになるのであるから神の導きはまことに奇しいものと言わざるを得ない。

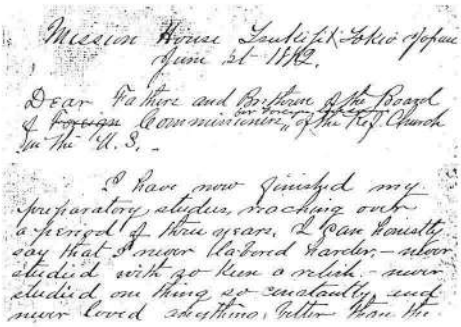
「在日宣教師社団」

さてグリング並びに夫人ハリエット（Harriet Lucretia Gring）は、ペンシルヴァニア州レディングで行なわれた送別礼拝で多くの教会員の祈りと励ましとによって力づけられたのち、一八七九（明治十二）年五月十六日、サンフランシスコ 解纜のゲーリック号に乗船して日本へ向い、約二週間の船旅の後、六月一日に横浜に到着した。グリングが間もなく満三十歳になろうとする頃であった。「合衆国改革派教会」は、この日、一八七九年六月一日をもって「合衆国改革派教会在日宣教師社団（在日伝道局）」の創立日と定めた。

あらゆる事において、初めということは困難を伴うものである。「合衆国改革派教会」の日本伝道開始の場合も同様である。他の諸教派にくらべて約二十年おくれて日本伝道に着手した「合衆国改革派教会」から最初の日本派遣宣教師として福音伝道の重要任務を担って日本に着いたグリング夫妻は、伝道方針や伝道拠点などについて充分熟考しては来たが、言語の全く異なる異教の地において伝道の成果をあげるには、日本語の習得と日本人の性格・風俗・習慣等の理解とが必要な準備であると考え、三年計画で徹底的にそれらの準備に専念することとし、最初の一

年間は横浜で日本人教師について熱心に日本語を学んだ。かくする裡に在日宣教師社団（在日伝道局）の本拠地を日本の首都東京へ移すこととした。それは、横浜には諸外国からの外国人が多数居住しているので、日本人の間に入りこんで伝道するには適当なところではないと判断し、進取の気性に富む日本人が多数住んでいると思われる東京に住居を構えることが日本人への伝道に最善であると考えたからであった。時たまたま東京の築地の外国人居留地内に適当な家屋が時価の半額で売り出されており、外国伝道局は一八八〇（明治十三）年四月二十六日にこれを三千九百五十五ドル五十セントで購入し[註二〇]、その後若干の修理を行なった後、グリングは六月二十八日に転居した。「合衆国改革派教会」が日本における最初の財産として東京の築地居留地二十八番に在日宣教師社団（在日伝道局）の本拠を定め宣教師館としたのである。この家屋は「合衆国改革派教会」所属の諸教会の日曜学校生徒が献げた献金によって購入されたのであるが、その購入資金を募金するために外国伝道局はグリング夫妻の肖像写真と宣教師館の写真とを印刷した立派な募金趣意書を一万七千六百枚作製し、諸教会の牧師に百枚、各日曜学校の生徒を通じて生徒の家庭に八千四百枚を配った。その結果、購入費の六分の五以上にあたる三千三百七十二ドルの献金が外国伝道局に届けられた[註二一]。

東京へ移ったグリングは伝道開始に備えて日本語の学習にはなお一層力を注いだが、同時に又、将来彼に続いて日本伝道のために来日する宣教師達のためにも裨益するようにと考えて、「ハイデルベルク信仰問答」の口語訳が必要であることを彼の日本語教師木曽五郎に提案して邦訳を完了し、外国伝道局は一八八〇（明治十三）年にグリング校閲・木曽五郎譯「基督教・海徳山問答」として出版した[註二二]。その後、一八八四（明治十七）年に石川彝訳「鄙語・海徳山問答」が出版されたのに続いて一八八五（明治十八）年に木曽五郎訳「基督教・海徳山問答」改訂第二版を出版した。この間グリングはまた彼が日本語学習に徹底的に専念した際の経験をいかして、彼自身の企画で「虞琳嵎編纂・對譯・漢和英字書[註二三]」を一八八四（明治十七）年に自費出版している。


Mission House, Tsukiji, Tokio, Japan
June 21st 1882.

Dear Fathers and Brethren of the Board
of Foreign Commissioners of the R.D. Church
in the U.S. -

I have now finished my
preparatory studies, reaching over
a period of three years. I can honestly
say that I never labored harder - never
studied with so keen a relish - never
studied one thing so constantly, and
never loved anything so sensatively and
never loved others who are to follow me, and my own sake, tried to lay for myself a solid
foundation.

第三年度報告書

このようにグリングは日本語の学習を続ける傍ら「ハイデルベルク信仰問答」の翻訳、「漢和英字書」の編纂に専念しているうちに満三年の伝道開始準備期間が経過した。一八八二（明治十五）年六月一日付でグリングは「第三年度報告書」（"Third Annual Report"）[註二四]を外国伝道局へ送っているがその冒頭には次のように記されている。

"I have now finished my preparatory studies, reaching over a period of three years. I can honestly say that I never labored harder —— never studied with so keen a relish, never studied one thing so constantly, and never loved anything better than the strangeness and difficulties of this language. I have honestly and conscientiously, for the sake of others who are to follow me, and my own sake, tried to lay for myself a solid foundation."

すなわち、グリングは「こんなに熱心に興味をもって、しかもこんなに着実に一つのことを勉強した事は未だ嘗てなかった」と述べているが、更にこの報告書の先の方には、一日数時間運動をする以外は、毎日早朝から午後九時まで書斎に入ったままで日本語の勉強に専念したとも記されている。グリングが如何に精魂こめて熱心に日本語の勉強を行ない、又、グリングに続く宣教師のことをも考えて、伝道のための諸準備に専念したかがわかる。

伝道準備期間

グリングはアメリカを発つ前に、日本へ着いたら、伝道活動の土台を確立するためには、満三年の月日をかけなければならないと決めておったのであるが、一八七九年六月一日に、我国に第一歩を印してみて間もなく日本における伝道には先ず日本語に習熟し、日本人の風俗習慣を充分に理解することが必

須条件であると考えた。そしてそのために満三年間の伝道開始準備期間を過すことにしたのであるが、この三年間に、日本語学習・「ハイデルベルク信仰問答」翻訳・漢和英字書編纂などに専念する合間にも、他教派先輩宣教師と接して貴重な伝道経験を学び、又、可能な限りそれら宣教師の伝道旅行にも同行して視野を広め経験を豊かにするように努力した。そして、グリングは日本人を福音へ導くためのキリスト教伝道としては、㈠、直接伝道で信仰に導くこと、㈡、学校教育を行なうことの二方法が考えられるが、日本では西欧の学問を教えることによって信仰へ導くことは困難であり、もし学校教育を通して信仰へ導こうとするのであれば、日本語を自由に駆使できる人物で、しかも立派な信仰の持主である優れたクリスチャン教師が、精魂こめて教育に当る場合にだけキリスト教伝道の補助的役割を果すことが出来るものであり、日本で大事なことは、あくまでも福音の真理を忍耐強く熱心に説くことであると判断した。したがってそのためには、牧師たる者は神の御言葉を宣べ伝えるために熱心に奉仕し、学校教師たる者は学問の真理探求並びに教育任務の遂行に誠実に邁進することが大事である。日本におけるキリスト教伝道のために、直接伝道と並列に、もしも学校教育をも行なう場合には、それはあくまでも補助的手段として行なわれるべきであり、しかも優れた学識経験を持ち、立派な信仰の持主である日本語に堪能なクリスチャン教師が、熱心に誠実に教育の任に当ってこそ、成果があがるものであると判断した。

グリングは又、「合衆国改革派教会」外国伝道局への多数の書翰で、伝道に関する数多くの情報を報告しているが、それらの中には、築地の外国人居留地には米国長老教会・米国改革派教会・メソジスト教会・バプテスト教会・米国監督教会など諸教派の宣教師達が住んでおり、それら諸教派の中には男子校や女子校を創設して教育を行なっているものがある事、あるいは、日本人は一般的に知識欲が旺盛であり、読書力もあるので、伝道方法の一つとして文書伝道も考えられる事、日本人の心が西欧の知識に向って来ていて、一八八一年度に出版された四千九百十冊の書籍の中の大多数が英米の書籍の翻訳物である事などにもふれている。(註二五)

グリングの伝道

三年間にわたる伝道開始準備期間を過して、日本語にも相当熟達し、日本人の国民性をも可成り理解したグリングは、愈々一八八二年六月から直接伝道を開始する事となり、その伝道の拠点とすべき礼拝所・説教所を、東京市内で交通の便が良く環境の良い高台に定めたく思った。そして準備期間最後の日、五月三十一日に、グリングは日本語の教師と二人で人力車を連ねて一日中、適当な家屋をさがしてまわった。数多くの貸家を見てまわった後、一軒の小じんまりした清潔な日本家屋を見つけ、その貸家の隣りに住む家主にキリスト教の集会所として使用させて欲しいと申し出た。ところが、キリスト教の信者でもなく、又、その家屋をキリスト教の集会所として貸さねばならぬこともない、全く初対面の家主が、グリングの趣旨を理解して、直ちに諒承し、しかも翌日からでも使用できるようにと早速家屋内の物を運び出した。グリング自身も全く驚き、異教の国日本で、自分の知らないキリスト教の伝道のために、欣然と自分の家屋を提供するような人物に出会うということは、この家主が、「神この家屋を必要とし給う。」との確信を持ったからであると思い、このような神の奇しき導きに心から感謝の祈りをささげた。グリングは、翌六月一日午前五時半頃に、その貸家の付近一帯を巡回して見て、所在地が礼拝所とするのに最適の環境にあることを再確認し、一カ月一ドル七十五セントの家賃で借りることにし、直ちに契約を結び、家賃一カ月分の他に、畳を全部新調することとして敷金三ドル五十セントをも支払った。又、日本人の風習に従って隣り近所への挨拶まわりのための品を準備してもらうべく、家主に更に五十セントをも手渡した。翌六月二日には貸家の中が整然と片付き、畳も新調されたので、テーブル、椅子二脚、ランプ、黒板、地図、聖書、讃美歌などをも運び込み、礼拝所とするための準備を完了した。グリングは、「かくし



グリング夫妻

て私達は愈々この日本帝国において、しかもこの興味ある国民の中で大事な第一歩をふみ出した。」と報告している。(註二六)

「合衆国改革派教会」外国伝道局が日本へ初めて派遣した宣教師アンブローズ・D・グリングの日本到着の日から丁度満三年の日、一八八二（明治十五）年六月一日から集会所として使用することになった日本家屋で、六月最初の日曜日、六月四日から日曜礼拝を開始した。当日は雨天であったがグリング夫妻が人力車を連ねて礼拝所に着いてみると、グリングの日本語の教師夫妻の出迎えを受けた。少憩の後、開会の祈禱をささげ、讃美歌を歌って礼拝を始めた。十二名の礼拝出席者があり、グリングは「唯一の真の神と創造」という題で約十分、日本で最初の説教を日本語で行なった。「合衆国改革派教会」が日本で福音を宣べ始めた最初の礼拝として記憶されなければならない。このようにして、日本の首都東京で始められた礼拝は、毎日曜日、午前九時三十分から、築地二十八番の宣教師館から人力車で約三十分の距離にあるこの日本家屋で続けられた。この家屋は二階建てであって、二階に六畳の部屋が一室、階下には六畳の部屋が二室あり、襖を取りはずして一部屋として使用することが出来るので、奥の方に説教者用のテーブルを置き、そのそばにグリング夫妻用に椅子を二脚置き、礼拝出席者は畳に坐るようになっていた。六月十一日、十八日と第二、第三の日曜日も雨模様であったが、それぞれ二十人、十二人の出席者があり、グリングの説教題は「神の子、イエス・キリスト」並びに「神はかくまで世を愛し給う」であった。第四日曜の六月二十五日には、「人類と罪」という題で説教をしたが、この日は晴天であったためか、礼拝出席者十八名の他に、通行人の中で五十乃至六十名ほどの人々が、玄関の外に入れ替わり立ち替わり立ちどまって説教をきいていた。(註二七)

グリングは又、六月十八日の日曜日から午後二時に日曜学校を開校することとし、その前日には準備のために壁面の黒板に「ハイデルベルク信仰問答」第一問を日本語で板書したり、あるいは生徒に教える讃美歌を日本語で歌えるように練習したりした。

このようにして始められた伝道において、グリングが最も力を入れたのは、日曜礼拝の説教の準備と日曜学校で

の「ハイデルベルク信仰問答」講話の準備であった。グリングは説教の内容がまとまると最初に英文で原稿を書きあげ、次にそれを日本文に訳し直し、その日本文の原稿をグリングの日本語教師に添削して貰い、最後にグリングが和紙に毛筆で清書するというようにしていた。グリングは、伝えたいと思うことを礼拝出席者に少しでも多く理解してもらうため出来るだけわかりやすい日本語で説教をしようと努力したのである。グリングは日本人に日本語で説教出来るようになったことを、神様の豊かな恵みによるものであると心から感謝し、非常に光栄なことであると喜び、そして最初の日曜礼拝に日本語で説教をした時に経験した喜びは非常に大きなものであったので、伝道開始準備期間中に経験したすべての苦しかった思いが一ぺんにふっとんでしまったと報じている。

日曜学校では、「ハイデルベルク信仰問答」の他に、讃美歌、主の祈、十誡、使徒信条などをも熱心に教え、特に「ハイデルベルク信仰問答」は、黒板にチョークで板書したものを何度も何度も繰りかえし読んでから講解する方法をとった。その中、生徒数も順調に増加した。又、伝道用小冊子を一ヵ月に七千部も印刷し、広く配布してキリスト教により一層関心をもたせるようにと努めたりもしたので、日曜礼拝も日曜学校も出席者が次第に多くなり、礼拝所が狭隘を感ずる様になった。一八八二年の暮れになって、グリングは礼拝所にも日曜学校にも学校にも最適の建物を見つけた。それは、二百人ほどの生徒を擁していた学校の校舎なのであるが、教師が死亡したために閉校になった二階建の建物であった。場所は、里程元標のある日本橋のすぐ近くであり、交通至便で且つ人口密度も稠密な地点なので、土地は三百円乃至五百円もして高価であった。そこで建物だけを九十ドルで日本語教師の娘の名義で購入した。外国人居留地外では、外国人の土地家屋購入は認められなかったからであろう。グリングは管理人として日本語教師を住まわせ、平日は学校として授業を行ない、彼自身も週に一、二回教鞭をとり、日曜日には礼拝並びに日曜学校に使用することとした。グリングはここに教会が創立されるようになれば良いと期待していたし、多くの人々が集会に出席するようになったのだから、自分に続く宣教師が一日も早く来日するようにと祈るのであっ

た。このようにして一八八三年を迎えるのであるが、その頃から「合衆国改革派教会」はその機関紙「メッセンジャー」（毎週水曜日発行）に従来にも増してしばしば、グリングからの書翰や日本伝道に関係のある論説や寄稿文などを掲載して、所属諸教会の牧師や教会員に日本伝道の現況を伝え且つ日本伝道への献身者があらわれるようにと訴え、又、所属諸教会のすべての人が日本伝道のために祈りをささげ献金をささげるようにと呼びかけた。(註二八)

J・P・モール

これより大分前、グリングがまだ伝道開始準備期間中の一八八〇年に、「合衆国改革派教会」ではグリングに続く第二番目の宣教師派遣の必要性を考えはじめていた。故国を遠く離れた異教の地日本に住むグリング夫妻の健康状態を心配すると同時に、もし第二番目の宣教師を派遣して伝道活動をより強力に進めることが出来るならば、日本における伝道を永続させることが出来るようになると考えたからである。そして翌一八八一年には具体的にその計画を練りはじめた。すなわち「合衆国改革派教会」外国伝道局は、既婚者で教会の牧師としての牧会伝道経験があり、家族数が多くなく且つ日本での伝道活動に献身できる者が名乗り出る様にと教会機関紙「メッセンジャー」紙上で繰りかえし訴えた。しかし仲々応募者があらわれなかった。フランクリン・アンド・マーシャル大学時代からグリングの友人であったジャイラス・P・モールはこの応募条件にかなう牧師であった。彼はその募集記事を目にはしていたが自分には無関係のことと思っていた。ところがモール夫人アンナは関心を持っていて、「あなたは何故応募しようとしないのですか。」と応募を促した。これに対してモールは、「あなたは丈夫でないし、両親や姉妹達とも離れたくないだろうから。」と答えるのみであった。しかしモール夫人は日本へ向うグリング夫妻を送った時から、日本での伝道を真剣に考えていたので、モールに対して再三再四応募を勧めた。熱心に勧める夫人の言葉によって日本伝道の事を考えはじめるようになっていたモールのところへ、一八八三年の早春、モールの友人から、「神様は日本への第二番目の宣教師を決めておられると思うが、モール君、君は、自分がその宣教師ではないだろうかと考えてみたことはありませんか。」との書翰が届いた。モールは天からの声を

聞いたように思い、夫人に対して自分が日本伝道に献身すれば同行してくれるかと尋ねた。モールは後にその当時のことを思いおこして次のように記している。(註二九)

"Her answer was 'Yes.' Then I said, 'What would you think if I were to offer myself to the Board of Foreign Missions?' And her answer was, 'I should be delighted, if you think it best.' My reply was, 'The thing is done. I shall write at once both to Dr. Thomas S. Johnston, of Lebanon, Pa., who is the Secretary, and, also to Dr. David Van Horn, of Philadelphia, the President of the Board, and make application to be sent to Japan'."

モールは、夫人の心からの賛同を得て早速、外国伝道局総幹事ジョンストン博士並びに外国伝道局長ヴァンホーン博士に宛てて日本派遣宣教師採用願書を送付した。

一八八三年三月十三日(火)・十四日(水)の両日、ペンシルヴァニア州の州都ハリスバーグのセイラム・リフォームド教会で、「合衆国改革派教会」外国伝道局特別会議が開催された。第一日には、丁度、日本から帰国中の「米国改革派教会」宣教師ジェームズ・L・アメルマン(James Lansing Amerman 1848-1928)を招いて日本における伝道現況の報告を聞き、又、「合衆国改革派教会」外国伝道局の訴えに応じて日本伝道に献身したい旨申し出て来た婦人達の書翰が紹介された後、日本の婦人達の伝道のためには少くとも三名の婦人宣教師派遣が必要であり、それら婦人宣教師派遣費を準備するためには、婦人伝道局の創設が必要であることを所属全教会の婦人会員に訴える事が決定された。第二日の三月十四日には、アンブローズ・D・グリングに協力して日本で伝道にあたる第二番目の宣教師にジャイラス・P・モールが指名され且つ任命された。(註三〇)これは出席者一同が多大な関心をもって注目していた決定であった。モール夫人の熱心な祈りがききいれられたのである。

ジャイラス・P・モール（Jairus P. Moore）は一八四七（弘化四）年十一月二十七日にペンシルヴァニア州バックス郡パーケーシー（Perkasie, Bucks County, Pa.）でスコッチ・アイリッシュ系の父とドイツ系の母との間に二男五女の末子として生まれた。一八七三年、ペンシルヴァニア州ランキャスターのフランクリン・アンド・マーシャル大学を卒業し、その年、アンナ・M・アーノルド（Anna〈Annie〉M. Arnold）と結婚した。大学卒業後三年間、師範学校長、高等学校長として教育界で活躍の後、オハイオ州ティフィンのティフィン神学大学（ハイデルベルク神学大学）に学び、一八七八年卒業後、直ちにペンシルヴァニア州ミラースヴィル（Millersville）教会で五年間、牧会に専念した。[註三] 彼は日本派遣宣教師に指名された時、一瞬、幼時からの彼の生涯で体験した様々の出来事を思いおこし、それらすべての出来事の中に神の奇しい導きがあった事を感じた。特に彼のミラースヴィル教会牧師就任式におけるランキャスター神学大学教授E・V・ゲルハート（Rev. Dr. E.V. Gerhart）博士の説教でテキストとなった聖句、「母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、」（ガラテヤ人への手紙第一章15・16節）を思いおこし、人智では測り知ることのできない神の導きに恐懼感激した。

なお、のちに宮城女学校の第二代校長となり、又、東北学院神学部でも教鞭をとることになるモールが日本派遣宣教師採用願を提出した時、もう一人の人物、デーヴィッド・B・シュネーダーも出願していたのであるが、シュネーダーは当時ランキャスター神学大学の学生であって、外国伝道局の示す「既婚者で教会の牧師としての伝道経験のある家族数の多くない者」という応募条件に適っていなかった。然しこのシュネーダーがそれから四年後に日本派遣宣教師として来日することになり、東北学院の第二代学院長として同じ仙台で教育界に貢献する事になるのも神の奇しき導きによるのである。

さて、モールが日本派遣第二番目の宣教師に決定すると、それを知ったミラースヴィル教会の会員の中には、た

といそれがどんな理由で決定したことであろうとも、このように優れた牧師モールを日本へ送り出さざるを得ないことは非常に悲しいことであると考える者もあった。当時、宣教師達がはるばる太平洋をこえてキリスト教伝道のためにアメリカから日本へ出かけて行こうと決心するまでの経過はそれぞれ異なっていたであろうが、それらの宣教師を送り出す各個教会としても並大抵でない理解と協力と激励とが必要であった。

勿論、モールの当時は、一八七三（明治六）年二月に太政官布告で切支丹禁制の高札撤去が行なわれてから十年程経過した頃であったので、幕末から明治初年の間に来日したG・F・フルベッキ、J・C・ヘボン、S・R・ブラウン、メアリー・E・キダーなどの場合にくらべれば、送り出す側、迎え入れる側それぞれの状況も相当に変っていた。しかしモールは自分が牧会していた教会員の中にモールの日本伝道を心から激励するわけにはいかないと言う者が何人かいるという事を知って意気阻喪せざるを得なかった。そこでその悩みを解決すべくランキャスター神学大学のトーマス・G・アップル博士に相談をすると、「教会員の中には様々な考えから賛成しかねる者も相当数は居るとは思うが、しかし彼等もその内必ず、自分等の教会の牧師が、『合衆国改革派教会』の日本派遣第二番目の宣教師という光栄ある大任を与えられて、異教の国日本で主の福音を宣べ伝えているということは実にすばらしいことだと考えるようになるだろう。決して心悩ますことなく、進み行くべき道を前進しなさい。」との激励を受けた。モールは心定まり出発準備に専念した。

モールは彼が牧会していたミラースヴィル教会並びに近郊の集会所など三ヵ所[註三二]での送別礼拝でお別れの説教を行なった。特にミラースヴィル教会での送別礼拝は五月十三日の日曜日の夜に行なわれたが、モールが牧会をしていたこの五年間ほどミラースヴィル教会の諸活動が活発で隆盛だったことが無かったと言われるほど大活躍をしたモール夫妻の送別礼拝なので、改革派教会のみならずルーテル、エヴァンゼリカル、メソジスト等々他教派の教会の牧師や教会員並びに州立ミラースヴィル師範学校の教員や学生が出席するなど、ミラースヴィル教会としては未

だ嘗て無かった程多数の出席者達が集まり、多難が予想されるモールの日本伝道の上に神の導きと祝福とがあるようにと祈りつつ激励の言葉をおくった。[註三三]

かくてモール夫妻は彼等の全財産を売り払って身辺の整理をし、日本への出発に先立ち「合衆国改革派教会」の本部に挨拶をするためにフィラデルフィアへ行った。外国伝道局長デーヴィッド・ヴァンホーン博士はモール夫妻を彼の家に一週間宿泊させて懇ろにもてなしつつ激励した。愈々日本へ向って出発する日が近づいて来たので、「合衆国改革派教会」主催の送別礼拝が七月十八日、水曜日の夜、ハリスバーグのセイラム・リフォームド教会で行なわれた。所属各教会の牧師並びに教会員が多数出席して、モール夫妻を遙か遠い国日本へ送り出すために次々と激励の言葉をのべ、又、心から祈りをささげ、最後にドイツ語の讃美歌を力強く歌って感激的な送別礼拝を終了した。[註三四]

モールの来日

モール夫妻は七月二十五日にランキャスターを出発し、先任在日宣教師グリング夫妻それぞれの母親を訪ねるべくペンシルヴァニア州ヨーク並びにメリーランド州ウィリアムズポートにも立ち寄った後、ハリスバーグ（ペンシルヴァニア州）、ティフィン（オハイオ州）、シカゴ（イリノイ州）、オマハ（ネブラスカ州）、コロンブス（ネブラスカ州）などで近親者や友人達の家を訪ねて数日を過しつつ、激励を受けたり礼拝説教を行なったりして、三千マイルもの長途の旅をしたのち、八月二十八日にサンフランシスコに着いた。モールはサンフランシスコで「合衆国改革派教会」外国伝道局総幹事T・S・ジョンストン博士にランキャスター出発後の経過を書翰にしたためて報告した後、九月四日、火曜日、サンフランシスコ出港の「シティー・オブ・ペキン」号上の客となった。日本や中国へ向う宣教師が二十人程同船していたので、それぞれ異教の地での伝道についての抱負などを話して激励し合い、話題には事欠くことは無かったであろうが、モール夫人は航海中全期間、又、モールは八日間、それぞれ船酔いに悩まされ、苦難の船旅であった。[註三五]

しかし十八日間の航海を終えて「シティー・オブ・ペキン」号は九月二十三日、日曜日、午前七時三十分、横浜

に入港した。その時の様子をモールは次のように報告している。[註三六] モールが此の時を如何に待ち望んでいたかが明瞭である。

"On Saturday evening previous to our landing, the light from the light-house near the entrance of the bay, 118 miles distant, could at times be faintly seen. This, excepting the warmer weather we had been having for several days previous, was the first intimation of nearing the land.

Sunday morning before daylight some of us were on the ship's deck watching for the land. How very anxious one is to see and to tread on land after having been tossed about on the ocean for 18 days! For a while we could see the previous evening. But as the day began to dawn we could see the outlines of the shore, and before the sun was fully up we saw, for the first time in our life, Japan. On either side of us stretched out the shore with the hills roseate with the light of the morning's sun and the beautiful green fields beyond. What a charming and refreshing sight it was! Never did my eyes rest upon anything more lovely and beautiful."

すなわちモールは、船が愈々日本に近づいて、横浜入港前夜、はるか彼方に時折かすかに見える燈台の光を目にしてからは心落着かず、翌朝まだ薄暗いうちに甲板に出て、今から伝道を開始しようとする国日本を一刻も早く眺めようとしていた。やがて朝日に輝いて正面に長く横たわるバラ色の海岸線と緑色の丘とを目にした時のモールの心境は、万感交々胸に満ちていたことであろう。「シティー・オブ・ペキン」号は横浜に入港し、検疫を済ませると、船客並びに船客の荷物を陸地へ運ぶべく数多くの小舟が近づいて来たが、それらの小舟の中の一隻のランチ（小蒸気船）に乗っているグリング夫妻の姿を見つけた時のモールの喜びは如何に大きかったことであろう。早速船室に駈け戻ってモール夫人をも甲板に連れて来た。モールは更に次のように記している。

"I strained my eyes to see, if possible, who it might be. Give me your glass quickly? I said to a friend along side of me. Raising the glass to my eyes I looked and, to my joy and surprise, I recognized Bro. and Mrs. Gring. You will forgive me, I know, if about that time I did not act with that gravity and dignity that is becoming. I waved my hat; ran back to tell my wife (who was too sick to be about) the good news. As I returned I was recognized by Mr. and Mrs. Gring. Soon the launch came up to our ship and they were on board, and if ever in all my life I was really and truly glad to meet any one, it was then, and I know we all felt the same. We wept tears of joy and inwardly praised God for this happy and safe meeting."

甲板上で両夫妻は四年ぶりに再会し歓喜の涙を流しつつ神に感謝の祈りをささげた。

グリング夫妻の手伝いを受けつつ通関手続をも済ませるや、モール夫妻にしてみれば初めて見る人力車を四台仕立てて、グリング夫妻が前日から宿泊していたウィンザーホテルに急行した。四年前に最初の宣教師として横浜に着いた時の辛い経験をモール夫妻にはさせまいとするグリング夫妻の心温まる配慮をうかがうことが出来る。モール夫妻はホテルで久しぶりにグリング夫妻と歓談しつつ長途の旅の疲れをいやした。翌九月二十四日、モール夫妻はグリング夫妻と共に横浜から汽車で東京へ向い、築地二十八番の在日宣教師社団、ミッションハウス、即ちグリングの家庭で旅装を解いた。モールは、グリングが既に築地四番にモールのために適当な住居を準備しておいてくれた事を知ると同時に、モール夫妻が完全に元気を回復するまでグリング宅で過すようにとの親切な申出を受けて感激し、新しい目的に向って故国をあとにして来た自分達の旅路を守り、必要なものをすべて備えて下さる神に心から感謝の祈りをささげた。

「御名のゆえに」故国アメリカを出発して異教の国、日本に着いたモール夫妻が、既にその異教の国、日本において多くの困難に遭遇しつつも信仰に堅く立って忍耐をもってそれらを克服し伝道に専念していた同労の宣教師グリング夫妻のねんごろな歓迎接待に接して如何ほど感激し、如何ほど伝道心を燃やし、如何ほど熱い祈りをささげた


モール夫人

ことであろう。

宮城女学校の創立に至る経過をふりかえる時、日本国内においては押川方義、吉田亀太郎その他のすぐれた伝道者が、人智をこえた実に不思議な神の導きによって福音に接し、その熱烈な信仰に基いて行なわれた積極的な伝道に思いをいたし、又、日本国外にあっては、この異教の国、日本に福音を宣べ伝えんがために、各国の幾多の宣教師がその生涯をささげて活動し、その伝道活動を支えんがため各国の数多くのクリスチャンがささげた熱心な祈りと尊い献金があったことに思いをいたす時、これらすべての者の信仰を嘉し、すべての活動に絶えざる祝福と導きとを与えたもうた神の豊かな恩寵と奇しきご経綸に感謝の祈りをささげることを忘れてはならない。

モール夫妻のバイブルクラス

モール夫妻は最初三週間ほどグリング夫妻と共に過していたが、十月十五日に築地四番の住居(註三七)に移った。此の建物は道路と防波堤を間において東京湾に面していた。隣家は当時の米国公使館であったので常に米国国旗が掲揚されており、モールは書斎の窓からそれを眺めると米国に居る様な気持にもなりホームシックにかかる暇もなかったと述べている。モールは直ちに日本人教師について日本語の勉強をはじめた。一日も早く伝道を開始したいと考えていたので、日本語に習熟するまでは伝道に着手しないということはモールにとっては不本意なことであった。そこで日本語の勉強を続けると同時に、早速自宅を解放して、モールもモール夫人アンナもそれぞれバイブルクラスを開講した。モールは、たとい日本語に習熟するまでは直接伝道に着手できないとしても、バイブルクラスで英語の聖書を読み進めて行くことを続けていれば伝道の端緒を開くことが出来ると考え、又、日本人教師から日本語を学ぶと同時にモールから英語を学びたいと思う日本人に英語の聖書を教科書として英語を教えていれば伝道にもなると考えたからである。幸いにも、モールのクラスの青年達の中にはある程度英語を理解している者が多かったので、英語の聖書を用いることができた。又、モール夫人のクラスには少女達や

婦人達が出席したが、モール夫人も同様の方法で教えはじめた。モール夫妻によってバイブルクラスという形で早くも二つの伝道集会が開始されたのである。更に又、毎週日曜日の夜にも集会を開いて讃美歌を歌い、モールの日本語教師の通訳で伝道説教を行なった。このようにしてバイブルクラスも日曜日夜の集会も次第に盛んに行なわれるようになった。

ところで、モールの此の伝道方法にグリングは必ずしも賛成ではなかった。グリングは既に記したように日本語を充分に習得し日本人の風俗・習慣を良く理解した上で伝道に着手すべきであるという意見であった。これに対してモールは「グリングの意見は正しい。しかし状況によっては色々な方法もありうる。牧師として任命された者は福音を説き聖礼典を執り行なうのは当然の権利であると思う。」と述べている。グリングとモールはそれぞれ意見を異にしたが、異る意見の二人が居った事も「合衆国改革派教会」在日伝道局として伝道上意味のあることでもあった。

「元大工町教会」

ここでモールが来日してからのグリングの伝道についてふれると、一八八四（明治十七）年初めには「ハイデルベルク信仰問答」の口語訳を完了したグリングは、愈々本格的に伝道に着手できると考え、諸集会や日曜学校を行なうのに適する建物を探した[三八]。その結果、グリングは日本橋元大工町に住む漢学者荒井某が、時代の趨勢で洋学に対する関心が強まったためか漢学塾に学ぶ者が減少したため彼の塾を閉鎖して、荒井自身も関心をもっていたキリスト教の礼拝のために提供しても良いと考えている事を知った。そこでグリングは、その漢学塾の教室をキリスト教の礼拝所として日曜礼拝、日曜学校その他の集会を行なうことにした。モール夫人が奏楽を担当した。やがて次第に出席者も多くなり、一八八四（明治十七）年四月六日の日曜礼拝では受洗者もあって遂に一八八四（明治十七）年五月十一日には、米国オハイオ州デイトンの教会の長老であるベンジャミン・クーンズの献金で購入したこの建物を教会堂として、「元大工町教会」が創立されるに至った[三九]。これは「合衆国

改革派教会」が日本で、否、東洋で創立した最初の教会である。グリングの心中はさぞかし感謝の思いでいっぱいであったことと思われる。

なおこの「元大工町教会」はのちに、神田区内に入手した恰好な土地に建設された教会堂並びに牧師館へ移って「神田教会」と称されるようになったが、それらの費用は古い建物の売却金に「合衆国改革派教会」からの特別送金千ドルを加えた資金でまかなわれた。そして、東北学院神学部第一回卒業島貫兵太夫を牧師に迎え、最初の二年間で教会員数が四十人から百七十人位にまで増加するような発展をみるようになるのである。

グリングはその後、モールの協力応援をも得て王子、更には埼玉県にまで伝道の歩みを進め、やがて越ヶ谷、岩槻にも教会が創立されるようになるのである。

「番町教会」

ところで築地四番のモール宅で開講されたモール夫妻による二つのバイブルクラスは、それぞれ順調に続けられ、又、毎日曜日夜の集会の出席者も次第に増加して来たのであるが、モール来日満一年を迎える頃にモール夫人が健康を害してしまった。築地居留地は元来東京湾の埋立地であり、又、多くの掘割りもあったりして、健康的に良くなかったのであろうか、モールはもっと高台に住みたいと考えた。しかし当時は法令の定めにより外国人は居留地以外の土地に住むことは認められなかった。ただ、日本人使用主のもとで働く外国人の場合だけ、その使用主の指定する家屋に住むことが出来た。時たまたま福島某というクリスチャンが、英語並びに聖書を教えることの出来る外国人を採用して、英語学校を開校したいと考えていたので、モールは福島某が借りた麹町区番町（麹町区上二番町五〇）の家屋で始められた英語学校で教鞭をとることとなり、築地四番の住居からそこへ移り住んだ。このことは従来よりももっと身近かに日本人に接することとなり、伝道の面で一層効果的であった。モール夫妻は築地時代よりも大規模にバイブルクラスを続けることが出来た。附近の人々が出席するばかりでなく、築地四番でのバイブルクラス出席者の大部分が出席したので、モール夫妻としても日本人の真っ只中で

伝道をしている感が強く、聖書講解にも熱がはいり、伝道成果は大いにあがった。のちに第四番目の宣教師として来日し、第二代の東北学院長として、東北地方のキリスト教伝道並びに日本の教育界のために大きな貢献をしたデーヴィッド・B・シュネーダーは「モール夫妻の初期の伝道の中で特筆すべき事は、多くの宣教師が住んでいた築地居留地から、東京のど真中、日本人と身近かに親しく接触できるところへ転居したことであり、そこで日本人が集りやすい様に家庭を解放して、多くの日本人を信仰へ導いたことである。」と記している。(註四〇)

ところでモール夫人のバイブルクラスに出席する婦人の中に、中島夫人と呼ばれる上流階級の婦人が居た。彼女はモール夫人から学ぶ聖書講解で、キリストの教えに非常に深い関心を示していたが、そのうち夫と同伴でやって来るようになり、中島もモールのクラスに出席するようになった。モールは中島が仲々教養のある人物であり、聖書をも相当に読んでおり、また政治家としても優れた人物であることに気づき、又、中島自身も非常に熱心にバイブルクラスに出席した。かくして中島と中島夫人はそれぞれモール並びにモール夫人の指導を受け、遂に夫妻そろってイエスを救主と信ずるに至り、モールから洗礼を受けた。(註四一) この中島夫妻とは、のちに一八九〇（明治二十三）年十二月二十五日開会の我国第一回帝国議会で初代衆議院議長に就任することとなる中島信行と夫人である。中島は一八四六（弘化三）年、四国土佐に生まれ、長ずるや坂本龍馬の海援隊に入り、明治維新後は各種要職を歴任した後、一八七六（明治九）年には元老院議官となったが一八八〇（明治十三）年には自由民権運動に参画するために官を辞し翌一八八一（明治十四）年、自由党が結成されるや副総理となり、更に一八八二（明治十五）年には立憲政党を結成して総理となった。又、中島夫人は但馬国（兵庫県）出身の岸田家の長女として一八六三（文久三）年に京都で生まれ、幼少より優れていたため一八七一（明治四）年官費給費生として京都府中学に入学し、更に西京女子師範に進んで京都二神童の一人と言われた岸田俊子である。彼女は槙村京都府知事や山岡鉄舟の斡旋で宮中に奉仕することとなり、一八七九（明治十二）年には僅か十七歳で皇后に「孟子」その他のご進講を行なった。一八

八一（明治十四）年、宮中を退いて後、自由民権運動発祥の地土佐を訪れて立志社の人々と交わり且つ演壇にも立ったが、才色兼備の彼女がおこなう流暢な演説は聴衆をして恍然たらしめたと言われる。一八八二（明治十五）年、土佐を去り、各地の政壇演説会で女権拡張を説き歩いたが、一八八四（明治十七）年、中島信行と結婚して中島俊子（号は湘煙）となった。この中島信行・俊子夫妻が、結婚後間もなくモール夫妻のバイブルクラスで指導を受け、モールより受洗するに至ったのである。モールはのちに「クリスチャンがかかる高位高官に選ばれたということは、彼の精神面の教師であった私にとってのみならず日本国民にとっても非常な驚きであった。」と記している。

このようにしてモール夫妻の伝道活動が続けられた結果、集会の場所が狭隘になるほど出席者数も増加し、隣家をも借りて講壇・ベンチ・オルガンなどを備えて日曜礼拝が守られるようになり、一八八五（明治十八）年、遂に「合衆国改革派教会」が我が国に創立した第二番目の教会である「番町教会」が創立された。

ここで念のためにつけ加えるが、モールが牧会するこの「番町教会」の真向いに、道路をはさんでもう一つの「番町教会」があった。それはイーストレーク博士夫人によって始められ、その後、植村正久によって牧会されていた「番町教会（番町一致教会・更に一番町教会となる。）であった。この教会もモールの教会と同じような伝道方針をとっていた教会であり、一八八八（明治二十一）年、モールが仙台へ転ずることになった時、この二つの「番町教会」は合同して強力な「番町教会」となり、更に発展して「日本基督教会富士見町教会」（現「日本基督教団富士見町教会」）となるのである。なお右に記した二つの「番町教会」の他に、小崎弘道によって牧会されていた日本組合基督教会の「番町教会」があった。現在の「日本基督教団番町教会」である。

グリング夫人の要望

さて、「合衆国改革派教会」の日本伝道開始以来六年の間にグリング並びにモールの伝道によって東京に「元大工町教会」並びに「番町教会」の二教会が創立されたが、この間に宮城女学校（宮城学院）の創立に関係をもつ動きが既に始まっていた。グリングが、日本到着後九カ月、まだ横浜で

日本語の勉強中の一八八〇（明治十三）年三月三日に、外国伝道局へ送った書翰で、「在日伝道局」を東京に移すための諸調査経過を記した後、多くの諸教派が既に東京の築地に教会堂や宣教師館の他に神学校や男子校や女学校をも創設してキリスト教教育を行なっている事を報じ、その後一年半を経過した一八八一（明治十四）年六月二十三日付けの書翰では、日本人は全般的に知識欲が旺盛で読書力があるので、日本人の此の長所を活かす伝道方法として文書伝道も考えられると報じ、更に又、グリングが三年間の伝道開始準備期間を終えた一八八二（明治十五）年六月一日に記した報告書の中では次のように報じている。

"The great and first thing for us to do is to make these people Christians. There is not so much need of secular instruction as there is for decidedly Christian instruction. It is one thing to make a man a Christian, and it is another thing to make a man a scholar, and to lead a man to Christ by first teaching him the Western sciences is a long way around, and by no means a sure way."

"The kind of work most needed in Japan is hard and persistent teaching of the fundamental doctorines of our religion. The great truth of the Word of God are to be repeated again and again, until they have fastened on the mind and in the heart. Patient labor in teaching the simplest truth of our religion is more needed than great learning——I mean foreign learning——he cannot have too much native information. It is not so necessary that these people become learned in our Western sciences as it is necessary for them to be saved. I do not say that schools are useless; but that they are of secondary importance, though a most valuable adjunct to Christian labor, and should be conducted by Christian professors, who give themselves entirely to the work of teaching, and not burden themselves with the native language. I think if the Church could look out several Christian professors and send them out to begin an academy it would be an excellent support to the mission ; but it does appear to me that the minister should give himself wholly to the ministration of the Word in the native language, and to do this well he will have himself constantly enployed. Ministers to preach the pure Word, and Christian teachers to teach them truth of the sciences ——the two should by all means be kept distinct, and this is easily done."

すなわちグリングは愈々伝道を開始しようとするにあたり自分の任務は勿論、日本人をキリストの福音へ導くことであるが、その際キリスト教教育という事を考えると、一つはクリスチャンをつくること、もう一つは学生を教育することが考えられるが、西欧の諸学問を教えることによってキリストへの信仰を持たせる事は仲々困難であり、日本における伝道で大事なことは西欧の諸知識・諸学問を教えることよりも福音の真理を忍耐強く教えることであると思うこと、したがってもし学校教育を実施するとするならば日本語を自由に駆使することの出来る優れたクリスチャン教師が精魂傾けて教育を行なう場合にだけキリスト教伝道の補助的役割を果すことが出来ると考えること、それ故、もし「合衆国改革派教会」外国伝道局が日本における伝道で学校教育をも採り入れようとするなら、立派な信仰の持主である優れたクリスチャン教師を派遣しなければならないと思うこと、そして直接伝道にあたる宣教師はひたすら神の御言葉を宣べ伝えることに専念すべきであり、学校教育にあたる宣教師は学問の真理探求並びに教育の任務に邁進すべきであって、両者の任務は明らかに区別し、それぞれがその分を守るべきであると思うことなどを報告している。

グリングは外国伝道局へ送った書翰や報告書の中でこのようにキリスト教教育に関する彼の見解を表明しているが、グリング夫人ハティーも日本における伝道について婦人の立場からの意見と要望を述べた書翰を送っている。そしてハティーは特に女学校創設の必要を何度も訴えている。それらの書翰を受けた外国伝道局では、グリング夫妻からの報道や要望を機関紙「メッセンジャー」紙を通じて所属各教会員に周知させていたので、日本伝道を希望する婦人達からの書翰が外国伝道局へ届くようになって来た。そして既に記したごとく、モールが日本派遣第二番目の宣教師に指名・任命された特別会議の第一日、すなわち一八八三（明治十六）年三月十三日に、これらの婦人達の書翰が会議の席で紹介され、外国伝道局としては少くとも三名の婦人宣教師派遣並びに派遣費準備のために「婦人伝道局」創設の必要を所属全教会の婦人会員に訴えることを決定した。そしてこの決定に至る経過並びにモール

夫妻日本派遣決定の記事が同年三月二十一日発行の「メッセンジャー」紙に掲載された。この事を知って非常に喜んだハティーは早速、同年四月十六日に「合衆国改革派教会」に宛てて非常に長文の書翰をしたため[註四二]た。ハティーはそれまで、他の教派はすべて四、五人の教師を有する学校を創設しているのだから我が教派も立派な学校を創設するために婦人教師を派遣して欲しい旨しばしば要請していたが、その都度財政上の理由でその要請に応えてくれなかった外国伝道局が日本へ婦人宣教師を派遣するための資金調達に着手したことを知り、横浜のフェリス女学校のように立派な学校を我が教派も東京に創立できるという喜ばしい見通しがついたのでとてもうれしいこと、日本という異教の地でキリスト教主義教育を行なう女学校が創立され、そのような学校で教育を受けた多くの若い日本婦人達がそれぞれ若い日本人牧師、長老、伝道師、信者達の夫人となって祝福された信者の家庭を築きあげるようになることは本当に楽しみなことであること、近く来日するモール夫妻は必ず立派な伝道活動をするであろうが、夫妻の他に更に二人の未婚の婦人教師を迎えることが出来れば、伝道成果は大いにあがるであろうことなどを記した後、母国の諸教会の婦人会員の方々へのお願いとして日本人は何が第一級であるかを正しく判断出来る力があり、子供達を第一級の学校で学ばせたがっているから、すぐれた婦人教師が外国伝道局を通して派遣される様に是非とも最大限度の盡力をして欲しいと記している。

このような書翰を受けとった外国伝道局は、一日も早くこの要望に応えられるようにしようと決断し、総幹事ジョンストン博士は、一八八三年九月二十六日号の「メッセンジャー」紙に、外国伝道局常置委員会は、今後の日本伝道においては婦人宣教師の活躍が是非とも必要であり、一日も早く婦人宣教師を日本へ派遣したいと考えているので所属各教会の全教会員が献金を献げて欲しいこと、又、「婦人外国伝道局」の創設が必要であると考えているのでこのためにも祈りをささげてほしいことなどを記した後、グリング夫人ハティーの長文の書翰全文を掲載している。なお、このハティーの書翰が「メッセンジャー」紙で紹介される約三カ月前の一八八三年六月二十日号の「メッセ

ンジャー」紙に「我々は日本に教育機関を持つべきであろうか」[註四三]という見出しの記事が掲載されている。そこにはグリングからの要請を念頭においた外国伝道局の考えが記されており、東京に学校を創設したいという提案があるが、我が教派としては青年男女に影響を与えるような学校をどこかに建てなければならない。そしてそのための建設資金を皆で準備しなければならない。日本人は今、西欧の新知識を渇望しているのだから、多くの各教派が男子校、女子校を創設して教育の成果をあげているように我が教派としても同様のことをしなければならない。この趣旨に賛同の教会員は建設資金と指定してルドルフ・F・ケルカー財務委員長へ献金をお寄せいただきたいと訴えている。

女学校創設の気運

このように外国伝道局には日本に学校を創立する気運が高まって来た。丁度このような動きの最中である同年九月二十三日にモール夫妻が来日したのである。そしてやがてモール夫妻から外国伝道局へ送られて来る書翰にも女学校の必要を訴える記事がしばしば見られるようになった。例えばモール夫妻が日本で初めて経験したクリスマス礼拝――それはグリングが開校していた日本橋の小さな学校の校舎を会場として行なわれたのであるが――の様子を報告したモールの書翰[註四四]の中に、クリスマス礼拝が終ったあとで、グリングの日本語教師やその他の教師と学校教育の重要性について話しあった事が記されており、又、モール夫人アニーが一八八四（明治十七）年一月十六日にしたためた書翰[註四五]中に、伝道を成功させる確実で迅速な方法の一つは男子校又は女学校のいずれかを環境の良い場所に創立し、二人の未婚婦人教師の直接指導下において教育を行なうことであると記し、特にこの場合には独身婦人教師が必ず二人必要であると強調している。そして更に、東京築地にある長老教会系の全寮制の女学校の様子を報じ、その女学校では生徒が婦人教師達の信仰の影響を受けて、卒業時には三分の二の生徒がクリスチャンになっている事にふれ、モール夫妻としても日本においてキリスト教伝道の成果をあげるためには優れたクリスチャン教師による学校教育を実施することが非常に喫緊且つ有効な補助的活動である

こと、そしてその場合の学校というのは、自分達が日本橋に開校している家塾風の小規模な通学学校（day school）ではなくて、他教派が既に創設し且つ大きな成果をあげているような女学校、すなわち数名の優れたクリスチャン婦人教師と数十名の少女達が一つの校舎内で二十四時間起居生活を共にしながら勉学を続ける全寮生学校（boarding school）であること、そしてそのためには二人の優れた独身婦人教師が一日も早く派遣されなければならないことを記している。

このように何度にもわたるグリング夫人ハティーからの要請の他にモール夫人アニー（アンナ）からも要請の書翰が次々に届くようになると、それらの書翰が「メッセンジャー」紙に毎号のように掲載されたので外国伝道局常置委員の各委員だけでなく、「合衆国改革派教会」所属各教会員の間にも日本からの熱望がひしひしと伝わって行った。

外国伝道局総幹事ジョンストン博士は同年四月十六日号「メッセンジャー」紙に、次のように記したあとで、日本橋の学校並びに日曜学校の発展の様子を報告するグリングの書翰を紹介している。

"The following letter from our missionary, is truly the Macedonian cry to our branch of the Christian Church. It reveals our grand opportunity. The field white for the harvest is opening before us. The great Head of the church has heard our prayers, and is honoring us, by giving us a part in the great work of Christianizing Japan. We cannot doubt or waver, nor can we evade responsibility. We must obey the divine mandate, 'Go Forward!' If we come up to the help of the Lord, by heeding the appeal of our earnest and zealous missionary, we shall reap a glorious harvest.……"

これは、グリング夫妻やモール夫妻などからの切実な要望に応えるべく外国伝道局がこれまで全教会員に理解と

協力を訴え続けて来たが、今や全教会員の祈りが聞き入れられて、日本において必ずや大きな伝道成果をあげうる好機会が神から与えられた。外国伝道局は日本に居る我が教会の宣教師達からの要望を神の命令とうけとめて、躊躇逡巡することなく積極的に取りくんで行かなければならないと決断したという姿勢を表明したものである。

このようにして、日本に女学校を創設するという問題は次第に具体化して来た。丁度そのような時にグリング夫人ハティーが母国の教会の婦人会員に宛てて記した請願文がまたまた外国伝道局に届いた。その中には次のような文面が含まれていた。(註四六)

"We are delighted and thankful for the growth of interest in our Church in the homeland, and are sure that by God's blessing your efforts shall not be in vain.

Our hearts are all centered upon, and we are heartily wishing and earnestly praying that, in the near future, we may have a flourishing girls' school here in Tsukiji, such as the other Missions have. The Japanese are beginning to look upon Tsukiji as the Foreign Educational quarter of the city, just as in several other quarters there are other peculiar attractions.…"

"We trust that our school at Nihon Bashi, which is a day-school held in a Japanese school-house, is the nucleus for such an institution as we desire in Tsukiji. We would like it in Tsukiji, because the other schools are here, because there is an educational attraction in Tsukiji, because we would like to get the girls away from Japanese life and influences as much as possible, and because we cannot hold property outside of the foreign concession, unless it be in the name of a Japanese.……"

"We must have also two competent Christian lady teachers, to live in the school with the girls, to care for them, love them, and train them.

My dear ladies, your privilege is a great and glorious one. Think of being the means of educating many of the wives and mothers of Japan in our holy Christian faith, and of elevating them from a heathen life to a level with our own. We can have no higher aim in life than to elevate our sister in Japan whose life and opportunities are so sadly inferior to our own.……"

ハティーの請願文によれば、母国の教会員の祈りによって、「合衆国改革派教会」系の女学校が日本に創立される日が近いことをハティーは感じとるようになっていた。そこでハティーは女学校創立の場所としては東京の築地を候補地と考えたが、その理由は、㈠、当時、東京の人々は、各教派の学校が建てられていた築地を東京における外国教育地区と考えていた事、㈡、封建的な風習が強く残っている日本人の家庭で育ってきた少女達を、築地の外国人居留地内に建てられる全寮制度の女学校で生活させつつ教育を行なおうと考えた事、㈢、外国人が居留地外に建物を所有することは当時認められていなかったことなどであった。ハティーは又、人格識見共に優れた立派な独身婦人教師が宣教師として派遣されて来て、その指導のもとに、将来妻となり母となる少女達がクリスチャンとなって女学校を卒業して行くようになることを願っていた。このような内容が含まれるハティーの請願文は、外国伝道局常置委員会で種々審議された結果、異教の国日本で女子教育に献身しようと出願する者があれば、その出願書類を一八八四年九月九日にハリスバーグで開催される常置委員会に上程審議する事を決定した。この決定事項は直ちにハティーの請願文全文と共に外国伝道局総幹事ジョンストン博士によって、一八八四年七月十六日号の「メッセンジャー」紙に掲載され、所属全教会員に「訴え」という形で周知された。この「訴え」を目にした教会員の中には、当然、宮城女学校最初の校長並びに教員となるエリザベス・R・プールボー並びにメアリー・B・オールトも含まれていた。

ところで外国伝道局が此の決定方針を「メッセンジャー」紙に掲載するのに先立つこと約二ヵ月、一八八四年五月七日から米国メリーランド州ボルティモアで開催された「合衆国改革派教会」の総会においてD・ヴァンホーン博士は総会議長報告の中で[註四七]

The missionaries all agree that it would be well for our Church to sent forth two additional lady missionaries, at no distant

day, with a view of establishing a school for Japanese girls and young women. For this purpose it is thought that a school building should be erected in Tsukiji, which, it is believed, might be accomplished for $800 or a $1,000. The lady teachers could reside in the building, and thus have full oversight of all its operations.

と述べており、又、ションスト ン博士は外国伝道局常置委員会(注四)報告の中で

The board requests the counsel and advice of the General Synod upon the following items.

Item 1. In reference to the publishing interets undertaken by the senior missionary.

Item 2. The expending of erecting suitable buildings for church and school purposes.

Item 3. The sending out of two lady missionaries, and an additional missionary family.

The following action is proposed by your committee:

Resolved, That we hereby record our gratitude to Almighty God, the Great Head of the Church, that he has so signally blessed and aided our missionaries in establishing our mission in Japan.

Resolved, That the work of Rev. A.D. Gring in preparing and publishing the Heidelberg Catechism, in the Japanese colloquial, and also a Manual or Dictionary of the language is hereby approved, and the board be authorized to supply the pecuniary assistance he requires to complete his work.

Resolved, That we heartily approve of aggressive movements of the board, and urge it to go forward in the erection of all suitable buildings for church and school purposes in the foreign field.

Resolved, That the board take measures to obtain and send out two ladies and another missionary family, to reinforce our missions as soon as, in the Providence of God, the way may be open.

Resolved,……

と述べている。これらの報告から判断すると、東京の築地に女学校を創立するために二人の婦人宣教師を派遣しようという事は、既に一八八四年五月の時点において決定されていたことがわかる。それから二カ月後の一八八四年七月十六日号の「メッセンジャー」紙に掲載された外国伝道局総幹事の訴えを読んで、エリザベス・R・プールボーやメアリー・B・オールトなどが日本で始められようとしている女子教育に献身する決意をしてそれぞれ出願した。

メアリー・B・オールト

ここでメアリー・B・オールトの書翰を紹介する。メアリー・B・オールト（Mary Belle Ault）は宮城女学校最初の校長となるエリザベス・R・プールボーと共に来日して宮城女学校最初の教師となるのであるが、これは彼女が外国伝道局総幹事ジョンストン博士に宛てて送った書翰である。

Kutztown Pa.
January 15th, 1885

Dr. T.S. Johnston

Dear Sir,

Please consider me an applicant for the position of missionary teacher to Japan. I am twenty-one years of age and have always enjoyed good health.

When thirteen years of age I joined the Reformed church in Littlestown. Since that time I have tried to live a christian life.

At present I am attending the State Normal school in this place. If it is the Lord's will, I will graduate next June.

Through the influence of my dear departed father, I, at an early age, expressed a desire to become a missionary. My parents always encouraged the desire, which grew stronger as I grew older, and I now long to go.

I feel as if the Lord has been opening the way for me. I am now an orphan without a home. My brother and sisters have very good homes and are happy. I have nothing depending directly on me, nothing that would hinder my going to Japan.

I am ready and willing, if it is the will of my Heavenly father, to give up all and devote the remaining days of my life in working

for him.

Hoping you will present my name to the Board, I remain

Respectfully yours,

Mary B. Ault.

すなわち当時二十一歳のオールトが是非共宣教師として日本に遣わされ、神許したもうなら生涯を外国伝道のために献げたいと訴えているのである。


BOARD OF COMMISSIONERS FOR FOREIGN MISSIONS
REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES.

プールボー出願調査書

エリザベス・R・プールボー

エリザベス（リズィー）・R・プールボーも同様に出願した。時にプールボーは三十歳であった。

エリザベス・R・プールボー（Elizabeth R. Poorbaugh）は一八五四（安政元）年十月二十七日に米国ペンシルヴァニア州サマーセット郡ベルリン（Berlin, Somerset County, Pa.）で「合衆国改革派教会」の著名な長老であるジョサイア・プールボー夫妻（Josiah and Margrette E. Poorbaugh）の娘として生まれた。両親が熱心なクリスチャンであったことと、ウィリアム・ラップ（William Rupp）牧師の指導とにより十五歳の時に信仰を告白した。同州のヨーク・ハイスクール（York High School, Pa.）を卒業後数年間、中学校や師範学校で教壇に立ったが、その間に婦人並びに少女に対する伝道に強い関心を持つようになった。又、メアリー・B・オールトは一八六三（文久三）年九月十日に米国ペンシルヴァニア州メカニクスバーグ（Mechanicsburg, Pa.）で「合衆国改革派教会」牧師ジョン・オールト夫妻の娘として生まれ、同州クッツタウンのキーストン師範学校（Keystone State Normal School, Kutztown, Pa.）を卒業した。彼女は七歳の時、父に連れられてメカニクスバーグのベテル教会で、海外伝

道から帰国した宣教師の話をきいたが、その時から宣教師になろうと考えるようになった。この様な彼女を常に激励していた両親は、彼女が十七歳の時に天に召された。爾来、彼女は外国へ出向いて福音を宣べ伝える者になりたいと真剣に考える様になった。この様な二人が一八八四年七月に「メッセンジャー」紙でジョンストン博士の訴えに接したわけである。

プールボーが日本派遣宣教師を出願した際に、外国伝道局の調査書(注四九)に記入した内容の一部分を紹介することにする。すなわち、調査書中の

"What led you to think of becoming a Foreign Missionary, and when did you decide the matter in your mind?"

という質問にたいしてプールボーは、

"I have ever been deeply interested in missionary work among women amd girls, and I trust love to Christ and humanity was the motive that led me to long, on the establishment of our Mission in Japan, to devote my life to the sacred cause. For five years I've been waiting for the way to open to me."

と答え、又、

"Do you conscientiously believe that you are called of the Lord to engage in the Foreign Missionary Work?"

という質問に対しては

"I can't say. I only know that, if appointed to the work, not having offered myself on any sudden impulse, God knows my heart, the best effort of which I am capable will be put forth, for its successful accomplishment."

と答えている。

このようにプールボーは、日本の少女達、婦人達の教育に献身したいという願いを五年も前から持ち続けていたのであるが、今やその願いを果すことの出来る機会が与えられようとしているので、此の尊い教育に全身全霊を献げる決意を披瀝している。プールボーは又、此の調査書の空欄に次のような追記をも記入している。

I should also have stated that I have dependent on me for a mother's care, an orphan niece, five years of age, from whom I could not think for one moment of being separated, since from her earliest infancy, she has known no mother but me.

L.R.P.

すなわち、プールボーはもし自分が日本派遣婦人宣教師に選任された場合には、自分には自分と一緒に連れて行かなければならない五歳になる孤児の姪がいることを明記したのである。今、ここでこの事情を明確にするために一八八六（明治十九）年六月十六日号の「メッセンジャー」紙に掲載されているサイラス・コート牧師（Rev. Cyrus Cort）の "En Route For Japan" と題する投稿文中の一部分を紹介する。

"The writer feels deeply interested in these female missionary helpers on personal as well as general grounds that appeal to the sympathy of all Reformed church people. Like most of our people in Eastern and Central Pennsylvania he knew the parents of Miss Ault and her pathetic history. He also was intimately acquainted with Miss Poorbaugh and feels that a few words in regard to her and her little niece, would be desirable information in many parts of the Church at this time.

While engaged in missionary work in Iowa the writer got into communication with Henry K. Poorbaugh, who earnestly requested him to visit Jasper county, Iowa, and hold service. It was a trip of about 150 miles, the last dozen of which, after traversing three lines of railway, had to be made in a rough farm wagon in face of north-easters. On March 12, 1880, the first visit was made. In a very small frame dwelling, out on the bleak prairie, I first met Miss Lizzie Poorbaugh and her little niece.

then a tender babe. The young wife of Henry had died a short time previous, leaving two other children, and this little girl when she was only two weeks old. His sister Lizzie had left one of the most comfortable and desirable of Pennsylvania homes in Berlin, Somerset county, Pa., and come out to the distant prairie to take care of these little ones and cheer her bereaved brother in the hour of his sore affliction.

That night we had service in the Green Valley school-house, a small structure at no great distance. Miss Lizzie led the singing with the babe on her knee. The sermon was on the Apostolic commission, the text of Dr. Wagner at the farewell services in Harrisburg. Henry and Lizzie then came forward with the babe, which was baptized Sarah Catherine. She has generally been known as Katie or Kitty, and is a bright and promising child."

これは、一八八六年六月三日の朝、日本へ向ってハリスバーグをあとにしたエリザベス・R・プールボー、メアリー・B・オールト並びにエリザベスの姪で僅か六歳のサラ・キャザリン・プールボーの一行を見送ったサイラス・コート牧師が、彼女達の旅路の平安と日本における伝道に神の祝福があるように祈りつつ記した長文の一部分である。エリザベスの兄ヘンリー・プールボーはアイオワ州で農業を営んでいたが、その夫人が第三子サラ・キャザリンを出産して二週間目に天に召された。コート牧師はヘンリーの切なる要望に応えて、遠路アイオワ州のヘンリー宅を訪れ、サラ・キャザリンに幼児洗礼を授けたのであるが、その際、幼い三人の子供達の世話をしながら甲斐甲斐しく活躍していたエリザベスの様子を見て、彼女の信仰・人格・識見に敬意を表するに至った。コート牧師は又、尊敬していたオールト牧師夫妻の遺児であるメアリー・B・オールトの生いたちをも承知して居たので、異教の国日本で、エリザベス・R・プールボーとメアリー・B・オールトの両人が少女達、婦人達に福音を宣べ伝えるキリスト教主義教育に従事しようとしている事を知り、しかもコート牧師が幼児洗礼を授けた幼いサラ・キャザリンも同行するので、彼女等一行の前途に神の導きが豊かにあらん事を祈ったことであろう。と同時に、アイオワ州の辺

地で、幼い子供達三人の母親代りとして貴重な体験をしている裡に、伝道に献身しようと考えるに至ったエリザベスのことであるから、たとい如何なる艱難困苦に遭遇しても、必ずやそれを克服して伝道の成果を挙げることであろうとの確信をもって見送ったことであろう。

このようにエリザベス・R・プールボーは日本へ向う時に幼い姪サラ・キャザリンを伴って行かざるを得ない事情にあったのである。それ故にこそ、日本派遣宣教師出願の際に、外国伝道局の調査書の空欄に敢えてサラ・キャザリンに関することを追記したのである。

日本派遣婦人宣教師の選任

ところで、一八八五年四月二十一日に話を戻そう。此の日、ハリスバーグで開かれた外国伝道局の会議で、ウィリアム・E・ホーイ、エリザベス・R・プールボー、メアリー・B・オールトの三名が日本派遣宣教師に選任された。「合衆国改革派教会」としては、ホーイが日本に赴任したら同教会の「小会」"Classis of Japan"を組織する方針であることをジョンストン博士は一八八五年六月十七日号の「メッセンジャー」紙で報じており、それに続けて更に次のように記している。

"The two ladies selected by the Board, Miss Lizzie R. Poorbaugh, of Berlin, Somerset county, Pa., and Miss Mary B. Ault, of Carlisle, Pa., are now preparing, and will be ready to embark as soon as the Board can send them. It is important that they should be on the field to qualify themselves fully for the work. Here is a work for the female members of the church to do. If the women of the Reformed church would organize and take these two ladies in charge, pay for their outfit, passage, and assume their support, it would be a grand work, and one which would benefit their own sex, and give a powerful impetus to the work. The duty of preparing a constitution for a Woman's Missionary Society has been assigned, and in a short time such documents will be sent out to the female members of the church. In the meantime let all the females of the church fervently pray for and earnestly consider this matter, then will they be enrolled among the honorable and noble women of the church of our Lord and

Savior Jesus Christ."

又、ジョンストン博士は一八八五年六月十二日付でJ・P・モールに宛てた書翰の中で次のように記している。

"The Board is of the opinion that the school at Nihon Bashi should be sustained, and made a success. And that any other school, should be the one we have proposed to establish somewhere in the future ……
viz: a Female Seminary, which is yet in embryo, and cannot take place until all plans, including location, building etc., are transmitted to this country and authorized by the Board. ……

Your work is approved, with this proviso that as soon as Mr. Hoy arrives in Japan, a classis must be organized, to be termed the "Classis of Japan", and in order to do this 3 ministers and 2 elders are necessary, ……

So in reference to schools, then the Board will only be guided by classical decision, and approve or reject as it sees proper. ……"

すなわちこれらによると、外国伝道局としては、在日宣教師からの切なる要望については充分理解することができたとはいえ、女学校創立に関わる諸種の問題が充分理解され解決されることにならなければ、すぐ実行にうつすわけにはいかないという状況にあったこと、又、既に二名の婦人宣教師が選任されてはいたが、当時、外国伝道局の財政には充分な余裕が無かったため、直ちに二名が日本へ派遣されるには至らなかったということ、更に外国伝道局としては婦人会員によって組織される婦人伝道局が日本における女学校創立並びに運営のために力をつくして欲しいと願っていたことなどがわかる。

一方、在日宣教師グリングやモールはホーイ、ブールボー、オールトの来日をどんなに待ち望んでいたことであ

ろう。それは、グリングの一八八五年六月十三日付書翰末尾の次の文面

"I pray God that every mother and sister in the Church at home may likewise determine that, by the grace of God, it shall not be their fault that the Japanese mothers, in the birth, training and build of their children, are wanting the support and consolation of the Gospel."

や、モールの同年七月二日付書翰末尾の次の文面

"Mr. Gring and myself are both delighted that we are soon to be joined by the Rev. Mr. Hoy, and express the hope that the ladies appointed may also speedily be sent on their mission."

などからも判断できる。

バラの提言　さてここでホーイ来日直前の東京の様子を眺めておこう。一八八五年四月のある日、A・D・グリングは偶々東京一致神学校内で「米国改革派教会（ダッチ・リフォームド）」宣教師J・H・バラに、日本における伝道についての率直な意見を聞いた。ところがバラは極めて重要な意見を述べたのである。[註五〇] その時のグリングとバラとの会話の模様をのちにグリングが次のように記している。

I do not now recall the subject on which we started, but I remember very distinctly that our conversation drifted to the subject nearest our hearts, viz., our mission work.

In the course of conversation, I happened to remark, that as our Board had heard and reported favorably on the appeal of

Mrs. Gring in 1884, to send out two lady teachers for the purpose of founding a girls' school, I was looking about for a suitable site in Tokyo, and would be glad to receive any suggestions his long experience in Japan might enable him to give. I wish to remark here, that it was ever my custom, while in Japan, to secure the judgement of my senior co-laborer before undertaking a step involving responsibility.

Bro. Ballage, acting upon my request, at once replied that he had a suggestion to offer.

He said he had just returned from a trip to Sendai and the North, and that while at Sendai he was profoundly impressed with the need of foreign missionaries there. Now my suggestion is, that you put your girls' school in Sendai, for there is a large field yet still unoccupied to a very large extent, and we could also receive financial aid from the people there. Whereupon also, he further remarked that Bro. Oshikawa, the principal Japanese minister in Sendai, was now in Tokyo, and if I wished he would at once take me across the city, where he was stopping, and make me acquainted with him. As soon as I signified my readiness to accompany him, we started off afoot on our way across the city.

We found Bro. Oshikawa in, and in a few moments he was at the door, and there and then I was, for the first time, made acquainted with him.

Our conversation, in Japanese, at once turned upon the needs of Sendai, and he strongly urged me to use my influece with our Mission Board, to locate our boys' and girls' school in Sendai. We were then having a boys' school at Nihon Bashi. I asked him in reply whether the people in Sendai would co-operate with us in establishing schools there in case we decided to come. He assured me they would, and would be glad to do so, if we came. I informed him that as we had so recently come to Japan, our mission was, as yet, financially and numerically weak, and could not, therfore, be expected to begin two schools at the same time, unless we received considerable financial cooperetion from the citizens of Sendai. He thought there would be little or no trouble on that score, and that our mission would be asked only to furnish the foreign teachers, while they, the citizens, would put up the buildings, and defray the running expenses of the schools.

押川とグリングの会談

すなわち、バラは、バラが洗礼を授けた押川方義が非常な困難を克服しつつ吉田亀太郎と共に全身全霊を傾けて熱心に伝道をしていた仙台方面の旅行から帰京したばかりであったが、その旅行で感じとってきたところに基いて、グリングに対して、「合衆国改革派教会」が仙台に女学校を創立するようにと勧めた。そして仙台では、外国の宣教師が伝道活動を開始することが期待されていることや、仙台に女学校を創立するならば仙台の人々は財政的援助をすると思われることなどをも述べ、更に、仙台で伝道をしている押川方義が丁度上京中なので、グリングを押川に紹介してもよろしいとつけ加えた。このようにしてグリングは、早速バラの案内で押川と会うことになった。押川はグリングに仙台を中心とした東北地方におけるキリスト教伝道状況を説明し、東北地方に福音を宣べ伝えるためには、仙台に伝道者を養成する学校並びにキリスト教主義教育を行なう女学校を創立することが急務であると説明し、その実現のためには、グリングに是非ともこの事を「合衆国改革派教会」外国伝道局に訴えてもらって、仙台に男子の学校と女子の学校とが創立されるよう盡力してほしいと熱心に願った。これは押川と吉田とが一八八〇（明治十三）年十月十日から開始した東北地方伝道が、次第に成果をあげて仙台教会（現在の仙台東一番丁教会）が創立され、その後も教勢は大いに発展の一途を辿り、東北地方各地にもつぎつぎに受洗者が生れ、押川は、吉田と二人だけで東北全域の伝道のために東奔西走するだけでは人材も資力も不足であることを痛感し、嘗てブラウンが、伝道は教育事業と相俟ってこそ成果を挙げうると話した言葉を思いおこし、学校創設の必要を感じたからである。グリングは更に続けて記している。

Bro. Oshikawa was then one of a number of young men who declared themselves independent of all missions, and sought to raise up independent selfsupporting Japanese churches. On leaving him, I gave him to understand, that as we had concluded to join hands with the Union Church of Christ in Japan, his position as an independent minister would make it difficult for us to come

to Sendai, so long as he continued in that position. He nevertheless urged me to consider the matter, and seemed very anxious to have us come. I told him I would consider the matter, said good bye, and was off.

Soon after this, by permission of the Board, I was compelled to remove Mrs. Gring and children to the mountains, on account of sickness. The call from Sendai was much upon my heart and constantly in mind. I felt that it was more than the Macedonian cry that came to Paul in a vision of the night, it was real and personal, a viva voce call of a living man, "Come up and help us."

So continually did this call keep sounding in my ears, that I determined, on one occasion, when alone with Christ in the solitary fastness of the mountains, that I would anser it to the best of my ability. It was on this occasion that I prayed with all the ardor of my soul, that God would move the heart of the Reformed Church in the United States to enlarge her interests in Japan, by answering this call. John Knox, when he agonized in prayer. "Oh God, give me Scotland or I die," could not have prayed more fervently for Scotland, than I did for Sendai and the Reformed chruch. I shall never cease to feel the influence of this occasion. I was impresserd with the fact that the call from Sendai must be answered by the church at home, by sending men and women from home.

すなわち、グリングは押川に対して「合衆国改革派教会」は近々「日本基督一致教会」と提携することになっているので、「日本基督一致教会」に加入しないで独自の立場で伝道をしている押川がその立場を変えない限り、「合衆国改革派教会」が仙台に赴くことは困難であると思うと述べた。それに対して押川は、その事情を諒解することは出来るがそれでも「合衆国改革派教会」が仙台に伝道の拠点を移し、二つの学校の創立に尽力してくれるようにと力強く説き、グリングと押川との会談を終了した。

その後、グリングの心の中にはいつも仙台からの招請の声がひびいていてきえなかった。グリングは「ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が立って『マケドニヤに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。パウロがこの幻を見た時、これは彼らに福音を伝えるために、神がわたしたちをお

招きになったのだと確信して、わたしたちは、ただちにマケドニヤに渡って行くことにした。」という聖書の言葉(使徒行伝第十六章9～10)を思いうかべ、何しろ仙台からの招きは、押川方義という実在の人物が自分の眼前で直接口頭で申し出ているのであるから、パウロが夜に見た幻の中でのマケドニヤ人の招きの声以上のものであることを思い、グリングの耳朶にひっきりなしに強く打ち続ける招請の声に如何に応えるべきかと全身全霊をしぼって祈り神の導きを求めた。スコットランドの宗教改革者ジョン・ノックスが非常な苦悩の中にあって「おー、神よ！我にスコットランドを与えたまえ。さもなくば死を！」とスコットランドのために熱心に祈った時のように。

W・E・ホーイ

一八八四(明治十七)年十月二十八日付で一通の書翰が「合衆国改革派教会」外国伝道局総幹事ジョンストン博士に届いた。それは当時ペンシルヴァニア州のランキャスター神学大学の学生であった二十六歳の青年ウィリアム・E・ホーイからであった。ウィリアム・E・ホーイは、それから二年後の一八八六(明治十九)年に、押川方義と共に仙台神学校(東北学院)並びに宮城女学校(宮城学院)の創立に直接関わることになる重要な人物であるので、その手紙の全文を次に紹介することとする。

Lancaster, Pa.,
Oct. 28, 1884

J.S. Johnston, D.D.

Dear Bro.:—

In October, 1882, I attended a convention of the Inter-Seminary Missionary Alliance, held at Chicago. The convention was an earnest one, full of Christian feeling. The young men felt the presence and power of the Holy Ghost. Many of us heard the voice of God calling us to preach the holy gospel to every creature.

I then made up my mind to enter the foreign mission field. For two years the vision of Macedonia has been before me as



W.E. ホーイ

a calm and sacred inspiration to prepare myself for the Master's work. It is plainly my duty to labor for Christ among the heathen. The divine call has entered my soul and spirit, and I feel that I cannot disregard it. Disobedience here would be a sin against the Holy Ghost.

I have just returned from the covention of the Inter-Seminary Missionary Alliance, held at Princeton. The missionary spirit was earnest and dignified as becometh those hearing God calling them to the foreing field. On Sunday evening we held a consecration service expressly for those young men who are now declaring their obedience to the Spirit working in them. During this meeting thirtyeight young men arose and publicly declared their holy purpose to enter the foreign missionary field. I was among that number, and that action was simply the result of two years' earnest, prayerful, tearful study of the claims of foreign missions upon me. It was an open expression of the voice of God speaking strongly within my heart.

On my return to Lancaster, I saw a coy of The Messenger and read your appeal for a missionary to Japan. It sent a thrill through my whole being. Was or is this printed appeal an approval of God of my public declaration at Princeton? I cannot help but think it is. I am ready to be sent to the uttermost parts of the earth. For me there can be no peace at home, for God is directing me farther on. I have consecrated my life to the foreign missionary cause. As a son of the Reformed Church and of our Institutions at Lancaster, I should rejoice to be sent by our Board. But if you cannot see your way clear to second my longstudied consecration, I must calmly submit to seek a commission elsewhere. I have obeyed the voice of God, I cannot do otherwise.

I am a member of the Senior class of our Seminary at Lancaster. My age is twenty six.

Hoping to hear from you soon, I remain,

Yours in Christ,
Wm E. Hoy

すなわち此の手紙は、ウィリアム・E・ホーイがプリンストンで開催された全国神学大学外国伝道協議会に出席

した後に、ジョンストン博士にあてて送ったものである。ところでホーイはこれより二年前、すなわち彼がフランクリン・アンド・マーシャル大学を卒業してランキャスター神学大学に入学して間もない一八八二（明治十五）年十月にも、シカゴで開催された同じ協議会に出席したのであるが、その時彼は聖霊の導きによって、「すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」と呼びかける神の声に接し、外国伝道に献身しようと決心した。彼はその時余程感激したとみえ、「合衆国改革派教会」の機関紙「メッセンジャー」[註五一]紙に長文を投稿しているが、その冒頭は

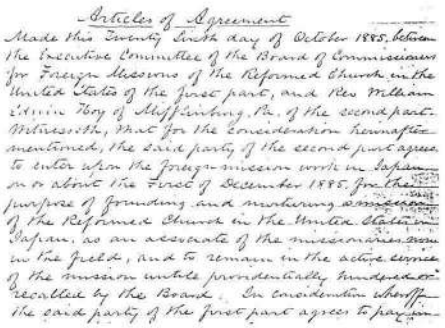
"The Alliance is in session. I listen to the first impulse of my soul, and study the scene before me. I look upon life; feel its beauty, its warmth, its light; bring virtue, goodness, spirit of peace to my mind; think of the sentiment of divine love pervading the whole assembly; gather the fruit of holy intercourse between man and man; and rejoice in the bright and easy strength that flows before me like a full river in the sunshine of fraternal feeling. It is a view of promise, a paradise set out with the bloom of youth and refreshed by the fountains fo age. Heart beats unto heart a quickening inspiration. Soul answers soul in the world of prophecy. Spirit joins spirit in creative execise of song. I stand before a mighty deep, and cannot fathom it. What an intense joy it is to live in!"

という書き出しである。ホーイは此の時から二年間、常に「異教の地でキリストのために働くことこそが、明らかに自分の義務である。」という考えを持ち続けていた。それ故、プリンストンでの全国神学大学外国伝道協議会に出席していて更に強くその決意を促されたのであろう。会議を終えてランキャスターに戻って来たホーイは、「メッセンジャー」紙で日本伝道に献身する人を求める訴えの文面を見つけ、早速ジョンストン博士に宛てて外国伝道に献身の意志表明を行なった。すなわち「私は『すべての造られたものに福音をのべ伝えよ。』という神の声をきいて、外国伝道に生涯を献げることを決心しました。異教の人々の間にあってキリストのために働くことが、正しく私の

義務であり、神の呼びかけの声に従わないようなことがあれば、それは神の前に大きな罪をおかすことになると考えました。私は此の神の呼びかけに是非とも応えねばならないと考えています。今、日本伝道に献身する者を求めている訴え文を読んで、私は感激で身震いがするほどです。私は福音の宣揚のためならば、たとい地の果てまでも出向く心がまえが出来ています。神は私に異教の地へ行けと命じておられますので、私は私の全生涯を外国伝道のために献げます。是非とも私を採用してください。」という概要の書翰である。

ホーイの「宣教師就任契約書」

ところでホーイ（William Edwin Hoy）は、彼が「合衆国改革派教会」外国伝道局に提出した宣教師採用願関係書類に自ら記しているところによると、一八五八（安政五）年六月四日にペンシルヴァニア州ユニオンカウンティ（ユニオン郡）のライムストーンタウンシップ（ライムストーン郡区）にあるミフリンバーグ近郊でジョーナス・ホーイを父としてエリザベス・ゲプハルト・ホーイを母として生れている。彼はペンシルヴァニア州マーサーズバーグの高等学校を卒業後、フランクリン・アンド・マーシャル大学に四年間、ランキャスター神学大学に三年間学んでいる。彼がキリスト教の信仰をもつに至ったのには、両親の熱心な信仰の影響が大きかったと思われる。その事は彼が提出書類に彼の考えを記す際、“Were your parents at that time, either or both of them, professors of religion?” という質問に答えて、“Yes, and their teaching and influence shaped me spiritually” と記しているところから判断することが出来る。


Articles of Agreement
Made this Twenty Sixth day of October 1885, between the Executive Committee of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of the first part, and Rev William Edwin Hoy of Mifflinburg, Pa. of the second part: Witnesseth, that for the consideration hereinafter mentioned, the said party of the second part agrees to enter upon the foreign mission work in Japan on or about the First of December 1885, for the purpose of founding and nurturing congregations of the Reformed Church in the United States in Japan, as an advocate of the missionaries now in the field, and to remain in the active service of the mission until providentially hindered or recalled by the Board. In consideration whereof the said party of the first part agrees to pay...

ホーイの契約書

ホーイの宣教師採用願の手紙を受取った「合衆国改革派教会」外国伝道局は、ホーイの熱誠溢れる手紙を通して彼の伝道精神を理解し、一八八五（明治十八）

年四月に彼を日本派遣第三番目の宣教師に採用した。そして同年十月十四日から十九日にかけて、ペンシルヴァニア州ダンヴィル教会のジョン・A・ピーター牧師を議長として、ミフリンバーグで開かれた「合衆国改革派教会」第百三十九回大会の会期中、木曜日夜の会合において、ウィリアム・E・ホーイはA・C・ウィットマー牧師の司式の下に按手礼を受け更に日本派遣宣教師の任命を受けた。ホーイの喜び並びに感激は如何ばかりであったろうか。かくしてホーイは十月二十六日、「合衆国改革派教会」外国伝道局（署名者は局長ヴァン・ホーン博士並びに総幹事ジョンストン博士）との間に契約書を交わした。その全文を紹介する。

Articles of Agreement

Made this Twenty Sixth day of October 1885 between the Executive Committee of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of the first part, and Rev. William Edwin Hoy of Mifflinburg, Pa. of the second part. Wittnesseth, that for the consideration hereinafter mentioned, the said party of the second part agrees to enter upon the foreign mission work in Japan on or about the First of December 1885, for the purpose of founding and nurturing a mission of the Reformed Church in the United States in Japan, as an associate of the missionaries now in the field, and to remain in the active service of the mission until providentially hindered or recalled by the Board. In consideration where of the said party of the first part agrees to pay in United States Currency or Gold, a yearly salary of Seven Hundred Dollars in quarterly instalments commencing at the date of the missionary's arrival in the field, together with Physician's bills not exceeding Fifty Dollars per annum, and all travelling expenses incurred in mission business. Also, an allowance of Three Hundred Dollars to cover expenses of outfit and freight on goods and Four Hundred Dollars for fare and passage money from which any surplus shall be applied to the account of salary.

In witness whereof we do subscribe our names with the date of signing, Oct. 26/85.

First Part
Executive Committee
David Van Horne
President
Thomas S. Johnston
Secretary
Second Part
William Edwin Hoy

すなわちこの契約書によれば、ホーイは一八五年十二月一日から「合衆国改革派教会」在日伝道局の先輩宣教師グリングやモーアと協力して、在日伝道局の確立並びに発展のために伝道活動に積極的に従事することとなり、そのため外国伝道局はホーイが日本到着の日から年俸七百ドルを年四回に分けて支給し、更に医療費・伝道旅費・家財梱包輸送費・赴任旅費等についてもそれぞれ所定額を支給するという約束なのである。当時の宣教師が外国伝道に出発する際の様子の一端をうかがい知る事が出来る。なおこの年の秋、ワシントンで開催された「合衆国改革派教会」ポトマック大会の期間中のある夜、それはホーイが日本へ向って出発する前夜のことであるが、彼は母校ランキャスター神学大学教授トーマス・G・アップル博士と話を交わす機会があった。アップル博士はホーイの前途に神の導きと祝福とがあるようにと心より祈りつつホーイを励ましたことであるが、その時の様子をデーヴィド・B・シューネーダー博士は次のように記している。(註五二)

In the course of the conversation Dr. Thomas G. Apple remarked: "Well, Brother Hoy, I suppose after you get out there you

will start a college and a seminary?" The words fell like a seed upon fruitful soil. Mr. Hoy from that time forward determined to convert into actuality the idea which then entered his mind. "On my way to Japan," he writes, "the question of mission schools was ever on my mind."

恩師アップル博士が「あなたは日本に着いたら大学と神学校とを創設することになるのではないですか。」と話したその言葉が、外国伝道の情熱に燃えて張切っていたホーイの心に強い刺激を与えたのであろう。ホーイは日本へ向う旅の間、恩師のこの言葉がひとときたりとも彼の胸中から消えることなく、キリスト教伝道のために学校を創設するという事に関してさまざま思いめぐらしつつ旅を続けたのである。

江戸時代の女子教育

宮城学院は、宮城県における最初の女学校として「宮城女学校」の名称のもとに創立されたのであるが、創立直前の宮城県の教育事情を概観しておくことにしよう。先ず最初にわが国の女子教育全般の歴史をふりかえって見ると、女子を男子よりも低く見る考えのもとに、女子教育は何らかの形で男子教育よりも低いレベルで実施されて来た。それは、江戸時代の社会は武家社会の主従関係に基礎をおいていたが、それが家庭内にも及び、親子関係、夫婦関係も主従関係同様にみなされ、このような人間関係を基礎として女子の教育も考えられたからである。江戸幕府の方針によれば、武家の子女にとっては、儒教にもとづく修養は必要であった。例えば将来、母たるべき者として「礼記」に言う四徳、すなわち婦徳（貞順）・婦言（辞令）・婦容（婉娩）・婦功（糸麻）を身につけることは大事であるが、学問はいっさい無用であるとされた。徳川八代将軍吉宗の孫であり、寛政の改革を実施した松平定信楽翁公の「女子はすべて文盲なるをよしとす、女の才あるは大に害をなす、決して学問などいらぬもの」（「修身録」〈「楽翁公遺書」上巻〉）とする考えも江戸封建時代の社会体制に関連のある教育観にもとづくものであった。勿論、江戸時代であっても女子の教育が全く無視されたわけではなく、何

らかの形での女子教育――女子のための寺小屋・娘宿・お針屋・お女中見習奉公・お屋敷奉公など――は行なわれてはいたが、しかしそれらも女子に必要な言葉遣い・行儀作法・芸事・教養などを身につけさせることに主眼目がおかれていたと思われる。江戸時代に著わされた女子のための教訓書には「女大学」・「女論語」・「女訓孝経」・「女今川」などと「女」の語を冠したものが多いのも、女子教育を男子教育と区別して考えていたことのあらわれであろう。このように、女子教育は、「人間として」ではなくて「女子として」、「婦人として」という立場から実施されていたと思われる。

このような時代のあとであっただけに、明治政府がとった教育方針――すなわち「人たるものは学ばずんばあるべからず」、「今般文部省に於て学制を定め」、「自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」、「高上の学に至ては其人の材能に任かすといへども幼童の子弟は男女の別なく小学に従事せしめざるものは其父兄の越度たるべき事」（明治五年壬申七月太政官布告第二百十四号）ということで一八七二（明治五）年八月三日に文部省布達第十三号で定められた「学制」に「尋常小学ヲ分テ上下二等トス此二等ハ男女共必ス卒業スヘキモノトス」（第二十七章）とあるごとく、男女貴賤の別なくすべての者が教育を受けるべきであるという方針――は非常に画期的なものであったと言わざるを得ない。

このように明治政府は女子教育に大いに力をそそぎ、既に「学制」布達に先立つ一八七二（明治五）年二月には東京女学校を創設している。更に同年九月には開拓使学校（のちの札幌農学校）の付置女学校をも創設したりした。しかし、小学校の就学率は一八七三（明治六）年を例にとって見ると、男児は三九、九〇パーセント、女児は一五、一四パーセントという具合に男女の開きが大きく、女子教育に関する成果はあがらなかった。したがって、同年八月に文部省に迎え入れられたデービッド・モルレーによって、「文部省が女子教育に深い注意を拂っていることを評価はするが、しかし文部省の方策は不充分である。欧米諸国では、女子は常に児童にとって最良の教師とされてい

るのであるから、日本においても是非女子をして教育を進歩させる媒介者として欲しい。」と言うような進言がなされた。この進言がもとになって、文部省は一八七五（明治八）年に東京女子師範学校を創設した。この様にして進められていった明治政府の教育行政の中での女子教育をふりかえって見る場合、初代文部大臣（第一次伊藤内閣）森有禮が女子教育を大いに重視した事を忘れてはならない。森が一八八七（明治二十）年に九州を巡回中に郡区長を対象に行なった演述の中で、「此等ノ縣ニ於テハ漸次女教員ヲ養成スルノ途ヲ開クヘシ。蓋シ女教員ノ親切ニシテ注意ノ周到ナルハ決シテ男教員ノ及フ所ニ非ス殊ニ其幼稚ノ児童ヲ教育スルハ男子ヨリモ大ニ優レリトスルハ歐米ニ於テモ既ニ通論ト成リタル程ノ事ナレハ尋常小学校ニテハ成ルヘク女教員ヲ用ヒタキモノナリ」と述べ、更に「師範学校ノコトヲ論スルニ當リ女教員ノコトニ論及セシト雖トモ女子教育ノ要旨ニ至テハ之ヲ述ヘザリシユエ今茲ニ一言スヘシ抑々教育ノ要旨タルヤ人ヲ薫陶シテ善良ノ人トナスニ在ルコトナレハ女子教育ノ目的モ畢竟良妻良母ヲ養成スルニ在リト言フコトヲ忘ル可カラス良キ妻トナリ良キ母トナルコトハ完全ノ教育ヲ受クルニ非サレハ能ハサルナリ故ニ女子教育ノ要旨ハ良キ母ヲ造ルニ在リトイフ一言ヲ以テ之ヲ包括スト認メテ可ナリ蓋シ今日ノ女児ハ他日人ノ母トナルヘキモノニシテ他日ノ児童ハ乃チ今日ノ女児之ヲ撫養スヘキモノナレハ女子教育ノ事ハ至大至重ニシテ我国ノ将来ヲ思フモノ須ラク精密ニ女子ノ教育法ヲ考究實行スヘキナリ」と述べている。このように女子教育に重要性を置き、「国家富強の根本は教育にあり」、「教育の根本は女子教育にあり。」としている。又第二次伊藤内閣の文部大臣井上毅も「普通教育の必要は男女において差別があってはならない。そして女子の教育は将来家庭教育に大きな関係を持つ。」と力説している。これら二人の文部大臣の努力にもかかわらず、一八九七（明治三〇）年までの間には、我国の女子教育は仲々発展しなかった。文部省の統計[註五三]によると、高等女学校及びこれに準じた学校数並びに生徒数は、

	高等女学校数	生徒数
一八八二（明治十五）年	五校	二八六名
一八八七（明治二十）年	一八校	二、三六三名
一八九二（明治二十五）年	二七校	二、八〇三名
一八九七（明治三十）年	二六校	六、七九九名

であって非常に少いのである。しかもこの大半が私立学校、特にミッション系の女学校なのであるから、明治初期から中期にかけて、キリスト教主義学校がわが国の女子教育の分野で果した役割は極めて大きかったと言わなければならない。

そこで今、宮城女学校（宮城学院）の創立の年である一八八六（明治十九）年までの間に創立されたキリスト教学校で現存のものを列挙して見ると、

フェリス女学院、女子学院（以上一八七〇年）、横浜共立学園（一八七一年）、神戸女学院、平安女学院（以上一八七五年）、立教女学院（一八七七年）、梅花学園（一八七八年）、活水学院、プール学院（以上一八七九年）、成美学園、聖和女子大学（以上一八八〇年）、遺愛女子高等学校（一八八二年）、大阪女学院、東洋英和女学院、頌栄女子学院（以上一八八四年）、北陸学院、福岡女学院（以上一八八五年）、弘前学院、広島女学院、宮城学院、松山東雲学園、捜眞女学校（以上一八八六年）

などである。明治政府は宮城女学校（宮城学院）創立の年、一八八六年（明治一九）年四月十日になってはじめて「小学校令」並びに「中学校令」を公布しているのであって、それまでは「学制」（一八七二〈明治五〉年）、「教育令」（一八七九〈明治十二〉年）、「中学校教則大綱」（一八八一〈明治十四〉年）、「中学校通則」（一八八四〈明治十

七〉年）が公布されていただけであった。

宮城県の教育状況

次に、宮城学院創立直前の宮城県の教育事情を眺めて見ることにしよう。江戸時代末期、一八五一（嘉永四）年十一月に、仙台藩では、川内中ノ坂通に「小学校」を開設したが、これは勿論「学制」以後の近代的な「小学校」とは異なり、一部の武士階級の子弟のための学校であった。明治新政府は一八六九（明治二）年六月に、幕府直轄の江戸の昌平黌を復興させた昌平学校を大学校（本校）とし、同じく幕府直轄の江戸の医学所並びに開成所を復興させた医学校並びに開成学校を大学校分局にするという総合大学設立を目ざし、翌月、七月の官制改革により「大学校」を設けた。これはのちの文部省の前身と見るべきものである。更に同年十二月には「大学校」を「大学」と改め、医学校を「大学東校」、開成学校を「大学南校」と改称し総合大学の形態がととのった。その後、「大学（本校）」は一八七〇（明治三）年七月には閉鎖されて「大学東校」と「大学南校」だけが存続することになる。なお洋学の最高機関としての伝統を持つ「開成学校」は「大学南校」と称せられるようになったが、一八七〇年「大学（本校）」が閉鎖されると明治政府は「大学南校」を中心として人材養成を企画し貢進生の制度を定めた。この貢進生の制度は諸藩から俊秀を選抜して大学南校に入学させ、ここで欧米の学問文化を学ばせて国家の指導的人材を養成しようとするものであり、貢進生は十六歳から二十歳までの者で、学費は藩が支給するものであった。我が宮城女学校（宮城学院）の創立者の一人押川方義も松山藩の貢進生となり「大学南校」に学んだ。貢進生の人数は藩の規模に応じて定められた。一八七一（明治四）年廃藩置県とともに廃止された。さて、一八七〇（明治三）年二月に、「大学規則」並びに「中小学規則」が定められ、都には「大学」を設け、府藩県には「中学」、「小学」が置かれることとなり、そこから俊秀を選んで都にある「大学」に貢進生として学ばせることとなったのでこれを受けて仙台藩も「中学」を置くこととした。

ところで一八七一（明治四）年七月、仙台藩が廃止されて仙台県が置かれることとなり、同年十一月、角田県、仙

台県、登米県を分合して仙台県と一関県とし、仙台県には塩谷良翰が県参事として任命された。仙台県の県庁舎には養賢堂講堂があてられ、養賢堂構内の手習所あとに中学が置かれて漢学・皇学・書学・算学などの教育が行なわれることになった。又、洋学に関しては、藩命により横浜で英学を修業中であった横尾東作が招聘されて仙台に戻り、明治維新以後廃館になっていた百騎丁（東二番丁）の医学館あとの施設を用いて置かれた英学所で英学を教授することとなった。この英学所を「辛未館」と称するのは、明治四年の干支が辛未にあたっていたからである。同年十一月十八日付で英学所に入学を許可された者二十七名は殆んどが士族の子弟であって、正則生（十三歳以上十六歳までの者）十二名、変則生（十七歳以上の者）十五名であった。学則によれば、十五名に満たなければ授業を開始しない旨定められているが、正則生が十二名であったということは、正則生の数が定員に満たなかったものと思われる。英学者として著名な斎藤秀三郎は僅か六歳にしてこの英学所に入学しているが、これも恐らく正則生の出願者が少かったため特別に入学を許可されて、横尾東作の指導を受けることになったのであろう。その後、一八七二（明治五）年五月には、仙台県が宮城県と改称されたが、同年六月、中学と英学所との場所の交換が行なわれると同時に「今般中学校ヲ設ケ、分ケテ両校トナシ、北校ヲ英学所トナシ、南校ヲ漢学所トナス」との宮城県布達文が出された。その二ヵ月後の八月に太政官布告第二百十四号と共に「学制」が公布され、四民平等・国民皆学の方針が明示された。宮城県も早速、小学校設立に主力を注いだ。一八七三（明治六）年八月、文部省は大坂と仙台に官立師範学校創設の布達を発し、直ちに生徒募集が行なわれ、同年十一月、官立宮城師範学校は授業を開始した。一八七八（明治十一）年二月に廃止される迄に百三十一名の卒業生を送り出している。官立師範学校は一八七七（明治十）年二月に愛知・廣島・新潟の三校が、翌年、大坂・長崎・宮城の三校がそれぞれ廃止されたので結局、東京師範学校と東京女子師範学校（一八七四・明治七年創立）の二校だけがのこった。

ところで「学制」第三十一章に「当今外国人ヲ以テ教師トスル学校ニ於テハ大学教科ニ非ザル以下ハ通シテ之ヲ

中学ト称ス」との規定があり、外国語学校は中学の一種とみなされていた。一八七三年四月、東京・大坂・長崎に官立外国語学校が設置されたが翌年三月には愛知・廣島・新潟・宮城（仙台）にも官立外国語学校が設置されることになり、官立宮城外国語学校は同年十二月八日に開校式を挙行し、又、校名を官立宮城英語学校と改称した。一八七七（明治十）年二月に文部省の方針で廃止されるまでの間にグールド（アメリカ人）・ヘールド（ドイツ人）・リッドル（イギリス人）・ペンニー（イギリス人）などの外国人が教鞭をとった。この様にして廃止された官立宮城英語学校の施設・設備等をそのまま引継いで、同月、県立仙台中学校が創立された。この県立仙台中学校が次第に整備拡充され、一八七九（明治十二）年六月には県立宮城中学校と改称され、更に内容が強化され体制が整えられて一八八七（明治二十）年八月に宮城県尋常中学校[註五四]となるのである。

以上の経過から理解できる様に、宮城女学校創立直前の宮城県の中等教育は、「学制」以後の宮城県でただ一つの中等程度の教育機関として重要な存在であった官立宮城外国語学校を始点として以後官立宮城英語学校・県立仙台中学校・県立宮城中学校と続く一連の流れによってだけ行なわれて来たと言わなければならない。

勿論、宮城県においても明治初期以来、英学岡本家塾・洋算家塾・佛蘭西学私塾・松操私塾（裁縫塾〈現在の朴澤女子高等学校の前身〉）などをはじめ、幾多の私立の教育機関が創設されたが、それらはいずれも私塾的性格のものであった。

一八七九（明治十二）年九月二十九日、「学制」が廃止されて「教育令」が公布され、従来の中央集権的画一主義の教育行政から諸権限の地方委譲の教育行政へと変ったのであったが、一八八〇（明治十三）年にはこの「教育令」が改正されて、府知事県令の教育行政権の強化・就学義務の厳守・徳育の重視などが徹底化される事になった。そして文部省が多くの布達や訓令を出して中央集権的な教育行政を全国に遂行させようとした。宮城県当局も一八八二（明治十五）年に「宮城県学事条例」を制定し、文部卿並びに県令の教育行政権を県内に周知させ実施しようと

した。このような状況の下にあって宮城女学校（宮城学院）の創立が行なわれるようになるのである。

（註　一）　吉田　栄「吉田亀太郎追憶集」百六十七頁。
（註　二）　"Q.P.", May 1879 to Feb. 1883, PP. 149-150
（註　三）　"Q.P." No. 8. N.S., Feb. 1877, P. 125.
（註　四）　"Q.P." No. 9. N.S., May 1877, P. 142.
（註　五）　"Q.P." No. 13. N.S., May 1878, P. 202.
（註　六）　"Q.P.", May 1879 to Feb. 1883, P. 8.
（註　七）　Ibid., P. 35.
（註　八）　Ibid., P. 127.
（註　九）　Ibid., PP. 127-128.
（註一〇）　長女シゲは明治十二年、父方義が開成所在学中に夭折。
（註一一）　吉田亀太郎四女、宝田愛氏所蔵。
（註一二）　志茂きく。
（註一三）　"Q.P.", May 1879 to Feb.1883, P. 180.
（註一四）　「仙臺日本基督教會歴史」三頁には「押川氏腸扶斯病に罹り次で又同病の爲に愛女を失はるゝに至り」とあり、「東北学院七十年史」三十四頁には「押川は疲労がもとでチフスに冒され（中略）、克子がシフテリヤに罹つて」とある。
（註一五）　"Q.P.", May 1879 to Feb. 1883, P. 307.
（註一六）　"Historic Manual of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States." Standard Publishing Company, Pottsville, Pa., 1888.（以下 "HM" と略記す。）
Callender., S.N., "Histrical Sketch of the Work of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States." (Revised Edition). Report Publishing Co., Lebanon, Pa., 1898.（以下 "HS" と略記す。）
"Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States 1877-1927." Board of Foreign

Missions, Philadelphia, 1927.（以下 "FY" と略す。）Klein, H.M.J., "The History of the Eastern Synod of the Reformed Church in the United States." Eastern Synod, Lancaster, Pa., 1943.（以下 "HES" と略記す。）"A Hisory of the Evangelical and Reformed Church." Christian Education Press, Philadelphia, 1961.（以下 "HER" と略記す。）

（註一七） "Acts and Proceedings of the General Synod of the Reformed Church in the United States, 1875.", PP. 36-37（以下 "Acts 1875" の如く略記す。）

（註一八） Acts 1881", P. 53.

（註一九） Moore, J.P., "Forty Years in Japan 1883-1923", PP. 1-2.（以下 "FYJ" と略記す。）

（註一一〇） "HS", P. 8. "HM", PP. 16-17. なお Moore, J.P., "Evangelistic Work. Tokyo Field." ("History of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States 1879-1904."), PP. 40-41.（以下 "HJM" と略記する）には「四千ドル」"HES", P. 270. には「四千五百ドル」とある。

（註一一一） "HM", P. 17.

（註一一二） At the instance of Missionary Gring, while learning the language, his personal teacher, aided by the personal teacher of Rev Dr. Verbeck, of the Reformed Church in America, translated the Heidelberg Catechism from the book language, into which it had been translated some time previously, mainly by a Presbyterian, into the colloquium, or spoken language. This translation was published by our Board.（"HS", P. 8.）「井深梶之助とその時代・第一巻」一一百六十一頁。

（註一一三） "Eclectic Chinese-Japanese-English Dictionary of Eight Thousand Selected Chinese Characters." "HS", P. 8. "HM", P. 17.

（註一一四） From Ambrose D. Gring, 28 Tsukiji, Tokio, Japan,（Mission House, Tsukiji, Tokio, Japan, June 1st, 1882.）to Fathers and Breathren of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States.

（註一一五） Gring's letters to Board, March 3, 1880, June 23, 1881 and May 12, 1882.

（註一一六） Ibid., June 17, 1882 and June 19, 1882. "HES", P. 272.

（註一一七） Ibid., July 3, 1882.

（註一一八） "The Messenger". Jan. 17. 1883.

(註二九) "FYJ", P. 18.

(註三〇) ギールの指名・任命年月日は、"Acts 1884" の五十九頁には "May 1883" とあり、"HS" の十頁には "March 13, 1883" とあり、又、ギール自伝である "FYJ" の二十一頁には "April, 1883" とある。しかし、"FYJ" はギールの住居が火災で全焼した年の翌年(一九一三年)、ギールの記憶だけに基いて執筆されたものであるためか年月日などに関しては正確を欠く記述が散見される。したがって、指名・任命日に最も近い一八八三年三月二十一日発行「メッセンジャー」紙掲載記事 "The Newly Appointed Foreign Missionaries" 中にある「一八八三年三月十四日」を正しいと判断する。

(註三一) "Attractive Footprints" (edited by Rew. K. Ito), PP. 4-6.

(註三二) 1. Millersville, 2. Rohrerstown, 3. Conestoga Center.

(註三三) "The Messenger". May 23, 1883.

(註三四) Ibid., Aug. 1, 1883.

(註三五) Moore's letters to Boasd, Aug. 30, 1883 and Oct. 2, 1883.

(註三六) Moore letter to T.S. Johnston, Oct. 2, 1883. 此の十月二日付書翰は、東京・築地二十八番で記されたもので、ギールの横浜着は九月二十三日(日)午前七時三十分であることが明瞭。しかるに、この時より四十年後の一九二三年にギールによって執筆されたギールの自伝 "FYJ" には、"on a beautiful Sunday morning in October we steamed into Yokohama harbor" と記されている。これは註三〇に記したごとき記憶ちがいによる不正確な記述の一つである。

(註三七) Ibid., Nov. 3, 1883.

(註三八) "FYJ", P. 52.

(註三九) "Acts 1884", P. 60. "FYJ", PP. 52-55. "HJM" PP. 11-12.

(註四〇) "Attractive Footprints", P. 16.

(註四一) "HS", PP.11-12.

(註四二) Hattie L. Gring letter to ladies of the Reformed Church, Aug. 16, 1883.

(註四三) "Shall we have an educational institution in Japan?" ("The Messenger", June 20, 1883.)

(註四四) "The Messenger", Feb. 13, 1884.

(註四五) Ibid., April 9, 1884.

（註四六）　"An Appeal" ("The Messenger", July 16, 1884.)
（註四七）　"Acts 1884", P. 59.
（註四八）　Ibid., PP. 64-65.
（註四九）　Questionnaire of Board of Commissioners for Foreign Missions. (Questions to be answered in Writing by Candidates for Missionary Work)
（註五〇）　"The Messenger", April 17, 1890.
（註五一）　Ibid., Nov. 29, 1882.
（註五二）　"Educational Work—North Japan College" ("HJM", P. 45.)
（註五三）　「教育統計」二百二十四頁第五表。
（註五四）　この宮城県尋常中学校は、宮城県では「中学校令」による唯一の公立尋常中学校であった。しかし一八八八（明治二十一）年三月に廃止された。一八九二（明治二十五）年四月、宮城県尋常中学校は再発足し、のち一九〇〇（明治三十三）年に宮城県第一中学校と改称し、一九〇一（明治三十四）年には県立宮城県第一中学校と改称、更に一九〇四（明治三十七）年には宮城県仙台第一中学校と改称された。

第四章　シオンの女子（むすめ）よ　喜び楽め

主は言われる、シオンの娘よ、喜び歌え。わたしが来て、あなたの中に住むからである。

（ゼカリヤ書　第二章十節）

創立とプールボー校長

ホーイの来日

一八八五（明治十八）年十二月一日（火）、宮城女学校（宮城学院）創立者の一人、ウィリアム・E・ホーイを乗せた「ゲーリック」（Gaelic）号は横浜に入港した。ホーイは横浜在住の「米国メソジスト・プロテスタント教会」宣教師F・C・クラインの出迎えを受けて午後四時に上陸した。早速、グリング並びにモールに電報で横浜着を知らせたので、彼等は間もなくクライン宅に駆けつけ、更に午後十一時すぎにグリング夫人、モール夫人の待つ東京築地二十八番のグリング宅に旅装を解いた。ホーイは日本到着後三日目の十二月四日（金）に記した外国伝道局総幹事ジョンストン博士宛ての書翰で、日本到着の様子を次のように報告している。

TOKIO, Japan, Dec. 4, 1885.

Dear Doctor Johnston: —With a deep feeling of gratitude to God for His abiding presence and providence on my long journey to Japan, I rejoice to announce my safe arrival in this land of my choice and mission. The ride across the continent and the voyage over the sea were both pleasant and instructive. From the moment I passed beyond the threshold of my father's house and home up to the present, my health has been good, and my spirit hopeful and happy. I escaped all attacks of seasickness.

I landed at Yokohama on the first day of December, at 4 P.M. Rev. F.C. Kline, of the M.P. Mission, Yokohama, in accordance with a previous arrangement with our missionaries, met me on board the Gaelic. He kindly took charge of me and my trunks. We telegraphed to Bros. Gring and Moore. They then came down to Yokohama in the evening and met me at Brother Kline's. At half past ten we started for Tokio and reached that city a little after eleven. We proceeded to Bro. Gring's and met the ladies, Mrs. Gring and Mrs. Moore. And a joyous band we were indeed. For the last few days I have been resting

and adapting myself to new scenes and to a new life.

Our missionaries are well, and hard at work. They are earning a decided and deserved success.

At this early period I cannot write more fully. By the next mail I shall write further particulars. "Bless the Lord, O my soul, and all that is within me, bless His holy name." Yours in the Lord.

WM. E. HOY.

押川とホーイの出合い

ホーイの来日を鶴首していたグリング夫妻、モール夫妻はホーイを囲んで今後の伝道計画について真剣に語り合った。何故なら、ホーイ到着の時点で、ホーイの伝道地や伝道方法、すなわち直接伝道を主にするか学校教育を主にするかなどの問題が未決定であり、しかも、この事に関してグリングとモールとがそれぞれ異なる意見をもっていたからである。この重要問題を語り合っていた時、しかもホーイ到着後僅か三日目の十二月四日（金）に、のちに宮城女学校の創立者になる押川方義とウィリアム・E・ホーイとが、押川の恩師バラの紹介によって出合うということに劇的な出来事がおこった。神の摂理はまことに奇しいものである。かえりみれば、グリング夫人、モール夫人の度重なる願いや訴えにより、「合衆国改革派教会」外国伝道局の理解が進み、所属教会員多数の協力により東京の築地に女学校が創設される可能性が強くなり、日本派遣婦人宣教師二名が選任されたこと、グリングが「合衆国改革派教会」在日宣教師社団（在日伝道局）の伝道計画に関して在日年数の長い「米国改革派教会（ダッチ・リフォームド）」宣教師J・H・バラの意見をもとめたところ、バラは仙台に女学校を創立するようにと勧めたこと、押川方義が恩師バラの紹介でグリングに会い、仙台に男子校並びに女学校を創立したい理由を話し、「合衆国改革派教会」の協力を要請したので、グリングは押川の要請を一瞬たりとも忘れないでいたこと、日本派遣第三番目の宣教師ホーイが日本へ向って出発するに先立ち、恩師トーマス・

G・アップル博士から「日本に着いたら大学と神学校とを創設することになるのではないか。」と言われ、この恩師の言葉がひとときたりともホーイの頭をはなれなかったこと、このように様々の面で機が熟して来たという状況下でホーイは押川と出合ったのである。押川はホーイに対して、東北地方におけるキリスト教伝道の現況を説明し、伝道の成果を更にあげるためには直接伝道と同時に学校教育を通して養成した伝道者を東北地方各地に派遣して伝道を活発に行なうこと並びにクリスチャンの婦人を中心にした家庭が東北地方各地に築かれることが大事であると考える事、仙台に神学校並びに女学校を創立することが極めて大事な事を力説し、「合衆国改革派教会」の協力を得られるようにとホーイに対して熱心に訴えた。この声涙ともに下る押川の熱心な訴えに接してホーイは恩師アップル博士の言葉が脳裡にひらめき、直ちに仙台を実地視察しようと決心し、押川から同じ要望を受けていたグリングと共に仙台へ向った。この仙台視察に関してモール並びにホーイがそれぞれ外国伝道局へ書翰を送っている。いずれも、グリングとホーイが仙台視察を終えて帰京してから記されたものであるが、モールは外国伝道局財務委員長ケルカーに宛てた十二月十五日付書翰で、「十二月一日に日本に着いたホーイが早速グリングと共に伝道地視察の目的で仙台へ行って来た。ホーイは仙台に好印象を持ち、外国伝道局の諒承が得られれば仙台に赴任する決心をしている。仙台は、私達がかねてから考えていた女学校の創設地としては好適の都市であるとは思われるが、私自身の考えとしては十分な確信をもってそうだと断言することはさしひかえる。在日宣教師社団（在日伝道局）の直接伝道の見地から言えば、ホーイは東京に定住して活躍した方が良いと私は思う。」と報告している。一方、ホーイは外国伝道局総幹事ジョンストン博士に宛てた十二月十八日付書翰で、彼自身の意見と決意とを披瀝している。ホーイが日本に到着後直ちに将来の伝道計画に関して、グリングやモールと話し合っていたところへ、押川から仙台へ招請の熱心な訴えを受けたのであるから、ホーイとしては東京に留るべきか、それとも仙台に赴くべきかに関する結論を出さなければならなかった。そこでホーイは早速、仙台を訪れて諸状況を調査した後、押川の熱望に応えて仙台

に伝道の拠点を定め、学校教育に重点を置いて伝道を行なおうと考えた。そこでホーイは一刻も早く外国伝道局の諒承を得て、仙台で伝道を開始しようと決断したのである。押川の熱心な訴えに応えようとしたホーイのこの決断があったからこそ東北学院や宮城学院が今日仙台の地に存在するのである。ホーイが極めて重大なこの決断を行なうに至った経過が記されている十二月十八日付のホーイの書翰を次に紹介する。

TOKIO, Japan, Dec. 18, 1885.

Dear Dr. Johnston: —Soon after my arrival in Japan the question of my future location and work was brought before me in a striking manner. It was this, —Should I go to Sendai or remain in Tokio? To answer it intelligently and definitely, Bro. Gring and I, with the hearty approval of Bro. Moore, went to Sendai last week and "spied out the land." What was the result of our examination?

Sendai is a city two hundred and fifty miles north of Tokio. It is the heart of an important and hopeful section of country just feeling the influence of a new life —— the tremblings of beginnings, great in prophetic force and assurance; something that tells of the young manhood, strong, vigorous, courageous, that is born from within. This city, for the place it occupies in the present flow of progress and for its wonderful promise of becoming a great influence in the imperial government, is called "the Tokio of the North,"— "the center of the six millions of the seven northern Kens." The population of Sendai is 60,000. The surrounding ken or province has 600,000 inhabitants. The climate is colder than that of Tokio. For the preservation of health and strength Sendai is certainly far preferable to Tokio.

The people of Sendai are still largely in their native simplicity. There are only five foreigners in the city. Just as you may see in the early stages of the day's dawn great promise of what is to be, so here in the faint light that is appearing one may find the confidence of the near future that is to make these people brighter and better. The Baptists and Methodists have recently opened evangelistic work here, based on the educational system. A few years ago a Japanese evangelist began preaching Christ in this city and has now a congregation of one hundred and thirty members. The third day after my landing on the shores of

Japan this native pastor called on me at Tokio and asked me to come to his help. He organized his people irrespectively of denominational lines, but has within the last three weeks joined the Union Church of Japan. The Christians of Sendai are praying that the Lord send me to their place to preach the glad tidings to those who have not yet called on the name of God. Those who do not embrace Christianity beg me to come. Christians and heathen ask for the bread of life. The citizens in general, backed by a few influential government officers, beseech me to make my home with them. They want foreign influence, education and example ; yes, thank God, they ask for the Gospel. Their desire is to have Christian agencies at work in their beautiful city. They would like to have a girls' seminary. There is no question but that Sendai is the most promising field, and the most urgent one, in Japan for female education, Yokohama and Tokio being already well suppled. Bros. Gring and Moore, and all the experienced missionaries testify to this. The citizens beg that Miss Poorbaugh and Miss Ault be sent to them soon. I have seen and heard them pray for this. *Will God answer* ! If only our Reformed people at home could realize the intensity of the new purpose at work in the hearts of these people, how willingly and lovingly they would pronounce in very truth the words, "It is more blessed to give than to receive I". It is happy and a holy privilege before God to love and help such a desire framed upon the lips of native Christians and echoed by the pleading voices of those still in spiritual darkness. Lovest thou God ? Wilt thou also love these people ?

I am making arrangements to locate in Sendai. I could not do otherwise. The call comes to me with a divine force that I cannot withstand. The Lord has plainly opened my way. Besides the spiritual aspect, Sendai appealed to me by the fact that it is a most favorable place for the study of the language. One is thrown into direct communication and intcrcourse with the natives. In Tokio new missionaries associate mostly with English and American people. Then, too, one can live more cheaply in Sendai than in Tokio. Property is cheap, and good, comfortable houses rent for four yen ($3.35) per month. A new center of work will also greatly strenghthen our mission. It is my purpose to study the language so as to prepare myself for evangelistic work. I want to engage in teaching English, looking forward to the Bible and our Catechism. A boys' school may probably grow out of this. A number of bright boys and young men are eagerly awaiting my return to Sendai. One young Christian wishes me to direct his theological studies. January 14 th is the date upon which Bros. Gring and Moore and I have decided for my return to Sendai.

All the missionaries that I have thus far met are unanimous in the opinion that I can do the greatest good in Sendai. The leadings of Almighty God are so evident in this that they are at once seen and believed by all. The voice of the Father calleth now even more forcibly than in that memorable moment of my life's history when I for the first time publicly announced my consecration to the cause and work of foreign missions.

Sendai has become the heart of my hopes, and it will be, I trust, the hearth and home of my best missionary affections.

Yours in the Lord,

Wm. E. Hoy　Heartily endorsed by A.D. Gring; J.P. Moore.

ホーイは、押川の構想に共感をおぼえ、又、押川の熱心な訴えに心動かされ、押川の伝道活動の根拠地の実情を偵察すべく、グリングと共に仙台を訪れ、諸種の状況を調査した結果、仙台は「北国の東京」とも言うべき東北地方の中心都市として将来発展の可能性に富み、又、市民の大部分が生来の純朴な気性の持主なので、キリスト教の伝道を行なえば成果があらわれると思われること、最近、バプテスト教会やメソジスト教会が学校教育に重点をおいた伝道を開始しようとしていること、ホーイ来日後三日目の十二月四日にホーイを訪ねて来た日本人牧師（押川方義）が数年前に仙台で伝道に着手し、その結果、受洗者が生れて創立された仙台教会は百三十名の会員を擁するに至り、つい最近、従来の無教派主義の独自の立場をかえて「日本基督一致教会」に加入したこと、仙台では信者も未信者もホーイが仙台に定住することを望み、誰もが福音を求めていること、美しい都市仙台は女学校創設のための好適地であるから、日本派遣婦人宣教師として選任されているプールボーとオールトも是非仙台に来任するようにと仙台の信者達が期待していることなどを記し、又、仙台は東京にくらべて物価も低く従って一カ月四円（三ドル三十五セント）で快適な家屋を借りられる事情などをも考えると、ホーイとしては仙台が最も有望な伝道地であると判断するが、この判断に関してはグリングもモールも同一意見であるので、「合衆国改革派教会」所属教会員

は、仙台の信者達が願っていることの重要性を理解して仙台市民の期待に応えることを喜ばしく神聖な特権であると考えて欲しいと記している。

ホーイとしてはとりあえず英語を教えることからとりかかり、次第に聖書や信仰問答の講義を行なうようにしたいという決意を披瀝し、仙台偵察から東京へ戻って早速仙台赴任の準備を始めていることや、グリング、モール、ホーイの三名でホーイの仙台赴任の日を一月十四日と決定していることをも報告している。（実際には一月十三日着。）

押川の「日本基督一致教会」加入

なお、ホーイのこの書翰にある仙台教会の「日本基督一致教会」加入について若干説明を加えると、既に記したごとく、一八七六（明治九）年五月以来「日本基督公会」、「日本長老公会」のそれぞれに所属する牧師代表並びに両公会に関係ある「米国長老教会」、「米国改革派教会」、「スコットランド一致長老教会」のそれぞれの在日宣教師代表が「日本基督公会」と「日本長老公会」の合同に関して協議の後、信仰箇條、宣教師の立場、同後の名称などについて賛否両論、種々議論がなされたが最終的には翌一八七七（明治十）年十月三日に合同を決議して「日本基督一致教会」として発足し[注一]会員六百二十三名を有する長老主義教会となった。その際、当時「日本基督公会（横浜公会）」の長老として、新潟のパームのもとでパームの医療伝道に協力していた押川方義は「日本基督一致教会」発足過程で定められた信仰箇條に賛成せず、したがって「日本基督一致教会」には加入しなかった。そして従来通り無教派主義の立場で新潟で更には仙台で独自に伝道を続けていた。その間、「日本基督一致教会」は年を追うて加入教会数が増加したので、一八八一（明治十四）年には全国を北部中会（東京日本橋以北）、東部中会（東京日本橋より横浜以南）、西部中会（中国及び九州）の三中会に分轄し、同年十一月二日から三日間東京築地の新栄教会堂で第一回大会（教会数二十五）を開催し、その後も急激な発展を示し続けていた。

他方、この間、既述のごとく、「合衆国改革派教会」宣教師グリング並びにモールの活躍によって一八八四（明治十七）年にはグリングにより「元大工町教会」が、翌一八八五（明治十八）年にはモールにより「番町教会」が創

立された。

又、ホーイの来日が間近い頃、押川方義の恩師ジェームズ・H・バラは押川の将来の伝道を見通して押川に対して「日本基督一致教会」への加入を勧めている。当時、押川は押川が希望している学校創立の件で「合衆国改革派教会」のグリングに対し協力を強く要望していたことは既述の通りであるが、その押川に対して「組合教会」はギューリックが、「メソジスト教会」はハリスが、「バプテスト教会」はボートがそれぞれ勧誘の働きかけを行なっていた。そこで「米国改革派教会」のバラが、「合衆国改革派教会」も近々「日本基督一致教会」と協力伝道の方針を採る予定になっていることを説明し、押川が「合衆国改革派教会」の協力を得て学校を創立したい願いを持っていることでもあるなら是非「日本基督一致教会」に加入すべきであると熱心に勧めたのである。当時、バラが押川に送った書翰中に「縦令師は一万ありとも親は一人なり。余は君に授洗せし関係あるを以て君の来りて一致派に投ずるは當然の理なり。且つ来らば新たに宣教師をも派遣すべし。」との文面があり、理義に敏なる押川は他教派の勧誘を拒んでバラの勧めに従うことを決意したと言われる。かくして押川は、一八八五（明治十八）年十一月二十四日から東京京橋厚生館で開催された「日本基督一致教会」第三回大会において、仙台、古川、岩沼、石巻の四教会[註二]を率いて「日本基督一致教会」に加入したのである。第三回大会出席者一同は嘗て「日本基督公会」の朋友であった押川を凱旋将軍の禮を以て迎えたと言われる。この第三回大会では、これら東北の四教会を以て組織した仙台中会に北部中会所属の函館教会を加えて宮城中会を組織した。更に、全国を鎮西中会（西部中会を改称）、浪花中会（中部中会を改称）、宮城中会、第一東京中会（東部中会を改称）、第二東京中会（北部中会を改称）の五中会に組織更えを行なった。この場合、「大会」とは現在

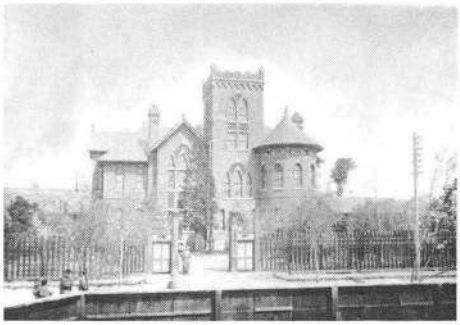


仙台基督一致教會員名簿

で言えば「教団（又は教団総会）」のようなもので、「大会」の下部組織として五つの「中会」、現在で言えば「教区（又は教区総会）」があり、各「中会」の下部に多数の個々の教会があるのであって、個々教会の長老会（役員会）を「小会」と称するのである。

仙台神学校創立

ホーイとグリングが仙台から東京へ戻り、モールとホーイが前記のような書翰を送った後、前述のごとく「合衆国改革派教会」在日宣教師社団（在日伝道局）を正式に組織化することとし、グリングが団長（局長）、モールが財務担当、ホーイが書記担当と役割を分担することにした。一八八六（明治十九）年一月六日付書翰でホーイは外国伝道局総幹事ジョンストン博士に宛てて、「在日宣教師社団が円滑に活動しており、伝道に関する事はすべて会議で審議して最善の判断を行なうことにした。伝道の必要緊急性は日毎に強くなっている。日本中のあらゆるところで伝道を必要とする声が高くなっている。そして誰もがこの大事な時に神の恵みと力とが愈々増し加わる様にと祈っている。私は決して誇張して言うわけではないが十二名乃至十五名の若い宣教師が私と一緒に日本に来れば良かったと考えるほど、日本では多くの人々がキリストの教えを聞きたがっている。この様なわけで、私は日本で伝道できる特権を与えられた喜びで心が燃えあがっている。」「この国で、神の国は力強く大きくなりつつある。伝道は神がなさることであり奇蹟の様に行なわれる。」「私は来る一月十一日、月曜日に東京を発って仙台へ向います。過日、仙台を訪問以来、仙台の人々から一日も早く来任するようにとの催促の書翰を受けたので、私は何の心配もしないで喜んで出発する。」との報告を行なっている。かくして、ホーイは仙台に赴任すると、大町の西端、広瀬川をはさんで真向いに青葉城の大手



仙台神学校校舎

門が見える大橋のたもと、現在市民プールのあるあたり、上仲ノ町六十三番地にあった新築の二階建ての家屋を借りて落着いた。早速、日本語を斎藤秀三郎について学び始めた。（斎藤は、県が一八七一（明治四）年に開設した入学資格が十三歳以上の者となっている英学所「辛未館」に六歳で特別入学し、横尾東作について英語を学んだ後、上京して更に英学を身につけて一八八三（明治十六）年に帰郷し、一八八六年、仙台英語塾を開き英語を教授していた。斎藤はのちに我国で有数の英語学者となり、又、その妹は、のちに宮城女学校に入学する斎藤冬である。）ホーイの同年四月八日付書翰には「神の豊かな恩寵により、私達は間もなく仙台に改革派教会の学校二校――男子校と女子校を持つことになるでしょう。」とあるように、ホーイは押川と協力して学校創立の準備を進め、同年五月十五日、木町通り、北六番丁角の民家を校舎として仙台神学校（東北学院）を創立した。

日本派遣婦人宣教師の送別礼拝　押川方義とウィリアム・E・ホーイとの協力によって仙台神学校が創立され、伝道者希望の六人の生徒を対象に授業が開始されて間もない頃、すなわち一八八六（明治十九）年六月一日（火）の夜、ペンシルヴァニア州ハリスバーグ市のセイラム・リフォームド教会（Salem Reformed Church, Harrisburg）でエリザベス・R・プールボーとメアリー・B・オールトの送別礼拝[註三]が行なわれた。ハリスバーグ市内は勿論、ペンシルヴァニア州内外各地の教会の牧師や教会員が多数出席した。わが国現行讃美歌で言えば、二二〇番、二一四番、四〇三番などが歌われ、聖書は詩篇第六十七篇が朗読された。アレンタウン市聖ヨハネ・リフォームド教会のサムエル・G・ワーグナー牧師の「されば汝ら往きてもろもろの国人を弟子とせよ。」（「マタイによる福音書」第二十八章19）と題する説教のあと、プールボーとオールトは「合衆国改革派教会」外国伝道局長ヴァンホーン博士に紹介されてそれぞれ決意を披瀝する挨拶を行なった。

プールボーは挨拶の中で「私は信仰告白式の際、私の生涯を主イエス・キリストに献げることを誓いました。そして実行すべき事を見つけたら全身全霊をもって取りくむ方針をたてました。私は私達の教会が日本の少女達、婦

人達の教育のための献身者をもとめていることを知った時、それは私をもとめているのだと思いました。私は力足らず信仰弱い者ですが、神がこの大事な任務を私にお与えくださったと信じ、喜んで全力をつくすなら、神は必ず必要な力をお与えくださると考えました。日本の少女達、婦人達が助けをもとめていることを知って私達アメリカの婦人はだまっておられましょうか。アメリカにのこられる婦人達も、日本へ出かける私達もこの重要な働きのために協力しましょう。」と述べ、オールトも「今から十五年前、私が七歳の頃のことです。父と一緒に、インドから帰国した宣教師の話を聞きに行ったことがあります。私は神が私に呼びかけているように思いましたので、帰宅してから、私は宣教師になりたいと両親に話しました。父は神様がきいれてくださるといいねと申しました。私は神が私に呼びかけておられる声がなお一層はっきりきこえるようになったので宣教師になる決心をしました。此の世の中には救主イエスを知らず、偶像礼拝をしている人が沢山居ることを考えると非常に悲しくなります。私達は今から、イエス・キリストの福音に耳を傾けようとしている興味あるしかも決して無学ではない人々の住んでいる国へ出かけようとしています。どうぞ私達の働きのために祈ってください。」と述べている。そのあと、外国伝道局総幹事ジョンストン博士より、日本でキリスト教教育という重要な任務に就くことになるが外国伝道局は二人の活躍のために支援を惜しまないから全力を盡すようにと激励の訓示があった。続いて各教会を代表する四名の牧師と外国伝道局ケルカー財務委員長からそれぞれ送別の言葉が述べられ、はるばるウェスト・ヴァージニア州からかけつけたホファインズ牧師の祝禱で礼拝を閉じた。ハリスバーグ市内の多くの人々や各教会の会員達が二人を囲んで親しく声をかけ、心から激励し、涙を流しつつ別れを惜んだ。このように多くの人々の祈りと激励を受けて、プールボーとオールトは幼い六歳のサラ・キャザリン（愛称キティー）・プールボーを連れて、六月三日朝、ハリスバーグを出発し日本へ向った。

エリザベス（リズィ）・R・プールボー、メアリー・B・オールト、サラ・キャザリン（キティ）・プールボーは

一八八六年六月三日（木）、「アセンション・デー」Ascention Day すなわち「キリスト昇天日」の午前七時四十五分にハリスバーグ発のカンバーランド・ヴァリー鉄道でマーチンスバーグに向った。更にボルチモア・オハイオ鉄道に乗りかえてシンシナチ、セントルイスを経て六月五日（土）午前十時、キャンザスシティーに到着、ここで二日間休養の後、七日（月）午前十時、再び車中の人となり、六月十日（木）午前十一時十分、サンフランシスコに着いた。一行は六月十二日（土）、パシフィック・メイル・スティムシップ社の「シティ・オブ・シドニー」（City of Sydney）号に午前二時に乗船したが、出航直前にオールトが外国伝道局財務委員長ケルカーに宛てて走り書きした葉書[註四]の文面は次の通りである。「ケルカーさん、出発まで数分しかないので数行しか書けません。私達の荷物は全部積みこみ、トランクも持ちこみました。あとは出航を待つばかりです。誰もが皆、私達に親切にしてくれました。さようなら。オールト」と。

プールボーとオールト横浜到着　「シティ・オブ・シドニー」号は約二十日間の航海を終えて七月二日（金）早朝、横浜に入港した。プールボー一行は、グリングの手配で出迎えに来たグランドホテルのボーイに案内されてホテルに落着き、朝食をとった。グリングの横浜着を待つ間、プールボーは彼女の家へ安着を知らせる書翰をしたためた[註五]。この書翰を七月二十六日に受取った家族達は、外国伝道局からの電報でプールボーの日本到着を既に知ってはいたが、プールボー自身が記した書翰を受けとって大いに喜び且つ安心した。妹アニーは早速、外国伝道局財務委員長ケルカーに宛てて書翰を出したが、その中には姉からの書翰の文面をそのまま筆写報告している。宮城女学校初代校長プールボーが日本到着の日に記した書翰、しかも日本からアメリカへ送った最初の書翰[註六]の文面は次の通りである。

"We have just arrived in this city, had our breakfast at the Grand Hotel and hasten to drop a line which can leave by the

Belzic which leaves port in an hour. We had letters written on board ship but as our baggage is not yet rec'd we won't be able to send them in this steamer. Mr. Gring has not yet arrived. I sent him a telegram immediately upon arriving. He sent a runner from this Hotel to meet us on board ship and bring us off. I don't think we will have any trouble. Oh, but it is lovely here! We took breakfast around a little round table bofore a large open window. Immediately under the window is a narrow arm of the bay, which realizes all ones idea of what a bay ought to be and just beyond rises a beautiful wooded hill, through which the railroad passes and the many jinrikisha and coolies standing around. It seems like a picnic in fairy Land. This is a very short letter that all I can write just now."

オールトが七月十日にケルカーに記した書翰には、「長い、陰鬱な船旅の後、七月二日の朝、無事、元気に着きました。プールボーも私もほとんど全航海中船酔いで苦しみました。」とあるところから判断すると恐らく海が荒れて航海を特に長く且つ憂鬱に感じたのかもしれない。

女学校仙台に創設と決定

ところでプールボーらがアメリカを発つ頃までは、女学校創設地は、グリング夫人、モール夫人の要望もあったため、東京の築地と考えられていた。外国伝道局はプールボーに対して、日本到着後、グリングやモールと充分に相談を行ない、又、横浜や東京で出来るだけ多くのキリスト教主義女学校を訪問視察の上、創設地を決定するように指示を与えたようである。なお、プールボーらよりも約半年前に日本に着き、押川の招きに応じて仙台に赴任し、押川と共に仙台神学校を創設していたホーイから、仙台では女学校創設が非常に強く期待されているとの情報が伝わってもいたので、外国伝道局は、もしモール夫妻が伝道拠点を仙台へ移すことを決断してプールボーらと共に仙台へ同行するなら、仙台に女学校を創設することも考えられると判断し、女学校創設地決定の最終判断をプールボーに一任していたようである。

そこで、プールボーとオールトは横浜ではフェリス英和女学校(フェリス女学院)その他の学校を視察ののち、東

京でもグリング宅で過す約十日間にいくつかの女学校を視察した。それぞれの学校で創立当時の諸問題を聴取する予定であったが、七月上旬は丁度期末考査実施時期にあたって授業状況の見学が出来なかったり、又、丁度コレラが流行していて休校中の学校もあったため、所期の目的を果すことが出来なかった。この間に、モールはプールボーとオールトに対して、福沢が創立構想中の女学校の教師になるように勧めたが、グリングはモールの考えには反対であった。そこでプールボーらは、彼女らの赴任地を自分達で決定せざるを得ず、諸状況分析の後、キリスト教教育を行なうことの出来ない福沢の学校よりは仙台に赴任して女学校を創設することの方が大事であると判断し仙台赴任を決断した。このようなプールボーの決断を知らせられてホーイは大いに喜び、丁度プールボーらが仙台に到着しようとしている七月十三日に、外国伝道局総幹事ジョンストン博士へ概要次のような書翰を送っている。「二人の婦人宣教師が無事に日本に着くことが出来、神の導きに対し心から感謝する。当地仙台では婦人の伝道は一番重要なことであるが、私達の女学校がもうすぐ仙台で現実のものとなろうとしているので大変うれしい。アメリカの「合衆国改革派教会」が心から支援してくださるようお願いする。皆様の支援が得られれば女学校はきっと急速に発展するでしょう。仙台の人々は新しい女性観を学び、それぞれの家庭生活の新しい力になることを学ぶでしょう。神よ、仙台の人々のために、此の新しい仕事の上に祝福を与えたまえ！」と。

プールボーとオールト仙台着任

プールボー、オールト、プールボーの姪キャザリンの三名はグリングの案内で横浜から日本郵船の船舶で海路、宮城県荻の浜港へ向った。[註七] 当時はまだ東京仙台間に鉄道が完通していなかったからである。プールボーらの通訳兼助手として、更に又、宮城女学校最初の日本人教師として活躍することになる稲垣ぎん、曲直瀬雪江も同行した。荻の浜にはホーイが出迎えに来ていた。荻の浜で小汽船に乗りかえ塩釜に着き、旅館で小憩の後、塩釜まで出迎えに来た押川の案内で人力車を列ねて仙台へ向った。

プールボーらの乗った蒸汽船の船客中に、のちに宮城女学校に入学する一少女が居った。彼女（早川京子）はそ



上田教會列名傳

れから五十年後の一九三六（昭和十一）年に、当時を回想して「私は大船が荻ノ浜につき、小汽船に乗りかへました時に二人の西洋婦人を見ました。そして其婦人の一人が通辯の日本婦人の名を、ゆきえ（雪江）さんと呼びました時、初めて外国人の言葉を解し大いに満足致しました。其事は心に深く刻まれて忘れる事が出来ません。思ひきや此の二人の婦人こそ宮城女学校創立者（ママ）たるミス・プルボー、ミス・オルトでありました。」と記している。

なお、稲垣ぎん（一八六二〈文久二〉年十一月二十七日生れ。）は、一八七五（明治八）年十二月、押川方義が横浜から新潟のパームの許へ向って信州上田を通過の際、上田で行なった押川のキリスト教講話によってキリスト教にふれ、その後、兄稲垣信（のちの日本基督公会牧師）や稲垣豊子（のちのフェリス英和女学校教師、宮城女学校教師）らと共に横浜に出た。彼女は横浜共立女学校で英語その他を学びつつキリスト教の求道を続け、一八七六（明治九）年八月十三日に洗礼を受けた。それから十年後、偶然にも押川方義が創立しようとしている女学校で教育の任に当ろうとしているプールボーらの通訳兼助手となってプールボーらを助け、同時に又、宮城女学校最初の日本人教師として活躍することになるのであるから、これもまたまことに奇しい神のご計画によるものであろう。[註八]

このようにして、プールボー、オールト、キャザリン・プールボーは一八八六年七月十六日（金）、午後十一時三十分、手に手に提灯を持って仙台市の郊外利府まで出迎えていた多数の教会員に温く歓迎されながら仙台に着き、その夜はホーイ宅（上仲ノ町六十三番地）で旅の疲れを癒したのである。[註九] 彼女らは三日後に彼女らの住居に落着いた。

今、ここで、プールボー並びにオールトが落着いた東四番丁三十五の彼女らの住居で、七月二十九日に外国伝道局財務委員長ケルカー夫妻へ宛てて記した書翰の一部分の概要を紹介し、当時の状況を推察してもらうこととしよ

う。

プールボーはケルカーに宛てて「私達が東京に着いてから、こんなに早く東京を発って仙台に来てしまったことをお知らせするのできっと驚かれるでしょう。モール夫妻が仙台へ移る決心をなさるまでは東京に滞在するようにとのご指示でしたのにそれを無視してしまったことを苦々しく思われるでしょう。私達が東京を発ってしまった理由の第一は、学期末に東京に着いたので、授業状況の見学は出来ず、生徒達が日本語で答案を書いているのを見るだけで何の見学にもならなかったためです。又、丁度コレラが流行していて休校中の学校もありました。私達は非常に多くの学校を訪問して先生達に多くの質問をし、彼等の知っている限りの情報を得ることが出来ました。しかし、私達は、創立当時の苦労談やその他を聞きたかったのですが、それらを話すことの出来る先生達は既に夏休みで東京を離れてしまっていて、私達が東京にこれ以上滞在する必要はないと判断しました。第二の理由は、モール夫妻が仙台へ移る考えを全くもっていなかったこと、そして東京や横浜には創立以来かなりの歴史を持つ学校が沢山あって私達が考えている小さな学校の割りこむ余地がなかったことです。モール氏は私達に、福沢氏が開校を考えている女学校の教師になるようにと勧めましたが、グリング氏はこれに反対でした。そこで私達は私達の責任で仙台に来る決心をしました。フルベッキ博士やアメルマン博士が強力に私達の考えを支持してくださいました。私達は仙台に来ることが最もふさわしいことだと判断しました。仙台に来てみて、非常に多くの人々が非常に熱心に私達の来任を待っていたことを知りうれしく思いました。私達が仙台に着いたのは午後十一時三十分でしたが、仙台市のはずれまで沢山の信者の方々が迎えに来ていて、特に婦人達が目に涙をうかべて胸もさけんばかりの表情で『本当に長いことお待ちしていました。』と声をかけてくれました。私達が仙台に住むようになって数日しかたっていないのに多くの人々が訪ねて来て、我が『合衆国改革派教会』がもっと沢山宣教師を派遣するかどうかを知りたがっています。本当に、もっと伝道者が必要なのです。もし『合衆国改革派教会』が宣教師を派遣出来ないという

ことになれば、他の教派が宣教師を派遣することになるでしょう。そうなれば、我が教会としては希望がもてなくなります。ホーイ氏は本当に生れながらの優れた宣教師であり、グリング氏は非常に親切に私達の仙台居住のための世話をしてくれました。」などと記している。

プールボーらの最初の住居

又、オールトはケルカー夫人に宛てて「私達が住むことになった家は大変住み心地の良いものでありますから、ご安心ください。グリング氏が同行してくれました。グリング夫人は病気で同行できなかったし、モール夫妻は東京を離れるつもりはないとの事でしたので、私達は両夫人に同行してもらうことは出来ませんでした。横浜から荻ノ浜までは快適な船旅でした。海は鏡のように滑らかで、月は満月だったのです。私は夜、甲板上でハンモックに横臥してすごしました。下船してから、私達は十マイルほど田舎道を人力車を連ねて楽しい旅をしました。仙台の郊外まで来ると、沢山の信者達が私達を迎えようとして喜んで待っていましたのでとてもうれしく思いました。私達は新しい住居に落着くまで三日かかりました。寝室が三室、居間、食堂、広間、台所からなる日本家屋です。又、調理人夫妻はカトリックの信者で十一歳の女の子供がいます。毎日沢山の訪問客があり、特に婦人達は誰もが笑顔でやって来て、私達が仙台に来たことを心から歓迎してくれます。私達はここ仙台で大事な働きが出来るように思います。すぐにも始めたいのですが、九月まで待つようにとのことです。オルガンを持って来て本当に良かったと思います。私達は通訳なしでは訪問客と話すことが出来ないので、オルガンで音楽を奏でて客をもてなしています。私達の住居の家主は議会の副議長であって、彼は英語を少しは話すことが出来、又、非常に学びたがっており、又、キリスト教にもいくらか関心があります。彼には十四歳になる聡明な娘が居り私達が始める学校に入学することになるでしょう。彼は、また息子をも入学させたがっていますが、女子だけしか入学できないことを伝えました。私達は毎日、午前中、日本語を勉強しています。最初はグリング氏が先生でありましたが、今は函館のメソジスト系の学校で学んだ雪江さんという婦人から学んでいます。毎週、日曜日の午前には教

会の礼拝に出ています。出席者は勿論、説教者でさえもが床に坐っているのです。室内に入る時には靴を脱がなければなりません。でも、私達のために何時も椅子を用意してくれるので私達は腰かけています。私達の住居は仙台市のほゞ中心にあり、しかも、静かな通りに面しているので、勉強もしやすく、何の心配もありません。」と記している。

首藤陸三

既述のようにプールボーらが仙台に着いた夜は、上仲ノ町六十三番地のホーイ宅でくつろいだ。ホーイはプールボーらのために恰好な住居を決めておいてくれた。それは東四番丁三十五番地にある日本家屋である。南町通りから東四番丁を北に入って少し行った右側（東側）の屋敷である。その家主は、一八八〇（明治十三）年以来宮城県議会議員として活躍し、一八八四（明治十七）年、一八八五（明治十八）年には副議長をつとめた首藤陸三であった。首藤は明治五年以来官吏として新潟、小倉、東京などで英語教育や翻訳関係の分野で活躍ののち、一八七八（明治十一）年に郷里宮城県に帰り、宮城県学務課長兼仙台師範学校長を勤め、一八八〇（明治十三）年には官を辞して政界に進出し、県会議員（四期）、更には衆議院議員（六期）として改進主義を持し、又、地方女子教育のために熱意を示し、宮城女学校創立に当っては、押川を助けて実務的活躍を行ない、又、宮城女学校創立後四年目の一八九〇（明治二十三）年から一八九三（明治二十六）年の間、宮城女学校校主として宮城女学校の基礎確立のために盡力した[註一〇]。このような人物であるので、宮城女学校校長となるプールボー並びにオールトの住居を探していたホーイの話をきいて彼の持家を提供したのであろう。



首藤陸三

開校準備

プールボーもオールトも、仙台で住居がきまりさえすれば、そこで家塾的規模の女学校を簡単に創設できると考えていた。ホーイが準備しておいてくれた首藤陸三の持家は割合に大きな家屋である

ので、そこで少女達や婦人達の教育を始めることが出来ると思っていた。そのことは七月二十九日付のオールトの書翰の中に「居間は広いのでそこで私達の勉強をすることが出来るでしょう。」とあることからも推測できる。ところが現実にはそう簡単でないことに気がつき、押川や首藤の力を借りて県当局との様々の折衝や必要書類の提出などのために予想外の日時を必要とすることになった。そのへんの事情については、プールボーが外国伝道局のケルカーに送った八月二十一日付書翰の中で次のように報告している。

「最近二週間、私たちは学校開設の準備のために色々気を配っています。日本に来てみて私達は万事が想像していたことと非常にちがうことに気づきましたので、これまでの考えを変えなければなりません。私たちは当初は私たちの家でこじんまりとした方法で授業を始めようと思っていました。ところが正式に法律上の認可を得なければ授業を始められないことがわかりました。そのため私たちの教育目的を明記した書類を提出しなければなりませんので、書類作成のために、当局の意向をよく理解している押川牧師や先輩宣教師に助けてもらっています。提出書類の写しを同封いたします。この写しをご覧になっておわかりでしょうが、学校の管理権は教師達と有志者 Ushisha (又は理事会 Board of Trustees) に帰属するということなのですがそのことについてはどうしても納得できませんでしたが、その有志者の権能は単に名義上のことであって、実際には私達外国伝道局所属の教師達の活動には支障がないことであるし、又、これを記載すれば県当局並びに国民に対して私達が法律的に認められた重みを示すことになるのだから記載せざるを得ないということがわかりました。県当局の承認を得た計画だけが将来性があることを考えると、兎に角承認を得ることが絶対に必要です。私達が借りた家は大きなものですが、二十五人乃至三十人以上の生徒たちのための通学学校としてはあまりに小さすぎます。私達は九月十五日に開校し、可成りの数の生徒が入学することを期待しています。私達としては生徒の定員を二十五人とすることに決めました。」と。

ところが、三日後、八月二十四日（火）に、プールボーは外国伝道局総幹事ジョンストン博士にも提出書類全文

の写しを同封して書翰を送っている。この書翰には極めて重要な内容が含まれているので、その全文を次に紹介する。

Higashi Yobancho, Sendai, Japan
Aug. 24, 1886

Dear Dr. Johnston,

I have just finished copying a set of papers, the preparation and submission of which have been demanded of us by the Government before granting us a permit to open a school in Sendai. I send you a copy of the paper for your judgement, if you deem it necessary. The truth of the matter is that the citizens have in a manner taken hold of us and our purpose and moved faster than we had intended ; but as by the laws of Japan we have no right even to be living here without this permit ; we thought best to yield the point. Accordingly this paper sets forth our future purposes rather than present intentions. It has been prepared by Mr. Oshikawa, translated by Mr. Gring, who with Mr. Hoy approved the paper. It seems to me a very simple instrument with, however, an apparently, objectional point or two. First is the Ushisha, I supposed the Board alone would sustain that relation to the school, but the people of Sendai insisted upon the Japanese having an interest in the affair. They wish to look forward to the school becoming self supporting in the future. Then too, it is an almost impossible thing, as you well know, foreigners to do any thing in Japan in their own name. Simple as this paper is there is some considerable trouble in getting it through the different offices. They insisted upon a number of things to which we would not yield ; for inst. They insist upon a Pres. who shall have unlimited control in the school ; then demand that Oshikawa be made Pres. They further decided to divide up the school year and the courses of study to suit their own notions. They insist upon knowing how much money will be paid out for the support of the school ; how many native teachers we intend to employ, what salary they are to have, and a good many other things equally as hard to answer. On these points we have firmly declined gratifying their curiosity for obvious reasons. Indeed ! I thought it impertinent and （不鮮明） rather than otherwise, for them to demand so much from us but Mr. Gring and Mr. Hoy declare that it is only their way and means nothing.

The matter of a Ushisha is I believe considered an advance step. It has been formed in one or two boys' school in Tokio that have been recently organized; but does not exist in any of the girls schools as they were organized at times when Christianity was not popular enough to warrant men of any position going into it.

By this paper you will see that the Christian teaching is not emphasized, further than to approve of the Curriculum. In that however we have given ample room to the teaching of the Bible. We may be obliged to exchange the word Bible for Christian Ethics, as the Government is very shy of authorizing Christianity.

If there is any objection to our method of procedure, this paper can be changed at any time, and we shall be very glad to receive instructions as to what we are to do.

Yours in Christ,
Lizzie R. Poorbaugh

すなわち、女学校創立のため提出をもとめられた書類（「私立学校設置之儀ニ付申請」書）は押川が作成し、その英訳はグリングが行ないその内容はホーイも同意しているものであった。この提出書類の英訳文の写しをプールボーはケルカーやジョンストンへ送ったわけであるが、この提出書類を作成する過程でプールボーとしてはどうしても譲歩したくない点がいくつもあったのであるが、県当局はそのような点についてこそ特に強く要求するので、どこまでも固執して譲歩せぬために創立許可が得られなくなっては困ると判断し、可成りの譲歩を行なわざるを得なかった。それらの譲歩の中でプールボーが特に残念に思った事は教育の目的に関する項での譲歩であった。何度にもおよぶ書きかえを重ねた結果、九月六日に提出した最終回の提出書類においては教旨、すなわち教育の目的に関する規定文中には、「其目的トスル所ハ純全（ママ）タル基督教主義ノ道徳ヲ基トシテ」という表現があるが、折衝の段階で提出した書類においてはその部分が「聖書ノ教ヘニ基ク基督教教育ヲ」と言う表現であった。しかし、県当局としては基督教教育を公認する形で認可をくだすことに対しては引込み思案であって、折衝の最終段階では「聖書」と

いう語を「基督教倫理」とか「基督教主義道徳」という表現に変更することを強く要望した。又、学校の名称についても、当初は「宮城英和女学校」とされていたのであるが、これも最終段階では「宮城女学校」と変更を余儀なくされたのである。これは、当時宮城県には女学校が設置されていなかったので、県当局としては「宮城女学校」という名称を希望したためと言われる。

ブールボーがケルカーやジョンストンへの書翰に同封して送った提出書類の英訳文（写し）の第二章には次のように記されている。

Art. 2. Name, Constitution and Department of School

a. Name. Miyagi Ei Wa Jio Kakko
(Miyagi Eng. Jap. Girls School)

b. Constitution. This institution is founded by a Foreign and Native Christian Ushisha (or supporters) for the purpose of female education. The object of the school is to give a through knowlege of the Elementary Sciences according to the most approved methods of teaching as founded upon pure Christian morality, and to cultivate in the ladies both wisdom and virtue.

c. If there be any persons, foreign or native, who desire to show their approval, or to assist and support the School by money and influence, such will be admitted as members of the Ushiha and from their number will be elected an equal number of Native and foreign members to advise with the faculty on matters of importance concerning the school.

他方、県当局へ九月六日に提出した最終提出書類中の同一箇所には次のように記されている。

名称及教旨

一、本校ヲ宮城女学校ト称ス可シ

一、本校ハ女生徒教育ノ為ニ内外基督信徒有志者ノ創設スル所ニシテ其目的トスル所ハ純全(ママ)タル基督教主義ノ道徳ヲ基トシ最良ノ方法ヲ以テ高等普通ノ学課ヲ女子ニ授ケ善良有智ノ婦人ヲ養成シ以テ女子タルニ愧ツルナカラシメントスルニアリ

一、本校創設ノ挙ヲ賛助シ之レカ為メ應分ノ損金ヲ為ス所ノ有志者ハ其人ノ内外人タルヲ問ハス均シク之ヲ厚待シ漸々其内ヨリ六名（内人三名、外人三名）ノ協議員ナル者ヲ撰ヒ校中貴重ナル事件ヲ商議セシム　と。

プールボーは一日も早く創立の許可を得たく、押川、ホーイ、グリング、首藤と共に連日、県当局との折衝や申請書類の整備作成に熱心にとり組んだ。

設立参画者　宮城女学校創立にあたり、創立認可のために心血を注いで奔走した人物は一体誰であろうか。

一、「私立宮城女学校一覧」（明治四十四年十月二十五日、創立第二十五年紀(ママ)念刊行）には「創立委員トシテ創立ノ事務ニ鞅掌セラレタルハダブルユー・イー・ホーイ、ゼー・ピー・モール、押川方義、首藤陸三、藤生金六ノ五氏ナリトス」とあり、

二、「宮城女学校五十周年史」（昭和十一年十二月二十三日発行）には「政府の記録によると公式の開設者はモーア、ホーイ、L・R・プールボー、首藤陸三、押川方義の諸氏になってゐる。」とあり、

三、「宮城学院七十年史」（昭和三十一年八月七日発行）には「当時の記録によると、開設者はJ・P・モーア、W・E・ホーイ、ミス・プールボー、押川方義、首藤陸三、藤生金六の六氏である。」とあり、

四、「宮城学院八十年小誌」（昭和四十一年十月三十一日発行）には、「宮城女学校の設立に参画した人々は合衆国改革派外国伝道局のホーイ、モール、邦人側の押川方義、藤生金六、首藤陸三氏である。」とある。

しかし、一八八五年十二月一日、ホーイ来日以後、一八八六年九月十八日、宮城女学校の「私立学校設置之儀ニ

付申請」認可までの間の「合衆国改革派教会」外国伝道局関係者諸書類並びにホーイ、ブールボー、オールト、グリング、モールの諸書翰を通して判断すると、創立のために活躍した人物は、押川、ホーイ、グリング、ブールボー、オールト、首藤の六名であり、又、側面から応援した人物は「米国改革派教会」宣教師バラ、フルベッキ、アメルマンである。勿論、モールは在日宣教師社団（在日伝道局）の財務担当であったが、モール自身としては「合衆国改革派教会」の日本における伝道活動は東京に拠点（在日宣教師社団）を置いて東京並びにその近県を伝道地域とすべきであるという意見をもっており、ブールボーやオールトも東京に留って女子教育に当るべきと考えていて、その点ではグリングと意見が一致しなかったわけである。一八八六年八月六日にホーイが外国伝道局総幹事ジョンストン博士に送った書翰中に「モールが『外国伝道局が私に対して東京から仙台へ移るようにと指示して来たが、私はその指示を積極的に拒絶すると返事を出した。』と知らせて来た。」と記している。この事はモールが仙台に赴任する意志がないことを示している。したがってモールが仙台で、直接、宮城女学校創立の諸準備に専念したことはないようである。

又、藤生金六は、一八八四（明治十七）年九月から一八八六（明治十九）年八月までは横浜ヘラルド新聞記者として横浜に在住し、一八八六年九月から一八九一（明治二十一）年七月までの間は福島日本基督一致教会の牧師であった。したがって宮城女学校創立諸準備が進められていた一八八六年七月から同年九月に至るまでの期間に仙台に居住してはいなかったので、モール同様、直接、宮城女学校創立の諸準備に専念したとは思われない。

このようにしている間にも、新しく創立されようとしている女学校に入学を希望する者が相当に居ることがわかり、東四番丁の住居で授業を行なうことは無理であると考え、校舎とするに好適の家屋を探した結果、東二番丁五十一番地に県会議員田辺繁久所有の恰好な二階建の家屋を見つけ、ここを仮校舎として授業を始めることとし、八月六日に借りることが出来た。したがって県当局への提出書類には、学校の位置は「東二番丁五拾一番地」と記入

した。八月七日付のオールトの書翰には「昨日、校舎にするにふさわしい家屋を借りました。新しい建物で此の町の交通の便の良い場所に位置しています。今すぐにでも授業を始めたいと思う程ですが、すべての準備が完了するのに数週間は必要でしょう。日本で一番良い女学校であるフェリス英和女学校（Ferris Seminary）で使用している教科書のカタログをとりよせました。私達の学校が好評を得るためには、最上の教育方法でしかも最上の教科書を用いて授業を行なう必要があります。何故なら、日本人は良いものを見分けることが出来るからです。私達の学校での宗教教育は全く聖書的なものとなるでしょう。」と記されている。

宮城女学校創立

このようにして諸準備のためについやされた日数は、仙台到着の日から数えて五十日にも達してしまった。しかし漸くのことで、九月六日に申請書類を提出することが出来た。ところが提出後十日過ぎても認可の通知がないので痺れをきらしたオールトは九月十七日にケルカーに書翰を送り、その中で「私は、念願であった女子教育をもうすぐ開始できるという状態で、今、日本に居ります。仙台の婦人達が希望を持つことが出来るようになれる教育に携わることが出来るということは何と光栄なことでしょう。私達は九月十五日には開校したいと考えていたのですが、その日までには当局の認可書を手にすることが出来ませんでした。県知事の認可印が得られさえすれば良いのです。でも私達は忍耐強く待たなければなりません。此の日本という国では何事でも速やかには進捗しないという事を知って忍耐強く待つことが宣教師にとっての一つの試練なのです。」と記している。日本に着いたら一日も早く女子教育を始めたいと考えていたプールボーやオールトにとっては約二カ月間も忍耐強く待ったのであるからさぞかし長く感じたことであろう。県当局は、事務折衝の段階で諸種の書類の提出を要求したが、設置申請者押川方義から提出された申請書を受理しては見たものの、プールボー、オールト二名の外国人を教員とする私立女学校の創立を認可すべきか否かを決定しかねたのである。そこで県の芳賀学務課長は九月八日、文部省中川視学官に「シリツガクコウニワガクニノメンキョジョウヲモタヌグワイコクジンヲキョウイン

トシテサシツカエナキヤスグヲシメシヲコフ」と打電し、文部省の指示を乞うた。これに対し文部省は翌九月九日、「シリツガクコウニグワイコクジンヤトヒイレノケンハソクコンニオヰテハサシツカヘナシ」と返電した。かくして、一八八六年九月十八日に松平正直宮城県知事によって宮城女学校の設置は認可され、此の日を以て宮城女学校が創立されたのである。設置者すなわち校主は押川方義である。これは、一八九九（明治三十二）年までは外国人が設置者、校主となることは許されなかったからである。したがって押川の後も、首藤陸三、橋本経光などが校主となっている。


明治〇年 送達紙

文部省よりの返電

設置申請書類　宮城女学校の創立が認可された際の設置申請書を次に紹介する。

設置申請書類

I.　私立学校設置之儀ニ付申請

一、設置目的

別冊名称編制及校旨ノ部ニ記載ス

一、位　置

東二番町五拾一番地

一、名　称

宮城女学校

一、教員等職務心得

別冊教員及職員ノ本務条款ニ記載ス

一、教員等姓名併俸給

無月俸　レゼ・アール・ブルボー　三十一年

同　メレ・ビ・オルト　二十二年

一、教員学力品行

別ニ履歴書及保証書ヲ添フ

一、校舎及敷地

借舎

一、就学生徒員見込

当分弐拾五名

一、授業料

一ヶ月金五拾銭

一、学費収入支出

歳入之部

合金　六百円

内

金　百五拾円　授業料

金　弐拾五円　束脩

金　四百弐拾五円　有志損金

歳出之部

合金　六百円

内

金　百武拾円　借家料

金　三百円　書籍及器具費

金　六拾円　諸営繕費

金　四拾八円　薪炭油費

金　七拾弐円　諸雑費

右ハ前書設置目的ノ次第ニ因リ今般宮城女学校設置仕度別冊教則等相添へ此段申請候也

仙台区支倉町拾八番地寄留

愛媛県士族

明治十九年九月六日　押川方義㊞

宮城県知事松平正直殿

前書之通相違無之ニ因リ奥書候也

明治十九年九月七日　仙台区長十文字信介㊞

II. 履歴書 (一)

一、生国名　ペンソルベニア

一、生年月日

一、姓名　レゼ・アール・ブルボー

一、現今所属国名　ペンソルベニア

一、学業

卒業セシ校名　ペンソルベニア・ヨークハイスクール

卒業セシ学科

一、職業

履歴書 (二)

一、生国名　レゼ・アール・ブルボー

一、生年月

一、姓名　ペンソルベニア

一、現今所属国名　メレ・ビ・オルト

一、学業　ペンソルベニア

卒業セシ校名　高等中学師範学科

卒業セシ学科　ペンソルベニア州ノキストンステット師範学校

一、職業

メレ・ビ・オルト

III. 品行保証書

亜米利加合衆国ペンソルベニア　レゼ・アール・ブルボー

亜米利加合衆国ペンソルベニア　メレ・オルト

右者従来品行端正ニテ学事条例第六章第十一条ノ各款ニ触候義等無之依テ証書差出候也

宮城県仙台区支倉丁十八番地寄留愛媛県士族

押川方義

前書之通相違無之ニ因リ奥書候也

明治十九年九月七日　仙台区長　十文字信介 印

IV. 私立女学校規則

〔一〕教員及職員

教授　二名

助教　未定

校長　レゼ・アール・ブルボー

幹事　未定

〔二〕教員及職員ノ本務

一　校長ハ本校ニ関スル一切ノ事務ヲ総理ス

一　教員ハ本校ノ学則ニ従ヒ諸学課ヲ教授シ生徒ノ勤惰ヲ督シ其品格ヲ高潔ナラシメ生徒ノ試業ヲ施行スル等学事ノ庶務ニ任ス

一　幹事ハ校長ノ指揮ニ従ヒ専ラ講堂ヲ整理シ生徒ノ品行ヲ監査シ不正ノ行状ヲナシ校内ノ紊乱ヲ醸ス等ノ者アルトキハ之ヲ校長ニ報道スル等一切ノ雑務ヲ司ル可シ

〔三〕名称及教旨

一　本校ヲ宮城女学校ト称ス可シ

一　本校ハ女生徒教育ノ為ニ内外基督信徒有志者ノ創設スル所ニシテ其目的トスル所ハ純全（ママ）タル基督教主義ノ道徳ヲ基トシ最良ノ方法ヲ以テ高等普通ノ学課ヲ女子ニ授ケ善良有智ノ婦人ヲ養成シ以テ女子タルニ愧ツルナカラシメントスルニアリ

一　本校創設ノ挙ヲ賛助シ之レカ為メ応分ノ損金ヲ為ス所ノ有志者ハ其人ノ内外人タルヲ問ハス均シク之ヲ厚待シ漸々其内ヨリ六名（内人三名外人三名）ノ協議員ナル者ヲ撰ヒ校中貴重ナル事件ヲ商議セシム

一　本校学科ヲ豫科本科ノ二科ニ分ケ豫科ハ三ケ年本科ハ四ケ年ト定ム

一　豫科ハ将来本科ヲ修メント欲スル者ノ為メ予備学科ヲ授クル所ニシテ予科課表ニ示ス所ノ諸学科ヲ教授スル者（ママ）トス

一　本科ハ英書英語等和漢ノ文書等本科課表ニ示ス所ノ学科ヲ教授スル者（ママ）トス

〔四〕校則

一　豫科生徒ハ小学尋常科ヲ卒業セシ者カ之ト同格ノ学力ヲ有スル者ニ限ル可シ

一　本科生徒ハ豫科ヲ卒業セシ者カ之ト同格ノ学力ヲ有スル者ニ限ル可シ

一　生徒ハ身元確実ナル引受人アル者ニ限ル可シ

一　通学生ハ毎月金五拾銭ノ受（ママ）業料ヲ毎月一日幹事ニ迄納ム可シ

一　入学ノ節束脩金壱円ヲ納ム可シ

一　生徒ハ諸規則ヲ遵守シ其身体ヲ清潔ニシテ粗暴ノ行状ヲ為サス長上師傅ヲ蔑如セス猥褻ノ言語ヲ吐カス互ニ友誼ヲ厚クシ自己ノ品性ヲ高尚ニシ質素倹約ノ風ヲ養成シ学事ヲ勉励ス可シ

一　生徒募集ノ期ハ毎学期ノ初トス

但シ臨時入学ヲ乞フ者アル時ハ校中ノ都合ニヨリ試撿（ママ）ノ上許ス事アル可シ

〔五〕

試　業

一　試業ニ大小二種ノ試撿アリ小試撿ハ第一第二期ノ末ニ於テ毎期之ヲ施行シ大試撿ハ毎年第三期ノ末ニ於テ之ヲ施行ス

但シ試撿ノ時ハ生徒ノ父兄親戚朋友ハ参観随意タル可シ

一　生徒平常ノ勤惰及試業ノ優劣ハ試撿後ニ其父兄若シク証人ニ向ケ報ス可シ

一　毎期ノ平常点及試撿ノ点数ヲ合シテ七十五点ヨリ少ナカラス百点迄ノ平均教ヲ獲タル生徒ハ及第シ此点数ニ及ハサル生徒ハ次ノ級ニ降点セラル可シ

〔六〕

教　則

一　各科共卒業生徒ニハ卒業証書ヲ與フ可シ

一　卒業生徒中優等ノ者ハ之ヲ撰抜シテ助教トナシ漸次教授ノ規模ヲ擴ムヘシ

一　壹ケ年ヲ以テ三期トナシ三期ヲ以テ一課ノ卒業トス

第壹期ハ九月一日ヨリ十二月廿日ニ至ル貳期ハ一月八日ヨリ四月八日ニ至ル三期ハ四月十五日ヨリ七月十五日ニ至ル

一　授業時間ハ五時間ニシテ午前八時ヨリ午後二時迄トシ生徒ハ授業時間前ニ教場ニ會シ道徳上ノ講説ヲ聞クヲ要ス

但シ授業時間ハ日ノ長短ニ依リ変更スル事アル可シ

一　生徒事故アリテ欠席スル時ハ其事情ヲ認メタル引受人ノ證印アル届書ヲ幹事ニ迫差出ス可シ

一　授業時間中ハ教員ノ許可ヲ経スシテ妄リニ教場ヲ出ル可ラス

一　休日ハ天長節（十一月三日）新嘗祭（十一月廿三日）孝明天皇祭（一月卅日）紀元節（二月十一日）神武天皇祭（四月三日）冬季休業（十二月廿五日ヨリ一月六日マデ）夏季休業（七月十六日ヨリ八月三十一日マデ）ト定ム

〔七〕

入校及退校

一　本校ノ諸規則ニ従ヒ入学ヲ求ムル者ハ入校試撿ヲ受クルヲ要ス

一　入学ノ節ハ身分確実ナル者ヲ以テ證人ト為シ其保証書を携へ来校ス可シ

保證書雛形

何府県何国何已郡何町村何番地
何府県華士族平民何之誰女妹厄介
何之誰
明治何年何月生
何年何ケ月

一　右之者今般貴校へ入校、入学相願候上ハ御規則等堅ク為相守可申ハ勿論當人ノ身上一切ノ事件ハ拙者引受卒業期限中

妄リニ退学為致間敷若シ止ヲ得ス退校ノ節ハ拙者罷出事実
陳述仕御断可申上候依テ證書如件

何府県華士族平民
何之誰印
宿所

宮城女学校長ブールボー殿

〔八〕

附　則

一　教科用書ハ校長教員ノ見込ニ依テ変更スル事アル可シ

一　本校ハ未タ創業ノ際ナレハ当分ノ内皆通学生ノミノ入学ヲ許スト雖モ本校ノ事務ノ漸ク端緒ニ就クヲ待チ寄宿舎ヲ設ケ生徒ノ寄宿ヲ許ス可シ尚ホ詳細ノ事項ヲ知ラント欲セハ仙台支倉町十八番地押川方義方ニ来訪アレ遠隔ノ地ニアル諸君ハ書信ヲ往復スルモ妨ナシ

V. 宮城女学校教科課程表

預〔ママ〕科第三年

課目		第一期	第二期	第三期
文学	和漢	十八史略作文習字、地理	同上	同上
	英	音読訳読習字書取文法地理	同上	同上
学術		算術単比例	同上	同上
雑科		唱歌裁縫畫学體操	同上	同上
聖書		新旧約書	同上	同上

本科第一年

課目		第一期	第二期	第三期
文学	和漢	十八史略作文・習字	同上	同上文法
	英	作文習字会話合衆国史言語分析法	同上	同上英国史
学術		代数学	生理学	同上
雑科		唱歌裁縫畫学音楽	同上	同上
聖書		新旧約書	同上	同上

本科第二年

課目		第一期	第二期	第三期
文学	和漢	十八史略作文日本文典習字	作文習字日本外史日本文典	日本外史作文元明清史略習字
	英	作文修辞英国史	萬国史	文法修辞
学術		代数学・生理学	同上	同上
雑科		唱歌裁縫畫学音楽	同上	同上
聖書		新旧約書	同上	同上

本科第三年

課目		第一期	第二期	第三期
文学	和漢	日本外史作文 元明清史略習字	作文習字 日本外史土佐日記	春秋左伝作文 文章軌範習字
	英	万国史文法 修辞	英詩 文明史	英詩抄読
学術		植物学	道徳学	同上
雑科		唱歌裁縫 畫学音楽	同上	同上
聖書		新旧約書	同上	同上

本科第四年

課目		第一期	第二期	第三期
文学	和漢	春秋左伝作文習字 和文抄読文章軌範	同上	復習
	英	英詩抄読	同上	復習
学術		心理学	論理学	復習
雑科		裁縫畫学 唱歌音楽	同上	復習
聖書		新旧約書	同上	復習

宮城女学校開校

創立が認可されて十日後の九月二十八日(火)、ブールボーはケルカーに宛て授業開始の様子を報告している。その概要は次の通りである。

「私たちの住居ではとても収容しきれないほど生徒数が多くなりそうなので、一カ月十円の家賃で一軒の家屋を借り、先週金曜日(九月二十四日)から授業を始めました。最初、生徒数は十名でしたが現在は十六名になっています。明日から年少者十名でもう一組を編成してオールトが教えることにします。クリスチャンはほんの数名しかおりません。私たちの影響で、生徒たちが毎日曜日、教会の礼拝に出席するようになりました。当分、私達は英語だけを教えます。漢文の授業がないので失望している生徒もいます。遠からず大きな学校になりそうな気がします。それ故、どういう学校にしたら良いかを目下慎重に検討中です。誰もが公立学校よりも知識水準の高い教育をして欲しいと願っています。しかしそのためには教科書、設備、備品などすべて最善のものを備えなければなりません。日本人は子女の教育の重要性を理解しています。私達がハリスバーグを発つ前にあなたもクーンズ氏も、学校を始め

る時にはアメリカ式の机や椅子を備えるようにと仰言いました。日本に着いた時、グリング氏は、日本では生徒がそれぞれ自分の座机を準備するのが習慣になっていると助言してくださいましたので私は初年度の学校運営費予算作成に当り備品費は十ドルしか計上しませんでした。しかし仙台に来て女学校創立の準備を始めてみると私達の学校を洋風建築にしなければ多くの人々が関心を持たなくなる事に気づきました。そこで、予算の関係上、大変質素なものですがこちらの公立学校に備えられているものと同種のものを購入しましたし、又、寒さにそなえてストーブをも購入しなければならないので備品費の支出が四十ドルになってしまいます。備品費予算額を修正していただけませんか。校舎建築の時のためフェリス英和女学校の設計図や写真を送って欲しいとグリング氏にお願いしました。私達は生徒に倫理学や諸学科だけでなく家庭を立派に管理するのに必要な家庭的諸知識をも教授したいと考えています。」

従来、宮城女学校は六名又は八名の生徒と二人（又は四人――この場合は、外国人二人と日本人二人）の女教師で九月二十五日に東二番丁五十一の田辺繁久氏宅で授業を開始したと伝えられていたが、それは、創立後三十三年経過した一九一九年（大正八）年四月に記されたプールボー（当時はコート夫人）並にオールト（当時はホーイ夫人）それぞれの回想記並びに創立後五十年の一九三六（昭和十一）年に記された稲垣秋香（最初の日本人教師稲垣ぎん）並に武藤ゆき（最初の卒業生関屋ゆき）・岸波せき（第三回卒業生竹内せき）・堂本まつえ（最初の入学生で第二年目に転出の宇野まつえ）の追想記などによって記されたものであった。しかし、創立直前並びに直後に記されたホーイ、プールボー、オールトの諸書翰や報告書並びに県へ提出の申請書をもとにして判断すれば、一八八六年七月十六日午後十一時三十分頃仙台に着いたプールボーとオールト（並びにキティー）は三日後に落着いた住居、東四番丁三十五の首藤陸三所有の家屋で授業を開始しようと考えたが、入学希望者が予想以上に多かったことなどにより八月六日に借りたもう一軒の日本家屋、東二番丁五十一の田辺繁久所有の二階建家屋を仮校舎として校長

プールボー並びにオールトの二名の教師で稲垣ぎん、曲直瀬雪江を助教として十人の生徒で授業を開始したという方が正確であろう。授業開始四日後の九月二十八日には生徒数は十六名、更に十月十五日には二十四名と増加し、入学希望者があとをたたなかった。しかし、予想外の速度で生徒数が増加するので、教室、設備、教具、教科書が充分でなくプールボーもオールトも非常に困惑した。彼女らは外国伝道局へ次々に開校直後の様子、苦悩、要望などを報告している。十月十五日（金）、オールトは外国伝道局総幹事ジョンストン博士に長文の書翰を送っているが、その中に次のような文面がある。

「生徒数が増加するので元気づけられます。現在、生徒は二十四人ですが、今日も入学希望者があることがわかりました。しかし、教室はいっぱいでこれ以上受けいれられません。当地に来るまでは、私達自身の校舎を必要とするようになるのは数年先のことと考えていました。事情が全くちがうのでおどろいています。立派な教育を行なうには資金が必要です。又、少なくとも二人の日本人教師が必要です。今、特に必要なのは漢文の男子教師です。この状況では、私達は来春には校舎建築に着手しなければなりません。秋の新学期に間にあわせようとお考えになりませんか。先週来訪の横浜のルーミス氏の話によれば私達は校舎を持つべきであり、四千円乃至三千ドルあれば可成り立派な校舎を建てられるだろうとのことです。現在仮校舎としている日本家屋で授業を続けていることには問題があります。窓はガラスでなくて障子なので、光線が充分に入らず暗いので目を無理に使うことになります。暖房にも悩んでいます。火鉢の炭火から出る悪い臭が健康上、良くありません。家主はストーブを使うことを好みません。それは壁に煙突を通す孔をあけることになるからです。しかし、このようなことは私達にとってそれほどの悩みではありません。私達にとっての大きな悩みは入学希望者を受け入れられる校舎を持たないことです。福島で牧会中の吉田亀太郎牧師から、福島に宮城女学校入学希望者が数人居るとの書翰を受けとりましたが、一人も受け入れられないと返事を出せばどんなに大きな失望を与えることになるでしょう。アメリカの母教会の方々が、日本

の人々が必要としているものに気づかないので、日本の人々がいつまでも真の神を知らず、偶像礼拝という古い生き方にとどまっているのです。悲しいことです。母教会の皆さん、今こそたちあがるべき時です。会衆派（組合派）教会の信者達が、今週月曜日（十月十一日）に百二十人の生徒で男子校（東華学校）を開校しました。今月末までにはアメリカから宣教師二家族がこの学校のために着任する予定とのことです。バプテスト派の婦人宣教師も一人着任とのことです。私達の教派（「合衆国改革派教会」）も是非、私達の学校で日本語の教科を何教科か持てるようにしなければなれません。宮城県知事の令嬢とその友人数人が入学を希望して来ました。しかし、現在のままの私達の学校ではジョーンズ夫人の学校と同じ程度の教育しか受けられないことに気がつき、今まで通りジョーンズ夫人のところで勉強を続けるとのことです。もし私達が校舎を所有するようになれば在校生全員が寄宿舎生になれるようにしたいと思います。そうなれば四六時中生徒達が私達の監督下にいることになり、どんなに好都合でしょう。私達は毎週日曜日の午後、生徒達を私達の家に招き、聖書の話をし、讃美歌を歌い、祈禱をささげる会を開いています。丁度、日曜学校のようなもので、全部、日本語で行なわれますから私達は通訳に助けてもらっています。私達の住居はとても快適ですし、又、仕事も興味をもって進めています。ジョンストン博士とケルカーさんとに是非一度見に来ていただきたいのです。私達の書翰を通してだけでは私達の考えをよく理解できないでしょうから。」

このように宮城女学校入学希望者が増加して来ると、創立後、一ヵ月も経たぬうちに校舎の必要を痛感するに至った。仮校舎とした日本家屋は、洋風生活をおくっていた宣教師達から見れば、日光が充分に入らず、隙間風が入り、暖房設備も不充分で、健康上も良くないと考えられた。そのような時、既に発足していた仙台神学校が着々と体制をととのえ内容を充実しつつあり、又、富田鉄之助、松倉恂らによって準備が進められて来た東華学校が創設され、校長新島襄、副校長市原盛宏を中心にジョン・H・デフォレスト（John Hyde DeForest 1844-1911）他の外国人宣教師も加わって教職陣容もととのって授業が開始されると、プールボーは宮城女学校の校舎建築の緊急性をなお一

層強く意識するようになり、オールトと共にホーイや押川に将来的展望に基く現実的計画を説明し、外国伝道局へ何度にもわたり校舎建築の必要を訴えた。ホーイもまた十月十六日付の書翰で「外国伝道局は是非、プールボーとオールトの願いをききいれてほしい。校舎も校具も備品も欲しい。換気も採光も不十分で、暖房設備もないような日本家屋でいつまでも授業を続けることは婦人達の健康に良くない。一日も早く校舎を建てた方が、今のように婦人宣教師住宅と仮校舎との二軒分の家賃として毎月三十ドルを支払い続けて行くよりは遙かに経済的である。私は、プールボーとオールトの願いを外国伝道局が叶えてくれるようにと真剣にお願いする。仙台には仙台市民と『アメリカン・ボード』との管理のもとに去る十月十一日キリスト教主義男子校（東華学校）が開校した。仙台に来た『アメリカン・ボード』の宣教師たちは気持の良い方々です。」と記している。

東華学校

ここで一応東華学校創立に至る経過に若干ふれておく。それは仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校（宮城学院）の創立者押川方義並びにホーイの真剣な祈りを導き給う神の奇しい恵みに思いをいたすことが出来るからである。仙台藩士富田鉄之助は幕末に江戸に出て蘭学並びに西洋砲術を、更に勝海舟の氷川塾で航海術を修めたが、一八六七（慶応三）年藩命によりアメリカに留学した。明治維新後にも政府留学生として再度渡米し研鑽をつんだが、岩倉遣欧使節渡米の際岩倉具視にみとめられ、一八七三（明治六）年ニューヨーク副領事となり、更にロンドン在勤など外交畑で活躍したが、一八八一（明治十四）年帰国後は、日本銀行副総裁を経て一八八八（明治二十一）年総裁に就任した。彼は帰国直後、郷里宮城県の人材育成に意を用い種々力をつくしたが、アメリカ滞在中に親しくなった新島襄が一八八五（明治十八）年来、仙台に男子校創立の計画を持っていることを知り、計画実現のため積極的に応援を行なった。時あたかも、押川方義が仙台に男子校創設の計画を持ち、「合衆国改革派教会」に協力を求めている頃であった。特に同年十二月、ホーイ来日後は押川、ホーイが協力して仙台に男子校創設のため県当局とも折衝を行ないつつ準備を進めていた。かくして押川、新島両者が競争相手の立場

におかれた。翌一八八六年二月十七日、富田は新島に宛てた書翰で、富田が新島の学校設立計画の件で松平正直宮城県知事と面談の際、松平から押川も男子校創立の計画をもち準備中との話をきいたので、新島と押川とで面談すべきである旨を記した。富田も松平も共にクリスチャンではないので、押川が「日本基督一致教会」派であり、新島が「日本組合教会」派であることの理解はなく、ただ単にキリスト教主義男子校が二校も仙台に創立される必要はないと考えていた。ところで、新島が押川と面談の際、押川は新島に対し超教派で両者合同しての男子校創立を提案したが、新島はアメリカから「アメリカン・ボード」の宣教師の資格で帰国しているので教派の籬を取りはずすことが出来なかった。仙台に一校だけの創立を認めることになれば、富田日銀副総裁、松平宮城県知事が応援する新島の方が有利な立場になった。押川が県当局に男子校設置に関して折衝した際にも、松平県知事は仙台に同種の学校を二校置く必要はないとして新島の願出のみを認める方針を示した。その結果、押川と新島は別々の学校を創立するという紳士協定で問題を解決し、押川は伝道者養成専門の学校として仙台神学校を同年五月十五日に仙台区木町通北六番丁角に、新島は男子中等普通教育の学校として宮城英学校を同年九月二十一日に仙台区清水小路九番地にそれぞれ創立した。宮城英学校は同年十月十一日に開校式を行ない、翌一八八七（明治二十）年寄宿舎、校舎、本館の新築完成後、六月十七日に献堂式を挙行し、校名を東華学校と改称し、理事会（東華義会）の理事長には松平知事が就任した。学校の発展に伴い主幹を置くことになり片桐清治が着任したが、一八八九（明治二十二）年二月十一日、大日本帝国憲法発布の頃より日本国内ではキリスト教に対する国民感情が冷却化して来た。東華学校では此の年の秋に副校長市原盛宏が留学のため渡米し、又、校長新島は翌一八九〇（明治二十三）年一月に天に召され、外国人宣教師以外には理事中にクリスチャンがいないため、時代の影響により諸規則なども次第に改変された。学科内容においても聖書科が自由出席教科となり、更には一八九一（明治二十四）年七月に、教科目から聖書科が削除されてしまった。かくなるとデフォレストをはじめとして宣教師全員が宗教教育を行なうことの出来ない

学校に留る必要はないとして辞職し、又、この間、同年三月に理事長松平県知事も熊本県知事へ転出し、理事長、校長、副校長の重要人物三名を欠いたため東華学校は衰退の歩みをはやめ、一八九二（明治二十五）年三月には廃校されてしまった。当時、改正中学校令によって創立された宮城県尋常中学校は、廃校になった東華学校の校地、校舎をそのまま譲り受けて使用し、東華学校生徒中の相当数も入学した。又、東華学校生徒中には、山梨勝之進（のちの海軍大将、学習院長）や栗原基（のちの旧制三高教授）などをはじめとしてキリスト教的影響を受けていた者相当数が、前年秋に開校された東北学院に転入学した。六年前に新島の英学校（東華学校）のみが創立を認められることになった際、押川は止むを得ず英学校創立を断念してキリスト教の伝道者養成のみを目的とした仙台神学校の教育に全身全霊を傾けることとしてホーイと共に精魂を傾けたのであるが、その仙台神学校が発展して東北学院となって開校されたのである。キリスト教教育の精神を失ってしまった東華学校が廃校への道を辿り、キリスト教伝道者養成に力を注いだ仙台神学校が東北学院へと発展し、東華学校生徒中の多数の者をも収容して更にキリスト教教育を続けるに至ったことを思えば神の奇しき導きを思わざるを得ない。

校舎新築必要の訴え

さて、話をもとに戻してプールボー、オールトのみならずホーイからも宮城女学校の校舎新築の必要を訴える書翰を次々と受けても、外国伝道局としてはそれに直ちに応ずることが出来るほど余裕のある財政状態では無かったので、プールボーらは満足できる返信を得られなかった。そこで、ホーイは、グリング並びにモールの同意をも得て、十一月四日に外国伝道局総幹事ジョンストン博士に宛て次のような書翰を送った。

Sendai, Japan, Nov. 4, 1886

To the Executive Committee of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United

States: Rev. T. S. Johnston, D.D., Secrtary.

Dear Brethren:

It being inconvenient and expensive to hold a Mission meeting at this time, and yet certain matters pertaining to the Girls' School in Sendai calling for careful consideration, the judgement of the Mission has been ascertained by correspondence, and we respectfully ask you to take action on the following points:

1. The Girls' School of Sendai opened by the Mission and taught by Miss Lizzie R. Poorbugh and Miss Mary B. Ault and their native helpers, is steadily growing and humanly speaking the outlook for the future is encouraging. The Japanese buildings available to us for school purposes are not at all suited to the wants of the Ladies and their pupils. General inconvenience, bad air and worse light and lack of proper arrangements for heating are difficulties with which it is not wise, in the serious matter of health in a strange clime, that the Ladies should contend long. It is plain that suitable buildings are needed.

2. Before we proceed to build, we must purchase land. A building lot should be bought now. If we delay, we shall have to pay for want of promptness. The price of land in Sendai has a little more than doubled since January of 1886. The railroad, and the Treaty Revision now in process, have produced a wonderful change in business affairs. It is thought by many that building lots will continue to rise in value for some years to come yet. Hence the financial gain to buy now.

3. A desirable lot, near the Ladies present home, and convenient to the heart of the city (a point concerning which the Japanese are very particular in school matters), containing between two and a half and three acres, can be bought now for about eleven hundred dollars American Gold. This would answer for the school, and for one or two missionary homes whenever these latter can be provided. We ought to buy this lot as soon as you can give us the necessary permission and authority. Delay will cost money.

4. It has been the universal experience of missionaries that it is unwise and exceedingly imprudent to live long in a Japanese house. There is too much exposure and too much risk incurred in the point of health. You can appreciate this when you know that there is only a thin rice paper between you and the elements.

5. It is the sense of the Mission, that, for the continued well-being of the Girls' School and for the preservation of the health of the Ladies, we should erect some suitable buildings before the beginning of another scholastic year. Well begun is well done.

Plans, designs, etc., are being made and will be forwarded as soon as fully prepared.

6. Don't fail to buy land at once.

In the interest of our holy cause we beg your earnest deliberation upon the above points.

Respectfully submitted,

W.E. Hoy, Secretary

A.D. Dring

J.P. Moore

すなわち、その大要は

「宮城女学校は着実に発展していて、将来の見通しは大変頼もしいようです。しかし現在の仮校舎は換気、採光、暖房が悪いために全般的に使用勝手が悪くアメリカと異る気候風土の中での婦人達の健康問題を真面目に考えるともっと快適な校舎が必要であると思います。校舎建築ということになれば土地が問題となりますが、仙台では今春以来、地価が二倍以上に高騰しており、現在、東北本線開通のための工事が進捗中であり、條約改正問題との関係もあって経済情勢も急激に変化するので今後地価は更に高騰するでしょう。今にして校地を入手しておかなければ後悔することになるでしょう。婦人宣教師住宅の近くで、しかも町の中心部に二、五エーカー乃至三エーカーの、恰好な土地があり、今なら千百ドル位で入手できそうです。そこなら校舎も宣教師館も建てられます。入手交渉に必要な證認と権限とを与えてください。遅れれば遅れるほど金がかかることになります。現在の日本家屋に長く住んでいることは賢明なことではないというのが私達共通の経験から言えることです。宮城女学校がいつまでも安泰であるためには婦人達の健康に良い校舎を建てることが在日伝道局としては、当然、しなければならぬことです。計

画・設計などの準備は既にできています。此の土地を入手しそこなうことのないようにしてください。」と。

ここに記されている恰好な土地とは、宮城学院が約九十年間、キャンパスとし、多くの同窓生にも仙台市民にも親しまれた東三番丁の校地のことである。何よりも大きな悩みとなっている校舎の問題を何とか解決したいと思っているホーイは、プールボーやオールトが悪条件とたたかいながらも熱心に教育の任にあたり、伝道活動に献身的に奔走している様子を目のあたりにしては落着いておれず、東京に居るグリングやモールと共に在日宣教師社団会議（ミッション会議）を開くこともどかしく、右のような書翰をしたためて東京のグリングに送り、東京でグリングとモールとが署名をそえて、外国伝道局のジョンストン博士へ送ったのである。

このように三者の署名のある在日伝道局としての公的書翰で訴えを受けた外国伝道局としては、校舎建築の必要性並びに緊急性を充分理解出来ても、此の訴えに直ちに応ずることが出来ず、何とか対策を講ずべく、遂に十二月十四日にハリスバーグで会議を開催した。宮城女学校の前途に良い道が開かれそうになって来たのである。

プールボーらの伝道活動　教育環境としてはまことに不充分な仮校舎で続けられる教育でありながらも、プールボー、オールトは使命に燃えて生徒達の指導にあたると同時に、仙台市内外での伝道活動をも活発に行ない、更には仙台市内の各種の団体の集いにも喜んで出席し、奉仕的活動を行なった。ホーイはジョンストンに宛てた十一月三日の書翰で「仙台市内並びに郊外で行なっている私達の伝道も成果があがり勇気づけられます。仙台で伝道できることは本当にうれしいことです。私の協力者である押川牧師は、私がこれまで出会った人々の中で最も信仰に燃えた真面目な人物の一人です。彼は精神的に何時も私を励ましてくれ、まさに私の同僚です。彼は大変堅実な教育を受けた人物で、彼の説教は又多くの人々に大きな影響と啓発を与える力強さがあります。」と記し、十一月五日の書翰でも

「東北地方におけるここ仙台での私たちの伝道地域は『宮城中会』として知られています。『中会』とはアメリカで

言うClassisと同じことです。……藤生氏が牧師就任の試験を受け、私の質問にも正しく答えました。彼は横浜で神学を学んだ後、数年間、新聞出版に従事していました。彼は、私達の要請に応えて、今年の春から福島で私達の協力者として伝道活動を行なっています。先週水曜日（十月二十七日）に、押川牧師と私はこの真面目な青年に按手礼を行ないました。木曜日（二十八日）の午後と夜の二回、仙台のある劇場でキリスト教公開講演が開催されました。午後には約三百人、夜には千五百人の聴衆があって盛会でありました。仙台教会の会員数は五月一日以後、今日までの間に三十五人増えて百九十六人になりました。岩沼教会は三十七人、函館教会は五十二人、石巻教会は二十五人、古川教会は二十一人、福島教会は十三人の教会員が居ます。なお、仙台教会は自給独立教会です。」と記している。

プールボーも十月二十六日にケルカーに宛てしたためた書翰で、

「私達の学校に関することですが、日曜学校を一校始めました。出席者が多いので、準備が出来たら、もう一校を別の地域でも開校したいと考えています。」と記し、又、十一月六日の書翰[註一一]では

「メーソン・アンド・ハムリン（Mason and Hamlin）のベビーオルガンを購入して大至急仙台に送っていただけませんか。私は仙台の教会並びに日曜学校の礼拝に積極的に参加したいのです。それ故、私はオルガニストとして奉仕しようと決心しました。在日宣教師社団にあるオルガンは大きすぎて、携行できません。私達は仙台で現在続けている日曜学校の他にもっと沢山日曜学校を開校したいと考えていますので、携行できるベビーオルガンが無いと困るのです。」と記している。

このようにしてプールボーもオールトも宮城女学校の教育だけにではなく、仙台市内外での伝道活動にも積極的に活躍しているのである。

十一月半ばになって、ホーイは広瀬川大橋の袂の住居から、町の中心部の南町通十六番地に転居[註一二]した。現在で言

えばブラザービルの附近である。又、外国伝道局の方針で仙台へ移る様にとの指令を受けながら、東京に拠点を置いて伝道を続けると頑張り続けていたモールも仙台へ移る考えに変りつつあった。「合衆国改革派教会」外国伝道局としては、在日宣教師社団（在日伝道局）の拠点を仙台に置いて、仙台神学校、宮城女学校の両校のキリスト教教育を中心にしつつ、東北地方の各地での伝道に全力を傾けようという方針であったので、モールが仙台へ移る事になれば、外国伝道局としても、東北伝道に全力を注ぎ易いわけであった。ホーイも、モールが仙台に移る可能性のあることを知って非常に喜んでいる。(註一三)

ホーイ、プールボー、オールトらは教育に、伝道に、日本語の勉強にと忙しい毎日を過している裡に此の年も十二月を迎えた。ホーイにとっては来日満一年に当る一八八六年十二月一日は記念すべき日であった。彼は満一年が経過したのだから、今後は努力して学んだ日本語で、通訳の助けを借りることなしに、礼拝出席者に直接に語りかけようと決心したのであろうか、十二月十二日、岩沼教会での聖日礼拝で、三十七名の信徒に聖餐式を行ない、初めて日本語で説教を行なった。(註一四)一日も早く日本語で説教を行なうようになりたいという伝道精神に燃えて一年間勉強を続けた結果行なった説教であっただけに、ホーイが日本人に神の福音を日本語で一生懸命に説く姿に接し、礼拝出席者は通訳を介しての説教を聞くよりもなお一層熱心に心静めてきいたことであろう。

在日宣教師社団会議

これより先、十二月七日に南町通十六のホーイ宅で在日宣教師社団会議（いわゆるミッション会議）が開催された。日本橋の学校閉鎖の件、仙台神学校に関する件、在日宣教師社団の財産（築地二十八番の宣教師館）を処分すれば三千乃至三千五百メキシコドルの現金が得られるのではないかに関する件等の重要議題も審議されたが、特に宮城女学校に関する議題が取りあつかわれ、生徒数が急激に増加したので国語並びに漢文の教師の採用が緊急に行なわれるべきであることが全員一致で（但しモールは欠席）決定された。創立後僅か三ヵ月で教師陣の充実が必要になったのである。又、山形に男子校（英学校）を創立したいので「合

衆国改革派教会」在日宣教師社団から教師を二名派遣して欲しいという願いがあるが、現況ではこの呼びかけに応ずることは勿論出来ないが、道義上この願いのあることを外国伝道局へ報告する義務があり、山形に限らず東北地方の何処へでも要望があればそれに応ずることが出来るようになるべきであるとの結論をも出した。(註一五)このようにしてプールボーもオールトも生活環境の全く異る仙台で三カ月を夢中で慌しくすごし、心身共に相当疲労したであろう時に、日本での最初のクリスマスシーズンを迎えた。彼女らにとって、故国を遠く離れた日本で祝うクリスマスは未だ嘗て経験したことのない喜びに満たされたものであったことと思われる。

新しい年一八八七（明治二十）年を迎えて早々、一月五日にオールトはケルカーに書翰をしたためた。

No. 35 Higashi Yobancho
Sendai, Miyagi Ken, Japan
January 5 th, 1887

Dear Father Kelker ; —

Christmas in Japan, what a happy, happy day it was. What pleasure there is in making others happy.

Miss Poorbaugh said she wanted to write you a description of the day and some other little matters so I will not repeat them, but I felt I could not let this mail go out without writing a few words to you.

Will you please give my thanks to Mr. Will for the pretty Christmas cards. It was very kind of him to remember us. A few weeks ago I sent him a few photographs of Sendai. I mean to send you several in a few days. I know you will be interested in seeing pictures of this place.

You were very kind to send the school books. Miss. Poorbaugh has acknowledged the receipt of them. The Calisthenic Song book I received on the third of December.

I have good news to tell you about our school. We have now forty-one girls and several more will enter on the tenth, when we again open school. Just now we have vacation. Our rooms are so full we scarcely know what to do at times.

How we long to have a building of our own one that we can heat and light properly.

Mr. Oshikawa is very anxious that our school be a success and so advised us not refuse any applicants at present.

A few days ago the Governor sent a man to our house to tell us that our school was now gaining a reputation and he was very sorry his daughter did not come to us when we started, but would we not allow her to enter school now. We said she could so she came on the fifth of December and brought four of her friends with her. I feel particularly glad to have the Governor's daughter because we heard not long since that he and his wife are very much opposed to Christianity. We hope to have some influence over the daughter and can perhaps reach the mother. The governor himself is a very bad man and I scarcely think we can hope to do him any good, though one can never tell.

I love my work better every day, and am well and happy in my home. We are having beautiful winter weather in Sendai now.

Mr. Moore was here on a short visit. He left for home this morning. He does not say that he will move up in the Spring, but he was looking around at some houses in case he does. I hope very much they will for we need them.

Give my love to Mrs. Kelker and remember me to friends. I am yours in Christ.

Mary B. Ault

The magazine comes monthly.

これによると新しい年を迎え、冬期休業があけて授業が再開される一月十日には、現在の生徒数四十一名のところ更に数名が入学して来ることになっており、そうなればなおのこと教室は超満員になるので、もっと余裕をもって入学希望者を収容できるような校舎を一日も早く欲しいという願いで頭がいっぱいであることがわかる。そのような具合であるから、宮城女学校の教育が大変誤解が良いことを知って是非とも娘を入学させたいと思い様子を打診して来た松平正直知事の令嬢の入学をも認めることが出来ない現状であった。オールトとしては、松平知事夫妻がキリスト教を快く思っていないということを耳にしていたので、令嬢が入学できて、宮城女学校のキリスト教教

育が令嬢を通して知事夫人に影響を与えるようになれば良いと考えているのだが教室の現況上どうしても入学を認めることが出来ない状態であり、入学希望者を受け入れることが出来る校舎が一日も早く建設されるべきであることを何とかして外国伝道局に理解させようと努力していることがわかる。ところがこの書翰とすれちがいに、外国伝道局が在日宣教師社団へ発送した校舎問題に関する重要事項の記された公式文書が日本へ向っていたのである。外国伝道局の公式文書を受けとった在日宣教師社団団長グリングは、懸案の重要諸問題を審議すべく在日宣教師社団会議（ミッション会議）を一月二十八日午前十時から東京、築地二十八番グリング宅の書斎で開催した。重要議題山積のため審議が一日では終了せず、翌二十九日にも東京、麹町上二番町モール宅の書斎で午前十時から続行された。二日間にわたる審議の経過を幹事役のホーイが外国伝道局総幹事ジョンストン博士に宛てて長文八枚にわたって報告している。[註一六] それによると公式文書は、前年十二月十四日にハリスバーグで開催された外国伝道局常置委員会の審議結果並びに外国伝道局の方針を伝えるジョンストン博士からのものであったが、此の公式文書並びに「日本基督一致教会」協力ミッション幹事ウィリアム・インブリー博士（William Imbrie 1845-1928）からの文書が朗読された後、諸種の議題に入った。

第一の議題は宮城女学校の校舎建築に関する事項であった。仙台では地価が日毎に高騰しつつあり、宮城女学校の校舎建設に最適と思われる土地の価格は一エーカーあたりアメリカドルで約千ドルであり、是非とも一・五乃至二エーカーは必要であること、現行法規下では、土地所有名義者は仙台市民乃至仙台市民の団体でなければならないが、この所有名義者に関して他教派の学校の場合を調べてみると日本人信徒六人位以上でそれぞれの教派の在日宣教師社団のために所有名義者となる形式を採っており、従来の各教派の例から見てこの形式を採ることは困難ではないこと、校地取得資金の調達については、十二月七日のミッション会議の結果報告でも提案した通り、築地（居留地）二十八番の在日宣教師社団本部（宣教師館）の財産を売却してアメリカドル二千四百乃至二千八百ドル位を

準備出来ると考えられること、その場合の財産譲渡証書は在日宣教師社団代表のグリングがアメリカ領事館を通じて準備できることなどを報告している。そして更に宮城女学校のために土地を購入し、校舎を建築することに仙台市民の援助を得ることは難かしいとも記しているが、その理由はホーイ、プールボー、オールトらは常に仙台市民と親しく交わり、宮城女学校の教育に理解と協力を得られるように努力を続け、女子教育の重要性をも認識してもらおうとしているが、日本人は一般的に男尊女卑の考えをもっているためか女子教育の重要性を認識する人が少なく、したがって男子教育のためならともかく、女子教育のために援助を得るということは一般市民に限らず官公庁当局に対してでも期待することは困難であるということであった。とにかく、会議の第一日目の審議は全く宮城女学校の校地取得並びに校舎建築に関する問題の論議だけに費された。なお第二日目には、東京並びに近郊伝道の将来性の件、健康上の理由によるグリング夫妻の帰国の件、東京の二教会（元大工町教会、番町教会）の自給独立の見通しの件、仙台教会の教勢に関する件、仙台神学校の内容拡充並びに奨学制度の件などが熱心に審議されたが、出席者一同、異教の国日本の国民の間に神の福音を宣べ伝えるために教育の分野、直接伝道の分野、社会活動の分野で献身的に活動するならば、神は必ず良き道を示し導き給うことを信じて如何なる困難に遭遇しても恐れ挫けることなく前進しようとの決意を新たにして会議を終了した。

なお、このミッション会議の直前の一月十九日にプールボーは「合衆国改革派教会」の婦人会員達に対して、宮城女学校創立後三カ月間の教育成果について詳細に報告しているが(註一七)、その中から一部分を紹介しよう。

創立当時の状況

「今回は、学校を始めた時、最初に入学して来た生徒達だけのことについておしらせしましょう。私が「ファースト・リーダー」を教えているクラスの最優秀生徒は齋藤お冬さんです。十六才で背の高い少女ですが、三カ月前には英語の単語一つさえも知らなかった——勿論、他の生徒も全部そうなのですが——のですが、今日午前の授業で

彼女が英語の教科書を読んでいるところをアメリカの皆さんにも是非聞かせてあげたかった程に上達しているのです。今日、私の授業を何時ものようにすませたら、英文朗読をする位の時間がなお数分のこりましたので、生徒達が正しく読めるかどうかの試験をしてみました。お冬さんは三頁もの長い文を一ヵ所の間違いもなく読んだのです。彼女は、前に、英語書取りの試験をした時にも、二音節の単語二十五を一ヵ所のつづり違いもなく書いたのです。彼女は聖書の勉強をも真面目にやっており、押川牧師から二週間前に洗礼を受けております。次に、非常にすばらしい進歩を示しているもう一人の生徒は小原きよのさんです。お冬さんほど早い進歩ではありませんが、彼女は非常に根気強い頑張り屋です。学ぶことは何でも正しく習得しようと努力する少女で、その努力は素晴らしいものです。これまでまだ僅か十二時間しか行なっていない裁縫や編みものなど家庭科の授業で小原さんほど上達した人を私は知りません。」この報告を読むと英語の単語一語さえ知らない少女達が宮城女学校創立と同時に入学して僅か三ヵ月で英語の教科書を三頁も正確に読んだり、単語二十五語を間違いなく書くことが出来るようになるほどの教育が行なわれていたことが理解できる。

なおここで、宮城女学校創立直後の授業の様子、仮校舎の様子などを更に一層推測し易くするため、コート夫人（ブールボー）、ホーイ夫人（オールト）、稲垣秋香（稲垣ぎん）、第一回卒業生武藤ゆき（関屋ゆき）と第三回卒業生岸波せき（竹内せき）並びに、堂本まつえ（宇野しげ、創立の翌年転出）らが創立当時の様子を記した回顧録（宮城女学校五十周年史所収）の一部分を次に紹介する。但しコート夫人並びにホーイ夫人の文は創立三十三年後に、又、稲垣、武藤、岸波、堂本ら四名の文は創立五十年後に、それぞれ記憶に基いて記されたものであるため、記憶違いなどのため、事実と相違する記述が若干[註一八]あるが原文のまま掲載する。

コート夫人（ブールボー校長）の回顧文

Lizzie R. Poorbaugh Cort　April 5, 1919

Miyazi Jo Gakko opened its session in the little two storied house on the Tanabe's compound at the head of Nibancho with six pupils, two lady teachers, a Japanese helper and a janitor in the fall of 1886. Very soon thereafter Miss Ault added a primary class of kindergartners but without any sort of kindergarten equipment.

Indeed our whole equipment at that time besides the rude chairs and tables made by the Japanese carpenter consisted of one Appleton's Beginners' Chart, First Readers, also Appleton's Gospel Hymns, two very wretched wooden blackboards, a box of chalk crayons and a baby organ. With this meagre equipment we wrought two years, adding gradually only such text books as the progress of the girls demanded.

We hardly realized that we were growing until we held our first Christmas celebration. By that time the girls had learned to sing simple tunes and to speak a little English. We therefore arranged for a service with Bible readings and many hymns in the Japanese but a small part of it was English. The one hymn the girls knew was Lenten rather than Christmas, never-the-less they sang and heartily at that, the hymn being, "Not all the blood of beasts" and recited some short verses. To this service came the wives of the Governor and Vice Governor, also their daughters, as well as the wives and daughters of many military officers. All these were so impressed by the accomplishment of our girls that many applications for admission were received, so that after Christmas vacation, we were greatly overcrowded and began appealing for buildings of our own. It now became necessary to employ more Japanese teachers and a teacher of Chinese.

However we were still but a day school and many parents importuned us to receive their daughters into our own home. This being impracticable we secured the use of a second small house on the Tanabe compound where at the beginning of our second year, we domiciled half a dozen girls and matron, while Miss Ault and I continued to live at the "Sudo Rikuso no ho" on Yobancho. This arrangement proved altogether too irksome and unsatisfactory to be endured so that as soon as we could get possession of the main dwelling in the Tanabe compound, that became the "ladies residence" until the Spring of 1889 when the whole school removed to the present location.

During our second year or perhaps toward the end of our first, the Empress of Japan instructed all ladies appearing at the Imperial "drawing rooms" to wear "foreign costume" and to learn "foreign manners". This proved to be a good thing for our school, for the first ladies of the Garrison came to Miss Ault and myself for assistance in that colossal undertaking. I pass over

the varied personal experiences that came to us in that proceeding. Suffice it to say we gladly served the ladies as best we could with the result that many warm friendships were formed. We gained access to homes we otherwise might never have been permitted to enter, and the school itself received accessions that gave it a character and standing it might not have won in many years.

During the year also, the Government took larger cognizance of the school and required certain technical formalities of us. In compliance with this demand, Mr. Hoy, Mr. Oshikawa, Mr. Sudo and ourselves held several meetings at which a name and a constitution setting forth our aims, responsibilities etc, were adopted. In return, we received certain privileges and recognizance from the Government.

ホーイ夫人（メーベル）の回顧文

April 18, 1919. Mary. B. Hoy.

It was a very humble beginning in two small rooms and with a little very rude furniture.

At the beginning of the second month, we had twenty four pupils and by January there were forty one. We had only half day sessions the first year. Great stress was laid on English. You may judge what was done, from a short extract of a letter written by Miss Lizzie Poorbaugh to the Women of the Refomed Church in the homeland, on the first Christmas exercises. "The services consisted of scriptural recitations and original essays by the girls. Three English poems were read by three girls of ages from ten to sixteen, who three months ago, had perhaps never so much as pronounced a word in English. Very creditably did they read. An English hymn sung by the larger girls and another by the littlest ones completed the service".

We used a set of charts and Swinton's First Reader. Besides English, Geography and Arithmetic were taught in Japanese. Mrs. Hitomi and Yukiye san, now Mrs. Yamaka, were our first Japanese teachers. I am sorry I cannot give you any definite report on the support of students. As I remember there were not more than five or six. School closed in June with fifty eight pupils.

There was considerable opposition at the close of the first year's work, made by the Governor and Vice Governor to our

teaching as much Christianity and making it a personal matter with their daughters. Threats were made to take the girls away from the school.

The second year opened on September 5, 1887 with sixty pupils. The little building on Nibancho was crowded to its limit. When we all gathered into the main school room every available inch of sitting room was occupied. When the first class was called the girls occupying the recitation bench had to go out on the veranda, and let the class have their places, and when the class was seated the girls on the veranda crowded back into the places made vacant by the reciting class. This of course took place every time a class was called to recite. There was a great demand for schools for girls. The Educational Department of the Government was watching and giving us a chance.

We were told if we did not measure up to their requirements, a Government school for girls would be opened. That of course would have wrecked our work, and so we wrote very pleading letters for better quarters.

When the second year of school work opened we were much encouraged and pleased to have the Governor's and the Vice-Governor's daughter come back to school and bring four other friends.

稲垣秋香（稲垣ぎん）の回顧文の一部分

「十年一と昔と申しますが、五十年は日本人の定命ほどの長さで記憶をたどることは仲々困難でございます。併し嬉しかったこと悲しかったことは其脳裏に深く入って容易に忘れられぬもので、宮城女学校も来年は創立五十年に當らるゝそうで誠にお芽出度いことでございます。私にも何か其頃の事を書いて見よとお勧め下さる方がございますので、一寸筆を取ってみました。宮城女学校は地方に出来た尤も舊い基督教主義の女学校で押川方義先生、首藤陸三氏其他二、三名の方々の発起により米国からはミス・プールボウ、ミス・オルト其れに日本人側では曲瀬雪江子と自分の四人で、兎に角寺小屋式に東二番丁に田辺といふ人の住宅を借りて授業を開始いたしました。生徒らしい女児はほんの二十名ばかりで、学級も定まらず、それに余り小人数では授業にはりあひがないといふので、誰れかれの区別なく来る人を選ばずの主義を取りましたので、軍人官吏の妻女を初め種々雑多の婦人らが西洋人から直接英語の稽古が出来るといふ好奇心にかられて入学されましたので忽ち教室も手狭を感ずるほどになりました。其人々は年齢も廿歳以上三十歳位までの丸髷姿の奥さんがドッグ、キャットのお稽古なさる有様は随分奇らしい光景でありました。されど斯ういふ種類の生活は到底長つゞきはいたしません。や

がて選び上げられたる善良な生徒ばかりとなりました。間もなく曲瀬雪江子は山鹿氏と結婚のため退かれましたので其代りとして私の妹稲垣豊子を横濱のフェリス女学校より呼びよせました。又、ミス・オールトはホーイ夫人となられましたので其代りとしてミス・ブールボウの妹ミス・エマが米国より来られました。同女は仲々のピアニストでありました。こんなわけで能く人々が宮城女学校は姉妹分の学校などと噂されました。漸く校舎も東三番丁に新築出来、和漢數畫などの先生方もお願ひしましたが、失禮ながら御姓名は記憶にございません。實に其頃の私は年齢も若く學力乏しく、經驗もなく今にして考へるとき身に冷汗を流す次第でございます。併しあの宮城野の小萩とも思ふ可愛らしき少女達に大和魂を失はせぬ様な女学校を作りたい念願に満ち〳〵てをりましたのに、外国の教師らは又日本女子をあっぱれ米国婦人に作り上げようとされるので自然意思の疎通を欠き此点では随分苦しみました。残念ながら第一回の卒業式も見ずにお暇して東京へ戻りました。其後早坂先生初め多くの適當なる先生方の御盡力にて立派なる女学校となり、俊才賢夫人を数多く社会に送り出されたことは喜ばしき限りでございます。（以下略）」

（稲垣　秋香）

武藤ゆき（関屋ゆき）、岸波せき（竹内せき）連名による回顧文の一部分。

「（前半略）最初宮城女学校に入学したのは八名で、大抵は信者の家庭から通学したのであったやうであります。けれども、女子教育の機運はその頃でも既に熟して、たゞその折を待ってをったのでありましたのでせうか。創立は明治十九年九月でありましたが、その年の十月十一月頃には、急に二十有余名の通学生となり、翌年には寄宿舎の設さへ見るに至りました。創立の常時は、学校とは申しましても、寺小屋のやうなもので、宮城女学校の名稱はありましたやら、少しも記憶に残ってをりません。たゞ記憶に鮮かなのは、最初の場所が東二番丁の北端、師範学校に隣接した普通の住宅を仮校舎とし教師館と寄宿舎と並んで庭つゞきになってをったこと、表は門構もなく、格子戸の入口で、入ると表通りに面して格子窓のある六畳間の教室があり、その奥に六畳間二つと四畳半一つとを打抜いて一室とした講堂があり、教室には畳の上にベンチを並べてあり、講堂は畳の上に一人用机と椅子とをならべてあり、中二階と二階とには、各六畳敷の室が一つ宛ありまして何れも畳の上に座して教師のみ椅子に腰を掛けて授業をせられたことをよく覚えてをります。

課業は最初英語ばかり、課業と課業との間に「リセッス」もなく、次から次へと御稽古は続けられました。でも多分毎日でありましたと覚えますが、十分間程一回、講堂の机と机との間に立って、體操をいたしました。號令は英語でありました。英語の唱歌も毎週二回程ありました。そんな風で最初は、課業は全部英語でありましたが、後間もなく漢文と数学とが加へられ、三年目の四月東三番丁の新校舎に移転した頃からは、課業は勿論諸般の面目が一新いたしました。

まだ仮校舎の當時、夏の頃ともなれば一階の街路に面した教室は障子を開放ち、風通しをよくして授業をせられたので通行人が足を停めて格子窓の内をのぞきこんで居ることが奇しくありませんでした。それも其の筈當時外国婦人も珍らしく教師の女子であったことや、年齢も十二三歳から二十五六歳位までが一緒になって教はって居ったことや、質素な小娘の間に華美を盡した県知事令嬢や、何とか官の令嬢が共に学んでをったのでありましたから、仙台の新名物珍風景であったに相違ありませんでした。某令夫人がそのお子さんと二人で通学せられたやうなことも面白い思ひ出の一つであります。

私共が最も興味を持ち精も出たのは、何といふても、スペリングの課業が第一でありました。通例二十人から二十五人位が一列に並び、綴を間違ったら順送りに當てられ、正答者は順番を上げられ、一週間続けて首席の者は次の週の第一日には態と列の最後の順番に置かれましたが、それでも能力や勉強の如何によって順番に異動を生じ、正答はズン〳〵順番を上げられるので、誰も彼も皆懸命に競争をしたものであります。かくて学期の終りには、正答の数の最も多い者一人賞として美くしいカードを授與されるのが例でありました。

文芸会が自治的に運用されて、その年一回の大会の費用すらも、父兄に頼らず、平生編物や何かで得た収入を積んでそれで支辨するといふ風に、すべてが創意的、自治的に行はれたことが私共にとって懐かしく、楽しく何となく微笑まるゝやうな得意さへ感ぜらるゝのであります。」

（武藤　ゆき・岸波　せき）

堂本まつえ（宇野しげ）の回顧文。

The President of Miyagi Jo Gakko,

May 25, 1936.

Dr. C.D. Kriete: —

Time flies so rapidly that I can hardly realize that almost fifty years have already passed since the time I entered your school. After coming back from Sendai the other day I was looking through my father's old memory book and found the copy of the application for the transfer which my father wrote for my transfer from Miyagi Jo Gakko to Eiwa Jo Gakko, on May 1887 (Meiji 20th year). I am enclosing the copy as it might be of interest to you. At that time my name was Shige Uno, and at the age of fifteen it was changed to Matsue Uno. I do not remember well, but at that time Eiwa Jo Gakko was the only English school in Sendai, so Miyagi Jo Gakko must have been called Eiwa Jo Gakko at first.

After a short while I left your school and went to Yamagata for one year to receive private English education from Mrs.

Moore and Japanese education from my uncle Mr. Sugeta.

After one year I returned to your school in Sendai again. When I was twelve years old I was sent to Mr. and Mrs. Schneder's home and from there I went to your school. I have had so many changes in my life that it is hard for me to recall old memories in order. Miss Inagaki was one of the teachers and I think her sister was teaching also.

In winter we had a huge square hibachi to warm the school room. It was such a pleasure to warm our hands and chat while sitting around the hibachi. I remember when Mayor Matsudaira's daughters came to school, they came in foreign clothes and always on a jinrikisha.

When I was in the beginning class Miss Poorbaugh used to put small girls on her lap and teach the alphabet from a chart. There were several girls in my class, I think, but I only recall Ishiguro Oyoshi San, Sudo Osono San and Yoshida Oteru San. Yoshida Oterusan was in my class, but she entered in our school after the new building was built I think.

I was one of the fortunate ones that I received a thorough religious training from childhood. I remember how I used to enjoy the prayer meetings and memorizing bible verses.

When I was fifteen years old I was called back to Kanazawa where my family were living. I was sent to an English school in Kanazawa but I missed the Sendai school very much and longed to go back again.

Times have changed and my life too has changed a great deal but the old memories of my childhood come back to me as precious treasures that can not be taken away from me. I realize now how important it is to give a child an education that she can look back upon and hold dear as the foundation and guiding light of her life.

It is wonderful to think how many girls have been sent into the world from Miyagi Jo Gakko with a firm moral and material foundation to guide them through life during these fifty years.

I wish to thank you, the President of Miyagi Jo Gakko, for all the privileges, the start in life that I have received at your school.

Sincerely yours,

Matsue Domoto

これらの回顧文を通して宮城女学校創立直後の様子の一部分をうかがい知ることが出来る。

外国伝道局長報告

さてここで、一八八七（明治二十）年六月一日からオハイオ州アクロンで開催された「合衆国改革派教会」総会において、外国伝道局長デヴィッド・ヴァンホーン（David Van Horne）博士が、日本における伝道進展状況全般について行なった報告の中から一部分を抜粋して紹介しよう。それはグリング、モール、ホーイ、プールボー、オールトなどの諸報告を総合してなされた外国伝道局長報告である。(註一九)

「仙台では伝道の機会が非常に多いのに在日宣教師社団としては宣教師の数、伝道資金などが充分でないため思うような活動が出来ないでいます。もっと多くの伝道者と伝道資金が必要であると思うのが在日宣教師全員の気持です。モール夫妻もこの仙台での緊急事態を応援すべく東京から仙台に移る決心をしました。モールも今こそ働き人、伝道費、祈りが必要であるということを日本伝道に関心を持つアメリカの教会員すべてがモットーとすべきであると言っており、グリングも仙台での伝道には我が「合衆国改革派教会」が全力を傾けるべきであると言っています。仙台神学校は在日宣教師社団の最も大事な枝の一つとして大事に育て、東北伝道に大きな任務を果すようにしなければなりません。宮城女学校は現在四十一人の生徒に日本家屋で授業を続けていますが、教育的見地から新しい校舎が必要なことは明白です。プールボー、オールトらの切なる訴えは無駄ではありませんでした。J・I・スワンダー博士（Rev. John I. Swander, D.D., Ph.D., F.S.Sc.）夫妻が(註二〇)校地購入のためにと千百ドルを献金してくださいました。校舎と宣教師館建設費を多くの教会員が献げくださって一日も早く建築される事を期待するという言葉以外何の条件もなしに献金して下さったのです。直ちに校地を購入するようにとの指令と共にこの献金をホーイへ送りましたが、仙台の土地代は既に千三百ドルに高騰していましたので、多くの方々に不足額を献金していただき仙台の中心部に二エーカー余の土地を購入することが出来ました。東三番丁



J.I. スワンダー

に面して柳町通りから北目町通りまでの間四百六十フィート、柳町通りと北目町通りに面してそれぞれ平均百九十フィートの土地で、東五番丁にある仙台駅にも近いところです。このように時を得たスワンダー博士夫妻の献金に感謝の意を表しますと同時に、この他にも五月三日現在で多くの教会員の方々から宮城女学校校舎建築のためにとの指定献金が二千九百三十ドル八セントに達していることをも感謝をもって報告いたします。宮城県知事も宮城女学校の教育を高く評価して令嬢を入学させています。宮城女学校の校舎並びに宣教師館何軒かの建築のためには、現在準備されている資金の他に少なくとも一万ドルは必要です。東京の宣教師館が四千ドルで売却できるかどうかは分りませんが、その売却金で仙台の宣教師館を建築することになるでしょう。オハイオ州デイトン第一改革派教会の一教会員(註二一)が宮城女学校のためにと立派な机と椅子四十名分を寄贈してくださり、更に輸送費百七十一ドル十セントをも献げてくださいました。又、もう一人の教会員が立派なオルガンを寄贈してくださいました。これらはすべて仙台に送られて既に宮城女学校で使用されています。又、最近三年間に天に召された八名の婦人教会員から総額二千四百三十五ドル三十セントの遺産金が宮城女学校のためにと献げられました。仙台に居るプールボー並びにオールトは、日本の少女達のためにアメリカの教会の婦人方が今後とも財政的に後援してくださるようにと願っております。プールボー、オールト両名の送別礼拝の様子をおさめた小冊子を一万部印刷し、又、在日宣教師達からの諸書翰や貴重な情報をも小冊子にして二万四千部印刷し、それらを多くの教会員に領布して集まった資金も仙台での教育のための重要な収入になっています。」

校地購入

このように宮城女学校は創立後僅か半年も経たぬうちにアメリカの教会員多数の献金によって、校舎建築のための土地を東三番丁に入手することが出来ることになった。校地購入許可の電報がホーイの手許に届いたのは一八八七（明治二十）年二月第四週の事であった。この時を一日千秋の思いで待ち続けていたホーイ、プールボー、オールトは喜びのあまり、アメリカからの送金到着を待ちきれずにそれぞれの手持金を出

し合っていわゆる手打ち金を立てかえ払いし、校地取得を確実にしたほどである。又、オルガンは三月三日の夜、プールボー宅に配達され、早速翌朝、仮校舎に運ばれた。このように授業を開始して僅か五カ月位の間に校地購入の見通しがつき、又、机や椅子の他にも教育に必要な教科書、教具、教材、文房具などまでもが次々に外国伝道局から送られて来るので、ホーイ、プールボー、オールトは如何ほど勇気づけられたことであろう。[註二二]必要な資金がととのって、四月には遂に広い校地を仙台の中心部に持つことが出来た。東三番丁百六十二～百六十九番地にあたる約二千四百坪である。

さてこれより先、同年一月二十四日付ホーイの書翰[註二三]によれば、仙台神学校で押川とホーイとは伝道者になろうとする青年達の教育に専念している様子、そして押川が積極的に親切にホーイに協力して教育にあたるので伝道者が続々と輩出しそうな状況であることなどが報告されている。又、三月四日付オールトの書翰[註二四]によれば、プールボーとオールトは押川並びにホーイ同道のもとに、生徒が百人ほどいる裁縫学校[註二五]を訪問し、校長夫妻と面談している。その際、キリスト教に関心を持っている裁縫学校の校長の要請により、生徒に毎週三時間の英語授業と毎月一回のキリスト教講話を行なうことになり、英語授業は毎週月曜日（プールボー）、水曜日（オールト）、金曜日（ホーイ）午後三時半から一時間ということで校長の願いにこたえることになった。なおその日、早速プールボーと押川とが教職員にもそれぞれ講話を行なったが、プールボーらはキリストの福音を宣べ伝える機会が与えられたことを喜んでいる。又、陸軍の将校夫人達のグループから毎週四回、午後六時から一時間、英語並びに婦人の一般教養についての授業の委嘱があり、プールボーとオールトがそれぞれ二時間ずつ担当することになり、これまた伝道の機会が与えられたと喜んでいる。オールトは、仙台では老若男女すべてが英語に熱狂的であり宮城女学校の授業の他に、仙台のあらゆる階級の人々に接する機会に恵まれるので、当初は英語の時間が多く聖書の時間が少くても、忍耐して長期にわたり授業を続けていれば、聖書のための時間の方が多くなる時が来るだろうと記している。オールトは教

会でも日曜学校の生徒一クラスを受持った他にバイブルクラスをも一クラス持っているが、此のバイブルクラスの話一時間のための準備に一週間が必要であるとも記している。

以上の如く、ホーイもプールボーもオールトも宮城女学校の授業、教会での奉仕活動、他校での授業、諸団体の申出に応じての諸種の活動というように非常に忙しい生活を送っている中で日本語の勉強にも時間を割き、更には校舎建築の準備をも行ない、それらすべての状況を詳細に報告書や書翰にして外国伝道局へ送っているのである。このように熱心な、信仰的活動を知るが故にこそアメリカの多数の教会員が仙台で行なわれているキリスト教教育に理解と協力とを示し、尊い献金がささげられ、宮城女学校運営費や施設費となって送金されて来たのである。

プールボーやオールトの熱心な信仰に基く教育はやがて生徒達にも大きな影響を与えたのであろうか、六月になって洗礼を受ける者が出て来た。プールボーは六月十六日にケルカーに宛てた書翰の中で次のように報告している。

"Last Sunday was a day of more than ordirary gladness to me. Two of my girls were baptized and for the first time partook with us of the Lord's Supper. I say my girls, because they have been brought in chiefly by my own effort."

礼拝の時や聖書の時間に真剣にプールボーの話をきいていた生徒達であろうか、六月十二日の日曜礼拝で二人の生徒が受洗し、聖餐にあずかったのである。プールボーはこの書翰の中で、此の一年間の授業を終ろうとしているが、来月も数名の生徒が受洗予定であると報告しており、更に又、夏休み中の予定を報告している七月四日付のケルカー宛の書翰の中でも、県知事並びに大書記官（副知事）の令嬢が在学しているが、彼女らは自分の聖書の時間には出席しているのに日曜学校には出席しないので、出席を勧める手紙を持たせたところ彼女らの父親が怒ってそ

れぞれ令嬢を退学させると連絡して来たこと、そこで早速何度も家庭訪問をして話し合ったところ、彼女らは日曜学校に出席するようになったのみならず友人達をも誘って大勢で出席するようになったので非常に喜んでいることなどをも記している。宗教教育に傾けるブールボーらの情熱をくみとることが出来る。

宮城女学校が授業を開始してから丁度十カ月が経過した一八八七年七月二十四日にブールボーはケルカーに対してホーイとオールトの婚約を報じ、ホーイのように非常に立派な宣教師が独身生活を続けていると、非常な緊張感と孤独感とのために伝道意欲を喪失してしまうことになっては大変だと思っていたので、オールトと結婚することになれば、ホーイはなお一層すぐれた活躍をすることになると思うと記し、二人が相互に好伴侶を見つけたことを衷心より祝福している。更に一カ月後の八月二十四日にオールトもケルカーに宛てて、ホーイは宣教師の模範とも称すべき人物、誠に立派で親切で上品で心優しくて、極めて優れたクリスチャン紳士であって、自分にとっては全く勿体ないような人物であり、そのようなホーイを伴侶と定めることが出来るような大きな祝福を神が与えてくださったこと、当初は、み心ならば生涯を女学校に奉仕するという決心をしたのに神は仕事の種類を変えて自分に新しい道を示してくださったので辞職願を同封すること、結婚しても伝道をやめることはせず、家庭の母親達の教育に専念したいことなどを記した書翰を送っている。

第二年度開始

丁度その頃、ブールボーは九月からの第二年度開始を前にして、入学希望者が増加していること、東京の女学校からの転入希望者があること、地方からの入学希望者があることなどから判断して、東二番丁五十一の仮校舎内に寄宿舎を設けることとし、ブールボー達もそこに寄宿舎生達と一緒に住むこととした。[註二六]

愈々九月五日に第二年度の新学年が開始された。[註二七] 生徒は六十名であった。新学年開始を前に曲直瀬雪江が山鹿氏と結婚のため退職したので、その後任には、稲垣ぎんの妹でフェリス英和女学校を卒業した稲垣豊子を採用すると同時に、かねてから計画していた漢文の教師をも採用した。[註二八] 生徒は予科が三クラス、本科一年が一クラスの編成と



D.B. シュネーダー

なった。又、寄宿舎生は六人居り、プールボーは寄宿舎生達と一緒の生活を新しい楽しみとし張り切って活躍した。プールボーは、オールトが此の学年度末で学校を退くことになるので、その後任補充の候補者に、妹のエマ・プールボーが向きはしないかと打診の書翰を九月二十四日に外国伝道局へ送った。丁度この頃、アメリカでは、九月十三日、デーヴィッド・B・シュネーダー（David Bowman Schneder 1857-1938）が日本派遣宣教師に選任された。[註二九] シュネーダーは一八五七年（安政四）年三月二十三日ペンシルヴァニア州ボーマンスヴィルに誕生した。長じてフランクリン・アンド・マーシャル大学を卒業した後、ランキャスター神学大学に学び、一八八三（明治十六）年卒業後「合衆国改革派教会」の牧師としてペンシルヴァニア州マリエッタで四年間牧会に従事し、一八八七年五月に教会を辞任した。それは更に神学の研鑽をつむためにドイツに留学するためであった。シュネーダーはドイツへの留学の準備中に、彼が嘗て志願したことのある日本派遣宣教師に選任されたのである。ところが選任されてはみたものの外国伝道局の財政事情で出発日が遅れそうであることを耳にした前述のスワンダー夫人が八百ドルをシュネーダーの伝道資金のためにと献じた。[註三〇] シュネーダーはかねてより婚約中であったアンナ・シェーンバーガーと十月二十日に結婚式を挙行、十月二十五日には日本派遣宣教師に正式に任命され、更にそのあとペンシルヴァニア州サンベリイ並びにオハイオ州アクロンでの送別礼拝で多くの教会員の激励を受けて故郷を後にし、十一月二十九日にサンフランシスコを出港するというまことに慌しい二カ月をおくって日本へ向った。[註三一] この頃、シュネーダーの来日を鶴首していたホーイが多忙による過労のため健康を害してしまい、気分一新のためもあって片平丁二十七番地に転居しては見たが快癒せず、シュネーダー夫妻の横浜到着直後に横浜で挙式予定であったオールトとの結婚式をも数日延べして十二月二十七日に行なわざるを得なかった。したがってシュネーダー夫妻の出迎えもホーイに代わってプールボーが行ない、その間、オールトとキティーは仙台で留守を

守ったが、結婚式の日が近くなってから、ホーイもオールトも横浜へ向った。(註三二)このように、十二月中旬から下旬にかけての間、仙台東京間を割合簡単に往復出来たのは、一八八一年に発足した日本鉄道株式会社による鉄道建設事業が進捗し、此の年十二月十五日に東北本線上野塩釜間の鉄道が開通し、一日に列車が二往復（片道十時間）するようになったからである。

このようにして一八八七年も過ぎ去るのであるが、慌しい動きの中にあっても宮城女学校の教育は順調に続けられていた。ここで第一年度の在校生の実情を眺めてみると、プールボーが一八八七年七月四日にケルカーに送った書翰中に、昨年九月開校以来今年七月までの間に在籍した生徒は七十八名であるが、正規に通学し続けている生徒は約四十名であると記されている。宮城県内にはまだ女学校が無かった時代であるから、物珍しさもあって宮城女学校に入学した生徒もあったが、彼女らは毎日の授業に続けて出席することもせず自然に退学してしまったのである。

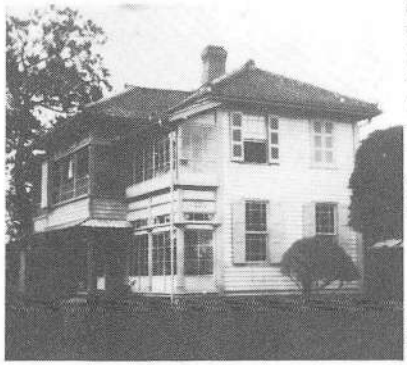
第二高等中学校

ここでこの年、一八八七（明治二十）年に創立された第二高等中学校（旧制第二高等学校の前身）について簡単にふれておく。前年一八八六（明治十九）年四月十日に公布された「中学校令」はわが国中等教育制度を確立させたものである。これによると中学校は高等、尋常の二段階制をとり、それは一八八一（明治十四）年の「中学校教則大綱」における初等中学科、高等中学科の編制区分とはちがって、全国的規模での二段階編成である。すなわち日本全国を五区域に分けて各区域に文部省の直轄として修業年限二年の高等中学校を置き、各府県には修業年限五年の尋常中学校を一校程度置くというものであった。これによって一つの帝国大学と五つの高等中学校並びに凡そ五十の尋常中学校を設け、中学校を卒業した者が直ちに大学に入学出来る方針であった。東北六県が属する第二区の第二高等中学校が設置されたのは一八八七年四月のことであり、諸準備の後、入学試験が行なわれ、同年九月二十二日に荒町尋常小学校内の仮教室で授業が開始された。前年の宮城女学校

の授業開始日九月二十四日から三百六十三日後のことである。なお、一八九四（明治二十七）年六月二十五日、「高等学校令」が公布されて、従来中学校の上段階を占めていた高等中学校が分離して、中学校を卒業した生徒のための高等学校が設置されることになり、第二高等中学校は修業年限三年の第二高等学校と改称された。これが今日、いわゆる旧制第二高等学校と称せられる学校であるが、一九四九（昭和二十四）年に新制東北大学誕生とともに東北大学に包摂され廃校となった。

校舎・宣教師館の建築

仙台の中心部にある土地を校地として入手できたのであるから、次に進められなければならないのは校舎並びに宣教師館の建築であった。プールボーとオールトはこれより先、日本家屋を仮校舎として授業を開始した時から、将来建築したい校舎の望ましき案を考えはじめていた。特にプールボーは日本到着直後に初めて訪問した学校、フェリス英和女学校[註三三]のすべてを参考にしたい考えを持っていたので、校舎についても勿論フェリス英和女学校のことが頭にあり、外国伝道局から宮城女学校の校地購入許可を得る前から将来の校舎設計に備え、グリングをわずらわしてフェリス英和女学校の設計図を取りよせていたほどであった。彼女らは日本での生活をしてみて、校舎は日本人の生活様式をも充分考慮して設計した洋風建築にすべきであるとの考えを持ち、しかも校舎の設計のみならず机、椅子などの諸設備にいたるまで、女学校として女子の健康を充分に考慮し教育効果の向上に最適の環境となるものでなければならないという方針を持っていた。そのため、ミッション会議などで上京した時などにも会議終了後、横浜まで出向いてフェリス英和女学校その他の学校を参観したり、東京の女学校をも訪問したりした。例えば、一八八七年二月八日にケルカーに宛てたプールボー



婦人宣教師館

の書翰中にも、一月のミッション会議終了後、オールトと二人で横浜に赴いて見聞を広めることが出来たことを感謝しつつ校舎並びに施設に関する問題を詳述している。校地購入の許可通知が来る前にでさえ、このように熱心に暖房設備の問題、礼拝・美容体操その他に使用できる多目的大教室の問題、日本製家具（校具）の欠点の問題等々までをも詳細に研究していたのである。クーンズ氏が彼女らの望むところを充分理解して、その望みにかなうような机や椅子を備えてくれる事についても満足の意を表している。ただ、横浜や東京の諸学校を訪ねてみた結果、校地を購入し校舎や宣教師館を建築するためには彼女らの当初の予想よりもはるかに多額の資金が必要であることに気付き、外国伝道局の財政を考えると校舎等の建築が早急に行なわれるためにはアメリカの各教会の会員達が日本における女子教育の重要性と緊急性とを充分に理解し、祈りをもって応援の手をさしのべてくれることが必要であると訴えている。

プールボーらの熱心な訴えがききいれられ、同年四月になって校地を入手することが出来るや、建築費が準備される日の一日も早からんことを祈りつつ校地の理想的な利用方法を念頭において色々と想を練った。建築問題が具体化せぬまま、この年も終ろうとするので、プールボー達の校舎案をもとにして横浜在住の建築家サールダ(Sarda)が作成した設計図を外国伝道局へ送り建築許可をもとめた。しかしそれは仲々承認が得られなかったが、一八八八年（明治二十一）年に入って外国伝道局の校舎設計図が送られて来た。ところがその設計図は日本人の生活様式を知らぬ設計者によるものであったため、プールボーらはそれを受け入れるわけには行かず図面修正の必要を訴える書翰をケルカーに送った。[註二四] その内容は日本人の生活様式を説明しつつ、寄宿者に必要な浴室・蒲団収納用押入れ・蒲団乾燥用縁側等の増設の件、生活様式の違いにより不要なクロークルーム・寄宿生室の煙突・地下貯蔵庫等の除去の件などをあげ、更に教室数・食堂・炊事室・事務室などについても要望を述べ、外国伝道局の設計者が慎重に設計したことは理解できるが、日本人、特に少女達の生活様式を知らぬ者の設計であるため全く期待外れのもので

あって諒承できるものではないこと、自分達が考えた案の方がはるかに日本の実情に則し且つ建築費が少なくて済むことを強調したものであった。このようにして設計図が両者間を往復している間に月日は流れた。しかし遂に一八八八年三月三日付書翰でケルカーはプールボーに対しおおよそ次のような文面で建築の許可を伝えて来た。「外国伝道局としては設計図の修正が必要なことは諒解した。修正はサールダ氏と連絡の上実施することとし、二千二百乃至二千三百アメリカドルの予算で婦人宣教師館の、五千乃至六千アメリカドルの予算で校舎兼寄宿者の建築に着手してよろしい。校地内における建物の配置は在日宣教師社団の判断に一任する。東京、築地二十八番の宣教師館が三千五百アメリカドルで売却できる見込みがつかないので、ホーイ並びにシュネーダー用の宣教師館の建築を今、直ちに行なうことは出来ない。宮城女学校はキリストの名によって創立された学校であって、単に青年子女に英語を教えようとする一般の学校とは異り、教育を通して少女達の魂を神へ導く使命を持つものであるから、この使命を忘れずに邁進するなら神は必ずや宮城女学校の歩みを祝福し給うであろう。」

そこで早速ホーイ、シュネーダー、プールボーの三名が建設委員となってサールダと連絡をとり、設計図の再検討、内装・備品などの検討を済ませ五月になって礼拝堂兼講堂・教室・寄宿舎を含む木造校舎の建築に着手した。工事が開始されてからも、プールボーらは校舎としても寄宿舎としても生徒達の健康を大事に考えて採光、暖房に関する設備を良くしようと考え、又、寄宿舎の設備には日本人の生活様式を採り入れようとし、礼拝堂その他のシャンデリアや教室、自習室、寄宿舎生室などの照明器具については細かい要望を記して態々外国伝道局に注文[註三五]している。西洋風建築であるためであろうか工事の進捗具合は遅々としていた。同年六月一日に引退したホーイ夫人（メアリー・オールト）の後任として、一月三日に選任されていたエマ・プールボーは六月二十一日に「オーシァニック」号でサンフランシスコを出港して七月八日に横浜着[註三六]、十日後の七月十七日には仙台に到着しているが、彼女は八月十五日付書翰で初めて見る日本の様々な印象をケルカーに報告している。その中でエマは日本では何事も事の

はこびが極めて遅いことにふれ、校舎と宣教師館の建築も非常にゆっくりおこなわれているので、この調子で進むなら一八八九年の春までに新校舎へ移れるかどうか分からないと記している。

第二年度年次報告

なお、宮城女学校第二年度の歩みをふりかえって、プールボーは一八八八年六月一日付で外国伝道局へ次のような報告書を送っている。在校生数が若干減少して四十八名であるのは、結婚のため退学した生徒が若干名あったことと保護者の転勤に伴って転出した生徒があったためであること、洗礼を受けた生徒が十二名あったこと、他にも受洗志願者が三名あるが保護者の諒承を得られないでいること、毎日一時間の聖書講話の時間を生徒達が大事にしていること、三分の二の生徒が日曜学校に出席しており、残りの生徒は他の日曜学校の手伝いをしていること、寄宿舎生が八名あること、学校の歩みは順調であることなどが記されている。

June 1,1888.

Fathers and Brethren:

Looking over the records of work for the year, we realize that if we have not been without trials and discouragements, neither have we been without success sufficient to warrant our feeling encouraged that the hand of the Lord is with us.

True there has been a falling off in numbers, which however must be largely ascribed to a number of the girls having been married,and by the removal of parents from the vicinity of Sendai.

In other respects the condition of the school is highly satisfactory. The girs for the most part do good work, are docile and earnest; and in that higher aim which we keep ever before us, we see desirable results. The building of character is necessarily a slow process, requiring years of patient endeavor, and yet, among the forty eight girls enrolled we feel that there are few indeed, who are not striving, according to the knowledge they possess, to follow their Savior. Twelve of these are baptized Christians. Three others have asked for baptism but were forbidden by their parents. Eight are little ones who are growing up in the knowledge and love of God; and we have every reason to believe that a number of others are withheld from making open

profession, only by the authority of parents and friends.

An hour is given daily to religious instruction to which the girls give good heed. Two thirds of the whole number are in regular attendance at the Sunday-School and several give assistance in other schools.

During the Lenten Season special services were held every Friday,and daily during Holy Week. These services were well attended and a marked interest manifest. Truly we have reason to thankful for the handful we have been allowed to glean in the Great Harvest.

Personally, I have been wholly occupied with school work and the language, finding no time for outside work. Teaching four hours a day,and having the oversight of the girls in the house, I can find time for only two hours study, and this subject to many interruptions. Accordingly my progress in this is slower than I could wish ; but finding there is much, very much that can be done in English, I am content.

Statistics : Teachers-Foreign	2
Japanese	2
Chinese	1
Day scholars	40
Boarders	8
Average daily attendance	45

LIZZIE R. POORBAUGH

Since writing the above eight of the girls have made known their wish to receive baptism.

L.R.P.

第三年度開始

第三年度は九月十日に開始(註三七)された。英語・音楽・聖書の教師としてエマ・プールボーが就任したが、のちに宮城女学校の幹事となって学校の発展に大きな功績のある早坂哲郎も修身・数学の教師として就任した。授業は相変らず仮校舎で続けられたが、教室がせまく、新校舎の落成が待たれた。十一月十五



ルドルフ.F.ケルカー

日には発注しておいた新校舎用の机その他の校具の大部分がアメリカから届いた。工事が進むにつれて校舎の立派な外観が人々の目につくようになると入学希望者が増えて来た。(註三八)プールボーは十一月二十七日付書翰で「三十人の少女達が入学したいと申し出て来ています。しかし新校舎へ移れる日の見通しがたたないので、現時点では入学許可の約束は出来ません。現校舎では一人をでさえも入学させる余裕がありません。」と報告している。なおこの年は四月二十五日に市制及び町村制が公布（翌年四月一日より施行）され、四月三十日には樞密院が設置されて憲法草案の審議が始まった。又、国粋主義論がおこり、キリスト教に対する風当たりも強くなって来た。そのような中でプールボーが十月十四日にケルカーにあてて次のような書翰を送っている。「今日、日曜礼拝を終えて帰宅してみると、数人の紳士が私達を待っていました。彼等は陸軍の将校達であって、その大部分は生徒達の親なのですが、英語を習いに来たのです。生徒達の父兄の中には陸軍の将校が相当沢山居りますので、私達の学校は日本帝国の学校のような気がするほどです。」宮城女学校に在学したことのある早川京子はその回想記の中で、プールボーに関して次のように記している。「ミス・プールボーは実に男まさりと申すべき女性でありました。其の権威ある様子を忘れる事は出来ません。リーディングとグランマを受持たれましたが、教室で一番前の生徒の傍に椅子を寄せて教へられる様子は恰度、ナショナルリーダーにある絵のようでありました。先づ座につきながら『ガールズ』と見廻はされますと、プルッと致す程緊張味を感じ、あてられては大変と思ひました。然し下読みがよく出来て居ります時は、あてられて『ウェル』とほめられたいと思ひました。……学校創立の頃より社交界の指導者であられました。陸軍婦人会の洋食作法の先生、又、婦人洋服の相談相手、編物、語学の先生でありました。其頃仙台區と申しましたが區の上流社会を文明に導く指導者でありました。」このようなプールボーであるから求められれば、時間の許す限り誰にでも英語を教え、聖書を説き、その他の奉仕活動をも行なっていたの

である。キリスト教に対する風当りの強くなって来た情勢下であっても、陸軍の将校達の求めに応じて英語を教授することも、プールボーの伝道活動の一端であって、彼女の活躍ぶりがうかがえる。

一八八九（明治二十二）年四月十日、プールボーはケルカーに宛てて、冒頭から

"Home at last!" is what we say to ourselves again and again. Home means No. 75 Higashi Samban Cho, and we feel that we should like you all to know how grateful we feel for our "foreign house".

というやや興奮気味の書き出しによる書翰を送り、建築中であった校舎や宣教師館の工事がほぼ完了し、プールボー姉妹は四月一日から宣教師館に住んでおり生徒達も寄宿舎に住んで校舎内外の清掃整頓を行なっているが電灯取付け並びに机・椅子などの搬入が未了のため授業開始は四月十五日になることなどを喜びと感謝に満ちた筆致で報告している。と同時に外国伝道局にも次のような報告を送っている。(註三九)

To the Board of Com. for Foreign Missions, Ref. Ch. in the U.S.A.

Fathers and Brethren:

Another year has passed and again we have to report more blessings than discouragements in the work of the Girls'School. The membership of the school remains about the same that it has been during the last two years, occupying all the available room in the old school-rooms.

We report with pleasure a growing interest in the school on the part of the general public which is evidenced by the frequent visits to the school of public men and their spoken and written commendation.

In the school life we feel the influence of some strong characters, and we congratulate ourselves that some of them are found among the supported girls to whom we look for future teachers and assistants.

Nineteen of the girls now in the school have been converted. Two weeks ago the first baptism in our Sunday School took place.

The Sunday School has grown both in interest and numbers,including two English classes and one large class in Japanese.

With the close of this term has dawned the long looked for red letter day, the day on which we took possession of our new school buildings. Although the house is still in an unfinished condition, the kitchen, dining room, and dormitories are habitable and already those girls, who remained over the vacation have given to their fresh airy rooms a home-like appearance.

The School will reopen Monday, Apr. 15, by which time the school and class rooms will be ready for use.

We build strong hopes on the favorable influence our commodious building will exert and to us the future of the Girls'School looks bright.

Statistics:

Whole number of pupils enrolled	49
No. of supported girls	6
Average No. of hrs. given to instruction by us daily	5
Average No. of hrs. given to the study of the language daily, less than	1
No. of S. S scholars	38

Respectfully submitted,

LIZZIE R. POORBAUGH

EMMA F.POORBAUGH

校舎献堂式

この年の七月五日（金）は宮城女学校にとって記念すべき日であった。この日、午前十時から校舎献堂式が挙行され、式後、記念午餐会が開かれ百二十五名が食堂で会食を行なった。更に午後には終業式が行なわれた。プールボーはこの日の様子を外国伝道局へ次のように報告している。

This happy event took place in connection with the closing exercises for the year, July 5, 1889.

Term examinations continued to Wednesday evening ; Thursday was employed by all connected with the school in putting everything in the holiday attire,so that Friday morning found the Girls'School building gay with bunting,the stars and stripes of our own most beautiful of national emblems blending with the "Rising Sun" of Japan, while flowers,as is usual on such occasions, were arranged in rich profusion all about the room.

The dedication took place in the morning, beginning at 10 o'clock. In addition to the members of the school there was present a considerable number of the parents of girls together with twenty of the chief magnates and educators of Sendai, including the wife of Gov. Matsudaira (he himself was absent from town), Vice-Gov. Wadachi, Gen. -in-chief Sakuma and wife, of the Imperial troops at Sendai, members of the Senate and Assembly,etc.

The orators of the day were Rev. Ibuka of the Meiji Gakuin of Tokyo and Rev, Uyemura,of our Bancho church of the same place. The orations were good, strong speeches, such as the official gantlemen named adove would not listen to from choice, but such as they need frequently to hear and such as we hope will some day enlist their sympathies.

As they are our own pupils we will only say that the girls, so far as they took part in the service, bore themselves in such a way that we were not afraid that the audience would think their three years'study had been in vain.

At noon, in accordance with the custom of the country, luncheon was served to one hundred and twenty-five people, to some in the girls'dining room, and to some in ours. In the afternoon the girls entertained the audience with songs and recitations, and Vice Pres. of Miyagi Ken, Wadachi and Mr.Sudo,Vice pres. of the Local Assembly and nominal owner of the school, made short addresses. Rev. F. L. White of the Congregational Church pronounced the benediction.

Notwithstanding several unavoidable and unexpected circumstances,requiring a rearrangement of our programme at the last

moment, everything passed off pleasantly and during the day we found ourselves frequently regretting the impossibility of the attendance of our most interested friends in America.

DEDICATION SERVICE

Anthem : Great is the Lord	School
Prayer	Rev. Uyemura
Responsive Reading, Ps. III	Rev, D.B.Schneder
Gloria in Excelsis	School
Scripture Lesson, Prov. XXXI	Rev.Sugeta
Hymn : Before Jehovah's Awful Throne	School
Address	Rev. Ibuka
Anthem : O, Praise the Lord	School
Address	Rev. Uyemura
Dedication	Rev.D. B. Schneder
Te Deum	School
Benediction	Rev. Ibuka

Now we feel settled. Whatever happens or does not happen in the way of treaty revision, the Girls'School has a footing in Sendai, and without doubt in course of time will be felt as one of the strong influences for good in this part of the country. At no very distant day, the most experienced, cultured and successful lady teacher in all the Reformed Church will receive an urgent, we trust irresistible call, to come to the aid of the Girls' School. We should have her now, and I give her this hint in order that she may hold herself in readiness.

献堂式は、松平正直県知事夫人（知事公務出張中のため）、和達孚嘉大書記官（副知事）、佐久間左馬太第二師団長夫妻を初めとする仙台市各界の高官並びに代表的著名人二十名及び父兄多数が列席して午前十時から挙行された。記念説教は当時、「日本基督一致教会」の代表的人物である明治学院副総理井深梶之助、番町教会（現富士見町教会）牧師植村正久の両氏によって行なわれ、献堂の辞はD・B・シュネーダーによってのべられた。愈々神に献げられたこの宮城女学校の新校舎において従来よりもなお一層多くの少女達にキリスト教教育をおこなうことが出来るということで、関係者一同、神が与え給うた豊かな恵みに対して心より感謝の祈りをささげた。この日、校舎玄関前には、従来も記念行事の日に行なわれていたことではあるが、日米両国国旗がしっかりと組み合わされて立てられ、式典列席者一同、その下をくぐって式場へ向った。又、式場の両側の壁面には新校舎校地購入にあたって格別の好意をもって巨額の献金を寄せたスワンダー夫人、新校舎の机・椅子その他各種の備品を数多く寄贈したクーンズ氏両名の肖像画が向いあって掲げられてあり、列席者一同、宮城女学校は日本並びにアメリカの数多くのクリスチャンの祈りによって支えられていることに思いを致し、此の学校が建学の精神に立脚して与えられた使命を着実に果して行けるようにと神の導きを祈った。

押川の欧米視察

献堂式当日、宮城女学校創立者の一人である押川方義が不在であったのは、「合衆国改革派教会」在日宣教師社団、特にホーイとブールボーとの推薦と外国伝道局の招聘とを受けてこの年三月にキリスト教教育並びに伝道状況視察のためにアメリカ並びにヨーロッパ諸国への旅に出かけていたからである。したがって三月からは首藤陸三が押川にかわって名義上校主になっていた。ここで押川の欧米視察旅行について、若干ふれておく。押川の視察に関しては、押川訪米の翌年、一八九〇年五月二十八日からペンシルヴァニア州レバノンで開かれた「合衆国改革派教会」の大会で外国伝道局長クレメント・Z・ワイザーは次のように報告している。(註四〇)

"One of the most important events connected with our history in the last three years was the visit of Rev. Masayoshi Oshikawa, a native gospel minister of Japan, made at the request of our mission at Sendai. He attended all our district synods, travelling more than ten thousand miles in visiting and preaching to our congregations, practicing the most rigid and judicious economy in expenditure. His aimiable, modest and gentlemanly Christian demeanor among our ministers and people served as an inspiration to all who were so fortunate as to meet or learn to know him. He remained in this country from April, 1889, to January 31, 1890, on which latter date he sailed from New York, intending to visit a number of cities in England,Scotland, France and Germany, in the interests of Foreign Missions, and particularly of our work at Sendai. He sailed from Brindisi March 31, 1890, hoping by way of the Mediterranean and Red Seas to reach Japan early in May."

押川はアメリカ各地にある「合衆国改革派教会」関係の諸教会を訪れて、仙台におけるキリスト教伝道の現況、仙台神学校並びに宮城女学校の教育の成果などを報告し、各教会の会員がその祈りの中に仙台神学校並びに宮城女学校の教育をおぼえて絶えず支えてくださることに感謝の意を表してまわった。アメリカ各地での使命を終えた押川は一八九〇年一月三十一日、アメリカを後にすると一路スコットランドのエディンバラへ向かった。「エディンバラ医療伝道会」を訪ねて、嘗て押川を指導して正式に牧師となる決意をなさしめ、吉田の願う東北地方伝道へ、「東北地方を日本のスコットランドたらしめよ」と激励して押し出した押川の師、セオボールド・A・パームを再度、日本へ派遣するように要請するためであった。二月二十一日、「エディンバラ医療伝道会」の理事会が開催され、二十八名の理事の他に押川も陪席した。押川の要請事項は議題第九で取扱われ、求めに応じて押川は発言し、パームの日本に於ける功績を讃え、感謝すると同時にパームの再派遣を要請した。当日の理事会議事録中には次のように記録されている。[註四]

The Meeting was then addressed by the Rev. Mr. Oshikawa from Japan who was for long associated with Dr. T.A. Palm, the former Medical Missionary of the Society there. Mr. Oshikawa who stated that he appeared on behalf of the Christian Community among whom Dr. Palm laboured in Japan, gave a very interesting account of Missionary work and the spread of the Gospel in that country and spoke in the highest manner of the excellent work which had been done by Dr. Palm when in Japan. Mr. Oshikawa's statement which was listened to with great interest, concluded with an urgent request that Dr. Palm should be restored to his position of Medical Missionary of the Society and sent back to Japan in that capacity.

Professor Simpson as President of the Society having thanked Mr. Oshikawa for his address and several questions, eliciting further information, having been put to, and answered by, that gentleman, a discussion followed in the course of which Dr. Lowe made a short statement as to the circumstances which led to Dr. Palm's resignation of his position some years back. Eventually a motion was made by Dr.Lowe and seconded by Mr. Goldstream that the whole matter be remitted to the Business Committee for consideration and Report, with full power however to them to communicate with Dr. Palm and with Japan should they think it necessary on the other hand Dr. Pringle moved and Mr. R. Simpson seconded a motion to the effect that in the whole circumstances of the case, no further steps should be taken in the matter.

On the two motions being put to the meeting, Dr. Lowe's motion was carried by a very large majority.

A very cordial and unanimous vote of thanks having been accorded to Mr. Oshikawa for his address, the Rev. W.M. Murtrie, at the request of the President offered prayer in connection with the work in Japan, specially commending to God His servant who had addressed the Meeting and the Benediction having been pronounced the Meeting separated.

「エディンバラ医療伝道会」としてはその後も審議を行なった後、当時既に同伝道会宣教医師を退任しカンバーランドのウィグトン（Wigton, Cumberland）に居住していたベームに対し三月十五日に神学上の問題に関する四件の質問の書翰を送った。それに対する三月十八日付けのベームの回答書翰中に示されている見解は同伝道会の諒承するところとならず、したがって同伝道会としては三月二十一日開催の理事会で慎重審議の後、ベームを同伝道会の

宣教医師に再度任命して日本に派遣することが出来ない旨の回答が押川に伝えられ、押川の要請は遂に受けいれられなかった。なお、三月二十一日の理事会議事録中には同伝道会とパームの往復書翰文面がそれぞれ記されたその後に続いて次のように記録されている。(註四二)

Dr. Lowe then submitted proposed reply to Mr. Oshikawa the whole of which it is not necessary to quote here, it being sufficient to state that part in which the decision of the Director's is contained. It is as follows: —"We sympathize with you and your fellow Christian in Japan in the severance of the tie that bound you and Dr. Palm so closely together for many years in the fellowship of Christian service. Your touching appeal to us revived anew our feelings of deep regret that circumstances should have arisen which led Dr. Palm to resign his connection with us and which left us no alternative but to receipt his resignation. We have ascertained from Dr. Palm that those circumstances are the same now as they were then. Were it otherwise we need hardly assure you that it would be a great joy to us should God, in his providence, open the way for Dr. Palm's return to his much loved work in Japan."

「ノアの箱舟」

さて新築された校舎—この校舎は卒業生たちから「ノアの箱舟」とよばれて親しまれた—での授業は、従来の狭隘な教室の場合にくらべてはるかに効果的に進められ、又、町の人々の宮城女学校に対する関心も高まり、県当局者もしばしば来校して教育状況を視察したりした。教授内容も愈々充実したものになって来た。生徒達一同も勉強に一層励みが出て来た。此の年のクリスマスも、新築校舎での最初のクリスマスなので生徒達には忘れがたいものとなった。プールボーは外国伝道局へ次のように報告している。

Dec. 28, 1889

It scarcely seems possible to me that a year has flown by since I wrote you an account of the last Chrismas exercises in the "Girls' School." Yet so it is. Another Chrismas has come and gone, that one, of which both teachers and scholars have talked and for which we have planned for three years, that is, the first Christmas in the new building. We always feel like writing those words in large capitals, but we refrain.

First, you must know that by removing the sliding doors between the large and small rooms we have a large square room capable of seating, with some crowding, two hundred people. On the north and south sides of this room are four windows facing each other. At either side of the east side is an entrance door ; between them the whole surface of the wall is covered with blackboard surface. Here is the dais and teacher's desk. Between the first two windows on both north and south sides is additional blackboard surface. Over the blackboard on the south side, hangs the school clock, between the next two windows a "Map of St. Paul's Travels" presented to the school by Rev. E.N. Kremer ; between the next two a crayon head of Mrs. Swander to whom the school feels largely indebted. On the opposite side is a similar crayon head of Mr. B.F. Kuhns, of Dayton, O., who gave us the most beautiful furniture in Sendai for our school. We are not proud,only grateful. At the west end of thr room, the wall surface is broken by four doors leading to the verandas and dining room. This is our room and this is how we timmed it : Over the blackboard behind the desk hangs a picture of the Christ child in the manger and immediately under it in letters of pine the word HOLY, and the whole twined about with evergreen and overarched by the words, "Christ is born." Slender ropes of green climb over doors and windows, map and pictures, etc. and hang in graceful festoons between. At the west and in the largest wall space is a large cross of evergreens and red berries, surmounted by the letters in gilt I.H.S. The blackboards are covered with Christmas texts in the drawing master's best style and look like the work of Jack Frost. The wprds of Is. 9 : 6 in Chinese characters fill all the space between the windows, under the festooning, while Glory to God, etc., in like characters is written above the sliding doors. In the middle of the dais stands as large a Christmas tree as could be brought into the room. Thanks to the good ladies of Lewisburg, Pa., it was filled with books and useful articles which delighted the girls and gave the tree a very festive look. I trust this description helps you to fancy the room into which we gathered the school and their friends on the night of the 25th. The room was comfortably filled and the girls did very well. Mr. Hoy conducted the devotional exercises, the girls joining in the Gloria in Excelsis and the Creed. Mr. Moore delivered the address. All this in Japanese. The

girls then rendered a pretty little cantata, "The Morning Star" in the English language, and Mr. Sudo made a strong speech in behalf of the school and its purpose, etc. Mr. Hoy pronouoced the benediction, after which the tree was dismantled.

If you could have looked into the Nibancho Church on Christmas Eve, where the Schneders conducted the services of their school, you would have seen a similar sight, and if you could have beem with the other missionaries on Christmas day as they met their newly opened schools, you would have seen those who are still in a transition state, coming to the Light. When I look back to that first Christmass service in the dingy little house on Nibancho, when the only tune the girls could sing at all was the easy one of Boylston and compare that with the way in which they now render even our most difficult church music, I feel that they have come a great way in their three years journey. With the music they imbibe the spirit of the words. They can't help loving the words it is set to. It is wonderful what a new world music opens to the Japanese and how eager they are to enter. I have never yet met one who, however weak or thin or harsh or cracked the voice, will not try with all his might to sing.

なお校舎献堂式が挙行されたこの年、一八八九（明治二十二）年には、二月十一日に大日本帝国憲法が発布された。又、この日、憲法発布式直前、文部大臣森有礼が刺され翌日死亡した。四月一日には、前年施行公布の市制により、仙台区は新しく仙台市となった。

学則変更

一八九〇（明治二十三）年二月に本校は「宮城女学校規則変更認可願」を県に申請し、三月二十四日に承認された。それは、この年公布される改正小学校令では、従来四ヶ年の修業年限であった尋常小学校が三ヶ年又は四ヶ年に、四ヶ年の修業年限であった高等小学校が二ヶ年及至四ヶ年にそれぞれ修業年限を変更することになるので、これに即応して、尋常小学校四年の課程を終えた者を予科一年に入学させ、高等小学校の課程を終えた者を本科に入学させる女学校の体制をとると同時に教科内容を充実するためでもあった。新しい宮城女学校規則は全十九章百十条から成るものであった。参考までにその中第一条から第十二条までを次に紹介した上で改正点の概要を説明する。

宮城女學校學科課程表

學級	第一年級 第一學期	第一年級 第二學期	第二年級 第三學期	第二年級 第四學期	第三年級 第五學期	第三年級 第六學期	第四年級 第七學期	第四年級 第八學期
倫理	人倫道徳之要旨 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
國語及漢文	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上
英學	英音 全上 書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上
數學	算術 加減 全上	算術 加減 全上	算術 乘法 全上	算術 除法 全上	算術 四則 全上	算術 分數 全上	算術 分數 全上	算術 小數 全上
地理歷史	日本地理 全上	全上	全上	全上	全上	日本地理 全上	全上	全上
理科						動物 植物 全上	全上	全上
家事	和裁縫 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
圖畫	自在画 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
音樂	單音唱歌 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
體操	徒手体操 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
合計	九	九	九	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

學級	第一年級 第一學期	第一年級 第二學期	第二年級 第三學期	第二年級 第四學期	第三年級 第五學期	第三年級 第六學期	第四年級 第七學期	第四年級 第八學期
倫理	人倫道徳之要旨 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
國語及漢文	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上	講読 全上 作文 全上 習字 全上
英學	英音 全上 書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上	書取 全上
數學	算術 加減 全上	算術 加減 全上	算術 乘法 全上	算術 除法 全上	算術 四則 全上	算術 分數 全上	算術 分數 全上	算術 小數 全上
地理歷史	日本地理 全上	全上	全上	全上	全上	日本地理 全上	全上	全上
理科						動物 植物 全上	全上	全上
家事	和裁縫 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
圖畫	自在画 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
音樂	單音唱歌 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
體操	徒手体操 全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上	全上
合計	九	九	九	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

第一章　目　的

第一条　本校ハ女子ニ高等ノ普通教育ヲ授ル為ニ設ルモノトス

第二章

第二条　学科ヲ分テ豫科本科ノ二トス

第三条　各学科ニ撰科ヲ置キ倫理課ト共ニ或学課ヲ撰脩スルコトヲ許ス

第三章　脩業年限

第四条　脩業年限ハ豫科三年本科四年トス

第四章　学年及学期

第五条　学年ハ九月十一日ニ始リ翌年七月十日ニ終ル之ヲ分ツテ三学期トナス則チ左ノ如シ

第一学期　自九月十一日　至十二月廿四日
第二学期　自一月八日　至三月廿一日
第三学期　自四月八日　至七月十日

第五章　授業及休業

第六条　各学科（撰科ヲ除ク）ノ授業時間ハ毎週三十時トス

第七条　毎学年中ノ休業日ハ左ノ如シ

一　土曜日、日曜日、及大祭日祝日
一　冬期休業　自十二月廿五日　至翌年一月七日
一　春期休業　自四月一日　至同月七日
一　夏期休業　自七月十二日　至九月十日
一　臨時休業

第六章　各学科ノ課程々度及教科用書

第八条　各学科ノ課程々度及教科用書ハ左表ノ如シ※但シ教科用書ハ新著良書ヲ撰ブヲ以テ変更スル事アルベシ

（※前頁の表）

第七章　入学及退学

第九条　入学ハ毎学年ノ始ニ於テ之ヲ許ス尤欠員アルトキハ臨時之ヲ許ス事アルベシ

第十条　豫科第一年級ニ入学ヲ許スベキモノハ尋常小学科ヲ卒ヘタル者若クハ之ト同等ノ学力ヲ有シ年齢十年以上ニシテ左ノ試験ニ合格ノモノトス

一　讀書
一　作文
一　算術

第十一条　豫科第二年級以上ニ入学ヲ許スベキモノハ年齢十年以上ニシテ該級ニ適当ナル入学試験ニ合格ノモノトス

第十二条　撰科ニ入学ヲ許スベキモノハ該学課ヲ修ムルニ適当ナル入学試験ニ合格ノモノトス

第三条に「各学科ニ撰科ヲ置キ倫理課ト共ニ或学課ヲ撰修スルコトヲ許ス」とあるのは、正課として聖書をおくことが許されなかったことに対する措置であったろう。予科、本科とも毎週土曜日・日曜日休業で三十時間の授業であり、教科目の課別は従来の文学（和漢・英）・学術（算術・代数・生理学・植物学・道徳学・心理学・論理学）・雑科（唱歌・裁縫・畫学・体操）・聖書の四課目から倫理・国語漢文・英学・数学・地理歴史・理科・家事・図画・音楽・体操の十課目となり各課目内の諸教科の充実がはかられた。試験は入学試験・学期試験・学年試験・卒業試験・撰抜試験の五種があり（第二十四条）、卒業試験は二回行なわれることになっていて、第一回は本科二年の終りに、第二回は本科四年の終りにそれぞれ二年間履修学業全体について行なわれ（第二十八条）、撰抜試験は職員会議の上、学業の進歩秀逸なる者を選抜して臨時に試験を行なって昇級又は卒業を認める（第二十九条）のであった。寄宿舎の舎費は一ヵ月三円（第六十三条）であり、寄宿舎生に関する詳細な規定（第六十一条～第八十八条）があり、生徒心得も規定（第九十八条～第百七条）されている。なお職制（第百八条）に関しては、校長・教員・舎監（女二名）・書記の他に、「校長ノ職務ヲ補佐シ校長事故アルトキハ其職務ヲ代理ス」る者として幹事一名が置かれることとなった。更に職員会議に関しても「校務ヲ商議センカ為メ毎月第四金曜日終業後ヨリ職員会議ヲ開ク、但時宜ニヨリ時日ヲ変更シ及臨時会議ヲ開クコトアルヘシ」（第百九条）、「職員会議ハ校長幹事及舎監ヨリ成立ツモノトス」（第百十条）と定められた。この改正によって、学校としては従来の家塾的教育の体制から、新時代にそくして「女子ニ高等ノ普通教育ヲ授クル」（第一条）女学校へと発展する体制をととのえたように思われたが、しかしこれは、国内に国粋主義の運動が活発になり、従来の欧米文化の絢爛たる姿にのみ魅せられてその摂取に思いを奪われていた全国的な姿に対する批判という形で諸種の見直しがなされていたが、本校の場合には文部省の方針に基いて県当局から強い要望があり、学校の内容に変更を加えざるを得ず、変更認可を申請したのであった。この申請の際に認

可申請書に添附されている「宮城女学校職員」表は、当時の宮城女学校の教職員構成並びに担当教科目を示すものであるので次に紹介する。

宮城女学校職員

校長			仝	稲垣とよ子
幹事			国語、漢文、数学、理科	早坂哲郎
教員		欠員	図画	武田文太夫
			家事	宮本みさ子
	倫理、英学、家事	リゼ・アール・プールボー		稲垣ぎん子
	音楽、体操			
	倫理、英学、家事、音楽	リゼ・アール・プールボー	舎監	稲垣とよ子
	倫理、英学、地理歴史	エマ・プールボー	舎監	
		稲垣ぎん子	書記	欠員
			外教員三名四月中採用ノ見込ニ候	

これによれば、当時は幹事は空席であること、稲垣ぎん子、稲垣豊子姉妹は教員兼舎監であったこと、規則変更が承認されれば、日本人教員三名の採用を実施しなければならなくなる見込であることがわかる。

プールボーの報告

なお、「宮城女学校規則変更認可願」を県に提出する直前の一月二十五日にプールボーが外国伝道局へ送った報告書の中には次のように記されている。

"I go into the school room at half past seven every morning and continue there on an average of five and a half hours. Allowing three hours for meals and recreation, there remain but three half hours between six in the morning and six in the evening in which to look after the housekeeping of both houses, receive accounts and make settlements, attend to visitors, workmen, etc.

and hear Kittie's recitations.

What I have said of myself, can also be said of the school. No time is wasted. The sudden revulsion of feeling against foreigners of which one hears so much all over the Empire, is felt in our school, less, perhaps, than in some others, but it has sufficed to prevent the growth we fondly expected. The girls that are in the school are loyal pupils, very grateful for the comforts provided for them and evince their earnestness by hard work.

Recently we received from the officers of the local government a proposition to make such changes in our course of study as will give young women an opportunity to secure a thorough Japanese education; this change in no wise to affect the moral or religious character of the school. In consideration of such change the Governor and Educational Secretary of Sendai promise to bestow the weight of their influence in favor of the school.

Hoping, believing that this may prove our opportunity, we are making every effort to meet their requirements, in so far as the policy of the mission will permit. This will involve the employment of more and higher grade Japanese teachers during the coming year, but will require less of English,since we have concluded to teach all natural sciences and mathematics in Japanese."

すなわち、ブールボーは、毎朝七時半に出勤して校長としての執務事項の処理を行ない、生徒に対しては一日平均五時間半の授業時間を担当するという多忙な毎日であった。全国的に、外国人に対する感情の激変が感ぜられる時代となって来たが、生徒達が学校生活を誠実に送っている様子を見ると、県当局からより一層日本的な教育を行なうよう教科課程の変更を実施するようにとの要請を受けても、生徒達にとってより効果あるものとなるのであれば、キリスト教教育の方針を崩すことのない限り出来るだけ県当局の要請にそうように変更を実施し、その変更を、将来なお一層教育を発展させることが出来るようになる契機としたいと考えていた。

エマ・ブールボーも姉に劣らず多忙な毎日を送っていた。英語・聖書・音楽などの授業を毎日五時間行なっていた。又、六人の生徒にオルガンの指導を行なった。又、毎晩の寄宿舎生の祈禱会の指導にもあった。更に月曜日の

夜は一週間の教育計画の立案その他教育関係の事務処理、水曜日の夜は教会の祈禱会、金曜日の夜は課外時間としての裁縫・編物の指導、土曜日の夜は生徒達との読書会・懇談会・社交会など親密の度を増すための時間という具合で、これら以外の時間に日本語の勉強や教会関係の行事、更には学校や教会以外の諸会合などがあるというように活躍していた。

なおこの年六月、宮城女学校創立当時よりブールボー、オールト（ホーイ夫人）、エマ・ブールボーの良き協力者として活躍し、学校にとって大きな陰の力であった稲垣ぎんが、妹豊子と共に退職した。前に紹介した稲垣秋香（ぎん）の回顧文中で彼女は「實に其頃の私は年齢も若く学力乏しく、経験もなく今にして考へるとき身に冷汗を流す次第でございます。併しあの宮城野の小萩とも思ふ可愛らしき少女等に大和魂を失はせぬような女学校を作りたい念願に満ちゝてをりましたのに、外国の教師らは又日本女子をあっぱれ米国婦人に作り上げようとされるので自然意思の疏通を欠き此点では苦しみました。」と記しているように、あるいは挫折感から退職したのかもしれない。

又、九月には、生徒達によって文学会が創設され、毎月、生徒達の執筆文によって成る雑誌「宮城野」を発行した。会費は月五銭であったが賛助会員としての教員の会費は七銭であった。この年、わが国では六月十日に貴族院多額納税者議員選挙、七月一日には衆議院の第一回総選挙が実施されたが、直接国税十五円以上を納める二十五才以上の男子による制限選挙であった。又、十月三十日には「教育ニ関スル勅語」が発布された。一八九一（明治二十四）年になって間もなく、宮城女学校の第五年度が終ろうとする頃、「合衆国改革派教会」の出版物の「ザ・ミッショナリー・ガーディアン」誌の一八九一年四月号に宮城女学校に関する次のような記事が記載された。(註四三)

The Girls' School.

We cull the following items, as of general interest, from a recent letter from Miss Lizzie R. Poorbaugh. "Both my sister and

myself feel that with the set of teachers we employ, we ought to have more than forty pupils. And yet as every school in the empire is ' shanky', as I heard an old missionary say yesterday, we cannot expect a large number of girls at their own expense. There are several reasons for this. One, the general poverty of the people ; another, lack of interest in female education ; and another, the almost irresistible impulse to go to Tokyo for everything desirable. Circumstances are such, that we cannot afford to take pupils at a less expense than the Tokyo schools ; rent being the one item that is less expensive here than there. So that for girls able to support themselves, it is cheaper to go to the older larger schools in Tokyo than to stay here."

In answer to an application by the Ladies' Missionary Society of Heidelberg Reformed Church, Philadelphia, for a pupil of the school as a beneficiary, she writes :

"I have the girl now for the Heidelberg Missionary Society of Philadelphia. In fact, I have four girls. One from the next term and three since the close of last year, for whose support no provision was made ; but I did not feel that I could turn them away. The girl I mean for the Philadelphia friends is Miyamoto Mura (the last is the Christian name), aged 17 ……O Mura has been in the school since the first day of its existence, at her own expense up to the beginning of this year. ……Her father …lost all his worldly possessions, so that he felt he could not keep his daughter in school any longer. But she, from being a banker's daughter, was willing to take the place of the lowest servant in the school, if by so doing she could remain. Of course that is impossible. If she gave her whole time to servants' work, she could earn only a small portion of her expenses and would have no time at all for her studies ; so I took her as a supported pupil. During this time she has crocheted all manner of things trying to eke out her expenses, but it amouns to so little. …She is a good girl ; a very faithful, loving girl of sound Christian principles, and an excellent worker in church and Sunday-school."

これはブールボーの報告に基き、宮城女学校の諸状況を教会員に知らせるための記事の一つであるが、これによるとブールボーは女学校の在学生すべてが学費を何等苦労なく支出することが出来るものではないことに気づいていること、日本では国民全体の生活水準は割合に低く、しかも女子教育に関しての認識も低いのに加えて、若し

同じ位の出費をするならば地方に居るよりは東京に出た方が良いというように何事も東京中心という考えが一般的であるため、仙台のような地方都市で女学校を運営する場合には、学校運営上授業料を東京にくらべて非常に低くすることも出来ないとすれば、優秀な生徒で学費支出に困難を感じているような者がある場合には、奨学金を提供できるようにしたいと考えていることがわかる。

そのような考えのもとにプールボーとしては奨学生にふさわしい生徒何人かの中の一人として、宮城女学校創立当時から在学している優れた生徒、宮本むら（おむらさん）の名をあげ、フィラデルフィアのハイデルバーグ・リフォームド教会婦人伝道局の奨学金を受けるにふさわしい推薦理由を詳記している。宮城女学校では、その後も数多くの篤志家クリスチャンやキリスト教諸団体から奨学金を受けて勉学を続けた奨学生は多数あり、彼女らはそれぞれ感謝して勉学を続け、卒業後も伝道界、教育界をはじめ各方面において奨学金提供者の期待にこたえるような生涯をすごしているのであるが、今ここでプールボーによって推薦されている宮城女学校最初の入学生宮本むらは、プールボーの期待に充分にこたえる働きをするようになるのである。

メアリー・A・ケルカー記念蔵書　この年、アメリカから宗教書・歴史書・旅行記・伝記・科学書・芸術関係書・小説などの図書二百八十二冊が送られて来た。ケルカー夫人メアリーの召天を記念してケルカーが宮城女学校生徒のために寄贈したものであり、生徒達一同に大変喜ばれ「メアリー・A・ケルカー記念蔵書」として図書室に備えられた。プールボーが三月十日にケルカーに宛てて送った書翰の中に次のような文面がある。

"Up to the time of receiving the Mary A. Kelker Memorial Library, we had no suitably furnished room for the girls when not occupied with their lessons at their desks. Upon the arrival of the books however, a carpet was procured and a room fitted up to accommodate them. As so many persons write to know just how we live, I will describe to you this room in which the girls

spend most of their leisure time & in which they hold their private meetings for prayer. It is an oblong room facing east & south, the fire-place in the middle of the western wall & a door both sides.

The book case finished in red lacquer stands in the center of the largest wall space on the north side & above it, in a dark chestnut colored bamboo frame, hangs a large photograph of the late Mrs. Kelker, the recess formed by the chimney is occupied by a Wilcox & White Cottage Organ & above it against the wall in a neat frame one of the memorial cards procured in honor of those who contributed funds toward the erection of the building ; between the east windows, also in a bamboo frame, hangs a photograph of Mr. R.E. Kelker without which the whole would seem incomplete. In the center of room, stands the reading table & above are scattered both armchairs & straight chairs. The room is lighted by means of a pretty hanging lamp & the windows furnished with brown holland shades.

Here most of the girls spend their Saturday afternoons & evenings & most of their leisure hours during school days.

One may enter the room when he will, he is sure to find two or more girl with their work or book, or a single girl practicing her music lesson or a group singing.

For this comfortable place we are indebted to Mr. Kelker whose desire was in this instance, as in many other,that no public acknowledgement be made of the gift. But in the present state of our work it seemed to me desirable that all our people should know of it, as it is so suggestive. Every time we receive a fresh copy of one of our church papers we are reminded by the obituary notices, that Death is busy among the people of our communion. Do none of those bereft ones raise memorials to their dear dead ? We know they do. Will they not consider the appropriateness of placing such memorials in the foreign mission field ? Is not a soul redeemed from the bondage of heathenism a better memorial to our loved dead than a marble shaft ? Or, if your means do not permit an expensive outlay can you not add to your regular contributions to missions, such sums as you have been in the habit of spending for the pleasure of your departed friends ?

The hearts of those who have buried their dear ones are very tender & I wish not to wound them by reminding them of their loss but only to suggest the fitness of giving to foreign missions that which is no longer needed by those whom God has called home."

生徒達が、海の彼方の多くの主にある兄弟姉妹によって備えられた新しい教育環境の中で、またまたあらたに恵まれた信仰による贈り物である「メアリー・A・ケルカー記念蔵書」を感謝して用いながら彼女らの周りにかかげられた寄贈者ケルカー夫妻の温顔に励まされつつ嬉々として勉学にいそしんでいる姿を瞼に浮べることが出来る。そして又アメリカの教会の数多くの教会員の祈りと励ましとを受けて故国を後にして異教の国日本の少女達、婦人達の教育に献身すべく仙台に着任したプールボーが、数々の思わざる困苦をのりこえて進めて来た宮城女学校の教育が今や着々と成果をあげつつあることを目のあたりにして、多くの主にある兄弟姉妹を励まして、宮城女学校のために思いを馳せるように導き給う神に感謝の祈りをささげている姿をも思いうかべることが出来る。

四月になってプールボーは宮城女学校第五年目の歩みをふりかえって次のような報告書を外国伝道局へ送っている。

第五年度年次報告

April, 1891.

Dear Fathers and Brethren,

To all outward appearances the past year in the Girls' School has been an uneventful one, but to us who have felt, as it were, every pulse beat of its inner life, the year has not been without its lights and shadows, its causes for anxiety and its sources of rejoicing.

Whatever adverse influences were brought to bear upon the school during the year have, we believe, been more than counteracted. On the 8 April, 1890, a change was effected in the course of study and in the personnel of the native faculty. By this change, made at the urgent request of the local government, the Japanese course of study was enlarged and the English shortened. At the same time the native teaching force was doubled and teachers of a higher grade employed.

This change accounts for the discrepancy between my estimated and actual expenses for the quarter ending May 31, 1890. On the whole, however, the change has been beneficial. While the number of pupils has not increased, the number of boarders

has, and at no time since its organization has the spiritual condition of the school been better or even so good as at present. Though there are a larger number of unbaptized pupils than there were last year, they are new girls. All that were with us last year have perceptibly grown in spiritual knowledege and practice, and we have very good reports from those Christian girls who have gone out from the school.

Daily Bible classes and devotional exercises are held for all the pupils and are faithfully attended, and the semi-weekly prayer-meetigs have grown in interest, those held during the Lenten season having been particularly refreshing. The Sunday afternoon Young people's meeting has also increased, so that it now numbers every pupil in the school.

I append the ststistics for the year:

Whole number enrolled		42
〃	〃 in attendance, Apr. 1891,	38
〃	〃 Boarding Dept.	30
〃	〃 Christians	29
〃	〃 Candidates for baptism	2

これによると、この一年間は、外見的には平穏のように見えたが内面的には明暗の二面があり、心配と感激とが錯綜しつつ過ぎ去った年であった。事実、この年は教科面では県当局の要請にこたえて所謂日本コースとも称すべき面が充実され、それに伴って優秀な日本人教員を新たに三名採用しているのである。(註四四) したがって財政面では赤字決算とはなったが、教育内容の充実が行なわれたので、将来的展望に立てば有意義な変化が行なわれたわけであった。生徒総数は増加してはいないが寄宿舎生数が増加してそのため学校としては落着いた教育が行なわれる体制になった。毎朝の礼拝や聖書の時間も落着いて敬虔な思いのうちに守られるようになり、週二回行なわれる祈禱会も盛んになって来た。日曜日午後の青年会も出席者が増加の傾向にあるという具合で、結論的には過去五年間の中で

この一年は精神的には最も落着いた状態で終了していて、校長としては満足できる一年であったようである。

驚くべきことは、この学年度在籍生徒三十八名の中八十パーセントにあたる三十名が寄宿舎生であり、又、在籍生徒の八十パーセントにあたる二十九名が既に洗礼を受けてクリスチャンになっているということである。未信者はそのほとんどが新入生であるが、その中二名は受洗希望者であるという状況で、キリスト教教育の方針を崩すことのない限りは、県当局の要請にそうような変更を行なっても教育の成果をあげるようにしようというプールボー校長の姿勢がつらぬかれている。プールボーは、一年間をふりかえって、次のような言葉でこの報告書をしめくくっている。

On the whole, as the end of the year approaches, we look back and as we have been able to say in the past, we can say now, too, that there is greater reason for hope than for discouragement. We have been blessed more than our feeble efforts deserved and only the unbelieving heart can fail to rejoice.

Personal report, aside from school work I have none. Since last September I've been in the classroom five and a half hours daily except Saturday. I teach six Bible lessons each week and until lately conducted two prayer-meetings each week and one Sunday School. I continue the S.S. work but the prayer-meetings have been given over to the care of some of the older girls. I am supposed to study the language one hour per day, but do so subject to interruptions of days at a time and can not report "progress".

まことにプールボーは、「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す」のであって「希望は失望に終ることはない」（ローマ人への手紙第五章四～五）という信念のもとに、使命に燃えて教育に専念しているのである。

第六年度開始

一八九一年九月、愈々第六年目を迎えた。その頃、アメリカでは外国伝道局が宮城女学校へ派遣する教員としてペンシルヴァニア州チェンバーズバーグ（Chambersburg, Pa.）出身のメアリー・C・ハロウェル（Mary C. Hollowell）を選任していた。ハロウェルは十月二十五日（日）に「エムプレス・オブ・インディア」号でヴァンクーヴァーを出港して十一月八日（日）に横浜に到着[四五]した。宮城女学校の教員組織が次第に充実して来た。この第六年目一年間の歩みについては、翌年六月二日にブールボーが外国伝道局へ送った年次報告書に記されているが、そこには極めて注目すべき内容が含まれているのでその報告書を次に紹介する。

June 2, 1892

To the B.C.F.M. for Ref. Ch. in U.S.A.

Dear Brethren :

As must necessarily be the case in matters and things of slow growth, the report of Miyagi Jogakko for tho year just closed varies so little from those of previous years that it is scarcely needful to repeat.Following as closely as possible the routine prescribcd by the policy adopted some years ago as that best fitted to accomplish tho desired end in the school, each year finds us doing very much the same work we did in the last, the only change being in the girls under our care.

At tho close of our sixth year we find no great increase of membership and have no conversions to report, but we find some earnest young women in the stead of the little girls who came to us five and six years ago. At least half a dozen of those girls are ready to help new pupils in every way and, in many things, they impart the lessons we taught them with greater ease than we could. Espccially is this true in matters partaining to personal traits, habits of neatness, etc. Many of the older girls are a great assistance to us in helping to guard the hearts and morals of the younger ones, so that in both moral and intellectual culture, no less than in spiritual, we can see sure, if slow, progress.

One of the girls who left school last year to do the work of a Bible woman has given entire satisfaction in her work. In her we reap the first results of beneficiary education in Miyagi Jogakko. In another year we shall have two more for the same

purpose who give promise of equal efficiency.

Of the other girls, six are doing S.S. work in various places and some are making arrangements for special work among the children of their neighborhood during tho coming long vacation.

Of former pupils, though of many we have lost sight, reports come to us at intervals of a very encouraging nature ; of the influence for good of one, over unbelieving parents ; of another over her husband, of another's work with her young brothers and sisters, etc. Thus the broad sown upon tho waters comes back to us and we feel that, notwithstanding our patience has often been sorely tried, and our burdens sometimes seemed too heavy to be borne, there is much cause for gratitude in the results of our work.

The health of both pupils and teachers in the school has been reasonably good and, as I look at the girls assembled today, I feel justified in calling them a happy family blest with many of heavens richest gifts.

The most exciting or unusual occurrence of the year was an attempt on the part of five of the best girls from the two upper classes, in cooperation with certain outside advisers, to wrest the mangement of the school from tho foreign teachers and vest it entirely in the Japanese.

By way of parenthesis—notwithstanding this affair was carried to such extent as to require the expulsion of the girls, we still call them some of our best girls, for it must not be thought their Christian faith was in any degree weakened. It was only a strong assertion of a difference of opinion as to what really was for the highest good of the school. These different opinions, however, were incompatible. --As the details of this matter were fully recited from time to time as they arose, I shall not repeat them. But I wish to call your attention to this fact ; that what in America are matters belonging entirely to Boards of trustees or faculties are, in Japan, largely the affairs of the students. This matter of the control of mission schools, is a matter of course to us but it is not a matter of course to the Japanese, and so long as it remains as it is, there will continue to arise from time to time an intollerable amount of friction. Of course, as long as the Mission furnishes the money for the support of the School, we can keep the management in our own hands but whether by so doing (in so doing outraging the sense of right and propriety of our Japanese brethren) we shall eventually accomplish the most good, is a question which all Japanese and many missionaries would answer in the negative. For myself, I freely admit, I have not the tact or talent or sufficient grace to teach under the

Japanese so long as I'm weighted with tho responsibility of being a missionary teacher in a mission school.

To teach in a Japanese school without such responsibility is the easiest thing in the world to do, to maintain the Christian character of a mission school under Japanese control, the most difficult.

With grateful appreciation of the great kindness and confidence you have freely bestowed upon us during the past year and hopes for better and brighter things to report in the future, I tender this report.

Respectfully submitted,

Lizzie R. Poorbaugh

すなわち、この一年間は、生徒数や受洗者が特に増加したわけではないが、五、六年前に入学した幼い少女達が今や健やかに成長して立派な上級生になっており、新入学生や下級生を精神面においては勿論のこと徳育・知育の面でも先輩として適切な指導を親切に行なうようになっており、又、学業半ばで召命を感じ婦人伝道者となって伝道活動をして成果をあげている者もあり、更に彼女に続いて婦人伝道者になろうと研鑽をつんでいる者が他にもあることなどを考えて、ブールボーらは此の学校の教育を祝福し導き給うた神に感謝をささげている。この一年の歩みの中で一番はらはらさせられた異常な出来事として、上級二学年に在学する最も優れた生徒五人が、ある外部の助言者達と協力して管理運営権を外国人教師達の手から完全にもぎ取って（wrest）日本人に移譲するようにしようと企てたことがあった事、この出来事のためにこれらの生徒が退学させられることになったが、それにも拘らず彼女らのクリスチャンとしての信仰は聊かも失われていないのであるから彼女らは依然として最も優れた少女であると言えること、学校で最も大事なもののためには何がなされねばならぬかに関してはどうするのが一番良いかという事に関しては様々の意見がありうるが、アメリカでは理事会や教授会で扱うべきことを日本では生徒達が問題としていることに注目してほしいこと、ミッションスクールの管理運営の問題は在日宣教師社団の構成員である宣教

師が取り扱う問題であり、この状況が続いていれば時々は忍び難い軋轢が生ずることもあろうが、在日宣教師社団が学校運営費を供給する限り宣教師が管理運営を続けて行かなければならないこと、プールボー自身としては自分がミッションスクールにおける宣教師である校長としての責任を有している限り日本人の管理下で教育にあたるつもりはないことなどを報じている。

いわゆる「宮城女学校のストライキ」

この報告書でプールボーが「一番はらはらさせられた異常な出来事　the most exciting or unusual occurrence」とか「この出来事　this affair」と呼んでいる出来事こそ相馬黒光の「黙移」に記されている、いわゆる宮城女学校のストライキなのである。

「黙移」によると、「ストライキの顚末」の見出しのもとに、冒頭にはおおよそ次のようなことが記されている。「明治二十五年二月上旬、生徒一同が講堂に集合し、上級の五人(斎藤冬、石川梅代、町田辰、尾花梅代、小平小雪)がステージ直前に腰をかけたところに入って来た校長ミス・プールボーが生徒一同にむかって『この五人の人達は—とここで事情を説明し—残念ながら今日限り学校から出てもらわねばならないことになった、お前達は軽挙盲動を慎しみ、自分達に与えられた勉強に専心するように……』というような一場の訓示めいたことであったと記憶する。」と記し、「ストライキの顚末」並びに「退校とその後の消息」の見出しのもとに、「恐らくこれが日本最初のストライキではないかと思う」として約十二頁にわたって述べている。ところでこの黒光の「黙移」の内容は事実を正しく伝えているのであろうか。ここで黒光のいわゆる、宮城女学校のストライキと称する出来事にふれておくこととする。


相馬黒光

従来、この出来事に関しては、宮城女学校にほんの一年くらいしか在学しなかった相馬黒光(星良)の回想による自伝的作品「黙移」や「宮城女学校五十周年史」に黒光が寄せた「宮城女学校最初のストライキ」だけに基づいて扱われて来た。とこ

ろで「黙移」は元来、一九三四（昭和九）年一月から六月にわたって雑誌「婦人之友」に連載されたものに加筆増訂がおこなわれて一九三六（昭和十一）年に女性時代社から発行されたものであるが初版発刊の際に黒光自身があとがき「『黙移』の後に」の中で「事実を語ると申しましても何分四五十年以前にも遡る旧いことでございますから、記憶の間違いも多かろうと思われます。ひとえに識者の是正を願う次第であります。」と記しているように全く記憶だけによって述べられたものである。又、島本久恵著「明治の女性たち」（昭和四十一年九月三十日発行）所載の「相馬黒光」の冒頭（二九一頁）に「雑誌『婦人之友』がドキュメンタリー小説の連載を企画し、その第二番目に（最初は森律子）相馬黒光がのぼり、羽仁主筆夫妻の意向で、その話の聴き役と執筆が私にまわり、…」とあることからわかるように「黙移」は黒光の口述を島本久恵が筆記したものである。これにくらべて「宮城女学校最初のストライキ」は、その中に「宮城女学校の光輝ある創立五十年史を編輯される時に、こんな題は甚だ不適当ではないかと再三躊躇いたしましたけれど、事実は事実としてはっきりさせておくことは必要であるやうに思ひ直しまして、貴重な紙面を汚がすことに致したのでございます。」とあり、又、「然し是は私一箇の側面観に過ぎないもので、又遠い過去の記憶がボンヤリ薄れて、年號とか場所とかに或は誤りあるやも知れませんから、豫めお斷りをしておきます。」とあるところから推測すれば黒光自身が執筆したもののようである。

黒光の回顧文

そこでここに一応、黒光自身の執筆と思われる「宮城女学校最初のストライキ」全文を紹介した上でこのストライキといわれている出来事を明らかにしてみよう。

宮城女学校最初のストライキ

相馬黒光

宮城女学校の光輝ある創立五十年史を編輯される時に、こんな題は甚だ不適当ではないかと、再三躊躇いたしましたけれど、事実は事

実としてはっきりさせておくことは必要であるやうに思ひ直しまして、貴重な紙面を汚がすことに致したのでございます。明治二十五年二月上旬、春とはいへ東北はまだ冬の或日、私はいつもの通り登校いたしますと、生徒一同に講堂に集れといふことでした。何事だらうと入って参りました、と、今日は又どうしたことか、一番上級生の斎藤お冬さん、次に石川梅代さん、町田お辰さん、尾花梅代さん、小平小雪さんの五人は、自分達の座席をからっぽにして、ステーヂのすぐ前に並んで腰をかけました、場内何となく一種の不安が漂ふてゐまして、私には或豫感を覚えるのでありました。

やがて校長のミス・ブルボーが入って来て壇上に立ち、生徒一同に向ってかう云はれました。

「此五人の人達は是々のことで残念ながら今日限り学校から出て貰はねばならないことになった。お前達は苟も軽挙盲動を慎しみ、自分に與へられた勉強に専心する様に」

といふような一場の訓示めいたものであったと記憶致しますが、非常に悲壮な顔をして一言毎に興奮の度を増し、終に抑制しきれなくなったのでせう、go away go away と、左手のドーアを指して怒號されました。満堂片唾をのんで聞いてゐましたが私も異状な憤懣と驚きで神経は硬直してしまひました。五人の先輩は、徐ろに起ち上り少しうつ向きながら順々に講堂から出て、永久に母校を去ってしまったのでありました。

事件がかう急轉直下して爰に至る迄は、お互ひの団結が固くて能く秘密が保たれてゐたために、お家の方々には全然寝耳に水の愕きでありました。お冬さんは、年長者であり、中堅人物としても、中々責任が重いので、お辰さんと一緒に町田家に行き、此顛末を詳細に説明してお詫びをなさいました。お辰さんのやうな、風にもあてられず大切に育てられたお嬢さんが、あられもない物騒な運動に投じたのは、いかなる運命の悪戯でございましたらうか。石川梅代さんは、已に松村先生と婚約中でありましたから、比較的面倒はありませんで、石川家に帰り謹慎してゐられました。小雪さんは親類に引取られましたけれど、尾花梅代さんの家は田舎の古川にありましたから、尾花さんと連れ立ってわざ〳〵古川迄行き、母様代りの叔母様に会って、事情を悉く打ち明け、誠意を込めてお詫びをなさいました。この叔母様は裁縫女学校を経営して居られた程しっかりした男まさりの方でしたから、よく理解していたゞいて本当に嬉しかったと、小雪さんから伺ったことがありました。校長の心中は真にお察しが出来ます、多年子供のやうに愛でいつくしみ、将来は自分の片腕にと、たよりにしてゐた教へ子が、揃ひも揃って反逆したと思はれたのですからたまりません、可愛さあまって憎さも百倍といふところでありませう、全く同情に堪えないものがあります。殊に斎藤お冬さんは頭脳明晰な秀才であったばかりではなく、聡明でそして毅然とした所のある女性で、学徳共に備はった、首領として姐御として申分のない人でありましたから、校長の期待も一層大きかったのであります。他の四人も皆、級の上席を占めてゐた粒揃ひ、そして人格から云っても、どなたも優劣がなく洋々たる前途を持つ人々ばかりでございました。

校長の失望と無念さは何にたとへやうもなかったらうと推察いたされます。其後間もなくミス・ブルボーは学校を止められて結婚生活に入り、不幸にして若死されたと聞き益々御気の毒にたえないのでございます。それでは一体事件とは何であったか、少しその真相を述べさせて頂き度いと思ひます、然し是は私一箇の側面観に過ぎないもので、又遠い過去の記憶がボンヤリ薄すれて、年號とか場所とかに或は誤りあるやも知れませんから、豫じめお断りをしておきます。

明治二十四、五年頃と申せば女子教育勃興の機運が最高潮に達した時代でありますから、諸所にミッションスクールが設立されて居りました、宮城女学校もその一つで、現在は存じませんが、その当時はアメリカからお金が来て経営されたものだと聞いて居りました、校長のミス・ブルボーの外に一、二名のアメリカ婦人も教鞭を取って居たと思ひますが、何から何までアメリカ式に教育されて居りました。勿論国語漢文の科目はありました、けれど、夫はただ科目としてあるので上級も下級も同じ本を読まされてゐました、（場合によっては同じ教科書を用ゐることが必ずしも悪いのではありませんけれど）幾組も同時に教へるのは手数が省け教師の数も少くて都合がよいかも知れませんが、学ぶ生徒の方から申せば、随分妙なものでございました。

前申した問題を起した五人は、級が進み思想も段々洗練されて来るに従ひ、最早従来の洋風一天張の教育方針には満足が出来なくなりました、お冬さんなどは卒業も目近に迫ってゐるのに、日本の女学生として必要な準備が出来てゐないのを痛切に感じました。小平小雪さんは事件のトップをきった程の人ですから真先きに焦慮し初めました。此方は前に札幌のスミス女学校に居たのですが、ヤソ教を信じてお父様の怒りにふれ退校を余儀なくされました、然し後ではお許しが出て再び学校生活に入ることが出来たのですが、其時は已に仙台に出て来てゐたので、宮城女学校に入学したのでありました。其頃はもう北方の一角にも明治女学校の新興振りが傳はり、女学雑誌が盛んに読まれるといふわけで、それが又小雪さんを刺激し促がしたのであります、結局明治女学校に入る迄の過程としてスミス女学校から宮城女学校に、それから最後に明治女学校に漕ぎつけたことになるのでございます。

話は戻りますが小雪さんは初めは自分一人で英文の建白書を校長に差出しました、内容は申す迄もなく日本精神を基調として教育して欲しいといふ意味を強調したものでありました。一生徒の希望を其侭採用する筈もなく、直ちに一蹴されてしまひました、然しそれで引下る小雪さんではありません、再擧を謀るために次の機会を待望してゐる内に、お冬さんと他の四人の方とは、小雪さんの志に大に感激し賛成し、今度は五人固く結束して、改革案に就き熟議を凝らす所がありました、然し念のために申添へますが、あの五人は決して他の人を教唆したり、不穏の擧動をしたのではありません、只同志密かに語り、密かに謀ったに過ぎないのです、悶着の最中舎監の亀山先生の室に五人が呼ばれ先生と問題につき押問答してゐたのが、襖間のない寄宿舎の部屋々々に筒ぬけにきこえて、事半ばに校内に洩れてしまひ、終に最悪の結果に到達いたしましたのは遺憾に堪えない次第でございます。小雪さんが一人で建白書を差出したのに端を発し

翌二十五年二月に至る八ヶ月の間、度々校長と折衝を重ねたり、教頭の藤生金六先生が、皆さんの希望が容れられる様校長に話してやるなどゝ引受けられても、中々実現されず、亀山先生などは校長と生徒の間に介在して、大によく取りなして下さる位置にありながら、少しも生徒側に有利な事にはならなかったのであります、小此木忠七郎先生は、福島の師範出ときいてゐましたが、此方は日本人の先生の中では、私共には一番頼もしく思はれ、人望もあり、内心五人の意図に賛成して居られたのでせうが、何としても日本人の先生には手の下し様がなく、発言権さへ持って居られたかどうか疑はしい程無力でありました。

かうしてゐる内に校長と生徒との対立が尖鋭化して来るばかり、校長は頑としてこちらの希望を少しも容れず、生徒側も目的達成のためには、断呼たる覚悟を以って一歩も譲りません、校長はとうとう最後の切札を出して退校させると云ひ出しました、押川方義先生は(当時東北学院々長)それをきかれ、大層御心配くだされ、五人を思ひ止まらせやうと、色々仰ってくださいやしたが、妥協的な生ぬるいことは最早あの方々を引止める何の力にもなりませんでした、仲裁に入らうとなさいましたが、それも断然拒絶いたしました。当時押川先生の東北地方に於ける信望は素晴らしいもので、先生を師父として敬慕すること、殆んど絶対に近いものでありました、さういふ師弟の関係は到底現代人の想像の及ばないものでした、それ程の押川先生の仲裁をさへ拒絶した先輩諸姉の決意が、如何に真剣であったか、如何に犠牲的熱情に燃えてゐたか、それを傳へるにはあまりにも自分の筆が貧づしいのを恥かしく思ふのであります。若き人達の純情より生れた、私なき行動は、かくの如く大膽に力強いものであります、區々たる毀譽褒貶は、考へてゐる余裕もなかった程純真でありました。他より批判すれば、もっと善い、もっと賢こい方法もあると、云はれるでせうが、あの時、あの学校では外に執るべき方法はなかったと思ひます。

然しかう申しましても明治文化の大半は、ヤソ教を通して輸入されたことを忘れるものではありません、古代文化の母胎として印度、支那、朝鮮に恩を感ずると同じやうに、外人の効蹟をも認識するものでございます。

話は又横道にそれました、その頃仙台に居た外国宣教師達は、押川先生が後ろで操ってゐられたものだと誤解して、先生を非難したといふことを後できいた皆さんは、恩師にこんなにも御迷惑をおかけしたことを申訳がないと心から懺悔されてゐたのを存じて居ります。

然し結局後の始末は矢張押川先生の御配慮によって、それ〴〵落附く處に落ちつきました。

お冬さんお辰さん小雪さんの三人は、憧憬の明治女学校に、尾花梅代さんは青山女学院に、石川梅代さんは松村介石先生と結婚されました。

前にも鳥渡申しましたやうに、小雪さんは、学校を追ひ出されるや、すぐ尾花さんの郷里古川に急行して、叔母さんの諒解を得て再び仙台に戻って来た時に、小此木先生はこの悲しむべき突発的事件を大に憂慮せられたあまり、病床に倒れて居られるときゝ、今更のやう

に当惑したのでした。そして五人が落ちついた頃には、小此木先生も亦宮城女学校を辞職して、矢張明治女学校に奉職されたのであります。

明治女学校の高等科に轉校したお冬さんの心の世界は、急に明るく自由になり、視野がグン〳〵と際限なく展けて行きました、あの頭脳と実力とを以て純文学の方面にわき目もふらず邁進し、かの有名な厭世詩人北村透谷先生を師と仰ぎ勉強してゐる内に、学力思想共に素晴らしい成長発達を遂げたのでありました。

「あなたは博言学者になるといゝ」

と透谷先生を驚嘆せしめたといふこともきいて居ります。お冬さんは文学的にばかりでなく、哲学的傾向をさへ帯び来り、魂の上にいよゝ深味を加へたのでありました。惜しいことに、明治女学校卒業間際に病を得て仙台に帰り、二十七年の初夏六月二十三日、宮城病院の別室で幾多の春秋を残して他界されたのでした、透谷先生はその前月五月十七日芝公園で多くの謎を私共に投じて斃死されました、何となく不思議な因縁を思はずにはゐられません。石川梅代さんは松村夫人として、至難とされる新宗教運動のために、四十余年の間忍従よく荊棘の道を拓くために夫君を授け、道会の母として後進指導の任を盡されましたが、昨昭和九年九月十二日尊い生涯を終っておしまひになりました。お辰さんは文学博士福来夫人となり、今は大阪方面で社会的事業に没頭し、奉仕の生活を送って居られ、尾花さんは、永い間旅順で夫君と共に教会の仕事や教育に従事して居られたのですが、現在は、最も賢こき母として、敬虔な女性として、御子様の成長を見守りつゝ、神戸にお住ひでございます。小雪さんは往時の意気と信仰とを、その侭持ち続けてゐられるのには自ら頭が下がります、日本最初の国会議長中島信行氏(湘煙女史の夫君)の許に、クリスチァンとし大にやって下さいといふ激励の手紙を書き、それに私にも署名させた宮城女学校時代の小雪さん、宮中改革を思ひ立ち、勝海舟翁を訪問した明治女学校時代の小雪さんは思ひ浮べる時、いつも微笑を禁じ得ないのであります。数年前利根川上流の沿岸で、松林に囲まれた丘の上に、憩ひの家を建て、雄大な大利根を眼下に、雲表遙かに富岳の秀麗な姿を仰ぐ絶景を恵まれて、物静かな感謝に充ちた老境の生活振りは、いかにも小雪さんらしく、私共俗人の羨望に價するものと云はねばなりません。

かうお話をして来ますと、五人の先輩達は、皆異った性格と天分を持ち、異った環境に入り、異った生活をしたのですけれど、その毅然として意志の強固なこと、友情に厚かったこと、所請現代式に何々名流婦人として嘖々たる名聲を天下に謳はれないけれど、そのつゝましやかにして謙譲なること、黙々として一向に正道を足どり確かに歩まれたのは、不思議にも皆同じ行方でありました。最後に私自身でございますが、ストライキに関して前々小雪さんから(同級でありました)秘密を打ち明けられ大に感激し、自分も一人前の同志を以て任んじて居りましたけれど、一番年少者ではあり、通学生でありましたので、学校でも私などを重大視してゐなかったと見え、退学は

されませんでした。それどころか校長の仰ふせだとて、藤生先生からいろ〳〵なだめられ引止められたり致しましたけれど、どうして自分丈オメ〳〵居残られませう、そればかりでなく前々から上京を志してゐたのですから、皆さんの後を追って自発的に退校し、横浜のフェリス女学校に轉じ、最後に明治女学校の高等科を修業いたしました。

爾来四十有余年碌々として今日に至り、誠に慚愧に堪えぬ次第でございます。

この黒光の記述はストライキの顚末・五人の生徒の態度・ストライキの真相・諸教員の態度・退学後の五人の消息・黒光自身の態度が内容であるが、ストライキの真相の中で肝心なこと、すなわちプールボー校長が生徒全員に対して行なった事情説明の内容がただ「是々のことで」としか記されていない。この「是々のこと」とは一体どういう内容であったのか。この事について島本久恵はその著「俚謡薔薇来歌」（一九八三年九月発行）の中で五人の生徒が永久に母校を去ってしまったことにふれて「良はこれをストライキが招いた結果と語り、学生ストライキおそらく日本最初のと、特筆すべく強調する。むろん心象深刻、五十年経ての思い出にもこうありありと現れ、薄れぬのではあったが。ストライキと言い得る根底の、理由、事情は何であったのか。どうもそれは明らかでなく、この話では聴く者の心に落ちぬところがあり、推察はいかがと思うが、五人はともかく、外の一人の良では、入学のはじめに抱いた不適合の感、何処までもそれが伴い、そこまで五人を背かせた、ストライキならストライキのその中心にはかえって進んで触れていない。手記『廣瀬川の畔』で見てもやはり不分明。」と記している。黒光の口述を取材して「黙移」を執筆した島本久恵ですらストライキの真相が不明であるというのである。

プールボー校長の報告内容　ところが前に紹介したプールボー校長の一八九二年六月二日付の報告書以外にもプールボーがこの出来事について外国伝道局へ報告した書翰が数通あるので[註四六]、黒光が生徒として観察した出来事を四十数年後に記憶だけに基いて記したものにくらべれば、当時、校長として五人の生徒と直接話し合って把握し

た内容を校長自らその時点で記した書翰の方がはるかに正確且つ詳細であってこの出来事を理解するのにはよりよい資料であると思われるのでそれら数通の中から二通を選んで次に紹介しょう。

先ず最初に、一八九一（明治二十四）年十月二十四日にプールボーが外国伝道局総幹事サミュエル・N・キャレンダー博士に送った書翰には概要次のような内容が記されている。「クリスチャンの力が増して来ると、これに抵抗しようとする悪魔の力が強くなり、遂にはクリスチャン達同士の中に敵意をおこさせようとする様々の方法がとられるようになります。私達の場合を考えてみますと、最近日本人クリスチャンの中には、宮城女学校の運営権を外国人の手から日本人の手に奪い取ろうと考えている者があります。その中、運営権を在日宣教師社団の手から日本人へ移譲するようにと要求する書翰が外国伝道局へ送られるかもしれません。それは押川氏の発案でありますが私はそれには反対です。婦人クリスチャンの私がノンクリスチャン日本人の意見に反対することは日本的に考えても正しいことですが、婦人クリスチャンの私が牧師である押川氏の主張に反対するということになりますと事情はちがって来るのです。それは婦人である私が婦人の美点を忘れて婦人らしくない態度をとったことになるからです。それ故、私が宮城女学校の運営権を日本人の手に移譲するようにという押川氏の発案による要求に応じなかったため、押川氏は私並びに在日宣教師社団の態度に失望しています。最近、日本では学校の管理運営権を日本人の手に移譲する問題で、すべての教派が困難な事態に直面しています。移譲して好ましくない状態になってしまった例がいくつかあります。

私は日本人の要求を受け入れても良い事と、在日宣教師社団の方針をしっかり堅持すべき事とのけじめを明確にしておくべきであると思っております。」と。

次に、プールボーが、五人の生徒に退学を言いわたした日（一八九二年一月二十一日、木曜日）の翌日、すなわち一月二十二日にキャレンダーに送った書翰（一月二十八日の追記が含まれている。）を次に紹介しよう。

Sendai, Japan.
Jan. 22, 1892,

Rev. S.N. Callender D.D.
Mechanicsburg, Pa.

Dear Brother:

When you have read this letter, I fear you will think me rather an unsatisfactory corespondent. Nevertheless, I think you will be interested in the subject and it will probably give you a better idea of Japanese character than I could give you in any other way.

You remember I told you in a previous letter that *some of the girls* had overtured me on the subject of giving the school into the hands of the Japanese etc. Well, the matter has crystallized and I want to give you the history of the process. First, however, I must go back to an event of the previous year: In the spring of 1890 we engaged the services of a certain gentleman as Japanese principal with the understanding that he was to control classroom work in the vernacular with no interference from me so long as he followed certain welldefined lines, and that he was not to interfere with me in the management of the home department. All went well for six months or so, then he began overstepping his authority in the matter of religious teaching. I refused to yield and he resigned at the end of the year, and went into the boys' school. Then he desired to advise me and his advice was very much against a lady teacher in my employ and at the same time he tried his best to induce her to resign her position lest she should come to harm. But there being perfect confidence between her and myself his counsels came to naught. During that vacation, (summer 1891,) one of the girls came to me with a lengthy written criticism of everybody in the school. She told me that there were really but one or two true Christians in the school, that I was teaching ways not in harmony with Japanese ideals etc, and demanded that I dismiss our lady teacher. If I did not comply, she must leave the school. I answered her by making her promise to read I Cor. 13 every day for a month and then come to me to talk over the matter. The result, in her case, seemed to be what I desired, but another girl came with a similer request. I pacified her, as I supposed. All this was in the summer and fall of '91. Then came Mr. Oshikawa' s proposal to put the school into Japanese control and you know what action was taken. In the mean time, five girls, advised as it turns out by one of our gentlemen teachers and our former

principal, prepared a paper demanding the dismissal of our lady teacher, changes in the Curriculum, and the transfer of the school. They kept this up till we decided upon a thorough investigation and the expulsion of the disturbance makers. Now what did we find? In the first place we find that our disaffected principal of 1891 put on foot an effort while he was in the school, to reverse the relation between him and myself. He declared that he could not remain in the school unless he had entire control not only of the school, but of all funds subscribed for its support even to the regulation of my own and sister' s salaries. Finding he couldn' t do that he urged all the teachers to resign with him in the hopes of forcing me to agree to his proposal. Failing in this also, he decided that he would get Oshikawa to give him a larger salary in the boy' school in order that he might "be in a better position to carry out his plan of going to America like O. and like him be put on a footing of equality with the missionaries." He said if he went only as principal of the girls' school he couldn't make much impression, but as prof. in the Theological Sem., he'd have every chance. Not for a moment, while working up these plans, dose he cease his underhand meddling with our school. By private conferences with a few of the girls and one of our teachers, by public utterances from the pulpit of ambiguous precept which could only be understood by the initiated, by gossip and all the ways open to him, he continued to work for his own ends. The result of it all was the spirit of distrust and insubordination which culminated in the expulision of five of our, hitherto, best girls. In their examination it transpires that all they have asked for is with the advice of this ambitions young man who also has used one of the teachers as a tool.

The examination the girls was as follows:

What is the object you expect to gain?

Ans. The school must be reformed.

Q. What do you mean by reformed?

A. Put under Japanese control.

Q. How do you propose to gain your end?

A. First by getting rid of the three teachers who support you.

Q. Suppose you got rid of them, what next?

A. You couldn't carry on the school alone.

Q. Couldn't I employ other teachers?

A. We'd do the same thing over.

Q. Whom do you suppose would sustain the greater injury in such a case, you or I?

A. We don't care. You must give the school which was established for Japanese into the care of the Japanese. It is not right that money subscribed for us should be controled by you.

Q. The subscribers of that money don't think so. Don't you think you'd better be satisfied with what they are willing to give you rather than perversely destroy all your chances?

A. We can't give up our thought. There can be only one right way to conduct Japanese schools and only the Japanese themselves can do it.

Q. Don't you know that if you continue to think and act like this you will have to leave the school?

A. We don't care for ourselves.

Q. Will you take a week to think over the matter?
Remenber you are asking me to do what I have no right to do; that I can not betray my trust if every girl and every teacher leave the school; and, should the school be broken up, you and your schoolmates only will be the losers.

A. It is not necessary to tell us that. (bitterly and boldly).

Of course I made every appeal to their sense of right and gratitude (for three of the five are supported girls) but to no effect. The teachers argued with them, all to no purpose; Mr. O. argued with them and finished by saying their purpose was good but their manner, a little wrong. According to Japanese custom, hours, yes, days, were wasted in consultations; some days they went all day without food and almost without sleep at night. Teachers could not hear their classes and pupils could not recite. Yesterday the girls were expelled and the one teacher who, we suspect, is largely to blame for it all looks as if he had just recovered from an attack of delirium tremens. On leaving school the girls left us a memorial of their purpose of which I append a free translation:

"We have looked at all mission schools in Japan. They are not successful, there are no good results. Why is this? It is because the missionaries are blind leaders," —(they don't add. "of the blind")— "They cannot understand the Japanese heart;

they do not satisfy the Japanese ideal ; Japan does not want women such as are made by the mission schools. The whole power of our school must be given to us, Miss Poorbaugh will not do this, therefore she is not a proper person for the school. There is only one right way. Japanese way is right and Miss Poorbaugh ought to know it."

There is a great deal more to this wonderful document but it is the same thing over and over gain. It is hard to believe same people could act so childishly, but if any one has had five or six year's experience of "*the Japanese heart*", I think they can understand it pretty well, at least if they can't reconcile such intellectual keenness as we find, with such unreasonable practice, they soon learn to be on the look out for it.

Well, now, what do you think ? Shall we yield or not. In the action we have taken thus far, the Mission unanimously concur, but what of the future ? Mr. Oshikawa still suggests the Board of Trustees as the remedy, but I don't trust him. His sympathies are all with his own people and though he speaks fair when talking with Mr. Hoy or Mr. Schneder, he eats his own words the next minute if his companions happen to be Japanese.

The girls expelled are Saito Fuyu, our own girl, Ishikawa Umeyo San, supported by First Ref. Ch., Phila., Obana Umeyo San, supported by I don't know whom and two self-supporting girls.

The poor children did think themselves in the right no doubt, but they became very impertinent and told me plainly that they should leave nothing untried to accomplish their purpose if they remained in the school. So, though it was like pulling out my own eyes, they had to go for the sake of the other girls. I'm afraid I'm not a very good missionary for I can't help feeling a wish that I had never come. To see this as the result of nearly six years work is terribly depressing, and to look all over the empire and see the same thing everywhere is more so. I read an article in the Scholar's Magazine a short time ago which said, The mission schools can not prosper for the reason that power and money go together and the foreigners are not generous enough to give their money to the Japanese or to recognize native ability and put it in positions of responsibility. Further that as long as this state of affairs exists foreigners cannot expect to work in harmony with the Japanese etc, etc. I did not get the other girls photograph so soon as they were promised and now I will send them to you by this mail asking you to hold them a while. Some of them may follow their schoolmates'bad example and withdraw, so we had better have a little patience. I think probably Ishikawa Kikuyo, at least will withdraw since her sister has been expelled. Her sister is the girl of whose marriage I wrote you

some time ago, as being so repugnant to our sense of right and decency.

I should like to write Mr. Kelker of this matter but am not equal to another letter, so I hope you will let him see this one. I feel so sorry for Miss Hollowell that this should happen so early in her missionary experience, but it couldn't be helped. Her bright spirits are a comfort to us all.

If there are any further developements between now and the mailing of this I will add a line or two.

Jan. 28, Since writing the above many strange rumors reach our ears. The girl say, "the expelled will still work till they bring about the desired end." Mr. Oshikawa, Mr. Fujiu are reported to be in favor of closing the school altogether. Mr. Fujiu is the man referred to in the first part of my letter as the source of the trouble. He is now in the boy's school but Mr. Hoy is gathering evidence against him and as soon as it is all in will insist on his resignation. I don't imagine the trouble is over yet.

Sincerely yours,
Lizzie R. Poorbaugh.

すなわち、この書翰によれば出来事の経過はおおよそ次の通りである。一八九〇（明治二十三）年の春、プールボーは一人の日本人紳士を宮城女学校の日本人教師中の長（宮城女学校規則にいう幹事）として採用した。半年ほどたつと彼はプールボーとの約束を守らず、宗教教育の面で彼の権限を越える動きをするようになったので、プールボーはそれを是認することが出来ず、したがって彼はその学年度末（一八九一年六月）に退職して男子校（東北学院）に就職した。その後、彼は宮城女学校の一女子教員の解職をプールボーに要求して来たがプールボーはその要求を取りあげなかった。一八九一（明治二十四）年夏になって、ある生徒が学校内全員の人物批評文を携えてプールボーのもとに来り、学校内には真のクリスチャンは一、二名しかいないとか校長の教育方針は日本人の理想とかけはなれているなどと話したのち、一女子教員を解職するようにと要求し、この要求がみたされなければ学校を去ると言った。プールボーは彼女に対して、新約聖書コリント人への第一の手紙第十三章を一カ月間毎日読み続けれ

ば、あらためて話し合うと約束した。一カ月後、彼女はプールボーの教育方針を理解するようになっていた。秋にも同じ要求をして来た生徒があったがプールボーは同様の指導を行ない同じ結果になった。やがて、押川方義から学校の管理運営権を日本人に移譲するようにとの申し入れがあった。更にその後、宮城女学校男子教員の一人と東北学院へ転職した元幹事の二人から授業拒否(turn out)をするように忠告を受けた五人の生徒が、女子教員の解雇・教科課程の改訂・学校の管理運営権の移譲を要求する文書をプールボーに提出し、これらの要求をいつまでも撤回しなかったので学校としてはその間に事情調査を充分に行なった上で、この騒動をおこそうとした五人(disturbance makers)の生徒の退学(expulsion)を決定した。

又、プールボーはこの出来事を取り扱い、調査してわかった事をいくつか列挙している。すなわち、一八九一年、例の幹事がまだ在職中のことであるが彼はプールボーと自分の立場を逆にしようと画策し、更に教育権、財政権を含む学校の管理運営権すべてを持つことを要求し、要求が満たされなければ学校に留まるつもりはないと宣言した。次にこの要求が認められず退職することになると、全教職員も彼と共に退職すればプールボーが彼の要求を受け入れざるを得なくなるからとて彼は全教職員に退職を誘いかけた。この誘いかけが成功せず、彼が退職すると東北学院長押川に頼んで高給で転職し且つ押川のように渡米できる様な地位につきたいと考えた。しかも彼は宮城女学校の幹事としてよりは東北学院教授として渡米する方が好機会に恵まれるだろうと話し、此の計画を実現させようとした。このようにして彼が色々画策したことの結果、宮城女学校の生徒中でも特に優れている五人が学校の方針に従わないために遂に退学せざるを得なくなるということで最頂点に達した。五人の生徒が要求した内容はすべて彼の勧告によってなされたことが明瞭になったと記している。更に調査の際の五人の生徒との問答をも詳細に報告している。五人の中の三人はプールボーその他の奨学金で勉学中の生徒なのでプールボーは彼女らが何とか正しい判断と感謝の心とを持ってこの出来事を考え直すようにさせたいと思い、熱心に説得を続け、又、教師達や押川も彼

女らに説得を行なったが彼女らはその説得を理解せず、押川は彼女らの目的は正しいが方法が間違っていると言って説得をあきらめた。彼女ら五人はこのようにして何日も要求をし続けたので、学校としては遂に、一月二十一日に五人に退学を言い渡すことになった。当時の宮城女学校規則第百四條に「無断ニ欠課スヘカラス若シ無斷ニ欠課スルモノハ其情状ニヨリ謹慎、退舎、昇校禁止、若クハ放校ヲ命ス」、第百五條に「本校ノ規則ヲ犯シ或ハ職員ノ命ニ従ハザルモノハ其情状ニヨリ謹慎、退舎、昇校禁止、若クハ放校ヲ命ス」との規定があるが、これらの規定の放校に該当することになってしまったのであろう。ブールボーは、このような結果に大いに責任を感ずべきであると思われる例の男子教員は猛烈な興奮状態の発作が治まったかの如き状態になっていること、また五人の生徒は、「日本中のミッションスクールが教育の成果をあげていないのは教師である宣教師達が大事なことを見る目がないからであって、日本の国はミッションスクールで教育を受けるような女性を必要としていない。私達の学校は私達に与えられるべきなのにブールボー校長は実行しようとしない。校長はこの学校にとって適任者ではない。日本人のやり方が正しいことに気づくべきである。」というような内容を記した意見書を手渡して学校を去って行ったことを報告し、更にブールボー自身としてはほゞ六年間の教育が終ろうとしている時にこのような出来事があったことは非常に気の滅入ることであり、日本国内のあちこちで同様な出来事がおきていることを考えるとなお一層心が重苦しくなるとも報告している。

右に紹介したブールボーの二通の書翰を見れば、黒光が「黙移」の中で「こゝで事情を説明し」と言っている場合の「事情」について、又、「宮城女学校最初のストライキ」の中で「是々のことで」と言っている場合の「是々」について、更にブールボーの一八九二年六月二日付年次報告書中の「ある外部の助言者達」とは誰を指しているかなどについてそれぞれ大体の推測が可能である。

すなわち、数年前より国粋主義思想が盛になって来ていた時代に、外国人が校長で、その方針に基づいてキリス

ト教教育を行なっていた宮城女学校に対して、文部省の方針を周知させるべく県当局から、教科目内容に日本精神を基調とする課目の充実が要請されたのであるが、この要請を機会に、かねてから日本の少女の教育は日本人の方針で行なわれるべきであり、したがって学校の管理運営権は日本人に移譲されるべきであると考えていた宮城女学校の創立者の一人であり、東北学院長である押川方義がその実現をプールボーに要請したが容れられなかった。これとは別に幹事藤生金六は彼なりの考えでその実現をはかったが認められず宮城女学校を去ることになった。しかし藤生はなおその実現のために努力したが実現困難と見るや実現を急ぐあまりに教員（小此木忠七郎）並びに生徒を誘いこみ、特に生徒をして校長との折衝に当らせた。純情多感な生徒は要求すること急にして学校当局の説明をきこうともせず一歩も引くことをしなかった。そのため学校当局としては秩序維持のためにこれらの生徒を退学させざるを得なかった。

「宮城女学校五十周年史」執筆者が、「事件が事件だけあって、當事者の心を痛めたことも想像以上であったであろう。けれども校長ミス・プールボーは彼女等が學校の最も善き生徒達であった事は少しも疑っていないばかりか、彼女等の考えも畢竟學校の為に何が最善の道であるかに懸っていると同情し、尚彼女等の基督教的信仰が少しも弱ったのではない事を報告している。併し彼女等を學校に止めるわけにはいかなかった。涙を揮って馬稷を斬る心情が想像されるでないか。」と記しているがその通りであったろう。こうしたプールボー校長の処置に対して、五人の生徒達は覚悟していたことではあってもかなりのショックを受けたことであろう。しかしそれは相馬黒光（星良）が「ストライキ事件」（同盟休校）と誇張するほど深刻には在校生も父兄達も受けとめてはいなかったようである。小平小雪が呼びかけた四人が賛成して、五人だけで他の在校生に呼びかけることをせず、固く秘密を守りつゝ校長に要望書を提出して学校の管理運営権を日本人へ移譲することなどを要求した出来事であったからであろう。黒光が五人に同情したのは、小平小雪と親しく、五人の生徒達が理想としていた明治女学校に黒光も憧れていたからで

あった。彼女らの要求は校長プールボーにとっては経営権の侵害に等しいものであるので、プールボーは到底受け入れ難いものであることを五人に説明し続けたが彼女らの理解するところとならず、遂に退校処分に至ったのである。これらの事情をプールボーは公開の場で在校生全員に説明したわけであるが、在校生はその事情説明を納得したために、「宮城女学校五十周年史」に寄せられた多くの卒業生の寄稿文においても誰もこの事には言及していないのであろう。更に、押川方義の盡力によって齋藤冬・町田辰・小平小雪は明治女学校へ、尾花梅代は青山女学院へそれぞれ転校し、石川梅代は婚約者松村介石と結婚するというようにこの年の三月までの間にこの出来事の事後処理が済んだことを在校生は承知していたのであるから、黒光の言うように「ストライキ」とは思っていなかったのであろう。したがって、黒光の言う「宮城女学校のストライキ」とは第三者の命名ではなく黒光の命名であって、この出来事を誇張したものであったと言えよう。

なお相馬黒光（星良）は、自分も退学処分になるかと思っていたが、案に相違して不処分であったので五人に殉じて自主退学し、明治女学校への転校を希望したが、押川や叔母佐々城豊壽の説得によって文学偏重の明治女学校ではなく、叔母の学んだフェリス女学校に同年六月に転入学している。しかし彼女は明治女学校をあきらめきれず、一八九五（明治二十八）年九月にはフェリス女学校を退学して明治女学校への転入学を果した。しかしその頃には明治女学校も衰退していて、当初三百人もいた生徒が百人に減少してやがて廃校となってしまうのである。「フェリス女学院一〇〇年史」の執筆者は相馬黒光の「黙移」によって黒光在学当時のフェリス女学校と明治女学校とについて記した後、「フェリス女学校はどこまでも和蘭改革派の信仰と氣品を保ち、ブース校長や婦人宣教師をはじめ、日本人教師によってキリスト教女子教育の高度な教育内容と品格とを保っていた。しかしまた、宣教師的な偏狭で、日本人の生活にはそぐわない一面もあって、それが若い相馬黒光の心に共鳴しなかったのであろう。しかし、以上ふたつの学校の氣風、ひとつ（明治女学校）は文学的でロマンチシズムの雰囲気ただよう学校、他（フェリス女学

校）は宣教師的精神で貫くキリスト教教育の学校であった。ひとつは文学的華やかさのなかで消えてゆき、もひとつは和蘭改革派の信仰に立って時代の風雪に耐え、一〇〇年の齢を保った学校として残ったのである。」と記している[註四七]が、和蘭改革派（米国改革派教会）と独逸改革派（合衆国改革派教会）の違いこそあれ、フェリス女学校の教育を模範にしつつ、創立直後の土台確立に専念するブールボー校長によって行なわれる宮城女学校のキリスト教教育に黒光はやはり共鳴しなかったのであろう。

なお、一八九二年一月三十一日にブールボーがケルカーに送った書翰の中には、「この度の出来事の根源であった男子校（東北学院）の教員を現時点で解職することは、在日宣教師社団の伝道を分解させてしまうことになるので実行出来ないのです。男子校のホーイ氏もシュネーダー氏も私共のとった処置を支持しておりますし、押川東北学院長も今後どんな事があっても東北学院の教師の誰でもが宮城女学校と対立することのないようにしなければならないと責任を感じています。」と記されている。又、同年七月の「ザ・ミッショナリー・ガーディアン」誌に掲載されている宮城女学校関係記事[註四八]の中には「外部の煽動者が、当時国内に行きわたっていた排外思想の感情を利用して可哀そうにも数名の生徒達に御しにくいほど強い考えをもたせてしまった結果、彼女らは学校を立ち去らざるを得なくなって了った。此等の少女達は良心的な信念に基いて行動したと思う。キリスト教主義教育は日本精神に基いてキリスト教の理解をさせるべきであるという考えが彼女らの心にくいこんでいる。彼女らの主張が間違っていたのではなく早まった行動をとったことが誤りであった。外国人宣教師の力をかりずにやれるような時代はその中必ず来るのである。外国伝道局は在日宣教師社団の処置を全面的に承認した。日本の多くのキリスト教主義学校で騒動の原因になっていることであるが排外思想に基いておこされた要求であったからこそその要求を認めてはならない。宮城女学校の場合、妨害は殆んどおさまった。煽動の結果、生徒数が減少するかと心配されたが却って生徒数が増えて教室が満員になった。」と記されている。又、エマ・ブールボーの六月六日付報告書[註四九]の中には「未だ曽て経

験したことのないことを色々経験しました。時々意気阻喪してしまいそうになりました。しかし概して言えばこの一年間の歩みは結果的に言ってこれまでの歩みよりも大変元気づけられるものであって心から感謝すべきものでありました。」という文面がある。

以上詳述したような出来事はあったが、第六年度は全体をふりかえってみれば大勢は平和にすぎ、エマ・プールボーの言うごとく感謝の裡に終了した。

プールボー校長の辞意表明　このようにして第六年度が終り、九月からは第七年度に入ろうとする直前、すなわち一八九二年七月一日（金）、プールボーは「合衆国改革派教会」外国伝道局総幹事キャレンダー並に外国伝道局財務委員長ケルカーに対し、それぞれ書翰を送り、明年度（一八九二年九月から始まる第七年度）一杯で、自分並びに妹エマ・プールボーが宣教師を辞任し、したがって宮城女学校での職責を終えて帰国したい旨の辞任願を申し出た。彼女は退職を決意するに至った理由として、日本語を大いに勉強したが十分に熟達できぬため日本人との意志疎通が相互に十分でない場合があり、そのため校長としての任務遂行を完全に行なうことが難しいことを痛感すること、又、日本人の中で最も尊敬すべき人物と思われる押川と接していても時々不信感をもたざるを得なくなることがあり、そのような心境のままで現職にとどまることは不適当であると感ずるようになったことなどをあげている。外国伝道局としては、全く予想外の辞任申出を受け、プールボーが創立以来、幾多の艱難困苦を克服しつつ大きな成果をあげて来たその業績を承知しているだけに、今後更にキリスト教教育の発展のためにプールボーの活躍を期待していたので、熱心にその翻意をうながしたがプールボー姉妹の決心は変らなかった。なお、辞任申出の際のケルカーへの書翰の中には

"So that all things considered, I feel that our work in Japan is very nearly done. Then too, in a few short years, my duty

to Kittie will require my return. Of course if the Board refuses to entertain the idea of our return, we shall submit for the present with what grace we can, but it will be with a strong sense of not the right persons in the right place."

と記されており、諸種の状況を充分に考慮した上で決定したことであり、又、来日当時、僅か六歳であったキャザリンも十二歳を過ぎ、キャザリンの教育のこともブールボーの念頭にあり、帰国の方針を変更することはなかった。

第七年度年次報告

第七年度の歩みは、宮城女学校の歴史の中で特に記念すべき一年である。それは、創立以来七年間（予科三年、本科四年）の教育を終了した生徒四名を第一回卒業生として送り出した事であり、ブールボー校長の言う宮城女学校の第一期が終了した年である。前年九月からの第七年度の教育を終了するに当り、ブールボーは次のような年次報告書を外国伝道局へ送っている。

REPORT OF MIYAGI JO-GAKKO FOR 1892-93.

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of America.

Dear Fathers and Brethren—With the close of this, the seventh year, Miyagi Jo-Gakko closes the first period of its existence. The work of the year compares favorably with that of former years, and the spirit of the pupils, as to docility and earnestness, shows decided improvement. In detail, there is little to be said that has not been said in former reports, and there is no need of repetition. As this year witnesses the graduation of our first class and as this is my last report, I feel that a cursory retrospect of the whole work will not be uninteresting.

Seven yenrs ago the school began its existence in a most primitive fashion, within paper walls, its ten girls sitting at the rudest of desks, or tables, and warming their fingers and toes, a cold weather, over a bed of coals resting in the center of a pine box filled with wood ashes, and, instead of the houses and grounds which for the last four years have been such a pleasant home for

all of us, there was a wilderness of bamboo, tea-plants and broken down bedges. The property at 75 Higashi Sambancho, today presents a pleasing picture to the eye and is a credit to the Reformed Church. As great a change as has been accomplished upon the property, marks the development of the school. Never seeking to make rapid, but always sure progress, the foundations of moral and intellectual culture were laid broad and deep, and, in looking over the years past and seeing the results of the policy adopted for the "Girl's School," there is no room for regret, but much for sincere gratitude to the God in whose name and strength the work was begun and carried forward.

From the original ten scholars, the school has increased to its present number of fifty-one, and there is every prospect for its continued prosperity in even a greater degree than has crowned the labors of the past.

What the school is today has not been achieved without hard labor, bitter disappointments and much weariness of body and mind, though much of the way we have come seemed strewn with roses and bathed in sunshine. Every effort made by the Japanese to subsidize the school to merely secular education, every attempt to wrest it from the control of the Mission, or in any way to pervert its aims, has been snccessfully resisted, and the school stands to-day no uncertain exponent of Christian faith and doctrine in this heathen city.

During these seven years 146 girls have been members of the school. Of this number, 62 were baptized before leaving, 6 are doing Christian work in various places, and one is a regularly employed Bible Woman. Of the original 10 girls, all became Christians and three, with one other who entered in the third year, form the graduating class of '93, from both Japanese and English departments, while a fourth graduates from the Japanese Department only and returns next year to complete the English course. All of these five are doing Christian work in Sendai, under the superintendence of my sister and Miss Hollowell. Two of the five have been supported girls and will be ready to devote all their time to that service, next year, as the Mission may see fit to direct. Amongst the other pupils there is as good material for future helpers as there is in the class of '93.

As I said above, the spirit manifest in the school during the year just closed has been for the most part, exceedingly good. There were fewer baptisms than in previous years owing to the youthfulness of many of the girls and the short time a number of the larger ones have been in the school.

On the whole we feel that the school has been blessed and highly favored by a gracious Providence, and we pray for it and

believe it will receive His continued benediction.

The statistics for the year are as follows—Foreign Teachers, 3; Native Teachrs, 4; Native Teachers of Specialties,3; Matron, 1.

Pupils: Seniors, 5; Juniors, 3; Sophomores, 10; Freshmen, 10; 3d Preparatory, 16; 2d Preparatory, 0; 1st Preparatory, 7; whole number, 51; whole number during the year, 58; number of Christians, 22; number of Baptisms, 2; number of Catechumens, 8.

Respectfully submitted,

LIZZIE R. POORBAUGH.

これによれば、生徒も真面目に熱心に勉学に精励し、満足な教育成果をあげることが出来、此の第七年度限りで退任して帰国するプールボー校長としては責任を果した満足感で最後の年次報告を行なっている。七年前、すなわち一八八六年にまことに不充分な教育環境の仮校舎でではあったが大きな希望をいだいて十人の生徒を相手にして教育を開始した当時のことを思いおこし、仮校舎での四年間の忍耐期間のことを思えば今や東三番丁七十五番地の恵まれた校舎で行なわれている教育は大変望ましい内容で進められていて、ここまで守り導き給うた神に衷心より感謝の祈をささげている。十人で始まった宮城女学校も今や在籍生徒数五十一人に達しているが、ここに至るまでの間に心身共に如何に苦労したかわからないことなどを思いおこせば感無量のことであろう。あくまでもキリスト教教育に徹し、建学の精神を守って諸種の試練にも屈することがなかったことを報じている。この七年間に百四十六名の生徒が在学したが、その中六十二名が在学中に受洗している。そして六名が各地でキリスト教の伝道に携わっている。更に一人は正規の婦人伝道者である。宮城女学校創立当時に入学した十名の生徒は全員がクリスチャンになり、その中の五名はエマ・プールボーやハローウェルの指導を受けつつ仙台市内でキリスト教の伝道の手伝いを

している。この一年間に在学した生徒五十八名中、年度末に在籍している五十一名の中に二十二名のクリスチャン、受洗予定者二名、求道者（教理問答受講者）八名という現況である。なお、この報告では本科四年在籍者が五名であるが、卒業式で卒業証書を授与された者は四名であるので、一名は卒業直前に転校、退学、あるいは原級に留るかのいずれかであったのであろう。又、在籍生徒五十一名の中二十六名が奨学生として、アメリカの諸教会関係から奨学金を受けている事が一八九三年五月二十四日から開催された「合衆国改革派教会」総会で外国伝道局長によって報告されている。[註五〇] この第七年度で引退帰国するプールボーは、この年次報告書を送るよりも先、一八九三年一月二十三日に外国伝道局総幹事キャレンダーに宛てて大要次のような書翰を送っている。「今学年は七月十日までありますが、私達が帰国の途につく前に私の後任者が仙台に着くようにしていただきたいのです。私達は公立学校の学年度制にあわせるため、宮城女学校の学年度も毎年三月で終了するように変更しようとしています。勿論、授業はこれまで通り六月末まで続きます。ただ四月から六月までの学期が従来のような学年度末の学期ではなくて学年度最初の学期になるのです。ただこの切りかえを既に在学している各学年全員に完全に実施するためには三年間の過渡期間を必要とします。私は宮城女学校の現況――長所も短所も――を誰よりも良く知っています。それでそれらについての引継ぎをしておきたいのです。この学校の運営に関しての重要点を把握するには長時間を必要とし、又、多くの辛酸をもなめなければなりません。私は、後任者にとって必ず役立つその重要点を是非とも引継ぎ、助言をしたいのです。」

プールボーの熱心な希望にもかかわらず、外国伝道局は適任の後任者を仲々選任することが出来ないでいるうちに月日が経過してしまうので、緊急の対策として、当時丁度帰国中であったJ・P・モールに宮城女学校第二代校長を嘱任することにした。この間の事情をキャレンダーは次のように記している。[註五一]

"During their stay in this country an event transpired which, for a season, interfered with Rev. Moore's resumption of his evangelistic work on his return to Japan. The Misses Poorbaugh, under whose efficient care and labor the Girls' School at Sendai had made such admirable progress, notified the Board that they wished to retire permanently from the work in the early future. This determination on their part very much disconcerted the Board. It asked them to reconsider their determination, but without success. It knew not where to find a successor, and its efforts to secure one resulted, for the time, in failure. It was felt that it could not allow the whole weight of the school to rest upon the remaining American teacher, Miss Mary C. Hollowell. So in the emergency, greatly to its own regret and that too, equally of Rev. and Mrs. Moore, it felt compelled to appoint him temporarily, Principal, and Mrs. Moore, Vice-Principal of the School. Upon their return they entered upon the discharge of their new duties, and so efficiently were they discharged that the sudden change in administration wrought no evil effects upon the School. They continued in this relation for one year, when the arrival of Miss Lena Zurfluh released them, and Doctor Moore (for during his sojourn in this country, Heidelberg University, at Tiffin, Ohio, honored him with the honorary degree of Doctor of Divinity), resumed his successful work as Principal of the Evangelistic Department."

第一回卒業証書授与式

第一回卒業証書授与式は一八九三（明治二十六）年六月二十九日（木）に挙行されたのであるが、それに先立つて六月二十五日（日）には卒業礼拝が、又、六月二十八日（水）には卒業学年発表会が行なわれた。

これら三日間の卒業記念行事の詳細についてのプールボー校長の報告が、「合衆国改革派教会」の機関紙「リフォームド・チャーチ・メッセンジャー」紙八月十七日号に掲載されているので次に紹介する。

FIRST COMMENCEMENT IN THE GIRL'S SCHOOL, SENDAI, JAPAN.

ON BOARD S.S. "OCEANIC," July 17, 1893.

Dear Friends : —I am glad that my last letter to you as your missionary, can chronicle so pleasing and interesting an event as the first commencement in the girl's school at Sendai. Seven years seems a long time to wait for such an event, but when you remember that for the first two years the school comprised only classes in the English language, arithmetic and the Bible, you will see that after all it has not been so long a time given to what is now a full seven years course in languages and literature, science and mathematics. Though I was too busy to write you an account of these exercises while still in Japan, I now, in mid ocean recall the scenes of the last week in June, and commit them to paper for your pleasure.

As this was our first commencement, a larger amount than is usual of the work of making arrangements etc, fell to the lot of the teachers, my sister and I were very glad indeed, for the assistance of Miss Hollowell with her fresh energy and enthusiasm. (I must explain here that, in Japanese schools, commencement exercises after the order of those in American colleges are unknown). In Japan, commencement day but furnishes an opportunity for all the notables connected with the school to make long speeches, while the part of the graduates is to keep in the back ground as much as may be, only appearing before the audience to receive his or her diploma. Our commencement, then, was not only the first of its kind in the girls school, but the second that had ever taken place in Sendai,—that in the Tohoku Gakuin of last year being the first.

The Baccalaureate sermon was preached in the chapel, Sunday, June 25, by Rev. W.E. Hoy, from the text in Prov. 4 : 18, "The path of the just is as a shining light which shineth more and more unto the perfect day." Mr. Hoy preached with his usual fervor and claimed the undivided attention of his hearers. Revs. Schneder, Miller and Oshikawa also took part in the service which was entirely in the Japanese language with the exception of the class hymn of the graduates, Dr. Harbaugh's "Jesus I live to Thee," which I'm sorry to say, is not yet translated into Japanese.

On wednesday, Miss Hollowell, some of the native teachers and the Junior girls decorated the hall, chapel, etc, for the two great occasions on Wednesday evening and Thursday morning. The class flower was the rose, and roses, ferns and ivy were scattered in rich profusion all over the house, turuing it into a veritable bower of beauty.

On Wednesday evening the first class-day exercises took place in Sendai, according to the following program :

Piano Duet	"Hungarian Dance, No. 3", Brahms	Misses Sekiya and Miyamoto
Address of Welcome		Miss Takeda

Vocal Duet	"Love's Old, Sweet Song", Molloy	Misses Ishii and Miyamota
Piano Solo	"Admired Waltz," Beethoven	Miss Sekiya
Recitation	"Wreck of the Hesperus," Longfellow	Miss Ishii
Class History		Miss Miyamoto
Piano Solo	"Marche des Troubadours," Roubie	Miss Ishii
Vocal Duet	"List to the Convent Bells," Blockley	Misses Ishii and Miyamoto
Recitation	"Sandalphon," Longfellow	Miss Takeda
Class Prophecy and Presentation of Gifts		Miss Ishii
Organ Solo	"Grand Fantasie", Hewitt	Miss Miyamoto
Mock Valedictory, Class Ode		Miss Sekiya

As I said before this was a new sort of entertainment for our Japanese friends and they seemed to enjoy it much. The original performances of the girls were in their own language, and I'm therefore not able to make any further comments upon them.

As commencement week came in the midst of the rainy season, many fears were entertained lest "the weather should spoil it all," but fortunately Wednesday dawned bright and beautiful, only clouding over after commencement was done. At nine o'clock, four as elegant and attractive looking little Japanese ladies as one could wish to see were ushered into their places and with great credit to themsleves rendered the following program before a select audience.

Piano Solo	"Voglein Flieg," M. Carithal op. 282	Miss Emma F. Poorbaugh
Invocation		Rev. K.Y. Fujiu
Chorus	National Song, "Kimiga yo"	School and visitors
Reading of "Imperial Rescript"		Mr. T. Saiki
Salutatory		Miss Miyamoto
Essay	Class motto, "My Life Consecrated"	Miss Sekiya
Piano Duet	"Spanish Dance, No. 1", Moskwoski	Misses Sekiya and Miyamoto

Essay	"Woman's Path"	Miss Ishii
Valedictory		Miss Takeda
Piano Solo	"Le Barbier de Seville," Binton Smith	Miss Kittie Poorbaugh
Presentation of diplomas and Address to graduates		Miss Poorbaugh
Letter from Gov. Funakoshi of Miyagi Ken.		
Farewell Song		School
Benediction		Rev. Oshikawa

As there were but four graduates each girl read her essay in both languages, and I would that all you lovers of foreign missions and the Japanese, might have sat with us as we listened to them. But more I wish those who are not interested, those who think there is enough to keep church workers busy at home, might have seen and heard these girls, and like ourselves might have been able to draw a comparison between them as they were when they entered the school seven years ago, and as they appeared on Wednesday mornig, June 25. They themselves, I am sure would be the most powerful missionary sermon that could be addressed to the hearts of Christians. Were not my letter already too long, I should like to give an outline of the subjects treated, but that is impossible. Suffice it to say that none of the girls selected a subject beyond her ; nor did they try in their essays to show how much of philosophy or science they had learned. All through all four essays, ran a strain of pleading for the recognition on the part of their nation of the divine rights of woman-hood ; the right to cousecrate their lives to all that is high and pure and holy, not in Church or state or any public walk of life, but in the sacred precincts of the home. To us who feel that, as long as she is in her own home, a girl is safe from all that pollutes and destroys, that evil cannot touch her while the protection of her own home is about her, it was most pathetic to hear these girls plead so earnestly for what is theirs by divine right. When at the close of the exercises the benediction fell reverently upon the hushed audience, we felt that we needed to seek that peace and grace and love with unusual earnestness for these girls and all the women and girls of this nation, we needed to pray that every earnest Christian woman who loves her own home and her own daughters may feel moved and more called upon not only to do and give as much as others, but all she can to the furtherance of the work of woman for women in the Island Empire of Japan.

Again I say that I am glad that in my last letter as your missionary representative in Japan, I can give you this account of at least a partial harvest reached from the seed sown under varying circumstances through seven years. The class of '93 is the first to go out from Miyagi Jo-gakko. May it be the first of many that, when the last great harvest-day comes, may be garnered as precious sheaves into the King's own granary.

For all the sympathy and confidence, dear friends, that you have given us during all these years, you have our sincere and cordial thanks, and we have no fear that your interest in the school and its work will flag in the years to come, but we earnestly pray that the little light which has been kindled in that pleasant lot at 75 Higashi Sambancho, Sendai, may also shine more and more unto the perfect day.

Very sincerely Yours,

LIZZIE R. POORBAUGH.

この報告は、宮城女学校創立から七年間の献身的活動によって第一回卒業生を送り出し、宮城女学校の基礎確立という大任を果し、妹エマ・プールボー、姪キャザリン・プールボーと共に「オーシァニック」号に乗船して帰国の途にあるエリザベス・R・プールボーが、つい半月前に卒業証書を授与した四名の前途に神の祝福を祈りつつ記したものである。

卒業礼拝は六月二十五日（日）に礼拝堂で行なわれ、宮城女学校創立者の一人、東北学院副院長ウィリアム・E・ホーイが、旧約聖書箴言第四章十八節の聖句「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して眞晝となる。」に基いて説教を行ない、宮城女学校創立者の一人、東北学院長押川方義をはじめD・B・シュネーダー（のちの第二代東北学院長）、H・K・ミラー（のちの第四代宮城女学校長）も列席した。卒業学年発表会は六月二十八日（水）の夜に開催された。教職員や在校生一同が卒業学年発表会並に翌日の卒業式のために礼拝堂は勿論、校舎



第一回卒業生

全体を第一回卒業学年の学年フラワーである薔薇の花を沢山使い、羊歯（シダ）と蔦とをあしらって薔薇の花の館のように美しく飾った。第一回卒業生の石井とき、宮本むら、関屋ゆき、武田かねの四名がそれぞれ宮城女学校在学中に習得した成果をこの卒業発表会で多くの来賓や聴衆に発表するのである。ピアノ二重奏・歓迎の言葉・二重唱・ピアノ演奏・オルガン演奏・英詩朗読・七年間の歩み・卒業にあたっての決意などが彼女らによって次々と発表されると、何しろ仙台では初めての催しなので聴衆一同を感激させた。

卒業式は六月二十九日(木)、午前九時から挙行された。式は奏楽・祈禱・国歌「君が代」斉唱・「教育勅語」奉読・開会の辞（卒業成績第二位の宮本むら）・小論・ピアノ連弾・小論・卒業生総代告別演説（卒業成績第一位の武田かね）・ピアノ演奏・卒業証書授与並に卒業生に與える言葉（プールボー校長）・船越衛宮城縣知事祝辞・別れの歌斉唱・祝禱（押川方義）という順であった。四人の卒業生が全員、それぞれの小論を日本語並びに英語の二ヶ国語で非常に立派に述べたので列席者一同は感激しつつ耳を傾けたが、プールボーは七年前入学当時の幼かった生徒達がこんなにまで立派な婦人に成長している姿を眺めて、宮城女学校の教育のために祈りをささげ献金をささげたアメリカの諸教会の多くの教会員並びに日本国内各地で常に宮城女学校のために祈っている教会員達にも彼女らの述べる演説を是非とも聞いてもらいたいと思った。神から自分達婦人に與えられている神聖な権利を神に喜ばれるようにいかし用いることが大事であるということを参列者一同に真剣に訴えている彼女らが、それぞれその生涯を神にささげて地の塩・世の光として生きようとする決意を謙遜な思いのもとに披瀝している姿に接してプールボーは感激している。最後に押川方義によってささげられた祝禱が静まりかえっ

た参列者一同におごそかにひびき愛と平和と恵みとが卒業生一同の前途に、又、参列者一同の上に豊かにあるようにとの祈りとして受けとめられ感謝と喜びとの裡に第一回卒業証書授与式は終了した。式後、宮城女学校同窓会が組織された。

なお、前記一八九三（明治二十六）年一月二十三日付キャレンダー宛の書翰でプールボーがふれていた学年度開始時期の変更に関して、宮城女学校主首藤陸三代理、幹事佐伯陽一より明治二十六年四月十一日付で宮城縣知事船越衛宛に「本校規則中第五条及ヒ課程表國語漢文別冊表書ノ通改正致シ度候間御認可相成度此段相届候也」との「宮城女学校規則中更正之儀ニ付願書」を申請し、四月十四日付で許可を受けている。したがって学年の始まりを四月八日、終りを三月三十一日と改めた。しかしこのあと数年間は、九月に新学年が始まり翌年七月で学年が終るという従来のやり方が続くのである。又、この規則変更で国語・漢文の内容を充実させた。

プールボー校長送別会

卒業式を終えて七年間の任務を果したプールボーは帰国の途につくのであるが、プールボー姉妹の帰国を知って別れを惜しむ人が多く、卒業式の日よりも前からホーイ夫妻、シュネーダー夫妻による送別会、押川夫妻、藤生夫妻、佐伯夫妻他日本人主催による送別会をはじめ送別会が何回も行なわれた。それらの送別会に関してヘンリー・K・ミラーは外国伝道局へ次のように報告している。

FAREWELL.

The announcement that the Misses Lizzie R. and Emma F. Poorbaugh would retire permanently from the Miyagi Jo Gakko (girls' school) was received with no little surprise. If we judge by the numerous farewell meetings and parties held in honor of these two ladies, and the sentiments which found expression on these occasions, the regret of their friends in this country is fully as great as, if not greater than was their surprise. These faithful servants of the Church leave behind them many pleasant

recollections on the part of their associates and others. It may also be safely said that they take with them not a few agreeable reminiscences. Their numerous friends in Sendai certainly tried hard to make this possible, and, if they did not succeed, it can hardly be said to have been their fault.

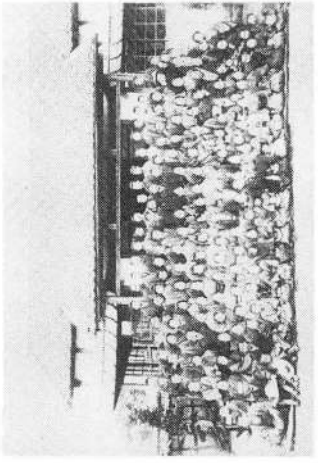
At the last annual meeting of the Mission the following action was unanimously adopted.

(This action has already appeared in the church papers, and is omitted here.)

We cannot go into details with reference to all the *sobetsukwais* (farewell meetings) which have been recently held. Very pleasant parties were given by Mr. and Mrs. Hoy and Mr. and Mrs. Schneder. Then came a Japanese banquet given by Mr. and Mrs. Oshikawa, Mr. and Mrs. Fujiu, Mr. and Mrs. Saiki, and Messrs. Kumagai, Matsura, Karasawa and Suzuki. This entertainment was held at a Japanese restaurant called the Bairin, in the eastern part of Sendai. Would that our friends could have seen us sitting on the floor, arranged around three sides of a rectangle. The picturesqueness of the occasion was enhanced when a line of young waiting girls came trooping in, each carrying a tray full of Japanese food. It would also have interested our readers to see the manipulation of chop-sticks in the operation of devouring the savory viands spread out before us. A description of the various dishes is beyond the writer's powers. But in due time the banquet was fully discussed, the trays were removed and the entertainment began. The games which were played and the other means by which the time was made to pass rapidly and pleasantly need not be mentioned. Mr. Oshikawa made a short address, the substance of which, through the kindness of Mr. Karasawa, we are able to give.

"I would like to say a few words to the two ladies who intend to leave us before long. It was just seven years ago that we received word from America that the Reformed Church would send out two lady missionaries to Japan. How glad we were to learn that we were to have the ladies among us here in Sendai! These ladies were Miss Lizzie R. Poorbaugh and Miss Mary B. Ault. We went to Shiogama to meet them. There were at that time in Sendai very few women who could speak English. These ladies must have had quite a hard time living among us whose manners and cutoms are entirely different from those in America. They labored very earnestly and zealously, both for the education and evangelization of our people. They started a school for girls, in order to teach them the arts and sciences of Western nation as well as the light which comes only from faith in Christianity. Two years afterwards Miss Emma Poorbangh joined these ladies in the work. I believe Americans experience

a good deal of trouble on account of the difference between their language and ours. The two ladies, Miss Lizzie and Miss Emma Poorbaugh courageously fought their way through these dificulties in spite of the many discouragement which often presented themselves. From what I hear, the present is the most flourishing epoch of the girl's school, in respect to both attendance and equipment. This year we shall see the first fruits of these ladies' labors, viz., the first graduates of this school. When in the future the history of evangelical work in Sendai is written, the names of the Misses Poorbaugh will be among the first mentioned and greatly praised for their untiring toil which issued in such good results. There are now in Sendai a good many young ladies who understand English. These have been instructed for the most part, by the Misses Poorbaugh. This is but one result of the valuable labor performed by these ladies. Now they are going to leave Japan for America. We who are acquainted with them are very sorry to see them leave. I have no doubt that their pupils feel so too. This is all the more true of them, as they are women, whose hearts are more easily affected both by sorrow and joy. Wherever they may grow up, they will certainly remember you, and will mourn over their past school life for having behaved so naughtily instead of doing what they should have done. They will long remember the favors and kindnesses they have received at your hands.



プールボー送別會（仙臺教会）

I have spoken in the name of your Japanese friends who are now assembled here. Our earnest prayer is that you may cross the ocean and arrive in your beloved country in safety to tell your friends how Japan looks, what kind of people inhabit it, and what progress Christianity is making in it. May your lives be happy and blessed. God grant you health, happiness and prosperity."

The Nibancho church is very closely associated with our educational institutions in Sendai. Naturally the members of this congregation desired to give public expression to their feelings with reference to the final departure of the Poorbaugh sisters from Japan. Accordingly a *sobetsukwai* was arranged, at which a number of addresses were delivered, the tenor of which was a testimonial to work faithfully performed on the part of the ladies, gratitude for leaving their homes in order to do this work and regret for the


謝状

ブールボー校長への謝状

necessity of returning home for good. Before the assembly dispersed a large group photograph was taken of all present.

Our readers have often read in our papers about "the mission" without perhaps knowing exactly what is meant by the term. It really has two meanings ; first, a regular organization of all the foreign missionaries of our Church. Again it means simply all the missionaries in their unorganized capacity. It was the mission in the latter sense who gave a farewell "Evening," in honor of their departing friends. Most of the foreigners in Sendai attended, and the affair passed off in happy style. The best evidence of the entire satisfactoriness of this party is the fact that when the guests reluctantly departed to their homes, they were surprised at the lateness of the hour.

Finally the girls' school held a farewell meeting shortly before commencement day. Quite a number of recitations and addresses were delivered. In behalf of the scholars, Miss Seki Takeuchi read an English address, which we give entire, not only for the sake of the sentiments it contains, but also to give a specimen of English composition by a Japanese girl.

"I am goiug to say a few parting words to the Misses Poorbaugh. They have lived with us many long years and during these years they treated us like children, and we thought too that they are as our own mothers, especially for those who have no mother I think, and in all these years, when we did anything bad, they healed it, when we did any right thing they praised it, when we were in sorrow they comforted us, when we were sick in bed they came to our bedside every day and treated us with kindness from the heart, so kind that we forgot that we were sick. They taught us our lessons every day. Here is one more great thing which they did, they taught us the way to God with tenderness through a great many troubles.

In those early days, as you know, almost none of the girls knew about God, and some of us worshiped idols. In those early days we had we had hard hearts against Christianity, and they softened these hard hearts with great kindness as the gentle breeze opens the flowers, and they taught us with patience until we came to understand. So now many of us girls became Christians

by their work, and although they could not see the result then, but as once they sowed this seed among us, it will grow greater and greater until at last it may bear fruit, and we will give this fruit to our brothers and sisters as they gave it to us. In these ways we will spread Christianity all over our own country. But time waits for no man, and seven years have passed as a day or a dream and now we must part with them and we are very, very sorry in our hearts to part with them, and here I come to think of Charles Dickens, words. He said this life is half made up of partings and these pains must be borne. Some part with you gladly with a hope that we will meet in this life or in the life eternal. Dear Teachers, please pardon us any act or word by which we pained your hearts during all these years, and although the great ocean lie between you and us, please do not forget us, but remember us as your dear children in Japan, and please write us often and we all hope that you may keep in good health, have a pleasant journey and reach your home safely."

A testimonial from the Japanese teachers of the school was read and given to Miss Lizzie R. Poorbaugh, who accepted it with an appropriate response. Afterwards a testimonial was given to Miss Emma F. Poorbaugh, who also replied briefly. We give a translation of the latter, which is substantially like the one given to Miss Lizzie.

"Our most esteemed teacher, Miss Emma Poorbaugh, came to our country from the far off land of America, crossing a thousand miles of ocean and leaving her dear ones behind, she devoted her life to educating Japanese girls. More than five years she most faithfully helped her sister in the school by her enthusiastic labors and her patience. We find the school in good condition, every thing in its place, and new names added to its roll daily. Now a season of great rejoicing has come to our school in that we see the first class of four graduates. This we owe to her and for this we offer her hearty thanks.

We are very sorry to part with her. Our hearts are filled with sorrow. We have no words to express our love and gratitude for all that she has done for us. But at this sorrowful time we are comforted by the thought that the school is already built on a solid fonudation, and we hope and pray that it may grow more and more.

Soon she will go from us, but her kind deeds will remain with us in the school, and we will keep all that she has done fresh and bright in our memory."

In view of such expressions of regard and the numerous farewell meetings we again say that if the Poorbaugh sisters fail to carry pleasant recollections with them to America, it will not be the fault of the Japanese.

HENRY K. MILLER.

Yokohama, Japan, July 6, 1893.

押川方義夫妻その他による送別会は榴岡の料亭「梅林」で開催されたが、その際、押川は次のような感謝の言葉を述べている。

「エリザベス・プールボー先生、エマ・プールボー先生は私達の宮城女学校をご退職なさろうとしておいでです。『合衆国改革派教会』が二人の婦人宣教師を日本へ派遣するという報せを耳にしたのは七年前のことでした。そして仙台においでになることを知った時の喜びは忘れられません。そのお二人がプールボー先生とオールト先生でした。私達は塩釜までお迎えに行きました。当時の仙台には英語を話すことの出来る婦人は何人おったでしょう。生活習慣の全く違う日本においでになってどんなにかご不自由だったことでしょう。先生は教育にも伝道にも誠実に熱心にあたられました。キリスト教の信仰をもつことによってしか得られない恵みだけでなく西欧の学問芸術についても女学生達にお教えくださいました。言葉の違いのためにもさぞかしご苦労なさったことでしょう。又、全く意気阻喪して了いそうな困難にも遭遇なさったことでしょう。しかし先生方はそれらの艱難を乗りこえて使命に邁進なさいました。宮城女学校は創立以来、今日が最も隆盛な状況を迎えております。お二人が熱心に教育にあたられた成果として此の度第一回卒業生を送り出すことが出来ます。将来、仙台におけるキリスト教伝道の歴史が書かれる時には、先生方ご姉妹のお名前が先ずあげられ、非常にすばらしいお働きをなさったお二人に対する賞讃の言葉が連ねられるでしょう。今や仙台には英語を解する若い婦人が沢山居ります。そしてその大半は両先生のご指導をいただいた人々です。しかしこれはお二人がなさいました尊いお働きの中のたった一つをあげたにすぎません。お二人は今やアメリカへお帰りになろうとしておいでです。親しくお交わりいただきました私達はお別れすることがと

ても悲しいのです。先生方からお教えを受けることが出来た生徒達はなお一層悲しいことでしょう。教えていただいた感謝の喜びとお別れしなければならない辛い悲しみとが一緒になって、私などよりはなお一層興奮していることでしょう。先生方からお教えいただいた人は、生徒であろうと一般の人であろうと、将来どこに居ってもお教えを受けた当時のことを思いおこし、もっともっと眞面目に熱心にお教えを受けるべきであったと嘆くことでしょう。お二人の先生が本当に親身になってお導きくださいましたご親切とご愛情に対して、私は、ここに出席しているすべての人々を代表してお禮申しあげます。お二人のご帰国の旅路の上に神のお導きとお守りがあるように祈ります。愛する故郷へお着きになりましたら日本でのご経験、日本の実情、特にキリスト教の伝道の様子をお話くださいますようにお願いします。お二人の前途に神の御祝福が豊かにありますように！」

仙台教会主催の送別会も行なわれ、宮城女学校主催の送別会は六月二十六日（月）に行なわれた。その際、学校はプールボー校長に別掲写真のような「謝状」（感謝状）をおくった。

プールボー姉妹歓迎会

プールボー姉妹並びにキャザリン・プールボーは八月二十九日（火）に無事故郷ペンシルヴァニア州ベルリンに着いた。八月三十一日の夜、母教会に於て歓迎会が開催され、彼女ら姉妹も日本における伝道の経過について報告した。更に九月三日の日曜日にも老若男女多数の教会員が礼拝を守った後、彼女らの報告をきき、更にキャザリンも日本語をまじえて日本における経験を話し教会員一同も彼女らの活動を守り導き給うた神に感謝の祈をささげた。それらの模様が一八九三年九月十四日号の「リフォームド・チャーチ・メッセンジャー」紙に次のように報ぜられている。

THE MISSONARIES AT HOME.

The Misses Poorbaugh returned to their home in Berlin, Somerset county, Pa., on Tuesday, August 29 th.　On the following

Thursday evening a public reception was tendered them by the ladies of the Conrad Missionary Society of the Berlin Reformed church, and it was a grand affair. The reception was held in the large and beautiful main auditorium of the church, which was crowded by friends and old neighbors of the two ladies.

The services of the occasion opened with an organ voluntary, followed by prayer, led by Rev. S.J. Taylor, of the Lutheran church. The hymns and music throughout were excellent and appropriate. There was an address of welcome by the pastor, Rev. A.R. Kremer, D.D., to which a response was made, partly in Japanese, by Miss Emma Poorbaugh, which was well spoken and well received. After an address by Rev. A.J. Heller, Miss Lizzie Poorbaugh spoke at considerable length, giving an interesting account of our mission work in Japan. She has the happy faculty of presenting facts and ideas plainly and in choice language.

The following Sunday, September 3 rd, was our Children's Day. The church was again crowded with people from the most aged to the youths and little children. The service used was that prepared by Miss Emma Pitt, of Baltimore, and sold by our publishing house in Philadelphia. It is perhaps the best that we have yet used, and was most happily rendered. A very interesting and instructive address was made by Miss Lizzie R. Poorbangh, who was evidently inspired by the new surroundings ; for when she left this place for Japan, over seven years ago, the church was not finished. Of the main part of the sanctuary she had only seen bare walls, rafters, and scaffolding, but now she stood in the midst of a completely changed scene, the result of many a hard and painful struggle. Another feature of the day was a recitation in Japanese by Miss Kitty Poorbaugh, a tall and comely maiden, but only a child of six years when she accompanied her aunt to the foreign mission field. She speaks that strange languagewith more ease than she does her own native English.

We hope and believe that the know ledge thus acquired by these ladies will, even at home, in Christian America, prove to be serviceable in the great and holy cause of foreign missions.

A.R.K.

（註　1）　合同に加わった教会は「日本基督公会」に属する横浜海岸教会，東京新栄教会，信州上田教会，肥前長崎教会並びに「日本長老公会」に属する横浜住吉町教会（指路），東京霞月町教会「ミ」，下総佐倉教会，東京品川教会，千葉大森教会の合計九

教会で、それらを代表する議員八名（長崎教会代議員は延着）に宣教師十二名を加えた二十名で成立つ会議でタムソンを議長として「日本基督一致教会」の設立を決議発足した。

（註 二）仙台教会は明治十四年五月一日創立、古川教会は明治十八年四月一日創立、岩沼教会は明治十八年十月三十日創立、石巻教会は明治十八年十一月七日創立。

（註 三）"Farewell Services held in Salem Reformed Church, Harrisburg, Pa., June 1, 1886, on the Occasion of the Departure of Lizzie R. Poorbaugh and Mary B. Ault, as Missionary of the Reformed Church to Japan", Harrisburg, Pa.; Telegraph Printing House, 1886. 参照。

（註 四）Mary B. Ault letter to Kelker, June 12, 1886 (on board ship).

（註 五）プールボー一行の横浜到着を「七月四日」とする説があるが、それは「メッセンジャー」紙一八八六年七月十五日号掲載記事 "Arrival of the lady missionaries" 中に "Poorbaugh and Ault who left San Francisco on the 12th of June in the "City of Sydney", arrived safely at Yokohama, Japan on Sunday July 4 th." とあるのによったからであろう。しかし、オールト自身が到着後間もない七月十日に記したケルカー宛書翰には "on the morning of the second of July" とあり、又、横浜到着直後にプールボーがしたためた書翰を受取った七月二十六日にアニー・M・プールボーがケルカーに宛てて記した書翰中に "Today I was this happy recipient of a short, only a very short letter from my dear sister Lizzie. I believe you are interested enough to like to hear of it. It is written from Yokohama Japan dated July 2, '86." とあることから判断すれば、日本からの書翰到着前に印刷発行された「メッセンジャー」の記事中にある「七月四日」よりは、両書翰中にある「七月二日」の方が正しいと思われる。

（註 六）Annie M. Poorbaugh letter to Kelker, July 26, 1886.

（註 七）一八八五（明治十八）年九月十七日に三菱汽船と共同運輸とが合同して日本郵船が創立。当時、日本郵船の横浜発函館行汽船の途中寄港地は荻ノ浜であり、荻ノ浜・塩釜間には連絡用小汽船が運航していた。明治十九年四月三十日の奥羽日々新聞七頁に掲載されている「日本郵船会社汽船荻ノ浜出帆廣告」によると、横浜・荻ノ浜・函館航路に就航の汽船は東京丸や新潟丸などであり、又、荻ノ浜・塩釜間の連絡小汽船は玉川丸である。

（註 八）稲垣ぎんの生年月日並びに受洗年月日は日本基督教会上田教会所蔵「列名伝」（明治九年十月七日調・明治廿七年六月調）中に記載の稲垣ぎんの項による。稲垣ぎんは、明治十八年九月三日設置認可の明治女学校（発起人は木村熊二・田口卯吉・植

村正久・島田三郎・巌本善治、校長は木村熊二）最初の教員四名（木村熊二・津田梅子・人見ぎん・富井於菟）中の人見ぎん（明治十四年十月に植村正久より受洗の下谷教会員人見亀司の夫人）と同一人である。人見ぎんは宮城女学校創立の明治十九年九月に明治女学校を退職、宮城女学校には稲垣ぎんとして就任している。（「女学雑誌」第四号、第二十五号、第三十六号。青山なを著作集第二巻「明治女学校の研究」百四十、二百十六、四百二十九、四百九十二、四百九十七、五百十一、七百八十一～八十二、八百二十三～二十四頁参照。）なお、人見亀司は明治十九年春から翌二十年夏頃まで石巻教会を牧会し、のち新潟へ移っている。（「石巻山城町教会九十年史」。）

（註　九）　プールボー一行の仙台到着日について「宮城女学校五十周年史」並びに「宮城女学校七十年史」には「七夕祭りの第二日目」、「宮城学院八十年小誌」には、「七月八日、七夕祭第二夜」と記されている。これはオールトの回想記の記述に基いたからであろう。オールトの回想記の内容と一八八六年にプールボーやオールトが記した報告書内容とを比較すると、到着翌日の来訪者氏名、開校当初の生徒数などに相違が見られるが、記憶のみに基いて記された回想記に若干の誤記があるのは止むを得ないことであろう。なお、一八八七年六月一日からオハイオ州アクロンで開催された「合衆国改革派教会」総会議事録には、プールボー一行の横浜到着は七月二日、仙台到着は七月十六日と記されている。（"Acts 1887", p. 73.）

（註一〇）　首藤が政界活動の多忙期間中は、藤生金六、佐伯陽一が校主代理をつとめた。

（註一一）　Poorbaugh letter to Kelker, Nov. 6, 1886.

（註一二）　Hoy letter to Johnston, Nov. 5, 1886.

（註一三）　Ibid., Nov. 24, 1886.

（註一四）　Ibid., Dec. 14, 1886.

（註一五）　Ibid., Dec. 15, 1886.

（註一六）　Hoy (Secretary) letter to Johnston, Jan. 28 and 29, 1887. (28 Tsukiji, Tokio.)

（註一七）　Poorbaugh letter to the Ladies of the Reformed Church, Jan. 19, 1887. (35 Higashi Yobancho, Sendai.)

（註一八）　例えば、コート夫人（プールボー）の回顧文には、開校当時の生徒数は六名とあり、武藤ゆき・岸波せき連名の回顧文には八名とあるが、既述のごとく、開校直後の一八八六年九月二十八日に記されたプールボーの書翰によれば十名であるがごときである。

（註一九）　"Acts 1887", pp. 74-78.

（註一〇）John I. Swander は一八三三年に Hope Township, Warren County, New Jersey に生る。生後五週間にして父母と共にオハイオ州ティフィン Tiffin, Ohio の近くに移住。一八五九年、オハイオ州ハイデルバーグ大学（Theological Seminary of Reformed Church, Tiffin）を卒業、翌年オハイオ州デイトン出身の Barbara Kimmel と結婚。「合衆国改革派教会」牧師として Dayton, Chillicothe, Lancaster, Northampton, Latrobe, Fremont などで牧会にあたり、此の間、フランクリン・アンドそマーシャル大学より名誉学位、フロリダ州立大学より神学博士、ジョージア州ボードン大学 Bowdon College よりドクター・オブ・フィロソフィーの学位を受け、又、多数の著書を著した。二人の子女を天におくり（Sarah Ellen, 1879; Nevin Ambrose, 1884.）悲しみの中にあった時、「合衆国改革派教会」が宮城女学校を創立したことを知り、しかも校舎新築に必要な資金が集らずにいることを聞くや、夫妻は二人の子女の召天を記念して、巨額な資金をキリスト教女子教育のためにと献じた。なおこれより先、夫妻の献金によって、ランキャスター神学大学にも「スワンダー記念講座」"The Swander Lectureship" が開設されたが、これも "Sarah Ellen and Nevin Ambrose Swander Lectureship" として知られている。John I. Swander は Fremont での牧会中よりハイデルバーグ大学で組織神学並びに実践神学を講じ、更に一九〇四年からランキャスター神学大学で組織神学の教授として多くの神学生を指導した。夫妻が宮城女学校の教育のために数次にわたり献ぜられたのは、夫妻の Fremont, Ohio 時代（一八八一－一八九二）のことである。（J.I. Swander, "History of the Swander Family", Tiffin, Ohio, 1889. J.I. Swander, "Autobiography of Dr. John I. Swander", Philadelphia, Pa., 1911. J.I. Swander, "After Death What, Where and Why?", Tiffin, Ohio, 1919.他。）

（註一一）Elder Benjamin Kuhns, Dayton, Ohio.

（註一二）Poorbaugh letter to Kelker, Oct. 26, 1886. Ault letter to Kelker, March 4, 1887. Hoy letter to Board, March 30, 1887.

（註一三）Hoy letter to Johnston, Jan. 24, 1887.

（註一四）Ault letter to Kelker, March 4, 1887.

（註一五）仙台大学並に朴沢女子高等学校の前身で、明治十二年に創立された松操私塾を明治十七年に改称した私立松操学校。創立者朴沢三代治校長は革新的な裁縫一斉教授法を創始し、その著「裁縫教授書」は文部省の検定教科書に採用されたほどの優れた教育者であり、明治十七年には彼の考案になる裁縫教授用具や生徒の作品を米国博覧会に出品するなど進歩的見識の持

主であった。

（註二六）Poorbaugh letter to Kelker, Aug. 23, 1887. "Acts 1890", p. 83.

（註二七）Poorbaugh letter to the Women of the Church, Sep. 7, 1887.

（註二八）Poorbaugh letter to Kelker, Aug. 23, 1887.

（註二九）"Acts 1890", p. 91.

（註三〇）Ibid., p. 92.

（註三一）Ibid., p. 91.

（註三二）Ault's letters to Kelker, Dec. 3, 1887 and Dec. 10, 1887.

（註三三）現在のフェリス女学院は創立当時の正式名称は「アイザック・フェリス・セミナリー」であったが、やがて慣行的に「フェリス・セミナリー」、日本流には「布恵利須英和（のちに和英）女学校」と呼ばれるようになった。「フェリス女学院一一〇年小史」には次のように記されている。「ところで『セミナリー』とは、むろん『神学校』を意味したのではない。第二代校長ブースは開校五十年記念式の挨拶で、キダー女史の事業は、米国のメアリー・リオンの女子教育の偉業に感化されたものに違いないと述べているが、リオンは、アメリカの最も古い女子大学であるマサチューセッツ州マウント・ホリヨーク・カレッジの創設者である。この女子大学は創立当時、マウント・ホリヨーク・（フィーメイル・）セミナリーと呼ばれ、十九世紀に活発化する米国の女学校（female seminary）発展運動の中心的役割を果した。この私立の女子中・高等教育機関であるセミナリーは、宗教及び道徳教育を最も重視し、ついで家政教育、教員養成、その他の知的・情操的訓練を重んじた。右のマウント・ホリヨーク・セミナリーの場合、その創設目標は、一、敬虔にして教養高い家庭婦人の養成、二、女教員養成、三、伝道に従事する婦人の養成であった。このような教育理念を掲げるセミナリーが、十九世紀、米国につぎつぎと創設され、多くの場合、創設のために格別の援助を惜しまなかった人の名をとって、○○セミナリーと命名された。」（十頁）。ブールボーはこの「フェリス・セミナリー」（「フェリス英和女学校」）のことが頭にあり、「宮城英和女学校」という校名で設立認可申請を行なおうとしたものと思われる。

（註三四）Poorbaugh letter to Kelker, Jan. 25, 1888.

（註三五）Poorbaugh letter to Kelker, Aug. 1, 1888. Kelker's letters to Poorbaugh, Aug. 24 and Aug. 31, 1888. Poorbaugh letter to Kelker, Sep. 29, 1888.

(註四六) Poorbaugh letter to Kelker, July 9, 1888. Josiah Poorbaugh letter to Kelker, July 20, 1888.
(註四七) Poorbaugh letter to Kelker, Aug. 31, 1888.
(註四八) Poorbaugh letter to Kelker, Nov. 16, 1888.
(註四九) "Annual Report 1888-89" by Elizabeth and Emma Poorbaugh
(註四〇) "Acts 1890", pp. 91-92.
(註四一) "Minute of Meeting of Directors" (Edinburgh Medical Missionary Society, 5st. Andrew Square), Feb. 21, 1890.
(註四二) Ibid., March 21, 1890.
(註四三) "The Missionary Guardian", Vol. I, No. 4 (April, 1891), pp. 121-122.
(註四四) 醫生会ヘ´ 今出来ヒモセ設他°
(註四五) "The Missionary Guardian", Vol. I, No. 12 (Dec., 1891), p. 377. "Acts 1893", p. 112.
(註四六) Poorbaugh letter to S.N. Callender, Oct. 24, 1891. Poorbaugh letter to Board, Jan. 15, 1892. Poorbaugh letter to Callender, Jan. 22, 1892. Poorbaugh letter to Kelker, Jan. 31, 1892. Poorbaugh's letters to Callender, Feb. 23, March 9, April 16 and April 29, 1892.
(註四七) 「トミリス女学院一〇〇年史」ペ十一ペ十一頁°
(註四八) "The Missionary Guardian", Vol. II, No. 7 (July, 1892), P. 206.
(註四九) Emma Poorbaugh letter to Board, June 6, 1892.
(註五〇) "Acts 1893", p. 117.
(註五一) "H.S.", p. 15.

第五章　確(かた)くして揺(うご)くことなく

だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである。

（コリント人への第一の手紙　第十五章五十八節）

発展と試錬



モール校長と生徒達

第二代校長モール就任　プールボーの後任校長の選任が難行して仲々決定せぬままに月日が経ちプールボー離日の日が近づいて来たため、外国伝道局は、一八九三年九月からの新学期にそなえ、この緊急事態に対処するため、当時丁度休暇帰国中であったジャイラス・P・モールを校長に、モール夫人を副校長に任命した。そこでモール夫妻は休暇を切りあげて急遽仙台に向うべく、「エムプレス・オブ・ジャパン」号でヴァンクーヴァーを出港し、七月九日（日）午前九時、横浜に到着、休む間もなく仙台に着任した。(註二)

モールは早速八月二十六日（土）に在日宣教師社団（いわゆるジャパン・ミッション）の特別会議を召集開催した。モールが宮城女学校第二代校長に就任するに当り、宮城女学校の管理運営に関する重要問題を審議するためであった。宮城女学校は創立に当って、県当局の指示により、形式上ではあっても日本人の校主を置く必要があり、押川方義を校主とし、又、押川のあとも首藤陸三が校主となっていた。しかし実質上、校務は校長プールボーが掌理掌握していた。すなわち学校の管理運営権はアメリカ人教師（プールボー校長）が掌握することになっていた。したがって事がおこると責任の所在が不明確となることもあり、それ故に学校の管理運営権を日本人に移譲するようにと言う要求も出たのである。そこでこの問題に関する日本人の不満を除去するだけでなく、管理運営に

関する責任の所在を明確にすべく種々審議が行なわれた結果、在日宣教師社団の実行委員会を設置することとなり、実行委員会の構成並びに任務等についても決定した[注11]。当日の記録は次の通りである。

Sendai, Japan

Aug. 26, 1893

A special meeting of the Mission was called to convene at the home of the Prest. 75 Higashi Sanbancho,Aug. 26, 1893. The President Rev. Dr. J.P. Moore called the meeting to order and opened the same with devotional exercises.

Rev. Henry K. Miller was elected Recording Sec., Protem, and the President was appointed corresponding Secretary, Protem.

The minutes of the previous regular and special meetings were read and approved of.

The following action in reference to the Girl's School was taken…

I. Resolved—That in accordance with the instructions of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States, the Miyagi Jo-Gakko be formally placed under the control of said church, and that in all difficult cases calling for adjustment the authority of the Mission be final.

II. That the Mission annually appoint an Executive Committee of four persons consisting of two members of the Mission, one of whom shall be the Principal, and of two Japanese, one of whom shall be the Kanji of the School.

III. That it shall be the duty of the Committee

(1) To appoint and discharge all officers and teachers of Miyagi Jo-Gakko not appointed by the Board of Commissioners of Foreign Missions of the Reformed Church in the U.S.

(2) To fix the salaries of officers and teachers appointed by this Committee.

(3) To look after the interests of the beneficiary students of school.

(4) To make regulations for the religious exercises of the school.

(5) To fix the curricula of studies and to assist in carrying out the rules of the school that have been or may be established.

(6) To take proper care of the buildings and all school property.

IV. That the proposed Executive Committee be at all times amenable to the Mission,whose consent will be necessary to make the Committee's actions valid.

The following persons were appointed to serve on the above named Committee.

Rev. J.P. Moore, D.D., Principal.

Rev. H.K. Miller.

Mr. Y. Saiki, *Kanji*.

Mr. Kumagai.

The case of Miss Omura Miyamoto, a member of last year's graduating class of the Girl's School was considered, and her request to the Mission to be permitted to enter perfect the Tokio Music School for the next two years was not granted——

The following action was taken——

Resolved that we sympathize with Miss Omura Miyamoto and appreciate her desire to enter perfect herself in Music ; yet we think it would be establishing a dangerous precedent in the view of other supported girls of our school, were the request granted.

The Principal, Vice Principal and Miss Mary Hollowell were appointed a Committee to comunicate with her, and to find suitable employment for her in connection with the School and as a Bible woman.

Adjourned.

J.P. Moore

Corresponding Secretary

第五章　すなわち、外国伝道局の方針を尊重して、宮城女学校運営は、形式上は「合衆国改革派教会」の管理下にあるが、実質上、個々の諸問題の取扱いは在日宣教師社団（いわゆるジャパン・ミッション）の決定によることとした。そこで宮城女学校の管理運営を円滑に実行するために在日宣教師社団に実行委員会を設置し、在日宣教師社団からの

二名（内、一名は宮城女学校長とする。）と日本人側からの二名（内、一名は宮城女学校幹事とする。）の四名を以て構成することにした。実行委員会の任務は、外国伝道局によって任免される者以外の宮城女学校教職員の任免並びに給与の決定・給費生関係事項の処理・学校の宗教関係諸行事の統轄・教科課程関係事項の決定・学校の全資産の適正管理等であり、最初の実行委員にはヘンリー・K・ミラー、ジャイラス・P・モール、熊谷駒之助（東北学院教授、歴史神学・経済学担当）、佐伯陽一（宮城女学校幹事、修身・国語担当）の四名が就任した。

モール夫妻はこの時より十年前の一八八三年九月二十三日に来日以来、東京を中心に埼玉県各地へまでも足をのばして伝道に奮戦し、初代衆議院議長中島信行夫妻をはじめ多数の青年男女を信仰に導き、番町教会を創立すると同時に、一八八六年十月から六カ月間学習院で英語を教授するなどの活躍を続けていたが、外国伝道局の方針にしたがい活動の拠点を仙台へ移すこととし一八八七年に仙台へ転じた。

山形英語学校

ところが、山形県知事柴原和が校主となって創立される山形英語学校が、かねてより「合衆国改革派教会」在日宣教師社団に対して英語教師の派遣を求めていたが、折衝がまとまり、同年五月十日に柴原和とA・D・グリングとの間で次のような條約書が締結されるに至った。

條　約　書

山形英語学校々主柴原和ト米国日耳曼レフオルムドミッション委員エー・デー・グリングトノ間ニ結約スル條款左ノ如シ

第一　山形英語学校ハ日耳曼レフオルムドミッションヨリ英語教師トシテ米国人夫妻ヲ一ケ月銀貨百貳拾五圓ノ給料ヲ以テ明治二十年十月ヨリ向フ三ケ年間傭入ルヽ事

第二　教師ニハ無償ニテ家屋ヲ貸與スル事

但内部ノ修繕装飾等ハ教師ノ負擔タルヘキ事

第三　押川方義氏ヲ校長ニ依頼シ該校ヲ総理セシムル事

第四　前條款ニ従ッテ日耳曼レフオルムドミッションハ適當ナル教師ヲ西暦一千八百八拾七年十月迄ニ派遣スル事

大日本明治二十年五月十日

柴　原　和

A.D. Gring.

Pres. of Mission of Ref.
Church in the U.S. in Japan

W.E. Hoy
Secretary

そこで仙台に移って間もないモールが外国伝道局の方針によって、押川が校長となる山形英語学校へ英語教師として赴任することになった。モールは山形に転じて英語教授にあたると同時に、自宅でバイブルクラスを開講するなどの活躍を続けたが、そのバイブルクラスがやがて山形教会（現・日本基督教団山形六日町教会）の創立へと発展したのである。一八八九年夏、再び仙台に転じて東北学院神学部で神学・教会史等を講じ、又、第二高等中学校（のちの旧制第二高等学校）にも教鞭をとる傍ら、仙台基督一致教会（現・日本基督教団仙台東一番丁教会）に集る第二高等中学校生徒のグループを指導した。これが第二高等学校忠愛之友倶楽部（基督教青年会）の濫觴となるのであるからモールが如何に青年の指導に大きな影響を与えていたかがわかる。彼は休暇を得て偶々帰国中に、宮城女学校長就任の命を受けたのである。副校長就任の命を受けたモール夫人アンナも初めて来日の時、彼女のバイブルクラスで女流民権論者としても著名な中島俊子（湘烟、中島信行夫人）をはじめ多くの婦人を信仰に導き、又、山形在任時代には病院伝道や救貧活動などにも特に力をいれ多くの者を信仰へ導いた。彼女はグリング夫人ハティーと同様に、日本におけるキリスト教伝道のためにはキリスト教主義教育を行なう女学校の創設が必要であることを、外国伝道局に熱心に訴えたことは既述の通りであり、グリング夫人やモール夫人の熱心な訴えが実ってプールボーやオールトが日本へ派遣されて宮城女学校が創立されたのである。モール夫妻は、プールボー校長姉妹の引退後の宮城女学校の校長並びに副校長に任命されて仙台に着任したのであるから、その心境は格別のものであったと思われる。



橋本經光

橋本經光

モールが校長に就任して間もない一八九三年十月十二日に、県に申請した宮城女学校校主変更願が十月十八日に認可になり、首藤陸三に代って橋本經光が校主となった。宮城女学校創立当時、宮城県議会副議長であった首藤は宮城女学校創立のために理解を示し、その持家をプールボーらの住居に提供し、設置認可書申請に関しても種々助言を行なうなど協力を惜まず、又、初代校主押川方義が欧米視察旅行に出発することになった時には押川に代って校主となった。しかし首藤は有力な政治家として極めて多忙であったため、幹事となった藤生金六や佐伯陽一などがそれぞれ校主代理を勤めたりしたが、この年、首藤は改進党より衆議院議員に当選して帝国議会に出ることになったので、校主を橋本經光と代ることとなった。橋本は四国松山藩士橋本宅次の長男、すなわち押川方義の長兄である。陸軍士官、愛媛県農学校教授などを歴任したが、この間、弟押川方義の影響を受けて、母橋本只子と共に受洗[註三]するに至り、押川とホーイとによって仙台神学校が創立されるや居を仙台に移して、弟押川が校長である仙台神学校に入学した。橋本が宮城女学校校主となった時、橋本はまだ東北学院神学部邦語神学科在学中であった。彼は翌一八九四（明治二十七）年六月三十日に神学部第一回生として卒業するのである。

なお校主変更願書提出の日、十月十二日に校主代理で幹事である佐伯陽一の名義で申請した宮城女学校の規則変更願も十月十八日に認可になり、規則第十九條に規定されている授業料の月額が一円から七十銭に下げられた。

外国伝道局の緊急特別の要請を受けたモール夫妻が、暫定期間であるが宮城女学校の校長並びに副校長の任務に専念している間にも、外国伝道局は後任校長の人選を急いでいた。そこへ在日宣教師社団から、プールボー姉妹引退後の宮城女学校で日本人教師達の適切な支援を受けながら立派に教育の実をあげているハロウェルの希望と要請による候補者をあげた書翰が外国伝道局に届いた。外国伝道局は、ハロウェルの希望と要請を尊重し、ハロウェル

の協力を受けて校長の任務を遂行することが出来る人物としてスイスのベルン州出身で、八歳の時アメリカに移り、長じてオハイオ州ティフィンのハイデルバーグ大学を一八九三年に卒業し[註四]、オハイオ州トレードーの公立学校で教壇に立っていたレナ・ズーフルを一八九四（明治二十七）年三月十四日に選任した。彼女は早速日本に向う準備を済ませ、八月十六日にサンフランシスコを出港の汽船で、九月二日に横浜に着いた。直ちに仙台に着任して宮城女学校第三代校長に就任したのでモール夫妻は宮城女学校での任務を離れて本来の任務に専念できるようになった[註五]。

第二回卒業式

モール夫妻が宮城女学校校長、副校長として教育に専念した学年の最後の日、即ち一八九四年六月二十九日（金）に、宮城女学校第二回卒業式が挙行された。この年の卒業生はただ一人、黒沢かつえであった。このたった一人の第二回卒業生のための卒業式を、宮城県副知事（書記官）、仙台市長の出席のもとに挙行することができたモール校長は格別感慨深かったことであろう。モールはその様子を次のように報告している[註六]。

The Miyagi Jo-Gakko closed for the summer vacation, on Friday, June 29th, and at the same time held its second graduating exercises.

The programme and decorating committee had done its work well, and when the commencement day came, an interesting programme of exercises, and a tastefully decorated room awaited the audience. Over the large front gate were two immense Japanese flags crossed, gracefully waving, as they responded to the cool breeze that seemed to blow for our special benefit that day, since the weather had been extremely hot for a week previous, and became so again afterward.

Over the outside door the "Stars and Stripes," crossed by the "Hi-no-Maru," Japanese flag, reminded one of the fact that in this school, America also was represented; that here America and Japan meet to do the Lord's work. At the end of the hall, before entering the chapel, was written in Chinese characters the word, "*Kangei*," Welcome; and on entering the chapel on the rear wall, in the same characters the words, "*Miyagi Jo Gakko dai nikai Sotsugyo Shiki*." The Second Annual Commencement

of the Sendai Girls' School. On the stage were placed vases filled with beautiful flowers, and pot plants of rare kinds and peculiar shapes which Japanese gardeners only know how to cultivate, and which were mostly loaned to us by friends in the city. The room was comfortably filled by an interested audience who were there by invitation, including the Vice-Governor of the Province and the Mayor of the City, and most of the foreigners who reside in the place.

While a march was being played on the piano belonging to the school, our girls, to the number of fifty-five, dressed in their best, and making really a beautiful picture, marched into the room, and took their appointed places.

The exercises were opened with instrumental music followed by prayer, the reading of the Imperial Rescript and the singing of the National Hymn, "Kimigayo." The rest of the programme consisted of vocal and instrumental music, the reading of a Japanese and an English graduating essay by the one graduate, Miss Katsuye Kurosawa ; addresses by the Mayor and Vice-Governor, and a short address by the president of the school, Rev. J.P. Moore, in connection with the presentation of the diplomas. Rev. H.K. Miller, who is a member of the Executive Committee of the school, dismissed the audience by pronouncing the Benediction in Japanese.

A feature of such exercises in this country, and which strikes an American as being rather odd, is the passing round of tea and cakes to the audience and also to the members of the school.

Each invited guest received a small box filled with different kinds of Japanese cakes, while the students only a paper of cakes, and those not quite so expensive. I was rather amused when the bill of commencement expenses was presented to me, and there was one item written in English, "Kek," and amounting to thirteen *yen* (seven dollars), which I could not at first understand, but afterwards learned to be the cake bill.

All seemed pleased with the exercises ; and the music, which may be said to be a feature of this school, was never better. So it was said by those who were competent to judge. Mrs. Dr. Swartz, of Sendai, a member of the Methodist Mission, in the absence of Mrs. Moore, assisted Miss Hollowell in preparing the girls in music for the commencement exercises, and the success of this part of the programme showed that her work was faithfully and carefully done. We owe our many thanks. Of course, it was a disappointment all around that Mrs. Moore, who had started the girls in music, and who was looking forward to helping in making these closing exercises a success, could not be present even when the day came, being still confined to her bed on

account of the operation she had undergone two months previous.

These annual exercises serve as a good advertising medium for the school, by bringing the public into closer contact with it, and showing them what is done in our school.

I have no doubt that on this occasion, as on like previous ones, a good impression was made, and the school will receive new favor and a more extensive patronage from the Sendai public, and thus God's name be honored and His kingdom extended.

J.P. Moore.

Sendai, Japan.

ここでホーイのことにふれておくが、一八八五年十二月一日に来日するや、押川方義の切なる訴えに共鳴して仙台神学校並びに宮城女学校の創立に全身全霊を傾けて奔走し、創立以後も健康を害しつつ使命に邁進し、メアリー・B・オールトと結婚後も夫妻揃って伝道に、教育にと活躍して来たが、外国伝道局が一八九三年三月の会議で決定したホーイ夫妻の休暇帰国も、ホーイが副院長をしている東北学院内の諸事情のため仲々実現に至らず、一八九四年春にホーイ夫人だけが三人の子供達とホーイ夫人のバイブルウーマン（聖書婦人）の吉田みさをを連れて帰国し、ホーイが「エムプレス・オブ・インディア」号に乗船して横浜を発ち帰国の途につくことが出来たのは同年十二月七日のことであった。なお、この吉田みさをは、「合衆国改革派教会」が我が国に最初に派遣した宣教師アンブローズ・D・グリングが埼玉県に伝道をして最初に洗礼を授けた信者、越ヶ谷の吉田兼三郎夫妻の娘で、宮城女学校に学んだが、卒業を待たずして、プールボーの推薦により、ホーイ夫人の助手となり、同時にホーイ夫妻の指導を受けつつバイブルウーマンとして、ホーイ夫妻、特にホーイ夫人の伝道の良き協力者となって活躍した。

バイブルウーマン

ここでバイブルウーマンという言葉が出て来たので、一応説明を加えておく。宮城女学校第五代校長サディー・L・ワイドナーの小論、"Bible Woman's Work"の冒頭にある次の文が、

簡潔にバイブルウーマンの任務を説明している。[注七]

As in the days of Christ's earthly career there was a band of humble women who ministered to His needs and were the last to leave the cross and the first to be at the sepulchre, so now here in Japan also there are women who minister to the needs of His children and thus fulfil the Master's own words: "Inasmuch as ye have done it unto one of the least of these my breathren, ye have done it unto me."

又、バイブルウーマンとしての吉田みさをの具体的な活動内容については、ホーイ夫人が外国伝道局総幹事キャレンダー宛に送った次の書翰[注八]を通して知ることが出来る。

Our Bible Woman.

Sendai, Japan, April 25, 1892.

Dear Dr. Callender: —For a long time I have felt like telling you and the Christian friends about my little Bible woman.

Yoshida Misao San was partly educated at a Presbyterian school in Tokyo, supported by some friends in Mercersburg, Pa. She came to our school in Sendai three years ago. Last fall I was very anxious to get a Bible worker, and, after looking around in Tokyo and Yokohama, I did not succeed in finding anyone willing to come to the country. Miss Poorbaugh kindly allowed Misao San to leave school one year before graduating, and she became my helper.

She was not a brilliant scholar, and I am sure the past year has done her more good than if she had remained in school. I superintend all her work and try to keep her busy. I have found her very faithful.

The mornings she spends in studying the Bible, following an outline prepared by Mr. Hoy. On Monday afternoons she takes the cars and goes to Masuda, a small town six miles below Sendai. Here she holds a woman's meeting, teaching the Bible and knitting.

Tuesday afternoon is her visiting day. Sometimes she visits the Christians, but oftener goes to the homes of unbelievers. She does not wait for an invitaion to go to places, but goes out for a walk, and with some polite excuse asks if she may enter the homes of the people. As Japanese houses are so open it is very easy to do this, and Misao San has met with nothing but kindness so far. She particularly delights in working among the poor. In this she is rather exceptional. At least my experience with Bible women, and also the Christian men, is that they would rather work among the middle and upper classes. Misao San has gathered a number of Sunday school scholars from her visits on Tuesday afternoons.

On Wednesday she goes to the home of one of our Christians and reads the Bible to a blind man. Of this man much could be written. He lost his eyesight only a few years ago, but he is so patient that it is a pleasure to go to see him. His wife is almost deaf. The good man says they suit each other beautifully. He hears when company comes and his wife sees; he is her ears, and she is his eyes. The Old Testament was not printed in Japanese before he became blind, so Misao is reading that to him. His favorite book is Job.

When Mrs. Moore left Sendai she asked me to look after her work in the hospital; so Thursday afternoon Misao spends among the sick, and I think this is her happiest time of all the week. She has permission to visit all the rooms, but seldom finds time to go to all. In some of the rooms the patients shut their ears and mouths and will have nothing to do with her; in others they welcome her and are glad to listen and to receive the books and tracts she hands out. It may seem strange, but she finds it hardest to do anything for the women. Not long ago she went to the door of a room in which there was just one woman. On asking permission to enter the woman said: "You can come in if you wish, but I do not care to listen to your talk. I am a perfect woman, and so the new religion you are preaching can do nothing for me." Misao San said, "I would like to tell you the story of Jesus." The woman answered, "You can talk if you wish, but I am not bound to listen." Nothing daunted, my girl began and told her the story of our blessed Lord. Before she was through tears were rolling from the eyes of the sick woman, and when she offered to stop talking was told to go on. At the end the poor woman said, "Is it true? Is it really true?" But then she added, "I hear that the Christians never care for their dead, and do not visit their graves." Misao told her about the beautiful cemeteries we have in America. On hearing which the woman brightened up and said, "Well, if that is true, perhaps there is something in the Christian religion. Will you please come to see me again and tell me more."

Friday afternoon is spent in teaching the Bible and knitting to some young girls who come to our house.

Saturday is her rest day.

Sunday is a very busy day. She teaches in Mr. Schneder's Sunday-school in the morning, then goes to church, after dinner goes over to Sunday-school in Naga Machi, and in the evening to church again.

I must tell you of one more happy experience the girl has had lately. She noticed a poor woman in church, who went and came several Sundays without speaking to anybody ; so she made it her business to bid her welcome and find out her home. The woman has quite a history. She has seen a great deal of trouble. She was once quite well off in this world's goods, but her husband became insane, and his friends sold all the property. When he died the poor woman was left with four children and no home, no money. One son is now old enough to teach school. He receives seven yen a month ; this, with ten sen a day that the mother earns in making stockings, must pay the rent and buy food for the family. She told Misao San that she had worshipped at all the temples in Sendai, but had received no comfort from the gods. Finally, she heard of the Christian religion. She began going to church, and now she is sure she has found rest for her soul.

We pay Misao San six yen a month. I am sure you will agree with me that she fully earns every sen of it.

Sincerely yours,
Mary B. Ault Hoy.



バイブルウーマン（バイブルハウス前）

新約聖書マタイによる福音書第二十五章四十節に「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」とあるが、バイブルウーマンとは、クリスチャン婦人で、その生活時間の大部分乃至は相当部分を、個人、家庭、病院などを訪れて聖書を読んだり、キリスト

の話をしたり、あるいはその他の奉仕活動を行なう人達のことである。そしてそれらの奉仕活動を行なうにふさわしい勉強を行ない指導を受ける事に勤める信仰深い婦人でなければならない。吉田みさをの場合には、月曜日には仙台市郊外の増田で婦人達に聖書を説き編物の指導を行ない、火曜日には主として未信者の家庭を訪問して伝道を行ない、それが契機となって日曜学校出席者が多くなり、水曜日には盲人クリスチャンを訪ねて旧約聖書を読み続け、木曜日には病院で多くの病人のために聖書を読み、話相手となり、金曜日にはホーイ宅で聖書を説き編物を教え、土曜日は休養につとめ、日曜日には午前中は仙台教会で日曜学校と聖日礼拝で奉仕をし、午後は長町教会の日曜学校、夜は仙台教会の夕拝という具合に忙しく過すという具合であった。このような奉仕活動に使命を感じて宮城女学校の卒業生や在学生の中からバイブルウーマンになる人が非常に多かった。

又、校長をはじめ宣教師の教師達は、宮城女学校における教育の状況、生徒の学習状況や宗教活動の状況などを外国伝道局へ克明に報告し、それらの報告が「メッセンジャー」紙その他の「合衆国改革派教会」の諸機関紙に掲載されて所属全教会員に周知されるので、教会関係諸団体や有志教会員から、在学生中、相当数の奨学生(給費生)のために奨学金が送られて来た。

奨学金提供者　次に掲げる二つの表は、「ザ・ミッショナリー・ガーディアン」の一八九二年九月号に掲げられている記事であって、同年八月八日に東北学院並びに宮城女学校の奨学生へ奨学金を送った奨学金提供者乃至団体の一部を示すものである。

List of Beneficiaries

IN THE TRAINING SCHOOL, AT SENDAI, JAPAN, AND THEIR PATRONS.

Names of Students.　　*Patrons.*

Hagiwara Kintaro ·····Missionary Society, Boehm's church, Blue Bell, Pa.
Nakamura Chonosuke ·····Missionary Society, Lewisburg, Pa.
Tamura Kenya ·····Austin Henry Missionary Society, Canal Winchester, Ohio.
Tsuchida Kumaji ·····Miss Mary J. Emig, Emigsville, Pa.
Sakai Katsutoki·····Mrs. J.C. Reber, Dayton, Ohio.
Yoshinaga Kushima ·····A Friend.
Igarashi Tadasu·····
Shida Toshiyuki·····Sunday-school, First church, Lebanon, Pa.
Suto Washiro ·····Misses Mary J. and Belle L. Emig, Emigsville, Pa.
Inomata Yohei ·····Women and Young People's Society, Fort Wayne, Indiana.
Maeda Jiro ·····First Church, Philadelphia, Pa.
Yano Isaburo ·····Girls' Band, Prospect, Ohio.
Nagashima Tozo ·····Rev. James I. Good, D.D., Reading, Pa.
Abe Yoshibumi ·····Mr. Isaac Lauffer, Harrison City, Pa.
Sato Shigematsu·····Y.M.C.A., Heidelberg University, Tiffin, Ohio.
Jo Yasuji ·····Salem Bible Class, R.F. Kelker, Teacher, Harrisburg, Pa.
Sato Tsuneo·····Woman's Missionary Society, Fairfield, Ohio.
Fujita Hiyotaro ·····Young People's Society Christian Endeavor, Collegeville, Pa.
Suto Kiichi ·····Young People's Society Christian Endeavor, Columbiana, Ohio.
Sasaki Junichi·····Ladies' Society, Bath, Pa.
Inouye Tetsuro ·····Society Christian Endeavor, First church, Tiffin, Ohio.
Akiba Teizo·····Missionary Society, Somerset, Ohio.
Demura ·····St. John's Sunday-school, Catawissa, Pa.

August 8, 1892.

List of Beneficiaries

IN THE GIRLS' SCHOOL AT SENDAI, JAPAN, AND THEIR PATRONS.

Scholars.	*Patrons.*
Ishii Toki	
Yoshida Teru	
Suzuki Saku	
Tabata Taka	Ladies' Missionary Society, Grace church, Pittsburg, Pa.
Tamura Tami	Mary Ault Missionary Society, Hamburg, Pa.
Senga O Yoshi San	Missionary Society, McEwensville, Pa.
Hino O Dai San	Woman's Missionary Society, Beaver Creek cong., Alpha, Ohio.
Kiyohara O Kise San	First church, Sunday-school Missionary Society, Phila, Pa.
Miyamoto Mura	Ladies' Missionary Society, Heidelberg church, Phila, Pa.
Takenouchi Teru	Missionary Society, Trinity church, Canton, Ohio.
Nakayama O Taki San	Miss Lizzie M. Roney, Dayton, Ohio.
Fuse Teru	Woman's Missionary Society, Lancaster (Ohio) Classis.
Takenouchi O Seki San	Miss Sarah A. Reynolds, Chambersburg, Pa.
Ishikawa Kikuyo San	Young Folks' Missionary Society, 2nd church (Ger.), Dayton, O.
Suzuki Saku san	Sunday-school, Shamokin, Pa.

Takagi O Ran San ……Ladies' Missionary Society, Bethel church, Tadmor, Ohio, and Ladies' Missionary Society, Fairfield, Ohio.

Shimizu O Shizu San ……Mrs. R.L. Gerhart (partial support), Bedford, Pa.

Shibuki Miyoshi San……Girls' and Boys' Bands, St. John's church, Allentown, Pa.

August 8, 1892.

「婦人外国伝道会」

当時、宮城女学校の運営には、どの位の資金が必要であったのであろうか。プール校長から婦人宣教師を更に二名、至急派遣して欲しいとの強い要望を受けても外国伝道局は財政上の理由でこの要望に応ずることができなかった時に、ハロウェルの派遣に関わる費用全額の負担を申し出たのは「婦人外国伝道会」(Woman's Missionary Society)であった。この「婦人外国伝道会」の質問に対してプール校長は一八九三年四月十一日、極めて長文の書翰を送って説明している。その書翰の冒頭に次のような説明が(註九)ある。

SENDAI, JAPAN, April 11, 1893.

Delegates to W.M.S.G.S., Reading, Pa., U.S.A.

DEAR SISTERS: —A request from one of your number that I should write you an account of our daily experiences, wants and privations, joys and sorrows, etc., induces me to send you a letter. It is quite impossible to give you a detailed account of our life in Japan during five or seven years; and without an intimate acquaintance with the peculiarities of the missionaries' position, many incidents which to us are strongly significant would have no significance for you. There are some things, however, that I feel much like saying to you, in view of the fact that many of you feel the time has come when the women of the home Church should assume the responsibility of "woman's work for woman" in Japan. That you may have some definite idea of what is needed for the immediate working—that is, the most effective working—of the Girl's School, I shall give you an account of our

needs first.

In addition to the salaries of the foreign teachers, the estimated expense for the Girl's School, under its present form, is $2500 per annum. This covers expenses for salaries of native teachers, support of forty girls, fuel, house repairs, and all incidental expenses for books, apparatus, etc., with the exception of musical instruments. The instruction provided, as you already know, is divided into a seven years' course. But we are much cramped for room, now that all the classes are full. The whole house being used for recitation rooms, we have only one little room of fifteen by twenty feet, that the girls can use as a sitting-room; but forty or fifty girls can not be in a room of that size for any length of time with any degree of comfort. It is plain, then, that we need an additional building, that can be used as a sitting-room and library. We are also much in need of a gymnasium. Japanese girls do not know how to play except by rule. It is not convenient to take them to walk in the city streets where they are jeered and hooted at by insolent boys, and men, too; so they are most likely to get no exercise, and the most delicate and impaired health is the result.

ブールボーは、宮城女学校七年間の経過をふまえて、学校運営のためには、外国人教師の給与を除けば、一年間に二千五百ドル位が必要であると判断していた。しかしブールボー校長時代は宮城女学校の草創期であったので、この程度で充分と考えられたであろうが、教科課程の充実に伴う教員の充実や施設の拡充なども行なわれることになれば更に必要額は増大するわけである。ちなみに外国伝道局が一八九三年五月一日から一八九六年四月末日までの間に宮城女学校、東北学院の運営のために送金した金額は表一の通りである。(註一〇)

このように宮城女学校によって行なわれている日本の少女達に対するキリスト教教育に理解をよせる「婦人外国伝道会」は、ハロウェルの派遣費を全額支援すべく外国伝道局に対して献金したのを契機にして、尚一層、宮城女学校の教育のために祈りをささげるに至り、遂に宮城女学校の運営に必要な費用を全額負担する事を「婦人外国伝道会」の会議で決議し、その旨を外国伝道局へ申入れるに至った。一八九六(明治二十九)年五月二十七日からオ

ハイオ州デイトンで開催された「合衆国改革派教会」の総会において外国伝道局総幹事キャレンダーは次のように報告している。(註一二)

表一　運営費支出

宮城女学校	5,887.37ドル
東北学院	15,283.06
給与支出	
J.P. Moore	5,372.64
D.B. Schneder	4,606.70
W.E. Hoy	5,075.00
H.K. Miller	2,158.87
押川方義（東北学院長として）	2,200.00
M.C. Hollowell	1,975.11
L. Zurfluh	1,975.00
その他	
Bible Women のため	625.00

"It was in 1891 that the proposal of the Woman's Missionary Society of the General Synod to support an additional lady teacher in the Girls' School enabled the Board to commission and send out Miss Mary C. Hollowell. This initiatory step in the way of direct work in the foreign field, had the effect of awakening thought and inspiring the inquiry as to whether the women of our church were not competent for, and entitled to, a larger share in this blessed work. The subject was discussed, inquiries made and prayers for guidance were offered up, by them. The outcome was, the adoption of a resolution to make the offer to the Board of Foreign Missions, to assume the entire support of the Girls' School. Official notice of this resolution was laid before the Board at its regular meeting in March, 1895, when the proposal was cordially and thankfully accepted, and the future support of the school was committed to the Woman's Missionary Society, G.S. Thus have the women of our Reformed church joined in our labors to rescue the women of Japan from the deep degradation into which their false religion has plunged them."

ズーフル校長着任の年に始まった日清戦争は翌一八九五（明治二十八）年に終結し、四月十七日に日清講和条約（下関講和条約）が調印された。国家主義思想が一段と強くなって来た。

このように「婦人外国伝道会」が宮城女学校の運営費（経常費）としての必要額全額を負担支援する決議を行ない、外国伝道局へ献金することになったので、外国伝道局は宮城女学校の教育内容充実に一層力を入れることが出来るようになった。又、宮城女学校生徒中、奨学金を必要とする者への奨学金提供を申出る教会員や教会関係諸団体も増えて来て、その恩恵に與る生徒も増えて来た。一八九五年六月十五日のズーフル校長の年次報告書によると、教員構成は、外国人教員二名、日本人教員は女子二名（内一名は英語、他の一名は舎監をも兼務）、男子教員四名であり、その他に図画一名、裁縫一名の講師が居り、更にスナイダー夫人が音楽の講師として応援している。生徒数は五十五名で、内、四十二名が寄宿舎生である。この他に中年のクリスチャン婦人が専任舎監として寄宿舎生と生活を共にし、生活指導の任に当っている。このような具合で、校舎と寄宿舎とから成る新しい校舎も全く予備室がなくなり、病人が出た場合の静養室が不足の状況であった。生徒の中、十五人が日曜日に教会の礼拝が終ってから仙台市内の各所で開かれる日曜学校に出向いて子供達に教え、伝道に協力している。日曜学校の応援に出向かない残りの生徒達のためには、同じ時間に校舎内で日曜学校を開いている。毎晩校舎内で開かれる祈禱会が、日曜日の夜だけは婦人宣教師館で開かれた。このような状況であるので、入学当時初めてキリスト教に接した生徒達の中からも、上級に進むにつれて受洗する者が出て来るようになり、この年も、五十五名の生徒中、三十名がクリスチャンであった。ズーフルは、未信者の家庭で育って宮城女学校に入学し、低学年時代にはクリスチャンで無かった生徒が、数年経って信仰を言いあらわすようになることは非常に喜ばしいと報告している。此の年の卒業生（第三回卒業生）五名も全員クリスチャンで且つ次のように全員奨学生であった。

田村たみ（ペンシルヴァニア州ハリスバーグ、メアリー・オールト外国伝道会）
日野だい（オハイオ州アルフェ、ビーヴァー・クリーク・チャージ婦人外国伝道会）
京田セツ（フィラデルフィア、C・E・グレース改革派教会青年会）

田畑たか（ピッツバーグ、グレース改革派教会婦人会）
竹内せき（ペンシルヴァニア州チェンバースバーグ、ミス・レイノルズ）

このように、生徒達の多くが数多くの教会員の祈りに支えられて勉学することが出来、在学中にキリストの福音に接するのであるから、卒業生は社会に出てからもそれぞれの立場で、キリスト教の伝道にかかわる奉仕活動をするようになったのであろう。卒業式に先立ち、六月二十三日（日）に卒業礼拝が行なわれ、説教はD・B・シュネーダーが日本語で行なった。

第三回卒業式

第三回卒業式は六月二十九日（土）午後三時から挙行された。多数の来賓が午後二時頃から次々に来校したが、それらの来賓を玄関に出迎えて礼拝堂へ案内する役目を第一回卒業生中の三人と第二回卒業生との四名が引受けた。第三回卒業学年の学年標語は“Gentle in manner,but resolute in deed”であったので、白色の木綿地で切りぬいたこの学年標語を縫いつけた大きな緑色の布地が礼拝堂の壁面に掲げられたが、この白と緑は第三回卒業学年の学年カラーである。なお、学年フラワーは西洋すもも(plum-blossam)であったので、校舎の壁は蔦で、礼拝堂内はプラム・ブロッサムで美しく飾られた。此の年の卒業式は第一回卒業生の場合の卒業学年発表会と卒業証書授与式の二つを総合した形式で行なわれた。定刻になると奏楽と共に在校生、続いて教職員の順に整然と行進して礼拝堂に入場着席すると、学年フラワーである西洋すももの花で出来た学年（アーピン）を頭髪につけた五名の卒業生が清楚な和服姿で入場し最前列、講壇真正面の卒業生席に着席した。式は、オルガン演奏（京田）、祈禱（橋本經光）、国歌「君が代」斉唱、「教育勅語」奉読（佐伯陽一）、讃美歌、来賓歓迎英語挨拶（日野）、ピアノ演奏（田畑）、卒業生総代告別の言葉（田村）、卒業証書授與、卒業生に贈る言葉（ズーフル校長）、ピアノ演奏（竹内）、祝辞（勝間田宮城県知事）、祝辞（巖本善治明治女学校長）、讃美歌、祝禱の順序に進められた。卒業生五名がそれぞれの役割を果した。東京から、三年前に宮城女学校を退学した生徒三名を受け入れた明治女学校の校

長巖本善治が来仙し、宮城県知事の祝辞に続いて祝辞を述べた。[註一二] 述べる巖本も、聞く卒業生も感慨無量であったことであろう。このようにして一八九四年度（宮城女学校第九年度）が終了した。

卒業生達の回顧

一八九五（明治二十八）年九月から宮城女学校の第十年度に入ることになる。創立後、十年目位になると授業体制も大分整って来たが、当時はまだ入学希望者がそれぞれ年齢にも差があり、又、学歴も尋常小学校卒業、高等小学校卒業などさまざまであるため、宮城女学校の予科から入学する者、本科から入学する者などいろいろであった。そこでそれらの実情を理解するために、当時在学していた卒業生が宮城女学校創立五十周年当時に記した回顧文（「宮城女学校五十周年史」所収）の中から一部分を抜粋して次に紹介する。

「誠に御辱しき事乍ら、私と申す者は生来数学が大嫌いでした。明日の学課に数学の有る時は前夜の豫習時間は全部数学の為に費すので、他の学課の豫習は犠牲に致さねばならないのです。

或時早坂先生（数学教師）に向ひ自分は数学の為に他の学課を犠牲にしなければ成りませんから、数学を私丈け除いて下さいと迄申しました事が有りました。其時先生曰く、

『お策さんそんな事すると貴女の子供は数学のでけん子が生まれるよ』此位ゐ数学では浮身をやつしました。

此の時代は卒業の時に二ヶ年修業した全課目に渡りて卒業試験をされるのでした。何とかして数学の為に復習時間を作り度いと思ひ、其考案の結果外室（ママ）の折に豆ランプを買って参りまして『ホヤ』の外部を畫用紙を真黒に塗り、外部に光線の漏れぬ様に作りました。是で天下一品の精巧なるものと思ひ、其夜は九時三十分の消燈の鐘と同時に押入に入り精巧なるランプに火を點じて頭から毛布を冠りて夜の明ける迄数学を勉強致しました。翌晩も例に依りて勉強を致して居りますと、何時の間に聞き付けましたのか關屋お雪さん（武藤）と田畑おたかさんのお二人が英語の本をかかえて、する〳〵と忍び込んで参りまして、頼むから一緒に勉強させてくないと申されまして、一人でも狭い勉強室が三人に成りまして女三人寄れば姦しいとやらにて、ひそ〳〵と話す聲も虫も寝むる丑満時の静けさを破りて舎監（久志木）の耳にひびきましたのか舎監室の『ふすま』がする〳〵と開く音が致しました。自分の室に来られるとは夢にも思ひませんので、舎監は御老人だから御不浄に行かれるのだと思ひ悠々と構まへて居りますと、豈計らんや私の室の『ふすま』がする〳〵と開きまし

た。私の胸の動気は早鐘とも何とも言葉に表す事も出来ませんでした。

精巧なる天下一品のランプも問題ではありません。ふつと一息に消せども時早遅しと舎監の雷撃は私の頭上に『鈴木さんあんだは今何ずだと思っていますか、おすれに（押入）カンデラとぼすてもすやかずでもだすだらどうすますか』と、落雷でした。此の時の操行點は六十點でした。職員会議の各教師の目はばち〳〵であったと思っても会議室の有様がまざまざと目にうかびます。」

（第四回卒業生　平野　策子）

「明治廿三年九月始業日までに出仙の積りでしたが、或事情の為不可となり、如何はせんと心配しました處、暮も押つまりましてから當時幹事でいらせられた藤生先生の御骨折にて入学出来る様になり、飛立つ嬉さに雪どけも待得ず、正月六日わらじがけにて案内人をつれて上ノ山町を出発、途中三泊午後二時仙台市に着、片田舎の山の中よりはじめて都に出し事とて実に其立派なる建築物に驚かされました。東三番丁迄参った時はよく、学院の同郷人にあひ、学校迄案内されましたが、湯殿にて洗足して居りますと、生徒がたがわらじばきの田舎娘など、めづらしそうにのぞきに来られるので実に恥しく思ひましたが今思っても其時の田舎くさい身なりに赤面致します。其日は金曜日で三時から編物の時間、あの広い講堂で一同お稽古中でしたが、先づあの見事なランプにたまげました。

四時亀山先生のお室に連て行かれ、髪の結び方など親切に直して頂き難有事に思ひました。寄宿室は黒澤、小平、小野寺姉方でしたが、黒澤姉は私が二歳の時バヒフ[註三]にて六ヶ敷時なほして頂たお醫者様のお嬢様で、誠に奇遇と申しませうかいろ〳〵と親切に指導して頂きました。小平姉は皆様御存知の様に大変に親切な方故、私は初めて他国に出てゝも大変に幸運だと思ひました。

豫科三年に入学、英語が少しも出来ないのに皆様がスキントンの四をお習ひでしたので、どうにも仕様がなく困りましたが、校長ミスブルボーの御親切で日本科の教室へは少しもまゐらず、一日中校長と上級生の齋藤冬子様とが教へて下さいましてやっと追いつきました。何しろＡＢＣから始めたのですから先生方の御骨折は一方ではありません。其おかげにて四回に卒業が出来たので御座います。ミスブルボーは非常な熱心な教育者で、学年試験九十點以上の首席者には一学期月謝免除をなさいまして御励げましになられましたが、モール校長の代にとりやめになりました。

ミスズーフル校長も迚もガールスを可愛がられまして、誰にでも同じ様に親切になさひました。私の卒業の時日光へ行かれ色々の美術品を御覧になり、大変に驚かれまして、私に刺繍を習ってガールスにも教へてくれないかとの事にて其時分ありました女子実業学校に入れて頂き（午前中）二年間月謝を出して頂きましたが、私は右の様に皆様の其厚情を頂きましても少しの報恩の事なく今でも心苦しく存じて居ります。

在校中楽しかりし事は春秋の遠足などでした。春は海岸に、秋は紅葉狩りなどに行きて思ひ〳〵の菓子など分ちあひて楽しく語らひ時の過るのも忘るゝ程でした。花ぶちは全校一週間も滞在、かなだらひなどたゝきて食事を知せたのもいと面白きものでした。或は富山に登り、松島を眼下に見おろし其景色の何とも形容の致し様もなく、芭蕉の句など口ずさんだものでした。松島には一泊して昔ながらのアイヌ人の住しホラ穴など見て来た事など記憶して居ります。あの田舎道を親しき友と語りながらそゞろあるきの楽しかりし事は今猶忘るゝ事が出来ません。」

（第四回卒業生　中村　タケ）

「私が宮城女学校に入学したのは丁度日清戦争が終って凱旋軍を迎へる頃、たしか明治二十八年五月二十八日地久節の日であったと記憶する。まだ汽車もない、電燈も見た事のない、会津の若松から山を越え湖水を渡って郡山から汽車に乗るまでの道程は當時十五の小女に取ってはなか〳〵容易でなかった。朝の二時か三時に人力車に乗せられて家を出で、瀧澤峠の頂上から見返へると下界の星の様に點々と燈火のまたたく暗黒の岩松、離愁の涙がこみ上げて来るのであった。

仙台の女学校と云ふのはどんなに立派な輝かしい處であろうかと、大きな期待をもって来て見ると、普通民家に見る粗末な板塀門なども余り立派でなかった。校舎とても郷里の小学校とは比較にならない小さなもので、二階建のたゞ一棟、上は表に面した方に教室が二つ並んで、後方は寄宿舎畳敷の小さな室が十もあったろうか、下階の大部分が講堂で其隣りに教室が二つ、表の方は應接室と事務室兼職員室、後方に食堂と浴室などがあった。西洋住宅の少し廣い位のものでいさゝか失望した。

生徒は全体を通じて六十人位、大部分が寄宿生で、一人二人の通学生があった。私は高等小学の卒業生なので本科一年に入学したが、その頃母校の学制は尋常小学卒業生の入学する豫科が三年、その上に本科が四年で、英語は豫科一年からあるので、英語を少しも知らない私は日本学科は本科一年でも英語は豫科一年であった。それで高等小学を出て母校を完全に卒業するのは七ヶ年かゝったもので、日本学科を卒業して残りの英語ばかりをやってゐる上級生をブラ〳〵顔とわる口したものである。私が入学した時には今の永島夫人、笹尾夫人、加藤夫人、酒井夫人などがそれであった。その頃は袴は無くて皆美しい帯をお太鼓に結び、髪は日本髪の人もあったが、大抵はミッションスクール独特に水々した美しい洋髪であった。先生ともつかず、生徒ともつかず、之れ等の先輩はお姉上様のやうによく私達の面倒を見て下さったものでいまだになつかしいお姉上様方である。

それから私のたしか本科三年の時であったと思ふ、学制が改正されて、之れまで日本学科と英語学科の学級が別々であったのが一緒になり、豫科はそのまゝで本科は五年となった。それでわれわれは七ヶ年間に学ぶ英語を五ヶ年でやらねばならなくなり、急にむづかしい

本を一足飛びに持たせられ、其困難は一通りでなかった。恥かしい事であるが、遂に英語は不得要領で卒業してしまった。そんな工合で、われ〳〵の時代は今日の様にすべてが統制の取れたものではなかった。今にして考へて見ると学校で何を学び得たのか、すべてが不得要領で終った様な感じがする。

しかも自分は決して善良な生徒ではなかった、先生方には御心配ばかりかけて、かへりみれば汗顔の至りである。一向に物にならなかった、学校に取って余りにも育て甲斐のない私でありましたが、生徒としての五ヶ年、卒業生としての五ヶ年前後十ヶ年の母校に於ける生活の思ひ出は忘れ様としても忘れ得ぬ一生を通しての感謝であります。

最も有難く思ふ事の第一は、その當時あき〳〵する程に繰り返し〳〵教へこまれた聖書の知識、いやでもおうでも刻みこまれたキリストの御言葉、それは実に私の一生を通じて我が足の燈火でありました。たとへ現今の私の信仰形式が母校に於けるそれと同様でないにしても、教へられたゞ一人の正しい神様に對する信仰は不変でありまして、たとへ母校が私の凡てに於て失望せられても、たゞ一つの脳裡に深く刻み込まれた正しい神様、これによって私が人間としての一生の行路をあやまらなかったとすれば、学校はたしかに私の教育に成功せられたと云ふべきであると信じ感謝に堪えないのであります。

私に深くも刻み込まれた聖書と云ふものがなかったら、此の思想混乱の時代に於て、私の様なものは、どんなにあはて迷ったかも知れません。風吹かば吹け、確固不抜の信念をもって如何なる困難にも堪え、如何なる事にも迷はず、常に希望に燃ゆる生活を持続する事の出来ます事は感謝しても〳〵足りない事であります。

それから私の有難く思ふもう一つは、私達は実に立派な先生方を持ってゐたと云ふ事であります。

『ふる里の園の野ばらのかほりもて大和桜に添へんとやする』

之れはかつて深田康守先生がある西洋の先生の歓迎會によまれたお歌でありました。

ミッションスクールと云へば世間では、皆西洋かぶれのした和製のヤンキーガールを養成する處であるかの様に誤解されてゐた當時でありましたが、國文の深田先生は『我が神は敬する神にして愛する神にあらずと云ひ、どこまでも我が國の神道を守られた方であり、漢文の永沼織之丞先生は漢文を通じて私達によく孔孟の道を教へて下さった。漢学者であり、且つ和歌をよくし稀に見る能書家の浅井舎監は今日得がたき教育家でいらせられた。『開け放し無用』とそこゝゝに貼られる先生の美事な筆跡は場處柄によっては勿体ないとさへ思はれた。お裁縫の中川先生は云はずもがな、人も知る模範的賢夫人、数学の早坂先生、私がいやな数学に興味をもち事務的に仕事をする習慣を與へられたのは先生のおかげであった。そして先生は常に教へられた。此の学校に学ぶ生徒は外國の先生に對し単に師弟の禮を守ると云ふ外に、一人〳〵が日本を代表する外交官であると云ふ事を忘れてはならない。外國の先生方に日本人の對面をはずかしめる様

な事があつてはならないと常に戒められた。三大節、國祭日などは官立の学校よりも、むしろ厳かに丁重に此が行はれた事を記憶する。西洋の先生方も日本の祝祭日を重ぜられ、当日はもっとも立派な服装をつけられ、われ〳〵生徒の一人にもお目出度う〳〵と挨拶せられるのはうれしかった。ミスズーフル、ミスワイドナ、ミスパーウェル方々の御親切なる御指導を受けたのであるが、前述の通り英語の出来ない私には、充分に先生方を知る事が出来なかった事は今でも残念に思ってゐる。」

（第九回卒業生　大井　清野）

「朝毎に全校一同講堂に集ひ各々定めの席に着きますと、校長ズーフル先生が静かに入ってゐらっして、出席をおとりになります。プレゼント、アブセントのお答があって、英語の聖歌につゞいて英語の祈禱があり、マーチにつれて各教室へと納まり、授業が始まるのでした。定めし現今も同じで御ざいませうと存じますが、これが後になりまして尊い贈物となりました。学校を去りましてから三十年になります。今日もなほ聖なる者のなし給ふ黙呼の前にいつもプレゼントでありますやう祈禱を以て毎日の行進を続けて参ります事は假令覚束ない足取りながら、此上ない感謝で御座います。

夜の自習時間もなつかしう御ざいます。寄宿生一同の此の講堂で其の日に学んだものを復習し、翌日の課業を準備するのでした。舎監先生も講壇の上の電燈の下で讀書遊ばしながら監督して入らっしゃる。大勢でも静かでした。私共下級生は石盤と石筆とを使用って書取や算術の練習をしました。カチカチ音がして上級生を困らせました。八時の休憩の時間になると急いでダンベル（dumb bell）遊びをいたしました。上級の方々が交って下さってうれしかったものです。やがてリーンとベルが鳴って静かに勉強が始まります。八時半になれば舎監先生が『豫科生はもうお休みなさい』と仰って下さる。其お言葉に従って寄宿舎へ退きます。長い廊下の兩隅には暖かいストーブが待ってゐました。

私が入学いたしましたのは明治廿九年九月。時は日清戦役後で御座いました。其頃第四回の卒業生平野夫人がセニアクラスで入らしった。上野ステーションから連れて来て頂いて寄宿舎に入った時には武藤ゆき子様と加藤たか子様とのお二人がをられまして、田舎者を親しく迎へて下さいました。私はすぐアットホームを覚えました。同室の方々は申すまでもなく、上級の方々もよくお世話して下さいました。おさげもあんで下さる、銀杏返へしも結っていたゞきました。洗濯物の心配までして頂きました。かうして宮城野の園に結ばれた友垣は年経て後も変りなく、友情いよ〳〵濃やかに頭に霜を頂きながらも若き日を語るのまどゐをなして白髪染めの話に花を咲かせて時のうつるも知らず、学校時代を思ひますのは老の身の唯一の慰で御ざいます。

豫科三年の頃でした。桜の御所と題した村井玄齋の小説を人様が讀まれますのを傍で聞きました。面白いので再び一人で讀み返へしま

した。讀み物に興味を持った私は小猫、小公子、一葉全集、馬琴の八犬傳、弓張月など後から〳〵と讀みました。美文では土井晩翠の天地有情、大町桂月の短文など何偏讀み返へしたものでせう。本科の二三年頃は蘆花の思出の記が出ました。誰やらの無花果、漱石の『猫である』もこの頃でせう。卒業前に己が罪や、ほととぎす、乳姉妹など讀みました。

新聞は萬朝報が入ってました。黒岩周六譯の探偵小説、黒潮、厳窟王など掲載せられましたのを奥山さんが讀み手になられますと甘いものに蟻がつくやうに大勢で聞いたものです。編物をしながら足袋継をしながら讀物を聞いたものです。若い者の好奇心と智識慾の盛な事に昔も今も相異はございません。其の緩々した時間を與へられましたる自分達の幸福を今になって有り難く思ふもので御ざいます。

三十畳敷の食堂は裁縫室にもなれば、親睦會々場にも用ゐられました。ある土曜日の晩でした。盛んな親睦會があって余興に時の移るも知らず、定刻よりおそく寝に就きました。ぐっすり眠った暁の夢を破って地震々々の聲がしました。びっくりして起き上り、窓のガラスを明け、そこから飛び下りやうとしたのですが、其晩に限って鎧戸がかゝってゐたので急轉廊下に出てよろけながら長い廊下を通りぬけ階段を下りてお庭に出ました。薄暗で見ますと自分のお室の下辺りに動いてゐる影が見えます。行って見ると、これは〳〵二人の友は大怪我をしてをられました。そこへ幹事先生が飛んで来られました、それは〳〵大した出来事でした。先生方の御心配はどんなだったでせう。責任者の苦労を思ひまして先生方の一人々々が有難く思はれました。

其頃の服装は極く質素でしたが、皆おたいこに結んでゐました。私共本科の三年生になった頃袴を穿きたいといふ事がクラスの話題になりました。可也長く研究しました。とう〳〵実現せられまして袴姿を写真に撮って置きました。

平和な学生生活が丸六ヶ年続きました。七年目の四月私共もセニアに上がりました。私共八名は、よく心が合ひました。一人が言ひ出した事はぢきに共鳴せられました。文学會大会が過ぎて重荷を下した頃は卒業の悦で心は一ぱいでした。卒業式の準備として、まづ服装の相談になりました。余り物知りでない私共は裁縫の先生に御相談いたしました。其結果一反五十六銭の白木綿を一反半宛の割で買ひ込み、三ツ紋付小紋に染めさせました。成績品の一つとして裁縫の組で比翼（ひよく）に仕立て上げました。

クラスカラーが選ばれました。白（ホワイト）青（ブルー）うす桃色（ピンク）の三色でした。白は潔白を現はし、青は真実を表現し、うすもゝいろは愛を表現すと聞きました。

クラスモットーとして"We climb tho' rock is ragged"の句が選ばれました。クラスフラワーはワイルドローズです。假令石地なりと焼け地なりと強く生長せんとする強さを求めたもので御ざいます。此のクラスカラーとモットーとクラスフラワーとをあやどりボウキル先生が長い詩を作って下さいました。名作で御座いました。

其他の準備も着々進行せられて居りました。三月八日暖かな春日和の続いた土曜日でした。外出する者が多く、お食事の食卓には空席

が可也見えました。今日はお風呂が立ちます。沸き次第お早く入って下さい水が少ないからと舎監さんは御注意になりました。私は食後洗濯を始めました。西洋の先生方の井戸端でした。寄宿舎の井戸水は日照りでお風呂に足りない位ですから。間もなく火事々々と聞えました。見るとお風呂場の上の方に黒い煙が立ち上ってゐます。私は寄宿舎の自分の室にかけ上りました。行李といはず、机といはず、夜具ふとん手當りほうだい窓から投げ出しました。隣室のもと思ふ所へ『危ない早く々々』と呼びながらワイドナー先生が上って来られましたので、お玄関の方の階段から下りました。構内の東北隅に立って見た時は各室の窓から火災の舌が赤く巻いてゐました。ほんの一時の中にあのなつかしい学校は灰燼となって仕舞ひました。三本の煉瓦の煙突のみを高く残して。それすら間もなく取り片付けられました。」

（第十回卒業生　川添　なみ）

このようにして勉強をした生徒達が朝夕なれ親しんだ我が家のような校舎をあとにしてそれぞれの新しい道へと進んで行った。ここでこの校舎（兼寄宿舎）における彼女らの生活を推察するために、この校舎で生活した卒業生の回顧文の一部を抜粋して次に紹介する。

「其の頃の母校の形はノアの箱船そのままで木造ペンキ塗の一棟で二階の三分の二が寄宿舎、下は講堂、教室、事務室、食堂、図書室兼應接室と云ったように一つの室が幾つにも使用され、講堂は夜には、自習室にもなれば教室にもなり又卒業式場にもなるといふ極めて便利なもので又クリスマスや御正月の休みにはストーブをかこんで色々な珍談佳話の種となる私共にとってなつかしい〳〵家でしたが明治三十五年の火事で焼けたのはほんとうに残念で御座います。」

（第八回卒業生　佐柳　千代）

「寄宿舎は校舎の一部分で、校舎と離しては考へられませんから全部申し上げることに致しました。

先づ門を入ると今の校長先生の御宅のやうに石が敷かれて、東向の玄関の石段を五六段上って入ると、右手は事務室兼教室で、書類の戸棚の側のガラス戸棚には剝製の鳥と少しの試験管がありました。左手の應接室にはオルガン一つと洋書の入っている小さな本棚があり、テーブルの上には其頃日本唯一の婦人雑誌である女学雑誌と云ふむづかしい雑誌が上ってました。此應接室では私共下級の時は毎月

さんびかや、舊約聖書の天地創造のお話やヨセフのお話を今で云ふヘルパーの方からカラクリの如きもので教へていたゞきました。玄関の突當りには南北に階段があり、両方の階段の下が寄宿生、通学生の下駄箱で其前のドアは出入口でした。南のドアの側には時間になれば誰でも鳴らしていゝ鐘が吊してありました。其れから西へ入ると所謂る講堂で、隅にオルガンがあって正面と右手の時計の下には一面黒板が造りつけてありました。我々四十五、六人の全校生に尚ほ余る程澤山机が並んでました。こゝでは礼拝は勿論あらゆる学科を幾クラスも同時に習ひました。今の方にはこう云ふ事はお分りにならないかも知れませんが、其頃の時間割はよく出来て一人の國語の先生が一年生に習字、二年生に作文、三年生に國語を教へて下さいました。私共は至っておとなしい者ばかりですからよく先生のお教を守りました。歴史や理科のやうにお話を要する学科は他の教室へ分れました。全校同時に習ふ唱歌や体操、編物はこの講堂でした。此講堂の北隣とは大きい長い一丈位の襖で仕切ってあって、二つの小さな室でしたが、私の頃には一つは教室として西よりの部屋は畳が敷かれてお作法や刺繍をするお部屋でした。之等のうしろ即ち西隣は三十畳位の座る食堂でした。此處は裁縫室にもなりました。オルガンが一臺隅にありました。此西隣りはお勝手と洗面所でした。

二階は前申した事務所の上が数学の早坂先生の教室でした。先生が『今に日本もメートルになる』と仰って教へて下さるのに、ヘクトメートルとかデカメートルなどゝ云ふ言葉を先生がいゝ加減を仰有ると思って勉強しないで叱られたのも此部屋でした。其南隣は丁度應接間の上で、上級の英語の教室でした。二階の其他の部分は寄宿舎になって、中央の廊下で南北に部屋を仕切ってありました。両側に十畳位の室四つづゝと四畳半位のが南側に四つと北側に二つの病室と洗面所へ下りる階段がありました。此部屋は各室共に隣室とのさかひの壁の上は三尺程天井まであいて居ますから、四號室の大越おつるさんが大きい聲でねごとを云ふと一號室まで通して聞えて皆んなでよく笑ひました。毎土曜日には午前中に押入から全財産を出して掃除をし、舎監の浅井先生が一々検分なさるのでした。清潔好きの先生の事故御自分もよく御掃除なさいましたが、或る日先生がお掃除の水が廊下にこぼれたのにお気がつきにならなかったら豈計らんや、講堂の白い天井へ漏って汚點がつきました。すると奇抜な小泉さんは『弘法にも筆のあやまりあり』と云って私共を笑はせました。この浅井先生は水戸の学者の家に生れて和漢の学問に通じ、又書家としては立派に一家を成す程で婦人の修むべき事はお茶、お花、お裁縫、お料理、和歌何でも御存じで武士の典型的夫人と云ったやうな方で、當時の東京嬌風會々頭とソリが合はないで副會頭をおやめになって私共のお母さんになって下さったのだとか、先生は私共をお叱りになる時に『キリスト曰く』とか『論語に何々』とか『古今集の歌に―』なぞと仰有いました。私の母が先生にチョイ〳〵お手紙をさし上げたりしたのでお部屋へ私を呼びになって『あなたはお母さんに似ないで女らしくなく習字やお裁縫が嫌ひで下手でいけません』と仰有ってお叱りになりました。私は先生のお言葉を恐れ入って(?)伺ひながら『私の母が女らしいか男らしいか御存じもないのに、母が余計なお手紙を上げたりするから叱られる』と先生と母を少からず

恨めしく其瞬間は思ひました。私も何と不心得な恩知らずの女子であったでせう。先生は少しスパルタ式の厳格すぎる處もある反面に一人々々の得意の学科欠點から、家庭よりの送金額、私共のお小遣ひの費ひ方、切れた鼻緒のたて方や豫科生の頭髪のムシに至るまで細い處に注意して教へて下さる本當のお母様でありました。

校長のズーフル先生は実に愛の化身とでも云ひたい方で、お小遣ひが来ないで困っている方には何かわざと用をさせてお金を上げたり、学費を出して上げたりなさいました。私共が風でも引かうものならスプーンで私共の舌を押へてノドへお薬をつけて甘草とか云ふあまったるい匂ひの煎薬をこしらへて持って来て下さったり、蜂蜜を持っていらしって熱湯にといて御自分が先にスプーンでお舐めになってから、其まゝ下さるのには誰も閉口しました。併し先生はこれ程私共を愛して下さったのです。私のクラスのみどりさんなぞヒドク咳をなさるので大へん心配なさいました。おなかの加減の悪い方で或時ヒマシ油を二、三回いたたゞいてもきゝめがないと先生に申し上げたら、お部屋にいらっしゃいと云はれてみどりさんは先生について上ったらお部屋に入る否や鍵をおかけになったのでへんだと思ってゐると、潅腸の用意をお始めになりました。みどりさんはこれはたまらないと思って床にすはって『何卒許して』と願ってもドアーにかぢりついて泣いても許されないで終にされてしまひました。感謝するより其時は自分の部屋へ帰ってから大泣きに泣いてくやしがりました。マア此一事でズーフル一先生がどんなに私共を愛して下さったか分りますでせう。因に先生は今でも私共時代頃までの方のことをお手紙にかいて上げると大へん喜んで毎晩my girlsのために祈ると仰有っておよこしです。

宗教方面はまだ日本に女子青年會のない頃でしたが、礼拝は朝はズーフルー校長、三時には幹事の佐伯先生、夜六時の寄宿生のためには校長以外の西洋の先生と寄宿にお出での譯の先生と御二人が司會でした。朝は英語、午後は邦語、夜は邦語、英語両方でした。お蔭で主の祈りも校長の祈りも意味は分からずと英語で覚えてしまひ、真似をしたりしました。水曜日には三時から生徒の司会でお祈会をしました。日曜の午前には校長と舎監の浅井先生に引率せられて教會に行き、午後は上級生は日曜学校を教へに出かけ下級生は校長先生や譯の先生の組に分れて日曜学校がありました。女中や小使いさんは浅井先生の組でした。夜七時から校長先生のお宅で西洋の先生が代り代りに當番でヘルパーの方が通訳でお話があり此時だけ一週に一度だけピアノに合わせて英語の讃美歌を唱ふのでした。飾ってある写真でもお人形でも先生から説明していたゞいて拝見して長いこと遊ぶのでした。校長も舎監もお母さんのやうな方故上級生が福田町や七北田へ日曜学校を教へに行く時寒い時に長距離を車で足が冷えるだろうとてユタンポを貸して下さったのはいゝが、車が揺れるにつれてお湯が吹きこぼれて足袋が冷たくなって大困りした人がありました。受難日、昇天祭にはやはり説教がありました。クリスマスにモーニングコワイヤも夜の祝會もあり、殊に本やキャンデーの贈物をいたゞくのが嬉しうございました。私は今でも一千八百九十六年のクリスマスにいたゞいた『テス物語』をもって居ます。

勿論現在のやうに教室も完備して居ない先生方も至って少数であったのですが、信仰深い愛の校長や先生方に導かれて神様を教へられ誠に楽しい朝夕を送りました。誰かが綽名したノアの方舟の長方形の校舎も明治三十五年三月八日の湯殿からの出火で全焼してしまひました。今後どんな立派な建物が出来やうと私はあの當時が一番幸福で楽しかったと思ってます。

なき方舟を惜しみて友と雨の夜に
いのりに行きて焼け鍵をひろふ

（第八回卒業生　原田　ことぢ）」

第十年度年次報告

第十年度目の一年間を終えようとしている一八九六（明治二十九）年六月六日にズーフルが外国伝道局へ送った年次報告書は、「私達は辛い困難な試錬にも何度か遭遇しましたがこの一年間は全体として楽しいことが沢山あった年でありました。神は恵み深く、如何なる困難にも耐え得る忍耐力を与えてくださることを実感しました。」という言葉で締めくくられているが、学年度末の在籍生徒は五十六名、この中、三十名の生徒がクリスチャン（この一年間に受洗の二名を含む。）であり、又、十五名の生徒が毎週日曜日に日曜学校の教師として奉仕活動を行なっている。その他の生徒のためには、日曜日の午後に校舎内で日曜学校を開き、ズーフルとハローウェルとが交替に旧約聖書の講話を続けている。又、この一年間には、伝染病特にコレラの流行、天然痘の流行、繰りかえしおこる地震、三陸海岸の大津浪などのために生徒を預って教育を行なっているズーフルは心の安まる暇がなかった。しかし年次報告書の中でズーフルが「辛い困難な試錬」と述べていることの一つは教員一名を退職させ、且つ又、十名の生徒を退学させなければならなかったことであろう。漢文を担当していた教員山下廉が、生徒達に対して学校の礼拝、聖書の授業等に出席しないようにと煽動した。その影響により欠席するようになった生徒が十一名に達し、校長は事情が判明したので、生徒の指導を誤り、学校の教育方針に背いた彼を退職させざるを得なかった。[註一四] 又、学校の教育方針に反抗した十一名の生徒に対しても退学を命じたのであるが、生徒達

は冷静に反省してみて自分達のとった行動の非をさとり、後悔して許しをもとめて来た。校長は生徒達の悔悛をみとめ在学を認めることにした。ところが、一ヵ月後、彼女らの中、十名が再び同じ行動をとるようになったので、校長は十名の生徒を無條件で退学処分にせざるを得なかった。彼女らの中、六名が、学校を去る時に、自分達の行動を後悔しつつ悲嘆の表情で校長に訣別の挨拶に来たが、先に退職した漢文の教員が退職後もこれらの生徒達に書翰を送って煽動を続けていたことが判明し、ズーフル校長は学校を去る彼女らの前途に全能の神の力強い導きがあるように祈り、彼女らを激励して別れた。校長並びに退学生にとって辛い試錬であった。

卒業の月、六月になると文学会が主催した送別会が行なわれ、互に別れを惜しんだ。六月二十一日（日）の卒業礼拝ではモールが説教を行ない、三名の卒業生は大きな希望を與えられ、彼女らの勉学を支援した奨学金提供者の期待にもそうことの出来る人生を送ろうと決意を新たにした。提供者は次の通りであった。

鈴木さく・ペンシルヴァニア州、シャモキン改革派教会日曜学校
中山たか・オハイオ州デイトン、ミス・リズィー・M・ロニー
石川きくよ・オハイオ州ディトン、デイトン改革派教会外国伝道会

卒業式は六月二十七日（土）に挙行された。この学年の標語は“Before Honor is Humility”であったが白色の布地に標語を金色で書いて式場の壁に掲げ、式場にはこの学年フラワーである山ひなぎく（mountain daisy）の花が美しく飾られていた。頭髪に学年フラワーである山ひなぎくのヘアピンをつけた卒業生は卒業学年歌に選んだ讃美歌、日本学科生の「み神のめぐみは量り知られず……」（現行讃美歌八十六番）、英語学科生の「たえなるみちしるべのひかりよ……」（現行讃美歌二百八十八番）を来賓・教職員・在校生と一緒に声高らかに歌った。卒業式の日の夜、同窓会入会式が行なわれ、そこでも先輩卒業生達と一緒に、それぞれの学年歌を歌いあい、神の恵みと導きとを感謝しあった。

なおここで文学会主催送別會にふれたので、文学会に関する第三回卒業生田村たみ子の説明を次に紹介しておく。

「其頃は明治廿三年に國會が開かるゝ時とて何でも彼んでも多数決で取りきめるので、文学會の組織も會長、書記、會計等の選挙も多数決の結果で取りきめた様な次第でありました。毎月雑誌を発行して其名を宮城野と名づけ、各自が書き一冊の本として應接室に置いたものです。文章、新体詩、小説、学校の報告等でありました。而して年一回大々的の大會が挙行されて、知事閣下、師団長閣下、諸学校長始め知名の士をお招きして茶菓を供して互に発展したものでありました。其頃すでに第二高等学校で文学會の催しがありまして、我が校よりも大會毎に校長はじめ役員が招かれて居りました。何でも高校でやる事は我々の学校でもやるのですからセッキスピヤーの劇があれば、此次には我校でもやると云ふた風で、高校の向ふ張りをした様な次第で男のやる事は女でも出来ると思ふて励んで勉強したものでしたが、何しろ全校で三、四十名の生徒でしたから何を相談しても直ぐきまると云ふた様な譯でした。」

（第三回卒業生　田村　たみ子）

ズーフル校長の活躍

この年、一八九六年九月十八日は宮城女学校創立満十年の日である。創立十周年式典は十一月二十日に行なわれたが、その二日前、ズーフル校長は式典の諸準備に忙しい生徒達の様子を記すと同時に、これまで数多くの生徒達のために奨学金を提供してくれたアメリカの諸教会の教会員有志全員の住所・姓名並びに諸団体の代表者の姓名を是非教えて欲しい旨の書翰を外国伝道局に送っている。(註一五) 校長として全員にそれら奨学金を受けた者全員の近況を報告し且つ感謝の意をあらわすためであった。

ズーフル校長は、極めて多忙な毎日を送っていたが、一八九六年に入ってからは、従来の日程の他に毎週一回、同窓生のためのバイブルクラスを開講し、又、土曜日の午後には東北学院の生徒の協力を得て、仙台市外の七北田村（現・泉市七北田）に出向いて子供達に音楽を教え聖書の講話を行なうことを始めた。更に又、宮城県内、県外を問わず生徒の家庭をも出来るだけ訪問するように努めた。特に夏期休暇期間中には県外の生徒の家庭を訪問し、学校

の様子を話し、場合によっては伝道集会を開いた。各地をまわって見て、宮城女学校の教育が一般に高い評価を受けていることを知り、教員組織を更に拡充し、教育内容を強化充実させる事を考え、独身の婦人宣教師の増員を外国伝道局に訴えている。[註一六] たとえば五月十四日付書翰[註一七]では、どのように多忙であっても、日本の少女達のために学校内のみならず学校外へも時間の許す限り出向いて活動しなければならないのであるから、自分のこと以外に家族のことをも考えなければならない家庭婦人にとってはあまりにも多忙すぎて気の毒なことになるので是非、独身の婦人宣教師を派遣して欲しいと説明を加えている。又、仙台市内のバプテスト派の女学校（一八九九年創立の尚絅女学校の前身の私塾）では生徒が十九名なのに外国人教師が二名居ることにふれ、我が校ではもう二名の増員がなければ充分な活動は難かしいこと、モール夫妻が近々東京へ移ることになれば、モール夫人に代って病院伝道をする人も必要であることなどをも記している。

一八九七（明治三十）年六月に記した年次報告書[註一八]によれば、ズーフルが、極めて忠実に在学生の家庭を訪問して生徒の近況を伝え、病院伝道には態々オルガンを運んで行って讃美歌の指導を行なうなど、席の暖まる暇もない活躍を行なっている。この年の卒業生は布施てる、吉田てるの二名であるが、彼女らもそれぞれオハイオ州ランキャスター婦人外国伝道会並びにオハイオ州ミネラルポイントのジェー・ライスからの奨学金で勉学を続けたのである。

この吉田てるは人物も成績も特に優れていたのであろうか、ズーフルは同年九月二十一日の書翰[註一九]で、吉田てるが宮城女学校の教師に適任ではあるが、まだ若すぎるので、日本で最良と思われるキリスト教主義学校で更に研鑽を積んだ上で教師に採用したい旨を外国伝道局へ報告している。吉田てるは、先にホーイ夫人のバイブルウーマンになった吉田みさをの妹である。彼女はズーフルの希望通り、東京で更に英語を学んだ後、英語の教師となって、母校宮城女学校の教壇に立つことになる。ここでこの一、二年の教員人事にふれておくが、生徒を煽動し、学校の方針を遵守せず退職させられた漢文の教師山下廉の後任として、一八九六年九月に永沼織之允（織之亟）が就任した。

永沼は、仙台市の出身、幼時より漢学を学び、長じて漢学の他に英学を学び、更に横浜の高島学校で、押川の恩師ジェームズ・バラの弟ジョン・バラについて英学を修業、のち神奈川県五日市町勧能学校初代校長（二代校長千葉卓三郎は「五日市憲法」草案者）、私立共賛義塾創設（漢文学教授）、その他数々の経歴を有する人物で、一八九六年九月に宮城女学校に就任した時は満五十九才であった。次に幹事として活躍した佐伯陽一が一八九七年六月に一身上の都合で依願退職した。ズーフルは同年九月二十一日の書翰で、キャレンダーに次のように報告している。

"We have no Kanji, Japanese head of school, just now, our Kanji resigned having had some severe trouble outside of school. We feel sorry for him and hope to secure some one in his place as soon as possible. He resigned of his own accord so that his connection with school was all right."

押川、東北学院長辞任

一八九八（明治三十一）年六月十五日、モール、ホーイ、シュネーダー三名連署による書翰[註二〇]が外国伝道局へ送られた。内容は押川方義の処遇に関する会議の結論を報ずるものである。これより先、押川は在日宣教師社団に対して、押川が東北学院長として受けている俸給額を半額に減額するように申入れている[註二一]。それは、当初、東北伝道に専念した押川が仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校を創立し、仙台神学校長（東北学院長）として東北学院の教育運営に直接関わっていたが、今や日本国内各地にわたって諸種の活動をも行なうに至り、東北学院の校務に充分な時間を割くことが出来なくなったからという理由によるものであった。この申入れを受けて、前記三名が充分に討議を行なった結果、一、押川の東北学院並びに在日宣教師社団との関係における現在の活動状況から判断すれば、押川の申入れ通り、俸給を半額にすることは適正である。二、朝鮮京城学堂との関係をも含めて、広く、日本全国にわたる押川の伝道活動の計画は、在日宣教師社団の伝道

計画外の活動になるので、在日宣教師社団の伝道のためへの外国伝道局の送金から、押川の俸給全額を支出する必要はない。三、押川が俸給半額で在日宣教師社団に関わる伝道活動を行なう旨申入れて来たのであるから、その方針で進むのが最上であると思う。ただ、押川の家族が物価の高い東京に住んでいる現在、俸給半額でその生計を維持しなければならないのは大変なことであり心から同情せざるを得ないとの結論を報じたのである。このように、宮城女学校創立者の一人である押川は、大日本海外教育会創設（一八九四年）、北海道同志教育会創設（一八九六年）、朝鮮京城学堂創立（一八九六年）などと極めて広範囲に及ぶ活躍を行ないその活動の拠点を東京に移し、更に数年後、一九〇一（明治三十四）年には東北学院長をシュネーダーに譲り、東北学院を辞することになるのである。そのような時期に、宮城女学校も堅実な歩みを進めていた。すなわちズーフルが六月に送った数通の書翰によると、前年、一八九七年九月にリリィー・M・ロールボーが着任したので、ズーフル、ハロウェルは大いに喜び希望に満ちた第十二年度のスタートをきった。学年当初五十五人おった生徒が学年末の六月現在で四十七名に減少したが、これは結婚のため並びに結婚準備のために退学した生徒があったためであった。在籍生徒四十七名中四十名が寄宿舎生であり、その中、三十名が奨学金を受けていた。又、在籍生徒中クリスチャンは二十三名であった。六月二十九日（水）に卒業式が行なわれたが、この年の卒業生はミラーの日曜学校で数年間、教師として立派な活動を続けた長谷川なを一名だけであった。学校のために忠実に活躍していた佐伯陽一幹事の退職は校務処理上に支障を来すことになるのでズーフルは一日も早く適任者を得る必要を痛感していた。

ズーフル校長は宮城女学校の毎日の授業の中で特に満足感を味わう時間として報告していることは、毎日、授業終了直後に行なわれる終礼についてである。終礼は生徒全員が礼拝堂に集合し、先ず終礼の歌として「しずけきいのりの　ときはいとたのし。なやみある世より　われを呼びいだし、父のおおまえに　すべてのもとめを　たずさえいたりて　つぶさに告げしむ。」ではじまる讃美歌（現行讃美歌三百十番）を歌ったあと一同で「主の祈」を唱和

し、続いてズーフル校長が祈禱をささげ、当番生徒の奏楽にあわせて生徒一同が礼拝堂から出て行くのであるが、礼拝堂から出て行く生徒の後ろ姿を壇上に立って見送る時にズーフルは、一日の勉学を守り導き給うた神に心から感謝の祈りをささげ安堵感に満たされたのである。

バイブルハウス

なお、この第十二年度のはじめ、一八九七（明治三十）年九月、バイブルハウスが校地内に竣工した。これは木造白壁二階建の日本家屋である。このバイブルハウスは、在日宣教師社団に直接所属し、外国人宣教師の助手（ヘルパー）となった卒業生達がここに住み、宣教師の指導を受けつつ伝道活動のための研鑽を積んだ場所である。なお三年後、一九〇〇（明治三十三）年に一年制の聖書科が創設されると、聖書科の生徒達も助手（ヘルパー）達と一緒に住むようになり、更に一九一六（大正五）年に聖書科が正式に専攻科となると、バイブルハウスは在日宣教師社団の直轄から宮城女学校の直轄となる。すなわち、バイブルハウスで生活した二名の回顧記を次に紹介する。

「五年間住み慣れた寄宿舎から五人のクラスメートと共に白壁造り二階建のバイブルハウスに入つたのは明治四十一年の春、ボケの花咲く頃でした。煉瓦造りの荘麗なる第一校舎、広々とした寄宿舎と対して、私共のハウスは何といふ旧時代の建物だつたでせう。雨戸はよく脱線する。白壁はそこゝゝ脱落する。危険な梯子、夜はランプといふ凡そ文化的新築校舎と対比して全く時代離れのした建物でした。けれど私共にとつては実に楽しい親しみのあるものでした。道路を距てたお隣の坊主学校から早朝ボコ〳〵と木魚を叩く音、朝の勤行読経の声に驚いて飛び起きる事も度々ありました。其の頃は未だ聖書科とは言っても今日の様に組織的なものでなく、午前中教会史や英語音楽などの練習、午後はヘルパーとしての用事或は夜の教会の集会の御手伝ひなどでした。新任のミス・ハンセン、ミス・リンゼイは実に熱心に教へて下さるにもかゝわらず、お稽古を見て戴く木曜日には必ず腹痛、頭痛を口実に逃げ廻る者さへありました。今思ひ出して真に勿体ない事であつたと後悔されます。ドクター・サイブルの時間などは誰も質問に答へるものもなく、僅に平山信子さんが要領よく

お茶を濁して居る位のものでした。先生は何時も参考書を一抱も持って来られ、熱心に講義なされ、終りには本を見てもよろしいから答へなさいと言はれますので、教科書をそのまゝ朗読致しますと、夫れでも先生は大いに喜ばれ、丸い目を更に丸くしてザッツライト、ベリーグッドなどと申されました。今思ひ出しても汗顔の至りでございます。此の様な生活の内に一週一度夜の祈会丈は真に有益でありました。実際伝道の苦しい事、失敗など遠慮なく打明け当時のママさん狩野みどりさんや先輩の前田まつゑさん、佐藤ことさん達からいろ〳〵ご指導いただきました。私共のクラスは女学校時代可成り諸先生に御迷惑をかけたにも拘はらず、漢文の永沼柏堂先生は非常に可愛がつて下さいました。先生は大の日本精神の鼓吹者で何時もお前達は此の学校で教育を受けても日本人だといふ事を忘れてはならぬ、忠孝の道を外してはならぬと訓戒され、時には懐中からお菓子などを出して私達に下さつたので一同心から先生に感謝して居たものです。夫故私達がバイブルハウスに入って最初のサラリーを受取るや、丁度全校生徒と共に榴ヶ岡にお花見の帰途、クラスの方々丈けで窃に先生を名物胡麻餅屋にお招きして思ふ存分のご馳走を差上げ、各自満腹し先生は涙を流して喜んで下さつた。私共もやれ〳〵是で多年の御恩報じが出来たと得々として、さて会計の為帳場に行くと誰かゞ既に御勘定を済してあるので、驚いて詮議して見ると豈計らんや老先生が全部お払ひ下されたる事を発見し、招待した方が却って招待された事になりました。子供は親孝行をしたと得々となつて居ても師父の愛は更に広く深く、到底愛の負債は償却出来ぬ事をしみ〴〵考へさせられました。」

（木山　かつみ）

「私のバイブルハウス時代はクラスメート五人と西洋の先生ヘルパー四人と合計九人の楽しいおうちでした。土曜日には、荒町方面に出かける人はいち〳〵相談せずとも九人前の直径15糎位の餡餅を駄落茶屋（昔は荷物を運ぶのに今のやうに乗物がなかつたので北の方から南の方へ運ぶ荷馬車は必ず荒町を通りました。そして中休みにちよつと休んで、うどんの一ぱいでも食べる店でした。それで茶碗や箸をきれいに洗ふ事や拭ふ事をする暇がない程はやつたのです。駄落茶屋とはこのときあまりはやると云ふいみの茶屋でした）から買つて来て喰べるのが常でした。本当に九人は仲よしでありました。私共卒業後の任地は卒業試験前に決定致しました。先生は試験後に知らせるおつもりであつたそうですが、何処からともなくすつかり知れました。眞山さんは埼玉県の浦和町、宮澤さんは中村、松岡さんは福島、加藤よしのさんは新庄、私は秋田でした。仙台から石巻へ行くのに塩釜から舟で行きます。明治時代でしたから秋田までは福島から米沢を通つて行くか青森を廻つて行くかしなければなりませんので本当に遠く感じました。それで毎日地図を広げて眺めては本当に淋しく試験が始まつても勉強が手につかず五人集つては任地の教会の模様や、信者の事やら先生や奥様の事に話が花を開いて一夜を過した事もありました」。

（佐々木　とも）

教科課程改正

さて、ズーフルは、ハロウェルが帰国を一年のばしてズーフルを助けて教育に専念している間に教科課程を改正して、宮城女学校の教育内容を充実させると同時に教育水準をより一層高めようと検討を行なっていた。

そして一八九八（明治三十一）年、十一月二十六日付で課程の改正を行ない、従来四年であった本科の修業年限を五年に延長した。これは翌一八九九（明治三十二）年に行なわれるわが国の学制整備によって内容が充実される公立の高等女学校よりも高水準の女学校にしようと考えたからであった。

これより先、文部省は一八九三（明治二十六）年七月二十二日文部省訓令第八号で「女子教育ニ関スル件」を定めた。これには

「普通教育ノ必要ハ男女ニ於テ差別アルコトナク且女子ノ教育ハ将来家庭教育ニ至大ノ関係ヲ有スルモノナリ現在学齢児童百人中修学者ハ五十人強ニシテ其ノ中女子ハ僅ニ十五人強ニ過キス今不就学女子ノ父兄ヲ勧誘シテ就学セシムルコトヲ怠ラサルヘキト同時ニ女子ノ爲ニ其教科ヲ益々実用ニ近切ナラシメサルヘカラス裁縫ハ女子ノ生活ニ於テ最モ必要ナルモノナリ故ニ地方ノ情況ニ依リ成ルヘク小学校ノ教科目ニ裁縫ヲ加フルヲ要ス」

とあり、小学校における就学率の低い女子の就学を勧める方針を示し、更に一八九五（明治二十八）年一月二十九日文部省令第一号で「高等女学校規程」を定めた。これによると

高等女学校規程ヲ定ムルコト左ノ如シ

高等女学校規程

第一条　高等女学校ノ学科目ハ修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操トス又随意科目トシテ教育、漢文、手芸ノ一科目若クハ数科目ヲ加フルコトヲ得

外国語、図画、音楽ハ府県立学校ニ就キテハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ其ノ他ノ学校ニ就キテハ地方長官ノ許可ヲ受ケテ之ヲ欠クコトヲ得
又生徒ノ志望ニ依リ之ヲ課セサルコトヲ得
第二条　高等女学校ノ修業年限ハ六箇年トス但土地ノ情況ニ依リ一箇年ヲ伸縮スルコトヲ得
第三条　高等女学校ノ第一年級ニ入ルヘキ者ハ修業年限四箇年ノ尋常小学校ノ卒業生若クハ之ト同等ノ学力ヲ有スル者トス
第四条　入学生徒ノ資格ヲ高ムルニ従ヒ第二条ノ修業年限ヲ三箇年マテニ短縮スルコトヲ得

とあり、これによって高等女学校がどのような教育を行なう学校であるかが明示された。それまでは一八八六（明治十九）年の「中学校令」に改正追加を行なった一八九一（明治二十四）年の「中学校令中改正」第十四条「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス　高等女学校ハ女子ニ須要ナル技芸専修科ヲ設クルコトヲ得」の規定があるだけであった。「高等女学校規程」第二条によると修業年限は六ヶ年であるが一年の伸縮が認められており、入学資格は第三条により、修業年限四ヶ年の尋常小学校卒業者若くはこれと同等の学力を有する者であった。この「高等女学校規程」で女子の中等教育が制度化されたのである。宮城女学校においては、既に創立の時点において予科三年、本科四年と定め、予科入学資格は小学校尋常科卒業者かこれと同格の学力を有する者、本科入学資格は予科卒業者かこれと同格の学力を有する者と定めており、一八九〇（明治二十三）年には更に規則変更を行なって「女子ニ高等ノ普通教育ヲ授ケル」（「宮城女学校規則」第一条）女学校の体制を整えていた。したがって予科三年、本科四年の合計七年制であることは、「高等女学校規程」による六年制に更に認められた一年を伸ばし加えた修業年限の形を既に備えていた。

ところが一八九九（明治三十二）年二月八日勅令第三十一号で公布された「高等女学校令」には次のような規定がある。

第一条　高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス

第二条　北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スヘシ
前項ノ校数ハ土地ノ情況ニ応シ文部大臣ノ指揮ヲ承ケ地方長官之ヲ定ム

第六条　私人ハ本令ノ規定ニ依リ高等女学校ヲ設置スルコトヲ得

第七条　高等女学校ノ設置廃止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
高等女学校ノ設置廃止ニ関スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九条　高等女学校ノ修業年限ハ四箇年トス但シ土地ノ情況ニ依リ一箇年ヲ伸縮スルコトヲ得
高等女学校ニ於テハ二箇年以内ノ補習科ヲ置クコトヲ得

第十条　高等女学校ニ入学スルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ニシテ高等小学校第二学年ノ課程ヲ卒リタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スル者タルヘシ

第十一条　高等女学校ニ於テハ女子ニ必要ナル技芸ヲ専修セントスル者ノ為ニ技芸専修科ヲ置クコトヲ得
高等女学校ニ於テハ其ノ卒業生ニシテ某学科ヲ専攻セントスル者ノ為ニ専攻科ヲ置クコトヲ得

第十二条　高等女学校ノ学科及其ノ程度ニ関スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

すなわち第十条によると、従来は、修業年限四年の尋常小学校卒業者に認めていた入学資格を、十二才以上で高等小学校第二学年の課程修了者かこれと同等の学力を有する者に改め、又、第九条によって高等女学校の修業年限を四年と定め、一年の伸縮を認めることとした。しかし宮城女学校としては多くのキリスト教主義女学校と同じように独自の方針で進むこととし、本科を五年に延長した。このことは、宮城女学校の場合には尋常小学校(四年制)卒業者が予科三年、本科五年の合計八年間の教育を受けることとなり、「高等女学校令」第二条によって北海道及び全国各府県に設置されることになる公立高等女学校の場合、高等小学校第二学年修了者が修業年限四年に更に認められた一年を追加した年限である修業年限五年の教育、すなわち尋常小学校卒業後七年間の教育を受ける場合よりも更に一年間長い教育を受ける形をとり、公立の高等女学校よりも高い水準の女学校とし、キリスト教教育を強調した高水準の教育を実施しようとしたのである。宮城女学校が本科の修業年限を五年に延長した三ヶ月後、一八九

九年二月にはこの「高等女学校令」の他に「高等女学校編制及設備規則」（文部省令第五号）、「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」（文部省令第七号）が公布された。

この一年間、すなわち第十三年度はあわただしい動きの中にも大いに教育の成果をあげることができた。卒業式を直前に控え、六月二十日にズーフルは年次報告書を送っているが、それによると、生徒数は五十名であるが、この一年間に受洗者十一名、信仰告白者一名があってクリスチャン生徒数が三十名になっており、その中十七名が日曜学校の教師として奉仕していること、この年は多くの外国人の来校者があり、それらの来校者による説教や講演をきく機会に恵まれたこと、嘗ては学校の人力車夫として活躍し、その後門衛兼校舎管理人として勤務している職員が受洗したこと、更に三名の卒業生（宮本むら、中山たけ、吉田てる）が教員として教壇に立ち、生徒達に大きな励ましを與えていることなどは校長としては特に喜ばしい事であり、これらの導きを與えたもうた神への感謝の祈りを以て報告書を記している。幾多の困難を試錬として與えたもうた神によって信仰を鍛えられ、"End well all is well."であるとしている。

六月二十五日（日）の卒業礼拝の説教者は日本組合教会宮城教会（現日本基督教団仙台北教会）のデフォレスト博士であった。六月二十九日（木）の卒業式に卒業した五名は第七回卒業生として小泉はる、安部やす、菊地とら、森かの、津田まつの五名であった。この五名の中小泉はる、菊地とらの二名は母校にのこってそれぞれ教壇に立つことになった。

なお、前述の如く、本科の修業年限を五年にすると同時に課程の改正を行なったが、その概要は次の通りである。従来は、予科においても英語の授業があったので、本科一年に進む頃には英語を相当学習しているわけである。そこで、外部から直接本科に入学した者があった場合には、英語に関しては入学者の力にあわせて予科の生徒と一緒に学習させ、力がつくにつれて次第に上級学年での学習を行なうようにさせた。又、同一学年であっても日本語学

科の生徒と英語学科の生徒とがあるため、本科一年だけをとってみても、英語、国語それぞれにおいて生徒達の間に諸種の進度の者があり、生徒数が増加するにつれて教員も指導上若干の煩雑さを感ずるに至ったので、今後は予科（Preparatory Course）に英語の教科を置かず、本科（Academic Course）の一年で英語の授業を開始することとしたのである。[註二二]なお本科を五年にしたことと同時に、苦学生（自活生徒）のため並びに正規の授業以外に更に英語・音楽・裁縫・国語などについての課外教科受講希望者のために研究科（Post-graduate Course）を設置することの検討を行なっている。

更に又、奨学生（給費生）の場合は課外教科として聖書研究教科の受講を義務づける計画を検討している。

なお第十三年度を終え、第十四年度に入って間もない一八九八年十月一日（土）、ハロウェルは横浜を発ってホノルル経由で帰国の途につき、十月十七日に無事サンフランシスコに到着した。ハロウェルは帰国して外国伝道局に宣教師を辞任する旨申し出た。その旨を知ったズーフルはキャレンダーに宛てた十一月一日の書翰で、大変驚き且つ残念なことではあるが、一日も早く健康を回復して、是非幸福な家庭生活を送れるようになってほしいと祈っている旨を伝えてほしいと記している。

「私立学校令」他の公布

愈々第十四年度が始まろうとして、新学年度の準備が行なわれていた一八九九（明治三十二）年八月三日に、「私立学校令」（勅令第三百五十九号）並びに「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件」（文部省訓令第十二号）が公布された。この前者、「私立学校令」は学校の設立・校長の認可・教員の資格などについて規定し、私立学校を監督官庁の統制下に置こうという方針で定められたものであり、又、後者、「文部省訓令第十二号」は学校から宗教教育・宗教行事を分離させようという方針で定められたものであり、これらは私立学校、特にキリスト教主義学校にとっては極めて重要な影響を与えるものであるので、これらが公布されるに至る経過を概観する必要がある。

一八八六（明治十九）年四月十日に公布された「中学校令」による中学校卒業者は直ちに大学に入学できることになっていた。その後、一八九四（明治二十七）年六月二十五日に「高等学校令」が公布されて、従来、中学校の上段階を占めていた高等中学校が高等学校となり、中学校は下段階を占めていた尋常中学校だけとなり、この尋常中学校が普通教育を施す最終段階となった。このようにして小学校・（尋常）中学校・高等学校・帝国大学というように学制が整備されて教育の体制が一本化されると、帝国大学に入学するには高等学校を卒業しなければならず、高等学校に入学するには（尋常）中学校を卒業しなければならなくなった。一八九九（明治三十二）年二月七日の「中学校令中改正」で尋常中学校の名称は中学校と改められ、中学校の目的を「男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス」（第一条）と規定し、同年公布の「実業学校令」による実業学校と性格を異にするものであることを明確にした。なお中学校の修業年限は尋常中学校と同様に五年とし、入学資格は年令十二才以上で高等小学校第二学年終了者とした。

女学校についてはどうであろうか。学校制度に関する規定の中に高等女学校の名称が初めて使われたのは既述の如く一八九一（明治二十四）年の「中学校令中改正」においてである。第十四条で、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス　高等女学校ハ女子ニ須要ナル技芸専修科ヲ設クルコトヲ得」と規定し、高等女学校を尋常中学校の一種と位置づけた。更に一八九五（明治二十八）年一月、「高等女学校規程」で高等女学校の修業年限を六年とし、土地の状況によっては一年の伸縮を認め、入学資格は修業年限四年の尋常小学校卒業者と規定した。すなわち尋常中学校と比較すると修業年限は一年長くなってはいるが入学資格の点で二年低く定めてあるので卒業年令は一年低くなっていた。そして修業年限に一年の伸縮を認めているのは、文部当局が女子の高等普通教育を必ずしも男子と同じにする必要がないと考えていたからである。一八九九（明治三十二）年二月には「高等女学校令」が公布されたが、これは「中学校令」に準じたものであって、高等女学校の目的を「女

子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲ス」と規定し、中学校の高等普通教育と同じ目標を示した。なお当時、樺山資紀文部大臣は「高等女学校令」制定に関して同年七月の地方視学官会議において「高等女学校ハ賢母良妻タラシムルノ素養ヲ爲スニ在リ、故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト倶ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル学術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス。」と説明し、女子の高等普通教育が中流以上の社会の女子の教育であり、その特質がいわゆる「良妻賢母主義」の教育にあることを明らかにした。高等女学校の修業年限は四年を基準として三年乃至五年にわたる年限を認めることとし、女子のための特有な制度としたが、修業年限の点で中学校よりも程度の低いものとして位置づけた。この点、宮城女学校は既述の如く一八九八年十一月の課程改正で本科の修業年限を五年に定めたが、それは、公立の高等女学校よりも高水準の教育、公立の中学校と同水準の高等普通教育を行なおうとしたためである。

ところで前述のように帝国大学に入学するためには高等学校を卒業しなければならなず、高等学校に入学するためには尋常中学校（のち中学校）を卒業しなければならなくなったのであるが、多くの私立学校は文部省から尋常中学校としての認可を得ておらず、それらの私立学校は、我が国の学制整備によって高等学校への進学の道は閉ざされてしまった。こうなると、キリスト教主義学校への入学志願者は次第に減少し、在学者でも中途退学する者が増加する傾向となり、他方、一八九〇年教育勅語が発布されて国民道徳の規範、教育の方針が示された頃より国家主義・国粋主義が抬頭して来たこともあり、キリスト教主義教育に困難な動きがみられるようになって来た。そこで、キリスト教主義学校としては公立の尋常中学校と同等の資格をもつ中学校としての認可を得ることが入学志願者減少を防ぐために必要なこととなり、同志社・青山学院・明治学院などの有力学校は一八九七年、一八九八年の頃に認可を得た。公立の尋常中学校と同等の資格を認可されるということは高等学校への進学資格並びに徴兵猶予の特典を得ることであり、この認可を得たキリスト教主義学校では再び入学志願者が増加して来るという希望を持

つことができた。ところが丁度そのような時に、「私立学校令」と「一般教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムル件」が公布された。これらはキリスト教主義学校に対して大きな影響を与えるものであるがこれらが公布されるに至った背景は次の通りである。

わが国は一八五四（安政元）年の開国後、一八五八（安政五）年に「日米修好通商条約」を締結調印し欧州各国にも及んだが、それは治外法権を認め、又、関税自主権を持たない不平等条約であった。したがって不平等条約の改正が明治政府にとっては多年の懸案事項であり、歴代の外務卿や外務大臣が條約改正の努力を続け、第二次伊藤内閣の陸奥宗光外務大臣の努力により遂に一八九四（明治二十七）年七月十六日、「日英通商航海条約」を締結調印するに至り、條約改正が実現し、欧米列国との間の條約改正も実現した。このため治外法権の撤廃、関税自主権の獲得が実現し、又、外国人の居留地が全廃されるに至った。これら新条約は五年後の一八九九（明治三十二）年から実施されることになったが、条約改正によって問題となったのは、外国人が自由に国内で生活し、営業ができる所謂「内地雑居」に関する不安であった。すなわち内地雑居が実施されるようになれば、従来よりも数多くの宣教師が日本国内各地に居住してキリスト教の伝道を盛んに行ない、日本国中がキリスト教によって占領されてしまうのではなかろうかという不安感をいだく者が政府当局は勿論、有識者の中にも可成り多くあった。そのような精神面における恐怖感が、キリスト教学校に対する抑圧となってあらわれた。すなわち政府は「私立学校令」を制定して宗教教育を禁止しようと考え、文部省は「私立学校令案」を作成し、高等教育会議に諮問した。その「私立学校令案」の内容は三十条にわたるものであったが、その第十七条に「小学校中学校高等女学校其他学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校及政府ノ特権ヲ得タル学校ニ於テハ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ得ス」との規定があった。高等教育会議で種々審議の末、文部省の此の案は反対少数で原案のまま通ったが、学制研究会総会では批判的意見が多かったため、一八九九年八月三日に勅令第三百五十九号として公布された「私立学校令」は、

高等教育会議を通過した文部省案を大分修正したものとなっており、宗教教育禁止を規定した前記第十七条の条項は削除されていた。この「私立学校令」には次のような規定があり、私立学校は原則として地方長官（県知事）の監督に属し、その設立及び校長については監督官庁の認可を受けることが明示された。

第一条　私立学校ハ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外地方長官ノ監督ニ属ス
第二条　私立学校ヲ設立セントスル者ハ監督官庁ノ認可ヲ受クヘシ
私立学校ノ廃止及設立者ノ変更ハ監督官庁ニ開申スヘシ
第三条　私立学校ニ於テハ校長若ハ学校ヲ代表シ校務ヲ掌理スル者ヲ定メ監督官庁ノ認可ヲ受クヘシ
本令中校長ニ関スル規定ハ之ヲ学校ヲ代表シ校務ヲ掌理スル者ニ適用ス
第五条　私立学校ノ教員ハ相当学校ノ教員免許状ヲ有スル者ヲ除ク外其ノ学力及国語ニ通達スルコトヲ証明シ小学校、盲唖学校及小学校ニ類スル各種学校ノ教員ニ在リテハ地方長官其ノ他ニ在リテハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
但シ専ラ外国語、専門学科又ハ特種ノ技術ヲ教授スル教員及専ラ外国人ヲ入学セシムル為ニ設立シタル学校ノ教員ハ国語ニ通達スルコトヲ証明スルコトヲ要セス
前項ノ認可ハ当該学校在職間有効ノモノトス
第七条　私立学校ノ校長又ハ教員ニシテ不適当ナリト認メタルトキハ監督官庁ハ本人ノ志望ニ依リ試験ヲ施スコトアルヘシ

「文部省訓令第十二号」

宮城女学校はその運営が主として「合衆国改革派教会」外国伝道局からの送金によって行なわれている学校ではあるが、やはり、この「私立学校令」の適用を受けるわけである。監督官庁の命令に違反すれば閉鎖を命ぜられるのである。第五条に「私立学校ノ教員ハ相当学校ノ教員免許状ヲ有スル者ヲ除ク外其ノ学力及国語ニ通達スルコトヲ証明シ（中略）其ノ他ニ在リテハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ但シ専ラ外国語、専門学科又ハ特種ノ技術ヲ教授する教員（中略）ハ国語ニ通達スルコトヲ証明スルコトヲ要セス」との規定があるが、宮城女学校の場合、教員組織はこの規定との関係ではなんら問題はなかったし、又、外国人教

師は専ら外国語（英語）や専門学科又は特種の技術（音楽その他）を担当していたのであるから、国語（日本語）に通達することを証明する必要もなかった。宮城女学校の教育にとってより大きな影響を与えるものは、次のような内容の「文部省訓令第十二号」の「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件」であった。

「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」

この「訓令第十二号」は当時のキリスト教主義学校を窮地に追いこんだ。すなわちこの訓令によると、官立公立学校も、学科課程に関し法令の規定ある学校も、教科課程の内外を問わず宗教教育も宗教行事をも行なうことが出来ないのである。学科課程に関し法令の規定ある学校とは、既述の如く諸法令によって学制整備が行なわれた文部省認可の学校系列の中に位置づけを認められる学校ということである。したがって私立学校でも「中学校令」や「高等女学校令」に規定する学校として認められるためには宗教教育・宗教行事を行なうことが出来ないのである。私立の中学校が公立の尋常中学校と同等の資格を認可されようとすれば宗教教育・宗教行事を行なうことが出来ないということはキリスト教主義学校にとっては建学の精神に則った教育を行なうことが出来ないことになる。前述の如く、同志社・青山学院・明治学院などのように、公立の尋常中学校と同等の資格を認可された学校が、建学の精神に則って聖書の授業その他の宗教教育や、礼拝その他の宗教行事を行なえば文部省認可の学校系列を離れて各種学校とならざるを得ず、したがって上級学校進学資格、徴兵猶予の特典を失うことになって了うのである。キリスト教主義中学校としては、一、許可を取消されて各種学校となって宗教教育・宗教行事を行なうか、二、宗教教育・宗教行事を中止して認可校としての立場を守るか、三、学校を廃校するかの何れかを選ばなければならなかった。認

可を返上した学校としては青山学院、明治学院があり、当時まだ認可を受けていなかった東北学院も認可を得ることをせず、それぞれ青山学院中等科、明治学院普通学部、東北学院普通科と称していずれも断乎としてキリスト教的立場を守って各種学校となりキリスト教主義学校として宗教教育・宗教活動を続ける道を選んだ。宗教教育・宗教行事を中止して認可校としての立場を守りつつ、何らかの方法で宗教教育を実施した学校としては立教中学校、同志社などがある。又、江原素六によって創立された東洋英和学校は宗教教育・宗教行事を中止して、新しく麻布中学校として発足し認可校となる道を選んでいる。

宮城女学校の場合はどうであろうか。既に記したことであるが、一八九九年二月に公布された「高等女学校令」と宮城女学校の規則とを比較すれば、宮城女学校は「高等女学校令」には従わず、独自の方針で、建学の精神をいかす教育を行なっている。多くのキリスト教主義の女学校が宮城女学校と同様に「高等女学校令」には従っていなかった。そこへ「訓令第十二号」が出されたのである。ここでもし「学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校」である「高等女学校令」に言う高等女学校になれば、私立の高等女学校であっても、四年の課程を終了すれば女子高等師範学校への進学資格を持つことになるのであるが、多くのキリスト教主義の女学校が敢てその道を選ぼうとしなかったのは、宮城女学校の場合と同様に、たとい各種学校の立場に甘んじたとしても宗教教育をあくまでも遂行して行こうと考えたからである。女子の学校であるので、男子の学校の場合と異り、徴兵猶予の特典の件は無関係であり、問題となるのは上級学校への進学に関することだけであった。しかし、各種学校であるために進学資格の特権を失ったとしても、当時は女子の上級学校としては東京女子高等師範学校が一校あるだけであったし、世間一般にも高等女学校の数が少なく、したがってキリスト教主義の女学校はそれぞれの地域における最高教育機関的評価を得ていたので上級学校への進学資格の問題に特別に拘束される必要はなかったのである。ただ、キリスト教主義学校としての特色を充分に発揮した教育を行ない、卒業生が更に高度の勉学をしたい場合の要望に応えうるような教育課程

（専攻科、研究科など）を併設することを考える必要はあったのである。

なお、この「訓令第十二号」によって大きな影響を受けたキリスト教主義学校全体としての対応を記しておくが、明治学院総理井深梶之助、青山学院長本多庸一、植村正久富士見町教会牧師、小崎弘道靈南坂教会牧師などが早急に協議の後、一八九九年八月十六日に、井深、本多が中心になり明治学院、青山学院、同志社、東洋英和学校、名古屋英和学校、立教中学校の代表者が東洋英和学校に集まり協議を行なった。その結果、大日本帝国憲法が保障する信教の自由を奪う訓令を文部省が出し、個人の資産を以て維持する私立学校の教育に制限を加え、子弟の教育を撰定する父兄の自由を検束することは帝国憲法の精神に違反するものであるので、全国のキリスト教主義学校は絶対にキリスト教主義を譲与することのないようにという趣旨の檄文を作成し、全国のキリスト教主義学校に送った。たとえば明治学院では、その翌日、八月十七日に臨時理事会を開催し、「訓令第十二号」に対する明治学院の態度を正式に決定しているが、決議事項七項目の中に次のような項目がある。

「一、今回の訓令が、宗教教育と宗教行事を全面的に禁止するとはいえ、明治学院は創立以来の原則に従い、中学校の特権を廃棄することも辞さない。（中略）七、明治学院教授会は、普通学部につながる英語普通課程（English Normal Course）開設の準備をする。」

このように中学校としての特権を放棄し、各種学校になってでも建学の精神を堅持してキリスト教主義教育を遂行し、更に上級課程の教育機関をも設置しようという決意が他の多くのキリスト教主義学校においてもなされた。井深を中心とするキリスト教主義学校代表者は何度も何度も文部省に請願・陳情を行なったが、文部省は仲々強硬であった。請願・陳情を眞剣に行なったのはキリスト教主義学校の中でも男子校が主であったのは、女子校は既述の如く上級学校進学資格や徴兵猶予に無関係という立場にあったからであろう。キリスト教主義学校側でもそれぞれ対応策を考え折衝を続けたが、二年乃至三年後には各男子校においても上級学校進学資格並びに徴兵猶予を得るに

至った。

外国人校主誕生

さて、宮城女学校も当然、「私立学校令」によって認可を受けなければならなかった。丁度、改正条約実施後で、いわゆる外国人の内地雑居も行なわれるようになった頃であった。宮城女学校は、一八九九（明治三十二）年十月四日付で認可関係一件書類を申請し、十月九日付で受理認可された。それら書類中に次の如き開申書も含まれている。

「私立宮城女学校々主変更之儀ニ付開申
當校従来橋本経光ヲ以テ校主則チ設立者ト相定メ置候處今般レナ・ザーフルーヲ以テ校主ト変更仕候ニ付私立学校令第二條ニヨリ新旧校主連署ヲ以テ此段開申候也
明治三十二年十月四日
仙臺市東三番町（ママ）七十八番地居住
北米合衆国人
新校主　レナ・ザーフルー
仙台市清水小路七番地寄留
旧校主　橋本経光
レナ・ザーフルー代理人　リリー・エム・ロールボー
Lillie May Rohrbaugh
宮城縣知事千頭清臣殿
」

「私立宮城女学校校長兼教員継続就職之儀ニ付開申
私儀現ニ私立宮城女学校校長教員ニ有之候處引續キ當該学校ノ校長兼教員ニ従事致シ候間私立学校令第二十條ニヨリ此段開申候也
明治三十二年十月四日
仙台市東三番丁七十八番地寄留
北米合衆国レナ・ザーフルー
校長代理　リリー・エム・ロールボー
Lillie May Rohrbaugh
宮城縣知事千頭清臣殿
」

「私立宮城女学校幹事兼教員継続就職之儀ニ付開申
私儀現ニ私立宮城女学校幹事兼教員ニ有之候處引續キ當該学校ノ幹事兼教員ニ従事致シ候間私立学校令第二十條ニヨリ此段開申候也
明治三十二年十月四日
仙臺市東三番丁七十九番地寄留
宮城縣平民　早坂哲郎

校長代理　リリー・エム・ロールボー　宮城縣知事千頭清臣殿」
Lillie May Rohrbaugh

すなわち、一八九九年十月九日付で宮城女学校に初めて外国人校主が誕生した。レナ・ズーフルが校主兼校長になったのである。ただし、この頃、ズーフルは疲労のため健康を害し婦人宣教師館で静養中であったのでロールボーが校長の実務を代理していた。又、さきに退職した佐伯陽一幹事の後任には、第十四年度のはじめ、一八九九年九月一日付で早坂哲郎が就任した。なおここでモールとホーイについてふれておく。J・P・モールも異国における活動に無理があったのか前年来心臓病のため静養につとめていたが、医師の指示により南カリフォルニアで療養することとなり、夫人と共に一八九九年四月二十八日、サンフランシスコに着き、療養に専念していた。又、一八九六年七月にアメリカから仙台に戻ったホーイは、またもや教育と伝道との両面で活躍を続けたが、何れの分野においても心身を労するような諸問題があいついで起り、それらの処理のために疲労が重なったためか持病の喘息が再発して苦しむことが多かった。転地療養が最上であるとの医師の指示にしたがいホーイは一八九八年春に中国に渡り数カ月を過して健康を回復して仙台に戻ったが、ホーイはその頃より中国伝道に使命を感ずるに至り、外国伝道局の承認を得たのち、一八九九年十一月には遂に中国の漢口に単身赴任、直ちに中国語の勉強にとりかゝった。[註二三]ホーイ夫人と家族も日本で中国語の勉強を開始し、中国へ渡る日に備えはじめた。

以上のように一八九六（明治二十九）年から一八九九（明治三十二）年までの数年間は、宮城女学校にとっても、キリスト教主義学校全般にとっても大変あわただしい動きの時代であった。一八九六年五月一日から一八九九年四月三十日の間に、「合衆国改革派教会」外国伝道局が宮城女学校並びに東北学院の運営費として送金した金額、そのために婦人外国伝道会が献金した金額、宣教師に俸給として送金した金額は表二の通りである。[註二四]

表二　運営費支出

宮城女学校	7,837.44ドル
東北学院	12,700.00

婦人外国伝道会の献金額

1896. 5. 1～1897. 4.30	2,299.04
1897. 5. 1～1898. 4.30	2,159.06
1898. 5. 1～1899. 4.30	3,136.60
計	7,594.70

（この7,594.70ドルが，宮城女学校運営費7,837.44ドルの約90%を占めている。）

給与支出

W.E. Hoy	5,400.27ドル
D.B. Schneder	4,200.00
J.P. Moore	3,737.96
押川方義（東北学院長として）	1,662.50
H.K. Miller	2,750.00
S.S. Snyder	4,027.35
C. Noss	3,811.89
Mary C. Hollowell	1,617.02
Lena Zurfluh	1,798.00
Lillie M. Rohrbaugh	1,042.75
Paul Lambert Gerhard	1,760.42
計	31,808.16

さて多くの困難が予想される中で歩みを始めた宮城女学校第十四年度は、ズーフル校長の病気療養、十月にはハロウェルの病気帰国、校長代理のロールボーの病気などと外国人教師の授業に支障がおきるかに見えた。ところが、東北学院関係宣教師や宣教師夫人、更には組合教会宣教師夫人デフォレストなどが欣然と応援を申し出て、宮城女学校の難局をきりぬけるために奉仕的活動を行なった。すなわち、ズーフルの授業はゲルハード、ミラー夫人、ノッス夫人、スナイダー夫人などが代講し、又、二月、三月にロールボーが病臥中はデフォレスト夫人が好意をもって教壇に立った。又、久しく空席であった幹事に就任した早坂哲郎が全教職員を統率して全員が協力し合ったので、充実した一年となった。一九〇〇（明治三十三）年七月二日付のズーフル校長の年次報告書によると、宮城女学校が非常な困難に遭遇した時に、「合衆国改革派教会」の多数の宣教師や宣教師夫人、更には「組合教会」のデフォレスト夫人の協力、新任の立派な幹事を中心にした全教職員の誠実な活動、生徒全員の熱心な努力によって心から感謝できる一年を送ることが出来たのである。この一年間に六名の生徒が受洗したので、四十七名の生徒中のクリスチャンは三十五名となった。六月二十四日（日）の卒業礼拝では東北学院教授梶原長八郎

が説教を行ない、六月二十九日（金）に原田ことぢら十一名の第八回卒業生が巣立った。彼女らの大部分がこゝ数年間、日曜学校の教師として誠実に奉仕活動を行ない、彼女らの活動で日曜学校が極めて盛んになっていた。したがって卒業式には多数の来賓があり礼拝堂が満席となった。ズーフルは、宮城女学校運営費の大部分を支える「合衆国改革派教会」の婦人外国伝道会にこのすばらしい教育成果を感謝の思いをもって詳細に報告した。

ワイドナーの来任

なお病床のズーフルに代って校長代理として校務を統理していたロールボーも健康を害し、一九〇〇年四月に帰国した。又、サディー・リー・ワイドナーが五月二十八日（月）、ヴァンクーヴァーを発ち六月十一日（月）早朝、横浜に着き、シュネーダー、ホーイ、クローナー、スナイダー、ノッス夫人の出迎えを受けた。シュネーダーとノッス夫人はワイドナーの出迎えのために仙台から出て来たのであるが、時たまたま在中国のホーイとクローナーが所用で来日し、これ又、所用で横浜滞在中のスナイダーも合流し、多勢で出迎えたのでワイドナーは非常に感激し、横浜到着から六月十二日午後七時仙台着任までの様子を六月十三日に外国伝道局総幹事キャレンダー並びに財務委員長レンベルガーに報告した。又、ワイドナーは宮城女学校に赴任すべく五月十七日にオハイオ州ベルヴューを出発してからシカゴ、ヴァンクーヴァー、横浜を経て仙台到着までの様子並びに赴任に要した旅費等の支出額について、七月四日並びに九月十日にそれぞれ報告している。当時の様子を知ることが出来るので旅費等の支出について表三で紹介しよう。

ワイドナーが宮城女学校に赴任すべく、ヴァンクーヴァーへ向う車中にあった一九〇〇年五月二十二日、ルーシー・マーガレット・ポーウェルは、日本派遣婦人宣教師に就任の契約書に署名し、ワイドナーに続いて宮城女学校へ赴任する準備に着手した。そして宮城女学校第十五年度が間もなく開始されようとしている九月三日に横浜に到着し、ランペ、スナイダー並びにワイドナーの出迎えを受け、仙台へ向った。このようにワイドナーとポーウェルが着任したので、かねてから休暇を得て帰国することになっていたズーフルは安心してワイドナーに校長代理を

委任し、休養に専念するため十二月に一時帰国することにした。ズーフルは使命に燃えた極めて責任感の強い人物であったので、健康を害して病床にあったにも拘らず、校長としての立場上、仙台に留っていたのである。ワイドナーに続いてボーウェルも着任したので、ズーフルは約半年の間に校務全般に関する引継を行なった上で十二月下旬、帰国の途に着いた。ワイドナーは一九〇一（明治三十四）年六月二十九日の年次報告書中でズーフルについて次のように記している。

表三　支出明細表

旅　　費

ベルヴュー（オハイオ州）→シカゴ	4.35ドル
シカゴ→ヴァンクーヴァー→横浜	185.75
寝台料	16.00
食事代	7.45
手数料	2.05
ホテル代（ヴァンクーヴァー4泊）	13.00

横浜における支出

手荷物関係費	2.38
ホテル代（一泊）	.87
人力車代	.35
汽車賃（仙台まで）	2.17
両　替	.55
計	234.92ドル

○預　り　金　400.00ドル
○支　出　額　234.92ドル
○残金（財務へ返済）165.08ドル

"Though it was time for Miss Zurfluh to return home on furlough when I reached Japan, she knowing the difficult nature of the work as no one else could, did not think of herself but kindly stayed until December so that Miss Powell and I might have an opportunity to learn more about the work before the entire responsibility rested upon us. How helpful this was to us and how much we appreciated this I have told you in my personal report. Of the work of the first part of the year Miss Zurfluh has no doubt told you more fully than anything I might wright. She left Sendai the latter part of December. Before she left, the School had a farewell meeting for her. Many were the expressions of appreciation of her earnest, faithful work and as the girls expressed it, 'It seems as if our real mother was leaving us.' To them she had given herself and they appreciated her true worth

as no other could. Moreover, the farewell given her by the leading citizens of Sendai was evidence that her noble work was appreciated not only by those in the School but also by those who from the outside are watching the progress of our work."

着任後僅か半年にして重要な任務を引受けたワイドナーは、アメリカにあって既に教壇に立った経験があり、緻密な計画力と優れた指導力を有する人物であったため、彼女の統率のもとに学校の歩みは順調に進められた。一九〇一年三月三十日(土)、第九回卒業生八名の卒業式が挙行された。宮城女学校としては初めて三月に行なう卒業式である。卒業生全員がクリスチャンであった。礼拝堂は多数の来賓で一杯になったが、校長代理として初めて卒業生に卒業証書を手渡し、卒業生に與える言葉を述べたワイドナーは、当日臨席した伊達伯爵が述べた祝辞の中で、宮城女学校の教育を高く評価する言葉があったことを知り、仙台における宮城女学校の存在意義を再認識すると同時に建学の精神に基くキリスト教教育をより強くおし進めるべき使命に邁進しようとの決意を新たにした。

一九〇一年四月、宮城女学校としては初めての四月からの新学年が始まった。入学希望者が極めて多く三十名の入学を許可した。この中、クリスチャンは僅か一名だけである。在学生徒数は予科十五名、本科五十四名、特別聖書科 Post-graduate Course 十七名となり、宮城女学校創立以来最大の入学生を迎えての新学年度開始となった。本科生五十四名中、三年、四年、五年の上級三学年の生徒全員がクリスチャンになっていた。この一年間に七名の生徒が受洗した。又、第一回から第九回までの卒業生合計四十名中三十八名がクリスチャンであった。宮城女学校における宗教教育の様子をおしはかる事が出来る。

なおこの当時の生徒の出身小学校であるが、一九〇一(明治三十四)年一月二十八日付文書で仙台市から、「他県市町村尋常小学校卒業者調査表」の提出を求められた際に、二月九日現在で調査した結果によると、在籍生徒四十八名の内訳は次の通りであった。

在籍生徒……四十八名
- 宮城県内尋常小学校卒業者　二十六名
- 宮城県以外尋常小学校卒業者　二十二名

二十二名
- 山形県内尋常小学校卒業者　六名
- 福島県内尋常小学校卒業者　五名
- 北海道内尋常小学校卒業者　二名
- 岩手県内尋常小学校卒業者　二名
- その他各府県内尋常小学校卒業者合計　七名

次にこの四十八名の年齢を調査すると、最高年齢者と最低年齢者との年齢差は十一歳であり、出生年は表四の通りである。

創立当時数年間の状況にくらべれば、生徒入学時に、大体同年齢の者が入学するようになって来た。

右の調査より三年後の一九〇四（明治三十七）年三月一日現在の調査であるが、一九〇三年四月一日以降の入学者中、一九〇四年三月一日現在在籍者四十四名の内訳は次の通りである。

一九〇三年度宮城女学校入学者中、一九〇四年三月一日現在在籍者……四十四名
- 本科二年入学者……一名…高等小学校四年卒業　一名
- 本科一年入学者……三十四名
  - 高等小学校四年卒業　二十九名
  - 高等女学校二年修業　四名
  - 英和女学校予科三年修業　一名
- 予科三年入学者……二名…高等小学校三年修業　二名
- 予科二年入学者……七名
  - 高等小学校二年修業　六名
  - 高等小学校一年修業　一名

この四十四名の入学者の父兄の職業内訳は表五の通りである。

表四

出生年	生徒数
1877（明治10）年	1名
1878（明治11）年	1名
1879（明治12）年	0名
1880（明治13）年	2名
1881（明治14）年	4名
1882（明治15）年	7名
1883（明治16）年	6名
1884（明治17）年	9名
1885（明治18）年	6名
1886（明治19）年	2名
1887（明治20）年	3名
1888（明治21）年	5名
その他	2名
計	48名

表五

商業	10名
農業	6名
官吏	5名
教員	4名
医師	4名
牧師	1名
会社員	1名
工業	1名
無職	12名
計	44名

在日宣教師社団特別会議　一九〇一年四月に宮城女学校第十六年度が開始されて間もなく、在日宣教師社団の特別会議が二回開催された。ワイドナーが宮城女学校の教育充実発展のために重要な議題を提案したからである。第一回は四月二十九日、バイブルウーマンの活動費として一九〇一年度から四百ドルの増額を要望する件、第二回は五月八日、宮城女学校の体育館建設費として緊急に七百ドルの送金を要望する件がそれぞれ審議された。これは、第一に、仙台市内のみならず、市外各地からも、宮城女学校のバイブルウーマンの応援・協力を得て伝道その他の活動を行ないたい旨の申出が多く、バイブルウーマンが増員されたとしても応じきれないほどの要望があり、ワイドナーは、献身的に奉仕活動を続けるバイブルウーマンの手当を従来の月七円から八円に改定し且つ旅費をも支出できるようにしたいと考えたこと、第二に、宮城女学校の教育が世間一般から高く評価されて入学希望者が多くなり、したがって入学生多数を迎えたため教室も不足し、事務室・応接室・食堂・礼拝堂をはじめ婦人宣教師館の応援室をも教室として授業を行ない、特に一クラス一週間三時間の体操の授業を行なう礼拝堂（兼講堂兼体操場）

では、場合によっては二クラス乃至三クラスが同時に体操実技を行なわざるを得ないような場合もあって健康上も好ましくない状況になったことにより、ワイドナーはこれらの問題を解決すべく、在日宣教師社団の名において外国伝道局へ資金調達を要請するよう提案したのである。在日宣教師社団としては早速、外国伝道局へ要請書を送付したのみならず、更に数次にわたる会議の後、ワイドナーも八月十四日、キャレンダーに書翰を送り、その後の会議での決定事項、すなわち、一、校舎並びに婦人宣教師館を増築し且つ校舎と婦人宣教師館の連結廊下を建設すること、二、新校舎を建設し、現校舎を寄宿舎として充分な施設にする事をも検討すること、三、新校舎建設に必要な校地として現校地に隣接する土地購入に関する諸権限を在日宣教師社団に委譲することの三件を要請した。これらの決定根拠は、九月にはキャザリン・パイファーが着任することになっており、更に帰国休養中のズーフル校長が帰任すれば在仙婦人宣教師が四名になり婦人宣教師館が狭隘となること、生徒中に急病人が出たり地震その他緊急事態発生の場合、婦人宣教師が天候の如何に拘らず晝夜いつでも校舎（兼寄宿舎）に駆けつけやすくする必要があること、宮城女学校近隣地域に政府関係庁舎の建設が進んでおり、学校周辺の地価高騰の動きがあるので、学校の将来的発展を見込んで隣接地域一帯の購入を地価高騰前に完了すべきであると判断したことによるものであった。

なおこの間、五月十四日、このように宮城女学校の発展という明るい希望を持って教職員一同が熱心に教育に専念している状況を、菊池大麓東京帝国大学総長（註二五）並びに文部省柳澤普通学務局長が視察のために来校したので、なお一層教科内容の充実と教育施設の拡充に努めようとの気運が強まったのである。

校舎全焼

学校の歩みは順調であり、生徒一同も、バイブルウーマンもそれぞれ毎日を充実した一日として送り続け、第十六年度が無事に終了しようとしていた一九〇二（明治三十五）年三月八日（土）、この順調な歩みを阻むような出来事、校舎が全焼する火災が発生したのである。前に紹介した第十回卒業生川添なみ（東

京神学大学の前身、日本神学校初代校長川添万壽得牧師夫人）の回顧文中に記されているように、第十回卒業式の日も近づき卒業学年の八名は卒業式にそなえさまざまの準備をしていた春の日和の続いた土曜日の出来事である。久しく降雨がなく水涸れのため節水をせざるを得ないような時におきた火災である。第十三回卒業生前島きそが三十五年後に記した回顧記には次のように記されている。

「思へば三昔以上も前のことになるが、明治三十五年の春は稀な旱がつゞいた。その結果学校に水がないので、私達も洗濯を控へお風呂にもはいれぬ有様であつた。たまたま三月八日、久々でたてたお風呂が原因して発火したのである。

そのころお風呂は一週二回（火・金）の規定であったが、水が缺乏してをる為め、西洋館の井戸から貰ひ水をしてやつと土曜日の午後たてたのである。土曜日はいつも休みなので外出した人も尠からずあつた。私は其の頃、西洋館と呼ばれてゐた現今の校長先生のお宅の應接間でピアノを練習してゐたところが、突如けたゝましく学校の鐘が鳴り出した。何事かと不審に思ひながらピアノの手を休めて聞耳を立てゝゐると、私より一級上の關口おそのさんが大聲で、『おきそさん、學校が火事よ』、と叫んで来られた。驚いて出て見ると校舎と寄宿舎と一棟になつてをる建物の一端から出た火煙は見るみる間に次から次の室へとうつり、火元に近い私の室の窓から濛々たる煙が立ち昇つてゐる。と見れば其の窓から私達の室長であった高橋なみ姉（今の川添夫人）は雄々しくも私達の着類其の他を下に投つてをられるのであつた。『おなみさんが危い〳〵』と叫びながら近づかうとしても、危険なりとて近寄らせられず、私達はたゞ胸を轟かせながらちらつと見詰めてをるより外に道がなかつたのであった。旱の為乾ききつたペンキ塗の校舎は風さへ加はつて、パリ〳〵音をたてゝ燃え行く其態は凄いといはうか、おそろしいと云はうか筆舌の盡し得るところではない。

水が無いので消防夫の懸命の努力も何の甲斐なく、総ては火の柱と化し、そして火の柱が風に煽られ舞ひながら落ちて来るその恐ろしさ、最後は三本の煙突丈をのこして、あはれなつかしき校舎は束の間に烏有に歸して了つたのである。

三月といへば試験の前である。當時向山に行つて勉強する人がよくあつた。この日も山上から火事を見て母校とは知らずに帰校され悲しむ人々もあり、それ〴〵外出先から戻られ、自分の所有物が焼失してゐるのをなげく方もあり、焼跡を見て泣く人もあり、實にその悲痛な光景は深く脳裏に印象されて今尚ほ忘るゝことができない。仙臺の近郊の方々は即日歸郷され、錦戸鶴代さんのお宅や早坂先生や又寄宿舎で取り付けの店屋等からの寄贈品より、バイブルハウスにも數日を過して歸郷された人々もあった。

當時校長ミス・ズーフルは、体養の為一ヶ年の豫定で歸米され、ミス・ワイドナーが校長代理をして居られたが、この出来事を非常に案じられ、久しく健康をそこなはれた事も私の記憶に存してゐる。

私も間もなく歸宅したが、其時父に『よくこんなに荷物を焼かずにすんだネ』と云はれ、高橋なみ姉の奮闘された御様子を誇らしげに話したので父は『あらい方だネー』とおほめしたのをはっきりと覚えてゐる。」

（第十三回卒業生　前島　きそ）

この火災の状況についての詳細は、シュネーダー並びにワイドナーが連名で外国伝道局へ送った三月十九日付の報告書に記されている。その報告書を受取った外国伝道局は早速緊急会議を開催して対応策を審議した。外国伝道局総幹事バーソロミューは、機関紙「メッセンジャー」の一九〇二年五月一日号において、宮城女学校の火災に関する外国伝道局の方針を説明しつつ仙台からの報告書全文をも紹介し、教会員全員に次のように協力を訴えている。(註二六)

"Full Report of the Burning of the Girls' School"

Herewith we present to the Church an official account of the destruction by fire of the Girls' School. This calm statement will be read by thousands, and answer many anxious questions. Now we know the facts, and our duty is plain. What we need is some liberal friend of the cause who will pay for the dormitory, and we believe the Church at large will contribute the means for the recitation hall as a memorial to Mrs. Christine Faust. Is there not some person of wealth in our fold who will erect the dormitory as a memorial to a saint in heaven? We will be glad to enter into correspondence with any friend whom the Lord may move to do so.

Allentown, Pa.　　A.R. Bartholomew

March 19, 1902

We, a commitee appointed by the Mission, beg to make the following statement about the destruction of the Miyagi Jo Gakko

by fire: ——

On March 8th, which was a mild sunny day, at about ten minutes before on o'clock it was noticed from the Schneder house that the Girls' School building was on fire. A large flame already struck up above the roof of the bath-house, which was so closely connected with the main building as to be virtually under the same roof. Mrs. Schneder and Mr. Faust immediately proceeded to give alarm, while Mr. Schneder endeavored to use one of the patent Miller Fire Extinguishers that were sent from America for the Mission's use a number of years ago. However, this appliance did not work satisfactorily, and would have been too insignificant to be effective even if it had worked well, as the flames had already gained much headway. Meanwhile others became aware of the fire. The school bell was rung vigorously, and the Misses Weidner and Powell were soon on the scene, Miss Pifer being away at the time. Both ladies went through the building to get out all the girls, who had just finished their dinner. Then Miss Weidner had the office desk with its important papers carried to a safe place, while Miss Powell looked after getting out the organs and books. An effort was also made to save the furniture, but only a little could be saved. The firemen came promptly with their hand pumps, but when they arrived all hope of saving the building was already gone. They, however, applied themselves vigorously to saving the Ladies' house, which stood on the south side of the burning building, and the Schneder house, which latter was specially exposed because a strong south wind was then blowing. But they were much handicapped through lack of water, the wells having been very low on account of a long-continued drought. Both houses were in great danger, and nearly all their contents were carried out, and in the excitement and confusion were much damaged. The Ladies' house was much scorched, and the Schneder house was on fire several times, and once seemed sure to go, but by the heroic efforts of the firemen and others it was saved, though considerably injured. Owing to the strong wind some twenty neighboring houses were slightly ignited, among them the Snyder-Miller house,which on account of its proximity would surely have been burned also, had the Schneder house not been saved. The most alarming of these minor incidents was the ignition of the brick building of the Tohoku Gakuin, which stands about two blocks away from the site of the Girls' School. The Schneder children were taken to the parsonge near by the Tohoku Gakuin, and while Mrs. Schneder was there to look after them she discovered about two feet of flame creeping up along the cornice of the east gable of the building. An instant alarm brought some students and several others quickly to the place, and one of them,a carpenter, at imminent risk to his life, went on the roof and with the help of others

soon extinguished the fire.

The Girls' School building was consumed in less than an hour, only three chimneys remaining standing. A godown a few rods away, in which were stored a number of things, mostly personal property of the missionaries, was also burned.

The conflagration started from the bath-house—just how it is only possible to surmise. The janitor of the school employed a jinrikishaman to help him on that day, and the latter commenced to fill the bath at six o'clock in the morning. At seven o'clock the janitor himself kindled the fire under the bath. The jinrikishaman kept on putting in water and firing at the same time, until twelve o'clock the janitor being engaged in other duties most of the time. At twelve o'clock the jinrikishaman gave over the work to the janitor and went home for his dinner. The janitor also, after looking at the fire, went into the Girls' School kitchen to eat his lunch, and was there until the alarm of fire was given. It is possible that the oven under the bath may have become defective, and that the fire reached the woodwork through crevices in the oven. Another possibility is that the fire originated from live coals that were taken out of the bath fire. The bath was fired with wood, and to give better draft some of the live coals were usually taken out and put into two earthen jars that stood by the mouth of the stove and that were then covered up. It may be that either the jars were not properly covered up, or that having gotten full they were emptied into a wooden receptacle before they were fully extinguished, thus setting fire to the receptacle, which in turn set fire to wood lying near. Or, a third possibility is that fire may have spurted out upon some kindling or upon a kind of a reed charcoal bag which the men had spread upon the ground to sit on. Which of these three possibilities is the true one probably no one can ever tell with certainty.

There were forty girls together with three teachers and the matron in the building at the time. All lives were saved, but some of the girls and two of the teachers lost all they had, and many others lost a great deal. After the fire thirteen girls were put in the Ladies' house and the rest in the Bible House. There was no complaint. At 9 o'clock in the evening a meeting for prayer and thanksgiving was held. The next day the girls went to church and attended to their Sunday School duties as usual. After the regular church service on Sunday morning a meeting was held for thanksgiving that no lives were lost. The next week all the boarding pupils excepting the graduating class were sent to their homes, to remain there until the beginning of the next term, when a rented building is to be used. Kanji Hayasaka of the school and all the teachers worked most faithfully during the fire and afterwards. Many friends also gave help. The students of the Tohoku Gakuin worked very hard, as did also the students

of other schools. The large force of police that were ordered to the fire did all in their power to keep back the crowds and to prevent disorder and theft. The wide-spread manifestation of sympathy by the people of the city was most remarkable. In large numbers, of all classes and stations, they came to express sympathy and encouragement and to offer help. Many gifts of money, food, clothing, etc.,were sent in to the girls as well as to the missionaries.

We realize that our work has met with a great calamity. A building which was made possible by the sacred offerings of many hands, which it took more than a year to erect, and around which during the fourteen years of its existence gathered many precious memories, has been laid in ashes in an hour. What the future has in store for us we do not know. But we pray and have faith to believe that God in his wisdom and might will turn this visitation into good. May He give us grace to follow his leadings in faithfulness and hope.

Yours in Christ,
D.B. SCHNEDER
SADIE LEA WEIDNER

Sendai, Japan.

すなわちベーツロミュー は、「合衆国改革派教会」外国伝道局が必要とすることは、教会員が宮城女学校の寄宿舎建設のために欣然と協力することであり、又、教会は、天に召されたクリスティン・ファウスト夫人を記念して宮城女学校の校舎建設のために必ず協力できると確信する旨を述べている。ここでベーツロミューが名をあげているクリスティン・ファウスト夫人とは、のちに宮城女学校第六代校長となるアーレン・クライン・ファウスト（Allen Klein Faust）夫人、すなわちクリスティン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト（Christine Elizabeth Vollmer Faust）のことである。彼女は、東北学院教授として仙台へ赴任することになったアーレン・K・ファウストと共に一九〇〇年九月二日に来日、直ちに仙台に着任してから、宮城女学校のために特に意を用いて活躍したが、翌一九

○一年七月十一日、病気のため来日後僅か十ヶ月にして天に召された。少女時代から外国伝道に献身する決心をしていた彼女が、念願叶って仙台に着任、日本の少女達のために活動しはじめて一年も経たぬうちに、志半ばにして日本派遣宣教師最初の召天者となった。外国伝道局は、彼女の尊い意志を尊重すべく、彼女を記念して宮城女学校の校舎建設を行なう方針を決定し、全教会員に協力を訴えたのである。(註二七)

ところで、シュネーダー並びにワイドナー連名の報告書によると、当時は日照りが長く続き、井戸の水位も低くなっていて水不足のため、洗濯や入浴も充分に出来ぬ状況であった。三月八日の土曜日は数日ぶりでの入浴日であったが、校舎の水が出ぬため、校舎から離れた宣教師館の井戸から水を運ばざるを得なかった。校舎管理人と人力車夫の二人が午前六時頃から浴槽に水を運び、管理人が午前七時頃に風呂の竈(かまど)に火を入れた。正午すぎ、二人がそれぞれ晝食のために浴室を離れてから間もない午後零時五十分頃、宣教師館にいたシュネーダーが校舎と続いている浴室の屋根から焔が出ていることに気付き、シュネーダー夫人とファウストとが、警報をならし、執務中であったワイドナーやポーウェルも現場に駆けつけた。日照りで乾燥しきっていた校舎は火のまわりが早く、消火のしようもなく、重要書類やオルガンや図書の他に若干の校具を運び出しただけで、消防夫の手押し消防ポンプによる消火活動も全く効果がなかった。したがって消防夫達は婦人宣教師館並びに宣教師館（いわゆるシュネーダー館）などへの類焼を防ぐことに全力を傾けるだけであった。婦人宣教師館は校舎の南側に建っており、シュネーダー館は北側に建っていたが、当日は南風が吹いていたのでシュネーダー館には何度か火が移って燃えあがろうとしたが消しとめることが出来た。婦人宣教師館も外部が大分焦げてしまった。消防夫、警察官、教職員生徒の活動、東北学院の生徒有志をはじめ学外の多くの方々の好意的応援によって延焼を防ぐことは出来たが、卒業生や在校生一同から我が家のように親しまれた校舎並びに倉庫が一時間たらずの間に全焼してしまい、崩れのこった煙突の残骸が三本、焼け跡に空しく立っているだけであった。

火災の原因としては三つの可能性が考えられる。当時、風呂は薪で焚いていたが、第一は浴槽の下の竈（かまど）に欠陥があり、かまどの亀裂から火が浴槽周囲の木造部分に燃えうつったこと、第二は焚口の傍に置いてある火消し壺の蓋が完全になされず、壺内で燃えさしが火力を得て壺周辺の薪に点火したこと、第三はかまどの焚口からはねとんだ火の粉が焚口附近のたきつけか焚口前に敷いてある腰掛けがわりの炭俵に燃えうつったことであってそれらの何れかが大火災の原因になったのであろうということになった。出火当時、校舎内には四十名の生徒と教員三名並びに舎監が居ったが、数名の生徒と教員二名とが所持品の大半を焼失してしまった。しかし幸いにも全員生命に異常はなかった。その晩、生徒十三名は婦人宣教師館で、残りの生徒はバイブルハウスで一夜をすごすこととし、午後九時に一同で祈禱会を開き、全員無事であったことを感謝したのち床についた。翌三月九日の日曜日、生徒達は平常のごとく教会で日曜学校の教師として奉仕し、聖日礼拝に出席したのち、全員の無事を感謝する会合を開いた。授業を再開できるような仮校舎を新学年開始の四月九日までに準備することとし、卒業学年以外の寄宿舎生徒全員に四月八日までそれぞれの家庭で待機させることにした。幹事の早坂哲郎並びに教職員一同は火災の際の消火活動・救援活動においても、鎮火後の諸活動においても非常に誠実に活躍した。又、東北学院並びにその他の学校の生徒達及び警察官が消火活動の最中に適切な活躍をし、鎮火後、多数の仙台市民が見舞い・手伝い・激励等のために来校して、見舞金・食糧・衣類などが沢山届けられた。シュネーダー、ワイドナーの報告文は、仙台市民が宮城女学校に寄せる温かい心に衷心より感謝し、今後、どのような将来が宮城女学校のために備えられるかは分らないが、全知全能の神はこの災害を必ず祝福にかえてくださることを信じて、祈りつつ前進する旨の決意を表明して結ばれている。

片平丁の仮校舎

寄宿舎生徒全員を帰宅させてから、早坂哲郎幹事以下全教職員一同で仙台市内を東奔西走して仮校舎に適する建物を探しまわった結果、一週間足らずの間に、最も望ましいものとして片平

丁六十九番地にある寺木定芳氏所有の建物を借りうけることが出来た。ここに至るまでのことについてポーウェル(Lucy Margaret Powell)は外国伝道局宛書翰の中で、「火災後の混乱状態から、適当な建物を借り受けて仮校舎とすることが出来るようになるまでの間、教職員並びに誠実な幹事早坂哲郎が好意をもって協力し活躍したことは筆舌につくし得ぬ素晴らしいものであった。」と報告している。(註二八)

在日宣教師社団は三月十二日並びに十九日の二回にわたり特別会議を開催し、宮城女学校の教育に関する緊急対応策並びに将来的展望に立つ再建策を審議し、その結果、三月十九日に前述の如くシュネーダー並びにワイドナー連名の「火災報告書」が送られた。この報告書とは別に、ワイドナーは同日もう一通の書翰(註二九)をしたためてバーソロミューに送り、特別会議の結果、在日宣教師社団が決定した内容を報告している。それによると、一、外国伝道局は、在日宣教師社団が宮城女学校の校舎と寄宿舎との二棟の建築を行なうことを承認するよう訴え、承認を得ること、二、仮校舎とする建物を借り受けることが出来たが、これは元来校舎には不適当な建物であるので、冬を迎えるまでにはこの建物を離れるようにしたいこと、三、最優先に着手すべきことは、日本式様式の寄宿舎専用の建物の建築であり、同時に校舎の建築をも検討し出来るだけ早急に着工すること、四、在日宣教師全員の経験と判断によれば、日本式様式の大きな寄宿舎の建築が生徒達全員にとって最も望ましい計画であり、これに配するに室内の暖房が充分な西洋式様式の大きな校舎の建築を行なうべきであること、五、これら緊急的並びに将来的問題を解決するためには従来の校地よりも遙かに広い校地が必要であることなどが審議されたのである。同じ頃キャザリン・パイファー(Catherine Barbara Pifer)が外国伝道局へ送った書翰中に、特別会議で審議された事項として、一、従来の校地の西側に隣接する土地で北目町通りの北側に位置する三ヵ所の土地を購入すること、二、校舎はクリスティン・ファウスト夫人記念校舎としてアメリカ式に建築し、寄宿舎は日本人向きに縁側を沢山有する日本式建築とすること、しかも、日本式建築の方が建築費も少なく済むこと、三、婦人宣教師館の増築を行ない四人の婦人宣

教師の住居にふさわしくすることなどが記されている。以上のような仙台からの諸報告を受けた外国伝道局は、四月二十四日(木)、ハリスバーグで緊急特別会議を開催し、種々審議を行なった結果の決定を前記の如く五月一日号の「メッセンジャー」紙[註三〇]で全教会員に訴えた他、同年五月二十日からメリーランド州ボルチモアで開催された「合衆国改革派教会」総会で報告し、全教会代表者に訴えた[註三一]。

一方、仮校舎として借り受けた片平丁六十九番地の建物は、二棟の日本家屋からなっていた。奥の一棟を寄宿舎、手前の一棟を校舎とすることにし、この二棟を連絡するための幅広い廊下を急造し、又、寄宿舎棟のそばにある土蔵を音楽室にあてることとしてピアノを配置した。これらはすべて暫らく使われないでいたところであったので、様々の応急補修を行ない、教員室・教室・寄宿舎の目的に使用できるようにした。ボーウェルは次のように報告している[註三二]。「私達が借りた建物は使用するには不完全な状態でありましたので、家主が少し修理を行ない、畳を敷いてくれました。大きな部屋には火事の時に運び出して類焼をまぬがれた畳を敷きました。寄宿舎には、火事の危険を避けるために配線をして電燈をつけました。外国人教員の部屋にはストーブを置く場所がありますが、その他の部屋はすべて火鉢で煖をとることになります。寄宿舎にした部分はかなり快適そうですが広さが不充分です。礼拝堂や教室として使用する部分は、もともと数年前までは県知事の厩舎(馬小屋)だったところで、粗末で天井が低く薄暗い建物です。礼拝堂にした部屋は一番広いと言っても生徒全員を収容することが出来ません。教室にした部屋は、一室が六フィート(約一・八メートル)四方で、他はこれより少し広いだけです。それ故、広い教室にするためには二、三室を続けなければならないほどなのですが、それが出来ないのです。これらの部屋の光は(電燈がないので)、窓の障子ごしに入る外の光だけなのです。」如何に使用勝手の悪い仮校舎であったかを想像できる。このような仮校舎ではあっても授業を開始しなければならない。出来る限りの補修を行ない、生徒を迎える準備を済ませて、四月八日、ワイドナーは東三番丁の婦人宣教師館から片平丁へ移り住んだ。そしてその日レンベルガーに

宛ててしたためた書翰[註三三]中に彼女は「今、明日の授業開始に備えて準備中です。今日、私は仮校舎内に準備した二つの外国人室に引越して来ました。しかし、食事の時には東三番丁の宣教師館に行かなければなりません。」と報告している。「宮城女学校五十周年史」執筆者が「片平丁時代」と命名し、「僅か二ヶ年であったけれども我が校の歴史に於て一つの時代を劃するものとして此の片平丁時代は記憶されるべきである。それは片平丁時代に於ける出来事ではなくして片平丁時代が宮城女学校五十年の前期と後期とを分つ意味に於て重要なのである。」と説明しているその片平丁時代の授業が明日から開始されるのである。ワイドナーはどのような思いの裡にその夜を過ごしたのであろうか。翌、四月九日、ワイドナーはバーソロミューとレンベルガーとにそれぞれ書翰をしたためているが、バーソロミューに宛てた書翰[註三四]の中には

"School opened this morning with appropriate exercises, in the quarters which we have rented for a temporary shift. We are so happy to have our dear girls back again, and to see new faces that I hope will soon be brighter because while in School the girls will learn to know Christ as their personal Savior.

We are indeed very much *overcrowded*, but are trying to make the best of circumstances for the time being.

Already *forty* new girls have entered and there are prospects of more.

Our Commencement had to be postponed until the 26th of this month, on which date it will be held in the Chapel of the Tohoku Gakuin."

とあり、又、レンベルガーに宛てた書翰[註三五]の中には

"School opened this morning with appropriate exercises. I wish you might have been present. I am sure you would have

enjoyed the sight, so different from what we have been accustomed to. All the girls and teachers sat on the mats on the floor. And will you believe it, there are forty new girls, and prospect for more. I am so happy to have the dear girls back again and to see the new faces that I hope will soon be brighter because Christ has come into their lives.

It seems the more trials I have to meet, the more I enjoy my work among these girls, and may He grant me grace and wisdom for it all."

と記されている。第十七年度の始業の日に、帰宅していた生徒全員並びに教職員全員が出校して特別礼拝を行なって授業を再開したのであるが、ワイドナーが驚き且つ喜んだのは、校舎を全焼してしまい、仮校舎で授業を開始しようとしている宮城女学校にその日、四十名が新たに入学願いを申出て来たことである。翌日以後も更に願い出て来る者があり、最終的には入学希望者数が八十名以上になった。宮城女学校の教育に対する評価と期待が非常に大きくなって来ていたのである。八十余名の入学希望者の中から選考して四十九名だけに入学を許可した。その内訳は通学生三十九名、寄宿舎生十名であった。(註二八)このようにして第十七年度当初の生徒数は表六の通りとなった。



第十回卒業生（一名欠席）

第十回卒業式

当初の予定では、一九〇二年三月二十九日に挙行されることになっていた第十回卒業学年の卒業式は、火災のために延期されていたが、東北学院からの好意的な申し出を感謝して受け、一九〇二年四月二十六日に東北学院の講堂で行なわれることになった。第十回卒業学年の生徒は八名であって、彼女らは卒業式にそなえて諸準備を進めていたのであるが、

表六

本科 Academic Course		
5年生	Senior	3名
4年生	Junior	5名
3年生	Middle	9名
2年生	Sophomore	25名
1年生	Freshman	46名
計		88名
予科（1年～3年）		
	Preparatory Course	15名
特別聖書科		
	Postgraduate Course	7名

火災のために卒業式が延期になってしまい、卒業式の日を鶴首していた。火災後、在校生全員がそれぞれの家庭で授業再開の日を待っていた期間中も、卒業学年の八名は帰宅せず婦人宣教師館やバイブルハウスで卒業式にそなえて準備を続けていた。この学年の学年標語は“We Climb tho' Rocks be Rugged”であり、学年カラーはピンク、ブルー、ホワイトの三色であり、学年フラワーは野薔薇（ワイルド・ローズ）であった。前に紹介した第十回卒業生川添なみの回顧文にも記されているように、ルーシー・マーガレット・ポーウェルが、卒業学年の生徒のために学年標語を主題にして詩をつくった。卒業を目前にして愛する学び舎が全焼するという災害に遭遇した八名にとってこの詩は希望と勇気を与える記念すべき詩となった。しかもこの詩は、彼女らの三年先輩として共に寄宿舎生活をし、卒業と同時に母校にのこって教員として彼女らに接した第七回卒業生小泉はるによって和訳されて、卒業式当日のプログラムにポーウェルの英詩と共に印刷されたのである。

彼女らにとっては生涯忘れることの出来ない学年標語となった。又、小泉はるも、一八九九年六月、宮城女学校を卒業するや、七月から教壇に立ったが、第十回卒業生の卒業式が行なわれる筈であった一九〇二年三月末日で宮城女学校を退職し、更に研鑽をつむため上京することにしていたので、ポーウェルの詩の和訳は小泉はる自身にとっても新しい門出への記念すべき詩の訳業であったのである。なお、この小泉はるはこのあと東京で更に語学力に磨きをかけると同時に広範な知識を身につけ、一九〇五（明治三十八）年報知新聞社に入社し、婦人記者として第一線で目ざましい活躍をした磯村はる（春子）なのである。

We Climb tho' Rocks be Rugged.

All ready they stand for a mountain climb,
For the climb of the mountain of life ;
With its rugged rocks, and slippery steeps,
With its chasms so wide, an fearful deeps,
And the torrents so wild and so rife.

All girded about with His truth and grace ;
With the sandals of peace are they shod ;
With the staff of righteousness in hand,
They begin to climb, this earnest band,
With their guide and their leader, our God.

They know that ahead many dangers hang,
That the way is so rough and so steep,
That the storms are roaring far above,
But above the clouds are light and love
And a life in which none shall e'er weep.

Yet they would not pause on the plains below,
But would haste to the heights above,
And the trials brave along the way ;
And the dark'ning clouds which mar the day
Shall be driven away by His love.

And as they have scaled ev'ry rugged rock,
To each climber new strength is given ;
They will stronger be in truth and grace,
And filling aright their chosen place,
Live better for Christ and for heaven.

And so to your place in the ranks of life,
A warm welcome, dear maidens, to you.
May your lives be faithful, good and free,
May you try each day His child to be,
Thus a work for the Christ you'll do.

May you, in the climb of the rugged road,
Help others along the steep way ;
When the summit high is reached at last,
When all tears and toil and pain are past,
May you hear the kind Father then say

The words that he spake many years ago
To the ones who were true to the end,
"The great joy of Christ thy Lord be thine,
For as thou hast faithful been to mine,
My trusted one on my friend."

Lucy Margaret Powell

登山

ルセー・マーガレット・パウイル，小泉春子譯

一　そこひもしらぬふちにそひ
流もはやき瀬にのぞみ
岩か根たかくそびゆなる
浮世の山路のぼらんと
こゝろさだめてもろともに
ふもとにたてる小女あり

二　あめにまします大神を
しるべとたのむ一群は
誠のきぬを身にまとひ
正義の杖を手にとりて
平和の靴を足にはき
いそしみつれて立出ぬ

三　けはしきいはの山路をも
吹まく嶺の嵐をも
ものともせずで久方の
遙けき空に明らけく
かゞやく愛のみ光と
たのしき國を仰ぎつゝ

四　安きふもとにためらはで
行へもとほく白雪の
かゝる高根をこゝろざし
のほりてゆかば天つ日の
かげ立かくすうき雲も
めぐみの風にはれぬべし

五　けはしき山路岩かねを
よぢて昇らん其時は
めぐみの神のみもとより
くしき力を賜はりて
此世の中もあまつくに
さきはひ多く過すべし

六　さらば浮世のなりはひに
いまや向はん小女等よ
日毎〳〵になすわざも
心つくしてつとめなば

み神の兒らと呼はれて
あまつ栄もあらはれん

七　あやうきみちをたどるにも
かたみにたすけいそしまば
世のうきこともくるしみも
あまつ光に消ゆるとき
天なる父はよろこびて
迎へ給はん小女等を

八　誠のみちを一すぢに
まもりてきよく仕へてし
ひじりにかたり給ひけり
『たのめる者よ我友よ
かしこき君の悦びの
また汝が身にもあれかしと』

片平丁の仮校舎で新しい学年の歩みを開始して数日後、宮城女学校第十回卒業生八名の卒業式の案内状が「合衆国改革派教会」外国伝道局長キャレンダーをはじめとし、各方面に発送された。大きな災害に遭遇して校舎を全焼してしまった宮城女学校が、兄弟姉妹校である東北学院の好意によって、東北学院講堂で挙行することになった卒業式である。その文面は別掲のごとくで

Class Motto :
We Climb tho' Rocks be Rugged.
Class Flower :
Wild Rose.
Class Colors :
Pink, Blue and White.

拝啓來ル二十六日午后三時ヨリ當市
南町通私立東北學院講堂ニ於テ當校
第十回卒業證書授與式執行致候間御
來臨被成下度此段御案内申上候敬具
明治三十五年四月十五日
仙臺市片平町六十九番地
私立宮城女學校長セーデー・リー・ワイドナー
殿

あった。

卒業式当日、卒業生八名の中の一名、上遠野たつのは病気のため出席できなかったが、災害でうけた打撃にうちかって使命感に燃えて新しい第一歩を踏み出そうとする卒業生を祝福し激励しようと多数の来賓が式場に姿を見せた。八名の中、二名は母校にのこって教員となり、六名もバイブルウーマンとなって活躍することになった。

卒業式を無事に済ませ、又、新学年度の歩みも軌道に乗って間もない五月上旬、緊急裡に多忙な毎日を送り続けて来たワイドナーが健康を害してしまい、遂に片平丁の仮校舎の外国人教師室から東三番丁の婦人宣教師館へ戻って当分静養することになった。ズーフル校長帰国中に校長代理として重要任務を代行しつつ、校舎全焼後の緊急事態を乗り切るために心身共に疲労したためであった。(註三七) 再建のための計画をも検討しつつ、毎週十二時間の授業（聖書、英語）を行ない、市内数ヶ所の日曜学校や教会並びに学校の祈禱会をも担当していたので、休息を充分にとる時間的余裕が全くなかった。彼女は婦人宣教師館で静養に専念するようになって間もなく外国伝道局長バーソロミューに宛てた書翰で、(註三八)「近々中にズーフル校長が仙台に戻って来られることを知り、とてもうれしく思います。こんなに大勢の新入生をも迎えて授業が開始されているのをご覧になって、きっと喜んでくださるでしょう。」と記している。校長代理としての責務遂行に専念したワイドナーの心中をうかがうことが出来る。慌しい学年末、学年始を切りぬけて第一学期が終りに近づいた六月二十五日、静養中のワイドナーに代ってボーウェルが外国伝道局へ前年度、すな

表八

本科 Academic Course		
5年生	Senior	8名
4年生	Junior	3名
3年生	Middle	5名
2年生	Sophomore	10名
1年生	Freshman	27名
計		53名
予科（1年～3年）	Preparatory Course	13名
特別聖書科	Postgraduate Course	7名

わち一九〇一年度の年次報告書を送っている。それによると、年度末の在籍生徒は表八の通りである。

特記すべきこととして、キャザリン・パイファーの着任、十一月に開催された文学会大会(Literary Anniversary)が極めて盛会で仙台市民にも好評であったことが記されている。火災に関する概要、仮校舎の状況などを記したあと一九〇二年度の現況にもふれ、片平丁仮校舎における授業は、早坂幹事、舎監の他に日本人教員十一名(内、クリスチャン教員六名)及び寄宿舎居住指導教員(tutor)六名(全員クリスチャン)の献身的活躍によって順調に進められている事、卒業生で非常に優秀な教員であった小泉はるが上京して勉学を続けるため三月で退職した事、バイブルウーマンであった第九回卒業生中村きよのを四月から教員として迎えた事、英語科教員中村長之助が渡米のため今月退職する事なども記されている。更に、宮城女学校は三つの点、すなわちキリスト教教育、英語教育並びに音楽教育において特に顕著な教育成果をあげていることにふれ、去る四月の入学式において早坂哲郎幹事は新入学生に対して、宮城女学校の教育目的は、この学校に学ぶ生徒がクリスチャンになって欲しいと願いつつ教育を行なうことであるということを、新入学生の皆さんが理解するよう学校当局は期待していると話したことが記され、ワイドナーの健康も回復しつつあるので安心していると結んでいる。校長が帰国中であり、校長代理が静養中のため若くして重要任務を遂行せざるをえなかったボーウェルは、さぞかし緊張の毎日を送っていたのであろう。ズーフルは八月九日にサンフランシスコを発ちホノルル経由で八月二十六日に横浜に着いた。

復興計画

ところでこれより先、前述のごとく一九〇二年五月二十日から、メリーランド州ボルチモアにおいて「合衆国改革派教会」総会が開催された。所属各教会の代表者が集ったこの総会で、外国伝道局総幹事バーソロミューは、日本における伝道状況を報告し、全教会の協力を訴えた(註二九)。先ず仙台の二つの学校の目的について、東北学院は日本人牧師の養成を目的とする学校であり、宮城女学校は卒業生がクリスチャン婦人となり、あるいは婦人伝道者となることを目的としている学校であると述べた後、東北学院において一九〇一年に押川方義学院

長が辞任してD・B・シュネーダーが第二代学院長に就任したこと、宮城女学校においては一九〇二年三月八日に火災で校舎が全焼したことにふれ、特に宮城女学校の火災に関しては詳細な説明を行なった。パーソロミューの説明の中から宮城女学校に関する部分だけをとりあげて次に紹介する。宮城女学校では仮校舎で授業を再開したが、生徒並びに教職員の健康にとって好ましくない仮校舎での教育を出来るだけ短期間で切りあげたい。一九〇三年九月までには新寄宿舎を完成し全員が移ることが出来るようにしたい。各教会の教会員は仙台の少女達のために新しい責任を感じて是非立ちあがって欲しい。婦人外国伝道会がこれまで宮城女学校運営費を献金し続けて来たことに深甚の謝意を表すると同時に、宮城女学校の校舎再建のためにも千ドルが必要である。長い間、キリスト教教育に対して好意を示さなかった日本の文部省が、最近は寛大にして友好的な態度をとるようになって来たので、キリスト教主義学校が自由に教育活動を行なうことが出来るようになって来た。在日宣教師社団からの要請によると、従来の校地の隣接地を購入して校舎と寄宿舎とを別棟として建築し、婦人宣教師館を増築したいという計画がある。したがって宮城女学校のために今後二年間で土地購入並びに建築費として一万五千ドルが必要である。日本の少女達の教育に献身すべく仙台に赴任して活躍していたが、一年足らずの活動で天に召されたクリスティーン・E・ファウスト夫人を記念して、「宮城女学校クリスティーン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト記念資金」を創設して欲しいことなどが述べられた。丁度帰国中であったズーフル校長やモール夫妻も出席していて補助説明を行なった。総会としては、事情を諒解し、在日宣教師社団が外国伝道局へ訴えていた内容を承認したのである。同総会議事録の中には次のように記録されている。(註四〇)

Item 2. *Resolved*, That this Synod recognizes the great loss sustained in the work of the Japan Mission by the death of the

wife of Missionary A. K. Faust, Christine Elizabeth Vollmer Faust; that her brief services in this noble cause were highly appreciated by the Church at home, her fellow-laborers on the field and the citizens of Sendai with whom she came in contact; that we bow to the dispensations of providence, in the same faith in which she lived and died; and that the Stated Clerk be instructed to convey the sympathy of this body to the bereaved husband.

Item 6. *Resolved*, That this Synod approves of the action of the Board for the immediate rebuilding of the Girls' School at Sendai; the buildings to consist of a recitation hall, to be known as a memorial to Christine Elizabeth Faust, and Dormitories in Japanese style, unless the Board would find the plan inexpedient; that the Board with its secretaries, take steps for the raising of the necessary funds; and that the Classes be urged to present the pressing need of this cause to the people through the pastors and elders.



片平丁時代のズーフル

片平丁時代

久しぶりで仙台に戻って来たズーフル校長は、校舎の焼け跡の様子を眺めて悲しみ、八十名以上の入学希望者の中、約三十名の者が入学を認められなかったことを聞いて悲しんだ。一日も早く寄宿舎を、そして校舎を完成しなければならないと決意を新たにした。バーソロミュー(註四)へ宛てたズーフルの書翰中に次のような文面がある。

「礼拝堂は狭く、生徒達は缶詰の鰯のようにぎっしりすし詰めになって坐っています。中に入ることが出来ないので、入口のところで背のびをしている生徒もいます。椅子も足りないので、始業式の時には壇上にあがれない教員もありました。生徒は全員畳に坐るのです。教室にしている部屋は鶏小屋のようです。一つ一つの教室に六名、九名、十名、十二名各位の生徒と教員が詰めこまれて

いる感じです。襖（paper doors）で各教室が区切られているのです。ワイドナーは段々元気になって来ています。土地は一坪五円とのことなので、もっと安く買える場所にした方が良いという意見もありますが、従来の校地の隣接地を入手すべきです。宮城女学校のためにということでスワンダー博士夫妻が出してくださった献金で購めた土地を離れるべきではないと私は考えるからです。」

「仮校舎は辺鄙な場所にあるので、帰校するために生徒が夜おそく仙台に着いた時のことを考えると心配です。私達も夕食のために東三番丁の婦人宣教師館へ行くのですが、途中が真暗闇なので人力車で往復しています。従来の校地は駅や教会や繁華街に近く、急病人があった場合にも安心な場所です。やはり従来の校地の隣接地を購入するのが最善であると思います。数百ドル多く支払うことになったとしても環境が良く安全で便利な土地を入手することが最も経済的な結果になります。東三番丁に出来る校舎に一日も早く移りたいものです。母国アメリカの教会の金持の婦人の心を神が開いてくださって、宮城女学校の教育のために理解と協力を示すようにしてくだされば良いと考えています。」

このように、片平丁の仮校舎は採光、暖房、その他あらゆる面で不自由を経験しなければならない状態で、教職員こぞって一日も早く、新校舎や寄宿舎を建築しなければならないと、そのための検討を続けていたが、この仮校舎で過した生徒達は、不便を克服して充実した毎日を送っていた。片平丁の仮校舎で卒業式を経験した卒業生の一人である第十一回卒業生谷津やすが三十五年後に当時を思いおこして記した回顧記の一部分を次に紹介する。

「忘れもせぬ私共が四年の三学期、即ち三月八日のことで御座いました。不幸にも母校が全焼の厄に逢ひその為めに私共在校生は學校當局より臨時歸郷を命ぜられて悲壮な想で郷里へ歸りました。

然し學校當局諸先生の一方ならぬ御盡力により、僅か一ヶ月後の新學期から假校舎を片平町の舊知事官邸に設けるとの御通知を受け

私共は喜び勇んで再び輝かしい復興の日を思ひ浮かべつゝ歸校したのでありました。

その假校舎と言ふのは廣瀬川の流を隔てゝ向山が一目に見られる處でありました。建物は道路より少し高く石垣を積んだ處にありました。そのうちの一棟は校舎に當て、奥にある他の一棟は寄宿舎に當たのでした。そして此の二棟の間を幅六間長さ卅間位の廊下を作って連絡したのでした。狹いながらも十分に勉強が出來たのであります。私は五年級の課程を此處で樂しく終へたのであります。一寸寄宿舎の事を述べて見ますと、それは日本家ではありましたが、非常に住み心地がよかったので皆樂しく日々の生活を送る事が出來たのでありました。祈禱会の時は私の室が大廣間であつた為に何時も祈りの室に使はれたもので御座いました。

その時分の舎監淺井先生には、特に私共のクラスをよく御指導下されて將來家庭の人になっても事足るやうにと料理、衛生育児など種々微細な點に至るまで御導き下さいました。

當時の校長ズーフル先生を始め、諸先生方は良く協力せられて私共をより立派な幸福な者になさん為めにと御骨折り下さいましたことは感謝で御座います。ある時のことでした、校長が山に登られたお土産に紅葉を一枝折って歸られ、それを淺井先生へお上げになられました處が、先生早速水莖のあとお麗はしく「老が身をなぐさめんとて贈らるゝ紅き心は色に見えけり」と御詠みになって御禮に上げられました。其を或先生が非常によく御通譯なされました處校長も大變に喜びの御様子で御座いました。實に美はしき親切の情愛溢るゝ事と深く感銘致し、今に忘れられない深い想出で御座います。また寄宿舎ではその頃名物だった余興なども致して笑つたもので御座います。

又ずつと奥の土蔵が音楽の教室になつて居りましたが、ある時そこで音楽会を致しました。狹い處へ諸先生と生徒がぎつしり集りました。その時はとても上々出來の音楽会だったので當時の印象は中々忘れられない想出の一つで御座います。その時の音楽教師でありました持館先生は天才的音楽者で御座いまして、實に何でもよく彈かれ、又實によい御聲で歌はれたもので御座いました。御指導を受ける私共も常に愉快で生々とした氣持で學んだもので御座いました。

上級生は中々忙はしいもので卒業式に着るべきヨクを私共は中川先生の御指導の下に一生懸命縫ひました。又殘りの學課もお晝休などに御教へ下さいました。かく諸先生方から教へいつくしまれ、又下級の方々と心から親しくして一大家族の如き假校舎の一年間もあはたゞしく過ぎ去り、いよ〳〵私共の卒業の日となりました。

そこで私共は一体何處で卒業式をして頂くのであろうと心ひそかに案じて居りました處、毎日〳〵幾度となく通りました廊下が式場となったのでありました。即ち中央に疊を一尺位高く積み重ね、講壇とされました。そうして右の方にピアノを置き、前方は來賓席、後方は生徒席で、疊を重ねた處の両側が職員席だったと思ひます。左右には紅白の幕を張りましたので大變奇麗で御座いました。

以上の如く假校舎でしかも廊下の卒業式場ではありましたが、然し私共卒業するものに取っては非常な喜びで御座いました。私共卒業する者は全部で三名で御座いましたので、前年の卒業式の如く大勢ではありましたが、それでも三人が交る〳〵立ちまして或は歓迎の辭を述べ、或は英文朗讀又告別の辞を述べるなど、それにピアノ独彈が二回連彈が二回といふプログラムで中々にぎやかなもので御座いました。これこそ學校歴史に於て最も變った記念すべき卒業式であったと思ひます。

諺に十年一昔とか申しますが、私共のが十一回の卒業式で、言はゞ學校の非常時に擧行されたものでしたが、それでも舊校舎と今の盛んな新校舎とをつなぐ為めには大切な卒業式であったと思はれます。廊下で擧げられた卒業式と言へば極めてお粗末なやうにも感じられますが、學校の歴史に於ては無くならぬ一頁であり、立派な役割を務めたものと思はれるので御座います。

謹みて益々諸先生方の御健康と學校の隆盛を衷心より祈ってやまない次第で御座います。」

（第十一回卒業生　谷津　やす）

一九〇二年十二月、従来の校地（東三番丁百六十二～百六十九番地）の西側に隣接して東二番丁に面する土地（東二番丁百三十二～百四十番地）の中、丁度中央にあたる部分約千四百坪（東二番丁百三十五～百三十八番地）をアメリカ・ドルで二千八百八十四ドル三十一セントで入手することができた。(註四二) この新しく入手した土地に先ず寄宿舎を建造すると同時に、火災で外壁や屋根などが損傷した婦人宣教師館の補修並びに増築工事をも行ないそれらすべてを一九〇三年（明治三十六）年九月までに完了することにした。(註四三) ズーフル、ワイドナー、ボーウェルらは早坂哲郎幹事ほか日本人教職員とも相談しつつ、寄宿舎の設計案や婦人宣教師館の補修改装増築案を検討し、一九〇三年二月上旬には寄宿舎の設計図が出来上った。(註四四) それによると寄宿舎生室は五名部屋七室、四名部屋十三室で八十七名を収容することとし、教員室、舎監室の他に病人室二室も準備された。この寄宿舎を至急完成させて、新校舎が完成するまでは、寄宿舎の一階と婦人宣教師館を教室として授業を行なうこととし、一日も早く片平丁の仮校舎から引きあげる方針を決定した。この間、ワイドナーは、何度か開催された在日宣教師社団で審議された宮城女学校の

寄宿舎並びに校舎に関する設計図案についての説明と、宮城女学校の建築のためにアメリカの教会員が献金を寄せられるようにとの訴えとを書翰にしてパーソロミューへ送り、「合衆国改革派教会」の機関紙「メッセンジャー」「クリスチャン・ワールド」「ウーマンズジャーナル」「リフォームドチャーチ・レコード」並びに「レフォルミールテ・キルヘンツァイトゥング」に是非掲載するようにと要望している。このようにして着工された寄宿舎の建築並びに婦人宣教師館の補修改装増築工事は順調に進捗して九月までには完成するのである。

片平丁仮校舎で最終学年を終了した第十一回卒業生三名の卒業式は一九〇三年三月二十八日（土）に仮校舎で行なわれた。その様子は既に紹介した谷津やすの回顧記に詳細が記されているが、仮校舎二棟を連結する幅広い廊下を式場としたのである。卒業生は勿論、教職員、父兄、そして来賓にとっても感無量の記念すべき卒業式となった。いわゆる片平丁時代の終了で、このような経験を経て宮城女学校は新しい歩みを開始したのである。



早坂哲郎

早坂哲郎

さてここで、幹事早坂哲郎についてふれておく。早坂哲郎は一八六五（慶応元）年、宮城県志田郡三本木の生れで、一八八四（明治十七）年に宮城師範学校高等師範学科卒業と同時に名取郡閖上濱小学校（現閖上小学校）の校長に就任、更に宮城県尋常師範学校で教鞭をとった後、一八八八（明治二十一）年四月、東京高等師範学校に入学した。入学して間もない同年七月、県当局の要請もあって、同校を退学し、宮城県知事松平正直の推輓で宮城女学校に数学科の教員として就任した。宮城女学校というキリスト教主義学校で教鞭をとることになった早坂は、仙台教会で求道生活を続けていたが、かねてより私淑していたJ・P・モールが一八八九（明治二十二）年夏、東北学院神学部で教会史を講ずるため仙台に居を構えた。そこで早坂は直接その指導を受けていたが、同年十一月、モールより受洗するに至り、キリスト教女子教育に生涯を献げる決意を固めた。一八九九（明治三十二）年、宮城女学校幹事に就任するや教育、渉外、運営各分野

において校長をよく輔佐し、翌一九〇〇（明治三十三）年には特別聖書科（一年制聖書専攻科）の設置を実現し、宮城女学校が将来各専攻科を設置して専門学校レベルになる礎石を据えた。そのような時、かねてより早坂の人物と識見とを見込んでいた第三代仙台市長里見良顕は、早坂に対して仙台市助役への就任を熱心に要請した。これに対して早坂は受洗当時の決意を翻すことはなく宮城女学校を離れようとしなかった。しかし里見市長の懇請黙し難く、宮城女学校幹事現任のままで仙台市助役に就任するという異例の扱いを受けて市長を助け、仙台市の教育行政にも関係をもつこととなった。仙台市助役として活躍中の一九〇二年、宮城女学校の校舎全焼という災害が発生したが、早坂の奔走によって片平丁の仮校舎の借受けが可能になり、又、新寄宿舎建築用地の入手も早坂の積極的な折衝によって実現し、宮城女学校の発展のために貢献すること大であった。里見仙台市長退任の一九〇三（明治三十六）年、早坂も仙台市助役を辞任し、以後、宮城女学校の発展に専念することになった。なおこの間、一九〇三年二月、仙台市より問合せのあった教員調査書提出の際、現に仙台市助役である早坂哲郎を調査表に記入することは書類上齟齬をきたすことになるので、仙台市に教員調査書を提出する三月十八日、既に数年前に退職したが学校からの届書未提出であった教員八名（ロールボー、加藤與五郎、布施淡、宮本ムラ、中山タケ、長谷川直、小泉ハル、菊地トラ）の他に早坂哲郎をも連記した九名の退職届書が校長ズーフルより田邊輝実宮城県知事に宛てて提出された。又、仙台市に提出されたズーフルよりの教員調査書（ズーフル、深田康守、浅井柞、永沼織之充、吉田テル、中川ツルの六名）の宛先は、仙台市長代理仙台市助役早坂哲郎と記されている。早坂が宮城女学校幹事と仙台市助役との両職を専任したための事務処理であった。早坂はその後も歴代のアメリカ人校長を輔佐して一九二〇（大正九）年三月退職まで事実上の校務担当者として宮城女学校の発展に貢献した。なお、一九〇七（明治四十）年、「合衆国改革派教会」の招聘により渡米、約二年間、ハイデルバーグ、コロンビア、イェール、ハーヴァード、シカゴ各大学において研鑽を積み、見聞を広めて帰国した。早坂が滞米中の一九〇八年五月十五日からペンシルヴァニア州ヨーク

で開催された「合衆国改革派教会」総会において外国伝道局総幹事パーソロミューは諸報告の中で、早坂に関して次のように報告している。[註四五]

Mr. Tetsuro Hayasaka, kanji of Miyagi Girls' School, will spend a few years in America. At present he is in Heidelberg University, Tiffin, Ohio, where he is pursuing special studies. For his faithful service of twenty years in connection with our mission, and in order to fit himself for still greater usefulness, the mission and the Board have granted him a two years' leave of absence for study and observation. He has proved himself a loyal worker in our Girls' School. Mr. Hayasaka has also served his city as vice-mayor, and even then while the work in the said office required a great part of his time, he never gave up his position in the school. His work during the trying days following the burning of the Girls' School will never be forgotten. He is the first Japanese worker from our Girls' School to come to America. Dr. Moore says, "He has been a personal friend of mine for the last twenty years, and I claim him as one of my spiritual children."

授業再開の延期

一九〇三年四月を迎え第十八年度が開始される月であるが、ズーフル校長は、片平丁の仮校舎が生徒達にも教員一同にとっても、健康上好ましくないと判断し、東二番丁の新校地に建設中の寄宿舎が完成するまで授業開始を延期することとし、[註四六]四月四日、宮城県知事に次のような開申書を提出し、四月八日に承認を得た。

開申書

當校(ママ)義昨年校舎焼失以来片平丁仮校舎ニ於テ授業致居候處右仮校舎ハ何分ニモ狭隘且ツ採光保温共ニ宣シキヲ得ズ多数生徒ノ健康ヲ障害スルノ恐有之候ニ付止ムヲ得ズ本年本月ヨリ六月マデ第一学期間授業ヲ休止シ新築校舎一部ノ落成ヲ待チ

授業開始致候間此段開申致置候也

明治三十六年四月四日

私立宮城女学校長

レナ・ズァーフル

宮城県知事田辺輝實殿

なお、四月二日にワイドナーがバーソロミューに送った書翰並びに四月三日にズーフルがバーソロミューに送った書翰によれば、仮校舎が非健康的、非衛生的であると判断して使用を中止し、生徒を帰宅帰郷させることとした最大の根拠は「教室というよりは馬小屋といった方が良いかと思われるほど採光状態が悪くて大変うす暗く、そのため生徒達の中には視力低下した者が居る。」と言うことであった。このようにして仮校舎における授業は事実上は三月末日で終了したのである。片平丁時代は従来、一九〇二年四月から、新校舎完成の一九〇四年六月までの約二年間として伝えられて来たが、此の二年間の中、この仮校舎が授業のために用いられたのは一九〇二年四月から一九〇三年三月までの満一年間であった。しかしこの一年間の生活が生徒にも教職員にも極めて貴重な体験であった。一九〇三年六月十八日、ズーフルは外国伝道局へ年次報告書を送っているが、それによると、一九〇三年三月すなわち第十七年度末の在籍生徒数は九十七名で、その中三十二名が、クリスチャンである。又、この報告書の中に仮校舎における文学会大会（Annual Literary Anniversary）の様子が記されている。それは一九〇二年の秋に行なわれたのであるが、礼拝堂も狭く大きな部屋が無いので、寄宿舎棟の各居室の襖を取りはずして広くし、食堂の机をいくつか並べて一段高くした上に毛布を敷いて舞台を作り、その舞台で諸種の催し物が行なわれ教職員も生徒も素晴らしい出来栄えに感激したほどであったが、会場が狭いために誰をも招待することが出来なかったことだけが残念であったという。クリスマス礼拝も同様にして行なわれ、教職員と生徒だけで主のご降誕を祝ったが、宮城女学校のために祈っていてくださる方々が一緒に出席していたように感じたという。

寄宿舎建築工事

婦人宣教師館の補修改装増築工事並びに新校地の寄宿舎建築工事は順調に進んだ。その間に、ズーフルやワイドナーらは旧校地に新築する校舎の設計案を熱心に検討した。特に数年間の教育経験を活かして、生徒達のために最も望ましい校舎にしようと話し合った。このようにして婦人宣教師達が真剣に討議し合ってまとめた結論に基いて立案した設計図案について、在日宣教師社団の会議で審議を行ない、外国伝道局から委譲されている権限内において工事着工に必要な決定を行なおうとした。しかし、何度か開かれた在日宣教師社団の会議において婦人宣教師達の意見と男子宣教師達との意見が一致を見ない問題が色々あり、しかも日本の少女達の教育に実際に専念して来た婦人宣教師の貴重な体験に基く意見が取りあげられないでしまうことが多かった。問題は単に校舎建築に関する事だけにとどまらなかった。ズーフル、ワイドナー並びにポーウェルはそれらの諸問題について冷静に話し合った結果、彼女ら三名が、外国伝道局に宛ててそれぞれ辞任願の書翰を送付するに至った。次にワイドナーの書翰を紹介する。

Sendai, Japan,
June 22, 1903

To the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the U. S.,

My dear Friends:

Realizing that it is impossible for me to continue my work under the present policy for the management of the Girls' School, I hereby submit my resignation as teacher and evangelistic worker in the Girls' School, and ask that it go into effect a year from date.

Respectfully submitted,
Sadie Lea Weidner

宮城女学校の新しい出発に備えて真剣に討議し、希望に燃えて智恵を出し合い、キリスト教女子教育の校舎として神の御光栄をあらわすに最もふさわしい教育を行なう場所とするためには、これこそ最上であると考えて立案し提案した諸事項が理解されず、女子教育に経験の少い者の多数意見が大勢を決定し、その決定に従って進まざるを得ない事が婦人宣伝教師達にとっては不満足であったのである。この問題で疲労した心身を医すために気分転換を考え、彼女らは七月十一日から日光で数日を過し、更に軽井沢で数日を過しつつ静養につとめた。此の間、七月二十日と二十二日にワイドナーは日光から、更に七月二十五日にはズーフル、ワイドナー、ボーウェル三者連名で軽井沢から長文の書翰を外国伝道局へ送って、日本におけるキリスト教女子教育に全身全霊を傾ける彼女らの心構えと諸問題を記し、辞任を決意せざるを得ない理由を説明している。

新校舎の定礎式

この間にも建築工事は進捗し、八月中にほぼ完成し、愈々新寄宿舎で第十八年度の始業式が挙行される日の前日、九月十日（木）午後三時から、新校舎の定礎式が行なわれた。この新校舎は長い間、宮城女学校の生徒、卒業生、教職員一同をはじめ多くの人々によって「第一校舎」という呼び名で愛称されることになる校舎、「クリスティーン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト・メモリアル・ホール」のことである。この校舎は、一九四五（昭和二十）年の仙台空襲で焼失するに至るまで、宮城女学校の文字通り「第一校舎」として重要な存在であり続けるのである。当日の模様を翌日、ボーウェルが詳細に報告した書翰があるが、極めて重要な内容を含んでいるのでここにその全文を紹介する。

Corner-Stone Laying of Christine Faust Memorial Hall.

September 11th, 1903.

Dear Friends:

I am sure you will all be glad to know that on our return from our few weeks of rest during the summer months we were glad to find awaiting us a home for ourselves, and a home for the girls which God has given us, and in the process of construction a school building for the girls—the Christine Faust Memorial Hall—the foundation of which is laid.

On September 10th, at 3 p.m., the corner-stone of this building was laid. A large number of sympathetic friends of our school were present at the impressive ceremony. The workmen on the lot gathered near to watch with interest the ceremony. Our girls were intensely interested in the service, and expressed their intense feeling in songs of praise and thanksgiving to God for His great and wonderful mercy. The significance of the ceremony was explained to those about by Mr. Hashimoto, who has been a staunch friend of the school since it was first organized. Prayers were offered by Miss Zurfluh and our pastor,Rev. Yoshimura.

In the copper box was placed an English and a Japanese Bible, a Japanese hymn book, a copy of the charter of the school, a copy of "In Memoriam" in honor of Mrs. Faust, the latest Church papers and daily papers, copies of our own catalogue and curriculum, and those of other schools in Sendai, pictures of the old building and the girls left homeless by its burning, names of the members of the Board, of the members of the Japan Mission, of the missionaries' children, of the students, of the alumnae, and of the teachers, names of contractors, overseers and members of building committee, program of last commencement, some coins and stamps, articles from ruins of the old building. This box was placed in the stone by Miss Zurfluh. The liturgical part of the service, and the laying of the corner-stone, which was presented by Misses Zurfluh, Weidner, Pifer and myself, was conducted by Rev. Lampe. An address was given by Dr. Schneder. Congratulations were read by our Kanji, Mr. Hayasaka. The benediction was then pronounced by Rev. Faust.

The corner-stone is laid. We hope very soon above it the superstructure will rise. We are in great need of this building. We have shifted in crowded, almost uninhabitable quarters since March,1902. We must now shift in a crowded condition in a good building for another year. It will be a hard year for us, but we press forward in the hope that ere another year rolls away we will see this building dedicated to His service for whom you sent us here, and for whose sake you are sending of your money and your prayers.

Yes, the corner-stone of this building is laid. The corner-stone of this nation is being laid—that of intelligent Christian womanhood. Some time the material stone will be crumbled and lie in the dust. Not so the spiritual one we are striving to place in the foundation of this nation. It will be as lasting as eternity. Christian daughters, Christian teachers, Christian wives and Christian mothers, what have they meant to Western lands? What have they meant to you? So much and more do they mean to heathen lands. So much greater is the darkness, so much greater the need of light. Christians in the homeland, you who have enjoyed all the blessings which a Christian land can give, will you not give as has been given to you? Many conscerated gifts have been placed on the altar for this cause. Some have not yet availed themselves of their privileges to have a part in this most encouraging, most important work of educating the girls of Japan.

Help us, we plead, to have a firm corner-stone of Christian character in this promising land.

Help us by your sympathy, by your prayers and by your means.

I plead for the girls of Japan.

Very sincerely,

Sendai. LUCY MARGARET POWELL

定礎式は多数の来賓、生徒、教職員が参列し、工事関係者他一般有志が見守る中で始められた。創立当時から宮城女学校の教育に誠実な支援を行ない続けて来た橋本経光が最初に定礎式の意義を説明し、ズーフル校長並びに仙台教会牧師吉村末吉が祈禱をささげた。英文聖書、和文聖書、宮城女学校定款、クリスティン・ファウスト夫人を記念してつくられた追憶集、「合衆国改革派教会」機関紙最近号、日刊新聞、宮城女学校要覧並びに教科課程一覧、仙台市内他校の学校要覧並びに教科課程一覧、焼失した旧校舎時代の諸種の写真、旧校舎焼跡に立つ生徒達の写真、外国伝道局役員名簿、在日宣教師社団関係宣教師名簿、宣教師子女名簿、宮城女学校生徒名簿、同窓生名簿、教職員名簿、建築工事担当業者関係名簿、建築監督者名簿、建築委員会名簿、宮城女学校最近の卒業式（第十一回卒業

生）の式次第、通貨並びに郵便切手、旧校舎焼失後の焼跡の遺留物品などを納めた銅製の箱は、建築工事総監督の重要任務を担うウィリアム・E・ランベ牧師指揮のもとに、ズーフル、ワイドナー、ポーウェル、パイファーによって「隅のかしら石」の中に安置された。そのあと、シュネーダーが定礎の辞を述べ、続いて早坂哲郎幹事が祝辞、祝文を朗読披露した。最後にアーレン・K・ファウストの祝禱があって式は終了した。参列者一同、「主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい。」（詩篇第百二十七篇一）との聖書の言葉を心に浮べながら、ここに建てられる校舎において、クリスティーン・ファウスト夫人の遺志を活かした立派な教育が行なわれるようにと祈ったことであろう。ポーウェルも、「見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。それにより頼む者は、決して、失望に終ることがない。」（ペテロの第一の手紙第二章六）との聖書の言葉を頭に浮べたことであろう。

今まさに据えられた土台の上に、来年になれば立派な校舎が完成する。校舎焼失以来、手狭で不便な仮校舎で教育を続けた時にも決して希望を失なうことはなかった。神の御栄光をあらわすためにとの決意ではるばるこの異教の国、日本に来たのであるから、母国の教会員がキリストの福音が世に伝えられるようにと祈って送る献金で建てられる校舎で、その祈りにこたえうる教育をしようと思い続けていた。日本の少女達が永久に朽ちることのない福音の真理を身におびて世に出て行き、クリスチャンの少女、教師、夫人、母親が日本中いたるところで神の御栄光をあらわすようになることを心から祈っている。新校舎の定礎式は日本国民の知性あふれる少女達、婦人達の精神的基盤が磐石のごとく据えられた記念すべき式典である。すべてを導き給う恩寵の神に心から感謝の祈りをささげる。このような思いの裡に、ポーウェルはこの書翰をしたためたことであろう。

第十八年度始業

翌九月十一日（金）、新寄宿舎の自習室において、第十八年度の始業式が行なわれた。この日、新任の男子教員三名、京道信次郎（理科）、大場誠治（数学）、斎藤正人（図画）の就任披露も

行なわれた。新寄宿舎はコの字型の二階建の建物で、新校舎が完成するまでの間、この建物の二階を寄宿舎、一階を仮校舎とすることにした。この始業式の日に就任した京道信次郎が、三十有余年後に、当時を偲んで記した回想記の一部を次に紹介する。

「九月復興の第一工事として設備の整ったコ字形の寄宿舎が落成し、十一日には其自習室で始業式が擧行され、同時に三人の男教師新任披露式も行はれた。夫れは數學擔任の大場氏、圖畫の斎藤氏、他の一人は私で當時二十三歳の青二歳臆面も無く理科と地文の擔任として大擔にも姫君達の前に教鞭を執った。當時の校長ミス・ヅーフル、外に女教師として、ミス・ワイドナー、ミス・パアウィル、ミス・パイパー等の諸先生、日本人側の教師は幹事早坂哲郎氏永沼柏堂翁（漢文）深田康守翁（國文、習字）出村悌三郎氏（現東北学院長、上級の英語）此れに前述の大場、斎藤の両氏と私で女教師には舎監手島ちか氏、英語數學の中村きよの氏、裁縫科の大黒なよ氏、音楽科の持館ふゆ氏等であった。以上の内外諸教師はよく協力一致、以て教授訓育に專念せられ、生徒も数が多い組で四十名、少い組は僅に四名、従って教師の手が充分行き届き、師弟間は温かく親しさも深かった。（中略）翌十二日からの授業の状態は又中々振ったものであった。即寄宿舎自習室を幕で仕切つて人員の比較的多い一二三年の教室にあてられ四年と五年とは各四名宛で、此二組は他の小室があてられ、且つ距離も相當あったので、何の障りも無かったが幕張内の授業は全く賑か過ぎて閉口した。何故かと申せば隣室の授業が悉く此方にも完全に聞き取られ、ドット笑聲が起れば此方でも貰笑ひと云った状態で、面白くもあり困りもした。就中永沼柏堂先生の漢文教授は先生聲聲を張り上げて朗読されたり、講義せられた事と、米国女教師の英語發音教授の一斎唱和で隣室の授業は全く壓倒の姿であった。斯様な調子の授業が約一ヶ年も繼續し、漸く新講堂の落成で喜んだ。今度は現在見らるゝ通の頑丈な総煉瓦二階建各室の障壁厚く隣室の音聲など毫も聞ゆることなく、シンミリとして落付いた授業が出来る様になり、設備も次第に整って来た。」

（京道　信次郎）

次に、当時この新しい寄宿舎に入舎した日の感激を直ちに石巻にいる姉に送った前島きそ（第十三回卒業生）の書翰中の一部分並びにこの寄宿舎内の仮校舎で学んだ平山信子（第十六回卒業生）が三十有余年後に記した回想記の一部分を紹介する。寄宿舎及び寄宿舎内仮校舎の様子を推しはかることが出来る。

「門をはいると直ぐ驚いたのは寄宿舎の立派な事でした。田舎者の私には恰度立派な宮殿でも見た様でした先づ第一に西洋館に行きましたら、ミス・ズーフルと吉田先生、持館先生とが御飯をあがつていらつしやいました。而して時間がはづれてゐる事をお叱りにならず、ミス・ズーフルは「御飯すみましたか」と仰有いますから、まだゝと申し上げたら加藤さんに台所に行つて御飯を二人前頼む様に仰有つて、大變親切にして下さいました。寄宿舎に入ると六、七人の「おかいんなさい」にむかへられ中を見ると驚いたも驚いたもあまり立派で夢でも見てゐた様でした。まづみんなの案内で一番はじめに教員室、次は客間次は自習室です。この室が大層立派で百餘の机はきれいに配列されて十ばかりの電燈は室を明るく照し、むかふの方に先生の机がありまして其の立派な事はもとの講堂よりはるか立派です。多分講堂が新築されるまで此處が代わりに使はれるのでせう。次に食堂です。自習室で目を圓くした私はこゝに来てもつと圓い目を見はりました。澤山のテーブルと腰掛があつて腰をかけて御飯をいたゞくのです。私は御存じの通り西洋風がすきですから腰掛けて御飯をいたゞく時は大きらいな麦御飯も鰻飯とまでは行きませんが、白い御飯にもましておいしくいたゞきました。矢張り御飯は腰掛けて食べるにしくはなしですネー（中略）次は体操室ですが、其の前に食堂の横に入ると私の大好きな音楽室です。其處はそう廣くもありません。体操室は十五間計りずつと何もなしです。其の広い事はもとの学校中合したくらゐに見えます。それから二階へ上つて見ました。

お室はきれいで押入れも大變廣くなつて本當にようございます。室の数はまだ忙しくつて数へる間がありませんが、畳は総計三百三十一枚とかなそうです。

常に不精な私の一番よろこんだ事は洗濯場です。洗たくするのに水を態々汲まないでも一寸ねぢると直ぐ出ます。顔を洗ふ處もそうです。而して流しが大變廣くつてこれも一寸ねぢると水がゾッと出て来ます。其の整頓してゐる事はよくこんな短かい間に出来上がつたと思つて驚きました。こんな立派な學校に入つて實に幸福だと思ひました。たつた一つ困る事があります。それは室に机も本も置く事が出来ないのです。而して机をもつて来た人は皆かへされました。すべて勉強したり、手紙をかいたりするのは皆自習室です。ちやんと自分の場所がきまつてゐて、そこで勉強するのでせう。私達が夜中に起きて勉強したから學校でも考へたのでせう。」

（第十三回卒業生　前島　きそ）



寄宿舎全景

「我が身を焼いた灰燼の中から再び新しい生命を得て、より美しく、より強く羽縛いて現はれると云ふフェニックス鳥のやうに、焼けた古い、小さい灰色の舊校舎の灰燼の中から、

スックと美しく大きく新しい姿を現はしたのは先づ第一に現在の寄宿舎で、続いて建てられた煉瓦造りの堂々たる校舎が完成するまでの仮校舎に當てられたのでした。

私は、小學校を卒業したらば入れて頂かうと指折り數へて樂しんで居た宮城女学校が、入學の日を目前に控へて灰燼に歸した時には失望して泣いたのでした。然るに幸にもこの寄宿舎が建てられて、九月から再び開校せられる事になりましたので、新入學を許された者は本科一年が約二十名、これは自分の組ですから覺えて居りますが、予科にも何人か入學が許された筈です。新しい木の香ならでペンキの臭ひのプン／＼する寄宿舎の大きな自習室を日中は教室として用ひられたのでした。仕切りは戸でしたかカーテンでしたか覺えて居りませんが、餘つ程遣り繰りして授業せられたものと見えます。南京下見に鼠色のペンキを塗った校舎、二階が寄宿舎で、階下が講堂やお教室で、机や椅子や講堂の長い腰掛は皆船来だったさうです。茶色と白茶との三寸幅位のダンタラの寄せ木、それにニスが塗ってあって立派なものでした。腰掛の形は今日で云へば流線型、腰掛面は流線下駄を後向きにしたやうな形で机、腰掛共シンガーミシンの脚みたいな銕鐵の脚が付いて居て、ネヂ鋲で床に止めてあったやうに記憶します。」

（第十六回卒業生　平山　信子）

新寄宿舎内仮校舎及び婦人宣教師館を教室として第十八年度の授業が開始されて間もない九月十七日、ヘンリー・K・ミラー、J・P・モール、P・L・ゲルハード、D・B・シュネーダー並びにアーレン・K・ファウストの五名が連名で記した書翰が外国伝道局へ送られている。これは、既述のごとく、ズーフル、ワイドナー並びにボーウェルの三名が、新校舎建築の設計に関する在日宣教師社団の特別会議における審議事項にかかわること、議事運営にかかわることなどをはじめとする諸問題が理由となって、辞任願を外国伝道局へ送付し、更に辞任理由詳細説明を追加送付したので、それらの書翰を受取った外国伝道局としては種々審議の後、男子宣教師の意見をも徴した上で外国伝道局の方針を決定しようとしたからである。新校舎設計に関することでは、体操室（体育館）の問題、婦人宣教師館の問題、バイブルウーマンズハウスの移築の問題などであるが、現実に現場担当者となる婦人宣教師が経験をふまえて提案する意見と、別な観点から提案される男子宣教師の意見が対立する場合があり、その場

合の結論を出すに至る議事運営の規定にも問題が存在するのであった。いずれにしても在日宣教師社団の全宣教師が宮城女学校というキリスト教女子教育の場において行なわれる日本の少女達の教育問題を真剣に考え、議論をしていたことを知ることが出来る。彼等五名連名の書翰の最後の部分には次のように記されている。

"The longer we are on the field the clearer does it become to us that harmony among Missionaries is essential to successful work, and while we do not for a moment expect the three ladies to yield their honest convictions yet it might as well be said plainly that unless they are willing to abide by the law of deliberative bodies——majority rule——in time an impossible situation will be created.

Under these circumstances we respectfully submit that the only way of relieving the present tension is a thorough change of attitude and feeling on the part of the three ladies. We honestly feel that generally speaking we have deferred to the wishes of the ladies and we have no intention of being otherwise than conciliatory in the future. Unless the ladies, on the other hand, can bring themselves to meet us on this ground, we fear that past difficulties will continue."

このような書翰を受取った外国伝道局としては、在日宣教師社団が関係している伝道が円滑に進められ、宮城女学校の教育が充実発展して行くために大所高所から適切な判断をくださねばならず、又、その判断に基く決定を契機としてなお一層神の栄光があらわされるようにする責任を負うことになった。外国伝道局常置委員会は真剣に祈り、熱心に審議した結果決定した方針をズーフルらへ伝えて来た。外国伝道局がくだした決定を理解したズーフル、ワイドナー並びにボーウェルは連名で一九〇四（明治三十七）年二月三日、バーソロミューへ書翰を送り、辞任を思いとどまる意志決定を伝えた。その書翰の冒頭部分は次のごとくである。

"Dear Friend! Your communication, urging us to remain in our respective positions and assuring us that the Board will, at the March meeting take into consideration the question of such change of policy as will obviate the difficulties in regard to the management of the Girls' School upon which we based our resignations, was duly received.

We are willing to remain at our posts, providing, that at an early date, a suitable policy is prepared."

第十八年度も終りに近づき、第十九年度の新学年度の教育計画の立案に着手せねばならぬ時、そして新校舎が眼前で一日一日完成に向っている時、ズーフル校長らが新学年度も辞任することなく従来通り教育に専念することが決定し、早坂幹事以下日本人教職員も大いに安心したことであろう。

新校舎竣工

ところで「合衆国改革派教会」外国伝道局から日本派遣最初の宣教師として派遣されたアンブローズ・D・グリング夫妻が横浜に着いたのは一八七九年六月一日であり、「合衆国改革派教会」はこの日を「在日宣教師社団」創立日と定めたことは既述の通りである。したがって一九〇四年六月一日は在日宣教師社団創立満二十五年記念日にあたるのであるが、この記念すべき日に新校舎が竣工した。工事に着手して僅か一年間という短期間に素晴らしい校舎が完成したのである。そのためには建築総監督の任にあたったウィリアム・E・ランペの実に献身的な活躍があったことを忘れてはならない。翌、六月二日に献堂式が挙行され、宮城女学校関係者一同、心から新校舎の完成を喜び、非常な災害を通して更に大きな祝福を与えたもうた神に感謝の祈りをささげた。重大責任を果し終えたランペは六月四日、「合衆国改革派教会」外国伝道局へ建築経過の概要を送っているが、それによると次の如くである。



W.E. ランペ

新校舎建築に着工当時の一九〇三年六月には、建築総監督他建築関係者の執務する工事事務所もないままで寄宿舎、婦人宣教師館の工事が行なわれていた。そこで工事事務所並びに校舎の建築を同時に開始した。工事事務所は七月一日に完成したので、事務所で工事関係業務を処理することができ、時間的にも労力的にも、したがって経済的にも非常に効果をあげることが出来た。寄宿舎並びに婦人宣教師館は九月の授業開始に間に合うように工事が完了しズーフルらの期待に応えることが出来た。日曜日を除いて毎日二百名乃至三百名という多勢の工事関係者が、ランペの指揮監督下にあって連繋よろしく協力して建築に専念した。梅雨時期以後の夏は十五年ぶりという猛暑で在仙宣教師他外国人は全員、避暑のため仙台を離れたが、ランペはただ一人仙台にのこって監督に励み、夏の間に校舎の土台工事が完了し、既述の如く九月十日には定礎式を行なうことが出来た。なおこの間、校舎等の配置上、バイブルハウスの移動工事をも完了した。校舎の設計者、横浜在住の建築家ゼール(Seel)との連絡を緊密にとりつつ、三十九万五千個の煉瓦を用いた装麗な校舎建築は順調に進捗し、愈々一九〇四(明治三十七)年を迎えようとする十二月三十一日に外装並びに屋根の工事が完了したのである。屋根には宮城県産のスレートが用いられた。工事関係者は夏の猛暑で苦しんだのであるが、この冬は二十年乃至三十年ぶりという厳寒であった。建築総監督のランペは監督に就任以来工事関係者との意志疏通が大事であるとの考えから、熱心に日本語の勉強を続けていたので、彼の真剣且つ誠実な態度は工事関係者一同にも大きな激励となり、驚異的な速度での工事進展を示し、既述の如く一九〇四年六月一日、在日宣教師社団創立満二十五年記念日に、日本の少女達の教育の重要性を説きつつ若くして天に召されたファウスト夫人を記念して建造された「クリスティーン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト・メモリアル・ホール」、すなわち第一校舎が竣工した。竣工の日から一週間後の六月八日、「我が事なし終えり。」の感をもって、ランペはバーソロミューに次のような簡潔な書翰を送っている。

59 Kwozenjidori, Sendai, Japan.
June 8, 1904

Rev. A. R. Bartholomew, D.D.
Philadelphia.

Dear Dr. Bartholomew:

Please excuse brevity. It is only a word or nothing. The buildings are finished. The Rec. Hall has been dedicated, I am tired but happy.

The estimates for our land and buildings were $34,600. I have finished and have spent only about $26,500 so that I have a balance of about $8,000. How often have you heard of buildings being put up for more than 20% less than the estimates of the architect and Mission? I am very glad that I was able to save some money but more thankful that I was able to do so much missionary work.

In a few weeks I can send you my full report. With very best wishes, I remain

Yours very cordially,
William E. Lampe.

建築総監督ランペは、宮城女学校のキリスト教教育のために数多くの教会員がささげた貴重な献金を大事に無駄なく活用せねばならぬと決心し、又、天に召されたファウスト夫人の尊い意志を受けつぐ教育が行なわれるにふさわしい校舎にせねばならぬという理想を常に忘れることなく文字通り心身を労して陣頭指揮をとったので、工事関係者一同も彼の信仰的な献身的な指揮活動に積極的に協力し、見積額三万四千六百ドルの工事が約二万六千五百ドルで完了し、約八千ドルを教育設備等くまわすことが出来るようになったことを報告している。「建築は完了した。校舎の献堂式は終了した。私は疲労したが、しかし幸せである。」とのランペの言葉は聞く者にも彼の気持が伝って

感激をおぼえさせる。工事費額は表九の通りである。

宮城女学校の歩みが順風満帆の勢いで進み行くかに思われた時、思いもかけず校舎全焼という苦難に遭遇したが、教職員一同、創立の当時に思いをいたし、建学の精神のもと一致協力して祈りつつ前進し、国内国外多くの兄弟姉妹の激励と、特に「合衆国改革派教会」所属各教会員の祈りによる尊い献金に支えられて新校舎、寄宿舎をはじめ関係諸建築物の工事が完了した。その翌年、一九〇五（明治三十八）年五月十六日からペンシルヴァニア州アーレンタウンで開催された「合衆国改革派教会」総会で外国伝道局長は全教会代表者に次のような報告を行なっている。(註四七)

表九

寄宿舎	7,496.70 ドル
婦人宣教師館	2,370.65 ドル
校　舎	13,412.47 ドル
バイブルハウス移築	69.00 ドル
新校地二区域	2,884.31 ドル
垣根その他	672.68 ドル
計	26,905.81 ドル

Miyagi Girls' School.

It is with great joy of heart that we report the completion of all the buildings for the Miyagi Girls' School, and at a cost of over $8,000 below the original estimate. The leading Sendai daily says: "The dormitory is one of the best planned and most substantial in northeastern Japan, and will doubtless be patterned after by many other schools." The ladies' residence was enlarged so as to give a study and sleeping room to each of the four lady teachers, and many other changes and repairs were made. The recitation hall, which is a memorial to the late Christine Vollmer Faust, is a beautiful solid brick structure with granite trimmings. As Japan is an earthquake country, great care was used that the building should be strong, and it is probably as nearly earthquake-proof as a building can be built. It contains eight recitation rooms, a large chapel, library, laboratory and science room, business office, reception room and waiting rooms. Our Girls' School has now a very fine equipment, and there is no better plant in Japan for the Christian education of young women. The cost of these buildings is as follows:

Dormitory	$7,496 70
Ladies' Residence	2,370 65
Recitation Hall	13,412 47
Moving Bible Women's House	69 00
Two Lots	2,884 31
Fencing, grading, incidentals	672 68
Total	$26,905 81

Receipts from all sources for the Girls' School Building amount to about $27,000.

The credit for the speedy and economical erection of these buildings is due to Rev. W. E. Lampe, who had sole charge of the building operations. In his report of the work so well done he says: "We of the Japan Mission feel grateful to all who by their contributions or in any other way have helped us in this grand work."

The Board again thanks all the individuals and congregations who have paid $500 each, for rooms in the new school buildings. Are there not those who may read this report, able and willing to contribute $500 or $1000 in memory of a saint in glory?

(註 一) "The Messenger", Aug. 17, 1893.

(註 二) "Acts 1896", P. 98.

(註 三) 橋本経光自筆の「橋本経光バプテマの畧歴」(明治三十五年十一月記)中に「予が基督信者となりしは明治十六年六月にてありき伊豫国越智郡今治組合教会に於て横井時雄氏より授洗入会す当時愛媛縣属の職に在りしが多少の迫害の間に在て直接間接に傳道に従事す明治十九年官を退きて東横間に遊ぶ同年五月十五日始めて東北の野に遊ぶ時に仙臺在住リホームド・ミッション派遣宣教師ウイリアム・キー・ホーイ氏の聘に應じ五月下旬より同氏く邦語を授くる事と予傍ら同氏に就て聖書神学を研究す明治十年宮城中会に於て博士ヘール押川教師藤生教師等の試験の許に准員傳道者に任ず同年秋始め

てホーイ氏オールト嬢等と共に磐城白石町及長袋宮町等に傳道を開始す（中略）明治十九年十一月松山市組合教会より仙台日本基督教會に転入す（以下略）」とある。なお、明治二十六年十月十八日に記された橋本經光の履歴書には「弘化三年十月六日生、愛媛縣温泉郡松山市出淵町二丁目三拾九番地、仙臺市東四番町廿一番地寄留、士族、故橋本宅次昌之ノ長男、文久三年旧藩兵備改革ニ付兵學研究ヲ命ゼラレ、慶應元年陸軍教師散兵隊長ヲ命ゼラル、明治元年軍務判事ニ任ゼラル、明治二年公用人外交役に任ジ上京命ゼラル、明治三年九月帰藩、明治三年九月ヨリ同八年ニ至ル陸軍士官奉職、明治十三年ヨリ同十九年四月ニ至ル愛媛縣御用掛農學校教授ニ任ゼラル、明治十九年五月仙台市（寄留爾後宗教學術教育等ノ事項ヲ研究ス、罰ナシ、右之通リニ候也」と記されている。

（註 四）"The Messenger", March 29, 1894, P.1. "Acts 1896", P.99.
（註 五）"Acts 1896", PP. 92-93.
（註 六）"The Messenger", Aug. 16, 1894, PP. 8-9.
（註 七）"History of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States 1879-1904", PP. 78-79.
（註 八）"The Missionary Guardian", Vol. II, No. 7 (July, 1892), PP. 203-204.
（註 九）"The Missionary Guardian", Vol. III, No. 9 (Sep. 1893), PP. 214-217.
（註一〇）"Acts 1896", PP. 108-119.
（註一一）Ibid., P. 90.
（註一二）Lena Zurfluh letter to Board, July 1895.
（註一三）バヒフとは、馬脾風（ばひふう）、すなわちジフテリアの漢方名。
（註一四）山下廉の退職は明治二十九年五月。
（註一五）Zurfluh letter to Callender, Nov. 18, 1896.
（註一六）Zurfluh report to Board, June 6, 1896. "Annual Report 1895-96" by Lena Zurfluh, June 6, 1896.
（註一七）Zurfluh letter to Callender, May 14, 1896.
（註一八）"Annual Report 1896-97" by Zurfluh, June 11, 1897.
（註一九）Zurfluh letter to Callender, Sep. 21, 1897.
（註二〇）Committee (Moore, Hoy and Schneder) Report to Board, June 15, 1898.

(註一一) "Rev. M. Oshikawa, desiring to devote a part of his time to general educational and evangelistic work beyond the scope of our Mission, requested that he be relieved of service in the Tohoku Gakuin about one-half his time, and that his salary be accordingly reduced one-half. The arrangement was approved by the Board on the recommendation of the Mission". ("Acts 1899", P. 97.)

(註一一一) Zurfluh letter to Board, June 20, 1899.

(註一一二) "Acts 1899", P. 97.

(註一一四) Ibid., PP. 117-119.

(註一一五) 菊池大麓はこの直後、文部大臣に就任。(一九〇一年六月一一日―一九〇三年七月十七日。)

(註一一六) "The Messenger", May 1, 1902, PP. 7-8.

(註一一七) "Acts 1902", PP. 132-135.

(註一一八) Lucy Margaret Powell letter to Board, June 25, 1902.

(註一一九) Sadie Lea Weidner letter to Bartholomew, March 19, 1902.

(註一二〇) "Latest Sendai Tidings" ("The Messenger", May 1, 1902.)

(註一二一) "Acts 1902", PP. 103-104.

(註一二二) Lucy Margaret Powell letter to Board, June 25, 1902.

(註一二三) Weidner letter to Lemberger, April 8, 1902.

(註一二四) Weidner letter to Bartholomew, April 9, 1902.

(註一二五) Weidner letter to Lemberger, April 9, 1902.

(註一二六) Powell letter to Board, June 25, 1902.

(註一二七) Weidner letter to Board, June 27, 1902.

(註一二八) Weidner letter to Bartholomew, June 11, 1902.

(註一二九) "Acts 1902", PP. 98-104, 110-113.

(註一三〇) Ibid., P. 134.

(註一三一) Zurfluh's letters to Bartholomew, Sept. 18 and Oct. 4, 1902.

（註四一） "Acts 1905", P. 120.
（註四二） Zurfluh letter to Bartholomew, Jan. 24, 1903.
（註四三） Weidner's letters to Bartholomew, Feb. 7 and Feb. 12, 1903.
（註四四） "Acts 1908", P. 151.
（註四五） Zurfluh letter to Bartholomew, April 3, 1903.
（註四六） "Acts 1905", PP. 119-120.

第六章　凡（すべ）てのことと相働きて

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。

（ローマ人への手紙　第八章二十八節）

躍進の十年

新校舎における教育

いよいよ新校舎で授業が開始された。生徒一同は勿論、教職員も新鮮な気持で毎日を送ることになった。新校舎が完成した年は、二月に日露戦争が始まっており、宮城女学校の教員の中にも出征する者がある一方、生徒による出征兵士の見送り、傷病兵の慰問等も行なわれた。当時、新校舎で教鞭をとっていた教員や、新校舎で学んだ卒業生達が、宮城女学校創立五十年当時に記した回顧文中から若干を抜粋して次に紹介する。校舎の様子、寄宿舎の様子をはじめ、教育の様子、教員の指導の様子や風貌をも彷彿させる。

「時恰かも日露戦役が始つた。第二師團将率は長町驛より乗車出征の途に就かれるので、毎日清水小路の兩側に各學校生徒が陣取って見送をした。此見送は殆と毎日の様に連續し、ズーフル校長を始め米國女教師達まで熱心に戦捷を祈りつゝ見送られた真心には日本人たる私共に痛く感銘を與へたものであつた。戦争中東京駐在の米國大使グリスカム氏来仙、宮女校体操場で紹介會が催され、在仙朝野の名士多数参列し中々盛大であつた。處が戦争中に斯かる行動は國際違犯とか何とかであるなどゝ他の外國公使より抗議があったとか噂があった。戦争も終り、大勝利獲得の凱旋勇士の歓迎は又より以上の熱烈な歓喜の裡に行はれた。

我國戦後の經営着々として諸般に渉り、改善を加へらるゝに及び、此等社会状勢の赴く處に従って學校の施設も改善せられ、先づ文部省の指定認可を得られた。校運は次第に隆盛になつた。ミス・ズーフル、ミラー博士、ミス・ワイドナー、ファウスト博士四代の校長に仕へ在職十一年で大正三年三月私は弘前中學校に轉じた。今仙臺一中に奉職し當時の御嬢様達の御子様等即私から見れば孫さんを教育して居る様な譯である。昔を追懐すると同時に先づ第一に心頭に浮んで来るのは幹事早坂先生である。先生は學校の創立當時より關係せられ、外国教師を輔けて學校の基礎を作り、校運發展の為献身的に努力せられた御功績の偉大さである。私も先生により引き立てられ指導せられた。先生は實に心身共に御壮健で忙しい時には夜を徹して校務を執らるゝも一向平氣であられた。時には先生と私は暖爐を圍み

深更まで學校の問題に關し議論した。特に訓育方面に關し先生の命を受けて個人の善導に苦心した事も、今は皆思出の種となったが割愛する」。

（京道　信次郎）

「時の校長はミス・ズーフル（ミス・ザーフルとも云ふ）お笑ひになると目尻が下がつてとても人好きのするお婆さん、と云つても四十歳前後で入らつしやつたが、若い少女には皆お婆さんに見えたらしいのです。中指と拇指とでよくパチン〳〵と音をさせながら私共を叱つたりなさつたものでした。先生御自身が感激なさりながらエヴアンジリンのお講義をして下さつたのは私共が上級になつてからでした。キヤンタタと云ふものをさせて下さつたのもミス・ズーフルです。歌劇の卵みたいなものです。

幹事は早坂哲郎先生、綽名はオヤヂ（先生に綽名をつけるのは當時こそ罪あれ、その綽名が今は懐しい想ひ出の敬稱とも愛稱ともなつてしまつて居るのですから幾重にもお赦しをお願ひして置きます。）このオヤヂはとても恐い先生で、先生方まで恐がつて入らつしやつたやうですから生徒は推して知るべし、世間までも恐がつて居たが故に我が宮城女學校が威張つて居られたのだとも言へませう。私なんかは學校での一番恐い先生が家へ歸つては恐いお父さんですもの、温順しかつたわけです。其の上に、講堂修身でオヤヂに叱られたとなると、今は亡くなられた平渡おつねさんなどが御大で、オヤヂの身代りにイヂめられて私はよくメソ〳〵泣いたものでした。先生は三十何年間か教員室と幹事室とに納まつて居たのですから母校のぬしみたいなものでした。

オヤヂが米國の教育視察に行かれた留守中、幹事代理を勤められたのは新妻先生で、決してお叱りにはならない先生でした。ノー〳〵と鬼の居ぬ間の洗濯も實際は出來るものではありません、恐いオヤヂのお留守中はどうやら締りが足りぬ感じがしたのは私だけではなかつたでせう。

數學は大場清治先生、仇名はデンチヤン、又はデンプ。私共四年生の春、木の芽のふき出る頃、水曜日の祈禱會で「君が代二回」と眞顔で仰しやる程精神に異狀を來たし、遂に亡くなられました。

理科は京道信次郎先生、仇名はラウンド又はラウンドバック、縁の二分位厚い眼鏡をおかけになつて、それでも答案はお鼻の尖にくつつけなければお見えにならぬ程の近眼の先生、答案の臭ひでお點を下さるんだなど云ふうわさもありました。先生が京道家に御養子に行かれたのは私達二年生位の時でしたか、榴ヶ岡近くのお住ひまでわざ〳〵お嫁さんを見に行つた者もありました。

地歴は現在大原夫人でその頃の佐藤いき先生と、後には村上兵助先生。村上先生の仇名や悪口は都合上お預り。佐藤先生は謹嚴其のものゝやうな方で、お笑ひになるにもお顔の筋一本動かしても大變だと云つたやうにソツとお笑ひになる方でした。美文家で、地理も歴史

も先生の美文を筆記させられるのでした。そして試験にはその美文を暗記して、そのまゝ一字も違はず書いてお出しゝなければ滿點は頂けないなどゝ、誰が宣傳したのやら、私達はそのまゝ信じて、ムニヤ〳〵〳〵と暗記勉強をしたものでした。兎に角お點は辛い先生でした。

英語と習字は深田康守先生とて昔の會津藩士、お頭の頂上だけきれいに禿げて白髪で、長い白髪の生えた上品なお爺さん「バズ、ザリ、デ、ジ、ン、マシ、ナンの八つこそは、將然言を受くる助詞なれ」などと教へて頂いたのは私共四年生の頃でありましたか。お習字は先生の御直筆をお習ひするのですから有り難い話でしたけれども、折手本の綺麗なお家流を拝見したばかりでダチ〳〵になるのでした。私などお習ひするのにはあまりに勿体ないと私かに遠慮して一筆書などばかり書いて居たものですから、天罰覿面、かう云ふ悪筆筆不精となつたわけです。

漢文と作文の先生は、深田先生よりももつと完全に禿げた、山羊鬚の陽氣なお爺さんで、自ら禿頭翁と號せられた永沼織之丞先生、漢文の時間にはよく詩吟を御願ひして時間を儲けたり、「先生、模範文を書いて下さい」なんて作文をサボつたりしたものでした。お點が辛くて、私の最初の作文なんかは六十五點、次が六十八點、何と情けないお點だつたではありませんか。然し一度模範文を書いて頂いてからは、「然り而して豈然らんやと」と云つたやうなこつを呑込んだので、やつと良いお點を頂くやうになつたのでした。「起承補助カ結」と云ふ作文のこつを教へて頂いた事を思ひ出します。

圖畫が齋藤正人先生、仇名はローング、お丈が高くて、細いズボンを落ちさうにはいて居らしたので、如何にも長々と御見えになつたのです。とても陽氣な先生。その次が長谷川先生とてお顔色の悪い陰氣な先生でした。肺を病んでとう〳〵亡くなられました。この先生、學期試驗に、サツマ芋を二本テーブルの上に置いて寫生をおさせになりました。出來上つた成績はどれも〳〵も壺みたいだのかめ見たいだのつて、とう〳〵男泣きに泣いておしまひになつた事があります。こちらはその芋を消毒するのだとかつて、後ろの隅にある大きなストーブの下の熱灰に突込んで、燒芋になるのを何時間待つた事でせう。「これなんですか？」つてズーフル校長が半燒けのさつまもをほり出して、お眼を丸くして叱られたのは別の機會でありましたか。サツマ芋のナンセンスはいくつもありますが今はお預り。

お裁縫は初めは大黒なよ先生、又の名はDattsan（東北の發音はとてもむづかしくて英字ならでは書き表はせません）お作法とお茶の湯も教へて下さいました。お作法では高貴の方に拝謁を仰せつかつた時の立禮を一生懸命に教へて下さつたものですが、私は不幸にして未だ一度も拝謁を仰せつかつた事がありません。多分今頃はそのお作法も變つた事でせうし、變らないにしてもちつとも覺えて居りません。覺えて居るのは私が丁度後ろにあつた柱によりかゝつて居たとて、あとでオヤヂにひどく叱られた事だけです。一時間立ちつゞけは辛かつたものですからね。



ボーウェル，ズーフル，ワイドナー

卒業近くのお裁縫は久道しゆくよ先生からお習ひしました。

家事と料理は手塚先生と仰しやいましたかしら、お眼鏡をかけた、柄の大きな舎監さんです。家事の一番始めの時間に「夫のセンタクはどうしたら良しいでせうか?」と仰しやいました。「先生、着物ですか?」と伺ふとお友達がドッと笑ふ、「ナーンだ、お風呂か」と獨言でごまかすと隣席の橋本みささんが又吹き出しましたが、それは先生にきこえたかどうか、後を向いて黒板に「選擇」とお書きになりました。

英語はミス・ザーフル、ミス・ワイドナー（後の校長）、ミス・パウエル（ミスパーとも呼ぶ）、ミス・リンゼーそれに河合きくの先生、吉田てる先生、上級になつてからは原田ことぢ先生。

ミス・ワイドナーはビューリタンで美人で、おみ足が小さくて（比較的）踵でコツコツ〳〵と歩く先生、生徒にも靴を履いたら踵で歩けと教へた先生ですが、ミスパーはスーツ〳〵とお靴をずつて歩かれた先生で、靴音が聞こえない為にいたづらが見付かつた事が何度もありました。

体操はミスパーで「マーチ・レフト・ライト・レフト・ライト・ホルト」なんて皆英語でやつたものです。全校一齊体操でした。球桿だの啞鈴も少しは使つたやうでしたが大体徒手体操で、「グリーシャン・スタッチュー」など云ふ素晴しく優美なフォームから、手先をグニヤ〳〵にして急激に振る所謂「タコオドリ」まで數番、毎日三十分づゝやらされるのでした。

バイブルは初めは河合先生、次がミスパー、最後がミス・ザーフル。河合先生は「あれですね」と仰しやる癖がお有りでしたので、一時間中に「あれですね」を何回仰しやるか數へたんだなどゝ他愛もなく時間を過したので、何を伺つたものやら少しも頭には殘つて居りません。

ミス・ザーフルのバイブルクラスと言へば、私がお友達の擬(まね)をしたとてきついお叱りを受けた事を思ひ出します。自分は何の悪意もなくした事なので、何をしたかさへ覺えて居らず、その友達とは至極仲よくやつてるのでしたのに、皆でふざけたのを校長に見付かつて以來三週間も四週間も校長は御機嫌斜めで、特にバイブルの時間には聖書も前の續きでなく特別の處を引いてはレクられるのです。「サテは誰か悪い事をしたな」と思つた程當の私はケロリとして居たのでした。それにしても少々風向が悪いと變には思ひましたが、あの時ふざけたのが悪かつたのだとあつさりしたものでした。「グツトモーニング、ミス・ズーフル」なんて朗かに挨拶しても何だか變なのです。

處がとう〳〵お室に呼ばれたのは私で、今までおこられて居たのは私だつたと云ふ事と、おこられた理由とを其時始めて知つたのです。校長先生はとても好い先生で私は随分可愛がつて頂いたのですが、人情風俗の相違と年齢の相違から來る見解の相違で、かうした見當違ひのお叱りを受けたのでせう。

斯う云ふ事で叱られた方々は外にもきつとあつた事と思ひます。私達にしても、子供の言動を大人の考へで解釋して子供を叱つても子供が何で叱られるのかわからずに居るやうな事がないでせうか。

ミス・ワイドナーには、お友達と手をつないで歩いたとてきついお叱りを受けました。これは西洋の風俗では卑猥な態度になるのださうです。

兎に角、國情の異ふ間で子弟の教育は容易でない事だと此の頃つく〴〵考へさせられます。日本の文化がお蔭で確立した今日お互ひ教育に付いては少しく考へる處があつて然るべきでせう。

音樂で唱歌は初めはミス・ズーフル、後にミス・ハンセン。

ピアノは初めは持館先生、後にはミス・ハンセン。私達が最初ピアノをお習ひした頃は、五線上のおたまじやくしを讀むのが初めてなので全くチンプンカンプン、それにテクニックなど殆ど教へて頂かないのですし、練習時間は一日に三十分間、それも土曜日曜とレッスンの日を除くとたつた四回ですから、何で進歩する筈がありませう。當時自宅にピアノなどある家庭を私は知りませんでした。それでも文學會や卒業式などにピアノ獨奏などやらされて好い氣持になつたものですが、曲目は？　など云はれると今は子供等の前にも恥しくて。白状しませうか、「ソナチネ十二番」。「ナーンだ」などゝ笑はないで下さい。今の子供の一年の進歩は、當時の四五年の精進に價するのです。

先生の悪口はこれ位で打切りにしませう、逆襲が恐しいから。然し嬉しい面白い懐しい想ひ出も、先生をぬきにしては描き出せぬやうな私共の學校生活は本當に幸福なものであつたと感謝の外はありません。今日のなべての學校にあつては、先生は従です、副です、學問を教へる道具です。卒業後は皆忘れられる方々です。忘らるゝはあじきない事ながら、先生方を忘れ得る生徒の學校生活も亦氣の毒なものではありませんか。

私の在學五年間に起つた事件の中で特筆すべきは日露戰爭です、日露戰爭は私共二年生の時に勃發して、第二師團からは現役、豫備、後備と次から次から軍隊が戰地に繰り出されるのでした。それを各學校は手分けをして見送るのでした。宮城女學校はよく清水小路に堵列して、手に手に日章旗を振りかざしながら、

行け々々男兒　　日本男兒

圖南の鵬翼　　雄飛の秋ぞ
萬歳々々　　日本萬歳
朝日の御旗の　　向ふがまゝに

と歌つて送るのでした。送る者も送らるゝ者も異常な感激に胸はたかなるのでした。

× × × ×

歓呼の聲に送られて
今ぞ出で立つ父母の國
勝たずば生きて歸らじと
誓ふ心の勇しさ

初めの二行は思ひ出せませんが、こんな歌も唱ひました。

暇さへあれば耳袋や靴下をいくつでも編んだものです。祖國に對し、出征軍人に對し、全く私心のない奉仕の精神は、當時完全に全校を支配したのです。——少くも多感な少女心にはさう映じたのです。ズーフル校長は堵列して待つてる間、毛糸を左手に持つて右手では針だけ動かすドイツ式の編方で、よく靴下を編んで居られました。かう云ふ編方は東京では十年ばかり前から流行り出したのですが、母校では日露戰爭の頃すでにこの編方を教へて頂いたのです。横道にそれますが、レースだタッテイングだと最近流行しはじめた編物に至るまで、母校では三十年以上も前からドン／＼やつて先鞭をつけて居ます。

母校から出征されたのは圖畫の齋藤正人先生、出征と伺ふともうローングなんて申しません、俄然人氣が集まつて、送別會など全く感激に滿ちたものでした。萬歳で答ふる師弟の間に感激の涙が光るのでした。祈禱會毎に先生の御武運を祈りました。戰地からお便りを何本頂いたか頂かないとかゞ重大な問題になつたりして、御便りほしさにせつせつと慰問状などを差上げたものです。

翌年凱旋された先生の歓迎も素晴しいものでした。只あの時の光景も、夢にお伽の國を歩いたのを想ひ出すやうに、提灯行列の外は何もはつきりと思ひ出せませんが、あのわく／＼するやうな感激だけが明かに記憶に浮んで來ます。多分タブローなんて云ふもの——活人畫などをミス・ズーフルがやらせて下さつたやうにも思ひますが。何の時の事でしたか日英米の三國同盟を意味して、今の伊藤おまきさんが英國、私の級で美人でならした氏家おいしさん（今は古川の永澤夫人）が日本、亡くなられた同級の荘司おきくさんが米國を代表して、それ／＼の國旗を着て講壇の上にうまく並んだのです。幕が開かれたら人形みたいに眼もからだも動かさないでぢつとして居ればよい、つまり動かぬマネキンです。

こんなことの一つ一つが多感な十六七歳の頃をまざ〳〵と思ひ出させて呉れるのも嬉い極みです。

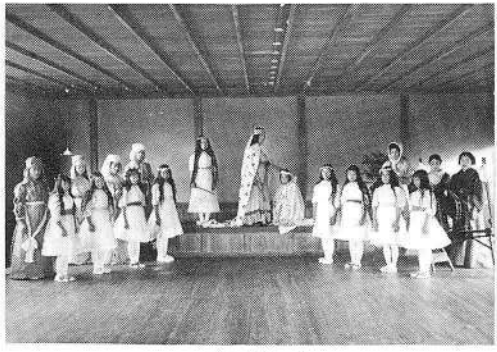
文學會とクリスマス

宮城女學校の文學會と云へば當時仙臺名物の一つであつたやうに思はれるのはうのぼれかも知れませんが、確かに學生間では名物らしかつたのです。十月下旬の金曜日の晩と殆と定まつて居たやうでした。

門から玄關まで杉を巻きつけた綱を兩側に張り渡して、幾つも提灯をぶらさげ、玄關の正面には、車屋さんが向山から採つて來た杉みたいな、つるみたいなもので大きくWELCOMEを書き出したり、菊や杉で智慧を絞つた装飾に、眩ゆきばかりあか〳〵と電燈が灯もされ、大ていは新調のドレスを召した西洋の先生方が忙しさうに、且つ嬉しさうに右往左往なさるだけでも晴れがましい氣分を充分に出して居ます。そこへ開會間近になると、貴顯紳士淑女、學生達が流れ込んで來る、案内係の生徒は全く得意で（私だけかも知れませんが）席を見つけて上げたりするのでした。全くこの夕べばかりは宮城女學校の生徒であると云ふだけでも大きな誇りを感じるのでありました。況んや出演者に於てをやです。でもピアノだ朗讀だ、唱歌だドラマだと一人で四回も出る人々は相當骨の折れたものです。

服装は規定の海老茶の袴をつけるのですが、文學會の出演者は一番上等の晴着を着たことは勿論です。その一番上等と云ふのは、お金持のお嬢さんでも今なら銘仙、昔の紬位なものでした。私など一番上等な着物で相當得意を感じたのは、みゆき更紗と云つてメリンスに似た物を天竺木綿みたいなものに染めた綿入れでした。それを着て、ガラス戸の前などを通る時、ソッと横目で見ては微笑んだりしたものです。

文學會の呼物は何と云つてもドラマでせう。當時は對話と云つても英語に限られて居ました。色金巾に金銀の紙をはりつけたり、綿をくつつけたりしたコスチユームも演壇で見れば素晴しいものに見えたらしく、頭髪をたらしたり、丸めたりする位が關の山で、メークアツプなどと云ふ事は少しもないのですから、折角金巾のローブデコルテを着けた女王様も黒い顔をして居ました。背景もなければフートライトもありません、わざや演出の方法なども今日とは較べものでないとは思ひますが、當時は一般が幼稚でしたから大した喝采を拍したものです。



文學會

私の覚えてるドラマでよかつたと思つたのは前島おきそさん（舊佐藤）が主役で活躍された Joseph と、どなたが主役でしたか Colom-bus と云ふのでした。

會の後でお菓子を頂くのが又嬉しかつたものです。さもしいとお笑ひ下さいますな、人情は昔も今も皆同じです。

クリスマスは宗教的儀式を除けば文學會と大同小異、クリスマスで嬉しいのはお菓子と蜜柑二つと贈物でした。上級生には米國から英語の讃美歌とか、西洋人形とかを贈られた事があります。私共の級は西洋人形が頂けなかつたので怒つた人も泣いた人もありました。生徒同志の贈物、生徒から先生への贈物に珍妙なのがあつて、これを開くのがとても面白かつたのです。飴とか燒芋などは月並で、おひげの薄い先生に付けひげ、エンゲージメントが出來たと云ふ友達に丸まげの形だの手柄だの、御結婚早々の先生にガラン〳〵の玩具等々、何とフール、オブ、ジョイ、と、ファンの夕べだつたでせう。

母校のクリスマスは十二月廿四日ときまつてました。尚ほ寄宿の方は、その翌朝未明にモーニング・コアイヤをやつて西洋の先生方を起こし、メリー・クリスマスの交歓をするのでした。

モーニング・コアイヤと云へば名前からいと美くしく、その調べと來たら魂を魅するものがあるとかね〳〵聞いて、非常な憧れを有つて居たのでした。一年バイブルハオスでクリスマスを迎へ、初めてこれを聞く機會を得ました。星のまたゝきもいと静かなクリスマスの夜明前、寒い空氣をふるはせてひゞく歌聲に恍惚となるのでした。西洋館の窓がガラ〳〵、ガラ〳〵と開いて「メリー・クリスマス」「メリー・クリスマス!!」がきこえます。やがてバイブルハオスにも近づいて來ます。滿腔の「メリー・クリスマス!!」をあびせようとして、ガラッと雨戸を開けた途端！「あゝ見るのじやなかつた」と後悔したのでした。聞いて極樂、見て地獄とは正に此のこと、コアイヤの主は乞食か、強盗か、それとも田舎の馬方かと云つたやうな裝ひです。ブク〳〵と綿の入つたドテラの上に毛布を着て、肩拂をスッポリと頭からかぶつて、頤の邊を手拭で縛つて、殆ど口ばかり出し、ふところ手で、ノソ〳〵歩きながら「キヤーロー、クリスマス、キヤーロ」などゝ美聲をはり上げるものですもの、少なからず顔まけしました。

ペンを採つて、三十年も昔の少女時代の事を書き出しますと、想ひ出は次から次から泉の如く湧出でゝ、ペンを擱く事が出來なくなります。然しこれでも随分書き過ぎましたから此の邊でペンを擱きませう。」

（第十六回卒業生　平山　信子）

「寄宿舍では毎夜（日土を除く外）七時から九時頃まで、階下の廣い自習室に集つて生徒各自静かに勉強したのでした。

土曜日は私共寄宿生の一番樂しい外出日でお洗濯をしたり、お買物に出かけたり或ひは通學の仲の良いお友達を訪問して共に散歩を

したりしました。

日曜日は四五年の上級生で、あちらこちらへ傳道にゆかれる人々を除くその他の寄宿生は全部先生に引率されて南町の教會へゆきました。午後からは室内で黙禱をしたり、聖書を讀んだり、又はお天氣の良い日など裏庭の井戸端の傍の青々とした絨氈を敷きつめた様な芝草やクローバの上で、お友達と、將來の希望や未來の事や魂の有無についてなど種々議論をし合つたりしたものでした。上級生になつてから、學校の前の人力車や汽車に乗つて、あちこち傳道に行くのも又樂しい事の一つでした。

仙臺の郊外、七北田へいつた時、道端に薄紫色の忘れな草が一面に咲いてゐた、その美しい景色は遠い昔の夢の様ですがいまだに忘れられません。」

（第十九回卒業生　岡田　佐知子）

「寄宿舍では日曜日の夜の禮拜は、今も校門の左方に殘つて居る西洋館の客間で、夜七時から行はれる事になつて居ました。その禮拜の時は必ず小さい豫科生の私共が、英語の讃美歌を寄宿舍から運んで行つたり、持ちかへつたりするのが役目でした。私共が讃美歌を運んでまゐりますと、時にミラー先生と西洋館の廊下で御目にかゝる事がございました。校長先生といへば、誰しもがいかめしいこわい先生を想像しがちで有りますが、ミラー先生は、之に反して大層御氣分がおだやかで時々はチヨコレートを一つ二つ御口に入れて居られる事があつて、時折は御ほうびに頂いたものです。只今は東京にお住みでございますので、時々御目もじいたしますが、此の頃は先生も奥様も大分御年が目立つ様に御見受いたします。此の上とも先生の健在を御祈り申し上ぐる次第でございます。

ミラー先生が學校をお止しになつて後、（明治四十四年の秋頃）ミス・ワイドナーといふ方が校長になられたのでございます。先生は私共にピューリタン式な信仰、ピューリタン式な生活又は學問を授けて下さつた様な氣がいたします。いはゞワイドナー先生は硬教育の本山であつた様な氣がいたしました。先生の硬教育は仲々徹底したもので、娘ざかりの私共學生がフザケ半分に廊下をバタ〳〵と草履やスリッパーの音をたてゝ走つたり、又お風呂に入りに行く時に素足でなぞ行くものなら何處から出ていらつしやるのか、ニット出ていらして「ソレ大ヘンイケナイ」と御叱言を頂いたものでした。又日曜日の午後のサイレントアワーの時はそれこそ靜粛にして聖書でも讀んで居りませんでしたら、そつと音をたてずに各室をお巡りになつて御目玉を頂く様な事が度々でございました。この様な嚴格そのものゝ様な硬教育をして下さいましたが、その反面寄宿舍で誰かゞ病氣でもいたしますと、御自身でヒマシ油を持つていらして、よく病人の面倒を見て下さるといふ温和な方面も多分にお持ちでございました。時々先生を憶ひ出します。」

（第二十三回卒業生　大橋　慰子）

第十二回卒業生四名の卒業式は新校舎献堂式から一ヶ月後の一九〇四年七月二日に、新装なった礼拝堂で挙行された。既に述べたように、片平丁の仮校舎が教職員並びに生徒にとって不健康な建物であるとの判断によって、第十八年度の始業時期を寄宿舎の竣工を待って九月まで延期したからである。

新校舎竣工までの二年間は教職員一同にとっても多忙な毎日であったが、特にズーフルは建築関係以外にも諸種の難問の処理などで心身共に疲労困憊その極に達していたので、新校舎の献堂式を済ませると遂に病臥してしまい、卒業式にも病身をおして出席せざるを得ぬ状態であった。七月十九日、ズーフルは病床よりバーソロミューに書翰を送り、新任婦人宣教師派遣の見通しを尋ねると同時に、彼女自身は二年間の緊張の連続のため、嘗てほどの元気が出ぬほどに衰弱してしまい、帰国して休養すべき時が来たように思うと伝えている。

校舎その他の建物が完成したので校庭の整美作業が続けられたが、宮城県の高官から松、楓、柳、ポプラ、無花果など多くの種類の樹木四十五本の寄贈があり、この他にも教職員、各学年、同窓生、一般市民有志などからの寄贈も多く、校庭は大小各種の樹木と諸種の花とで美化され、校庭外からの眺めも良くなり、立派な環境になって来た。(註一)ズーフル以下教職員も健康を回復して一九〇五（明治三十八）年を迎えた。第十三回卒業生は、卒業礼拝ではモールによる説教を通して決意を新たにした。四月一日に第十三回卒業式が挙行された。宮城県知事が祝辞の中で宮城女学校の教育を激賞し、四人の卒業生も彼女らの受けた教育を感謝し大きな喜びを感じた。来賓中には仙台市内外の著名の士並びに陸軍将官夫人などの姿が多く見え、宮城女学校の教育が多くの人々に高く評価されているようであった。この頃になると在籍生徒数は二百名に達しており、ズーフルも健康を回復し、毎朝、礼拝堂で生徒全員が声高らかに讃美歌を歌って礼拝を守る姿を眺めるとズーフルもなお一層任務の重且つ大なるを思わせられ、より一層すぐれた教育を行なうことが出来るようにと熱心に神の恵みと導きを祈る毎日であった。余裕をみて設計された校舎も寄宿舎も決して広くはないと思うほど教室も寄宿舎も満員であった。(註二)

ここに第十三回卒業式執行順序（表一）を紹介する。

表一

第十三回卒業式執行順序（四月一日　午後二時）

一、奏　楽（ピアノ）　持館ふゆ
二、祈　禱　教師橋本経光
三、唱　歌　生徒一同
四、勅語奉読　幹事早坂哲郎
五、英語唱歌　本科四三二年生
六、歓迎ノ辞　卒業生真山れい
七、奏　楽（オルガン）　〃　鉄本きつよ
八、英文朗読　〃　佐藤きそ
九、奏　楽（ピアノ）　〃　井上きゑ
〃　佐藤きそ
十、英文朗読　〃　鉄本きつよ
十一、英語唱歌　〃　一　同
十二、告別ノ辞　〃　佐藤きそ
十三、卒業証書授与及告辞　校長レナ・ズーフル
十四、奏　楽（ピアノ）　卒業生佐藤きそ
十五、田辺宮城県知事祝辞
十六、早川仙台市長祝辞
十七、君が代　一　同
十八、祝　禱　教師エッチ・エッチ・クック
以　上
明治三十八年四月一日　私立宮城女学校
卒業生（ＡＢＣ順）
井上きゑ（宮城県）　真山れい（宮城県）
佐藤きそ（宮城県）　鉄本きつよ（宮城県）
以上四名

ズーフルが外国伝道局へ送った書翰に「我が宮城女学校は従来と同じように豊かな家庭、貧しい家庭の別なく、又、職業の如何を問わずあらゆる職業、あらゆる階級の家庭の少女達を迎えて入学させています。」と記しているように、創立以来変ることなく、キリスト教主義女子教育を受けさせたいという家庭の子女を可能な限り入学させている。したがって奨学金を受ける必要のある生徒が多数あったが、多くの教会員の支えによって勉学を続けることが出来た。

そして今や大きな新校舎も寄宿舎も満員になるほど入学希望者があとをたたないのである。

文部大臣の視察

このように学校全体が活気に満ちて日毎の活動を続けていた一九〇五年五月二十六日（金）に久保田文部大臣による宮城女学校の視察があった[三]。この日、大臣は田邊宮城県知事以下十二名からなる視察団と共に仙台市内の十八校を視察したのであるが、宮城女学校には午後五時に到着した。視察時間は僅か三十分であったが、当日の様子をボーウェルは外国伝道局へ詳細に報告[四]している。その一部を次に紹介する。

"The Minister asked to see our dormitory. They were first taken through the recitation hall and dormitory, then into the chapel, where the girls were assembled. He gave them a short address. Meanwhile the janitor and photographer had been at work. On emerging from the chapel they found seats arranged and a camera in position. In the arrangement for the photograph, the Minister requested that Miss Zurfluh, as principal, should be seated next to him. In three minutes the picture was taken, and they bade us farewell. This was all done in exactly thirty minutes. They had visited eighteen schools that day, and ours was the only one that had a photograph taken. They, as well as we, were delighted, and I send with this a sample of the result. At 6 p.m. that evening we were invited to attend a banquet given in his honor at the Military Club. We three were the only ladies present among several hundred gentlemen, educators of Sendai, and our reception was most cordial. We were at once taken to the reception room where the special guests were, and held a very delightful conversation with the Minister. They regretted very much that they could not see more of our work. Having been much impressed by the singing and English, he asked minutely about our methods of teaching English and singing. He was also much pleased to see the erect bodies and the dignity of the girls, and asked all about our physical culture methods. He and other members of the party said they must come again, for they wanted to see more of our work. We feel highly honored that our Girls' School has been so recognized by the highest educational authority in Japan."

文部大臣他視察団一行は、玄関から図書室へ案内される際、上級三学年の生徒がホールに立って歓迎の歌を歌って出迎えたので一同はこの歓迎に大いに感激した。図書室で大臣は特に宮城女学校の歴史と現況について説明を求めたので早坂幹事が資料を用いて説明を行なった。遅い時間の到着のため大臣は実際に授業を観ることが出来ないことを残念に思った様子であった。大臣の希望により寄宿舎の視察があった後、礼拝堂で生徒一同に対する大臣の短い訓辞があった。その中で、大臣は、海の彼方、アメリカからはるばるキリスト教女子教育のために来日した外国人教員の教えを大事にまもるようにと述べた。大臣は宮城女学校の音楽教育と英語教育に特に関心を示している旨述べた。ズーフル校長以下一同は宮城女学校の教育を高く評価されて満足であった。校長の報告を受けた外国伝道局長は、一九〇八（明治四十一）年にペンシルヴァニア州ヨークで開催された「合衆国改革派教会」総会でこの文部大臣の視察について、次のように報告している。宮城女学校としては特記すべき出来事なのであった。

"A notable event for the Girls' School was the visit of the Minister of Education of Japan, in company with the governor and other officials of Sendai. The party could remain only a few hours, but they saw enough of the work to call forth a brief address of hearty congratulation from the Minister. Our Japanese head teacher, Mr. Tetsuro Hayasaka, gave them written statistics of the school, and they said they must come again and see more of the work."

なおこの年一九〇五年七月三日、帰国滞米中の東北学院長D・B・シュネーダーが、ルーズヴェルト大統領を訪問して、仙台市民からのプレゼントとして日本刀一振と絹製国旗二旒を贈り、大変喜ばれ、日米親善の役を果している。外国伝道局長の報告によると次の通りである。(註五)

"Sword Presentation.—On July 3, 1905, a few friends accompanied Dr. D.B. Schneder to Washington, D.C., for the purpose of presenting to President Roosevelt two gifts, a costly sword and two silk flags, the gifts of citizens of the city of Sendai, as a token of their regard and appreciation for the chief executive of the American people. The President, in accepting the gifts, said in part: "I want you, Dr. Schneder, to bear in return this message to Japan:I am glad to receive this sword from a nation of swordsmen, whose motto is that the sword should never be drawn except with justice, but having been drawn, should never be sheathed except with honor. I am happy to inform you that my address at the Mother's Congress has been translated into Japanese, and is being distributed among the people. I thank you for your kindness." Evidently this gift made a profound impression upon the President, who thoroughly appreciates the spirit in which it was given, and he will ever link the bearer, Dr. Schneder, with it. It may be of interest to the members of the Church to know that the sending of this gift had its origin in the visit of the late Dr. C. Cuthbert Hall, of Union Seminary, New York, to Sendai a few years ago. Both the citizens and the missionaries gave Dr. Hall such a royal welcome that upon his return to America he got the President of the United States to send him an autograph photo for the Mayor of Sendai."

十一月七日に仙台市民に大好評である恒例の文学会大会（文学会年会）が開かれた。開催に当っては仙台市当局に届出の義務があり、次のような文書にプログラム（執行順序）を添えて届出ている。

来ル十七日午後六時半ヨリ當校講堂ニ於テ別紙順序方法ニ依リ第十四回文学会年会開催致候ニ付御臨告ニ及ビ置キ候也

明治三十八年十一月五日

私立宮城女学校
校女宮
印学城

仙台市長　早川智寛殿

なお、一九〇四―五（明治三十七―八）年の日露戦争による戦傷病者が入院している病院へ定期的に（毎週少くとも一回）ワイドナー、ポーウェル、早坂哲郎が訪問して讃美歌を歌い聖書の話をして慰問を行ない、戦傷病者に喜ばれている。特にクリスマスやイースターの時期には一人一人に色々のプレゼントや花束を持って訪問している。(註六)

一九〇六（明治三十九）年三月三十一日（土）には第十四回卒業式が挙行されたが、卒業式に先立つ卒業礼拝の日の説教者はウィリアム・E・ランペであった。新校舎等の建築にあたって総監督として活躍したランペは、一八七五（明治八）年メリーランド州フレデリックの生れで、プリンストン大学、ランキャスター神学大学を卒業後、日本派遣宣教師に選任されて一九〇〇（明治三十三）年来日、東北学院教授として教壇に立っていた。建築監督として知られていたランペが伝道者として十一名の卒業生に極めて力強い説教を行ない彼女らの前途に祝福を祈った。卒業生十一名は全員クリスチャンになっていたが、その中の一名は初代仙台市長（仙台区長）松倉恂の孫であり、又、一名は僧侶の子女であった。卒業式は多数の来賓が臨席し、十一名の卒業生に対して、宮城県知事、仙台市長並びに第二師団長がそれぞれ祝辞を述べて彼女らを激励した。特異なことは、この卒業式に、仙台市長夫人をはじめ各界著名人の夫人が多数列席していたことで

表二

Class 1906

Class Motto:
Patriotism, Patience, Faith
Class Flower:
Pink Begonia
Class Colors:
Light Green and Pink

拝啓本月卅一日午後二時半ヨリ
当校ニ於テ第十四回卒業式執行
致候間御來臨被成下度此段御
案内申上候　敬具
明治三十九年三月卅六日
仙台市東三番丁
百六十六番地
私立宮城女学校長
レナ・ズーフル
殿

あり、宮城女学校の教育に対する一般の関心が益々強くなって来ていることを示していた。[註七] なおこの卒業学年の標語は“Patriotism, Patience, Faith”（「愛国心、忍耐、信仰」）であり、学年フラワーはピンクベゴニアであり、学年カラーはライトグリーンとピンクであった。卒業式の案内状は表二のようなものであった。

宮城女学校YWCA

ここで宮城女学校基督教女子青年会の発足についてふれておこう。一九〇五（明治三十八）年十月頃より、生徒有志が学校内において、毎月一回定例会を開いて聖書の勉強を行ない、生徒達で出来る奉仕活動を行なうことを話し合ったりしていた。一九〇六（明治三十九）年になって萬国基督教女子青年会本部のマクドナルド女史が来仙されて集会が開かれたが、これが契機となって三月十六日、宮城女学校基督教女子青年会が組織された。目的は「基督教ニヨリ會員ノ徳性ヲ涵養シ青年女子ノ間ニ基督教ノ智識ヲ普及シ唯一ノ救主ナル基督ニ導キテ主ヲ信奉セシムルニアリ」（會則第二條）であって、正会員については会則第三條に「一、本會ノ正會員ハ福音主義ノ教會ニ属セル本校ノ女子職員生徒及ビ高等科生ニシテ本會ノ規則ニヨリテ役員ノ之ヲ推薦セシムルモノナリ正會員ニ限リ役員選擧ノ權及ビ役員タルノ權ヲ有ス」と規定されている。

なお会則の附則に「福音主義ノ教会トハ聖書ヲ完全ナル信仰ノ基礎トシ導トシテ信ジ人ヲシテ唯一ノ救主即チ眞神人ナル基督ヲ主トシ救主ト信ゼシムル教義ヲ奉ズル教會ナリ」と説明されている。正會員の他に準會員、名誉會員の規定がある。會費は一ヶ月金壹銭で、一学年間で金拾銭と定められている。活動状況については、参考のために第十五回卒業生高橋こと子の回顧文（「宮城女学校五十周年史」所収）を紹介する。

「母校の女子青年會が創立されたのはたしか明治三十九年のことで、おもへば三昔も前のことになるので厶います。従つて記憶と申しても、うすらぼんやりとしてゐますが、おもひ出すまゝに拙き筆を運むで見ませう。

此の會の誕生は私共が本科四年生の末期であつたと思ひます。五年生の方々は御卒業を控へて居られるので、すべてその役員は四年以

下から選出され、そして不束な私が會長といふことになり、宇田まさ姉が庶務會計に、一年下の橋本みさ姉が副會長に當選されました。その當時何呉れとなく會のために御つくしになつた御二人の方は今は故人となられ、結局生き長らへて居る私が筆をとらなければならない立場となつたことは何といふても淋しい事實でムいます。

始めて生れ出た會は、至つてさゝやかな幼稚な、そして微力なものであつたに違ひありません。しかし千里の道も一歩より始まるの譬の如く、たど〳〵しい歩みながら神様の御祝福の下にその走せ場を馳せ、いよ〳〵益々熱心にして眞劍な會員の方々により更に〳〵發展し今日のやうな隆盛を見るに至つたのでありますが、すべてものゝ始まりに於ては相當の努力を拂ふに拘らず、存外思ふたやうな成績の上らないものであるといふことを今更の如く考へさせられて居ります。

今日も明日も亦永き將來をも常に私共に伴なり給ふて、その進むべき道を御示し下さる神は必ずや、我が母校の青年會をよりよきもの、より高きもの、より美しいものとなし給ふことを信じ且つ祈るものでムいます。

第一回Y.W.C.A. のConferenceが青山女學院に開かれたのも同じ年の七月であつたと思ひます。その折、私は前に述べた御二人の姉妹と共に母校のY.W.C.A. の代表者として上京いたし、青山女學院の寄宿舎に各地の代表者と共に起臥しあらゆる集會に出席し、相祈り、相語り、或ひは基督教界知名の方々の御話を承つたり、數々の奏樂、獨唱等に深い感激を覺え、若いたましひにいひしれぬ印象をうけたのでありました。

その年の九月新學期を迎へてこの集りについての報告會を開き、東京に於ける感激をあるがまゝに御つたへしたことも淡い記憶の中に殘つて居ります。

今日もなほかうしたConferenceが持續されてゐることゝ思ひますが、かうした種類の集會がある場合には矢張出來得る限り多くの會員が出席されて特別な刺戟を受け、いつも母校のY.W.C.A. が新らしい氣分を失ふことなく、專ら神様の御心を喜ばせまつり御栄をあらはすことの出來るやうにありたいと願つて止みません。」

（第十五回卒業生　高橋　こと子）

この頃、ズーフルらは早坂哲郎の渡米研究視察について考えはじめていた。一九〇六年六月十四日付のズーフルの書翰中に次のような文面がある。

"Our Japanese Secretary, Mr. Hayasaka has been in the School for 18 years; he has been faithful and earnest, not only in our School but also in connection with other work of the missionaries, and that of all the missionaries in Sendai. He certainly deserves much credit and we hope that he may soon realize the desire of his heart and go to America to see the work there, which will fit him for even broader and greater usefulness in his own country and our School and work."

宮城女学校就任以来十八年間に及び忠実勤勉な活躍、特に幹事就任後、学校内外において献身的に活動したことが在日宣教師社団のみならず各方面からの信用を得るに至っており、ズーフルらは宮城女学校の将来の発展のために、早坂に更に見識を広めさせたいと考えたのである。

ところで当時、文部省は公立学校の英語教育の充実向上のためにすぐれた婦人教員の必要を痛感しており、全国の私立学校、特にキリスト教主義女学校卒業生中、優秀な者を月謝免除で東京女子高等師範学校に入学させる事を考えてその選抜試験を行なった。七十四名の受験者があり、合格者は三十名であったがその中の一人は宮城女学校本科在学生であったのでズーフルは宮城女学校の英語教育が評価されたとして非常に喜んで早速外国伝道局へ報告している。(註八)

このようにして宮城女学校のキリスト教主義女子教育は成果をあげ、初めてキリスト教に接した生徒が卒業時にはその大部分がクリスチャンとなり、卒業生は各方面で直接間接にキリスト教の伝道に関与して活躍を続け、又、歴代の校長が目標としていたように教育レベルは常に公立高等女学校の上を行くことが実現し、したがって入学希望者は数を増し続けるという状況であった。ちなみに一九〇六（明治三十九年）年四月に本科第一学年に入学を希望した者は三十七名であったが、試験の結果十三名の入学を許可している。十三名の出身小学校別人数は次の通りである。仲々の難関となったのである。

東二番丁高等小学校卒業者	九名
立町高等小学校卒業者	二名
南材木町高等小学校卒業者	一名
宮城師範附属高等小学校卒業者	一名
合計	十三名

なお又、宮城女学校の生徒数が多くなり、特に寄宿舎生の数も多くなると、宮城女学校としても各種の物品を購入し、又、管財上校舎や寄宿舎などの補修関係工事なども常時実施することとなり、学校関係業者との取引状況を毎年度末に仙台税務署へ届出ることとなった。参考までに一九〇六（明治三十九）年の業者一覧を表三に紹介する。

表三

明治三九年一二月一九日

一、物品納入業者				株式会社 三〇〇、五七円
図書	大町五丁目	藤崎祐之助	六三、八〇円	
米麦豆	新伝馬町	江刺新十郎	一三六二、六四円	
野菜	北目町	飯澤タカ	三五四、九一円	
魚類	上染師町	岩沼寅治	四八四、六一円	
味噌醤油	東八番丁	東北学院労働会	一八九、一三円	
牛肉	大町五丁目	大泉多四郎	八一、六八円	
茶・砂糖	大町四丁目	一力友助	五五、八三円	
炭	秋保村	岡崎武左衛門	八〇、四六円	
電燈	大町二丁目	宮城県紡績電燈		

二、工事請負業者				
指物	元寺小路	阿部清吉		五九、二〇円
桶	上染師町	飯沼勇松		七八、〇〇円
流木	中ノ町	相澤勝晴		二二三、六一円
石炭	東京市京橋区	茨城無煙炭鉱株式会社		一一〇、〇〇円
大工	五十人町	清野徳七		三一四、二七円
ペンキ屋	田町	中村忠治		五一〇、三八円

一九〇七（明治四十）年に入って間もない一月八日、ワイドナーはこの数年の疲労を充分に回復すべく休暇帰米のため「コーリア」号で横浜を出港、ホノルル経由サンフランシスコへ向った。二月十四日にズーフルがバーソロミューへ送った書翰によると、宮城女学校基督教女子青年会の活躍が盛んに行なわれるようになって来ており、百九十名の在籍生徒の中百四十名が会員になっており、毎月一回開催されることになった特別祈禱会も盛会である。会としては、更に仙台市内の官立学校他各学校の基督教青年会とも協力して、キリスト教伝道のために青年会として奉仕出来ることを実施しようとの計画をたてている。

「宮城女学校運営委員会」

この年、外国伝道局は、宮城女学校の運営に関する重要な決定を行なった。それは四年前の一九〇三年六月二十二日、ズーフル、ワイドナー並びにボーウェルの三名が辞任願を提出した時以来、外国伝道局としては種々検討を続けて来た問題についてであるが、一九〇七年六月十一日の会議で、爾今、宮城女学校の運営権を「宮城女学校運営委員会」（The Executive Committee of Miyagi Girls' School）に委譲することとした。「宮城女学校運営委員会」の組織は婦人宣教師教員二名の委員並びにこの二名の指名した者を外国伝道局が承認して就任する少くとも二名以上の委員によって組織され、権限は外国伝道局の方針を遵守して実際の運営を行なうというものであった。既述のことであるが一八九三年八月二十六日に開催された在日宣教師社団特別会議において宮城女学校の管理運営権に関する問題を審議した際の結論は在日宣教師社団に「実行委員会」を設置し、委員は在日宣教師社団から二名（内、一名は宮城女学校長）と日本人側からの二名（内、一名は宮城女学校幹事）で構成するということであった。今回、宮城女学校の運営権を委譲されることになった「宮城女学校運営委員会」は一八九三年に定められた「実行委員会」とは委員の選出方法が異るものであった。外国伝道局は、この新方針決定に

至る経過並びに運営に関する詳細及び、それ以後、翌一九〇八年六月十九日の会議の決定事項内容及びその後の措置などを詳細に記した八頁にわたる印刷物 "A Statement To The Church" を一九〇八年十二月に「合衆国改革派教会」関係全教会に配布して宮城女学校の管理運営に関する外国伝道局の方針についての理解と協力とをもとめた。新方針採用によって組織された「宮城女学校運営委員会」は、従来、校長が記していた年次報告書や個人報告書や諸書翰と同様の報告を行なった。たとえば、次のように。

Digest of the Business of the Executive Committee of Miyagi Girls' School.
From June, 1906 to June, 1907.

Teachers who resigned.

Prof. Demura.

Miss Kiyono Nakamura.

New Teachers employed.

Miss Kotoji Harada at Yen 22.00 per month.

Mr. Chunojo Miura at Yen 20.00 per month.

Eight supported girls having graduated were recommended to the Bible Woman's Committee. The traveling expenses of Miss Harada were paid.

Miss Nami Takahashi's salary was increased from yen 13.00 to Yen 15.00. The traveling expenses of Mr. Hayasaka to the World's Student Christian Federation Conference, amounting to Yen 23.60, were paid. Miss Fujie Yoshida was granted full support from May lst, 1907.

Support was withdrawn from Teru Kitago on account of low grades in conduct and in her studies.

この概要報告書の中で報告されているが、宮城女学校第八回卒業生原田ことぢが、一九〇五（明治三十八）年四月一日私立英学塾本科（現津田塾大学）卒業後更に一九〇六（明治三十九）年三月私立英学塾補修科をおえて一九〇六年十月一日に英語教員として就任している。原田は宮城女学校において優れた教員として教育に専念し、英文専攻科の創設にも盡力し、又、宮城女学校の理事として学校の運営にも参与し、更には宮城女学校同窓会第五代会長として同窓会の発展にも貢献するようになるのである。一九〇七年二月二十一日には三浦忠之丞が数学教員として就任している。なお退職者は出村悌三郎（一九〇六年九月一日）、中村きよの（一九〇七年一月二十二日）の二名であったが、出村悌三郎は新潟県の出身で、新潟英学校、北越学館、東北学院に学び、仙台神学校（東北学院）並びに宮城女学校の創立者押川方義並びにウィリアム・E・ホーイに直接指導を受け、東北学院に教鞭をとったが、一九〇二年からは宮城女学校においてもすぐれた教員として生徒達の尊敬を受けていた。のちに東北学院専門部長としてシュネーダー院長を補佐し、更に第三代東北学院長としてキリスト教教育に大きく貢献するのである。

なおこの概要報告書が送られた頃、ケート・I・ハンセンとリディア・A・リンゼイが宮城女学校へ赴任する準備中であった。この事は外国伝道局にとっても在日宣教師社団にとっても宮城女学校にとっても非常に嬉しいことであった。それは、次の事情による。宮城女学校の校舎焼失後、ズーフル、ワイドナー、ポーウェルなどが非常に多忙な毎日を送りつつ教育の任務に専念し、それぞれ体力の限界を超えると思われる働きをし、健康を害してしまったため、彼女らは何度となく後任婦人宣教師の派遣を要請した。外国伝道局もその要請に応えようと努力したが仲々

適任の人物を得ることが出来なかった。生徒数が急増して四名の婦人宣教師が必要である状態になってからも三名のままで教育を続けることが既に六年になろうとしていた。ズーフルが外国伝道局へ送った書翰[註九]の中には、

"There are each day a hundred and one things to be done that do not come under the category of regular teaching, but which must be done, and which consume thought, time and energy beyond estimation. We must do the work of teachers, mothers, friends, physicians and nurses. This is what makes the Christian bording schools the factors for good that they are, and it shows us how important it is to have sufficient workers so that this part of the work can be done to the greatest advantage."

という文面があった程、婦人宣教師達はまさに毎日の二十四時間を教員として、母親として、友人として、医者として更には看護婦として生徒達のために活動しても、なお、実施しなければならないことが山ほどあったのである。そのような時に是非日本へ行って女子教育に専念したいというすぐれた人物が二名、日本派遣宣教師志願を申出て来たのである。ハンセンとリンゼイは多くの人々の期待を身に背負い、心からの歓迎を受けて一九〇七年九月に仙台に到着した。

この年九月十三日、宮城県知事宛に「校則追加ノ儀認可申請書」を仙台市長を経て申請した。

校則追加ノ儀認可申請書

當校規則第十八章職制第百四條第二項「一　幹事　校長ノ職務ヲ輔佐シ校長事故アル時ハ其職務ヲ代理ス」ノ次ニ左記一項ヲ追加致度候間御認可被成下度校則一部相添へ此段申請仕候也

一　副幹事
　幹事ノ職務ヲ輔佐シ幹事事故アル時ハ其職務ヲ代理ス

明治四十年九月十三日

私立宮城女學校設立者
校長　レナ・ズーフルー
Lena Zurfluh

宮城縣知事　亀井英三郎殿

追テ右ハ幹事病氣其他ノ事故アル場合校務處理上差支ヲ生スルヲ以テ本文ニ追加ヲ要スル次第ニ候間此段申添候也

右の申請書は、宮城女学校に新たに副幹事を置くための校則追加申請であるが、その末尾の追書中に「幹事ニ病気其他ノ事故アル場合校務処理上差支ヲ生スルヲ以テ」とあるように、幹事早坂哲郎の渡米研究視察が実施されることになったので緊急を要する認可申請となったのである。仙台市当局もこの事情を諒解したので次のような副申書をそえて「本文追加ノ儀ハ至急ヲ要スル趣ニ候間特急御認可相成度」と追書で緊急性を強調している。

私立宮城女学校規則追加認可申請書仝校設立者ヨリ差出候所不都合ノ廉無之様被認候間御認可相成度此段副申候也

明治四十年九月十四日

仙臺市長　和達孚嘉

宮城縣知事　亀井英三郎殿

追テ本文追加ノ儀ハ至急ヲ要スル趣ニ候間特急御認可相成様致度此段申添候也

右の申請が認可されたので、九月十七日に職制の変更を行ない、副幹事を置くこととし、同日、新妻源助を採用し副幹事に任命した。

かくて十月、幹事早坂哲郎は二ヶ年の予定で渡米した。早坂はアメリカではハイデルバーグ大学（オハイオ州）、

コロンビア大学、イェール大学、ハーヴァード大学並びにシカゴ大学で教育学、教授法その他の研鑽を積み、一九〇九（明治四十二）年十二月に帰国するのであるが、宮城女学校校主であり東北学院長であった押川方義の海外視察旅行の場合を除けば、宮城女学校日本人教職員としては最初の海外研究視察者であった。

ミラー校長の就任

なおこの年、一九〇七（明治四十）年三月二十一日の「小学校令中改正」により、尋常小学校の修業年限が四年から六年に変り、高等小学校の修業年限が四年から二年に変った。したがって、従来は尋常小学校四年卒業者が宮城女学校予科一年に入学出来たのであるが、義務教育である尋常小学校の修業年限が二年のびたために、この年並びに翌年は予科一年への入学者が無いということになり、予科三年制度を検討する必要が生じた。

一九〇八（明治四十一）年一月、校地の西南側隣接地、すなわち寄宿舎の南側に位置する東二番丁・北目町通角地六百余坪（東二番丁百三十九、百四十にあたる土地）を購入し、花壇として校庭に美しさをそえることとした。学校としては愈々環境が整って来た。

なお学校としてはこの後も一九一一（明治四十四）年に寄宿舎の北側の土地約六百七十坪（東二番丁百三十四にあたる）、更にその翌年一九一二（明治四十五）年にはその北側、東二番丁・柳町通角の土地（東二番丁百三十二、百三十三にあたる）をも購入し、遂に、宮城女学校は東二番丁・北目町通・東三番丁・柳町通に囲まれた方形の校地を所有することになるのである。丁度このような時に外国伝道局からの訓令があって校長ズーフル並びにボーウェルは、第二十二年度が終了した後、帰国することになった。一九〇八年五月十八日から開催される「合衆国改革派教会」総会において、宮城女学校校舎焼失以後の再建復興発展の経過を報告説明することになった。宮城女学校の再建並びに運営のために多大の献金を寄せた各教会の代表者達に、既に帰米中のワイドナーも加わって、直接に経過を報告し感謝の意を表わす必要があったのであろう。彼女らは、二十名という宮城女学校創立以来最多数の

卒業生を送り出す三月三十一日挙行の第十五回卒業式の終了後、四月六日に仙台を出発、四月十四日横浜解纜の「コーリア」号でホノルル経由サンフランシスコに向うことになった。[註一〇] このような理由によってズーフル校長が帰国することになったので、外国伝道局はズーフルに代る校長にヘンリー・K・ミラーを任命することにした。そこで緊急に設立者並びに校長の変更手続をとることになり、四月六日並びに四月七日に宮城県知事に宛てて次のような開申書並びに申請書によって認可申請を行なった。

設立者変更ノ儀ニ付開申

従来ノ宮城女学校設立者レナ・ズーフル今般歸國ニ付更ニ明治四十一年四月七日ヨリヘンリー・ケー・ミラーヲ以テ設立者ト相定メ候間履歴書相添ヘ連署ノ上此段開申候也

明治四十一年四月六日

私立宮城女学校設立者　レナ・ズーフル
Lena Zurfluh

私立宮城女学校新設立者　ヘンリー・ケー・ミラー
Henry K. Miller

宮城県知事　亀井英三郎殿

校長認可申請

従来ノ私立宮城女学校長レナ・ズーフル今般帰国ニ付私儀校長トシテ就職致度候條御認可相成度履歴書相添ヘ此段申請候也

明治四十一年四月七日

私立宮城県女学校設立者　ヘンリー・ケー・ミラー

宮城縣知事　亀井英三郎殿

ヘンリー・K・ミラーは一八六六（慶応二）年、ペンシルヴァニア州レディングの生れでフランクリン・アンド・マーシャル大学及びニューヨークのユニオン神学大学を卒業後、日本派遣宣教師に選任されて一八九二（明治二十五）年来日、三年間、東北学院教授として教壇に立った後、一八九五（明治二十八）年七月より一九〇〇（明治三十三）年一月まで東北地方各地において直接伝道に従事し、休暇で一年間帰米の後、一九〇一（明治三十四）年九月、再び来日して伝道活動に従事していたのである。ミラーは宮城女学校の緊急事態に対処するため、一年間、第四代宮城女学校長として教育に専念することとなった。

五月十八日からの「合衆国改革派教会」総会終了後、外国伝道局はズーフル並びにボーウェルの宣教師退職願を承認することになったので、ミラー校長の後任者の選任が必要になり、休暇帰国中であったワイドナーに校長就任を交渉し、ワイドナーは一九〇九（明治四十二）年、新学年度から第五代校長に就任することを諒承した。

ミラー校長就任後間もない五月二十三日に宮城女学校基督教女子青年会が主催して音楽会が開催された。入場者が多数あって好評裡に終了することが出来た。諸経費を支出して純益金が百五円十八銭（五十二ドル五十九セント）あり、これは基督教女子青年会の実施する宗教活動や基督教女子青年会全国大会出席代表者の派遣費補助等に使用されることになったと報告されている。

なお、ミラーの校長時代にはズーフル、ワイドナー並びにボーウェルの三名が帰国中であったため、W・G・サイプル夫妻、J・M・スティック、メリー・ゲルハード、校長夫人S・S・ミラーが応援に協力して三名の授業を分担した。[註一一]なおこの緊急期間中に重要任務を遂行した「宮城女学校運営委員会」の委員はヘンリー・K・ミラー、サイプル、リンゼイ、新妻源助並びにハンセンの五名であり、ハンセンが書記を勤め、又、副幹事の新妻は幹事早坂哲郎の不在期間、重要任務を適切に処理してミラー校長をよく輔佐した。[註一二]

六月十一日には「校則一部改正ノ儀認可申請書」を申請して同月十六日付で認可を受けた。

校則一部改正ノ儀認可申請書

今般経費上ノ都合ニ依リ當校規則第八章束修、授業料及楽器使用料中第十八條「授業料ハ一ケ月豫科金五拾銭本科金壹圓トシ毎月五日迄ニ納ムルモノトス　但始テ入學セシモノハ其當日該月ノ授業料ヲ納ムルモノトス」ヲ左記朱書ノ通リ改正シ来九月ヨリ實施致度候間御認可相成度校則一部相添ヘ此段申請候也

明治四十一年六月十一日

私立宮城女學校設立者　ヘンリー・ケー・ミラー
Henry K. Miller

宮城縣知事　亀井英三郎殿

左記

第十八條　授業料ハ一ケ月豫科金六拾銭本科金壹圓貳拾銭トシ毎月五日迄納ムルモノトス　但、始メテ入學セシモノハ其當日該月ノ授業料ヲ納ムルモノトス

以上



第十七回卒業生

すなわち、授業料が、一ケ月につき従来よりも予科は十銭、本科は二十銭高く改訂された。

一九〇九（明治四十二）年三月二十七日、第十七回卒業生十六名の卒業式が挙行された。十六名全員がクリスチャンであった。この中二名は前年のクリスマス頃まで受洗をためらっていた生徒であったが一名は卒業式の二ケ月前に、他の一名は一ケ月前になって受洗を申し出たのであった。(註一三) 卒業生への言葉を述べるミラー校長は非常に力強い日本語で彼女らを激励し、宮城県知事並びに仙台市長も祝辞を述べて卒業を祝福した。卒業生の希望で選ばれた讃美歌、「見よ

や、十字架の旗たかし、君なるイエスはさきだてり。進め、つわもの、すゝみゆき、おおしくあだにたちむかえ。勇め、つわものいざいさめ、十字架の御旗(みはた)さきだてり。」（現行讃美歌三百七十九番）が一同によって声高らかに歌われ、一同が卒業生の門出を心から激励した。

ところでミラー校長が六月二十一日付で記した一九〇八年度、年次報告書[註一四]（この報告書の署名の下にActing Principal校長代理と記されている。これは、三月末で校長の任務を終了したのであるが、四月から第五代校長に就任することになっているワイドナーの再来日が事情により遅れていたため、その間ミラーが代理を行なっていたからである。）において次のように報告している。すなわち此の一年間、学校内全般に「協力の精神」が満ちあふれていて、教職員も生徒もすべてにおいて相互関係が最良の状態にあり、したがって教職員の場合、すべての者が他事に気をそらすこともなくそれぞれの任務に熱心に専念することが出来た。このような教職員の態度、熱心な活動の様子が生徒達にも反応をおこさせないわけはなく、特に日本人の婦人教員達のY・W・C・A活動における信仰的な行為が無言の裡に生徒達に影響を与えたことも力となって、一年間に受洗した生徒の数が十六名にのぼった。したがってクリスチャン生徒数は六十四名となり在籍生徒数が前年度に比し二十一名も少かったにも拘らず、クリスチャンの数が前年度に比し二名多いということになったのは、教職員が学校の教育目標達成のために熱心に協力し合う姿を通して生徒達の心が神の福音へと向けられ数多くの生徒が受洗したためであると記している。校長の突然の退職という事態にあたり、一年間校長の任につくことになったミラーが、全教職員や応援を申し出た東北学院関係宣教師達の協力によって無事に大任を果し得ての実感であったと思われる。

なお、一九〇九（明治四十二）年六月一日付で書記ハンセンが報告している「宮城女学校運営委員会」[註一五]報告（自一九〇九年一月～至一九〇九年六月）によると、この期間に採用された教員の中に宮城女学校卒業生四名がある。すなわち既に寄宿舎生の指導教員であった宇田まさ、中村まつの二名が正教員となり、佐藤こと、奥山ますの二名が

就任した。奥山は宮城女学校卒業後、更に津田英学塾（現津田塾大学）を卒業してからの就任であった。この奥山ますと宇田まさがのちに宮城女学校同窓会第二代会長並びに第三代会長として宮城女学校同窓会の発展にも貢献するのである。

ワイドナー校長就任

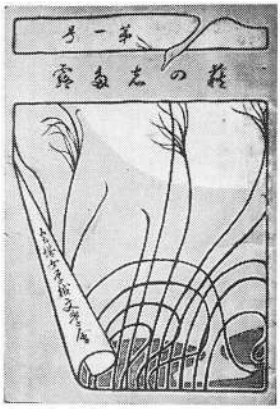
再来日が遅れていたサディー・リー・ワイドナーは八月二十二日に横浜に到着、仙台には九月一日午前五時五分、教職員生徒一同の出迎えをうけて帰任し、九月十三日に第五代宮城女学校長に就任した。[註一六] 但し、ワイドナーの校長認可申請書は、翌一九一〇（明治四十三）年二月十七日に申請され、二月二十二日に認可されている。又、設立者もミラーからワイドナーに変更することとし、その変更届は九月十八日に宮城県知事に届出を完了した。ワイドナーは一八七五（明治八）年三月三日、ペンシルヴァニア州ザイアンヴィルの生れで、幼き時より優れた成績を示し、オハイオ州ボルチモア小学校卒業時には州の定めによりオハイオ州内いずれのハイスクールにも無試験入学の特典を与えられた。マウント・イートン並びにベルビュー・ハイスクールを卒えてハイデルバーグ大学に学んだ。一九〇〇（明治三十三）年六月、「合衆国改革派教会」より日本派遣宣教師として派遣されて宮城女学校に着任したが、着任後半年にして、ズーフル校長の休暇帰国により校長代理に就任、ズーフルの帰任まで約二年間その重責を全うしたことは既述の通りである。その後もズーフルをよく輔佐して校舎再建並びに学校の発展に努力し、特に宗教教育並び伝道活動においては積極的に生徒を指導した。一九〇七年一月休養のため帰国したが、健康を回復するやコロンビア大学において学校制度並びに学校管理法の研鑽に励んでいた。時たまたま、ズーフルの退職が承認されるに至ったため、外国伝道局より校長就任の命を受けて緊急の再来日となったのである。この年十二月十八日、アメリカにおける研究・視察を終えた早坂哲郎が無事帰仙した。

「萩の下露」

なおこの年、従来の文学会誌「宮城野」を廃して、新しく「萩の下露」が宮城女学校文学会発行で印刷によって創刊されるようになった（第一号発行日は明治四十二年三月二十七日）が、これは生

徒の文芸活動の隆盛活潑を示すものであり、又、文学会の年中行事である文学会大会も仙台市の名物行事として市民の関心も愈々深まって来た。深田康守による「萩の下露」発刊の辞は次の通りである。

「宮城女学校文学会は明治二十二年の秋に始まり、つぎ〳〵にものして、それが雑誌を宮城野となづけ、號をかさねて、すべて、百〇七號とはなりぬ。されど、ただちり失せざらんが爲にとて、僅かに、一部をかきしるせるにとゞまり、普く人の見るべきにもあらで、遂に、文箱の底のものとしもなりはてぬるがくちをしければ、いかで、かひもあるさまに、なしかへばやとて、こたびよりは、活版を用ゐてその數を多くし、更に號を改め、名をも、宮城野に因みて萩の下露とぞおほせつる。みかさとまをせとよまれし名所は、名のみになりて、今は、そのなごりだに無げなるこそあたらしけれ。こは、雨にまされる大御代の恵みに、なりたゝむ子等の、作りいでむ文は、ありし秋萩の下露のしげきの如く、よみいでむ歌は、その露のきよきが如くなれかしとてなむ、あはれ、この雑誌のいや榮えに榮えて、秋萩をめづるが如く人のほめたゝふるに至らば、この會のほいなりとやいはまし。」



「萩の下露」

一九一〇（明治四十三）年六月十一日にワイドナー校長が送った一九〇九（明治四十二）年度の年次報告書によると、一年間の重要事項として、生徒の活発な日曜学校奉仕活動、早坂哲郎幹事の帰国、教員組織並びに教科課程の充実、スクールカラーの決定、校章の制定、卒業生・教職員・在校生よりの感激的寄贈、外国伝道局総幹事バーソロミュー博士夫妻並びにケルカー夫妻の来校などがあげられている。

すなわち、一九〇九年度、第二十四年度末の在籍生徒百三十六名中、この一年間の受洗者は二十三名におよび、クリスチャン生徒数は六十三名であった。一九一〇（明治四十三）年四月二日に卒業した第十八回卒業生二十名は全員クリスチャンであり、毎週日曜日、市内九ヶ所

の日曜学校で教師として奉仕活動を続けた生徒であった。次に、卒業生が官立の上級学校に入学するためには、文部省の認可を受けた高等女学校の卒業生以外は資格試験に合格する必要があった。既述の如く、「訓令第十二号」発布当時、宮城女学校は他の多くのキリスト教主義中学校や女学校と同じように、キリスト教教育を行なうために認可を受けることを敢て行なわず、従前通りの方針で進んで来た。しかし、その後、文部省当局の方針も変化を示し、又、既述のごとく宮城女学校の教育水準が公立高等女学校以上であることも証明され、更に世間一般もその事実を知り、入学志願者が激増を示したので、学校としては「高等女学校令」による宮城女学校としての認可を得ようと考えるに至った。ワイドナーの報告によると、彼女は卒業生が官公立の上級学校を卒業して公立学校の教員になることは、公立学校にクリスチャン教員を送りこむことになり、そのこと自体がキリスト教主義学校として重要な働きを行なっていることになるのであるから、この重要な働きを行なうことの出来る機会を逃すべきでないと判断したのである。

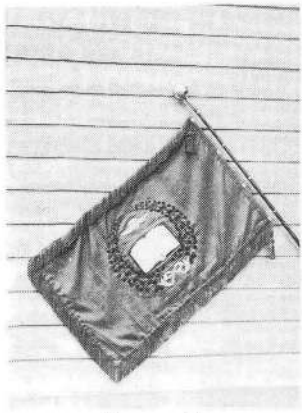
校章制定

次にスクールカラー並びに校章であるが、スクールカラーに決定したいわゆる臙脂(えんじ)色は宮城女学校の運営を行なって来た「合衆国改革派教会」のカラーである。ワイドナーの報告書(註一七)中には次のように記されている。

"School colors have been chosen and a seal decided upon. The Reformed Church colors are the colors and the seal, the open Bible with a dove in a wreath of bush-clover. The latter is especially appropriate for our School because of historical association of Miyagi Province in which we live and from which the School takes its name."

また、開いた聖書とその上に舞う鴿(はと)とを「宮城野萩」の輪がかこむ紋章をもって校章と定めたが、これは聖書に

根底をおくキリスト教精神をもって、鴿に象徴される神による平和を愛し、「宮城野萩」のごとき清純な信仰生活を行なう卒業生を送り出すようなキリスト教主義教育を行なうことを目的とすることを表わすものである。特に萩の輪でかこむことにしたのは、宮城女学校創立の際、校名を定めるに当り、当時、県内には女学校が無かったので、宮城県当局が県名をとって「宮城女学校」とするよう強く要望したことを思いおこし、学校所在地に近い「宮城野」は萩の名所として知られたところであること、又「一種宮城野萩といふあり。其花尤うるはし。其茎冬枯れて春新に根より生ず。」（貝原益軒「花譜巻之下、八月、鹿鳴草」）というように最も美しいとされる「宮城野萩」を思いおこしたことにより「萩」をとりいれるようにと提案した生物科教員京道信次郎のアイディアを早坂哲郎幹事が採用し、その頃、僅か一年間（一九〇九年四月～一九一〇年六月三十日）ではあったが、たまたま、宮城女学校の図画教員であった原あさをが図案化したのである。(註一八)



校旗

ワイドナーが最も感激したこととしてあげている卒業生・教職員・在校生からの寄贈とは、一九一〇年四月二日に挙行された第十八回卒業生二十名の卒業式において、卒業生一同からは宮城女学校基本金のためにとの指定寄贈金二百円（百ドル）、日本人教職員一同並びに在校生一同からはスクールカラーで作られた校旗一旒がそれ〴〵学校へ寄贈されたことである。校章となった紋章はこの校旗の中央部分に位置を占めている。外国人教員達は、かねてより校旗の必要を痛感していたので、校旗の寄贈を受けて全く感激したのである。教職員・在校生一同による校旗寄贈というこの発議は、前年十二月、研究視察を終えてアメリカから帰国した早坂哲郎がおこなったものであった。すなわち「萩の下露」第二号所収の「私立宮城女学校動静」に記されているところによると、一九一〇（明治四十三）年二月二十四日、教職

員・生徒一同が講堂に参集し、校旗（萩丸に聖書・鳩を表したるもの）一旒を学校に寄附することを決議し、又、校章を表した小旗を作製して教職員生徒一同は勿論、有志の人々にも譲って宮城女学校の建学の精神を世間一般にも発表することにしようと決定したのである。ワイドナーは次のように報告している。(註一九)

"One of the most encouraging features of the year's work has been the offerings of teachers, graduates and students. On Commencement Day the graduates presented the School with Yen 200.00 ($ 100.00) for the beginning of our Endowment Fund. Thus the girls who had been in the School the longest and appreciate its benefits most, have laid the foundation of the fund which some day must mean the chief source of income.

At the same time the Japanese teachers and students presented a valuable flag in the School colors. We have long needed a School flag and are glad it has come from the teachers and students. It is but just to say that Mr. Hayasaka was the means of inspiring these gifts."

第十八回卒業式　なおこの記念すべき卒業式に、「合衆国改革派教会」外国伝道局総幹事バーソロミュー博士夫妻（Dr. and Mrs. Bartholomew）、宮城女学校創立当初から宮城女学校のために格別の支援を惜しまなかった外国伝道局財務委員長ケルカーの子息フレッド・ケルカー夫妻が臨席したことは、教職員並びに生徒一同にとって非常な喜びであり感激であった。この記念すべき第十八回卒業式の式次第、ワイドナー校長の告辞並びに基本金及び校旗制定に対する挨拶、外国伝道局総幹事（総務）バーソロミューの祝辞を次に紹介する。

一九一〇年四月二日午後二時

第十八回卒業証書授與式

一 奏樂（ピアノ） 教員 宇田まさ
二 祈禱 教師 伊藤嘉吉
此の間同窓會長より學校基本金貳百圓捧呈及新定の校旗を早坂幹事より校長に捧呈せり
三 讃美歌 本科四、三、二、一年生及豫科生
四 勅語奉讀 幹事 早坂哲郎
五 奏樂（ピアノ） 卒業生 吉田藤枝
六 歡迎の辭 同 廣岡いと
七 英語唱歌 卒業生一同
八 英文朗讀 卒業生 里見よろし
九 奏樂（ピアノ及オルガン） 同 小野ひでな 及川ほこ
一〇 英文朗讀 同 加藤もと
一一 卒業證書授與及告辭 校長 セデー・リー・ワイドナー
一二 唱歌（卒業級歌） 卒業生一同
一三 奥宮宮城控訴院檢事長祝辭
一四 寺田宮城縣知事祝辭
一五 中村歩兵第三旅團長祝辭
一六 和達仙臺市長祝辭
一七 外國傳道局總務パーソロミュー博士祝辭
一八 奏樂（ピアノ） 卒業生 山本みさほ
一九 告別之辭 同 黒澤ふくす
二〇 君が代 一同
二一 祝禱 教師 エッチ・エッチ・キャッスルマン

ワイドナー校長告辭

第十八回卒業生諸子、皆さんには長の年月の間學校で始終御話を致して居りましたから今日更めて御話する必要は無いかも知れませんが皆さんに深く胸中に留めていたゞきたいと思ふ事を今一度述べて置きませう。

今日は貴女方の卒業の日でありまして今皆さんは新らしい生涯の入口に立って御出（ヲコ）でなさるのであります。貴女方は一の課程を了られたのでありますが其によりて又もつと進んだ業を取る資格が出來たのであります。

皆さんは人數が多く御座いますから是れから進んで御取りになる業も定めて種々でありませう、此の五ケ年の間皆さんは此學校で多くの便宜を得て居られたので是は即ち皆さんに大なる責任のある事を含んで居ります何故と申しますに便宜には必ず責任が伴って居りますからであります。

先づ第一に皆さんには婦人として特別の責任があります神は特に世の中を美しくし淸くする事の出來る德を婦人に御授けになって居ります故に家庭の女王として役に衝るべき婦人の機會は殆んど無限とも云ふべき程であります、婦人は家庭の中心でありまして家庭の善惡は大に妻たり母たるもの〻善惡によりて定まるものであります。是迄學ばれた學科の中で家庭に運用する事の出來ざ

るものは一もありません、家政を經濟的に整理して行くには皆さんの學ばれたる數學を活用しなくてはなりません。裁縫や料理の學科も家庭で應用なさらなくてはなりません。

或人の言に「家庭を巧に司る事程色々の力を多く要する職業は決して他に無い」と云ふてあります。皆さんの家庭を善き感化の中心となるやうにして其の光を周圍の家庭に輝すやうになさらなくてはなりません。

御國は誠に偉大な國であります。ですから又貴女方に對して大なる事を要求する權利があります。何となれば貴女方は特別の便宜を與へられて居られますからであります。國の文明の標準は實に婦人の標準の高下に由りて定まるので御座います、大なる國は大なる婦人を要求します智も情も一樣に勝れて居る婦人、妻、母を要求致します、貴女方は傳道者となられるにせよ、教師となられるにせよ家庭の務を取られるにせよ兎に角勉強を止めてはなりません始終進歩して行かなければなりません善き書籍を讀みて世の中の事を能く知りて居らなければなりません、皆さんは最早獨立して勉強の出來るやうになられましたから常に智力を進めて進歩を勉めるやうになさらなければなりません、

次に又皆さんは忠實でなければなりません、自分の信仰に對し又自分の最も高き理想に對し又眞理に對して忠實でなければなりません、詩人の言に「眞理を人に敎へんと欲せば先づ自ら眞理に忠實ならざるべからず」とあります。

又皆さんは勇氣が無くてはなりません、卑屈は世の中で嫌はれます故に眞理の上に固く立って動ざる決心が無くてはなりません。私共は唯樂な事ばかりする爲めに生まれてきたのではありません。困難な事も亦しなければならないのであります。

又貴女方は正しくなければなりません、輕々に人を非難してはなりません。

「總て人にせられんと思ふ事は汝等亦人にも其の如くせよ」、とのキリストの金言を常に記憶して自分の生涯によりて之を表さなければなりません。之が總ての人を幸福にする一番確な道であります。

又人を救けなければなりません、愛の言葉と行爲により親切と同情によりて人を救けなければなりません。唯自分の爲ばかりでなく人の利益を計る爲に生活し世間の爲めになる私のない務を爲なければなりません、そうするならば此の世の中で受ける事の出來る最も大なる喜と平和を受ける事も出來又貴女方の主義である克己を實行に表はす事が出來ます。

終に最も大切なる事は常に依賴む事を得る唯一人の御方であるエス・キリストを何時でも覺えて居ると云ふ事であります、キリストは喜の時にも悲の時にも貴女方を導いて下さいます。又智慧と力を與へる根源であります、キリストに任せキリストを愛しキリストに忠義を盡して下さい、而して何處に行かれやうとも、主は貴女方を惠み貴女方を護り其の御面をあげて貴女を顧み貴女方に平和を送り下さるやうに誠心より祈ります。

本校基本金及校旗制定に對するワイドナー校長の挨拶

人が最も深く感じた時には其れを言葉に表はす事の出來ざる場

合が屢々あるのでありますが此度も基一例でありまして皆さんが今日學校の爲めになされた御寄贈に對する私の感謝の意は全く言葉を以て表はす事が出來ないので御座います。

母校の爲めに寄附の例を開かれた名譽は全く卒業生の方々にあります永く學校に居られて學校より受けたる利益をよく認めて居れる皆さんが其を形に表はされたのは誠に結構な事で御座います。宮城女學校を代表して厚く皆さんに感謝致します。殊に此寄附となって現はれた皆さんの愛校心を感謝致します。

初めて校旗を制定せられたのは全く先生方及び生徒一同の功勞であります。此の校旗の下に私共は同じ目的を以て立つて居ります。何卒其色と徽章とが私共及び將來此處に來る人々に取りて絶えず奬勵となるやうに致し度う御座います。此場合に感謝致すと云ふだけでは甚だ不充分でありますけれども其場合に用ゐる一層善き言葉を見出す事が出來ません。殊に早坂先生に對しては神の御導の下に此計劃の動力となり主導者となられた事を深く感謝致します。

先生方及卒業在校生徒一同に對して今一度學校の爲に現はされた愛校心を誠心より深く感謝致します。神の惠により相互に協同一致の精神が益々强くなり神と人に對する忠實なる生涯によりて私共が受けて居る恩惠に對し感謝の意を現したいもので御座います。

バァーソロミュー博士の祝辭

宮城女學校卒業生及生徒諸君、余は今此目出度御校の卒業式に列し悦びの我胸に溢るゝを禁ずる能はざるなり、日本に於ては近來男女の教育進歩し、殊に女子教育大に發達し現今に於ては女子と雖男子と等しく高尚なる教育を受くるを得るに到れり之實に喜ぶ可き事なり。

「幼子の搖籃を動かす纖手は國家を左右する偉大なる力なり」との古の諺の如く國家の文明は婦人の力に依らされば進むることを得ず殊に婦人は家庭の女王とも云ふ可く其家族に對して絶大の感化力を有し、其善悪は全く主婦たるものゝ人格に依るものと云ふも可なり、然るに此絶大の感化力を有する婦人にして教育無く且つ神に祈ることを知らずば如何にして善良なる家庭を作ることを得ん、

從來いづれの國に於ても女子教育は男子の夫に比して甚しく重せられず兎角後にせらるゝ傾きあり我米國に於ても近年迄斯くの如き狀態なりしがやうやく其必要を認められ今日に於ては女子も男子と等しき教育を受くる得歐洲各國も亦之が必要を認むるに至れり。

然らば各國の斯くの如き勢の源因は何ぞや、之即ち基督教外國傳道に依るものなり、或人は日本女子教育發達の源は全く基督の福音にありと云ひしが各國にありても之と同じく、基督が卅三年の純潔なる生涯を送り十字架に架り死して蘇生りし事實が婦人を斯くの如く高尚なる者と爲しゝと云ふ可く、彼のマリアなる一婦人が基督の死して葬らるゝや萬人に先じて第一に其墓に到りしも決して偶然なりと云ふ可らず。

今日婦人が男子と等しき教育を受くることを得るに至りし結

果、就き得可き職業も亦男子と等しく或は官吏、或は小説家或は醫師と殆あらゆるものに通ず然共婦人の最高の事業は人の妻人の母たるにあり即ち婦人は家庭にありて最大の勢力を有すればなり、而して此勢力は聖書の言葉に依れるなり、Sir Walter Scott は彼が將に死せんとする時に於て聖書は神が人心になし給へる事の記祿にしてイエスキリストに次げる其最大なる賜物なりと呼び、又ヘブライの詩人が「我足の燈我歩む道の光とたゝへしが如く聖書は單に學術上の智識を吾人に與ふる他の書と異りて吾人が生涯を照す光り品性を照す光り即其人が品性に就いての幾多の難問に正確なる答を與ふるものなり」而して吾人はキリストが實踐躬行以て道を教へたる如く、其聖書に示されたることを正しく行はざる可からず、世には此尊き聖書の德を未だ知らざるもの多し、眞理を知らぬこと程社會の進歩を妨ぐるものなし、實に歎ず可きことなり。

卒業生諸君よ、余は諸君が第一に聖書を研究せられんことを望むものなり、此は吾人が道しるべの光なり、世には種々の宗派あれ共其德は唯聖書の言葉の確に誤り無きを證したるに在るのみ、實に聖書の教ふる處は何人に對しても適せるものなり、故に諸君が之を充分に研究せられたる後は之を普く世に傳へざるべからず、此事業は最も困難なるものなれ共神が諸君の盡力に對して爲し給ふ報いも亦甚だ大なるものなるべし、余は諸君が如何なる困難にも屈せずして此務に盡されんことを希望してやまざるものなり。

ここで校章や校旗が制定された当時ワイドナー校長のヘルバーとして良き奉仕を行なっていた第十七回卒業生村上あや（旧姓名池田ちん、現在九十八歳で同窓生中最高年齢者）は、現同窓会長伊藤久子にあてた一九八一年六月四日付書翰の中で次のように記している。これは同窓会第一回ホームカミングデーのためにつくられた校章をデザインしたメダルを手にした際の感想文であるが、校章・校旗制定当時の苦心と感激とが伝わって来る。

「みやぎの校旗は私がミス・ワイドナーのヘルパーをいたして居りました時に創作いたして御祝ひにチョウチン行列をいたしまして構内をバンザイバンザイを高らかに賛唱（ママ）し乍、寄宿舎の廊下の戸を全部はづして校庭をグルグル廻った事を思いおこします。案を、図案を練りますのに随分苦慮いたしました。原阿佐緒女史は図画の先生でいらっしゃいました。」（中略）「この栄光のメダルを掌に光らせ　し

みじみと拝見いたしておりますと、長年胸に大切にしまい込んでおきましたイメージがありありと浮んでまいります。明治四十二年に校旗の製作にお骨折りをいたゞきました先生方のあの眞剣な御姿が、そしてお顔が……、校長ミス・ワイドナーの御室に何回となく御集りになられて御協議を重ねられました。本当に御熱心に。布地のエンジ色はミス・ハンセン先生の御愛好の色でムいます。中央の王座を占められましたバイブルはミス・ワイドナーの御旨思、平和の鳩は原田ことぢ先生の御考案、これ等の宝物をしっかりととりまくみやぎ野の萩は早坂哲郎先生の御誠旨、嵐にも台風にもめげず、いとも強靱なる、そして色も形もそのまゝに散りしく花のじゅうたんは無碍に箒もあてがたい。かくして諸先生がたの御熱心に心血をしぼられました貴い案を見事にアレンジして下さいましたのは、当時の図画の先生、原阿佐緒女史でムいます。かくして御恵与の校旗はみやぎのスピリットをとこしえまでも高くなびかせて、主の栄光をたゝえまつり、女子の道しるべともなりますます事でムいます。……」

（第十七回卒業生　村上　あや）

なおバーロミュー来校を記念して校庭に木犀（もくせい）を植樹した。更にこの機会に、宮城女学校は、高等女学校の上級課程の学科設置を検討中であることを伝え、その実現のための支援を要望した。この要望がききいれられやがて専攻科の設置、第二校舎の建築となって実現し、宮城女学校は高等学校レベルの学校に発展することになるのである。

予科の廃止

一九一〇（明治四十三）年八月一日、「学則改正認可申請」書を提出した。その理由は前述のごとくである。すなわち一九〇七（明治四十）年三月二十一日の「小学校令中改正」により尋常小学校（義務教育）の修業年限が六年となったため、宮城女学校では予科（三年制）の必要がなくなった。そこで予科を廃止し、本科を五年制の高等女学科と改称し、その入学資格を「年齢十二年以上ニシテ尋常小学校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スルモノ」とし、内容を公立の高等女学校より程度の高いものとするための申請であった。すなわち次の通りである。

学則改正認可申請

当校学則ハ其創立ノ際則チ明治十九年九月御認可ノモノヲ明治二十三年全部変更ノ御認可ヲ受ケ其後数回一部分変更ノ御認可ヲ受ケ今日ニ至リタルモノニ候処今般小学校義務教育年限延長ノ結果当校モ高等女学校ノ学科課程ト同一程度ノ女学校ニ変更致度候ニ付別紙ノ通学則全部改正仕度候間御認可被成下度現行学則相添ヘ此段申請仕候也

仙台市東三番丁百六十六番地
私立宮城女学校設立者
セデー・リー・ワイドナー

明治四十三年八月一日

宮城県知事　寺田祐之殿

又、申請書に添付した「私立宮城女学校学則」の第一章目的の第一條は「本校ハ基督教主義ニ基キ女子ニ須要ナル高等女学校程度ノ高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス」とあり、第三條には「本校ノ学科目ハ聖書・修身・国語及漢文・英語・歴史及地理・数学・理科・図画・家事・裁縫・音楽・教育・法制及経済・体操トス」と定められている。

この申請は八月十二日、宮城県知事の認可を得ることが出来、学則全部を改正し、予科を廃し、本科を五ヶ年の普通科とし、尋常小学校六年卒業者を第一学年に入学させることとし、修業年限を五年とし、公立高等女学校より稍程度の高い女学校とすることにした。

次にワイドナーは、前述のごとき観点に立って宮城女学校卒業生が「高等女学校令」による公立高等女学校卒業者と同等の学力を有する者であることの認定を受け、卒業生が宮公立上級学校進学をなし得べく同年十月三日、文部大臣に対し次のような「専門学校入学者無試験検定願書」を申請した。

専門學校入學者無試驗檢定願

宮城縣仙臺市東三番丁百六十六番地

私立宮城女學校

明治四十四年三月以後ノ本校卒業者ヲ一般ノ専門學校入學ニ関シ専門學校入學者檢定規程第八條第一號ニ依り修業年限四ヶ年ノ高等女學校卒業者ト同等ノ學力ヲ有スル者ト御指定相成度別紙學校沿革學則設立者履歴書職員教員姓名生徒定員現在生徒數學年及學級別卒業生員數及卒業後ノ情況學校繪圖面經費及維持法教科書目録教授用器具器械標本數相添へ此段申請候也

明治四十三年十月三日

仙臺市東三番丁百六十六番地
私立宮城女學校設立者
セデー・リー・ワイドナー
Sadie Lea Weidner

文部大臣　小松原英太郎殿

なおこの申請書に添付された書類中に含まれる「私立宮城女学校教員氏名及分擔学科等調」、「私立宮城女学校卒業生員数及卒業後ノ情況調（ママ）」、「私立宮城女学校経費及維持法」並びに「私立宮城女学校教科書目録」を（表四、表五、表六、表七）紹介する。当時の諸状況を判断することが出来る。

表四

私立宮城女學校教員氏名及分擔學科等調				
分担學科	専任兼任ノ区別	資格	職名	氏名
英語聖書	専任	文部大臣認可	校長兼教員	セデー・リー・ワイドナー

修身教育	同	同	早坂哲郎
英語聖書音楽	同	教員免許状所持	ケート・インゲバーグ・ハンスン
英語聖書	同	同	リデア・アルマイラ・リンゼー
英語聖書	同	文部大臣認可	クララ・マッサー
歴史國語漢文	同	教員免許状所持	村上兵助
数学家計簿記	同	同	筒井千吾
理科	同	文部大臣認可	京道信次郎
習字圖画	當分兼任 明年一月ヨリ専任	教員免許状所持	石原重思
歴史地理 法制経済	専任	文部大臣認可	鈴木寅之進
数學	同	同	三浦忠之丞
英語	専任	文部大臣認可	原田ことぢ
家政割烹	同	同	田内ヨウ

英語聖書	同	同	同	教員	奥山満壽子
裁縫作法	同	同	同	同	志賀イチ
國語体操	同	同	同	同	中村まつ
音樂	同	同	同	同	田邊ひさ
音樂	同	同	同	同	山本みさほ
看護婦人衛生病兒育	兼任			校醫兼教員	中村忠篤

表五

私立宮城女學校卒業生員數及卒業後ノ情況調

（表中＊印ハ既婚者ヲ表ス）

年度	合計	傳道者	高等女學校又ハ同等程度學校教員	小學校教員	幼稚園保姆	家庭教師	通譯官	通譯者	新聞記者	會社事務員	産婆	内國學生	家事ニ従事スルモノ	在米国	在加奈太	死亡
明治二十五年度	＊四				＊一								＊二			＊一
同二十六年度	＊一												＊一			
同二十七年度	＊五				＊一								＊一	＊三		＊一

同二十八年度	同二十九年度	同三十　年度	同三十一年度	同三十二年度	同三十三年度	同三十四年度	同三十五年度	同三十六年度	同三十七年度	同三十八年度	同三十九年度
*三	*二	*一	*五	*九二	*六二	*六二	*二一	*四	*四	*八三	*二八
					一						二
	*一		*一	一	一	一					一
										一	*二
				*一			一				一
											二
											一
			*一								
										*一	
									*一		
						一					
*三	*一		*三	*八一	*四	*六	*二	*三	*三	*八一	*九一
		*一			*一						
								*一			
					*一						*一

表六　私立宮城女學校經費及維持法

明治四十三年度經費豫算

収入之部

総収入金　壹万四千貳百參拾圓

内譯

一金壹万貳千四百五拾圓　外國傳道局寄附金

一金壹千七百四拾圓　生徒授業料

一金四拾圓　生徒入學金

総支出金　壹万四千參百五拾圓

内譯

一金壹万壹千四百拾六圓　俸給

内金壹万八百六拾六圓　教員俸給

金五百五拾圓　小使給料並ニ雜給

一金貳百圓　教授用器具器械費

一金四百圓　圖書費

一金貳百圓　修繕費

一金五百圓　薪炭油電燈費

一金壹千五拾圓　慈善費

一金參百圓　雜費

一金貳百八拾四圓　豫備費

以上

	計	同四十三年度	同四十二年度	同四十一年度	同四十年度
総計	計	同四十三年度	同四十二年度	同四十一年度	同四十年度
一六七	七〇 *九七	二二 *三三	一三 *七	一一 *五	*一 〇六
一一	一一		四	三	一
九	*七 二		二	一	
七	*五 二	一	一	一	一
四	*二 二	一	一		
三	*二 一				
二	二				
五	五	二	一	一	
一	*一				
三	三	一			一
一	*一				
二一	二一	一五	四		一
九〇	一二 *七八	*二 二	*七	*五 五	*一 〇二
五	*五	*二			
一	*一				
四	*一				

維持法

本校維持資金ハ北米合衆國リフォームド教會外國傳道局ノ寄附ヲ主トシ生徒授業料入學金臨時寄附金等ナリトス而シテ明治十九年度以降右外國傳道局ノ寄附金ハ左ノ如シ

明治　十九　年度	二千九十八円二十銭	同　三十二年度	八千一百六円二十四銭
同　二十　年度	四千〇〇九円六十五銭	同　三十三年度	八千九百六十八円〇八銭
同　二十一年度	九千六百五十七円四十一銭六厘	同　三十四年度	九千三百六十四円六十七銭
同　二十二年度	三千三百五十七円二十九銭	同　三十五年度	二万一千二百八十三円十五銭
同　二十三年度	四千四百十五円七十二銭	同　三十六年度	五万三千八百八十六円十一銭
同　二十四年度	四千八百二十二円三十一銭	同　三十七年度	一万二千四百十三円七十二銭
同　二十五年度	四千九百七十九円十九銭	同　三十八年度	一万一千百八十一円五十九銭
同　二十六年度	八千二百八十二円七十八銭	同　三十九年度	一万一千四百六十八円三十九銭
同　二十七年度	七千八百十九円六十九銭	同　四十　年度	一万八千三百二十六円四十二銭
同　二十八年度	八千二百七十三円十二銭	同　四十一年度	一万一千七百七十八円十一銭
同　二十九年度	八千三百九十円六十八銭	同　四十二年度	一万一千四百五十円
同　三十　年度	九千七百七十四円十六銭	同　四十三年度	一万二千四百五十円
同　三十一年度	九千六百六十八円六十八銭		

表七　私立宮城女學校教科書目録

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
聖書	新舊約全書	同　上	同　上	同　上	同　上
修身	文部省著作　高等女學校用修身教科書　一、	同　二	同　三	同　四	同　五
國語	佐藤　球著　改訂高等女子讀本　一、二	同　三、四	北畠親房著　校註神皇正統記	鴨　長明著　方丈記讀本	藤岡作太郎著　日本文學史
習字	大口鯛二著　高等女子習字教科書　一	同　二	同　三	同　四	深田康守著　蜻蛉帖
漢文	簡野道明著　女子漢文教科書　一	同　二	同　三	同　四	同　五
英語	シアース著　プリマー及第一讀本 齋藤秀三郎著　ミドルスクール、イングリシュレッスンズ一	シアース著　第一及第二讀本 齋藤秀三郎著　ミドルスクール、イングリシュレッスンズ二	パーンズ著　ニューナショナル第四讀本 齋藤秀三郎著　ミドルスクール、イングリシュレッスンズ三	パーンズ著　ニューナショナル第五讀本 齋藤秀三郎著　ミドルスクール、イングリシュレッスンズ四 沖田乃武著　英文典第一	パーンズ著　ニューナショナル第五讀本 齋藤秀三郎著　ミドルスクール、イングリシュレッスンズ五 神田乃武著　英文典第二
歷史	文學博士黒板勝美著　女學校用日本歷史	同	小川銀次郎編　修正女子東洋史	文學博士箕作元八著　女子教育西洋史教科書	同
地理	地理研究會編纂　明治三十七年訂正女子新地理教科書　本邦之部	同　外國之部	同		山崎直方著　普通地文學教科書

數學	理科	圖画	家事	教育	法制經済
高木貞治著 女子算術教科書 上	濱幸次郎河野齢藏共著 女子用植物教科書 濱幸次郎河野齢藏共著 女子用動物教科書	淺井 忠著 新編自在画臨本 第一編 第二編			
同 中	動物教科書前學年ノ續 岩川友太郎藤堂忠次郎共著 女子理科生理衛生	同 第三編 第四編			
同 下	女子理科 生理衛生前學年ノ續 堀田要三郎渥美鏡太郎共著 女子理科物理	同 第五編 第六編			
高木貞治著 女子教育代數學初歩	女子理科物理前學年ノ續 濱幸次郎河野齢藏共著 女子用化學鑛物教科書		佐方鎭子後関菊野共著 家事教科書 上巻	槇山榮次著 訂正女子教育學教科書	寶文館編輯 最新法制経済教科書
小林盈稲垣作太郎共著 女子用幾何學教科書	女子用化學鑛物教科書 前學年ノ續		同 下巻	同	同

この申請を受けた文郎省から槇山榮次視学官が十一月十八日来校、宮城女学校の各分野にわたる視察が行なわれた。その結果、十二月二十一日付文部省告示第二百四十號による次のような告示文を受けるに至った。

文部省告示第二百四十號

明治三十六年文部省令第十四號専門学校入学者検定規程第八條第一號ニ依リ左記ノ者ノ修業年限四ヶ年ノ高等女学校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノト検定ス

明治四十三年十二月二十一日

文部大臣　小松原英太郎

一、宮城縣私立宮城女學校卒業者

明治四十四年三月以後ノ卒業者ニ限ル

ところで、一八九〇（明治二十三）年に「宮城女学校規則」の変更が認可された時は、正課に聖書を置くことが許されなかった。したがって当時は第三條に「各学科ニ撰科ヲ置キ倫理課ト共ニ或学課ヲ撰修スルコトヲ許ス」という一條を設け、宮城女学校の教育で最も重要と考えている聖書の授業を倫理課の時間と正課以外に「或学課」という表現による授業で行なわざるを得なかった。したがって「宮城女学校学科課程表」には聖書の課目が含まれていなかった。又、一八九九（明治三十二）年に「高等女学校令」が公布された際にも、宮城女学校は、修業年限を四年と定めたこの「高等女学校令」による公立の高等女学校よりも一段高い水準の女学校として、キリスト教教育を強調した高水準の教育を実施する方針でのぞみ、敢て文部省の認可を受けることをせず、本科の修業年限を五年と定めて、独自の道を歩んで来た。更に、同じ一八九九年に「私立学校令」の公布と同時に、学校から宗教教育・宗教行事を分離させようとして「文部省訓令第十二号」が公布された際にも、宮城女学校は建学の精神を堅持して宗教教育・宗教行事を行なう方針をとり、上級学校進学資格を放棄してでも断乎としてキリスト教的立場を守り、認可を受けて「高等女学校令」による女学校になる道を選ばず、各種学校として扱われる女学校の道を選んだのである。しかし、宮城女学校の教育内容は、「高等女学校令」による公立の高等女学校に劣るものでなく、むしろ一段上の水準にあるものであることが文部省当局のみならず、世間一般にも理解されて来たことは既述の通りである。

それ故にこそ、宮城女学校の卒業式には、殆ど例外なく宮城県知事、仙台市長が直接臨席して卒業生に親しく祝辞を述べ、多くの来賓も学校の繁栄を祝ったのであろう。ワイドナー校長が時代の変遷に伴い、卒業生の殆ど全員がクリスチャンである宮城女学校の卒業生を宮公立の上級学校に入学できるようにすることは、クリスチャンを公

立学校に送りこむことになることであるとの見地に立って、「高等女学校令」による宮城女学校としての認可を申請しようとしたのであった。それ故にこそ、正課として聖書の授業を行なうことが出来ることをも含めて、申請が認可されたのであるから、ワイドナー校長以下一同の喜びは非常なものであったと思われる。一九一一（明治四十四）年一月四日付で、ワイドナーがバーソロミューに報告した次の書翰は、極めて簡潔ではあるが、一同の喜びが伝わって来るような文面である。

Miyagi Jo Gakko,
Sendai, Jan. 4, 1911.

My dear Dr. Bartholomew:

On Dec. 19, 1910, the Miyagi Girls' School received Government recognition. This recognition was given ever though we now have more Bible teaching in our curriculum than before.

Yours sincerely,
Sadie Lea Weidner

更に一九一一（明治四十四）年二月一日、宮城県知事に次のような「学則訂正ノ儀ニ付認可申請」を行ない、宮城女学校第一学年入学志願者の入学試験の科目についての認可を受け、直ちに実施した。

學則訂正ノ儀ニ付開申

私立宮城女學校學則第九條ヲ御達示ニ依リ左ノ通訂正本日ヨリ實施致候間此段開申候也

仙臺市東三番丁百六十六番地
私立宮城女學校設立者
セデー・リー・ワイドナー
Sadie Lea Weidner

明治四十四年二月一日

宮城縣知事　寺田祐之殿

記

第九條　第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業セザルモノニ對シテハ入學志願者ノ數入學ヲ許スベキ人員ニ超過スル場合ト雖トニ拘ハラズ國語、算術、日本歷史、地理、理科ニ就キ尋常小學校卒業ノ程度ニ依リ入學試驗ヲ行フモノトス

學則訂正ノ儀ニ付認可申請

私立宮城女學校學則第九條ハ御達示ニ依リ訂正ノ儀別途開申候處本校ノ將來ニ於ケル管理上ノ都合有之候ニ付第九條ニ二項（及但書）ヲ左ノ通追加規定シ御指令ノ日ヨリ實施致度候間御認可相成度別紙現行學則相添此段申請候也

仙臺市東三番丁百六十六番地
私立宮城女學校設立者
セデー・リー・ワイドナー
Sadie Lea Weidner

明治四十四年二月一日

宮城縣知事　寺田祐之殿

記

第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業シタルモノニ對シテハ入學志願者ノ數入學ヲ許スベキ人員ニ超過スル場合ニ限リ國語、算術ニ就キ入學試驗ヲ行フモノトス

但シ本校長ノ意見ニ依リ試驗ヲ行ハス他ノ志願者ニ先チテ入學ヲ許スコトアルベシ

第六章

一九一一（明治四十四）年三月二十九日、第十九回卒業生二十五名の卒業式が挙行された。この中、二十名がクリスチャンであった。これら二十五名の卒業生は、文部省告示第二百四十号によって「高等女学校卒業者ト同等以上ノ学力ヲ有スルモノ」と認められた最初の卒業生となった。しかし、この第十九回卒業生よりも先に卒業した多くの卒業生も同等の学力を有している筈である。そこで、明治二十六年六月より明治四十三年四月までの間の本科卒業生全員百四十二名についても第十九回卒業生と同等の学力を有する旨の認定を受けるべく同年三月四日付で文部大臣に指定願を申請していたところ、同年四月十三日付文部省告示第百三十四号を以て文部大臣より次のような通達が届いた。(註二〇)

文部省告示第百三十四号

明治四十三年文部省令第三十二号附則第三項ニ依リ明治四十一年文部省令第三十二号第五条第二号ニ該当スル者ト同等ノ学力アリト認メ之ヲ指定スルコト左ノ如シ

明治四十四年四月十三日　　文部大臣

宮城縣私立宮城女学校　明治二十六年六月ヨリ仝四十三年三月マデニ本科ヲ卒業シタル者ニ限ル

かくして、宮城女学校本科第一回卒業生から此の年の卒業生である第十九回卒業生までの全卒業生が「高等女学校令」による公立高等女学校の卒業生と同等以上の学力があると認められた。このように認められた女学校は当時全国で十校だけであり、宮城女学校はそのリストの第二番目に位していた。まことに当然のことである。ちなみに一九一一（明治四十四）年三月末日までの卒業生数は表八の通りである。

なおこの三月には、聖書科（一年制）の第一回生八名が卒業した。この当時の聖書科の教科目は、聖書、カテキ

ズム、聖書考古学、音楽、英語、国語、漢文などであった。

ところで、宮城女学校の第二十六年度の新学年度は一九一一（明治四十四）年四月十日に授業を開始した。本学年度からは「高等女学校令」による女学校として新しく発足したわけである。入学を許可された生徒は三十五名であった。六月五日にワイドナー校長が外国伝道局へ送った一九一〇（明治四十三）年度の年次報告書によると、この一年間の特徴としてあげられることは生徒達のために特別講演会をしばしば開催したことである。講師の中にはノッス博士、ファウスト博士、貴族院議員（元宮城県知事）小野田元熙（もとひろ）、陸軍士官学校伊藤大佐、その他各方面の知名の士があり、生徒一同大いに啓発されたことと思われる。又、特別研究科生のためには東北学院教授梶原長八郎が四回、特別講演を行なっている。又、同窓生による寄贈が基礎となって設けられた宮城女学校基本金会計へ小野田元熙をはじめ数名から合計二百十円の寄附が寄せられ、宮城女学校の教育に期待する理解者がふえていることが分る。

表八

第一回	4名
第二回	1名
第三回	5名
第四回	3名
第五回	2名
第六回	1名
第七回	5名
第八回	11名
第九回	8名
第十回	8名
第十一回	3名
第十二回	4名
第十三回	4名
第十四回	11名
第十五回	20名
第十六回	16名
第十七回	16名
第十八回	20名
第十九回	25名
計	167名

創立満二十五年記念式典

さてこの年は宮城女学校創立満二十五年の年である。記念式典は十月二十五日に挙行されることになった。日時が決定するや早速文部大臣に次のような申請書を送り準備に着手した。

開校二十五年祝賀式擧行ニ付申請書

宮城縣仙臺市
私立宮城女學校

當校ハ明治十九年九月十八日ノ開校ニシテ本年ヲ以テ将ニ滿二十五年ト相成リ候ニ付キ来ル十月二十五日ヲ以テ其祝賀式ヲ擧行致ス豫定ニ御座候就テハ文部大臣閣下並ニ第三地方部擔任視學官ノ御臨校ヲ得テ御訓示ヲ賜ル様致度若シ御政務ノ御都合上閣下ノ御光臨ヲ辱ウスルヲ得ザル場合ハ御訓示計リモ賜ハルノ榮ヲ得度當校沿革概要相添ヘ此段申請仕候也

明治四十四年七月十日

右設立者
校長　セデー・リー・ワイドナー
Sadie Lea Weidner

文部大臣　小松原英太郎殿

記念行事の日程大要は次の通りである。

一、十月二十二日（日）　紀念礼拝
一、十月二十四日（火）　文学会第二十回紀念大會　午後六時半
一、十月二十五日（水）　紀念祝賀式　午後一時半
　　同窓会紀念感謝会　午前十時
一、十月二十六日（木）
　　紀念同窓会大会　正午
　　同窓会紀念親睦会　午後六時半
一、十月二十七日（金）　園遊会　午後二時～五時

十月二十五日の記念祝賀式においては、明治学院総理井深梶之助並びに女子学院長矢嶋楫子に特別記念演説を願うこととなり、次のような書面が送られた。

拜啓益御清適奉賀候偖テ當校創立第二十五年紀念祝賀會モ大體別紙日割ニヨリ執行ノコトヽ決定準備致居リ候御演説ハ二十五日午后一時半ヨリ執行ノ紀念式場ニ於テ願上ゲ候コトニテ御座候御參考ニモト存別紙當校沿革略御高覽ニ供シ候尚ホ御出迎ノ都合モ有之候間御着仙ノ日時前以テ御一報下サル様願上置候右貴意ヲ得度如此ニ候敬具

明治四十四年十月十日

仙臺市東三番丁百六十六番地
宮城女學校長　セデー・リー・ワイドナー

井深梶之助殿（東京市芝区白金町今里明治学院）
矢嶋楫子殿（東京市麹町区上二番丁三三女子学院）

又、記念諸行事についてもそれぞれ次のような案内状が発送された。

拜啓當校創立第二十五年紀念祝賀會に際し來る二十四日（火曜日）午後六時半より本會第二十回紀念大會を擧行致候間御來臨被成下度此段御案內申上候　敬具

明治四十四年十月十八日

仙臺市東三番丁百六十六番地
宮城女學校文學會長　セデー・リー・ワイドナー
殿

追て御來臨の際は此狀御持參被下度候

――――×――――

拜啓當校創立以來茲に滿二十五年と相成候に付來る二十五日午後一時半より紀念祝賀式擧行致候間御來臨被成下度此段御案內申上候　敬具

明治四十四年十月十八日

仙臺市東三番丁百六十六番地
宮城女學校長　セデー・リー・ワイドナー
殿

――――×――――

拜啓今般母校創立第二十五年紀念祝賀會ヲ擧行セラルヽニ際シ來ル二十六日午前十時ヨリ紀念感謝會正午ヨリ紀念同窓會大會（會費金貳拾五錢）午後六時半ヨリ紀念親睦會（會費金拾錢）相開キ候間萬障御繰合セ御來會被成下度此段御案內申上候　敬具

明治四十四年十月十八日

仙臺市東三番丁百六十六番地
宮城女學校同窓會々長　原田あとぢ
殿

――――×――――

拜啓今般母校創立第二十五年紀念祝賀會ヲ學行セラルヽニ際シ來ル廿六日木曜日午后六時半ヨリ紀念親睦會相開キ候間萬障御繰合セ御來會被成下度此段御案內申上候　敬具

明治四十四年十月十八日
仙臺市東三番町百六十六番地
宮城女學校同窓會々長　原田あとぢ
殿

追テ會費拾錢當日御持參ノコトヽ御承知願上候尚準備ノ都合有之候間御來否來ル廿日迄必ズ御一報下サル樣願上候

――――×――――

拜啓當校創立第二十五年紀念祝賀の爲め來る二十七日（金曜日）午後二時より五時迄校內に於て園遊會相催候間御來臨被成下度此段御案內申上候　敬具

明治四十四年十月十八日
仙臺市東三番丁百六十六番地
私立宮城女學校長　セデー・リー・ワイドナー
殿

追て御來臨の際は此狀御持參被下度候

十月二十五日の記念祝賀式の式次第は次のごとくであった。(註二)

創立第二十五年紀念祝賀式順序

一　奏樂ピアノ八手連彈　（山本教員／吉田教員／及川卒業生／中村教員）
二　讃美歌　四百三十六番　菅井牧師
三　聖書朗讀　モール博士
四　祈禱　同
五　君ヶ代　一同
六　勅語奉讀　早坂幹事
七　式辭　ワイドナー校長
八　沿革略史　早坂幹事
九　奏樂ピアノ獨彈　ハンセン教員

一〇　演說　矢嶋女子學院長
一一　演說　井深明治學院總理
一二　創立者祝辭　コート博士夫人
一三　唱歌　生徒
一四　祝辭
長谷場文部大臣祝辭
寺山宮城縣知事祝辭
遠藤仙臺市長祝辭
伊達邦宗君祝辭
スカイラー米國代理大使祝辭
澤柳東北帝國大學總長祝辭
大澤宮城縣立高等女學校長祝辭
早川仙臺市教育會長祝辭
シュネーダー東北學院長祝辭
宮城女學校同窓會祝辭　磯村夫人
宮城女學校校友會總代祝辭　桑原夫人
父兄總代祝辭　田代進四郎氏
レフォームド教會ミッション總代祝辭　フアウスト博士
日本基督教會宮城中會總代祝辭　梶原教師
在仙外國宣教師總代祝辭　クック教師
仙臺牧師會總代祝辭　川澄牧師
一五　獨吟　サイブル博士夫人
一六　頌歌　四百六十番
一七　祝禱　ミラー教師
以上

創立者祝辞を述べたコート博士夫人とは初代校長エリザベス・R・プールボーである。又、同窓会祝辞を述べた磯村夫人とは第七回卒業生小泉はるである。

これらの諸行事は関係者一同の協力によっていずれも周到な準備のもとにそれぞれ当日を迎えいずれも極めて盛大に感激の裡に終了した。校長以下全教職員、生徒、同窓生、来賓、内外各教会の教会員など、すべての人々が宮城女学校を支え導き給う神に衷心より感謝の祈りをささげた。記念行事終了後、これら諸行事のための特別の協力者であったシュネーダー東北学院長・須子東二番丁高等小学校長・萱場東二番丁尋常高等小学校長・有馬東八番丁尋常小学校長に対して次のような感謝の書面が送られている。

謹啓時下秋晴の候益々御清適奉賀候扨て今回擧行致し候當校創立第廿五年紀念祝賀會に際しては多大の御賛助を辱うし加之御要品拜借仕り御蔭様にて無滞結了を告げ申候儀難有奉感謝候右御禮申し述べ度如此ニ候　敬具

明治四十四年十月三十一日

宮城女学校長
セデー・リー・ワイドナー
同校幹事
早坂哲郎

「私立宮城女学校一覧」

記念式典にあたっては、記念品として「私立宮城女学校一覧」が記念刊行され、出席者一同に贈られた。これは七十頁からなる一覧であって、その内容は、私立宮城女学校々舎全景・沿革・職員・教員・嘱託教員・名誉教員・学則・明治四十四年度教科書・文学会・基督教女子青年会・同窓会・生徒・卒業生・卒業後ノ状況・舊職員・舊教員・私立宮城女学校略図からなるものである。その印刷所は東北学院労働会金子紀念印刷所（印刷者淺賀甚吉）である。それらの一部分を次に紹介する。

宮城女學校職員及受持學科

職員

校長　セデー・リー・ワイドナー
幹事　早坂哲郎
舍監　田内ヨウ
書記　三浦忠之丞
醫　中村忠篤

教員

聖書・英語　セデー・リー・ワイドナー
修身・教育　早坂哲郎
理科　京道信次郎
英語　原田さとぢ
數學　三浦忠之丞

聖書・英語・音樂　バチエラー・オヴ・アーツ（ケヤンザアス大學）　ケート・インゲバーグ・ハンセン

聖書・英語　バチエラー・オヴ・アーツ（ケヤンザアス大學）　リデア・アルマイラ・リンゼー

聖書・体操　中村まつ

歴史・國語・漢文　文學士　村上兵助

作法・家政・割烹　田內ヨウ

裁縫　志賀イチ

歴史・地理・法制・經濟　早稻田大學卒業　鈴木寅之進

音樂　山本みさほ

習字・圖畫　石原重思

數學・簿記　筒井千吾

音樂　吉田藤枝

聖書・英語　バチエラー・オヴ・アーツ（ハイデルブルグ大學）　アンナ・ガートルド・シユーツ

聖書・英語　バチエラー・オヴ・アーツ（ハイデルブルグ大學）　オリー・アメリア・ブリツク

聖書・英語　バチエラー・オヴ・アーツ（フレデレック女子大學）　マーガレット・ヂェーン・リーダー

囑託教員

聖書考古學　ドクトル・オヴ・フヰロソフヰー（ヂョンスホプキンス大學）　ウヰリアム・ジー・サイブル

看病・婦人・衛生・育兒　中村忠篤

名譽教員

深田康守

永沼織之允

表九　學科課程表

學科目＼學年	聖書	修身	國語漢文	英語	歷史地理	數學	理科	圖畫	家事	裁縫
每週定時數	四	二	七	八	三	三	二	一		四
第一學年	新約及舊約	作道德ノ要領	國語文法講習字讀作文	發音綴字書取讀方文法讀解會話習字	日本歷史日本地理	算術	植動物	自在畫		運針縫方裁方服地繕方
每週定時數	四	二	七	八	三	三	二	一		四
第二學年	仝上	仝上	仝上	綴字書取讀方讀解會話文法	仝上	仝上	動生理及衛生物	仝上及川器畫		仝上
每週定時數	四	二	七	八	三	三	二	一		四
第三學年	仝上	仝上	仝上漢文講讀	綴字書取讀方讀解會話文法作文	東洋史外國地理	仝上	生理及衛生物理	仝上及考案畫		仝上ミシン使用法
每週定時數	四	一	五	九	二	二	二	一	二	四
第四學年	仝上	仝上	國語漢文習字講讀作文	讀方讀解會話文法作文	西洋史	代數	物化學及鑛物理	仝上	衣食住	仝上
每週定時數	四	一	五	九	二	二	二	一	三	四
第五學年	仝上	仝上	仝上	仝上	西洋史地	幾何	化學及鑛物天文	仝上	看病婦人衛生及育兒家計簿記割烹	仝上

音樂	教育	法制經濟	体操	合計
二			三	三元
唱歌 樂器使用法			普通體操及遊戲	
理論				
二			三	三元
仝 上			仝 上	
二			三	三元
仝 上			仝 上	
二	一	一	三	三元
仝 上	教育ノ大要	法制經濟ノ大要	仝 上	
一	一	一	三	三元
仝 上	仝 上	仝 上	仝 上	

明治四十四年度教科用書

第一學年

聖書　新舊約全書　定價金五錢以上

さんびか　定價金拾貳錢以上

修身　明治四十年四月十五日小林義則發行　文部省著作

高等女學校用　修身教科書　一　定價金拾錢

國語　明治三十九年十一月廿二日明治書院發行　佐藤球著　明治三十年一月廿五日檢定濟

改訂高等女子讀本　卷ノ一、二、三　定價各金貳拾參錢

習字　明治三十八年二月五日明治書院發行　大口鯛二著　明治三十八年二月十日檢定濟

高等女子習字教科書　一　定價金貳拾四錢

英語　シアース讀本　プリマー及卷ノ一　定價金四拾六錢

明治四十二年發行　興文社　齋藤秀三郎著

ミッドル スクール イングリシュ レッスンズ　卷ノ一　定價金四拾五錢

開盛舘發行

ニュー センチリー ペンマンシップ　首巻及一卷　定價各金九錢

歷史　明治卅八年九月十日吉川弘文舘發行　文學博士黑板勝美著　明治卅九年二月十四日檢定濟

女學校用新訂日本歷史　全　定價上製金六拾錢並製金四拾五錢

地理　明治卅八年二月五日吉川弘文舘發行　地理教授研究會編纂　本邦ノ部　明治卅八年三月二十日檢定濟

明治卅七年訂正女子新地理教科書　定價金六拾錢

同　附圖　同金參拾五錢

數學　明治圖書株式會社發行　森岩太郎編　明治四十四年三月十八日檢定濟

女學校用算術新教科書　上卷　定價金四拾五錢

理科　明治四十二年二月廿三日光風舘發行　濱幸次郎河野齡藏著　明治四十二年三月一日檢定濟

女子用植物教科書　定價金四拾錢

女子用動物教科書　定價金四拾錢

圖畫　明治四十二年三月十日金港堂發行四版　淺井忠著　明治四十年三月十四日檢定濟

新編自在畫臨本　第一編第二編　定價各金拾六錢

第二學年

聖書　新舊約全書　定價金五錢以上

さんびか　定價金拾貳錢以上

修身　明治四十年四月十五日小林義則發行　文部省著作

高等女學校用修身教科書　二　定價金拾壹錢

國語　明治卅九年十一月廿二日明治書院發行　佐藤球著　明治三十年一月二十五日檢定濟

改訂高等女子讀本　卷ノ四、五、六　定價各金貳拾參錢

習字　明治三十八年二月五日明治書院發行　大口鯛二著　明治三十八年二月十日檢定濟

高等女子習字教科書　二　定價金貳拾四錢

英語　シアース讀本　卷ノ一、卷ノ二　定價卷ノ二金五拾四錢
明治四十二年　興文社發行　齋藤秀三郎著
ミッドル スクール イングリシュ レッスンズ　卷ノ二　定價金四拾五錢
歷史　明治卅八年九月十日吉川弘文舘發行　文學博士黒板勝美著　明治卅九年二月十四日檢定濟
女學校用新訂日本歷史　全　定價上製金六拾錢並製金四拾五錢
地理　明治卅八年二月五日吉川弘文舘發行　地理教授研究會編纂　外國の部　明治卅八年二月十一日檢定濟
明治卅七年訂正女子新地理教科書　全　定價金六拾錢
同　附圖　同金參拾五錢
數學　明治圖書株式會社發行　森岩太郎編　明治四十四年三月十八日檢定濟
女學校用算術新教科書　中卷　定價金四拾五錢
理科　女子用動物教科書　定價金四拾錢
明治卅八年一月廿五日吉川弘文舘發行　岩川友太郎藤堂忠次郎著　明治卅八年三月二日檢定濟
女子理科生理衛生　定價金五拾八錢
圖畫　明治四十二年三月十日金港堂發行四版　淺井忠著　明治四十年三月十四日檢定濟
新編自在畫臨本　第三編第四編　定價各金拾六錢

第三學年

聖書　新舊約全書　定價金五錢以上
さんびか　定價金拾貳錢以上
修身　明治四十年四月十五日小林義則發行　文部省著作
高等女學校用修身教科書　三　定價金拾參錢
國語　明治卅九年十一月廿二日明治書院發行　佐藤球著　明治三十年一月二十五日檢定濟
改訂高等女子讀本　六　前學年ノ續キ
明治三十年十月五日博文舘發行　北畠親房著

校註神皇正統記　定價金貳拾五錢

漢文　明治三十九年一月二十二日明治書院發行　簡野道明著　明治卅九年二月二日檢定濟
女子漢文教科書　卷ノ一　定價金貳拾七錢

習字　明治三十八年二月五日明治書院發行　大口鯛二著　明治三十八年二月十日檢定濟
高等女子習字教科書　三　定價金貳拾四錢

英語　明治三十七年四月七日鐘美堂發行　バーンズ著
ニューナショナルリーダー　卷ノ四　定價金五拾八錢

明治四十二年發行興文社　齋藤秀三郎著
ミッドルスクールイングリシュレッスンズ　卷ノ三　定價金五拾錢

歷史　明治四十一年一月五日六盟舘發行　小川銀次郎編　明治四十一年一月十四日檢定濟
修正女子東洋史　定價金五拾錢

地理　明治卅八年二月十日吉川弘文舘發行　地理教授研究會編纂・外國の都　明治卅八年二月十一日檢定濟
明治卅七年訂正女子新地理教科書　全　定價金六拾錢
同　附圖　同金參拾五錢

數學　明治圖書株式會社發行　森岩太郎編　明治四十四年三月十八日檢定濟
女學校用算術新教科書　下卷　定價金四拾五錢

理科　女子理科生理衛生　堀田要三郎著　渥美鏡太郎著　明治卅八年三月八日檢定濟　定價金五拾八錢
明治四十年三月十八日吉川弘文舘發行
女子理科物理　定價金五拾五錢

圖書　明治四十二年三月十日金港堂發行四版　淺井忠著　明治四十年三月十四日檢定濟
新編自在畫臨本　第五編第六編　定價各金拾六錢

第四學年
聖書新舊約全書　定價金五錢会上

さんぴか　定價金拾貳錢以上

修身
明治四十年四月十五日小林義則發行　文部省著作
高等女學校修身教科書　四　定價金拾三錢

國語
明治卅九年十一月廿二日明治書院發行　佐藤球著　明治三十年一月二十五日檢定濟
改訂高等女子讀本　卷ノ七　定價金貳拾參錢
明治三十八年一月五日博文館發行　鴨長明著
方丈記讀本　定價金八錢

漢文
和田、佐藤校　明治書院發行
增鏡讀本　定價金四拾五錢
明治三十九年一月二十二日明治書院發行　簡野道明著　明治卅九年二月一日檢定濟
女子漢文教科書　卷ノ二　定價金貳拾四錢

習字
明治三十八年二月五日明治書院發行　大口鯛二著　明治三十八年二月十日檢定濟
女子高等習字教科書　四　定價金貳拾四錢

英語
明治三十七年七月二十二日鐘美堂發行　バーンズ著
ニューナショナルリーダー　卷ノ五　定價金八拾五錢
明治四十二年興文社發行　齋藤秀三郎著
ミッドルスクールイングリシュレッスンズ　卷ノ四　定價金五拾錢
明治四十三年三省堂發行　神田氏英文典第一　定價金四拾錢

歷史
明治卅九年十一月十五日開盛舘發行　文學博士箕作元八著　明治四十一年十月二十日檢定濟
女子教育西洋史教科書　定價金五拾五錢

數學
高木貞治著　開盛舘發行　明治四十一年二月十四日檢定濟
女子教育代數學初步　定價金五拾錢

理科
女子理科物理　三學年ニ同ジ　濱幸次郎　河野齡藏著　定價金五十五錢
明治三十九年十二月五日光風舘發行　明治卅九年三月十六日檢定濟

女子用化學鑛物教科書　定價金五拾錢

家事　明治四十一年二月廿日秀英舍發行　佐方鎭子共著　後閑菊野共著　明治四十一年十月二十日檢定濟

教育　家事教科書　上卷　定價金四拾錢
明治四十一年一月廿三日金港堂發行　槇山榮次著　明治四十三年一月卅一日檢定濟　四版
訂正女子教育學教科書　全　定價金五拾錢

法制經濟　明治四十一年十二月五日寶文舘発行寶文舘編輯所編纂　明治四十四年二月十六日檢定濟
改修最新法制經濟教科書　全　定價金六拾五錢

第五學年

聖書　新舊約全書　定價金五錢以上
さんびか　定價金拾貳錢以上

修身　明治四十年四月十五日小林義則發行　文部省著作
高等女學校用修身教科書　五　定價金拾五錢

國語　明治卅九年十一月廿二日明治書院發行　佐藤球著　明治卅年一月廿五日檢定濟
改訂高等女子讀本　卷ノ八　定價金貳拾參錢

明治四十年一月三十日元々堂發行　藤岡作太郎著　明治四十一年二月十八日檢定濟
日本文學史　定價金四拾錢

漢文　明治三十九年一月二十二日明治書院發行　簡野道明著　明治卅九年二月一日檢定濟
女子漢文教科書　卷ノ四　定價金貳拾七錢

英語　明治三十七年七月二十二日鐘美堂發行　パーンズ著
ニューナショナルリーダー　卷ノ五　定價八拾五錢

明治四十二年　興文社發行　齋藤秀三郎著
ミッドルスクールイングリシュレッスンズ　卷ノ五　定價金五拾錢

明治四拾三年三省堂發行　神田氏英文典第二　定價金四拾錢

歷　史　明治卅九年十一月十五日開盛舘發行　文學博士箕作元八著　明治四拾一年十月廿日檢定濟
　女子教育西洋史教科書　定價金五拾五錢
地　理　明治三拾九年三月六日開盛舘發行　山崎直方著　明治三拾九年三月拾四日檢定濟
　普通教育地文學教科書　定價金八拾錢
數　學　小林盈、稻垣作太郎合著　光風舘發行　明治四拾年十二月二十五日檢定濟
　女子用幾何學教科書　完　定價金四拾五錢
理　科　女子用化學鑛物教科書　四學年ニ仝ジ
家　事　明治四十一年二月廿日秀英舍発行　佐方鎭子　後閑菊野共著　明治四拾一年三月三拾日檢定濟
　家事教科書　下卷　定價金四拾五錢
教　育　明治四十三年一月廿三日金港堂發行　槇山榮次著　明治四拾三年一月卅一日檢定濟　四版
　訂正女子教育學教科書　全　定價金五拾錢
法制經濟　明治四十一年拾二月五日寶文舘發行　寶文舘編輯所編纂　明治四拾四年二月拾六日檢定濟
　改修最新法制經濟教科書　全　定價金六拾五錢

文學會

本校文學會ハ明治廿三年九月ノ創設ニ係リ本校當局ノ監督指導ノ下ニ生徒之ヲ經營シ本校教職員生徒ハ當然之ニ屬スベキモノトス

本會ハ毎月一回例會毎歲一回大會ヲ開ク本年度ヲ以テ第廿回大會ヲ開クニ至レリ又本會ノ記事ヲ收錄シテ雜誌『萩の下露』ヲ發行ス　本會會則ハ左ノ如シ

第一條　本會ハ會員ノ智德ヲ增進シ學藝ヲ練磨シ兼テ交際法ヲ學習スルヲ以テ目的トス

第二條　本會ヲ宮城女學校文學會ト稱ス

第三條　本會ハ宮城女學校生徒ヨリ成ル

第四條　本校職員ニシテ本會ヲ贊助シ毎月金七錢以上ノ金品ヲ寄附セラルヽトキハ贊助員ト稱ス

第五條　本校卒業生及ビ舊生徒ニシテ本會ヲ贊助セラルヽトキハ會友ト稱ス

第六條　本會ノ目的ヲ達スル爲ニ左ノ事項ヲ擧行ス

第一　毎月一回（毎年十月ノ會合ヲ紀念大會ト稱ス）會員ノ會合ヲ開キ文詞朗讀　暗誦　會話　演說　談話　音樂　唱歌　家事及ビ製作物參考品ノ展覽　會議　報告　等

ヲナス

但シ必要ナル場合ニハ役員會ノ決議ニヨリ臨時會ヲ開クコトアルベシ

第二　毎月一回會員ノ寄稿及ビ本會ノ記事其他有益ノ事項ヲ輯メテ雜誌ヲ編成ス

第七條　會務ヲ處理スル爲メ左ノ役員ヲ置ク

會　長　一　名

會務ヲ總理シ兼テ會議ノ長トナル

副會長　二　名

會長ヲ補佐シテ會務ヲ處理シ會長事故アルトキハ其代理ヲナス

委　員　六　名

會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

第八條　會長ハ委員會ノ決議ニヨリ贊助員中ヨリ推薦ス

第九條　委員ハ會員ノ互選ヲ以テ定ム

第一條　會長及委員ノ任期ハ一ケ年トス重任妨ナシ

第十一條　會員ハ本會ヲ維持スル爲メ毎月會費トシテ金五錢ヅツ出スモノトス

第十二條　此會則ハ會議ヲ經テ變更スルコトヲ得

基督教女子青年會

本校基督教女子青年會ハ明治三十九年三月十六日ヲ以テ組織シ萬國基督教女子青年會ニ同盟ス其會則次ノ如シ

第一條　名　稱

本會ヲ名ケテ宮城女學校基督教女子青年會ト稱ス

第二條　目　的

本會ノ目的ハ基督教ニヨリ會員ノ德性ヲ涵養シ青年女子ノ間ニ基督教ノ智識ヲ普及シ唯一ノ救主ナル基督ニ導キテ主ヲ信奉セシムルニアリ

第三條　會　員

一　本會ノ正會員ハ福音主義ノ教會ニ屬セル本校ノ女子職員生徒及ビ高等科生ニシテ本會ノ規則ニヨリテ役員ノ之ヲ推薦セシムルモノナリ正會員ニ限リ役員選擧ノ權及ビ役員タルノ權ヲ有ス

二　本校生徒ニシテ本會ノ精神ヲ贊シ本會ニ同情ヲ寄スルモノヲ役員ノ推薦ニヨリテ本會ノ準會員トス

三　本校職員卒業生ハ名譽會員ニ推薦ス但シ名譽會員ハ役員選擧權及ビ役員タルノ權ヲ有セズ

四　本會會員ハ必ズ本會ノ規則ヲ遵守シ入會ノ際ハ自筆ニテ會ノ名簿ニ記入スベシ

第四條　會　費

本會々員ハ一ケ月金壹錢宛則チ一學年間金拾錢ヲ會費トシテ本會會計ニ納ムベシ

第五條　役　員

一　本會役員ハ會長副會長會計記錄書記通信書記各一名トシ每年總會ニ於テ之ヲ選擧シ其任期ヲ一ケ年トス

二　會長ハ本會ヲ總理シ總會其他事務會ノ議長トナリ且ツ委員ヲシテ各其ノ任ヲ負ハシムルコト

三　副會長ハ會長不在ノ時其事務ヲ代理ス
四　記錄書記ハ本會ニ關スル一切ノ記錄ヲ司リ每會出席會員ヲ記名シ且ツ選擧サレタル各部委員ニ其由ヲ通告スベシ
五　通信書記ハ本會ニ關スル書信ノ往復ヲ司リ且ツ本部ヘ報告ヲナスモノトス
六　會計ハ本會ノ金錢ノ出納ヲ司ル
七　若シ役員欠員アルトキハ次ノ總會ニ於テ補欠選擧ヲ行フ

第六條　委　　員

一　凡テ委員ハ會員ノ推薦ニ由ルモノトス
二　役員會ハ本會ノ役員ヲ以テ組織シ各部委員長ハ役員會ノ事務ヲ所理スルノ權ヲ有ス
三　誘導委員ハ每學年ノ始ニ於テ特ニ新入生ニ注意シ之レニ接シ之レヲ導クコトヲ務メ學年間ニ會員ノ增加ヲ計ルコト
四　集會委員ハ會員ニ利益ヲ與フルニ適當ナルモノト認メタル集會ヲ開クニ準備ヲナスコト
五　親睦會委員ハ互ノ友情ヲ温ムル爲メニ時々親睦會ヲ開クコト
六　會長ハ每期ノ始メ或ハ時々役員及ビ各部委員長ヲ召集シ其學期間ノ運動及ビ事業ニ就テ協議會ヲ開クベシ
七　校長ハ職權上各部委員會ニ臨席スルコトヲ得

第六章　會

第七條　集　　會

一　定期總會ハ三月ニ開キ議事役員ノ改選事務ノ報告ヲナス
二　臨時總會ハ會長ノ召集ニヨリ臨時ニ之ヲ開ク但シ正會員五名以上連署ニテ臨時會召集ノ請求アリタル時ハ會長ハ之レヲ拒ムコトヲ得ズ
三　役員ノ定メニヨリ每月集會ヲ開クコトヲ得ベシ

第八條　改　　變

本會規則ヲ取捨スルコトアル時ハ前ノ會ニ於テ或ハ前以テ會員ニ通告シ置キ出席者ノ三分ノ二ノ贊成ヲ要ス
但シ第三條ノ一ハ本會ガ日本基督敎女子靑年會同盟ニ加入セル間ハ之レヲ變更スルコトヲ得ズ

附　　則

一　福音主義ノ敎會トハ聖書ヲ完全ナル信仰ノ基礎トシ導トシテ信ジ人ヲシテ唯一ノ救主即チ眞神眞人ナル基督ヲ主トシ救主ト信ゼシムル敎義ヲ奉ズル敎會ナリ

同　窓　會

本校同窓會ハ明治二十六年第一回卒業生ヲ出スト共ニ組織セラレ左ノ規定ニ依リ行動シ來レリ而シテ昨明治四十三年十二月東京及其附近在住ノ同窓生ハ左ノ規定ニ依リ東京部會ヲ創設シタリ

宮城女學校同窓會規定

第一條　本會ハ宮城女學校同窓會ト稱ス
第二條　會員ハ宮城女學校本科卒業生ヨリ組織ス
第三條　本會ノ目的ハ卒業生相互ノ舊交ヲ溫メ女子ノ德義ヲ尙ウ

シ智識ノ交換及ビ宮城女學校ノ隆盛ヲ圖ルニアリ

第四條　役員ハ會長一名書記一名會計一名ヲ便宜ノタメ在仙會員中ヨリ選擧シ其期限ハ一ケ年トシ再選スルコトヲ得

一　會長ハ常ニ本會目的上ノ運動ニ注意シ又本會ノ事務ヲ總理ス

一　書記ハ本會ノ記錄及ビ事務ヲ司リ會長ヲ補佐ス

一　會計ハ本會ノ會計ヲ司ルモノトス

第五條　集會ハ會長ノ召集ニ任ズルモ毎年卒業式日後必ズ開會ス時ニ博學ノ士ニ請フテ說ヲ聞クコトアリ

第六條　會費ハ一ケ年金貳拾錢（但シ都合ニヨリ變更スルコトアルベシ）大會費金貳拾錢ヲ納ムルモノトス又本會ノ目的ヲ贊助シ金品ヲ寄附スルモノハ之ヲ受領ス

第七條　此規定ハ會員半數以上ノ決議ヲ經ルニアラザレバ變更セザルモノトス

表十

私立宮城女學校卒業生員數及卒業後ノ狀況調（＊印ハ既婚）

年度	合計	傳道者	高等女學校又ハ同等校教員	小學校教員	幼稚園保姆	家庭教師	通譯官	通譯者	新聞記者	會社事務員	產婆	內國學生	家事ニ從事スル者	在米國	在加奈太	死亡
明治二十五年度	＊四				＊一								＊二			＊一
〃二十六年度	＊一												＊一			
〃二十七年度	＊五				＊一								＊一	＊二		＊一
〃二十八年度	＊三												＊三			
〃二十九年度	＊二		＊一										＊一			
〃三十　年度	＊一													＊一		

総計	計	〃四十三年度	〃四十二年度	〃四十一年度	〃四十年度	〃三十九年度	〃三十八年度	〃三十七年度	〃三十六年度	〃三十五年度	〃三十四年度	〃三十三年度	〃三十二年度	〃三十一年度
一六七	七〇 *九七	二二 *三	一三 *七	一一 *五	六 *一〇	八 *一二	三 *八	*四	*四	一 *二	二 *六	二 *六	二 *九	*五
一一	一一		四	三	一	二						一		
九	七 *二		二	一		一					一	一	一	*一
七	五 *二	一	一	一	一	*二	一							
四	二 *二	一	一											
三	二 *一					一				一			*一	
二	二					二								
五	五	二	一	一		一								
一	*一													*一
三	三	一			一		一							
一	*一							*一						
二一	二一	一五	四		一						一			
九〇	一二 *六	*二	*七	*五	*五	*九一	*八一	*三	*三	*二	*六	*四	*八一	*三
五	*五	*一										*一		
一	*一								*一					
四	*四					*一						*一		

この記念すべき一年間も、前年に引続いて各界著名の士による特別講演会が開催され、講演者の中には、衆議院議員私立岡山中学校長服部綾雄、宮城女学校創立が認可された当時宮城県知事であった松平正直男爵、創立当時並びに創立後も校主の重責をになうなど学校の発展に貢献した首藤陸三などの名も見られ又、在日宣教師社団在仙宣教師による大隈重信伯爵（首相）招待会が宮城女学校で開催されたりもした。[註二二]基督教女子青年会の活動も極めて活発であって、夏の全国大会へは十一名の代表を送り、又、全国協議会へも十五名を派遣しているが、宮城女学校生徒の活躍が全国的になって来た一例と言えよう。なおここで感謝すべき特記事項として、津田英学塾（現津田塾大学）長津田梅子から宮城女学校英語科教員のために奨学金の提供があり、教員一名（原田ことぢ）が一年間、津田英学塾研究科で更に研鑽を積んでいる。しかもこの間、代講者として一名の教員を津田英学塾から宮城女学校に派遣しているのであるが、これは、宮城女学校卒業生で津田英学塾（女子英学塾時代をも含む）に学んだ者がいずれも優秀な成績をおさめた立派な人物であり、彼女らが、母校宮城女学校で良き働きをしていることを知り、更に勉学の機会を提供したものと思われる。

なおこの年、一九一一年、寄宿舎の北側隣接地約六百七十坪（東二番丁百三十四番地）を購入し、校地が更に広くなった。

専攻科設置

一九一二（明治四十五）年、宮城女学校に新たに家政専攻科並びに英文専攻科を設置する計画がまとまり三月二十日、次のような申請書を宮城県知事に申請した。一九一二年度には家政専攻科生を、一九一三年度には英文専攻科生をそれぞれ募集開始する計画であった。

専攻科設置ニ付キ學則追加認可申請

仙臺市東三番丁
私立宮城女學校

今般當校ニ於テ専攻科ヲ設置シ高等女學校卒業以上ノ女子ニ家政及ヒ英語ニ關スル高等ノ教育ヲ致度ニ付現行學則ニ別紙第九章第三十八條乃至第四十七條ヲ追加シ家政專攻科生徒ハ明治四十五年四月一日ヨリ英文專攻科生徒ハ明治四十六年四月一日ヨリ募集致度候間御認可被成下度現行學則相添ヘ此段申請仕候也

追テ生徒ノ定員ハ家政專攻科三學年ヲ通計シテ七十五名英文專攻科同七十五名同豫科二十名ノ豫定ニ御座候

明治四十五年三月二十日

右設立者
セデー・リー・ワイドナー
Sadie Lea Weidner

宮城縣知事　寺田祐之殿

（別　紙）

第九章　專攻科

第三十八條　本校ニ專攻科ヲ置キ之ヲ分チテ家政科英文科ノ二トシ英文科ニ豫科ヲ置ク

第三十九條　專攻科ノ修業年限ハ家政科三ケ年英文科三ケ年英文科豫科一ケ年トス

第四十條・專攻科各學年ニ於ケル各學科程度及毎週教授定時數ハ左ノ如シ但シ教授ノ一定時ハ四十分トス又隨意科ハ生徒ノ志望ニヨリ其學力ヲ檢案シテ之ヲ課スルコトアルベシ

第　六　章

第四十一條　家政專攻科第一學年ニ入學ヲ許スベキ者ハ左ノ一項ニ該當スルモノトス

一　修業年限四ケ年以上ノ高等女學校卒業者

二　專門學校入學者檢定規程ニ依リ無試驗檢定ヲ受クル資格アル者若クハ該試驗檢定合格者

三　前二項中何レノ資格ヲ有セズトモ高等女學校ノ必修學科目ヲ試驗シ修業年限四ケ年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルト認メタルモノ

第四十二條　英文科豫科ニ入學ヲ許スベキモノハ前條ノ資格ヲ有シ更ニ英語ノ入學試驗ニ合格シタルモノトス

第四十三條　英文科第一學年ニ入學ヲ許スベキモノハ左ノ

一項ニ該當スルモノトス

一　本校卒業者及英文科豫科修了者

二　第四十一條ノ資格ヲ有シ更ニ前項豫科修了者ト同等以上ノ英語ノ學力アルモノ

第四十四條　第二學年以上ニ入學ヲ許スベキモノハ第四十一條ノ資格ヲ有シ更ニ前各學年ノ學科目及課程ニ就キ試驗ヲ經タルモノトス

第四十五條　專攻科入學志願者ハ入學願書ト共ニ入學試驗手數料金五拾錢ヲ納ムルモノトス

第四十六條　專攻科ノ授業料ハ一ケ月金貳圓トス

第四十七條　專攻科寄宿生徒ノ外出平日ニアリテハ午后三時半ヨリ同五時マデ土曜日、祝日、大祭日及皇后陛下御誕辰日ニハ朝食後ヨリ午后五時マデ之ヲ許ス

表十一

家政專攻科學科課程表

學科目＼學年	毎週定時表	第一學年	毎週定時表	第二學年	毎週定時表	第三學年
必修 聖書	二或四	新約及舊約	二或四	新約及舊約	二或四	新約及舊約
修身	一	道德ノ要領	一	同上	一	同上
家事	三	家事　割烹　經濟	三	同上	三	同上
裁縫	一〇	裁縫	八	同上	八	同上
教育	一	應用心理學　論理學大意	一	教育ノ原理	二	教育ノ原理　教授法
生理衛生	二	生理學	二	衛生學		

科目	隨意科目			科目				
音樂	簿記	漢文	英語	合計	体操	音樂	國語	物理化學
三	二	一	三	二四 二六	二	一	二	
一ピアノ或ハオルガン 一音樂理論 一音樂者傳	商業簿記	講讀	譯解		普通体操及遊戲	唱歌	講讀作文	
三	二	一	三	二四 二六	二	一	二	二
一上 一和聲學上	銀行及會社簿記	同上	同上		同上	同上	同上	物理學
三	二	一	三	二三 二五	二	一	二	二
一上 一上 一音樂歷史	官用簿記	同上	同上		同上	同上	同上	同上

表十二

英文專攻科學科課程表

學科目 / 學年	必修科目								隨意科目	
	聖書	修身	英語	教育	國語漢文	音樂	体操	合計	生理衛生	
第一學年	四	一	三		三	二	三	二六		每週定時表
	新約及舊約	道德ノ要領	讀方 二 作文 二 文法 三 訳解 四 會話 二		國語講讀 二 作文 一	唱歌	普通体操及遊戲			豫科
	二	一	三		四	一	三	二四	二	每週定時表
	同上	同上	文法 三 作文 二 文學 二 訳解 四 會話 一 通訳 一		國語講讀 二 漢文講讀 一 作文 一	同上	同上		生理學	第一學年
	二	一	三	二	二	一	三	二四	二	每週定時表
	同上	同上	文法 二 作文 二 文學 三 訳解 四 會話 一 通訳 一	教育ノ原理	國語講讀 一 漢文講讀 一	同上	同		衛生學	第二學年
	二	一	三	二 二		一	三	三		每週定時表
	同上	同上	文法 二 作文 二 文學 三 訳解 四 會話 一 通訳 一	教育ノ原理 教授法		同上	同上			第三學年

意	家事		三	家事 割烹 經濟	三	同上	三	同上
科目	裁縫		三	裁縫	三	同上	三	同上
	音樂		三	ピアノ或ハオルガン 一 音樂理論 一 音樂者傳 一	二	ピアノ或ハオルガン 一 音樂者傳 一	二	ピアノ或ハオルガン 一 音樂史 一

この申請は四月四日付で認可を受け、宮城女学校第二十七年度、すなわち一九一二（明治四十五）年四月の新学年度から、家政専攻科（三年制）が発足することになった。

新学年度はじめに入学を許可された者は四十三名であったが、その内訳は、女学校一年に三十六名、二年に一名、家政専攻科一年に六名であった。

この年も宮城女学校基督教女子青年会は、ケート・I・ハンセンの指導のもとに、五月一日（金）午後七時より慈善音楽会を開催することとなり、四月二十九日、仙台警察署長に次のような「慈善音楽会開催届」を提出した。

慈善音楽會開催届

一　場所　仙臺市東三番丁百六十六番地
　　私立宮城女學校内
二　種別　ピアノ、オルガン及聲樂
三　日時　明治四十五年五月十日午後七時ヨリ同十一時マデ開會
四　開催ノ趣旨目的
　　日本基督教女子青年會同盟及宮城女學校ニ於ケル基督教女子青年會ノ事業ヲ助クル為メ
五　醵集會ノ處分法

入場券ハ壹枚ニ限リ五拾銭券百枚貳拾五銭券貳百枚拾五銭券五百枚此収入ヨリ實費ヲ差引残金ヲ日本基督教女
子青年會ニ寄附スルモノトス

一収支ノ豫算

収入之部

一金百七拾五圓也　入場料
入場券　五拾銭券百枚　弐拾五銭券貳百枚　拾五銭券五百枚ノ賣上金

支出之部

一金拾五圓也　雑費
差引残金百六拾圓也即寄附金

右之通り開催致候間此段御届仕候也

仙臺市東三番丁百六十六番地
私立宮城女學校
幹事　早坂哲郎

明治四十五年四月廿九日
仙臺警察署長
警視　園田金之殿

例年のことではあるが、慈善音楽会は極めて盛会に終了した。五月十七日（金）には春季遠足運動会を松島湾内、桂島で実施し、十月十六日（水）には秋季遠足運動会を亘理郡荒浜で実施して鮭漁を観覧し、いずれも盛況裡に有意義に終了した。又、前年度同様に、特別講演会がしばしば開催され、生徒一同大いに啓発されたが、講師としては明治学院総理井深梶之助、靈南坂教会牧師小崎弘道、日本救世軍山室軍平、早稲田大学教授内ヶ崎作三郎、、東北帝国大学理科大学教授本多光太郎などの名が見られる。又、家政専攻科学生のため東北学院神学部教授矢野猪三郎の聖書講義の連講があり仲々好評であった。

この年、前年購入した土地の北側、東二番丁・柳町通角の土地（東二番丁百三十二、百三十三番地）を購入することが出来、宮城女学校は、東は東三番丁、西は東二番丁、南は北目町通り、北は柳町通に囲まれた方形の校地を所有することとなった。

なおこの年、七月三十日午前零時四十三分、明治天皇崩御のため、翌七月三十一日、大正と改元された。宮城女学校教職員生徒一同を代表してワイドナー校長は七月三十日、宮内大臣渡邊千秋に宛てて大喪に付、天機を奉伺し、又、皇后宮大夫香川敬三に宛てて御機嫌を奉伺している。更に八月一日、礼拝堂において大喪に付、敬悼式を挙行している。

一九一三（大正二）年三月二十七日（木）、第二十一回卒業式が挙行されたが、森宮城県知事、遠藤仙台市長の他に三好第二高等学校長も臨席、卒業生のためにそれぞれ祝辞を述べて卒業生一同の前途に幸多かれとの激励があった。

（註 一）Lena Zurfluh letter to Board, June 20, 1905.
（註 二）Zurfluh letter to Bartholomew, 1905.
（註 三）Zurfluh letter to Board, June 20, 1905.
（註 四）"Visit of Japanese Minister of Education to Miyagi Girls' School, Sendai." by Lucy M. Powell. ("The Messenger", July 27, 1905, P. 9.)
（註 五）"Acts 1908", PP. 149-150.
（註 六）Zurfluh letter to Board, June 20, 1905.
（註 七）Zurfluh letter to Board, June 14, 1906.
（註 八）Ibid.
（註 九）"Acts 1908", P. 128.

（註一〇） Zurfluh letter to Bartholomew, March 30, 1908.

（註一一） "Annual Report Miyagi Girls' School 1907-1908." (Henry K. Miller, Acting Principal, June 19, 1908.) Kate I. Hansen (Secretary of Executive Committee of Miyagi Jogakko, Jan. —June, 1909.) letter to Board, June 1, 1909.

（註一二） "Digest of Business Transacted by the Executive Committee of Miyagi Girls' School, July—Dec., 1908." (Kate I. Hansen, Secretary.)

（註一三） "The Messenger", 1909. (Nina C. Zaugg.)

（註一四） "Miyagi Girls' School Annual Report for the Year 1908-9." (Henry K. Miller, June 21, 1909.)

（註一五） "The Report of Executive Committee, Miyagi Jo Gakko, Jan.—June, 1909." (Kate I. Hansen, Secretary, June 1, 1909.)

（註一六） Sadie Lea Weidner's letters to Board, June 11 and June 16, 1910.

（註一七） Weidner letter to Board, June 11, 1910.

（註一八） 木村有香東北大学名誉教授の「宮城野萩」（仙台市野草園監修「野草園の四季」所収）に「わが国にかずかずある萩のうちミヤギノハギほど美しい萩はまずなかろう。ヤマハギの清楚なるに心を傾ける人も多々あろうが優美の点にかけてはこれの右に出るものは全くなく現代人の嗜好に適した種類といえる。（中略）しかし古歌によまれて有名な『宮城野の萩』は宮城野萩とは異なり今日も仙台周辺に自生するキハギ、ツクシハギ、ヤマハギ等が主体ではないかと考える。（以下略）」とある。宮城学院の校章の萩は、さだかではないが、校章の様子から判断すれば『宮城野萩』ではなく、『宮城野の萩』を図案化したものではないかと考えられるとのことである。（本書第十章四、「新校地の植物と鳥類」の三、「所産植物」の「解説」(M)「ミヤギノハギ（マメ科）」参照。）

（註一九） Weidner letter to Board, June 11, 1910.

（註二〇） この通達を受けたワイドナーは、直ちに次のような書簡をベーツロミューに送っている。

Miyagi Jo Gakko, Sendai, Apr. 14, 1911

My dear Dr. Bartholomew ;

On April 13, 1911, the Department of Education of Japan granted new privilege to *ten* Girls' Schools, Miyagi

Jo Gakko being second on the list.

The full Government Recognition which we received Dec. 21, 1910, gives our graduates the privilege of becoming teachers in the Primary Schools and of taking the Government examinations for teachers of Secondary Schools but does not extend these privileges to those who graduated before March, 1911.

This new action of the Department of Education grants the above privileges, during the next five years, to all who graduated before we received Government Recognition.

We are the only school for whom this privilege begins with the first graduating class.

Yours sincerely,

Sadie Lea Weidner

（註一一一）「荻の下露」第四号（大正三年三月発行）、七十七―八頁。
（註一一二）前掲書、七十六頁。

☆第一章～第六章関係資料一覧

[一]

1 宮城学院所蔵諸書類（但し、一九四五年空襲で校舎焼失のため、焼失を免れた若干資料のみ）
2 官公庁への申請・願出・届出・提出諸書類（但し宮城県立図書館所蔵分のみ）
3 「エディンバラ医療伝道会」派遣宣教医師セオボールド・A・ベームの諸書翰（「エディンバラ医療伝道会」資料室所蔵）
4 「エディンバラ医療伝道会」理事会議事録（「エディンバラ医療伝道会」総幹事室所蔵）
5 「合衆国改革派教会」派遣宣教師の公的諸報告書、公的諸書翰、私的諸書翰――グリング夫妻、モール夫妻、ホーイ、エリザベス・R・プールボー、オールト、シュネーダー、ハロウェル、ミラー、ズーフル、ノッス、ロールボー、ランペ、ファウスト、ワイドナー、ボーウェル他――（ランキャスター神学大学内 The Archives of the United Church of Christ and the Evangelical and Reformed Historical Society 所蔵）
6 「合衆国改革派教会」外国伝道局関係公的文書――外国伝道局長、総幹事、財務委員長他――（同右）
7 「日本基督一致教會（仙臺基督一致教會）會員名簿（原簿）・第一～三」（日本基督教団仙台東一番丁教会所蔵）
8 「仙臺日本基督教會（日本基督教団仙臺東一番丁教會・現日本基督教団仙台東一番丁教会）會員名簿（原簿）・第一～第五」（同

右）
9 「仙臺日本基督教會記錄〈原簿〉」（同右）
10 「仙臺日本基督教會記事〈原簿〉」（同右）
11 「仙臺日本基督教會小會記〈原簿〉」（同右）

〔二〕
1 Franciscus, S.D., "Faith of Our Fathers——History of the Dutch Reformed Church in Sri Lanka (Ceylon), Pragna Publishers, Colombo, 1983.
2 "Quarterly Papers of the Edinburgh Medical Missionary Society" (1871-1887)
3 "Annual Report of the Edinburgh Medical Missionary Society" (1873-1890)
4 "Acts and Proceedings of the General Synod of the Reformed Church in the United States." (1875-1934)
5 "The General Synod Blue Book." 〈"The General Synod of the Reformed Church in the United States."; "Blue Book' for the General Synod of the Evangelical and Reformed Church"〉 (1917-1961)
6 "The Outlook of Missions." (1909-1920)
7 "The Nessenger" 〈"The Weekly Messenger of the German Reformed Church"; "The Reformed Church Messenger"; "The Messenger"; "Reformed Church Nessenger"〉 (1838-1914)
8 "Jottings from Japan." (1916—1926)
9 "The Missionary Guardian"
10 "Farewell Services held in Salem Reformed Church, Harrisburg, PA., June 1, 1886, on the Occasion of the Departure of Lizzie R. Poorbaugh and Mary B. Ault as Missionaries of the Reformed Church to Japan", Telegraph Printing House, Harrisburg, Pa., 1886.
11 "Historic Manual of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States. The Year of Jubilee 1838-1888", Standard Publishing Company, Pottsville, Pa., 1888.
12 Bartholomew, A.R., "Won by Prayer.—The Life and Work of Rev. Masayoshi Oshikawa.", Reformed Church Publication House, Philadelphia, 1889.
13 Callender, S.N., "Historical Sketch of the Work of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States.",

Reformed Publication House, Lebanon, Pa., 1895.
14 Miller, H.K., "History of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States 1879-1904.", Board of Foreign Missions, Reformed Church in the United States, Philadelphia, 1904.
15 Moore, J.P., "Twenty-fifth Anniversary of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States ——Celebration on the Field (June1-3 and 25, 1904.)", Kaneko Memorial Press, Sendai, 1905.
16 Noss, Christopher., "Tohoku, the Scotland of Japan.", Board of Foreign Missions, Reformed Church in the United States, Philadelphia, Pennsylvania, 1918.
17 Moore, J.P., "Forty Years in Japan 1883-1923.", Board of Foreign Missions, Reformed Church in the United States, Phiadelphia, 1925.
18 "Fifty Years of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States 1877-1927", The Board of Foreign Missions, Philadelphia, 1927.
19 Klein, H.M.J., "The History of the Eastern Synod of the Reformed Church in the United States." Eastern Synod, Lancaster, Pa., 1943.
20 Dunn, David., "A History of the Evangelical and Reformed Church.", The Christian Education Press, Philadelphia, 1961.
21 "The Japan Evangelist." Vol. 1 and 2, The Yokohama Seishi Bunsha, 1894 and 1985.
22 "Attractive Footprints." (伊藤嘉吉「ゆかしき足跡」勞働會印刷所、一九一四)
23 Cary, Otis., "A History of Christianity in Japan." Fleming H. Revell Company, New York, 1909.
24 Strong, William E., "The Story of the American Board.", The Pilgrim Press, Boston, 1910.
25 「仙臺日本基督教會歷史」(明治四十年)
26 「仙臺日本基督教會小史」(昭和六年)
27 「仙台東一番丁教会八十年史」(昭和三十七年)
28 「日本基督一致教會宮城中會記錄」
29 「日本基督教會宮城中會記錄」

30 「日本基督教會東北中會記録」
31 「東北教會時報」
32 「私立宮城女學校一覧――創立第二十五年紀念刊行――」（宮城学學校、明治四十四年）
33 「宮城女學校五十周年史」（宮城女學校校友會、昭和十一年）
34 「宮城學院七十年史」（學校法人宮城學院、昭和三十一年）
35 「宮城学院八十年小誌」（学校法人宮城学院、昭和四十一年）
36 “Catalogue-Miyagi Girls' School 1916-1917.”
37 「萩の下露・第一號～第五號」（宮城女學校文學會、明治四十二年～大正四年）
38 「東北學院七十年史」（東北學院同窓會、昭和三十四年）
39 「東北學院創立七十年寫眞誌」（東北學院同窓會、昭和三十年）
40 「フェリス女學院一〇〇年史」（昭和四十五年）
41 「明治学院百年史」（昭和五十二年）
42 「同志社百年史・通史編一」（昭和五十四年）
43 山本秀煌編纂「日本基督教會史」（日本基督教會事務所、昭和四年）
44 山本秀煌著「日本基督教會小史」（日本基督教會事務所、昭和十一年）
45 郷司愷爾著「基督教史」（新生堂、昭和五年）
46 比屋根安定著「日本基督教史・第四巻」（教文館・昭和十四年）
47 比屋根安定著「日本宗教全史・第五巻」（教文館、昭和十七年）
48 比屋根安定著「日本近世基督教人物史」（基督教思想叢書刊行會、昭和十年）
49 比屋根安定著「日本プロテスタント九十年史」（日本基督教団出版事業部、昭和二十四年）
50 小澤三郎著「幕末明治耶蘇教史研究」（日本基督教団出版局、昭和四十八年）
51 小澤三郎著「日本プロテスタント史研究」（東海大学出版会、昭和三十九年）
52 佐波　亘編「植村正久と其の時代・第一巻～第五巻、補遺、新補遺、植村正久夫人季野がことども」（教文館、昭和十三年、昭和十六年、昭和十八年、昭和五十一年）

53 武藤富男刊行「井深梶之助とその時代・第一巻―第三巻」（三五堂、昭和四十四年―四十六年）
54 吉田　榮編「吉田亀太郎追憶集」（僕會出版部、昭和八年）
55 海老澤有道著「維新変革期とキリスト教」（新生社、昭和四十三年）
56 海老澤有道・大内三郎著「日本キリスト教史」（日本基督教団出版部、昭和四十五年）
57 石原　謙著「日本キリスト教史論」（新教出版社、昭和四十二年）
58 片子澤千代松著「日本のプロテスタント―一二〇年の歩み」（日本 YMCA 同盟出版部、昭和五十四年）
59 青山なを著作集第二巻「明治女学校の研究」（慶應通信、昭和四十五年）
60 平塚益徳著「日本基督教主義教育文化史」（日獨書院、昭和十二年）
61 文部省「学制百年史・記述編並びに資料編」（昭和四十七年）
62 宮城縣「宮城縣史・3・近代史」（昭和三十九年）
63 宮城縣「宮城縣史・11・教育」（昭和三十四年）
64 宮城県教育委員会「宮城県教育百年史・第一巻・明治編」（昭和五十一年）
65 宮城県教育委員会「宮城県教育百年史・第四巻・資料編」（昭和五十四年）
66 「宮城県議会史・第一巻」（昭和四十三年）
67 仙臺市「仙臺市史・第一巻・本篇一」（昭和二十九年）
68 仙臺市「仙臺市史・第三巻・別篇一」（昭和二十五年）
69 仙臺市「仙臺市史・第四巻・別篇二」（昭和二十六年）
70 仙臺市「仙臺市史・第九巻・資料篇2」（昭和二十八年）

第七章　錬達は希望を生ず

それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。

（ローマ人への手紙　第五章三―四節）

大正時代から昭和へ

明治から大正へ

一九〇二（明治三十五）年の校舎焼失のあと、宮城女学校が、文字通り、灰じんの中から立ち直っていく約十年間は、それに続く、校史上第二のエポック――輝かしい発展の時代にそなえて、本校の礎がますますしっかりと固められた時期でもある。

すなわち、前述のように、最初の校地が四回にわたって拡げられ、遠く「昭和の大移転」（一九八〇年）まで本学院の歴史を載せ続けた、方形約五、六〇〇坪のキャンパス（仙台市東三番丁一六六番地―現・中央四丁目六番一号）が、このころほぼ定まったばかりではなく、壮麗な「第一校舎」が建てられて、より充実した教育活動のための場もそなわった。そしてそこへ、内外のすぐれた教師たちがさらに多数迎えられ、「高等女学校」が認可されたうえに専攻科もつくられはじめたのであった。加えて、生徒による自主的な教科外活動の嚆矢たる「基督教女子青年会」が創立されたのも、また校章・校旗が定められたのも、この時期であったことなどを考えあわせると、火災以後の本校復興の十年が、前章までの「創建期」に含められているのは、至極当然なのであった。

こうして、いわばかたちが、ますます整えられていったあとを受けて、なかみがより豊かとなる第二の時期が始まるが、前期同様ここでも、なかみの充実とかたちの整備とは、互いに因となり果となって、校運のさらなる発展を記録させていくのである。

一九一二年夏、「明治」が終り、九月十三日の「大葬」後まもなく、宮城女学校は二十六回目の創立記念日を迎えているから、「大正時代」の始まりと同時に、その第二の四半世紀がスタートしたことになる。この「大正時代」に

は、日本全体の歩みが、日露戦争後の数年間を萌兆期として、政治・経済・文化あるいは軍事などあらゆる面に、前代とは明らかにちがう相貌を次第にあらわしていくのであるが、その展開は、いくつかの大きな起伏を経ながら、一九三〇（昭和五）年頃まで続いたのである。そして、本校の歴史にとって、この時期はまた、第六代校長ファウストの在任期（一九一三～三〇年）とほぼ重なるのであった。

「大正時代」

この、二十年近い「大正時代」は、世の中全体も、また本校も、何事につけ改新・創始の辛苦を味わった明治期と、軍靴の音に驚き硝煙の匂におびえた一九三〇年代以降との中間にあって、比較的平穏な時代を楽しんだかのように見える。本校も、ひたすら内部の充実にいそしむことができたようではある。

たしかに、この間わが国は、第一次世界大戦以外、対外的に大きく干戈を交えたことはなく、それとても、僅少な犠牲によって獲るところすこぶる多い対ドイツ戦であった。また、軍事・経済面で「列強」の仲間入りをするほどに大きくなった国力は、学問や文芸のめざましい進歩によっても裏打ちされ、さらに、いわゆる護憲運動の波状発生や「民本主義」の興起、普選運動の高まり、女権拡張へのうねり、社会主義思想の普及、労働運動の隆盛、「新教育」の勃興など、思想・教育・社会運動等さまざまな分野で、極めて大きな進展が見られたのである。また、国民の生活程度は、大都市を中心に著しく向上していき、交通・出版の発達、学制の整備などによって、中小都市あるいは農村部に住む人々も、徐々にではあるが、文化を享受できるようになった。そして、デモ、ストライキ、「米騒動」などに象徴される、いわゆる「民衆化傾向」が国民の間にひろがり深まっていった。

キリスト教界でも、宣教上好ましい動きが多方面で見られた。神学校やミッション・スクール等の創立は、この間、プロテスタント系だけでも十指に余り、キリスト教社会福祉事業も前代に引き続いて各地に興った。一九一七（大正六）年には「新約聖書」の改訳が完成して、宗教改革四百年記念の年を飾り、また、キリスト教および関連文物のいわば移入が一段落して、日本人の著に成る神学書・キリスト教書も数多く刊行されるようになった。さらに、

山室軍平・賀川豊彦・内村鑑三等すぐれた思想家たちが、著述・伝道両面でそれぞれユニークな活動を展開したのもこの時期である。

右のような動きと平行して、プロテスタント各教派は、それぞれのあり方を鮮明にしつつも、前代にまして、連合あるいは協同戦線を張るようになっていた。それは、すでに一九〇九（明治四十二）年の「宣教五十周年記念祝典」（大講演会）などに、益々はっきりと具現されており、翌年エディンバラで開かれた「世界宣教会議」（わが国から本多庸一が出席）において、伝道体制の協同が説かれ、いわゆる「世界教会運動」がスタートした影響からも、一層広く教派間の相互協力伝道が試みられるに至った。一九一四（大正三）年からはじめられた「全国協同伝道」や、二三（同十二）年に成立した日本基督教連盟が翌年から展開した「全国教化運動」、そして、教派合同促進のためのいくつかの企てを経て、一九二九（昭和四）年、宣教七十周年を期しておこされた「教化総動員運動」などに、その姿勢がよく示されている。賀川らによって唱導され、一九二九～三四（昭和四～九）年に特に盛んであった「神の国運動」も、これらの一環と見ることができよう。

また、この時代のキリスト教は、色々な意味で「国家」を強く意識した明治期とちがって、その個人性・世界性を通じて一般の人々に受けとめられており、それが、「大正文化」のもつ教養主義・人道主義的性格とも相つながったのであった。時代のそうした傾向からも、教会は多数の青年男女をひきつけて教勢をさらに伸ばし、日曜学校も隆盛を誇って欧米のキリスト教関係者に大いに注目された。すでに、一九〇七（明治四十）年、第七回万国基督教青年大会が、また一九二〇（大正九年）には第八回万国日曜学校大会が、それぞれ東京で開催されたほどである。吉野作造らの指導する、かの東京帝大「新人会」も、教会に集う学生たちが核となって結成されたのであった。

しかし、「大正時代」は、右のように国民の「デモクラシー」、「文化」、「平和」、「人権」等への志向と実践に貫かれ、キリスト教勢力の伸張にも見るべきものがあったその反面、支配体制の側からする、国民の思想統制、軍備の

拡充、海外への軍事・経済進出等が、ある意味で前代以上に強行されてきた二十年間でもあった。

日露戦争後からの、政府主導による「地方改良運動」や、戊申詔書などが強調する「国民精神作興」、さらには大逆事件後「通俗教育」（＝社会教育）がますます強められるなどして、「思想善導」の網は全国にひろがり、一九〇〇（明治三十三）年以来の、治安警察法――維持法体制の徹底化が陰に陽に着々と進んでいった。

かくて、ひたむきな「田舎青年」たちがおこしてきた、各地の青年会（団）、処女会等は、巧みに体制内にとりこまれて、徐々に官製団体化し、若者たちは、国家に仕えるために、各自の修養と「報徳」に励んだ。出版事業への規制は、少なくとも大正中期までは比較的緩かったが、それでも学生層の読書傾向が絶えず監視され、また、一部婦人雑誌の「反良妻賢母主義」的記事が取締りの対象となった。

さらに、「平和と軍縮の時代」とはまさしく裏腹に、いわゆる軍拡への底流が、大きさと速さを増していった。たとえば、第一次世界大戦の終った一九一八（大正七）年から、ワシントン（軍縮）条約が成立した一九二二（大正十一）年までの間、年国家予算中、軍事費が占める割合は、実に35～48パーセントにも達していたのである。

かくて、ますます蓄えられてきた武力を背景に、外国、ことに近隣諸国への威圧はいよいよあらわとなった。一九一〇（明治四十四）年の「日韓併合」に続く、辛亥革命――「中華民国」誕生への干渉や、いわゆる対華二十一ヶ条要求、第一次大戦後のシベリヤ出兵等々、そして、これらがひきおこした、中国・朝鮮における激しい抗日運動や台湾生蕃たちの反乱に対する弾圧などに、それらを見ることができる。さらに、いくつかの大企業は、国の後押しで海外諸地域に進出し、二次製品のほか、資本の輸出でも各国の企業としのぎを削りあうようになり、しばしば国家間の緊張関係を高めさせた。特に、中国における権益の争い相手となったアメリカ合衆国とは、その西海岸地方への日本人移民の問題もからんで、むしろ対立の状態に入っていた（一九一七年の「石井―ランシング協定」、一九二〇年のカリフォルニア州「排日新土地法」、同二四年の連邦議会「排日移民法」可決、あるいは軍事面での「オ

レンジ作戦」など。もっとも、日米市民間で「人形交換」が行なわれたりはしたが)。すでに、日本経済は、輸出・入ともアメリカの産業界に大きく依存していたから、年を追って進む国際的孤立化、とりわけ対米関係悪化の中で、わが国は次第に苦しい立場に追いこまれ、そのことがまた、アジア近隣諸国への武圧策強化につながっていった。

国内でも、思想善導—教化、言論の統制等が、大正中期以後特に強められた。大戦後の反動不況、「軍縮」による不景気や「震災恐慌」などから来る経済界の混迷、その中での独占の進行と、労働争議・小作争議の異常なまでの頻発、また、いわば行財政改革が志向され、あるいは短命ながら「政党内閣」が生れはしたものの、軍部の圧力や疑獄事件なども加わって、なお続く政治状況の低迷および政界の不安定等々に対する、国民の反抗的世論と行動を、政府が警戒したためである。

この時代は、教育界でも比較的大きな波動が見られた二十年間であった。前代末すでにドイツから入って来ていた、新国家主義教育、あるいは社会的教育学の思想が、第一次大戦の終結を機に、英米流の自由主義・個人主義的、あるいは児童中心の教育思想にとって代わられ、さらに、これに拮抗するかたちで、国家にとって、望ましい「公民」の養成を目ざす体系的思潮がドイツから導入されて、政府文教の重んずる所となった。すなわち、この時代の学校教育界では、J・デューイ(アメリカ)らとG・ケルシェンシュタイナー(ドイツ)らとを、それぞれ主導者とする二つの外来思想が対立並行していたといってよいが、国内各地でも、前者に大きく依拠する「大正自由教育運動」がおこって「大正デモクラシー」の先駆的一翼をにない、多くの教育家によるいくつかの実践成果が、早くは大正初期から次々と明らかにされていったのである。本県でもすぐれた実践例が多く報告され、また、かの「ドルトン・プラン」で有名なパーカスト女史が、大正後期に仙台を訪れたりもしている。

しかし政府は、かの「臨時教育会議」体制下、一九一九(大正八)年「中学校令」を改正して、中学校教育の目的に「特ニ国民道徳ノ養成ニ力ムベキ」ことをつけ加え、翌年の「高等女学校令」改正でも、国民道徳と婦徳の涵

養を強調した。この頃、全国の大学・（旧制）高校・高専は計百余校、学生数は約四万人であったが、中学校も公私立あわせてようやく三四五校、生徒数一六六、六一六名（一九一九年）、女学校は増えつつあったがそれでも五八〇校、一七六、八〇八名（一九二一年）という状況であったから、現今の大学生数を考えると、そのエリート性はるかに高く、政府が、将来国の指導者層を形成する彼等の善導、および彼等を通しての国民教化にかなりの効果を期待していたことがうかがえる。

さて、先にも述べたように、この時代のプロテスタント・キリスト教は、主として都市部の青年知識層にかなり喰いこみ、教会の教勢を順調に伸ばしたばかりではなく、日本人による神学理論の構築も進んでいたが、社会一般の個人主義的志向からも、ともするとそれは、「教養としてのキリスト教」あるいは「文化宗教」、「個人倫理」として機能するにとどまる場合が多かった。キリスト教が国家社会の経綸に直接つながりをもった明治期と違い、ここでは、個人の思想形成への基礎、あるいはその社会生活の道徳的根拠を与えるものとして作用したのである。かくて、一般信徒の、信仰に関する知的把握への偏り、一見さかんな教勢の中にひそむ教会の質的固定化等を背景に、「救世軍」や、賀川らのはたらき（「神の国」運動）、内村、中田重治・羽後父子、木村清松らによる「再臨運動」などがおこったのであった。年を追って深刻化していく諸社会問題が、これらの人々の視野に大きな影を落していたことはいうまでもない。

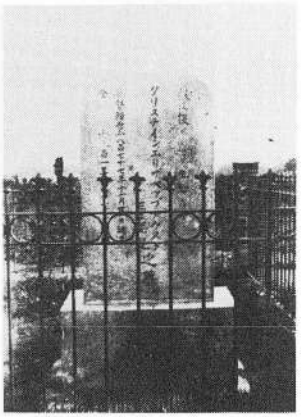
しかし、教界全体の社会的勢力はなお弱かった。それはすでに、明治末年の、内務省からする（神・仏・基）「三教合同」へのはたらきかけに対する応じ方においてあらわにされていたが、その後、文部省から執拗に発し続けられた「宗教（団体）法案」攻勢には、（むしろ政府の意図に添って）ゆがんだ「教派合同促進」、やがて戦争への協力という形でしか対応できなかったのである。

こうして、昭和五年頃まで続く「大正時代」には、国家と国民との間の緊張関係がやや緩み、文化の個々人への浸透と権利意識の向上が広く見られたが、一方、権力の集中とその国内外での突出――思想統制と対外的武圧等もさらに激しくあらわれた二十年間であった。そうした中での本校の歩みは、前代に劣らず苦しいものであったに違いない。しかし、神のかわらざる恵みと、内外関係者のたゆまぬ努力とによって、そこでは、前代同様、絶えず人間の尊厳が説かれ、平和と国際協調の精神が伝えられ、聖書の示す福音の真理を唯一不変の核として高い教養が積まれていき、地域社会への奉仕が実践された。そして、使命感にあふれた多くの教育者・伝道者・職業人等が校門を出てゆき、また、家事と時流の中で自己を見失なわぬ賢明な主婦たるべき女性が次々と輩出していったのである。

ファウスト校長

前述のように、宮城女学校が、一九〇二（明治三十五）年の火災の傷からいやされていった十年間は、また、本校がさまざまな面でますます整備されていく時代でもあった。そして、その努力と成果が適切に引き継がれ、さらなる発展充実を見たのが、その後十七年にも及ぶ「ファウスト時代」であった。私たちは、ここでファウストその人について、少しく知る必要があろう。

一九一三（大正二）年七月、第六代校長（兼設置者）として本校に来任した、アレン・クライン・ファウスト（Allen Klein Faust）は、一八六九（明治二）年八月二十日、合衆国ペンシルヴァニア州の小邑ベルンヴィルに生れた。ドイツ系移民の血を継ぐ篤信堅実な家庭に育てられて早くから教職を志し、一八九三（明治二十六）年州立キーストン師範学校を卒業したが（バチェラー・オブ・エリメンツ）、進んでランキャスターのフランクリン・アンド・マーシャル大学古典科に学んだ。九七年、その定められた課程を終えるが（バチェラー・オブ・アーツ）、この頃までに、伝道者となる決意を固めていた青年ファウストは、直ちにランキャスター神学校に入学する。一九〇〇（明治三十三）年七月、卒業とほとんど同時にクリスティン・エリザベス・ヴォルマー（C.E. Vollmer）と結婚、同年九月には合衆国改革派教会（Reformed Church in the U.S.）の宣教師として来日し、仙台の地に遣わされて東北学院教授



ファウスト夫人と嬰児の墓

となった。時に彼は弱齢三十一歳、早くから外国伝道を志していたクリスティン夫人が喜んで同行したことはいうまでもない。爾来三十年間、彼は日本における主の尊きみ業に全力を以て加わり、六十一歳までの、いわば働きざかりの時期をそのためにささげたのである。

だが、仙台に赴任の翌年、彼は二十三歳の若き夫人をその初産児と共に失なって悲嘆の極を味わう。七月、花渕浜の避暑地（いわゆる高山外人村）での急病の故であった。故国の両親・友人等からは、当地での職務を辞して帰米するようすすめられるが、彼は、その固い使命感からこれを謝絶し、夫人らの遺骸を仙台の北山墓地に葬ったのち、今後とも日本に留まって、長く教育と伝道の任にあたりたい旨を宣明した、という。ほゞ二年を経た一九〇三（明治三十六）年十月、フェリス女学校の教師メアリ・エステル・マーデン（M.E. Marden）と結婚したことは、その決意をあらわしたものともいえよう。

まもなく彼は、一九〇七（明治三十）年、最初の休暇（furlough）を得て帰米するが、かねてからの計画に従って直ちにペンシルヴァニア大学大学院に入学した。そして、教育学・社会学・歴史学等の諸方野にわたり深く研鑽の実を挙げて一九〇九年その課程を修了、ドクター・オブ・フィロソフィの学位を得て帰任し、再び東北学院の教壇に立った。学位論文は「日本近代の文明に及したキリスト教の感化」であるが、この頃、その考究の副産物として、処女作『近代日本における社会的因子としてのキリスト教』を公けにしている。

東北学院では、そのすこぶる流暢な日本語を駆使して、教会史・社会学・教育学・教育史、等のほか、ギリシャ語・ラテン語などを教授し、驚くことに和文英訳をも講じているが、経理面にも明るい彼は、理事会のメンバー（財務理事及び書記）としてシュネーダー院長のよき助け手として活躍した。さらに、かの「労働会」（Industrial Home）

を指導し、その会計担当者として、苦学生たちの印刷、味噌醤油販売、牛乳・新聞配達等の諸事業を支え、農業部の経営にもあたった。彼の力添えによって学業を全うした者は数知れず、また、その信仰に触れて受洗への道を歩んだ学生が、特に会員の中から多く出たことは、記すべき有名な事実である。

やがてファウストは、宮城女学校の第五代校長S・L・ワイドナーが辞任したあとを受けて、本校に迎えられ、以後十七年間、一九三〇（昭和五）年の帰米まで校長職をつとめることとなる。これは、創立以来の歴代校長――（順に）ブールボー、モール、ズーフル、ミラー、ワイドナー――に比べて、かなり長期の在職であるばかりでなく、モール、ミラー両博士がそれぞれ一年間だけの校長であったことを考えると、ファウストに至って初めて、男子の校長が、いわば本格的な形で出現したことをも意味するものであった。

ところでファウストは、東北学院在職中から、宮城女学校とその教育に深い親近感と関心を抱いていたが、困難な家計の中にある一人の少女を引き取り、娘の如く愛して本校に入学せしめ、卒業まで生活費・学費等の一切を担ったり、クリスティン夫人の急逝を悼んで知人らが刊行した冊子 In Memoriam が母国の人々の心を動かして本校第一校舎建築のための献金を促進したり、また、その定礎式に際して、同夫人記念の品々が埋められるなど、かねてから宮城女学校とは細からぬ縁の糸を結んでいたのであった。

なお、右記 In Memoriam は、若きファウスト夫妻と共に仙台に赴任し、本校で英語と聖書を講じた詩人宣教師L・M・ボウエル（一九〇〇～〇八年在任）の美しい悼賦や、夫妻と親しく交わったS・L・ワイドナー、C・ノス、W・E・ランペ、S・S・スナイダー、D・B・シュネーダーらはじめ内外のミッション関係者によって綴られた切々たる弔詞と追憶文で構成されている。

さて、ファウストがミッション・ボードの決定に従って、一九一三（大正二）年七月十六日、本校に着任したとき、彼は漸く四十四歳になろうとするところであったが、翌年の三月、彼が初めて送り出す卒業生に与えた説教は、

その信仰と、宮城女学校の教育に臨む彼の姿勢とを、十分にうかがわせるものであると思われるので、次に全文を掲げておく。（一九一四年三月二十八日発行「萩の下露」第四号、五～十頁より引用。用字法等そのまま。）

「ルデヤと欧羅巴（ヨーロッパ）の教化」

（使徒行傳第十六章十四～十五節）

使徒ポーロは其の第二回の巡教中に一の奇異な夢を見た。此の夢が歐州の歴史に一大影響を及ぼし爲に其の狀態を一變するに至つた。實に其の影響は單に歐州のみに止らず延いて全世界に及んだのである。

ポーロと其の一行は西アジアに傳道しつゝあつたが余り成功を收むる事が出來なかつたのでポーロは一夜これより採るべき方針につき思ひを凝らして居つた丁度其の時に此の夢を見たのである。

夫は一人の男が海を隔てたかなたのマケドニヤの海岸に立つてポーロを摩き、來つて我等を助けよと云ふのであつた。ポーロは目醒て確に是は神の宣託であると信じ速に歐州に渡つて福音を宣傳しやうと云ふ決心を起した。是れ實に歐州が救を亞細亞に求めたのである。

ポーロは其の一行即ちシラス、テモテ、ルカの三人と共に直に立つてマケドニヤのピリピに渡航した。ピリピは其の當時其の近邊にては最も大きな最も繁華な町であつたが在住のユダヤ人は其の數がすくなかつた故別に會堂の設けはなかつたが只安息日を守るため集會場が市外のガンガスと云ふ川の邊に設けてあつた。之の川邊は町の雜踏を離れて靜かであつた爲でもあらうが主として手を洗ふに便利であつた爲であらうと思ふ。何故なればユダヤ人には祈禱をする前に必ず手を洗ふ習慣があつたからである。さてポーロの一行は先づ安息日に此の集會場に至りユダヤ人と共に神を拜し又ポーロは彼等に向つて一場の說教をした處が其の聽衆の中にルデヤと云ふ一人の婦人が居つた。此のルデヤはもとユダヤ人ではなかつたがユダヤ教に改宗した人で常に此の川邊の集會場に來てユダヤ人と共に獨一の神を拜し之に祈を捧けて居つたのである。此の人は紫の布を商ふ業を營んで居つたが此の布は當時ローマ帝國にて上流社會の用ひたもので中々需要の廣かつたものであつた。此のルデヤはピリピに生れた人ではなくアジヤのテヤテラから出た人で商賣の爲にピリピの町に移住したものである。彼は當時其の町にて位置もあり財產もある寡婦であつたが夫の死後自ら其の商賣を繼續し盛んに其の商賣を營んで繁榮を極めたものと思はれる。ポーロの一行が此の川邊に來た時にルデヤも彼の一行と其處に居つてポーロの說教をきゝ彼女は始めて救主イエスキリストの事を知つたのである。是より先きルデヤはユダヤ教に入つて眞の生ける神を信じて居つたからイエスを受け入れる準備は既に出來て居つたのである。故に主がポーロによつて彼女の心を開き給ふた時に確信の矢は彼女の心を貫き彼女は直に其の子

供や雇人を始め奴隷に至る迄全家を擧げてイエスに歸依し其の名に依つてバプテスマを受けたのである。

ポーロが見た夢は頗る不思議であると云はなければならない。何となれば彼が幻に見たのは男であつたのに其の實歐州に於ける最初の改宗者は女であつて而も歐州の生れ更りは實に此の一婦人より起つたからである。ルデヤの改悔は唯に全歐州の恩惠となつたのみならず其れがひいて亞米利加や日本に迄も及んだのである。然し之は敢て奇むに足らぬ事である。何となれば世界中何れの國に於ても婦人は概して宗教に對する感情が甚だ鋭敏であるからである。男子の基督に負ふ處は勿論甚だ多いのであるが婦人は尚一層之れが多いのである。何となれば婦人は基督によつて男子の奴隷たる位置より引き上げられ男子と同列に置かれ神の前に於て男子と同等に認められるやうになつたからである。之れ實に基督の賜と云はなければならない。ルデヤは斯の如く我が宗教の歷史に於て無比の位置を占めて居る婦人であるから是より暫く彼女の性格を考へて見度いと思ふ。

第一ルデヤは誠實で敬虔な婦人であつた。彼女は偶像教の家に生れたものであるが其の當時の偶像教は非常に墮落し不道德を極め生命がなく殆んど死灰の如きものであつた。然るに彼女ルデヤは斯る宗教に滿足する事が出來ず其の故郷テヤテラにてユダヤ人よりエホバの事をきゝ偶像教を捨てゝユダヤ教に改宗し生ける神を信じて之に仕へて居つたのである。彼女の生活は富裕であり其の商賣は繁榮を極め實に忙はしくあつたにもかゝわらず安息日毎に必ず其の商賣を休み自分ばかりでなく雇人まで引きつれて此の川邊の祈禱會に連るのが常であつた。之によつて見ると彼女は如何に祈禱を好み生ける神と交る事を無上の樂みとし夫を以て自分の生命希望として居つたかゝわかる。彼女は斯る篤信家であつたからポーロの談に耳を傾けたのは敢て異むに足りない事である。彼は神の愛を感じた時に進むで其の胸を開きポーロの傳へた生命の言葉を受入れ而して其の言葉が次第に成長して果を結ぶに至つた。ポーロは種子を蒔き神は夫れを繁殖させ給ふたのである。寫眞屋が如何程上手に其の種板を設備しても若し太陽の光線がなければ物の象を寫す事が出來ない、云はゝポーロは寫眞屋で神は光線である。

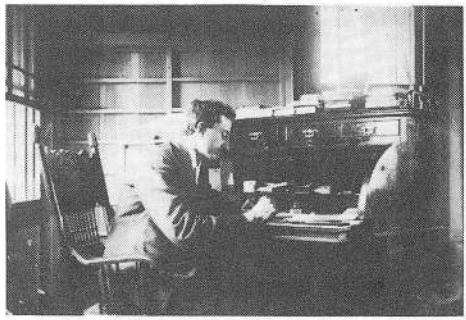
第二ルデヤは親切で謙遜な人であつた。此の四人の宣教師即ちポーロの一行はルデヤに取つては一面識の無い人々であつた。然るに彼のポーロの說教を聞き彼等をキリストの使者であると認めるや否や直に彼等を自分の家に招待した。ポーロは一旦それを辭したが再三の懇請もだしがたく遂に其れを諾するに至つたのである。何んと美しい謙德が其處に表れて居るではないか。ルデヤは働く者は其の報酬を受くべきものであると云ふ事を信じ身を宣教に捧げて居る人に對しては宜しく進んで扶持すべきものであると云ふ事を信じて居つた。彼女は財產を有つて居つた。而して其の財產に依つて自分の人格を擴大した。人が基督信者となるならば其の心靈ばかりでなく其の身體も其の財產も皆悉く回心すべき筈である。ルデヤの財產は實に其の持主と共に洗禮を受けたと云つてよろしい。何となれば彼女はバプテスマを受けるや否や直に其の所有物の一部をキリストの祭壇に捧げたからである。彼女は財產と云ふものは凡て神より依託せられたも

のであつて神と人との爲に用ふ可きものである事を知つて居つた。彼女は實に新經濟學の主張者であつた。新經濟學の大切なる主義は受くるより與ふるは幸福なりと云ふ事である。さてポーロは暫く彼女の家に止つてピリピの町に傳道して居つたが迫害の爲に捕はれて獄舍の戸を開いて彼を導き出し給ふた爲め再びルデヤの家に歸る事を得た。ポーロが愈々此のピリピの町を去る事になつた。使徒行傳第十六章の四十節を見るとルデヤは其の時ポーロの爲に特に送別會を開いた事が載せてある。之によつて見てもルデヤは如何に親切であり如何に思慮深く如何に基督信徒らしかつたかを窺ひ知る事が出來る。

第三ルデヤは感恩の念に充ちた婦人であつた。彼女が宣教師に與へた歓待は決して義務の觀念に迫られて生じたのではなく感恩の念から自然に湧き出でたのである。勿論ポーロに對しては感謝の念を持つて居つたに相違ないが夫と同時に神の恩を感ずる事が非常に深かつたから夫れが此の歓待となつてあらはれたのである。故に彼女の内に入り來つた新しき感恩の念は唯に彼女をしてポーロと其の一行を歓待せしめたに止まらず尚は進むで自ら世の人に此の救の恩惠を配ちたいと云ふ希望を起させ傳道の精神を燃させたのである。彼女は先づ自分の一家眷族に向つて傳道を始めた手代番頭を始め奴隷に至る迄悉く此の恩惠を別たうとした。而して彼等の多くが信者となつたに違ひない。何故なれば其の時より間もなく此の地に立派なキリストの教會が出來たからである。新約聖書の中にはポーロが特に此のピリピの教會に送つた書翰が入つて居る。其の書翰によつて見ると此の教會は其の當時余程優勢なものであつたらしい。其の後ポーロがローマに在つて獄舍の内につながれて居つた時に此のピリピの教會は特に一人の代表者を遣はして贈物を持たせて彼を慰問させた事がある。ポーロは元來凡て教會からの贈物なぞは悉く辭して受けた事のない人であつたが此のピリピの教會の贈物だけは辭せなかつたのを見ると如何にも篤い感謝の念が其の中にこもつて居つたかゞ想見し得られる。默示錄二章十八、十九節によればルデヤの生地テヤテラに亦一の教會があつた事が見える。此の教會は必ずルデヤの感化によつて興つたものに相違ない。又此の教會に關して默示錄の記者の云ふ處を見ると其の教會には惡い點もあつたが又其の反對に善い點が多かつた事がわかる。ルデヤは實に熱心な忠實な善行に充ちた傳道者であつた。彼女の性格を探ぬれば彼女は眞に熱心な信者であつて親切で謙遜で感恩の念の深き基督の美はしき婢であつた事がわかる。又彼女の燃ゆるが如き傳道心はよく其の家族其の寄留地其の故郷に基督の感化を及ぼさしめたのである。

千九百十四年度卒業生諸子よ、予は更めて今茲に此の注目すべき婦人を諸子に餞する。諸子は必ず此の婦人に於て各自一生の指針とするに足る高尚な價値ある模範を見出さるゝを信ずる。凡そ誠實と信仰と奉仕とは三位一体とも云ふべき一の美德である。諸子がこれを各自の主義として進まるゝならば諸子の成功は期して俟つべきである。誠實は今の世に最も要する所、諸子よ希くは誠實であれ、希くは常に神と同胞に對して篤き信仰を保て、希くは又斃れる迄喜んで同胞の爲に奉仕せよ、此の三德はルデヤの性格に於て模範を諸子に要求して居る。諸子が今有する信仰は概して本校在學中に得られたのであるがどうか今後其の信仰を愈增し愈強くし、愈深くし、果を結ぶこと愈

多からしめ、決して福音を恥づることなく使徒ポーロの如く各自己れの身にイエスの徽章を帯びられんことを切に希ふのである。


執務中のファウスト校長

ファウストの在職十七年間におけるめざましい活躍は、次項以下でも明らかにされるが、彼は、校長・設置者として、経営・管理・渉外など多面にわたる激務をこなしながら、なおいくつかのよき働きを平行させ得た、まさに稀有の人であった。

宮城女学校着任後も彼は、東北学院での理事職と「宗教教育」の講義とを引続き担当していたが、本校では、聖書・英語等の授業を週に十時間受け持ちながら、在任中使命と職務を共にした外国人教師延べ十数人の先頭に立って、説教や講話を度繁く行ない、校内誌にも進んで寄稿している。もちろんそれらの中には、校長としての立場でなされたものも多いが、伝道精神すこぶる旺盛な彼は、学校行事のほかにも、あらゆる機会をとらえて、その熟達した日本語による重厚な聖書講解や力強い奨励を通し、若き少女らへの宣教の業にひたすらいそしんだのである。

学校の発展に伴なって、生徒数の増加（一九一三年、一四四名、一九二四年には四四六名）、組織の拡大・複雑化は避けられなかったが、ファウスト校長はますます輻輳していく校務の数々を十分に遂行しながら、ほとんど毎日曜日、仙台東六番丁教会はじめ市内、県内、さらには遠く福島・山形、時に秋田等の諸教会で礼拝説教を担当した。東北学院在職中から続けているこの奉仕によって、彼は多くの人を信仰に導いたが、地元紙「河北新報」に東北学院のW・G・サイプル博士（のち本校理事）と共同で、キリスト教の基本に関する解説文を寄稿（十三回連載——の

ち冊子として出版）するなどして、一般市民をキリスト教になじませる努力も惜しまなかった。しばらくの間、キリスト教関係書の専門店をマネージしたこともあったという。

また、教会教育にも熱心だった彼は、東北学院時代から、日曜学校（教会学校）教師の養成に力を入れ、その研修会（聴講者は、宮城女学校の生徒が過半だったという）で、しばしば講師をつとめたり、名著と評された『宗教教育指針―日曜学校教師の手引き―』（日本文）を刊行したり、あるいは、一九一五（大正四）年仙台で催された全国日曜学校大会の運営や、さらに一九二〇（大正九）年東京で開かれた万国日曜学校大会の準備委員として奔走の数年を送ったりした。

加えて、宣教師としてのファウストは、「在日宣教師社団」関係のさまざまな常設委員会において、いくつかの責任ある地位を占めていたほか、来日宣教師の日本語試験委員もつとめ、また、宣教師の不足・帰休等を補なうべく、東北一円ではもとより、東京・埼玉地区における伝道活動をも代行していたから、その心身の多労は筆舌の域を越えたものであったろうが、彼は絶やさぬ微笑を以て、これらの仕事を着々と果たしていたのである。

しかも、驚くべきことに、いわばミッショナリ校長として、右のように繁忙極まる日々を過していたファウストは、さらに校外・教会外での幅広い社会的活動を通して、地域の人々にあるいは日本国民全体に、直接的な伝道面以外でも大きな貢献を残しているのである。ここでは、それらの内の二、三のみを紹介しておこう。

① まず、社会福祉事業における働きである。彼は早くから、在仙外国人が組織していた救貧委員会の委員長として活躍し、市内坊主町（現・八幡町の一部）にあった「救貧院（Poor House）」に対し、多数の寄付によってその維持経営を助けること、十二年間に及んだ。また、一九〇五（明治三十八）年の東北大凶作に際しては、国内外に訴えて拠金を募り、各地を巡回して多数の困窮農家を見舞い、人々を物心両面で支えた。このめざましい救恤活動は朝野を感激させ、日本政府（内務省）はファウストを表彰して銀盃二個を贈ったほどであったが、彼はその後

も、この大飢饉がもたらした多数の捨て子救済のために開設された「仙台基督教育児院」の会計理事として長く尽力した。なお、ファウストは、仙台東六番丁教会の盲人日曜学校を母胎とする「東北盲人学校」（一九〇七年開校―現在の宮城県立盲学校）の経営にも大きな支えとなっており、さらに、第一次世界大戦中は、夫人と共に赤十字活動を強力に援助した。かくて、彼は、実に仙台の社会福祉事業における草分け的存在の一人であり、かつその発展の大功労者でもあったのである。東北学院「労働会」をよく指導し、また宮城女学校の基督教女子青年会に社会的奉仕活動を勧めたのも、右記の諸活動と同じく、彼の篤い信仰にもとづく博愛精神の発現なのであった。

② さらに彼は、わが国の結核予防運動に嚆矢を放った一人として献身的に働いた。日本の宿痾（あ）といわれてきた結核病は、明治以降も多くの有為な国民を斃し、わが国を世界一、二の「結核大国」たらしめてきており、国民の死亡率第一位を脳卒中にゆずったのは、実に第二次大戦後、一九五一（昭和二十六）年のことであった。しかし、明治期の公的施策としては、わずかに一九〇四（明治三十七）年の「肺結核予防令」が器物消毒や痰つぼ設置を命じていたにすぎない。来日以来、この問題に心を痛め、すでに在日外国人の結核予防対策にとり組んでいたファウストは、当然のことのように、日本人のためにも活動を開始した。

一九一一（明治四十四）年、啓蒙的な著作『社会の強敵』を日本文で発表し、翌年には「結核予防思想普及会」を組織してその会長となり、英文の季刊誌も発行しはじめた。そして、当時まだ珍しく、かつ高価でもあった幻燈機をみずから購入し、各地を巡回して映写・講演会を開いてうむことなく、遠隔の地からの招聘にも喜んで応じた。この活動に協力することとなる「日本結核予防協会」が一九一三（大正二）年に設立され、また同年十二月、近江八幡にわが国最初の結核療養所（民営）が建てられ、さらに、翌年の帝国議会は「肺結核療養所設置及び国庫補助に関する法律」を成立せしめたが、これらが、みなファウストを中心とする人々の奮闘の賜といわれるのは、まことにもっともなことである。やがて、国民全体を対象とする「結核予防法」が一九一九（大正八）年に成立し、患者

の死亡数も前年をピークに以後漸減していくが、その後の関係者の努力によって、現在ではこれが極度に低下してゼロに近づきつつあり、新規発病者も激減した。伝道者ファウストは、私たち日本人にとって、この世の命の恩人でもあった。

③　もう一つ、ファウストは、地域社会に対する教育活動の面でも大きな貢献を果たした。学生時代からの親日家であり、日本的趣味にも通じていた彼は、その人格識見と、ユーモアさえ交える巧みな日本語とを以て、本校に直接関わりのない人々の心をもとらえ、前記二項に見られるようなめざましい働きぶりもあって、その名声は、教育界の内外に広く高くとどろいていた。

彼は、度々、請われて県や市の教育会（学校教職員の研修団体）で講演を行ない、各地の学校で数繁く教育講話を試み、また有志教員のために英語クラスも開くなどして、諸学校の教師に敬愛され、父兄・生徒・学童にも直接間接に好ましい影響を及ぼしていたのであった。さらに、銀行・一般会社など地元企業の経営者あるいは従業員のための講演会にもしばしば招かれて訓話を与えているが、どれも深い精神性に富む内容だったという。加えて、彼は、日本における女性の社会的地位の向上と内面の充実を訴えて、世人を導くことすこぶる熱心であった。彼が、来日以来四半世紀を経た一九二六（大正十五）年、英文であらわした『近代日本の女性』は、国内でも名著との評すこぶる高かった。翌二七（昭和二）年一月号の「婦人公論」には、本県ゆかりの著名なジャーナリスト・評論家千葉亀雄が、正鵠を得た紹介文（「外国人の観たる日本婦人」）を載せているので、その一部を抄記しよう。（一九三一年四月二十四日発行校友会誌「橄欖」第十号の冒頭記事「ファウスト前校長略歴」より、ただし、用字法等はそのままとした。）

「少なくとも自分が此頃読んだ少数の異邦人の日本婦人観は、邦人の或種の現代婦人観よりももつと洞察があり大観的であり同情があ

り、第一判斷と觀察が正しいものである。――ファウスト氏は仙臺の宮城女學校の校長として十三年間を勤め、總体では二十五年間も日本に棲んでゐた。かうした人々が所謂西洋眼を通して眺めた日本である。もつとよいことは彼等が多くの西洋旅行者のやうに、何でもかでも舊日本の禮讃者でないことである。彼等はむしろ現代日本の黎明は東西文明の調和にありとし現代日本の女性の目醒は明かに新女性時代の輝かしい曙だとして驚異してゐる。……ファウストは日本の新女性の今將に進みつゝある進路が何處にあるかを語り、舊思想との衝突、日本の新女性の特殊性、新日本の女性があらゆる方面に觸手を伸しつゝある活動の世界の種々相を極めて正確に眺め正しく判斷して、最後に日本と日本女性の社會的展開は人類が最も深い欲求と最も高い憧れに於て結局は一つだといふ證據を立派に証明するものだといふ。そして現代までに存在する外的な相違もつまりは決定的なものではなく、單に特殊な事情から起つた所――違つた環境から生れたものだといふ事を示すに過ぎない。そして彼等は他の人類と同じ狀態の下に同じ社會群の中に置きさへすれば、やはり同じ樣な機能を十分に生長させ得るものだといふことを併せて證明するに外ならない……」

右のように、ファウストの働きはまさに八面六臂、その成果は、ただ驚嘆の一語に尽きるものであった。彼は、教育宣教師としての職務以外にたくさんの仕事を進んでみずからに課し、しかもそれら一つ一つに常人を超えたその能力を惜しまず傾注したのである。しかし、ファウスト校長在職十七年の間、敬愛のまなざしを以てその傍らを通りすぎた何百人もの学生・生徒はもとより、共に働いた教職員の内、多くの者が、彼の校外における右記のような活動のすべてには気づかず、あるいは詳細を知らされていなかったのであった。彼が、常に温顔を以て人に接し、その大きな手を振りつつ、悠揚せまらぬ足どりで校内を歩いていたからである。

なお、彼は、当然のことながらアメリカのキリスト教界、教育界でも、夙に高い名望を得ていた。それは、合衆国改革派教会の月刊誌 The Outlook of Missions の記事などに見られるように、彼が休暇で一時帰国すると、説教や講演の依頼が、物理的限度を越えて殺到したこと、あるいは、彼地で当時刊行された権威ある「紳士録」に、在日アメリカ人宣教師としてD・B・シュネーダーと共に二名だけが載せられていたことなどからも察せられる。

ところで、ファウストの、余人には到底及び得ないこのような働きを、陰に陽に支えていたのは、メアリ夫人であった。牧師の家庭に育ち、教師でもあった夫人は、仙台東六番丁教会のオルガニスト・婦人会長を長くつとめ、二人の男児（一九〇五年生れロイド及び一九一三年生れリチャード）を育てながら、努めて病人や求道者の家庭を訪問し、かのクリスティン夫人がそうしたように、諸教会の婦人会をよく励まし、あるいは宮城女学校で英語を教え、家庭ではバイブルクラスを開いた。さらに、ファウストが校長となってからのメアリ夫人は、病床にある生徒を頻繁に見舞ったりもした。この間、博士も編集委員の一人となっている月刊「東北教会時報」の英文欄を、夫人が毎号担当執筆し、また英文の著作『宝の谷』を公刊するなどして、教育者・宣教師たる夫をよく助けたのであった。

かくて営々三十年、主に在って日本と日本人を愛し続け、後半の十七年間を本校のために、夫人ともども尽くしたファウストは、やがて一九三〇（昭和五）年五月、退任・帰米することとなった。春浅い頃それを知った教員・学生・生徒らの驚きと落胆は非常なもので、次の三つの文章には、その心情が極めてよくあらわれている。（「橄欖」第十号六～九頁、用字法等は原文のまま）

送別の辞（原文英語）

日本教員總代　黒澤長平

ファウスト博士及御夫人。

私は今茲にて眞に博士及御夫人と御別れする様な感じは致しません。夫れが數日の裡に實現さるゝ事實と信ずる事は出來ません。貴下達は兩三回賜暇歸米なされ、其度々に學校に多大の御土産を携へて御歸校なさいました。今私の感じは其の時の様に思はれてなりません。何と私共が感じ様が此の別は眞の事實確實なる事實としてとして數日の内に實現するのです。私共は夫れを信じなければならぬのです。日本では「生別は死別にまさる」と申します。又永の別れには人は時立てば神の御心に御委せする氣になります。しかし生別の場合には何時までも運命とあきらめる事は困難です。使徒行傳二十章に聖保羅とエペソの信徒との別れの記事が明確に描かれて居ります。「みな

大に歎きパウロの頸を抱き接吻し、その再び我顔を見ざるべしと云ひし言によりて特に憂ひ遂に彼を船まで送りゆけり」若し我國の習慣が許すならば、我等も昔のエペソ人と同様に貴下の頸を抱き接吻して別を惜みたい氣がするのです。

我が主イエスの母マリヤに關するシメオンの預言（路加傳二、三五）「劍なんぢの心をも刺し貫くべし」とは又總ての父母に對する運命でなければならぬと見へます。我共は總ての事物を子女の爲に捧げねばなりません。眞に我々兩親たる者は我等の子女の祭壇の前の犧牲者であります。博士が御言葉は眞に我共の肺腑を貫くの感を致します。——「私は本校の校長たるの職を辭する事は出來ますが、我が父たるの職は辭する事は出來ません」是れは何人に對しても同樣の眞理であります。私共は深く博士の御心中に御同情申上て居ります。博士は何時も溫顏を以て私共に接してくださいました。私共が怠けた時も過ちをなした時もにこにことして私共を教へ導きてくださいました。一言で申せば博士は私共の父でした。私の如き老輩に對しても父の如き愛を以て私共の爲めを計つてくださいました。今や私共は我等の父と別るゝ苦い經驗を認めなければなりません。私共は貴下達を太平洋の向ふの御國に送り、當分御目にかゝる譯には參りません。忍耐の苦しい教訓を學ぶ爲に私共は昔のイスラヘル人が天より與へられたる御言葉を聞かねばならないのです。「心を強くしかつ勇め、汝の凡て住く處にて汝の神エホバ偕に在せば懼るゝ勿れ戰慄くなかれ」さらば御別れ申し上げます。神の祝福永遠に博士と御家族の上にあれ。

ファウスト校長を送る辭

専攻科總代　英文三年　阿部都喜子

先生がこの宮城女學校を又我が日本をお去りになると云ふ事を耳にしました時、私共はどうしてもその事實を信じる事が出來ませんでした。

それにもうお別れしなければならない時期が目の前に迫つてる事を思います時、私共の心は悲しみで一杯で御座います。いつもやさしい笑を浮べていらいしやるお顏、あの大手を振つてお歩きになるお姿がもうこの學校の何處にもお見かけすることが出來ない事を思ひますと、私共は大變物足らなく耐へられない淋しさをおぼえます。どうしてもお別れするのがいやで出來ます事なら無理にでもお引きとめ致したいのが私共の願いでございます。

三十年の昔、神の御教をお廣ろめになるためにはる〳〵故國をお離れになつて、文化の未だ開けない日本にお出で下され、私共が生れてやつと日の光を喜んで居りました頃から先生はこの宮城女學校の校長として多くの姉妹をお導き下さいました。宮城女學校と云へばダクター・ファウストをダクター・ファウストと云へば宮城を思ひ起す程、ダクター・ファウストの御名は私共宮城女學校の生徒ばかり

でなく、廣く仙臺の人々の間に親しみのあるもので御座居ます。
十有八年と云ふ長い間、内に外にあらゆる苦しみと困難とお戰ひになつて、宮城女學校の今日をあらしめ下さいましたのは一に先生の祈りのお力と思ひまして、私共は感謝の念にたへません。
暑い時も、寒い時も、いつも變らず私共を愛し育み、常に正しい道へお導き下さいました。この御恩は深く私共の心の奥にしみ込んでおりまして幾度お禮申しても足らないくらいで御座います。
私共の宮城女學校の誇の一つである先生の流暢な日本語の演說や、私共日本人の眞似の出來ないお上手なユーモア等も先生がお去りになると同時にお聞きする事が出來なくなる事を思いますと、眞に殘念で御座居ます。
校長先生と云へば一般にきびしくいかめしくて近づき難いものゝやうに思つておりましたが、私共の校長先生はよく私共の一人々々を眞の子供の樣に愛して下さいました。その暖かい御恩情は私共の一生涯を通じて忘れられぬ事でございませう。
或年の丁度今頃で御座居ました。先生は校庭の木瓜の葉をとつて、その葉で作つた草笛を聞かして下さいました。又先生と御一緒にお庭の草刈をいたした事もございました。
最早こうした事も皆なつかしい思出となる事で御座いませうか！
その時が間もなく來る事を考へますと、お別れが名殘りおしくてなりません。
先生！
長い間色々ありがたう御座いました。先生が私共にお示し下さつたお敎への數々を私共は深く心に刻んで憶えて居ります。そして、私共の魂をより高く、より淸くすると同時に、ます〳〵この學校の榮えを期する事が先生の深い〳〵御恩に報ひる一端である事をよく知つて居ります。
お別れに際してこの事の實行を固くお約束いたします。
先生！
出來ます事なら再び日本を、そしてこの宮城女學校をお尋ね下さいます事を私共は切にのぞんでおるので御座居ます。
又長い御道中を先生には恙なくお歸國なさいます樣お祈り致しております。
お別れの悲しさに胸がふさがつて今は申し上げたい言葉も出て參りません。
このつたない言葉をもつてお別れの御挨拶に致したいと存じます。



ファウスト校長の離任挨拶

送別の辞

高等女學科生徒總代　五學年　我妻　さだ子

遠く故郷を離れ私達を教育せんがために身を神にゆだね、父母に代り幾年の間私達を愛し導いて下さつた校長先生、如何なる時もやさしい笑顔と、あふれ出づる愛とをもつて接して下さつた先生。此度御歸國なさるとの事をきゝました時の私達の驚きと悲しみ如何ばかりでございませう。このうらゝかな春の光がどんな人をも樂しませてくれて居るのに、私達の心の中は言ふ事の出來ない悲しみのためにとざされて居ります。

かへりみますと先生と共に樂しんだ過去の事どもがみんななつかしい思出となりました。

又先生の說教の時の御姿、あのほゝゑんだ御顏、大きな手、忘れる事の出來ない一つの印象となりました。

先生とのお別れがどんなにつらくても悲しくても今はいさぎよくお別れせねばなりません。

どうぞ先生、御歸國なさつても私達をお忘れなさらず神のためます〳〵お働き下さいませ。私達も社會に出で神の道を歩み光の道を進んで幾分なりとも宮城女學校發展のため盡し先生の御恩にむくいたいと存じて居ります。

私達は先生ならびに御家族の御健康と神よりの祝福あらん事を祈り上げます。

このふつゝかな言葉をもつて送別の辭といたします。

博士夫妻との離別を悲しんだのは、校内に在る者たちだけではなかった。同窓会や父兄会の会員は、ファウスト帰米の報におのが耳を疑って、多数の者が学校に参集し、その真偽を問いただしたという。やがて、彼等の間から期せずして「ファウスト記念館」建設の議が湧き上がるが、ファウスト夫妻の離仙前からその資金が集められ、送別後半年も経ずして定礎式が行なわれるというスピーディな運びも含めて、すべてのことが彼等の残したものの大

きさを物語っているのであった。この頃、ファウストの胸裡には、後任としてクリーテ宣教師の名が浮んでいた。

なお、宮城県教育会は、彼の帰国の報を聞くと直ちに、その長年の貢献を謝して置時計を贈り、日本政府からも、その功績に対して五月二十九日、勲四等瑞宝章が授与された。

五月三十日、離任式、そして六月十六日、ファウスト夫妻は、二男リチャードを伴ない、主のご用のために三十年を過した仙台を出発、故国に向かったが、神戸までは教員代表一見清と同窓会代表原田ことぢが同行した。

彼は帰国後、ノースカロライナ州に在る名門校、合衆国改革派教会につらなるカトーバ大学（Catawba College）教授となって、「社会科学」を講じ数年後に引退するが、愛する日本が、やがて「十五年戦争」の苦しみを経て、敗戦後の復興に向かって歩み出すさまを、故国から夫人と共に見守り、一九五三（昭和二十八）年九月十三日、ペンシルヴァニヤ州アレンタウンで歿した。八十四歳の誕生日を祝って間もなくのことであった。

ファウストの生涯は、聖書の教えそのままに、心をつくし精神をつくし力をつくして、主なる神を讃美し、誰しもを隣人としておのれの如くに彼等を愛し続けた日々の連続であった。そして、その隣人の群の中に、わが宮城女学校全体を大きく包みこんでいたのであった。

専攻科の充実

一九一二（明治四十五）年四月、三年制の「家政専攻科」が、全七十五名の定員で新設された。これは、「英文」（翌年）、「音楽」（一九一六年）、「聖書」（同年）と続く、各専攻科設置のスタートを刻するもので、本校は、創立後四半世紀を経て、早くも専門学校としての実質を併有しはじめたのであった。

右のうち、英文専攻科（三年制、ほかに予科一年）は、実際の開講が二年遅れたものの、音楽科は、すでに一九一四（大正三）年から専攻科としての内容を持つ授業が開始されて、一九一七年春にその第一回卒業生を出しており、また、聖書科も前述のように構内のバイブル・ハウスにおいて、一九〇〇（明治三十三）年から一年課程で開設されていたものを、ミッションの手から学校の経営に移し、同時に二年制としたのであった。それまでは、卒業

生有志に対するいわば継続教育コースであったものが、徐々に形を整えてきたのである。いずれにせよ、専攻科設置への胎動は、かなり早くから活発化していたわけで、それが歴代校長はじめ、K・I・ハンセン、L・A・リンゼイ、早坂哲郎など日米教師陣の努力を通して、誕生――成長へとつながっていき、ひいては「本科」の一層の充実をも結果したのであった。

家政・英文両専攻科の開設によって学則の一部が改正された（一九一三年）ので、左にその概要を掲げよう。家政・英文両科が認可された時のものであるが、本科の学科目や、改訂されたばかりの授業料（月三十銭アップ）・寄宿料（一円アップ）なども記してあって興味を引く。

なお、当時の各科カリキュラムは、後表の通りであるが、ほどなく認可された音楽専攻科の分も付しておく。

第一條　本校ハ基督教主義ニ基キ女子ニ須要ナル高等女學校程度ノ高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條　本校ノ修業年限ヲ五ヶ年トス

第三條　本校ノ學科目ハ聖書　修身　國語及漢文　英語　歴史及地理　數學　理科　圖畫　家事　裁縫　音樂　教育　法制及經濟　体操トス

第七條　入學ハ學年ノ始ヨリ三十日以内ニ於テ之ヲ許ス
但シ缺員アル時ハ第二學期及第三學期ノ始ヨリ十日以内ニ於テ臨時之ヲ許スコトアルベシ

第八條　第一學年ニ入學ヲ許スベキ者ハ年齢十二年以上ニシテ尋常小學校ヲ卒業シタルモノ又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スルモノトス

第九條　第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業セザルモノニ對シテハ入學志願者ノ數入學ヲ許スベキ人員ニ超過スル場合ト雖トモ拘ハラズ國語算術日本歴史地理理科ニ就キ尋常小學校卒業ノ程度ニ依リ入學試驗ヲ行フモノトス

第一學年入學志願者中尋常小學校ヲ卒業シタルモノニ對シテハ入學志願者ノ數入學ヲ許スベキ人員ニ超過スル場合ニ限リ國語算術ニ就キ入學試驗ヲ行フモノトス
但シ本校長ノ意見ニ依リ試驗ヲ行ハス志願者ニ先チテ入學ヲ許スコトアルベシ

第十條　第二學年以上ニ入學ヲ許スベキ者ハ相當年齢ニ達シ前各學年ノ課程ヲ卒リタル者ト同等ノ學力ヲ有スルモノトス
前項入學者ノ學力ハ前各學年ノ程度ニ於テ其各學科目ニ就キ

試驗ニ依リテ檢定ス

第十三條　本校ト同一程度ノ女學校生徒ニシテ本校ニ轉學ヲ志望シ該學校長ヨリ在學證明書成績表及學科課程表ノ送附アルモノハ本校ニ缺員アル場合ニ限リ無試驗ニテ同一學年ニ編入スベシ

但シ必要アリト認ムル時ハ英語ノ試驗ヲ行フ

第二十一條　各學年ノ課程修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績試驛成績及操行ヲ考査シテ之ヲ定ム但シ本校長ノ許可ヲ得テ試驗ニ欠席シタル者ヲ考査シテ之ヲ定ムルコトアルベシ

第二十二條　試驗ハ各學期內ニ於テ其學期間ニ履修シタル學科目ニ就キ之ヲ行フ但シ本校長ノ許可ヲ得テ試驗ニ欠席シタル者ニハ特ニ追試驗ヲ行フコトアルベシ

試驗ハ某學科目ニ就キテハ本校長ノ意見ニヨリ之ヲ行ハザルコトアルベシ

第二十三條　本校長ハ修業年限ノ終ニ於テ本校ノ教科ヲ卒業セリト認メタル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第二十四條　入學料ハ金壹圓トシ入學ノ當日之ヲ納ムルモノトス

第二十五條　授業料ハ一ケ月金壹圓五拾錢トシ在學中出席ノ有無ニ拘ハラズ每月五日迄一月四月九月ハ十五日迄特ニ納期ヲ指定シタル時ハ其期日ニ新入學者ハ其當日之ヲ納ムルモノトス

第二十六條　學校ノ休業日全月ニ亘リタル時ハ其月分ノ授業料ヲ徵收セズ

第二十七條　授業料ヲ滯納シタル者ハ滯納中其授業ヲ停止シ其旨保證人ニ通告シ尙三十日以內ニ納メザル時ハ退學ヲ命ズ

第二十八條　課外ニピアノ又ハオルガンノ彈奏ヲ學習スル者ハ每學期ノ始メヨリ五日以內ニ中途ヨリノ學習者ハ其當日一學期間ノ音樂料トシテピアノ金四圓オルガン金參圓ヲ納ムルモノトス

第三十二條　生徒ヲシテ學業ニ專心ナラシメンガ爲メ本校ニ寄宿舍ヲ設ケ志願生徒ノ寄宿ヲ許ス寄宿生徒ノ監督及衞生上ノ取締ハ舍監寄宿女教員及看護婦ヲシテ之ヲ掌ラシム

第三十五條　寄宿料ハ一ケ月金五圓トシ每月五日迄一月四月九月ハ十五日迄特ニ納期ヲ指定シタル時ハ其期日ニ新ニ入舍スル者ハ其當日之ヲ納ムルモノトス但シ物價非常ノ高低アル時ハ其額ヲ變更スルコトアルベシ

第三十八條　本校ニ專攻科ヲ置キ之ヲ分チテ家政科英文科ノ二トシ英文科ニ豫科ヲ置ク

第三十九條　專攻科ノ修業年限ハ家政科三ケ年英文科三ケ年英文科豫科一ケ年トス

第四十條　專攻科各學年ニ於ケル各學科程度及每週教授定時數ハ左ノ如シ（別表）但シ一定時ハ四十分トス又隨意科ハ生徒ノ志望ニヨリ其學力ヲ檢案シテ之ヲ課スルコトアルベシ

第四十一條　家政專攻科第一學年ニ入學ヲ許スベキ者ハ左ノ一項ニ該當スルモノトス

一　修業年限四ケ年以上ノ高等女學校卒業者

二　専門學校入學者檢定規程ニ依リ無試驗檢定ヲ受クル資格アル者若クハ該試驗檢定合格者

三　前二項中何レノ資格ヲ有セズトモ高等女學校ノ必修學科目ヲ試驗シ修業年限四ケ年ノ高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有スルト認メタルモノ

第四十二條　英文科豫科ニ入學ヲ許スベキモノハ前條ノ資格ヲ有シ更ニ英語ノ入學試驗ニ合格シタルモノトス

第四十三條　英文科第一學年ニ入學ヲ許スヘキモノハ左ノ一項ニ該當スルモノトス

一　本校卒業者及英文科豫科修了者

二　第四十一條ノ資格ヲ有シ更ニ前項豫科修了者ト同等以上ノ英語ノ學力アルモノ

第四十四條　第二學年以上ニ入學ヲ許スベキモノハ第四十一條ノ資格ヲ有シ更ニ前各學年ノ學科目及課程ニ就キ試驗ヲ經タルモノトス

第四十五條　專攻科入學志願者ハ入學願書ト共ニ入學試驗手數料金五拾錢ヲ納ムルモノトス

第四十六條　專攻科ノ授業料ハ一ケ月金貳圓トス

（以下略）

なおこの頃、在日宣教師社団から学校へ移管されようとしていた聖書科では、聖書、カテキズム、聖書考古学、聖書地理、キリスト教史、音楽、英語、国語、漢文、伝道法、育児法、看護法などを教えていた。

家政・英文両専攻科の設置をいわば置土産に、一九一三（大正二）年夏、ワイドナー校長は退職した。六月三十日朝の礼拝後、彼女自身から、七月十五日をもって退職すること、後任として東北学院のアレン・クライン・ファウスト教授が七月十六日来任することが報告され、生徒らの落胆の中で、時を移さず送別式が催された。そして七月十五日朝、ワイドナーは帰米の途に就き、仙台在住の教職員生徒一同が駅に出て見送った。

サディ・リー・ワイドナーは、一九〇〇（明治三十三）年五月の来日――本校着任以来、校長としての四年四ケ月を含めて十三年間余、厳格かつ濶達な人柄をもって、聖書および英語を教授した。来任早々第三代ズーフル校長の帰休に際して校長代理を二年三ケ月つとめたが、この間、校舎の焼失（一九〇二年）に遭い、その事後処理に多

高等女學科甲部乙部學科課程表

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	新約及舊約道徳ノ要領	同上	同上	同上	同上
國語漢文	國語講讀作文文法習字	同上	漢文講讀作文習字	同上	國語漢文講讀作文習字
英語	讀方書取綴方讀解會話文法習字	同上	讀方綴方譯解會話文法作文	讀方綴方譯解會話文法	同上
歴史地理	日本歴史日本地理	同上	東洋歴史外國地理	西洋歴史地理	西洋歴史地理
數學	算術	同上	全上	代數	幾何
理科	植物動物	動物生理及衛生	生理及衛生動物	物理及化學及鑛物	化學及鑛物天文
圖畫	自在畫	同上及用器畫	同上及考案畫	同上	同上
家事				衣食住	看病育兒家計簿記割烹
裁縫	運針縫方縫方縫地	同上	同上及ミシン使用法	同上	同上
音樂	唱歌器使用法	同上	同上	同上	同上
教育					教育ノ大要
法制經濟					法制經濟ノ大要
體操	普通体操及遊戲	同上	同上	同上	同上
合計	三五	三五	三五	三五	三五

每週教授時數

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
修身	二	二	二	一	一
國語漢文	六	六	六	甲部三乙部五	甲部三乙部五
英語	六	六	六	甲部八乙部六	甲部八乙部六
歴史地理	三	三	二	二	二
數學	三	二	二	二	二
理科	一	二	二	二	二
圖畫	一	一	一	一	一
家事				甲部二乙部三	甲部三乙部五
裁縫	四	四	四	甲部四乙部五	甲部四乙部五
音樂	二	二	二	二	一
教育					一
法制經濟					甲部三乙部五
體操	三	三	三	三	三
合計	三五	三五	三五	三五	三五

每週教授時數

一、高等女學科第四學年ノ始ニ於テ生徒ノ志望ニヨリ英語家事裁縫ノ三科目ニ就キ甲部又ハ乙部ノ教科ヲ選定セシム

一、音樂ニ於テハ器械外ニ學習スルセアノ又ハオルガン彈奏ノ成績ヲ一級ヨリ五級マデトシ高等女學科卒業ノ際修了證書ヲ授與ス

家政專攻科學科課程表

學科目＼學年	第一學年 毎週定時數	第一學年 毎年定時數	第二學年 毎週定時數	第二學年 毎年定時數
必修科目				
聖書	二	二	二	二
修身	一	一	一	一
家事	二	二	二	二
割烹	六	六	六	六
裁縫	二二	二二	二	二
教育	一	一	一	一
生理衛生	二	二	二	二
應用理科	一	一	一	一
國語	二	二	二	二
音樂	一	一	一	一
體操	一	一	一	一
計	三一	三一	三一	三一
隨意科目				
英語	三	三	三	三
簿記	三	三	三	三
音樂	三	三	三	三

家政專攻科生徒ハ毎學年ノ始ニ於テ二科目マデ隨意科ヲ選定スルコトヲ得
選定ノ隨意科ハ學年ノ半途ニ於テ廢學スルコトヲ得ス
但シ學校長ノ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

（右は実施時のもの 四五六頁参照）

學科目＼學年	第一學年	第二學年
聖書	新約及舊約	全
修身	道徳ノ要領	全
家事	家事經濟	全
割烹	日本料理	全
裁縫	用心縫	教育ノ原理
教育	心理學大意	衛生學
生理衛生	生理	全
應用理科	食物化學	全
國語	作文	全
音樂	唱歌	全
體操	普通體操及遊戲	全
英語	會話	全
簿記	商業簿記	銀行、會社簿記及官用簿記
音樂	ピアノ或ハオルガン伴奏者	全
音樂	音樂論	和聲學
		音樂史

英文專攻科學科課程表

學科目＼學年	必修科目											隨意科目				
	聖書	修身	英語	教育	國語漢文	體操	音樂	合計	生理衛生	家事	農經	音樂	宗教諸問題
第一學年 每週定時數	四	一	一三		三	二	二	二六					
	新約及舊約ノ要領	道徳ノ要領	讀方二 譯解四 會話二 作文二 文法三		國語講讀二 作文一	普通体操及遊戯	唱歌						
第一學年 每週定時數	二	一	一四		四	三	一	二五		二	三	三	二
	全 上	全 上	文法二 作文二 會話一 讀方四 譯解四 和文英譯一 獨習一		國語講讀二 漢文講讀一	全 上	全 上		生理學	家事 經濟	農經	基督教史 基督教音樂	宗教
第二學年 每週定時數	二	一	一五	二	二	三	一	二六		三	三	二	二
	全 上	全 上	文法二 作文二 會話一 讀方四 譯解四 和文英譯一 獨習一	教育ノ原理	國語漢文講讀一	全 上	全 上		衛生學	全 上	全 上	ピアノ或ハオルガン 音樂者ノ	全 上
第三學年 每週定時數	二	一	一五	二		三	一	二五		三	三	二	二
	全 上	全 上	文法二 作文二 會話一 讀方四 譯解四 和文英譯一 獨習一	教育ノ原理 教授ノ原理		全 上	全 上			全 上	全 上	ピアノ或ハオルガン 音樂史	全 上

英文專攻科本科生徒ハ每學年ノ始ニ於テ二科目マテ隨意科ヲ選定スルコトヲ得但シ場合ニヨリ學校長ノ許可ヲ受ケ二科目以上ヲ選定スルコトヲ得

選定ノ隨意科ハ學年ノ中途ニ於テ變更スルコトヲ得但シ學校長ノ許可ヲ受ケタル者ハ此限ニアラス

音樂專攻科學科課程表

聲樂部　ピアノ部　オルガン部

學科目＼學年	第一學年 毎週定時數	第一學年	第二學年 毎週定時數	第二學年	第三學年 毎週定時數	第三學年
聖書	二	新約及哲約	二	全上	二	全上
修身	一	道徳ノ要領	一	全上	一	全上
和聲學	二	和聲學	二	全上		
分聲學					二	分聲學
音樂者傳	一	音樂者傳				
音樂史			一	音樂史	一	全上
ピアノ或ハオルガン學習	一	ピアノ或ハオルガン學習	一	全上	一	全上
ピアノ或ハオルガン練習	一五	ピアノ或ハオルガン練習	一五	全上	一五	全上
音樂教授法					二	音樂教授法
音聲學習	一	音聲學習	一	全上	一	全上
音聲練習	五	音聲練習	五	全上	五	全上
視唱或ハ聽音練習	四	視唱或ハ聽音練習	四	全上	四	全上
合計	三二		三二		三四	

ピアノ部及オルガン部ニ於テハ音聲學習　音聲練習　及視唱或ハ聽音練習ノ三科目ヲ缺ク

音樂專攻科生徒ハ學校長ノ許可ヲ得テ一週四定時マテ他ノ專攻科ノ學科ヲ選修スルコトヲ得

但シ前學年ノ學年成績九十點以上ノモノハ學校長ノ許可ヲ得テ四定時以上選修スルコトヲ得

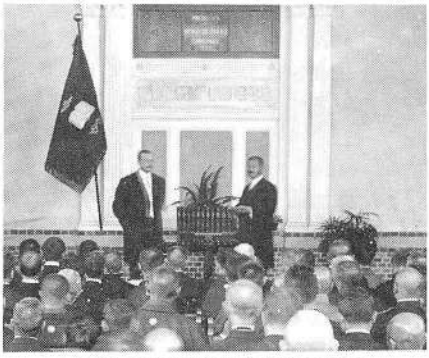
大の心労を経験して、才気煥発の彼女も一時健康を害しさえした。しかし、その後も早坂幹事らと共に、よくズーフル、ミラー両校長を助けて、新校地の取得、校舎の復旧等につとめたばかりでなく、バイブル・ハウス――聖書科の育成に力を注ぎ、諸専攻科設置への道を広げ、また「高等女学校」としての正式認可を得るなどして、本校最初の四半世紀を、さらなる充実のうちに終わらせた。ワイドナーは、辞任後一時帰国したが、まもなく再来日し、岐阜県の大垣地方に宣教師として赴任、長く伝道に従事した。この間、絶えず仙台での十三年間を懐しみ、一九二七(昭和二)年頃には、本校を訪れて聖書科卒業生らと再会した写真を残している。その後、半世紀を関した本校の歩みを想いつつ帰米する途中、一九三九(昭和十四)年十二月二十六日、船中で歿し、オハイオ州ティフィンに葬られた。六十六才であった。

さて、第六代校長ファウストと、夏休み明けに着任した音楽教師メアリ・E・シュネーダー(東北学院長D・B・シュネーダーの長女)との歓迎会が、九月十八日の創立記念式後行なわれ、新校長は本格的な執務を開始した。本校の実情を忽ちにして把握した彼は、就任後最初の書簡(九月二十七日付)を外国伝道局に送っているが、そこでは宮城女学校の教育内容が、公立校に比べ、英語と音楽ではすぐれているものの、他の科目ではまだ同等あるいはそれ以下、特に家庭科(Domestic Science)を含む理科、あるいは日本史・東洋史などでむしろ劣っていることを認め、その改善に努力するつもりである、と述べ、今後とも全科目にわたって、よりすぐれた教師を得るために、その給与面での向上(年金制度の導入も含む)にさらに配慮してほしい旨も訴えている。また、彼は本校について一般市民が、外国人によって経営されているキリスト教私学であることをネガティブにうけとめていると感じており、この誤った見方の払拭が急務であるとも書いている。当時の仙台は、内外の伝道関係者からThe most christian city in Japanと評され、宣教師たちと行政当局や一般市民との関係が、仙台ほど良好な所はないともいわれていたが(寺田祐之県知事の転任に際し、在仙宣教師一同が本校で盛大な感謝会を催したり、D・B・シュネーダー夫妻の一時

帰休にあたって、仙台の名士多数が送別の宴を開いたことなどは、その代表例)、人々が、宣教師に向ける敬愛の眼は、ミッション・スクールとその教育内容に対しては、女子教育への偏見もあって、まだまだ冷ややかであったことが察せられる。ファウスト新校長は、かくて大きな課題を背負うこととなるが、彼の在任十七年間はその克服への過程であり、自らの努力と、合衆国改革派教会の協力と、教師たちの勉励とによって、そして学生・生徒・父兄らの理解と信頼に支えられて、課題のほとんどは解決されていったのである。

同年十月十日、「早坂哲郎幹事在職二十五年記念祝賀会」が催された。これは、早くからワイドナーが提案してその準備にかかっていたもので、彼女の帰国によってファウスト校長の手に引継がれた企画であった。

早坂哲郎は、一八八八(明治二十一)年、数学教師として来任、一八九九(明治三十二)年からは「幹事」(教頭)となり、歴代のアメリカ人校長を助けて、教師陣を率い、学校運営上の様々な立案と実務遂行の中心となって校内外に奮闘した。若くして公立校(宮城県名取郡閖上浜小学校)の校長をつとめた彼は、地元教育界ばかりでく、県や仙台市当局の信望も厚かった。その娘を本校に入学させた、当時の県知事松平正直が、ミッション・スクール教育の内情を探らせるべく、早坂を教師として派遣したこと、しかも俗にいうミイラ取りのミイラ化よろしく、当の早坂がまもなく受洗して熱心なキリスト教信者となったことなどは、その後代々の語り草となったが、幹事に任ぜられた翌年、一九〇〇(明治三十三)年からは、時の仙台市長里見良顕に請われて、校務兼任のまま、足かけ三年、仙台市助役をもつとめたのであった。一九二〇(大正九)年辞任するまで、その壮期三十二年間を宮城女学校にささげた彼は、アメリカで得てきた教育学上の新知識をもふまえて、数学のほか「修身」なども担当したが、謹厳、古武士然たる容姿の中に、時代の動きを先見する明敏さを秘めて学校の運営に加り、綿密な計画と強い実行力とをもって、専攻科設置や校地取得・校舎建築等を進め、本校発展への土台を揺るぎないものにした。「おやじ」のニックネームが示すように、校長はじめ教師たちからは頼もしがられ、また生徒たちの畏敬の対象であったが、常に文才を発



早坂幹事在職25周年記念祝賀式

揮し、語る所またユーモアに富んでいた、という。

当日の記念祝賀式には、本校関係者のほか、来会者二百名を越え、県知事、仙台市長、(旧制)第二高等学校長らが祝辞を述べ、前校長ワイドナーら元教員も祝詞を寄せた。

なお、これがよき先例となって、その後第二次世界大戦までに、ハンセン、リンゼイ、原田ことぢ(一九三二年)、鈴木虎之進(一九三四年)、金子かね(一九三七年)、一見清(一九三九年)の各教師が、二十五年勤続の祝賀を受けることとなる。

寄附行為制定と理事会の設置　翌一九一四(大正三)年、宮城女学校は、初めて「寄附行為」(The Constitution)を作成した。これは六月二日、合衆国改革派教会外国伝道局の認可を得、その内容に基いて、十月二十日「理事会」(the Board of Managers)が組織され発足した。この「寄附行為」は、英文のものをもって「正本」とすることが定められているので、ここでもその全文を左に掲げておく。

CONSTITUTION

Article I.—Name

The name of this Educational Institution established at Sendai, Miyagi Ken, Japan, shall be Miyagi Girls' School.

Article II. —Object

The following shall be the aim of Miyagi Girls' School:

1. To furnish a thorough general education in harmony with the principles of Christianity;
2. To train girls and young women in body, mind, and spirit so as to fit them to serve God and their fellowmen efficiently.

Article III. —Departments

The Institution shall be divided into Deprtments as follows:

1. An Academical Department having a curriculum extending over five years;
2. A Higher Department, embracing a Graduate Course in Bible Study and Teaching, a Domestic Science Course, a Higher Course in English, and other Courses to be established.

Article IV. —Management

The control of Miyagi Girls' School shall be vested in a Board of Managers representing the interests of *Nihon Kirisuto Kyokwai* (Church of Christ in Japan) and the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States.

Article V. —Board of Managers

1. The ordinary membership of the Board of Managers shall consist of an equal number of missionaries of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States and of Japanese Christians of distinction. The Principal of the School, who shall also be the President of the Board of Managers, shall ex officio be an extra member of the Board, but he shall have no vote except as hereinafter provided. So far as practicable, the membership of the Board of Managers shall include all the missionary teachers in the School who have passed two-thirds of the language examinations required by the Mission. The majority of the Japanese members shall be persons belonging to the *Nihon Kirisuto Kyokwai* (Church of Christ in Japan). Under ordinary circumstances, one, at least, of the Japanese members shall be a graduate of the School. When a member is away from Japan for a year or more, his or her place on the Board shall be filled by some other eligible person, from the time the regular member

leaves until his or her return. Whenever any member of the Board who is a teacher or officer in the School shall sever his or her connection with the School as teacher or officer, his or her membership on the Board of Managers shall thereby cease.

2. The Board shall be a self-perpetuating body.

3. A member whose further membership is considered injurious to the affairs of the Board of Managers may be expelled after due process by a majority of the Board.

4. Persons who work in the interests of Miyagi Girls' School may be elected Honorary Members of the Board but shall have no vote.

5. A quorum shall be two-thirds of the members of the Board.

6. All questions, except amendments to the Constitution, shall be decided by a majority vote, the President of the Board having the casting vote in case of a tie.

7. The regular annual meeting of the Board shall be held during the month of March. Special meetings may be held at the call of the President or at the request of three or more members.

Article VI. —Functions of the Board of Managers

The Board of Managers shall be invested with the following functions:

1. To appoint all officers and instructors of the Institution and to discharge them if this become necessary, provided, however, that for the election or dismissal of the Principal of the School the ratification of the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States shall be necessary; also that for the dismissal of any teacher whose salary is not paid out of school funds, the consent of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States shall be necessary. The Board of Managers, at the beginning of each school year, shall appoint class-teachers for each of the various classes; it shall also appoint all necessary committees.

2. To determine the salaries of officers and instructors (except missionaries), school clerk, and matron of the dormitory. The salaries of such members of the Board of Managers as are paid out of school funds shall be determined by those members whose salaries are not paid out of school funds. The officers of the school shall fix the wages of the servants.

3. To fix the curricula of the Departments.

4. To make all necessary regulations pertaining to admission, attendance, deportment, examinations, grades, fees, libraries, dormitories, religious exercises, and other matters pertaining to the proper administration of the Institution in accordance with its object as stated in Article II.

5. To grant certificates of graduation.

6. To establish new Courses or Departments.

7. To have charge of the finances.

8. To determine the beneficiary allowance to students in need of aid.

9. To take proper care of all property ; and to superintend the erection of recitation halls, dormitories, and other buildings required by the Institution, according to plans and cost approved by the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States, and by the Mission of said Church, as long as the funds for such buildings are mainly furnished by said Board. In case of building funds collected in America for new buildings, the treasurer of the Japan Mission of the Reformed Church in the United States shall act as treasurer.

10. All official communications with the Board of Foreign Missions shall be forwarded to said Board through the Mission.

Article VII. —Officers of the Board of Managers

The officers of the Board of Managers shall be a President, two Secretaries, one to keep the record in Japanese and the other in English, and a Treasurer.

Article VIII. —Duties of Officers of the Board of Managers

1. It shall be the duty of the President to preside at the regular and special meetings of the Board of Managers, to represent the Institution especially to the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in the United States ; also to make an annual report to the same.

2. It shall be the duty of the Secretaries to keep neat and accurate accounts of all the proceedings of the Board.

3. It shall be the duty of the Treasurer to receive and disburse all funds for teachers' salaries, grounds, repairs, books, apparatus, beneficiary education, and current expenses of the Institution. His books shall be open to inspection by any member of the Board of Managers at any time. He shall also make a careful report at the annual meeting of all funds received and disbursed during the year.His books shall be audited by a committee elected by the Board of Managers. This committee shall also audit the Registrars's financial accounts and any other accounts of school funds. All payments that are made must be duly authorized by the Board of Managers through the Principal of the School.

Article IX. —General Officers of the Institution

The General Officers of the Institution shall be a Principal, a Registrar, and later, also Deans of Departments.

Article X. —Duties of the General Officers of the Institution

1. It shall be the duty of the Principal to preside at the regular meetings of the Faculty (or Faculties); to supervise the teaching of the Institution; to administer the rules and discipline of the Institution; to represent the interests of the Institution before the public; to preside at all public meetings; and to make an annual report on the condition, progress and needs of the Institution to the Board of Managers.

2. It shall be the duty of the Registrar:

(1). To have charge of all matters pertaining to the registration, attendance and standing of students, according to regulations prescribed by the Board of Managers;

(2). To be responsible for all records required by the Government;

(3). To make all necessary reports to the Government;

(4). To conduct the current business affairs of the Institution according to rules and methods approved by the Board of Managers.

Article XI. —Duties of Special Officers

1. It shall be the duty of the Librarians to attend to the business of the library, subject to the regulations of the Board of Managers, and to make an annual report to the Board of Managers.

2. It shall be the duty of the Curators of laboratories and museums to have charge of all apparatus and specimens, keep a careful record of the same, and to make an annual report to the Board of Managers.

Article XII. —Faculty

1. The Faculty shall consist of the Principal, (Dean or Deans when appointed), Registrar, regular Teachers and the Matron of the dormitory. Special Teachers, Lecturers, Tutors and the School Clerk may be advisory members.

2. At the beginning of each school years the Board of Managers shall appoint from among the Teachers a Class-teacher for each class, who shall be a means of communication between his or her class and the Principal ; shall hold himself or herself in readiness to report at any time on the scholarship or conduct of the members of the class, and shall have general oversight over their daily conduct.

Article XIII. —Functions of the Faculty

It shall be the function of the Faculty to admit students ; subject to the final decision of the Principal, to take charge of important cases of discipline, suspending or expelling students ; to commend such students as pass the required examinations to the Board of Managers for graduation certificates ; and to determine matters pertaining to teaching.

Article XIV. —Endowment

The principal of the Endowment Fund of Miyagi Girls School shall not be used under any circumstances for any purpose except as an endowment fund.

Article XV. —Miscellaneous

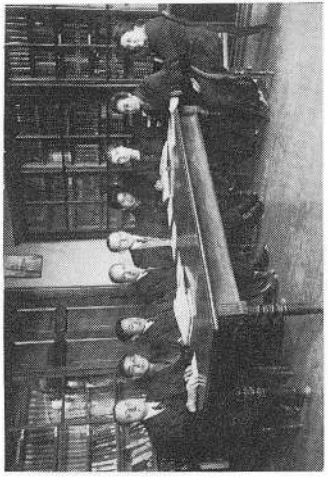
This Constitution may be amended by a two-thirds vote of the Board of Managers at the regular meeting of the same, provided three months' previous notice be given to all the members of the Board, and provided that any amendments involving the Board of Foreign Missions shall have its ratification. Articles II. (Christian Object), VI. Sec. 1. (Principal of School), and XIV. (Endowment Fund) can not be changed.

なお、「理事会」は、かねてから設けられていた「運営委員会」(the Executive Committee) を拡充強化したものと考えてよく、「委員会」同様、校長のほか日本人とアメリカ人それぞれ同数の理事によって構成された。

ボードによって任命された本校最初の理事会メンバーは次の通りである。

アレン・K・ファウスト　(担当教科　聖書)
ケイト・I・ハンセン　(音楽)
リディア・A・リンゼイ　(英語)
マーガレット・J・リーダー　(英語)
オルリー・A・ブリック　(聖書・英語)
早坂哲郎　(ハヤサカ・テツロウ　幹事、数学・修身)
村上兵助　(ムラカミ・ヒョウスケ　国語・漢文)
窪小谷米一　(クボコヤ・ヨネジ　数学)
原田ことぢ　(ハラダ・コトヂ　英語)

以上理事会記録における記載順・(　) 内は引用者による補注



当時の理事会

右のうちファウストは校長として議長を、リーダーと早坂はそれぞれ英文・邦文の書記をつとめることとなった。以後、理事会は少くとも毎月一回、規則正しく開催されていくが、正確に書かれていたであろうその議事録は、第二次大戦終結までの三十余年分が戦災によってほとんど失なわれており、ただ一冊、最初の記録簿（一九一四年十月二十日―一九二八年四十一日）、それも英文のものが残されているだけである。肉筆で書かれたこの議事録は、外国伝道局との連絡内容などのほか、学校の行事予定、教職員各人の校務・授業担当や給与の査定、カリキュラムと使用教科書、学生・生徒一人一人の動静、学校全体の諸収支、さらに購入物品の価格細目等についてまでも、毎回極めて詳しく話しあわれた跡を生き生きと書き留めている。

理事会発足後まもない十一月二十五日、宮城県当局は「幼稚園保姆検定及免許に関する規定」を発表し、本校の卒業生は（過去に遡って）すべて、その免許に関し無試験検定出願の特権を与えられる旨通告してきた。専攻科の設置認可等と相まって、本校の教育実績は公的にもますます認められていくのであるが、それに一層こたえる意味からも、ファウスト校長らは制度面、施設面の充実をさらにはかった。

一九一五（大正四）年三月の理事会は「教職員心得十一ヶ条」を初めて成文化し、校長・幹事・教師・舎監・司書等の職務を細かく定めた。特に教師に対しては、いわば就業規則や、学生・生徒の成績判定基準などの教務事項のほか、彼らの校外生活の指導、保健面での配慮、はては火災予防のための訓練までをも求めているが、この頃総勢二十数名（うちアメリカ人がほぼ三分の一）しかいなかった教職員は、たがいに家庭的に接しあっていたこともあって、これらの規定を至極当然のものとして受けとめこそすれ、束縛的には感じとらなかったようである。

続いて同年五月には「私立宮城女学校生徒心得」が作成され、全校の学生・生徒に配布された。詳細な規定の中に、本校の教育方針がよくあらわれているので、これも全文を転載しよう。（「心得」原文の頁付けは略した。）

（表紙）

大正四年五月

私立 宮城女學校生徒心得

此生徒心得ハ一旦父兄保証人ニ示シタル上在學中
鄭重ニ保存シ常ニ携帯シテコレガ實行ヲ期スベシ

私立 宮城女學校生徒心得目次

本校ノ目的……一
學年學期及休日……三
保證人……六
退學及轉學……九
成績査定修了及卒業……一一
授業料及音樂料……一六
懲戒及賠償……一八
缺席……一九
操行……二一
教場……二二
寄宿舍……二四
通學生……三五
服制……三八
級長及代理……三八
文學會及運動部……三九
基督教女子青年會……三九
圖書室……四〇
特待生……四三
非常……四五

私立宮城女學校生徒心得

本校ノ目的

本校ノ目的ハ日本女子ニ基督教主義ノ下ニ完全ナル教育ヲナサントスルニアリ、本校ニ於テハ文部省指定ノ學科ハ一ツモ之ヲ缺ク所ナク教授スルハ勿論ナレ共、更ニ聖書音樂及ビ英語ニモ重キヲ置ケリ本校ハ如何ナル意味ヨリスルモ日本従來ノ高尚優美ナル諸德ヲ輕視スルモノニアラズ大ニ之ヲ發達セシメヨリテ以テ基督教ノ土臺ニ置カンコトヲ期ス、本校ハ又智德具ハリ有爲ノ母ヲ養成シカクテ愛國的精神ヲ發揮センコトヲ念トス、本校ハ單ニ生徒個人ニ基督教的品性ヲ與フルヲ以テ滿足セズ更ニ生徒全部ニ傳道的精神ヲ與ヘ他日校ヲ去リ實社會ニ入ルニ及ビ日常生活ニ於テ其ノ得タル新生命ヲ他ニ傳播セシメカクテ國家ニ對シテハ幸ヲ神ニ對シテハ譽ヲ致サシメンコトヲ期ス

學年學期及休日

(一) 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月卅一日ニ終ル之ヲ分チテ左ノ三學期トス

第一學期　自四月一日至八月卅一日
第二學期　自九月一日至十二月卅一日
第三學期　自一月一日至三月卅一日

(二) 休日ハ左ノ如シ

(1) 土曜日及日曜日
(2) 祝日及大祭日
(イ) 四方拜　一月一日
(ロ) 紀元節　二月十一日
(ハ) 春季皇靈祭　三月廿一日前後
(ニ) 神武天皇祭　四月三日
(ホ) 明治天皇祭　七月三十日
(ヘ) 天長節　八月卅一日
(ト) 秋季皇靈祭　九月廿一日前後
(チ) 神嘗祭　十月十七日
(リ) 天長節祝日　十月卅一日
(ヌ) 新嘗祭　十一月廿三日
(3) 地久節　六月廿五日
(4) 受難日昇天祭基督降誕祭
(5) 學校創立記念日　九月十八日
(6) 春夏冬休業
(イ) 春季休業　自四月一日至四月七日
(ロ) 夏季休業　自七月一日至九月十日
(ハ) 冬季休業　自十二月二十五日至一月七日

保証人

(一) 入學ノ許可ヲ得タル者ハ十日以内ニ本校ノ承認スル丁年以上ノ男子ニシテ現ニ仙臺市ニ於テ一家計ヲ立ツル

者一名ヲ保證人トシ左式ノ在學證書ヲ差出スベシ

在學證書（用紙ハ本校ヨリ交附）

道府縣郡市町村大字番地
寄留者ハ寄留地籍併記
華士族平民戸主某何女姉妹
現住所何所

氏　名

法定印稅

生年月日

私儀今般御校ニ入學許可相成候ニ就キテハ御規則御命令ヲ堅ク相守リ一意勉學仕リ確ク成業ヲ期シ猥ニ欠課休業退學等致間敷依テ在學證書差出候也

年月日　右本人　氏　名㊞

前書何某在學中同人ノ身上ニ關スル一切ノ事件ハ私ニ於テ引受ケ其責ニ任ズベク依テ證書差出候也

原籍現住所族籍職業
本人トノ關係右保證人　氏　名㊞
生年月日
本人トノ關係右保護者　氏　名㊞
私立宮城女學校長氏名殿

(二) 保證人轉居改印改氏名シタル時ハ其都度本校ニ届ケ出ヅベシ

旅行等ノ爲メ不在一週間以上ニ及ブ時ハ相當代人ヲ立テ連署ヲ以テ本校ニ届出ヅベシ

(三) 本校ニ於テ保證人ヲ不適當ト認ムルカ或ハ保證人其資格ヲ失ヒタル時ハ速カニ適當ナル保證人ヲ立テ在學證書ヲ書換スベシ

退學及轉學

(一) 疾病其他止ムヲ得ザル事由ニヨリ退學ヲ要スルモノハ本人保護者及保證人連署ヲ以テ其事由ヲ詳記シタル退學願書ヲ差出シ學校長ノ許可ヲ受クベシ

(二) 學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ

一　性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二　成業ノ見込ナシト認メタル者

三　出席常ナラザル者及本校ノ許可ヲ得ズシテ試驗ニ缺席シタル者

(三) 本校生徒ニシテ他校ニ轉學ヲ志望スルモノアル時ハ學校長ハ正當ノ事由アリテ必要ナル場合ニ限リ其生徒ノ在學證明書成績表及學科課程表ヲ移轉先學校ニ送附ス

成績查定修了及卒業

(一) 各學年ノ課程修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績試驗成績及操行ヲ考查シテ之ヲ定ム但學校長ノ許可ヲ得テ試驗ニ缺席シタル者ニ對シテハ平素ノ學業成績及操行ヲ考查シテ之ヲ定ムルコトアルベシ

(二) 試驗ハ各學期内ニ於テ其學期間ニ履修シタル學科目ニ就キ之ヲ行フ但學校長ノ許可ヲ得テ試驗ニ缺席シタル

者ニハ特ニ追試驗ヲ行フコトアルベシ又其學年中ノ學期試驗點ノ平均點ノ四分ノ三ヲ以テ追試驗成績ト見做スコトアルベシ

試驗ハ某學科目ニ就キテハ學校長ノ意見ニヨリ之ヲ行ハザルコトアルベシ

聖書、作法、作文、習字、簿記、體操、唱歌、英習字、英會話ノ各學科ハ當分試驗ヲ行ハズ平常點ヲ以テ之ニ充ツ平常點（日課點）ノ査定方ハ其課目ニツキ受持教員適時ニ之ヲ定ム

學期試驗點ハ平常點ノ二倍ト學期試驗得點トノ和ヲ三等分シタルモノトス

操行點ハ各教員之ヲ評定シ學級主任之ヲ平均シタルモノヲ得點トス

操行ノ評語ハ甲乙丙丁ヲ用ヒ甲乙丙ヲ可トシ丁ハ學課成績優等ナルモ退學セシムルモノトス

(三) 理事會ハ教員會ノ推薦ニ依リ各科卒業生ニ對シ卒業證書ヲ授與ス

(四) 本科第一學年ノ學年試驗成績ハ各分課六十點以上總平均六十五點以上ヲ合格トス

但二分課マデ五十點以上六十點未滿ノモノト雖モ總平均六十五點以上ノ時ハ合格トス

(五) 本科第二學年以上及ビ英文專攻科豫科ノ學年試驗成績ハ各分課六十點以上總平均七十點以上ヲ合格トス

但二分課マデ五十點以上六十點未滿ノモノト雖モ總平均七十點以上ノ時ハ合格トス

(六) 三分課マデ五十點以上六十點未滿ノモノ又ハ一分課ハ五十點以上六十點未滿一分課ハ四十五點以上五十點未滿ノモノト雖モ本科第一學年ニアリテハ總平均六十五點以上本科第二學年以上及ビ英文專攻科豫科ニアリテハ總平均七十點以上ノモノハ假進級トシ第一學期試驗成績合格ノ時ハ及第トシ不合格ノ時ハ落第トシ元級第二學期ニ止ム

(七) 專攻科ノ學年試驗成績ハ各分課七十點以上總平均八十點以上ヲ合格トス

(八) 本科第一學年ノ入學試驗成績ハ比較高點者定員ヲ合格トシ其他ノ入學試驗成績ハ各分課六十點以上ヲ合格トス

授業料及音樂料

(一) 授業料ハ一ヶ月本科金壹圓五拾錢家政及英文專攻科金貳圓聖書專攻科金壹圓トシ在學中出席ノ有無ニ拘ハラズ每月五日迄一月四月九月ハ十五日迄特ニ納期ヲ指定シタル時ハ其期日ニ新入學者ハ其當日之ヲ納ムルモノトス

(二) 學校ノ休業日全月ニ亘リタル時ハ其月分ノ授業料ヲ徵收セズ

(三) 授業料ヲ滯納シタル者ハ滯納中其授業ヲ停止シ其旨ヲ保證人ニ通告ス尚卅日以內ニ納メザル時ハ退學ヲ命ズ

(四) 課外ニピアノ又ハオルガンノ彈奏ヲ學習スル者ハ毎學期ノ始メヨリ五日以内ニ中途ヨリノ學習者ハ其當日一學期間ノ音樂料トシテピアノ金四圓オルガン金參圓ヲ納ムルモノトス

(五) 如何ナル事由アルモ既納ノ入學料授業料音樂料ハ之ヲ還附セザルモノトス

懲戒及賠償

(一) 學校長ハ學則又ハ命令ニ違背シ其他生徒タル本分ニ悖リタル行爲アル者ニ對シ教育上必要ナリト認メタル時ハ其情狀ニヨリ譴責謹愼又ハ停學ノ懲戒ヲ加フ

(二) 本校所屬ノ物品ヲ毀損シ亡失シタル時ハ現品若クハ代價ヲ辨償セシム

缺席

(一) 疾病其他止ムヲ得ザル事由ニヨリ缺席缺課若クハ遲刻ヲ要スル者ハ其事由ヲ詳具シ通學生ハ保證人連署ヲ以テ寄宿生ハ舍監ノ認印ヲ得テ直チニ本校ニ届出ヅベシ但疾病一週間以上ニ亘ル時ハ主治醫ノ診斷書ヲ添フベシ

(二) 親族ニ凶事起リタル塲合ハ左ノ期間謹愼シテ其ノ忌ニ服スベシ

一等親ノ塲合　七日間
二等親ノ塲合　五日間
其他ノ塲合　三日間

操行

(一) 心志ヲ高尚ニシ言行ヲ方正ニシ確ク成業ヲ期シ苟モ婦徳ヲ亂ルガ如キ言行アルベカラズ

(二) 順良以テ長上ニ奉ジ仁愛以テ幼少ニ接シ信義以テ朋友ニ交ハルベシ

(三) 校内ニアリテハ靜肅ヲ旨トシ苟モ喧噪ノ擧動アルベカズ

(四) 校内ニアリテハ猥リニ飮食スルヲ禁ズ

(五) 校用物品ヲ紛失毀損シ及建物ヲ毀損スベカラズ

(六) 校内ニアリテハ學生ニ不必要ト認ムル物品ヲ所持スルヲ禁ズ

教塲

(一) 生徒教塲ニアリテハ總テ受持教員ノ指揮ニ從フベシ

(二) 就課及放課ハ點鐘ヲ以テ之ヲ報ズ

(三) 入塲ハ就課前凡二分時以内トシ點鐘終レバ直チニ就課スルモノトス

(四) 放課時間ハ毎課十分時トス

(五) 故ナク定刻ニ遲レタルモノハ入塲スルヲ許サズ若シ止ムヲ得ザル事故アリテ遲レタルモノハ其旨ヲ受持教員ニ告ゲ許可ヲ得テ後入塲スベシ

(六) 教塲ハ極メテ靜肅ナルヲ要ス故ニ特ニ受持教員ノ命ズ

ルカ或ハ許ス時ノ外數人同時ニ問ヲ發シ或ハ互ニ語ヲ交ヘ或ハ猥リニ去席徘徊出入スル等凡テ教場ノ靜肅ヲ妨グルノ擧動ヲナスヲ禁ズ

(七) 猥リニ教場設置ノ器物ヲ使用シ及書器等ヲ散亂スベカラズ

(八) 教場ニアリテハ席次ヲ乱ルベカラズ

(九) 教場ハ學級主任監督ノ下ニ各級生徒ニ於テ每日掃除スベシ

寄宿舍

(一) 生徒ヲシテ學業ニ專心ナラシメンガ爲メ本校ニ寄宿舍ヲ設ケ志願生徒ノ寄宿ヲ許ス

寄宿生徒ノ監督及衞生上ノ取締ハ舍監寄宿女教員及看護婦ヲシテ之ヲ掌ラシム

(二) 寄宿ヲ許可セラレタル者ハ左式ノ寄宿證書ヲ差出スモノトス

寄宿證書（用紙ハ本校ヨリ交附）

法定印稅

何科第何學年生

氏名

私儀今般寄宿御許可相成候ニ就キテハ寄宿舍規則確ク相守ルベキハ勿論猥リニ退舍致間敷依テ保護者併ニ保證人連署ヲ以テ寄宿證書差出候也

年月日　右本人氏名㊞

現住所

右保證人氏名㊞

右保護者本人トノ關係　氏名㊞

私立宮城女學校長氏名殿

(三) 疾病又ハ止ムヲ得ザル事故ニヨリ退舍ヲ要スル者ハ本人保護者併ニ保證人連署ヲ以テ願出デ學校長ノ許可ヲ受クルモノトス

(四) 寄宿料ハ一ケ月金五圓トシ每月五日迄一月四月九月ハ十五日迄特ニ納期ヲ指定シタル時ハ其期日ニ新ニ入舍スル者ハ其當日之ヲ納ムルモノトス但物價ニ非常ノ高低アル時ハ其額ヲ變更スルコトアルベシ

(五) 端日數ノ寄宿料ハ日割ヲ以テ之ヲ計算ス

(六) 寄宿生徒ノ外出ハ土曜日祝日大祭日及地久節ニ朝餐後ヨリ午後五時マデ之ヲ許ス

但專攻科生徒ハ平日ニ在リテモ午後三時半ヨリ同五時迄之ヲ許ス

前項大祭日祝日地久節ニシテ日曜日ニ當ルトキハ之ヲ許サズ

二名以上同伴ニシテ監督教員附添ノ上ナルトキハ左ノ場合ニ限リ前項外出日外ト雖モ學校長ノ許可ニヨリ外出セシユルコトヲ得

(一) 音樂會、文學會等參觀ノ爲メ

(二) 日曜學校ノ爲メ

(三) 校外運動ノ爲メ

但校外運動ノ時ハ訪問買物ヲナスヲ許サズ
前項ノ場合ノ外出舍外泊ヲ要スルトキハ保證人ヨリ願出デ舍監ノ許可ヲ受クベシ
外出中疾病等ニヨリ歸舍時限ニ後ルヽモノハ疾病者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ其他ノモノハ其事由ヲ詳記シ歸舍時間前ニ保證人ヨリ舍監ニ届出ヅベシ

(七) 日業時限ハ左ノ如シ

晨	起	午前六時
朝	餐	午前七時
授	業	自午前七時四十五分至正午
晝	餐	正午十二時
授	業	自午後一時至同三時二十分
運	動	自午後四時至同五時 但教員ノ監督ヲ要ス
夕	餐	午後五時
晩ノ禮拜		午後六時
自	習	自午後六時半至同九時
就	褥	午後九時

但一二年ヲ除キタル他ノ者ハ午後九時ヨリ同三十分マデ就褥又ハ自習共隨意トス

(八) 寄宿舍ノ生徒配當ニ就キテハ舍監ハ學校長ノ認可ヲ得テ之ヲ定ム
但必要ノ場合ハ何時ニテモ舍監ハ學校長ノ許可ヲ得テ變更スルコトヲ得

(九) 各室ニ關スル事務ヲ辨理セシメン爲メ各室ニ室長一名ヲ置ク室長ハ舍監之ヲ任免ス

(十) 授業時限及自習時間中ニハ室内ニ入ルヲ許サズ但疾病又ハ止ムヲ得ザル事情アルトキハ舍監ノ許可ヲ得テ入ルコトヲ得

(十一) 猥リニ他生ノ室ニ出入スルヲ禁ズ但疾病者訪問等ノ爲メ必要ナル場合ハ舍監ノ許可ヲ受クベシ

(十二) 寄宿舍生ハ日曜日午前教會又ハ日曜學校及寄宿舍ノ禮拜ニハ必ズ出席セザルベカラズ
日曜日ノ午後一時ヨリ三時マデハ自室ニ在リテ靜思默想スベキコト

(十三) 衣服金錢物品等ハ貸與若クハ交換スルヲ禁ズ

(十四) 一圓以上ノ金錢ハ必ズ舍監ニ預ケ置キ需要ノ都度其事由ヲ述ベテ受取ルベシ

(十五) 郵便物ノ受授ハ必ズ舍監ノ手ヲ經由スルヲ要ス

(十六) 生徒ニ來訪者アルトキハ日曜日ヲ除キ午前八時ヨリ午後五時マデ舍監ノ許可ヲ得テ應接室ニ於テ應接スベシ
特別ノ場合ハ舍監ノ許可ヲ受ケ前項ノ時間外ニテモ應接スルコトヲ得
但授業中ニ係ルトキハ特ニ幹事ノ許可ヲ受クベシ

(十七) 生徒ノ衞生ニ關シテハ總テ校醫ノ指揮監督ヲ受クルモノトス
疾病ニ罹リタルモノハ舍監ノ見込ヲ以テ病室ニ移シ療養セシム尤モ傳染病ハ勿論重病ト認ムル時ハ校醫ノ診

斷ニヨリ直ニ退舍ヲ命ジ保證人ニ引取ラシム

(六) 冬期休業春期休業中ハ寄宿舍ニ留ルヲ許スモ夏期休業中ハ一切寄宿舍ニ留ルヲ許サズ
夏期休業後ノ寄宿舍ハ第二學期始業日一日前ニ開始ス
但當日日曜日ニ當ルトキハ其前日ニ開始ス

通學

(一) 通學生徒ハ本校ノ認可スル仙臺市内住居ノ父兄若クハ親戚ニ同居若クハ寄留スルモノニ限ル

(二) 通學生徒ノ保證人ハ左式ノ宿所届ヲ本校ニ差出スベシ
轉宿スルトキ亦同ジ

宿所
轉居 御 届 (用紙美濃紙)

何科第何學年生

一宿所仙臺市何町何番地父
兄若クハ親戚何某方 何 某

右之者前頭書ノ所ニ居住或ハ轉宿爲致候間此段御届仕候也

年 月 日 右保証人 何 某 ㊞

宮城女學校御中

(三) 通學生徒ノ昇校時限ハ就業前三十分以内トシ退校時限ハ終業後三十分以内トス但テニス バスケットボール等ノ課外運動ノ爲メ學校ニ留ルコトヲ要スル場合ハ豫メ父兄又ハ保證人ノ許可ヲ受クベシ

(四) 通學生徒ハ就業時間内ノ外ハ寄宿舍ニ立入ルヲ禁ズ

(五) 通學生ノ食事ハ必ず本校指定ノ食堂ニ於テナスベシ

生徒服制

生徒ハ袴ヲ着用スベシ袴ノ地質ハ隨意ナレドモ色合ハ海老茶ニシテ無飾ノモノトス

級長及代理

(一) 各級ニ關スル事務ヲ辨理セシメンガ爲メ各級ニ級長一名を置ク

(二) 級長及其代理ハ每學年若クハ臨時ニ學校長之ヲ任免ス

文學會及運動部

文學思想ノ發達ヲ期センガ爲メ且ツ体育奬勵ノ爲メニ文學會ヲ設ケ總テ生徒(選科生ハ隨意)ハ會員タルノ資格ト義務トヲ有ス詳細ハ規則ニ就キ承知スベシ

基督教女子青年會

本校基督教女子青年會ハ教職員及生徒ノ有志者ヨリ成ルモノニシテ本校ノ目的タル精神修養上最も緊要ナル機關ト認メ之ニ入會スルコトヲ奬勵ス詳細ハ規則及役員ニ就キ承知スベシ

圖書室

(一) 本室開閉ノ時間左ノ如シ

平日　午前八時開　午後四時閉
土曜日　午前八時卅分開　午前九時卅分閉
但日曜日大祭日祝日ハ休トス

(二) 本室所藏ノ圖書ヲ携出借覽セントスル者ハ圖書掛教員ノ許可ヲ受クベシ

(三) 閲覽者ハ同時ニ一ヶ月間二冊マデ携出借覽スルコトヲ得
但學期末ハ此ノ限ニアラズ

(四) 本校教員ハ生徒ノ使用セザル教科書及ビ參考書ヲ一學期間携出借覽スルコトモ得但時宜ニヨリ圖書掛ノ許可ヲ得テ休暇中モ閲覽スルコトヲ得

(五) 期限内ニ返納セザルトキハ罰金トシテ一日金五錢ヲ納附セシムベク若シ借覽中圖書ヲ亡失又ハ汚損シタルトキハ圖書掛ノ指定ニ從ヒ現品若クハ相當代金ヲ以テ之ヲ辨償セシムルコトアルベシ

(六) 借覽者ハ毎學期末ニハ必ズ返納スベシ若シ期限ニ至リ返納セザル者ハ前條ノ處分ニ充ツベシ

(七) 字書聖書註譯書類又ハ新聞雜誌ハ例令如何ナル場合ト雖モ室外ニ携出スルコトヲ得ズ但閉室後ハ圖書掛ノ許可ヲ得テ其翌朝開室時間前迄携出閲覽スルコトヲ得

(八) 圖表室ニアリテハ靜肅ヲ旨トシ一切音讀スルコトヲ禁ズ

特待生

(一) 奬學ノ爲メ英文專攻科ニ特待生ヲ置ク

(二) 特待生ハ身体健全品行方正學術優等ニシテ將來中等學校英語科教員タルニ適當ナル者ヨリ理事會ニ於テ選定シ一學年間授業料ヲ支給シ本校寄宿舍ニ入舍ノ必要アル場合ニハ寄宿料ヲ支給ス

(三) 學術ニ關シ第一學年級ノ特待生ハ本校本科卒業生中該卒業試驗成績英語科及ビ總平均點九十以上ノモノヽ中英語科ノ最高點者一名ヲ選定シ第二學年級及第三學年級ノ特待生ハ各該級學年試驗成績英語科及總平均點九十以上ノモノヽ中ヨリ英語科ノ最高點者一名宛ヲ選定ス尤モ第一當選者ニシテ特待生ヲ辭スルトキハ次ノ資格者ヲ選定ス

(四) 特待生タリシ者ハ卒業後成ルベク速カニ中等學校英語科教員ノ檢定試驗ヲ受クルコトヲ期スベシ

非常

本校又ハ本校附近ニ出火若クハ其他非常ノ事變アル時ハ寄宿生ハ舍監又ハ他ノ係員ノ指揮ヲ受ケ通學生ハ直ニ參集シテ係員ノ指揮ノ下ニ救護ニ盡力スベシ

（以上）

第二校舎建設

専攻科の拡充や理料教育振興のためにも新しい校舎の建築が求められていたが、本校の具体的な計画に対して一九一七（大正六）年春、ミッション・ボードの許可が下り、ほどなく着工、そして翌年五月には「第二校舎」とよばれる、煉瓦造りスレート葺き三階建六百四十四坪の堂々たる建物が校地の西南隅に出来上った。五月二十八日の献堂式には、それを祝う来賓二百五十名が出席し、宮城県知事、仙台市長、東北帝大総長、それに在日宣教師社団代表（H・K・ミラー）らが祝辞を述べたが、式中、建築までの詳しい経過については本校の村上兵助理事が、次のように報告している。なお、建物の内部は翌日一般市民に公開された。

本建築最初の計画は、一千九百十年（明治四十三年）北米合衆国リフォームド教会外国伝道局総務R・パーソロミュー博士の本校来訪の際に始まれり。此時本校理事会員はパーソロミュー博士の協賛により、本校を高等女学校同等以上と認可せられんことを、文部省に認可せられんことに決せり。而して理科教育の発展に対し学校に於て必要なる設備をなさば、文部省は該申請を許可すべき内示ありしを以て、外国伝道局に対し約一万弗を以て理科教室を建設せられんことを請求することに決せり。而して此建築物は当時増設計画中なりし家政科及び其他の専攻科に使用すべき教室をも包含すべきものなり。

リフォームド教会ミッション及びリフォームド教会外国伝道局は大體建築計画を協賛したれども、財政上の都合により連年延期せられたり。一千九百十一年（明治四十四年）文部省は新建築の最短期間に実現せらるべき黙契により、本校の申請を許可せらる。

一千九百十二年（明治四十五年）家政専攻科開始せられ、次で英文科亦計画せられたり。新計画のために建築の設計拡張せられて、其費額亦一万二千弗に増加せり。

一千九百十五年（大正四年）英文専攻科開設、同時に音楽専攻科新に計画せらる。次でファウスト校長賜暇帰米中、一九一六年（大正五年）十月新設計はリフォームド教会ミッション及び伝道局の協賛を受く。此時に際しリフォームド教会婦人伝道会員は本建築資金の募金に従事せり。

一千九百十七年（大正六年）四月リフォームド教会外国伝道局より一万七千五百弗を以て建築を開始すべき許可到着し、同六月建築技

師W・M・ヴォーリズ氏より詳細の設計仕様書を送附せらる。是に於て同年八月神戸市建築請負業中川仙吉氏建築請負の契約書に調印し、八月十七日建築工事を開始す。建築委員はファウスト校長、ミス・ハンセン、ゲンザー氏、早坂哲郎氏及び村上兵助氏なり。本建築は第二校舎と称す。

本建築には、理科実験室一、同講義室一、専攻科教室六、作法教室二、料理室一、食事教室一、音楽室一、音楽練習室八を包含せり。

一千九百十七年十一月十九日定礎式を執行、尋で一千九百十八年（大正七年）五月二十八日即ち、本日を以て全部の落成を告げ、献堂式を挙行するに至れり。工を起してより玆に十ヶ月、工事費額は四万有余円なり。而して本校職員生徒同窓会及び半沢正朔氏、菅井文五郎氏もまた金幾何を寄附し、松原卯平氏は新校舎のために椿一本を寄贈せられたり。

以上を建築工事報告の大要とす。

第二校舎の新築は、ワイドナー時代からの宿題であったが、ファウスト校長もボードに対してその必要を頻繁に訴え、The Outlook of Missions 誌上でも彼地の信徒たちにたびたびよびかけている。その結果、祈りは祈りを呼んで主の聴き給う所となり、多くの人々の心を動かして、第一次大戦とその後の不況期にもかかわらず多額の献金がささげられ、本校のために送られたのであった。かくて、今まで乏しかった理科――家政系の施設がかなり整い、また、木造校舎の一室で、冬は寒さにふるえ、夏は近隣に気をつかっていた音楽の授業もゆったりとやれるようになった。

「校報」と「橄欖」

同年十月、「校報」（The School News）第一号が発行された。それまで刊行されてきた「萩の下露」などの定期出版物を合冊とし、さらに若干の時報的内容を加えたものであるが、一誌にまとめて発刊する目的は、「世の未だ本校を知らざる数多き友に宮城女学校を紹介せん希望を達すべく、本校職員、同窓会員、生徒及び校友の間に、〈家庭の火の消えぬ〉よう絶えず燃料を供給せんことを期する」とされ、年二回発行された。創刊号の目次は次の通りであるが、学生・生徒のこのころの活動状況を知るために、文学会（のち、一

時「文芸会」）や運動部、キリスト教女子青年会等の記事もあわせて転載しよう。（記載の仕方に不十分な所もあるがあえてそのままとした。）


校報
第一號
私立二葉女學校

次目號壹第報校

◎創刊の辭（第二校舎献堂式記念）
◎濱田宮城縣知事祝辭……一
◎山田仙臺市長祝辭……一
◎福原東北帝國大學總長祝辭……二
◎ミッション代表者ミュラー博士祝辭三
◎第二校舎工事報告　建築委員　村上　兵助……六
□講　筵
天長節式辭　ミスハンセン……八
世に勝つべし（卒業訓話）ファスト校長……一〇
□學校記事
□文　苑
◎雨の日（一年）片桐喜代　◎我が家の離隊（一年）新國てる　◎私の一番うれしかつた事（一年）大石あき　◎途上雜記（一年）永島和子　◎新學期を迎へて（一年）大場ミヱ　◎遠足運動會の前夜（二年）今野あさの　◎石巻（二年）相場ゼつ子　◎雪（二年）新妻欽子　◎我が故郷（二年）高橋伊奈代　◎初夏の朝　増子わくり　◎秋の夜（三年）小林婦美子　◎駿（三年）鈴木かう　◎二日間の日誌（四年）福澤泰子　◎秋は來た（四年）佐伯きん　◎親（四年）門馬貞子　◎世界大戰亂私見（五年）加藤喜子　同村松福美子
□彙　報
第二校舎定禮式……三四
第二校舎献堂式……三五
第二十六回卒業式……三六
文學會第二十六回記念大會……三七
大正七年度文學會役員……三九
運動部報告……四〇
女子青年會報告……四〇
同窓會報告……四四

第七章　文學會第二十六回記念大會

文學會第廿六會記念大會は、大正六年十一月九日（金曜日）午後六時より本校講堂に於て擧行せられた。

執行順序

一、奏樂ピアノ獨彈　ハンガリヤ行進曲、コールベー作　教員　佐藤まさ

二、祈禱　秋保牧師

三、奏樂ピアノ連彈　兵士の進軍　クロンケ作　（音選）　土井照子
四、歡迎の辭　全　土井信子
五、英詩諳誦「水仙」　英專三　鈴木せつ
六、奏樂オルガン獨奏　讃詠の緩徐調、バテステ作　三年　中村きくよ
七、文章朗讀　月明かき夜　音專一　山浦仁
八、新體詩諳誦　少女　家專一　小西うた
九、奏樂ピアノ、オルガン合奏　（ピアノ　オルガン）　一年　砂澤たかみ
一〇、漢文諳誦　前赤壁の賦　（五年　全）　成田さかえ　長野千代世
一一、談話　全　菅井りう
一二、獨唱　四年　大石しゆく
一三、英文朗讀　政岡と千松　音選　二年　小舘赤子
一四、タブロー　英專二　西淵さだ
一五、合唱　佐伯ますえ
一六、新體詩諳誦　心のまゝになるならば　數名　（三年　全）　佐久間美子
一七、和文諳誦　嵯峨野の奥　四十一名　佐久間靜子
五年　加藤ひさ子

一八、奏樂ピアノ合彈　大曲ト短調　ハンデル作　（第一ピアノ　第二ピアノ）　音專三　福井こう　キツツエウエルヘル
一九、英語對話　戲曲リベカ　（リベカ　リベカの母　駝者の妻　伯母メランデ　伯母ヂェーン　リベカの友　エマヂェーン　小學教師）　四年　佐伯きん　菊地とよ　四年　秋保たより　英專一　田中やへ　四年　松村としぢ　五年　今澤きく　聖專一　小野さだよ　外數名
二〇、閉會の辭　ハンセン會長
二一、君が代　一同
二二、祝禱　秋保牧師
以上

五時半には會衆はもう溢れて、無慮八百名、さしもに廣き講堂も立錐の餘地もなかつた。佐藤先生のマーチは磯うつ浪の低く〳〵屢くに似て聽衆は魅せられてしまつた。秋保牧師の祈禱につづきて土井姉妹のピアノ連彈、其態度は堂々、兵の勇ましき行軍の狀さながら目の前に彷彿たるものがあつた。中村さんの英詩諳誦も終つて、此夜の白眉ともいふべき山浦さんのオルガン獨奏となつた。プログラムは次第に進んだ。此夜の呼びものなる戲曲リベカの幕は切つて落された。出演者はローラ、シーモア兩先生の指導の下に熱心な練習を積んだ事とて、苦心の跡歷々として舞臺の上

にあらはれ、可憐の少女リベカに扮した佐伯さんの若々しい態度は觀客を恍惚たらしむるに十分であつた。田中さんの伯母メランデは邪見な科が其人になつて居つた。松村さんの伯母ヂェーンは愛情が籠つて居り、今澤さんのエマジェーンは可愛らしい子供になり切つて居つた。あれで五年生とは誰も思ひよらなかつたであらう。殊に一幕ごとに佐藤ていさんの親切な說明がついた事とて、一層の興味を添へて一段の効果をあげ得たと信ずる。秋保牧師の祝禱を以て閉會したのは午後九時半、校門を出づれば、月影冴えて、風もかなり寒い夜であつた。

大正七年度文學會役員

大正七年度役員左の如し

會長	フアウスト校長
文學部長	リンゼー先生
	村上先生
委員	聖專　杉山すて
	五年　條　ふみゑ
	一見先生
會計部長	小野たまえ先生
委員	五年　鈴木みゆき
	五年　菊地とよこ
	高木先生
雜誌部長	英專　佐藤てい
委員	四年　中村きくよ
	窪小谷先生
	四年　鈴木こう
	四年　岩間よし

運動部報告

自大正七年四月
至同年五月

運動部長
委員

○運動部委員左の如し。

	四年　鈴木コウ
	四年　岩間ヨシ

○運動奬勵の爲め教員中より擧げられたる委員

	態谷そみ先生
	ミスリンゼー先生
	鈴木寅之進先生
	一見清先生
	窪小谷米二先生

○運動時間　午後零時三十分より仝五十五分迄及び放課後

○運動種類、ピンポン、テニス、バスケットボール、プランコ、遊動圓木等、其内ピンポン、テニスは中々に上達せり。

○毎年春秋二季には運動部大會を開くことゝせり。

女子青年會報告

○大正七年三月二十日（水曜日）午後二時より寄宿舍自修室に於て大正七年度新役員選擧會を開きたり。

一、開會の祈禱　田中會長
二、出席調査　書記
三、選　擧
次の方々當選せられたり。
會　長　田中八重
副會長　菅井リウ
會　計　菊地トヨコ　中村キク代
　　大塲ミヱ
集會委員　小野定代　杉山ステ
通信書記　條　フミヱ
書　記　佐々木スエノ
運動委員　佐伯キン　岩間ヨシ
　　中川トシヲ　小舘赤子
　　渡邊三千代
販賣委員　鈴木ミユキ　松村トシヂ
　　堀内キミ子　鈴木カウ
以上十八名
閉會の祈禱　原田先生
○大正七年三月二十五日（月曜日）午前八時半より講堂に於て役員會を開く。
開會の祈禱　田中八重
次の事項を相談す。
一、當校女子青年會の顧問を前年通りリンゼー先生と原田先生に御願ひすること。
二、當校女子青年會の規則を改正すること。
三、改正委員に田中八重、鈴木カウ、中村キク代の三人を擧ぐること。
四、學年の初めに於て新入學生を歡迎する會を開くこと、その準備委員としては小野定代、杉山ステの二人を擧ぐること。
五、第四水曜日と祈禱會毎に青年會の事業の大體を報告すること。
閉會の祈禱　田中八重
○大正七年四月十三日（金曜日）放課後より英文專攻科の教室に於て役員會を開く。
開會の祈禱　田中會長
一、新入生の歡迎會の事に付きて議す。
　　執行順序
大正七年四月十七日午後二時半執行
第一部　司會者　小野定代
讃美歌　三百八十五番
聖書朗讀詩篇四十六篇
祈　禱
讃美歌　四百十八番
歡迎ノ辭並ビニ青年會報告
頌　榮　四百六十二番
以上講堂ニ於テ
第二部　司會者　中村キク代
茶菓余興數種

以上食堂ニ於テ、會費五錢

○大正七年四月十七日晝の休み時間に學校の後庭に於て委員會を開く。

一、ミッション會議を利用し慈善音樂會を開く事を校長に依頼する事。

○大正七年四月十七日に議せし音樂會のことは第二校舍の落成式と衝突するため校長より許可を得ず、止むなく今學期は開催せざる事に決定す。

○大正七年五月一日（水曜日）放課後作法室に於て委員會を開く。

一、日本キリスト教青年會同盟聯合軍慰問部への寄附金を募集し、成るべくは各人五錢以上と決議す。

○大正七年五月九日（木曜日）昇天祭の午後一時より一見先生指導の下に役員及び會員の志望者約三十余人三瀧方面に鈴蘭及び忘れな草を採集し、大學病院の施療患者に贈る。

○大正七年五月十日（金曜日）晝休み時間に理科室にて役員會を開く。

開會の祈禱　田中會長

一、春期修學旅行の際に落花豆と仙臺豆とを販賣することを決議す。

二、落花生の皮むきのため土曜日八時半より役員一同働くこと。

三、鈴蘭取りの指導者（一見先生）に五十錢の菓子を御禮に上げること。

三、施療患者に贈る花は今年より役員が草花を作り春秋二回これを贈ること。

五、求道者のため機を見てクラス會を開き、役員は個人的親密を增し、社會的集會により漸次求道すること。

六、日本キリスト教青年會同盟聯合軍慰問部へ金十二圓を贈りしこと。

以上を決議す。終りの祈禱　菅井リウ

○大正七年五月十一日より落花豆を販賣す。

一、砂糖カケは二錢

二、塩煎は五錢

○大正七年五月十三日より聯合軍慰問のため繪葉書を販賣す。

一、一枚五錢

二、一組二十錢

○大正七年五月十九日東二番丁日本キリスト教會及び荒町教會に於て洗禮を受けたる者次の如し。

熊谷そみ先生　伊東なみえ

千葉よし　今野うめ

鈴木正子　佐藤よし

小川とく　枡　よう

飯淵さだ　永島和子

○大正七年五月二十二日（木曜日）放課後校庭に於て役員會を開く。

第二學期に施療患者に花を贈るため役員一同畑を堀りダリヤの種子を播く（種子は六ツで六十錢）。

一、役員一同が一週に二枚宛のハンカチを贈ること。

二、勞働會より學校内にて取る牛乳は全部青年會の名義まで取

り、晝食の際食堂に於て臨時に牛乳を販賣すること、而して一合に付き一錢五厘の利益を収むること。

○大正七年六月十一日（火曜日）放課後舊理科室に於て役員會を開く。

開會の祈禱　田中會長

一、夏季修養會に青年會にて贈るべき人員を定む。

役員　條フミエ　鈴木ユキ　松村トシヂ　田中八重

會員　高橋ノブ

二、第二校舎の繪葉書五百枚を注文し、これを販賣すること（一組四錢）

上記の事を相談し杉山ステ終りの祈禱を以て散會す。

なお、一九二一（大正十）年からは、活動の盛んな文学会が、その夏、別に年刊雑誌（「橄欖」）を出し始めたが、これは一九二六（昭和元）年の第六号（創立四十周年記念号）で「校報」十七号にあたる分も包含し、以後は、ほぼ一本にまとめて刊行された。そして、一九二八（昭和三）年頃から文芸・運動・雑誌・音楽の四部構成に再編された「校友会」の機関誌となったのである。（この頃から印刷は東北学院労働会に托されていた。）校友会の会長は校長、各部長を教師がつとめ、委員は生徒の互選であった。

右の「橄欖」創刊号には、英語教師土井林吉（晩翠）が巻頭に詩を寄せ（以後毎号）、命名者の国語教師小野玉枝が発刊の辞を載せているが、巻末に、生徒たちが課外活動の状況などを詳しく伝えているので、この部分を紹介しておく。なお、号を追うに従ってかなり高度の研究発表も掲載されていった。

（イ）　英語會記事

大正九年三月より英文科に英語會といふものが設けられました、この會合は文學的方面と交際の方面との二部よりなつて居ります、諳誦、お話、英作文、朗讀、音樂等を致します、其他時には討論會等をすることもございます、時日其他は實行委員に一任します、委員は一學期交代英文科各學年より一人宛を擧げて其の責を負ふことに致して居ります。今年からは豫科生も會員として

迎へることに、決議致しました。

時々校外の有志として可愛らしいリチャードさん（ファウスト校長の二男―引用者註）の英語語誦などを加ふる事もあります、趣味と實益とを併せて我が英語會の進歩を計りたいと希望して居ります。終りにのぞみ常にこの會のために御出席下さいまして直接間接に本會の成長を御助け下さる諸先生及び生徒諸子の厚き御同情を感謝致します。

（ロ）音樂クラブ記事

起源。時にふれ折にふれ或は散歩の途路二三の者が時時話を交へつれど、師に相談を請ふも未だ時勢伴はずとやら。それより一年も經て或日曜日の夜中島町のバプテスト女學校の讃美禮拜に集ひ、其の歸るさ師の君と途すがら、種々と音樂に關することを語り、その翌日遂にクラブを組織することの賛成を得るに至りぬ、和聲室に於て五六人の音樂專攻科の者はミス、シュネーダーを發起人としてこの四月よりクラブを實行する事を決議せり。

クラブの形、クラブは活動的なもので、一學期に二人位の委員を立てゝ置く。

クラブの内容

一、クラブに屬する者は音樂專攻科生選科生及び豫科生とす。
一、クラブは勿論各々の發達進歩の爲め。
一、クラブは音樂会の外に交際會の二部より成る。
一、クラブ、リサイタルは、一學期に少くとも一回を催すこと。
一、時日はクラブ委員に任すこと。
一、實行委員は一學期毎に代ること。

クラブの望。クラブの希望として、人數少なるが故に大々的にせんとは不可能としても公共の爲に幾分なりとも歌を以ってお助け致したい積り。

（音樂クラブ委員）

第一回 Club Recital Programme

大正拾年六月十三日午後二時半開會
於第二校舍音樂講堂

I. Piano 4 Hands
Weber "Invitation to the Dance"
{ Akiko Tadori
{ Mori Matsu

II. Vocal Duet
Horn "I Know a Bank Whereon the Wild Thyme Blows"
{ Matsushima Ito
{ Furuuchi Yoshiko

III. Violin Solo
Brahms "Hangarian Dance"
L. Faust

IV. Vocal Solo
Cornerious "Violets"
Horrocks and Hickens "The Bird and the Rose"

Nishibuchi Sada

V. Piano Solo

Mozart "Fanatasie"

K. Wülful

VI. Quartet

Sullivan "O, Hush The My Baby"

（ハ） 女子青年會記事

例年の通り選擧會によりますと不適任の方面に選擧される心配がありましたので委員のみで選擧する事を會員に願ひました後、そのやうにいたしました結果は左の通りでございます。

會　長　聖專二　增　子　わくり
副會長　家專二　岩　間　よし子
社交部　家專二　岩　間　よし子
同　四年　今　泉　とく子
會計部　英專二　畠　山　千代子
同　英專一　渡　邊　三千代
書　記　五年　永　島　和　子
仕事部　五年　片　桐　喜　代
同　五年　黒　澤　まつ代
同　五年　佐　藤　あい
販賣部　五年　猪　股　まき
同　四年　佐　藤　かつ
クラブ　英專二　中　村　きく代
同　四年　土　井　てる
圖書部　五年　渡　部　あや
同　四年　栗　村　みち

但し增子會長は御病氣なので前會長の條ふみえさんが代って會長となられました。クラブ委員の中村きく代さんも御病氣につき當分お休みです。今年度の顧問は原田先生とミス・ナウのお二人。

大正十年四月十三日各々の分擔引き渡しがあつて後任委員は新しい力と希望とをもつてこの尊い女子青年會の爲熱心に働いて居ります。殊にクラブと圖書部ははじめての事とて一層の努力をもつて務めて居ります。圖書部は寄宿舍に設けられた主に宗教的な書籍を集め美しい宗教的な氣分を校内にみたし各々の信仰生活に幾分でもお助けしたいと思ひまして。小さい圖書室は云つて居ります、『皆さんのためにいつも私の扉は開いてある。』と。

クラブの名はレンボークラブと申し、顧問ミス、ナウの御熱心な指導の下に普通科一、二、三年の生徒から組織されて居ります、四年五年のクラブはウォーキングクラブと申します、各年級を適當の人數に分けて居ります、專攻科と五年四年の人がリーダーとなつてその上に働いて居られます、レンボークラブではその虹をとつて組々の色にして居ります。一年はヴアイオレットとオレンヂの二組、二年は赤と青との二組です、三年は黄と綠との二組です、ウォーキングクラブの方では四年がダークグリーン、五年がブラウンです、丁度その名の通りレンボー

クラブは虹のやうにウォーキングクラブはそのやうに熱心に働いて居ります。仕事をして育兒院等に寄附したり花をつくり病人へ持つて行つたりして居ります。一週をき位に宗教的の話をいたしたり又は時にはダンスなんかも教はつて居ります。つまり各方面から青年會に興味をもつていたゞいて、眞に青年會の何ものであるかを理解していたゞき、やがてはキリストのため犧牲的精神をもつて熱心に働かるゝ姉妹の多く出らるゝために。

この間の育兒院のバザーの時にもみなさんが熱心にお働き下さいましたので少しではございましたが育兒院のために色々のものを寄附する事が出來ました。

皆さんがその立場立場で責任をもつて働いて下さることはその人の精神的生涯にも、人々のためにもなる事を思ひ、感謝に堪へない次第でございます。先達ては尚絅女學校の青年會の委員をお招きいたしピーナツツパーテーを開きました。委員手製のサンドイツチやコーヒーの御馳走もございました、ピーナツツのゲームも面白いものばかり澤山ありました。あまり靜にしてお話する時は持ちませんでしたが御互に無言の内に何ともいへない勵ましの力強いあるものを與へられました。たつた仙臺に二つきりない女子青年會ですから、互い助け合ひ、末來に於て仙臺市部女子青年會をも設ける覺悟で一緒に働かうと思ひます、ピーナツツパーテーその名のやうに共に一緒になつて働かうと思ひます。

私どもの青年會も東北人の集まりのやうなものですから、社交の方にはいつもかけてゐると思って居りましたもんで今學期は社交部に力をいれやうと思つて努力いたしましたら、あまりに外面的方面に流れて内部の大切なことを忘れたではないかといふ感じがしないわけでもございません、やはり青年會は精神的のものとしてその方に發達いたしたいやうに思はれます、社交も大切ですが。

青年會の記事をものせていたゞかれる事をうれしく思ひます。

（ニ）文學會報告

(a) 文藝部報告

四月二十二日（金）放課後、寄宿舍の自修室にて大正十年度文學會委員の選擧會を開く。

例年の選擧法を改め、單數候補をあげ、會員の贊否を尋ね、會員全部の贊成を受け、左の通り定む。

會　長	校　長　フアウスト
委員長	英　二　中　村　きくよ
文藝部長	ミス、リンゼイ
同	黒澤良平先生
同　委員	家專二　岩　間　よ　し
同	英專一　細　谷　え　ん
雜誌部長	小野玉枝先生
同　委員	英　一　渡　邊　三千代
同	聖專一　鈴　木　て　る
同	五　年　田　中　千　枝

會計部長　　一見　清先生
同　委員　　五年　片桐キヨ
同　　四年　土井てる
運動部長　　鈴木虎之進先生
同　委員　　五年　永島和子
同　　四年　今泉篤子

五月最終の金曜日　一二九回　文學會例會を、講堂に於て開く、

プログラム

司會者　聖一　鈴木てる

一　ピアノ獨彈　三年　根本和子
二　新体詩　たんぽゝ　二年　渡邊いち子
三　作文　或朝　三年　澤口かつ
四　英詩　May Day.　二年　土井信子
五　漢文　愛蓮說　四年　齋藤てる子
六　ピアノ獨彈　五年　黒澤まつよ
七　和文　或夜の宴と蜘蛛　家一　峯岸はつえ
八　新体詩　かもめ　三年　遠藤くま
九　お話し　貧しき心に　二年　中川よしを
十　英詩　Little Boy Blue.　四年　添田みつえ
十一　作文　初夏のエンゼル　聖二　岩田みえ
十二　演說　きまりきつた話し　五年　田中千枝
十三　合唱　1　みどりの野べ　一年一同
　　2　夕立

練習の不充分だったにもかゝはらず、みな大變上出來だったやうに思ふ、みんなの心の中にある、うつくしい、ヴイジョンが、見えてうれしかった。

靜かな、うつくしい森の都の學校で、神樣の愛のもとに、はぐくまれている私達、神秘的な空氣を、吸つて、成長しつゝある私達は、より高い、より美しい藝術の讀美者でありたい、否、やがては、其母とならなければ……。

六月の第二金曜日、放課後、第一校舍の講堂にてお話し會を開く、例の文學例會を談話のみにせしなり。

プログラム

司會者　永島和子
一　合唱　音專　有志
二　開會の辭　英一　細谷えん
三　お祈り　三年　菊地とみを
四　喘ぎつゝ地に伏して　五年　佐藤　今
五　お玉杓子の氣焰　家一　秋月千代
六　自然と社會　四年　古山すみえ
七　生きんがために　五年　田中千枝
八　若葉の下にたゞずみて　家一　鈴木千代
九　ユダの心　聖一　鈴木てる
十　閉會の辭　英二　中村きくよ

驚いた、あくまで眞實な、みんなの叫びに、より高きものに達せんとする、痛ましいまでの努力、何かをつかまねばやまないやうな心！　混亂しきつている。今の世の、思想がみえる、けれど其中から、何かを得んとする、生まんとする、眞面目な、世

の或人々の、思想も見える、危險性を帶びてると、心配する人があるかも知れない、眞理はいつも危險であることを知らない人は。

『我はこの世に平和を、出さんとにあらず。』と、ガリラヤの湖畔で、高く叫んでたつた、ナザレの聖者を想ふ。こんなにまで、思想界の動搖してる今の世に生れ合はしたことを、いやに思ふ、けれども、感謝する、何かを生む一部の責任が、私共、各々にもあるやうな氣がする、只、其時眞實でありたい、上つ調子なことは、一番いやなことだ。

今日の會が、割合に、上ずつてたやうに思ふ、眞實な叫びを、茶化したいやうな、人も居たらしい、私は、今日、お話しされた方々にお氣の毒な感じがした、それから、いらした先生方の少いのに驚いた。いらして戴きたかつた、そして私共の本當の要求を知つて戴きたかつた、私共のなやみに、解決をつけて戴きたかつた、私共の努力に力をそへて戴きたかつた。

私共が、どんなことを思つて居たつて、先生には關係がないのか知らん、こんなことを思うた。

本當に自己を生かすために、あらゆる努力を惜しむまい。

私共の文學會が、より高きものに達せんとして苦しんでる事は、喜ぶべき事だ。

神のみ力のそへられんことを祈りてペンを置く。

(b) 運動部報告

何と云つても、夏は若い人々の、シーズンでございます、クローバーの上に若い人たちの足の、ふれない日は、一日だつて、一時間だつてございませんもの、朝露がまだキラ〳〵光つてゐるうちから、クローバーの白い花が、お星樣のやうに見えるまで、若い人々の姿の見えないことはございません。いつも裏のお庭は、かうしてにぎはつて居ります、三十分のおひるのお休みは殊更です、ブランコに乘つて、キヤツキヤツさわいでる、可愛い一年生の人達、『今のは、アンパイヤが惡いのよ、ねえ。』『うそよ、うそよ。』額の汗をふきながら、ラケット片手に、一口論してる、テニスの、チヤンピオン達、一寸目を轉ずると、バラ色の頰の少女が二三人、何か一心に、さがして居る、『何あに?。』と問ふと、ひくい聲で『四つ葉。』と答へる、どんな幸福、を願つてるのやら!

ポプラの木の下で、蒼い空に見いつてる少女、藤棚の下からは、絕えずにぎやかな笑聲が、高く聞える運動好きの少女も、私見たやうな人も、皆よろこんで、遊んでる、遊ぶ事は各々違つても、夜になつても、うつくしい庭を慕つて、自修室をぬけだす人もあるとかないとか、これは舍監先生には、大の秘密。

雨の日には、ピンポンが、仲々盛んです。一臺しかないピンポン臺では、足りさうもありません、ベルがなる時、やうやく順番が廻つてくる位。『だから、私、上手になれないのよ。』との誰かの不平を一寸。運動はます〳〵盛んになつてゆきます、健康である事は、ほんとうに、感謝すべきですね。

(c) 文學會大正九年度會計報告

(自 大正九年四月一日
至 大正十年三月卅一日)

収入之部

一金參〇參圓參拾貳錢六厘　収入總高
一金拾六圓八拾貳錢六厘　繰越高
一金貳拾圓八拾錢　賣上高
一金貳百貳拾壹圓　文學會費
一金四拾四圓貳拾錢　試驗用紙代
一金五拾錢　預金利子

支出之部

一金百九拾四圓八拾八錢　支出總高
一金百〇五圓七拾參錢　諸拂高
一金七圓八拾錢　印刷費
一金八拾壹圓參拾五錢　文學大會費

差引殘高

一金百〇八圓四拾四錢六厘　現在高

(d) 雜誌報告（編輯後記）

檄欖が生れた。私共の檄欖は生れました。喜んで下さい。私共は今ただ涙ぐんで、美しい、力強い、尊い産聲をきいてゐます。土井先生の祝福の歌に、私共の檄欖の將來は、どんなに輝かしくなったでせう。どんなに力あるものになったでせう。雜誌の發行のおくれた罪も、又原稿の集らない私共の不平も、又この雜誌の内容がたとへ貧しく、つまらないものであらうとも、物足らない點も、生れ出たと云ふこの尊い事實のまへには、すべては忘れられてたゞ涙ぐんで居ります、みんな一人々々の手をにぎって嘉び合ひたい様な氣もちです。私共なんの働きもしなかったものでさへも、こんなに嬉しくってたまらない程の感激をあたへられてゐるんですもの。御忙しい中をさいて全力をあげて編輯の事から、裝訂の世話までなさって下さった部長の小野先生は、どんなに喜んでいらっしやるかを思はずに居られません。殊に先生は生れ出た可愛い子の名づけの親でいらっしやるんです。『なんて雜誌の出るのがおそいんだらう！　投書して下さいって、あんなに委員がさわいでばかり居て一体何時になったら出るんだろう？』こんなつぶやきがきこえてきさうです。けれど考へてみて下さい。生れる子のためには、産着もこしらへねばなりませんでした。どうせこしらへるのならきれいな着物をこしらへたかったのでした。それでおくれたわけだったのです。そしていざ生れたとなると名まへもつけなければなりませんでした。でも名まへは小野先生がほんとに美しい、意義のある名をつけて下さいましたから、どんなに嬉しかったかわかりません。生れ出たのですから赤くっていやだの、乳くさくっていやだのって云はないで下さい。生れたばかりですもの。今に可愛いゝ子になりませう。どうぞみなさんで育てゝ下さい。生れた子がどんなに成長しますか、それはみなさんのお心のまゝなのです。私共はお願ひします。ほうとうに名にふさはしいものと成長する様に、祈って居ります。たとへ貧しからうが、みにくからうが、私共は愛を注いだ檄欖なのです。生れた以上はよりよきものに、又より美しいものに、完全なものにしなければなりません。可愛がって下さい。

悲しい事があらうと、厭な事があらうと、又は嬉しい事があり

ませうと、心から泣き、心からいたわり、心から喜んで下さるのは宮城女學校にある私共であるといふ事を私は信じます。私共の働きはほんとうに小さかったかもしれません。實際さうなんです。けれどもそれはどうぞ赦して下さい。この橄欖をたゞ無意味なものにしないで下さい。私共の橄欖を心から祝福して下さる校長先生や諸先生又力強い祝福と尊い行くべき道を示して下さった土井先生や全力をつくして下さった小野先生にすみませんから。

月光の夜にあふれる悲しみと苦しみを抱いてしかも神を讃美する事を忘れずに、歌を歌ひつゝ橄欖の森にわけ入つた尊いエス様や使徒達を思ひ、私共は美しい心とそして又如何なる苦しみのまへにも神をほめたゝへる事を忘れないものになりたいと思ひます。

（雑誌部委員）

右のうち「基督教女子青年会」は、校友会とは別組織になっており、早くから聖書研究や校内外での伝道・奉仕活動にいそしんできたが、この大正時代の後半には特に社会奉仕に力を入れた。校長ファウストの勧めや聖書・英語教師C・L・ナウらの指導で、学校にほど近い仙台貯金局の女子事務員のために週三回「夜学」を開き、聖書・英語・音楽（合唱）・編物等を教えて、五百人以上の「生徒」を集め、また、やはり近所の鉄道病院に週二夜出かけては、非番の看護婦たち四、五十人に英語や手芸を指導した。時折パーティなども開いたが、本校生らはたえず謙虚に行動し、若い女性どうしの学び合いと交わりをむしろ楽しんでいたようである。その他、仙台で学生によるものとしては初めての慈善音楽会をたびたび開いて（のちには尚絅女学院青年会とも共催）、浄財を国内外各所に送り、仙台基督教育児院などの施設を頻繁に訪問し、また全国あるいは東北地区レベルの合同修養会に毎年参加して新刺激を得、信仰面の向上につとめている。なお、一九二八（昭和三）年からは、人数の関係もあって、専攻科と女学校の二パートに分かれた。

創立四十周年

大正期（＝「ファウスト時代」）の後半も、施設や制度面の拡充はさらに進んだ。一九一九（大正八）年三月の仙台大火に、幸い難を免れた本校であったが、年々増加して四百名に達しようとし

ていた学生・生徒全員を容れるには、第二校舎内の講堂も狭さを感ずるようになり、「大講堂」新築の議がおこって、一九二三（大正十一）年一月からは早くも募金が始まった。これは、降って一九三七（昭和十二）年暮、完成し、以後、仙台市民に「文化」を供給するパイプともなっていった。なお、第二校舎そのものも、一九二六（大正十五）年増築され（その際由緒ある「バイブルハウス」もとりこわされ）、教室、事務室の他、社交室（三階）、図書室（二階）、雨天体操場（地階）などが加えられた。この建物は、在職半年にして逝った若きアメリカ人女教師の名を採って、「ヴォーンホルト記念校舎」と名づけられた。

一九二五（大正十四）年、学則が改正されて、専攻科はすべて三年制となり、ほかに、家政科を除き予科一年（英文・聖書）あるいは二年（音楽）が置かれた。これによって本校は、形実ともに「専門学校令」による専門学校と同等となったのである。

翌年十月二十～二十三日、創立四十周年記念祝賀行事が催された。記念式（第一日）次第は次の通りで二百余名が来会し、その夜の音楽会では、練習を重ねた左記十四の演目が展開され、ヘンデルの「ハレルヤ・コーラス」で結ばれた。

宮城女學校創立四十年記念式執行順序

（大正十五年十月二十日午前九時三十分）

一、奏樂（ピアノ合奏／オルガン）ロマンツ、ベートーベン作　ミス、ウイルソン
二、讃美歌三百七十六番　佐藤アイ
三、聖書朗讀及祈禱　原田ことぢ
四、勅語奉讀　一見科長
五、君ヶ代（再唱）　一同
六、式辭　ファウスト校長
七、獨唱　生命ノ主　ミス、ウヰード
八、祝辭　一同
1、上田宮城縣知事

2、鹿又仙臺市長
3、雀部女子專門學校長
4、シユネーダー東北學院長
5、片　桐　牧　師
6、ミセス、ホーイ
7、ミセス、アナオルト
8、クライツ博士
9、早坂哲郎氏
10、前島きそ夫人
九、祝辭、祝電披露
十、頌榮四百六十二番
十一、祝　禱

記念音楽会プログラム

第一部

一、ピアノ二重奏　　一見科長
　ハンガリ舞踊五番
　ブラームス作
二、ピアノ獨彈　　一　同
　短ロ調ミニユエット
　シユーベルト作
三、ピアノ獨彈　　秋保牧師
　變イ調ワルツ　ショパン作
四、二重唱
　慰安　ドヴオルシヤク作　　音一　松澤よし子　音三　有馬　文

第七章

五、ピアノ獨彈　　音三　太田　裕
　ソナタ作品十四番
　アレグロ　ベートーベン作
六、オルガン獨奏　　聖二　八木沼　節
　交響樂第四　メンデルスゾン作
七、ピアノ二重奏　　森　まつ
　ヘ調ローマンス　グリーグ作　　黒澤松代
　第二部
八、ピアノ、オルガン合奏　　猪股まき
　前奏曲　リスト作　　佐藤アイ
九、ピアノ獨彈　　音一　岩崎ハル
　ポーランド國舞踊
　シヤルベンカ作
十、ソプラノ獨唱　　音二　中目きみ
　イ、薔薇の咲く時
　ロ、姫　君
　ハ、我戀人よ來れ　シヤミナーデ作
十一、ピアノ獨彈　　黒澤松代
　ホ短調ワルツ　ショパン作
十二、ソプラノ獨彈　　佐藤アイ
　イ、我が歌に翼あらば　ハン作
　ロ、牧羊者よ小曲を奏でよ
　スピークル作
十三、ピアノ獨彈　　猪股まき

ト長調夜の曲　ショパン作
十四、コーラス　メシヤ　其の打れた
　　痍によりて癒されたり

コーラス隊　メシヤ　ハレルヤコーラス
ヘンデル作　以上

運動会（第二日）は、マス・ゲームやホッケーを含む三十ほどのプログラムで盛り上り、翌日の文芸会も、例年の会以上に多い一般市民の来聴を得て、独唱・奏の他、英詩の朗誦、和歌朗詠、英作文の発表などが披露された。四日目の「バザー」は、食品・絵ハガキ・花などの販売に小音楽会も加わって大いに賑わった。

ちなみに、この年の学生・生徒数は計四百二十名、教師は日本人十九名（他に講師十二名）、アメリカ人十一名、事務職および司書計四名という陣容で、卒業生はすでに八百名に達していた。

「昭和」に入って三年目、一九二八年には、英文専攻科に無試験検定による教員免許が与えられた。これは極めて取得困難な特権で、東京以北の女子教育機関としては最初のものであった。春三月、このニュースを教職員は勿論、生徒一同も歓喜して聞いた、という。なお、この年の十一月、天皇即位の大典を記念して、第一校舎の前に、正六角形の噴水池が造られた。これは戦災によっても損なわれず、以後約六十年間、水を高く噴き上げては池魚を養ない、現在の校地に移されてのちもかたわらの花樹アーチと共に、訪れる人の心を和ませている。

このように整えられた教育環境の中で、生徒たちは学校生活を大いにエンジョイしていた。なお家庭的雰囲気の残る教場で、教師は熱心に教え、生徒もそれにこたえ（しかし、ひそかにニックネームをつけ、教師の名を盛り込んだ「数え唄」を作り）、日本では稀な、校長が博士の学位を持つ学校にいることを誇りに思いつつ、互いに学んだ。

授業の合間には、文学会(文芸会)や運動会さらには対外試合の準備に全力を注ぎ、また、クリスマスを盛大に祝って喜びを分かち合い、多くの者が日曜学校の教師として奉仕した。修学旅行や春・秋二回の遠足、たびたび設けられた「校外見学」の機会を大いに楽しんだ。寄宿生活では、舎監や教師たちの細かい配慮を、時には煩わしく感じつつ過すが、後年それを懐しみ、寄宿舎での数年がその人間形成に資する所大であったことを大半が告白している。

本校では、学生・生徒のために年に数回キリスト教界、学界、教育界などの著名人を招いて講筵を開いてきたが(ファウスト校長のゲーテ「ファウスト」論もあった)、生徒たちは、それらに学校側の強い熱意を感じとり、特に信仰面における関係者挙げての努力には、充分こたえた。ファウストがしばしば誇りをこめて報告しているように、生徒たちのほとんどはキリスト教の何たるかを知らずに入学してくるのであるが、卒業するまでには、クラスの大部分、時には全員が受洗するに至るのである。ファウストらは、しばしば「軽佻浮薄」といわれる面をもった「大正文化」の時代に、真の教養、すなわちここではキリスト教という核を具えたものとしての教養を与えようとしたのであろう。宮城女学校は、ミッション・スクールとして最も成功したものの一つといわれるが、故なきことではない。

ファウスト記念館

一九三〇(昭和五)年早春、突如として伝えられた、ファウスト校長辞任の報は、まさに青天の霹靂であった。卒業生、父兄らは二月八日以来、たびたび協議を開いて、記念館の建築と記念品の贈呈とを決め、委員を挙げて直ちに準備に入った。世界大恐慌のさ中にも拘わらず、必要な分の募金は速やかに集まり、同年五月三十日、その離任式に際して記念品(金屏風一双)をファウストに手渡すことができた。続いて十一月十一日定礎式を行ない(石銘は In Honor of A.K. Faust, Principal 1913-1930, June 1930)、翌年十二月、木造二階建ての日本家屋が校地内に完成し、献堂式が行なわれた。その際の祝辞の一つと建築経費の収支報告を左に掲げる。

祝　辭

昭和六年十二月廿六日の佳き日を迎へましてフアウスト紀念館竣成献堂の盛大なる式典を擧げさせらるるに當りまして不肖をもかへりみず同窓會を代表いたしまして心からなる御よろこびを申上ぐる次第でございます。思へば昨年の春前校長フアウスト博士御夫妻と御名殘り惜しくもお別れをいたしましから最早一年有半、其間學校併に父兄各位の御熱心なる御盡力と御援助とによりまして今日かくも壯麗なる記念館が落成いたし、献堂の運びに至りました事は同校長の御德を偲び永く其御功績を記念し得る最もよき御企てとして衷心より厚く〳〵御禮申上ます。特に同校長は同窓會の進歩發展に關して常に御心を注がせられ、會員一人〳〵に對する御同情を厚くあらせられました事は私共一同の深く〳〵感銘する處で御座いました。此處に當局は其貴き御志を御理解あつて此の立派なる紀念館をたゞに在校生のためのみならず私共同窓生のためにも同窓會館として使用する事をお許し下さいました事は誠に私共にとりまして無上のよろこびであり感謝であるのでございます。千餘の會員を有する我が同窓會として其根城といたします處の會館を有して居らなかつたといふ事はどんなに會の進歩發展上支障を來たしてゐたるかを思ひますと誠に違憾に堪へない次第でございます。今後は此會館をして會員の親睦に事業の相談所に將また母校を慕ひくる遠來の會員にとりて安息所たらしめ、更に進んでは會員の研究發表の場所社會に進出して活動せんとする際の根據地として大いにフアウスト紀念館の存在を意義あらしめかつ同博士の御德望と御功績の上に更に〳〵光輝をそへまつらんがため會員各自の御奮闘御努力を切望いたします。此新たなる決意と新たなる抱負とを以て今日の祝辭に代へる次第でございます。仰ぎ願はくは天父の豐かなる御祝福のいく久しく此館の上に止まり給はんことを。

昭和六年十二月廿六日　同窓會代表　矢野きよせ

経　費

収入之部

三二一八圓〇〇	父兄及有志寄附
一四六〇・二〇	同窓生寄附
三二〇・二三	外國教員寄附
四九四・三二	日本教員寄附
二〇〇・〇〇	寄宿舍より寄附
四〇・〇〇	學校より暖房裝置費への寄附
一五〇・〇〇	同窓會より献堂式費への寄附
一〇〇・〇〇	フアウスト夫人より床飾へ寄附
三三・三六	利子
六〇一六・一一	合計

支出之部

四八〇〇圓〇〇	フアウスト館建築請負金

五〇・〇〇	請負者へ謝金
三四・七五	定礎式及上棟式費
一〇・〇〇	記念礎石代
八八・三七	金屏風並箱代
一二・〇〇	玄關踏石
一五九・五〇	印刷並に郵便代
二五〇・〇〇	スチーム据付料
一一一・〇三	電熱機並に工料
五三・四八	電燈工費
九六・二五	電氣器具代
一四・六〇	右器具檢査料
八・五〇	電柱
六・九五	障子紙表具屋拂
一八・二〇	カーテン代
五・四〇	掃除人夫代
三八・五九	雜費
一〇〇・〇〇	床飾
一五八・四九	献堂式費用
六〇一六・一一	合計

建物は六十七坪一合五勺、一階が裁縫室、二階は五十畳の広間であるが、作法室として、あるいは同窓生のための集会、宿泊にも使えるようになっていた。工費は記念品代を含めて六千余円であった。

ファウストは、本校での十七年間を、主のよき働き人として憩う間もなく過したが、帰国の頃は、大恐慌の波が仙台にも寄せはじめて入学希望者が漸減していくこと、および国家の思想的圧迫が学校の周辺にもせまりつつあることをすこぶる気遣っていた。帰途にあっては勿論、彼地で没するまでの二十三年間、彼は毎日、その愛し抜いた日本に思いを馳せ、宮城女学校への祝福をひたすら祈っていた、というが、戦争と老齢に妨げられて、再び来日することはできず、自らの名を冠したこの記念館に入ることは遂になかった。

クリーテ校長

一九三〇（昭和五）年六月、第七代校長として本校に来任したカール・ダニエル・クリーテ（Carl Daniel Kriete）は、一八八三（明治十六）年十一月十七日合衆国ケンタッキー州ルイヴィル市

デュートに生れた。

一九〇七（明治四十）年、オハイオ州ティフィンのハイデルバーグ大学を卒業（バチェラー・オブ・アーツ）、その後セントラル神学校、のちに合併されてモンタナ州ウェブスターグローブ神学校を卒業し、オハイオ州アッパー・サンダスキの牧師として伝道に従事していた。穏やかな人柄で音楽にも造詣深く、人望を集めていた。

一九一一（明治四十四）年、外国伝道局と外国伝道についての契約を交し、同年十一月来日、以後十九年間、塾達した日本語をもって福音伝道の仕事に携わったが、その活動の中心地は主に山形であった。

先任者クック宣教師の後を継いで秋田、山形の二県にわたって上ノ山、新庄、酒田など六十箇所、四十日間の巡回説教を毎年のように行なった。また県の要請もだし難く中学校で英語の授業を行ない、新設の工業学校では英語の発音と会話の指導を依頼されたりした。

クリーテ夫人は山形に幼稚園を開き、助手として宮城女学校卒のミセス・長島を得た。後年、幼稚園も軌道に乗り、一九二二年母親達のコンサート開催の申し出に対しては、宮城女学校からハンセンと菅井りうが援助に来ている。


C.D. クリーテ校長

一九二九（昭和四）年、クリーテは外国伝道に携わって第三期の奉仕、十八年目に入った。伝道の成果も順調に伸び、これまで公立の学校は宣教師に冷たかったが、秋の巡回説教中、六つの学校で全生徒、或は全教師に話す機会が与えられ、今までにない嬉しい体験をした。

一九三〇（昭和五）年の春、クリーテを宮城女学校々長に任用する話がおこり、彼を当惑させた。多忙でも比較的自由だった伝道生活から全く未知の学校生活への転換は容易ではなかった。しかし、彼は夫人とともに祈って遂に就任を決意した。山形で生れた三人の子供は成人して、当時はそれぞれ東京のアメリカンスクールに

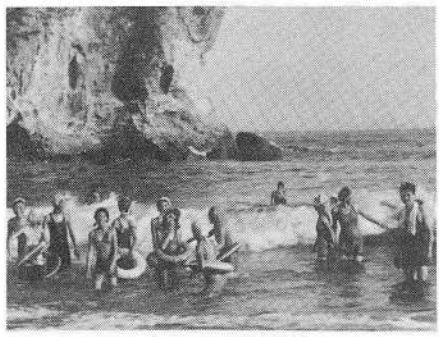
いっていたので、夫婦二人で四月に仙台に移転し、構内の校宅に入ったのだった。

恐慌とファシズム

これより先、一九二九（昭和四）年十月にニューヨークの株式取引所で株価の暴落がおこり、恐慌の口火が切られた。この恐慌は一九三二（昭和七）年まで続き、アメリカ本国の銀行の倒産、失業の増大は日本伝道にも影響を及ぼした。「本国の財政切りつめ政策により、バイブルクラス給費生は、以前は婦人外国伝道会から支払われていたが、今は我々が引受けており、それも減額されている。礼拝堂兼用の講堂建築もこの不況の時に延期せねばならぬが、資金集めをしている卒業生に合せる顔がない。建築費も今なら安いし、延ばせば高くなる。講堂建築用の金を送ってほしい。今なら日本円にして追加請求なしに十分建てられる。」クリーテはくり返し本国に要請しているが、一九三二年の段階での外国伝道局の返事は「数年前と状況が一変し、負債と不景気で外国伝道局も今までにない重荷をおっている。伝道も試練の時期をむかえている。アメリカの銀行が軒並みに破産するとは誰も思っていなかった。」というものであった。

しかし、その間一九三一（昭和六）年の卒業式には七十二人の生徒達が、半数は女学校女学部を、半数は専攻部を卒業し、五十六人の受洗者を社会におくり出している。一九三三（昭和八）年の外国伝道局への報告では「十一月に御殿場でYWCAの全国大会が開かれ、出席する代表学生は靴下を売ったり、校章入りの便箋や昼食時にパンやアイスクリームを売って資金をつくった。会議に出席した生徒たちは驚くほど成長して帰って来る。我々生れながらのクリスチャンよりもはるか先まで歩んで行くだろう。」とある。

学校生活の記録として専攻部七十人の生徒との高山での夏期学校の報告があ



高山での夏季学校

る。「高山の傍の海辺で十日間のキャンプが始まる。生徒たちは泳いだり、ハイキングしたり、松島湾を船で遊覧したりした。日の出とともに起床、海岸で体操、短い礼拝、七時朝食、勉強、九時聖書研究、講話、水泳、午後はリクリエーション、夕方にはビクトロラ・コンサート、合唱、キャンプファイヤー。私たちの願いは女学校と専攻科と二回キャンプをしたい。バンガローと寝室をもった設備がほしい。今は、寝るための小屋は山の上にあり、食事、台所、集会用の大テントは平地に、他に教師が寝る小さなテントがあり、海岸には来客用の小さなテントがあるといった具合だ。キャンプはもっと集約的かつ効果的でなければならない。バンガローを建て、井戸を堀るにも大して費用はかからない筈だ。」

一九三四（昭和九）年になると、外国伝道局予算中、外人教師への伝道局給料予算は四〇％カットされることになった。クリーテの書簡はいう―「子供の教育をアメリカ本国でうけさせている者は苦しい立場にたたされている。子供の教育をやめさせるか、自分の仕事をやめるかの二者択一を迫られているかのようだ。」「我々の予算が削減されたので給費生に、なるべく自力でやってほしいと要請した。彼女たちも給費がなくても落伍せずにやってゆくという。」「現在のカットされた給料ではとてもやっていけない。今年は毎月収入より支出が上廻り、借金が驚く程の額になった。我々を支えてくれる多くの人が自分の子供を学校へやれないでいることを知っているから、あまり言えないが。」

クリーテはアメリカ本国のこうしたきびしい時に、一時帰休することについて次のように述べている。二年後には宮城女学校五十周年がくること、現在の日本の教育事情では、凡ての教師、特に校長はアメリカ、ヨーロッパの教育分野の最新の発展に精通していなければならないので、教職につく時、特別研修をうけることを条件として引受けたこと、学校基本金を十万円に増額するために、教職員、学生生徒父母、卒業生が実動に入っている今、五十周年記念行事までに帰日するよう、勉強もし、学校の宣伝もするとすれば今が丁度よい時期であると言っている。

クリーテの休暇中の仕事は、一、校長の研修のため一年間シカゴ大学で研究すること、二、宮城女学校の窮状を本国の教会に陳情すること、三、音楽科声楽教師と英語教師を探すこと、であった。

一九三五（昭和十）年、彼は外国伝道局に直言している。「現在の日本の国公立の学校は急速に設備を充実してきており、宮城女学校は立ちおくれている。高校の建物も古くなり、不適当になった。礼拝堂も建てねばならず、寄宿舎の設備も古くなった。家政科の多大の設備が数年の中に必要となる。仙台に公立の立派な女子専門学校がつくられつつあり、宮城女学校女学部の生徒を引きとめるのが難しくなっている。日本を教化しようとするならば、女子の高等専門教育は大切であり、県や市から助成をもらうことはできるが、それを受けるのは県や市の管理統制を認めるならばの話であり、とりもなおさず非キリスト教的統制を意味する。制度をキリスト教的に管理運営できないならば、高等専門教育を経営しない方がよい。また十分に設備を与えないなら、我々は経営できないだろう。」又基本金の必要についても、「帰日するまでに現金でというのでなく、例えば送金は数年にわたっても七万円の約束をとれれば、同窓会で三万円の募金をしているから、五十周年には十万円になる。」と語っている。

以上のクリーテの要請に対する外国伝道局の返事は次のようなものであった。――外国伝道局は絶望的な財政危機に直面している。基本的姿勢としては宮城女学校の後楯であり、学校が行なっている事業を後押しするものであるが、外国伝道局は諸教会に集められた献金を外国伝道のために運営する目的で組織されたもので、金を工面するのは外国伝道局の仕事ではない。外国伝道局は教会に対し宮城女学校の事情と要請を知らせるのに最善の努力をするが、教会の対応が今後どうなるかは誰に対しても保障はできない。婦人外国伝道会が宮城女学校の礼拝講堂建設のために集めた基金は五十周年記念までに利用できるだろうという望みを外国伝道局は記録にとどめているが、それは希望であって約束ではない。建物や設備に関して公立学校と張り合おうとは教会は考えていない。それは不可能なことである。アメリカでもできないし、日本でもできない。しかし我々には公立の学校が持たず、我々だけが

提供し得るものがある。我々は宮城女学校を最高級のキリスト教学校にしたいと思っている。キリスト教教育に関しては人間が建物より遙かに重要である。――

日本へ帰る日が迫っても、音楽、英語の教師はなかなか決まらず、出航間際になってミス・アルマ・C・ネフ（英語教師）を採用した。ミス・ネフの任用には彼女の旅費、支度金を別途に募金するという条件があり、クリーテ夫妻は友人知人に訴えて旅費基金四六二ドルを集め、五〇〇ドルの目標額に迫って、八月に一緒の船で渡航することになった。滞米中一年以上探して声楽の教師は決定をみなかったが、十月にミス・マリー・レイダルが任用され、その後十一月には来日している。なお、クリーテは、この年六月アーサイナス大学から神学博士の学位を授与された。

創立五十周年

一九三六（昭和十一）年のクリーテのレポート「宮城女学校女学部が五年制高等女学校の認可を申請中であり、これまでは本校は聖書の授業があり、土曜日は授業なしだったので四年制の公立の学校と同等か、少し上と思われていたが、この認可をうければ公立より上だという評価になる。」「今春は高等部の五十人の募集に対して、百十二人の志願者があるが、入学式に何人が残るかわからない、受験生は何校もかけもちしていて、受かれば公立を選ぶからだ。五十人合格させても、二十人しかこなかったり、逆に五十人以上が出てきたり、見当がつかない。今年は十人の音楽科卒業生があり、大半は主にミッション・スクールに就職した。」「女学部は明るい年になりそうだ。文部省が我々の要求を容れ五年制の高等女学校として認めてくれた。本県で五年制の学校となったのは最初である。」

三月の卒業式には、専攻部から聖書科八人、家政科十六人、英語科三人、音楽科十人、計三十七人、女学部から二十六人の卒業生があった。ミセス・アネワルトとミセス・エルドマンからの賞金授与は従来どおりだったが、ヘッカーマン賞とラップ賞は送金が途絶えたので中止。エルドマン賞は女学部の二人の生徒に与えられた。

この年は創立五十周年に当っているが、外国伝道局からクリーテに宛てた手紙の文面は宮城女学校とアメリカの

教会との長い間の関係をあらためて示している。「五十年にわたって宮城女学校はキリストの名の下に北日本の若い女性たちにより高い教育をすすめるパイオニヤであり、リーダーであった。これが宮城の歴史であり、誇るに足る歴史である。外国伝道局はこの五十年の初めから今日まで宮城女学校と結びついており、アメリカの全教会と共にこの盛事をお祝いしたい。全教会といえば教会の全員の半ば以上が婦人であるという事実を忘れてはならない。これらの善良な婦人たちは婦人外国伝道会の指導の下に、宮城女学校の経経的援助の大半を寄金してきた。それにもまして母親のような気づかいをもって宮城女学校の発展を見守ってきたのである。」実際学生生徒の作品や学校行事の写真・パンフレット等はアメリカに送られ、教会の婦人集会に於て、又教会新聞に紹介され、特に音楽会のプログラム等は音楽科の活動を述べる際に利用され、教会のオルガニストや合唱団の関心もひくのであった。



宮城女学校略史展覧会

五十周年記念行事の先駆として十月十六日に運動会が開かれ、招待リレー・レース、招待バスケット・バレーボールの試合には仙台のいろいろな高等女学校の生徒が参加した。十一月一日の感謝礼拝と追悼礼拝で記念行事週間の幕があげられた。夜はメンデルスゾーンのオラトリオ「エリヤ」、二日は祝賀式と勤続十五年以上の教師・功労者への記念品贈呈、学生と同窓生の合唱、午後は職員・同窓生のコンサート、記念晩餐会、三日は明治節の式典、同窓会総会、三日、四日は文芸公演、英語科と音楽科の合同でメンデルスゾーン「真夏の夜の夢」上演、五日、沖野岩三郎と田川大吉郎の講演、また展示は四日間にわたり、学校の歴史展、生徒の作品展、日本女性の着物展示などあり、八日の感謝礼拝で終了した。（左記「橄欖」第十八号の記事参照）

記念式典　時　日　昭和十一年十一月二日午前九時

場　所　宮城女學校第一講堂

司會者　宮城女學校高等女學部長　一見　清

一、生徒教職員入場（生徒係引卒）

二、父兄同窓會員入場（接待係案内）

三、來賓入場（校長及接待係案内）

四、奏樂（クレードルソング　作者ベルビー）清水アイ

右奏樂終るや司會者立ちて奉式を宣言す

五、讀美歌七〇　一同

六、聖書　原田ことぢ

七、祝禱　舘岡剛

八、君が代　一同

九、勅語奉讀　一見清

一〇、祝賀歌　一同

一一、式辭　クリーテ校長

一二、コーラス　"Say not the struggle naught availeth"

一三、祝辭

宮城縣知事　菊山嘉男殿

仙臺市長　澁谷德三郎殿

外國傳道局代表　クライツキャツスルマン殿

基督教諸團体代表　田川大吉郎殿

東北學院長　出村悌三郎殿

宮城縣女子專門學校長　三矢英松殿

市内中等學校長代表　齋藤文殿

市内小學校長代表　二階堂清壽殿

同窓會代表　岸波せき殿

一四、祝辭祝電披露　諸根武雄

一五、校歌　一同

一六、表彰式

1、感謝狀朗讀　一見清

2、同授與　クリーテ校長

3、總代受領者　ミス、リンゼー

受領者名

感謝狀　米國リフォードムド教會外國傳道局ミス・レナ・ズー

フル、ミス・セデー・ワイドナー、ドクター・アレン・

フアウスト、ドクター・カール・クリーテ

感謝狀　並玉蠟塗花瓶一個　土井林吉氏

感謝狀　並玉蠟塗花瓶一個

原田ことぢ、ケート・アイ・ハンセン、リデヤ・エーリンゼー、鈴木虎之進、金子かね、一見清、竹中久、小野タマエ、早坂哲郎、三浦忠之亟、アーレン・ケー・ファウスト、黒澤良平、フロレンス・エル・サイプル諸氏

一七、頌榮四六八

一八、祝　禱　　クリーテ校長　　一九、挨　拶　　一見　清

右クリーテ校長の式辭では、本校半世紀の回顧と展望が試みられているので、後記の礼拝説教と共に全文を載せる。

式　辭　　クリーテ校長

本日の祝賀式に當りまして、本校五十年の歴史を考え、併せて祝賀の意義を考へてみたいと思ひます。宮城女學校が創立されましたのは、此の東北地方に基督を弘めたいと云ふ、少數の基督教信者の考へからでございます。押川方義先生と吉田龜太郎先生と東京に參りまして、米國リフォームド教會の若い宣教師として當時東京に居られたHoy先生に頼んで、一緒に東北傳道を致しませうと申しました。Hoy先生は當時まだ東北に女學校がない事を聞きまして早速女教員を送るやうに米國に申してやりました。

米國リフォームド教會の外國傳道局は早速Poorbaugh先生とAult先生とを送りまして、兩先生は明治十九年の七月仙臺に着き、女學校創立の準備を始めました。九月十八日には松平縣知事から認可されましたので、東三番丁圖書館寄りの民家を借りまして、六人の生徒と五人の教員とで愈々開校されたのでございます。之は丁度五十年前の九月の事でございましたが、六人の生徒が十一月には二十四人となり、十二月には四十一人となり民家の假校舍では手狭となりましたのでPoorbaugh先生とAult先生とは米國の外國傳道局に敷地と校舍が必要である事を申してやりました。その結果只今の敷地の一部を買ひまして校舍を新築し、創立の三年目明治二十一年の四月には新校舍に移りました。

同年Ault先生は結婚して退職致しましたので、Poorbaugh先生の妹Emma Poorbaugh先生が米國から參りましたが此のEmma Poorbaugh先生は特に音樂の教師としてすぐれてゐました。宮城女學校の立派な音樂は多分此の時から始まつたものと考へます。

縣當局の記錄には本校創立者として次の六氏があげられております。卽モーア氏、ホーイ氏、ブルボー氏、首藤陸三氏、押川方義氏、藤生金六氏でござゐました。なほ創立當初日本におきましては外國人の學校經營は許されておりませんでしたので明治十九年から同卅二年まで學校は三人の校主、押川、首藤、橋本の三氏の名義になつておりました。そして明治卅二年始めて外國人が學校經營の資格を得ましたので校主は廢されズーフル先生が正式の校長となりました。

創立の四年目明治二十二年には Poorbaugh 先生が正式に校長となり五年間勤めました。

最初に教へました學科は極めて簡単なもので、聖書、英語、國語、漢文、數学でございました。修業年限も始めは本科四年制でございましたが、創立三年目には三年制の豫科を設けまして、學科の方も充實致しました。以上が學校創業時代の大体でございますが、創立七年目の明治二十六年になりまして、校長 Poorbaugh 先生が辭任して歸國されますと、内外人半數から成る委員會の手で學校を管理する事となり Moore 先生が選ばれて校長となりましたが、翌年には Zurfluh 先生と代りました。その翌年、創立八年目には三年制の豫科を廢し四年制の本科を五年制と致しましたから、丁度今日と同じ修業年限となつたわけでございます。

Zurfluh 校長の代になりまして明治三十二年早坂先生が學校の幹事となり、明治三十三年には聖書專攻科が始められました。明治三十五年三月には校舎は新築以來十四年で全燒してしまひました。之は大きな打撃でございましたが、學校當局は一層の努力をしようと立上りまして、更に敷地を買ひ足し、二年間に現在の寄宿舎も新築し、現在の高等女學校校舎も新築致しました。

明治四十一年 Zurfluh 先生は校長として十四年間勤めた後、辭任歸國され Miller 先生が校長となりましたが、二年後の明治四十三年には更に Weidner 先生が校長となり三年間勤めました。明治四十三年、高等女學部は文部大臣から四年制高等女學校と認められ、明治四十五年には家政專攻科が設けられました。

以上で明治時代が終りますが、此の時期は宮城女學校の過渡期と申してよろしいかと思ひます。此の間早坂先生は大正六年辭任されるまで十七年間、幹事として學校の發展の爲に大變に盡力されたのでございます。

大正二年ファウスト先生が校長となりましてから學校は發展時代にはいりまして、大正三年には今日の様に内外人半數から成る理事會が學校を管理する事となりました。大正七年には第二校舎が新築され、大正十五年には更に增築されまして現在の專攻部校舎が出來ました。既にあった聖書專攻科、家政專攻科の外に大正四年には英文專攻科が設けられ、翌大正五年には音樂專攻科が設けられ、現在では專攻部が全部整つたのでございます。

昭和二年には英文科卒業生には中等教員無試驗檢定の特典が許可され、本年はまた高等女學部が五年制の高等女學校として認められました。

以上申上げました通り、宮城女學校は、初めは微々たるものでございましたが、今日では高等女學部と專攻部とを有し、生徒は合せて三七二名、教員は五十名を數へるに至り、この間出しました卒業生一、五六五名は全國に亘り、社會の各方面に於て母校の名譽の爲に活動致してをる次第でございます。

今日過去五十年の歷史を考へるに當り、私共は先づ第一に、宮城女學校の事業をよく理解して下さいました東北の皆様に深く感謝致す者でございます。若しも宮城女學校が東北の女子教育に對し貢獻する所がございましたならば、それは全く皆様の直接間接の御後援のお蔭でございました。又本日の祝賀式に當り私共は同窓生の皆様と父兄の皆様に厚くお禮を申し上げなければなりませ

ん。同窓會と父兄の皆樣は、宮城女學校創立五十周年のお祝ひの爲に基本金十萬圓の募集を始めて下さいまして、その寄附申込は既に約二萬圓に達てをりますが、此の皆樣の美しい尊い犧牲は何ものよりも強い宮城女學校の柱でございます。

この樣な皆樣の御盡力に對しまして、又過去五十年の名譽ある歷史に對しまして、私共は將來益々努力發展致さなければなりません本日の祝賀の意義の半分が過去五十年の歷史を考へる事にあると致しますならば、あと半分は將來の希望をしっかりと樹てる事になければならないのであります。

現代の情勢を一言で申しますならば、その一つの特色は文化の急激な發達であり、もう一つの特色は社會思想の混亂であると思ひます。文化の急激な進步の爲に女子教育は將來益々充實しなければなりませんが、私共の校舍は段々手狹となりました。幸ひにして同窓會と米國の後援家は既に約十五萬圓の資金を集めて下さいましたので、まづ來年の春から大講堂建築に着手する豫定でございます。

社會思想の混亂の爲には何よりも人格を養成しなければなりません。幸ひにして本校は創立以來基督教主義による人格教育を最も大きい特色と致して參りました。過去に對す感謝と現在及び將來に對する祈りとを中心とする信仰の力、愛を中心とする宗教の力は、人格の基礎として、將來益々重要である事は申すまでもございませんが、特に女子教育に於きましては、其の家庭を通し其の子供を通して、一層強い感化を社會に及ぼすものでございます。私共は神の御惠みによりまして、東北の爲、國家の爲に、今後一層大なる貢獻をなし得ると信ずる者でございます。

然しながら此の私共の將來の希望が實現される爲には、東北の官民皆樣の變らぬ御援助を受けなければなりません。今日此の樣に多數來賓を迎へました事は、卽ち皆樣の御後援の現れであると存じます。本校の名譽として厚く御禮申上げると同時に、將來も宜敷く御願ひ申上げる次第でございます。

感謝禮拜　十一月一日午前十時

司會　大越直

一、奏樂　ミス・イルズレー
二、讃美歌　三五六
三、聖書　詩篇百篇
四、祈禱
五、說教
　價無しに受けたれば價なしに與へよ　クリーテ校長
六、獨唱　ミスター・リガレー
七、讃美歌　三二八
八、頌詠　五六九
九、祝禱　クリーテ校長

出席者全校生徒職員及同窓生來賓約六十名

感謝禮拜に引き續き職員永眠者追悼會を行ふ壇上に永眠先生の芳名並に花環を飾りいと嚴肅に行はる

追悼式

一、讃美歌　四九二
二、聖書朗讀　小野教員
三、祈禱　右同
四、挨拶　クリーテ校長
五、頌榮　五六八
六、祝禱　クリーテ校長
七、遺族一同を代表して石田六治郎氏謝辭を述ぶ

來會遺族

石田六治郎　黒澤艮平　伊藤まき姉
中村菊代姉　ミセス、ホヂソン

永眠者芳名

押川方義先生　佐伯陽一先生　山下廉先生
深田康守先生　宮本むら先生　平野仲子先生
淺井さく子先生　長谷川喜多子先生　布施淡先生
吉田てる先生　六波羅杢太郎先生　小泉はる先生
長谷川とみ先生　ブルボー先生　鈴木さだ先生
大場誠治先生　廣田友子先生　石川こん先生
吉田龜太郎先生　佐藤まさ先生　永沼織之允先生
筒井千吉先生　中村忠篤先生　中村義策先生
ヴオンホルト先生　菅井文章先生　冨士すへ先生
相澤きみよ先生　ルイズボリガー先生　モール先生
黒澤まつよ先生　石田房子先生　メリー・シュネーダー先生

伊藤英吾先生　ミラー先生

感謝禮拜說教

クリーテ校長

『價なしに受けたれば價なしに與へよ』

マタイ傳十章八節

主イエスがその御弟子達を初めて世の救ひのためにお遣はしなされた動機は只今の聖句「價なしに受けたれば價なしに與へよ」でござゐました。感謝の心はよき生活への道しるべであります。クリスチヤンの生活は根本的にたゞ二つの事、卽ち受ける事與へる事にふくまれてをります。それは賜物の宗教であります。神はその獨子を賜ふ程に世を愛し給ひます。本日この禮拜は過去五十年間の神の數々の御恵を覺えその感謝の心から與へられたよきものを永遠に傳へ、我等のために價なしに與へた人々の未だ實現し得なかつた希望を仕遂げるために生涯をきよめて神に捧げんとする決心を目的としております。かくして創立者の大きな夢、彼等の生涯を捧げた、否今なほ生きて捧げつゝある多くの人々の未だ全うしない理想は實現されるでありませう。

我等は豐かな過去の繼承者であります。我等は日々他の人々にとつて多くを價したものしかし我等自身には何物も價しなかつたものを受けてをります。又先きにそのはせばをはしつた者達の肩を足場として立つております。さてこれから夜となく晝となく疲れた時も長き年月の間その全生涯を捧げつくした人々の大きな數々の天に積める寶を數へあげて見たいと思ひます。先づこゝに價なくしかも喜びの中に捧げられたお金があ

ります。その中には僅かの収入の中より大きな努力によつて貯へられた想像以上に尊い寡婦のレプタ二つも入つてをります。次に愛と献身的な犠牲。聖別された心より捧げられる祈り。慎重な慮りと種々の計畫、御母のその子供等に對するそれの様な心慮。これ等すべてのものそしてこれ以上のものがこの宮城女學校に今日の榮譽をになはせたのであります。しかし就中我等に傳へられたキリストイエスの聖き御生涯と死との精華、價なしに受け得る彼の救基督教的生活に於て得られる眞の喜び。これ等のすべてを感謝をもて今日新に認識し我等の身も靈も全生涯を彼に捧げて仕へ様とする決心を再び固めたいと存じます。

「汝等價なしに受けたり」、五十年前に思ひをはせる時私の心に深い感激を與へるものはと二人のうち若いそしてか弱い婦人の事どもであります。このお二人は前に一度もお家をはなれた事がなかったのに鹽釜港にその小さい舟からおり立つて、この地に神の御光を與へるためにゐらつしやいました。廣い太平洋を渡るには小さすぎその上乘心地惡い舟で愛する母國アメリカの港を出帆し離鄉のたまらない淋しさと舟酔ひになやみながら、日本における前途の生活に對する不安におのゝきながら、自分の力をあやぶみながらしかしその種々の憂慮の中にあつてなほ彼等が神の召命に應へて來つた故にすべて要するものを供へ給ふ事に絶對の信賴をよせて勇敢にすゝむ彼等の姿は如何に雄々しかつたでせう。私は二人が落膽し、堪え得ない望鄉の念にかられその希望がむざんにうちこわされ失敗によつてくぢかれ、信じ得ると思つた人々にそむかれて失望されたその時に書かれたお手紙を讀みました。そして我等が只今價なしに承けついでゐるものが如何に大きな犠牲をもつてきづきあげられたものであるかを幾分さとりました。

更に私はこのお二人をたすけてつくされた當時の日本の教職員を思ひます。彼等は献身的の信義の心を以て女性薫陶の道にはげまれた愛國者でありましたが基督教に歸依し主イエスに献身を誓ひましたので周圍の人々の不信用をまねきその忠信はしば〳〵うたがはれました。基督、彼は熱れの國にも屬してをられない故にそして「己れの民はこれを受けざりし」故にすべての國に屬し給ふものであります。現代の様に以前とは違つたそしてしかも強い愛國心の波がおしよせてゐる時においては特に彼等の犠牲がどんなに大きかつたかわかる様な氣が致します。只今我等が何も考へずにうけてゐる賜物が役等にとつてどんなき大きな犠牲であつたかと云ふ事は我等の想像にも及ばない事であるでせう。

又私は今本校御在職中に御許に召されし人々をあふるゝ尊敬を以てお偲び致します。彼等の愛はそのいまはの時までのこされし者達への祈りと心やりとなつて輝きわたりました。彼等のいまわの祈りは我等の名であり又そのおへる重荷のためでありました。かくて彼等はもはや生きて愛する學校につくし得ない事のみを心にのこし親しきもの愛する教へ子達に最後の愛の言葉をよせて遂に神の輝く永遠の御國にお入りになりました。

私は長い年月本校のためにおつくし下され今尚ほ我等と共に種々計畫し働き祈り今日のこの喜びに共にあづかつてゐらつしやる方々にもあつい感謝を捧げます。

更に私はこゝに學ばれし多くの同窓の友を思ひます。彼女達は家族の者の反對をしりぞけ親しき者達の嘲り否それ以上の迫害にも堪へて彼等のために輝きわたつた生命の光のもとに忠實にとゞまりました。彼等の獻身的愛はクラスには勿論學校に愛の精神を創りました。そしてこの美しい愛の精神、友情の精神は我等が只今價なく受け得る所の宮城スピリットとなつたのであります。斯様な精神をきづきあげるためには彼女等に多大の犧牲を要しました。しかし感謝すべきかな我等はそれを價なしに受けております。

私は過去半世紀の長い年月我等のために價なしにその尊い賜物をあたへたアメリカの方々を思ひます。數日前私は九十の坂を越えたマザーゲルハードからお祝のお手紙を戴きました。それによりますと夫人は五十余年前國で開かれたブルボーオールト兩先生の送別會に出席しそれ以後日々神の御前に捧げる敬けんな祈りを通して彼等及びその後繼者なる私共を支へ助けて下さいました。夫人はその子供達にも"Our Miyagi Jo Gakko"のために祈り働く様に教へなさいました。我等が我等自身を考へるその如く夫人が私達のために祈り得る様にと日本語で宮城女學校と云ふ名をお覺えになつた程でした。

キテー・ブルボー（エドマンゾ夫人）、この方は叔母君が本校に御教鞭を執つてゐらつしやる時に或る學課をとつて一生徒でありましたがそのお手紙によりますと、夫人は全校で寫眞をとる時に一生徒として入る事を許されました。幾年かたつてアメリカに歸國後一人の貧しい女裁縫師をたづねて着物をつくつてもらひました。その時はからずも眞中に自分の入つてゐるなつかしい宮城女學校の寫眞がその部屋の壁にかゝつてゐるのをみつけました。そして更に感激すべき事には長い年月の間この貧しい女裁縫師は彼女自身高い教育を受け得なかつたけれどもはるか遠い自分が一度も會つた事のない日本のお嬢さんにそれを受けさせたいと喜んで價なくして彼女のわづかの收入から獻げておつた事を知りました。この他この學校のためにつのられる幾千圓のお金の中にこの様な貧しいやもめの心からの尊いさゝげものが如何に多く入つておるか知る由もありません。又それが與主に如何に多くの犧牲を要したかを知らないのであります。しかもそれは價なしに與へられます。

みなさん宮城女學校教職員生徒垂び同窓生一同がすべてを價なしに受けました。それ故に我等も價なしに與へねばなりません。これは神の國の律法であります。即すべてを與へる故に躊躇なく受ける與へる事受ける事の限りないつながりの輪、これが神の國の法であります。なぜならば基督教の中心事實は賜即まぶねにおける神の子救世主の誕生、そして十字架上の神の子の贖の死と云ふはかりしられない恵みの賜物であるからであります。

我等はこゝ數年間今日のこの光榮輝く日を望みこのために種々準備をかさねてきました。多くの集會を持ち多くの事を計

書してあります。しかしながらこれ等すべての中でもし我等が賃なしに受けたる故に我等も又身も霊も全生涯すべてを神への御奉仕に捧げつくせるならばこれこそ我が宮城女學校創立五十周年に當つての最大の成功であります。

「汝等賃なしに受けたり」いざ我等も報ひなしに與へる様ではありませんか。

なお、この記念行事に際し、前校長A・K・フォウストは次のような祝辞をよせた。

To the Board of Managers of Miyagi College, Sendai, Japan:

It is with profound joy and gratitude that I avail myself of the privilege of sending words of heartfull congatulation to Miyagi College, her officers, professors, students, alumnae and friends on this auspicious occasion of the 50th anniversary of her founding.

The growth from infant to adult is always a challenging phenomenon, but this is still more true when an institution of learning has sucessfully passed through the various stages of developement to full growth.

Miyagi College has a very difinite and a very noble propose. It is to serve Japan faithfully and in so doing to serve the God of the universe faithfully. I firmly believe that Miyagi College has succeeded in both of these endeavors. The Japanese Government and the Japanese people have always been most sympathetic and helpful, and the heavenly Father has abundantly blessed these efforts.

For seventeen years it was my light privilege to be a fellow-woiker in this College. They were the best seventeen years of my life. and they were made truly happy by the fellowships and the friendships that were then formed.....My spirit is with you on this day of celebration. On this occasion of rejoicing, I pray fervently that God will unceasingly bless Miyagi College and every person connected with this great work.

Mrs. Faust joins me heartily in all these sentiments.

Very sincerely yours,
A.K. Faust

この頃の本校組織および設備の概要は左のとおりである。（記念発行文書による。）

◎高等女學部　五ヶ年（昭和十一年三月三日文部省告示第四十四號ヲ以テ本校高等女學部卒業者ニ對シ高等女學校高等科（修業年限二ヶ年）ノ入學ニ關シ修業年限五箇年又ハ三箇年ノ高等女學校ヲ卒業シタル者ト同等以上の學力アルモノト指定セラル）

◎專攻部
- 聖書科　三ヶ年　豫科　一ヶ年
- 家政科　三ヶ年
- 英文科　三ヶ年　豫科　一ヶ年（昭和三年三月二十四日文部省告示第百九十七號ヲ以テ昭和三年三月以後ノ卒業者ニ對シ中等學校英語科教員無試驗檢定ノ取扱ヲ許可セラル）
- 音樂科研究科　一ヶ年以上（本科　三ヶ年／師範科　三ヶ年）　豫科　二ヶ年

定員、學級數、及現在生徒數

昭和十一年十月末日現在

	定員	學級定數	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		計	
			生徒數	學級數	生徒數	學級數	生徒數	學級數	生徒數	學級數	生徒數	學級數	生徒數	學級數
高等女學部	二五〇	五	五五	一	七一	二	五三	一	五〇	一	四四	一	二七三	六

經費

年度＼種目	俸給	小使給	消耗品費	修繕費	備品費	圖書費	印刷費	通信費	衛生費	其他	計
昭和十年度決算	三一、九四三	一、九二〇	四、四一三	一、四九二	八〇三	七四七	三一八	一五五	一七三	六、四〇七	四八、一七九
昭和十一年度豫算	三三、一〇〇	一、九四七	四、六一五	三、〇三〇	一、〇五〇	九一三	七〇〇	三〇〇	一九〇	四、三〇八	四九、二六三

	專攻部				計
	聖書科	家政科	英文科	音樂科	
定員	豫科一〇 本科四五	九〇	豫科一五 本科七五	豫科一五 師本科四五 研究科一五	三一〇
學級定數	豫科一 本科三	三	豫科一 本科三	豫科二 師本科六 研究科一	二〇
豫科 一年 生徒數			二	四	六
豫科 一年 學級數			一	一	二
豫科 二年 生徒數	二			二	四
豫科 二年 學級數	一			一	二
一年 生徒數	一	一三	五	四	二三
一年 學級數	一	一	一	一	四
二年 生徒數	一	一二	一〇	九	三二
二年 學級數	一	一	一	二	五
三年 生徒數		一一	九	七	二七
三年 學級數		一	一	二	四
研究科 生徒數				六	六
研究科 學級數				一	一
計 生徒數	四	三六	二六	三一	九八
計 學級數	三	三	四	八	一八

卒業生の狀況

種別 / 部別	家庭	傳道	在米	保姆	教員	醫師	事務員	學生	死亡者	計
高等女學部	七二七	九	一二	一〇	三七	二	二二	四九	九〇	九五八
專攻部	四四二	二七	四	五	四五	〇	二三	七	二一	五七四
計	一、一六九	三六	一六	一五	八二	二	四五	五六	一一一	一、五三二

校地及校舍

校地	地形	地質	飲料水	所有區別	屋外運動場坪數	學校園坪數	校長住宅坪數	場所數	總坪數
	稍正方形	第三紀層	水道使用	社團法人	一、〇二〇・〇〇	五〇・〇〇	五四・〇四	一	五、七五・八〇

校舍	棟數	種類及構造		坪數
	四	第一校舍	煉瓦三階建 スレート葺	建坪 一七〇坪
		第二校舍	煉瓦(地下室共)四階建 スレート葺	建坪 二一四・四五坪
		寄宿舍	木造二階建 スレート葺	建坪 二五〇坪
		記念館	木造二階建 瓦葺	建坪 四〇坪
				總坪數六七四・四五

大講堂

講堂建築がようやく設計に入った段階で、十二月にヴォーリズ社から鉄材の不足が契約の値段を引上げるおそれありとの連絡があった。アメリカの海運業者のストライキで鉄の輸出がとまり、鉄の驚異的な高値をよんだもので、工費総額は十五万円を越すと思われるが、請負業者は十九万円を越すと見込んだ。学校は、価格が安定するまで着工を延期するか、設計を縮小変更するかを迫られた。

しかし、苦慮したクリーテは鉄材を削減する設計変更を決定して施工、新しい礼拝講堂は一九三八(昭和十三)年一月三十日献堂された。これによって全校生徒が一度に二階席におさまり、一階は客席として確保できるようになり、キリスト教行事に父母らもが初めて参加できるようになった。ピアニストのクロイッアを呼んでの大音楽会や、マリー・レイダルのリサイタル等が新講堂を利用して行われた。



新しい大講堂で初のクリスマス

これより先、昭和十二年に外国伝道の二大対象である日本と中国との間に戦争が始まり、外国伝道局は在中国宣教師家族の引揚げの方針を打出し、宣教師が残留するか引揚げるかは自主判断に任せることになった。国内の戦時色は俄かに強まり、仙台でも学校の生徒は出征兵士の遺骨を駅まで出迎えることが多くなった。その戦死者の中には東北学院の卒業生もおり、生徒の兄弟もおり、戦争の気配が身近かになってきた。日本基督教会が今後ミッションとのあらゆる協調をやめる方針を打出したので、東北中会の中には、ミッションのサポートなしでもやっていける教会とやっていけない教会とがあり、分裂も起ってその調停で苦悩する時代を迎えた。

また学校経営についても来るべき時代の予見めいたものをクリーテは感じ

ている。「当地のバプテストの学校は今では日本人の経営になり（アメリカ人教師は一人だけ）、入学者を増大させることにより学校を維持している。そこでは百五十人の生徒を女学校に入れようとしている。我が校では五十人だ。彼等は志願する者は全てとろうとしているのだ。他の二校も財政的理由から入学者を増やそうとしている。そのため今度の春は我が校の立場が難しくなる。」と述べている。

物資統制令で新入生の生徒達に制服を調達できなくなった。というのは今まではウールを一巻き単位で学校で購入し、生徒達に原価で分けてやっていたので生徒の家庭には助けになったのだが、もはやウールは制限され入手できなくなった。小学校の時の服を着ている生徒もかなりいたという。

軍国主義的風潮の強化

クリーテの書簡―「一九三九（昭和十四）年六月十八日、文部省の視察官が仙台に来た。全国を十二地区に分け、定例の視察を行なう他に、年に一回各地区をまわる視察団をつくった。仙台では今回が初めてである。県下の女学校の全校長が県立第一女学校に集められたところへ、八人の政府側の視察官と三、四人の県側の教育関係者が来た。その中の一人は軍人で、最近まで地方連隊にいた人である。開会の挨拶の中で、学校の教育に国民精神の動員が欠けていると指摘した。また五月二十二日に天皇が中学生の軍事教練を親閲し、その際勅語（「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」―引用者註）を賜わった事実に言及した。また、荒木文相の、教育についての十四ヶ條を詳しくのべ、教育に政府が重点をおいていることを強調した。そして我が校には二日後に視察団が来ることを予告した。

三人の視察官が来校した時、私達は英語で礼拝をしていた。礼拝後彼等は教育の方針について質問し、学則、教案を検討した後、授業を見学した。特に道徳、歴史、礼儀作法等の授業に関心を示した。一行の一人は教室のパーマネントウェーブをかけている一人の生徒に、多くの生徒がかけているかとか、自分でやるのか、美容院でやるのかとか質問した。

彼等の批評の要旨は次の通りであった。この学校は二つの教育目標を追っていること、一つは聖書の教えとキリスト教であり、もう一つは国民精神である。第一の方は徹底しており、音楽を通してそれが浸透している。それにくらべれば第二の目的の方は薄いように思われる。この二つの目的をもっと調和させてほしいということであった。

また国の祝日のもち方について、讃美歌、聖書朗読、祈禱という形をやめて、今後は国歌と教育勅語と適切な講話で式を挙げた方がよいと忠告を受けた。

これをきいて他の先生方は落胆したが、それは国への忠誠と宗教を結びつけようと考えるからだと思う。」しかし、政府がこの二つをはっきりと切りはなした以上、視察団の提言はクリーテの考えからも賢明だったと思われた。「これから国家の祝日は純粋に国民的にやるつもりだ」とクリーテはのべている。また彼等は当校で天皇の写真(御真影)を県に請求したかどうか訊ねた。「していないと答えて、問題はそのままになっているが、この問題は又再提起されるだろう。」とクリーテはのべている。

音楽科の最上級生は六月三十日から七月四日にかけて、弘前、青森、札幌で演奏旅行をし、他に青森の教会で讃美演奏を予定している。

七月に休みに入ると、生徒達は非常時に合せて集団作業をする。今度の戦争で亡くなった兵士の記念に「招魂社」造営の手伝いをするのである。小学校から大学までの全生徒が一月の間交替で働くのである。火曜日は我が校の生徒が広瀬川の河床から砂を、古い城のたっている地面まで運び上げる。ある日には砂利を、ある日には小石を運ぶのであった。

十一月学校を財団法人にしたいという我々の申請に対して、文部省は理事会の構成について、過半数が日本人であることが必要で、そうでなければ許可されないといってきた。理事会で検討の結果、急遽第十七条に定める構成

員数を十名から十一名にし、六名の日本人と五名のアメリカ人（内一名は校長）の理事にした。

日本の軍国主義的風潮が日に日につよまり、国民の市民的、知識人的、自由主義的人達より優勢になったら、キリスト教教育にとって悲運の日がくるだろうと予見された。

一九四〇（昭和十五）年二月十一日は「皇紀二千六百年」の記念行事が西公園で行なわれ、全ての学校関係者は出席した。

三月十三日には外国伝道局が理事の人数変更の件を正式承認したとの知らせがクリーテに届いた。

三月二十日、卒業式。女学部卒業生六十三人、専攻部二十人（内三人は聖書科、八人は音楽科、七人は家政科、二人は英語科）であった。

この年から入試の方法が全国的に変更され、仙台でも全学校が同一日に一回の入試を実施することになった。不合格の生徒は来年を待つか、他の定員割れの学校にいくことになる。専攻部には七十六人というこれまでにない応募者があった。中四十四人は家政科志願だが、設備との関係で適切な人数たる三十人以上は採らないつもりだったところ、古い研究室を教室にし四十二人入れることが出来た。家政科は総計七十五人、音楽科は志願者少なく、全員で三十六人、英文科は新入生五人で総計三十六人、聖書科は六人、高等部は新入生を七十七人にしぼり、校舎の南側の小さな教室を使用することにした。

クリーテ校長の辞任と帰国　同年六月に県の教育長が来校、一年前の文部省の視察団の追跡調査であった。朝の礼拝に宮城遙拝と国歌斉唱をしているかという質問があった。校長は国の祝日にはしているが毎朝はしていないと答えた。全体の雰囲気は友好的であったが、二十三日には、東北学院、宮城女学校、バプテスト派の学校、カソリックの学校の代表者が県庁によばれた。三つの提言がなされ、実行を要請された。一、朝礼に国歌を歌い、宮城遙拝をすること、一、聖書の授業を必須からはずすこと、一、天皇の写真（御真影）をうけること、最後の一点

は本校だけにあてはまるものであった。すなわち、本校はこれに抵抗してまだ「実行」していなかったのであった。

クリーテ校長は正式に辞める時がきたと思った。日本人なら圧力がかかって、出来ないだろうクリスチャン・ライフを外国人なら保持できると思っていたが、時代は変り、自分のがんばりは学校に不利になるばかりだとクリーテは判断した。九月十二日、彼は校長職を辞し一見清（いちみきよし）が校長事務取扱となった。

十月二十九日の河北新報はミス・ハンセンとリンゼイの写真をのせ、長年日本の学校で教えたことで表彰されることを報じた。他に一見清、ポール・ゲルハード、ミス・マリー・ゲルハード、出村悌三郎各教員も表彰されたが、これは「教育勅語」渙発五十周年記念と関係があった。

十一月、クリーテは自分の後継者として、山形で宣教活動を始めた時の最初のセクレタリーであり、今は和歌山高等商業学校の教授をしている西山貞（にしやま　みさお）に白羽の矢をたて、その説得を開始した。西山もキリスト教教育に献身する気持はあるものの、今はそれを困難にしている事情があるとして受諾しなかった。

一九四一（昭和十六）年、日本基督教団（同年六月二十四日成立）がミッションの手をはなれて独立自給の決意をしたのに合せて、全国のキリスト教主義学校も経済的独立をすることを決議し、宮城女学校でもこの新事態に苦難を分かとうと立ち上ったのが、同窓生会員を含む後援会と「家庭会」（父母の会）である。二つの会は別個に運動しているが、学校の当面の予算額年額一万円を向う三ヶ年間據出するため、半額ずつ負担することにしている。早坂一郎（早坂前幹事の長男）も別箇に支援組織の先頭に立とうと協力を申し出た。

以上の事はクリーテによれば、外国からの援助を必要としないとか、望んでいないとかいう事を意味するものでなく、少額の基本金と、高校に関する限り不十分な施設をかかえて、極めて不利な立場のまま、自給自足に入らねばならないのであった。クリーテは昨年ボードに要請していた四万三千円と基本金の二千ドルを全額本年度分として送るように要求している。

国際状況が危機を増しているのに、何故明白な危険を前にして留まっているのか、この間のことをクリーテは次のように書いている。「仲間のクリスチャン達が苦しみ、彼等の苦しみをやわらげる手だてがあるならば、又彼等の苦しみに愛を示す手だてが何かあるならば、彼等をおいて去ることはできない。しかしまたもし我々が敵性外国人としてとどまったとしても何ができるだろうか。手だてになるどころか、彼等にとって疑惑と危険の種になり、苦難の上の新たな重荷となるだけである。我々はヂレンマの中におかれている。」

「日本政府は我々の要求をいれ、日本人を多数参加させることにより、ミッション団体を再編成することになった。この措置は教会財産を守るために必要だったのである。この再編成がみとめられ、宮城女学校も財団法人としてみとめられることになる。文部省からの通達は万事順調で保証文書も発行された。これで我々の長期にわたる気がかりな仕事も終った。」

「西山氏の就任に関する問題が解決し、彼は九月一日には仙台で任につくことができるでしょう。これで私はホッとしたし、現在のような状況では私は留まるよりは去る方がよいと信じて帰国できます。彼が事を始める時、私は邪魔にならないようにしたい。彼は正に適任者です。」

第七代校長クリーテはかくして日本を去っていった。

越えて一九四一(昭和十六)年六月九日、夫妻は、こよなく愛した日本での奉仕を三十年目にして中断させられ、離仙—帰米の途についた。

これに先立つ六月三日、「宮城女学校報国団」が成立(「校友会」は解散)し、翌四日には、五年生が「宮城(皇居)外苑整備の勤労奉仕のため上京している。

アメリカに帰国したクリーテ宛の、かつての秘書だった大内タケの手紙はクリーテと西山との交情を伝えるものである。

「夏休みが終り、今日学校が始まりました。開会礼拝のあと、西山氏は短い挨拶をされました。クリーテ先生、彼は貴方の立派な後任者です。私はあらためて貴方の絶えざる祈りと多大な努力によって彼がついに宮城女学校校長の地位を引受けるに至ったことに感謝します。彼の挨拶は次のようでした。『クリーテ先生と私は彼が日本に来て以来の良き友でした。初めてお会いしたのは東京築地で、ご夫妻共若く、新婚家庭を山形にもちました。(生徒ほほえむ)あなた方生徒の先生だったマーガレットさんは山形で生れ、私もそこにいました。私達は三年間そこで楽しい日を送りました。彼の流暢な日本語は他ならぬ私のおかげです(生徒喝采)、去年の十一月彼から電報で私に東京で会いたいと言ってきました。二千六百年の紀念式典に列席のため私は上京していた時です。彼の後任になるように私に求めました。何でも出来ることは喜んでしますが、それだけは、と拒わりました。結局私は今ここにおり、クリーテ先生の家に住んでいます。我々人間は自分の意思がどうであれ、結局は神の意思に従うよう導かれるのだという経験をしました。』これらの言葉を美しい柔らかな声で、威厳のある物静かな態度で述べる彼の姿をご想像できるでしょう。それは美しいクリスチャンの性格と豊かなクリスチャン・ライフからのみ生れるものです。このような困難な時に貴方が去られて、この学校はどうなることかと案じていましたが、今は希望と喜びに満ちています。」

十月十九日にはハンセン、リンゼイも仙台を去り、帰米の途についた。そして、太平洋戦争勃発(十二月八日)の翌日、アメリカ人教師はすべて辞任し、まもなく日本を去ったのである。

この年の暮、専攻科のいわゆる繰上げ卒業が行なわれ、翌年四月二十四日には、前年「建築許可」を受けていた「奉安殿」が完成して「御真影拝戴式」が営なまれたのであった。

クリーテは、終戦後、送り出されて日本を訪れ、八年ほど、わが国文教復興のために働くが、その後帰国してほぼ八年を経た一九六二(昭和三十七)年三月三日、病のため、カリフォルニア州クレアモントで永眠し、続いて六月十七日には夫人も天に召された。病床の夫妻は、最期まで、宮城学院の近況を気遣い、特にキリスト教精神が学

校の中にさらに息づくべきこと、教職員・学生・生徒間のパーソナル・タッチがより深まるべきことを願っていたという。

第八章　四方より患難（なやみ）を受くれども

わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。

（コリント人への第二の手紙　第四章八節）

戦禍と復興、西山学院長時代

戦時体制と財団法人化

満州事変以来十年、国内外に次第に垂れこめてきた戦雲は、一九四一（昭和十六）年十二月、遂に太平洋戦争という形で大きな炸裂をおこした。あらゆるものが戦争遂行体制にますます強く組みこまれてゆき、学校教育もその重要な部分と化せしめられていった。そしてわが宮城も、多くの強いられた変革を重ねなければならなかったのである。

在来外国伝道局からの人的物的援助が得がたくなっていく状勢の中で経営基盤を確立するために、すでに前年九月、基督教教育同盟の「学校長会議」は、「各校は可及的近き将来に於て経済的自立をなすべき事」を決議しているが、今まで社団法人であった本校も、新たに「財団法人」として歩み出すこととなった。すなわち、かねて申請中の「財団法人宮城女学校寄附行為」が、この年二月十四日に許可され（別記参照）、五月十九日には、その一部（理事会の構成）が変更されて、日本人理事七名（一名増）、外国人宣教師四名（一名減）という割合となった。なお、これより先、在日宣教師社団は、本校の校地、校舎、宅地など財産の一切を本財団に寄付している。

財團法人宮城女學校寄附行爲（一九四一・二・一四）

第一章　目的名稱及事務所

第一條　本法人ハ財團法人宮城女學校ト稱ス

第二條　本法人ハ教育勅語ノ聖旨ヲ奉體シテ女子ニ須要ナル教育ヲ施シ且基督教ノ精神ニ基キ品性ヲ涵養スルヲ以テ目的トス

第三條　前條ノ目的ヲ達スル爲宮城女學校ヲ維持經營ス

第四條　本法人ノ事務所ハ仙臺市東三番丁百六十六番地ニ置ク

第二章　資産及會計

第五條　本法人ノ資産ハ在日本リフォームド宣教師社團及宮城女學校設立者カール・ダニエル・クリーテノ寄附ニ係ル別紙財産目錄ニ記載スル財産及將來收得スル財産トス

第六條　前條ノ資産ハ之ヲ基本財産ト普通財産トニ分ツ

基本財産

一、設立當初ニ宮城女學校設立者カール・ダニエル・クリーテヨリ寄附セル基本金三萬二千二百七十二圓三十五錢

二、設立當初ニ在日本リフォームド宣教師社團ヨリ寄附セル校地宅地及校舍

三、將來法人ノ基本財産トシテ指定寄附セラレタル財産及理事會ノ決議ニ依リ本法人ノ財産ヨリ基本財産トシテ編入セラレタル財産

普通財産

設立當初ニ宮城女學校設立者カール・ダニエル・クリーテヨリ寄附セル別紙財産目錄記載ノ備品、圖書及其他ノ收入

第七條　基本財産ハ之ヲ處分スルコトヲ得ズ　但　在任理事五分ノ四以上ノ同意ヲ得テ主務官廳ノ承認ヲ經タルトキハ此限リニアラズ

第八條　基本財産中基本金ハ公債其他確實ナル有價證券ヲ買入レ又ハ確實ナル信託預金若クハ銀行定期預金トシ理事長之ヲ保管ス

第九條　本法人ノ經費ハ基本財産ヨリ生ズル果實、考査料、入學料授業料、及其他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第十條　理事長ハ每會計年度開始前收支豫算ヲ編成シ理事會ノ決議ヲ經ルモノトス

第十一條　決算ハ理事長ニ於テ年度終了後遲滯ナク之ヲ作製シ理事會ノ承認ヲ受クルモノトス

第十二條　經費ニ剩餘ヲ生シタル場合ハ理事會ノ決議ニ依リ基本財産ニ繰入レ又ハ翌年度ヘ繰越支出ヲスルモノトス

第十三條　收支豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負担ヲナシ又ハ權利ノ抛棄ヲ爲サントスル時ハ主務官廳ノ承認ヲ受クルコトヲ要ス

豫算内ノ支出ヲナス爲其會計年度内ノ收支ヲ以テ償還スル一時借入金以外ノ借入金ニ付亦同ジ

第十四條　本法人ノ會計年度ハ每年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三章　役　員

第十五條　本法人ニ左ノ役員ヲ置ク

理事十一名（内一名ヲ理事長一名ヲ副理事長トス）

第十六條　理事長及副理事長ハ理事ノ互選ニ依リ日本人中ヨリ之ヲ定ム

理事長ハ本法人ヲ代表シ理事會ノ議長トナル理事長事故アルトキハ副理事長之ヲ代理ス

第十七條　理事中五名ハ在日本エパンゼリカル　エンド　リ

フォームド教會ノ宣教師中ヨリ理事會ニ於テ之ヲ選任ス

理事中六名ハ日本ノ福音的基督教信者中ヨリ理事會ニ於テ之ヲ選任ス　但内一名ハ宮城女學校長タル職ニ在ルモノヲ以テ之ニ充ツ

第十八條　役員ノ任期ハ三ケ年トス　但重任ヲ妨ゲズ

第十九條　理事ニ缺員ヲ生シタル時ハ其後任ハ理事會ノ決議ニ依リ之ヲ定メ其任期ハ殘任期間トス

理事ハ其任期滿了ノ場合ト雖後任者ノ就任マデハ其職務ヲ行フモノトス

第二十條　理事長ハ理事會ノ決議ヲ經テ別ニ諮問機關トシテ顧問若干名ヲ委囑スルコトヲ得

第二十一條　本法人ノ事業ニ關係スル集會及團體組織ヲナサントスル時ハ總テ理事會ノ承認ヲ得ベキモノトス

第四章　會　議

第二十二條　理事會ハ左ノ事項ヲ決議ス

一、毎年度收支豫算ノ決議ニ關スル事項
一、毎年度收支決算ノ承認ニ關スル事項
一、學校長及教職員ノ任免ニ關スル事項
一、其他本法人ノ事業達成上必要ナル事項

第二十三條　理事會ハ理事長之ヲ招集シ本法人ノ事務ヲ審議ス

第二十四條　理事會ハ在任理事ノ三分ノ二以上出席スルニアラザレバ開會スルコトヲ得ズ

理事會ノ議事ハ出席理事ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長之ヲ定ム

第五章　寄附行爲ノ變更並ニ解散

第二十五條　本寄附行爲ハ在任理事ノ五分ノ四以上ノ同意ヲ得主務官廳ノ認可ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ズ

但　第二條及第二十七條ハ變更スルコトヲ得ズ

第二十六條　本法人ノ解散ハ理事會開會ノ三ケ月前ニ各理事ニ通知シ在任理事五分ノ四以上ノ同意ヲ經主務官廳ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第二十七條　本法人ノ解散ノ場合ニ於ケル殘餘財産ハ在任理事五分ノ四以上ノ同意ヲ經タル上主務官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ處分ス

第六章　附　則

第二十八條　本財團法人設立當初ニ於ケル理事左ノ如シ

校長事務取扱　兼　理事長　一見　清
副理事長　伊藤　正
理事　原田　こと
同　平山　のぶ
同　植村　環
同　土井八枝
同　カール・ダニエル・クリーテ
同　ケート・インゲバーグ・ハンセン
同　リデア・アルマイラ・リンゼー

かくて一見清を中心とする理事会は、経済的自立の為に一学年を従来の五〇名（一クラス）から二〇〇名（四クラス）に改め、校長として、新たに和歌山高等商業学校教授であった西山貞（にしやまみさお）を選任した。また女学部五年生の学科目と授業時数を変更し、女学部卒業生は家政科二年に入学できるようにした。これは県内の女学校が四年制であったことに対応したものである。

この頃、生徒の自治活動を目的とした「校友会」は、戦争完遂に協力を要請されて、「宮城女学校報国団」に改組し、そのあかしのように、五年生の修学旅行は宮城（皇居）外苑の清掃奉仕におきかえられた。

一九一〇（明治四十三）年にバイブルハウスとして発足し、多くの働き人を世に送った聖書科も、この年の三月をもって廃止された。一九一八（大正七）年からは、発展して聖書専攻科になっていたこの科も次第に在籍者を減じ、ついには卒業生のない年さえあったからである。

西山校長の就任式はこのような空気の中で十一月十九日に行なわれたが、日本人初の校長は、かくて未曽有の難局を乗り切るべく重い使命をになって出で立つことになったのである。



一見　理事長

十二月八日未明、日本海軍機はハワイの真珠湾を奇襲し、次いで宣戦が布告され、太平洋戦争が勃発した。翌九日、アメリカ人理事・教師は全員辞任し、十日には東北学院関係の外人教師と共に、市内元寺小路の天主公教会堂に収容された。ここで、あれほど愛した日本人から、敵国人としての取扱いを受ける悲哀は、翌年六月、交換船で帰米するまで続くのである。

翌年、理事会は思いを残して辞任したアメリカ人理事のあとを一力次郎・菊地勝之助（県立図書館長）・伊勢武の三氏で補った。また同年三月退職した教員一見清・金子かね・丸山敏子・原田ことぢのあとを、石井昌光、島末三（史也）を招いて充たした（翌年、森下金二郎も来任）。そして理事長には新たに一力次郎の就任を求め、ここに西山新校長体制は一応ととのった。しかし時勢は益々急となり、金属製品の献納の問題などが理事会の議事録に巾をきかせている。

教員、生徒に対する軍事教練も益々強化された。それはしばしば一週間にもわたり、その中には現・泉市の山の寺までの強歩訓練なども含まれた。当局の「戦意昂揚」の意図に対応する為に、庶務主任の諸根武雄がたまたま予備役の陸軍少尉であったので大いに活用された。それはいささか場違いの感があったが、しかしすべては「御国のために」の声のもとに押し流されていった。神の国ではなく大日本帝国のために励まねばならなくなったのである。

七月二十四日、本校は初めて「御真影」（天皇陛下の正面写真）を「奉戴」した。それは当局の指導によって大講堂前の噴水池右側に、すでに建設されていた鉄筋コンクリートづくりの奉安庫に奉安された。八月八日には県下中等学校長会議で英語を随意科目とすることが決議されたので、本校でも次年度から英語を選択科目とし、英語か裁縫の何れかを選択させることになった。名門「英語の宮城」は正に没落の運命にあるかにみえた。

前年十二月二十六日には初めての繰り上げ卒業式が行なわれたが、更にこの年は夏休みを短縮して繰り上げた結果、九月二十八日には家政科十四名、英文科十名、音楽科十二名、計三十六名が卒業生として怒濤の世に出で立っていった。



一力　理事長

しかし、この間にも、大阪の私立梅花女子専門学校教授であった前記石井昌光を招き、専攻部教務主任としたが、これは翌年度発足する「国文科」（国語専攻科）への布石である。また、音楽同好会を設立して内外の有名音楽家を招き、会員組織で

度々音楽鑑賞会を開いたが、美しい芸術はすさみ切った空気をやわらげ、人の心にしみじみと浸みとおっていった。これは学園内のみならず、広く仙台市民の心のやすらぎとなった。辻久子、巌本真理、諏訪根自子、クロイツァ、モギレフスキーなどの名が、今も仙台の老人の間に美しい思い出となっている。

一九四三（昭和十八）年になると高等女学校令が実施せられ、これに従って宮城女学校は「宮城高等女学校」と改編・改称された。これに伴ない、専攻部は「専攻科」と改称した。

太平洋戦争第三年を迎え、教育よりは訓練が一層強化された。一月二十三日からは二週間にわたり耐寒訓練が実施され、仕上げには軍隊式の閲兵分列行進が課せられたりした。また四月二十九日（天長節）には、市内中学校、女学校、高等専門学校、大学の生徒・学生の閲兵分列式が行なわれた。日頃アメリカ系のミッションスクールであることで不当な批判の眼をあびていた本校は、その講評で成績第一位と激賞され、面目をほどこした。当日は本校の控えの場所の一隅に、よしず張りの仮設便所を設置した周到な用意も好評を得た。軍事教練を担当した庶務の諸根武雄予備少尉も三月に召集されて指導者を欠いていたにもかかわらず、森下金二郎教諭ら教員の努力に助けられ、学生、生徒は母校の名誉のために奮起したのであった。

「教育勅語ノ聖旨ヲ奉體シ」　しかし、この年四月一日を以て寄附行為が改められた。特に、第二十五條の規定にも拘らず、第二條後半（「且基督教ノ精神ニ基キ品性ヲ涵養スルコトヲ以テ目的トス」）が削除された。あとから入って来た「教育勅語」が「基督教ノ精神」を追い出したのである。

五月二十七日には校庭に国旗掲揚台が完成した。六月二十五日には「学徒戦時体制確立要綱」が発表され、学生、生徒の「勤労奉仕」は法制化され恒常化した。十月四日には金属供出のため、教室内の暖房ラジエーターを全部取りはずして、「献納」することになった。学生、生徒はかなり遠隔地域の農家で農繁期の手伝いに慣れぬ労働を強いられ、あるいは仙台市内の工場に勤労動員を命ぜられるなどして教室を離れた。

しかし、毎年続けてきた夏期修養会のキャンプは「海洋道場修練」といかめしい名にかわったものの、代ヶ崎吉田浜の「心照荘」（土井晩翠氏寄贈）で続行された。また一時中止されていた音楽科の演奏旅行も軍人療養所や軍需工場慰問をプログラムに加えて復活した。

このように緊迫した重苦しい時代であったが、三年生は卒業を記念してと自発的に計画した富士登山で、「富士登山史上、最長時間を記録」（山小屋の主人の言）しながら登頂に成功した。また家政科主体の「修禅寺物語」（岡本綺堂作）公演が文化に飢えた仙台市民の心を感動させたが、これは音楽同好会の鑑賞会と共に、戦中戦後十年にわたって文化的に廃墟と化した仙台の市民に親しまれ期待をうける存在となったのである。

二月の理事会で、任期満了に伴なう理事改選の結果、植村環、伊藤正両理事は退任し、伊藤まき（第十四回卒）が新任、他は再任となった。

戦争はついに校舎の内にまではいってきた。この年の初めから、第二校舎と呼んだ専攻科校舎を仙台連隊区司令部庁舎として軍に貸与することになったからである。更に八月からは家政科教室が「東北風第二〇二工場」（長町・日本電気の戦時名）の第一工場に転用され、十月にはミッション・ハウスが第二工場となり、十二月には第二校舎の洗濯実習室が第三工場となり、大半の学生・生徒はここに動員され、電波探知機の部品と思われるコイル捲きの作業に従事した。しかし、これでもキャンパスに留ることが出来たのは幸いというべきであった。それは作業前の二時間を授業にあてることができたからである。

このほか、八月から十月までは、女学校四・五年生は仙台簡易保険支局に勤労報国隊として動員され、十一月からは市内の女学校上級生と共に、国策の名を以て「県外派遣勤労女子挺身隊」として横須賀海軍航空技術廠に送られ、夜行列車で横須賀に向った。引率責任者（森下・大場両教諭）の心身の苦労は察するに余りがある。

在校の学生・生徒は、耐寒訓練やら耐寒行軍やら軍事修練に勉学のいとまもないありさまであったが、それでも

四月から三年制専攻科と改称し、新しい出発をした専攻科には育児専攻科六十八名、国語専攻科三十九名、外国語専攻科十二名、音楽専攻科二十一名、計百四十名の学生が集った。

戦局は益々切迫し、一月にはマーシャル群島に米軍の上陸が報じられ、十一月にはサイパン島基地からの米空軍のB29爆撃機による本格的空襲がはじまった。

この年、本校は文部省の補助を受けて、仙台市原町小田原に「原町託児所」を開設した。ここでは専任保姆一名のほか、生徒若干名（見習生）の手伝いを得て、三十名ほどの子どもたちを預かり、保育を施したが、終戦によって打ち切りとなった。

一九四五（昭和二十）年三月中旬横須賀の海軍空技廠に動員された高等女学校の四、五年生は、動員先で、出張した石井教授の下で卒業式を行ない、本校専攻科進学希望者はここで面接考査を実施した。しかし四月からは動員令が延長になり、附設課程生徒として空技廠勤務を継続することになった。付添の森下・大場教諭は交替期間をこえて生徒の保護と指導に当ったが交替要員の大越直教諭は老齢のためもあって、終戦直後の八月二十六日死去した。尊い殉職であった。

戦災―終戦

七月十日の未明、B29の大編隊によって仙台は大空襲をうけた。仙台の中央部に位置する本校も例外ではなく、第二校舎、大講堂を除く校舎七棟を焼失し、罹災教職員十三名、同生徒家庭二百余を数えた。七月十九日の「戦災後措置緊急理事会」では今後の学校経営について種々の意見もあったが、とりあえず「本日より一ヶ月間授業を停止して、情況の推移を静観し、一ヶ月後に再び理事会を開催して方策を樹つること」を決定した。八月十九日の理事会は、終戦のことあり、米軍進駐のことあり、内外諸般の情勢は多難を極めたので学校復興の方策を樹つること能わず、更に当分の間授業を停止して情勢の推移を待つより外になかった。

八月六・九日の広島・長崎への原爆投下とソ連の参戦で日本はなすべきすべを失った。八月十五日正午にラヂオ

による「玉音放送」があって遂に戦争は無条件降伏を以て終結した。

九月十一日、横須賀の海軍空技廠に動員されていた人々は解散式を行い、帰校した。九月十二日から授業は再開されたが、各学年とも合併で、焼け残った大講堂の階上階下や音楽講堂を使用し、しかも低学年は午前、上級生は午後という二部授業であった。この間、幸いにも連坊小路国民学校（昭和十六年から小学校は国民学校と改称されていた）の四教室を借りることができたが、市の学務課と連坊小路国民学校山内才治校長の好意を、我々は今も忘れることはできない。

十月十五日には終戦後はじめての礼拝を行なった。これまでは高等女学校令によって宗教的行事ができなくなっていたが、文部省令によって私立学校にあっては課外に宗教的行事が許されるとのことを新聞報道で知ったからである。始業前の礼拝はここに回復し、連坊校舎通いの生徒も先ず本校で朝の礼拝を終ってからそれぞれ通学することになった。

第二校舎にはいっていた連隊区司令部も逐次引揚げていったので、教室は次第に広くなったが、机も椅子もなく、各自座布団持参の授業であった。十二月二十七日には、危険をさけて根白石小学校に奉遷してあった「御真影」を戻し、翌日、奉還式を行なって学務課に返した。燈火管制用の遮光幕を取り除いた明るい光の中で、戦争の終結をほのぼのとした喜びの中で実感した。

こうした中で十一月二十四日には植村環元理事を招いて特別礼拝を行なったが、「若き日本女性の進むべき道」と題する説教は、進路を見失ったような学生・生徒に多大の感銘を与えた。また十二月十五日の久し振りのクリスマス礼拝は、焼けあとの荒涼とした背景の中で深い感動をもたらし、涙が人々のほほをぬらした。

こうした非常事態の中で、新設の国語専攻科は翌春の初卒業にあたり、ぜひとも文部省の中等教員無試験検定資格をとるべく猛勉強を積みかさねた。他学科もこれに協力し、教室や時間割に大幅な便宜を提供したりした。九月

二十日の文部省検定委員来校に当り、その実力を示すべき小論文を提出したが、学徒動員に続く戦災下にあって示された実力は立派なものであった。翌年五月七日の事であったが、無試験検定が認可された。この頃学校は、世相の混乱を慮って、生徒には特に服装・言動等に注意するよう指示している。

フェニックスの羽ばたき

何はともあれ、戦災復興が翌年の喫緊の急務であった。その為には復興資金八十万円の借入れ、続いて復興資金募集の苦難の道が待ち構えていた。また矢野貫城（明治学院長）を理事に加え、諸石靖（県立一高女校長）を女学校主事・女専教授として迎えた。

戦災復興資金は、寄附募集ではなく父兄より借受ける方法であったので、二月五日、募金委員を任命して資金集めを開始したが、教職員はそれぞれ地域を分担して東奔西走したのである。だが、インフレーションは猛威をふるい、十一月からは授業料をそれまでの倍額としたことも記憶されなければならない。

これより先三月末に第三校舎復旧工事が完成したが、この二階建校舎がこのように早く復旧したのは、西山校長の広い人脈によるものであった。西山が文部省に陳情出張した際、そこで偶然G・H・Qの教育課長ニューゼント中佐に出合ったがこの人は旧和歌山高商の教授であって西山校長のかつての同僚であった。彼の好意と協力が、戦災復興に大きな力をもたらしたのだと伝えられている。

連坊小路小学校の借用校舎に在った四年生は、どんなに不自由であっても最後の一年を本校で過したいと熱望したので三学期からは三年生と入れかわったりしたが、校舎が復旧するに従い、わずか六ヶ月でとにもかくにも全員本校に集結することができたのは誠に幸いであった。快く校舎を提供した連坊小路小学校の好意にすがる事態は、忘れることの出来ない思い出を残して終結した。

五月二十五日には第四仮校舎（延三〇六坪）、六月五日には第五仮校舎（延二四一坪）が完成したので、これからしばらくはバラック時代が続くが、粗末ながら長椅子も備えられ床にじかに坐らないで授業がうけられるように

なった生徒の喜びは大きかった。

戦後、基督教主義学校への志願者は、全国的に増加したが、本校でも高等女学校二五〇名の募集に対し四八三名の優秀な志願者が殺到し、この年からクラス名に花の名を用い、梅・桜・萩・菊組などと呼んだ。また女子専門学校の方には、育児科一九七名、外国語（英文）科九四名、国語科四九名、音楽科一三名の志願者があった。

かくて、ようやく生気のみなぎりはじめた中で、九月十六日創立六十年の記念式典が行なわれ、恵泉女学園長河井道子女史記念講演が行われた。続いて十一月一日から七日にわたり関係者の追悼式、表彰式、文芸会、同窓会大会、演劇公演、音楽会、体育会、感謝礼拝などの記念行事が行われた。この中でも演劇公演――「坂崎出羽守」（山本有三作、島史也演出）と「太陽の子」（真船豊作、石井昌光演出）は好評で、長く文化に飢えていた仙台市民の語り草になった。

前記のように五月七日に、国語科の中等教員無試験検定が認可され、六月二十九日には専門学校令によって宮城学院女子専門学校の設置が認可された。育児科、国語科、外国（英）語科、音楽科がその内容である。

かくて新しい「宮城学院」はフェニックスのように焼土の死灰の中から飛び立ったのである。

かつて、一九〇二（明治三十五）年の自失火で全焼しながら、その復旧に当って、画期的な発展を遂げた経験を持つ本校は、ここでも主に導かれて奇蹟とも思える復興と拡充へと歩み出したのであった。

寄附行為の改正と新学制　越えて一九四七（昭和二十二）年三月十日の理事会は、「建物戦災復旧貸付金」（高等女学校は一九四六年度分として四萬五千円、女子専門学校は一九四七年度分として二百万円）の借入れを決定し、本格的な校舎復旧に立ち上った。

また九月二十三日の理事会において、寄附行為第十七条を改正し、「理事は原則として福音的基督教信者とし理事会に於て之を選任す。但し一名は宮城学院女子専門学校長を以て之に充つ」とうたった。理事は矢野貫城、西山貞の

ほかは平山のぶ、土井八枝、伊藤マキが留任、諸石靖、村上兵助、栗原基、C・D・クリーテ、A・アンケニー、K・I・ハンセンの諸氏が新たに、または再び任命された。

クリーテ元校長は、夫人と共に戦後直ちに再来日し、主として東京を中心に、国際基督教大学の設立準備など、日本の教育文化面での復興につくした。本学院で教鞭をとることはなかったが、理事としてさらに奉仕した。

外人教師も逐次帰任した。アンケニー夫妻は三月、ゲルハード夫妻は四月、ハンセン、リンゼイは七月、ミス・ポーターは八月と、次第に旧に復し、四月にはアメリカの世界教会奉仕団から多量の食糧や衣料が贈られて、教職員、学生生徒をうるおした。

この年四月より、六・三・三制と呼ばれる新学制がしかれて、宮城学院中学校を併設することになり、第一回生一〇〇名を募集したが、四一二名の志願者があって、成績も非常に優秀であったので、二クラスの予定を変更して三クラス（花の名を冠した）を入学させた。創立早々狭き門となったのである。

専門学校の方も向う三年の猶予期間を設け、大学設置の為に努力することになった。

翌年二月二十日の理事会で、理事長は矢野貫城、副理事長を西山学院長、会計理事にアンケニーの諸氏を選任して依嘱した。そして寄附行為の第二条を旧に復して「本法人は基督教に基き女子に須要な教育を施すことを目的とする」と改めた。

また、五月八日の理事会では、女子大学の設置に関し音楽学部及び文学部（英文科）の二学部設置をきめたがこれは後に変更され、「学芸学部」一本となった。なお、理事の土井八枝（晩翠夫人）の逝去に伴ない、ミス・リンゼーが代って就任した。

この年、授業料が増額され、中高は年額三千円、女専は三千六百円となった。これは刻々増大してきたインフレーションの記憶につらなり、また東三番丁側の校地削減は、仙台市の都市計画の急速な展開の思い出となる。

空襲で外壁だけ焼け残った第一校舎の修復工事も八月三十一日には完成し、形の上ではほぼ旧に復した。また戦時中久しく休止の止むなきに耐えていたYWCAも復活した。この秋「女の一生」五幕（森本薫作、石井昌光演出）が三日間五回にわたって公演され、いずれも満員の盛況であったことは記憶されてよい。正に復興への跫音は高らかにひびき始めたのである。

教育体制の充実

一九四九（昭和二十四）年二月二十一日、かねて申請中の「宮城学院女子大学」設置が認可となり、学芸学部として英文学科、音楽科が四年制となった。四月には、大学として新しく、英文学科十名、音楽科三名の入学が許可され、旧女専の外国語科三十五名、音楽科十三名をそれぞれ大学に編入させた。六月十五日には大学設置に伴ない宮城学院女子専門学校校則の一部変更が認可となったが、これは女子専門学校の修業年限を二年とし、この本科とは別に修業年限一年の別科を置くものであった。内容は育児科、国語科、外国（英）語科、音楽科の四科である。十月二十七日には、高校新校舎（第六校舎）の落成とあわせて大学開学の記念祝典が挙行された。

一方、中学・高校においては、四月の新学期から従来の月曜日を休業としていた五日制を土曜日休業に切り替え、さらに本学院大学に歩調を合わせて二学期制を実施することになった。また、七月三十日には四泊五日の日程で、中学校つぼみ会の夏期修養会が野蒜海岸の旅館を借りて開催された。戦争のため途絶えていた夏の修養会が久しぶりに復活したのである。

またこの年には多くの外人教師が来任している。一月にエリノア・J・ジップ、九月にはガートルード・B・ホーイ、マーサ・L・ラマーズ、マーガレット・A・ガーナー、マーサ・M・レイン、ベティー・J・ホファイン、オードレ・A・ヤンゲンというようなすぐれた女性教師たちが赴任し、国内のミッションスクールとしてもこのように

たくさんの外人教師を擁する学校は他に例を見ないほどになった。

このように、女学校→女専→女子大学と、僅々三、四年の間にぐんぐん伸びて来た宮城学院の姿は、仙台の人たちには勿論、宮城県全体にも大きな驚きを与えた。その陰には、西山学院長はじめ理事会のその機会を適切に活用して、果断に打った手がみごとに決まっていったということもあったが、それと同時に、人の和、さらに神の恵みによるものであったことも忘れてはならない。苦しかった戦時中に劣らず、物質的には恵まれた環境とは到底言えなかったが、教職員一人一人が親しく、和やかに、かつ全力を尽して外国人教師・学院長および理事会を援けた。神のゆるし給う学校、いとなみ給う学校を我々は建設して行くのだという共通の思いは、まさに主に在る同労者としての親愛感と使命感を高め、それが明るい希望となってお互いの手を握らせたのである。

一九五〇（昭和二十五）年の明けて一月三十一日、アメリカのトルーマン大統領が水素爆弾製造の指令を発したというニュースが前世界を慄然とさせた。この頃から原水爆禁止運動や平和運動がいわゆる草の根的市民運動より左翼運動と結びつきはじめ、ヒューマニズムの立場からこれに賛成する人と、政治的な運動としてこれを強く訴える人との区別がつきかねるようになった。学生運動も活発になり、ついに五月には東北大学と北海道大学とにいわゆる「イールズ事件」がおこった。また、朝鮮動乱による特需ブーム——戦争景気が起こり、戦前にまさる贅沢品が出まわったり、新興財閥が発生したりする一方、六月にはマッカーサー元帥書簡による共産党中央委員の公職追放指令と地下潜行幹部に対する逮捕状が出された。八月には全労連の解散指令と共に一万二千人にのぼるいわゆるレッド・パージが発表され、のちに再軍備への第一歩と言われる警察予備隊も誕生した。

宮城学院女子短期大学設置が三月十四日に認可され、国文科五十名、家政科五十名について本年度から募集することになった。四月、大学、短大の入学試験を実施したが、志願者数と合格者数は次のようなものであった。

	（志願者数）	（合格者数）	
英文学科	六十八名	五十五名	大学
音楽科	九名	九名	
家政科	七十六名	六十五名	短大
国文科	四十九名	四十六名	

一方、中学・高校においては、三月に高校第一回の卒業生二十二名が巣立った。人数が少ないのは、さきに高女生二百二十七名が四年で卒業したためである。

また、四月の新学期より中学・高校生は制服（紺色、中学は校旗色のネクタイ、高校は紺色の紐タイ）を着用することになった。特に略服のセーター（中学は校旗色の海老茶、高校生は紺で、共に「MG」の文字入り）は好評であったと見えて、まもなく市内の他私立女子校でもセーターを使用するようになった。

夏休みに入ると高校のYWCAは、岩手県前沢在の大内氏（在校生の父兄）の好意により、同氏の邸宅を使わせていただき、高校としては戦後初の夏期修養会を開いた。中学校のつぼみ会は、松島湾寒風沢（さぶさわ）島の浦戸小学校を借りて夏期修養会を開いているが、閑静な田園において、あるいは空気清浄な海浜において、それぞれ意義のある修養会を持つことが出来るようになったのは、感謝の至りであった。



矢野　理事長

九月三十日に中学校の校舎たる第五校舎（木造二階建、延三四八・五坪）の新築工事が完成し、十月三十日には落成の記念式が挙行された。

学校法人としての拡充

一九五一（昭和二十六）年一月、財団法人より学校法人への組織変更認可申請を提出し、三月九日認可となった。それに伴ない、これまで財団法人の所轄庁はすべて文部大臣であったが、高等学校

以下の学校は県知事を所轄庁とすることになった。

一方、理事・監事・評議員会が必須機関となり、初代学校法人理事長には矢野貫城（やの　つらき）が就任した。

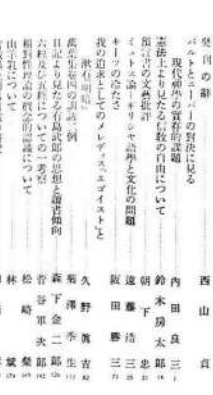
一月十四日午後、四十年余、本学院音楽科の教授として、全生涯を日本人の基督教教育のために献身したケート・I・ハンセンが急に帰米の途についた。これは九十歳を越える母堂の病気看護のためであったが、突然のことだったので送別会らしい集いも何ら持つことができなかった。

また、ハンセンと共に四十余年の長い年月にわたって本学院に教鞭をとったリディア・A・リンゼイは七月に定年を迎え、やはり帰国することになった。これに先だち、七月六日、中学・高校・大学合同でリンゼイの送別礼拝が西山学院長司会のもとにとり行なわれた。西山学院長が送別の言葉を述べ、学校、PTA、教職員生徒一同より記念品（一月帰米のハンセンにも同様に贈呈）を、また生徒代表より花束を贈呈した。最後にリンゼイより心のこもった挨拶と祈禱があって閉会した。

リンゼイは七月二十三日に離仙し、帰米の途についたが、二十五日、文部省においてハンセン、リンゼイの両名それぞれに対し、勲四等瑞宝章の授与式が行なわれた。

この年三月の大学・短期大学の入学考査において合格した者は、英文学科五十六名、音楽科二十一名、家政科七十二名、国文科五十七名で、前年に比べ一段の飛躍をみた。なお、この年の卒業生は女専最後の卒業生であって、三月三十一日限りで、昭和二十一年六月二十九日の専門学校令による宮城学院女子専門学校は廃止となった。

九月二十九日、高校三年の生徒は六泊七日の日程で、北海道（道南地方）方面と関西方面の二組に分かれて修学旅行を行なった。この頃


研究論文集目次

になって交通事情もかなりよくなったからである。

十月二十三日午前、本校創立六十五周年記念式典が挙行され、午後は記念の展覧会を開催。二十四日は文芸会、展覧会、バザー。二十五日は展覧会、音楽会を開催。二十六日には記念の運動会を行なっている。

この年、宮城学院女子大学から「研究論文集」が発刊された。なお、この研究誌は第Ⅲ号（一九五三年六月二十五日）から「宮城学院女子大学文化学会」の刊行物となった。右号所載の同会会則を左に掲げておく。

宮城學院女子大學文化學會會則

第一條　本會は宮城學院女子大學文化學會と稱する。

第二條　本會は會員相互の協力により學術の研究を助長し、その發表の便をはかることを目的とする。

第三條　右目的達成のため左の事業を行う。

一、機關誌「宮城學院女子大學研究論文集」の發行（春秋二回）

二、研究會及び講演會の開催

第四條　本會の會員を分けて左の三種とする。

一、正會員　本學教授、助教授、講師、助手、及び委員會の推薦をうけた者

二、學生會員　本學學生

三、特別會員　本學卒業生

第五條　本會の會員は機關誌の配布を受け、本會における研究ならびに發表の行事に參與する。

第六條　本會に左の役員を置く。

一、會　長　學長

二、委　員　九名　正會員中より互選する。

三、編集委員　四名　委員中より互選する。

四、編集代表者　一名　編集委員中より互選する。

第七條　本會委員の任期は一年とする。但し重任を妨げない。

第八條　本會會員は次の如く會費を負擔するものとする。

一、正會員　年額　五百圓

二、學生會員　年額　參百圓

三、特別會員　年額　參百圓

第九條　本會の會計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終るものとする。

第十條　本會の會則の變更は委員會の決議による。

第八章

本学院中学卒業生のほとんど全部が本学院高校に進学するので、高校の入学志願者を公募したことは今まで一度もなかったが、他の中学校から本学院高校への入学志望の声が高まり、一九五二（昭和二十七）年初めて入学者を外部から公募した。約五十名の募集に対し、九十五名の志願者があり、二月十一日、十二日の二日間にわたり考査を実施し、四十名の入学が許可された。

一方、大学・短大は毎年入学志願者数が増加するのに伴ない、この年より短大家政科のみ二クラスを募集することとなり、AクラスとBクラスが生まれた。この年の大学・短大の学生数は、合わせて五七〇名を数えた。

中学・高校の必要な校舎が順次、そして順調に与えられてきたが、今度はいよいよ大学の施設充実をはかることになり、ヴォーリズ氏（大講堂設計者）設計による大学本館の起工式が、五月十三日に西山学院長の鍬入れで行なわれた。

大学・短大では五月上旬、懇親をかねて春の遠足を実施し、英文・国文両科は東名浜、音楽科は八木山、家政科は松島へのピクニックを楽しんだ。

七月中旬、高校のYWCAは青根で夏期修養会を開いた。また、中学校のつぼみ会は、下旬に福島県の猪苗代湖畔翁島の高松宮別邸「天鏡閣」で修養会を開いたが、同別邸が福島県に移管する直前で「聖書研究のためなら」というご好意で無償で使用できたことは、まことに感謝すべきことであった。そして高校の自治会誌「橄欖」が十四年ぶりに復刊された。本誌の創刊（一九二一年）にあたり「『橄欖』に題して」という詩を寄稿し、また長く本学院の教壇に立った土井林吉（晩翠）が八十一年の生涯を閉じたことは忘れられない。葬儀は十月二十四日、仙台市の主催で公会堂に三千の参列者を集めてしめやかに行なわれた。この時本学音楽科生一同の歌った「荒城の月」はマイクに乗って全国に流れた。

この年、大学・短大の厚生補導部で行なった学生調査左記三項目の結果を紹介しておく。（調査人員五一四名）

一、基督者学生

受洗者　求道者

大学（英文科　二六名）　二四名
大学（音楽科　三九名）　四〇名
短大（家政科　三名）
短大（国文科　一三名）　八十一名　二四名　四四名　一三二名

二、汽車・市電・バス通学生

東北本線　六四名　仙石線　四六名
常磐線　二三名　仙山線　五名　一四〇名
秋保電鉄　二名

三、下宿・寄宿生

市電　九四名　バス　二六名

寄宿舎　下宿（自炊を含む）

大学（英文科）　一五名　二〇名
大学（音楽科）　六名　五名
短大（家政科）　一〇名　三一名
短大（国文科）　九名　二八名

一九五三（昭和二十八）年四月一日、日本基督教団総務部に在職していた末包一夫（すえかね　かずお）が本学院の事務長に就任し、以後、学校運営に腕を揮った。

本学院中学・高校の教育施設そのものについては、年を追うごとに充実したものになってきたが、衛生施設に関しては戦後手薄な感じがないでもなかった。父母教師会会長佐々木統一郎氏はかねてからこれを遺憾とし、本学院においても特に健康管理に留意すべきことを提唱、多田三郎校医、古谷辰三教諭並びにPTA厚生部関係の諸理事が中心となって、東京の成城学園など、他校の衛生施設を参考にして、一九五二（昭和二十七）年の秋から、「ヘル



末包　事務長

スセンター」創設の準備を始め、一九五三（昭和二十八）年の四月から第一校舎に「宮城学院ヘルスセンター」を開設した。春秋二回の定期身体検査（細密検査を兼ねる）、生徒の生理日記調査、健康相談（木曜日―婦人衛生、金曜日―内科）を実施して、従来比較的手薄であった学生・生徒及び教職員の健康管理に力を入れるようになったのである。センターでは古谷教諭を主任とし、各相談日に婦人衛生について長池博子女医、内科に関しては東北大学医学部の中村隆、湯村良一両氏に来校を請い、専門的な指導をいただくことになった。

一方、大学・短大においてはこの年より本学院高校が推薦する成績優秀者を面接選考の上、無試験入学を許可する方針が定まり、英文学科六名、音楽科三名、家政科十二名、国文科五名の者が入学を許可された。また、授業料の値上げが発表されて、在学生は年額一三、〇〇〇円で据置き、新入生から一四、四〇〇円（月割一、二〇〇円）となった。

また、大学・短大でも礼拝はいわゆる「朝拝」として毎朝午前八時五分より十五分間行なってきたが、この時刻に間に合わない汽車通学生が在学生の二割八分にも達するという状況になったので、すべての学生が礼拝に出られるように左のような校時変更を行なうこととした。（のち、「礼拝」までは五分ずつ繰下げとなる。）

八・一五～九・〇五	第一校時	一一・三五～一二・二五	第四校時
九・一〇～一〇・〇〇	第二校時	昼　休	
一〇・〇五～一〇・三五	礼　拝	一三・一五～一四・〇五	第五校時
一〇・四〇～一一・三〇	第三校時	一四・一〇～一五・〇〇	第六校時

前年十二月三十一日に完成引渡しを受けた大学本館への移転は、一月十九日に学生を動員して行なわれた。従来第一校舎に学校本部が置かれていたが、この日より新校舎が本部となった。落成式は、第一寄宿舎の二期工事が五月に完成したのと合わせて、五月十三日（水）十時から行なわれたのであった。

また、十月二十日～二十二日の三日間、本学院を会場として、キリスト教学校教育同盟理事会並びに第四十一回総会が開催され、北は北海道、南は九州に及ぶ全国のキリスト教主義学校五十五校の代表者が集まってキリスト教教育上の諸問題について熱心な協議を行なった。

十二月より本館にスチームが初めて通ったが、第一、第二校舎にもストーブを設備し、不公平のないよう配慮した。このため冬季暖房費として一五〇円ずつ全学生より徴収した。なお十二月十五日付で、大学は四十数校の加盟大学を持つ日本私立大学連盟に加入した。

この年宮城学院が受けた最大の悲報は、九月十三日、第六代校長アーレン・K・ファウストがペンシルヴァニア州のアレンタウンで死去されたことである。ファウストは一九一三（大正二）年より一九三〇（昭和五）年までの十七年間、宮城女学校の校長として多くの生徒や教職員に慕われた。

大学・短大は一九五四（昭和二十九）年四月から、英文学科、国文科とも二クラス採ることにした。そのほか、県よりの委託で幼稚園教員養成所（一年）が附設された。こうしたことからこの年の新入学学生は四〇三名にのぼり、在学生を加えると約八三〇名を数えた。学生数の増加に伴ない、白地小型円形の校章バッヂのほかに、本学教授朝下忠のデザインによって、大学という字を中央に長くMIYAGIと綴った科別バッヂ――英文は赤、音楽はグレー、家政は青、国文は黒、（のち保育科ができたが、これは緑）が採用された。

この年より家政科に栄養士養成課程が加えられ、取得すべき単位が増えることになったので、これを機会に戦後実施されてきた五日制を、中学・高校・短大・大学すべて六日制にすることに決定した。

十一月二十三日・二十四日には四万円の予算で自治会主催の初めての大学祭が行なわれ、リサイタル、レコードコンサート、映画会、演劇などを公開した。また学生数が多くなるとともに就職希望者も増加し、総体として卒業予定者の約七九％（大学八一・六％、短大七五・四％）という高率になった。この現状に即し、四月から新たに、就職対策委員会が設けられて、従来ほとんど補導部長ひとりに任せられていた形の就職対策を、委員会によって強力に推進していくようになった。

一方、中学・高校においては、毎年冬季または秋季に生徒・教職員のために有力な伝道者を招き、特別の伝道集会を行なってきたが、当年はフェリス女学院長山永武雄氏を迎えて特別伝道集会を十月二十九日・三十日に開催した。またこの年、中学校自治会誌「鴿」（はと）が創刊された。「橄欖」同様、これも聖書から名が採られた。

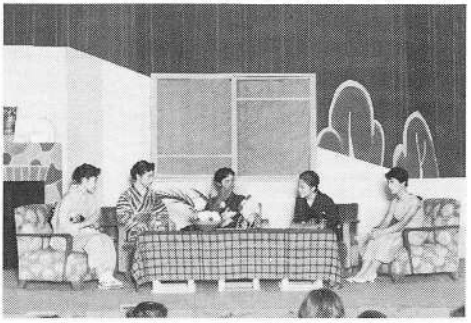
施設面では、かねてより全生徒、全教職員の希望でもあった体育館の建設が本決まりとなり、十一月一日、西山貞学院長によって、体育館新築工事鍬入式が行なわれた。

なお、再帰国直前のC・D・クリーテ夫妻を迎えて送別会が催されたのは、この年五月のことであった。

また、同じ年、私立学校法の改正に伴ない、現行の恩給財団並びに健康保険は一月一日より私立学校共済組合として発足することになり、本学院においてもこれに加入することに決定した。

幼稚園教員養成所は一九五五（昭和三十）年になって一年限りで廃止され、代って宮城学院女子短期大学保育科が設置され、シップル初代科長の指導を受けつつ授業を開始した。保育科の増設については一月二十日付で正式に認可があったが、その開設条件として特に重要なものは昭和三十年度中に計画通り校舎の建築を完成することで、これを整備するために、また、仙台市の都市計画によって東二番丁道路が文字通り大幅に拡張されることから、第二校舎の西半分を切断して大学本館と接続する校舎の新築を要するという事態のために、米国ミッションボードの援助を仰がねばならなくなり、エールマン代表を通じて米国諸教会の特別な援助を申請した。

施設整備を見るとこの年は、保育科教室及び幼稚園増改築工事起工や、第一校舎の小講堂に設置した図書館及び第二校舎地下雨天体操場に設備した食堂改造工事完成があげられるが、中でも特記すべきは、当時仙台に於ける屈指の設備と言われた体育館の完成である。体育館は鉄骨造一部鉄筋コンクリート造延二百七十三坪で、父母教師会・同窓会・教職員の協力によって五月に完成、十月に行なわれた創立七十周年記念式典時に落成式を挙行した。



「夏の夜話」

創立七十周年

本校の創立記念式典は一九一一（明治四十四）年の「創立二十五周年祝賀式」以来十数回行なわれているが、七十周年記念式典のみは例外としていわゆる数え年で迎えている。

十月の主な行事は、七日に新装の大学図書館を会場とした第十回東北地区大学図書館協議会総会をスタートに、九日から十七日にかけて、創立七十周年記念行事が行なわれた。

○十月九日（日）旧教職員永眠者追悼記念礼拝及び聖書講演会。

○十月十日（月）創立七十周年記念式典（於市公会堂）。会衆三千名によるハレルヤ合唱は、新任のピアス・A・ゲッツ教授の指揮の下に荘重にかつ感激をこめて見事に歌われ、この式典を感銘深いものにした。式典に引続き、記念演劇「青い鳥」（メーテルリンク原作、若月紫蘭訳、石井昌光演出）六幕十場が公演された。十二日まで世界各国語の聖書展示会も開かれた。

○十月十一日（火）体育館落成式挙行・同窓会総会及び講演会・音楽会（カンディフ教授ピアノリサイタル）開催

○十月十二日（水）競技会・東北六県女子高校生英語弁論大会及び音楽会開催。
○十月十三日（木）演劇発表会（「夏の夜話」・「マクベス」）。
○十月十四日（金）中高学芸会開催。
○十月十七日（月）全学院運動会及び総員礼拝。

この他、各種の展示会、バザーなどが行なわれ、記念写真誌も発行され、そして翌年十月には『宮城学院七十年史』の刊行をみている。大学図書館に備えられた英文学書 John Dryden 全集（十八冊）と音楽書 Concord Song Book（三十二冊）は、七十周年記念にハンセン、リンゼイより寄贈を受けたものである。また講堂と音楽教室のためにピアノ三台が北米リフォームド教会より寄贈された。

この年の文化活動をみると、二月に文化学会主催の第一回学術講演会が、また四月にスタンレー・ジョーンズを、十二月に元理事植村環を招いての伝道集会をそれぞれ開催している。また料理講習会（父母教師会主催）・第一回職業指導講習会（厚生課主催）なども開かれた。

また中高生のクラブ活動も盛んであったが特に庭球班・卓球班・かるた班・演劇班の活躍がめざましいものであった。この頃の学生・生徒の在籍状況および卒業生総数は別表のとおりである。

一九五六（昭和三十一）年三月二日、女子短期大学附属幼稚園設置認可がおり、園児募集が行なわれた。シップル保育科長が初代園長となり、アメリカ方式の一年保育を実施した。

また四月一日付で、短期大学に聴講生の課程設置、「保健」の免許状取得のための課程（家政科）が認められた。この年八月、前年より創立七十周年記念事業として計画されていた西山学院長の渡米が実現した。西山は仙台を八月十日に出発し、十二月六日に帰仙したが、在米中は視察の他、本学院に対する援助金要請を働きかけ、のちにこれを成功させている。

學校（科）別	在籍生数					卒業生数	備考
	一年	二年	三年	四年	計		
中學校	二四〇	二四一	二二〇	—	七〇一	一、八九〇	
高等學校	二四一	二四四	二三三	—	七一八	三、四六一	旧制高女卒二、二六二も含む
大短 國文科	二〇七	二〇四	—		二一一	二八一	研究科六も含む
大短 家政科	一一四	一〇七	—		二二一	三四六	研究科一四も含む
大短 保育科	三五	—			三五	—	
大短 計	二五六	二二一	—		四六七	—	
大學 英文学科	九五	八四	三八	三五	二五二	一三七	前期修了五四も含む
大學 音樂科	二六	二一	二〇	一三	八〇	三一	前期修了五も含む
大學 計	一二一	一〇五	五八	四八	三三二	—	
校學門專（旧制）育児科						七二七	
校學門專（旧制）國語科						一八四	
校學門專（旧制）外國語科						三五七	旧女學校専攻部・旧制高女専攻科分をも含む
校學門專（旧制）音樂科						二一一	
校學門專（旧制）聖書科						一〇四	
幼稚園教員養成所						三七	



島　事務長

この年の中高生クラブ活動を見ると、体育部においては、かるた・卓球・フェンシング・硬式庭球班・陸上競技班等が、頻繁に東北及び全国大会に出場し、特に日本一の栄冠を勝ち得たかるた班の活躍は素晴らしいものであった。また、文化部では、語学班が市内・県内の弁論大会に数回選手を派遣して、その都度優勝の記録を作っている。

翌年四月、島　末三が事務長に就任した。同八月、仙台市復興土地区画整理による東二番丁道路拡張計画により、第二校舎西半分の解体工事が始まった。この都市計画による校地削減は三百四十四坪であった。九月より、第二校舎改新築工事が始まり、家政科実験室と音楽科教室が翌年三月に完成している。さらに、今後五ヵ年の建築計画が検討され、その結果、家政科の充実を目指した家政科本館の建設・図書館書庫の建設・幼稚園から大学までの一貫教育を実現するための小学校併設などが立案されたが、このうち小学校の併設は実現しなかった。一方、戦後復興のために海外より受けた財政援助はかなりの額にのぼっているが、米国ミッションボードの財政状態悪化により援助金は以後減額の傾向を示しはじめた。

学生・生徒の自治活動についてみると着実な歩みのもとに安定した年といえよう。中でも高校フェンシング・硬式庭球班の東北大会並びに国民体育大会出場は後輩にも大きな好影響を与えたし、またこの頃の宗教部（中学つぼみ会・高校ＹＷＣＡ）および大学ＹＷＣＡの活躍は『キリストの精神によって結ばれた団体として、信仰、友情を深め、世界平和のためにつくす』という目標のもとに、多数の会員に支えられ、よき成果を挙げていた。

一九五八（昭和三十三）年三月、大講堂の既存の長椅子が取払われて個席となり、さらにステージの幕も校章色のビロードに代わった。

四月、中・高・大学で教鞭をとり、理事・評議員として本学院のため十年近く尽力したガートルード・Ｂ・ホー

イの送別会が行なわれた。ミス・ホーイは、本学創立者の一人であるW・E・ホーイと、初代校長プールボーの良き助け手であったM・B・オールトとの間に生まれ、日本宣教のために献身したが、本学院から香港のミッションスクールへの赴任は、この両親の伝道活動への情熱をさらに継いだものといえよう。

五月、父母教師会の大学部門が「大学後援会」となって独立し初代会長に一力次郎前理事長が選出された。

六月、第二校舎改築落成、一部四階で地階つき（延五三〇坪）、主として音楽・家政両科が使用した。

この年の中・高関係の歩みは西山学院長の次の言葉に代表されよう。

「来年（一九五九年）は、キリスト教における新教が日本に伝えられてから百年になるという、一つの劃期的な年にあたります。このような記念すべき時に、新らたに三十一名の者が入信の決意をして、去るクリスマスに洗礼を受け、又、数十名の生徒が求道の志をたてたということは、クリスチャンスクールである宮城学院にとって、何よりの大きな喜びであり、私共の感激であります。これは、秋に、中高生の為に校内特別伝道集会が催され、東京大森めぐみ教会の岩村信二牧師の熱心な奨励があって、ここにはたらき給うた神の導きの、直接のあらわれではありますが、私はこの蔭にある多くの祈りや、信仰の道に心をむける多くの魂を思わないではいられません。

本校の特色の一つとして、英語の学力のレベルの高いことがあげられていますが、その成果はいろいろの面にあらわれております。AFS国際奨学金による留学生に、あるいは、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン社主催「世界高校生徒代表者討論会」（於ニューヨーク）の日本代表者に、そして北日本・東北六県英語弁論大会出場者が入賞するなどの活躍がみられました。

今年は台風二十二号の被害が意外に大きく、その様子を知った自治会の皆さん方が、自発的に救援物資を送ったことも心温まることでありますが、これに対して文化の日に知事から感謝状が送られたりしました。……（略）……」

（『橄欖』八号「一年の歩み」より抜粋）

プロテスタント日本宣教百年

翌年一月に女子大学家政学科が設置認可を受け、また四月には高校新校舎建築が開始されている。

一九五九（昭和三十四）年が意義ある年であることの一つは、右にふれられているように、プロテスタント宣教百年記念を迎えたということである。学内ではプロテスタント・デー特別礼拝が守られ、教会及びその他のキリスト教関係団体が主催した記念行事に、本学院ＹＷＣＡが積極的に参加している。

また記念すべきもう一つのできごとは、仙台で催された「私立学校法」制定十周年の記念式典及び私学祭（音楽会・体育会など）に参加したことである。ここでも、中高生が大いに活躍して関係者を驚かせた。

この意義深い二つの行事を通して、学生・生徒及び教職員は、四方から患難を受けても窮することなく伝統と使命を守り続けて来た宮城学院の建学の精神を、改めて確認する機会が与えられたのである。

十月二十九日、一見前理事長が逝去した。一見清は教師として、また第七代校長クリーテ帰米の後、校長事務取扱として長く本学院に貢献し、財団法人の初代理事長もつとめた。一見の後を継ぎ、宮城女学校第八代校長に就任した西山貞は、一九四九（昭和二十四）年からは宮城学院初代学院長として、さらに財団法人理事長として、戦中戦後の最も困難な時期に力を尽し、本学院の発展を導いたのであった。西山は翌年三月をもって十九年間の在任にピリオドを打ち、後任に小田信士弘前学院長が迎えられることとなる。

第九章　惟（ただ）エホバの旨（むね）のみ

人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ。

（箴言　第十九章二十一節）

拡充と「改革」

小田信士学院長

一九六〇（昭和三十五）年は、一月早々の、高等学校新校舎（第一期工事）の献堂式から始まった。鉄筋コンクリート四階建て、延べ三百五十一坪（約千百六十平方米）のこの校舎は、一九五七（昭和三十二）年頃から議がおこって、すでに実行に移されつつあった、本学院施設拡充五ヶ年計画の重要な一環であり、西山貞学院長のいわば置き土産となった建物である。なお、第二期工事は翌年五月に終了し、高校新校舎（全八百十坪）が完成を見るに至っている。

西山貞は、同年三月末日、定められた期が満ちて、学院長（及び、兼務の大学・短期大学長、高等学校・中学校長）を辞任し、同時に本学院を退職した。西山は、前述の通り、太平洋戦争の始まる一九四一（昭和十六）年の七月、初の日本人校長（のち学院長）として来任したが、以後十九年間、歴代校長の誰にもまさって長く在職し、その深い信仰と豊かな教養、教育的情熱と経営的手腕等々の充分な発現に加えて、挙措すこぶる温雅、人を容れること寛大、図るところ緻密、決するにあたって果断、よく教職員・学生生徒を統べ率い、父兄らの厚い信頼も得て、戦中・戦後における本校未曾有の苦難期を見事に乗り切り、宮城学院の今日あるを可能にしたのであった。学校は、新たに「名誉学院長」の制度を作り、西山を推してその第一号とした。

四月一日、第二代学院長（第九代校長）に、弘前学院名誉院長小田信士（おだのぶし）が就任した。新学院長は、山形県鶴岡の出身で、時に五十九歳、一九三〇（昭和五）年九州帝大法文学部（経済学専攻）を卒業して、直ちに青山学院専門部教授に任ぜられ、その後、戦時下の学校統合などで明治学院専門学校の教授となった。第二次大戦

後は、弘前学院院長として女子教育に専念すること十四年に及び、この間、弘前大学講師、青森県労働委員会委員などもつとめた。青年時代からの熱心な教会人として、長く伝道と教育にかかわってきた小田学院長は、六月七日行なわれた就任式で、「(みずからが)神によってあえて選ばれたことを信じて、この学園の中に神の栄光が一層高くあらわれるために最善をつくし、また宮城学院の輝く純潔なピューリタンの伝統を守るとともに、特に①キリスト教教育の徹底、②学問精神の高揚、③教職員の生活の安定等に努力する。」との決意を鮮明に披瀝した。

新学院長を迎えた頃の、教職員および学生・生徒・園児の在籍数は上の通りであった(同年四月一日現在)。

また、年度初めにおける、法人および学校の役員は次のようなメンバー構成であった。

理事長　矢野貫城

理　事　小田信士(学院長・常務理事)、村上兵助(常務理事・財務理事)、大石栄一(常務理事)、平山信子、遠藤浩三、

教員数

(外国人教師を含む)

大學・短大	45名
同上副手	9名
高等學校	20名
中學校	24名
短大付属幼稚園	2名
(小計)	100名

事務職員

書記	22名
司書	8名
労務員	8名
その他(舎監等)	7名
(小計)	45名
計	145名

学生

大学

英文學科	237名
音樂科	103名
家政學科	89名
(小計)	429名

短期大學

家政科	282名
國文科	196名
保育科	73名
	551名

生徒

高等學校	843名
中學校	778名
幼稚園児	52名
計	2,653名

マーガレット・S・アンケニー、丸山敏子、高橋とき、秋保孝蔵、マーガレット・A・ガーナー、島　末三（史也）、森下金二郎。

監　事　佐藤利吉、伊藤うん。

（評議員名は省略）

大学・短期大学学長、高等学校長、中学校長　小田信士、大学・短大教務部長　阪田勝三、同学生部長　石井昌光、英文学科長　遠藤浩三、音楽科長　伊藤久子、家政学科・家政科長　中島下枝、一般教育科長兼宗教主任谷口隆之助、国文科長兼図書館長　菊沢季生、保育科長兼幼稚園長　エドナ・M・シップル、大学・短大体育主任　椿　多摩。

高等学校主事　島　末三、教務主任　本多　繁。

中学校主事　森下金二郎、教務主任　渡邉弘道。

事務長（兼営繕課長）菅野章夫。

庶務・会計課長　高橋源次郎、教務係主任　富沢政一、庶務・営繕係主任　斉藤　実、会計係主任　佐藤かつ、ヘルスセンター主任　古谷辰三（嘱託）、図書館係主任　太斎はる子。

翌一九六一（昭和三十六）年は、本学院の創立七十五周年にあたるので、同年十月六日から十三日までの期間を中心に、次のような記念行事が盛大に営まれた。

○記念礼拝　説教「キリスト教の人生観」（東京神学大学学長　桑田秀延）

○記念講演会　「科学技術と人間形成」（東京大学総長　茅　誠司）
○記念式典　（高等学校新校舎献堂式を兼ね）

右の記念礼拝では、「七十周年」以後の永眠旧教職員十一名を覚える行事も併催され、また記念式典の際には、永年勤続（十五年以上）者、左記十九名の表彰も行なわれた。

佐藤かつ（三十七年九ヶ月）、斎藤てる（三十五年十ヶ月）、菊沢季生（三十五年四ヶ月）、伊藤久子（二十五年）、†遠藤浩三（二十三年）、島†末三（十九年五ヶ月）、石井昌光（同上）、森下金二郎・南條和子（以上十八年五ヶ月）、†村上みや（十六年六ヶ月）、林†斌（同上五ヶ月）、鈴†木房太郎（同上二ヶ月）、高†橋源次郎（十五年十ヶ月）、斎藤　実（同上七ヶ月）、土橋コウ・阪田勝三・加藤　孝・庄司知子（以上十五年五ヶ月）、今野恒四郎（十五年）。

右のうち七名の者が、その後、天に召されている（†印）が、他は、一九八六年三月までに全員が退職したものの、それぞれなお健在で、今も本学院のために祈り且つ直接間接に尽力している。

○そのほかの記念行事としては、大学で音楽科教員および学生によるリサイタル、「リンゼイ杯」英語スピーチコンテスト（東北各県女子高校生参加）、ＹＷＣＡ講演会（高木幹太牧師「神と人間について」）、グリークラブ演奏会、また中学校・高等学校では、学芸会（合唱、演劇、英語劇など）、展示会、体育大会（短大付属幼稚園児も参加）等々があり、それぞれ盛会であった。

この記念の年にあたり、学校は同窓会の協力を得て、Ｋ・Ｉ・ハンセン、Ｌ・Ａ・リンゼイ両名誉教授を招いた。（元校長Ｃ・Ｄ・クリーテ博士夫妻にも聘辞を送ったが、ともに病篤く、来日できなかった。）


記念行事での両先生

十年前に定年退職し、帰米してカンザス州ローガン市に住んでいたミス・ハンセンとミス・リンゼイは、知人のミセス・シャフナーに付添われて八月に来朝してのち、三ヶ月近く滞日、諸記念行事のほとんど全部に列したほか、学校・同窓会共催の歓迎晩餐会、同窓会総会等にも出席した。また、日光および関西方面を旅し、その寄贈になる軽井沢山荘を訪れ、さらに、皇后への拝謁のため皇居に赴くなど、共に八十歳を越える身ながら、すこぶる元気に全日程をこなした。この間、各地で、かつての教え子たちと感激の再会を果たし、多くの知人たちとの旧き交わりを一層温めたことはいうまでもない。なお、両教授は、帰米に際し、学生たちの勉学の資にと、一、〇〇〇ドルを本学院に寄付した。これは、のちに「ハンセン・リンゼイ文庫」となって、大学図書館の書庫に、重要な一隅を形成していくこととなる。

三つの方針とその具体化

さて、これら創立七十五周年を祝う諸行事と相前後して、小田学院長が就任に際して述べた前記諸方針――とりわけ「キリスト教教育の徹底」、「学問精神の高揚」、「教職員の生活の安定」の三つは、次のようなかたちで、徐々に実行されはじめた。

① 学院長着任の年の八月末、本学院最初の「教職員修養会」が開かれた。福島県穴原の旅館を会場としたこの催しには、一〇六名もの専任教職員が参加したが、関西学院神学部の松木治三郎教授を講師に招き、二泊三日の日程で、キリスト教教育のあるべき姿に関し、共に学び、語り、睦みあったことは、まことに有益であった。全学院規模の教職員修養会は、このあと行なわれなかったが、小田学院長の意とした所は、別の形で徐々に実現していった。

一九六二（昭和三十七）年春、新たに、本学院宗教総主事（兼大学教授）として、遠くアメリカから、菊地賢治


菊地賢治師とよし夫人

牧師を迎えた。同師は、宮城県亘理の出身で、東北学院神学部を卒業し、仙台東二番丁教会（押川と吉田が興した仙台教会、現仙台東一番丁教会）の副牧師をつとめたのち、本学院出身のよし夫人と共にアメリカに渡って、プリンストン神学大学等での学びを終え、主としてロサンゼルス、サンディエゴなどの日本人教会で長らく奉仕していたが、招かれて本学院のために、二年間働くこととなったのである。菊地師は、すでにかなりの高齢であったにも拘らず、その後、一九六九年春からほぼ半年間再来日して奉仕した時期も含め、進んで学生・生徒たちと交わり、その職責を果たしたのであった。

加えて同年、教育宣教師アレン・アーウィン博士がマリー夫人ともども着任、大学英文学科に籍を置いて、英語学と聖書を講ずることになった。マリー夫人は英文タイプを指導した。

これらすぐれた伝道者たちは、さまざまな困難の中でも、温和な人柄を以て、熱心にうむことなく托せられた任務遂行に努力したのであった。

大学・短大教授会の発議によって、一九六六（昭和四十一）年頃から計画が進行していた「パイプ・オルガン」設置のための諸手続と作業が、曲折の四年を経て完了し、一九七〇（昭和四十五）年十月、大講堂のハモンド・オルガンに代って、西ドイツはハノーヴァーのエミール・ハンマー社建造にかかる、左記仕様の壮麗なパイプ・オルガンが奉献された。価格は本体約一、五〇〇万円、付帯経費をあわせて二、八〇〇万円余であった。その完成記念演奏会は、同十一月、西ドイツから、ウェストファーレン教会音楽学校教授・ヘァフォルド大聖堂オルガニスト、A・シェーンシュテットを迎えて行なわれたが、大講堂は超満員の盛況で、仙台では数少ないこの〝楽器の女王〟と遠来の名演奏家に接し得るという魅力に加え、本学院の文化活動に対する市民の期待がやはり大きいことを感じさせ

新パイプオルガン仕様

ハウプトウエルク C-g‴（第一鍵盤）

1. Quintade 16′
2. Principal 8′ プロスペクト
3. Koppelflöte 8′
4. Viola di Gamba 8′
5. Oktave 4′
6. Gedacktflöte 4′
7. Quinte 2 2/3′
8. Flachflöte 2′
9. Mixtur 4-6列 11/3′
10. Trompete 8′

ブルーストポジティフ C-g‴（第二鍵盤，スウェル）

11. Gedackt 8′
12. Principal 4′
13. Rohrflöte 4′
14. Waldflöte 2′
15. Terz 1 3/5′
16. Quinte 1 1/3′
17. Oberton2列 1 1/7′ +8/9′
18. Scharff 3-4列1/2′
19. Holzdulcian 16′
20. Krummhorn-Schalmey 8′

20a Tremulant

ペダル C—f′

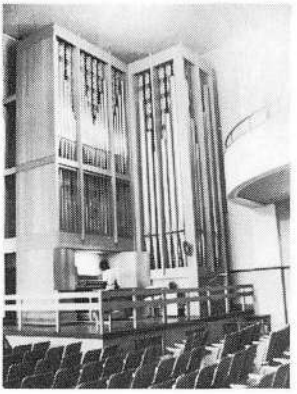
21. Principal 16′ プロスペクト（ツインク）
22. SubbaB 16′
23. Oktave 8′
24. Gedackt 8′
25. Choralbass 4′
26. Nachthorn 2′列
27. Mixtur 5列 2 2/3′
28. Posaune 16′
29. Trompete 8′
30. Klarine 4′

アクション：トラッカーアクション
チェスト：スライディング チェスト
カプラー：II/I, I/Ped., II/Ped.
自由コンビネーション 10組
高さ 7.20 m, 巾 4.50 m, 奥行 1.30 m
総重量：約 7,500 kg
最大パイプ：長さ 5.20 m, 口径 24.5 cm
最小パイプ：長さ 5 mm, 口径 2 mm
総パイプ数：1,954 本
建造：西独ハノーヴァー市アルヌム，エミール・ハンマーオルガン建造商会
ディスポジション：クリスチァン・アイクホーフ，松原 茂
メンズール：クラウス・クノート
プロスペクト：ディーター・オーバーバッヒャー
ケース建造（ナラ材使用）：日本楽器製造株式会社
組立と整音：ディーター・オーバーバッヒャー，ウォルフガング・シュテッカー，辻 宏

た一夕であった。

大講堂は、全学院共用の礼拝堂でもあったから、ここで毎日守られる礼拝の雰囲気は、新オルガンによって一段と厳粛さを増し、和する讃美の歌声もさらに高く、発せられるメッセージもまた愈々深まっていったことはいうまでもない。奏楽担当者の訓練も急速に進んだ。

この頃、世はあたかも、全国的規模の「大学紛争」、あるいは高校をもまきこんだ「学園闘争」時代に入っており、本学院にもその波はかなり強く押し寄せていたばかりでなく、後述のように、大学、中高ともにそれぞれ内部の諸問題克服のために、多事すこぶる輻輳、かかわった者はほとんどみな、精神的にも一種浮動の状態にあったが、大講堂にどっしりと据えつけられた新オルガンのパイプ群から流れる崇高な調べと荘重な音色は、本学院が絶えずめざして進むべき、一つの変らざる目標、すなわちイエス・キリストの姿を、よりはっきりと示すかのようであったし、事実、それは礼拝ごとに主のことばを載せ続け、いわば前進を望むがゆえに苦悩する人々の心に励ましを与えていたのであった。


新パイプオルガン

大講堂で、長年礼拝で使用されてきたハモンド・オルガンは、まもなく新築された第一校舎（後記参照）五階の、広い「第七講義室」に移されて、礼拝その他の集会や諸行事等に引続き奉仕したが、それまで第二校舎二階の小講堂（小型パイプ・オルガン備付）で行なわれていた毎月の全学院「教職員礼拝」も、この頃から第七講義室で催されるようになった。かつて教職員礼拝は、毎週月曜日の朝八時から十分乃至十五分という短い時間で守られていたが、その後月に一回、前記小講堂で、次に第七講義室で、さらにキャンパス移転までは大講堂で行なわれるようになった。これは、教職員数の急速な増加により会場が狭隘となったためでもあるが、大パイプオルガンの奏楽に乗って礼拝を守りたいという気持も大きく作用していた。中学生と高校生は、毎朝八時二十分から大講堂での礼拝と各

教室での放送による礼拝とを各二十分間交互に行なっており、大学・短大生は、八時二十分始業、第二校時のあと、十時十分からの二十五分間をチャペルアワーとして大講堂ですごしていた。

この頃の、学生・生徒主体の宗教活動は、前の時期に引続き、すこぶるさかんで、中学校の「つぼみ会」、高等学校、大学・短大の各YWCAが多くの会員を集め「夏期修養会」のほか、日常の研究・奉仕活動、災害地救援などを通して、本学院建学の精神を学び、実践し、かつ内外に伝えた。

② 一九五一（昭和二十六）年以来、すでに号を重ねること三十に近い、大学文化学会の『研究論文集』に加えて、一九六五（昭和四十）年度には、中学校・高等学校専任教員の『研究紀要』が発刊された。第一号のあとがきや発表内規によると、その目的は「教員相互の協力により、専攻の学問や各教科の研究を助成し、その発表の便宜をはかるところにあり」、「一 教員の専攻の学問の研究、二 基督教主義学校発展に資すると考えられる諸研究、三 教授上の教科教材についての研究、四 其の他、諸文献に関する紹介・書評等」を内容とするもので、発表応募者の内、委員会の「審査に合格した研究については、所定の研究費前渡金を支給する」ことになっている。一九六六年二月十五日刊行の第一号には、本多繁（「東華学校について」）、阿部富士雄（「宗教改革以後の〈世俗のつとめ〉について」）はじめ、加藤孝、小倉英男、及川武良夫、斎藤昭、阿部邦雄、桜庭正堂、大曽根良衛の各教諭が寄稿した。以後これは、年一回ずつ発行されて、かなり高度の研究成果が公表されていった。

また、本学院創立八十周年にあたるこの年、大学の付属機関として「キリスト教文化研究所」および「生活科学研究所」が設立され、それぞれの『年報』を発行しはじめた。両研究所の規約をそれぞれ左に掲げる。

宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所規約

第一条 目的 本研究所はキリスト教文化に関する学術的研究を目的とし、わが国におけるキリスト教主義教育の発展並びに文化の進歩に貢

献しようとするものである。

第二条　組　織

研究員はキリスト教文化に関する研究に従事する者で所長の委嘱により次に示す各部門に所属し、所の活動に協力するものとする。

(一)　キリスト教思想部門　(二)　キリスト教文学部門
(三)　キリスト教芸術部門　(四)　キリスト教文化史部門

第三条　構　成

本研究所の構成は所長（1）、研究員（若干）、副手（1）からなるものとする。所長・主任・研究員に関しては別に規定を定める。

第四条　活　動

(一)　キリスト教文化講座　(二)　研究発表会
(三)　研究年報の出版　(四)　海外留学出張

第五条　運　営

本研究所の運営は学長・教務部長・所長および主任からなる運営委員会がこれにあたる。

第六条　研究員の委嘱に関する規定

1　運営委員会はキリスト教文化に関する研究題目を毎年四月学内に公募し、部門別にそれを選衡して研究員を委嘱する。選衡に当っては臨時委員を加えることができる。

2　研究員は右研究にたいして研究費の交付を受け、月例会その他の活動に参加し成果を研究年報に発表するものとする。

3　研究員の任期は原則的に一年とする。但し、研究継続の必要性を認めるものに限り延長することもある。

第七条　研究所役員に関する規定

1　所長および主任は学長の任命によるものとする。

2　所長および主任は運営委員会に属し、研究所の運営にあたる。

3　所長は委員会を代表して研究員を委嘱する。

4　主任は所長を補佐し、所務にあたる。

5　所長および主任の任期は二年とする。

宮城学院女子大学附属生活科学研究所規約

第一条　目　的

本研究所は生活科学に関する学術的研究を目的とし、衣食住にわたる生活の合理化と生活科学の進歩に貢献しようとするものである。

第二条　組　織

本研究所には次の各専門部門を置く。

(一)　家庭科学部門　(二)　衣生活部門　(三)　食生活部門　(四)　住生活部門

第三条　構　成

本研究所は所長、主任各一名の他、研究員若干名および副手一名からなるものとする。

(1)　所長および主任は学長の任命とする。

(2)　所長は運営委員会を代表して研究員を委嘱し、主任は所長

を補佐して実務にあたる。

(3) 研究員は生活科学に関する研究題目（研究所が研究題目を提示する場合もある）で応募し運営委員会がこれを専攻し、各専門部門のいずれかに所属するものとする。

(4) 研究員は研究費の交付を受け、月例会その他の活動に参加し、その成果を会報または関連学会誌に発表するものとする。

(5) 研究員の任期は一年とする。

(6) 所長および主任は任期を二年とし、研究員を兼ねることができる。

第四条 運 営

本研究所の運営は学長、財務部長、所長および主任からなる運営委員会がこれにあたる。

第五条 活 動

本研究所の活動内容は次の通りとする。

(一) 生活科学講座 (二) 研究発表会（月例会）

(三) 会報の出版 (四) 外国留学出張研究

この両研究所の設置は、本学院の歴史において画期的なことであったばかりでなく、単一学部組織で、しかも大学・短大あわせて専任教員数が六十名に充たず、同じく学生数も二千人前後という、本学のようないわば小規模校で、この種の研究施設を二つも持ったことは、国公私立を通じて日本の大学でも珍しく、本学ならではの、その設立目的、重厚・斬新な研究成果および活発な対内外文化活動と共に、以後、全国ことに東北地方の他大学に大きな好影響を与えていったのである。

一方、慎重な準備を経て申請していた、大学「日本文学科」と短期大学「教養科」の増設が、一九六四（昭和三十九）年一月早々認可され、ともに四月からスタートした。

すぐれた伝統を誇る短大国文科の教授内容を受け継ぎ、特にそのうち、近代文学・比較文学等の部門をさらに強化して、名称にもその趣意をあらわし、四年制に昇格させた「日本文学科」、および、新時代の女性にふさわしい真の「教養」を身につけるアカデミックな場として設けられ、「文学コース」と「生活文化コース」とから構成される「教養科」、そのいずれも、全国的に見て極めてユニークかつ先進的な学科づくりをめざしたもので、初代日本文学科長・石井昌光教授、同教養科長・森下金二郎教授以下、豊かな教師陣が内外から集められたことと相まって、広

く学界・教育界、さらには実業界からも注目された。なお「教養科」については四年制の「教養学科」も構想されたが、現存学芸学部のほかに「教養学部」の設立が必要ということで、これは見送られた。

こうして、現在の学科組織すべてが整ったのであるが、この両科からはまもなく、それぞれ『日本文学ノート』（「日本文学会」機関誌）、『教養実習ノート』が発刊され、年一回ながら教師・学生の研究・調査成果を学内外に披露していった。また、『家政学ノート』（家政学・家政両科のメンバーが構成する「家政学会」の機関誌）および『英文学会誌』も、それぞれ一九六九（昭和四十四）年、一九七二（同四十七）年から刊行されて、これらに伍し、すでに設けられていた「音楽学会」、「保育学会」も、他の学会同様、講演会・研究発表会あるいは演奏会などを活発に催した。

教職課程の設置はすでに大正年間から徐々に認可されてきていたが、新設の日本文学科と教養科にもこれが直ちに認められ、課程を修めた学生には中学校一級「国語」、高等学校二級「国語」・「書道」（日本文学科）、中学校二級「国語」（教養科文学コース）の各免許状が与えられることになった。

これに先立ち、あるいは平行して、家政学科が栄養士養成施設として（一九六一年）、また保育科は保母養成施設として（一九六三年）認可され、さらに英文学科および日本文学科に司書課程が置かれて（一九六五年）、本学は、学生の卒業に際し、さらに多くの有利な資格を授与し得ることとなった。

なお、司書の養成については、その前年の夏から、文部省委嘱による「司書・司書補資格取得講習会」が、本学を会場として開かれることになった。これは、東北・北海道地方では二つの大学だけに委嘱された行事で、第一回は、七月十一日から八月三十一日まで、計百四十六名の、すこぶる熱心な受講者を得て催され、本学の鈴木房太郎教授、大給尹（ただし）助教授はじめ内外の講師陣がこれに携わった。

この講習会は、以後毎年、盛夏の五十日間行なわれ、キャンパス移転の前年まで続いた。

かくて、わが国が、経済のいわゆる高度成長期に入った一九六〇年代に、本学院には、むしろ文運大いにみなぎり、教育・研究面で内容的・制度的な一大進展が録されたのであった。

また学生・生徒らも学業や課外活動面で数々の好成績を挙げた。特に全国レベルの各種コンクール、競技会での入賞、表彰などで学校の名を各方面にとどろかせ（中高では、英語・作文・合唱・かるた・フェンシングなど、大学ではグリークラブ・演劇部・児童文化部・ＥＳＳ・新聞部・庭球部等）、あるいは、高等学校が県下一、二の進学率を誇って、いわゆる一流国公私立大学に沢山の卒業生を送り、また、大学・短大も高校とともに極めて高度・良質の就職状況を示すなどして、さらに多くの入学志願者を集めていった。

③　小田学院長の来任直前、「宮城学院教職員協議会」が結成され、教職員の各パート代表がその待遇のあり方などについて、学校当局側と話しあう場がすでに出来ていたが、まもなく、一九六四（昭和三十九）年春以降、大学、中高に「組合」も誕生し、相互の交渉がより頻繁に行なわれるようになって、〝公務員に準ずる線〟にまで徐々に改訂されつつあった、教職員給与をさらに向上したいとの要望が教職員の間にかなり強まっていた。これにこたえて、同年秋以降の理事会は、教職員の給与を、いわゆる人事院勧告による公務員俸給表にならって改訂することの可否を検討しはじめた。そして、慎重な審議をくり返した結果、給与を右の線で改訂することとし、次年度から実施にふみ切ることをもあわせ決定したのである。すなわち、従来、一本の給与体系であったものを三本建てとし、助手・副手を含む大学・短大教員に国家公務員、中学校・高校教員および事務職員には地方公務員（宮城県）の俸給表を、それぞれ適用することとなったのであるが、これは、本学院にとってまことに大きな決断であった。

なお、右記「教職員協議会」が母胎となって、「宮城学院女子大学・短期大学教員組合」、「宮城学院中学校・高等学校教職員組合」およびやや遅れて「宮城学院事務関係職員組合」が順に結成されていき、法の保障のもとで、給与や勤務条件等に関し、理事会と交渉し得る三つの団体が、学院内に続いて誕生したのも画期的なことであった。

なお、三組合とも、いわゆるオープン・ショップながら、法規の許す範囲で加入し得る者全員によって構成されていた。

施設の大拡充

さて、小田学院長が就任以来その実現を期して、心をくだいてきた、右の三つの事柄は、教職員らの真摯な努力とも相まって、以上のようにそれぞれかなり具体化し、中には予想以上に大きな展開を見せたものもあるが、これらと平行しつつ極めて積極的に進められたのは、何といっても、施設の拡充と、いわゆる制度改革とであった。

西山学院長時代に策定された、「宮城学院施設拡充五ヶ年計画」を拡充するかたちで「十ヶ年計画」が立てられ、一九六二（昭和三十七）年、実行に向って動き出した。その内容は次の通りである。

1　高等学校校舎建築（前述）　八百十坪

2　大学新館の建設（地上五階、地下一階）延一、五四八坪
家政学科・家政科の栄養実験室、被服管理室、和洋裁室、大小講義室、研究室、体育室、会議室などで、管理栄養士関係のコース拡充や、日本文学科の増設にともなうものであった。

3　中高総合校舎（地上四階、地下一階）延一、二七五・四坪
普通教室のほか各種特別教室と準備室、屋上に天体観測ドーム。完工と共に東三番丁の木造二階モルタル校舎を使用していた中学校がこの校舎に移り、そのあとは、大学および中高の自治会・学友会クラブ室等にあてられたが、一部はアメリカン・スクールに貸与され、また後記寄宿舎工事中の仮寮としても使用された。なお、新校舎屋上には、のちに二つの音楽教室が付設された。

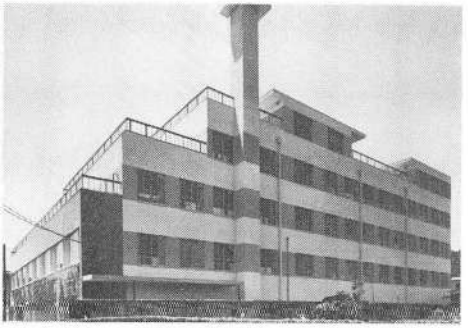
4　校地の拡張（仙台市郡山新々田、宮城町愛子、同落合、泉町の四ヶ所）計約三万五千五百坪

学園の将来の発展に備えて、仙台市の周辺部に土地を求め、特に愛子（あやし）にはグラウンドを、また落合地区には教職員のための住宅地を、それぞれ造成する計画が進められた。

5　愛子スクール・ハウス建設と体育施設造成

仙台西部の右記愛子地区に取得した一万四千二百坪の土地に、広大なグラウンド（トラック・フィールド）と体育館、テニス・バレー・バスケットコートなど体育関係の施設を作り、かつ学生・生徒の宗教活動、クラブ活動等のための合宿施設（百二十名収容）として「スクール・ハウス」を二棟建設した。（内一棟は、宣教師社団からの寄贈にかかるもので、ゲストハウスとして使用する。）

6　学生寮・生徒寮建築



米ヶ袋大学寮

大学・短大では学科やコースの増設、定員増などから、また中学校・高校では、いわゆる「ベビーブーム」への対応から、そしてそれぞれ遠隔地からの入学志願者がますます増えて来たことをふまえて、新寮を建設することになった。大学のほうは、米ヶ袋の木造学生寮を一部とりこわして、鉄筋コンクリート地上五階、地下一階、延六五六坪の近代的ビルを建て、洋室七十余（収容定員百八十名余）のほか、食堂・ホール・給湯施設などを持つ寮とした。なお土樋寮はそのまま存置した。中高寮は、しばらく米ヶ袋の木造の寮や借家（市内小松島　千石宅）にも入っていたが、やがて一九六八（昭和四十三）年、「十ヶ年計画」の最後を飾って建てられた地下一階（ボイラー室など）・地上五階のビル（一階　幼稚園、二階　保育科、三～五階　中高寮）が北目町に完成し、霊屋下の寮生と

ともに、ここに移った。

7　大学図書館棟建設

戦災後、内部を補修して使用していた「第一校舎」は、老朽度が進んで危険になったこともあって、その由緒を惜しまれつつとりこわされ、地下一階（書庫と学生食堂）、地上五階（図書館、講義室、研究室など）の建物が旧位置に建てられた。

このようにして、キャンパスおよび周辺付属地における、教育施設の取得・拡充はほぼ終ったが、最も古い第二校舎（一九一八年完工）の存置部分と大講堂（一九三七年）を残して戦前の建物はすべて姿を消し、近代的なそれに生れ変ったのを機会に、校地内の建物は次のようなナンバリングで呼ばれることになった。

（学校本部のある「本館」は従来通りとし）、旧第一校舎→「一号館」、旧第二校舎→「二号館」、大学新館→「三号館」、第七校舎（高）「四号館」、中高総合校舎→「五号館」、第六校舎→「六号館」、東三番丁の中高校舎→「七号館」、北目町の中高寮・保育科・幼稚園→「八号館」。

また、愛子のスクールハウス（二棟）は、学生・生徒合宿用のものを「愛子一号館」、ゲストハウスを「愛子二号館」と呼ぶことになった。なお、この地の新体育館およびグラウンド、コートは、ほぼ大学・短大の専用と定められて、学生は体育実技の授業を受けるために、本部キャンパスからスクールバスで通ったが、これには往復約七十分を要した。


愛子体育館

右のような、施設の大拡充については、当然巨額の資金を必要とし、そのほとんどすべてを学生・生徒・園児の父兄はもとより、教職員、同窓生等の協力によって調達しなければならないので、理事会は、今次

計画のスタートにあたって企画委員会を中心に種々資金構想を練り、新たに「協力定期預金制度」を発足させた。これは、当時まだ全国的には珍しい方式で、本学院の場合預金目標額を一億円とし、学生・生徒・教職員らが、学校の指定する銀行（七十七銀行または三井銀行）に一口三万円（以上）の定期預金を積み、一定期間（在学期間）後、元利の支払いを受けるものであるが、学校はこれら預金の見返りとして指定銀行から低利の融資を受け、施設拡充計画を実施し得ることとなった。この制度に対しては、文字通り多くの協力申し出があり、発足後半年ほどで目標額をはるかに越える好調ぶりであった。

かくして父兄や同窓生らの理解と協力に支えられてこの十年足らずの間に、教育・研究施設面で格段の充実発展を遂げ、少くとも東北地方の私学では他に例を見ないほどの大躍進時代を画したのであった。創立以来たえずそうであったように、豊かな内容が小さな器を大きく変えさせ、あるいは大きないれものがなかみをそれにあわせて充実させる、という理想的な力動関係または相互増幅作用が、この頃までは続いていたといえよう。

一九六六（昭和四十一）年十月には『宮城学院八十年小誌』が発行された。写真をふんだんに用いながら、資料をあたりなおした上での簡潔な記述で、神の恩寵と人の努力のあとを回顧させる力作である。

「制度改革」

さて、一九六〇年代の末葉に至って、本学院は、制度面・機構面で、未曾有の大改革を経験した。それは、学校当局乃至理事会からの発議によるのではなく、終始、いわば現場の教職員たちがイニシアティヴを執った、という点でも、本学院史上初めての、あるいは日本の学校教育史にも容易に類例を探し得ぬ出来事であった。

改革は、まず、大学から始まった。教授会内に学長を除くほとんどのメンバーによって結成された「宮城学院女子大学教育問題協議会」は一九六八（昭和四十三）年十一月十五日、次のような「要望書」を理事長・学院長に提出し、前年から作られていた「制度審議会」を中心に「要望書」の具体化に向って精力的に動き出した。理事会も、

まもなく内部に「制度改正審議会」を組織してこれに対応しはじめた。

要　望　書

現在、大学教育が諸方で重大問題に直面し、危機的な様相を呈していることは、大方の深く憂うるところであります。本学においてもすでに見のがすことのできぬ教育崩壊のきざしが見られ、大学当局・教員・学生三者の間に教育の根底たるべき信頼感が失われつつあります。

その由って来るところを考えてゆきますと、学院長であると同時に学長である一人にすべての権限が集中している事実につき当らざるを得ません。すでに、その点で経営と教育の混同が不可避的に生じ、教育の自律性がおかされていることは遺憾ながら認めないわけにはいかないのであります。こうした状況のもとで、果して血の通った責任のある大学教育が行えるのでしょうか。私どもは相互の信頼感が失われたところで、知識の切り売りに甘んじていることにもはやこれ以上堪えられません。私どもは、私どもの愛する宮城学院女子大学のために、一刻も早く信頼感を回復し、キリスト教信仰の基盤に立った、生きた教育の場を確保していきたいと心から願うものであります。そのために、先ず教育に専念する者としての学長を教員全員の主体的な意思によって選び、そのもとで、各自の本分を全うすべく学長公選を議決し、重大かつ厳粛な決意をもってその即時実現を要望する次第であります。

十一月十五日

宮城学院女子大学教育問題協議会（以下署名四十八名分、氏名省略――引用者）

学校法人宮城学院理事長
矢野貫城殿

宮城学院長・宮城学院女子大学長
小田信士殿

この間、十一月二十日には、学生自治会の代表が食堂（学校直営）の食品値上げ問題で学校当局と会見し、話しあいの末、学校側が値上げ案を撤回することとなったが、この際にも、また数年前からの校納金改訂をめぐる度々


阪田　学長

の交渉でも、学校当局と教授会との間に意志の疎通を欠いた、従って学生へのバラバラな対応がしばしば問題を複雑にさせており、教授会内部には、教育と経営を明確に分離させようとする機運が益々高まっていた。そこで、学校運営の最高責任者たる学院長と、教育と研究に責任を持つ教授会の長（＝学長）とは、別々に選出されるべきである、との意見が教授会の大勢を占めて「要望書」が提出される結果となったのである。

理事会は十二月三日、次の二点を骨子とする回答を提示した。

① 明年四月を目途に、学長公選を実施する。

② 大学諸制度・規約の改正については、教授会内の制度審議会に原案作成を依頼する。

こうして、まず大学（短大兼任）の学長公選制が実現し、選挙の結果、英文学科の阪田勝三教授が選ばれた。一九六九（昭和四十四）年四月一日付で就任した新学長は、東北帝大出身で、一九四六（昭和二十一）年以来、本学に勤務し法人理事・評議員のほか教務部長、英文学科長などの要職を経、またキーツに関する評論等で夙に内外学界の重鎮的存在となっていた。

続いて理事会は、寄附行為の大幅な改正を決議し、六月二日、文部省に「学校法人宮城学院寄附行為一部変更申請書」を提出し、九月三日付で認可された。その骨子は、① 従来、学院長が大学・短期大学長、高等学校長、中学校長を兼任していたのを改めて、それぞれ学長と校長（中学・高校で一名）を置き、かつ公選制にしたこと、② 理事会の構成と理事（役員）の選出方法を別表（新旧「寄附行為」）のように改めたことなどであった。

関係条約	旧	新
前文	明治十九年（一八八六年）米国リフォームド教会宣教師ブールボー及びオールト両女史によって創始された宮城女学校は、その後日米両国基督者の信仰による緊密な協力により、女子中等教育と専門教育との両方面に於て、一貫した基督教に基く教育を行い、わが国の文化に寄与すること六十年余の長きに亘った。其の間、本学院独自の真摯敬虔なる校風を培いその感化は多数の卒業生と共に、国内の隅々にまで及んでいる。 今、英文学科、音楽科を有する女子大学、家政科、国文科を有する女子短期大学、高等学校及び中学校の四校を経営する学校法人宮城学院を組織するにあたり、特にこの女子大学が目的使命としている左記の綱領をここに掲げて本学院が今日の発展を見るに至った現在に於ても依然創立以来の基督教精神が一貫した基調となっていることを明らかにしたい。 「本学は基督教に基いて女子に大学教育を施すことを以て目的とする。而して学生	一八八六年（明治十九年）米国リフォームド教会宣教師および日本人の熱誠なるキリスト者によって創設された宮城女学校は、その後日米両国キリスト者の信仰による緊密な協力により女子中等教育と専門教育との両方面において一貫したキリスト教に基ずく教育を行ない、わが国の文化に寄与すること久しきに亘っている。その間本学院独自の真摯敬虔なる校風を培いその感化は、多数の卒業生と共に国内の隅々にまで及んでいる。このように本学院は創設以来常にキリスト教精神を基調として女子教育を行い、国際精神を養い、人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成することを使命している。

に対し基督教的奉仕の精神を鼓吹し、特に北日本に於ける学術文化の向上と、社会及び家庭生活の改善進歩を実現し、且つ国際精神の育成につとめることを以て使命とする。」			
本法人には左の役員を置く。	第五条	第一項	
理事十二名	第六条	第一項	第一号
役員は、新教福音的基督者でなければならない。			
理事は左に掲げる者とする。	第八条	第一項	
学院長			第一号
本法人の経営する大学の学長			第二号
本法人の経営する各学校の教職員のうち、理事会において選出した者一名			第三号
本学院同窓生のうち、同窓会が推挙した倍数の候補者の中から理事会において選任した者二名			第四号
本法人には左の役員を置く。			
理事十五名			
役員は、新教のキリスト者でなければならない。			
理事は左に掲げる者とする。			
学院長一名			
大学長および短期大学長の中から一名、ならびに校長の中から一名			
本法人の経営する各学校の教職員の中から選挙された者三名			
本学院同窓会が同窓生にして年令二十五年以上の者の中から選挙した者二名			

		第五号	評議員のうち、評議員会が推挙した倍数の候補者の中から理事会において選任した者二名	本法人に関係ある教育宣教師の中から互選された者二名
		第六号	エヴァンヂエリカル・エンド・リフォームド教会外国伝道局の宣教師のうち、理事会において選任した者二名	前各号に規定する理事の過半数をもって特に必要と認めて選任した者三名
		第七号	前各号に規定する理事の過半数を以て特に必要と認めて選任した者三名	評議員の中から評議員会が選挙した者二名
第九条	第二項		前項の第一号、第二号、第三号、第五号、第六号に規定する理事が……	前項の第一号、第二号、第三号、第五号、第七号に規定する理事が……
	第一号		理事の互選により理事長一名、常務理事五名（うち一名は学院長とする）を選出する。 常務理事の中一名は財務理事となる。	理事の中一名を理事の互選により理事長とする。
	第二項から第四項まで			第二項以下順次繰りさげ新たに次ぎの第二項を加える。
	第二項			理事の中一名を財務理事とすることができる。

第三項			理事長は、私立学校法に規定する職務を行い、その他この法人の内部の事務を総括する。常務理事は常務理事会を組織し、この法人の平常の業務を処理する。	理事長は、私立学校法に規定する職務を行ない、その他本法人の内部の事務を総括する。	
第四項			理事長に事故があるとき、又は理事長が欠けたときは、理事の互選によって定められた者が理事長の職務を代理し、又は理事長の職務を行う。	（変更なし）	
第五項			理事長以外の理事はすべてこの学校法人の業務についてこの法人を代表しない。	理事長以外の理事はすべて本法人の業務について本法人を代表しない。	
第十二条 第一項			本法人に評議員会を置き、二十五名の評議員をもって組織する。	本法人に評議員会を置き、三十一名の評議員をもって組織する。	
第二項			評議員は、新教の福音的基督者であることを原則とする。	評議員は、新教のキリスト者であることを原則とする。	
第三項			左の事項については理事長において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。	（本項および本項の各号に変更なし）	
第四項		評議員は、左に掲げる者とする。		（変更なし）	
	第一号から第五号まで				第一号以下順次繰りさげ新たに次ぎの第一号を加える。

第十三条			
第三項	第一号		学院長一名、大学長および短期大学長の中から一名、ならびに校長の中から一名
	第二号	本法人の経営する各学校の学長、校長及び園長ならびに教職員の中から、理事会において選任された者五名	本法人の経営する各学校の教職員の中から選挙された者八名
	第三号	本学院同窓会が、互選により選出した者六名（但し、年令二十五才以上の者）	本学院同窓会が同窓生にして年令二十五年以上の者の中から選挙した者八名
	第四号	理事の中から理事の互選によって選出した者七名	本法人に関係ある教育宣教師の中から互選された者三名
	第五号	本法人に関係のある学識経験者で、前各号の評議員の過半数を以て選任した者五名	本法人に関係ある学識経験者で、前各号の評議員の過半数をもって選任した者五名
	第六号	エヴアンヂエリカル・エンド・リフオームド教会外国伝道局を代表する宣教師で、理事会において選任した者二名	理事会が必要と認めて選出した者四名
	第五項	前項第一号、第三号、第五号に規定する評議員が当該各号に掲げる。地位又は職を退いた時は、評議員たることを止めるものとする。	前項第一号、第二号、第四号に規定する評議員が、当該各号に掲げる地位又は職を退いた時は、評議員たることを止めるものとする。
		定期理事会は毎年二月及び五月に開く。	定例理事会は原則として毎月一回開く。

第四項		臨時理事会は理事長若しくは、常務理事会が必要と認めた時、理事四名以上から会議に付議すべき事項を示して、理事の招集を請求された時、又は監事の請求があった時に之を招集する。	臨時理事会は理事長が必要と認めた時、もしくは理事五名以上から会議に付議すべき事項を示して理事の招集を請求された時、又は監事の請求があった時、これを招集する。
第七項		常務理事会は、必要に応じて随時理事長が招集する。	（削除する）
第八項および第九項			（第八項を第七項に、第九項を第八項に改める）
第一四条 第二項		定期評議員会は毎年二月及び五月に開く。臨時評議員会は、理事長或は監事が必要と認めた場合、又は評議員総数の四分の一以上の請求があった場合随時招集する。	定期評議員会は毎年二月及び五月に開く。臨時評議員会は、理事長或は監事が必要と認めた場合、又は評議員総数の三分の一以上の請求があった場合随時招集する。

この新規定によって選出された役員は次の通りであった（就任は九月十二日）。

小田信士（学院長）、阪田勝三（学長）、森下金二郎（大学）、南條和子（中高）、渡邉弘道（事務）、丸山敏子・瀬戸堯子（同窓会）、M・A・ガーナー、W・S・カンディフ（宣教師）、佐藤利吉・茅　誠司・桜井重秀（学識経験者）、岩井淳一・柏山恵智子（評議員会選出）、欠員一名は中高校長。

右のほか、監事として、大石栄一、田中従夫の二氏。

理事長には、矢野貫城理事長任期満了のあとをうけて、佐藤利吉理事が選ばれた。矢野は、かねてからその厚い人望の故を以て、東京女子大学および四国学院の理事長をも兼任していたが、ここ数年は本学院の運営に専念し、前述のような学校の発展に大いに寄与した。同時に任期満了となった村上兵助、平山信子の両理事も、本学院のために戦前から長く尽力してきたことから、学校はこの三氏を名誉理事に任じた。

佐藤新理事長は、地元商工業界では有名な実業家であり、畜産学の分野、特に肉牛飼育の方面で国際的に活躍している研究者でもあるが、少年時代から信仰生活に入り、すこぶる熱心な教会人として、ギデオン協会、教会学校など広くキリスト教教育界で長く奉仕し、矢野前理事長、小田学院長などと心情相通ずるところすでに大きいものがあった。新理事会は、このところ年に春秋二回のみであった定例会議を、毎月一回開くこととしたが、成立後まもなく、進んで大学・短大教授会メンバー、中高教員、事務職員との懇談会を順に催して、意見を交換しあった。

なお、新評議員三十一名も新理事と同時に選ばれて職務に就いた。

公選学長のもとで再出発した大学教授会は、従来の機構を改めて、学務運営上六つの委員会を作り（今までは、教務、学生の二委員会のみ）、それぞれの長は、同時に「大学協議会」を構成して学長を補佐することとなった（別掲）。教授会から選ばれた「五部長・一館長」は次のメンバーで、やはり選挙制による各委員ならびに、（学）科長と共に、任期は二年と定められた。

教務部長―石井昌光教授、学生部長―津田　淳助教授、厚生部長―森下金二郎教授、宗教部長―マーガレットA・ガーナー教授、財政部長―山形孝夫助教授、図書館長―平島正郎教授。（これらのほか、しばらく学長が兼務していた短大付属幼稚園長に、長谷川精一助教授が任命されている。）

教授会は、また、教員人事の扱い方についても、制度を大きく改善した。教員採用人事は従来専任教授会（教授のみで構成）によって行なわれ、それを理事会が承認するといった機構になっていたのを、新しく教授会（教授・

助教授・講師で構成）によって公選された「人事委員会」によって、教員採用人事を取扱いたいというものであった。また、これも専任教授会が従来行なってきた教員の資格審査（昇任昇格を含む）についても、新しく「資格審査委員会」を設置し、そこでより公平な人事をはかろうというものであった。

このように学長・各部科長らの公選、人事委員会・資格審査委員会の設置によって、教授会は、大学における最も重要な教育権・教員採用人事権を漸く獲得することができたのであった。もっとも、こうした教職員の経営への参加や資格審査のやり方などについては、制度審議会の案がすんなりと教授会を通過した訳ではない。深夜にも及ぶ幾度もの検討や論議が重ねられての末の成立で、大学は生みの苦しみを経験したのである。

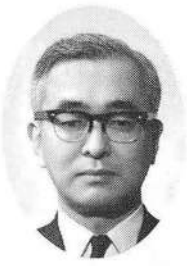
こうした大学の機構改革は、ひとり大学だけの問題に止まらず、それが中高や事務局にも当然波及して行った。そこで大学制度審議会は、中高・事務局との三者協議会を度々設定して、相互に密接な連絡を取った。それはこの年の十月から十二月にかけてのことであったが、苦悩をわかちあう業は以後当分続くのである。

大学の機構改革は、当然、副手や学生にも影響を与えた。すなわち、副手からは、その給与・職能と仕事の分担・位置づけなどの問題が提起され、その都度、人事委員会は副手会との折衝に当った。また、学生たちの要求は、学生も大学の構成員の一つの柱であるから、その運営に学生の参加を認めよという主張であった。教授会は十一月六日全学集会を開いて、これまでの機構改革の経過と主旨を説明し、学生参加の必要性のないことを説得した。

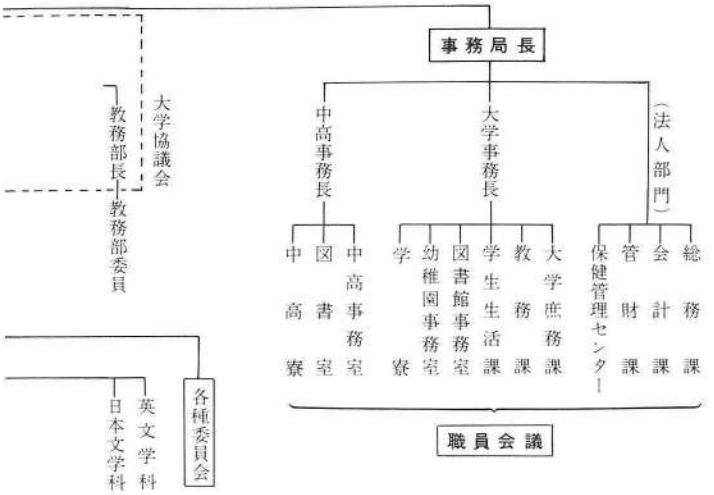
中学校・高等学校でもすでに「組合」結成の頃から、院長―校長分離、および「校



菅野　事務局長



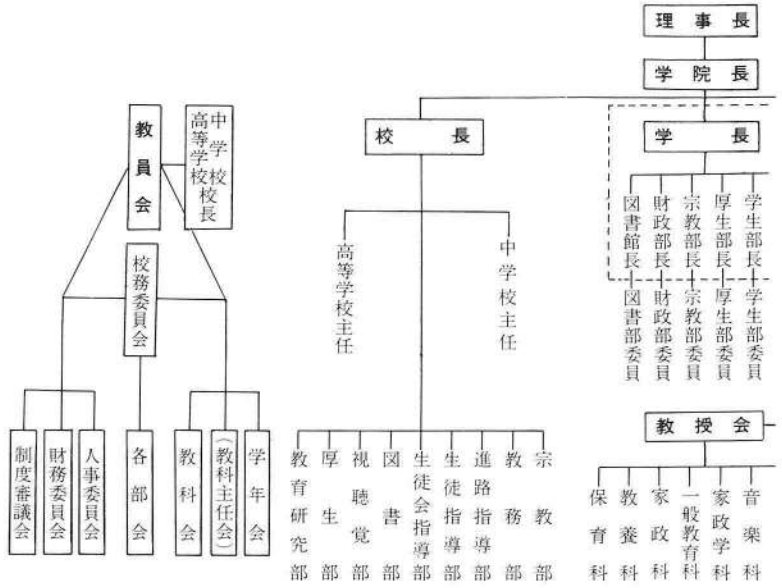
渡邉　事務局長



長公選」を大きな眼目とする「制度改正」への歩みが急ピッチで進んでいたが、新「寄附行為」の規定の最初の適用として翌一九七〇年春、校長選挙が行なわれ、選挙規定に従って立った候補者三名の中から、日本基督教団仙台外記丁教会（現仙台川平教会）牧師大沼隆が選ばれた。大沼牧師は、東京都出身、一九六〇（昭和三十五）年東京神学大学大学院を修了後、直ちに同教会に赴任した。この間、ボストン大学で二年間、牧会心理学を学び、帰国後一九六六年教団正教師となった。

校長は、同七〇年四月一日来任、同五月二十二日その就任式が挙行された。時に三十七歳で牧会開始後十年、教務教師への転身でもあった。

中学・高校は、その後も新校長のもとで、形実ともに「中高一本化」を志向する機構改正への努力を続け、度重なる討議の結果、別図のような仕組みを整えていった。初代の両校「主任」として、阿部富士雄（中）、阿部邦雄（高）両教諭が任ぜられたが、各部主任同様これも選挙によるものであった。教員



人事に関しても教員会議に大幅な権限が与えられた。なお、これら一連の経過については、中高『研究紀要』第四号および第五号に掲載された「宮城学院中学校・高等学校　制度改正のあゆみⅠ」「同Ⅱ」に詳しく報告されている。

一方、事務関係部門でも、大幅な機構改正が行なわれた。すでに小田学院長来任の翌年から、校内各パートの「事務局」への統合（一本化）が始められていた（菅野章夫事務長の「事務局長」任命など）が、一九六九年、中学校主事から転じた渡邉弘道事務局長のもとで、事務職員の意見聴取、校内各部門との話しあい、組合との折衝などをとりまとめた結果として、別掲図のような機構がほぼ定まった。そして、従来のものに手を加え、いくつかの課・室・ポストの新設や呼称変更等も実施されたのであった。「大学事務長」、「大学庶務課」、「中高事務長」、「中高事務室」の新設や、「総務課」（↑庶務課）、「管財課」（↑営繕課）、「学生生活課」（↑学生課）、「保健管理センター」（↑ヘルスセンター）などの新名称がそれであ



石井　学長

る。のちに「法人室」や「業務員室」、「（大学）企画室」なども設けられたが、やがて、月に一回、「事務職員会議」や「課・室長会議」が開かれるようになった。以上のほか、学院長によって「学院協議会」も定期的に召集されていくが、これは、かつての「主事・部長会議」の形をとりながらも議決権は持たず、校内三パートの相互連絡の場としての働きにとどめられた。いわば権力の分散と自主性の尊重をはかった結果である。

右のようにして、本学院全体の制度・機構改革がほぼ一段落したが、その余波は、なおも繰り返し諸所を洗い、旧制度の残滓掃討がさらに求められたり、阪田学長の突然の辞任劇とその事後処理の問題、中高にはいわゆる学力・生活指導問題がおこったりなどして、教職員はこれらへの対処に多大の時間とエネルギーを費さねばならなかった。

しかし、すべては良きに導かれた、といってよいであろう。さきの「施設拡充十ヶ年計画」実施の最後を飾る、一号館・八号館・愛子体育館の献堂式が行なわれたその日（一九六八年十一月十五日）に、大学の教育問題協議会から前記「要望書」が提出されて、「改革」への口火が切られたことは極めて象徴的である。戦後の復興―学制整備期を継いで、教育・研究面の一層の充実と施設の飛躍的拡充が図られ実行されたこの十年間に、教職員は、それらを喜びつつも、本学院の営み全体に主体的に参加する意欲と力とを養わしめられたのである。かくて行なわれた改革は、教育・研究の場に立つ者が、みずからの責任と判断において、職務により良くかかわるための、新たな組織づくりをめざすものであり、まさに、わが建学の精神に沿う業なのであった。

こうした中で、一九七一（昭和四十六）年四月、かねて学長代行をつとめていた石井昌光教授が公選第二代学長に就任した。あたかも、本学院は同年、創立八十五周年を祝い、左記のような記念行事を催して、主から托せられたつとめのさらなる展開を念じたが、同じ頃、理事会は「総合計画委員会」を発足させて、キャンパスの総合移転

を含む将来計画に関し、早くも策定を開始したのであった。校地が狭小となったことを文部省から指摘されたのがきっかけではあったが、学生・生徒数の増加と施設の拡充が進んだことから、より大きな器を求める声は、すでに校内にも挙ってきており、以後、各パートでこの問題が徐々に話しあわれていくのである。約九年後、キャンパス移転が完了するまでのそれらの動きについては、次章以下の諸項が詳しく扱う。

創立八十五周年記念行事

十月十八日(月)
◇記念礼拝及び記念式典(午前十時より)　於　大講堂
「神の作品」　東京神学大学学長　宮本武之助先生
◇祝賀パーティ(午後零時三十分より一時三十分まで)　於　体育館

十月十九日(火)
◇記念講演会(午後一時より)　於　大講堂
「古い皮袋」　パリ大学教授　森　有正氏
「現在における問題点」　元東京大学総長　茅　誠司氏
◇一般公開講演会(午後六時三十分より)　於　大講堂
「現代におけるキリスト教の意味」　パリ大学教授　森　有正氏

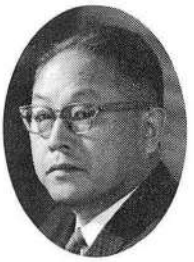
十月二十日(水)
◇音楽会(午後六時三十分より)　大学音楽科　於　大講堂

十月十六日(土)
同窓会記念行事
◇同窓会祝賀パーティ　(午後二時より)　於　セントラルホテル
◇ヨーゼフ・ブロッホ　ピアノリサイタル　(午後六時三十分より)　於　電力ホール

佐藤昌彦学院長

この年度を以て、小田学院長は、三期十二年の任期を終え、翌年三月退職するが、その前後から、中高組合が給与に関して、人事院勧告によらず、いわゆる春闘方式で臨むようになった。事務組合もこれにならったが、殊に中高組合は校外の他組合とも共闘体制を組んで、ストライキをも辞さなかったの

で、次期学院長の選考が進まぬままに、キャンパスは緊迫した日々を送り、加えて、大学内および中高内で人事上の不測の事態が次々と発生し、その処理に教授会や教員会議は苦慮した。


高梨　事務局長

約一年の空白ののち、一九七三（昭和四十八）年四月、東北学院大学の佐藤昌彦教授が学院長に就任した。東京帝大法学部出身の新学院長は、初代北大総長・佐藤昌介の子息であるが、島崎藤村とのエピソードで有名な佐藤輔子を伯母に持ち、仙台で旧制高校時代を過したことなどから、当地にはゆかり深い経歴を持っている。すでに法理学・刑法学界には広く名を知られ、法曹実務にも明るいクリスチャン学者であるが、学院内諸問題の処理に関する集中的な繁忙から過労となり、遂に病を発して翌年春、辞表を提出した。同じ頃、佐藤理事長も、中高組合との「春闘団交」席上、疲労のため倒れて入院し、石井学長、渡邉事務局長はじめ管理者層は、それらの代行業務も加わって極度の忙しさを経験した。しかし、この間も「移転」への検討は進み、前年八月「建設委員会」が発足して建設本部（本部長は理事松崎粲教授）が精力的な実務活動を開始した。

また、同じ年の十二月、やはり病気で渡邉事務局長が辞任し、新年度から前仙台高等学校々長高梨光がこのあとを襲って、前任者に引続き給与―財政問題や、学院長選考、移転計画、創立九十周年行事準備等々の実務にかかわることとなった。大学教授会や中高教員会が私学への国庫助成、公費補助の拡大要求に積極的にとり組むようになったのもこの頃である。

やがて、新学院長として、キリスト教学校教育同盟総主事、前恵泉女学園長、清水二郎が迎えられることとなり、一九七五（昭和五十）年四月一日、その赴任を見た。「学院長」としては第四代、初代校長から数えると十一代目にあたる。

清水二郎学院長

清水学院長は、一九〇二（明治三十五）年東京生れ、東京帝大文学部（西洋史専攻）を卒業し、（旧制）新潟高校教授等を経て、学習院教授、東宮傅育官、東宮侍従などを歴任後、恵泉女学園に招かれた。この間、私学関係の団体で諸種の役員をつとめ、また、文部省の大学設置審議会や教育職員養成審議会の委員にも任ぜられている。教会生活を重んじ、西洋史のほかキリスト教学、教育学等にも造詣が深く、森　明牧師についての評伝そのほかの著作がある。就任時の挨拶は「宮城学院広報第七号」（同年四月三十日発行）にも掲げられており、新学院長の本学院の教育に臨む姿勢がはっきりと示されているので、ここにそのまま引こう。

宮城学院ご関係の皆々様、はじめてご挨拶申しあげます。主にありて何卒よろしく願います。

教育に携わる者として深く学ばされていることは、教育は常に互いに協力しあうわざであり、人間の相互性に拠って立つものだということであります。いかなる理想主義の方法も、気づかないうちにどこかで一方的な主張の傾向が強まっている場合があり、そういう場合はその教育理想が真理性をもっているのに拘らず、真理を活かす力が失われて、行きづまりを生じていることがしばしばあると思います。

その難渋の中でも、相互の許しあいと受け入れあいを敢えて実行することさえできれば、その難渋をチャンスとして、閉された状況のもう一つ先にある高次の開かれた前進性をつかみ、また実現することもできると信じます。聖書の指針と、祈の経験から見出す希望の光といえましょう。

宮城学院が日本の教育史上にしるしたキリスト教教育に拠る女子教育の貴重な貢献に対し、私は深い尊敬を捧げます。このたび院長職へのご懇切な招きを受け、謹んで祈り考えた末、自分の至らないことを承知しながら神許し給う限りはと考えて、現在の教職員ご一同に伍して、共に学燈を担おうと願うに至りました。今の宮城学院の教育を担当し、教育の理想を追求して苦辛してこられた諸先生、また諸先生と共に教育の相互性を協力してこられた生徒・学生の皆さんと、学院生活を共にしつつ平常の心で語りあい共に道を求めることを許されるならば、私の光栄であります。「時く者も刈る者も共々に喜ぶため」（ヨハネ四・三六―三八）に、真剣に工夫して見ようではありませんか。ことに、女子専門の教育の深い意味と、キリスト教がまだ社会的受容に達していない日本社会におけるキリスト教教育の在り方および意義を、共に深く学び求めたいと願います。

今の混迷期の中で、宮城学院もまた苦渋の歴史を避け難いことでしょう。しかし、宮城学院に入学した若人が、他者との協力の中で自己を自覚し、聖書が示す新生の自己を理解するならば、なくてはならない生きがいや学績を物にして、必ずや自他のために宮城学院の教育の意義を高めて下さるでしょう。「わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある」(第二コリント一三・八)との、使徒パウロの命懸けの証言に協賛したいと切に願います。そして、それには日本国憲法の基礎をなす基本的人権の、またその基礎をなす良心の自由に確かりと立つべきであると、覚悟しております。

宮城学院関係の皆々様、重ねてよろしくご協力のほど、お願い申しあげます。

清水学院長を迎えた頃の本学院は、前述のように、施設が整えられ制度も改められたのち、むしろ財政問題そのほかを抱えて、史上屈指の難渋期を過しつつあったが、新学院長は、校内諸部に諸事節倹を勧め、役職手当の返上などで率先これを実行したほか、進んで組合をはじめ校内各パートと話しあい、教職員のみならず、学生・生徒・園児および父兄・同窓生らとの接触にもつとめた。

翌一九七六(昭和五十一)年には、新学院長のもとで、別記のように創立九十周年記念行事が盛大に催されたが、これに先立つ九月には、さきの理事会決定に基いて、桜ヶ丘新校地での建設に関する仮調印式が行なわれ、五年後に予定されるキャンパス大移転に向って正式にスタートが切られたのであった。建設本部長は清水学院長が兼任した(のち石井昌光教授)。

創立九十周年記念行事

十月十六日(土)　講師　国際基督教大学教授　武田　清子先生

午後一時三十分　記念講演会　於　大講堂

「近代日本におけるキリスト教と女子教育」

十月十七日(日)

午前十時　同窓会記念礼拝並に総会　於　大講堂

午後零時三十分　同窓会祝賀パーティー　於　伯養軒会館

十月十八日(月)

午前十時　記念式典　於大講堂

㈠　記念礼拝

一奏楽「神より我は離れまじ」バッハ作曲　伊藤久子
一招詞　司式　佐伯晴郎
一讃美歌　二四番　一同
一聖書　ローマ人への手紙　第十五章1～6　大沼隆
一祈禱　山形孝夫
一合唱「サンクトゥス、ベネディクトゥス」ヴィラーロボス作曲　大学音楽科学生　指揮　前田幸市郎
一説教「強い人と弱い人」　仙台広瀬河畔教会牧師　山本尚忠
一祈禱
一讃詠　五四五番　一同
一祝禱　宮崎彰
一式辞　学院長　清水二郎
一挨拶　理事長　佐藤利吉
一表彰　功労による感謝状贈呈　理事長　佐藤利吉
一ハンドベル「恵みふかき神」中学・高校生徒有志
一逝去者追悼　追悼のことば　学長　石井昌光
一祈禱　内田良三
一合唱　記念祝典歌　石井昌光　作詞　山内忠　作曲　大学音楽科学生　指揮　前田幸市郎
一祝辞　基督教学校教育同盟理事長　大木金次郎殿　日本基督教団東北教区総会議長　芦名直道殿　宮城学院同窓会会長　滝口篤子殿
一後奏「聖アンのフーガ」より　バッハ作曲　伊藤久子

㈡　記念式

一前奏「天にまします我らの神よ」バッハ作曲　伊藤久子
一校歌　一同

第九章


阿部　校長


松崎　学長


小林　事務局長

この年、大沼隆中高校長は二期六年の任を終え、阿部富士雄教諭（英語）が後任に選ばれたが、翌年、大学・短大でも、前任者のあとを受けて多難な時期の六年余、怪我や病とも闘いながら学長職をつとめた石井昌光教授に代って、一般教育科の松崎粲（きよし）教授（化学）が、公選三代目の学長に就任した。また、事務局長（兼法人室長）に、東京女子大学事務長などを歴任した小林義一が新たに迎えられ、さらに財務理事としても、前二者とともに佐藤理事長、清水学院長をよく助けた。

制度改正の一つの結実として、大学・短大の副手および幼稚園教諭に、法人理事・評議員に関する選挙権・被選挙権が与えられたのもこの年である。（副手会は、のちに「組合」を結成する）。

この年、四月一日を以て、中学校・高等学校は学則を改正し、三学期制を二学期制とした。教育効果をさらに上げる目的からであった。また、数年間、発行が途絶えていた『研究紀要』に代り、『教育研究』がこの年度から刊行され、翌年春「第一号」が出た。いわゆる私学の危機が呼ばれてすでに久しいこの時期に、本校教諭たちは、「一九七〇年改革」以来の学校の状況、みずからの姿・生徒たちの実態などを真摯にみつめ、将来、特に移転後、新校地で実現されるべき学校像・教師像を模索しながら「教育研究」をさらに推進したのであった。第一号の「巻頭言」には、発刊の趣意がよくあらわれているので（筆者は「教育研究部」主任丸岡真教諭）、一部を左に抄記し、あわせて「目次」も掲げておく。

昭和四十五年の制度改革後、我が学園は、他のどの学園に増して、「教育の自由」が保障されたはずであった。しかし、その自由は、ここ数年間どのように行使されたであろうか。それは新たなものを創造する自由という、能動的・積極的なものでなければならない。保障されている自由を十分生かし、独創的な教育を作り上げる精神を、そして実践を、私達はこれまでどのくらい持ち得たであろうか。制度的には形の整った民主化を、教育活動の中味へ、あるいは又教師個々人の中へどれほど内実化させ定着化させ得たであろうか。

私達は自分が所属しない部署から出されてくる意見に対して謙虚に耳を傾け、その背後にある課題を共有し、互いに知恵を出し合って、より優れた考え方を生み出していくことを未だ不得手とする。それは個人の力量のみならずまた集団としても力をも、十分備えているとは言い難いことを示している。中学一年から高校三年までの六頭立ての馬車の手綱を、一まとめにして、しっかりと握りしめる手があり、しかも一頭一頭の馬が存分に駆け巡る自由を持ち得た時、馬車はもっと力強く、もっと輝きを増して進むことであろう。

私学の存在そのものの危機がじわじわと進行しつつある現在、相互理解に基づいた内部批判の出来る教師集団へと早く成長したいものである。私達が持っている自由を存分に使いこなし、創造する自由を獲得していくこと、それが我が学園の存在の危機を乗り越える一つの確実な力になるであろう。

昭和五十二年度の教研部の活動方針の柱として「広報活動」を掲げたのは以上述べた様な事情からであった。各学年の取り組み、各教科教育の営み、生活指導の実践などを出来るだけそのままの形で公の場に出し、お互いに試みていることを知り合うこと、そして生産的な形での相互批判が出来るよう成長すること、このことを抜きにしては学校としての統一ということはあり得まい。否、このことを抜きにして統一のみを求めたら、あの四十五年以降の数年間は何の意味も持ちえない空白の時間に帰してしまい、私達はまた再び、その当時味わった新しいものへの脱皮の苦しみをなめねばならないだろう。四十五年以降跡絶えていた「研究紀要」を、ここに「教育研究」として再び、そして新たに刊行することには、このような願いがこめられている。

目　次

巻頭言……丸岡　真……1
キリスト教教育の問題点……阿部富士雄……3
カウンセリング室から……大沼　隆……8
随筆　ホンモノとニセモノ……阿部邦雄……14
教科実践（家庭科、中学二年）

食品加工建学について……山際とし……18
教科実践（社会科、高校三年）　エミシ（古代蝦夷）問題の学習を通して
生徒の歴史認識はどのように変わったか……一戸富士雄……25
教科実践（自由選択、高校三年）　幼児教育……宮崎彰……35
学年の取りくみ（中学一～中学三年、三ヶ年のながれ）
学年会の歩み……永嶋宏寿……48
学年の取りくみ（高校二年～高校三年、二ヶ年のながれ）
学力診断テスト……松尾光章・松本静夫……57
学級経営（中学三年、三ヶ年のあゆみ）
班編成による試み……鈴谷輝秋……71
学力と人格形成（私学シンポジウムに参加して）……丸岡真……82
教研部の歩み……奥田美年子……88

なお、中高に、この年から「カウンセリング室」が開設され、数年前からスタートした「ホーム・ルーム・キャンプ」も、ほぼ定着して、それぞれよき効果を示し始めた。

若き日、神学をも学んだ清水学院長は、教会生活に精励し、学校内の伝道活動にも積極的で、「全学院教職員礼拝」を強化充実させ、学生・生徒・園児らのための礼拝でも進んで奨励をひきうけたほか、同窓生や中高・幼稚園の父兄有志を対象に聖書研究会を定期的に催してみずから講義し、また、大学の信徒教員若干名が月に一度開いていた聖書研究会をも指導して、彼等を熱心に指導した。

かくて、清水学院長はその在任中、レイマンながら、実質的に本学院の宗教総主事的な役割をも果たしていたのであった。

こうした動きと平行して、年一回の、大学・短大「キリスト教教育特別集会」は、毎回、講師に教界知名の適切な人を得て益々盛んとなり、中学校・高等学校でも、従来の一日だけの行事が「キリスト教教育週間」として拡充され、より大きな成果を挙げるようになった。一方、大学英文学会の主催で、ロンドン・シェークスピア・グループの「ロミオとジュリエット」が公演され、あるいは、世界オルガン界の女流第一人者マリー・クレール・アランの演奏会が開かれるなど、アカデミックな催しも続き、すでに仙台の年間行事として定着した感のある、キリスト教文化研究所の公開講演会等とともに、本学院は、大講堂を通じて、高度の文化を一般市民とわかちあうという良き伝統をさらに発展させていたのである。

なお、九十周年記念事業の一つとして『宮城学院最近十年小史』が刊行され、『八十年小誌』後の本学院の歩みを極めて克明に綴った。

この間にも、キャンパス移転への準備は着々と進み、各パートごとに、主として建築物の設計に関し精力的な協議が連日のように行なわれ、本館、礼拝堂、大学講義棟・人文棟・家政棟・音楽棟・保育棟・幼稚園舎・講堂・図書館・食堂・クラブ室、中高校舎・講堂・寮、それに大学・中高それぞれの体育館（プールを含む）、さらに大学土樋寮に代る新寮等々について、きめ細かい話しあいがなされ、段階に応じて設計者（ヴォーリズ社）側ともくり返し打ち合わせが行なわれたのであった。また、山形孝夫理事をキャップとして設けられた募金委員会も活発に動き初めて、順調な実績を示していった。移転―建築の際、貴重な自然環境の保全に十二分な配慮が払われるべく、そのための委員会が発足したのも、この頃である。

なお、大学では、現存学科の拡充や短大諸科の昇格をも含めて、三学部制（たとえば人文学部、家政学部、音楽学部）設立への希望も、かなり熱心かつ具体的に語られたが、この時点では実現できなかった。

一九七八（昭和五十三）年六月十二日の午後五時十五分、仙台を中心に東北地方は強烈な地震に襲われた。マグ


岩井　理事

ニチュード七・四の「宮城県沖地震」である。大部分の市民が初めて経験した激しく大きな揺れによって、仙台近辺だけでも二十数名の死者が出、建造物の倒壊はかなりのものであった。交通は一時途絶し、電気・水道の供給もしばらく止り、都市ガスの完全復旧には一ヶ月以上を要した。本学院では、ほとんどの学生・生徒らが下校した後であったので、教職員を含めて校内での人身受傷は全くなかった上、幸いに、建造物等の被害も比較的軽かったが、それでも調査の結果、備品・実験器具などを含めて、合計二一、三六七、五〇〇円に及ぶ損害を受けたのであった。とりあえず翌日は全学院休校としたが、六月十四日からは通常の授業と業務を再開することが出来、年間行事予定もその後すべて滞りなく進行した。そして、七月末日には、総合移転建設工事契約の本調印式が、次いで八月十一日には、現地で「仕事初め式」が行なわれたのであった。

清水二郎学院長は、前年度末より、健康上の理由などから退任を申し出ていたが、理事会は止むなくこれを認め、右諸行事も一段落した九月二十一日を以て正式に辞任した。清水は学院長として定められた期間に満たぬ三年半の在任であったが、その信仰・学識と、まさに伝道者を思わせる熱誠を以て人々に接し、本学院建学の精神を強く作興せしめたばかりでなく、あらゆる問題に真摯に対処し、戦時戦後以来の困難期にあったわが学院を牽引して、キャンパス移転―「百周年」への展望を開いたのであった。なお、移転にかかわる清水学院長の働きは建設本部スタッフの努力とともに後にふれられよう。

とりあえず、岩井淳一理事（東北大学名誉教授）が学院長事務取扱に選ばれて後を補なったが、岩井理事は選考が進んでいる次期学院長の就任直前まで、すなわち翌年三月末日まで在任することとなる。

同年十月十六日には、新校地で、建設工事起工式が行なわれ、学生・生徒代表も初めて現地に立って、理事・教職員らと共に鍬入れの儀に参加したのであった。

第十章　神にむかひて歓びよばはれ

全地よ、神にむかって喜び呼ばわれ。
そのみ名の栄光を歌え。
栄えあるさんびをささげよ。

（詩篇　第六十六篇一～二）

移転から「百周年」まで

新校地への始動

一九七九（昭和五十四）年

この年、学院長が交替した。

かねて、健康上の理由で退任を申し出ていた清水二郎学院長は、前年九月、正式に引退し、岩井淳一理事が学院長事務取扱をつとめていたが、この四月一日からは専修大学文学部教授早坂禮吾に正式に引き継がれることになった。新学院長の就任式は五月十六日に行なわれたが、「私は今ここに、神と、お集り下さった皆様の前で宮城学院長の任命を受けました。私はこれを神の与え給うた使命であると自覚し、かつ信じます。私がこの名誉にふさわしい能力をもっているとは思いません。しかし、使命を与え給うた方が、その使命に添えて能力をも与え給うことを信じますが故に、おそれることなくこの重い任務に就任いたします。――」との新学院長の「就任の言葉」に対し、佐藤利吉理事長が式辞に続いて「ただ今ここに早坂先生が学院長に就任なさったしるしとして、学院長フードを授与します。」と宣言、臙脂のフードを新学院長に懸けた。

なお、新学院長は一九一三（大正二）年十月二日、早坂哲郎の五男として仙台市に生れた。旧制台北高等学校を経て一九三九（昭和十四）年三月、東北帝国大学法文学部国文学科を卒業、札幌の北星学園、東京女子大学を経て専修大学文学部主任教授をつとめてきた現役で、定年を数年余して就任したのは特記すべきことである。父君の故・哲郎は、一八八八（明治二十一）年から一九二〇（大正九）年まで、三十二年間本学に奉職して、草創期の宮城女

学校の土台を定めた人物であり、また姉の故・平山信子は本学院の同窓生で、一九四一（昭和十六）年から一九六六（昭和四十四）年まで二十八年間本学院理事として奉仕した名誉理事である。新学院長は二代六十年のキャリアを背に歩み始めることとなった。なお、国文学専攻の早坂学院長は、若き日からの教会人で長く吉祥寺教会の役員をつとめ、また国立市の教育委員長なども歴任して、教育行政にもかなり経験を有している。

すでに開始されていた新キャンパスの工事は着々と進行していた。建設委員会の本部長は初代の松崎粲学長、次いで石井昌光前学長、清水二郎前学院長をへて新学院長が四代目をうけついだが、建設の全景が次第にあきらかになるにつれて、七月、新たに「移転推進本部」を設け、数名の若手事務職員を指名して、移転のための推進プロジェクトチームを編成した。

なお、建設は進んでいるが、東三番丁校舎と新キャンパスとの間はかなり距離もあり、当時は交通も不便であったので、学校内には不安や不満も生れはじめた。そこで建設本部は九月に入ると数次の見学バスを仕立て、多くの教職員や、学生・生徒の代表を現地にはこんだ。いずれもその広大な規模に驚異の目をみはり、建設の進行状態に満足した。中でも、学生・生徒らは、大学から幼稚園まで「同じ一つの門から出入りできる」ことを最大の喜びとしていることが、「宮城学院広報」のルポルタージュに強くあらわれて関係者を驚かせた。

この年三月を以って定年退職した大学の石井昌光・森下金二郎両教授が、五月九日、名誉教授の称号を授与された。前者は在職三十七年、後者は三十六年、崩壊の危機とさえ感じさせられた「戦争時代」から戦後のこの時期まで、ともに宮城学院の運命を背負った碩学である。記録によれば、かの故・ハンセン・リンゼイ両名誉教授の前例があるが、新制度として設けられた「名誉教授規程」による第一号・第二号として誠にふさわしい授与であった。

一九八〇（昭和五十五）年

新キャンパスの建設は着々と進行し、現場は日毎に様相を変えつつあった。総合移転を「民族大移動」などとおどける向きもあったが、「その日」は予定通り、音もなく、

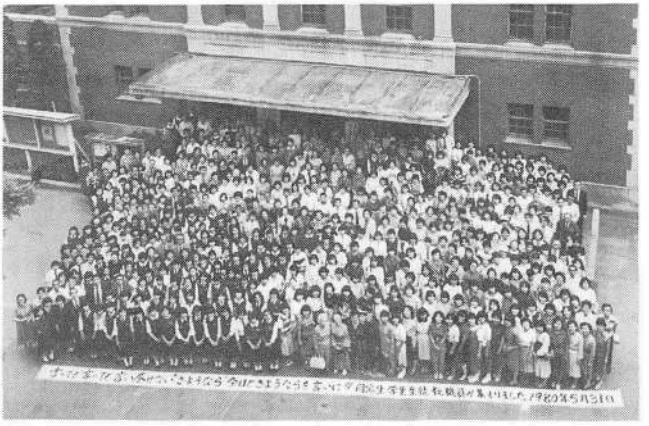
しかし確実に、近づいてくるのであった。建設の模様を見聞しては、一喜一憂していた私たちは、ふと気がついて九十余年本学院をはぐくんでくれた現校地への別離を深く思うようになった。

五月三十一日、同窓会主催の「さよならパーティ」には二五〇余の会員が参加した。

またこの日、講堂前で記念の写真をとった。「誰でもいい。お別れの写真に自分の顔を残して、百年史の一頁を飾りましょう。」と呼びかけたところ、定刻に講堂前に集った学生・生徒・教職員・同窓生は約六百名。誰かが「言っても言っても言い尽せない〝さよなら〟今日もさよならを言いに!!」と書いた巻紙を前にひろげた。笑っていた人々が皆だまってしまった。これが大講堂を背にした「宮城群像」の最後のものである。

いよいよお別れとなると、狭いの何のと文句をいった「東三番丁の宮城」も今は限りなくなつかしい。それにつけても戦後の混沌の中で宮城の大講堂が仙台の文化の復興に果した役割は大きかった。

翌六月一日はここで同窓会主催の「サヨナラコンサート」が開かれた。カンディフ教授によるシューベルトの大曲ピアノソナタ第十八番「幻想」(作曲七十八)で、これは同教授が「二十年前からねらっていた」ものだという。演奏は満堂の聴衆を酔わせるものであった。八十歳位のおばあさんが帰りがけに何かぶつぶつ言っているので、近よって聞いてみたら「この講堂のためにもいいご供養になりました」ということであった。



さよなら二番丁校舎

七月二十四日、桜ヶ丘の新校舎に送電が開始され、巨大なキャンパスに生命の灯がともった。

八月七日、引越第一陣のトラック群が東三番丁を出発した。大小三万個の荷物と九十余年の歴史が怒涛のように動きはじめた。そして、九月三十日、一切を完了するまで、この流れは止むことがなかった。四千五百の人々を乗せたまま、ノアの方舟は桜ヶ丘の新キャンパスに碇をおろしたのであった。

やがて十月二十五日にこの新キャンパスの落成を感謝し、そのすべてを神に捧げる「献堂式」が行なわれた。あいにくの雨天であったが、各施設をつなぐ廻廊が完備しているので、千百余名の来賓に、雨が降っても傘の要らないキャンパスの偉容を誇示する結果になった。

献堂式は本学院理事山本尚忠牧師（広瀬河畔教会）の司式により、佐藤理事長の「わたしたちは今、心から感謝と喜びをもって、この学院のすべての建物と施設・設備を神の前にお捧げ致します。」という「献堂の辞」が早坂学院長の「私共は只今理事長によって述べられた献堂の辞のように、この学園の一切を献じ、そしてそれを神より与えられたものとしてその使命のために十全に用いようと身構えております。」という決意を述べた「式辞」につながれ、その後、東北学院の小田忠夫院長などから心のこもったたくさんの祝辞を有難く頂戴した。（左記プログラム参照）

献堂式次第

司式者　理事　山本　尚忠　■頌　栄　五三九番　一　同
奏楽者　教授　伊藤　久子　■序　詞　司式者
■奏　楽　〃おゝ神よ、真実なる神よ〃　J・S・BACH　■讃　美　歌　七番　一　同
■聖　書　司式者

旧約聖書　伝道の書第三章十～十五節
新約聖書　ピリピ人への手紙第四章四～九節
■祈禱　仝
■説教　〝主にあって、喜びなさい〟　学校法人宮城学院理事　日本基督教団　仙台広瀬河畔教会牧師　山本尚忠
■讃美歌　一九四番　一同
■献堂の辞　理事長　佐藤利吉
■献堂の祈　仝
■式辞　学院長　早坂禮吾
■讃美歌　三三八番　一同
■ハンドベル演奏　〝エコー〟　J・S・BACH　中学校・高等学校生徒
■工事経過報告　財務理事・事務局長　小林義一
■感謝状贈呈　理事長　佐藤利吉　株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所殿
■祝辞　テーテンス事務所殿　株式会社熊谷組殿　東海興業株式会社殿　キリスト教学校教育同盟　東北・北海道地区代表理事　東北学院長　小田忠夫殿　衆議院議員　三塚博殿　宮城県知事　山本壮一郎殿　仙台市長　島野武殿　米国合同教会世界宣教局　REV・PAUL CLAYTON
■祝電披露　法人室長　長谷川英敏
■頌栄　五四一番　一同
■祝禱　司式者
■後奏　〝おゝ、キリストよ、あなたは我々の光であり、導きである〟　J・S・BACH

キャンパスは美事に完成したが、場所が仙台市の北西隅であり、多くの人々に見知ってもらう必要があるので、この秋からの一年を新キャンパス紹介の年にしようということになった。そのため種々の講演会・音楽会また大学・短大・中高の学園祭などを積極的に展開したので、年間およそ一万五千の外来の人々を迎えることができた。


今野　事務局長

桜ケ丘での最初の教職員クリスマスは本館前のモミの木にデコレーションの豆電燈をともし、新聞にチラシを入れて桜ケ丘在住の市民に呼びかけ、前東京神学大学学長竹森満佐一牧師（東京・吉祥寺教会）をお招きして厳粛な礼拝を守った。同窓会の寄贈による礼拝堂タワーの十二のベルが、美しい讃美歌のメロディーを奏して雰囲気を盛り上げ、職員有志がセットした通称ピアノ池のまわりのルミナリアが夕闇に揺れて礼拝を終えた会衆の目を楽しませた。おくりものといえば、講義館二階ロビーの大壁面を飾る美術作品はすべて学園内外の作家たちが寄贈してくれた物である。

十二月一日付で、資料室兼百年史編纂室を設置し、渡邉弘道元事務局長をその室長に任命した。また、同日付で今野恒四郎が事務局長に就任した。

建設と移転は終わった。次は来るべき創立百年の日の為に……という心意気でもあった。

一九八一（昭和五十六）年

この年、五月十七日（第三日曜日）に同窓会の第一回「ホームカミングデー」が催された。当日は老若一千余の同窓生が新しい母校に集い、先ずチャペルで感謝の礼拝を捧げ、年次総会のあと食事を共にして親睦を深めた。

すぐれた学校は何れも同窓会が強力である。同窓会の強力な学校は例外なく大きな発展の歴史を示している。「同窓会が強くならねば――」の思いがこの計画となった。当日は十時開門というのに、各地から一時間も前に集いはじめた同窓生は、定刻十一時には一千名をこえた。立錐の余地もない礼拝堂では「視よ、汝の母なり」と題して厳粛な礼拝が守られ、集う人々の心を在学時代の昔に引きもどし、引き続き大学講堂での総会は、早坂学院長の「お帰りなさい。ようこそ!!」という挨拶が以後のホームカミングデーの「合いことば」になった。

第一回のホームカミングデーは大成功のうちに終った。しかし、成功を喜ぶと同時にきびしい反省も必要である。



創立95周年記念礼拝

一千人以上の人を動かすことのむずかしさをつくずくと感じさせられたが、同窓生と職員の協力は画期的といってよいほど美事なものであった。

また、創立記念日である九月十八日は「休日」でこそあれ、特に記念の行事は久しく行なわれてこなかったが新キャンパスに移った当年から、再び同窓会の主催で記念礼拝と、北山のキリスト教墓地における墓前礼拝を復活した。前日、職員や中高YWCAの奉仕によって墓地はすがすがしく清められており、先人たちの墓前に捧げた花がとりわけ美しかった。

創立記念日に際しては五年毎に式典をもち、記念の行事などを行なって来たが、この年は創立九十五周年に当り、新キャンパスでの最初のものであったので、十月九日式典を挙行し、続いて記念講演会が開催された。

記念行事はステンドグラスの美しいチャペルの礼拝にはじまり、日本基督教団東北教区総会議長深田寛牧師（仙台北三番丁教会）の「結実」と題する説教があり、五〇〇名が参列した。

続いて行なわれた記念講演会では大学講堂にて二人の講師を迎えて行なわれた。一人は国際基督教大学長・日本基督教学会会長中川秀恭博士で「キリスト教的人間観」と題して基督者の生き方を論じ、「祈りと沈黙」をもって結論とされた。

もう一人は日本オリエント学会名誉会長・中近東文化センター総裁、歴史学者として碩学の誉れ高い三笠宮崇仁殿下で、「古代メソポタミヤ文明と旧約聖書――バベルの塔を中心として」と題し旧約聖書の理解に欠くべからざる言語学的、風土学的問題に深い蘊蓄を示された。御自作のスライドによって、緑と砂漠――生と死との間に中間地帯のない旧約の世界の風土を示された時には、感動的な静寂があたりを支配したほどであった。

いずれも大きな収穫であった。チャペルの礼拝にも中川博士と共に静かに列席された三笠宮殿下に深く感謝申し上げたい。

なお、この年度をもって建設本部、並に移転推進本部もその任務を終えたので三月二十六日に解散した。

六月から八月にかけて、あのなつかしい東三番丁の旧校舎は解体され、古びた赤煉瓦は完全に視界から消えてしまった。たたずんでそれを見送った同窓生も少なくはなかったという。

一九八二(昭和五十七)年

早春は別離の時でもある。

東北学院の理事長・院長・学長を長い間つとめた小田忠夫氏が三月十三日に逝去された。正に「東北の巨星墜つ」の思いが深い。

元理事の植村環女史(植村正久息女)は五月二十六日、大石栄一名誉理事は十一月二十六日に召天された。

宮城学院では在職二十八年、最後の六年間は校長として激務に耐えた阿部富士雄教諭が定年によって退職し、選挙によって推薦され理事会により承認された前校長大沼隆教諭が校長に再任された。そして、五月八日に礼拝堂に於いて就任式が行なわれた。

キリスト教学校教育同盟の第七十回総会が、桜ヶ丘のキャンパスを会場に開かれたのは六月の四・五両日であった。諸行事の進行は事務局で計画され実施されたが、全国から集まる基督教主義学校の幹部ら約三百人をどのように心あたたかくお迎えしたらよいだろうかと学院長以下関係者は心をくだいた。

当日のキャンパスは夜来の雨に洗われた緑が映えて、芝生の雑草を一本一本抜いて整備してくれた人々の努力が宮城の新キャンパスを最高に美しくみせた。記念写真のために中央の芝生に集まった全会員の頭上に美しいチャペルの鐘が鳴り渡り、配られた弁当の上の一輪の「みやこわすれ」は旅人の心にしみじみと訴えたらしく、多くの人々が胸のボタン穴に留めたり、プログラムに押して家づとにしたりした。お茶の席では「仙台駄菓子」や名物「笹か

まぼこ」、「九重」や「長なす漬」が郷土色を豊かに発揮し、会場にかざられた大きな「七夕飾り」が前日遅くまでかかった職員の手製であると紹介された時は、感謝の拍手が鳴りやまなかった。総会を代表して西南学院長の感謝の辞は数々の事にふれたが、中で、会場校に対しては「門をはいったその時から、大勢の宮城人がどんなに温かく自分たちを歓迎してくれているかがひしひしと胸に応えて、それが総会終了の今までに変ることなく続いていたことに最大の感謝を捧げる。」と結ばれた時は、関係者一同は誰しも眼頭の熱くなる一瞬を経験した。直接この総会運営にたずさわった人の努力は大変なものであったが、大きな仕事を成し遂げた喜びでそれは十二分に報いられたにちがいない。それよりも日常の持場を守って黙々と、外で働く同僚の仕事を引きうけていた蔭の人々の力にこそ感謝しなければならない。この自ら成る眼に見えぬ協力態勢を尊いものに思った。

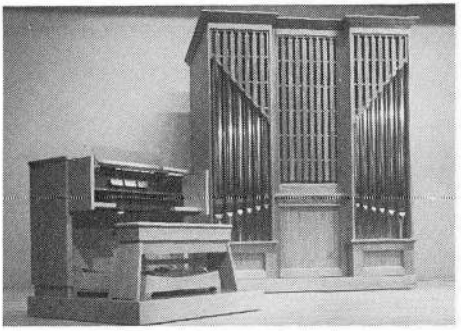
今回の特別講演は早坂学院長の「藤村文芸とキリスト教」で特に、「仙台」の果した役割が強調された。

後日、同盟の機関紙「キリスト教学校教育」新聞に捜真女学校の日野綾子校長が、「頂度下校時であった土曜日の昼さがり、中学生が緑の若葉のゆらぐ中で、そよ風に少女らしい髪をなびかせて楽しげに私共にかわいい挨拶をしながら三々五々帰ってゆきました。〝大切な娘たち、神様の娘たち、よく生きてね〟との思いを私の心の中になげかけていました。」と書かれ、「さわやかな総会でした。」と結んで下さった。

宮城学院のキャンパスが「BCS賞」を受賞した。これは財団法人建築業協会の一九八二年第二十三回建築業協会賞というもので、単なる建築や設計の芸術性にとどまらず、キャンパス建設の企画の段階から、設計・施工ならびに管理面について選考委員が厳重に審査した結果なのである。

十月二十七日には表彰式で賞状と賞牌を受けた。

中高の講堂にパイプオルガンができた。パイプオルガンがなくても礼拝はできるが、礼拝の中のパイプオルガンは重要な要素であることも否定できない。旧校舎の大講堂でパイプオルガンのある礼拝になじんできた生徒たちは


中高のパイプオルガン

美しいキャンパスに感激しながらもまたあのオルガンが新礼拝堂の中にそのまま入ったことを知りながらも自分たちの講堂にパイプオルガンのないのが淋しく物足りない。しかし、もっと困ることは、二・三年もすれば生徒は入れ代って、その物足りなさを感じなくなることである。父母の会は総合移転の記念事業として、パイプオルガンの設置を思いたち、二年にわたる募金の結果、遂にこれを完遂したのである。オルガンはカナダのカサバンフレール社製でパイプの数は六八四本の可動式である。

十月二日に青山学院大学の岡井晃教授を迎えてパイプオルガン奉献式を行なった。

宣教師として長く宮城に留っておられるガーナー・ランディス・カンディフの三先生の在職も三十年を超えた。同窓会主催で感謝の晩餐会を催したところ百名以上の参会者を得て盛会であった。これを記念して催したカンディフ教授のピアノ演奏会は、シューベルトのソナタもリストの小品群も気品の高い演奏であった。しかも最後の「小象ババールのおはなし」は渡辺美佐子氏の朗読とあいまって子供の世界を充実した芸術性の高みに押し上げていった。素晴しい音楽会であった。

待望の東北新幹線が六月二十三日、「みどりのはやて」となって大宮から盛岡へと通りぬけていった。かくて仙台は日帰り圏に東京をとらえた。かつて「汽笛一声新橋を」発車した交通の変革が日本の歴史を大きく変えたが「みどりのはやて」は仙台に、そして宮城学院に何をもたらすのであろうか。

一九八三(昭和五十八)年

この年、二期六年の任期を満たした松崎粲学長はその座を去り、教授会は次期学長候補として教養科山形孝夫教授を選出し、理事会はこれを承認して大学及び短期大学学

長に任命した。その就任式は五月七日に挙行されたが、新学長は就任の辞で、「私はただいま、本学のキリスト教主義学校のしきたりに従いまして理事長よりフードを授けられました。私はこれを神が与え給うた使命に向って出発する終生の修道僧の旅立ちのしるしである、そのように自覚しまして、私に負わされた任務に就くことをお誓いいたします。学校は修道院ではございませんけれども、しかし神に仕えるということの意味は、やはり見失われてはならない重要なことだと思います。なぜなら、神に仕えるということは、決して己れに仕えないということだからです。私は今日、このことを特に肝に銘じて与えられた任務につく覚悟でございます。」と決意を述べ、内外の関係者が励ましの言葉を贈った。

創立記念日の礼拝のあと、同窓会は「建学の泉」を学院に寄贈した。これは東三番丁の旧校地にあって、多くの卒業生に親しまれた石造りの噴水であるが、旧キャンパスと新キャンパスとのいわば唯一の接点である。ついでにバラのトンネルや藤棚、かえでの木、木のベンチまでととのえられたが、これらは卒業生には思い出を、在校生には夢を与えようとするものである。

この秋から「女性のための生涯教育講座」が開かれた。これは本学院の建学の精神の一つでもある女子の一貫教育を卒業後まで拡大しようという企てである。

最初はとりあえず秋田、石巻、白石の三ヶ所に同窓会の後援を得て開講した。

戦災をまともにうけた宮城学院は、校舎と共に多くの貴重な資料を失っている。百年の歴史を綴るための基礎的資料はアメリカに求めざるを得ない。七月十四日から十月二十七日まで三ヶ月余り、渡邉弘道資料室長はアメリカおよびイギリスに派遣され、主としてランキャスター、エディンバラを中心に歴代の校長のミッション・ボードに対する報告の手紙などを複写して持ちかえった。極めて体系的に保管されていた貴重な資料はコピー機という近代的武器を駆使してよく整理され、宮城の〝古代史〟上書きかえられねばならぬいくつかの問題を明らかにしたのは

大きな収穫であった。

一九八四（昭和五十九）年

創立百周年を祝う時が二年後にせまり、その財政的準備を、との声が卒業生を中心にしておこり、十月、同窓会と共催したカンディフ教授のリサイタルからの純益が早速学校に寄付された。また、前年開始された女性のための生涯教育講座は、秋田、古川、石巻など各地のほか、校内施設を使用した、染色、児童文学講座など、すっかり定着した感がある。移転に際して設置した室内プールを学校外にも開放することとなり、まず仙台ＹＭＣＡの水泳教室に使って戴いたのもこの年からである。

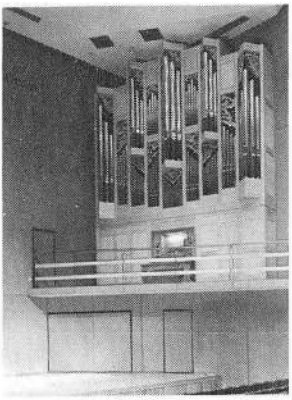
一九八五（昭和六十）年

五月一日付で「百周年記念行事準備委員会」が発足し、七月一日付で「目でみる百年」（仮称）の記念写真誌編集委員会を組織して、創立百年の日はにわかに近づいた。

八月に入って、事務局長今野恒四郎の退職により、新たに中高事務長長谷川英敏が昇任した。

九月十六日の同窓会主催の講演会にはユニセフ大使としての黒柳徹子氏を招き、「トットちゃんとアフリカ」と題した話を聴いてアフリカの実状を深く学んだ。なお、同氏の祖母君は、聖書科出身の古い同窓生である。

ハンセンメモリアルホールに新しいパイプオルガンが設置された。かねて本学音楽科の創設者故・ハンセンが御遺族の経営するハンセン財団を通して贈られた基金が実ったものである。これはスイスのサンマルタン・オルガン工房の作で設計と整音は、この方面の世界的な第一人者ジョルズ・ロート氏である。近年日本ではオルガンの需要が多く、パイプオルガンは昔ほど珍しくはなくなったが、中高のそれを加えてそれぞれ様式の異なる三台のオルガンを持つ学校は稀である。音楽教育の向上は期して待つべきであろう。このオルガンは、十二月十四日の奉献式を経て早速活動を開始した。



新オルガン

以上、桜ヶ丘キャンパスへの移転を中心に年次を追って列記してみたが〝現代史〟のむずかしさは材料が多すぎて選択がむずかしいことである。しかも印象が新しいだけに、えてして見えるものにかたよりがちである。ここに列記したことがらの、真の歴史的意味あるいは評価がはっきりするためにはなおかなりの時を籍さねばなるまい。本書を「百年史」と呼ばない所以である。

総合移転準備

新学園建設計画

本学院の新学園建設計画は、すでに一九七三（昭和四十八）年十一月発行の「宮城学院広報第三号」で、創立九十周年の記念事業として実行されることが報告されている。本問題については、その数年前から本学院理事会が将来のヴィジョンづくりとしての審議を重ねていた。すなわち一九七一（昭和四十六）年七月、理事会内に総合計画委員会を設置し、大学移転と全学園の将来計画について審議し、その第一段階として、「新校地の取得について理事長に一任する」ということを決定している。新校地については、国有地の払下げを得るため、青森営林局（仙台営林署）と交渉をすすめることとなった。

私立学校が国有地の払下げを受けるには、まず青森営林局管内国有林野審議会の承認が必要なので、この申請についての文書（移転すべき理由書、事業計画書、さらに宮城県知事の学園移転についての承認副申書）を提出した。この間適当な国有地を選定するため、一九七二（昭和四十七）年一月、宮城町岩木山一帯を実地視察したり愛子の本学院体育施設隣地の仙台営林署苗圃の譲渡などの適合性を検討したりしたが、それぞれ色々な事情で決定には至らなかった。しかし、たまたま仙台市内に残されていた国有林（丸田沢地区の土地約二十ヘクタール）を推薦され、理事長・学院長等がこの候補地を視察して、誠に理想の土地と判断したのは一九七三（昭和四十八）年四月のこと

であった。

さて、学園の総合移転を考えるときは、候補地を別にすればまず第一に移転すべき理由について学校内外の承認を得ること、第二に資金計画、建設計画をしっかりと固めることが基本条件である。

第一の移転すべき理由については、中央四丁目の校地約一五、〇〇〇㎡が施設の急増や、終戦後東二番丁通りの拡幅に伴なう用地の提供などで、大学設置基準には不適合であったこと。このことは大学・短期大学と中学・高校との分離、教育環境（校舎の敷地には学生が休息、その他に利用するのに適当な空地が必要。狭隘、騒音、排気ガス等）が極めて好ましくない状況にあるということで、かねてから文部省より移転を考えるよう勧告を受けていた。また、当初大学・短期大学のみの移転を考えていたのが途中で全学移転に変更されたのは、新候補地となった仙台市桜ヶ丘九丁目、いわゆる丸田沢地区の用地二〇八、〇〇〇㎡（約六三、〇〇〇坪）は当時の敷地面積の十三倍に当り、東北地方を統轄する青森営林局としては、今までにない大きい規模の国有林払下げであって、これだけの大面積のものを払下げるには大学だけでなく、中学・高校・幼稚園を含めた総合移転とするよう勧告されたためであった。

第二の資金計画については、中央四丁目校地約一五、〇〇〇㎡その他の売却と私学振興財団よりの借り入れが主たるものとされたが、土地の売却価額については当時見通しもつかぬ状態であった。しかし、皆の強い決意が天の時、地の利、人の和を生み、〝骰は投げられた〟と冒険の途につかせたのである。

この全国に例を見ない全学院移転という大事業はまことに容易なものではなく、一九七一（昭和四十六）年に計画を立ててから一九八〇（昭和五十五）年十月、献堂式を行なうまでの足かけ十年の道のりは、経済的にはドルショック、オイルショックなどへの対応、法律的には都市計画法、森林法等の関連法規充足、また内部的には学生、教職員、同窓生などの意思統一の必要等々が次々におこり、さらには大地震に見舞われる中での事業遂行であった。

百年後を見越しての理想像

「現在のキャンパスは手狭まになったし、もっと環境の良いところで総合教育を行なうことが本学の長年の夢でした。」……松崎　粲学長

「まず何より第一に私は学生たちにもっと広々とした教育環境を与えてやりたい。そこには思索するにふさわしい自然があり、おのずから学問と信仰が培かわれるような場所が、大学（特にキリスト教主義学園）であるべきだと思います。このたび、計らずも与えられた新しい地は、仙台市で最後に残されたアカマツの群生する水と緑に包まれた広大な山林です。そこを切り拓いて、ひとつひとつ創り上げていこうというのです。経営的に極めて苦しい本学院が、今これをやろうとするのには多くの不安が伴なうのは当然ですが、やらねばなりません。教育環境の益々悪化する現在地に学生を押しこめて、六万坪の自然を拒むとしたら、悔を千載に残すことになりましょう。困難をしのぎながら、現状維持からぬけ出し、未来にむかってひらかれている仕事をご一緒にやりたいと思います。」……

石井昌光前学長

右のことばでわかるように、移転によって新天地を拓きたい望みは、大学において特に強かった。

開学より九十余年、先人の残した遺産を基礎に、次の百年を築く使命を実現するために、大学では学芸学部四学科（英文学科・日本文学科・音楽科・家政学科）の、いわば単科大学から、長期的展望にたった三学部構想（人文学部・音楽学部・生活科学部）も、来たるべき広大な新キャンパスへの移転によって実現されようと検討された。その学部学科構想をまとめてみると

① 人文学部――日本文学科・英文学科・人文学科・幼児教育学科
② 音楽学部――演奏学科・音楽学科
③ 生活科学部――食品栄養学科・生活科学科

となるが、これは単なる学部数や規模の拡大をねらうのではなく、いずれも主眼は伝統ある学科の柱をより太くし

ていこうとするものであり、そこには「キリスト教的精神に立ち、プロテスタント的情熱をもって、本学の特色である少数教育の充実を今後も貫いていきたい。」とする姿勢が表われていた。この構想は広大な新キャンパスで、これから宮城学院につながるすべての人々の責任において形成されるべき使命であり、神のくすしきご経綸により花ひらくことが理想であるとされ、大学教授会は委員会を設けてかなり熱心に計画を練ったが、残念ながら日の目を見なかった。

建設の規模と内容

理想は広々としたキャンパスに緑に囲まれた静かな環境、豊かな人情あふれる教育環境、中味は伝統ある赤レンガの建物、礼拝堂を中心に、大学・短大・高校・中学の乙女たちを包む十五棟の施設、またその規模も東三番丁キャンパス時代の一・四倍、五万平方米は欲しいということで学内各部局の意見、要望をまとめ、さらに学校設置基準によるチェックと本学の将来とも維持経営のできる内容を考慮した結果、新しい時代の要求にこたえる新学園校舎は

大学・短大部門　二八、六九四㎡
高校・中学部門　一四、九七四㎡
短大付属幼稚園部門　七九九㎡

この他に礼拝堂、事務棟、同窓会館など合わせて建物面積は五六、九七二㎡となり、キャンパス敷地は、二〇八、五七四㎡（約六三、〇〇〇坪）という広大なものとなった。

また、このような校舎内には、最新の設備を備えた図書館、Language Laboratory、ピアノその他のプラクティスルーム、少人数教育を目標とした高校・中学の各教室が配置され、さらに屋内にプール、サブ・コートを備えた大学・中高の体育館も計画された。

新校地の取得

新校地選択にあたり、①仙台市内で②中央四丁目の校地一五、〇〇〇㎡の十倍以上の面積、③位置的に仙台駅より十キロメートル以内、④女子教育にふさわしい教育環境を維持できるもの、といった条件に合致する土地は、仙台市内の民有地に求めることは至難なことで、国有地の払下げについて検討に入った。

一九七二（昭和四十七）年十一月、青森営林局長へ国有林野の払下げ方申請したが、一九七三（昭和四十八）年二月、売払いの条件について次のような指示があった。

(1) 売払い土地

地名　仙台市荒巻川片山一番

面積　二〇三、七九〇㎡

内水没地　一七、七二八㎡　　差引　一八六、〇六二㎡

(2) 報告すべき事項

(イ) 現在所有地の利用方法、(ロ) 移転完了は二年以内が原則（約三十カ月）、(ハ) 造成計画の樹立、(ニ) 計画の年次予定、(ホ) 水没地一七、七二八㎡も引取る、(ヘ) 昭和四十八年度中に売渡し契約が可能か、(ト) 丸田沢地区の緑保存について、(チ) 立木をも含めて売渡しする、(リ) 現所在地の売渡し先（仙台市の中心街区に属しているので健全な地域として利用されるよう配慮願いたい）、(ヌ) 教職員の反応、(ル) 学生・生徒・父兄の反応、(ヲ) 交通問題

以上のことを今後の問題として至急設計技術者を決定し、本格的検討に入ること。次いで所在地域を実測し、造成計画開発スケジュールを立て、青森営林局を通して、本省に提出してもらうこととする。

移転計画資金調達

新校地への移転計画資金としては、現校地の売却、私学振興財団よりの借入金、その他寄付金を予定したが、狂乱物価、ドルショックなどの原因による土地価格の暴騰により昭和四十五年国土法による地下公示制度が実施せられ、地価の安定が図られることとなり、校地の売価額が制約されることとなった。

校地の売却方法としては、等価交換方式（学園建設工事と土地の売却をセットにして価額を決定する）としたが、学校の特質として土地の明け渡しには新校地の建設後移転するという条件のため、建設工事期間二～三年は更地に出来ないという不利があった。

第一次答申書では資産売却六十億円、建築費五十三億円が計上された。

校地売却に当り、まず大手建設業者と交渉に入ることとなったが、建設業者の完工高、経営内容等から大手五社、準大手数社を対象に、直接の申入れを行なった。当時、建築業界は一九七〇年以来の地価高騰に備えて土地の保有が大きく、さらに宮城学院の大型土地を取得することは工事請負の魅力とは反対に難かしいことであり、一九七六（昭和五十一）年二月第二十三回建設委員会で売渡し条件をとり決めてから同年九月、熊谷・東海共同企業体に決定するまで延四十社に及ぶ折衝が行なわれた。

建築設計と建設予算

一九七二（昭和四十七）年九月、青森営林局管内国有林野管理審議会において払下げが承認されたので本格的な建設設計に入ることとなり、第一次事業計画書案作成のための設計家として金原設計事務所金原　譲氏を委嘱することを決定した。また、本計画遂行のため特別委員として、建築設計金原　譲氏、県土木部計画課長吉村忠孝氏、仙台市教育委員長小田信士氏の三名を委嘱し、さらに横山設計事務所長（県設計士協会長）横山芳夫氏に顧問として専門的アドバイスを受けた。

第一段階調査として、一九七二（昭和四十七）年十一月、学長、校長、管財課長と金原氏が神戸地区、名古屋

地区の視察を行ない、設計（事業）計画に入り、青森営林局に対する国有林払下げ申請書類作成に一歩進めた。

設計業務委嘱の経緯

素案作成については金原設計事務所長金原　譲氏にお願いし、本設計は大手設計事務所より選定することになった。山下設計事務所、日建設計、一粒社ヴォーリズの三社を挙げ検討の結果、一九七三（昭和四十八）年十二月、キリスト教関係施設や学校建築に実績のある一粒社ヴォーリズ建築事務所に決定した。一粒社ヴォーリズ建築事務所は一九七四（昭和四十九）年一月、仙台市に事務所を設け、以後学園の完成に大きく貢献した。

開発工事の認可

当初丸田沢新校地は市街化調整区域で、中高の建設はできるが、大学の建設はできないという問題があった。市街化区域の見直しは五年毎に建設省で行なわれるが、宮城県は最近の急成長で市街化区域への変更が多く、農耕者の耕作面積減少に対する抵抗もあり、見直しが困難であった。農林省への陳情も行なったが、他地域との関係で見直しの承認がおくれた。しかし一九七七（昭和五十二）年四月、線引き見直しが告示されたので、ただちに仙台市の開発関係十五の窓口に対して事前協議の願書を提出し交渉に入った。地域の人々との合意や汚水処理など難問をかかえていたが、それぞれ了承解決をみたので、開発許可がおりたのは一九七七（昭和五十二）年九月十三日であった。

汚水処理

丸田沢地区は県の環境保全地域であり、本学の汚水を丸田沢に流すことは県の環境保全条例による許可が必要で、一九七四（昭和四十九）年三月、汚水処理に関して県より、丸田沢溜池に直接放流する場合、汚水処理施設は、し尿及びその他の汚水を合併処理する三次処理方式（活性汚泥法＋凝集沈澱法）とし、ＢＯＤを十三ＰＰＭ以下に浄化すること、との指導があった。しかし三次処理方式による装置は工事費（約四億円）と処理場用地の面からも好ましくないので他の方策はないかと検討していたところ、たまたま泉市の三団地（加茂・長命ヶ丘・虹の丘）の汚水共同処理場として上谷刈処理場建設計画を知り、泉市長に本学院も参加

できないかについて請願した。しかし下水処理は目下七北田川広域下水計画があり、一九八七（昭和六十二）年には丸田沢まで到達するので、それまで上谷刈処理場を使用できればと考えたが、行政地域の異なる下水の処理は両市市議会の承認等難かしい問題があり、見込みはない模様であった。

しかし、泉市長や県住宅公社への働きかけで、泉市より教育的見地から特別承認を受けることができたのは最大の成果であった。なお具体的な手続きに関しては仙台市と泉市の行政上の処理があり、数回の折衝で許可を受けたのは、一九七八（昭和五十三）年一月十九日で、一九八五（昭和六十）年三月末日まで泉市で本学院の下水を引き受けるということであった。

新校地周辺地域との関わり

一九七七（昭和五十二）年九月十三日成立した事前協議の条件として、工事車輌等の通行する町内会等の承認を得てから別に協議することになっているので、本学院から清水二郎学院長、石井昌光建設委員会本部長及篠田勝太郎同次長が出向いて、次のとおり折衝を重ね、一九七八（昭和五十三）年二月、合意に達した。

資材搬入については、指定道路以外通行しないこと、指定道路については開発者が経路にあたる

○桜ヶ丘連合町内会（十三町内会）との話し合い

第一回八月二十五日より第四回三月六日まで協議を重ね、工事車輌等の通行ルートについて諒承を得る。

○公苑団地町内会との話し合い

第一回九月三日より第十回三月十日まで協議を重ね、交通量、騒音、道路管理等について諒承を得る。

○桜ヶ丘町内会との話し合い

工事車輌通行ルートについて、道路の改修と交通安全、騒音公害防止等の申し入れがあり、それぞれ諒承を得る。

移転・建設計画の歩み（略年表）

一九七一（昭和四十六）年

七・一五　理事会内に総合計画委員会を設置し、全学移転と将来計画について審議する

一九七二（昭和四十七）年

一・二三　本学院の新移転地の選定につき宮城郡愛子方面の山林を視察（理事長・学院長・学長・校長・事務局長）

九・二二　理事会において新校地の取得について理事長に委任することを決定する。

九・二八　青森営林局管内国有林管理審議会において国有林野の払下げが承認さる

一一・一〇　金原設計事務所に事業計画書作成について依頼する

（学長・校長・管財課長・金原氏と神戸・名古屋地区を視察する）

一九七三（昭和四十八）年

四・一一　新移転候補地丸田沢地区（約二〇〇、〇〇〇㎡）の現地視察を行なう

六・二〇　総合学園の建設について第一回答申（建設規模現在の四〇%増の五〇、〇〇〇㎡とする）

七・一一　総合学園の建設について第二回答申（収支計画、交通対策、地質調査について）

八・一三　建設委員会本部設置

本部長松崎粲（一〇・一付）、次長今野恒四郎（一〇・一付）、次長篠田勝太郎（十二・一付）

八　青森営林局へ国有林の払下げ申請をする

九・一二　学生自治会と移転について話し合う

一九七四（昭和四十九）年

一・二六　理事会において一九七八（昭和五十三）年度を期して丸田沢地区への完全移転を決議する

五・一一　学生一般に対し学園総合移転についての説明会を開催する

七・二六　一粒社ヴォーリズ建築事務所に対して設計、監理を委嘱する

八・一　建設委員会基本設計打合せ

九　理事会において土地の買入れについて承認

九　青森営林局に対し土地の買入れについて申請

一九七五（昭和五十）年

三　実施設計開始

六　第十九回建設委員会で資金計画決定（新築工事概算見積六、八一九、九五二、九九八円）

八・二〇　実施設計完了

一九七六（昭和五十一）年

二　第二十三回建設委員会で現校地の売渡し条件上建設業者は大手とすることを決定

二・二八　本学院の百億円建設計画に対し熊谷グループ（熊谷組、東海興業、日本都市総合開発）より買受けの申入れあり

四・二一　本学院の跡地購入について竹中グループ（伊藤忠商事、清水建設、竹中工務店）より八十五億円の申入れあり

六・八　建設見積書を開封する会を開く。熊谷グループに決定

九・二二　共同企業体結成届を受理〈学校法人宮城学院キャンパス建設工事共同企業体〉工事請負仮契約成立

仮契約金額八、一二五、〇〇〇、〇〇〇円

十二　青森営林局より国有林の払下げを受ける土地（面積二〇八、〇三一㎡）立木竹一、四七八㎥、売渡金額八六八、〇〇〇、〇〇〇円

一九七七（昭和五十二）年

四　仙台市と開発並びに建築について事前協議に入る

八　開発工事について関係町内会と個別協議に入る（桜ヶ丘連合町内会、公苑団地など十三町内会）前後十八回の交渉により一九七八年三月協議成立す

一九七八（昭和五十三）年

一　泉市より本学園の汚水処理について、上谷刈処理場への放流を承認される

四　都市計画法第三十四条により開発行為の許可を受く

四・一〇　宮城県と自然環境保全協定を結ぶ

協定内容　開発面積の三七%以上を自然緑地として保存

開発面積の二六%以上を造成緑地として存置

六　仙台市へ開発工事の着手届を提出する

七　共同企業体と工事請負契約成立。工事期間一九七八年七月三十一日～一九八〇年十月三十日

契約金額八、三二五、〇〇〇、〇〇〇円

八　ヴォーリズ、熊谷・東海JVと第一回三者協議会を持つ

八　桜ヶ丘連合町内会との工事に伴なう協定を行なう

	協定内容	①一部私道の改良工事、②一部私道の交通安全標識と設備工事
八・一一	仕事初め式	
一〇・一六	起工式	
一九七九（昭和五十四）年		
四	汚水処理について丸田沢水利組合・地主萱場重剛両者と協定成立する	
七	第四十回建設委員会において第二期工事の大学講義棟の増設、礼拝堂の建設、大学寮の建設を決定する	
一〇	パイプオルガン移設工事契約を須藤オルガン工房と結ぶ	
一一	中高寮建築工事契約成立	
	工事金額一七三、六三六、〇〇〇円	
一九八〇（昭和五十五）年		
一	礼拝堂に十二ベルチャイムを設置することを決定（同窓会より寄贈）	
三	移転推進本部を設置（本部長早坂禮吾学院長）	
四	軀体設計変更工事契約成立（宮城県沖地震による災害を配慮して再検討）	
	工事金額三八六、〇〇〇、〇〇〇円	
七・二九	大学寮（橄欖寮）新築工事契約	
	工期一九八〇年七月二十九日～一九八一年三月二十日	
	工事金額四五四、〇〇〇、〇〇〇円	
	ソーラー設備追加工事金額九、〇〇〇、〇〇〇円	
八	中学校・高等学校の移転開始	
八・三一	仙台市交通局・宮城交通と学生等の輸送について協定成立	
九	定礎式	
九・一	幼稚園献堂式	
八・三一	本部棟引越し完了	
九・八	中学校・高等学校献堂式	
九・二二	泉市長と上谷刈下水処理場への流水、汚水流水に関する協定成立する	
	流入期間一九八〇年八月一日～一九八五年三月三十一日	
	流入時間午後十時から翌日午前五時までとする	
	汚水流入量吐水量は五二〇㎥／日以下とする	
	負担金二九、九三二、四〇〇円	
一〇・一	大学・短期大学献堂式	
一〇・二五	全学院献堂式及祝会	

新キャンパス建設

一九七三（昭和四十八）年、建設委員会が設置されるのと同時に、その実務を担当する建設本部（初代本部長松崎　粲理事）が設けられた。また、中学校・高等学校、大学・短期大学（幼稚園を含む）、事務局にそれぞれの建設委員会が発足し、新校地における教育のための新しい諸施設の構想が練られた。同年十二月、設計・監理者として委嘱した「一粒社ヴォーリズ建築事務所」は、建設委員会で練られた土地利用、校舎配置及び規模に関する計画に基づき、調査分析を深めていったが、これらを図面上に展開しながら建設委員会とともに基本構想をまとめ上げたのは、一九七四（昭和四十九）年九月であった。その概要は次のようなものである。

一　①中学校・高等学校、②大学・短期大学、③体育施設、④幼稚園の四つのゾーンに分けて配置する。
二　中学校・高等学校、大学・短期大学には、それぞれ広場をもうける。
三　丸田沢および桜ヶ丘校地周辺の植生・水系等を可能なかぎり保存して、自然を享受できるようにする。
四　構内における歩・車（人間の動線と車の動線）の分離を図る。
五　建物は人が歩いて昇降できる階数とする。
六　礼拝堂は、学院の要（かなめ）としてふさわしい位置に建てる。
七　講堂は外部の人が利用しやすい位置とする。
八　校地の西側を通る予定の都市計画道路（幅員四〇メートル）の車輛走行騒音を考慮し、建物はこの計画道路より可能な限り離して建てる。

これらは、自然ととけ合った教育の場として、教職員と学生・生徒、また学生・生徒相互の人格的接触、周辺地

表1　用地利用表

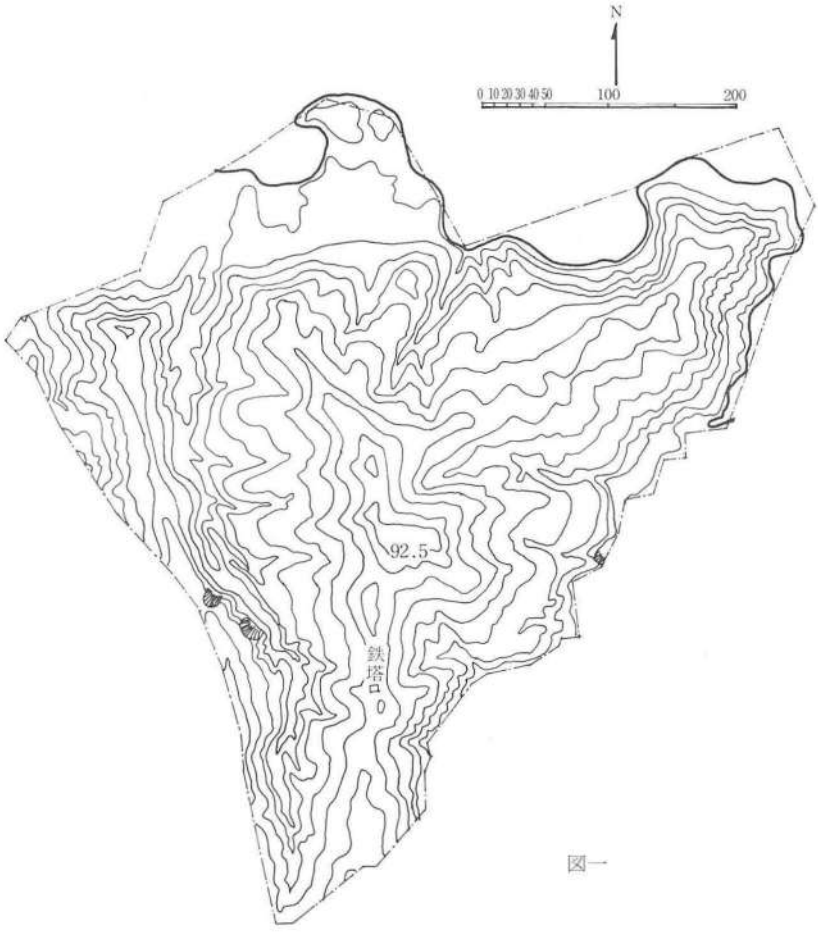
土地利用区分	面積(m²)	比率(%)	備　　考
施設用地	43,573	22.9	運動場 15,200 m² テニスコート 5,500 m² を含む
緑　　地	134,800	70.9	
造園緑地	(45,340)	(23.8)	
保存緑地	(78,640)	(41.3)	
法面緑地	(10,820)	(5.6)	
構内道路用地	11,850	6.2	駐車場用地を含む
計	190,223	100	都市計画道路用地は市へ移管

域社会との触れ合いを強める方針に添って策定された。

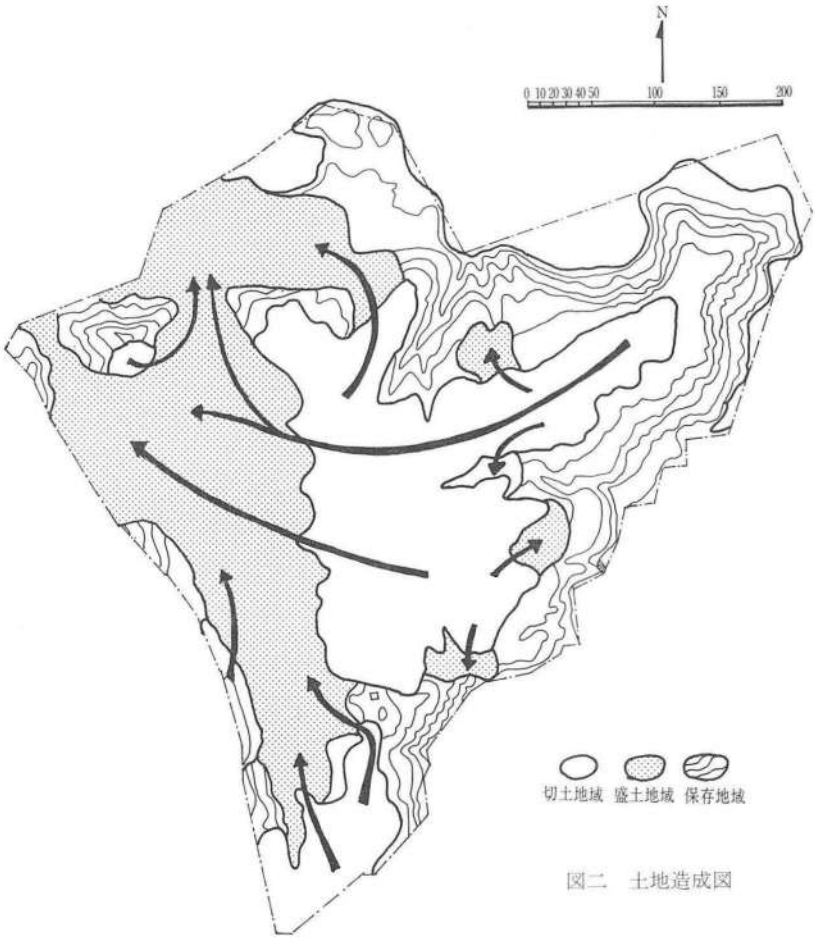
さて、移転用地の形状は、丸田沢に接する部分を底辺とする、ほぼ正三角形をなした約二〇〇、〇〇〇㎡で、校地のほぼ中央の標高九〇メートルから北に向って低くなり、標高四〇メートルの丸田沢に達している。丘陵の頂上部は全体的にゆるやかな起伏を示しており、北に流れて丸田沢に注ぐ数条の沢で開析され、これによる斜面は概して急勾配をなしている(図一)

このような地形の中で、都市計画道路に接する一辺を最も手を加える対象とし、他の二辺は現況を保存する辺として周辺の自然との繋りをもたせることとした。そしてこれら三辺に囲まれた内部の敷地で保存される緑地に接する側に校舎群を、校舎群と都市計画道路との空間は、修景される緑地とすることとした。そしてアプローチ道路、構内道路、運動場スペース、校舎群のボリウム、保存緑地の確保、切土量と盛土量のバランス等諸条件を勘案して、標高九〇メートルの頂点から標高七〇メートルラインまでの土を切り取ることとした。(図二、表一)

この結果、礼拝堂は広場の北部中央に位置し、中学校・高等学校の校舎群は北西部に、大学・短期大学の校舎群は、敷地東寄りに学生の移動線の軸上に広場を囲んでS字にのびる配置が考えられた。都市計画道路に面した盛土の深い場所にグラウンド、その南側に体育館を配置することとした。幼稚園は、敷地南側の小さな丘を用地とし、他のゾーンから離れた位置と



図一



図二　土地造成図

した。

大学・短期大学の校舎は、各科の要望規模と独自性を配慮し、各パートを独立した一個の建築物とし、地上階と中間階に屋外・屋内渡廊下を設け結びつけることとした。しかも各科共通に使用される講義館を中心に置くことにより移動線の短縮化をはかり、寒冷期・雨天時の動線を確保した。

中学校・高等学校の場合は、同種機能をもつ諸室のグループ化をはかると同時に、これらを有機的に結びつける必要があり、結局六つのグループ化された個体が、それぞれ質を高めながら集合し、一つの集合体として機能するよう計画された。

体育館は、中学校・高等学校、大学・短期大学それぞれのフロアーを持ち、さらに共用の室内プールを設置するが、大きいボリウムであるため、標高七〇メートルラインから三メートル下げて六七メートルラインに建てることとした。体育館には将来都市計画道路からの騒音に対する遮音効果としての役割をも期待した。幼稚園も外部騒音に対する配慮をし、都市計画道路に背を向けた形とし、保育室の窓は、保存緑地に向って開くこととした（図三）。

設備設計にあたっては、学校運営上特に設備の運営、維持に重点をおき省力化、経済性、安全性の三原則を踏まえることとした。即ち一つはエネルギー供給熱源装置、情報源設備等の中央集中化をはかり、セントラル・パワーステーションを構内のほぼ中央に位置する講義館に、また各棟グループ別九ヶ所にサブ・ステーションを設けることとした。また共同溝を採用して、電気・都市ガス、水、暖房用熱源、電話線等のエネルギー供給の幹線を収容することとした。暖房設備は、温水暖房方式を採用し省エネルギーを図り、ボイラーの運転台数もキャンパスの全体負荷に応じ自動制御されるようにした。また、給水設備では、市水と井水の二系統とし、加圧給水により高架水槽は最少限の設備にとどめた。なお、排水方式は、生活排水系路と雨水排水系路と実験排水系路の三



図三　校舎配置計画図

1. 礼拝堂
2. 人文館
3. 保育実習館
4. 講義館
5. 図書館
6. 大学講堂及学生センター
7. 家政館
8. 音楽館
9. 中学校・高等学校
10. 体育館
11. 幼稚園
12. 本館
13. 同窓会館
14. 中高寮
15. 守衛所

つとした。

以上の基本構想に基づく基本設計図面により各棟別の関係教職員とヴォーリズ設計事務所担当者と建設本部の協議が何度も繰り返され、建物十五棟、延床面積五八、〇〇〇㎡の実施設計が完了したのは、一九七五(昭和五十)年十二月であった。建設委員会発足以来、基本構想から基本設計、そして実施設計が終るまでの期間は二年数ヶ月を要した。(表二各棟延床面積表)

実施設計完了と同時に、施工業者の選定に入り、熊谷組・東海興業共同企業体及び竹中工務店・清水建設共同企業体に対し実施設計図書による新キャンパス建設工事見積り依頼の結果、「熊谷組・東海興業共同企業体」に施工を依頼することに決定し、工事請負仮契約の調印を行ったのは一九七六(昭和五十一)年九月であった。

一九七七(昭和五十二)年三月、キャンパス用地である国有地(現校地　桜ヶ丘九丁目一番一号～四番)が払下げとなり、宮城学院への移転登記を完了した。これにより市の開発関係諸課に対し現地説明会を行ない、開発事前協議に入った。しかし用地は市街化調整区域のままであったため工事の着工ができない状態であったが、同年七月、線引き変更となり用地内の保存緑地を除き市街化区域として第二種住居専用地域の指定となった。この間、県より用地周辺地域の水質、植生等に関する環境影響評価調査の指示を受け、同調査書を提出し、了承を得て、市に開発申請書を提出したのは同年十二月であった。

そして翌一九七八(昭和五十三)年四月、開発申請が許可された。同年七月、熊谷組・東海興業共同企業体と工事請負本契約を調印する運びとなり、総合移転建設仕事初めの式が行なわれたのは八月であった。しかし本契約の際、諸物価高騰等のため礼拝堂の建設は延期することとなった。

なお、この年六月、宮城県沖地震が発生し、仙台市を中心に大きな災害をもたらすこととなったが、建設現場では建築工事に着手していない段階であったので被害を受けることはなかった。しかしこの地震を契機に市の建

表2　各棟延床面積表

棟名	構造	階数	延床面積
本館	RC	3階	1,890 m²
同窓会館	RC	2	517
人文館	RC	5	4,302
保育実習館	RC	2	1,567
講義館	RC(一部SRC)	6	11,013
大学図書館	SRC	3	1,897
大学講堂	SRC	2	2,214
学生センター	RC(一部SRC)	4	2,637
家政館	RC	4	6,445
音楽館	RC(一部SRC)	3	2,287
中学校・高等学校	RC(一部SRC)	6	13,518
体育館	S(一部RC)	2	5,331
礼拝堂	SRC	2	885
幼稚園	RC	1	815
中高寮	RC	3	1,500
			1,742

築指導により建築物等の設計構造の見直しを余儀なくされ、耐力壁、柱、鉄筋等に関する設計を変更し強化することとなった。むしろ幸いなことであったといえよう。

また、建設工事にともなう夥しい車輌の通行により予想される町内地域住民との事故紛争防止及び道路の改修について桜ヶ丘地区連合町内会との話し合いが続けられていたが、一九七七（昭和五十二）年八月、協定書の締結を行なうことができた。また汚水処理については、はじめ学校自前の汚水処理施設の設置の方向で検討されていたが、仙台市・泉市の協力により昭和六十年度まで加茂団地内の公共汚水処理場へ、移送処理をしてもらうこととなった。

一九七八（昭和五十三）年九月、土地造成工事の完了公告前の建築承認を受け、建築確認申請を開始し、十月には起工式が行なわれ、いよいよ本格的に建築工事に着手することとなった。同年十二月、幼稚園園舎の建設を皮切りに、

翌年三月に家政館、音楽館、中学校・高等学校の校舎の建築に着手した。続いて五月に図書館、六月に講堂・学生センター、七月に人文館、八月に保育実習館、九月に同窓会館、十一月に本館、体育館、講義館、十二月に中高寮の建築工事が着工となり、桜ヶ丘には建設の槌音が響き渡った。この後、契約の際礼拝堂の建設を延期していたが本工事期間内に規模縮少により施工することが決定されたこと、講義館五階建が六階建に変更されたこと、また大学寮が長命ヶ丘用地に建設されることになったこと等、工期中種々の小変更があったが十五棟に及ぶ建設が終了したのは、一九八〇（昭和五十五）年九月であった。建設委員会誕生から落成まで実に七年の歳月を要したことになる（図四）

総合移転計画立案の段階から懸念されていた移転後の教職員・学生・生徒らの通勤通学のための交通については、仙台市交通局及び宮城交通株式会社との間で一九七三（昭和四十八）年より折衝が続けられていたが、学校側に対し受益者負担として、大型乗合自動車（バス）の購入資金の一部負担、停留所施設の設置及びUターンに必要な用地の確保等の条件が付された。ほどなく、本学院校門前までのバス路線が新設または延長され、新校地への通勤通学の足が引越し直前に確保され、交通問題は一応の解決を見た。

引越し作業は、日本通運株式会社に委嘱され八月初めより作業を開始したが、什器約一九、〇〇〇点、物品を収納したダンボール箱等約一三、〇〇〇点、ピアノ・オルガン一一〇台、実験実習室の物品約七、〇〇〇点等の輸送は、トラック、クレーン車等延五〇〇台が動かされ、日曜祝祭日も休まず続けられた。その間、工事完了前の建物もあり、搬入経路等について毎日打合せを行なうなど苦労も多かったが十月初旬に無事に完了した。なお、大講堂に設置されていたパイプオルガンの移転は八月より解体移送を行ない十二月組立移設を完了した。

八月下旬には受電・給水が開始され、開発行為の工事検査済証の交付を受けた。続いて九月中には、すべての建物の検査済証が交付され、短大付属幼稚園は九月一日より、中学校・高等学校は九月四日より、また、大学・



図四　新キャンパス完成図

A ——本館
B ——同窓会館
C_1 ——人文館
C_2 ——保育科実習館
D ——講義館
E ——大学図書館
F_1 ——大学講堂
F_2 ——学生センター
G ——家政館
H ——音楽館
I ——中学校・高等学校
J ——幼稚園
K ——大学体育館
　　中高体育館
　　屋内プール
L ——礼拝堂
M ——中高寮
a ——守衛所
b ——ガスガバナー室
c ——温室
d ——特殊排水槽
e ——吐水孔
f ——排水ポンプ室

短期大学は十月一日よりそれぞれ使用を開始した。

こうして、清水前学院長はじめ関係スタッフの筆舌に尽くし難い労苦は、みごとに実ったのである。

新校地の植物と鳥類

一、はじめに

本校地は、仙台市街の北西部にひろがる一連の丘陵地帯の一部にあり、遠く西には大東岳、船形山、北には泉ヶ岳、七ツ森などの山々が、近くには西の青葉山、北の国見峠などが望まれる場所にある（東経一四〇度五一分北緯三八度一八分）。

一九八〇（昭和五十五）年、市中心部の旧校地からこの地に移ったとき、私たちは立派な校舎と、それをとりまく緑の美しさに強い感銘をうけた。

丘陵地帯というのは、平野の水田地帯から標高三〇〇メートル内外までの地域を言うが、宮城県の場合、気候条件などから考えて、これらの丘陵地帯は、もし人手を加えずに植物を自然の成育にまかせた状態におけば、モミ・イヌブナを主とする森林が形成されると考えられている。

しかし、そのような森林は、仙台近郊では、太白山近くの佐保山、青葉山の東北大学付属植物園に残っているだけであり、本校の緑地（保存緑地）は、規模は小さいがその一部に佐保山などのそれに近い状態が残されている部分があり、仙台北西部に僅かに残された貴重なものとなっている。

このように、校地には豊かな緑が保存されているので、当然、そこには動物もかなり豊富なことが予想される。しかし、動物全般については未調査であるので、一応観察し得た鳥類についてのみふれることにする。

ここでは、校地造成前後の植生[註一]の概略についてのべ、さらに移転後に調査した植物相[註二]、鳥類について記し、また、その中のいくつかの種類について解説する。なお、調査は一九八〇年から一九八三年にかけて行なった。

今回の調査に当っては、多くの方々のご協力を頂いた。特に、尚絅女学院短期大学の木村中外教授には、植物の同定などについて、多大のご指導を頂いた。これらの方々に心から感謝申し上げる。

二、造成前後の植生

一九七七（昭和五十二）年の調査[1]によれば、校地予定地は次の四つの群落[註三]から成り立っており、その内容および現況の概略は次の通りである。（図一）

(イ) アカマツ・コナラ林

コナラ林が過度に伐採された跡地に、アカマツが侵入して成立したと思われる林で、調査地のおよそ半分以上の面積を占めていた。校舎などの建造物は、主にこの林を造成した跡地につくられ、現在では保存緑地の東・南側にその一部が残っている。

(ロ) コナラ林

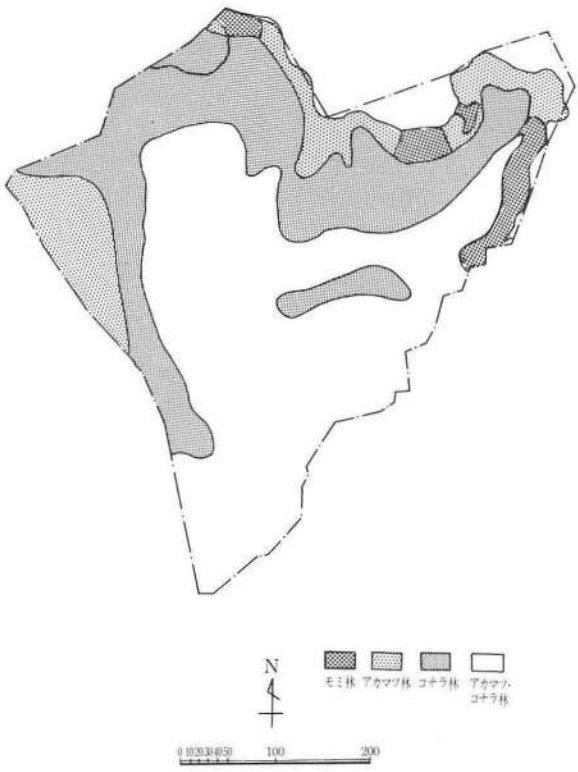
（一）でのべたモミ・イヌブナ林をくり返し伐採した跡地に二次的に成立した林で、保存緑地の北側に一部が残っている。

(ハ) アカマツ林

(イ)のアカマツ・コナラ林のアカマツだけを残して伐採し、育てることで成立した林で、大径木のアカマツによって構成されており、ほとんどが、保存緑地の北側に残っている。

(二)　モミ林

前述の通り、宮城県の丘陵地帯では、自然状態ではモミ・イヌブナを主とする森林が形成されるが、校地のモミ林はその状態に近い組成をしめし、この地域では、極めて貴重なものとなっている。幸い、保存緑地の北・東部にほとんどそのままの姿で残っている。この植生調査では、四三科、九四種の維管束植物が報告されている。[註四]



図一

造成前の植生、残された保存緑地の概略は以上の通りである。

保存緑地は、校地面積の三五パーセントを占め、校地の外縁を西から北・南と、幅およそ五〇メートルの帯状にとりかこんでいる。その中には、延長約二キロメートルに及ぶ、起状にとんだ遊歩道が設けられており、動植物の観察や散策に絶好の場所となっている。なお、保存緑地以外にも、校庭、運動場、道路沿いなどにシバ、クロマツなど多くの植物が植栽されて景観の美化に役立っているが、これらの場所には帰化植物[註五]の侵入も著しい。

三、所産植物

維管束植物（変・品種を含む）三五四種を収録した。配列はシダ植物、裸子植物、被子植物の順に並べ、被子植物は単子葉植物、双子葉植物・離弁花類、同・合弁花類の順とした。科の配列は、シダ植物は田川基二[2]に、種子植物は大井次三郎[3]に従った。

学名はほとんど前記の田川、大井によったが、一部は他によった。なお、目録中、和名の後にかっこ内に栽としたものは、移転時に植栽したものである。

所産植物目録

PTERIDOPHYTA　シダ植物

Equisetaceae　トクサ科

1. Equisetum arvense L.　スギナ

Osmundaceae　ゼンマイ科

2. Osmunda japonica Thunb.　ゼンマイ

Pteridiaceae　イノモトソウ科

3. Pteridium aquilinum (L.) Kuhn var. latiusculum (Desv.) Und.　ワラビ
4. Adiantum pedatum L.　クジャクシダ

Aspidiaceae　オシダ科

5. Matteuccia orientalis (Hook.) Trev.　イヌガンソク
6. Polystichopsis standishii (Moore) Tagawa　リョウメンシダ
7. Dryopteris sabaei (Fr. et Sav.) C. Chr.　ミヤマイタチシダ
8. D. chinensis (Bak.) Koidz.　ミサキカグマ
9. Lastrea japonica (Bak.) Copel.　ハリガネワラビ
10. Leptogramma mollissima (Fisch.) Ching　ミゾシダ
11. Athyrium yokoscense (Fr. et Sav.) Christ　ヘビノネコザ
12. A. conilii (Fr. et Sav.) Tagawa　ホソバシケシダ

Blechnaceae　シシガシラ科

13. Struthiopteris nipponica (Kunze) Nakai　シシガシラ

Polypodiaceae　ウラボシ科

14. Lepisorus thunbergianus (Kaulf.) Ching　ノキシノブ

SPERMATOPHYTA　種子植物

GYMNOSPERMAE　裸子植物

Ginkgoaceae　イチョウ科

15. Ginkgo biloba Linn.　イチョウ（栽）

Taxaceae　イチイ科

16. Torreya nucifera (Linn.) Sieb. et Zucc.　カヤ

17. Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.　イチイ（栽）

Pinaceae　マツ科

18. Abies firma Sieb. et Zucc.　モミ

19. Picea Abies Karsten　ドイツトウヒ（栽）

20. Cedrus deodara (Roxb.) Loud.　ヒマラヤスギ（栽）

21. Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　アカマツ

22. P. thunbergii Parlat.　クロマツ

23. P. palustris Mill.　ダイオウマツ（栽）

Taxodiaceae　スギ科

24. Sciadopitys verticillata (Thunb.) Sieb. et Zucc.　コウヤマキ（栽）
25. Metasequoia glyptostroboides Hu et Cheng　メタセコイア（栽）
26. Cunninghamia lanceolata (Lamb.) Hooker　コウヨウザン（栽）

Cupressaceae　ヒノキ科

27. Thuja orientalis Linn.　コノテガシワ（栽）
28. Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. apud Endl.　ヒノキ（栽）
29. C. pisifera (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. apud Endl.　サワラ（栽）
30. C. pisifera (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc. apud Endl. var. squarrosa (Sibe. et Zucc.) Beissn. et Hochst.　ヒムロ（栽）
31. C. obtusa Endl. var. breviramea Mast.　チャボヒバ（栽）
32. Juniperus rigida Sieb. et Zucc.　ネズ（栽）
33. J. chinensis Linn.　イブキ（栽）

ANGIOSPERMAE　被子植物

MONOCOTYLEDONEAE　単子葉植物

Typhaceae　ガマ科

34. Typha latifolia Linn.　ガマ

Alismataceae　オモダカ科

35. Alisma canaliculatum A. Br. et Bouché　ヘラオモダカ

Gramineae　イネ科

36. Phyllostachys aurea Carr. ex. A. et C. Riviére　ホテイチク（栽）
37. Sasamorpha borealis (Hack.) Nakai　スズタケ
38. Pleioblastus chino (Franch. et Savat.) Makino　アズマネザサ
39. Alopecurus aequalis Sobol.　スズメノテッポウ
40. Calamagrostis pseudo-phragmites (Haller fil.) Koeler　ホッスガヤ
41. Lolium multiflorum Lamarck　ネズミムギ
42. Festuca ovina Linn.　ウシノケグサ
43. Poa annua Linn.　スズメノカタビラ
44. Eragrostis ferruginea (Thunb.) Beauv.　カゼクサ
45. Zoysia japonica Steud.　シバ
46. Setaria viridis (Linn.) Beauv.　エノコログサ
47. S. glauca (Linn.) Beauv.　キンエノコログサ
48. Sacciolepis indica (Linn.) Chase var. oryzetorum (Makino) Ohwi　ヌメリグサ
49. Digitaria adscendens (H. B. K.) Henry　メヒシバ
50. Paspalum thunergii Kunth　スズメノヒエ
51. Oplismenus undulatifolius (Ard.) Roemer et Schultes var. japonicus (Stend.) Koidz.　チヂミザサ
52. Echinochloa crus-galli (Linn.) Beauv.　イヌビエ

53. Miscanthus sinensis Anderss.　ススキ
54. Microstegium japonicum (Miq.) Koidz. var. borelae (Ohwi) Ohwi　キタササガヤ
55. Arthraxon hispidus (Thunb.) Makino　コブナグサ

Cyperaceae　カマツリグサ科

56. Cyperus brevifolius (Rottb.) Hassk. var. leiolepis (Fr. et Sav.) T. Koyama　ヒメクグ
57. C. microiria Steud.　カヤツリグサ
58. C. amuricus Maxim.　チャガヤツリ
59. C. difformis Linn.　タマガヤツリ
60. Scirpus wichurae Böcklr.　アブラガヤ
61. Carex incisa Boott　カワラスゲ
62. C. dolichostachya Hayata var. glaberrima (Ohwi) T. Koyama　ミヤマカンスゲ
63. C. conica Boott　ヒメカンスゲ
64. C. lasiolepis Franch.　アズマスゲ
65. C. floribunda (Korsh.) Meinsh　ヒカゲスゲ
66. C. siderosticata Hance　タガネソウ
67. C. ischnostachya Steud.　ジュズスゲ
68. C. rhizopoda Maxim.　シラコスゲ
69. C. doniana Spreng.　シラスゲ

Commelinaceae　ツユクサ科

70. Commelina communis Linn.　ツユクサ
71. Aneilema keisak Hassk.　イボクサ

Juncaceae　イグサ科

72. Juncus effusus Linn. var. decipiens Buchen.　イ
73. J. papillosus Franch. et Savat.　アオコウガイゼキショウ

Liliaceae　ユリ科

74. Heloniopsis orientalis (Thunb.) C. Tanaka　ショウジョウバカマ
75. Veratrum maackii Regel var. parviflorum (Miq.) Hara et Mizushima　アオヤギソウ
76. Tricyrtis affinis Makino　ヤマジノホトトギス
77. Hosta albo-marginata (Hook.) Ohwi　コバギボウシ
78. Lilium auratum Lindl.　ヤマユリ
79. Erythronium japonicum Decne.　カタクリ
80. Polygonatum odoratum (Mill.) Druce var. pluriflorum (Miq.) Ohwi　アマドコロ
81. Maianthemum dilatatum (Wood.) Nels. et Macbr.　マイヅルソウ
82. Disporum smilacinum A. Gray　チゴユリ
83. Paris tetraphylla A. Gray　ツクバネソウ
84. Liriope minor (Maxim.) Makino　ヒメヤブラン
85. Aletris luteoviridis (Maxim.) Franch.　ノギラン

86. Smilax china Linn.　サルトリイバラ
87. Yucca smalliana Fernald　イトラン（栽）

Dioscoreaceae　ヤマノイモ科

88. Dioscorea tokoro Makino　オニドコロ

Iridaceae　アヤメ科

89. Iris gracilipes A. Gray　ヒメシャガ

Orchidaceae　ラン科

90. Cephalanthera erecta (Thunb.) Blume　ギンラン
91. Epipactis thunbergii A. Gray　カキラン
92. Spiranthes sinensis (Pers.) Ames　ネジバナ
93. Liparis krameri Franch. et Savat.　ジガバチソウ
94. Cymbidium goeringii (Reichb. fil.) Reichb. fil.　シュンラン

DICOTYLEDONEAE　双子葉植物

CHORIPETALAE　離弁花類

Saururaceae　ドクダミ科

95. Houttuynia cordata Thunb.　ドクダミ

Salicaceae　ヤナギ科

96. Salix bakko Kimura　バッコヤナギ
97. S. vulpina Anders.　キツネヤナギ
98. S. sachalinensis Fr. Schm.　オノエヤナギ
99. S. integra Thunb.　イヌコリヤナギ

Betulaceae　カバノキ科

100. Carpinus laxiflora (Sieb. et Zucc.) Blume　アカシデ
101. Corylus heterophylla Fischer var. thunbergii Blume　ハシバミ
102. Betula platyphylla Sukatchev var. japonica (Mig.) Hara　シラカバ（栽）
103. Alnus hirsuta Turcz. var. sibirica (Fischer) C. K. Schn.　ヤマハンノキ
104. A. japonica (Thunb.) Steud.　ハンノキ

Fagaceae　ブナ科

105. Fagus japonica Maxim.　イヌブナ
106. Quercus serrata Thunb.　コナラ
107. Castanea crenata Sieb. et Zucc.　クリ

Ulmaceae　ニレ科

108. Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ケヤキ（栽）

Moraceae　クワ科

109. Broussonetia kazinoki Sieb.　コウゾ
110. Humulus scandens (Lour.) Merrill　カナムグラ
111. H. lupulus Linn. var. cordifolius (Miq.) Maxim.　カラハナソウ

Santalaceae　ビャクダン科

112. Buckleya lanceolata (Sieb. et Zucc.) Miq.　ツクバネ

Aristolochiaceae　ウマノスズクサ科

113. Asarum sieboldii Miq.　ウスバサイシン

Polygonaceae　タデ科

114. Rumex acetosella Linn.　ヒメスイバ
115. R. japonicus Houtt.　ギシギシ
116. Polygonum filiforme Thunb.　ミズヒキ
117. P. thunbergii Sieb. et. Zucc.　ミゾソバ
118. P. sieboldii Meisn.　アキノウナギツカミ
119. P. nepalense Meisn.　タニソバ
120. P. lapathifolium Linn.　オオイヌタデ
121. P. scabrum Moench　サナエタデ
122. P. longisetum De Bruyn　イヌタデ

123. P. cuspidatum Sieb. et Zucc. イタドリ

Chenopodiaceae アカザ科

124. Chenopodium album Linn. var. centrorubrum Makino アカザ

125. C. ambrosioides Linn. ケアリタソウ

Amaranthaceae ヒユ科

126. Achyranthes japonica (Miq.) Nakai ヒカゲイノコズチ

Phytolaccaceae ヤマゴボウ科

127. Phytolacca americana Linn. ヨウシュヤマゴボウ

Caryophyllaceae ナデシコ科

128. Spergularia rubra (Linn.) Presl ウスベニツメクサ

129. Sagina japonica (Sw.) Ohwi ツメクサ

130. Cerastium glomeratum Thuill. オランダミミナグサ

131. Stellaria aquatica (Linn.) Scop. ウシハコベ

132. S. media (Linn.) Villars コハコベ

133. S. alsine Grimm var. undulata (Thunb.) Ohwi ノミノフスマ

134. Dianthus armeria Linn. ノハラナデシコ

135. Silene gallica Linn. var. quinquevulnera (Linn.) Rohrb. マンテマ

Nymphaeaceae　スイレン科

136. Nymphaea tetragona Georgi　ヒツジグサ

Ranunculaceae　キンポウゲ科

137. Rnunculus silerifolius Lév.　キツネノボタン

138. Cimicifuga simplex Wormsk.　サラシナショウマ

139. C. acerina (Sieb. et Zucc.) C. Tanaka　オオバショウマ

140. Coptis japonica (Thunb.) Makino var. dissecta (Yatabe) Nakai　セリバオウレン

Lardizababalaceae　アケビ科

141. Akebia trifoliata (Thunb.) Koïdz.　ミツバアケビ

Berberidaceae　メギ科

142. Epimedium grandiflorum Morr. var. thunbergianum (Miq.) Nakai　イカリソウ

143. Mahonia japonica (Thunb.) DC.　ヒイラギナンテン（栽）

Magnoliaceae　モクレン科

144. Magnolia obovata Thunberg　ホウノキ

145. M. kobus DC.　コブシ（栽）

146. M. liliflora Desr.　モクレン（栽）

147. M. denudata Desr.　ハクモクレン（栽）

148. Schisandra repanda (Sieb. et Zucc.) Radlk. マツブサ

Lauraceae クスノキ科

149. Lindera umbellata Thunb. クロモジ
150. L. umbellata Thunb. var. membranacea (Maxim.) Momiyama オオバクロモジ
151. Neolitsea sericea (Blume) Koidz. シロダモ
152. Laurus nobilis Linn. ゲッケイジュ（栽）

Papaveraceae ケシ科

153. Macleaya cordata (Willd.) R. Br. タケニグサ

Cruciferae アブラナ科

154. Thlaspi arvense Linn. グンバイナズナ
155. Cardamine flexuosa With. タネツケバナ
156. Rorippa islandica (Oeder) Borbás スカシタゴボウ
157. R. sylvestris (L.) Besser キレバイヌガラシ
158. Capsella bursa-pastoris (Linn.) Medic. ナズナ
159. Descurainia sophia (Linn.) Webb ex Prantl クジラグサ

Crassulaceae ベンケイソウ科

160. Sedum bulbiferum Makino コモチマンネングサ

Saxifragaceae　ユキノシタ科

161. Astilbe thunbergii (Sieb. et Zucc.) Miq.　アカショウマ
162. A. thunbergii (Sieb. et Zucc.) Miq. var. congesta H. Boiss.　トリアシショウマ
163. Hydrangea paniculata Siebold　ノリウツギ
164. H. macrophylla (Thunb.) Ser.　アジサイ

Hamamelidaceae　マンサク科

165. Hamamelis japonica Sieb. et Zucc.　マンサク

Rosaceae　バラ科

166. Stephanandra incisa (Thunb.) Zabel　コゴメウツギ
167. Aruncus dioicus (Walt.) Fernald var. tenuifolius (Nakai) Hara　ヤマブキショウマ
168. Potentilla fragarioides Linn. var. major Maxim.　キジムシロ
169. P. freyniana Bornm.　ミツバツチグリ
170. Rubus microphyllus Linn. fil.　ニガイチゴ
171. R. crataegifolius Bunge　クマイチゴ
172. R. palmatus Thunb. var. coptophyllus (A. Gray) Koidz.　モミジイチゴ
173. Rosa wichuraiana Crép.　テリハノイバラ
174. Prunus mume Sieb. et Zucc.　ウメ（栽）
175. P. apetala (Sieb. et Zucc.) Franch. et Savat.　チョウジザクラ
176. P. apetala (Sieb. et Zucc.) Franch. var. pilosa (Koidz.) Wilson　オクチョウジザクラ

177. P. pendula Maxim. forma pendula　イトザクラ（栽）
178. P. verecunda Koehne　カスミザクラ
179. P. grayana Maxim.　ウワミズザクラ
180. Malus sieboldii (Regel) Rehder　ズミ
181. Amelanchier asiatica (Sieb. et Zucc.) Endl.　ザイフリボク
182. Pourthiaea villosa (Thunb.) Decne. var. laevis (Thunb.) Stapf　カマツカ
183. Chaenomeles speciosa (Sweet) Nakai　ボケ（栽）
184. C. sinensis (Thouin) Koehne　カリン（栽）
185. Sorbus commixta Hedl.　ナナカマド（栽）
186. S. alnifolia (Sieb. et Zucc.) C. Koch　アズキナシ
187. Pyracantha angustifolia (Franchet) Schneider　タチバナモドキ（栽）

Leguminosae　マメ科

188. Albizia julibrissin Durazz.　ネムノキ（栽）
189. Lespedeza homoloba Nakai　ツクシハギ
190. L. thunbergii (DC.) Nakai　ミヤギノハギ（栽）
191. L. cuneata (Du Mont. d. Cours.) G. Don　メドハギ
192. Kummerowia striata (Thunb.) Schindler　ヤハズソウ
193. Pueraria lobata (Willd.) Ohwi　クズ
194. Amphicarpaea edgeworthii Benth. var. japonica Olivier　ヤブマメ
195. Wisteria floribunda (Willd.) DC.　フジ

196. Trifolium dubium Sibth. コメツブツメクサ
197. T. repens Linn. シロツメクサ
198. Medicago lupulina Linn. コメツブウマゴヤシ

Oxalidaceae カタバミ科

199. Oxalis corniculata Linn. カタバミ

Rutaceae ミカン科

200. Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC. サンショウ

Polygalaceae ヒメハギ科

201. Polygala japonica Houtt. ヒメハギ

Euphorbiaceae トウダイグサ科

202. Daphniphylum macropodum Miq. ユズリハ（栽）
203. Acalypha australis Linn. エノキグサ
204. Sapium japonicum (Sieb. et Zucc.) Pax et Hoffm. シラキ
205. Euphorbia supina Rafin. コニシキソウ

Anacardiaceae ウルシ科

206. Rhus trichocarpa Miq. ヤマウルシ

Aquifoliaceae　モチノキ科

207. Ilex macropoda Miq.　アオハダ
208. I. serrata Thunb.　ウメモドキ
209. I. crenata Thunb.　イヌツゲ

Celastraceae　ニシキギ科

210. Euonymus alatus (Thunb.) Sieb.　ニシキギ
211. E. oxyphyllus Miq.　ツリバナ

Staphyleaceae　ミツバウツギ科

212. Staphylea bumalda (Thunb.) DC.　ミツバウツギ

Aceraceae　カエデ科

213. Acer japonicum Thunb.　ハウチワカエデ
214. A. mono Maxim. forma dissectum (Wesmael) Rehd.　エンコウカエデ
215. A. rufinerve Sieb. et Zucc.　ウリハダカエデ

Hippocastanaceae　トチノキ科

216. Aesculus turbinata Blume　トチノキ

Sabiaceae　アワブキ科

217. Meliosma myriantha Sieb. et Zucc.　アワブキ

Vitidaceae.　ブドウ科

218. Cayratia japonica (Thunb.) Gagn.　ヤブガラシ

Actinidiaceae　マタタビ科

219. Actinidia arguta (Sieb. et Zucc.) Planch. et Miq.　サルナシ

220. A. polygama (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim.　マタタビ

Theaceae　ツバキ科

221. Camellia japonica Linn. var. hortensis (Makino) Makino　ツバキ（栽）

222. C. sasanqua Thunb.　サザンカ（栽）

223. Ternstroemia gymnanthera (Wight et Arn.) Beddome　モッコク（栽）

Guttiferae　オトギリソウ科

224. Hypericum laxum (Blume) Koidz.　コケオトギリ

225. H. erectum Thunb.　オトギリソウ

Violaceae　スミレ科

226. Viola eizanensis (Makino) Makino　エイザンスミレ

227. V. takedana Makino　ヒナスミレ
228. V. makinoi H. Boiss.　マキノスミレ
229. V. rostrata Muhl. var. japonica (W. Becker et H. Boiss.) Ohwi　ナガハシスミレ
230. V. grypoceras A. Gray　タチツボスミレ
231. V. grypoceras A. Gray var. pubescens Nakai　ケタチツボスミレ

Thymelaeaceae　ジンチョウゲ科
232. Daphne odora Thunberg　ジンチョウゲ（栽）

Lythraceae　ミソハギ科
233. Lagestroemia indica Linn.　サルスベリ（栽）

Punicaceae　ザクロ科
234. Punica Granatum Linn.　ザクロ（栽）

Onagraceae　アカバナ科
235. Epilobium pyrricholophum Franch. et Savat.　アカバナ
236. Oenothera erythrosepala Borbás　オオマツヨイグサ

Araliaceae　ウコギ科
237. Aralia elata (Miq.) Seemann　タラノキ

238. Panax japonicus C. A. Meyer　トチバニンジン
239. Fatsia japonica (Thunb.) Decne. et Planch.　ヤツデ（栽）
240. Acanthopanax spinosus (Linn. fil.) Miq.　ヤマウコギ
241. A. sciadophylloides Franch. et Savat.　コシアブラ
242. Evodiopanax innovans (Sieb. et Zucc.) Nakai　タカノツメ

Umbelliferae　セリ科

243. Spuriopimpinella calycina (Maxim.) Kitagawa　カノツメソウ
244. Sium sisarum Linn.　ムカゴニンジン

Cornaceae　ミズキ科

245. Aucuba japonica Thunb.　アオキ
246. Cornus kousa Buerger ex Hance　ヤマボウシ

GAMOPETALAE　合弁花類

Clethraceae　リョウブ科

247. Clethra barbinervis Sieb. et. Zucc.　リョウブ

Pyrolaceae　イチヤクソウ科

248. Pyrola japonica Klenze　イチヤクソウ
249. Monotropastrum globosum H. Andr. ex Hara　ギンリョウソウ

Ericaceae　ツツジ科

250. Tripetaleia paniculata Sieb. et Zucc.　ホツツジ
251. Rhododendron semibarbatum Maxim.　バイカツツジ
252. R. indicum (Linn.) Sweet　サツキツツジ（栽）
253. R. kaempferi Planch.　ヤマツツジ
254. R. wadanum Makino　トウゴクミツバツツジ
255. R. japonicum (A. Gray) Suringer　レンゲツツジ
256. Pieris japonica (Thunb.) D. Don　アセビ（栽）
257. Lyonia ovalifolia (Wall.) Drude var. elliptica (Sieb. et Zucc.) Hand. -Mazz.　ネジキ
258. Enkianthus perulatus (Miq.) Schneid.　ドウダンツツジ（栽）
259. Vaccinium hirtum Thunb.　ウスノキ
260. V. smallii A. Gray var. glabrum Koidz.　スノキ
261. V. oldhamii Miquel　ナツハゼ

Primulaceae　サクラソウ科

262. Lysimachia japonica Thunb.　コナスビ
263. L. clethroides Duby　オカトラノオ

Ebenaceae　カキノキ科

264. Diospyros kaki Thunb.　カキノキ（栽）

Symplocaceae　ハイノキ科

265. Symplocos chinensis (Lour.) Druce var. leucocarpa (Nakai) Ohwi forma pilosa (Nakai) Ohwi　サワフタギ

Styracaceae　エゴノキ科

266. Styrax japonica Sieb. et Zucc.　エゴノキ

Oleaceae　モクセイ科

267. Osmanthus aurantiacus (Makino) Nakai var. aurantiacus　キンモクセイ（栽）
268. O. heterophyllus (G. Don) P.S. Green　ヒイラギ（栽）
269. Forsythia suspensa (Thunb.) Vahl　レンギョウ（栽）
270. Syringa vulgaris Linn.　ムラサキハシドイ（栽）
271. Fraxinus sieboldiana Blume　マルバアオダモ

Gentianaceae　リンドウ科

272. Swertia japonica (Schult.) Makino　センブリ
273. Gentiana thunbergii (G. Don) Griseb.　ハルリンドウ
274. G. zollingeri Fawcett　フデリンドウ
275. G. scabra Bunge var. buergeri (Miq.) Maxim.　リンドウ
276. Tripterospermum japonicum (Sieb. et Zucc.) Maxim.　ツルリンドウ

Apocynaceae　キョウチクトウ科

277. Nerium indicum Mill.　キョウチクトウ（栽）

Asclepiadaceae　ガガイモ科

278. Metaplexis japonica (Thunb.) Makino　ガガイモ

Convolvulaceae　ヒルガオ科

279. Calystegia japonica Choisy　ヒルガオ

Boraginaceae　ムラサキ科

280. Omphalodes krameri Franch. et Savat.　ルリソウ

Verbenaceae　クマツヅラ科

281. Callicarpa japonica Thunb.　ムラサキシキブ

282. C. mollis Sieb. et Zucc.　ヤブムラサキ

Labiatae　シソ科

283. Ajuga yesoensis Maxim.　ニシキゴロモ

284. Prunella vulgaris Linn. var. lilacina (Nakai) Nakai　ウツボグサ

285. Lamium purpureum Linn.　ヒメオドリコソウ

286. Salvia lutescens Koidz. var. intermedia (Makino) Murata　ナツノタムラソウ

287. S. nipponica Miq. キバナアキギリ
288. Mosla dianthera (Hamilt.) Maxim. ヒメジソ
289. Lycopus lucidus Turcz. シロネ
290. Clinopodium gracile (Benth.) O. Kuntze トウバナ
291. Elsholtzia ciliata (Thunb.) Hylander ナギナタコウジュ
292. Plectranthus inflexus (Thunb.) Vahl ex Benth. ヤマハッカ

Scrophulariaceae ゴマノハグサ科

293. Mazus miquelii Makino ムラサキサギゴケ
294. Veronica persica Poir. オオイヌノフグリ
295. V. didyma Tenore var. lilacina (Hara) Yamazaki イヌノフグリ

Bignoniaceae ノウゼンカズラ科

296. Campsis grandiflora (Thunb.) K. Schumann ノウゼンカズラ（栽）

Plantaginaceae オオバコ科

297. Plantago asiatica Linn. オオバコ
298. P. lanceolata Linn. ヘラオオバコ

Rubiaceae アカネ科

299. Paederia scandens (Lour.) Merrill var. mairei (Léveillé) Hara ヘクソカズラ

300. Mitchella undulata Sieb. et Zucc.　ツルアリドウシ
301. Rubia akane Nakai　アカネ
302. Galium spurium Linn. var. echinospermon (Wallr.) Hayek　ヤエムグラ
303. G. pseudo-asprellum Makino　オオバノヤエムグラ
304. G. pogonanthum Franch. et Savat.　ヤマムグラ
305. Sherardia arvensis Linn.　ハナヤエムグラ

Caprifoliaceae　スイカズラ科

306. Sambucus sieboldiana (Miq.) Blume ex Graebn.　ニワトコ
307. Viburnum plicatum Thunb. var. tomentosum (Thunb.) Miq.　ヤブデマリ
308. V. dilatatum Thunb.　ガマズミ
309. V. wrightii Miq.　ミヤマガマズミ
310. V. phlebotrichum Sieb. et Zucc.　オトコヨウゾメ
311. V. awabuki K. Koch　サンゴジュ（栽）
312. Abelia spaphulata Sieb. et Zucc.　ツクバネウツギ
313. Weigela hortensis (Sieb. et Zucc.) K. Koch　タニウツギ

Campanulaceae　キキョウ科

314. Peracarpa carnosa (Wall.) Hook. fil. et Thoms. var circaeoides (Fr. Schm.) Makino　タニギキョウ
315. Lobelia chinensis Lour.　ミゾカクシ

Compositae　キク科

316. Gnaphalium affine D. Don　ハハコグサ
317. Carpesium gllossophylum Maxim.　サジガンクビソウ
318. C. koidzumii Makino　ホソバガンクビソウ
319. Leibnitzia anandria (Linn.) Turcz.　センボンヤリ
320. Pertya glabrescens Sch. Bip.　ナガバコウヤボウキ
321. P. triloba (Makino) Makino　オヤリハグマ
322. Ainsliaea apiculata Sch. Bip.　キッコウハグマ
323. A. acerifolia Schultz Bip. var. subapoda Nakai　オクモミジハグマ
324. Ambrosia artemisiifolia Linn. var. elatior (Linn.) Descourtils　ブタクサ
325. Eupatorium lindleyanum DC.　サワヒヨドリ
326. E. chinense Linn. var. simplicifolium (Makino) Kitam.　ヒヨドリバナ
327. Solidago virga-aurea Linn. var. asiatica Nakai　アキノキリンソウ
328. Erigeron philadelphicus Linn.　ハルジオン
329. E. annuus (Linn.) Pers.　ヒメジョオン
330. E. bonariensis Linn.　アレチノギク
331. E. canadensis Linn.　ヒメムカシヨモギ
332. Aster scaber Thunb.　シラヤマギク
333. A. ageratoides Turcz. var. ovatus (Franch. et Savat.) Nakai　ノコンギク
334. Petasites japonicus (Sieb. et Zucc.) Maxim.　フキ
335. Ligularia dentata (A. Gray) Hara　マルバダケブキ

336. Senecio vulgalis Linn. ノボロギク
337. S. integrifolius (Linn.) Clairville var. spathulatus (Miq.) Hara オカオグルマ
338. Cacalia delphiniifolia Sieb. et Zucc. モミジガサ
339. C. farfaraefolia Sieb. et Zucc. var. bulbifera (Maxim.) Kitam. タマブキ
340. Achillea millefolium Linn. セイヨウノコギリソウ
341. Centipeda minima (Linn.) A. Braun et Aschers トキンソウ
342. Artemisia princeps Pampan. ヨモギ
343. Atractylodes japonica Koidz. ex Kitam. オケラ
344. Saussurea nipponica Miq. var sendaica (Franch.) Ohwi センダイトウヒレン
345. Lapsana humilis (Thunb.) Makino ヤブタビラコ
346. Hypochoeris radicata Linn. ブタナ
347. Picris hieracioides Linn. var. glabrescens (Regel) Ohwi コウゾリナ
348. Taraxacum officinale Weber セイヨウタンポポ
349. Ixeris debilis (Thunb.) A. Gray オオヂシバリ
350. I. dentata (Thunb.) Nakai ニガナ
351. Sonchus oleraceus Linn. ノゲシ
352. Youngia japonica (Linn.) DC. オニタビラコ
353. Y. denticulata (Houtt.) Kitam. ヤクシソウ
354. Erechtites hieracifolia (Linn.) Rafin. ダンドボロギク

解説

(A)　モミ（マツ科）

校地内では、アカマツとともに、もっとも目立つ樹木で、冬に雪をかぶった姿は、幻想的で美しい。谷間やゆるい傾斜地に多く、丸田沢沿いにある林は、緑地の中でいちばん山深い感じをあたえる所で、中には胸高直径[註六]が八四・七センチメートルに達するものもある。モミの葉の先端は、若木では鋭く二股にわかれているが、老木になるとほんの少し凹むだけになる。

(B)　アカマツ（マツ科）

幹の上部が赤褐色なのでこの名があり、自生のもののほかに、寺院、学校などでもよく植栽されており、また、昔は街道や神社の参道などに、並木として植えられた。樹皮や葉の感じが女性的なのでメマツ（雌松）ともよばれ、男性的なクロマツのオマツ（雄松）に対している。保存緑地の北側には、胸高直径が五六・五センチメートルに達するものがある。

(C)　コナラ（ブナ科）

春には若葉が銀色にかがやき、秋には赤味をおびた茶色の黄葉が美しい。銀色にかがやくのは、葉の両面に絹のような毛が生えているためであるが、この毛は葉が成熟すると落ちてしまう。雌花が成熟すると、いわゆるどんぐりになる。このどんぐりで独楽をつくったり、おわんで人形をつくったりする。形は似ても似つかぬものだが、クリのいがは、このおわんに相当する部分である。コナラの材は、昔から薪や炭を作るのに用いられてきた。校地の北側の緑地の中に残っており、いかにも雑木林らしい雰囲気をかもし出している。

(D)　マンサク（マンサク科）

高等学校の卒業式が終わって間もない三月上旬、日陰にまだ雪が残っている頃、日当りのよい所のマンサクの花が咲き出

し、春の最初の息吹きをつげてくれる。黄色で、細長い四枚の花弁が波をうったような独特な形をしている。材や樹皮の繊維が非常に強いので、昔は縄の代わりに薪をしばったりするのに用いられた。校地内にかなり数多くみられる。

(E) ウメモドキ（モチノキ科）

庭木としてもよく植えられる木で、校地内にもかなりの数がみられ、特に丸田沢の水際には見事な株がみられる。花は目立たないが、秋から初冬にかけて熟する径五ミリメートルぐらいの、丸くて赤い果実は光沢があり美しい。この果実は、ヒヨドリ、ツグミ、オナガなどの野鳥の好物で、季節がくると、みるみる間に実をたべつくして、木を裸にしてしまう。

(F) コシアブラ（ウコギ科）

秋の黄葉が美しい木で、長い柄の先に、手のひらをひろげたように五枚の小葉がついている（掌状複葉）[註七]。花は目立たないが、果実は秋になると黒く熟する。仙台地方で、春の彼岸に墓に供えるけずり花は、この木の枝の皮をはぎ、木の部分をけずってくるくる巻いたものを、イヌツゲの枝先に差し、赤く染めたものである。

(G) イヌツゲ（モチノキ科）

あまり目立たない木であるが、校地内ではふつうにみられる。庭木としてもよく植えられている。夏に小さな白い花をつけ、果実は秋になると紫黒色となる。むかし、櫛（くし）やそろばん玉などをつくったツゲと混同されるが、全く別の種類である。

(H) カタクリ（ユリ科）

マンサクの花が咲き出してから二ヶ月もすると、いよいよ春たけなわで、スミレやカタクリの季節となる。校地の中を、ことに、葉のまだ開かぬコナラ林をあるいていると、足もとに、紅紫色で先が強くそり返えったこの花が下向きに咲いている。カタクリが地上に葉や茎を出している期間は、僅か二ヶ月ぐらいのもので、まわりの木々がまだ葉を出ひろげる前に、

ふりそそぐ春の光をあびながら、せっせと光合成をして、養分を地下の球根に貯え翌春に備える。そして、木々の若葉が繁って、光が地面にとどかぬようになる頃には、地上部はもう働きを終えてしまう。このような生き方をしている植物を、早春植物とよんでいる。フクジュソウもその例である。地下の球根から片栗粉がとれ、若葉も食用になる。

(I)　エイザンスミレ（スミレ科）

花だけを見ると、すぐにスミレの仲間であると納得できるが、葉だけを見てはスミレとは思えないのが、このスミレである。花の時期には、葉が三つに分裂し、その両側の二枚がまた分裂して、全体として一枚の葉が五つに分れ、鳥の足のようにみえる。ところが、果実をつける頃には、これとは別に、三つに分裂した大きな葉が出てくる。花の色はふつう淡い紅紫色であるが、校地内のものは、白色でよく目立ち、大学図書館下の遊歩道にみられる。

(J)　ヒメシャガ（アヤメ科）

淡い紫色の花をつけるとアヤメの仲間で、シャガよりも小形で可憐な感じがする。カッコウが鳴くころ咲くというので、仙台でかっこう花と呼んでいる。校地のコナラ林の中などにみられ、また、愛子スクールハウスの広瀬川沿いの林の中にもみられた。

(K)　マイヅルソウ（ユリ科）

ヒメシャガと同じ頃に、白い小さな花を穂のようにつけ、果実は赤く熟する。葉脈の様子が、ツルの羽根をひろげた様子に見立てて名づけられた。丸田沢沿いのモミ林の、ほの暗いじめじめした場所に、数は多くないがまとまって生えており、まわりのモミとあいまって、山深い感じをかもし出している。

(L) ヤマジノホトトギス（ユリ科）

夏になると、遊歩道の両側は木や草が茂り合い、花の乏しい季節となる。蛇や蚊などにも悩まされるので、歩く人も少なくなる。それでも、ほの暗い道筋に、この花が咲き出すと、なんとなく秋の気配を感じるようになる。白色に紫の点々のついた花で、それがホトトギスの胸の斑点になぞらえられてこの名がついた。マイヅルソウもそうであるが、動物の名のついた植物はかなり多い。

(M) ミヤギノハギ（マメ科）

枝がよくのびてたれさがり、紅紫色の花をつける美しいハギで、公園、庭、学校などに植えられて、なじみの深いものである。木村有香博士[4]によれば、ミヤギノハギは野生のものはなく、古歌によまれた宮城野の萩とは別種であらうという。さらに、宮城野の萩は、キハギ、ツクシハギ、ヤマハギなどを主体としたものと考えられておられる。ミヤギノハギは、一九五四（昭和二十九）年に、宮城県の県花に選がれている。仙台市の市花は、一九七一（昭和四十六）年に選ばれたハギであるが、これには、ミヤギノハギ、ニシキハギ、ツクシハギ、ヤマハギなどのハギ類がふくまれている。

本校の校章のハギは、さだかではないが、宮城野の萩を図案化したものと考えられる。

（註 一）ある場所に生育している植物の集団で、その地域の代表植物によって特徴を表現する。
（註 二）特定の限られた地域に分布し生育する植物の種類で、その場所の全植物をリストに表わしたもの。
（註 三）植物が集団生活をしている状態で、例えば、森林、草原などがある。
（註 四）植物体内の水分や物質移動の通路となる組織である維管束をもつ植物で、シダ植物と種子植物がふくまれる。
（註 五）本来の生育地から、人類の媒介によって他の地域にもたらされて、そこで野生化し繁殖している植物。
（註 六）地上一・三メートルの高さで測った幹の直径。
（註 七）一枚の葉が二つ以上に分れた葉が複葉で、その一枚一枚を小葉といい、コシアブラでは五枚の小葉が、手のひらを拡げたような形となっているので、掌状複葉（しょうじょうふくよう）という。

参考文献

(1) 宮城学院　一九七七（昭和五十二）年　宮城学院建設に関する環境調査　宮城学院
(2) 田川基二　一九五九（昭和三十四）年　原色日本羊歯植物図鑑　保育社
(3) 大井次三郎　一九八三（昭和五十八）年　新日本植物誌　至文堂
(4) 木村有香　一九八〇（昭和五十五）年　野草園シリーズ四〇　仙台市公園協会
(5) 長田武正　一九七二（昭和四十七）年　日本帰化植物図鑑　北隆館
(6) 牧野富太郎　一九六一（昭和三十六）年　牧野新日本植物図鑑　北隆館
(7) 北村四郎他　一九七一（昭和四十六）年　原色日本植物図鑑木本編Ⅰ、Ⅱ　保育社
(8) 佐竹義輔他　一九八二（昭和五十七）年　日本の野生植物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ　平凡社
(9) 加藤多喜雄他　一九七八（昭和五十三）年　みやぎの自然　宝文堂
(10) 宮城植物の会　一九八〇（昭和五十五）年　宮城の自然をたずねて　第一法規

四、鳥　類

これまでの、校地付近の鳥類調査では、およそ八〇～一〇〇種の野鳥が報告されている。[1][2] 今回の調査では六三種（飼育一を含む）を認めたが、以前の調査より数が減少している。その原因は、調査対象を校地内だけに限定したこと、環境の変化によること、および調査が不十分であったことなどが考えられ、今後の継続調査が必要と考えられる。

目録の、分類学的配列、学名、和名は日本鳥学会編、日本鳥類目録改訂第五版[3]によった。

なお、目録中、かっこ内に飼としたものは、飼育しているものである。

鳥類目録

カイツブリ目	PODICIPEDIFORMES
カイツブリ科	PODICIPITIDAE
1. カイツブリ	Podiceps ruficollis (Pallas)
コウノトリ目	CICONIIFORMES
サギ科	ARDEIDAE
2. ゴイサギ	Nycticorax nycticorax (Linnaeus)
3. コサギ	Egretta garzetta (Linnaeus)
4. アオサギ	Ardea cinerea Clark
ガンカモ目	ANSERIFORMES
ガンカモ科	ANATIDAE
5. コブハクチョウ	Cygnus olor (Gmelin) (飼)
6. マガモ	Anas platyrhynchos Linnaeus
7. カルガモ	Anas poecilorhyncha J. R. Forster
8. コガモ	Anas crecca Linnaeus
9. オナガガモ	Anas acuta Linnaeus
10. ハシビロガモ	Anas clypeata Linnaeus
11. ホシハジロ	Aythya ferina (Linnaeus)

12. キンクロハジロ	Aythya fuligula (Linnaeus)
ワシタカ目	FALCONIFORMES
ワシタカ科	ACCIPITRIDAE
13. トビ	Milvus migrans (Boddaert)
ハヤブサ科	FALCONIDAE
14. ハヤブサ	Falco peregrinus Tunstall
キジ目	GALLIFORMES
キジ科	PHASIANIDAE
15. コジュケイ	Bambusicola thoracica (Temminck)
16. ヤマドリ	Phasianus soemmerringii Temminck
17. キジ	Phasianus colchicus Linnaeus
ツル目	GRUIFORMES
クイナ科	RALLIDAE
18. バン	Gallinula chloropus (Linnaeus)
チドリ目	CHARADRIIFORMES
シギ科	SCOLOPACIDAE
19. クサシギ	Tringa ochropus Linnaeus
20. イソシギ	Tringa hypoleucos Linnaeus
カモメ科	LARIDAE
21. カモメ	Larus canus Linnaeus
ハト目	COLUMBIFORMES

ハト科	COLUMBIDAE
22. キジバト	Streptopelia orientalis (Latham)
ホトトギス目	CUCULIFORMES
ホトトギス科	CUCULIDAE
23. カッコウ	Cuculus canorus Linnaeus
24. ホトトギス	Cuculus poliocephalus Latham
フクロウ目	STRIGIFORMES
フクロウ科	STRIGIDAE
25. フクロウ	Strix uralensis Pallas
ヨタカ目	CAPRIMULGIFORMES
ヨタカ科	CAPRIMULGIDAE
26. ヨタカ	Caprimulgus indicus Latham
ブッポウソウ目	CORACIIFORMES
カワセミ科	ALCEDINIDAE
27. ヤマセミ	Ceryle lugubris (Temminck)
28. カワセミ	Alcedo atthis (Linnaeus)
キツツキ目	PICIFORMES
キツツキ科	PICIDAE
29. アオゲラ	Picus awokera Temminck
30. アカゲラ	Dendrocopos major (Linnaeus)
31. コゲラ	Dendrocopos kizuki (Temminck)

スズメ目	PASSERIFORMES
ツバメ科	HIRUNDINIDAE
32. ツバメ	Hirundo rustica Linnaeus
33. イワツバメ	Delichon urbica (Linnaeus)
セキレイ科	MOTACILLIDAE
34. キセキレイ	Motacilla cinerea Tunstall
35. ハクセキレイ	Motacilla alba Linnaeus
36. セグロセキレイ	Motacilla grandis Sharpe
ヒヨドリ科	PYCNONOTIDAE
37. ヒヨドリ	Hypsipetes amaurotis (Temminck)
モズ科	LANIIDAE
38. モズ	Lanius bucephalus Temminck & Schlegel
ヒタキ科	MUSCICAPIDAE
ツグミ亜科	TURDINAE
39. コルリ	Erithacus cyane (Pallas)
40. ジョウビタキ	Phoenicurus auroreus (Pallas)
41. トラツグミ	Turdus dauma Latham
42. ツグミ	Turdus naumanni Temminck
ウグイス亜科	SYLVIINAE
43. ウグイス	Cettia diphone (Kittlitz)
44. オオヨシキリ	Acrocephalus arundinaceus (Linnaeus)

45. メボソムシクイ	Phylloscopus borealis (Blasius)
46. キクイタダキ	Regulus regulus Lamarck
ヒタキ亜科	MUSCICAPINAE
47. キビタキ	Ficedula narcissina (Temminck)
カササギヒタキ亜科	MONARCHINAE
48. サンコウチョウ	Terpsiphone atrocaudata (Eyton)
エナガ科	AEGITHALIDAE
49. エナガ	Aegithalos caudatus (Linnaeus)
シジュウカラ科	PARIDAE
50. ヒガラ	Parus ater Linnaeus
51. ヤマガラ	Parus varius Temminck & Schlegel
52. シジュウカラ	Parus major Linnaeus
メジロ科	ZOSTEROPIDAE
53. メジロ	Zosterops japonica Temminck & Schlegel
ホオジロ科	EMBERIZIDAE
54. カシラダカ	Emberiza rustica Pallas
55. ミヤマホオジロ	Emberiza elegans Temminck
56. アオジ	Emberiza spodocephala Pallas
アトリ科	FRINGILLIDAE
57. アトリ	Fringilla montifringilla Linnaeus
58. カワラヒワ	Carduelis sinica (Linnaeus)

ハタオリドリ科　PLOCEIDAE
59. スズメ　Passer montanus (Linnaeus)
ムクドリ科　STURNIDAE
60. ムクドリ　Sturnus cineraceus Temminck
カラス科　CORVIDAE
61. カケス　Garrulus glandarius (Linnaeus)
62. オナガ　Cyanopica cyana (Pallas)
63. ハシブトガラス　Corvus macrorhynchos Wagler

解説

(A) トビ（ワシタカ科）

ごく見馴れた鳥で、校地にも四季を通じて住みついている。飛んでいる時、下からみると尾が三角形にひろがっている。校地北部のアカマツ梢に巣をつくり、ひなを育てる様子を二年続けて観察できた。その結果を総合すると、抱卵開始からひなの誕生までは、四月中旬から五月中旬までの約一ヶ月、誕生から巣立ちまでが約一ヶ月であった。ひなの数は二～三羽で、親がひなに与える餌は、近くの田や沼で捕えた魚、蛙などのようであった。（留鳥）[註一]

(B) サンコウチョウ（ヒタキ科）

さえずりの初めの声が、「月火星（つきひぼし）」ときかれるので三光鳥の名がついた。嘴と目のまわりがコバルト色で、雄の尾は雌のそれより非常に長く、口笛を吹くような声と、色彩、形ともに美しい。校地では稀にしかみられない。（夏鳥）[註二]

(C) カワセミ（カワセミ科）

体に比べて、大きな頭と長い嘴をもち、背はコバルト色、胸が橙色で美しい。水中の魚を急降下して捕える。一九八二年十一月、校舎にぶつかり、フラフラになっているのをみつけ、半日程鳥かごに入れて休ませておいたら、元気になり放してやったことがある。（留鳥）

(D) コゲラ（キツツキ科）

小形のキツツキで、頭から体の上面は黒褐色で、背と翼には白い横斑があってよく目立つ。校地では、他のキツツキ類より数が多いようで、丸田沢近くや、音楽棟近くでみかける。（留鳥）

(E) カモ類（ガンカモ科）

秋になると、丸田沢に次々とカモ類がやってくる。多い時には百～二百羽にもなり、小さな池が賑やかになる。これまでに七種類のカモを認めたが、その種類、個体数には消長があり、もっとも多いのがカルガモで、その中のいくらかは、年間留まっているのがある。厳冬期に入り、沼が結氷すると彼等はどこかに姿を消し、沼は静かになる。春になると少数のカルガモを残して、再び北の国に戻っていく。（冬鳥）（註二）

(F) コブハクチョウ（ガンカモ科）

日本に渡ってくるオオハクチョウ、コハクチョウとは種類がちがい、嘴が橙赤色で基部にこぶ状の突起があるので区別がつく。ヨーロッパでは、なかば家禽化されて公園などの池に飼育されている。本校校庭の池に、同窓生から寄贈されたものが一羽飼われている。（西ヨーロッパの留鳥）

（註 一）ある地域で一年中みられる鳥

（註　二）　春に南方から日本に渡ってきて繁殖し、秋には南の地に行って冬をすごす鳥。
（註　三）　秋に北の地から日本に渡ってきて冬をこし、春に北の繁殖地へ帰る鳥

参考文献

（1）宮城学院　一九七七（昭和五十二）年　宮城学院建設に関する環境調査　宮城学院
（2）小松哲文他　一九七七（昭和五十二）年　三共沼（堤）鳥類目録　丸田沢休養林及び三共沼の鳥を守る会
（3）日本鳥学会　一九七四（昭和四十九）年　日本鳥類目録改訂第五版　学習研究社
（4）内田清之助　一九七四（昭和四十九）年　最新日本鳥類図説　講談社
（5）高野伸二　一九八二（昭和五十七）年　フィールドガイド　日本の野鳥　日本野鳥の会
（6）高野伸二　一九八五（昭和六十）年　日本の野鳥　山と渓谷社

五、おわりに

校地内の植物と鳥類についてのべた。不完全ながら、校地の自然の一端にふれることができたことと思う。緑の大切さは、ここで改めてのべる必要もないが、その緑がほとんど自然の形で残されている。この貴重な財産は、本学院のものだけでないことを思い、今後百年、二百年と守り続けていく責任が私達にはある。今回の調査の結果が、今後の自然保護の基礎資料となることを願う。

百周年記念事業

一九八六（昭和六十一）年は愈々宮城学院創立百周年の記念の年。七十六年周期のハレー彗星が近づいて、創立

二十四年の時見た宮城女学校の、百年の姿を大空からもう一度見て通りすぎた。

この年は百周年を祝う諸行事の外、年中行事のすべてに「祝百周年」の冠を加えて感謝と祝賀に明け暮れた。

折よく四月からのＮＨＫの朝の連続テレビ小説で『はね駒』が放映された。これは寺内小春氏の作で、チーフプロデューサーは岡本由紀子氏、主役の斎藤由貴演ずるところの「橘りん」は宮城女学校の第七回卒業生をモデルとしたものであったから、本学院の「百年」をアピールするには誠によいタイミングであった。ＮＨＫは前年から多くのスタッフを動員して資料を調査し、宮城学院の資料室も挙げてこれを援助したので、明治二十年代の歴史や風俗がブラウン管に美事に再生され、極めて高い視聴率を記録することになった。四月七日に始まり、週六回、十月初旬に至るまで放映されたこのドラマはすこぶる好評を博し、日本の初期の女流新聞記者磯村（旧姓小泉）はるの優れた人柄や語学力は宮城女学校の教育の賜との評価を受け、百年の祝賀のよき先駆となった。



第6回ホームカミングデー

東北最大の新聞「河北新報」もまた百年を記録した宮城学院のために、二十回にわたる『光あおいで』という連載記事をかかげた。九月十六日に始まり十月一日に及ぶこの特集は、東北学院のための『われら地の塩』に続くもので、キリスト教教育の歴史、就中、本学院の栄光と苦難の歩みについて大いなる啓蒙の役割を果たしてくれた。

かくて盛り上がった世論の上に、同窓会の第六回ホームカミングデーが開かれた。五年前（一九八一年）に定められたホームカミングデーは、年に一回、すべての同窓生が「里帰り」をする日として、毎年五月の第三日曜日がそれにあ

てられてきた。これは多くの同窓生に歓迎され、年毎に隆盛の道をたどったが、今年の五月十八日は創立百周年の祝賀シーズンの皮切りとあって、一千余の参会者で特ににぎわった。折からの好天に恵まれ、開会の一時間も前には、全国から集う老若の同窓生によって広大なキャンパスも埋めつくされ、なつかしい「建学の泉」は白玉の噴井を青空に輝かせた。

例年のように、チャペルにおける礼拝に始まり、大学講堂での同窓会総会、午後は「自分づくり」と題する遠藤周作氏の講演があった。

礼拝次第

司会　大井　康江　　ハンドベル演奏　中学校つばみ班　指揮　石川　洋子
奏楽　菊地　明子　　奨　　励　「宮城学院の百年」　学院長・名誉会長　早坂禮吾
前　奏　Liebster Jesu, wir sind hier.　　讃　美　歌　三三八番
愛のイエスよ私達はここにいます　　後　奏　Von Himmel noch da komm' ich nah.
讃　美　歌　四九四番　　高き天より私は来た
聖　書　ヨハネによる福音書第三章十六節～第十五章五節

遠くアメリカから参加したのは、P・グレゴリー博士、R・ノーサップ牧師などミッションボードの責任ある方々、ミセス・シップルのような教壇から直接教えを垂れた先生、また初期の先生方の三代目、四代目の方々などで、今さらのように百年の重みを考えるよすがとなった。祖父母によって播かれた一粒の種子が異国の地にかくも美しく芽生え成長している姿を心から喜んでくださる方々、そのお姿をまた我々は有難いものに思った。

五月十九日には、東北学院・宮城学院の共催による、創立百周年記念ＮＨＫ交響楽団演奏会が行なわれ、宮城県民会館を喜びの聴衆で満たした。

これは、百年前に同じ父母から生まれた双生児ともいえる両学院が、その後それぞれ独自の発展をしてきたが、百年という節目にあたって両学院の学生・同窓生が共に集い、もろ声あげて神の聖名を讃美しようと三年前から計画されてきたもので、両校二百に近い人々が大合唱団を組織し、ＮＨＫ交響楽団という日本で現在望み得る最高のオーケストラと共に美しいハーモニーを生み出そうという試みであった。

管弦楽・ＮＨＫ交響楽団
指　揮・森　正
ピアノ・浅野　繁
独　唱・渡部ジュディス〈ソプラノ〉布田　庸子〈メゾソプラノ〉佐々木正利〈テノール〉小野　浩資〈バス〉
合　唱・東北学院グリークラブ・グリークラブＯＢ、宮城学院女子大学・同短期大学在学生・卒業生
合唱指導・熊田　為宏

プログラム

ブラームス作曲「大学祝典序曲　作品八〇」
リスト作曲　「ピアノ協奏曲第一番変ホ長調」
I. Allegro maestoso　II. Quasi Adagio　III. Allegro vivace　IV. Allegro marziale animato
モーツアルト作曲「ミサ曲ハ短調Ｋ・四二七」
I. Kyrie (1. Kyrie)　II. Gloria (2. Gloria　3. Laudamus te　4. Gratias　5. Domine　6. Qui tollis　7. Quoniam　8. Jesu Christe-Cum sancto spiritu)　III. Credo (9. Credo　10. Et incarnatus est)　IV. Sanctus (11. Sanctus und Osanna)　V. Benedictus (12. Benedictus Osanna)

このハーモニーこそが我ら百年の成果と意気ごんでいたものである。指揮者森正氏の手が止った瞬間から怒涛のような拍手がしばし鳴り止まなかった。

九月十八日は百年前に宮城学院の創立を認可された、その日である。五年前（一九八一年）から復活した記念礼拝が守られた。

記念礼拝次第

司会	同窓会長	伊藤　久子
奏楽	主イエス・キリストは私たちをかえりみ	
	J・S・バッハ作曲	教授　菊地　明子
讃美歌	一二番　めぐみゆたけき主を	一同
聖書	ピリピ人への手紙　第二章一節～十一節	伊藤　久子
祈禱		同
子供讃美歌	五二番　ひかりひかり	幼稚園児
ハンドベル演奏	詩篇第一九　ベネディット・マルチェルロ作曲	中学・高校ハンドベル班
説教	「イエス・キリストは主である」	仙台広瀬河畔教会牧師・理事　山本　尚忠
祈禱		同
二重唱	新しき歌を主に捧げん　ドヴォルザーク作曲	〈ソプラノ〉教授　千田　ふみ 〈アルト〉教授　鈴木　知
祝辞		東北教区総会議長　高橋　力殿 東北学院学院長　情野鉄雄殿 尚絅女学院院長　甲原　一殿
讃美歌	二六七番　神はわがやぐら	一同
祝禱		山本　尚忠
合唱	主はなれを祝し（ベネディクション）ピーター・ラトキン作曲	大学音楽科学生 指揮　講師　高橋とみえ
挨拶		学院長　早坂　禮吾
奏楽	すばらしい日が出現した　J・S・バッハ作曲	菊地　明子

ステンドグラスの美しい礼拝堂を満たした同窓生、旧・現教職員、代表の学生・生徒は百年にわたる恵みを感謝し、百年の祝賀行事のすべてが失われてもこの礼拝さえあれば――という学院長の挨拶にも感動した。幼稚園児の讃美歌の斉唱は全会衆をほほえませ、かつ感激させた。中高生のハンドベルも素晴しい讃美の音楽であった。

昼食の後、有志はバスで北山のキリスト教墓地を訪れ、押川方義はじめ先人たちの墓前で礼拝を捧げ、それぞれ手分けして親しい誰彼の墓前に花を置いた。

墓前礼拝次第

司会	同窓会副会長	福井 喜江	献花	一同
讃美歌	二二八番	ガリラヤの風かおるあたり	一同	讃美歌	二九一番	主にまかせよ汝が身を	一同
聖書	使徒行伝	第三章一節～一〇節	福井 喜江	挨拶	同窓会長 伊藤 久子
祈禱	同				
お話	「金銀は我になし」資料室兼百年史編纂室 渡邉 弘道				
祈禱	同				

墓地は前日の高校ＹＷＣＡや業務員の奉仕によって塵一つなく清められていた。讃美の歌声は泉ヶ岳の彼方に消えていった。

創立百年の喜びを内外に伝え、宮城学院を支持し続けてくださった方々に感謝を捧げる記念式典と祝賀会は、十月十一日に行なわれた。

記念式典式次第

司会	学長	山形 孝夫	
讃美歌	六六番	聖なる、聖なる	一同
聖書	ヨハネによる福音書第十五章一節～十四節		
奏楽	Melodie op. 38 Grieg作曲	教授	W.S. Cundiff

祈禱　校長　大沼　隆　教授　M.A. Garner

合唱　宮城学院創立百周年祝典歌「女声合唱のためのアレルヤ」山内忠作曲　同　音楽科学生　指揮　講師　高橋　とみえ　伴奏　音楽科四年　伊勢　泉

祝辞　米国合同教会世界宣教局副理事長　Dr. Paul Gregory　前米国合同教会世界宣教局総幹事
キリスト教学校教育同盟理事長　S. Libbey 殿　元音楽科教授ハンセン先生のご一族代表　Mr. Dane Bales
宮城学院同窓会長　久山　康殿　初代校長ブールボー先生のご一族代表　Mrs. Hugh Cort
宮城県知事　伊藤　久子殿
理事長　山本壮一郎殿

感謝状贈呈　理事長　佐藤　利吉　校歌（一節、四節）　一同
謝辞　理事長　佐藤　利吉
Benediction　The Lord bless you and keep you　Peter Lutkin 作曲
奏楽　Aria (Partita No. 4) J.S. Bach 作曲　W.S. Cundiff

会場の大学講堂はその入口も、演壇の上も美しい花に飾られて豪華であった。

この日のために作曲された山内教授の「祝典歌」には「さすが」の嘆声があがったし、来賓の祝辞もそれぞれ心あたたまるものであった。この春まで米国合同教会世界宣教局総幹事として長い間この学園を見守っていてくださったP・グレゴリー先生、天に召されてからもハンセン財団を通してわが学園を導いてくださったK・I・ハンセン先生のご一族を代表してD・ベイルズ先生、初代校長ブールボー先生のご一族を代表してH・コート先生に、深甚な感謝の意をこめて感謝状を贈呈した。

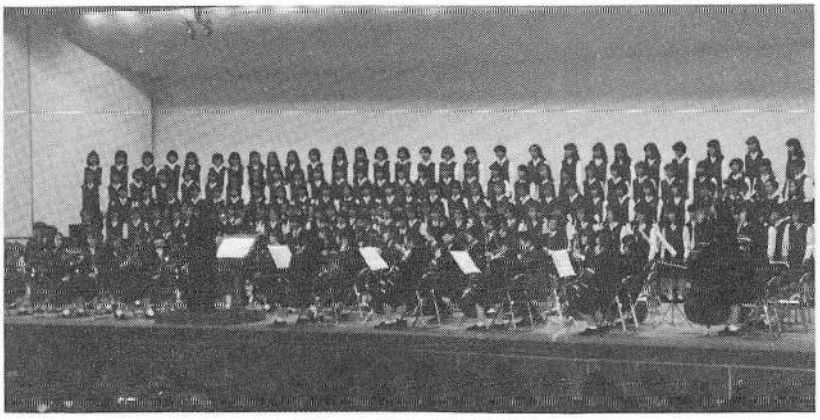
式辞・祝辞・謝辞は記録して後に一書としたが、形実ともに盛大な式典であった。

午後は中高体育館において祝賀会に入り、日頃お世話になっている方々のテーブルスピーチなども和やかに進行したが、宴たけなわの頃、どっと床を踏みならしてレオタード姿の乙女たち百人余りが壇上にかけ上り、大デモン

ストレーションを展開したのには一同「度肝」を抜かれた。これは百年を祝って中高中心に演ぜられるはずのミュージカル、〝Heart by Heart Tour〟関係者の演出であった。素晴しい若さのエネルギーの爆発を見せられた会衆の心は、やがて一種の感動にまで高められ大成功であった。

この外、各パートで計画された「だしもの」は数々あって、中学校（五月二日）・高等学校（五月九日）の運動会、また大学・短期大学（五月十五日）の新入生歓迎運動会は「百周年記念」を冠して、例年にまして賑かに行なわれた。また従来別々に行なわれて来た学園祭は、今年は大学・短大・高校・中学が合同で（十月十七日～十九日）盛大に行なわれた。「期にいたりて実を結び」という聖書の言葉（詩篇第一篇三節）が今年の共同の「テーマ」であった。

その外、大学からは「国立モスクワ合唱団」の演奏会（九月三十日）、ロンドン・シェークスピア・グループ公演の「ハムレット」（十一月二十四日）また、NHKテレビ「はね駒」にちなんでそのチーフプロデューサー岡本由紀子氏の講演「ドラマにみる女性と仕事」（五月三十一日）等も一般に公開されて、聴衆は大学講堂を満たす大盛況であった。音楽科の定期演奏会（十月二十六日）は新たに作曲されて記念式典で公表された創立百周年の祝典歌「女声合唱とオーケストラのための序奏とアレル



中学校・高等学校記念音楽会

ヤ」（山内忠教授作曲）が改めて発表され、宮城フィルハーモニー管弦楽団の伴奏も美事なまとまりをみせてくれた。

中学・高校では全員を参加させようと、別に創立記念式典（十一月一日）を宮城県民会館でもち、続いて音楽会を催した。中高生によるオーケストラはよく訓練され、最後に全員起立して合唱する「ハレルヤ・コーラス」は、まさに圧巻であった。

なお、中山節子（高八回卒・所沢武蔵野教会牧師）・岩崎賢江（高校六カ月在学・ボランティア活動家）・西沢優李子（高七回卒・福祉事業家）・阿部笙子（高十五回卒・版画家）・山田恵子（高十六回卒・札幌医科大学助教授）・梶賀千鶴子（高十六回卒・演出家）・門間陽子（高十九回卒・音楽療法士）・赤城真理（高二十回卒・ピアニスト）・鵜浦昌子（高二十六回卒・インターナショナル・インフォーマント）など九人の、現在それぞれの分野の第一線で活躍中の先輩諸姉を招き、生徒たちはそれぞれ希望の人を選んでその鍛えられた人生観を聞こうという試みが行なわれた。いずれも多大の感動をもって成功裡に終了した。

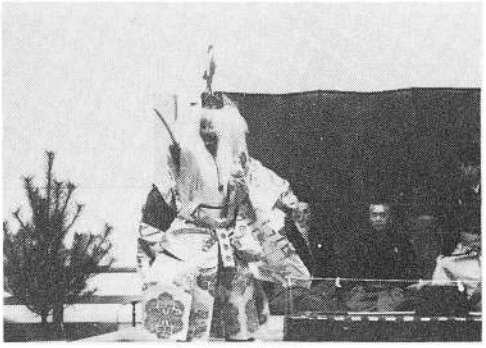
多くの人々に鮮烈な印象と感動を与えたオリジナルミュージカル「Heart by Heart Tour」の製作・上演は一同窓生である演出家梶賀千鶴子の主唱とその熱心な指導によって誕生した。同氏は宮城学院の中学・高校をへて大学では日本文学科に学び、卒業後はしばらく副手としてつとめたこともある。やがて「劇団四季」にはいり、有名な話題作「ジーザスクライスト・スーパースター」とか「キャッツ」などを演出したり、前年十二月にはミラノのスカラ座で「マダム・バタフライ」の上演スタッフとして活躍した。この一月からはフリーとなって、沢山の素人を舞台にのせて新鮮なエネルギーを見事構成した「Can!」がその独立第一作である。現代の教育への関心と母校愛とが創立百周年に際会したことによって融合し、この作品を生みだした訳である。初めは中高生を中心に考えられたのであるが、やがては卒業生・大学生から幼稚園児までひろがり、ついには大学・高校・中学の教員から事務職員、PTAの父母までまきこんで、文字通り宮城学院の全分野がこのために動いた。練習はプロ並で、時には深夜に及

ぶこともあったが、各方面に連絡をとり、夜食の炊き出しまで全くのボランティア活動をしてくれたのは多くの父母と事務職員たちであった。

ミュージカルには衣装もいれば背景も小道具も要る。第一、音と光が極めて重要である。照明と音響はヤマハ音楽振興会仙台支部のお世話になり、作曲は音楽科の学生が手伝ってくれた。どうなることかとあやぶまれた衣装は馬渕株式会社の馬渕社長にデザイナーつきで大量の布地を寄附して頂いた。針子としてPTAのお母さんたちが徹夜で頑張った。

一夜があけると、そこに専門家はだしの立派なミュージカルが誕生していて、見る者の心を感動で充たし、喜びの涙ぬぐいもやらず、一人で二度も三度もみたり、これはどうしても多くの人々に見せなければと頼まれもしないのに一生懸命客あつめをした人もあった。昼夜五回の公演ではどうしてもさばききれず第六回を緊急に追加公演するというれしい悲鳴の大成功であった。

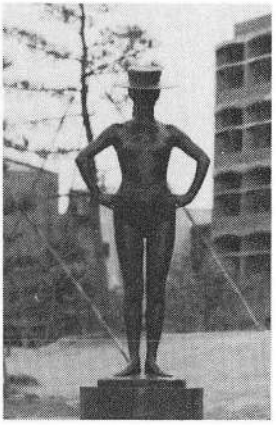
興業?の成功もさることながら、あらゆる意味で、参加した人々の心に「協力すれば何でもできる」という自信をうえつけ、一人一人をまさに「Heart by Heart Tour」にさそいこんだことは望外の収穫であった。



喜多流「小鍛冶」

同窓会はホームカミングデーの外、いろいろ行事を後援したが、自らも林秀光氏（桐朋学園ピアノ科主任・本学音楽科特別講師）のピアノリサイタルを主催して記念行事を盛り上げた。

事務局の職員は同窓会の援助を得て喜多流の「能」の会を主催した（九月十七日）。舞台は大学講堂に仮設した置舞台であったので、最後まで不安はつきまとったが、流石に音響のいい講堂だけに、床を牛乳でふき上げるという



「帽子の像」

重労働の仕上げと相まって、立派にその役目を果した。

舞囃子　養老　佐々木宗生
仕舞　八島　香川靖嗣
羽衣　塩津哲生
船弁慶　友枝昭世
狂言　佐渡狐　野村万作
能　小鍛冶　佐藤章雄
後見　佐々木宗生

それに囃子方、地謡十数名という豪華なプログラムであったので、半数を占める県内外の愛好者の拍手なりやまず学生・生徒にはよき教材として喜ばれた。

もう一つの新しい試みは、大学人文館の前庭に建った佐藤忠良氏の彫刻である。両手を腰に帽子をかぶったレオタード姿の若い女人像で、建物の煉瓦色と松の緑を背景にし、どこからみても絵になる美しい姿である。佐藤忠良氏は、宮城県出身の現代彫刻家として第一級の人。仙台市の、「彫刻のある街づくり」計画の第一作として森林公園に立つ「緑の風」は有名である。「帽子の像」は作者自らの命名であるが、宮城学院百年記念のためのオリジナルである。これに先立つ帽子をテーマにした三作と合せて、やがて「佐藤忠良帽子の四部作」と称せられるものである。作者は「できるだけ清純なものをと心がけた」といっているが、これからは噴水「建学の泉」と共に卒業や入学の記念写真のよい背景になりそうである。

十月九日には作者佐藤忠良氏と、その作品のモデルになった愛弟子のこれも彫刻家の笹戸千津子氏を迎え除幕式

を行なったが、除幕の紅白の綱を引いたのは三代にわたる「宮城人」ということで、数ある親子三代同窓生の中から志子田さん一家が選ばれて奉仕して頂いた。

なお、その後大学の大教室で作者佐藤忠良氏の「私と彫刻」と題する講演が行なわれ、その人柄を示すような話しぶりに興味は尽きなかったが時が尽きた。聴衆は心あたたまる思いで家路についた。

出版物では「GLORY TO GOD—宮城学院目でみる百年—」が写真集として式典参加者と全学院の学生・生徒に配られた。また大学からは「研究論文集創立百周年記念号」、事務職員研修会からは「はね駒の周辺（あたり）」、また百周年記念事業委員会による、宮城学院の百年をその前史から綴った書物も御覧の通りに発行された。

なお、八月六日から八日にかけて、仙台名物の七夕祭りには、中央通りの目抜の場所に、宮城学院名入りの七夕飾りが五本もさがって、当日は二百万と称せられる道ゆく人にほほえみをもって迎えられた。有志による二万羽の折鶴、特に幼稚園児の紅色の小さな手型の帯は町内会の「特別参加賞」を受けるにふさわしかった。中でも「宮城学院は今年百年を迎えました。市民の皆様百年間どうもありがとうございました。」のコメントは一種の感動をもって市民に迎えられた。

また桜ヶ丘の町内会と商店会は「祝　宮城学院開校一〇〇年記念」とスクールカラーに白く染め出した大旗を各戸にかかげ、通りには同様の横断幕を張って、われわれの喜びに参加してくださった。「地元との協力」はただのかけ声だけではなかったことが実証されたもので、これは全く、望外の嬉しい経験であった。今年もまた、クリスマス礼拝と祝会には是非多くの町内の人々をお迎えしたいものと思っている。

かくて感謝のための創立百年記念の年は、すべて恵まれて成功の裡に終了するのである。さあ、力強く歩み出そう、第二の世紀に向って——。

各校の現況

大学・短期大学

○一般教育課程

選ばれて大学に入学し、そこで専門的知識と技術を学ぶ者が、大学生という名にふさわしい知性と教養とを身につけるためには、各々の専門の枠を越えた一般教育の充実こそが、欠くことのできない条件である。本学では、「一般教育科」専属の教師が中心となって、大学・短期大学それぞれに、入学年次から卒業年次にわたって、各学科・各科共通の一般教育のカリキュラムを編成し、その充実に独自のくふうをこらしている。

たとえば「総合コース」（大学は二年次・短大は一年次）という科目がその一つである。従来、一般教育課程においては、人文科学・社会科学・自然科学の三系列にわたって並列的にカリキュラムが組まれるのが常であったが、本学では、全国にさきがけて、一九六九年からこの枠を越える試みがなされてきた。一九八六年度の場合でいうと、「女性」「現代」「東北」などのテーマを設定して、そこに多彩な講師陣を集中し、たがいに連繋をとりながら、さまざまの学問分野からのアプローチを試みるのである。また、大学の一年次には少人数制の「基礎演習」を置き、三年次・四年次には、専門的テーマによる講義または演習形式の「特殊研究」を置くなど、教師の側からの一方的な講義に終ることのないよう、さまざまの配慮がなされている。また本学の建学の精神にのっとり「宗教学」（キリスト教学）が初年次および卒業年次に必修科目として週一時間ずつおかれている。

右のほかに、国際的な視野と感覚を養うための「外国語」、心身の健全な発達を期する「保健体育」、さらに教員

免許取得希望者のための教職課程を含めて、本学では、一般教育科目をことさらに重く見ており、たえず検討・改訂が加えられている。一般教育のめざすところは、学問の意義と方法とを広い視野から見きわめ、その上で現代に生きる知的人間にふさわしい、すぐれた知性と教養とを十分に培うことにあるからである。

○大学英文学科

英文学科は、一九一三年に設置された英文専攻科を母胎に、およそ七十年の歴史をもつ。この間、献身的なアメリカ人教育宣教師と、気鋭の日本人教師との協力によって、独自の教育体制をつくりあげてきた。

本学科は、英米文学の研究、ならびに英語学の理論的研究を踏まえて英米人の思想・文化を探究することを目的とする。それには、まず、英語の修得が前提となるので、一、二年次に基礎科目を配し、またランゲージ・ラボラトリを集中的に活用し、主として外国人教師による少人数クラスでのことばの徹底的な訓練、教育が行なわれている。一部学生は二年次より国際文化コースに入り、他の学生は三年次から文学コースと語学コースに分かれ、各自、自由に選択して特殊講義、演習、関連科目を履修する。

国際文化コースでは「英語演習科目」と「文化論科目」に大別されるカリキュラムに従って授業を受ける。「英語演習科目」は、外国人教員による英会話が中心であり、時間数・単位数の配分が多いことでは他大学のそれをはるかに凌駕する。「文化論科目」は、英米を重視した比較文化論、地域研究が主体であり、重要科目の講義はすべて英語で行なわれる。

文学コースは、中世より現代にいたる英米文学を思想的、体系的に解明することを目的とし、詩、劇、小説、評論の各分野にわたって多彩な講座が開かれ、文学作品に深く親しめるように配慮され、**語学コース**では、言語科学と英語学との交流関係を深め、英語という言語現象の史的研究から、歴史文法理論、最近の文法理論の研究にわた

る講座が開かれており、英語学に興味をもつ学生は、それぞれ研究の道を選ぶことができる。

また、視野を広げ、国際的感覚を涵養するために、英米両国において夏期ほぼ一ヶ月間実施される「海外研修」の履修が要望される。なお、本学科には課外活動の一端として、学生、教員によって組織された「英文学会」があり、機関誌『英文学会誌』の発行、学生主催の英語劇の上演等、多彩な研究活動が展開されている。

〈卒業後の主な進路〉

教育関係（中学・高校教諭、大学・研究所の助手、秘書を含む）、一般事務、航空会社（スチュワーデス）、サービス業（ガイド）、図書館司書等の分野が挙げられる。また少数ながら他大学院に進むものもいる。すでに多年にわたって、多くの卒業生が各界に進出し活躍しており、一定の評価を得ている。卒業生が築いてきた実績を基盤にして、就職状況は安定している。

○同　日本文学科

日本文学科は一九四六（昭和二十一）年に、宮城学院女子専門学校国語科として発足し、四十年の歴史を持っている。敗戦直後の東北地方に、キリスト教主義教育の真価を再評価させるため、新しい市民文化創造の気運に乗って設置された学科であるため、革新的な文化を創造する知的な女性を教育することを使命としてきた。その知的な訓練を、日本語・日本文学（中国語・中国文学を含む）を通して行なうことを目的とする学科である。この目的を達成するために、価値観の多様化していく現代社会の要請にこたえて、文学研究専門の国文科というイメージを脱却するために、昨年より新しいカリキュラムを組んでいる。すなわち、国語学を中心として、コミュニケーション論などを含む**国語学コース**、文学研究を中心とする**日本文学コース**。日本文化史学と日本文学の学際的領域にわたる**日本文化コース**という、三コースが設けられており、学生は自分の適性に合ったコースを選択して、卒業論文の

テーマを設定できるようになっている。この結果、専門教科目が文学研究のみに集中し過ぎることなく、教育現場や企業体内における実践力が養成されることになろう。なお、教育課程とともに司書課程を設けてあり、図書館学やコンピューターによる情報検索の技術を学ぶことができる。さらに、日本文化コースを選択する学生を中心に学芸員（博物館職員）資格を取得する課程が組まれている。

以上のような正規カリキュラムの外に、日本文学会という学生の自主的研究活動組織があり、ここでは研究旅行、講演会開催、新聞『葉（えふ）』発行、機関誌『日本文学ノート』刊行など、青春時代の可能性を目いっぱい試すことができるのである。

〈卒業後の主な進路〉

宮城県を中心に東北・関東各県の中学高校教諭および小学校教諭（資格認定試験および卒業後通信教育により免許状を取得）として活躍中の卒業生が多く、また大学図書館等の司書、公務員、会社員、大学の研究補助員・秘書などとして活躍している。

また、少数ながら国立大学大学院へ進学するものもいる。

○同　音楽科

長い歴史と伝統をもつ本学音楽科は、北日本におけるもっとも充実した音楽の高等専門教育機関である。その目的とするところは、創造性豊かな高い音楽技能を身につけさせ、知性ある人間を育成することである。

大学における音楽教育のカリキュラムは、歴史の中で長い真摯な実践と思考で築き上げられ、主専攻実技以外の多くの科目がある。これらの科目には、実践的技能をもとめる科目ばかりでなく、理論的学問の領域のものも多い。これらは、音楽家あるいは人間としての基礎的な力をもつために役立つ科目であり、さらに主専攻を深める科目と

なるはずである。カリキュラムの科目編成は、主専攻における高度の技術の修得をしながら、あわせて音楽教育に関する科目をも修得した教育者など学生の目的にあわせられるようになっている。

また技術の授業は、各学生の個性能力を引き出すことができるように、個人レッスンのかたちが多い。

専攻は**声楽コース**と**器楽コース**がある。器楽コースには、ピアノ・オルガン（パイプ）・弦楽器（ヴァイオリン）・管楽器（フルート）がある。このようなカリキュラムと優れた教授陣および充実した設備によって、本学音楽科は演奏家あるいは教育者として指導的役割を果たす人材を育成し卒業後は芸術学士と称することになる。

本学音楽科を卒業後、さらに高度の技術を修得しようとする者のために、**研究科**が設置されている。研究科は、主として専攻実技に重点をもつカリキュラムで二年間研讃を積む。修了までに、研究発表としてリサイタルを行なわねばならない。

〈卒業後の主な進路〉

公立私立中学高校教員として宮城県内はもとより、東北・北海道にわたってひろく就職している。

またいわゆる音楽教室等において後進の専門指導にあたっている者も多い。

○同　家政学科

近年の急激な社会変動は、生活のあり方すべてに大きく影響を与えつつある。明治末以来の歴史を持つ本学家政学科はそれに対応すべく、総合科学の立場から深い専門的知識に裏づけられた思考能力の修得（専門職の養成）を目的としている。そのため、本学科には次の二つの専攻が置かれている。

管理栄養士専攻　長寿時代を迎え、国民の健康を確保し、健全な社会を建設していくために、食生活改善の必要性は、益々増大している。本専攻はこうした社会的要請に基づいて、食物・栄養に関する専門家の育成を目標とし、

あわせて管理栄養士の養成をめざしている。

カリキュラムの内容は、栄養学・食品学・調理学などに関する専門的な講義・実験・演習に加えて、学内実習はもちろん給食施設・病院・保健所など校外実習を行なっており、国民の健康に貢献できる有能な指導者や研究者を育成している。

なお、管理栄養士は、益々高い専門性と資質の向上が要求され、その資格の取得は、法律によって一九八七年度以降入学者からすべて国家試験制度に改められている。(第一次・第二次試験のうち、本専攻卒業者は第一次試験免除)。来年度からは、新たに「養護教諭」の資格も取得できることになった。

家政学専攻　「被服」・「食物」・「住居」・「家族」の四つの専門系列に分れ、学生はそのうちどれかに属して知識を深め、その分野でのエキスパートになることをめざしている。専門系列は三年次になって選択するが、少数グループに分れて、それぞれの専門分野の教師から親しく指導を受けられることが特色である。さらにカリキュラムの中から選択により家庭科・保健科教員免許状および栄養士の資格を取得できることが利点となっている。

〈卒業後の主な進路〉

管理栄養士・栄養士・中学高校教諭・生活改良普及員・大学助手・研究員などの専門職を中心に医療機関・民間会社など地域社会の指導者として広く活躍を続けている。

○短大家政科

本学の家政科は、単に家庭的教養の修得のみならず、広く社会に進出して、現実の諸問題に積極的・研究的に取り組むことのできる女性の育成をめざして、次の二つの専攻を設けている。

食物専攻　食物に関する教科目を中心として学ぶ。単に食物に関する知識の修得にとどまらず、衣食住その他の

生活の様々な問題とあわせて今日の食生活についての理解を深め、またそれらを通じて幅広い知識をもった社会人の育成を目的としている。この専攻は、その性格上、実験・実習が多いが、これらは社会の要請に実践的に応えるために大いに役立っている。

家政専攻　生活を総合的にとらえることのできる広い知識を修得することを目的とした専攻である。そのために、生活の現状と構造を認識し、把握するための講義として、一年次に「生活論基礎講義」、二年次に「生活論特別講義」が設けられている。これを主軸として一年次には家庭管理・食物・被服・住居の各分野の基礎的知識を取得し、二年次には各自の問題意識の中から主たる分野を選んで、いっそう知識・技術を深めることができる仕組みになっている。

〈卒業後の主な進路〉

学校・病院その他の公立施設の栄養士関係、研究機関の助手、および民間企業など。とくに民間会社では本科の卒業生は歓迎され、積極的に社会に出て働く意欲のあるかぎり、希望しても就職口がないということはほとんどない状況である。

○同　教養科

一九六四年創設の教養科は、創造的・建設的な批判精神の涵養を目的とする教養主義の立場に立ち、現代に生きる知性豊かな女性の育成を目的としている。その設立の趣旨は、資格取得を主目的としたカリキュラムを考えず、学生が在学二年間に、自分自身の内的要求に従って、現代女性としての教養を追求し、個性を磨き、自己形成を遂げるために適切なカリキュラムを作ろうとしたところにある。したがってそれは、現代の社会人としての女性の基本的教養に役立つ科目をそろえ、さらには学生それぞれが、自分の個性に即して勉学することに「生き甲斐」を感じ

得るような、コース別あるいはグループ別の研究システムをとっている。

まず大枠として**文化コース**と**文学コース**の二つのコースを設け、一年次では基本的総合的な学習を主とし、二年次ではそれぞれのコースにおいて専攻領域を深めることができるようにカリキュラムが編成されている。すなわち、文化コースの二年次には〈文化〉・〈社会〉・〈歴史〉・〈芸術〉の各グループに分かれた実習が開講されており、一方文学コースでは作家や作品に即したテーマ別による実習が行なわれている。そしてそれらの成果は、『教養実習ノート』としてまとめられ、毎年刊行されている。

教養科は、文学・文化それぞれのコースで研究・調査旅行等を実施している。

〈卒業後の主な進路〉

卒業生のほとんど全員が就職する。就職先は金融商事関係などの民間企業が中心であるが、その他教育・研究機関の補助員（助手あるいは秘書）など、社会の各分野に進出して積極的に活躍している。

○同　保育科

保育科は、幼児・児童の保育・教育・養護についての専門的な知識の修得を目標としている。言いかえれば、「子どもとは？」「子どものための教育とは？」「いかに教えるべきか？」等々、幼児の教育・保育に必要な問題全般についての科学的知識と技能を求める学科である。

「幼児心理コース」「保育コース」の二コースがあり、それぞれ専門領域を深めることが出来るよう配慮している。

幼児心理コース　乳・幼児の心身の発達を理解し、その指導に習熟した学生を養成することがねらいである。そのために少人数編成として、乳・幼児に関する心理学の学習を重点的に行なう。また基礎的技能としては、観察法・統計処理・パソコン操作なども学習する。

保育コース　二年次から五グループ（心理・保育学・音楽・造形・福祉）に分かれ、年間を通じて週四時間のゼミナールの中で、それぞれの分野での内容の充実を図る。

したがって学習内容は一般教育科目はいうまでもなく、保育の基本的な理論・原理に関する科目をはじめ、保育内容の研究などの教育技術面、ピアノ図画工作などの実技面、幼稚園や保育所・施設に出かけての観察ならびに実習を行なう実践面など、幼児、児童に関係する広い分野に及んでいる。授業形態はそれぞれの内容により、講義形式や、ゼミナール形式、あるいは、ピアノ実技のように個人指導の形式をとる科目など、多岐にわたる。

また、学生はキャンパス内の附属幼稚園で、自由に保育観察を行ない、幼稚園教諭の指導のもとに授業で得られた理論的知識を実践場面で確かめることができる。

さらに年二回、一・二年生間の交流会が催され、学年を超えた学生同志のきずなが強められるのも、本科の特長である。

〈卒業後の主な進路〉

卒業生の多くは幼稚園教諭、保育所・施設の保母として活躍し、他の一部が一般企業に就職している。

中学校・高等学校

「宮城女学校」として創立されて以来百年、大学・短大、あるいは幼稚園をも生み出して、終始本学院の核となってきたのは、中学校・高等学校である。

いわゆる六・三・三制の実施によっていわば名義上二つに分かれはしたが、六年間の「一貫教育」を旨として、たえず一体となってともに歩んできた。

本校の建学の精神にもとづくキリスト教教育は要約すれば次の二つを目標としている、といってよい。

第一に神（真実）を畏れ、謙虚になること。

第二に隣人を徹底的に尊重する愛の心を最も大切にすること。

これらは日本国憲法や教育基本法の精神とも一致し、学校全体の運営、生徒会活動、行事などすべてキリスト教精神と民主主義の精神の具体化としておこなわれているのである。

本校では週一回の聖書の授業とともに、毎朝、礼拝が行なわれる。それは聖書を読み、讃美歌をうたい、神に祈り、静かに自己を見つめる貴重なひとときで、一日の生活はこの礼拝からはじまる。

「毎朝の礼拝で、確かに何かが私の心の中におこり、これまでとは違った内面の一部がかたちづくられたように思います。」（卒業生のことば）。

この毎日の礼拝とは別に一定の集中した時間をとって、キリスト教に関する行事が行なわれ、たとえば「キリスト教教育週間」では、映画を鑑賞したり、講演を聞いたりするなかで〝共に生きるとは〟〝隣人を愛するとは〟というような永遠のテーマについて深く考える機会が与えられる。また、恒例のクリスマス礼拝も本校の大切な行事の一つである。卒業生たちは「宮城学院での思い出の中であのキャンドルサービスとハレルヤコーラスが心に一番深く残っています」と口をそろえていう。

夏から秋にかけて、中学三年生は二泊三日で田沢湖方面に、高校二年は四泊五日で京都・奈良方面に研修旅行を行なう。また、中・高ともに遠足やスポーツ大会、登山などの行事があり、これらの行事については、生徒たちの自主性が重んじられ、クラスの代表を中心にして、自分たちでルールを作ったり、一人も欠けないで、意欲的に参加するにはどうしたらいいか、また、集団生活に欠かせないことは何かなど、一つ一つの行事の意味・内容等が話し合われ、実施に移されている。このほかに、文化祭や音楽会なども生徒自身の手で作り上げ実行している。

なお、寮は構内にあって、大ぜいの中学生・高校生が二人の寮監の先生を中心に、楽しく、規律ある共同生活を過している。

本校で利用できる奨学金制度には次のものがある。

・宮城学院奨学会……貸与又は給付
・宮城学院同窓会奨学会……一年給付
・日本育英会……貸　与
・宮城県の私立高等学校生徒への授業料軽減措置

短期大学付属幼稚園

本幼稚園は、聖書の教えにもとづく人間教育を念願とする宮城学院女子短期大学の付属幼稚園として、本学院の創立七十周年にあたる、一九五六（昭和三十一）年四月に開設された（初代園長E・M・シップル）。

爾来、キリスト教精神を基礎とし、教育基本法および学校教育法の趣旨にのっとって、望ましい環境の中で、幼児の心身の健全な成長をうながし、のびのびした豊かな個性、調和のとれた情緒の発達を助けることを目的としている。本園の性格と任務は、当然次のようなものとなる。

(1) キリスト教主義による幼稚園である。
(2) 幼児教育研究施設として、短大保育科と協力し、保育の研究を行なう。
(3) 保育科学生に対して実習指導を行なう。
(4) 地域社会における幼児教育の発展に貢献する。

右のうち、「研究活動」では、本学保育科のみならず、他の幼稚園とも協力して研究活動を推進しており、特に次の点を主要項目としている――①教育理念に関すること、②幼児の宗教的教育に関すること、③障害児教育に関すること、④保育内容に関すること（自然、放送教育等）、⑤三歳児保育に関すること。

また、保育科学生の実習指導についても、「観察実習」（一年次学生の「基礎実習」）や「教育実習」（二年次、四週間）、さらに研究保育の指導に全園が参加している。

教育課程は、長く二年保育を主として来たが、キャンパス移転（一九八〇年）後、地域の要望にもこたえて、三年保育を開始した。その後も三歳児の入園希望は年を追って激増している。現在、園児は周辺の数団地より集まり、交通がまだ不便な通園区域も多いので、希望者のためにスクール・バスを登降園時に運行している。

専任教職員数一覧（一九八六年十二月末現在）

区分		大学短期大学	中学校高等学校	短大附属幼稚園
教員	*1教員	七八	六七	六
	契約教授契約教員	四	二	
副手		二六		
職員	*2事務	七二		
	*3業務	二三		
合計		二七八		

*1…教育宣教師を含む

*2…書記、司書、寮監、養護教諭、栄養士、実習助手、電話交換員が含まれる

*3…業務員、技能員、運転業務員が含まれる

学生・生徒・園児数一覧（一九八六年十二月現在）

学科 / 学年	大学				短期大学			高等学校	中学校	短大附属幼稚園	合計
	英文学	日本文学	音楽	家政学	家政	教養	保育				
一年	一四二	一五三	四〇	一一〇	一七四	二二七	一〇二	三九〇	一四九	一五二	四、一六二
二年	一一一	一一一	三九	九四	二三〇	一九三	一一三	三二七	一三四		
三年	一三六	一三六	三七	一〇五				二九七	一〇八		
四年	一〇九	一一七	三九	九八							
合計	四九八	五一七	一五五	四〇七	四〇四	四二〇	二二五	一、〇一三	三九一	一五二	
	一、五七七				一、〇四九						

結び

創立百周年の記念行事は、祝賀の式典と共に、主催団体それぞれの意向に従って、いずれも立派な盛り上がりを示した。そして「参加した」者がそれぞれに多くの賜物を与えられたことは、誠に感謝すべきことであった。

宮城学院第二世紀の夜明け、本年一月一日の河北新報は、学校法人宮城学院が「一世紀にわたるキリスト教主義教育で人間性豊かな女子教育に寄与した功績によって、「河北文化賞」が授与されると報じた。「河北文化賞」は「東北地方の学術、芸術、体育、産業、福祉の各分野で顕著な業績を挙げた個人、あるいは団体を顕彰して」贈られる賞で一九五一（昭和二十六）年河北新報社の創設にかかるものである。以後毎年、同紙の創刊記念日、一月十七日を期して贈呈式が行なわれてきたが、本年は特に創刊九十周年とあって、一層盛大に催された。今回は、

○糖尿病の病態解析と地域医療への貢献　東北大学医学部　後藤由夫　教授
○形状記憶合金の基礎および応用研究における功績　東北大学選鉱製錬研究所長　本間敏夫　教授
○東北書道界の発展向上に寄与　書道芸術院名誉会長　加藤翠柳　氏
○団体陸上競技百メートル少年の部で三年連続優勝　福島県立会津高校三年　五十嵐幸一　選手
○ギンザケ養殖の技術確立による複合型養殖業の推進　宮城県志津川漁業協同組合
○一世紀にわたるキリスト教主義教育で人材を育成、社会の発展に寄与　学校法人東北学院
○一世紀にわたるキリスト教主義教育で人間性豊かな女子教育に寄与　学校法人宮城学院

の四個人三団体がその対象であった。両学院の推薦者であった山本宮城県知事がその祝辞で「河北文化賞は東北のノーベル賞である」と述べられたが、「ノーベル賞」に擬するにはその程度についてやや誇張が過ぎたかも知れない。



河北文化賞

しかしその性格はたしかに似ている。もとより目に見える賞などに夢中になるのはキリスト教の精神になじまないかも知れない。ただ、兄と妹の関係にある東北学院と宮城学院が一組となって共に受賞したのは誠にうれしいことだし、百年前に、また戦争中にあれほど迫害されたキリスト教とその教育が今、公の推薦を得て受賞したことを思えば感慨の一入なものがある。

かくて宮城学院第二世紀の夜はほのぼのと明けそめた。しかし我々に与えられた使命はこれで終ったわけではない。否、今こそ一層その重さを加えたのである。使命を与えられた神は、その使命と共にそれを果たす能力をも与え給うことをかたく信じ、建学の精神「キリスト教の信仰に基づく女子教育」の旗を高くかかげて、限りなき前進をはじめたい。そして、校歌の結びにあるように「人の世に神のほまれをあらわさん」ことを誓うものである。

付

同窓会小史

編集にあたって

母校創立百周年記念『天にみ栄え』の中に、同窓会のページも設けることになり、一八九三年にその発端を見一八九五年に田村たみこ初代会長によって組織化されて以来九十三年を閲した同窓会の歴史を残す、という学校のご好意を深く感謝し、委員一同、真心を尽してその編集の任に当りました。九十年史までは以前の諸刊行物によるところがほとんどですが、今回は主に最近十年間を編集しました。

同窓会は、創立当初より、如何なる苦難の時代、改革の嵐の吹きまくる時代も、常に学校と共に歩み、学校の危機には駆けつけ、募金の相談を受けては夜を日についで奔走するという、学校の喜びも悲しみも共に負うことを光栄に思い、宮城に学んだ幸いを共に神に感謝する者たちの集まりです。

現在、学校は、広大な美しい自然の中に移され、ますます発展しておりますが、宮城の真の誇りは、地上の目に見える繁栄ではなく、神のご恩寵の下に建学の精神を高く掲げ、福音の証し人として、清さと知性に生きる若い女性の育成こそがわが母校の使命であり、現在の世の中に最も待望されているものと存じます。

創立以来、一貫して絶えることなく続いた、神を賛美しそのみ名をあがめるわざが、宮城の歴史で最も大切なことであり、宮城学院が存続する限り続くことを願うものです。

最後に編集の大任を負われた、福井喜江・泉貞子様を始め、委員の方々に深く感謝いたします。

同窓会長　伊藤久子

歴代会長



2代　奥山ます
明43.3～7.2



初代　田村たみ子
明28.6～明43.3



5代　原田ことぢ
大15.10～昭17.2



4代　小野寺みきよ
大8.3～大15.9



3代　佐藤まさ
大7.3～大8.2



8代　片桐こう
昭28.6～昭28.7



7代　伊藤まき
昭21.11～昭28.5



6代　西山貞
昭17.2～昭21.10



11代(現在)伊藤久子
昭56.5～



10代　滝口篤子
昭46.5～昭56.4



9代　丸山敏子
昭28.7～昭46.4

母校創立より同窓会発端まで

明治十九年（一八八六）一月六日、グリング、モール、ホーイの三氏によるミッション会議が開かれ、仙台に女学校開設の相談がなされた。同年七月二日、かねて送られることに決定していた婦人宣教師ミス・オールト及びミス・プールボーとその姪キティーさんの一行が東京に到着、約十日の後グリング氏の案内で海上を塩釜へ上陸し、人力車で仙台へ向かった。

「ちょうどその日は七夕祭の第二日目で、塩釜より仙台へ向かう道々には、家々に笹の葉に色とりどりの色紙が飾られ、まるでお噺の国へ入ったようであった。その翌朝、二人の少女が私達の開こうとする学校の生徒にしてくれと頼んできた。武藤（関屋）ゆきさんと吉村（宮本）むらさんである」とミス・オールトの思い出の記にしるされている。

かねて宮城女学校設立許可申請中のところ、九月十八日その認可を得て直ちにモール、ホーイ、プールボー、首藤陸三、押川方義、藤生金六の六氏により創立の事務が着手され、初代校長にエリザベス・R・プールボー女史就任、仙台市東二番丁五十一番地田辺繁久氏別邸を借宅し教育が開始された。二十一年四月東三番丁一六二～一六九番地に至る二千四百坪を購入、二十二年四月、木造講堂、教室、寄宿舎の竣工を見、田辺氏別邸から移転した。同年七月五日献堂式挙行、二十三年三月、学則が全部改正され、予科三年（尋常小学校四年卒）と四年制本科の組織となり、従来の聖書、英語、国語、漢文、算術、音楽に更に代数、幾何、歴史、自然科学、心理学、倫理学が追加され、高等女学校以上の学力程度となった。すべて洋風教育の方針であったということである。その当時、国内には国粋主義運動が興隆し、一部の生徒の中に洋風一点張の教育方針に満足出来ず、日本精神を基調とする教育を強調し、最初のストライキが起った。斎藤冬、石川梅代、町田辰、尾花梅代、小平小雪の諸嬢は退校を命ぜられ、そ

の結果斎藤冬、町田辰、小平小雪さんの三人は明治女学校へ、尾花梅代さんは青山学院へ、石川梅代さんは、松村介石氏と結婚した。翌二十六年三月J・P・モール氏が第二代校長に就任なさって、武藤（関屋）ゆきさん他三名の高等女学部第一回卒業式が挙行された。卒業式後、教師と卒業生が別れを惜しみながら、長き学舎の思い出を語ったとのこと。これがそもそもの同窓会の発端と言えよう。其の後、第三回卒業生の田村たみこ氏が同窓会組織の重要性を力説し、初代会長となり、来る年々の卒業式後、新入会員歓迎会として、はっきりした形をとるようになった。その蔭には岸波せき氏の大きな力のあったことも忘れてならないことであろう。

創立以来この七年間、生徒数は一四六名、受洗者数は六二名に及んだということである。

武藤ゆき様訪問記

村上あや

第十回御卒業の川添なみ様の御葉書に従いまして、さわやかな五月晴のある日の午後、第一回御卒業の武藤ゆき様の許をお訪ね致しました。姉は長い間、神戸の支部長として同窓会の為に御尽し下さいましたが、たゞ今は目黒清水町のお嬢様の許で静かに御過しでいらっしゃいます。口許にほゝえみを浮かべて、いそいそと迎えて下さいました姉は、八十一歳の御高齢とは思えぬ程の御若々しさで、私がまぶたにえがきましたそれとは、はるかに違いますので嬉しく存じました。いかにも教養の豊かな御態度で次の様に話されました。

「私の母は熱心なクリスチャンで、教会の婦人会のお仕事などを致して居りまして、娘の為に仙台に是非ミッションスクールをと祈って居りました。時あたかも押川先生の並々ならぬ御努力に依りまして宮城女学校が創立されました。私が十五歳の時で、明治十九年頃とおぼえて居ります。初代の校長ミス・ブールボーが宣教師のミス・オールト（後のミセス・ホーイ）と御一緒に塩釜に御上陸なさいまして、あとは人力車で御来仙という事で婦人会の方と共に、途中岩切まで御出迎え申上げました。その翌日、同級の石井おときさんと二人で御挨拶に参上致しましたが、お互に言葉が全然通じませんので両方でたゞニャッと笑うだけで困って居りました。時に首藤陸三様が来合わせまして、少し英語が出来ますからと言うので通訳をしていたゞきまして大助かりいたしました。校舎は二番丁の通りに面した普通の住宅で広いお庭伝いの大きい家が西洋の先生方の御住いでした。その奥に寄宿舎がございまして、八人の寄宿生が二室に別れて起き伏して居りました。髪を結っていたゞいたり帯を結んで上げたり、それこそ本当の姉妹でございました。横浜共立御出

身の稲垣おぎん様は、通訳兼先生兼舎監の御資格で、女子学院出身の曲直瀬ゆき江様は先生として迎えられました。やがて校舎の新建築も成りまして、アメリカからミス・エマ・ブールボー（校長の御妹）、ミス・ハロエル、それから当時の第二高等学校の教授方もそろってお出で下さいまして、本格的に完全な授業が始められました。二高の先生ミスター・デニングは、基督教を徹底的に大きらいで身の毛がよだつと言われていましたが、ミセスは有名な音楽家でピアノを教えていたゞきました。オペレッタの伴奏などしていたゞきました。時には記者であるミスター・デニングが大層宮城をほめて新聞に載せて下さいました。宗教々育の極めて厳格な中にも、実になごやかな雰囲気がたゞよいまして、愉快に勉強を致しました。誰か怪我など致しますと、御自分の御室に連れて行って、いとねんごろに手当を施し、夜を徹して愛情をこめて看病をして下さったものでございます。大きいボンネットの先生方と、おたいこ姿の純真な女学生達との間には、単なる師弟の関係というものを超越し、主にあるお友達との愛情の結びは永久にほぐれる事はございません。

かくて根強く宮城のスピリットなる尊いものが培われましたのでございましょう。

第一回の卒業生は、武藤ゆき、石井とき、宮本むら、武田かねの四名でございましたが、すでに三名は天国へゆかれました。」

聡明な昔々の女学生は御記憶もさだかで、さながら堰を切った泉の如くに、次から次へと生きた歴史のページがくりひろげられますが、心なごむ思いでおいとまを告げました。

明治二十七年（一八九四）、十月、ミス・ズーフル第三代校長に就任。

明治二十八年（一八九五）、夏、コレラ流行、学校は九月三十日まで休校となった。当時の思い出をたどりつゝ寄宿舎生活の一端を繰りひろげよう。

昔の思い出

女学部第十回卒業生　川添なみ

私が宮城女学校に入学致しましたのは、明治廿八年九月でございました。日清戦争後でその秋は悪い伝染病が流行して集団集合は避ける様にとの事で、七十日の長い夏休がその上延びたのでした。寄宿舎に入れて頂きました時は、舎監の浅井策子先生と第一回卒業で音楽の教師、関谷雪子様と第三回卒業生お一人とが居られただけでした。八畳間が九つ、小さい部屋が五つ、その小さいお部屋三つだけ先生

方のお部屋として除いて、あとの各室の入口には大きい部屋には四名づゝ、小さいのには二名づゝ名札が掲げられ入舎の準備がされていました。私は予科二年級に編入されました。予科は三学級あるのですが、その年は二年生だけ少数居たのでした。校長ミス・ズーフルはリーデングを教えて下さいました。翌**廿九年秋**、創立十周年記念会が挙行せられ、多くの来賓がありカフェテリヤ式の御馳走がありました。その頃、ミス・ハロエルが御退職せられ、ミセス・デニングが手伝って下さいました。そのうち、ミス・パイファー、ミス・ワイドナー、ミス・パーウェルが前後して御来仙、先生になられて活気付けられました。寄宿舎に住まわれ、英訳その他を受持たれた滝口みか子先生が御辞任になり、長谷川きた子先生が来られましたが、一年位で柏隅みつ子先生に代られました。お三人とも女子学院御出身、粒よりの方々でした。佐伯陽一先生に代って早坂哲郎先生が幹事になられ多少変更されたものがありました。日本学科と英学科と別々のクラスにおかれた者が一様にされました。六月に行なわれた卒業式が三月になり、お太鼓結びが袴に変わりました。校長先生は寄宿舎を見廻られまして、病人があるとよくお世話下さいました。吸入をして下さったり流動食を作って来て下さったりしました。生徒の学力増進の為に特に心を用いられ、立派な先生方を招いて下さいました。入学以来、上級生は下級生をいたわり、下級生は上級生を敬い、親しみの心豊かに勉強させていたゞきました。その頃、生徒の中から日曜学校のお手伝いに教会や伝道所に遣わされる者がありました。ズーフル先生は御多忙の身を以てその人々を毎土曜日午後、自宅に招き日曜学校の学課の準備をして下さるのでした。日曜日の朝は寄宿生一同を引き連れ、教会の礼拝に出席せられ、夜は寄宿生一同を自宅に集め、通訳付きで聖書をやさしく解き聞かせて下さるのが常でした。幾度か重大事件に見舞われながらも屈せず、学校と生徒の為に懸命に働いて居られたあのお姿に、私は幾度励まされた事でしょう。

明治三十年（一八九七）九月十四日、ミッション直属によるバイブル・ハウス竣工。

明治三十三年（一九〇〇）、一年制聖書専攻科が設置され、伝道に必要な事、その他色々の授業が授けられた。

聖書科第十六回卒業生　小関　ゆたか

大正十三年聖書科入学といえば、今から三十二年も昔になる。ハイカラな校舎の中にたった一つ小さな古びた日本家屋のバイブルハウスがあった。そこで一年間、ちょうど御赴任になった光静枝先生に、初めて旧約聖書というものをお習いした。一学期の試験問題に「旧約聖書の文学的価値を論ぜよ」という問題を出されたことは、今でも忘れられない。

次の年そのハウスが取りこわされて、新二校舎増築が出来る間、教室は寄宿舎の応接間に移り、体操場が聖書科の寄宿舎になった。二

校舎が増築されて聖書科の教室もきまり、冬はスチームも通って、十名ばかりのこじんまりした楽しい生活が始まった。その頃、アメリカ帰りの高久先生が御赴任になり、間もなく結婚して丸山先生となられたが、私達は歓迎の意味でよく先生をひやかした。深刻型の光先生と陽気型の丸山先生、それに美しく崇高にさえ見えたミス・シュネーダーの御薫陶を受けた私達は全く幸福であった。討論好きな私達は丸山先生の授業中などは、先生をそっちのけにしてよく口角泡を飛ばして論争した。泣いたり笑ったり歌ったり食べたり、今にして思えば、その時代程楽しく、青春を思いのまゝに過ごした事は二度となかったような気がする。また、何といっても忘れられないのは寄宿舎生活で、私達が敬遠した程厳格な舎監先生の許で、よくもあんないたずらが出来たものである。あの有名な豚つこや台所から、こっそりいたゞいた残飯の「うまさ」など、到底忘れられない出来事だった。今は亡き舎監先生もなつかしい方である。

また生涯を通じて忘れられないのはクリスマスである。星の降るような聖らかな明け方、寄宿舎の窓下を歌い歩いたクリスマスの歌、その朝の礼拝の何と晴れやかなことよ。

ピアノの音に目が覚め、ピアノの音と共に暮れていった四年間、私達の敬愛して止まなかった光先生や、友達のように親しかった丸山先生、白百合のように清楚で、しかも優しかったメリー先生、その他大勢の先生方からいたゞいた身に浸みるような教訓と、心の底に残された一つ一つの思い出は、その後の私達の人生に大きな原動力となった。道標となった。光先生も、メリー先生も、もう天国に召された。私達は何と幸せだった事だろう。再び来ない青春の時に、今、この心を支えてくれる大きな力のあることを教えて下さった先生方と学び舎を与えられたという事は——。

静かに目を閉じると、感謝の涙があふれてくるのである。

明治三十七年（一九〇四）六月二日、第一校舎奉献式が挙行され、創立以来最初の入学試験が実施された。

女学部第十七回卒業生　村上あや

明治三十七年と申せば、今を去る五十年前即ち半世紀昔の事であります。我が日本の国はまさに大飛躍の域に達し、日英同盟が締結され海外への大発展を醸しました。折しも日露の戦火をよそにして宗教々育の魁なる宮城女学校の門を叩きました。創立以来初めて入学試験実施というので、その前日に兄に伴なわれて雪深の降る五里の田舎道を鉄道馬車にゆられ更に汽車に乗りかえ仙台に到着、学校に程近い旅館に草鞋の紐をときました。当日は自分で結った銀杏返しにタケナガをかけ、母の手織の一本縞の袷に海老茶の袴を着けて、矢立(諸

侯の行列の時に持つ墨壺〕を小脇に挟み、意気揚々と試験場に臨みました。国語や作文は毛筆なので一せいに墨がすられ、凍える手に息を吹きかけつゝ、配られた答案に注目するのでした。やがて試験管理の先生方の見廻りとなり、硯の不用な私は恥かしくて真赤になり、オド〳〵して居りましたが、詮方なしに笑われるかと、ひがみ根性で矢立なるものを机上に出しました。所が誰かが私の肩に手をかけて声も優しく「あなたは良い物をお持ちになりましたネ」と先生はそれを手に取られて、「まあ」とほめて下さいました。私は一途に嬉しくなり明るい気持になりまして、宮城の精神がこゝにあると心にひらめきを感じました。良い学校を選んだ事を喜び、必ず及第しなければと勇気百倍の態でした。このお優しい先生は同窓の中村清乃姉でございました。一度御礼を申上げたいと希いましたのも空しく、悲しいかな姉は、天国へ逝ってしまわれましたとかや、残念至極に存じます。

ありし日の恩師が情の印象は
　五十とせ経ても尚新たなり

寄宿舎生活を営みつゝ宮城の精神に培われて成長致しました私には、ほゝえましい思い出が走馬燈の如く脳裡に繰り拡げられますが、何と申しましても基督の尊き教えを植え付けていたゞきまして、六十台の老の坂を登りつめました今なお、教会生活を続けて居ります事を感謝申上げます。

明治四十二年（一九〇九）三月、ミス・セデー・L・ワイドナーが第五代校長に就任された。

同　村上あや

明治四十二年夏、ミラー先生の後を継がれて、ミス・ワイドナーが校長の椅子に着かれました。宮城女学校を通して神の成そうとし給もう御摂理を深く悟り、重大な使命を肝に銘じて、学校の為に献身的に専念なさいまして、真の信仰にもえて神の福音を身をもって証され、あふるゝばかりの愛情と熱意とをもって、宮城のゆるぎなき基盤を築かれました。校旗の作製されましたのもこの時代で、あの構想の崇高な風格を見るにつけ、いかに宮城は整った宗教教育を施されてあったかを、うかがうに足る最良の資料かと存じます。全生徒の数も僅かに百数十名先生方も十数人という事でございましたから、自然と親密になりましたのかも知れませんが、学校教育と並んで人格の養成に力を注がれました。身体の弱い生徒や気の毒な境遇にある教え子等で、神の御力を必要とする人達には特別に意を篤くされました。寄宿舎に病人など出ますと、先生は非常に御心配なさいまして、病室の廊下に夜を徹して祈りつゝ看られますことが常でした。

かゝる温愛の中にはぐくまれました故でしょうか、他校には到底見られない良いものを持って居ります。ミス・ハンセン、ミス・リンゼイなど立派な先生方もおいでになりますし、学校は膨張し始めました。コの字形の寄宿舎にも、五、六十人の娘盛りが実に整然たる生活を楽しみました。手島先生を慈母と仰ぎ、明治の女学生達は上を敬い下を愛し、嬉々として純真な姉妹の情は、いつまでも続いて居ります。

ワイドナー校長の在職は短く、四年位のものでございましたが、学校の内容は充実致して居りました。先生が学校を去らねばならぬ時期に到った時、送別会には全生徒がとゞめる術をも知らず、ハンカチを三枚も絞ったと語り伝えられる程までに、先生の御薫陶が生徒の魂に浸透致して居ったのでございました。

明治四十三年（一九一〇）四月二日、第十八回卒業式が挙行され、大野（別所）つねさん他十九名が卒業、同日午後七時から母校西洋女教師館において第十六回同窓会大会を開き、同窓会規則設定の報告があった。席上、会長奥山ます氏が新会員歓迎の辞を述べ、中村まつ氏が規則を朗読した。規則の一端を通して会員一人々々の責任と友情を深めることにしよう。規則朗読の後、外国伝道局総務バアソロメウ博士夫妻の御訪問をうけ、同博士の御講演を拝聴し、御夫妻をかこんで記念撮影をした。

宮城女学校同窓会規定

第一条　本会は宮城女学校同窓会と称す

第二条　会員は宮城女学校本科卒業生より組織す

第三条　本会の目的は卒業生相互の旧交を温め女子の徳義を尚うし……（以下省略）

会費は一ヶ年金弐拾銭とした。

第一回母校維持金贈呈式が行なわれた。

母校高恩の万分の一に報いようとかねて募集中の母校維持金が、多大の賛助によって功を奏し、会員七十九名及

び在米同窓生により金弐百円の多額が集められ、会長奥山ます氏よりワイドナー校長を経て母校に贈呈した。

東京部会創設

時を同じくして母校の発展は年毎にその度を増し、東京及びその附近在住の卒業生は三十有余名となった為に相会する機会のないことを残念に思い、折りから学事視察のため渡米中だった早坂哲郎母校幹事が帰朝なさって、校用のため滞京中だったのを訪問、師の御尽力によって東京部会の創設を見るにいたり、東京部会規定が出来上った。

第一条　本会は東京市及びその附近在住の宮城女学校本科卒業生相互の交誼を厚うし、婦徳を高潔にし、智識を交換し、兼て母校の隆盛発展を賛助するを以て目的とす

第二条　本会は東京市及びその附近在住の宮城女学校同窓会員を以て組織す

以上はその一部であるが、会費は年一回金五拾銭とし、一月中に会費として納入するものとした。

この席上、初代会長に黒沢かつ江氏、書記永島てる氏、会計加藤とら氏が選出された。

明治四十四年（一九一一）十月二十五日、母校では創立二十五周年記念祝賀式が盛大に催され、同窓会を代表し、磯村はる氏が祝辞をのべた。翌二十六日午前十時から講堂において同窓会大会を挙行し、午後五時寄宿舎食堂において同窓生出席者五十名が、やさしき妹達の作った御馳走に舌鼓をうちながら、しばしの時を過ごし、夕食会の後提灯行列に移った。夜会巻に抜衣紋、裾長、蝶々まげ、胸高の袴など、在校生と共に百五十名の行列は、市中をねり歩き、七時半に終了した。その夜歌った行進曲の一節を紹介してみよう。

一、二十五年のその昔　世は文明のあかつきに　二、萩丸聖書の校旗をば　高くかゝげて進み行け
夢醒せども東北の　まだ露深き宮城野の　MJGの提灯を　かゞやかしつゝ
乙女らがため学舎を……　進み行け

早坂哲郎先生作詩（この朝浴槽の中で作られたとのこと）

行列終了後、大親睦会は和やかな雰囲気に包まれながら、午後十時半終了した。

大正二年より創立四十周年前後

大正二年（一九一三）七月十五日、セデー・L・ワイドナー校長御退職。同年七月十六日、アーレン・K・ファウスト氏が第六代校長として御就任になった。真情あふれる師の温顔に接し、会員一人々々は母校の礎たらんと深く心に刻んだことであろう。

大正四年（一九一五）三月、神戸在住の同窓生集まり相互の親密をはかり、大正六年五月、正式に神戸支部が成立した。次の記録により今日までの長き歩みをたどってみよう。

宮城女学校同窓会神戸支部記録

家政科第九回卒業生　岡　美佐子

第一回

大正四年三月下旬、市内中山手通武藤夫人御宅に神戸在住の同窓生集りたり。集れる諸姉次の如し。

武藤夫人、谷津夫人、木村夫人、松井夫人、龜井姉、小野寺姉、加藤姉、赤尾姉。

第二回

大正六年五月廿六日武藤夫人御宅に於て開き、正式に同窓会神戸支部の組織を宣し、会長に武藤夫人、書記兼会計に小野寺姉当選したり。当同窓会費年二十銭と定めたり（来会者八名）

以上が神戸支部の最初に記された原文のまゝの記録でございます。

神戸に最初に来られました御方は、第一回卒業生武藤ゆき夫人であり、続いて三回の岸波夫人、十一回の谷津夫人が来神されて、親密な同窓会の交わりが始まり、次いで上記の様に第一回の同窓会が開催されるに至りました。当時は年一回例会を開き、会長及び書記会計は互選となし、姉妹方の交わりは一層深くなって参りました。大正八年村瀬うめ子夫人が来神なされましてからは、武藤夫人を中心に岸波夫人（昭和廿五年八月十八日昇天）、村瀬夫人の諸姉が母校において学ばれましたキリストの愛を実践なされ、熱心に会員を訪問し、愛

情を以って導かれましたので、皆楽しんで来会し、讃美歌と聖書と祈りを以って、真実の同窓会を創始されました事は、武藤夫人始め三姉に対し、真に感謝に堪えない次第でございます。

大正十四年四月、十七回同窓会が村瀬姉御宅において開催されました時、参会者諸姉の御賛成の下に神戸支部規則を設定、同窓会本部に正式に通達し、神戸支部同窓会の基が出来ました。そののち神戸支部は、故郷を遠く離れた同窓生諸姉にとっては先輩諸姉の御愛情に温められて懐しい家庭であり、同窓であり、大正十一年より春秋二回となったお集まりは待遠しい程楽しいものと記されて居ります。この独特な雰囲気が出来上る蔭には、武藤夫人の母校に対する熱情と同窓生諸姉への深い愛情によるのでありまして、同窓会の為には御家庭を開放し、母校創立当時のお話をして、諄々と私共を導いて下さいました事は忘れ得ない感激でございます。かくて武藤夫人は七十七歳まで支部長を務められ、東京に御転任になり、今もなお御健かにて会の為お祈りしていて下さいます事は、誠に心強くうれしく存じて居ります。

昭和二十七年四月の例会において、後任支部長は満場一致にて村瀬夫人が挙げられました。村瀬夫人は岸波夫人、谷津夫人と共に武藤支部長の良き共働者として、同窓生が関西に来られましたら、どんな遠い所でも探し訪れて同窓会に導かれる、その愛情の深さとユーモラスな話題と御趣味の深さとを以て、慈母の如き支部長でございます。その他、神戸支部には五回の永島てる夫人、十一回の谷津夫人御健在にて、会の度毎に御出席、後輩を優しく御導き下さいます事は真にうれしい事でございます。

かくて昭和三十年四月、第七十三回の同窓会を重ねました今、この七十三回の記録を繰返し読んでみますと、ある時は会員の御宅にて暴風雨も知らずに語り合い、ある時は須磨寺にお花見に参り、ある時は東北学院同窓会と一緒に集まり、ある時は郊外に出て遊び、ある時は講演をきき等々、思い出の記録はつきません。殊に神戸は港でありますから、外人先生の歓送迎には、いつも村瀬姉の御心入れにて楽しいお集まりをなし、また新しい会員が来られますとピアノを弾き独唱をして頂きます等、宮城ならでは見られぬ同窓会を致して居ります。

母校創立七十周年に際し、神の御祝福豊かにございます様切にお祈り申しあげます。

母校幹事の早坂哲郎先生の二十五年勤続記念祝賀式が十月十日挙行され、本会を代表して佐藤まさ会長が祝辞をのべた。

大正五年（一九一六）四月、音楽専攻科の設置を見、大正七年（一九一八）五月二十八日、今なおその偉容を誇

る第二校舎献堂式が行なわれ、本会代表として矢野きよせ氏が祝辞を朗読した。この間、三月二十八日第二十六回卒業式を挙行、式後第二校舎落成記念として会員五十三名による尊きレプタ百九拾円七拾銭を当時母校音楽科の最も必要としたグランド・ピアノ一台購入費の一端として捧げた。続いて第二十五回同窓会大会が開催された。出席者八十名により会長に佐藤まさ氏、書記に小野さわ氏、会計に渡辺秀尾氏が選出された。

大正八年（一九一九）三月、第二十六回同窓会大会が行なわれた。出席者九十名により選挙の結果、会長に小野寺みきよ氏、会計に小野さわ氏、書記に田中八重氏が選出された。

この間東京部会では、故磯村はる氏の追悼会を会長黒沢かつ江氏宅で催し、故人の二女子磯村とし子様と、その妹君を交えて、出席者は十七名であった。また、ワイドナー先生は、岐阜県大垣町に伝道なさる旨を決定し、赤坂キリスト教婦人矯風会本部に二十六名が出席して、先生の御前途を祝福した。故森平てる姉、岩淵はつゑ姉（在米）の追悼会も十一月二十三日、会長宅で行なわれ、故人の写真を前に思い出は尽きなかった。両姉共に流行性感冒から肺炎にかゝられたとの事である。

創立四十周年記念式が盛大にとり行なわれた。

母校においては、**大正十五年**（一九二六）九月十八日、創立四十周年を迎えるに当り、創立当時に思いを馳せて、十月二十日より二十三日の四日間小講堂において記念式典及び祝賀式がとり行われた。同窓生は既に八百二名に達し、一人々々の感謝と感激をもって意義深い記念の年を寿ぎ、なお一入母校への感謝を深からしめた。

主な行事を通して当時を偲ぶことにしよう。

十月二十日午前九時三十分より小講堂において記念式典が行なわれた。本会を代表し前島きそ氏の祝辞があった。同日午後七時より記念音楽会開催。翌二十一日記念運動会後、午後二時より寄宿舎食堂を会場として記念親睦会を催し、十五年以上御勤続の原田ことぢ、鈴木虎之進、三浦忠之亟の三先生と、御帰米中のミス・ハンセン、ミス・

リンゼイの二先生を加えて五名の方々の謝恩会を開催した。船坂（佐伯）きみ氏の司会で会は進み、千葉まさ氏の御挨拶の後、諸先生方へ記念品を贈呈した。この席、創立者の御一人ミセス・ホーイ及び記念式典の為に米国からはるばる御出席のリフォームド教会婦人ミッション会長ミセス・アンナワルトの御臨席を願った。既に母校と協力し五十周年記念事業として、大正十二年一月より募集中の大講堂建築募金の大努力に対し、会員一同への同女史の感謝の祝辞を頂き、出席者百三十名は感激あふれる中に秋の日暮れる夕散会した。ミセス・アンナワルトへの御土産として鼓と桜、あやめ、菊の純日本式模様の富士絹の長椅子用蒲団を差上げた。記念式典、バザー等で綿の様にお疲れの大泉、金子両先生の御同伴を願い、絹地を購入、加藤（森）まつ姉の仕立により、同窓会の写真と共に送ったものであった。この日、東京支部から母校の祝賀記念を祝し、光楽造獅子に牡丹模様の花瓶が到着した。二十三日寄宿舎階下及び第二校舎地下室で本会主催大バザー催され、アイスクリームを始め七品目、校舎絵葉書、宮城独特のお花売り、体重計り（一回計れば金五銭也）但し、二十四貫以上は只とのこと、珍妙奇抜最高二十二貫を記録して、午後四時和やかな会は閉じられた。当時の利益金は全額大講堂建築資金として繰り入れられた。年々歳々催されるバザーは、仙台名物の一つでにぎ〳〵しく集まる千客万来これこそは、会員の母校を思う厚き祈りとその労苦によるところは、いうまでもなく、外人諸先生方のケークとなり、クッキーとなって御賛同いたゞいた賜物であって、今更の様にミス・リンゼイのアイスクリームを自ら作られた、あの尊いお姿が眼前に浮ぶのである。

大正十二年一月より大正十五年十一月十八日までの建築募金額は左の通りである。

第一回バザーで、　一、二一四円六八銭
第二回バザーで、　九三六円四〇銭

十四年三月開催した音楽会よりの三四二円四〇銭を含め、全国同窓生の汗の結晶は合計**七千五百四拾参円九拾一銭**の多額に上った。この募金の際、一口募金額百円也には……百円紙幣にお目通りもかなわぬ各会員にとって驚く

他はなく、会長原田ことぢ氏は卒先して、金弐百円也を御寄附下さって「奮励、努力せよ」と叫ばれたのであった。総額を建築資金として母校へ寄贈した。

この後まもなく十月二十九日、東京支部ではミセス・アンナワルト並びに伝道会社々長クライッァ博士御夫妻を丸ビル精養軒に御招待申上げ、有志会食した。同三十日、神田教会にクライッァ博士の御講演を拝聴する機会を与えられた。

役員数増加案及び会費を一ヶ年壱円に値上げの案が提案された。

○会員増加と共に専攻科各科別の連絡不行届をうまく進める為、規定四条「役員三名」を「役員五名」に増加すること。

○大正七年十月十五日母校の校報第一号が発行されてから、校報組織の中に会員の消息を伝えて来たが、校友会誌「橄欖」と合併し母校との連絡を密にする為、雑誌代幾分の負担と郵税として会費を一ヶ年金壱円也に値上げする案が、会長原田ことぢ氏から提案され、賛否を昭和三年一月三十日までに決することにした。

昭和三年（一九二八）一月値上げ案賛成可決、会費前納の会員へ「橄欖」を送ることに決定した。

同年十一月、御大典を記念し、噴水池が建設され、母校の象徴として、なくてならぬものの一つとなった。戦後復興を見、赤煉瓦の第一校舎を背景に、水蓮の花静かにその影をとゞめ、緋鯉真鯉のたわむれる姿、冬ともなれば木々の枝々に蔵王ならぬ樹氷の見られるのも、幾年の星霜を物語るものであろう。

越えて**昭和五年**（一九三〇）二月八日、ファウスト校長御退職の報に、本会及び父兄会は合同会議を開き、御退職の理由を伺う。直ちに先生の御功績に対する表彰につき協議会を開催した。その後、再度会を重ね、先生の御意志を尊重して、五千円を以って記念館（同窓会館）の建築並びに記念品を贈呈することに決定した。

五月三十日、講堂において盛大な送別式が行なわれ、記念品として金屏風一双を贈呈した。

六月十六日、午後七時二十五分ファウスト校長御夫妻御離仙。本会は会長原田ことぢ氏が代表として、御見送りをした。

ファウスト校長を偲びて

ファウスト博士は大正二年七月十六日、セデー・L・ワイドナー校長の後をつぎ、第六代校長に就任、昭和五年五月三十一日までの十七年間の長きにわたり、勤続なされた。就任以来その間一意專心、教育界のために尽され、また結核予防の為犠牲的に社会事業を起こされた。また、日米親善の為の貢献は大いなるものがある。

十一月十一日、ファウスト記念館定礎式が行なわれた。礎石銘を(In Honor of K. Faust Principal (1913~1930) June, 1930) とした。

ファウスト記念館献堂式

昭和六年（一九三一）十二月二十六日行なわれた。本会を代表し矢野きよせ氏が祝辞を朗読した。本会々員は金一四六〇円二〇銭を記念館設立費として寄贈し、また献堂式費用として百五拾円を寄附した。ファウスト記念館は別名同窓会館と名付けられ、階上五十畳敷、日本間は会員の集会所として、また遠来会員の宿泊所として、貴い存在であった。宮城のバッジ入り諸陶器、その他蒲団、座布団等設備され、多数の会員の便宜を計った事は甚だ大きいものがあった。階下は裁縫室として、生徒達が使用していた。

ファウスト館日本間の本会用設備品は、次の通りであった。

夜具蒲団・毛布二人前、蚊帳二人前、座布団百枚、青銅火鉢二個、美人掛軸一幅（大越先生筆）、バッジ入り諸陶器各百名分、電気ストーヴ一台、布袋床飾り（音楽科十四回卒の石田房子先生御永眠記念としての御寄附金で購入）

同年三月六日、当時札幌在住の同窓生七、八名、石丸直子氏宅に会し、グループの同窓会をひらき、その後度々

会をひらき、第十六回女卒にして札幌にて一番古き芳賀あさの氏が会長に選ばれ、札幌部会が創設された。最初の出席者は芳賀あさの氏、石丸直子氏、斎藤よし氏、茅伊登子氏、斎藤裕氏、黒沢松代氏、石田タヘ氏、中坪希代氏の方々であった。現在は南浦千鶴子氏が部会のため御努力中で、創設以来と同様、親睦に歓迎に送別に、和やかな集いを持たれている。

明けて**昭和七年**（一九三二）一月十六日クラス幹事制度成る。

新年親睦会開催。その席上、顧問の先生、役員の数を増加し、会の発展をはかり、クラス幹事を便宜上市内在住会員より選び、各クラスの責任を持つことゝなり、左の通り決定した。

顧問四名、役員二十六名、クラス幹事五十三名。（氏名省略）

その年の秋たけなわの九月、ミス・ハンセン、ミス・リンゼイ、原田ことぢ先生の勤続二十五年祝賀式が挙げられ、本会代表で矢野きよせ氏が、東京支部代表で前島きそ氏が祝辞をのべた。（原田先生が現在の仙台市木の下四二の二に新築移転なさったのは十一月であった）

昭和八年（一九三三）三月二十四日、卒業式後、新会員八十一名の歓迎会を開催、左の規定が追加された。

「中途退学者にして会員の推薦ある時は役員詮衡の上会員となることを得」規定第二条に加えられた。

この年も終る頃、校長よりの御指令で来る一九三六年母校創立五十周年準備のため、委員を在仙会員より十名選出するようにとの事で、十一月一日午後一時よりファウスト館で同窓会を開催、指命委員三名をあげ、本部は矢野きよせ氏他九名、各支部の代表として札幌、神戸、東京に一名づゝを依頼した。

昭和九年（一九三四）、**二月十七日**、父兄会と合同で最初の記念事業委員会を開き、その結果総募金額拾五万円のうち、本会として会員の寄附とバザーで金弐万円を昭和十一年九月第一回締切日までに募金すること。募金方法は毎月五十銭づゝ二十八ヶ月払込みで金拾四円を一口とする。本会側委員はクラス毎に選出し、各自クラスの勧誘に

当ることを決め、市内六十二名、地方委員に東京支部二名、神戸、札幌各一名を挙げた。計画万事整い、全力を挙げて集中することとなった。

四月十二日、かねて御病気中のミス・メリー・シュネーダーが午後二時四十五分御永眠。十六日午後三時、東北学院教会において葬儀が行なわれた。本会代表として原田ことぢ氏が弔辞を呈した。

七月十六日、十七日、十八日、同窓会主催の料理講習会が開かれた。母校割烹室において栄養料理講習会が始めて開かれた。会費は金参拾銭、東京国立栄養研究所和田富起先生を講師に、参加者は六十名で、暑さをものともせず熱心そのものであった。茶の湯、活花、ドイツ語、習字等、〝土曜会〟が母校主催で行なわれたのも同じ頃のように記憶している。

十二月十日、鈴木虎之進先生の二十五年勤続祝賀式が行なわれた。

昭和十年（一九三五）、一年後に迫る五十周年記念事業のため、この年の終り**十一月二十九日**、記念事業委員会を開催、本会側より展覧会、記念品、園遊会委員等二十五名をあげて、学校に協力することとなった。

昭和十一年（一九三六）記念式典いよいよ迫る。

十一月一日の感謝礼拝から始まった記念行事は、二日午前九時よりの厳かな記念式典へと移っていった。全国同窓生一五三七名を代表し、岸波せき氏が祝辞を朗読した。参加した同窓生九十三名は感激の波に心をおどらせながら、午後三時よりの母校音楽教員、在仙同窓生有志を加えての音楽会に参加した。翌**三日**（明治節）は、待ちに待った我等の記念同窓会が、午前十時から寄宿舎食堂において開催された。出席者二三〇名の同じ思いは、次の一節にもうかゞわれる。

「寄宿舎の食堂は変らない。追想が幾重にも折り重なって浮んで来る。もうテーブルはそろえられ、御重やらこの同窓会のために学校からわざわざ下さったお菓子と果物が一々名札と共に美しく並べてあった。御弁当はもちろん

美味しいけれど、皆さんと一緒にいたゞくと殊更美味しいものだと」友達はそう言って葡萄の一房を取った。恐らく誰もが感じたことだろう。（英文卒十八回長谷川清子記）

本会は大講堂建築資金のため並々ならぬ努力を傾け、金**弐万七千百七拾八円二拾二銭**（一万九千六百三拾四円三拾一銭、七千五百四拾三円九拾一銭）を母校へ捧げ得たということは、まことに感謝のほかはない。

昭和十二年（一九三七）、三月六日、地久節式後午後二時より金子かね先生勤続二十五年表彰式が行なわれた。

四月十五日、大講堂建築起工され、九月十八日第五十一回創立記念日をトして定礎式を執行、各代表のコンクリート充鎮があった。本会及び東京支部代表で矢野きよせ氏と平山のぶ氏がそれぞれ充鎮した。続いて平山のぶ氏の講話があった。

大講堂は**十二月三十日**、完成した。設計は近江八幡ヴォーリズ氏で、工事は東京竹中工務所により進められ、収容人員は九百五十名。ギャラリーは映写室その他を備え、**総建坪四八三坪一合**の大建築物である。

六月五日、キャムプ場設備費のためバザーを開催した。このキャムプ場は宮城郡七ヶ浜吉田浜字沢尻の畑地一八七坪をキャムプ敷地としたもので、昭和十一年七月、土井晩翠先生御息女故土井照殿の記念として晩翠先生から母校へ寄贈下さったものである。また十月二十四日、母校生徒皇軍慰問のためガーゼ肌着一三五着を作製、師団司令部へ送付することになったため、本会より肌着慰問費として金拾円を、その中に加えた。

昭和十三年（一九三八）一月二十一日、母校は財団法人となる為本会より法人理事一名選出方依頼を受け、理事は全同窓生の選挙とし、加藤とら、佐柳千代、平山のぶの三氏を候補者としてあげた。二月九日、会員一同に印刷物を発送、選挙の結果平山のぶ氏が当選した。

一月二十五日、舎監竹中久先生へ御老後の慰労金として、会員から募集、金百九拾壱円弐拾弐銭を送り、感謝の意を表した。

六月十一日、午前十時バザー開催、純益金六百五拾弐円を女学部増級のため、校舎増築資金として捧げた。

十月三日、かねて御病気中のシュネーダー博士が重態におちいられた。東京・神戸各支部へ博士の御重態を打電した。十月十日、同博士告別式が東北学院教会堂で行なわれ、本会より花輪を捧げた。

十月二十九日、東京支部において午前十一時より支部秋季同窓会開催席上、故シュネーダー博士の御霊へ支部有志より花輪を送ったこと、御葬儀次第を伝える原田会長の手紙の朗読があった。

昭和十四年（一九三九）十二月二十六日、五代校長セデー・L・ワイドナー先生が永眠せられた。

昭和十五年（一九四〇）三月二十二日、早坂哲郎先生御永眠。本会から花輪を呈した。四月十三日、早坂先生の追悼会が、第一校舎講堂において行なわれた。

九月十九日、ファウスト館階下で定期総会が行なわれた。出席者は六十四名。

○母校奉安庫造営のため、本会でも造営費の一部として、金壱千円を寄贈すること。

奉安庫造営の際、第八回女学部卒佐柳千代氏が月桂樹二本を寄贈された。これは終戦後移植され、大学本館前芝生に、亡き寄贈者の面影をしのぶかの如く、香ぐわしきかおりを漂わせている。

○理事長のほかに、常任理事八名を置き、理事長を補佐する。

○母校独立の折、会員全力をあげて、その援助に当る。

以上の三議事が万場一致で可決された。

昭和十六年（一九四一）大東亜戦争勃発を前に、国を挙げて戦時体制がいよいよ強化された。この間五月二十六日、休暇御帰米予定のクリーテ先生御夫妻の送別と、教育功労者として文部省より表彰を受けたミス・ハンセン、ミス・リンゼイ、一見、大越、原田、金子の諸先生の祝賀会をかねて有志会を開き、本会よりクリーテ先生御夫妻に山水の掛軸をお送りした。

六月九日、クリーテ先生御夫妻御離仙。

昭和十四、五年は米国と日本との国際的関係は暗雲の中に包まれてきた。折しも、クリーテ校長の離仙となった。この頃母校は重大な問題で岐路に立った時であった。同窓会のあり方も積極的な意見を母校に対して表示した。当時の父兄会も同窓会もまた学校自体も一握の不安と動揺があった。校長問題については離仙されたクリーテ先生の推せんによる西山貞先生を和歌山の高商より招くことに、同窓会も学校側と協力して、その実行にあたった。

十一月十九日、西山貞先生が第八代校長として御就任になった。その前にミス・ハンセン、ミス・リンゼイ両先生が帰米の途につかれた。

昭和十七年(一九四二)、大正十五年正式に同窓会長となられた原田ことぢ先生は大正七、八年頃より当時の会長を補佐し、母校への募金の際は勿論のこと、御熱心に本会の事務を御援助頂き、幾多の困難な時代を雄々しくきりぬかれ、終始その重責を果たされ、同窓会の〝生き字引〟としての尊き存在であった。昭和十七年停年御退職となられ、戦争たけなわとなり、西山貞先生へ本会々長を御依頼いたすまでの十八年の長い間、本会発展の大きな基盤となられたのであった。

本会は西山貞先生に会長をお願いした。母校は大東亜戦争勃発のため、学校経営が非常に困難な状態となったので、同窓会は母校後援を決議し、一口参拾円を三ヶ年間に納入の募金趣意書を全同窓生へ発送し、非常な努力の結果、壱万五千円を維持費として寄贈した。その内訳は、十六年に六千五百円、十七年に三千五百円、十八年に二千五百円、十九年二千五百円である。

昭和十七年三月、原田ことぢ先生御退職。

昭和十七年四月、同窓会事務所を設置した。全国内外千七百名の会員の連絡並びに一切の事務を処理するため第一校舎二階一室を借りうけ、高女部第十七回卒伊藤うん氏がその事務に当り、毎週月曜日より金曜日の午前奉仕さ

れることとなった。

昭和十八年（一九四三）、四月国語専攻科が設置された。

国文科の幼き頃

国文科第一回卒業生　福井喜江

四月〇日―各科別歓迎会……入学して間もない掲示板を見て、国文科（当時は国語科でした）第一回生は、実に妙な気持だった。「各科別じゃ私達を歓迎してくれる人はないわけねえ」「悲しいわ」「いゝよ／＼私達で大いに for myself の歓迎会をしましょうよ」永く立派な伝統をもつ各科の中で、第一回生は自分自身で異端者になりすまし、それをかえってプライドにした思想を卒業まで持ち続けた私達だった。それはまるで、古事記の中にある創世記の国土のあしかびのように混沌として定めなく、いろ／＼唐突な事をしでかしては、先生方の御期待をはずしたりなどした。

懸念した歓迎会も、音楽科の上級生のお心づくしにより、社交室においてにぎ／＼しく行なわれ、私達は本当に宮城の精神に触れたような暖い喜びにひたり、また国文科の生みの親であられた菊沢先生や石井先生より「大いに期待している」というお言葉を賜わり一抹の不安と緊張で一ぱいになったのを思い出す。それは、ちょうど今から十二年前、戦の激しい中であった。

あの荒れ果てた時代に生きて、みどりの芝生も美しい赤煉瓦の中の新しい国文科は、私達にとって一つの大きな夢の世界であり、砂漠のオアシスにも等しい一つの救いの城だった。

入学当時は二校舎の図書室の真向いが教室だったので、休憩時はほとんど図書室で過ごすのが私達の常だった。何時もひんやりと静まり返ったあの部屋の天井までとゞく書棚の書物を見上げては、たゞ更級日記の少女のように「あるかぎりみせ給え……」と心せく思いで、とにかくさま／＼なものを読んでは感激した。

当時は戦時中だったので、学問一すじに専念することは許さるべくもなく、農繁期には田舎の託児所の保母として、あるいは工場にと奉仕に出かけ、遂には学校が工場化され、随分苦しみもした。その中にあってたゞ一縷の望みは中等教員の免許状を得ることにあった。その為に特に国文科だけ午前中の授業が許されたが、戦はいよいよ激しくなるばかり、明日をも知れない命をいとおしみながら、源氏物語を、徒然草を、あるいは国語学をと御熱心に御講義下さる先生方のお声に、一心に耳を傾けた。

この時文部省よりの審査に合格しなければ今後無試験検定制度が本校に与えられなくなるというので、今思えば全く冷汗ものであるが、当時は大へん張り切って論文を書いた。以来院長先生始め、菊沢、朝下、石井先生や多くの先生方の御尽力によって、昭和二十一年

六月に許可の通知を受けることが出来、入学以来の喜びを味わった。その年には専攻科は専門学校となり、国文科には早四回生も大勢入学し、卒業生を持つ科として一人立の第一歩を踏出した。十一月には二、三、四回生達によって、既に卒業した私達も招かれ、無試験検定許可と国文学会発会式とを兼ねた大祝賀会を催し、先生方の御努力に感謝申上げると共に、その喜びを分ち合った。この時十四ヶ条からなる規約も定められ、国文学会は誕生したのである。その何条目かに入会金は五円とする……とあるのを見ても、ああ一時代前の事だなあと、つく〴〵今昔の感がする。

この度母校も七十の齢を重ね、その中で国文科も満十二歳、各科共々手をつなぎ、神の御旨に従い、ます〳〵豊かに立派に成長して行く事を、心から祈って筆をおく。

終戦直前こもごも

大東亜戦争勃発寸前、中学校以上の学徒は学校報国団を組織し、奉安庫を建築するなど内外の状勢けわしく、高等女学部上級生は宮城外苑整備勤労奉仕のため上京、繰上げ卒業式の挙行、夏期休暇短縮の状態となった。十七年三月、始めて空襲警報発令、十一月には母校教職員生徒に対しても軍事教練を実施した。外人諸先生は元寺小路天主公教会に収容されることとなった。十八年九月、校内生徒は全員胸に名札をつけ、同月二十三日東条総理大臣の「戦時体制強化」のため文科廃止の重大放送があった。十九年五月、母校は学校工場と変り、第二校舎調理実習室を工場に転用、専攻科生徒および女学部生徒の工場作業が開始された。一方、四・五年生は海軍航空技術廠に出動することゝなった。

昭和二十年（一九四五）七月九日午後十一時半より翌十日午前三時までの仙台大空襲……母校は大講堂、第二校舎を残し、七棟全部焼失、第一校舎はその側の残骸を残すのみ。コの字型寄宿舎、ファウスト館（同窓会館）も跡方もなく類焼した。洋風建築中に和風一棟として異彩を放ったファウスト館、我々同窓会員にとって尊い記念館であり、懐しい集会所であったのだ。また全国多数会員の罹災者を出し、爆風によって死亡した会員があったとのこ

と。まことにその悲しみの筆舌に言い尽せぬ矢先、無条件降伏の終戦を迎えたのである。たゞ、呆然自失我が家、我が主を失った羊の如く……

あの混乱した仙台大空襲の前後と終戦の頃の思い出を女学部五十四回、女専家政科第三回卒の吾妻トシ氏の記事によってたどってみよう。

女学部第五十四回女家第三回卒業生　吾　妻　ト　シ

スマートなスーツに赤いネクタイ。はちきれそうな幸を胸に秘めて、宮城女学校の生徒は赤煉瓦の学び舎で平和と愛と信仰の生活をみつめて居たのであった。けれども突如として戦争といういまわしい二文字のために「ペンを銃に替えて」「学徒は出陣、女子は挺身」の合言葉に励まされて勇躍(?)して校門を巣立って行ったのである。はるばる横須賀の工場に出かけたお姉様方の後に続いて、当時四年生になったばかりの私達は多賀城の海軍工廠へ。戦闘帽に南京袋の様な上着と吊りズボン、勇ましいかけ声と共に敬礼の練習から始まった学徒動員の生活は、実にその日その日が真剣そのものであった。仙台空襲のあの晩、まるで燃える様に真紅に染まった多賀城のガラス窓をまんじりともせずににらみ、徹夜の作業。夜がしらじらと明けそめる頃、工場からの好意でおにぎりを一つずつ渡されて、我が家を求め母を求め、そしてなつかしい私達の母校を求めて、ひきずる様にして足を運び入れた仙台市のあの姿、焼土の前にひるむ間もなく私達は歯をくいしばって、そのまゝまた踵を返して、自分達の職場に帰って行った。

戦争、学徒動員！、そういった文字からはしばらく眼を離して、とにかくあの頃の私達の生活の一日々々のページをめくってみると、そこに見出されるものは、後悔とか空虚とか、そういったものからは遙かに程遠い「私達は私達なりにとにかく一生懸命やったのよ」そんな文字である様な気がする。

やがて終戦！

焼け残った大講堂で、再び静かな祈りの時を持つ事のできた、私達のあの時の感激、いやそれは感激という言葉で表現するのには余りにも複雑な意味を含んだうれしさ、喜びであったのだが。現在は音楽科の大学生が二、三人でピアノを囲んでレッスンに励んでいる部屋に、六十二名がまさしく寿司詰めの坐学。座布団を敷きつめて級全員が教室につまってしまうと、教壇も教卓もない先生の足もとまでぎっちり。それでも私達は、残された僅か六ヶ月の女学生時代をたゞもう夢中でむさぼる様にして学び続けた。

「蛍の光窓の雪」千万人が繰り返した卒業の歌であったにもせよ、私達が口にしたあの蛍の光こそは、かつて誰も歌った事のない思いのこもった歌であった。かつてなかった。そしてまた、これからも決して決してあってはならぬ生活を女学生として送っただけに、四ヶ年の生活の間に繰り広げられた数々の思い出が、一人々々の胸に交錯して今、そのページに一応のピリオドを打とうとする時、誰にもわからない「本当に私達だけが知る」思い出で胸が一杯になるのであった。宮城女学校から宮城高等女学校、そして現在の宮城学院にと校名の移り変りと共に色々の歴史をおりこんで、あれから十年、中学校、高等学校、大学本館、そして体育館と、他校に先がけて次々と平和と愛の鐘を鳴らす学び舎が立ち並び、赤いリボンの中学生、青いリボンの高校生が、ちらほらと見えがくれする泉のほとりで、じっと十三年間の想い出の糸をたぐる時、本当に感慨無量のものがある。

昭和二十年**十一月十九日**、第二校舎校長室で終戦後初の理事会が開催された。西山会長他六名、伊藤まき氏、伊藤うん氏、船坂きみ氏、丸山敏子氏、大場美恵氏、高橋とき氏が出席した。敢然と母校の復興並びに戦災会員の慰問へと歩みを始めたのであった。東京、神戸各支部へ戦災見舞金としてそれぞれ参千円、弐千円を送ることに決定し、罹災市内会員へフライパン一個を見舞品として送ることも決定した。また西山会長より専門学校昇格問題及び復興対策資金募集協力方依頼を受け、最善を以って会員へ訴えることを約束した。

昭和二十一年（一九四六）、十一月一日、創立六十周年記念式典が挙行された。

十一月二日、第二校舎音楽講堂において、同窓会大会が開催された。原田ことぢ氏、土井八枝氏、平山のぶ氏の三氏へ感謝記念品を贈呈した。

この間、米軍進駐の結果、仙台市川内その他にキャムプが増加し、将校家族もどしどし移り住むようになった。本会は国際親善の目的と将校家族との融和をはかるため、また日本紹介の目的を以って星和会なるものを結成し事務所を宮城学院内に置き、星和会長伊藤まき氏の名をもって会員へ発送し、協力を求めた。けれども見るべき成果を挙げ得なかったことは、まことに遺憾であった。

昭和二十二年（一九四七）、**六月十五日**、二十二年度総会を開催、この席上万場一致で可決したことは、かねて母校より同窓会本部代表として、本会側より法人理事一名推薦の件を依頼された事により、伊藤まき氏が理事として加わること。また会費を百円に値上げし、二十三年三月卒業生より残額六十八円を集め、以後は百円とすること。（会員会費の事については詳細記事なく、壱円に値上げ後、参円、拾円の時代を経て、毎月卒業前に月謝と共に月々分割納入した模様である。）終戦後最初の名簿作製の件、母校復興資金援助の件等である。

秋十月、一関、古川方面に水害があって、相当の被害を及ぼした。会員永島てる氏、長倉冬氏、鈴木モトヨ氏に見舞金を送る。

昭和二十四年（一九四九）、十月二十七日、高等学校校舎落成記念式典を挙行、**二十八日**には同窓会主催のバザーを開催した。その純益金は左の通り母校へ寄贈した。

オルガン一台	三四、一四〇円	土樋女子大学寄宿舎へ寄贈
夜具上下二名分	二〇、〇〇〇円	土樋女子大学寄宿舎備品（遠来同窓生宿泊用）
高校作法室床飾り四点	一六、〇〇〇円	（薩摩焼香炉一、蒔絵文庫一、硯箱一、朱塗盆一）
合計	**七〇、一四〇円**	

五月十五日、岩沼町に、九月二十五日、亘理町に、十月六日白石町に、それ〴〵本会支部誕生。

昭和二十五年（一九五〇）十一月五日、二十五年度総会を開催した。

中学校校舎新築落成のため、五月の総会を繰り下げ、中学校新校舎において行なう。かねて懸案中の終戦後第一回会員名簿二千部を作製、同席上で出席会員へ配布した。既に昭和二十三年度総会で可決した改正会則を同名簿に記載した。会則改正については、中島慶治先生及び平山のぶ氏の多大な御尽力のあったことを、こゝで述べておきたい。

昭和二十六年（一九五一）三月一日、ミス・ハンセン、ミス・リンゼイ謝恩募金開始、趣意書を発送した。

ミス・リンゼイ御帰國について

明治三十八年（一九三六）から昭和二十六年（一九五一）まで母校宮城のため、その生涯を捧げて働かれたミス・ハンセン、ミス・リンゼイの恩師が隠退して、帰米の途につかれることになった。その頃ミス・ハンセンは御母堂の危篤のため早急に飛行機で帰国の途につかれた。そのあわたゞしい御帰国には同窓生は胆をぬかれた。後に残られたミス・リンゼイは独り淋しくも英語の教授に専一されていたが、先生にもいよ〳〵帰国の期が近づいて来た。その生涯を宮城のために尽された老境の身は仙台と宮城を離れるつらさは断腸の思いで悲しまれたときく。ミス・リンゼイの親しき一老教師はその心境を察して私共に語られた。同窓会は恩師の健康が許されるならばもう一ヶ年師の宮城学院滞在の日をのばし、母校と同窓生の中に過ごされることを花むけとしたいものと、当時の同窓会理事会はミス・リンゼイの一ヶ年間の留任を、学院の理事長矢野貫城氏に提出した。けれども理事会はミス・リンゼイ帰国決定後のためか、その歎願は受け入れられず、遂に師を送ることになった。同窓会が恩師の留任を学校当局にあたったことも、我々の歴史にのこす一ページである。

六月一日、塩釜市に同窓会支部誕生。

七月三日、昭和十六年から捧げた母校維持金は昭和二十三年までの八ヶ年間で打切ることに決定、母校から承認を得た。これは二十五年発行の会員名簿作製のため、多額の資金を必要としたからであった。その詳細は次の通りである。

昭和十六年より昭和十九年までの三ヶ年間に母校維持金として一五、〇〇〇円、同年理科教育振興基金として二、〇〇〇円。二十一年に三、〇〇〇円。二十一年に専門学校設立戦災復興資金として一一、二六七円。二十三年に復

興資金として拾弐万円。合計**拾五万壱千弐百六拾七円**を寄贈した。

二十六年四月、同窓会費を金参百円に値上げした。

十月二十三日、六十五周年記念式典が挙行された。

昭和二十七年（一九五二）、**一月二十七日**終戦後初の同窓会事業部が発足した。事業部の今昔は左の通りである。

女学部第十七回卒業生　伊　藤　う　ん

宮城女学校が創立五十周年を迎えようとする前年、即ち、昭和十年の早春、同窓会有志数名（伊藤まき姉他五・六名）が五十周年を記念して母校への奉仕を決議し、先ず事業部を設立して、会の発展と内容充実の為に活動し始めたのが、現在の同窓会事業部の発端であります。当時、会はファウスト校長帰米記念の建物なるファウスト会館を集会場とし、階上は五十畳敷位の和室でありましたが、役員会並びに諸集会を招集して懇談を重ね、または顧問土井八枝子夫人の御協力もあって、先ず土佐ダルマを仕入れ、次いで浴衣地数百反を東京より購入して、各支部を初め市内会員有志の協力を求めて、第一回目の純益金を得ましたが、これは佐藤淑子姉が直仕入の為に奔走された結果の賜物でもありました。次いで家庭必需品及び薬品の購入に努力して、校の内外からも重宝にされ、一石二鳥の効果を獲得致しましたが、その純益金は何時も母校への奉仕の一部となりました。

しかし昭和二十年七月十日の仙台大空襲の際に、二校舎と大講堂を残して、他は悉く焼失しましたので、事業部も一時中止のやむなきに至りましたが、二十七年頃から再開し、事業部委員の努力により、家庭用品を主に校内外の協力を得て前進しつゝあります。

英文科第十七回卒業生　泉　貞　子

事業部は終戦を境としてその前後に跡をたち、再び返り咲いたのでございます。母校もはや七十年の歴史を経てますます盛んになって参ります時、微力ながら七十周年記念事業資金の一部にと本部会計より資本金壱千円をお借りして始めましたのが一昨年の春浅い三月、若々しい緑の萌えと共に、私達の芽も今は大分大きく育って参りました。

主なるものとしては、石鹸類、ちり紙、ハンカチーフいろいろ、焼麩、こけし、ビニール製品類、かん詰、バター、ぶどう液等をたゞ今扱っております。市価よりもずっと安く、喜んでお求め頂いております。

また事業部と同様働きの大きなものとして、奉仕部があり、誕生も同時代であった。奉仕部は会員の時々の訪問に慰問に同窓会奉仕部の名刺をつくり、会員相互の交誼に大きなうるおいとなった。伊藤うん氏、佐伯いと氏、船坂きみ氏等は代表的な存在であられた。

十一月二十五日、アメリカン・リフォームド・チャーチ会長ゴーベル博士が御視察のため母校訪問の際、本部理事数名が懇談、玉虫塗花瓶を贈呈した。

昭和二十八年（一九五三）**五月十五日**、本会事務室として第二校舎一階南側一室を母校より借り受け事務を執行。

五月三十一日、二十八年度総会が開催された。会長伊藤まき氏が辞任、新会長に片桐こう氏が選出された。続いて前会長伊藤氏への感謝会を開き、船坂きみ氏の感謝の辞があって、万場拍手のうちに記念品を贈呈した。伊藤まき氏は昭和二十二年、西山貞会長の後をつぎ、七年の長きにわたり会長の重責を担われた。会長に就任前も常に理事として母校の緊急の場合はもちろんのこと、母校維持のため並々ならぬ努力を傾注された。現在は母校法人常任理事として御活躍中である。

二十五年会則改正が行なわれたが、その後また一部改正の必要を認め、総会で承認を得て一部を改正した。丸山敏子氏、船坂きみ氏、泉貞子氏の御尽力に感謝する。

七月六日、片桐新会長突如、御良人様が横浜へ御転任のため辞任された。会長に丸山敏子氏が理事会において選出された。

十月二十三日、宮城県気仙沼市に同窓会支部誕生。

十一月二十一日午後一時半、高校作法室においてフゥウスト博士並びに舎監竹中先生の追悼会を催した。恩師一見清、原田ことぢ、鈴木虎之進、村上兵助、舘岡剛、小野たまえの六先生を招待し、各先生の思い出話は、眼のあたり両先生の御姿が浮かぶが如く、暮れ早い晩秋の半日を惜しみつゝ記念撮影の後、散会した。

十二月七日、音楽科五回卒の加藤まつ氏から本会の基金として**金拾壱万円保険金加入の保険証**が丸山会長の許へ到着した。理事会の席上で感激のニュースであった。理事一同は深く感銘し、同時に全会員の奮起を促すものまことに大きいものがある。

昭和二十九年（一九五四）、**三月**、会員の数五千参百有余名となり、年毎に会員の数を増し、相互の連絡と親睦の度を一層密にするため有給の本会専任の事務担当者が必要となり、英文科九回卒小河内静江氏に依頼する。

昭和二十九年四月、終身会費を金五百円に値上げした。

同年五月六日午後一時、クリーテ博士御夫妻の送別会が高等学校作法室で催された。伊藤久子氏の司会で会は進められ、丸山会長の感謝の辞の後、クリーテ博士御夫妻のお別れの御言葉を頂き、いつ果てるとも知らず四十七のむつびの糸は心より心へと固く結ばれて、初夏の緑濃い葉に夕日の映ゆる五時過ぎ終了した。これに呼応して東京支部でも同月十一日、クリーテ先生御夫妻お別れの筵を都内港区南部坂教会幼稚園を会場として、春季同窓会を機に催された。八十余名の子供達が宮城学院の父母御夫妻を囲んで和やかな一時は、また一入のことであったろう。六月四日いよいよ御帰国に際し、本部より大場美恵氏が代表として見送られた。

この間、同支部の有志が三月十三日、加藤とら氏と笹尾やす氏（女学部七回卒）の喜寿の祝いを鵠沼の加藤氏邸で開いた。本会からこけしの内裏雛を御二方へお祝いとして送り、遙かにその御長寿を祈った。村上あや氏の当日詠まれた歌により主催された方々の御骨折りに感謝を表したいと思う。

・長らくのねがひかなひて鵠沼に　　・ひたぶるに神に仕へて感謝せむ
咲きそろひたりうばざくら花　　喜の字のよはひ祝ふこの日を

十二月二十五日、宮城学院同窓会報創刊号を全会員へ配付した。年毎に会員が増加し、母校並びに本会との交流がうとくなるのを恐れ、かねて計画中の会報がいよいよ発刊をみるに至ったのである。この間、各支部との連絡に

古き時代から新しき時代への変遷をと、旧き先生方や会員への原稿依頼に、また編集へと日夜心を砕かれた山田操氏、川端安子氏、長谷川キミ氏の三姉妹へ深い感謝を捧げつゝ、地の塩となり、世の光となった、この七十年の過ぎこし方をふりかえることも、まことに意義深いことであろう。

同窓会館より体育館へ

昭和二十八年六月六日、片桐会長の後を継ぎ、丸山敏子氏が会長として就任せられ、昭和二十八年度最初の理事会が**六月十三日**に開かれた。二年後に迎える記念すべき七十周年の記念事業案（同窓会館建設並びに本会々史編集）が提出され、再度の理事会において承認を得て、会館建設募金草案委員十名が会長より任命された。八月、クラス幹事を召集し、七十周年記念及び事業計画案を説明、全員の賛成を得、いよいよ具体化した。草案委員により募金額五百万円と内定、その後度々会を重ねた。東京・神戸支部長へも連絡を取り、十月近在支部長（六ヶ所）会議を本部で催し、支部長全員の賛成を得た。

昭和二十九年一月理事会招集、草案委員会において決定した募金案を提出し、理事全員の同意を経て、クラス幹事会を招集することに決定した。

四月十七日クラス幹事会にはかり全員協力を約束した。直ちに理事全員募金役割が決定し、いよいよ趣意書発行の段階にいたり、一同大いに張り切って「我らの家」をと声高らかに叫びつゝ運動開始の準備が全く整った。

五月八日、突如として会館より体育館へ切替依頼の旨母校より起こり、五月十五日臨時理事会を招集し、その旨を伝え、母校事務長末包氏の御出席を願い、体育館へ切替依頼となった理由の説明をきいた。五月二十三日、二十九年度総会開催に当たり母校を代表し、再び事務長より出席者全員に対し、切替になった今日までの経過につき説明があって、全員承認の形となり、体育館建設募金と改称のやむなきに至った。そもそも会館建設の目的は遠大な

希望の下に提案されたものであって、全会員五千参百有余名を容する我が同窓会の会員相互の友情と交誼を厚くする為、その連絡場所として本会独立の建物が欲しいこと(事務室、集会所、宿泊所)、その他会員の福祉的方面の仕事を計画すること(茶道、華道、料理、洋裁、編物等)、また、精神的に経済的に種々の困難と闘いながら神の御恵に励まされつゝ日々を送られる姉妹達への幾分の助力とする為のものであった事は云うまでもない。現会長丸山敏子氏は特にこれらの事を熟慮せられ、理事全員の協力の下に全国会員の援助と努力により、その実現を期したいとの念願であった。体育館建設募金趣意書に示された様に、母校の壮挙に対しこの大事業に邁進し、若鮎の如く躍る母校の姉妹達の成長を見守りつゝ、微力ながら応分の力を捧げて来た道はけわしく、行手遠き長い旅路をふりかえるとき、学生時代を回想し、ほのぼのとした喜びを感ぜずにはおられない。

七月三日、募金第一段階として、緑蔭アイスクリーム・パーティを泉のほとりで開いた。金六千参百円の純益をあげ、九月一日趣意書を全国会員へ発送した。

十月十五日、母校運動会を期してバザーを開催した。金二万八千百六拾円の収益を得た。引きつゞき十一月三日、第二段階として体育館募金バザーを開催した。おしるこ、うどん、コーヒー、ハンバーグバーンズ、その他五品目で、晴天に恵まれ、予期以上の成績を収め、七万六千二百七拾六円の収益を挙げた。この催しのためにオペラを上演、御指導を賜わった音楽科教授カンディフ先生、またあらゆる角度からみた近代の母校の姿を描かれて御寄贈いたゞいた布施梯次郎先生の蔭の御援助のあったことをこゝに申しのべておきたい。

昭和三十年(一九五五)、一月、母校七十周年記念の盛大に行なわれる喜びの新年(にいどし)を迎え、かねがね計画中の諸行事について具体的に実行案をねり、理事会並びにクラス幹事会の協力の下に万全を期することに決定した。この佳き年を寿ぎ、本会独自の歴史編集予定のところ、母校七十周年史の一部に繰り入れることとなり、その編集を急ぐこととなった。

また会員の大きな願いであった同窓会館建設が、前述の如く体育館に切替となり、払込期間が一応本年八月末日となるため、本部理事及びクラス幹事は各支部の涙ぐましい助力と共に、各自の責任を果さうと募金促進に拍車をかけることとなった。三月には大学二九二名、高校二五〇名、中学十一名、計五五三名の新会員を迎え、会員総数五千八百有余名に達した。

その間に、福島、山形在住会員の支部設立の要望高まり、理事会の承認を求めて、近く実現をみるに至った。六月に入り、行事日程について学校側より連絡あり、多忙の波が日毎に押し寄せてきた。本会は種々考慮の末、十月十日（式典）の翌十一日を記念祝賀同窓会とし、また行事中の最後の十五日（記念運動会）にバザーを開催、純益金を大講堂幕新調費の一部として寄贈することとなった。

秋のおとずれも濃くなる頃、実家の祝に馳せ参じたいと、娘達からの便りがつぎ〳〵と送りこまれた。また東京支部「思い出」の旅の催し等、多数の参加が予想されてきた。理事会は通信に連絡に宿泊に接待に、各係を依頼し、九月のクラス幹事会にはかり、役割の依頼等賛成を得て、十月始め最後の打合せを完了した。母校の多彩な催しを含めた祝賀同窓会の日程、宿泊斡旋等詳細なプログラムをかねた返信用葉書を全国同窓生に送り、万遺漏なきを期した。計画、準備に昼夜をわかたず心を労された、丸山会長始め全理事、特に専心事務に尽された小河内静江姉に深い感謝を捧げる次第である。

七月　山形支部、九月　福島支部結成式。

十月十一日　七十周年祝賀同窓会。

十月十五日　バザー、好天に恵まれ、**弐万参千拾八円**の純益をあげ、幕購入費として寄贈した。

追悼と感激と感謝の中に数々の思い出を残し、静かに閉じた一週間、遠く近く集まった参百六拾有余名の心の中にふくらんだつぼみは至る所に花を咲かせ、母校並びに同窓会発展への大きな道標となることであろう。

近く主の御降誕を迎えようとするこの年の歩みを省みつゝ、それぞれの小さな器を用い給うた神に感謝し、十一月末現在の体育館募金額を報告して母校を思う会員一人々々の尊きレプタに深謝を捧げ、尚いっそうの協力を切に希望するものである。

募金予約額　壱百八万四千六百九拾五円也
納入額　九拾六万四百九拾五円也

以上は目標額に甚だ遠いものがあるが、貧者の一燈とも申すべき一ケ年の成果がます〳〵輝きの加わるよう会員皆々様の御努力を願い、コリント人への第一の手紙九章十一節「惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである」の聖言(みことば)を表し得たいと思うのである。

（以上『宮城学院七十年史』―同窓会の歴史―より）

昭和三十一年（一九五六） 体育館の募金は昭和三十年八月末日で締切られることになっていたが、予定額に達し得ないため、三十二年三月末日まで延長することになった。会員各々の援助を切に希望するものである。その間、バザーなどを催し、出来うるだけ協力することになった。

八月二十六日、名誉同窓会長西山貞先生渡米を機会に、ロスアンゼルス及び加州地方、その他在米同窓生との親睦をはかるために、ロスアンゼルス支部誕生、初代支部長に山中しづ氏が選ばれ、同窓会は海外にも飛雄することになった。

十月、体育館募金の一助として五月と十月の二回にわたりバザー開催、三四、二一四円の収益をあげた。

昭和三十二年（一九五七） 一月十一日、昭和三十一年秋以来入院中の大場美恵氏現職にて逝去。十三日、母校大講堂において校葬がとり行なわれた。姉は大正四年以来母校宮城学院に勤め、三十二年間にわたり家政科のため尽力され、同窓生の模範とすべき存在であった。

六月、名古屋支部発足。初代支部長に奥平操氏就任。

七月十二日、昭和二十九年四月以来同窓会のため、専心事務を担当された小河内静江氏退職。ひきつづき後任として遠藤光子氏が就任された。

九月十七日、赤間つや子氏現職にて逝去。姉は音楽科卒業後母校に勤め、その後研鑽を積まれるため渡米、帰国後突然病魔におそわれ、七日の間意識の回復もまたず主のみ許に召された。母校音楽科のため嘱目された姉を失ったことは洵に残念である。

九月十八日、かねて話題のまとになっていた、ハンセン、リンゼイ両先生の軽井沢の別荘が同窓会のため寄贈されることが、いよいよ実現をみることになり、東京支部今泉純子氏より報告された。ハンセン、リンゼイ両先生が四十有余年の間、母校の姉妹達の教育のため尽力され、この間使用された山荘を憩いの場として、修養の道場として用いるよう同窓会のため恵与されたことは子弟を思う愛情の発露というべきである。この年いっぱい山荘の運営について本部、東京支部相協力して受入準備を開始し、二十七名の委員をあげ、ハンセン、リンゼイ記念山荘（仮称）と称し、一体となって希望にふくらんだ第一歩を踏みだすことになった。

住所　長野県軽井沢市林の根一三一九　土地　一、〇七〇坪　建坪　二階建延三十数坪

一方、体育館募金も次第に伸び、三十二年度五月の総会席上これまでに集められた百二十五万円を学校へ贈呈することを満場一致賛成、また三十二年度以降通常会計より五万円ずつをむこう五年間、計二十五万円を寄贈することも可決し、計百五十万円を体育館募金として寄贈することとなった。学校側より九月に入って体育館の決算報告

がとどき、同窓会より百二十五万円也の寄贈があった旨確定となった。三十年以来、本年三月まで延長された募金もこれで終りをつげた。姉妹方の多大な援助と協力に感謝したい。

昭和三十三年（一九五八）三月二日、福島県相双支部発足。初代支部長に高篠あい氏就任。

四月十六日、ハンセン、リンゼイ両先生より贈られた軽井沢山荘を同窓生は感謝の裡に、さっそく内部の改造と設備、備品の用意にとりかかることになり、一切に要する費用を見積もり、概算額四十万円を同窓生の手によってつくろうと募金を行なうことを計画。ハンセン、リンゼイ記念山荘募金趣意書を会報発行と同時に、全国同窓生に発送、協力を依頼することとなった。六月初旬より修理が始められ、増築も進んだ。その間、宿泊用備品一切の準備も整えられていった。

六月二十九日、山荘開荘式が軽井沢山荘において開かれ、いよいよ同年七月より新しい第一歩を踏み出すこととなった。七月十日より九月十日までの二ヶ月間を開荘期間として始められた山荘は、中旬に入り、母校大学の学生がぞくぞくと集まり、心ゆくばかり若い世代の清純さを発揮して、木がくれに見えかくれする雄大な浅間山に讃美歌のこだまする美しい光景はなににも例えようのないものである。

十月四日、夏季期間中山荘開きの経過報告会を、東京支部において開催。従来の山荘委員、つまり準備委員はこの日をもって解散となる。十月二十三日、新山荘運営委員として次の七名の方々が選出された。本部より丸山敏子、川端安子の両氏、東京支部より平山のぶ、今泉純子、加藤まつ、副島ノブ、服部文子の各氏、この中で平山のぶ、今泉純子の両氏は運営の指揮と、山荘のホステスとしての役目を果たされた並々ならぬ協力に深い感謝と敬意を表したい。

十一月二十日、中島慶治先生岐阜大学に勤務中、胃病のため逝去。二十四日仙台市五ッ橋メソジスト教会にて告

別式がとりおこなわれた。先生は昭和二年、宮城女学校に勤務以来、二十四年の長い間英文科発展のため、大きな功績を残され、また、同窓会のためにも尽力を惜しまれなかった。

年もおし迫り、記念山荘準備資金はぞくぞくと姉妹方より寄せられ、十一月に入り会計取扱者加藤まつ姉より報告され、七五三、四二四円もの額にのぼったことは洵に感謝である。決算報告は同窓会報第四号とともに会員に発送された。

昭和三十四年（一九五九） 八月十四日、ハンセン、リンゼイ記念山荘登記完了。

八月二十五日、第一回卒業生武藤ゆき氏、八十四才の高齢にて逝去。姉は熱心なクリスチャンで神戸支部同窓会のため支部長として長年奉仕され、同支部同窓会の発端を築かれたと申してもよろしいでしょう。

十月二十八日、一見清先生八十九才の高齢にて逝去。

昭和三十五年（一九六〇） 三月二十日、西山貞先生の離任式が行なわれ、同窓会を代表して会長丸山敏子氏送別の言葉を述べる。先生は、昭和十六年以来クリーテ博士のあとをつがれ、終戦を迎え、最も困難な時代をきりぬけ、戦後復興のため多大な功績を残され、また同窓会の名誉会長として会の育成、発展のため尽力なされた。ひきつづき新学院長小田信士先生を、名誉会長として迎えることとなった。

五月二十一日、ソプラノ界第一人者伊藤京子姉を招き独唱会を開催、記念山荘運営資金、即ち修繕改造等々費用が年毎に増加するにともない資金の必要上、一〇五、七五六円の収益を山荘資金に繰り入れることとなった。

五月二十四日、宮城県志津川、気仙沼、石巻、塩釜方面にチリ地震津波の襲来があり、同地方在住の同窓生、とくに甚だしい被害を被られた方々を慰問することとなり、理事が手分けて訪問を行なった。

八月二十四日、伊藤まき氏、七十六才にて逝去。二十七日、仙台市南六軒丁（現、広瀬河畔）教会にて告別式が行なわれた。姉は同窓会第七代会長として重任を果たされ、同窓会発展のため尽された。

十月二十八日、大泉しげ先生八十五才の高齢にて逝去。

秋に入り、学校側より、軽井沢ハンセン、リンゼイ記念山荘の隣接地にあるシュレーヤー氏の建物を八十五万円にて買いうけ、運営については同窓会に委嘱する旨の申し出があり、理事会にはかることとなった。

十二月を迎えて、法人理事会においては、クリーテ博士夫妻を七十五周年の式典に招待する旨決定。同窓会では、軽井沢山荘運営委員会が、かねがねハンセン、リンゼイ両先生を軽井沢山荘に招き、日頃のご恩に報いたいという希望もあり、これを実現させたいという意見が理事会で一致した。

昭和三十六年（一九六一）年あらたまり、七十五周年の記念の年を迎え、二月にはいり、ハンセン、リンゼイ両先生を記念式典ご招待の企画委員会結成。つづいてクラス幹事会を招集、満場一致の賛成を得、三月一日を期して招待のための募金趣意書を発送した。とくに学内同窓生の協力により、いっそうの成果をあげようと懇談会を開いて、ますます意気があがってきた。

四月、岩ヶ崎支部発足。初代支部長に韋名はま子氏就任。

六月、招待募金の経過報告と招待についての細かい打ち合せが進み、七月になって受入準備態勢は着々と進んでいった。

七月～九月、山荘の開荘と同時に学校より運営を委嘱されたシェレーヤーハウス（別館）も使用する運びとなり、今までの女護ヶ島より解放され、家族連れも利用できるようになった。

八月に入り、ハンセン、リンゼイ両先生歓迎準備について大童となり具体案が完了し種々打ち合せにかかった矢

先、両先生八月十六日羽田空港着との報告があった。東京国際文化会館に一泊後、十七日は待ちのぞんだ同窓生にかかえられるようにして仙台ホテルロビーにおちつかれ、在仙滞在の一歩をふまれた。

十月八日、午後二時より体育館において、両先生歓迎総会、お二人の先生の元気なお顔を拝すべく、北は北海道の果てから、南は九州まで約三百名の同窓生が集まり、会場には日本、アメリカの国旗が飾られて楽しい雰囲気が、会場いっぱいに満たされた。十月九日、午前十時より創立七十五周年記念式典が挙行され、両先生ご出席。永年勤続者として同窓生関係の次の六名の方々が表彰された。平山のぶ氏法人理事(二十年)、斎藤てる氏(三十六年)、佐藤かつ氏(二十五年)、伊藤久子氏(二十五年)、南條和子氏(十八年)、庄司知子氏(十五年)。

その後両先生は、十月十八日、宮中において皇后陛下より拝謁を賜り、同窓会を代表して丸山敏子、伊藤うん、柏山恵智子の三氏が同道、学校側より小田院長、菅野事務局長も付添って参内した。そして、十月三十日、八月十六日到着以来三ヶ月間滞在の数々の思い出を残され、在仙最後の本部送別会を終了、十一月三日離仙と決定した。十一月九日、二十三時五十九分、羽田空港発で帰国の途につく。酷暑の八月以来、滞在の日程を満足いただけるように千々に心を砕き、帰国された後のほっとした安堵と疲れのうちにこの年もようやく終りに近く、クリスマスも迫ってきた半ばを迎えてこの一年間、いろいろと協力いただいた同窓会各支部長始め、会員の並々ならぬ苦労に対し、感謝を捧げ、七十五周年特集号として会報の発行に全力をそそぐこととなり、各編集委員は、ハンセン、リンゼイ両先生招待に関する記録の収集に大童、多数の同窓生より寄せられた招待募金の収支決算報告へと、一日一日の経過が恐しいほどめまぐるしい後始末の一ヶ月が終り、十二月二十六日、特集号を全国同窓生に発送。

昭和三十七年（**一九六二**）三月、暫らく病床にあられた元校長C・D・クリーテ博士は三月三日、米国カリフォルニア州クレアモントにおいて永眠。三月二十一日、学校同窓会合同にて追悼式を行なった。六月、クリーテ博士

夫人永眠の報に接し、驚きのほかはなく、七月四日、学校と同窓会合同にて追悼式を行なった。お二人の人格と、温かい面影はいつまでも教え子たちの心の中に生きるであろう。

九月、かねてから母校は「施設拡充十カ年計画」をたて、目標額を一億円とし、同窓会にも援助、協力方について依頼があった。同窓会としては協議の結果、協力することに決定し、十月一日、全国同窓生に対し依頼状を発送した。

昭和三十八年（一九六三） 六月十六日、秋田支部が発足、最初の支部長に長谷川とく氏就任。

十二月、施設拡充募金は、口数二八五口、金額一〇、二二六、三〇〇円となり、はるかに目標額をこえたことは、同窓生の母校を思う厚い祈りの賜物と言えよう。

昭和三十九年（一九六四） 九月八日、小野タマエ先生、七十四才にて逝去。病気療養中であられた先生は、大正十五年以来、三十七年間にわたり母校家政科のため尽され、恩師として母として慕われていた先生の死去は、家政科として、また家政科の卒業生にとり、大きな支柱を失ったと同然であり、洵に哀惜に堪えない。

鈴木玖磨氏（女学部三十二回卒）の先生を思う一首に

胸高に紫紺のうるはしき
ありし日の師を涙しておもう

昭和四十年（一九六五） 四月二十九日、同窓会名誉会長西山貞先生は、この日を卜し多年教育に貢献された功労により、勲三等旭日中綬章を下賜され、喜びの限りである。

十一月十三日、秋も深まる頃、大阪阿倍野風流田舎そば屋において、東北学院・宮城学院神戸在住同窓生合同懇親会が開かれた。これが二回目である。第一回は神戸支部において大正十年十月八日、武藤ゆき氏宅を会場とし、懇親会を開いたことが記録に残されており、ほほえましい和やかな一駒である。

十一月十四日、福島市会津在住の東北学院・宮城学院合同の同窓生懇親会が、会津東山温泉新滝旅館にて催され、宮城学院側より小田院長先生、本部より丸山敏子、川端安子の両氏が出席した。この機をきし、会津支部会が結成され、最初の支部長に小檜山綾子氏が選出された。

昭和四十一年（一九六六） 八十周年記念行事を迎える年となり、昨年六月より種々計画をたて、このことについて五月七日クラス幹事会招集、記念行事案を説明、承認をうけ本格的に乗り出すこととなった。六月に入り学校側より行事日程が示され、十月十二日から、十八日の一週間行なわれ、十五日を同窓会デーとして使用することとなった。

五月七日、西山貞先生は長らく病気療養中であったが、東京都武蔵野病院で逝去、初代日本人の校長としてのご功績はまさにめざましいものがあった。同十四日午後二時より大講堂において学院葬がおこなわれまことに哀悼に堪えない。

七月八日、第一回創立八十周年記念行事準備委員会を開き、各パートの責任者が決まり、その後たびたび会合をひらき着々と進んでいった。全国より八十周年を目指し、わが家に集まって思う存分しゃべりたいという娘たちの希望が一年前よりおこり、いろいろの工夫がなされた。――愛子スクールハウス並びにグランドを紹介かたがた宿泊をしてもらうこと。新しく出来上った大学米ヶ袋寮の見学。終戦後復興した仙台杜の都、青葉城跡等々、大型バスを連ねての「見て歩き」。パーティーには、仙台市内国分町徳陽相互銀行本店大ホール。パーティーには七十五才

以上の卒業生を招待すること。記念品としてスプーン銀装二本。噴水と大講堂の版画式カード二枚入等々の心のこもったプランが進んでいった。

九月十九日、初秋の色もみえそめ、杜の都も一入秋らしくなり、記念行事に余すところ一ヶ月足らずとなった。記念式典並びに同窓会パーティーに招待する七十五才以上の先輩の方々に招待状を発送し、また旧恩師には同窓会デーへとてんてこ舞い。九月二十四日、最後のクラス幹事会開催、記念式典及び同窓会デーのプログラムについて説明、当日の各係を依頼しいよいよ多忙な毎日となった。

十月、いよいよ母校創立八十周年記念行事がくりひろげられることになった。十二日記念礼拝、十四日記念式典、十五日同窓会デーと一週間にわたって華々しく催されることとなった。十四日午前十時からの記念式典では、永年勤続者として次の方々が同窓生関係として表彰された。斎藤てる氏（四十年）、伊藤久子氏（三十年）、南條和子氏（二十三年）、庄司知子氏（二十年）、平山のぶ氏法人理事（二十五年）。

十月十五日、同窓会デー。仙台市国分町徳陽相互銀行大ホールにおいて盛大に行なわれた。約三百名の姉たちが集まった。この日午前八時三十分校内見学、貸切バスにて母校正門出発、学寮、愛子グランド、青葉城跡等をみて歩いた。午後十二時三十分より行なわれる祝賀パーティーに参加。午後三時無事終了。三々五々、愛子の宿泊所、ホテル、親戚等へと散っていった。

十一月十九日、理事会開催。八十周年記念式典並びに祝賀パーティーについて反省を行なう。盛大にしかも楽しく終了し、数々の思い出を残して閉じたこの一週間、陰に陽に過去一年にわたり種々苦労を積まれた同窓会理事及びクラス幹事の方々に、感謝と敬意を表するものである。

昭和四十二年（一九六七）三月十日、スタンレー・ジョーンズ博士の大伝道集会が大講堂で行なわれた。同窓会

教養部は同窓生に呼びかけて参加した。

五月、同窓会報「みやぎ」九号・創立八十周年記念特集号成り、全国同窓生へ発送。

五月、同窓会終身会費追徴金を会員に納入してもらうことに決る。

七月十三日、ハンセン、リンゼー両先生より寄贈を受けた軽井沢記念山荘の開荘十周年の感謝会を開く。母校理事長矢野貫城先生ご夫妻初め仙台より高橋とき氏、虎岩千代氏が上荘し感謝の祈りを捧げた。

九月十三日、事業部・教養部共催の第一回「友愛セールバザーと小音楽会」開く。純益三二、七四〇円を得る。

十一月、同窓会名誉会長の小田信士学院長は米国オハイオ州のハイデルバーク大学の名誉博士の学位授与式並びに聖地パレスチナの研究調査より帰仙。同窓会にて旅行談を伺う。

昭和四十三年（一九六八） 一月四日、宮城学院名誉教授K・I・ハンセン先生はカンサスのノルトン病院にて九十一才のご生涯を終えられた。先生はリンゼイ先生と共に明治四十年九月本学院にご来校になり、その永いご生涯を宮城学院のために捧げられた。音楽教育への厳しい態度とキリスト教精神に貫かれた豊かな愛の教えは多くの教え子達に強い感化を与えた。英文学のリンゼイ先生との強く暖かい友情は、そのお人柄を偲ばせる麗わしいエピソードとして語り継がれている。

一月二十六日、ハンセン先生の追悼式が一号館七番教室に於て行なわれ、その後、学生ホールに於て、白菊の花に囲まれた先生の慈母のようなお写真を前に、追悼会が営まれた。内外の多くの関係者、同窓生が集い、そのご遺徳を偲びご冥福を祈った。五月、同窓会報「みやぎ」十号、故ハンセン先生追悼特集号成り、全国同窓生へ発送。

九月七日、事業部・教養部共催、第二回「友愛セールバザーと小音楽会」開く。純益三〇、九〇四円を得る。

十月十三日、小説「氷点」の作家三浦綾子女史を大講堂にお迎えして「私を変えた愛」と題する同窓会主催の講

演会を開催。女史はキリスト教の厚い信仰に支えられて、常に文学と宗教との接点を追求され、祈りのうちに執筆されるという人柄に、同窓会は深い共感を覚え以前から女史とご交際のあった同窓会顧問の佐藤利吉先生のご尽力によって実現の運びとなった。同窓生のみならず、一般の方々にも解放したので、会場は立錐の余地もないほど盛況であった。

講演内容は、女史自身の赤裸々な体験を通し、神に導かれることを自覚する人生に至るまでの熱情的な話しぶりに、そして最後に「私の一生を闇から光あるものに変えたのは、まことに神の愛である。私は今ここに皆様のために、心から神の子イエスをご紹介申し上げる」と結ばれたことに一同強い感動を受けた。翌夕刻、女史ご夫妻を囲み、懇親会を行った。

昭和四十四年（一九六九） 学校法人宮城学院寄附行為の一部が変更になった。それに伴い、同窓会に関するところも一部変更された。即ち、従来は同窓会から学校法人理事並びに評議員をおくる場合は、理事候補者四名を同窓会で選出して、その中から二名を学校側で選出する方法がとられていたが、新制度では理事二名は同窓会で選出することになった。

評議員については従来、同窓会選出は六名だったが、新制度では八名選出することになった。このため同窓会理事会は六月中に数回会議を持ち審議した結果、法人理事並びに評議員の候補者を定員の倍数選出し、クラス幹事、各支部長、理事により、選挙を行なうことに決定、但し、理事候補者のうち選外の二名に関しては評議員候補者とすることにする。

七月、学校法人宮城学院寄附行為に基づく宮城学院同窓会選出の理事及び評議員選挙規定を作成し、承認を得て、七月十二日より、施行することとする。

七月十二日、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）が行なわれ、次の方々が選出された。法人理事に丸山敏子氏、瀬戸堯子氏。法人評議員に柏山恵智子氏、斎藤てる氏、滝口篤子氏、山浦ヤイ氏、伊藤久子氏、久保和子氏、蔵持節子氏、舩木フキ氏。

五月、同窓会報「みやぎ」十一号成り、全国同窓生へ発送。経費節減のため、雑誌形式の会報はこの十一号をもって終る。次号からは新聞形式に改めることが決る。

七月十九日から八月十日まで第一回同窓会主催ヨーロッパ見学旅行を実施する。十三名が参加し、好評であった。

十一月三日、同窓会長丸山敏子氏が「永年、教育・学術文化向上に貢献したその功績が顕著である」ということで、勲六等に叙せられ、瑞宝賞を授与された。同窓会では大きな誇りとして、十一月二十四日、丸山敏子氏叙勲のお祝いの会を開いた。

昭和四十五年（**一九七〇**）五月二十二日、大正末期から昭和初め、家政科長をされていたヒーシング先生が来仙され、有志による昼食会を開いた。

七月七日、昭和の初め音楽科の先生をされていたミセス・ブローティ（旧ミス・ブラット）を囲み、グランドホテルに於て、有志による歓迎会を開いた。

十月二十四日、東京支部の「宮城野グレー十五周年記念の合唱の夕べ」を厚生年金ホールで開き、大へん好評を博した。

昭和四十六年（**一九七一**）三月三十一日、同窓会副会長であり、本学院中・高教諭の山浦ヤイ氏が仙台国立病院にてご永眠になられた。三月二十六日、広瀬河畔教会に於て告別式が行なわれ、武田愛氏が弔辞を呈した。先生を

敬慕する現教え子や同窓生たちが大勢参列し、ご冥福を祈った。

四月二十二日、昭和二十八年より十七年の永きにわたり、同窓会長として宮城学院の同窓会の発展のためにご尽力下された丸山敏子氏が会長をご退任になられた。それに伴い、クラス幹事会に於て同窓会長選挙が行なわれ、ここに、女学科三十一回、英文科九回卒業生滝口篤子氏が第十代同窓会長に選出された。

四月二十三日、宮城学院名誉教授L・A・リンゼイ先生は二月十一日、アメリカ、カンサス州アーカンソーシティに於てご永眠になられた。明治四十一年十月に本学院に奉職されて、ミス・ハンセン先生と共に、宮城学院並びに同窓会のために、戦前・戦後を通じ、多大の貢献をされて、全同窓生の敬慕の的であられた。英文学の講義に、英語劇の指導にその情熱的な面影が偲ばれ、大講堂に於ける追悼式の遺影の前に、同窓生は立去り難い思いで菊の花を捧げ冥福を祈った。

十月十六日、菊薫るこの日、母校創立八十五周年記念同窓会祝賀パーティをセントラルホテルに於て開催。全国各地より集まった同窓生百数十名、神の御恵みによって、すばらしい発展ぶりを示している母校の八十五年の歩みを顧み、各々学生時代にかえったような賑やかな祝賀会であった。

なお、夕刻六時半より、著名なアメリカのジュリアード音楽院ピアノ科主任教授ヨーゼフ・ブロッホ氏の同窓会主催音楽会を電力ホールに於て開催。音楽学者であり、演奏家である先生の堂々としたすばらしいリサイタルであった。「生き生きと現代を感じさせ、聞くものの心を捉える演奏……」と翌日の河北新報は惜しみない賛辞を表していた。先生は十月一杯滞在され、音楽科生の指導、中高生のためのリサイタルを開くなど、大へんなご厚意を示して下され、まことに感謝にたえないことであった。

その後、八十五周年記念事業として、同窓会奨学会を発足することに決まる。ヨーゼフ・ブロッホ氏の音楽会で得た収益も含め、八十五周年を記念して、八十五万円を基金として始めることにした。以後、賛同者、有志の寄付

も加わり、基金も増えつつあることは喜ばしい限りである。

十月十八日、創立八十五周年記念礼拝、記念式典が大講堂に於て挙行された。式典に於て感謝状の贈呈並びに永年勤続者の表彰が行なわれた。同窓生関係は次の方々である。

感謝状を受けた方――加藤まつ氏、大正十二年より、十五年余の永きにわたり、教員として本学院に奉職し、その後、同窓会支部長として、また軽井沢山荘運営委員長及び本学院大学寮舎監として、本学院発展のために大きく貢献された。佐藤かつ氏、大正十二年より、四十一年余の永きにわたり、本学院に奉職し、その生涯を母校のために献身され、本学院発展のために大きく貢献された。山田操氏、大正十二年より、四十八年余の永きにわたり、本学院に奉職し、本学院音楽科のための充実発展のために貢献された。

永年勤続により表彰を受けた方――（二十五年以上）伊藤久子氏、南條和子氏、庄司知子氏。（二十年以上）泉貞子氏、千田ふみ氏、岡村直子氏、山際トシ氏、菊地明子氏。

なお、式典の中で、戦時中勤労動員先で、卒業の日を迎えたため、卒業証書を受けることなく、今日に至った昭和十九年三月宮城高等女学校四学年終了者への卒業証書授与式が行行われたことは感謝であった。

昭和四十七年（一九七二）三月、中・高・大の卒業生千余名を同窓会に迎えて、全同窓生は二万を越す大世帯となる。

三月三十日、学校法人宮城学院より、宮城学院広報第一号が創刊された。同窓会独自の会報は四十六年五月刊十三号をもって中止し、宮城学院広報の一部に同窓会報を載せることになった。

四月、学院側のご厚意により、同窓会の集会室として七号館教室をお借りすることになり、和室に改装した。

本年度より、同窓会費を三千円に改訂した。

五月二十七日、同窓会総会をシティホテルに於て開催。その後、今春ご退任になられた学院長であり、同窓会名誉会長であった小田信士先生をお招きし、本学院並びに同窓会のために多大の貢献をされた功を記念して、記念品を贈呈し、感謝の意を表した。

七月十五日、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）が行なわれ、次の方々が選出された。法人理事に滝口篤子氏、柏山恵智子氏。法人評議員に伊藤久子氏、福井喜江氏、久保和子氏、蔵持節子氏、舩木フキ氏、織田豊子氏、坂本喜久子氏、瀬戸堯子氏。選挙終了後、新しい同窓会和室に於て、各支部長、前任理事、現理事が集い、同窓会の現況や運営状況について懇談。

九月二十九日、創立八十六周年記念全学教職員礼拝に於て、永年勤続者の表彰式が行なわれ、次の同窓生二名が表彰された。蔵持節子氏（二十年）、三浦まさ子氏（二十年）。

十月八日、ミセス・M・アンケニー先生がアメリカに於て、ご永眠になられた。先生は、戦前・戦後を通じ、本学院に於て英文学を教えられ、また、法人理事、評議員として、本学院のために多大の貢献をされた。十一月十五日、東北学院礼拝堂に於て、東北学院・宮城学院・日本キリスト教団広瀬河畔教会、合同の告別式が行なわれた。先生のご遺徳を偲び、多数の教え子、関係者らが参列し、ご冥福を祈った。

十一月、奨学会会則成る。総会で承認を得次第、奨学生を募集することとなる。

十一月十八日、事業部・教養部共催「友愛セールバザーと小音楽会」開く。純益四万七千円。

昭和四十八年（一九七三）三月十九日、宮城学院広報第二号発行。

五月十六日、学院長に佐藤昌彦先生が就任された。

五月二十六日、総会を伯養軒会館に於て開催。同窓会会則一部改正並びに奨学会会則の承認を得る。その後、新

しく同窓会名誉会長になられた佐藤院長ご夫妻の歓迎会を行なった。同窓会員名簿が完成。価一千三百円、送料二百円。

七月三日、小野タマエ先生の追悼記念会を三号館和室にて行なう。先生の親しい教え子である在米の菊地よし氏の来仙を機に、石井学長、丸山前会長を初め同窓生三十余名が集い、ご冥福を祈った。

八月二十八日、ルース・クック先生の歓迎会をTG会館にて行なう。先生は約四十年前、姉上のヘンリエッタ・クック先生と共に、それぞれ音楽科と家政科で教鞭をとられた。同窓生三十名が集い歓談。

十月十二日、中・高PTA教養部と同窓会教養部共催「仙北史跡めぐり」を行なう。

十一月十七日、事業部・教養部共催「友愛セールバザーと小音楽会」を開く。純益一〇三、一七一円を得る。

十二月二十三日、副島ノブ牧師歓迎会を和室にて行なう。全学院教職員クリスマス礼拝の説教者として、同窓生の日本キリスト教団麻布南部坂教会の副島ノブ牧師をお招きし、感銘深いメッセージを頂いた。その後、和室にて、佐藤学院長、佐藤理事長、ガーナー宗教部長、丸山前会長、現理事など二十数名が集い、真近に先生のお人柄に触れ、神の御栄えと母校の発展を祈り、奨励を頂いた。

十二月二十四日、校内同窓生のクリスマス会を行ない、捧げられた献金は、同窓生が働いている西多賀療養所におくった。

昭和四十九年（一九七四） 創立九十周年に向けて、学校法人に於て、創立九十周年記念事業委員会が発足した。同窓会からは滝口篤子氏、織田豊子氏、泉貞子氏（建設募金委員）、武田愛子氏（式典委員）、福井喜江氏（年史編集委員）が選出された。

五月二十五日、同窓会総会を弥生会館で開催。

五月二十九日、第百十一回、春季関西支部同窓会を芦屋市民会館で開催。学校側より石井学長、渡邉弘道先生、高梨光先生、大沼校長と丸山前会長、滝口会長出席、関西支部長初め、関西各地より会員が集った。中でもご永眠になられた前支部長の村瀬氏の九十三才になられたご主人がご出席なされ、一同感激。

六月三日、東京支部会が例年通りこの青葉の季節に青学会館にて開催。柏山支部長初め百余名の出席という盛会ぶりにて、七十才以上の先輩も数人参加され、遙かに母校を偲んだ。

この年、各コース会発足する。同窓会の目的である「キリスト教の信仰に支えられて、会員相互の親睦と教養の向上をめざし、ひいては母校の発展に寄与する」ことを達成すべく、各コースごとの同窓会を持つことになり、以前から有った聖書科、女学科の二コース会に加えて、英文、音楽、家政、日文、教養、保育、の各科及び高校の七コース会が発足の運びとなった。そのトップを切って十月十八日家政科コース会が開かれ、以後、各科の特色を生かし、それぞれのコース会が開かれて、実りある報告が本部に寄せられてくるようになったことは大きな感謝である。

九月一日、同窓会の最初の奨学生が誕生。父を突然失って、修学困難となった真面目な本学院高校二年生に奨学金を贈呈することになった。

九月二十七日、全学院教職員礼拝に於て、永年勤続者八名が表彰を受けられた。うち四名が同窓生である。斎藤松枝氏（二十一年）、久保和子氏（二十年六ヶ月）、神舘雅子氏（二十年六ヶ月）、水野幸子氏（二十年六ヶ月）

十月二十五日、中・高PTA教養部・同窓会教養部共催「仙南史跡めぐり」を行なった。

十一月九日、事業部・教養部共催「友愛セールバザーと小音楽会」開催。純益一一万三七〇五円を得る。

十二月十日、校内同窓生クリスマス会を行ない、献金は堀川愛生園（高校五回卒・飯田通子ご夫妻の施設）と愛成学園（英専五回卒、紺野やす子氏が園長の施設）にそれぞれ一万円ずつ贈った。

昭和五十年（一九七五） 四月、幼稚園から中高・大学までの一大総合学園として発展した本学院は教育環境の拡充整備と教育内容の充実という目標のもとに四十八年三月以来検討されて来た仙台北部丸田沢方面への本学院総合移転計画が着々進み、一粒社ヴォーリズ設計事務所による設計もほぼ完了。法人側のご厚意により、同窓会館も新校舎の一隅に、同窓会事務所、集会室、和室と立派に設計された。永年夢みた同窓会館建設の念願が実現されるのも間もないこととなった。神のご恩寵に感謝し、喜びをもって全同窓生に報告する次第となり、ついてはその建設資金の募金を願うべき趣意書の作成を急ぐことになった。

四月十七日、アメリカの代表的オルガニスト、クレア・コーチ博士によるパイプオルガン演奏会を大講堂にて開催。

同月、宮城学院同窓会長選挙規定成る。また二十六日、同窓会長並びに同窓会理事の選挙が行なわれた。会長には滝口篤子氏が再選された。

五月十九日、学院長に清水二郎先生が就任された。

五月三十一日、同窓会総会が大講堂で行なわれ、同窓会会則の一部改正が承認された。つづいてTG会館において、同窓会名誉会長となられた清水院長ご夫妻の歓迎会を行なう。

七月、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）が行なわれ、次の方々が選出された。法人理事に滝口篤子氏、柏山恵智子氏。法人評議員に伊藤久子氏、泉貞子氏、福井喜江子氏、織田豊子氏、林松子氏、瀬戸堯子氏、久保和子氏、土生慶子氏。

八月十六日、加藤まつ先生がご永眠になられた。九月二十日、東京南部坂教会にて告別式、中山新子氏指揮の「宮城野グレー」のコーラスにて行なう。

九月二日、椿多摩先生がご永眠になられた。実に二十八年の永きにわたり、本学院教育並びにかるた競技向上に

多大の貢献をされた。九月二十日、大講堂にて追悼式を営み、学校関係者が弔辞を呈し、冥福を祈った。

九月二十日、同窓会コース会規約成る。

九月二十六日、全学院教職員礼拝につづいて永年勤続者表彰が行なわれ、次の同窓生が表彰された。岩渕淑子氏（ひで）（二十年）

十月、社会の経済事情を考え、同窓会の運営に支障なきよう、五十年度から、全同窓生より維持費を納入して頂くことに決る。

十二月四日、校内同窓生クリスマス会にて、献金一九、四〇〇円を青葉女子学園に贈った。

昭和五十一年（一九七六） 二月二十八日、中高卒業生の同窓会入会式を行なう。中学卒業生二名、高校卒業生三百九名を同窓会に迎えた。

三月十九日、大学・短大卒業生の同窓会入会式を行なう。短大卒業生五百十二名、大学卒業生三百七十四名を同窓会に迎えた。

四月、同窓会費を本年度より六千円に改訂した。

十月十七日、秋晴れの美しい日、母校創立九十周年記念礼拝、総会並びに祝賀パーティが催された。午前十時より大講堂に於て、同窓会の創立記念礼拝が行なわれ、織田豊子氏司会により清水学院長の説教をいただいた。創立当時の生徒宮本むら氏の信仰厚い生涯を培った宮城学院の精神の尊さと神の摂理の永遠なることを主題としたもので、一同大きな感銘を受けた。つづいて永年同窓会のために功労された方々の表彰式が行なわれた。

永年功労者氏名――（支部長）姉歯たま氏、大泉いち氏、安部さだ氏、葦名はま子氏、柏山恵智子氏、岡美佐子氏。（理事）――伊藤うん氏、佐藤かつ氏、斎藤てる氏、丸山敏子氏、猪股満喜子氏、高橋とき氏、林松子氏、伊藤久子

氏、蔵持節子氏、泉貞子氏、山際トシ氏、福井喜江氏。

ひきつづき昭和五十一年の総会が行なわれた。全国より参集した同窓生にて、大講堂の一階は埋まり、近年にない盛況ぶりにて、織田副会長挨拶は記念事業である同窓会館建設とチャペル建設の為の募金をお願いする熱意に溢れたものであった。清野・岩渕理事より庶務、会計報告、つづいて福井副会長により理事紹介があった。総会終了後、一同にて本館前、大講堂を背景にして記念撮影。

宮城学院創立九十周年同窓会祝賀パーティは伯養軒会館にて十二時半より行なわれた。滝口会長の挨拶につづいて清水名誉会長、佐藤理事長の祝辞、御招待者紹介があり、千田ふみ氏の独唱にて会は華かに盛り上り、丸山前会長の食前の感謝にて食事となる。ご出席同窓生中最高齢者で八十九才の大場ひとし氏の喜びのご挨拶に盛んな拍手が湧いた。招待者、先輩、支部長のスピーチ、つづいて巧みな日本語によるランディス先生の可愛いい指人形の創作劇に一同吸い寄せられ、会場は二百余名の笑いとどよめきに終始和やかな雰囲気の渦にひたりつつ進行し、豪華なお料理は次々に平らげられ、招待者、先輩、後輩の同窓生の暖い交流のうちにこの記念すべき祝会は、次回百周年記念の日の再会を約してお開きとなった。

〈明治会〉――祝賀会終了後、同窓生の車に分乗した明治時代の在学生の大先輩達は同窓会和室に参集し、明治会と称する貴重な同窓会を開いた。理事有志のお世話にて約三十人の大先輩が相集い、後輩たちの持ち寄ったおむすびやお菓子に舌鼓みを打ちつつ、七十、八十余才の元宮城の女学生は嬉々として昔語りをし、夢のような懐かしくも麗わしい時を過したことを特筆せねばならない。

十月十八日、創立九十周年記念式典が大講堂に於て厳粛にとり行なわれた。昨日の祝賀会にひき続き大勢の同窓生が参列し、感激のうちに式は進行し、同窓会より祝辞を呈した。なお、法人側より永年学院の発展に貢献された多くの方々と共に同窓生としては次の方々が感謝状を受けた。丸山敏子氏、泉貞子氏、武田愛氏。また、永年勤続

者（二十五年以上）として同窓生からは次の方々が挙げられた。伊藤久子氏、岡村直子氏、南條和子氏、千田ふみ氏、菊地明子氏、山際トシ氏。

昭和五十二年（一九七七）一月、母校宮城学院は創立九十周年記念建設事業として総合移転の計画が進められ、現在の桜ヶ丘九丁目の校地に移転することが決まり、工事が着手されることとなった。これを機に同窓生にとって長い間の念願であった同窓会館の建設を校地のなかにとの願いが許可され、場所も本館の隣りの便利な所と決定した。同窓会ではさっそく理事会とクラス幹事会にはかり、了承を得て、昭和五十二年一月より昭和五十四年十二月までの三ヶ年間を募集期間として、同窓会館建設募金趣意書を作成した。目標額を五千万円とし、全国同窓生に発送し協力を依頼した。同窓会館の完成にともない、仙台における女子教育の発展のため大なる貢献をなしつつある宮城学院と同窓会の長い歴史の足跡を直接目で見る大切な資料も整備する資料室を設けることとなった。

六月、同窓会館建設もかねて、学院建設委員として同窓会より滝口会長、林松子氏が加わった。また同窓会館建設委員に会長以下八名、九十周年記念史（『宮城学院最近十年小史』）編集委員も決定した。

七月、学院移転のため、校内にプレハブを建て、その中の二階に同窓会事務室を移動する旨学院側より達しがあり、予定は十月頃となった。

九月二十一日、音楽科教授W・S・カンディフ先生在仙二十五年を記念し、仙台市市民会館大ホールにて、午後六時三十分よりピアノ・リサイタルが催された。すばらしい演奏に満堂の聴衆は魅了され、大成功裡に終了した。その純益金は全額同窓会館建設費に寄贈された。先生の温かいお心に感謝でいっぱいであった。その額は一、二一四、四二九円の多額であった。

九月二十九日、女子大学来春卒業予定の学生による演奏旅行が盛岡で行なわれるのを機に、岩手支部発足、初代

支部長に吉田見知子氏就任。

十月五日、同窓会事務室予定どおりプレハブ二階に移り、会館完成を待ちわびながら執務が始まった。

十月三十日、青森支部発足、初代支部長に安藤明子氏就任。

昭和五十三年（一九七八） 一月、従来の栗駒支部を栗原支部と改称し、支部長に葦名はま子氏が選出された。

三月二日、東京支部初代支部長であられた加藤とら氏逝去、余生を熱海で過され、百一才のご高齢で召天なされた。姉は高等女学科七回卒業で、世界的に有名な化学者加藤与五郎博士の夫人として、ご主人のかげの力となり、多くの有能な弟子達の育成のため尽力、また同窓会軽井沢山荘のためにもつくされた。

六月十二日、宮城県沖地震（マグニチュード七・五）県内をおそい、明治三十八年以来の強震であった。それにより大被害を受けられた同窓生に見舞金を送った。

七月、理事会にて支部会会則（規約）を作成した。これは本部と支部とのつながりを深めるためと、支部長の任務、支部の目的を明確にすること等々をおりこんだものである。

七月十五日、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）がクラス幹事及び各支部長出席のもと行なわれた。任期を三年とするため、三年に一度行なわれることになっている。次の方々が選出された。理事に滝口篤子氏、柏山恵智子氏。評議員に伊藤久子氏、泉貞子氏、織田豊子氏、久保和子氏、国領知氏、清野貞代氏、高橋とき氏、林松子氏。

八月二日、軽井沢山荘開荘二十周年を記念し、記念式典が同窓生二十三名出席のもとに山荘にて行なわれた。同志社大学前総長住谷悦治先生をお招きして、「いかによい本を読まねばならないか」と題する講演が行なわれた。感銘深いものがあった。先生の著書の『いかに美しく老いるか』のなかに、一九〇九年高等女学科十七回卒業の村上

あや氏の美しい行ないが記されてある。姉は信仰の日々を送りながら、母校宮城県伊具郡舘山小学校の子供達に毎年百冊以上の本を五年間も送り続け「東京のおばあちゃん」と呼ばれ慕われている尊い愛の精神が描きだされている。ますますご壮健にて、今なおよき働きを続けられている。このことが一九六六年の十月二十七日と三十日の二回にわたり「河北新報」に報ぜられている。

十月、かねてより同窓会では、経済的に変動をきたし困窮している中学・高校の生徒達に授業料を援助するための奨学金制度を設けているが奨学金基金四百万円に同窓会事業部よりの利金三十万円が加算されることになり、出来うるだけ多くの生徒のため役立てることができるようになった。事業部の働きに感謝を捧げたい。

十二月、一九一九年高等女学科二十七回卒業五十嵐清水氏長い間にわたって母子家庭のため貢献された功績により、厚生大臣より表彰を受けられた。

十二月二日、日本文学科教授石井昌光先生退官記念に「宮沢賢治の『春と修羅』」と題する記念講演が行なわれた。その後TG会館にて日本文学科コース会主催の祝賀会に同窓生有志も参加して、三十有余年にわたって宮城学院のため学長としての重大責任を果たされ、その間学院移転のためにもつくされた先生の思い出話しに花を咲かせた。また同窓会を愛され卒業生の住所の変更等々いろいろと援助をいただいた。

十二月九日、短期大学教養科発展のためつくされた森下金二郎教授退官記念講演が行なわれ、ホテル江陽にて教養科コース会主催の祝賀会が催され、同窓生有志多勢参加して先生の労をねぎらった。

十二月二十二日、全学院教職員クリスマス礼拝に住谷悦治先生を招き奨励があった。ひきつづき先生をかこむ会に、同窓生も加わった。その席で宮城学院の同窓生のすばらしい働きについて紹介があった。

昭和五十四年（一九七九）二月、中学校・高等学校校長任期満了にともない、次期校長候補者を同窓会よりも推

挙してほしい旨学院側より依頼あり、阿部富士雄先生を推すこととした。三月、選挙の結果阿部富士雄先生が再選された。

四月、定礎板を学校側は新校舎落成の折に埋めるので、同窓会も一緒にさせて頂くことに決める。

五月二十六日、同窓会総会をセントラルホテルにおいて行なう、第一部　礼拝、第二部　滝口篤子会長挨拶。同窓会館建設募金に大勢の同窓生の誠意によって三千万円に達した感謝と新校舎の建設が着々と進んでいる旨、報告がなされた。募金総額　三千万円のうち二千五百万円を同窓会館建設費、五百万円を新校地の礼拝堂の鐘の資金として捧げることに決まる。出席者七十六名。

六月三十日、同窓会バザー実施。天候に恵まれ、大講堂ロビーは満員の盛況にて、忽ち売り切れとなる。純益一八八、七二四円を得、奨学会その他に繰り入れる。

七月、東京支部より、会館建設費として二十万円ご寄付あり。

十一月、高校より高校生徒会誌「橄欖」の座談会、題「宮城学院の歴史をふり返って」の要請があり、滝口篤子会長、福井喜江副会長、高橋とき理事、菅野のぶ理事、門脇清子理事が出席し、それぞれ在学した時代の宮城の様子を在校の出席者に語り、今昔の感を与えた。

昭和五十五年（一九八〇）　一月、新校地に建設される礼拝堂の鐘の選定のために、早坂禮吾学院長、滝口篤子会長、伊藤久子理事、工事関係者二人とで静岡に出向し、ヤマハ楽器で鐘の音を聴き検討する。価格は十二ベルにて六百万円。

三月、中高バザーの利益金二十万円を同窓会奨学会にご寄付下さる。

五月三十日、本年の総会は現校舎への「さようならパーティ」をすることになり、現校地で九十余年、時代と共

に様相を変えて、多くの学生・生徒に親しまれた赤煉瓦の校舎やその他の校舎も神よりのご計画をすべて果して、次の新校舎にバトンタッチすることになったので、万感の情をこめて招待者、同窓生三百名が第二校舎地下の食堂に会し、別れを惜しんだ。参会者一同、毎朝の礼拝堂として、またクリスマスのハレルヤコーラスが毎年響きわたり、そして仙台の文化の殿堂として昭和初めより、音楽会、講演会の会場となって親しまれた大講堂前にて記念撮影をして、万感を込めて、旧校舎に別れを告げた。

六月一日、カンディフ先生のピアノリサイタルが大講堂で開催された。優れた演奏は聴衆を魅了し、盛会であった。収益は先生のご厚意により、同窓会館建設のためご寄付下さる。

九月、八月二十八日に同窓会の移転を予定されていたが長雨がつづき、九月二日に移転となる。同窓生の長年の夢であった同窓会館が実現し、旧校舎時代の旧備品を整理して、無事に引越し完了。

九月十八日、創立記念日に北山墓地に於て、本学院の創立以来の功労者を偲び、墓前礼拝を行なう。「創立者をお偲びして」と題するお話を渡邉弘道先生に伺い、参会者一同墓前に菊の花を供え、新校舎並びに、新同窓会館移転を報告し、感謝の意を表した。

十月四日、同窓会館献堂式を新会館資料室に於てとり行なう。

十月二十五日、雨降り、風強し。礼拝堂に於て本学院の献堂式が行なわれた後、中高体育館に於て参会者七百余名によって落成祝賀パーティが和やかに行なわれ、新校舎の落成を祝った。その後各地より参会の支部長方と理事及び関係者約五十名は同窓会館和室に集まり、懇親会を催す。

十二月十九日(金)、クリスマス祝会。従来の校内同窓生クリスマス祝会を全学院教職員クリスマスと合流して行なうこととなった。説教、竹森満佐一牧師(吉祥寺教会牧師)。クリスマス献金おくり先、堀川愛生園(養護施設)・戸部和子様(日文卒)

昭和五十六年（一九八一） 四月、滝口篤子会長の後任として伊藤久子新会長が選出される。

五月十七日、桜ヶ丘の新校舎に於て、最初の同窓会総会を第一回ホームカミングデーと称して、全国の同窓生をお誘いした結果、実に千二百余名が参集し、新緑の新校舎は喜びの声に満ち溢れた。その朝は礼拝堂の鐘が広い広いキャンパス一帯に讃美歌を奏で、訪れた同窓生は足を止め、その昔、学舎の友と歌い祈りを捧げた日に返り、自然に恵まれたすばらしい環境に目を瞠り、歓声が上り、礼拝、総会、懇親会と同窓生は近年になく一番幸せな日を過ごした。

六月、同窓会新名簿作成が決まる。同窓会館利用規定及び同窓会館運営委員・山荘委員選出。

七月、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）が行なわれた。理事に伊藤久子氏、柏山恵智子氏。評議員に（校外）林松子氏、泉貞子氏、久保和子氏、瀬戸堯子氏、滝口篤子氏、（校内）岡村直子氏、庄子泰子氏、福井喜江氏。

長年、監事の任にあられた大石栄一氏の後任として、蜂谷正毅氏が当られることになる。

九月、創立九十五周年記念日を守る。礼拝、懇親会後、北山キリスト教墓地に草創期の先人に追悼の意の花を手向け、墓参する。四十余名出席。

十月、全国支部長会議を催す。七支部長出席。支部の現況報告と今後の同窓会のあり方について懇談。シップル先生来仙。創立記念行事に参加。同窓会へご寄付頂く。

十二月、同窓会名簿完成、発送開始す。

十二月十八日、全学院クリスマス礼拝及び祝会。クリスマス献金おくり先、新生園。

昭和五十七年（一九八二） 一月十六日、同窓会館使用規定決まる。

二月二十日、同窓会会費の値上げ決まる。（従来六千円――新会費一万円に）大学、短大生、高校生が卒業時に納入することとなる。

四月、旧校舎の同窓生には在校当時の懐しい思い出の「噴水」を新校舎に復活することを検討する。

五月、同窓会「維持費」という名称を「年会費」と改称する。

五月十六日、第二回ホームカミングデー開催。礼拝、早坂学院長説教「ヤコブの梯子」。その後総会、懇親会、清水前学院長の乾杯で和やかに行なわれた。

六月十二日、カンディフ先生在仙三十年記念リサイタルを開催。独奏にひきつづき渡辺美佐子氏の朗読「小象バールのおはなし」に合わせ、プーランクの曲の演奏は聴衆を魅了し純益を同窓会に献金された。

九月、創立記念礼拝、中学生、家政科コース会の方も加わり、行なわれ、八十余名が出席した。

十一月、林秀光先生ピアノリサイタル。

昭和五十八年（一九八三） 五月十五日、第三回ホームカミングデー開催。すばらしい五月晴れに恵まれ、五百名の姉妹が参加、和やかに盛会裡に終えることが出来た。ひきつづき阿部光子氏（牧師・作家）による「現代に生きる」という題の講演と浅野繁助教授のピアノ演奏を一般公開で行ない、聴衆は深い感銘を受けた。

六月十二日、大西愛子先生のピアノリサイタルが同窓会主催により大学講堂に於いて行なわれ、純益を同窓会にご寄付下さる。

七月十六日、軽井沢山荘開荘。ハンセン、リンゼイ両先生の記念山荘は毎年夏の憩いの家として、多くの同窓生、在校生に利用されてきたが、老朽化が目立つようになり、その対策を考えねばならない時期となった。

九月十七日、創立記念日の礼拝を行ない、親睦会終了後、北山キリスト教墓地に参り、墓前礼拝と献花をした。

噴水の贈呈式。かつて東三番丁校舎のシンボルだったあの六角の噴水が甦り、同窓会から学校への贈呈式が噴水のほとりにて行なわれた。「建学の泉」と命名する。

九月二十五日、礼拝堂での結婚式。かねてより同窓生の希望であった礼拝堂に於ける結婚式を同窓会の事業としてとりあげることとなり、結婚式規定を作り結婚式運営委員会により挙式のお世話をすることとなった。なお第一号は副会長福井喜江先生のご子息様（新婦も同窓生）である。

十月一日、会報「みやぎ」第二十五号発行

十月十五日、全国支部長会議開催、各支部の現状報告、本部への要望、企画運営等について熱心な話し合いが持たれ有意義な会であった。

十一月十四日、「宮城学院女性のための生涯教育講座」を開講。その第一回は、早坂学院長による「日本の古典と源氏物語」を秋田市キャッスルホテルに於いて行なう。この講座は宮城学院の教育を更に発展させる理念で学校主催同窓会後援の形で春秋二回、各地区で開くことを原則とする。

十一月二十二日、石井昌光先生叙勲記念祝賀会（勲三等瑞宝章）を学校と共催で仙台プラザホテルに於いて行なう。四十有余年にわたり母校のためにお尽しなされた石井先生ご夫妻をお招きして、お祝いと感謝の会を開いたところ、大勢の先生方、同窓生が参加、心暖まる盛大な会であった。

十一月二十六日、生涯教育講座、早坂学院長「日本の古典と源氏物語」。石巻、河北ビルに於て。

十二月三日、生涯教育講座、早坂学院長「島崎藤村と夜明け前」白石、柿崎医院ホールに於いて。

十二月十六日、クリスマス礼拝と祝会を教職員と合同で行なう。同窓会よりの献金をホームカミングデーでご講演頂いた阿部光子先生とご不自由なお体で伝道されている中山節子氏（同窓生）の教会におくった。

昭和五十九年（一九八四）二月十七日、高校卒業生同窓会入会式。高校三百七十名、中学三名。
三月十七日、大学短大卒業生同窓会入会式。大学三百八十二名、短大五百二十名。
三月三十一日、ベールズ氏（ハンセン先生の甥）ご夫妻の歓迎会を学校と共催で行なう。ご夫妻より同窓会に本を寄贈された。
四月十二日、「噴水」第二号発行。
四月二十一日、同窓会会長選挙がクラス幹事会により行なわれ、伊藤久子現会長が再選された。
五月二十日、第四回ホームカミングデーが新緑のキャンパスで開催され約五百名参加。礼拝、総会の後、同窓生のデュエットによる音楽会、講演会の講師は黒柳朝氏（徹子氏のお母様）。生い立ちや家族のこと、クリスチャンとしての生き方をユーモアをまじえつゝ率直に語り、七十二才とは思えぬ活力にあふれたパイオニア精神に聴衆は魅了された。
五月二十二日、森下金二郎先生の叙勲祝賀会（勲四等瑞宝章）が三井アーバンホテルにて催された。先生の三十八年のご功績とご苦労をねぎらい、お人柄を慕って多くの教職員、同窓生の方々が参会された。
七月三日、生涯教育講座、扇畑忠雄先生「万葉の世界――額田王と家持を中心にして」秋田、キャッスルホテルに於いて。
七月六日、生涯教育講座、久保和子先生「白石をめぐる紀行―奥の細道、新花摘、東遊記その他」、白石柿崎医院ホールに於いて。
八月三日、「山荘」について移動委員会を開く。軽井沢山荘はいよいよ老朽化が進み、今年度は遂に閉荘することとなった。早坂禮吾名誉会長、会長、副会長、山荘委員ならびに長年山荘の運営にご尽力下さった東京支部の方々が、山荘に集って実態をみ、今後いかにすべきか話し合った結果、百周年記念事業の一環として、山荘改修工事を

とりあげ、理事会で慎重に討議をし、計画を進めることにした。

九月八日、学校法人理事、評議員の選挙（同窓会選出関係分）が行なわれ、次の方々が選出された。

理事に伊藤久子氏、林松子氏。評議員に（校外）滝口篤子氏、泉貞子氏、久保和子氏、高橋とき氏、瀬戸堯子氏。（校内）福井喜江氏、庄司泰子氏、岩渕淑子氏。

九月十八日、創立記念日の礼拝、祝会、つづいて北山墓地への墓参を行なった。

十月一日、会報「みやぎ」第二十六号発行。

十月二十日、全国支部長会議を第二会議室にて行なう。特に百周年記念行事と山荘についての話し合いがなされた。

十二月十四日、学校同窓会合同のクリスマス祝会が行なわれ、桜ヶ丘地区の人々も共に祝った。今年度の献金は、西沢優李子氏（高七回卒）経営の大崎老人ホームと、虎川清子氏（高十七回卒）所属のウイクリフ聖書翻訳協会に差し上げた。

なお九十才以上の同窓生十九名に「九重」をおくり、大変喜ばれた。

昭和六十年（一九八五）二月二十六日、高校卒業生同窓会入会式。高校三百十八名。

三月十九日、大学短大卒業生同窓会入会式。大学三百四十三名、短大五百十三名。

五月九日、山荘改築募金のための発起人会が午後六時より弥生会館で行なわれ、三十三名が出席、礼拝後、学院長、早坂理事が発起人紹介を行ない、食事後募金についての有為な話し合いが行なわれた。

五月十九日、第五回ホームカミングデーが行なわれた。今年は音楽会と講演会の二本立てで、音楽会は、布田庸子先生と渡部ジュディス先生による「アリアと二重唱」で、伴奏はカンディフ先生、講演会は、「幸をありがとう」

との演題で、田原米子氏、晴天にめぐまれ盛会裡に終了した。

八月一日、午後五時より軽井沢山荘に於て改装（開荘）感謝の会が行なわれ、仙台より早坂名誉会長、会長、副会長、及び山荘委員の和田、早坂理事など十三名、東京方面より斎藤東京支部長他七名が参加、針生理事の司会で礼拝、会長挨拶、早坂名誉会長の祝辞、福井副会長の献詩「ハンセン、リンゼイ先生に捧ぐ」の朗読があり、その後銘々ハンセン、リンゼイ先生の思い出や改装後の維持・管理等を話し合い有意義な会であった。

九月十六日、「トットちゃんとアフリカ」と題して黒柳徹子氏の講演会が午後二時より大学講堂で行なわれた。黒柳氏は予定の時間を一時間もオーバーしその熱弁はたて板に水を流す如く講堂はあふれるばかりの盛会であった。場内にアフリカ難民救済の募金箱を設け、講演会の純益の一部とともに二十万円を河北新報社を通じて黒柳氏の親善使節基金として送金、その他は山荘募金に充当することとなった。

九月十八日、例年の様に創立記念礼拝を礼拝堂で行ない、墓参は悪天候のため中止となり、第二会議室に七代の校長の写真を飾り懇親会を行なった、渡邉弘道先生より思い出話をうかがい昔を偲び和やかな会であった。

十月十九日、支部長会議が第二会議室で行なわれた。

昭和六十一年（一九八六） 一月十五日、福島県に相双支部・会津支部と共に今回いわき支部が発足し、その発会式が挙行され伊藤会長が出席した。いわき支部長に安斉和子氏（旧姓伊藤　家女五回卒）同副支部長に小野昭子氏（旧姓見沢　家専三〇回卒）就任。

宮城学院創立百周年第六回ホームカミングデー

実行委員長　福井　喜江　副会長

すばらしい五月晴れに恵まれた五月十八日、母校創立百周年を祝うにまことに適わしい美しい日！　礼拝堂の鐘は朝早くから讃美歌を桜ヶ丘一帯に奏で、校門より校舎に至る歩道にはエンジ色の校旗が十数本、五月の爽やかな風に翻り、遠来の同窓生一人一人を心からお迎えしているような風情である。正面の校舎の四階からは太々と祝宮城学院創立百年と墨書きされた垂れ幕が下げられ、よく晴れわたった空に赤煉瓦の校舎が映えて、手入れのよくゆき届いたみどりの芝生の輝き、磨かれた煉瓦敷の清潔さ、まさに晴れの日に適わしい校舎のたたずまいである。

約半年前より、実行委員として同窓会理事一同と当番幹事（昭和十六年～二十一年までと四十五年～四十八年までの卒業生）は、積極的にこの百年に一度しかない祝会の準備を進め、とうとうこの日を迎えた感慨は言いつくせないものがある。

最初の記念礼拝は九時十五分より礼拝堂で挙行された。同窓会名誉会長早坂禮吾学院長の「宮城学院の百年」と題する奨励をいただき、同窓生一同母校の創立百年目の今、この礼拝に参加できたことの喜びを噛みしめ、神のみ旨に従いこの学院を守り育てて来られた先人の方々に心から感謝の祈りを捧げた。

次いで、創立百年の式典がお隣りの大学講堂で厳粛にとり行われた。伊藤久子同窓会長のこの日の喜びのご挨拶、早坂名誉会長のお祝いの辞、ひきつづき同窓会功労者への感謝状の贈呈が行なわれた。

降りそそぐ美しい五月の太陽がこのキャンパスの真上にさしかかる頃、一同約千人は中庭の芝生の丘に喜びの姿を並べ、記念撮影、次いで民族の大移動さながらに祝賀会場の中高体育館へ――、煉瓦敷の段差や、途中の階段などご年輩の方々の歩行を気づかって、学校側の職員がボランティアで誘導してくれたので恙（つつが）なく移動できたことは

感謝であった。

祝賀会場にあてられた中高体育館の床には敷物が敷きつめられ、テーブル、椅子を設置し、全員着席、正面テーブルには華麗な五月の花々が盛られ、会長、名誉会長、来賓が並ばれて、実行委員長挨拶、乾杯で宴は開始された。中でも喜びの散花で会長、同窓会理事、実行委員長、三名が手をとり合って紐を引き、金のくす玉が見事に割れて、花びらが散り、エンジに白抜きの文字で〝宮城学院創立百周年おめでとう〟の旗が下り、万雷の拍手のうちに花びらはしきりに飛び交い、祝宴はいやが上にも盛り上がった。

アメリカ、北欧からの学院草創期の功労者のご親族の方々のご挨拶、ご来賓、旧現恩師、遠来の大先輩同窓生の心あたたまるスピーチなど、タイムカプセルを開いたような戸惑いと喜びの渦が会場に溢れた。

記念講演は作家遠藤周作氏の「自分づくり」と題するキリスト教徒としての豊かな経験に裏打ちされた自由でしかも含蓄のあるものであった。予定の時刻二時を十分も延長してしめくくられ、もっと時間の余裕があったらと惜しまれる程であった。かくて歴史的意義のある創立百周年のホームカミングデーは名残りを惜しみつつおひらきとなった。

創立百周年記念式典祝辞

宮城学院同窓会長　伊藤久子

百年の昔、東北の地に最初の女子教育の場として明るい光をもたらした宮城女学校は、熱烈なキリスト教の信仰を持ち、高邁な理想と、大いなる使命感に燃える押川方義先生を始め、神の召しに従って、はるばるアメリカの地より来仙された、ミス・プールボー、ミス・オールトの若いお二人の先生方、ミッションボートの莫大な援助、そしてアメリカのクリスチャンの方々の祈りと尊い献金と犠牲の上に建てられました。これらの先生方の呼びかけに

応えて、勉学の熱意に燃えた若い乙女たちは、家族の反対も押し切って飛び込んできたと聞いています。少女たちは、これらのクリスチャンの先生方より魂の目覚めと学問、そして信仰の道を与えられ、封建の時代から近代化されていくときに、彼女らは、正しい人間教育の明確な意志を受け止めました。

若き日に、キリストの教えを身につけた彼女らは、幾多の困難や絶望の渕におかれても、あくまでも神のお導きを信じ、聖書の教えによって強く明るく生き抜く力を与えられ、多くの日本の家庭に清く、健やかな空気を吹き込みました。

先生の播かれた種は、今や四万余の卒業生のなかに芽をふき、数多くの尊すべき同窓生たちを生み出しております。

現在私どもの後輩は、この桜ヶ丘の神の恵み豊かな美しい大自然のなかに、理想的な教育の場を与えられています。しかし、今日の百年を迎えるまでには、数知れぬ苦難や、学校の存続をも危ぶまれた時代もありました。そのようなときにも、同窓会は常に学校と共にあり、学校の危機には駆けつけてその支えとなり、募金の相談を受けては、夜を日についで奔走いたしました。私どもは学校の喜びも悩みも共に負うことを光栄に思い、母校をこよなく愛して止まぬ同窓生たちでございます。

私どもには日常にキリストの愛を身を持って伝えて下さった恩師が多数おられました。その生涯を捧げ尽くして学生を慈しみ、若い柔らかな芽をひとつひとつ真心から培って下さった先生方への感謝は、言い尽くせぬものがございます。そして今日、私どもは幸運にも、母校創立百年の喜びのときに巡り会えた幸せが、言い表せぬ喜びとなって、心に湧きあふれております。

宮城学院の誇りと特色は、イエスとその愛であります。今こそ百年の間、キリストの精神に培われた伝統を強く打ち出し、キリストは常に我らとともに歩んで下さり、「万事を益となるようにして下さる」（ロマ書八・二八）と

の信仰を持ち、「世の光・地の塩」となれよ、と私どもを育てたこの愛する母校「宮城学院」が、内に、望みと愛と信仰の輝く、確固たる「クリスチャン・スクール」として厳存し、来たるべき二世紀に向かって「建学の精神」を堂々と挙げて前進することが、私ども同窓の者たちの切なる願いであり、祈りであります。

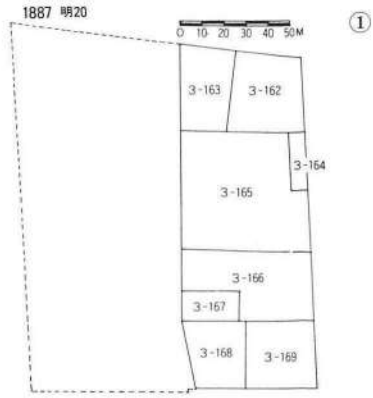
以上をもちまして、全国四万余の同窓生を代表し、お祝いの言葉といたします。

昭和六十一年十月十一日

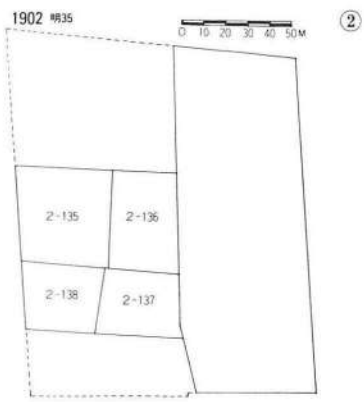
敷地及び校舎の変遷

四万余の若き乙女らを迎え送ってその学びと交わりの場を提供し、また数多くの教職員を業に就かしめてキリスト教信仰に基づく教育を守らせてきた、わが校地および校舎――。それは、一世紀の昔、いわば仮住まいの教場から出発したが、今、宮城学院は緑と水に囲まれた広大・荘麗なキャンパスを、桜ヶ丘に営んでいる。この間、敷地は徐々に拡大を続けていったのであるが、校地の正式取得は一八八七(明治二十)年、初代校長プールボーらが、仙台市東三番丁一六二番地から一六九番地に至る二、四〇〇余坪(約八、〇〇〇㎡)の土地を一、六五〇円で購入した時に始まる。翌年、最初の校舎――木造二階建一棟(講堂・教室・寄宿舎を含む)延床面積一六六坪(五五四㎡)が竣工したが、建物の正確な位置は残念ながら不明である。この校舎は、十三年後の一九〇二(明治三十五)年、火災によって焼失したが、翌年再び、寄宿舎・教室・講堂を含む一棟(木造二階建)が、延床面積三二〇坪(一、〇五六㎡)という、より大きな規模で建てられた。その後、学校は、積極的に隣接土地を次々と取得していき、柳町通り・東二番丁・北目町通り・東三番丁の四本の道路で囲まれた方形の校地がほぼ定まったのは、一九一二(明治四十五)年のことであった。この東三番丁一六六番地(現・中央四丁目六番一号)のキャンパスも、大移転を敢行した一九八〇(昭和五十五)年までの九十三年間に、校舎の新築・増改築・模様替え・取りこわし、火災、風水害、戦災、地震、あるいは区画整理による校地削減など幾多の変転を経験した。

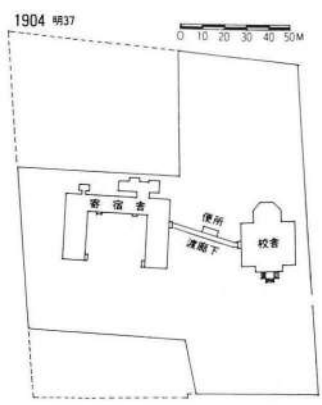
最初の校地取得からほぼ百年、聖書と讃美歌をすっかり覚えこんでしまったであろう懐しの旧キャンパスが、新天新地に移るまでの変遷を、年代を追って図示しながらたどってみよう。なお、付属用地・施設等についても、簡単にふれることにする。



①



②



③

一八八九(明治二十二)年
最初の校舎・木造二階建一棟(講堂・教室・寄宿舎)竣工。延床面積一六八坪(五五四㎡)。建築位置は明らかではない。

一八九七(明治三十)年
バイブルハウス・木造二階建竣工。建築規模、位置は不明。なお校長宅は東三番丁一六二～一六三番地にあったといわれるが、建築年代・規模位置不詳。

②

一九〇二(明治三十五)年
最初の校舎・火災により焼失(三月八日)。東二番丁一三五番地より一三八番地の土地を取得。

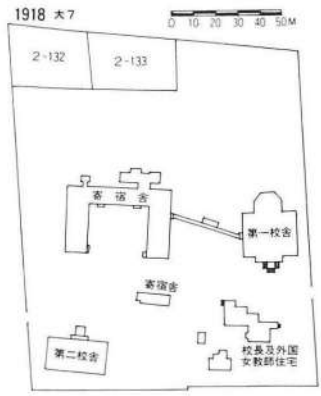
③

一九〇三(明治三十六)年
寄宿舎(二階寄宿舎、一階教室・講堂)木造二階建スレート葺、延三二〇坪(一、〇五六㎡)竣工。

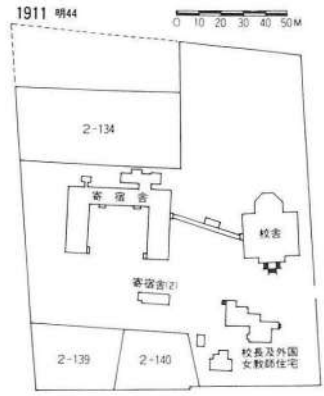
一九〇四(明治三十七)年
校舎・総煉瓦造三階建スレート葺三一五坪(一、〇四〇㎡)竣工(「第一校舎」――「クリスティン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト・メモリアル・ホール」)

一八七(明治二十)年
在日宣教師社団、東三番丁一六二番地より一六九番地にわたる土地を取得。

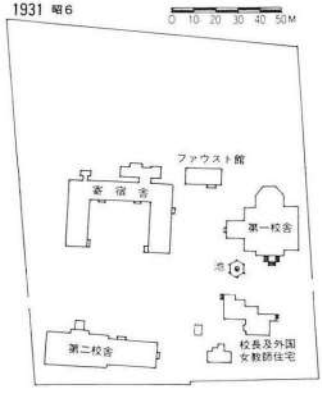
①



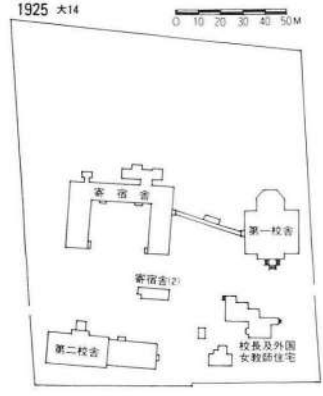
⑤



④



⑦



⑥

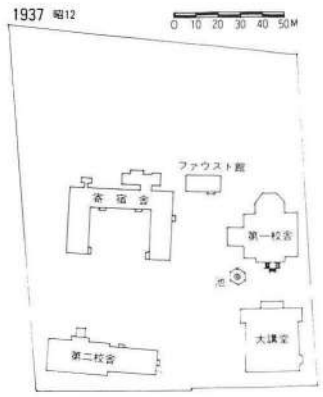
④
一九〇八(明治四十一)年
東二番丁一三九・一四〇番地を取得。
一九一一(明治四十四)年
東二番丁一三四番地を取得。
※校長及び婦人宣教師住宅、寄宿舎(2)の建築年、規模は不明。

⑤
一九一二(明治四十五)年
東二番丁一三二・一三三番地を取得。
一九一八(大正七)年
総煉瓦造スレート葺三階建校舎六六四坪(二、一九一㎡)竣工。「第二校舎」と呼ばれる。

⑥
一九二六(大正十五)年
第二校舎を増築(ヴォーンホルト記念校舎)総煉瓦造三階建を竣工。
パイプルハウス取壊し。

⑦
一九二八(昭和三)年
噴水池を設ける。
一九三一(昭和六)年
ファウスト記念館(別名同窓会館)木造二階建瓦葺六七坪(二二一㎡)竣工。
一階裁縫室、二階作法室(五〇畳敷)

⑧



一九三六(昭和十一)年
土井林吉(晩翠)氏より七ヶ浜字沢尻の畑地一八七坪をキャンプ場として寄贈。

一九三七(昭和十二)年
大講堂(鉄筋コンクリート三階建煉瓦タイル貼)四八三坪(一、五九〇㎡)竣工。

⑨



一九四一(昭和十六)年
校地校舎を在日宣教師社団より宮城女学校へ寄附される。
寄宿舎を改築、四教室を設け第三校舎と改称。この時の生徒数は八二一名であった。
増築校舎(木造スレート葺二階建)一二〇坪(三九六㎡)竣工。
元ミッションハウス(木造スレート葺二階建)七二坪を家政専攻科校舎として使用することとなる。また校長住宅を教室として使用することとなる。
館岡剛氏より宮城郡七ヶ浜吉田浜の保安林寄贈される。

一九四二(昭和十七)年
御真影奉安殿竣工。

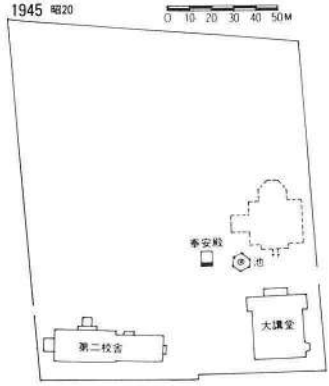
一九四三(昭和十八)年
第三校舎に理科実験室を増築する。金属供出命令により校舎のラジエーター、大講堂のシャンデリア、階段の真鍮製手すり供出。

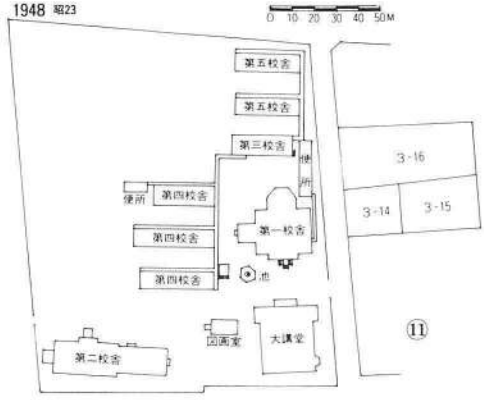
一九四四(昭和十九)年
調理実習室を新築(規模不明)。しかし家政科教室とともに「東北風第二〇二工場」として通信機部品の生産を開始。専攻科生は作業実習生として勤労奉仕をする。

一九四五(昭和二十)年
第二校舎・大講堂を仙台連隊区司令部庁舎として貸与。

⑩

一九四五(昭和二十)年
七月十日、仙台空襲を受け九棟のうち七棟を焼失した。焼失床面積一、二二七坪(四、二一四㎡)。残った建物は第二校舎と大講堂の二棟のみ。第一校舎は煉瓦積みの外壁のみ残り、内部は完全に焼け落ちた。



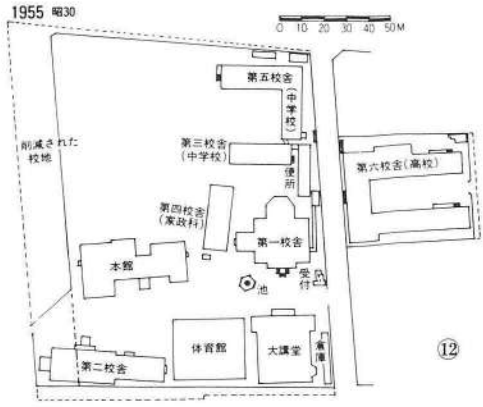


⑪

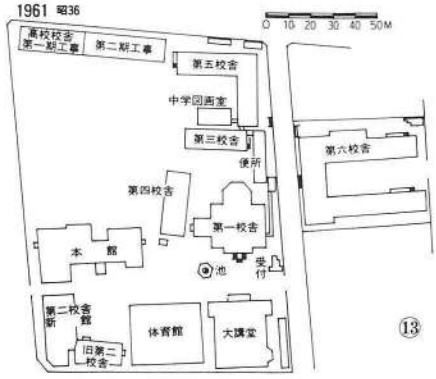
一九四六(昭和二十一)年
第三校舎木造モルタル二階建セメント瓦葺一六〇坪(教員室一室、教室六室)竣工。
第四校舎三棟木造平屋柿板(木羽)葺、三六六坪(一、二〇八㎡)竣工。バラック建築。
第五校舎二棟木造平屋柿板(木羽)葺、二四一坪(七九五㎡)竣工。バラック建築。
東三番丁一四～一六番地の土地を取得。
一九四八(昭和二十三)年
第一校舎の修復なる。なお大講堂と第二校舎の間の図画室は、戦時中、連隊区司令部が建てた銃剣術道場を利用したもの。

⑫

一九四九(昭和二十四)年
第六校舎木造モルタル二階建洋瓦葺七二八・五坪(二、四〇四㎡)高校校舎として竣工。
土樋寮用地取得。
一九五〇(昭和二十五)年
第五校舎木造モルタル二階建三八四・五坪(一、二六九㎡)中学校舎として竣工。
土樋寮第一期工事完成



一九五一(昭和二十六)年
第四校舎木造モルタル二階建一四〇坪(四六二㎡)家政科校舎として竣工。
一九五三(昭和二十八)年
本館鉄筋コンクリート三階建六七〇・四坪(二、二一二㎡)竣工。
土樋寮第二期工事完成。
一九五四(昭和二十九)年
戦災復興計画による道路拡張のため校地を削減される。
米ヶ袋大学寮敷地取得。

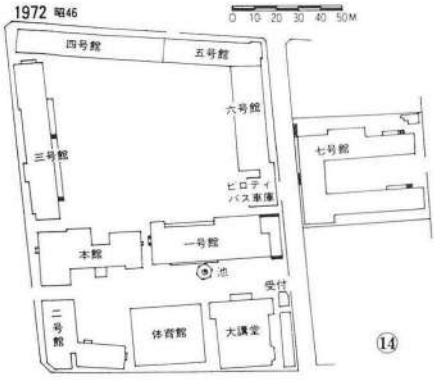


一九五五(昭和三十)年
体育館鉄筋コンクリート造二階建二七二・三四坪(八九九㎡)竣工。
土樋寮増改築。
東二番丁(現北目町一丁目)に幼稚園用校地取得。(一、五三九㎡)

⑬

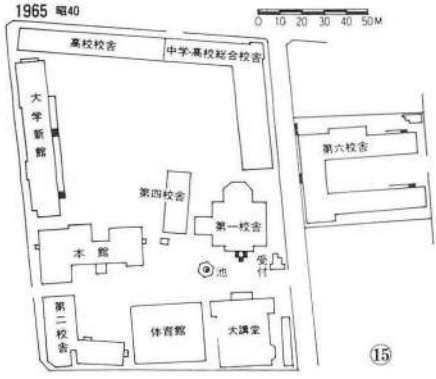
一九五七(昭和三十二)年
国道四号線道路拡張のため第二校舎西側半分を解体。
中学校図画教室木造モルタル洋瓦葺三七坪(一二二㎡)竣工。
一九五八(昭和三十三)年
第二校舎新館鉄筋コンクリート造地下一階地上四階五三〇坪(一、七五〇㎡)竣工。
一九五九(昭和三十四)年
高校校舎鉄筋コンクリート造地下一階地上四階五三〇坪(一、七五〇㎡)竣工。
一九六一(昭和三十六)年
高校校舎第二期工事鉄筋コンクリート造四階建(一、一五八・三㎡)竣工。
七ヶ浜吉田浜に東北電力火力発電所建設のため校有地を提供し換地を受ける。

⑭
一九六三(昭和三十八)年
宮城町上愛子松原に土地四六、〇〇〇㎡を取得。
一九六四(昭和三十九)年
大学新館鉄筋コンクリート造地下一階地上五階床面積五、一一〇㎡竣工。
第三校舎、第五校舎、中学校図画教室を解体。このため中学校は第六校舎に移転する。



⑭

中学・高校総合校舎鉄筋コンクリート造地下一階地上四階建床面積四、二〇八㎡竣工。
一九六五(昭和四十)年
中学・高校総合校舎屋上に音楽教室を増築。
米ヶ袋大学寮鉄筋コンクリート造地下一階地上五階竣工。
泉市市名坂に土地六五、〇〇〇㎡を取得
一九六六(昭和四十一)年
愛子スクールハウス一号館竣工。



⑮

⑮
一九六七(昭和四十二)年
第一校舎、第四校舎解体。
大学図書館兼校舎鉄筋コンクリート造地下一階地上五階床面積四、一二八㎡竣工。
愛子体育館竣工。
愛子スクールハウス二号館竣工。
校舎名称を全面的に変更し本館、体育館、大講堂以外の校舎を一号館より七号館までの呼称とする。
一九六八(昭和四十三)年
北目町校地に鉄筋コンクリート造地下一階地上五階(八号館)を保育科校舎・中高寮・幼稚園舎として竣工。
一九六九(昭和四十四)年
六号館増築完成(中高教室、ピロティーをバス車庫とする)。
一九七〇(昭和四十五)年
大講堂にパイプオルガンを建造設置する。
一九七二(昭和四十七)年
三号館屋上に研究室増築。

⑯

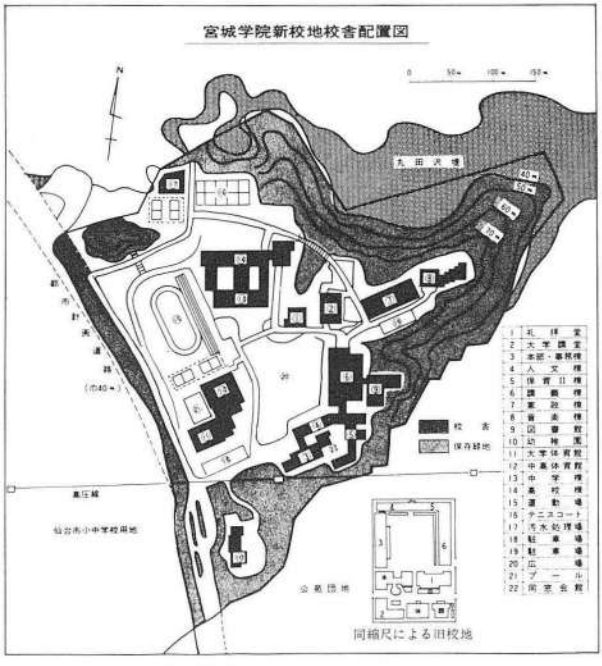
一九七四(昭和四十九)年
学院を桜ヶ丘校地へ総合移転することに決定。
一九七八(昭和五十三)年
七号館敷地及び施設を熊谷組・東海興業共同企業体に移管し、代替校舎としてプレハブ校舎A棟～D棟完成。
一九七九(昭和五十四)年
七号館、熊谷・東海共同企業体により解体。
長命ヶ丘大学寮用地取得。
一九八〇(昭和五十五)年
八月、桜ヶ丘校地へ移転開始。九月末移転完了。



⑰

一九八〇(昭和五十五)年
十月新キャンパス落成献堂式典挙行。
一九八一(昭和五十六)年
長命ヶ丘大学寮(徹慨寮)竣工。
一九八二(昭和五十七)年

桜ヶ丘キャンパスBCS賞(建築業協会賞)受賞。



歴代学校役員

歴代設立者・校主・理事長

（　）内は就任年

設置者（校主）　押川方義（一八八六年）
設置者（校主）　首藤陸三（一八九〇年）
設置者（校主）　橋本經光（一八九三年）
校主　レナ・ズーフル（一八九九年）
設置者　ヘンリー・K・ミラー（一九〇八年）
設立者　サディー・L・ワイドナー（一九〇九年）
設立者　アーレン・K・ファウスト（一九一三年）
設立者　カール・D・クリーテ（一九三〇年）
財団法人理事長　一見清（一九四一年）
財団法人理事長　西山貞（一九四二年）
財団法人理事長　一力次郎（一九四二年）
財団法人理事長　西山貞（一九四六年）
財団法人理事長　矢野貫城（一九四八年）
学校法人理事長　矢野貫城（一九五一年）
学校法人理事長　佐藤利吉（一九六九年）

歴代女学校長

初代　エリザベス・R・ブールポー（一八八六年）
二代　ジャイラス・P・モール（一八九三年）
三代　レナ・ズーフル（一八九四年）
四代　ヘンリー・K・ミラー（一九〇八年）
五代　サディー・L・ワイドナー（一九〇九年）
六代　アーレン・K・ファウスト（一九一三年）
七代　カール・D・クリーテ（一九三〇年）
八代　西山貞（一九四一年）

歴代宮城学院長

初代	西山　貞	（一九四六年）
二代	小田信士	（一九六〇年）
三代	佐藤昌彦	（一九七三年）
四代	清水二郎	（一九七五年）
五代	早坂禮吾	（一九七九年）

歴代女子大学・女子短期大学長

初代	西山　貞	（一九四九年）
二代	小田信士	（一九六〇年）
三代（公選、以下同じ）	阪田勝三	（一九六九年）
四代	石井昌光	（一九七一年）
五代	松崎　燊	（一九七七年）
六代	山形孝夫	（一九八三年）

歴代中学校・高等学校長

初代	西山　貞	（一九四七年）
二代	小田信士	（一九六〇年）
三代（公選、以下同じ）	大沼　隆	（一九七〇年）
四代	阿部富士雄	（一九七六年）
五代	大沼　隆	（一九八二年）

歴代短期大学附属幼稚園長

初代	エドナ・M・シップル	（一九五六年）
二代（学長）	阪田勝三	（一九七〇年）
三代（学長）	石井昌光	（一九七一年）
四代	長谷川精一	（一九七一年）
五代	内堀玉男	（一九七五年）
六代	菊地明子	（一九七九年）
七代	吉田　栄	（一九八一年）
八代	内堀玉男	（一九八五年）

歴代事務局長（事務長）

初代	末包一夫	（一九五三年）
二代	島　末三	（一九五七年）
三代	菅野章夫	（一九六〇年）
四代	渡邉弘道	（一九六九年）
五代	高梨　光	（一九七四年）
六代	小林義一	（一九七七年）
七代	今野恒四郎	（一九八〇年）

八代　長谷川　英　敏　（一九八五年）

歴代同窓会長

初代　田村たみ子　（一八九五年）
二代　奥山ます　（一九一〇年）
三代　佐藤まさ　（一九一八年）
四代　小野寺みきよ　（一九一九年）
五代　原田ことぢ　（一九二六年）
六代　西山貞　（一九四二年）
七代　伊藤まき　（一九四六年）
八代　片桐こう　（一九五三年）
九代　丸山敏子　（一九五三年）
十代　滝口篤子　（一九七一年）
十一代　伊藤久子　（一九八一年）

旧教職員名簿

○記載は就任順による。
○所属については次のような略語を用いた。
女……女学校・高等女学校教員
専……専攻科・専攻部・専門学校教員
幼……幼稚園教員
中高……中学校・高等学校教員
大……大学・短期大学教員・副手
事……寮監・司書・書記・業務員、さらに当時の呼称による舎監・庶務係・給仕・小使・使丁・炊婦・汽かん士等も含めた。
○一九四五年以前在任の教職員については、火災・戦災等による資料焼失のため、就職・退職の年月日並びに職種・身分等の区別、専任期間・講師（一九四五年以前の在職者に限る）期間等を明確に出来なかった事例がかなりあった。
尚、＊印は現職逝去者を示す。

邦人の部

氏名	所属	在職年月
曲直瀬雪江	女	一八八六・九～一八七七・六
稲垣ぎん	女	一八八六・九～一八九三・六
和田みの	女	一八七七・九～一八八八・五
石黒磐	女	一八八七・九～一八八八・六
稲垣豊子	女	一八八七・九～一八九〇・六
宮本ひさ	女	一八八八・六～一八九〇・六
武田文太夫	女	一八八八・六～一八七七・六
早坂哲郎	女	一八八八・九～一九三〇・三
藤生金六	女	一八九〇・四～一八九一・六
小此木忠七郎	女	一八九〇・九～一八九一・六
亀山てい	女	一八九〇・九～一八九二・六
中村くめ	女	一八九一・四～一八九二・六
佐伯陽一	女	一八九一・四～一八九七・六
萱間保蔵	女	一八九一・九～一八九四・六
中川つる	女	一八九一・一〇～一九〇五・三
中野嘉作	女	一八九二・四～一八九三・一〇
朽木その	女・事	一八九二・六～一八九四・六
山下廉	女	一八九三・九～一八九六・五
浅田みや	女	一八九三・九～一八九六・九
平野仲子	女・事	一八九四・九～一八九五・二
深田康守	女	一八九四・九～一九一〇・四
浅井柞	女・事	一八九五・二～一九〇五・三
楢橋良雄	女	一八九五・九～一八九八・九
長谷川喜多子	女	一八九六・九～一八九七・六
関屋ゆき	女	一八九六・九～一八九九・五
中山たけ	女	一八九六・九～一九〇〇・七
永沼織之允	女	一八九六・九～一九一〇・四
中川みつ	女	一八九七・九～一八九九・五
布施淡	女	一八九七・一〇～一九〇一・二
加藤與五郎	女	一八九八・九～一八九九・一〇
小泉はる	女	一八九九・七～一九〇一・三
菊地とら	女	一八九九・九～一九〇〇・七
宮本むら	女	一八九九・九～一九〇一・九
吉田てる	女	一八九九・九～一九〇四・六
長谷川直	女	一八九九・一〇～一九〇三・三
篠原吉祥	女	一八九九・一二～一九〇三・三
六波羅李太郎	女	一八九九・一二～一九〇三・三
寺田とみ	女	一九〇〇・七～一九〇一・三
佐藤いき	女	一九〇〇・七～一九〇四・九
杉本とら	女	一九〇〇・九～一九〇一・六
中村長之助	女	一九〇〇・九～一九〇一・六
大越つる	女	一九〇〇・九～一九〇七・三

氏名	所属	在職年月
持館ふゆ	女	一九〇〇・九～一九一七・九
金子精	女	一九〇〇・一〇～一九二二・三
鈴木さだ	女	一九〇一・四～一九二一・四
道家弘	女	一九〇一・四～一九二三・三
中村きよの	女・事	一九〇一・四～一九一七・一
田中はるを	女	一九〇一・五～一九二三・四
出村悌三郎	女	一九〇一・九～一九一六・九
大黒なよ	女	一九〇一・九～一九一七・九
斎藤正人	女	一九〇二・一〇～一九一八・六
長谷川多茂治	女	一九〇四・三～一九二五・一
高橋なみ	女	一九〇四・九～一九一七・九
川合きくの	女	一九〇四・一〇～一九一八・二
松岡たけ	女	一九〇五・五～一九一六・三
廣田とも	女	一九〇六・一～一九一八・六
原田ことち	専	一九〇六・一〇～一九四一・三
三浦忠之亟	女・事	一九〇七・二～一九一九・九
石川こん	女	一九〇七・九～一九一八・四
新妻源助	女	一九〇七・九～一九一〇・四
久道しゅくよ	女	一九〇七・九～一九一三・六
佐藤きそ	女	一九〇七・九～一九一三・六
中村まつ	女	一九〇七・九～一九一四・六
鈴木虎之進	女	一九〇八・一～一九二七・七

氏名	所属	在職年月
井上きゑ	女	一九〇八・二～一九一八・六
村上兵助	女	一九〇八・四～一九二〇・二
安藤武雄	女	一九〇八・九～一九一〇・六
真山真砂	女	一九〇八・九～一九一〇・七
原あさを	女	一九〇九・四～一九一〇・六
奥山ます	女・事	一九〇九・四～一九一一・三
田内よう	女・事	一九〇九・五～一九一四・六
佐藤こと	女	一九〇九・六～一九一九・二
佐藤まさ	女・専	一九〇九・六～一九一三・一二
田邊ひさ	女	一九一〇・一～一九一一・三
志賀いち	女	一九一〇・一～一九一三・三
山本みさほ	女	一九一〇・五～一九一三・三
筒井千吾	女	一九一〇・九～一九一三・九
石原重思	女	一九一〇・九～一九一五・九
中村忠篤	女	一九一〇・九～一九一六・三
吉田藤枝	女	一九一一・四～一九一三・三
今村わくり	事	一九一二・四～一九一三
白石うめ	事	一九一二・四～一九一三
丹野きく	事	一九一二・四～一九一三
洞口さた	事	一九一二・四～一九一七
金子かね	専	一九一二・四～一九四一・三
小野玉枝	女・専・大	一九一二・四～一九一九・六
吉田いね	女	一九一二・五～一九一三・三
徳島直毅	女	一九一二・五～一九一四・三

氏名	所属	在職年月
矢野猪三郎	専	一九一二・五～一九一八・九
窪小谷米二	女	一九一二・一〇～一九二〇・三
遠藤いの	事	一九一三～一九一三
沼邊貞政	事	一九一三～一九一三
村上榮治	事	一九一三～一九一八
庄司善吉	事	一九一三～一九二〇
堀江亀吉	事	一九一三～一九一三
笠松勇吾	事	一九一三～一九一三
村上うの	事	一九一三～一九一七
鈴木誠治	女	一九一四・四～一九一六・六
一見清	女	一九一四・四～一九四二・三
熊谷まん	女	一九一四・五～一九一六・一〇
竹中久	女・事	一九一四・九～一九二七・七
高橋ゆき	事	一九一四～一九一五
小野寺勇右ェ門	事	一九一四～一九一七
佐藤すへ	女	一九一五・一～一九一九・四
小野寺みきよ	女	一九一五・四～一九一六・六
小野さわ	女	一九一五・四～一九二四・三
小倉博	専	一九一五・四～一九二一・三
土井林吉	専	一九一五・四～一九二四・二
高木尚介	女	一九一五・四～一九二六・三
久保一	女	一九一五・九～一九一九・一二
山下金蔵	女	一九一五・九～一九二六・三
佐藤まき	女	一九一五～一九一五
池田むね	女	一九一六・四～一九一六

氏名	所属	在職年月
鈴木みよし	女	一九六・四～一九九・七
菅井文五郎	女	一九六・四～一九三・五
秋保雨柳	女	一九六・九～一九八・九
黒沢艮平	専	一九六・九～一九二・三
中村茂策	女	一九六・九～一九三・一〇
平河内そみ	女	一九六・一一～一九九・三
斎藤ぜん	事	一九六～一九七
山田みさほ	女	一九六～一九八
片桐こう	専	一九七・四～一九三・一
		一九六・五～一九七
		一九三〇・一～一九三五・八
熊谷うみ	女	一九七～一九八
渡部秀尾	女	一九七～一九八
櫻田勝磨	事	一九八～一九八
宮下いつ	専	一九九・四～一九〇・三
五十嵐清水	女	一九九・四～一九〇
茂貫きみ	女	一九九・四～一九一・一〇
長野千代世	女	一九九・四～一九四・三
水間そう	女	一九九・九～一九二・二
吉田りゅう	専	一九九・九～一九六・三
千田六右エ門	事	一九九～一九〇
田中八重	女	一九〇・一～一九二・三
宮路文	事	一九〇・一～一九三・六
野村房雄	女	一九〇・一～一九六・二
鈴木みつ	事	一九〇・四～一九一〇

氏名	所属	在職年月
加藤文友	女	一九一〇・四～一九二一・三
丹下花	女	一九一〇・四～一九二一・三
佐久間こう	事	一九一〇・四～一九三・四
長谷川ます	女	一九一〇・四～一九三・一〇
西淵さだ	女	一九一〇・四～一九四
加藤まつ	専	一九一〇・四～一九三・七
高澤やす	専	一九一〇・九～一九四・三
林ふみ		一九一〇～一九一〇
山田よし	事	一九一一～一九一一
佐々木直次	事	一九一一・一～一九一三
長沼儀造	事	一九一一・三～一九一二
高橋順	女	一九一一・四～一九一三・六
伊藤えなよ	女	一九一一・五～一九一七・七
菅原作久江	女	一九一二～一九一三・五
小林亀太郎	女	一九一二～一九二一・三
平野いな	女	一九一二～一九二一・三
片桐文七	事	一九一二～一九二一
鈴木かつ	事	一九一二～一九二一・四
高橋今朝之助	事	一九一三・四～一九一三
我妻文治	事	一九一三・四～一九一三
岩間よし	事・女	一九一三・四～一九一三・四
若生とく	事	一九一三・四～一九一九
萩ヒロ	女	一九一三・四～一九二八・二
服部英太郎	専	一九一三・六～一九六・二三
小林高子	女	一九一三・九～一九一三・九

氏名	所属	在職年月
布施とよせ	専	一九一三・九～一九一五・一
大泉しげ	女	一九一三・九～一九二四・三
高成田力	事	一九一三～一九一三・二
秋保タドリ	女	一九一三～一九一三・四
高橋久治	事	一九一三～一九一五・五
内村理	専	一九一三・四～一九一六・三
堀内真澄	専	一九一三・四～一九一六・六
黒瀬艶	専	一九一三・四～一九一七・六
津久井善四郎	専	一九一三・四～一九二三・三
清水アイ	専	一九一三・四～一九四三・九
猪股満喜子	女・専・中高	一九一三・四～一九二九・一二
		一九二五・四～一九六八・三
佐藤千代	事	一九一三・五～一九一六
伊藤英吾	専	一九一三・六～一九二四・八
松木高子		一九一三・八～一九二四
相澤きみよ	女	一九一三・二～一九二四・六
佐藤かつ	事	一九一三・二～一九二四・三
佐藤今朝治	事	一九一三～一九一三
谷田ちま	事	一九一三～一九二四
伊藤淳治	事	一九一三～一九三一・七
谷田房子	事	一九一四・四～一九二五・一〇
佐伯フミ	女	一九一四・四～一九二五
野副八重	女	一九一四・四～一九二五
赤井力也	女・専	一九一四・四～一九六・七

氏名	所属	在職年月
黒澤松代	女	一九二四・四～一九二〇・三
中村菊代	女	一九二四・四～一九三三・六
小関千世子	女	一九二四・四～一九二五・九～一九二五・五
植木たつよ	女	一九二四・四～一九二四・三
山田操	専・大事	一九二四・四～一九二四・四
鈴木紀一郎	専	一九二四・一〇～一九二五・三
伊藤孝安	事	一九二四～一九二五・五
相澤フヂ子	女	一九二五・四～一九二五
有馬フミ	女	一九二五・四～一九二五
佐藤てる	女	一九二五・四～一九二五
佐治秀治	専	一九二五・四～一九二七・四
光静枝	専	一九二五・四～一九二八・四
中村九郎	専	一九二五・四～一九二九・四
大場美恵	専・大事	一九二五・五～一九二七・一
喜藤仙太郎	事	一九二五・六～一九三三
羽賀末吉	事	一九二五・六～一九四〇・一
斎藤てる	事	一九二五・一一～一九六九・三
千藤さだ		一九二五～一九二七
佐藤勇	事	一九二六・一～一九四四・四
坂元義男	専	一九二六・四～一九二六・三
崔三悦	専・大事	一九二六・四～一九二七・七
菊澤季生	事	一九二六・九～一九二三・三
斎藤やすへ		一九二六・九～一九二六・九～一九三一・三
高橋あぐり		

氏名	所属	在職年月
大越直	女専	一九二七～一九二五・八
菊地とみを	事	一九二七・四～一九二八・二
丸山敏子	女専	一九二七・四～一九四三・四
中島慶治	専・大事	一九二七・四～一九五一・三
林松子	専・大事	一九二七・四～一九四四・九～一九四九・三～一九七〇・三
男澤光子	事	一九二七・五～一九三六・三
神田摂道	専	一九二七・九～一九二八・七
上西初郎	専	一九二七・九～一九二九・三
大石さだ	女専	一九二七・九～一九三〇・三
矢崎かづえ	専	一九二七・九～一九三〇・三
吉田慶助	専	一九二七・九～一九三三・四
伊藤美穂	専	一九二七・一〇～一九二七・一二～一九二九・三
篠原助市	専	一九二八・三～一九三一・三
山極真衛	専	一九二八・三～一九三一・三
山田ひさえ	専	一九二八・四～一九二九・九
猪苗代とき	女	一九二八・四～一九三〇・三
遠藤はつ	事	一九二八・四～一九三七・一
有井癸巳雄	専	一九二八・五～一九三一・三
館岡剛	専	一九二八・九～一九四一・三
芳賀文七	事	一九二八～一九三五・九
前川真二郎	専	一九二九・四～一九三九・六
高木フミ		一九二九・四～一九三九

氏名	所属	在職年月
外村徳三	専	一九二九・五～一九三〇・三
高山信司	専	一九二九・九～一九三〇・五
松原富	専	一九二九・一〇～一九三一・七
金子もと	女	一九三〇・一～一九三一・二
菅間まつみ	専	一九三〇・四～一九三〇・六
安倍三郎	専	一九三〇・四～一九三二・三
黒沢惇造	専	一九三〇・四～一九三一・三
横山きゑ	専	一九三〇・四～一九三四・一〇
木村花子	女	一九三〇・四～一九三九・七
野村やちよ	女	一九三〇・四～一九三二・三
岡不二枝	専	一九三〇・四～一九四四・一〇
菊田善三	女	一九三〇・九～一九三一・三
阿部やえ	専	一九三〇・一二～一九三一・三
及川トキ	事	一九三一・四～一九三二・八
濱田長松	女	一九三一・四～一九三四・四
高野濱治	専	一九三一・四～一九三五・一〇
木皿襲	事	一九三〇・二～一九三〇・三
伊藤はな	事	一九三〇・五～一九三〇
鈴木萬蔵	事	一九三一・九～一九四一・六
阿部平治	事	一九三一・三～一九三七・八
柘植千代	女	一九三一・九～一九三九・三
諸根武雄	女・事	一九三一・九～一九四四・三
石田房子	女	一九三二・四～一九三二・三
小川三郎	女・専	一九三二・四～一九三七・三

氏名	所属	在職年月
今井静子	女・専	一九三三・四～一九三四・七
平塚ミネ	事	一九三三・九～一九三五・三
小島次男	専	一九三三・九～一九四〇・三
湯本あさ	専	一九三四・四～一九三四・七
小野寺さだえ		一九三四・四～一九三四
小谷野格文	専	一九三四・四～一九三五・三
鍋谷堅次郎	専	一九三四・四～一九三五・三
山本信道	女	一九三四・四～一九三六・三
平出サダ	専	一九三四・四～一九四〇・三
伊藤久子	大	一九三四・四～一九八一・三
大内タケヶ	事	一九三四・五～一九四一・八
村上恭子	女	一九三四・九～一九三五・三
相原とし子	事	一九三四・九～一九三五・三
中村彪	専	一九三四・九～一九四三・九
多田三郎	女	一九三四・九～一九四五
深宮政範	女	一九三五・四～一九三六・三
實方ハル	専	一九三五・四～一九三六・一〇
菊地ミツ	事	一九三五・四～一九三六・一二
長谷川きよ子	事	一九三五・四～一九三六・三
佐藤義雄	女	一九三五・四～一九三七・一〇
辻秀子	女	一九三五・四～一九四一・八
伊藤千代	女	一九三五・四～
相馬恵美子	専	一九三五・一〇～一九六〇・三
三浦忠雄	事	一九三五・一一～一九三六
上原弘衛	女	一九三六・四～一九三七・三
北島光子	女	一九三六・四～一九三七・三
服部静枝	女	一九三六・四～一九三九・三
大宰友次郎	女	一九三六・四～一九四一・六
鈴木春代	専	一九三六・四～一九三八
平愛子	事	一九三六・九～一九四〇・九
八枝子	事	一九三六・九～一九四〇・九
武藤トモ	事	一九三七・一～一九三七・一〇
刈田満喜子	女	一九三七・一～一九四三・三
泉貞子	中高・事	一九三七・一～一九四四・五
九鬼利憲	女	一九三七・四～一九三八・三
林昭	事	一九三七・四～一九三八・一二
田島治兵衛	女	一九三七・四～一九四〇・三
相澤睦臭男	女	一九三七・四～一九四〇・一三
武田愛子	女・専	一九三七・四～一九四五・八
千葉善雄	事	一九三七・九～一九四〇・一
宮崎信彦	女・専	一九三七・九～一九四一・八
佐藤貞子	事	一九三七・一〇～一九四三
村上正	事	一九三七 ～一九三八・一
梅林刃之助	専	一九三八・四～一九四三
坂元ゑい	専	一九三八・四～一九四四
赤城しげよ	女	一九三八・六～一九五〇・九
作間貞子	事	一九三八・九～一九四〇・四
中澤栄子	女	一九三八・九～一九三九・七
小清水れい	専・大	一九四〇・三～
遠藤浩三	専・大	一九三八・九～一九六七・三
石原淳子	事	一九三八・一二～
清水道子		一九三八 ～一九三九・三
西條開吾	事	一九三八 ～一九四〇・一
青野くに	事	一九三八 ～一九四一
田中清助	女	一九三九・一～一九四三
山室美喜	女	一九三九・四～一九三九・九
片倉仁	専	一九三九・四～一九四四・五
佐瀬とめ	女・専	一九三九・四～一九五六・三
柳原夏子	女	一九三九・四～
水戸光子	事	一九三九・六～一九四一・九
一見よし子	女	一九三九・六～一九四六・一〇
林幸子	中高	一九三九・九～一九四〇・五
中山敏美		一九三九・九～一九四一・三
阿部利夫	女	一九四〇・二～一九四三
佐藤勇	事	一九四〇・二～一九四四・四
杉野代志乃		一九四〇・四～一九四一
相澤清吉		一九四〇・四～一九四二
蟻川富蔵	専	一九四〇・四～一九四三・六
小川政恭	専	一九四〇・四～一九四三・八
五十嵐愛子	女	一九四〇・四～一九四四
千葉善右エ門	事	一九四〇・四～一九四四

氏名	所属	在職年月
赤石義明		一九四〇・四～
中川秀恭	専	一九四〇～
堀江清治郎	女・専	一九四〇・五～一九四四・四
宮崎友夫	女	一九四〇・六～一九四一
坂本ナカ	事	一九四〇・一一～一九四一
清水きよの		一九四〇・一一～一九四一
高橋房子	事	一九四〇・一二～一九四一
安倍淳吉	専	一九四一・一～一九四一
岡雄次郎	女	一九四一・四～一九四二・三
加藤與重	女	一九四一・四～一九四二・三
山内源一	女	一九四一・四～一九四二・三
岡田愛江		一九四一・四～一九四二・一一
磯部太郎	専	一九四一・四～一九四三
佐々木美知子	女	一九四一・四～一九四三・三
藤原いち子	女	一九四一・四～一九四三・九
村岡晢	専	一九四一・四～一九四四・三
登坂ミハル	女・専	一九四一・四～一九四四・九
竹内義子	女・中高	一九四一・四～一九五一・九
宮崎玉江	専	一九四一・五～一九四一・九
菊地信史		一九四一・六～一九四一・九
小野村洋子	専・大	一九四一・六～一九四一・九
西山貞	学院長	一九四一・七～一九六〇・三
渡會美和		一九四一・九～一九四四
乾雪雄		一九四一・九～一九四二・三

氏名	所属	在職年月
酒井瞭吉		一九四一・九～一九四二・三
三島常鳳		一九四一・一〇～一九四一
武田宗俊		一九四一・一〇～一九四二・七
大泉泰子		一九四一～一九四二・九
三品恒子	女	一九四一・一～一九四二・一〇
高橋裕代		一九四一・三～一九四二・六
小澤善右エ門	事	一九四一・三～一九四二
尾花重雄		一九四一・三～一九四二・三
小川芳子		一九四一・三～一九四二・四
出村總		一九四一・三～一九四二・九
藤澤禅		一九四一・三～一九四三
佐藤きみ		一九四一・三～一九四四・四
清水ユウ	女	一九四一・三～一九四二・五
秋保孝蔵	女・専・大	一九四一・四～一九五一・三
島史也	中高	一九四一・四～一九六七・三
石井昌光	専・大	一九四一・四～一九七九・三
澤邉繁治	事	一九四一・五～一九四二・一〇
佐伯哲夫	女	一九四一・八～一九四二・三
酒井原和子	事	一九四一・九～一九四三・一
佐々木美恵	女	一九四一・一〇～一九四二・五
佐々木安治	事	一九四一～
平山清子	事	一九四一～
六波羅久男		一九四三～
平田千代子	女	一九四三・一～一九五一・八

氏名	所属	在職年月
堀江合造	事	一九四三・二～一九四三
斎藤宣子	事	一九四三・四～一九四三
沢本マツ		一九四三・四～一九四三
澤本兼治	女	一九四三・四～一九四四
田丸貞之	女	一九四三・四～一九四四
佐々木美恵	事	一九四三・四～一九四五・一
小林恭	女	一九四三・四～一九四五・七
木村教而	女	一九四三・四～一九四五・一〇
岡崎淑	女	一九四三・四～一九四五
鈴川文子	女	一九四三・四～一九四六・三
古川澄子	女	一九四三・四～一九四六・三
森下金二郎	中高・大	一九四三・四～一九四七・九
平能なほ	中高	一九四三・四～一九四七・九
南條和子	中高	一九四三・四～一九八六・三
寺崎毅		一九四三・一〇～一九四四・七
立花祐雄		一九四三・一〇～一九四四・一二
阿部泰子		一九四三・一〇～一九四五
笠置洋子		一九四三・一〇～一九四五
佐藤裕子	事・女	一九四三・一〇～一九四五・一
檜山通子		一九四三・一〇～一九四五・九
栗林宇一	専・大	一九四三・一二～一九五八・九
石川正生		一九四三～
田中雅美		一九四三～

氏名	所属	在職年月
加藤孝	女・中高	一九四四・二～一九四四・四 一九六七・四～一九七三
手島照子	専	一九四四・四～一九四五
遊佐久		一九四四・四～一九四五
本宮直助		一九四四・四～一九四五
村瀬和子		一九四四・四～一九四五・三
一見とみ	女・専	一九四四・四～一九四六・六
江刺りつ	事	一九四四・四～一九四六・九
安藤ヤエ	女	一九四四・四～一九四七・二
朝下忠		一九四四・四～一九四九
佐武禎子		一九四四・五～一九四四・九
熊坂佐内	女・事	一九四四・五～一九四五・三 一九四六・一～一九四六・九
櫻岡茂代		一九四四・五～
佐々木清吾		一九四四・六～一九四四・七
石橋ときわ	専・大	一九四四・九～一九四四・一二 一九四五・九～一九七〇・九
松本房江	女	一九四四・一〇～一九四五・一〇
永井裕子	女	一九四四・一〇～一九四六・四
渡辺やす子	女	一九四四・一〇～一九四六・八
平田富美子	事	一九四四・一一～一九四六・九
加川則		一九四四・～一九四四
片山行子		一九四四・～一九四四
建部順子		一九四四・～一九四四
西村雪池		一九四四・～一九四四

氏名	所属	在職年月
松隈ツネ		一九四四～一九四四
椿雄太郎	大	一九四四・一～一九五七・三
村上みや	中高	一九四四・三～一九六三・三
林斌	中高	一九四四・三～一九七〇・一一
柴山文子	女・専	一九四四・四～一九四七・一〇
中島哲郎	中高	一九四四・四～一九五一・三
鈴木房太郎	中高・大	一九四四・七～一九七〇・三
石川百合	大	一九四四・一一～一九五二・三
高橋源次郎	事	一九四四・一一～一九六二・三
諸石靖	中高	一九四六・二～一九五四・三
斎藤実	事	一九四六・二～一九七二・三
土橋コウ	大	一九四六・三～一九六四・四
高橋まさ	中高	一九四六・四～一九四六・六
津久井鏡子	中高	一九四六・四～一九四七・六
飯塚恭子	中高	一九四六・四～一九五三・三
真山成子	事	一九四六・四～一九五四・三
伊藤るつ子	中高	一九四六・四～一九五六・三
赤城恭子	中高	一九四六・四～一九五六・七
阪田勝三	大	一九四六・四～一九七二・三
庄司知子	大	一九四六・四～一九七二・三
小林淳男	専	一九四六・五～一九四八・三
赤間つや子	大	一九四六・五～一九五七・九
木丈邦子	中高	一九四六・九～一九五六・三
今野恒四郎	中高・事	一九四六・九～一九八三・七
作山ミツエ	女	一九四六・一〇～一九四六・一二

氏名	所属	在職年月
斎藤朝子	事	一九四六・一〇～一九五一・二
古谷辰三	大	一九四六・一二～一九五六・三 一九六七・四～一九七〇・三
阿部中子	事	一九四七・四～一九四八・二
高橋睦子	中高・事	一九四七・四～一九四九・三
鈴木宣子	事	一九四七・四～一九五三・九
須藤慶子	中高	一九四七・四～一九五四・三
横山シゾ	中高・大	一九四七・五～一九八二・三
椿多摩	大	一九四七・八～一九五五・九
小野いわ子	事	一九四八・三～一九六三・三
瀬戸千代	事	一九四八・四～一九四八・四
星千賀子	事	一九四八・四～一九四九・三
堀田綾子	事	一九四八・四～一九五〇・三
岡村直子	大	一九四八・四～一九四八・三
田口和子	事	一九四八・六～一九四八・三
太斎はる子	事	一九四八・八～一九七一・三
塩見敏	中高	一九四八・九～一九五一・七
菅野栄子	中高	一九四八・一〇～一九五一・三
前田博子	女・専	一九四九・四～一九五〇・三
池田哲郎	大	一九四九・四～一九五〇・五
篠塚恵美子	中高	一九四九・四～一九五二・三
松井みどり	事	一九四九・四～一九五二・三
上野和子	中高	一九四九・四～一九四九・三
金沢孝子	事	一九四九・四～一九五四・三
小平武躬	事	一九四九・四～一九五六・三

氏名	所属	在職年月
瀬戸堯子	大	一九四九・四～一九五七・三
川端安子	中高	一九四九・四～一九七一・三
富澤政一	事	一九四九・四～一九七一・三
山際トシ	中高	一九四九・四～一九七九・三
八木咲子	事	一九四九・一〇～一九五〇・三
渡邉弘道	中高・事	一九四九・一〇～一九五八・三
平山初子	事	一九四九・一〇～一九五四・八
山尾富子	事	一九五〇・一～一九六八・三
小林高壽	中高	一九五〇・四～一九五一・二
作間孝子	事	一九五〇・四～一九五一・三
松本愛子	事	一九五〇・四～一九五六・三
稲葉一郎	中高	一九五〇・四～一九六一・三
半田道子	事	一九五〇・四～一九五七・一〇
石田禮子	中高・大	一九五〇・四～一九六八・三
内田良三	大	一九五〇・四～一九七八・三
大槻照子	事	一九五〇・五～一九五一・三
山崎謹一郎	大	一九五〇・六～一九五一・三
湯澤フク	事	一九五〇・九～一九六三・三
進藤たけ子	中高	一九五〇・九～一九七〇・三
浅井きよ子	中	一九五一・三～一九五四・二
高橋恵子	大	一九五一・四～一九五一・三
佐藤文子	中	一九五一・四～一九五二・三
石井律子	事	一九五一・四～一九五四・一
久野真吉	大	一九五一・四～一九五五・三
織田誠	中高	一九五一・四～一九五七・一〇

氏名	所属	在職年月
吉原護一	中高	一九五一・四～一九六〇・三
谷口隆之助	大	一九五一・四～一九六六・三
立谷清治	大	一九五一・五～一九八〇・三
宮城喜久子	事	一九五一・五～一九八〇・三
大塚敬	中高	一九五一・七～一九五七・三
原田昭子	大	一九五一・二～一九五四・九
生地竹郎	中高	一九五二・四～一九五三・三
亀高京子	大	一九五二・四～一九五四・三
三宅瑠璃子	事	一九五二・四～一九五四・一二
布施悌次郎	中高	一九五二・四～一九五八・三
須藤文子	大	一九五二・四～一九五九・三
北目ノブ子	中高	一九五二・四～一九六一・三
小林安子	中高	一九五二・四～一九六九・三
蔵持節子	大	一九五二・四～一九八四・三
菅原三治	事	一九五二・一〇～一九五七・一一
小山純子	大	一九五二・四～一九五三・九
佐藤光子	大	一九五三・四～一九五四・三
三塚美代子	大	一九五三・四～一九五四・三
茂庭康子	大	一九五三・四～一九五五・三
半田三恵子	大・中高	一九五三・四～一九五五・九
永井洋子	中高	一九五三・四～一九五五・一〇
武田敏子	大	一九五三・四～一九五六・三
中兼利子	中高	一九五三・四～一九五七・三
末包一夫	事	一九五三・四～一九五八・三
加藤美代子	事	一九五三・四～一九六四・七

氏名	所属	在職年月
古賀蘆子	大	一九五三・四～一九六九・三
渡邊芳子	大	一九五三・一〇～一九五六・三
山浦ヤイ	中高	一九五三・一〇～一九五九・八 一九六一・四～一九七一・三
小暮アイ	事	一九五三・一〇～一九六四・三
本多繁	中高	一九五四・四～一九七〇・三
大澤富士雄	中高	一九五四・四～一九七〇・三
工藤シマ	大・中高	一九五四・四～一九七〇・三
平澤清	大	一九五四・四～一九七五・六
佐々芳子	中高	一九五四・四～一九五六・三
後藤藤子	事	一九五四・四～一九五七・四
本田順美	大	一九五四・四～一九五九・九
阿部順子	事	一九五四・四～一九六六・四
川瀬智壽子	中高	一九五四・四～一九六七・三
土生慶子	中高	一九五四・四～一九七一・八
高橋京子	事	一九五四・四～一九七二・三
園部正助	事	一九五四・四～一九七四・三
久保和子	大	一九五四・四～一九七五・三
阿部富士雄	中高	一九五四・四～一九八二・三
八嶋亀吉	事	一九五四・四～一九八五・三
吉原美佐子	事	一九五四・五～一九六一・三
本間節子	事	一九五四・五～一九六六・八

氏名	所属	在職年月
宮腰雅子	事	一九五四・六～一九六四・一
矢萩文子	事	一九五四・一〇～一九六一・七
遠藤千恵子	大	一九五五・四～一九五六・三
青山愛子	大・中高	一九五五・四～一九五七・三
佐々木英子	大	一九五五・四～一九五八・三
斎藤信子	中高	一九五五・四～一九五九・三
井出和美	中高	一九五五・四～一九六二・一〇
丸山俊雄	事	一九五五・四～一九五七・三
平賀玲子	大	一九五五・四～一九六〇・三
斎藤トシ子	事	一九五五・五～一九五六・三
浦山松右衛門	事	一九五五・九～一九六三・三
大沼美恵子	中高	一九五六・四～一九五七・三
坂正子	大	一九五六・四～一九六二・一〇
石本亮子	大	一九五六・四～一九五七・四
手島芳	大	一九五六・四～一九五七・四
熊谷玲子	事	一九五六・四～一九五八・三
伏見アヤ子	大	一九五六・四～一九五九・三
目黒美恵子	中高	一九五六・四～一九五九・八
水戸南美子	幼	一九五六・四～一九六〇・七
土橋克子	幼	一九五六・四～一九六三・三
阿部よし	事	一九五六・四～一九六五・一〇
菅井よし	事	一九五六・四～一九六六・四
今井儀子	事	一九五六・五～一九五七・三
有路教子	大	一九五七・四～一九八三・三
小川富子	大	一九五七・四～一九六五・九
石丸靖子	大	一九五七・四～一九六一・九
斎藤行子	大	一九五七・四～一九八八・三
坪内淳子	大	一九五七・四～一九八八・三
手島ケイ	中高	一九五七・四～一九八八・三
北畠豊子	事	一九五七・四～一九九五・一〇
鈴木美智子	大	一九五七・四～一九七五・三
大曽根良衛	中高	一九五七・四～一九七九・三
泉山中三	大	一九五七・四～一九七九・三
中島下枝	大	一九五七・四～一九七九・三
小野澤公子	事	一九五七・六～一九六一・三
大谷卓子	事	一九五七・一〇～一九八〇・八
千葉禮一	事	一九五七・一三～一九八〇・七
菅野章夫	事	一九五八・一～一九六八・三
菊地美奈子	大	一九五八・四～一九九五・三
佐々木歌子	大	一九五八・四～一九九五・三
高橋美江	大	一九五八・四～一九九五・三
阿部孝子	中高	一九五八・四～一九八〇・三
大泉和子	大	一九五八・四～一九八〇・三
岡康子	大	一九五八・四～一九八〇・三
高橋玲子	大	一九五八・四～一九八〇・五
山本真喜子	事	一九五八・四～一九八六・二
出村郁子	中高	一九五八・四～一九八六・四
高橋とみえ	大	一九五八・四～一九九三・三
千葉栄子	中高	一九五八・四～一九九五・九
佐々木交賢	大	一九五八・四～一九六〇・五
五十嵐千恵子	事	一九五八・四～一九七〇・三
宮地房江	大	一九五八・四～一九七八・三
阿部邦雄	中高	一九五八・四～一九七九・三
小倉英男	中高	一九五八・四～一九八四・三
大出みち子	大	一九五九・四～一九六〇・三
大槻悦子	大	一九五九・四～一九六〇・三
佐々木浩子	大	一九五九・四～一九六〇・三
岡崎幸子	大	一九五九・四～一九六一・三
馬場良子	中高	一九五九・四～一九六一・三
廣岡英子	大	一九五九・四～一九六一・三
本間幸	中高	一九五九・四～一九六一・三
月浦節子	大	一九五九・四～一九六一・四
増田忠子	大	一九五九・四～一九六六・三
愛川照子	中高	一九五九・四～一九六六・三
松木弘子	大	一九五九・四～一九八五・三
高橋延子	事	一九五九・七～一九七一・九
高橋康雄	事	一九五九・一〇～一九九三・三
副島敏子	大	一九五九・一〇～一九九四・三
高橋孝子	大	一九六〇・四～一九六〇・三
天野功子	大	一九六〇・四～一九六一・六
渡部啓子	中高	一九六〇・四～一九六一・八
濱田喜和子	大	一九六〇・四～一九六一・一一

氏名	所属	在職年月
石津倫子	大	一九五〇・四～一九五三・三
大友賢二	中高	一九五〇・四～一九五三・三
千葉妙子	中高	一九五〇・四～一九五三・三
安部紀子	大	一九五〇・四～一九五三・八
千葉靖男	中高	一九五〇・四～一九五三・三
坂本さい子	事	一九五〇・四～一九五四・九
山田昌子	大	一九五〇・四～一九五四・一二
佐瀬則子	大	一九五〇・四～一九五六・三
高橋栄夫	中・高	一九五〇・四～一九五六・三
小田信士	学院長	一九五〇・四～一九五二・三
松原茂	大	一九五〇・四～一九五二・三
西村規矩夫	大	一九五〇・四～一九七四・九
熊野敬子	大	一九五〇・六～一九五四・一一
橋本頼子	幼	一九五〇・九～一九五一・三
加藤マツ	事	一九五〇・九～一九五四・三
南條宗子	大	一九五〇・一〇～一九五一・九
安藤清保	事	一九五〇・一一～一九五八・三
生地悠子	大	一九五一・四～一九五三・三
大沼葉子	中高	一九五一・四～一九五三・三
加川方子	大	一九五一・四～一九五三・三
佐藤紀久子	大	一九五一・四～一九五三・三
須田康子	大	一九五一・四～一九五三・三
安達哲子	中高	一九五一・四～一九五三・八
亀井淑	事	一九五一・四～一九五五・一〇
佐々木自子	中高	一九五一・四～一九六六・三

氏名	所属	在職年月
斎藤昭	中高・事	一九五一・四～一九五九・三
武田愛	中高	一九五一・四～一九六三・三
庄司みや子	事	一九五一・五～一九六八・九
大泉節子	大	一九五一・五～一九七八・九
濱名タカ子	大	一九五一・七～一九五三・三
佐々木清子	事	一九五一・九～一九七五・一〇
河口郁子	大	一九五一・一〇～一九五二・一
鈴木彌栄子	大	一九五一・一〇～一九五三・三
高橋美智子	事	一九五一・一〇～一九六八・三
有住宏子	大	一九五一・一一～一九五四・六
菊地賢治	大・中高	一九五二・三～一九五四・三 一九五九・五～一九七〇・一
竹内啓子	事	一九五二・四～一九五二・五
堀福子	大	一九五二・四～一九五二・八
有路雍子	中高	一九五二・四～一九五三・三
伊藤美穂子	大	一九五二・四～一九五三・三
歌書紀子	中高	一九五二・四～一九五三・三
小林和子	大	一九五二・四～一九五三・三
中村真喜子	大	一九五二・四～一九五三・三
芳賀嘉子	中高	一九五二・四～一九五三・三
杉森茉莉子	大	一九五二・四～一九五三・四
手戸聖子	中高	一九五二・四～一九五三・九
上田久恵	大	一九五二・四～一九五五・三
鍛冶久美子	大	一九五二・四～一九七七・三
中村右子	中高	一九五二・四～一九七七・三

氏名	所属	在職年月
金田佳子	大	一九五二・六～一九五三・三
桑折州子	大	一九五二・九～一九五四・三
鈴谷道子	事	一九五二・九～一九五四・三
遠藤英子	事	一九五二・一一～一九五四・三
松田節子	大	一九五三・四～一九五三・五
武田民子	事	一九五三・四～一九五三・九
大西美保	大	一九五三・四～一九五四・三
大松澤増子	事	一九五三・四～一九五四・三
佐々木美智子	中高	一九五三・四～一九五四・三
清水恒子	中高	一九五三・四～一九五四・三
山崎悠子	大	一九五三・四～一九五四・三
門間艶子	大	一九五三・五～一九五四・三
辻田幸子	大	一九五三・四～一九五五・三
林志乃	大	一九五三・四～一九五五・三
菱沼幸子	大	一九五三・四～一九五五・六
平邦子	事	一九五三・四～一九五五・六
橋浦兵一	大	一九五三・四～一九五六・三
小松茂人	大	一九五三・四～一九五七・三
佐々木裕子	事	一九五三・四～一九六七・九
鎌谷光子	中高	一九五三・四～一九六八・三
鈴木久子	大	一九五三・四～一九六八・三
斎藤恵子	中高	一九五三・四～一九七〇・三
桜庭正堂	中高	一九五三・四～一九七八・八
阿部勝八	事	一九五三・四～一九八五・三
松崎光子	大	一九五三・六～一九八四・四

氏名	所属	在職年月
丹野やつよ	事	一九六四・二～一九六六・四
佐々木郁子	大	一九六四・四～一九六四・四
関谷佳子	大	一九六四・四～一九六五・三
富永幸子	大	一九六四・四～一九六五・三
麥倉令子	中高	一九六四・四～一九六五・三
高橋洋子	事	一九六四・四～一九六五・九
佐々木照代	大	一九六四・四～一九六五・一二
伊藤美智子	事	一九六四・四～一九六六・三
高橋厚子	大	一九六四・四～一九六六・三
高橋とし子	事	一九六四・四～一九六六・四
新井佑造	中高	一九六四・四～一九六七・三
菊地美恵子	大	一九六四・四～一九六七・三
牧田三枝子	中高	一九六四・四～一九六七・三
橋本幸子	中高	一九六四・四～一九六七・八
高橋栄子	事	一九六四・四～一九六七・一二
松野俊一	中高	一九六四・四～一九七〇・八
情野佳子	中高	一九六四・四～一九七一・三
宝槻千代	事	一九六四・四～一九七二・三
遠藤恭子	大	一九六四・四～一九七三・三
千葉恵子	事	一九六四・四～一九八〇・五
門間淳子	大	一九六四・五～一九六四・六
渡邊則子	大	一九六四・五～一九六五・三
山崎真理子	大	一九六四・九～一九六五・三
白石美津子	大	一九六四・一〇～一九六五・三
大場きく	事	一九六四・一〇～一九八八・一〇

氏名	所属	在職年月
櫻田裕子	大	一九六五・四～一九六六・三
鈴木妙子	大	一九六五・四～一九六六・三
高橋鎭雄	中高	一九六五・四～一九六六・三
千葉富子	大	一九六五・四～一九六六・三
阿部伸子	中高	一九六五・四～一九六七・七
小原徳子	大	一九六五・四～一九六七・三
櫻木明子	大	一九六五・四～一九六七・三
佐藤かずよ	大	一九六五・四～一九六七・三
田中章子	事	一九六五・四～一九六七・八
小山節子	大	一九六五・四～一九六八・三
斎藤啓子	大	一九六五・四～一九六八・三
永元道子	大	一九六五・四～一九六八・三
船越栄	中高	一九六五・四～一九六八・三
横山圭子	大	一九六五・四～一九六八・三
岩間はじめ	事	一九六五・四～一九六八・三
及川今朝治	事	一九六五・四～一九六八・三
早坂作也	事	一九六五・四～一九六九・三
布田庸子	大	一九六五・四～一九六九・三
目黒昭子	中高	一九六五・四～一九七〇・七
樽松恭子	中高	一九六五・四～一九七〇・三
小野寺玲子	大	一九六五・四～一九七〇・七
保原加代子	事	一九六五・四～一九七一・三
片瀬敬子	大	一九六五・四～一九七二・三
渡部治雄	大	一九六五・四～一九七二・四
後藤たへ	大	一九六五・四～一九七八・三

氏名	所属	在職年月
及川俊子	事	一九六五・四～一九七九・三
鈴木豊吾	事	一九六五・四～一九六六・三
湊谷幸子	事	一九六五・五～一九七七・三
吉田陽子	事	一九六五・六～一九六八・七
薗部はつよ	事	一九六五・六～一九七七・三
大坂瓊子	事	一九六五・一〇～一九六六・三
及川迪子	大	一九六六・四～一九七七・三
及川彌	事	一九六六・四～一九七七・三
亀山かよ子	大	一九六六・四～一九七七・三
遊佐純子	事	一九六六・四～一九七七・三
吉田直子	事	一九六六・四～一九七七・三
岡邦子	大	一九六六・四～一九七七・八
湯目しず子	事	一九六六・四～一九六八・九
阿部洋子	大	一九六六・四～一九六八・三
江端節子	大	一九六六・四～一九六八・三
林偕子	大	一九六六・四～一九六九・三
早川淑子	中高	一九六六・四～一九六九・三
保原雪江	中高	一九六六・四～一九六九・三
前田富祺	大	一九六六・四～一九七五・三
石橋典子	幼	一九六六・四～一九七五・三
遠藤佳子	事	一九六六・四～一九七〇・三
大出京子	大	一九六六・四～一九七〇・三
朝倉秀之	事	一九六六・四～一九七一・三
佐藤あい子	事	一九六六・四～一九七二・三
早瀬彰彦	中高	一九六六・四～一九七二・三

氏名	所属	在職年月
榛葉和子	事	一九六六・四～一九七一・四
相澤孝子	事	一九六六・四～一九七一・四
佐藤尤子	大	一九六六・四～一九七一・三
米昭子	事	一九六六・四～一九七一・三
前越節子	事	一九六六・四～一九七二・三
亥飼ナッ	事	一九六六・四～一九七二・八
佐藤孝一	事	一九六六・四～一九七三・三
石田綽子	事	一九六六・四～一九七六・五
長田一夫	事	一九六六・四～一九七六・八
小野寺紀子	事	一九六七・四～一九七七・三
阿部和子	大	一九六七・四～一九七八・三
斎藤信子	大	一九六七・四～一九七八・三
伊藤和子	大	一九六七・四～一九七八・三
斎藤紘子	大	一九六七・四～一九七八・三
善積とま子	事	一九六七・四～一九七八・三
篠塚康子	大	一九六七・四～一九七九・三
若生和男	中高	一九六七・四～一九七九・四
渋谷博子	中高	一九六七・四～一九七九・五
梅津淳子	中高	一九六七・四～一九八〇・三
田丸敦子	大・事・中高	一九六七・四～一九八〇・一〇
山口知子	大	一九六七・四～一九七一・三
深宮百合子	中高	一九六七・四～一九七一・三
大給尹	大	一九六七・四～一九七二・三
平島正郎	大	一九六七・四～一九七三・四

氏名	所属	在職年月
平塚とし江	事	一九六七・四～一九七一・三
大塚智	中高	一九六七・四～一九七二・三
宍戸保男	事	一九六七・四～一九七二・一〇
鈴木則郎	大	一九六七・四～一九七九・三
宮崎彰	中高	一九六七・四～一九八〇・三
斎藤洋子	大	一九六七・九～一九八九・九
相原みわ	事	一九六七・九～一九七八・四
花村奉樹	大	一九六七・一〇～一九七二・三
千葉智子	大	一九六八・三～一九七二・三
工藤保子	大	一九六八・四～一九八九・一
嶺岸裕子	大	一九六八・四～一九八九・二
村上佑子	中高	一九六八・四～一九八九・三
青野澄子	中高	一九六八・四～一九九〇・三
梅原由紀子	大	一九六八・四～一九七〇・三
佐々木昌雄	中高	一九六八・四～一九七〇・三
日野よし子	大	一九六八・四～一九七〇・三
櫻井京子	大	一九六八・四～一九七〇・一一
小野寺春恵	幼	一九六八・四～一九七一・三
津田彌生	大	一九六八・四～一九七一・三
塚野澄子	事	一九六八・四～一九七一・四
柴田順子	大	一九六八・四～一九七一・一〇
梶賀千鶴子	大	一九六八・四～一九七二・三
木村厚子	大	一九六八・四～一九七二・三
佐藤節子	大	一九六八・四～一九七二・三
津田淳	大	一九六八・四～一九七二・五

氏名	所属	在職年月
伊藤淑子	事	一九六八・四～一九七四・三
大山正博	大	一九六八・四～一九七四・三
山本よりか	事	一九六八・四～一九七五・三
成川博子	大	一九六八・四～一九七五・九
森セキ子	大	一九六八・四～一九七五・九
保見和代	大	一九六八・四～一九七六・三
山田瑞子	事	一九六八・六～一九七〇・三
杉山徳子	事	一九六八・九～一九七四・三
伊藤洋子	大	一九六八・一〇～一九六九・二
今野明子	事	一九六八・一〇～一九七〇・一一
土田重子	事	一九六八・一一～一九七一・三
佐々木啓子	大	一九六九・一～一九七〇・三
高橋紀美子	事	一九六九・四～一九六九・八
中村和子	大	一九六九・四～一九七〇・八
青渕和江	事	一九六九・四～一九七〇・三
小澤則子	大	一九六九・四～一九七〇・三
熊田純子	大	一九六九・四～一九七〇・三
東海林容子	大	一九六九・四～一九七〇・三
関戸朋子	中高	一九六九・四～一九七一・三
鳴海敏江	幼	一九六九・四～一九七一・三
櫻井知恵子	中高	一九六九・四～一九七一・七
吉田和子	事	一九六九・四～一九七二・二
石川重俊	大	一九六九・四～一九七二・三
大河内裕子	大	一九六九・四～一九七二・三
長谷川美智子	大	一九六九・四～一九七三・三

氏名	所属	在職年月
千葉智子	事	一九六九・四～一九七四・三
尾畑いつ子	事	一九六九・四～一九七二・三
加藤知子	事	一九六九・四～一九七六・三
伊藤裕子	中高	一九六九・四～一九八〇・三
佐藤芳信	事	一九六九・九～一九八二・三
小野寺庸子	事	一九六九・五～一九七一・一
梅屋睦美	大	一九六九・九～一九七五・六
狩野かち	事	一九六九・九～一九七六・二
和田和	事	一九六九・九～一九八三・三
久世妙子	大	一九七〇・四～一九七〇・九
小川美代子	中高	一九七〇・四～一九七一・三
亀山純子	大	一九七〇・四～一九七一・三
佐藤宣子	事	一九七〇・四～一九七一・三
松崎健一郎	中高	一九七〇・四～一九七一・三
岩井絹枝	幼	一九七〇・四～一九七二・三
栗田路子	大	一九七〇・四～一九七二・三
高田恵子	中高	一九七〇・四～一九七二・三
三浦和子	大	一九七〇・四～一九七二・三
高橋律子	事	一九七〇・四～一九七二・七
今泉静子	大	一九七〇・四～一九七二・九
鈴木昭子	大	一九七〇・四～一九七二・三
杉山紘子	大	一九七〇・四～一九七三・二
玉懸洋子	中高	一九七〇・四～一九七四・三
今野隆子	中高	一九七〇・四～一九七四・三

氏名	所属	在職年月
丹野政子	事	一九七〇・四～一九七五・三
虎川清子	中高	一九七〇・四～一九七六・三
松尾福子	中高	一九七〇・四～一九七七・三
森田敏彦	大	一九七〇・四～一九七九・三
南野栄子	中高	一九七〇・四～一九七九・三
笹子喜美江	中高	一九七〇・四～一九八〇・三
石若恵美子	事	一九七〇・四～一九八〇・一
海野京子	中高	一九七〇・四～一九八一・三
酒井倫夫	大	一九七〇・四～一九八二・九
平井節子	大	一九七〇・四～一九八五・三
古藤正一	事	一九七〇・五～一九七三・七
河上幸子	大	一九七〇・五～一九七四・三
深堀美智子	事	一九七〇・六～一九七五・九
秋川玲子	大	一九七〇・二～一九七三・三
渡邊紀子	事	一九七一・四～一九七一・三
中村久美子	中高	一九七一・四～一九七二・三
鈴木せつ子	大	一九七一・四～一九七二・三
岩崎啓子	大	一九七一・四～一九七三・三
斎藤廣信	大	一九七一・四～一九七三・三
武藤光枝	事	一九七一・四～一九七三・一〇
石川妙子	中高	一九七一・四～一九七四・三
菅原千恵子	大	一九七一・四～一九七四・三
落合明美	事	一九七一・四～一九七四・五
宮崎庸夫	事	一九七一・四～一九七五・一
石澤淳好	事	一九七一・四～一九七五・四

氏名	所属	在職年月
木村恵美子	幼	一九七一・四～一九七五・九
管野ノゾミ	事	一九七一・四～一九七六・三
我妻和子	中高	一九七一・四～一九七六・三
長澤京子	幼	一九七一・四～一九七六・三
澤口美恵子	大	一九七一・四～一九七六・三
野本さい子	中高	一九七一・四～一九七七・三
及川美津子	事	一九七一・四～一九七七・一二
門間陽子	中高	一九七一・四～一九八二・三
川村順子	中高	一九七一・四～一九八四・三
高橋晴子	事	一九七一・五～一九七三・八
大井美枝	事	一九七一・五～一九七三・一二
篠田勝太郎	事	一九七一・五～一九八二・三
鈴木美枝子	大	一九七一・一〇～一九七六・三
千葉淑子	事	一九七二・四～一九七三・九
板澤由美子	大	一九七二・四～一九七四・三
竹澤和子	大	一九七二・四～一九七四・三
玉木コウ子	大	一九七二・四～一九七四・三
木村すみ子	大	一九七二・四～一九七四・九
大沼日和	大	一九七二・四～一九七五・三
佐藤義子	中高	一九七二・四～一九七五・三
松平節子	大	一九七二・四～一九七五・三
大宮牧子	中高	一九七二・四～一九七五・七
鈴木由布子	大	一九七三・四～一九七五・一〇
大友善市	事	一九七三・四～一九七六・三
錦恵美子	大	一九七三・四～一九七六・三

氏名	所属	在職年月
森谷典子	中高	一九七三・四～一九七六・五
高井良隆	中高	一九七三・四～一九七六・三
高沢淑子	大	一九七三・四～一九七七・一
小熊久子	中高	一九七三・四～一九七七・三
樫村由美子	事	一九七三・四～一九七八・三
市場芳夫	大	一九七三・四～一九七九・三
吉川ちひろ	中高	一九七三・四～一九七九・三
佐々木斐子	事	一九七三・四～一九八〇・三
佐藤英子	中高	一九七三・四～一九八〇・三
庄司利信	事	一九七三・五～一九七三・七
伊藤恒夫	事	一九七三・五～一九七六・五
林陽子	事	一九七三・九～一九七三・三
佐藤ふみ	大	一九七三・一〇～一九七四・三
鈴木京子	大	一九七三・一〇～一九七四・九
岩井みどり	大	一九七三・四～一九七四・三
水戸達子	事	一九七三・四～一九七四・五
佐藤昌彦	学院長	一九七三・四～一九七四・八
砂金祥子	中高	一九七三・四～一九七五・三
富田節子	大	一九七三・四～一九七五・三
篠憲二	大	一九七三・四～一九七六・三
鈴木美津子	大	一九七三・四～一九七七・三
渡辺栄美子	大	一九七三・四～一九七八・三
伊藤りょう	事	一九七三・四～一九七八・九
松尾泰江	中高	一九七三・四～一九八一・三
宮川康子	中高	一九七三・四～一九八三・三

氏名	所属	在職年月
建部朱美	事	一九七四・四～一九七五・四
大坂まり子	事	一九七四・四～一九七五・七
市川いち子	大	一九七四・四～一九七六・三
大橋かよ子	大	一九七四・四～一九七六・三
高見洋子	大	一九七四・四～一九七六・九
高梨光	事	一九七四・四～一九七七・三
長坂正子	大	一九七四・四～一九七七・三
畠山節子	大	一九七四・四～一九七七・九
大野一枝	大	一九七四・四～一九七八・三
井出富起子	大	一九七四・四～一九七八・三
飯渕由美	大	一九七四・四～一九七八・三
吉成さつ	事	一九七四・四～一九八〇・三
熊谷まさ江	事	一九七四・四～一九八〇・三
斎藤珠江	事	一九七四・四～一九八〇・三
平塚美智子	事	一九七四・四～一九八〇・七
飯田洋子	事	一九七四・四～一九八三・三
門間恵美子	大	一九七四・一〇～一九七八・三
池田きわ子	事	一九七五・四～一九七六・九
千賀満智子	大	一九七五・四～一九七八・三
赤羽まき子	大	一九七五・四～一九七八・三
森節子	中高	一九七五・四～一九七八・三
清水二郎	学院長	一九七五・四～一九七八・九
乾正也	中高	一九七五・五～一九八三・三
安住ひろし	事	一九七五・一～一九八六・三
斎藤美保子	大	一九七六・四～一九七七・三

氏名	所属	在職年月
小倉勝男	大	一九七六・四～一九七八・三
菊地都紀子	大	一九七六・四～一九七八・三
酒井育子	事	一九七六・四～一九七八・三
高橋亮子	大	一九七六・四～一九八〇・三
相沢陽子	大	一九七六・四～一九八〇・三
沼田玲子	大	一九七六・四～一九八〇・三
本宮俊子	幼	一九七六・四～一九八一・三
横山淳子	大	一九七六・四～一九八一・三
菅原則子	大	一九七六・四～一九八一・三
松久順子	中高	一九七六・四～一九八一・三
松本玲子	大	一九七六・四～一九八二・九
菊地健子	事	一九七六・五～一九八五・二
尾形玲子	事	一九七六・六～一九八一・三
岩瀬しのぶ	中高	一九七七・四～一九七九・三
奥田妙子	大	一九七七・四～一九八〇・三
庄子愛子	事	一九七七・四～一九八〇・六
高橋道子	幼	一九七七・四～一九八〇・一〇
小野裕子	大	一九七七・四～一九八一・三
高橋聡子	大	一九七七・四～一九八一・三
土師文	大	一九七七・四～一九八一・三
小海信子	中高	一九七七・四～一九八二・三
清野早苗	大	一九七七・四～一九八二・三
鈴木裕子	事	一九七七・四～一九八二・四
岸恵子	大	一九七七・四～一九八三・三
佐藤美和子	大	一九七七・四～一九八三・三

氏名	所属	在職年月	氏名	所属	在職年月	氏名	所属	在職年月
高木正朗	大	一九七八・四～一九八一・三	相場富子	大	一九八二・四～一九八三・六			
池上良正	大	一九七八・四～一九八一・三	男澤ひろみ	幼	一九八二・四～一九八四・三			
伊藤慶子	大	一九七八・四～一九八一・三	大河内美那子	事	一九八二・四～一九八四・一一			
小林由紀子	大	一九七八・四～一九八一・四	平川新	大	一九八三・四～一九八五・四			
宮崎由美子	大	一九七八・四～一九八六・九	斎藤亮子	大	一九八三・四～一九八六・三			
遠藤さえ子	大	一九七八・一一～一九八〇・三	岩佐百合子	事	一九八三・四～一九八六・三			
岡野圭子	中高	一九七九・四～一九八二・三	後藤千珠	大	一九八三・七～一九八六・一			
小林義一	事務局長・財務理事	一九七九・八～一九八二・一三						
石川郁子	事	一九八〇・四～一九八一・三						
久米田淑子	大	一九八〇・四～一九八一・一〇						
佐藤雅子	大	一九八〇・四～一九八三・三						
片寄智子	大	一九八〇・四～一九八三・三						
鷲尾洋子	事	一九八〇・四～一九八四・三						
熊倉弘子	大	一九八〇・四～一九八四・一〇						
皆川由美	大	一九八〇・四～一九八五・三						
太田知子	事	一九八一・四～一九八三・二						
我妻典子	大	一九八一・四～一九八三・三						
福士啓子	大	一九八一・四～一九八三・三						
若生真理	幼	一九八一・四～一九八三・四						
角田真知子	大	一九八一・四～一九八四・三						
新田智子	大	一九八一・四～一九八五・三						
末光泰江	幼	一九八一・四～一九八五・三						
串間直美	大	一九八一・六～一九八二・三						
藤原徹子	大	一九八二・四～一九八三・三						

外人の部

氏名	所属	在職年月
メアリー・B・オールト	女	一八八六・九～一八八八・六
エリザベス・R・ブールボー	女	一八八六・九～一八九二・三
エマ・F・ブールボー	女	一八八八・九～一八九二・五
M・C・ハロウェル	女	一八九一・九～一八九八・七
ジャイラス・P・モール	女	一八九二・四～一八九四・八
アニー・M・モール	女	一八九二・九～一八九四・七
レナ・ズーフル	女	一八九四・九～一九〇八・七
リリー・M・ローレルボー	女	一八九七・九～一九〇〇・三
サディー・L・ワイドナー	女	一九〇〇・五～一九一三・六
J・H・デフォレスト	女	一九〇〇・九～一九〇一・六
ポール・L・ゲルハード	女	一九〇〇・九～一九〇五・六
ルシィー・M・ボーウェル	女	一九〇〇・九～一九〇八・七
P・C・パイファー	女	一九〇一・九～一九〇四・九
ミセス・ゾーグ	女	一九〇一・九～一九〇五・六
マリー・A・ゲルハード	女	一九〇六・五～一九〇九・四
ハスノハナ・ガーデナー	女	一九〇七・九～一九〇九・三
ケート・I・ハンセン	女・専・大	一九〇七・九～一九五一・一
リディア・A・リンゼイ	女・専・大	一九〇七・九～一九五一・七
ヘンリー・K・ミラー	女	一九〇八・三～一九九九・三
ジェイコブ・M・スティック	女	一九〇八・四～一九一〇・五
クララ・マッサー	女	一九〇九・九～一九一一・六
マーガレット・A・リーダー	女	一九一〇・九～一九一三・六
アンナ・G・ショルツ	専	一九一一・九～一九一三・六
マーガレット・J・リーダー	女	一九一一・九～一九一五・六
オリィ・A・ブリック	専	一九一一・九～一九二一・五
アーレン・K・ファウスト	専	一九一三・七～一九二〇・四
マーガレット・S・アンケニー	大	一九一五～一九四一 一九四七・二～一九五一・七 一九五四・五～一九五五・六
フローレンス・L・サイプル	専	一九一六・四～一九二一・三
ローラ・リンゼイ	女	一九一六・九～一九一九・三
ルイス・ボリガー	女	一九一六・九～一九二〇・一
ヘレン・A・ベーカー	女	一九一六・九～一九二五・六
イルシー・J・シーモア	女	一九一八・四～一九二〇・五
メリー・E・シュネーダー	専	一九一八・九～一九二〇・四
メリー・E・ヴォンフォルト	女	一九一九・九～一九二〇・三
ロシナ・E・ブラック	女	一九一九・九～一九二〇・五
エリザベス・C・ゼテー	専	一九二〇・九～一九二一・五
カサリン・L・ナウ	女	一九二一・一～一九二三・九
キッテー・ウェルヘルム	女	一九二一・四～一九二三・九
アーリン・デシャン	女	一九二一・九～一九二四・七
ヘレン・ゲルハード	専	一九二一・九～一九二五・八
マートル・キング	女	一九二三・九～一九三三・二
ガートルード・パンペリン	女	一九二三・九～一九二四・七
マーリー・E・ホファインズ	専	一九二三・四～一九二五・六

氏名	所属	在職年月
カザリン・B・デシャン	専	一九二四・九～一九二九・四
リディア・A・ボリガー	専	一九二四・九～一九三〇・八
エリザベス・スイス	女	一九二五・九～一九二六・九
エデス・H・ヒューシング	専	一九二六・九～一九二九・六
ウイルソン	専	一九二六・九～一九二九・六
アンネッタ・ウィンター	専	一九二七・九～一九二九・一一
ヘンリエタ・S・クック	女	一九二七・九～一九三一・七
ルーネ・E・クック	専	一九二八・九～一九三一・七
ルース・ナールミセス・ウィード	専	一九二九・四～一九三一・七
カール・D・クリーテ	専	一九三〇・五～一九四一・六
ヘレン・E・ブリムレー	女	一九三〇・九～一九三四・三
セルマ・G・グレッサー	女	一九三一・四～一九三三・一二
ヘレン・D・ハノルド	専	一九三一・四～一九三五・七
メリー・E・ホフマン	専	一九三一・四～一九三五・七

氏名	所属	在職年月
ネトケ・レーヴェ	専	一九三二・九～一九四〇・七
マテー・E・ピーターソン	専	一九三三・九～一九三八・七
エルマ・H・ゾーク	専	一九三三・四～一九三四・三
ハリエット・P・スミス	女	一九三三・四～一九三八・七
マーガレット・M・ガーマン	専	一九三四・一～一九三七・七
アンナ・M・アンケニー	女・専	一九三四・九～一九五〇・七
エラ・N・ニコデマス	女・中高	一九三四・九～一九五三・七
アリス・M・イルズレー	専	一九三五・九～一九四〇・七
アルマ・C・ネーフ	女	一九三五・九～一九四〇・七
ベス・クリーテ	専	一九三五・九～一九四一・五
マリー・ライダル	専	一九三五・一一～一九三八・七
マリオン・ブラック	女	一九三八・九～一九四一・五
マーガレット・クリーテ	専	一九三八・九～一九四一・六
エレノア・F・ポーター	女・専	一九四〇・九～一九四八・三
ロバート・ゲルハード	大	一九四七・四～一九五一・八

氏名	所属	在職年月
マリアム・ハンセン	女・専	一九四九・一～一九四九・九
エリノア・J・ジップ	中高	一九四九・一～一九五〇・七
エドナ・M・シップル	大	一九四九・四～一九六三・六
マーサ・L・ラマーズ	中高	一九四九・九～一九五一・七
オードレ・A・タッシュ	大	一九四九・九～一九五一・四
マーサ・M・レイン	中高	一九四九・九～一九五一・一〇
ガートルド・B・ホーイ	大・中高	一九四九・九～一九五八・六
ベティ・J・ホファイン	大	一九四九・一〇～一九五一・七
マッチー・M・クリンガマン	大	一九五一・九～一九五三・七
メァリーL・マーニッツ	中高	一九五一・一〇～一九五三・九
リリアン・M・ライシュ	大	一九五一・一〇～一九六三・九
ルース・F・スナイダー	大・中高	一九五二・一〇～一九七二・五
ドロシー・W・ルーブライト	大・中高	一九五三・四～一九五六・三
ジャネル・J・ランディス	大・中高	一九五三・四～一九六三・三

氏名	所属	在職年月
ジェームス・F・メルカルト	大	一九五三・四～一九五四・三
トーデス・ビーターセン	大	一九五三・五～一九五五・三
メリー・E・ウイリアムス	大	一九五三・九～一九五五・七
ビアス・A・ゲッツ	大	一九五七・七～一九五七・一〇
ジーン・S・ゲッツ	大	一九五七・七～一九五七・一〇
ポール・R・パウムガートナー	大	一九五七・九～一九五八・六
ヘレン・B・パウムガートナー	大	一九五七・九～一九五八・六
エリザベス・L・ニーハウス	中高	一九五七・一〇～一九五七・七
マジョリー・M・シップル	中高	一九五八・九～一九五九・六
エンマ・L・アーケンパック	大	一九五七・九～一九五八・九
コーネリア・R・シュレーヤー	大	一九五七・一〇～一九五七・三
アーレン・E・デシャン	大・中高	一九五七・一二～一九五八・六
ナンシー・R・ヘンリー	中高	一九五八・九～一九六〇・八
ナンシー・E・レイノルズ	大・中高	一九五八・一〇～一九六〇・九
エレノア・ハイヤー	大	一九五九・一〇～一九六一・三
ジャネット・A・ハナワー	中高	一九六〇・九～一九六一・八
エレン・A・オールリッチ	中高	一九六〇・九～一九六三・八
アレン・L・アーウイン	大	一九六一・四～一九六四・四
マリー・アーウィン	大	一九六一・四～一九六四・四
パトリシア・ランディス	中高	一九六一・一〇～一九六三・八
ポーリン・スターン	中高	一九六三・八～一九六五・三
ゴールディー・M・ヴィアニー	中高	一九六三・八～一九六四・七
パトリシア・A・フラナガン	中高	一九六六・四～一九六七・三
ジャネット・アンソニー	中高	一九六五・四～一九六七・八
ルーリン・V・シンプソン	中高	一九六七・九～一九六九・三
ジャネット・マクヴィカー	中高	一九六九・四～一九七一・三
ハインツ・ファート	大	一九六九・四～一九七四・七
マートル・バートン	中高	一九七〇・四～一九七〇・一三
チャールズ・バプキンスン	中高	一九七一・四～一九七二・三
ニナ・バプキンスン	中高	一九七一・四～一九七三・三
キャサリン・ムーア	中高	一九七一・四～一九七三・三
カリン・グランバーグ	中高	一九七三・四～一九七四・八
デーヴィット・ヴァージン	中高	一九七三・四～一九七五・三
レスリー・ヴァージン	中高	一九七三・四～一九七五・三
ブルース・ウィルカーソン	中高	一九七四・八～一九七七・六
ルース・ヴァージン	中高	一九七六・九～一九七八・八
アリスン・M・ルー	中高	一九七八・一〇～一九八一・三
ルシュール・ホール	中高	一九七七・六～一九八〇・三

現学校役員

（一九八七年一月末日現在）

学校法人宮城学院役員及び評議員

○役員（理事定員十七名、現員十五名。監事二名）

理　事　佐藤　利吉、早坂　禮吾、山形　孝夫
大沼　　隆、古賀　信夫、田中　弘志
長谷川英敏、伊藤　久子、林　松子
ウイリアム・S・カンディフ、
マーガレット・A・ガーナー、
岩井　淳一、山室　章、山本　尚忠、
末包　一夫（「寄附行為」条項順）

監　事　竹井　一夫、小林　義一（就任順）

○評議員（定員三十五名、現員三十四名）

早坂　禮吾、山形　孝夫、大沼　隆、
蒲生　芳郎、黒滝　正昭、鈴木　紀子、
一戸富士雄、鈴谷　輝秋、大坂　欣哉、
水野　幸子、伊勢　文夫、内海　勝、
滝口　篤子、泉　貞子、久保　和子、
高橋　とき、瀬戸　堯子、福井　喜江、
庄子　泰子、岩渕　淑子、
マーガレット・A・ガーナー
ウイリアム・S・カンディフ、
ジャネル・J・ランディス、
末包　一夫、出村　彰、山本　尚忠、
高橋　富雄、柏山恵智子、阿部富士雄、
石井　昌光、森下金二郎、村上　喜見、
岩井　陽子、小岩忠一郎（同上）

学校役職者

○学校法人宮城学院

理事長　佐藤　利吉
学院長　早坂　禮吾

○宮城学院女子大学
女子短期大学

学　長　山形　孝夫
教務部長　遠藤　一
学生部長　蒲生　芳郎

厚生部長	青柳照夫
宗教部長	ウイリアム・S・カンディフ
財政部長	吉田清一郎
図書館長	田中隆昭
英文学科長	野坂東作
日本文学科長	安部元雄
音楽科長	山内忠
家政学科長	藤波伊三雄
一般教育科長	及川武良夫
家政科長	竹久文之
教養科長	多々良翼
保育科長	鈴木登
キリスト教文化研究所長	今村忠純
生活科学研究所長	伊達洋司

○宮城学院中学校高等学校

校長	大沼隆
中学教頭	大坂欣哉
高校教頭	田中弘志

○宮城学院事務局

事務局長	長谷川英敏
法人室長（兼務）	長谷川英敏
総務課長（兼務）	高橋正宏
会計課長	伊勢文夫
管財課長	西渕嗣郎
大学事務長	内海勝
大学庶務課長	西渕嗣郎
教務課長（兼務）	西渕嗣郎
入試事務室長（兼務）	桜井信久
学生生活課長	神館雅子
大学図書館事務室長	菊地チエ子
大学保健管理センター室長	岩渕淑子
中高事務長	

現任教職員名簿（一九八七年一月現在）

◎大学・短期大学

○名誉教授

石井昌光
森下金二郎
伊藤久子
岡村直子

○英文学科

教授　マーガレット・アン・ガーナー　英米文学（UCBWM教育宣教師）
助教授　山本淳二　英語学
教授　野坂東作　英米文学
教授　本田康典　英米文学
助教授　飯塚久栄　英米文学
助教授　両角千江子　英米文学
助教授　礒崎邦光　英語学
講師　遊佐典昭　英語学
契約助教授　アルヴェン・レナード・ロビンソン　比較文化論
契約助教授　キャサリン・ジーン・オーラルフォースター
副手　鈴木紀子
副手　西條アヤ子
副手　阿部ひとみ

○日本文学科

教授　蒲生芳郎　近代文学
教授　佐佐木忠慧　和歌文学
教授　遠藤好英　国語学
教授　田中隆昭　平安文学
教授　安部元雄　中世文学
助教授　澤井清　図書館学
助教授　田中和夫　中国文学
助教授　佐藤伸宏　近・現代詩
副手　高瀬たい子
副手　大友幸恵

○音楽科

教授　千田ふみ　声楽
教授　ウイリアム・スタンレー・カンディフ　ピアノ
教授　鈴木知　声楽
教授　山内忠　理論・作曲
助教授　長尾愛作　ピアノ
助教授　遠藤安彦　ソルフェージュ
助教授　塚田鞆子　音楽学
助教授　浅野繁　ピアノ
副手　紺野聖子

○家政学科・家政科

助教授　塩谷節子　被服構成学
助教授　鈴木愛子　病態栄養学
教授　遠藤一　栄養学
教授　上崎武男　食品化学
助教授　伊藤静子　公衆栄養学
教授　伊達洋司　食品衛生学
教授　吉田清一郎　被服材料学
助教授　木須靖子　食品加工学
助教授　藤波伊三雄　住居学
教授　吉岡倭子　食品化学
教授　竹久文之　栄養生理学
教授　後藤久太郎　住居学
助教授　上田伸男　給食管理学
助教授　菅谷よし子　家族社会学
講師　吉村佳子　被服学
助教授　松原豊彦　家庭経済学
助教授　星祐二　調理学
副手　小沢正子
副手　松井みき子
副手　星清子
副手　長田可奈
副手　針生和子
副手　佐々木真弓

副手　早坂浩見
副手　浅野美代子
副手　朝野嘉名芽
副手　鈴木由香里

○一般教育科

教授　松崎粲　化学
教授　佐伯晴郎　宗教学（日本基督教団教務教師）
教授　青柳照夫　保健体育
助教授　及川武良夫　生物学
教授　長谷川精一　社会学
助教授　関宮子　英語
助教授　田中進　教育学
教授　黒滝正昭　経済学
助教授　三浦武人　哲学
助教授　小幡忠夫　英語
助教授　伊沢佑子　英語
講師　岩川亮　フランス語
助教授　伊藤一義　法学
教授　阿部隆　地理学
助教授　白木悦子　体育実技
助教授　大島衣　ドイツ語
助教授　高田紀代志　科学概論
助教授　森雅彦　西洋美術史
助教授　菊池勇夫　日本史学
助教授　佐々木隆之　心理学
助手　工藤敏巳　体育実技

副手　遠藤周子
副手　大塚純子
副手　升沢京子
副手　渡辺裕子

○教養科

教授　山形孝夫　宗教史（日本基督教団教務教師）
助教授　古賀信夫　美学
教授　多々良翼　社会学
助教授　小野寺凡　日本文学
教授　工藤雅樹　考古学
教授　高橋渉　人間学
教授　今村忠純　日本文学
助教授　田中禱子　西洋史学
教授　犬飼公之　日本文学
副手　村田洋子
副手　佐藤友子

○保育科

助教授　吉田栄　児童福祉
教授　内堀玉男　教育学
教授　菊地明子　音楽
教授　鈴木登　図画工作
講師　木越久子　音楽
助教授　古田倭文男　教育心理学
助教授　畑山みさ子　臨床心理学
副手　木幡智佳子
副手　大槻真奈美

○基督教文化研究所

副手　鈴木三千代

○生活科学研究所

副手　駒井弘子

○教職センター

教授（契約）　阿部茂
○学科増設準備委員会
教授（契約）　矢嶋文夫

○短期大学附属幼稚園

園長　内堀玉男
教諭　大場勝子
教諭　佐藤正枝
教諭　色川幸子
教諭　松川紀美恵
教諭　西富美枝
教諭　太田光洋

◎中学校・高等学校

教諭　大沼隆聖書（日本基督教団教務教師）
教諭　大坂欣哉　社会
教諭　相田明子　理科
教諭　永嶋宏寿　保健体育
教諭　横尾寛　社会
教諭　高沢広子　国語

教諭　本田順子　数学
教諭　庄子安　英語
教諭　青田知子　音楽
教諭　岩渕秀子　保健体育
教諭　伊藤香美子　聖書
教諭　今野勝弥　保健体育
教諭　菊池順子　国語
教諭　小川里江子　社会
教諭　早坂直樹　数学
教諭　畠山修一　理科
教諭　星宮順子　英語
教諭　石川洋子　音楽
教諭　菅井加代子　家庭
教諭　工藤知道　美術
教諭　細川純子　国語
教諭　水原清　社会
教諭　八巻寛子　数学
教諭　八巻富喜子　理科
教諭　斎藤尚美　英語
教諭　安井敦子　家庭
契約教師　ベス・J・ワイシガー（ミッショナリー・アソシエート）　英語
契約教師　キャロル・J・スミス（同右）　英語

教諭　田中弘志　英語
教諭　宮東彦太　数学
教諭　鈴谷輝秋　社会
教諭　菅沼省三　社会
教諭　結城斐之助　数学
教諭　長井祥子　国語
教諭　伊藤啓次　国語
教諭　三浦捷子　社会
教諭　村田耕造　社会
教諭　塚本恭子　数学
教諭　伊東静夫　理科
教諭　國友裕子　理科
教諭　岡部誠一　英語
教諭　白鳥幸子　英語
教諭　清野貞代　音楽
教諭　斎藤ノリ子　保健体育
教諭　朴沢道子　家庭
教諭　福井喜江　国語
教諭　阿部洋子　国語
教諭　永沢汪恭　社会
教諭　石田さだ子　社会
教諭　後藤文男　数学
教諭　遠藤光広　理科
教諭　熊谷恵　理科
教諭　庄子泰子　英語
教諭　星野恵久子　音楽
教諭　若月敏子　美術

教諭　平林健　保健体育
教諭　鈴木理恵　家庭
教諭　松尾光章　理科
教諭　麻生丈士　国語
教諭　松野栄利子　国語
教諭　佐藤里美　国語
教諭　奥田美年子　社会
教諭　斎藤佐四郎　数学
教諭　丸岡真　理科
教諭　今沢祐子　英語
教諭　千葉智子　英語
教諭　日野方子　音楽
教諭　佐々木典彦　保健体育
教諭　一戸富士雄　社会
養護教諭　三浦もみぢ
実習助手　二宮裕子

◎職員

書記　長谷川英敏　事務局長・法人室（兼務）・総務課（兼務）
書記　星涼　資料室　兼百年史編纂室
書記　桜庭照子　法人室
書記　阿部キミ子　法人室
書記　千葉義雄　法人室
電話交換員　野口安伎子　総務課

書記	菊地 須恵子	総務課		
書記	相澤 幸子	総務課		
書記	鈴木 正昭	総務課		
書記	大河内 真	総務課		
書記	高橋 正宏	会計課		
書記	水野 幸子	会計課		
書記	高沢 孝子	会計課		
書記	斎藤 和子	会計課		
書記	宇津井 孝義	会計課		
書記	鹿野 みち子	会計課		
書記	斎藤 由紀子	会計課		
書記	山田 義章	会計課		
書記	伊勢 文夫	管財課		
書記兼自動車運転手	庄司 安雄	管財課		
書記	守 正喜	管財課		
書記	佐藤 悦子	管財課		
書記	柳澤 良彰	管財課		
電気主任技術者	大泉 源一	電気主任技術者		
書記	西渕 嗣郎	大学事務長・教務課（兼務）・入試事務室（兼務）・学科増設準備室（兼務）		
書記	内海 勝	大学庶務課・学科増設準備室（兼務）		
書記	坂井 美智子	大学庶務課		

書記	相田 典子	大学庶務課		
書記	石垣 真人	大学庶務課		
書記	千葉 澄子	教務課		
書記	渡辺 道子	教務課		
書記	千葉 榮治	教務課		
書記	千葉 きえ子	教務課		
書記	後藤 幾子	教務課		
書記	時田 恵子	教務課		
書記	吉田 昭子	入試事務室		
書記	高橋 宏人	入試事務室		
書記	残間 雅敏	入試事務室		
書記	桜井 信久	学生生活課		
書記	高橋 芳人	学生生活課		
書記	太田 富美子	学生生活課		
司書	神館 雅子	大学図書館事務室		
司書	斎藤 松枝	大学図書館事務室		
司書	小野 恵子	大学図書館事務室		
司書	本田 あかね	大学図書館事務室		
司書	大坂 田茂子	大学図書館事務室		
司書	八巻 仁一	大学図書館事務室		
司書	鈴木 明子	大学図書館事務室		
司書	佐藤 由紀恵	大学図書館事務室		
養護教諭	菊地 チエ子	保健管理センター		
書記	菊池 睦子	保健管理センター		
書記	浅野 靖子	幼稚園事務室		
書記	福山 昌利	百周年記念事業委員会本部室		

書記	小高 清輝	学科増設準備室		
書記	岩渕 淑子	中高事務室		
書記	藤沢 やす子	中高事務室		
栄養士	森本 いく子	中高事務室		
書記	森 治子	中高事務室		
書記	島貫 孝雄	中高事務室		
書記	尾野 みつ江	中高事務室		
書記	津田 浩之	中高事務室		
書記	守 めぐみ	中高事務室		
司書	三浦 まさ子	中高図書室		
司書	一条 孝子	中高図書室		
書記	菊地 ひろみ	中高保健室		
業務員	多田 稔	業務員室		
技能員	紺野 長一郎	業務員室		
業務員	永野 紀美子	業務員室		
業務員	五十嵐 直	業務員室		
業務員	伊藤 きくを	業務員室		
技能員	小川 秀男	業務員室		
技能員	佐藤 巌	業務員室		
技能員	阿部 英治	業務員室		
業務員	高橋 恵子	業務員室		
業務員	河野 あさの	業務員室		
業務員	多田 ハルコ	業務員室		
運転業務員	安斎 小右エ門	業務員室		
運転業務員	阿部 文十郎	業務員室		

運転業務員　永瀬　栄　業務員室
運転業務員　嶺岸　儀三郎　業務員室
業務員　清水　幸子　業務員室
業務員　武藤　たい子　業務員室
業務員　太田　せい子　業務員室
業務員　北條　祐子　業務員室
業務員　佐々木　うた　中高業務員室
業務員　千葉　みや子　中高業務員室

◎米ケ袋大学寮

顧問　南條　和子
寮監　安住　ひろし
副寮監　斎藤　知子
栄養士　浅田　正子
業務員　前田　ミヨシ

◎橄欖寮

寮監　藤本　和子
副寮監　大沼　祐子

◎中高寮

寮監　鴇田　久子
副寮監　石井　くに子

◎校　医（委嘱）

大学・短大学校医　三品　房子
中学・高校学校医　桜田　俊郎
中学・高校学校歯科医　米田　栄吉
中学・高校学校薬剤師　安斎　文雄
学校医　原田　伸正
幼稚園医　大越　博子

◎百年史編纂室（委嘱）

渡邉　弘道

◎音楽科附属音楽教室

五十嵐　真由美

◎宮城学院同窓会

会長　伊藤　久子
副会長　林　松子
副会長　福井　喜江
佐藤　尚子

◎大学後援会

会長　小岩　忠一郎
副会長　井ヶ田　徳治
副会長　高橋　富雄
監事　岩井　淳一
監事　丸谷　慶二郎

◎中高父母教師会

会長　津國　惣助
副会長　野田　一郎
副会長　寺崎　泰子
監事　中塚　洋美
監事　鈴木　祐太郎

◎幼稚園PTA

会長　大友　裕子
副会長　三浦　知子
副会長　岸　純子

（以上一九八六年度教職員名簿による）

土地・建物

○桜ケ丘校地
地　番　仙台市桜ヶ丘九丁目一番地・他
土地面積　一九一、六四一・七四五㎡
建物面積　五六、八九三・二三　㎡

○米ケ袋大学寮
地　番　仙台市米ヶ袋二丁目三一三番地・他
土地面積　一、三二六・七九　㎡
建物面積　二、一一六・七五　㎡

○大学橄欖寮
地　番　泉市長命ヶ丘三丁目一〇四番地・他
土地面積　三、三〇五・七九　㎡
建物面積　一、九三五　㎡

○七ケ浜実習地
地　番　宮城郡七ヶ浜町吉田浜字沢尻五六番地・他
土地面積　五、二九九　㎡

○軽井沢山荘
地　番　長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢林ノ根一〇〇四番地・他
土地面積　四、六四八・〇三　㎡
建物面積　二六〇・八二　㎡

略年表

一七四七（延享四）年
○「北米合衆国ドイツ改革派教会（のちの合衆国改革派教会）」創立

一八一八（文化十五・文政元）
・イギリス船浦賀に来航

一八三七（天保八）年
・モリソン号事件

一八三八（天保九）年
○「北米合衆国ドイツ改革派教会（合衆国改革派教会）」、外国伝道局を創設

一八四一（天保十二）年
○イギリススコットランドエディンバラ市に「エディンバラ外国医療援助会」（一八四三年に「エディンバラ医療伝道会」と改称）創立

一八四六（弘化三）年
・万国福音同盟会ロンドンで結成

一八四八（弘化五・嘉永元）年
○一月二十二日、T・A・パーム、父の伝道地セイロン（現スリランカ）のコロンボに生まれる

一八五一（嘉永四）年
○十二月十六日、橋本熊三郎（のちの押川方義）、伊予国松山藩久松侯藩士橋本宅次昌之の三男として生まれる（一八四九年嘉永二年の説もある）

一八五三（嘉永六）年
・アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー浦賀に来航、入港中日本国領海内におけるプロテスタント最初の礼拝を行なう
・幕府、ペリーと「日米和親条約」を締結調印、下田・箱館二港を開く

一八五四（嘉永七・安政元）年
・アメリカ総領事ハリス下田に着任し、玉泉寺を領事館とする

一八五六（安政三）年

一八五七（安政四）年
○橋本龍三郎、押川方至作右衛門の養子となり押川方義となのる
・ハリス、川崎の本陣で日本国土内最初のプロテスタント礼拝

一八五八（安政五）年
○吉田亀太郎、陸中国花巻に生まれる
・幕府、神奈川でハリスと「日米修好通商条約」並びに「貿易章程」を締結調印、この際ハリスは日本在留アメリカ人の信仰行為の自由、礼拝所建立とその保護並びに踏み絵の廃止を要求し、幕府これを承認
・安政の大獄

一八五九（安政六）年
・キリスト教宣教師として、「米国監督教会」のJ・リギンズ、C・M・ウィリアムズ、「米国長老教会」のJ・C・ヘボン、「米国改革派教会」のS・R・ブラウン、D・B・シモンズ、G・H・F・フルベッキ来日
・幕府、神奈川・長崎・箱館・新潟・兵庫を開港し、下田港を閉鎖

一八六〇（安政七・万延元）年
・横浜在住宣教師及び外国人ら宣教師宅で初週祈禱会を開く
・桜田門外の変

一八六一（万延二・文久元）年
○「米国改革派教会」のJ・H・バラ来日
・アメリカ南北戦争（～一八六五年）

一八六二（文久二）年
・生麦事件
・幕府、横浜運上所で横浜英学所を開校、ヘボン・バラ・ブラウンら教鞭をとる

一八六三（文久三）年
・「米国長老教会」のD・タムソン来日
・リンカーンアメリカ大統領、奴隷解放宣言

一八六四（文久四・元治元）年
○幕府はS・R・ブラウンとJ・H・バラに横浜居留地一六七番を外国人礼拝所建築敷地として下附
・第一回長州征伐

・矢野元隆、バラより受洗（日本最初のプロテスタント信者）
・新島襄、国禁をおかして箱館より国外へ脱出
・ヘボン会堂で日本最初の日曜学校が開かれる

一八六五（元治二・慶応元）年
・リンカーン大統領暗殺

一八六六（慶応二）年
○「北米合衆国ドイツ改革派教会（合衆国改革派教会）」独自の外国伝道開始の方針決定
・第二回長州征伐
・福沢諭吉『西洋事情』発刊

一八六七（慶応三）年
・ヘボン著『和英語林集成』上海で印刷完了
・大政奉還

一八六八（慶応四・明治元）年
○押川方義、押川方至の娘常子と結婚
・明治維新
・江戸を東京と称す
・太政官布告で切支丹禁制の高札全国に立てられる

一八六九（明治二）年
○押川、松山藩の選抜により上京し、開成所（大学南校）に入学
○押川の長女シゲ生まれ夭折
・「米国改革派教会」のメアリー・E・キダー、S・R・ブラウンと共に来日
・版籍奉還
・明治新政府、東京の築地に外国人居留地を設く

一八七〇（明治三）年
○「貢進生」の制度が布かれ、押川、貢進生となる（翌年制度廃止）
○吉田亀太郎、両親と共に石巻に移り住む
・明治新政府、大学校を「大学」、開成学校を「大学南校」、医学校を「大学東校」と改称す

一八七一（明治四）年
○押川、横浜に移る

○J・H・バラ、横浜居留地一六七番の小会堂で押川方義、本多庸一、植村正久ら青年達を教える
・廃藩置県
・政府、岩倉具視らを欧米へ派遣（津田梅子ら少女五名、アメリカ留学を命ぜらる）

一八七二（明治五）年

○陰暦一月一日、（陽暦二月九日）、日本人による最初の祈禱会がバラの指導のもとに始まる
○二月二日（陽暦三月十日）の日曜日、押川方義らバラ塾の青年中九名バラから受洗、他二名を加えた十一名により我国最初のプロテスタント教会「横浜公会（日本基督公会）」創立、バラ仮牧師となる
○横浜バンド成立
・太陽暦採用

一八七三（明治六）年

○吉田亀太郎、上京し築地新港町の化学研究所で研究に従事す
○四月十五日、「合衆国改革派教会」日本伝道方針決定
○S・R・ブラウン、横浜山手二一一番にブラウン塾開設
○押川方義、植村正久、井深梶之助、藤生金六、山本秀煌、雨森信成などブラウン塾生となる
○「エディンバラ医療伝道会」日本伝道決定、最初の宣教医師としてパームを選任
・太政官布告で切支丹禁制の高札撤廃さる
・井深梶之助、S・R・ブラウンより受洗
・植村正久、J・H・バラより受洗
・「東京日本基督公会（のちの新栄教会）」創立
・カロゾルスら「日本長老公会」創立

一八七四（明治七）年

○五月十五日、T・A・パーム夫妻来日
・「横浜長老公会（のちの指路教会）」創立
・板垣退助ら、「民選議院設立建白書」提出
・「明六雑誌」創刊

一八七五（明治八）年

○一月十九日にパーム夫人メアリー、一月二十八日に女児が逝去
○四月九日、パーム新潟伝道を決意し東京を発ち、四月十五日、新潟到着
○パーム、横浜のブラウンに協力者派遣を依頼、（押川これに応ず）

○吉田、新潟へ向い、十二月中旬中條町到着
○十二月二十一日、横浜公会（横浜海岸教会）長老押川、横浜を出発、新潟のバームのもとへ向う

一八七六（明治九）年

・同志社英学校創立
・「七一雑報」創刊
○一月三日、押川、新潟到着
○「合衆国改革派教会」、「米国改革派教会」と提携して外国伝道を行なうことを決定

一八七七（明治十）年

・熊本バンド成立
・札幌農学校創立
・太政官布告により、日曜日をもって休日とする
○十月三日「日本基督公会」「日本長老公会」合同により「日本基督一致教会」組織
○吉田、バーム並びに押川による伝道説教で福音に接す

一八七八（明治十一）年

・東京一致神学校創立
・札幌バンド成立
○九月三十日、「合衆国改革派教会」日本宣教事業に着手のためA・D・グリングを日本派遣最初の宣教師として選任
○十一月五日、吉田、新潟でバームから受洗

一八七九（明治十二）年

・第一回全国基督教徒大親睦会
○六月一日、グリング夫妻横浜着、「合衆国改革派教会在日宣教師社団」創立
○吉田亀太郎、東北地方各地を巡回し、伝道の必要性をバームと押川に報告

一八八〇（明治十三）年

・学制を廃し、教育令を制定
・新約聖書全巻和訳完成
○押川と吉田、東北地方を伝道視察
○八月七日、新潟大火
○九月六日、押川、吉田を伴い、東北伝道着手のため新潟出発（九月二十六日）、仙台に到着す
○十月十日、押川、北三番丁木町通角に基督教講義所開設

一八八一（明治十四）年
○グリング校閲・木曽五郎訳『基督教・海徳山問答』（ハイデルベルク・カテキズム）出版
○グリング夫人ハティー、女学校創設の必要を外国伝道局に訴え始める
・「六合雑誌」創刊

一八八二（明治十五）年
○五月一日、仙台教会（現日本基督教団仙台東一番丁教会）創立
○押川の次女克子病歿（三才）

一八八三（明治十六）年
○六月一日、グリング伝道開始、六月四日「合衆国改革派教会」の日本における最初の聖日礼拝
○六月十八日、グリング日曜学校開校、「合衆国改革派教会」の日本における最初の日曜学校
○九月二十三日、J・P・モール夫妻横浜着、十月十五日より築地において伝道開始
○十月、パーム婦英の途につく
・鹿鳴館開館

一八八四（明治十七）年
○グリング、『ハイデルベルク・カテキズム』の口語訳完成
○五月十一日、グリングによって「元大工町教会（のちの神田教会）」創立

一八八五（明治十八）年
○モールによって「番町教会」創立
○四月二十一日、W・E・ホーイ、E・R・ブールボー、M・B・オールト日本派遣宣教師に選任さる
○十二月一日、W・E・ホーイ横浜着
○十二月四日、押川、ホーイと会見し、仙台に女学校創設の必要を説く
○ホーイ、グリングと共に仙台を視察す
○十二月十三～十七日、グリング、モール、ホーイら種々相談の結果ホーイの仙台赴任を決定
・「女学雑誌」創刊
・明治女学校創立

一八八六（明治十九）年
○一月十三日、ホーイ仙台着任
○五月十五日、仙台神学校開校、初代校長押川方義、副校長W・E・ホーイ
○七月二日、ブールボー並びにオールト横浜到着
○七月十六日、ブールボー並びにオールト仙台着任

○九月十八日、「宮城女学校」（予科三年、本科四年）設置認可（以後「創立記念日」とする）、押川方義校主に就任、初代校長E・R・ブールボー、教員はブールボー、オールト、稲垣ぎん、曲直瀬雪江
○九月二十四日、仙台区東二番丁五一番地、田辺繁久別邸にて十名の生徒で授業開始
・中学校令公布
・宮城中会組織
・基督教婦人矯風会結成
・宮城英学校（私立東華学校）創立
・現広島女学院、現弘前学院、現松山東雲学園、現捜真女学校創立
・東北本線上野塩釜間開通

一八八七（明治二十）年

○四月、校地二千四百余坪を仙台区東三番丁一六二番地～一六九番地に購入
○九月五日、第二年度開始
○十二月二十一日、D・B・シュネーダー夫妻来日
・第二高等中学校（のちの旧制第二高等学校）創立

一八八八（明治二十一）年

○四月、W・E・ホーイ、D・B・シュネーダー、E・R・ブールボー校舎建設委員となる
○五月、校舎（二階は寄宿舎）建築起工
○九月、早坂哲郎就任
・市町村制公布
・国歌「君が代」制定

一八八九（明治二十二）年

○三月、押川方義、欧米視察に出発、首藤陸三、校主に就任
○校舎建築がほぼ完成した四月一日、田辺邸より移転し、四月十五日より授業開始
○七月五日、校舎献堂式
・大日本帝国憲法発布、皇室典範制定
・第一回夏期学校、同志社で開催
・仙台区に市制を施行す
・広瀬川洪水大橋流出

一八九〇（明治二十三）年

○三月、「宮城女学校規則」の変更認可

○九月、文学会創設、雑誌「宮城野」を発行する
・教育勅語発布
・日本基督一致教会、「日本基督教会」と改称

一八九一（明治二十四）年
・仙台神学校、「東北学院」と改称

一八九二（明治二十五）年
○一月二十一日、「いわゆるストライキ」事件により生徒五名退学
・私立東華学校廃止
・現尚絅女学院創立

一八九三（明治二十六）年
○四月、「宮城女学校規則更正」認可
○六月二十六日、ブールボ校長送別会
○六月二十九日、第一回卒業式（卒業生四名）
○七月九日、モール仙台帰着
○八月二十六日、在日宣教師社団（ジャパン・ミッション）に「実行委員会」創設
○九月、J・P・モール、第二代校長に就任
○十月十八日、橋本経光、校主に就任
・「文学界」創刊
・文部省訓令第八号「女子教育ニ関スル件」公布

一八九四（明治二十七）年
○九月二日、L・ズーフル来日、第三代校長に就任
・高等学校令公布
・日清戦争
・東北学院に労働会設立
・押川方義「大日本海外教育会」をおこす

一八九五（明治二十八）年
○六月、田村たみ子、初代同窓会長に就任
・高等女学校規程公布
・下関条約調印
・三国干渉

・救世軍、伝道開始
・コレラ流行
・仙台市に電燈がつく

一八九六（明治二十九）年

○十一月二十日、創立十周年記念式典
・仙台市に初めて幼稚園設立
・島崎藤村、東北学院に赴任
・三陸大津波

一八九七（明治三十）年

○九月十四日、バイブルハウス竣工
・金本位制確立
・日本学生ＹＭＣＡ同盟が成立
・現宮城県第一女子高等学校創立
・「河北新報」創刊
・『若菜集』（島崎藤村）発刊

一八九八（明治三十一）年

○十一月二十六日、本科を五年に延長

一八九九（明治三十二）年

○九月一日、早坂哲郎、幹事に就任
○十月九日、ズーフル、校主となる件認可され初めて外人校主制実施
・高等女学校令公布
・私立学校令公布
・文部省訓令第十二号公布
・外国人内地雑居許可
・『天地有情』（土井晩翠）発刊

一九〇〇（明治三十三）年

○一年制聖書専攻科（特別聖書科）設置
○六月十一日、Ｓ・Ｌ・ワイドナー来日

○九月二日、A・K・ファウスト夫妻来日
○十二月、ズーフル校長、休暇帰米のため、S・L・ワイドナー校長代理（明治三十五年八月まで）
・尋常小学校を四年制に統一
・現津田塾大学創立
・仙台市に電話開通

一九〇一（明治三十四）年

○三月三十日、第九回卒業式（初めて三月に行なわれた卒業式）
○四月、第十六年度開始、学年開始が初めて四月になる
○五月十四日、菊池大麓東京帝国大学総長来校視察す
・押川方義東北学院長辞任し、東北学院長にD・B・シュネーダー就任
・高等女学校令施行規則公布

一九〇二（明治三十五）年

○三月八日、浴場より出火、校舎全焼市内片平丁六九番地、寺木氏所有家屋を仮校舎とし移転
○四月二十六日、第十回卒業式（於東北学院講堂）
○八月二十六日、ズーフル校長横浜着帰任
○十二月、市内東二番丁一三五番地～一三八番地に校地一千四百余坪を購入
・日英同盟調印
・教科書疑獄事件

一九〇三（明治三十六）年

○三月二十八日、第十一回卒業式（於仮校舎）
○四～六月、新校舎完成まで授業休止
○八月、寄宿舎建築完成、九月十一日より寄宿舎を仮校舎として授業開始、片平丁仮校舎から移転
○九月十日、新校舎の定礎式挙行
・専門学校令公布
・藤村操投身自殺

一九〇四（明治三十七）年

○六月一日、「在日宣教師社団」創立満二十五年記念日
○六月二日、新校舎（「クリスティーン・エリザベス・ヴォルマー・ファウスト・メモリアル・ホール」、いわゆる「第一校舎」）献堂式
○七月二日、第十二回卒業式（新校舎における最初の卒業式）

・日露戦争
・東北学院専門部創設

一九〇五（明治三十八）年

○四月一日、第十三回卒業式
○五月二十六日、久保田文部大臣来校視察
・ポーツマス条約調印
・日本基督教女子青年会（ＹＷＣＡ）創立

一九〇六（明治三十九）年

○三月十六日、萬国基督教女子青年会本部マクドナルド女史来仙を機に宮城女学校基督教女子青年会創立
○十月、原田ことち就任

一九〇七（明治四十）年

○一月八日、ワイドナー休暇帰米のため横浜出港
○六月、「宮城女学校運営委員会」設置
○九月、Ｋ・Ｉ・ハンセン、Ｌ・Ａ・リンゼイ来日
○十月、早坂哲郎幹事、外国伝道局の招聘により二ヶ年の予定で研究視察のため渡米
・小学校令改正、義務教育六年制に延長
・東北帝国大学創立
・『南小泉村』（真山青果）発刊

一九〇八（明治四十一）年

○一月、校地の西南隣接地、市内東二番丁一三九番地～一四〇番地に六百余坪購入
○四月六日、ズーフル帰国のため仙台発
○四月七日、Ｈ・Ｋ・ミラー、第四代校長に就任
○九月より授業料一ヵ月予科六十銭・本科一円二十銭をそれぞれ五十銭・一円に改訂
・経済恐慌
・戊申詔書発布

一九〇九（明治四十二）年

○三月、「宮城野」に代り「萩の下露」創刊
○八月二十二日、Ｓ・Ｌ・ワイドナー、再来日、九月十三日第五代校長に就任
○九月十八日、Ｓ・Ｌ・ワイドナー設立者に就任
○十二月十八日、早坂幹事、研究視察を終え帰仙

・日本宣教五十年記念会
・仙台広瀬橋竣工

一九一〇（明治四十三）年

○二月二十四日、校旗制定を決議
○三月、奥山ます、第二代同窓会長に就任
○四月二日、第十八回卒業式の日、教職員・在校生一同より校旗の寄贈、卒業生一同より宮城女学校基本金のため金二百円の寄贈、なお卒業式には当時来仙中の外国伝道局総幹事バーソロミュー博士夫妻臨席
○八月十二日、学則改正により予科を廃し本科を「高等女学科」（五年制）と改称
○十二月二十一日、文部大臣より、「明治四十四年三月以後の卒業者は『高等女学校令』による高等女学校卒業者と同等以上の学力を有すると検定する」との通達を受く

・大逆事件
・韓国併合
・高等女学校令改正
・リパイバルおこる

一九一一（明治四十四）年

○三月二十九日、第十九回卒業式（卒業生二十五名）並びに聖書科第一回卒業式（卒業生八名）
○四月十日、第二十六年度授業開始、本年度より「高等女学校令」による女学校として発足
○四月十三日、文部大臣より、明治四十三年以前の卒業者全員も明治四十四年三月以後の卒業者と同等の学力ある者と認める旨の通達あり
○十月、校地六百七十坪を東二番丁一三四番地に購入
○十月二十五日、創立満二十五年紀念祝賀式
○同日『私立宮城女学校一覧』発刊

・「青踏」創刊
・日本基督教同盟成立

一九一二（明治四十五・大正元）年

○四月、三年制家政専攻科を設置
○校地東二番丁一三二番地～一三三番地に購入

・明治天皇崩御
・乃木希典夫妻殉死

一九一三（大正二）年

○四月、三年制英文専攻科設置
○七月、A・K・ファウスト、第六代校長に就任
○十月十日、早坂哲郎幹事在職二十五周年記念祝賀会
○十一月二十五日、幼稚園保姆無試験検定認可
・宮城県立女子師範学校創立
・文部省、婦人雑誌に多い「反良妻賢母主義的婦人論」の取締りを決定

一九一四（大正三）年

○十月二十日、理事会組織発足、「寄附行為」制定
・第一次世界大戦
・対独宣戦布告
・「三太郎の日記」（阿部次郎）発刊
・シーメンス事件

一九一五（大正四）年

○三月、家政科第一回卒業式（卒業生三名）
・大戦景気
・市内霊屋橋、愛宕橋竣工

一九一六（大正五）年

○家政専攻科二年に短縮
○四月、三年制音楽専攻科設置
○四月、二年制聖書専攻科設置
・吉野作造、民本主義を唱える
・「東北学院時報」創刊

一九一七（大正六）年

○三月、音楽科第一回卒業式（卒業生二名）
○十一月十九日、第二校舎定礎式執行
・「主婦の友」創刊
・ロシア革命
・「新約聖書」改訳完成

一九一八（大正七）年

○一月二十六日、聖書専攻科増設の件認可
○三月、英文科第一回卒業式（卒業生二名）
○三月、佐藤まさ、第三代同窓会長に就任
○五月二十八日、第二校舎献堂式
○十月十五日、「校報」創刊
○この頃の授業料一カ月、高等女学校二円、専攻科二円五十銭
・第一次世界大戦終結
・シベリア出兵
・米騒動
・スペイン風邪流行
・現東京女子大学創立
・現宮城県第二女子高等学校創立
・大学令、高等学校令公布

一九一九（大正八）年

○一月二十八日、専攻科に予科選科を設置の件認可
○三月、小野寺みきよ、第四代同窓会長に就任
・仙台大火（本校は類焼を免かる）
・ヴェルサイユ条約調印

一九二〇（大正九）年

○三月、英文科に英語会設置
・国際連盟発足
・『死戦をこえて』（賀川豊彦）発刊
・戦後恐慌

一九二一（大正十）年

○六月三十日、雑誌「橄欖」創刊
○文学会を「校友会」と改称
・ワシントン会議

一九二二（大正十一）年

○二月、青年会、尚絅女学校青年会と協力して欧州学生救済義捐金募集のため音楽会開催

一九二三（大正十二）年

○一月より大講堂建設資金募集始まる
・「文芸春秋」創刊
・関東大震災

一九二五（大正十四）年

○四月、専攻科をすべて三年制とする
○家政科予科の廃止
・治安維持法公布
・普通選挙法公布

一九二六（大正十五・昭和元）年

○三月二十三日、増築第二校舎（ヴォーンホルト記念校舎）献堂式
○十月二十日、創立四十周年記念祝賀会
○十月、原田ことぢ、第五代同窓会長に就任
・大正天皇崩御

一九二八（昭和三）年

○一月十日、元校主押川方義逝去
○三月八日、英文科に中等教員無試験検定取扱許可
○十一月、御大典（天皇即位）記念噴水池（六角池）建設
・仙台に市電開通

一九二九（昭和四）年

・世界経済恐慌

一九三〇（昭和五）年

○二月、ハンセン、音楽博士（シカゴ音楽大学）となる
○二月二十一日、文部省による音楽科学術試験実施
○五月三十日、C・D・クリーテ、第七代校長に就任（ファウスト前校長送別会）
○十一月十一日、ファウスト記念館定礎式
・基督教連盟、神社問題に関して建言を政府に提出

一九三一（昭和六）年

○音楽科に師範科及び研究科を設置
○校服制定

○十二月二十六日、ファウスト記念館献堂式
・東北地方に冷害

一九三二（昭和七）年

○六月十一日、鈴木クワルテット、ハンセン作曲「日光」を演奏
○十二月十二日、ハンセン、リンゼイ、原田ことぢ勤続二十五年祝賀式
○本年より高山海岸にてキャンプを行なう
・五・一五事件

一九三三（昭和八）年

○六月三十日、音楽科三年生、山形市及び鶴岡市に音楽演奏旅行
○十二月、校門改築成る
・三陸大津波
・国際連盟脱退
・滝川事件

一九三四（昭和九）年

○二月十七日、創立五十周年記念事業として基本金十万円募集の計画を起こす
○十二月十日、鈴木虎之進勤続二十五年祝賀式
・文部省思想局設置
・ヒットラー、ドイツ総統となる

一九三五（昭和十）年

○二月二十日、専攻部図書室にて故ミス・シュネーダー（前年四月十二日逝去）寄贈図書献納式
○六月十日、クリーテ校長アーサイナス大学より「神学博士」の称号を受く
○七月二十二日、校友会・同窓会主催、市教育会・河北新報社後援の第一回仙台夏季婦人講座開催
・文部省、学校の宗教教育禁止緩和方針を全国に通牒
・東北地方に冷害

一九三六（昭和十一）年

○七月、土井林吉（晩翠）より息女故土井照子の記念として宮城郡七ヶ浜吉田浜町字沢尻の畑地をキャンプ敷地として寄贈
○十一月二日、創立五十周年記念式典
○十二月二十三日、『宮城女学校五十周年史』発刊
・二・二六事件

・日独伊防共協定調印

一九三七（昭和十二）年

○三月六日、金子かね勤続二十五年表彰式
○四月十五日、大講堂建築起工
○十二月十二日、宮城女学校家庭会設立
○十二月三十日、大講堂新築落成
・文化勲章制定
・文部省、「国体の本義」刊行
・文相、宗教・教化団体代表者に挙国一致運動を要望

一九三八（昭和十三）年

○五月五日、勤労奉仕開始
○五月二十日、徐州陥落に際し全校生徒旗行列に参加
○十一月二十日、弓道部創設
・大阪憲兵隊が教会とキリスト教主義学校に天皇と神との関係を質問
・国家総動員法公布

一九三九（昭和十四）年

○三月六日、一見清、勤続二十五年祝賀式
○本年度より二学級（百名）募集
○八月三十日、財団法人宮城女学校寄附行為申請
○十二月二十六日、第五代校長S・L・ワイドナー逝去
・宗教団体法公布
・国民徴用令公布
・全国中学校の入試廃止

一九四〇（昭和十五）年

○五月十五日、「橄欖」タブロイド版となる
○九月十二日、クリーテ校長辞職、一見清校長事務取扱となる
○十一月十日、「紀元二千六百年」記念式
○十一月二十六日、教育勅語発布五十周年にあたり、ハンセン、リンゼイ、一見清、原田ことぢ、金子かね、大越直、文部大臣より表彰せらる
・「思想国防」のため、外国人教師のいる学校と教会へ監督強化を通牒

・大日本帝国民服令公布
・この頃修学旅行制限される

一九四一（昭和十六）年

○二月八日、家庭会総会にて本校維持費として一口（金三十円以上）寄付することを決議
○二月十四日、「財団法人宮城女学校」設立許可
○二月二十七日、一見清、財団法人理事長に就任
○二月二十一日、奉安殿建築の件県知事より許可
○本年度より四クラス（二百名）募集
○六月三日、宮城女学校報国団成立
○六月四日、高女部第五学年生宮城外苑整備勤労奉仕のため上京
○十月三十一日、西山貞、第八代校長に就任
○十一月二十日、館岡剛より宮城郡七ヶ浜吉田浜の保安林寄贈
○十二月九日、アメリカ人教員全員辞任
○十二月二十六日、専攻科繰上げ卒業始まる
○同窓会、母校維持会結成

・国民学校令公布
・日本基督教団創立
・太平洋戦争突入

一九四二（昭和十七）年

○一月十六日、国語科設置案提出
○一月三十日、外国人理事四名辞任、西山貞、財団法人理事長に就任
○二月十六日、奉安殿献堂
○二月、西山貞、第六代同窓会長に就任
○七月四日、理事会において国語科設置の件可決
○七月四日、一力次郎、財団法人理事長に就任
○七月二十四日、御真影を奉安庫に奉安
○八月八日、中等学校長会議において英語を随意科とする事を決定
○十月十六日、寄宿舎市内米ヶ袋に移転
○十月二十七日、音楽科後援の目的をもって「宮城音楽同好会」結成
○十一月十六日、教職員、生徒に対して軍事教練開始

・ミッドウェー海戦敗北
・文部省、高等女学校の英語を随意科目として週三時間以内とすると通牒

一九四三（昭和十八）年

○四月一日、宮城女学校を廃止し「宮城高等女学校」設置、専攻部を「専攻科」と改称
○四月、三年制国語科設置
○六月、専攻科生農村託児所に勤労奉仕
○七月二十日、代ヶ崎の海洋道場で修練す
○七月二十四日、ラジオ体操、救急訓練実施
○八月二十四日、理科実験室増設
○十月四日、鉄供出のため第一、第二校舎のスチームを取外す
○十月五日、農繁期手伝いに出動
○十月十二日、三馬弘進ゴム会社に勤労奉仕
○十月十九日、市内清水小路五番地に寄宿舎設置
・学徒出陣

一九四四（昭和十九）年

○四月、理科実験室及び調理実験室改修工事完成
○五月、「東北風第二〇二号」工場と学校工場化契約成立、新設調理実習室を工場に転用
○五月、専攻科教科修練課程改正認可、育児・国語・外国語・音楽の四科併立設置、中等学校教員養成に適する課程を履習
○七月、専攻科生「東北風第二〇二号」に作業実習生として出勤開始
○八月、家政科教室を工場に転用
○十一月三日、高女生横須賀海軍航空技術廠に出勤
○十二月、学校工場第三工場作業開始
・学童疎開始まる

一九四五（昭和二十）年

○一月、専攻科校舎を仙台連隊区指令部庁舎として貸与
○三月、高女生横須賀で卒業式挙行
○五月三十日、御真影を根白石に奉遷
○図書を岩切に疎開する
○七月十日、仙台空襲により校舎及び附属物焼失

○八月四日、学徒隊を戦闘隊に切りかえる
○九月十二日、専攻科授業開始
○十月八日、二部授業開始
○十月十一日、連坊小路国民学校の四教室を借り受ける
○十月十五日、礼拝復活
○十二月二十八日、御真影奉遷式

一九四六（昭和二十一）年

・アメリカ軍沖縄上陸、広島・長崎に原子爆弾投下
・ポツダム宣言受諾
・天皇、戦争終結の詔書を放送
・文部省、私立学校の宗教教育実施を許可

○五日制実施
○二月五日、戦災復興資金募集開始
○三月三十一日、第三校舎（中学部）復旧工事完成
○五月七日、国文科に中等教員無試験検定許可
○校地八二六坪を市内東三番丁一四番地～一六番地に購入
○五月二十五日、第四仮校舎復旧工事完成
○六月五日、第五仮校舎復旧工事完成
○六月二十九日、専門学校令による「宮城学院女子専門学校」設置認可（育児科、国語科、外国（英）語科、音楽科）

一九四七（昭和二十二）年

○七月十日、宮城高等女学校は「宮城学院高等女学校」と改称
○九月十八日、創立六十周年記念式典
○十一月、伊藤まき、第七代同窓会長に就任
十一月一日、西山貞、財団法人理事長に就任
・日本国憲法公布

○四月一日、新学制により「宮城学院中学校」設置
○八月四日、本校主催の音楽科認定講習会開催
○九月、再来日のC・D・クリーテ、A・アンケニー、K・I・ハンセンを理事に加える（翌年L・A・リンゼイも）

○九月、宮城学院父母教師会結成
・教育基本法、学校教育法公布
・キャスリン台風

一九四八（昭和二十三）年

○二月二十日、矢野貫城、財団法人理事長に就任
○四月九日、新学制による「宮城学院高等学校」設置
○五月十八日、専任教職員および基督教役者子女の授業料（中学のみ）免除と決定
○五月二十三日、YWCA復活
○八月三十一日、第一校舎修復工事完成

一九四九（昭和二十四）年

○二月二十一日、「宮城学院女子大学」設置認可
○六月十五日、宮城学院女子専門学校学則一部変更
○七月二十三日、市内土樋一九五、一九六番地の土地購入
○九月十五日、第六校舎新築工事完成
○十月二十七日、大学開設、高校校舎落成記念祝典
・東北帝国大学、「東北大学」と改称
・下山・三鷹・松川事件あいつぐ
・湯川秀樹ノーベル賞受賞
・私立学校法公布
・市制六十周年、仙台市名誉市民制度設置

一九五〇（昭和二十五）年

○三月十四日、「宮城学院女子短期大学」設置認可
○五月二十五日、第一寄宿舎新築工事完成
○九月三十日、第五校舎新築工事完成
○中学、高校制服着用
・朝鮮動乱
・宮城師範を「東北大学宮城師範」と改称
・仙台市教育委員会発足

一九五一（昭和二十六）年

○二月二十八日、第四校舎新築工事完成

○三月九日、「学校法人宮城学院」設立認可、矢野貫城、理事長に就任
○三月三十一日、宮城学院女子専門学校廃止
○十月二十三日、創立六十五周年記念式典
○宮城学院文化学会組織
○十二月二十五日、大学「研究論文集」創刊
・日米安全保障条約調印

一九五二（昭和二十七）年

○二月二十九日、女子大学教職課程設置認可
○四月十三日、東北学院との合同理事会（以後度々）
○五月十三日、大学本館鍬入式
○「橄欖」再刊
・私立学校振興法公布
・義務教育費国庫負担法公布

一九五三（昭和二十八）年

○四月一日、末包一夫、事務長に就任
○四月、「ヘルスセンター」開設
○五月一日、本学本館新築工事完成
○六月、片桐こう、第八代同窓会長に就任
○七月、丸山敏子、第九代同窓会長に就任
○九月十三日、A・K・ファウスト逝去
○十月十九日、東北学院、尚絅女学院との合同院長会議
○十月二十一～二十二日、第四十一回基督教学校教育同盟総会本学院で開催
○第一寄宿舎新築二期工事完成
・NHKテレビ放送開始

一九五四（昭和二十九）年

○三月三十一日、女子大学附設幼稚園教員養成所設置認可
○四月一日、英文学科・音楽科・家政科・国文科に教員養成課程認定、家政科に栄養士養成施設指定認定
○四月一日、六日制実施
○私学共済組合加入
○九月二十一日、市内米ヶ袋広丁二三番地の宅地建物を取得

○十一月一日、体育館建築鍬入式
・教育二法公布
・自衛隊発足

一九五五（昭和三十）年

○二月二十日、大学図書館、第二校舎地下室食堂改造工事契約
○三月二十四日、第一寄宿舎増改築工事開始
○三月三十一日、女子大学附設幼稚園教員養成所廃止
○四月一日、女子短期大学学科増設認可（保育科）
○四月二十六日、学生食堂（喫茶）営業許可
○五月十三日、市内東二番丁二九番地の宅地建物取得
○五月三十一日、体育館献堂
○六月七～八日、基督教学校教育同盟東北・北海道地区協議会本学院で開催
○九月二十六日、保育科教室及び幼稚園増改築工事開始
○十月十日、創立七十周年記念式典
○十二月二十日、保育科教員養成課程認定
・県下一斉学力テスト実施
・第一回原水爆禁止世界大会開催
・「うれうべき教科書」問題化

一九五六（昭和三十一）年

○三月二日、「女子短期大学附属幼稚園」設置認可
○八月七日、『宮城学院七十年史』発刊
○八月十日、西山学院長渡米（十二月六日）
○八月二十一日、女子短期大学免許状（保健）授与のための課程設定（家政科）
○十月十三日、女子大連盟秋季例会本学院で開催
・国際連合加盟

一九五七（昭和三十二）年

○四月一日、島末三、事務長に就任
○四月十六日、女子大学免許状授与の所要資格を得させるための聴講生の課程認定（音楽・英語）
○五月二～三日、全国教会学校大会本学院で開催
○五月十三日、米ヶ袋寄宿舎起工式

○七月十六日、第二校舎改装及び都市計画による一部解体工事、十二月十四日には実験室、音楽科設備工事
○七月二十九日、中学図画教室新築工事
・ソ連人工衛星打ち上げ

一九五八（昭和三十三）年

○六月三日、第二校舎新館献堂式
○大学後援会発足
・文部省、道徳教育実施要綱通達

一九五九（昭和三十四）年

○一月二十日、女子大学学科増設認可（家政学科）
○四月二十八日、高校校舎建築鍬入式
○九月二十五日、高校新校舎（第一期）定礎式
○十月二十九日、元理事長一見清逝去

一九六〇（昭和三十五）年

○一月十一日、高校新校舎（第一期）献堂式
○四月一日、女子大学免許状授与のための課程認定（保健・家庭）
○四月一日、小田信士、第二代学院長に就任
○四月一日、菅野章夫、事務局長に就任
○六月十七日、市内堤通八六番地に宅地取得
○七月二十二日、高校第二期新築校舎鍬入式
○八月二十九～三十一日、全学院教職員修養会
・この頃ベビーブーム世代中学入学

一九六一（昭和三十六）年

○一月二十日、宮城郡七ヶ浜町吉田浜の土地換地
○四月十三日、高校渡廊下及び下足置場新設、物理生物室改造工事
○五月二十三日、高校校舎完成
○六月十四日、小田学院長世界教育者会議（於ニューデリー）出席並びに欧米視察（～八月十六日）
○八月十日、学生ホール調理室を栄養士集団実習室に改造及び大講堂フローリング工事
○九月二十六日、文部省、中学一斉学力テスト実施
○十月五日、大学栄養士養成施設認定

一九六二（昭和三十七）年

○十月九日、創立七十五周年記念式典（ハンセン、リンゼイ来日）

一九六三（昭和三十八）年

○三月三日、第七代校長C・D・クリーテ逝去
○三月十五日、家政学科洗濯実習場、卒論実験場、中学集会室下足置場新設改造
○九月十六日、協力定期預金制度発足

一九六四（昭和三十九）年

○一月十日、大学新館建築開始
○二月十五日、保母養成施設認可
○四月五日、宮城村（当時）上愛子松原に土地約一万四千坪取得
○六月二十八日～七月三日、小田学院長、西山名誉学院長沖縄教育事情視察
・ケネディー大統領暗殺

一九六五（昭和四十）年

○一月十日、大学新館竣工
○一月十一日、女子大学科増設認可（日本文学科）
○一月十七日、女子短期大学増設認可（教養科）
○二月二十四日、女子大学（国語・書道）及び女子短期大学（国語）免許状授与のための課程認定
○二月二十八日、宮城町芋沢字向田に土地一千坪取得
○四月十三日、中学高校総合校舎鍬入式
○五月二十七日、栄養士養成施設の校舎及び各室の用途変更承認
○七月十一日～八月三十一日、文部省委嘱図書館司書、司書補講習会（一九七九年度まで毎年）
○八月三十一日、市内郡山字新々田に土地四一七坪取得
○十月十七日、愛子運動場造成工事着手
○十一月二十日、大学新館、中学高校総合校舎献堂式
・東京オリンピック大会

○三月十三日、宮城学院仮寮（旧中学校舎二階）改造工事開始
○四月十九日、泉町（当時）市名坂字天神沢に土地約二万坪取得
○五月八日、女子大学学則一部変更認可（図書館学）
○五月十日、米ケ袋寮鍬入式
○六月三日、グラウンド造成工事

○八月二十四日、中学高校総合校舎屋上に音楽教室を増築工事開始
○八月三十日、栄養士養成施設教育課程承認
○十月八日、ミッション・ボード視察団来校
・中教審「期待される人間像」中間草案発表
・ベトナム北爆開始

一九六六（昭和四十一）年

○三月十日、体育館フローリング換装
○三月二十二日、愛子グランド附属建物建築工事開始
○四月一日、大学に基督教文化研究所設置
○五月七日、名誉学院長西山貞逝去（同十四日学院葬）
○九月二日、大学に生活科学研究所設置
○十月十二日、創立八十周年記念式典
○十月十五日、『宮城学院八十年小誌』発刊
・宮城教育大学創立

一九六七（昭和四十二）年

○一月二十八日、一号館（新大学図書館兼校舎）の鍬入式
○二月三日、図書館司書課程を日本文学科・英文学科に設置認可
○四月十八日、大学・短大新入生オリエンテーションキャンプ開始
○五月二十三日、小田学院長エルサレム訪問（～八月三日）
○十二月二十日、家政学科管理栄養士専攻課程認可
・初の「建国記念の日」
・日本基督教団、戦争責任告白を提出
・明治百年
・この頃仙台市の人口約五十万人

一九六八（昭和四十三）年

○一月四日、宮城学院名誉教授K・I・ハンセン逝去（同二十六日、追悼式）
○三月一日、八号館（中高寮及び保育科）の鍬入式
○十月、中学校入試制度に推せん制度開始
○十一月十五日、一号館・愛子体育館・八号館合同献堂式
・三億円事件

・M・L・キング牧師暗殺

一九六九（昭和四十四）年

○四月、学校法人宮城学院寄附行為改正、「制度改革」行なわれる
○四月一日、阪田勝三、公選制最初の女子大学・女子短期大学学長に就任
○四月一日、渡邉弘道、事務局長に就任
○九月三日、学校法人宮城学院寄附行為一部変更認可
○九月十八日、新寄附行為に基づいて選任された最初の理事、監事、評議員就任
○九月、佐藤利吉、学校法人理事長に就任
○矢野貫城、村上兵助、平山信子名誉理事に就任
○一力次郎、名誉評議員に就任
○この年より事務職員研修会開始
・中近東諸国の紛争おこる
・全国で大学紛争激化
・アポロ十一号で人類初の月着陸

一九七〇（昭和四十五）年

○四月一日、大沼隆、公選制最初の中学校・高等学校校長に就任
○六月三十日、石井昌光学長事務取扱に就任
○七月七日、元理事長、名誉評議員一力次郎逝去
○十月九日、パイプオルガン奉献式
・日本万国博覧会（大阪）
・三島由紀夫事件

一九七一（昭和四十六）年

○二月十一日、宮城学院名誉教授L・A・リンゼイ逝去
○四月一日、石井昌光、女子大学・女子短期大学学長に就任
○五月、滝口篤子、第十代同窓会長に就任
○十月八日、宮城学院総合計画委員会発足
○十月十八日、創立八十五周年記念式典
・「いのちの電話」開局（東京）
・米国ドルショック

一九七二（昭和四十七）年

○二月二十日、「宮城学院報」創刊
○四月一日、石井学長、学院長職務代行を兼務
○四月十日、「宮城学院広報」創刊
○四月、J・J・ランディスよりハンドベル寄贈
○八月十八日、渡邉事務局長、学院長事務取扱を兼務（～一九七三年三月三十一日）
・赤軍事件
・横浜海岸教会創立百年記念式典
・宮城県制百年、教育百年式典
・沖縄県発足

一九七三（昭和四十八）年

○四月一日、佐藤昌彦、第三代学院長に就任
○四月一日、大沼隆、中学校・高等学校校長に再選就任
○八月十三日、宮城学院総合計画委員会並びに建設委員会発足
・ベトナム和平成立
・金大中事件
・オイルショック、異常インフレ

一九七四（昭和四十九）年

○一月二十六日、理事会において丸田沢地区への総合移転を決議
○四月一日、石井昌光、女子大学・女子短期大学学長に再選就任
○四月一日、高梨光、事務局長に就任
○四月十八日、石井学長、理事長職務代行を兼務（～九月三日）
○九月三日、石井学長、学院長職務代行を兼務
・靖国神社国営法案採決

一九七五（昭和五十）年

○四月一日、清水二郎、第四代学院長に就任
○十一月四日、名誉理事矢野貫城逝去
・東北自動車道開通
・ベトナム戦争終結

一九七六（昭和五十一）年

○三月二十九日、聴講生の課程認定
○四月一日、阿部富士雄、中学校・高等学校校長に就任
○十月十八日、創立九十周年記念式典
・仙台市電営業終了
・ロッキード事件

一九七七（昭和五十二）年

○四月一日、松崎粲、女子大学・女子短期大学長に就任
○八月一日、小林義一、事務局長に就任
○五月二十六日、仙台市へ総合移転の現地説明会を行なう
○九月二十九日、『宮城学院最近十年小史』発刊
○十月四日、ブレハブ（七号館代替校舎）竣工
○十一月二十一日、名誉理事平山信子逝去
・二百海里水域宣言

一九七八（昭和五十三）年

○六月三日、自然環境保全委員会発足
○六月十二日午後五時十五分、宮城県沖地震発生、被害総額二千万円を超える
○七月三十一日、総合移転建設工事本契約調印式
○八月十一日、総合移転建設工事仕事初め式
○九月二十二日、岩井淳一理事、学院長事務取扱を兼務（～一九七九年三月三十一日）
○十月四日、寄附行為一部変更認可
○十月十六日、総合移転建設工事起工式

一九七九（昭和五十四）年

○四月一日、早坂禮吾、第五代学院長に就任
○四月一日、阿部富士雄、中学校・高等学校校長に再選就任
○五月九日、大学名誉教授規程施行（石井昌光、森下金二郎に初の適用）
○五月三十一日、移転に伴う大学寮用地を泉市長命ヶ丘に購入
○七月七日、移転推進本部発足
○七月二十四日、郡山校地売却に伴う譲渡契約
○九月十二日、礼拝堂建設工事契約

○十月三日、泉校地不動産譲渡契約
○十一月二十二日、新校地への中学高校寮契約
・東京サミット開催

一九八〇（昭和五十五）年

○四月一日、松崎粲、女子大学・女子短期大学学長に再選就任
○五月三十日、新校地見学会
○六月一日、「赤レンガの大講堂へのさよなら演奏会」開催
○七月二十四日、新校舎に送電開始
○七月二十九日、大学寮（徹槐寮）起工式
○八月七日、桜ヶ丘校地への引越し開始
○九月一日、幼稚園献堂式（三歳児入園）
○九月八日、中学高校献堂式
○九月三十日、引越し業務ほぼ終了
○十月一日、大学短大校舎献堂式
○十月三日、新校地校舎のボイラー火入式
○十月四日、同窓会館献堂式
○十月二十五日、新校地献堂式典並びに祝会
○十一月二十五日、パイプオルガン移設工事完了引渡
○十二月一日、今野恒四郎、事務局長に就任
○十二月十四日、宮城学院礼拝堂落成献堂記念演奏会
・冷夏
・東北、北陸地方豪雪
・日本ＹＭＣＡ創立百年
・日本で初の女性大使誕生

一九八一（昭和五十六）年

○三月二十四日、徹槐寮献堂式
○三月二十六日、建設本部解散
○四月一日、大学短大「採用人事および昇任人事に関する規程」施行
○四月一日、大学短大「礼拝」時間を変更し、十二時二十分～四十五分とする
○五月十七日、同窓会第一回ホームカミングデー

○五月、伊藤久子、第十一代同窓会長に就任
○十月九日、創立九十五周年記念式典並びに記念講演会
・ローマ法王初来日
・教科書問題論争

一九八二（昭和五十七）年

○四月一日、大沼隆、中学校・高等学校校長に就任
○六月四～五日、キリスト教教育同盟第七十回総会本学院で開催
○十月二日、中学高校パイプオルガン奉献式
○十月十二日、同窓会主催ガーナー、カンディフ、ランディス在職三十周年記念感謝の会
○十月二十七日、宮城学院桜ヶ丘校舎BCS賞（建築業協会賞）受賞
○十一月、英文学科・日本文学科・家政学科・家政科の一般推せん入学開始（保育科は翌年度から）
○十一月二十六日、名誉理事大石栄一逝去
・日航機羽田沖墜落事件
・フォークランド紛争
・東北新幹線開業

一九八三（昭和五十八）年

○一月、事務局新年礼拝を開始
○四月一日、山形孝夫、女子大学・女子短期大学学長に就任
○八月十日、「建学の泉」落成（九月十七日同窓会より寄贈）
○「宮城学院女性のための生涯教育講座」開始
・初の比例代表制による参議院議員選挙
・日本海中部地震
・大韓航空機撃墜事件
・ロッキード事件
・日本初の体外受精児誕生

一九八四（昭和五十九）年

○十月三十一日、W・S・カンディフピアノリサイタル（百周年基金のため）
○十二月二日、大学短大「外国人契約教員規程」施行
・グリコ事件
・臨時教育審議会設置法成立

・日本人の平均寿命世界一
・アフリカの飢餓重大な局面に

一九八五（昭和六十）年

○二月大学短大、秋田市での入試開始
○四月一日、大沼隆、中学校・高等学校校長に再選就任
○四月一日、大学短大「教職センター」設置
○四月、中学高校各主任を「教頭」とする
○六月十一日、創立百周年記念行事準備委員会発足
○七月、英文学科生の海外研修開始
○八月一日、長谷川英敏、事務局長に就任
○十一月三十日、高等学校収容定員に係る学則変更認可（高等学校生徒急増に伴う暫定措置による）
○十二月四日、ハンセンホール、パイプオルガン奉献式
・青函トンネル貫通
・つくば科学万博
・日航機墜落事件

一九八六（昭和六十一）年

○四月一日、山形孝夫、女子大学・女子短期大学学長に再選就任
○五月二日、創立百周年記念中学運動会
○五月九日、創立百周年記念高校運動会
○五月十五日、創立百周年大学短大新入生歓迎スポーツ祭
○五月十八日、創立百周年同窓会第六回ホームカミングデー
○五月十九日、創立百周年記念NHK交響楽団演奏会（東北学院と共催）
○五月三十一日、創立百周年記念岡本由紀子講演
○八月六～八日、創立百周年記念仙台七夕参加
○九月十七日、創立百周年記念喜多流「能」公演
○九月十八日、創立百周年記念日、創立記念礼拝並びに墓前礼拝
○九月二十一日、創立百周年記念幼稚園大運動会
○九月三十日、創立百周年記念国立モスクワ合唱団公演
○十月九日、創立百周年記念彫刻「帽子の像」（佐藤忠良作）除幕式並びに講演会
○十月十一日、創立百周年記念式典

○十月十五～十八日、創立百周年記念オリジナルミュージカル「Heart by Heart Tour」公演
○十一月一日、中学高校創立百周年記念式典及び音楽会（於県民会館）
○十一月十六日、創立百周年記念林秀光ピアノリサイタル
○十一月二十四日、創立百周年記念ロンドンシェークスピアグループ「ハムレット」公演

・ハレー慧星観測
・英国王室日本訪問
・衆参同日選挙実施
・男女雇用平等法施行
・初の女性党首誕生
・東北学院、弘前学院、捜真女学校、松山東雲学園、広島女学院、創立百周年

一九八七（昭和六十二）年

○一月十七日、「河北文化賞」を受く

おわりに

宮城学院百年の歩みを編み綴るにあたって、私たちはこの書を『天にみ栄え　――宮城学院の百年――』と題しました。これを計画した時から完成近くまで、とりあえず仮に「宮城学院百年史」と呼んでいましたが、作業を進めていくうちに、「百年史」と名づけるに足る歴史の真正な編纂というものの容易でないことが時と共にいよいよ明らかになったからであります。それと共に、固苦しい史書であるよりも、多くの関係者たちに親しんで読んでもらうものでありたいと願ったからであります。また、欲を言うならば、百周年記念式典の折にお目にかけた『宮城学院　目でみる百年――GLORY TO GOD――』と並べて見て頂きたいと願ったからであります。さらに、最も大事なことですが、天にいます我らの父なる神にのみ栄光を帰すべく、そして、その栄光を地上であらわすべく、この学舎は建てられ、かつ営まれてきたことを再確認しつつ、その歩みを振りかえりたかったからであります。本書の題が宮城学院の校歌の冒頭の一節でもあることは改めて説明を要しないことでありましょう。

また、目次を一見して頂けばおわかりのように、本学院の歩みにとってまさに画期と考えられる出来事をもって各章の区切りと致しましたが、それぞれの最初に聖書の一節をあてたのも同様の趣旨によるものであります。

ところで百年の歩みをめざしながら、歴史でいえば先史および古代史にあたる部分、特に宮城学院発足以前の部分が、量質ともにバランスを破って重い、ということにお気づきだと思います。これは、戦災でほとんど焼失した資料を求めて渡米した前資料室長渡邉弘道氏が、各地で多くの人々の特別な好意に支えられて収集した古い資料があまりにも膨大であったばかりでなく、歴史に磨かれた誠に新しいものであったからであります。「宮城学院の百年」

を基礎づけたこの部分こそ、むしろ本書の中心といってよいもので、これらによって古い年史を修正した部分も多く、また日本のキリスト教伝道史、特に東北の伝道史に新しい光を与えるものとなりましょう。

これに比べて戦後は未だ歴史が定着しておりませんので、特に、いわば現代史たる桜ヶ丘移転あたりからは、年を追って出来ごとを羅列するにとどめ、余の多くを年表その他にゆずることにしました。真の意味での「百年史」にはさらに五十年の時を籍さなければなるまいと思われます。

装丁は臙脂（えんじ）の布製としました。言うまでもなく宮城学院のスクールカラーであります。できるだけ簡素にと念じながら金箔押しの校章は省くことができませんでした。外函は「東三番丁の宮城」以来、わが学院のイメージをあらわす煉瓦の色に似せました。

「百年史」をつくりたいということは『宮城学院八十年小誌』以来の念願でありましたので、六年前、新キャンパスに移転した時から「資料室」を新設し、これに「百年史編纂室」を兼ねさせて具体的な準備にかかりました。何もなかった新資料室は今、古い、しかし新しい資料でいっぱいになりました。昨年のＮＨＫ連続テレビドラマ「はね駒」もここの資料を存分に使ってとび出しましたし、「目でみる百年」史といわれる「GLORY TO GOD」もここから生れました。本意とする百年史『天にみ栄え』も、今こうしてお目にかけることが出来るようになりました。

顧みればこの間、随分多くの方々にお世話になりました。計画の段階からいろいろ相談に乗っていただいた本学院評議員の高橋富雄先生、東北大学の原田隆吉先生、またひとしく「百年史」にかかわる東北学院の竹井一夫先生（本学院監事）と出村彰先生（評議員）、執筆者としては定年まで資料室長であった渡邉弘道先生（一～六章）、評議員の森下金二郎先生（八、九章）、同じく、阿部富士雄先生（七、九章）、それに新キャンパスの植生を足で調査して下さった小倉英男先生（十章）、総合移転に中心的役割を果たされた篠田勝太郎先生（十章）と今野恒四郎先生（十章、「付」）、同窓会の福井喜江先生（「付」）などに、改めて深い感謝を捧げます。また、惜しみなくたがいに資料を

見せ合った東北学院資料室の方々からいただいたご協力は、共に百年を迎えた兄妹の関係にある学校のそれでありますが故に、一層の感謝と喜びに耐えないところであります。

なお、各種資料作成を含む煩瑣な編集実務は資料室の星　涼、総務課の大河内　真の両名が、執筆も担当した早坂禮吾（八、十章）、長谷川精一（七、八、九章）らの協力を得て、誠実にこれにあたりました。

印刷・製本など、造本の一切は笹氣出版印刷株式会社に依頼しましたが、丁寧な仕事ぶりと、適切な技術的指導をいただいたことに対し、深く感謝いたします。

私どもは、既刊の校史、『宮城女学校一覧』、『宮城女学校五十周年史』、『宮城学院七十年史』、『宮城学院八十年小誌』、ならびに『宮城学院最近十年小史』等の補充延長以上のものを志しましたが、出来上がりましたものが、これらの方々のご厚情に十分おこたえしていないものであろうことを、今おそれるのみであります。

『天にみ栄え』出版をもって、創立百周年事業の一切を完了いたします。他の事業同様、この刊行作業に携わった者には思うに勝る御恵みの連続でした。これを第一世紀の完結とすると共に、新しい第二世紀の輝ける出発といたしたいものであります。

本書の編述を終えた今、私どもは、感謝のうちに次の聖句を噛みしめている次第であります。

「愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。」（ペテロ第二の手紙　第三章八～九節）

学院長　早坂禮吾

天にみ栄え ——宮城学院の百年——

一九八七年三月二十五日　印刷
一九八七年三月三十一日　発行

発行者　早坂禮吾
発行所　学校法人　宮城学院
〒九八〇　仙台市桜ヶ丘九丁目一番一号
電話　〇二二―二七九―一三一一（代）

印刷者　笹氣幸緒
印刷所　笹氣出版印刷株式会社
〒九八三　仙台市六丁の目西町八番四十五号
電話　〇二二―二八八―五五五五（代）

天にみ栄え —— 宮城学院の百年 ——

人 名 索 引

1. 本文（第一章から第十章まで）及び同窓会小史の中から収録した。
2. （ ）内は外国人名原綴り，及び旧姓・名，雅号，筆名，漢訳名，襲名，俗称等。
3. 頁の下のアンダーラインは写真掲載の頁を示す。

ア

アーウィン（Irwin），アレン　L.　602
アーウィン（Irwin），マリー　602
アイクホーフ，クリスチャン　603
相澤　勝晴　401
相澤きみよ　550
相場せつ子　521
青木　周蔵　61
青山　なを　467
赤城　眞理　722
赤星　研造　66
赤間つや子　779
秋月　千代　530
秋葉　貞蔵　292
秋保　孝次　521-3，535
秋保　孝蔵　599
秋保たどり　522，527
淺井　　柞　302，306-7，357，360，550，749
淺井　　忠　430，444-6
朝下　　忠　582，587，766
淺賀　甚吉　440
淺野　　繁　717，804
葦名　直道　631
葦名はま子　782，796，799
吾妻トシ→山際トシ
渥美鋭太郎　430，446
アップル（Apple），トーマス　G.　95，128-9，144-5
アナオルト（アネワルト）→アンナワルト
姉歯　たま　796
アバークロンビー（Abercrombie），ジョン　33
阿部　邦雄　605
安部　さだ　796
阿部　笙子　722
阿部　清吉　401
阿部都喜子　489
阿部富士雄　605，624，631，632，633，646，801
阿部（橋本）みさ　386，399
阿部　光子　804-5
阿部　義文　292
安部やす→笹尾やす
雨森　信成　32，48-51
アメルマン（Amerman），ジェームズ　L.　93，158，166
綾部　　恭　37
アラン（Alain），マリー-クレール　635
有馬　　文　535
アンケニー（Ankeney），アルフレッド　570
アンケニー（Ankeny），マーガレット　S.　599，792
安斎（伊藤）和子　808
安藤　明子　799
安藤利兵衛　75-6
アンナワルト　535，544，758-9

イ

イーストレーク（Eastlake），フランク　103
イールズ（Eells），ウォルター　C.　580
飯澤　タカ　401
飯沼　勇松　401
飯淵　さだ　525
五十嵐幸一　740
五十嵐清水　800
五十嵐　正　61，292
池田ちん→村上あや
石井　とき　259-60，262，293
石井　昌光　571，574，577，579，589，599-600，607，622，626，628，630-2，640，653，656，658-9，748-9，766，793-4，800，805
石川梅代→松村梅代
石川きくよ→小谷部きくよ
石川　こん　550
石川　　彝　86
石川　洋子　716
石黒まち子→吉田まち子
石黒　よし　195
石原　　謙　467
石原　重思　424，441
石田　タヘ　761
石田　房子　550，760
石田六治郎　550
石丸　直子　760-1
泉　　貞子　745，772-3，791，793，795，797，799，803，807
伊勢　　泉　720
伊勢　　武　571
磯村（小泉）はる（春子）　306，319，348，350，353，360，439，550，715，754，757
磯村とし子　757
一戸富士雄　634

市原　盛宏　176
一見　　清　492, 502, 523, 525, 530, 534, 546-7, 561, 569, 571, 594, 764, 773, 781
一力　次郎　571
一力　友助　401
伊藤　うん　599, 765, 769, 772-3, 786, 796
伊藤　英吾　550
伊藤　嘉吉　417
伊藤和子→安斉和子
伊藤　京子　781
伊藤　　正　569, 573
伊藤　悌三　78
伊藤なみえ　525
伊藤　久子　420, 599-600, 631, 642, 718-20, 745, 746, 774, 783, 786, 789, 791-2, 795-6, 798-9, 801, 803, 806-10
伊藤　博文　131, 323
伊藤　まき　388, 550, 573, 578, 746, 769, 770, 772-3, 782, 807
稲垣ぎん→人見ぎん
稲垣作太郎　430, 449
稲垣　　信　157
稲垣　豊子　157, 193, 200, 222, 224
井上　きゑ　393
井上　　毅　131
井上　哲郎　292
猪股　まき　528, 535
猪股満喜子　796
猪股　誉平　292
井深梶之助　27, 32, 137, 212-3, 327, 436-7, 439, 460, 466
今泉　純子　779-80
今泉とく子→滝口篤子
今澤　きく　522-3
イルズレー（Ilsley），アリス　M.　549
岩井　淳一　636, 639
岩川友太郎　430, 445
岩倉　具視　56, 177
岩崎　賢江　722
岩崎　ハル　535
岩田　みえ　530
岩沼　寅治　401
岩渕はつゑ　757
岩渕　淑子　796-7, 807
岩村　信二　593
巌本　眞理　572
巌本　善治　272, 298-9
インブリー（Imbrie），ウィリアム　187

ウ

ウィットマー（Witmer），A.C.　127
ウィリアムズ（Williams），サミュエル　W.（衛三畏）　9, 12-7
ウィリアムズ（Williams），チャニング　M.　17
ウィルソン（Willson）　534
ウィード（Weed），ヘレン　I.　534
鵜浦　昌子　722
ウェーバー（Weber），カール　M.v.　527
上田　萬平　534
植村　季野　466
植村　　環　569, 573, 575, 646
植村　正久　24, 27, 32, 51, 103, 211-3, 271-3, 327, 466, 646
ウェルフル（Wülful），K.　528
宇田まさ→佐藤まさ
内ケ崎作三郎　460
内ケ崎清之助　714
内田　良三　582, 631
内村　鑑三　473, 476
宇野まつえ→堂本まつえ
ヴァンホーン（Van Horn），デーヴィッド　82, 93, 96, 110, 127-8, 152, 196
ヴィラーロボス（Villa-Lobos），H.　631
ヴォーリズ（Vories），ウィリアム　M.（一柳米来留）　520, 584, 763
ヴォルマー（Vollmer），クリスティン　E.　477
ヴォンホルト，メリー　E.　534, 550

エ

エールマン　588
江口　宇吉　56
江刺新十郎　401
江原　素六　326
海老澤有道　467
エミグ（Emig），ベル　L.　292
エミグ（Emig），メアリ　G.　292
エルドマン（Erdman）　544
遠藤　くま　530
遠藤　浩三　582, 598, 600

遠藤　周作　810
遠藤　光子　779
遠藤　庸治　439, 461

オ

オーバーバッヒャー, ディーター　603
オールト（Ault）, ジョン　113
オールト（Ault）, メアリ　B.
　→ホーイ（Hoy）, メアリ　B.
及川なほこ　417, 438
及川武良夫　605
大井（中村）きよの（清野, 清乃）　303, 353, 368, 403-4, 752
大井次三郎　675, 706
大井　康江　716
大石　あき　521
大石　栄一　598, 621, 646, 803
大石しゅく　522
大泉　いち　796
大泉　しげ　758, 782
大泉多四郎　401
大内　三郎　467
大内　タケ　562
大木金次郎　631
扇畑　忠雄　806
大口　鯛二　429, 444, 446-7
大越　　直　549, 574, 760, 764
大澤　彌治　439
大曽根良衛　605
太田　　裕　535
大西　愛子　804
大沼　　隆　624, 631-3, 646, 656, 659, 720, 794
大野（別所）つね　753
大原（佐藤）いき　384
大橋　慰子　391
大場　誠治　367-8, 384, 550, 573-4
大場ひとし　797
大場美恵（ミエ）　521, 524, 769, 774, 779
大町芳衛（桂月）　304
大村　維虎　55
岡　美佐子　796
岡崎武左衛門　401
岡村　直子　791, 798, 803
岡本　監輔　55
岡本敬二（綺堂）　573
岡本由紀子　715, 721
小川銀次郎　429, 446
小川　とく　525
小川　義綏　25, 37
沖田　乃武　429
沖野岩三郎　545
大給　　尹　608
奥田美年子　634
奥野　昌綱　27
奥平　　操　779
奥山ます（満壽子）　304, 411-2, 425, 746, 753-4
小倉　英男　605, 884
小河内静江　774, 777, 779
小此木忠七郎　238-9, 249, 275
長田　武正　706
小澤　三郎　20, 466
押川　克子　74-5, 78, 136
押川　　清　57, 77
押川　シゲ　136
押川　常子　70, 74, 75, 76-7, 263
押川　方存　74-5
押川方至（作右衛門）　30
押川方義（熊三郎）　3, 20, 23-6, 28-32, 37, 47, 51-61, 65-81, 120-3, 133, 136, 144-5, 148-50, 152, 155-7, 160-3, 165-70, 177-9, 182-3, 186, 189, 191-2, 213-6, 238,, 241-50, 258, 260-4, 268, 279, 282-4, 296, 312-3, 330, 353, 376, 378, 404, 407, 547, 550, 719, 747-8, 810.
小田　信士　594, 597-8, 609, 614, 621, 625, 627, 656, 659, 781, 783, 785, 787, 792
小田　忠夫　642-3, 646
織田　豊子　792-3, 795-7, 799
小野（見澤）昭子　808
小野さだよ　522, 524
小野　さわ　757
小野タマエ（たまえ, 玉枝）　523, 526, 529, 532-3, 546, 550, 773, 784, 793
小野　ひで　417
小野　浩資　717
小野田元熙　435
小野寺みきよ　746, 755, 757
尾花　梅代　234, 236, 238-9, 245, 250, 747-8

小原きよの　189
小谷部（石川）きくよ　245, 293, 309

カ

貝原　益軒　415
香川　敬三　461
香川　靖嗣　724
賀川　豊彦　473, 476
梶賀千鶴子　722
梶原長八郎　330, 435, 439
柏隅みつ子　750
柏山恵智子　783, 789, 792, 794-6, 799, 803
片桐　喜代　521, 528
片桐　キヨ　530
片桐　こう　746, 773, 775
片桐　清治　178
片子澤千代松　467
勝　義邦（海舟）　177, 239
勝間田　稔　298-9
加藤　翠柳　740
加藤　　孝　582, 600, 605
加藤多喜雄　706
加藤とも→佐々木とも
加藤（菊地）とら　301, 319, 360, 754, 763, 774, 799
加藤ひさ子（寿子）　521-2
加藤（森）まつ　527, 535, 758, 774, 780, 795
加藤　もと　417
加藤與五郎　360, 799
加藤よしの　315
河東喜一郎　30
門脇　清子　801
金子　かね　502, 546, 571, 758, 763-4
金原　　譲　656-7, 659
狩野みどり　315
鹿又武三郎　535
樺山　資紀　322
亀井英三郎　397, 405-6, 408, 410
亀井（佐野）コト　755
亀山　てい　237-8
鴨　　長明　429, 447
茅　伊登子　761
茅　　誠司　600, 621
萱場　重剛　661
萱場　文二　439
カロゾルス（Carrothers），クリストファー　26-7, 55-6
河合きくの　386
河井　道子　577
川添（高橋，八木橋）なみ　305, 336-7
川添万壽得　337
川奈邊甚平　56
河野　齢藏　430, 444, 447
川端　安子　775, 780, 785
神田　乃武　429
カンディフ（Cundiff），ウィリアム　S.　589, 621, 641, 648, 650, 719-20, 776, 798, 802, 804, 807
菅野　章夫　599, 623, 624, 783
菅野　のぶ　801
簡野　道明　429, 446-8
ガーナー（Garner），マーガレット　A.　579, 599, 621-2, 648, 720, 793

キ

キーツ（Keats），ジョン　582
菊澤　季生　582, 599-600, 766
菊池　大麓　336, 378
菊地　明子　716, 718, 791, 798
菊地勝之助　571
菊地　賢治　601, 602
菊地とみを　530
菊地とよ（トヨコ，とよこ）　522-4
菊地とら→加藤とら
菊地　よし　793
菊山　嘉男　546
岸波（竹内）せき　174, 189, 193-4, 266, 272, 293, 298, 546, 748, 755-6, 762
木曽　五郎　86
北後　てる　403
北畠　親房　429, 445
北村　四郎　706
北村門太郎（透谷）　239
キダー（Kidder），マリー　E.　274
キッツェウェルヘル　522
木村　有香　462, 705-6
木村　清松　476
木村　熊二　271-2
木村　忠外　673
キャッスルマン（Casselman），H.H.　417
キャッスルマン（Casselman），クライツ　546
木山（早坂）かつみ　315
キャリイ（Cary），オーチス　465
キャレンダー（Callender），サミュエル　N.

136, 241-2, 256, 263, 275, 288, 296, 351, 377, 464
京田　せつ　297-8
京道信次郎　367-8, 384, 415, 424, 440
清野　徳七　401
清原　きせ　293
桐澤富士子　535
キング(King), チャールズ　W.　12
キンメル(Kimmel), バーバラ　273
ギュッツラフ(Gützlaff), カール　F.A.（郭実猟）　8-9, 12-3
ギュリッキ(Gulick), オラメル　H.　26

ク

クーンズ(Kuhns), エルダー　B.　100, 213, 217, 273
久志木→朽木
櫛部　　漸　25
葛岡　宗吉　59
朽木　その　299
クック(Cook), ハーマン　H.　393, 439, 540
クック(Cook), ヘンリエッタ　S.　793
クック(Cook), ルース　E.　793
久野　眞吉　582
クノート, クラウス　603
久保　和子　789, 792, 794-5, 799, 803, 806-7
窪小谷米二　508, 523
熊谷駒之助　281-2
熊谷　そみ　523, 525
熊田　爲宏　717
熊野　雄七　28
久山　　康　720
クライツ(Creiz), チャールズ　E.　535, 759
クライン(Klein), F.C.　143
クライン(Klein), H.M.J.　137, 465
藏持　節子　789, 792, 797
クリーテ(Kriete), カール　D.　194, 492, 539, 540, 542-4, 546-7, 549-50, 557-63, 568-9, 578, 588, 600, 764-5, 774, 781-3
クリーテ(Kriete), マーガレット　563, 600, 764-5, 774, 782
クリスティー(Christie), デュガルド　11, 20, 35
栗原　　基　179, 578
栗村　みち　528
クレイトン(Clayton), ポール　643
クレマー(Kremer), A.R.　270
クレマー(Kremer), E.N.　217
クローナー(Kroner)　331
黒板　勝美　429, 444-5
クロイツア(Kreutzer), レオニイド　557, 572
黒岩周六(涙香)　304
黒澤かつ江　286, 300, 754, 757
黒澤　良平　488, 529, 546, 550
黒澤ふくす　417
黒澤松代(まつ代)　528, 530, 535, 550, 761
黒柳　　朝　806
黒柳　徹子　650, 806, 808
クロンケ　522
桑田　秀延　599
グード（Good), ジェイムズ　I.　292
グールド(Gould)　135
グリーグ(Grieg), エドワルト　H.　535
グリーン(Greene), ダニエル　C.　26
グリスカム(Griscom), ロイド　C.　383
グリング(Gring), アンブローズ　D.（虞琳嵎）　83-93, 96, 98, 100-1, 103-5, 108, 111, 118-9, 121-2, 137, 143-51, 154-6, 158-9, 162, 165-6, 174, 179, 181-2, 187-8, 203, 282, 287, 372, 463, 747
グリング(Gring), ダニエル　83
グリング(Gring), ハリエット(ハティー)　L.　84-6, 90, 92, 96, 98, 103, 105-6, 108-110, 120, 122, 138, 143-4, 155, 283, 463
グレゴリー(Gregory), ポール　R.　716, 720

ケ

ケアリ(Carey), ウイリアム　6
ケルカー(Kelker), フレッド　416
ケルカー(Kelker), メアリー　A.　157, 159, 186, 226-8, 413, 416
ケルカー(Kelker), ルドルフ　F.　82, 107, 145, 153-4, 157-8, 173, 183, 185, 202-5, 208, 209, 226-8, 246, 271-5, 413, 416
ケルシェンシュタイナー(Kerschensteiner),

ゲオルグ　475
ゲーテ(Goethe), ヨハン　W.v.　537
ゲッツ(Getz), ビアス　A.　589
ゲルハート(Gerhart), エマヌェル　V.　94
ゲルハート(Gerhart), R.L.　294
ゲルハード(Gerhard), ポール　L.　330, 370, 561, 578
ゲルハード(Gerhard), マリー　A.　409, 552, 561, 578
ゲンザー　520

コ

コーチ(Coci), クレア　795
コート(Cort), H.　720
コート(Cort), サイラス　115-6
コート→プールボー, エリザベス　R.
コールベー　521
小泉はる→磯村はる
郷司　慥爾　466
神館　雅子　794
甲原　　一　718
國領　知→鈴木　知
小崎　弘道　103, 327, 460
小関ゆたか　750
小平　小雪　234, 236-9, 249-50, 300, 747-8
小館　赤子　522, 524
後藤　由夫　740
小西　うた　522
小林　義一　632, 643
小林小太郎　30
小林瀧太郎　57
小林婦美子　521
小林　　盈　430, 449
小林　義則　444-5, 447-8
小槍山綾子　785
小松　哲文　714
小松原英太郎　423, 430
コリッジ(Colledge), トーマス　R.　33
コルネリウス(Cornerious)　527
今野あさの　521
今野　うめ　525
今野恒四郎　600, 644, 650, 659
紺野やす子　794
ゴーブル(Goble), ジョナサン　15
ゴーベル(Gobel)　773
ゴールドストリーム(Goldstream)　215
後関　菊野　448-9
コルドン(Gordon), ピーター　11

サ

サールダ(Sarda), ポール　204-5
蔡　　高　20
佐伯　いと　773
佐伯　きん　521-4
佐伯　晴郎　631
佐伯ますえ　522
佐伯　陽一　259, 263, 272, 281-2, 284, 298, 307, 312-3, 329, 550, 750
斎藤　　昭　605
斎藤　セツ　808
斎藤　てる　600, 783, 786, 789, 796
斎藤てる子　530
斎藤秀三郎　134, 152, 429, 443, 445-6, 448
斎藤　ふみ　546
斎藤冬(お冬, 冬子)　152, 188, 234, 236-9, 245, 250, 300, 747-8
斎藤　正人　367-8, 385, 388
斎藤　松枝　794
斎藤　　實　599-60
斎藤　　裕　761
斎藤　由貴　715
斎藤　よし　761
サイプル(Seiple), ウイリアム　G.　314, 409, 441, 483
サイプル(Seiple), フロレンス　L.　409, 439, 546
酒井　勝軍　292
酒井(森)かの　301, 319
坂崎直行(成正, 出羽守)　577
阪田　勝三　582, 599-600, 615, 621
佐方　鎮子　430, 448-9
坂本喜久子　792
坂本　龍馬　102
桜井　重秀　621
桜庭　正堂　605
佐久間左馬太　211, 213
佐久間静子　522
佐久間美子　522
笹尾(安部)やす　301, 319, 774
佐々木純一　292
佐々木スエノ　524
佐々木統一郎　585
佐々木(加藤)とも　315
佐々城豊寿　250

佐々木正利　717
佐々木宗生　724
雀部　顕宜　535
笹戸千津子　724
佐竹　義輔　706
佐藤あい(アイ)　528, 534-5
佐藤　章雄　724
佐藤いき→大原いき
佐藤　今　530
佐藤　かつ　528, 599-600, 783, 791, 796
佐藤　きそ　393
佐藤こと→高橋こと
佐藤　重松　292
佐藤　昌介　628
佐藤　輔子　628
佐藤　すゞ　535
佐藤　球　429, 443-5, 447-8
佐藤　忠良　724-5
佐藤ちよ→佐柳ちよ
佐藤　庸男　292
佐藤　てい　523
佐藤(宇田)まさ　399, 411-2, 417, 521, 550, 628, 746, 756-7, 792-3
佐藤　昌彦　628, 792-3
佐藤　よし　525
佐藤　淑子　772
佐藤　利吉　599, 621-2, 628, 631, 639, 642-3, 659, 720, 788, 793, 797
里見　良顕　360, 501
里見よろし　417
佐屋　重光　55-6
佐柳(佐藤)ちよ(千代)　305, 763-4
佐波　亘　466
サリヴァン(Sullivan), アーサー　S.　528
澤口　かつ　530
澤柳政太郎　439
三條　実美　56
ザーフルー→ズーフル

シ

シーモア(Seymoar), イルシー　J.　522
シアース　429, 443, 445
シェーンシュテット(Schönstedt), A.　602
シェーンバーガー, アンナ
→シュネーダー, アンナ
塩小路光実　56
塩津　哲生　724
塩谷　良翰　134
志賀　イチ　425, 441
志田　寿之　292
シップル(Sipple), エドナ　M.　588, 590, 599, 736, 803
篠崎桂之助　24, 26, 52
篠田勝太郎　658-9
柴田トシ→山際トシ
柴原　和　282
澁木みよし　294
澁谷徳三郎　546
島末三(史也)　571, 577, 592, 599-600
島崎春樹(藤村)　628, 647, 805
島田　三郎　272
島貫兵太夫　101
島野　武　643
島本　久恵　235, 240
清水　アイ　546
清水　しづ　294
清水　二郎　628-32, 634, 636, 639-40, 658, 672, 795-7, 804
志茂　きく　75-6, 136
シモンズ(Simmons), ドゥウェイン　B.　17
シャフナー(Shaffner)　601
シャミナーデ(Chaminade), セシル　535
シャルベンカ(Scharwenka), クサヴァー　535
シューベルト(Schubert), フランツ　P.　535, 641, 648
シュテッカー, ウォルフガング　603
シュナイダー(Schneider), ベンジャミン　82
シュネーダー(Schneder), アンナ　M.(シェーンバーガー)　201, 263-4, 339, 342, 527, 751
シュネーダー(Schneder), デーヴィッド　B.　29, 61, 72, 94, 128, 201, 205, 212-3, 251, 258, 261, 263, 290, 296, 298, 312-3, 330-1, 338-9, 341-4, 354, 365, 367, 370, 377, 395-6, 439, 463, 478-9, 487, 500, 535, 764
シュネーダー(Schneder), メアリ　E.　500, 550, 762
シュピタール(Spital), ジェイムズ　33
シュレーヤー(Schroer)　782
シュラッター(Schlatter), ミカエル　81

荘子　きく　388
庄司　知子　600, 783, 786, 791
庄子　泰子　803, 807
庄村助右エ門　37
ショパン(Chopin), フレデリィック　F.　535-6
ショルツ(シューツ), アンナ　G.　441
白金繁三郎　55
シンプソン(Simpson), R.　215
ジッフ(Ziph), エリノア　J.　579
十文字信介　170
條ふみゑ(フミエ)　523-4, 526, 528
城　康次　292
ジョーンズ(Jones), E.　176
ジョーンズ(Jones), スタンレー　590, 786
ジョオンズ　13
ジョンストン(Johnston), トーマス　S.　82, 93, 96, 106, 108, 110-2, 114, 118, 123, 125, 127-8, 138, 143, 145-6, 151, 153, 156, 161-4, 175-6, 179-80, 182, 187, 272

ス

末包　一夫　585, 586, 775
陶山　昶　42, 44, 46, 49-50
スカイラー　439
菅井　文章　550
菅井文五郎　520
菅井　りう　522, 524-5, 540
菅谷軍次郎　582
菅田勇太郎　195, 212
杉山　すて　523-4
スコット(Scott), ウォルター　420
鈴木　玖磨　784
鈴木コウ(カウ)　521, 523-4
鈴木さく→平野さく
鈴木　さだ　550
鈴本　正吉　402
鈴木　せつ　522
鈴木　千代　530
鈴木　てる　529-30
鈴木(國領)知　718, 799
鈴木虎之進　424, 441, 502, 523, 530, 546, 757, 762, 773
鈴木房太郎　582, 600, 608
鈴木　正子　525
鈴木みゆき(ミユキ)　523-4
鈴木モトヨ　770
鈴木　ユキ　526
鈴谷　輝秋　634
須藤　鬼一　293
須藤　その　195
須藤和四郎(貴郎)　293
首藤　陸三　160-1, 165-6, 168, 190-2, 211, 213, 218, 263, 279, 284, 454, 547, 747-8
スティック(Stick), ジェイコブ　M.　409
ストロング(Strong), ウィリアム　E.　465
スナイダー(Snyder), M. アリス　297, 330
スナイダー(Snyder), シルヴァナス　S.　330-1
砂澤たかみ　522
スピークル　535
スミス(Smith), ピントン　260
住谷　悦治　799-800
諏訪根自子　572
スワルツ(Swartz)　286
スワンダー(Swander), サラ　E.　273
スワンダー(Swander), ジョン　I.　196, 273, 356
スワンダー(Swander), ネヴィン　A.　273
スワンダー(Swander), バーバラ　K.　201, 213, 273, 356
ズーフル(Zurfluh), レナ　285, 296-8, 303, 307-11, 313-4, 316, 319-20, 328-32, 336, 338, 352-3, 355, 357-8, 360-73, 377-9, 383-5, 386, 387-8, 392-5, 397, 399-400, 402, 404-9, 412, 461-3, 479, 495, 500, 546-8, 749-50

セ

清野　貞代　797, 799
清野　鉄雄　718
関口　その　337
関屋ゆき→武藤ゆき
瀬戸　堯子　621, 789, 792, 795, 803, 807
千賀　よし　293
ゼール(Seel), リヒャルト　373

ソ

相馬(星)良(黒光)　234, 235, 240, 248-50

副島　ノブ　780, 793
添田みつえ　530
園田　金之　460

タ

田内　ヨウ　424, 440-1
大黒　なよ　368, 385
高木　貞治　430
高木　尚介　523
高木　らん　294
高久敏子→丸山敏子
高篠　あい　780
高島嘉右衛門　23
高谷　道男　62
高梨　光　628, 794
高根　幸寛　56-8
高野　伸二　714
上遠野たつの　352
高野譲(長英)　12
高橋伊奈代　521
高橋源次郎　599-600
高橋(佐藤)こと(こと子)　315, 398-9, 411
高橋　力　718
高橋　とき　599, 769, 787, 796, 799, 801, 807
高橋とみえ　718, 720
高橋なみ→川添なみ
高橋　ノブ　526
宝田　愛　136
田川大吉郎　545-6
田川　基二　675, 706
滝口(今泉)篤子　528, 530, 631, 746, 789-90, 792-5, 797-9, 801, 803, 807
滝口みか子　750
滝澤興邦(馬琴)　304
武田愛(愛子)　789, 793, 797
武田　かね　258-60, 262, 749
武田　清子　630
武田文太夫　222
武知武右衛門　30
竹中　久　546, 763, 773
竹内せき→岸波せき
竹内　てる　293
竹森満佐一　644, 802
田代進四郎　439
多田　三郎　585
橘　りん　715
館岡　剛　546, 773, 816
田中　千枝　528-30
田中やへ(八重)　522-6, 757
田中　従夫　621
田邊　繁久　166, 174, 190, 747
田邊　輝實　360, 362
田邊　ひさ　425
谷口隆之助　599
谷津　やす　356, 358-9
田原　米子　808
田畑　たか　293, 298-9
田村　兼哉　292
田村たみ子(たみ)　293, 297-8, 310, 745, 746, 748
タムソン(Thompson), ディヴィット　26, 271
太斎はる子　599
ダッフ(Duff), アレキサンダー　7
伊達　邦宗　333, 439
ダラス(Dallas), チャールズ　H.　31
ダン(Dunn), ディヴィット　465

チ

千頭　清臣　329
千田　ふみ　718, 791, 797-8
千葉　亀雄　486
千葉卓三郎　312
千葉　まさ　758
千葉　よし　525

ツ

ツァウグ(Zaugg), ニーナ　C.　462
ツィーゲンバルク(Ziegenbalg), バルトロメウス　6
辻　久子　572
辻　宏　603
津田　淳　622
津田　梅子　272, 454
津田　まつ　319
筒井　千吾　424, 441, 550
土井照子(てる, 照)　522, 528, 530, 763
土井　信子　522, 530
土井　八枝　569, 578, 769, 772
土井林吉(晩翠)　304, 526, 532, 546, 573, 584, 763
土田　熊治　292

椿　多摩　599, 795

テ

テイラー(Taylor), H.F.L.　61
テイラー(Taylor), ジェイムス　H.(蔵雅各)　10
テイラー(Taylor), S.J.　270
手島(嶋)ちか　368, 386, 753
鉄本きつよ　393
寺内　小春　715
寺田　祐之　417, 422, 433, 439, 455, 500
ディケンズ(Dikens), チャールズ　J.H.　267
デニング　(Dening), ウオルター　749
デフォレスト(DeForest), ジョン　H.　176, 178, 319
デフォレスト(DeForest), C.B.　330
出村悌三郎　292, 403-4, 546, 561
デューイ(Dewey), ジョン　475

ト

徳川　家康　3
徳川　吉宗　129
徳富健次郎(蘆花)　304
戸部　和子　802
富井　於菟　272
富沢　政一　599
富田鉄之助　176-8
トムソン(Thomson), バーンズ　62, 70
友枝　昭世　724
虎岩　千代　787
虎川　清子　807
トルーマン(Truman), ハリィ　S.　580
堂本(宇野)まつえ(しげ)　174, 189, 194-5
土橋　コウ　600
ドヴォルザーク(Dvorák), A.　718
ドリング(Dring), A.D.　181

ナ

ナウ, カサリン　L.　528, 533
中川　つる　302, 357, 360
中川　仙吉　520
中川トシヲ　524
中川　秀恭　645-6
中川よしを　530
中島　下枝　599
中島　慶治　770, 780
中島　てる　754, 756, 770
中島(岸田)俊子(湘煙)　102-3, 282-3
中島　信行　102-3, 239, 282
中田　羽後　476
中田　重治　476
中坪　希代　761
中目　きみ　535
中村きくよ(キク代, きく代)　522-4, 528-30, 550
中村きよの→大井きよの
中村　隆　586
中村(中山)たけ(タケ)　293, 301, 309, 319, 360
中村　忠篤　424, 440-1, 550
中村　忠治　401
中村長之助　292, 353
中村　まつ　411, 425, 438, 441, 753
中村有平次　30
中村　義策　550
中山　新子　795
中山　節子　722, 805
中山たけ→中村たけ
長倉　冬　770
永澤(氏家)いし　388
長池　博子　586
永島　和子　521, 525, 528, 530
永嶋(布施)てる　293, 301, 311
永島とうぞう　292
永嶋　宏寿　634
永沼織之丞(織之允, 柏堂)　302, 311-2, 315, 360, 368, 385, 441, 550
長野千代世　522
夏目金之助(漱石)　304, 582
成田さかえ　522
南條　和子　600, 621, 783, 786, 791, 798

ニ

ニーバー(Niebuhr), ラインホールド　582
新島　襄　28, 176-9
新妻　歌子　521
新妻　源助　384, 406, 409
新妻興左衛門　54, 61
二階堂清壽　546
錦戸　鶴代　337
西澤俊李子　722, 807
西淵　さだ　522, 528
西山　真　561-3, 570-1, 576-8, 580, 582,

584, 588-90, 593-4, 597, 610, 746, 765, 769, 773, 778, 781, 784-5
新國　てる　521
仁村　守三　25
ニューゼント(Nugent), ドナルド　576

ネ

ネフ(Neff), アルマ　C.　544
根本　和子　530

ノ

ノーサップ(Northup), ロバート　W.　716
ノックス(Knox), ジョン　73, 123
ノッス(Noss), クリストファー　C.　330-1, 463, 465, 479
ノッス(Noss), ヂョージ　S.　435, 570
野村　万作　724

ハ

芳賀あさの　761
萩原信行(金太郎)　61, 292
橋本　只子　30, 284
橋本　經光　168, 284, 298, 328, 365-6, 376-7, 393, 547
橋本昌之(宅次)30, 284, 377
橋本　昌行　30
橋本みさ→阿部みさ
長谷川喜多子　550, 750
長谷川キミ　775
長谷川清子　763
長谷川精一　622
長谷川　直　360
長谷川とく　784
長谷川とみ　550
長谷川なを　313
長谷川英敏　643, 650
長谷場純孝　439
畠山千代子　528
蜂谷　正毅　803
服部　綾雄　454
服部　文子　780
土生　慶子　795
濱　幸次郎　430, 444, 447
濱田恒之助　521
早川　京子　156
早川　智寛　439
早坂　一郎　561
早坂　哲郎　193, 207, 222, 299, 302, 306, 328-30, 337, 340, 343-4, 353, 358-61, 365, 367-8, 383-4, 393, 395, 397, 399-400, 403, 406, 409, 412-3, 415-7, 421, 424, 438, 440, 460, 493, 500-1, 502, 508-9, 520, 535, 546, 548, 639, 750, 754, 756, 764
早坂　禮吾　639-40, 642-4, 647, 661, 716, 718, 801, 804-9
林　　斌　582, 600
林　　秀光　723, 804
林　　松子　795-6, 798-9, 803, 807
原阿佐緒(あさを)　415, 420-1
原田ことぢ　308, 331, 403-4, 421, 424, 438, 440, 454, 492, 508, 524, 534, 546, 569, 571, 746, 757, 759-62, 764-5, 769, 773
原田　庄蔵　12
ハリス(Harris), タウンゼント　15-6
針生　龍子　808
ハロウェル(Hollowell), メアリー　C.　231, 246, 254-5, 258, 284, 286, 294-6, 308, 313, 316, 320, 330, 463, 749-50
ハン　535
半澤　正朔　520
ハンセン(Hansen), ケート　I.　314, 387, 404-5, 409, 411, 421, 424, 438, 441, 459, 462, 493, 502, 508, 520-2, 540, 546, 561, 563, 569, 578, 582, 590, 600, 601, 640, 650, 720, 753, 757, 761, 764-5, 771, 779-83, 787, 790, 804, 806, 808
飯田　通子　794
ハンディサイド(Handyside), ピーター　36
バーソロミュー(Bartholomew), アレン　R.　338, 341, 344, 346, 353, 355, 361-2, 371, 373-4, 378-9, 402, 413, 416-7, 419, 421, 432, 461-2, 464, 519, 753
バーンズ　429, 446-8
バッハ(Bach), ヨハン　S.　631, 642-3, 718, 720

バテステ(Buttstett), F.V. 522
バラ(Ballagh), ジェイムズ H. 17, 23-6, 29, 32, 51, 81, 119-21, 144, 150, 166, 312
バラ(Ballagh), ジョン 23, 312
バルト(Barth), カール 582
バーウィル(バウィル)→ボーウェル
バーカー(Parker), ピーター(伯駕) 9, 12-13, 32-3
バーカスト(Parkhurst), ヘレン H. 475
バーム(Palm), アリス 38
バーム(Palm), ウィリアム S. 38
バーム(Palm), エマ 38
バーム(Palm), ジョン D. *Jr.* 37-8
バーム(Palm), ジョン D. *Sr.* 37
バーム(Palm), セオボールド A. 26, 28-9, 32, 37-44, 45, 46-62, 65-8, 70-9, 214-6, 463
バーム(Palm), ヒラリー 38
バーム(Palm), メアリー 40, 42-7, 69, 71, 74
バーム(Palm), ロイド 38
パイファー(Pifer), キャザリン B. 336, 344, 353
パイファー(Pifer), P.C. 339, 365, 367-8, 750
パイパー(Piper), ジョン 46

ヒ

ヒーシング, エデス H. 789
光 静枝 750
樋口奈津(一葉) 304
人見 亀司 272
人見(稲垣)ぎん(秋香) 156-7, 174-5, 191-3, 195, 200, 222, 224, 271-2
日野 綾子 647
日野 だい 293, 297-8
平島 正郎 622
平塚 益徳 467
平野(鈴木)さく(策子) 293, 300, 303, 309
平野 仲子 550
平山(早坂)のぶ(信子) 314, 368, 370, 390, 578, 598, 622, 640, 763, 769-70, 780, 783, 786
平渡 つね 384
廣岡 いと 417
廣田 友子 550
比屋根安定 466
ヒューイット(Hewitt), A. 259
ヒュースケン(Heusken), ヘンリィ C.J. 15
ビッドル(Biddle), ジェイムズ 13
ピーター(Peter), ジョン A. 127
ピット(Pitt), エンマ 270

フ

ファウスト(Faust), アレン K. 339, 341-2, 355, 365, 370, 383, 435, 439, 477, 479, 483, 484-9, 491, 492, 495, 500-1, 508-9, 519-21, 523, 527, 529, 533-4, 537-9, 546, 548, 553-4, 587, 755, 759-60, 772-3
ファウスト(Faust), クリスティン E.V. 341, 344, 354-5, 364-7, 373-4, 478-9, 488, 491-2
ファウスト(Faust), メアリ E.M. 488
ファウスト(Faust), L. 527
ファウスト(Faust), リチャード 488, 492, 527
ファウスト(Faust), ロイド 488
フィルモア(Fillmore), ミラード 13
フェリス(Ferris), ジョン M. 52, 82
深田 寛 645
深田 康守 302, 360, 368, 385, 413, 429, 441, 550
福井 喜江 719, 745, 766, 792-3, 795, 797, 801, 803, 805, 807-9
福井 こう 522
福来(町田)辰 234, 236, 238-9, 250, 747-8
福澤 泰子 521
福原鎌二郎 521
冨士 すへ 550
藤生 金六 32, 165-6, 183, 238, 246, 249, 259, 263-4, 272, 275, 284, 300, 376, 547, 747
藤岡作太郎 429
藤崎祐之助 401
藤田兵太郎 292
布施 淡 360, 550
布施梯次郎 776
布施てる→永嶋てる
布田 庸子 717, 807

船木　フキ　789, 792
船越　衛　206, 262-3
船坂(佐伯)きみ　758, 769, 773
フランケ(Francke), アウグスト　H.　6
フランシスカス(Franciscus), S.D.　20, 464
古内よし子　527
フルベッキ(Verbeck), ギドー　H.F.　17, 26, 95, 137, 158, 166
古谷　辰三　585-6, 599
古山すみえ　530
ブース(Booth), ユージン　S.　250, 274
ブラームス(Brahmus), ヨハネス　258, 527, 535, 717
ブラウン(Brown), サミュエル　R.　17, 25, 26, 29, 32, 51-3, 62, 80-1, 95, 121
ブラックリイ(Blockley)　259
ブリック, オリィ(オルリー), A.　441, 508
ブロッホ(Bloch), ヨーゼフ　627, 790
プーランク(Poulenc), フランシス　804
プールボー(Poorbaugh), アニー　M.　154, 271
プールボー(Poorbaugh), エリザベス(リズィー), R.　110, 112-8, 147-8, 152-3, 155-8, 161, 163-4, 166-70, 172-7, 179-80, 182-5, 188-9, 192-3, 195-201, 203-11, 213, 216, 222-6, 228, 230-4, 236-7, 240-1, 246-53, 255-7, 260-75, 279, 283-4, 287-8, 294-5, 300, 439, 463-4, 479, 547-8, 550, 552, 593, 616, 720, 747-8, 810
プールボー(Poorbaugh), エンマ　F.　193, 201, 205, 207, 210, 222-4, 251-2, 255, 259, 261, 263-5, 267-70, 275, 283-4, 547, 749
プールボー(Poorbaugh), キャザリン(キティ)　116-7, 153, 156-7, 253, 260-1, 263, 269-70, 283-4, 552
プールボー(Poorbaugh), ジョサイア　113, 275
プールボー(Poorbaugh), ヘンリー　K.　115-6
プールボー(Poorbaugh), マーガレット　E.　113
プチャーチン(Putyatin), Evfimii V.　15
プリュッチャウ(Plütschau), ハインリッヒ　6
プリングル(Pringle)　215
プローティ(プラット)　789

へ

ヘールド　135
ヘボン(Hepburn), ジェームズ　C.　17, 26, 37, 39-42, 45, 95
ヘラー(Heller), A.J.　270
ヘンデル(Händel), ジョージ　F.　522, 534, 536
ベートーヴェン(Beethoven), ルードウィッヒ　v.　259, 534-5
ベールズ(Bales), D.　720, 806
ペリー(Perry), マシュー　C.　13-6, 36
ペルビー　546
ペンニー(Penny)　135

ホ

ホーイ(Hoy), ウィリアム　E.　26, 28-30, 47, 54, 80, 117-9, 123, 124, 125-8, 143-6, 148-9, 151-2, 156, 159-60, 162, 165-6, 177, 179, 181-3, 187-8, 191, 197-202, 205, 217-8, 251, 261, 263, 272-4, 283, 287-8, 296, 329-31, 376-7, 404, 463, 547, 593, 747
ホーイ(Hoy), エリザベス　G.　126
ホーイ(Hoy), ガートルード　B.　579, 592-3
ホーイ(Hoy), ジョーナス　126
ホーイ(Hoy, 旧姓オールト Ault), メアリ　B.　110, 112-4, 116-8, 147-8, 152-3, 155-7, 161, 166-70, 173-5, 177, 179-93, 197-205, 213, 224, 258, 263-4, 271-4, 287-8, 290, 293, 329-30, 377, 463-4, 535, 547, 552, 593, 616, 747-8, 751, 758, 810
ホール(Hall), C. カスバート　396
ホーン(Horn)　527
朴澤三代治　273
細谷　えん　529-30
ホヂソン(Hodgson)　550

堀田要三郎　430, 446
ホファイン(Hoffein), ベティー　J.　579
ホファインズ　153
堀内キミ子　524
本多光太郎　460
本多　繁　599, 605
本多　庸一　27, 327, 473, 599
本間　敏夫　740
ボリガー(Bolliger), ルイーズ　A.　550
ポーウェル(Powell), ルーシー　M.
303-4, 331-2, 339, 342, 344-5, 348, 350, 352-3, 358, 363-4, 366-8, 371, 378, 386, 394, 397, 402, 404, 407, 409, 461, 463, 479, 750
ポーター(Porter), エリノア　F.　578

マ

マーシュマン(Marshman), ジョシュア(馬士曼)　8
マーデン(Marden), メアリ　E.　478
マートリィー(Murtrie), W.M.　215
前島(佐藤)きそ　337-8, 368-9, 390, 393, 535, 751, 761
前田幸市郎　631
前田　治郎　292
前田まつゑ　315
牧野富太郎　706
槇山　榮次　430, 448-9
マクドナルド(Macdonald), A.キャロライン　398
増子わくり　521, 528
枡　よう　525
町田　辰→福来　辰
松尾　光章　634
松岡ひさよ　315
マッカーサー(MacArthur), ダグラス　580
松倉　恂　176, 397
マッサー, クララ　424
松崎　檗　582, 628, 632, 640, 648, 653, 659, 662
松澤よし子　535
松島　いと　527
松平　定信　129
松平　正直　3, 168-9, 178-9, 186, 211, 213, 359, 454, 501, 547
松原　卯平　520
松原　茂　603
松村(石川)梅代　234, 236, 238-9, 245, 250, 747-8
松村　介石　250, 748
松村としぢ　522-4, 526
松本　静夫　634
松本治三郎　601
曲直瀬雪江　156, 159, 175, 191-3, 200, 749
眞船　豊　577
馬淵　康平　723
眞山たつよ　315
眞山　れい　393
丸岡　眞　633-4
マルチェルロ(Marcello), ベネディット　718
丸山(高久)敏子　571, 599, 621, 746, 751, 769, 773-7, 780-1, 783, 785, 789-90, 793-4, 796-7

ミ

三浦　綾子　787
三浦忠之丞　403-4, 424, 440, 546, 757
三浦まさ子　792
ミカエリウス(Michaelius), ヨーナス　80
三笠宮崇仁　645-6
見沢昭子→小野昭子
箕作　元八　429, 447, 449
箕作　秋坪　31
三塚　博　643
水谷惣五郎　46, 49-50, 71
水谷てつ子(おてつ, 鉄子)44, 46, 49-50, 52-3, 69, 71, 74-6
水野　幸子　794
三矢　英松　546
南浦千鶴子　761
ミヌート(Minuit), ピーター　80
峯岸はつえ　530
宮崎　彰　631, 634
宮澤きよし　315
宮澤　賢治　800
宮本武之助　627
宮本みさ子　222
宮本むら→吉村むら
ミュラー(Müller)　521
三好　愛吉　461
ミラー(Miller), サラ　S.　409
ミラー(Miller), ヘンリー　K.　61, 258,

261, 263, 268, 280-2, 286, 296, 330, 370, 383, 391, 407-12, 439, 462-3, 465, 479, 500, 519, 548, 550, 752
ミルン(Milne), ウィリアム(米雄) 8-9

ム

陸奥 宗光 323
武藤 富男 466
武藤(關屋)ゆき(お雪, 雪子) 174, 189, 193-4, 258-9, 262, 272, 299, 747-9, 755-6, 781, 785
村上(池田)あや(ちん) 420-1, 748, 751-2, 774, 799-800
村上 兵助 384, 424, 441, 508, 519-21, 523, 578, 598, 622, 773
村上 みや 600
村瀬うめ子 755-6, 794
村田 若狭 37
村松福美子 521

メ

メーテルリンク(Maeterlinck), モーリス 589
メイン(Main), ダンカン 35
メドハースト(Medhurst), ウォルター H. (麥都思) 8-9, 11-2
メレディス(Meredith), ジョージ 582
メンデルスゾーン(Mendelssohn), アーノルド 535, 545

モ

モーツァルト(Mozart), ウォルフガング A. 528, 717
モール(Moore), アンナ M.A. 85, 92-4, 97-98, 99, 100-3, 107-8, 155, 158-9, 195, 257, 279, 283, 285-6, 289, 311, 329, 354, 463
モール(Moore), ジャイラス P. 84-5, 92-8, 100-3, 108, 118-9, 128, 137-8, 143-9, 151, 155-6, 158-9, 165-6, 179, 181-2, 184, 186, 196, 217, 256-7, 279-87, 296, 300, 311-2, 329-30, 354, 359, 361, 370, 376-7, 392, 438, 463, 465, 479, 547-8, 550, 747
モギレフスキー(Mogilevskii), アレクサンドル 572
モシェコフスキー(Moszkowski), モーリツ 259
持館 ふゆ 357, 368-9, 387, 393
モファット(Moffat), ロバート 7
森 明 629
森 有禮 131, 218
森 有正 627
森 岩太郎 444-6
森 かの→酒井かの
モリソン(Morrison), ロバート(馬礼遜) 7-9, 12, 20
森 正 717
森 正隆 461
森 まつ→加藤まつ
森下金二郎 571-4, 582, 599-600, 607, 621-2, 640, 800, 806
森平 てる 757
森本 薫 579
モルレー(Murray), デービット 130
モロイ(Molloy) 259
諸石 靖 576, 578
諸根 武雄 546, 571-2
門馬 貞子 521
門馬 陽子 722

ヤ

八木橋なみ→川添なみ
八木沼 節 535
矢嶋 楫子 436-7, 439
谷津 やす 755-6
矢内原忠雄 35
矢野猪三郎 292, 460
矢野きよせ 538, 757, 760-1, 763
矢野 貫城 576-8, 581, 582, 598, 614, 622, 771, 787
矢野 元隆 37
山内 才治 575
山浦 仁 522
山浦 ヤイ 789
山岡高歩(鉄舟) 102
山形 孝夫 622, 631, 635, 648, 719
山際(吾妻)トシ 634, 768, 791, 797-8
山崎 直方 429, 449
山下 廉 308, 311, 377, 550
山路とし子 535

山田　揆一　521
山田　恵子　722
山田　　操　535, 775, 791
山中　しづ　778
山永　武雄　588
山梨勝之進　179
山内　　忠　631, 722
山室　軍兵　460, 473
山本音吉(乙吉)　12
山本　澄子　20
山本壯一郎　643
山本　尚忠　631, 642-3, 718
山本　秀煌　32, 466
山本みさほ　417, 425, 438, 441
山本勇造(有三)　577
ヤンゲン(Youngen), オードレ　A.　579

ユ

湯村　良一　586

ヨ

横井　時夫　376
横尾　東作　134, 152
横山　　覚　78
横山　芳夫　656
吉田　榮作　54, 61
吉田亀太郎　26, 29, 47, 54, 55-62, 65-8, 71-80, 121, 136, 175, 467, 547, 550
吉田兼三郎　287
吉田　　榮　62, 136, 293, 467
吉田　さわ　54, 61
吉田　てる　195, 311, 319, 360, 369, 386, 550
吉田　信好　25, 31-2
吉田　藤枝　403, 417, 438, 441
吉田(石黒)まち子　74-6
吉田みさを　287-91, 311
吉田見知子　799
吉田　雄吉　54-55, 61
吉永久志馬　292
吉野　作造　473
吉村　末吉　365-6
吉村　忠孝　656
吉村(宮本)むら　225-6, 258-9, 262, 281, 293, 319, 360, 550, 747, 749, 796

ラ

ライス(Rice), ジェー　311
ライダル, マリー→レイダル, マリー
ラインバッハ(Leinbach), チャールズ　H.　83
ラウファー(Lauffer), I.　292
ラップ(Rupp), W.　113, 544
ラトキン(Lutkin), ピーター　718, 720
ラファイエット(LaFayette), マリー　J.　4
ラマーズ(Lammers), マーサ　L.　579
ランディス(Landis), ジャネル　J.　648, 797
ランペ(Lampe), ウィリアム　E.　331, 365, 367, 372, 373-4, 376, 397, 463, 479

リ

リーダー, マーガレット　J.　441, 508
リーバー(Reber), J.C.　292
リヴィングストン(Livingston), デーヴィト　7
リオン(Lyon), メアリ　M.　274
リガレー　549
リギンズ(Liggins), ジョン　17
リスト(Liszt), フランツ　v.　535, 648, 717
リッドル(Riddle)　135
リッベイ(Libbey), S.　720
リンゼイ(Lindsay), リディア　A.　314, 386, 404-5, 409, 424, 441, 493, 502, 508, 523-4, 529, 546, 561, 563, 569, 578, 582, 590, 600-1, 640, 753, 758, 761, 764-5, 771, 779-83, 787, 790, 804, 808
リンゼイ(Lindsay), ローラ　522

ル

ルーミス(Loomis), ヘンリー　32
ルーズヴェルト(Roosevelt), セオドール　395-6
ルービイ(Roubie)　259
ルイ(Louis), XVI　4

レ

レイダル(Leidal, ライダル)マリー　544, 557

レイノルズ(Reynolds), サラ　A. 293, 298
レイン(Rein), マーサ　M. 579
レンベルガー(Lemberger), ジョセフ　L. 331, 345-6, 378

ロ

ロート, ジョルズ　650
ロールボー(Rohrbaugh), リリー　M. 313, 328-31, 360, 463
ロウ(Lowe), ジョン　46, 215-6
六波羅奎太郎　550
ロス(Ross), ジョン　11
ロニー(Roney), リズイー　M. 293, 309
ロングフェロー(Longfellow), ヘンリイ　W. 259

ワ

ワーグナー(Wagner), サムエル　G. 152
ワイコッフ(Wyckoff), マーチン　N. 32, 47-8
ワイザー(Weiser), クレメント　Z. 213
ワイドナー(Weidner), セディー　L. 287, 305, 331-3, 335-6, 338-9, 341-7, 351-3, 356, 358, 362-5, 367-8, 370-1, 378-9, 383, 386, 387, 391, 397, 402, 404, 407, 409, 411-8, 420-3, 431-3, 435-8, 440, 455, 461-3, 479, 495, 500-2, 520, 546, 548, 750, 752-5, 757, 760, 764
若月保治(紫蘭)　589
我妻さだ子　491
渡邊いち子　530
渡邊定静(巌山)　12
渡辺　秀尾　757
渡邊　弘道　599, 621, 623, 625, 628, 644, 649, 659, 719, 794, 802, 808
渡辺美佐子　648, 804
渡邊三千代　524, 528-9
渡部　あや　528
渡部ジュディス　717, 807
和田　英子　808
和田　富起　762
和達　孚嘉　211, 213, 405-6, 417
ワトソン(Watson)　61

『天にみ栄え―宮城学院の百年―』正誤表

頁	行	誤	正
三	三	内外基督信徒有志ノ	内外基督信徒有志者ノ
一七	三	締結の際の他にも	締結の際の活躍の他にも
三三	三～四	世界で最も…慈善心に富んだ贈り物	「世界で最も…慈善心に富んだ贈り物」
四二	一六	to recognise His voice	to recognise His voice
四三	一二	wished to realise	wished to realise
四四	九	here—he first	here—the first
五二	三	手紙よると、	手紙によると、
六二	一二	（S・R・ブラウン	「S・R・ブラウン
六六	一〇	視察しつ、	視察しつつ、
六九	一五	Oshikawa, on hin return	Oshikawa, on his return
六九	二二	living Nakajo;	living at Nakajo;
七四	二	満二十八才。	満二十八才、
八八	一〇	大事である。	大事であり、
一〇一	五	第一回卒業島貫	第一回卒業生島貫
一〇八	七	常置委員の各委員	常置委員会各委員
一一二	八	Kutztown Pa.	Kutztown, Pa.
一一四	一二	I've been	I've been
一一七	九	「小会」	「中会」
一一〇	五	Bro. Ballage	Bro. Ballagh
一一二	七	I would anser	I would answer
一一五	一一	excise of song.	exercise of song.

頁	行	誤	正
一三二	九	キリスト教学校	女子のキリスト教学校
一三二	一三	聖和女子大学	聖和大学
一三七	最終行	Jan. 17. 1883	Jan. 17, 1883
一三八	七	Rew. K. Ito	Rev. K. Ito
一三八	一一	Boasd	Board
一四七	一二	to receive I".	to receive !".
一四七	一二	It is happy	It is a happy
一四七	一七	intercourse with	intercourse with
一四九	一〇	同後の名称などに	合同後の名称などに
一五二	二～五	（斎藤は、… 斎藤冬である。）	［斎藤は、… 斎藤冬である。］
一五二	八	木町通り、北六番丁	木町通り・北六番丁
一五七	写真説明	上田教會列名傳	上田教會列名薄
一六六	一三	一八九一（明治二十一）年七月	一八八七（明治二十）年十月
一七一	上一六	平均教	平均数
一七七	一三	岩倉遣欧使節	岩倉遣欧使節
一八三	九	ケルカーに宛てしたため	ケルカーに宛ててしたためた
一八五	一八	Miss. Poorbaugh	Miss Poorbaugh
一九〇	一	Miyazi Jo Gakko	Miyagi Jo Gakko
一九〇	一	its session	its first session
一九一	一〇	Mary. B. Hoy.	Mary B. Hoy

頁	行	誤	正
一九三	一三	創立の常時は	創立の當時は
一九六	一五	教会員が献げくださって	教会員がお献げくださって
二一一	一三	Rev. Uyemura	Rev. Uyemura
二一一	一四	gentlemen	gentlemen
二一二	六	Rev. D.B. Schneder	Rev. D.B. Schneder
二一二	一五	Rev. Ibuka	Rev. Ibuka
二一五	八	answered by, that	answered by that
二一七	一三	we timmed it:	we trimmed it:
二一八	四	you could have beem	you could have been
二一八	六	Christmass	Christmas
二二二	下六	宮本みさ子	宮本みさ子
二二三	最終行	指導にもあった。	指導にもあたった。
二二四	九	満ちゝて	満ち〳〵て
二二四	一六	記事が記載された	記事が掲載された
二二五	二	'shanky',	'shaky',
二二七	七	Mr. R.E. Kelker	Mr. R.F. Kelker
二二七	七	of room	of the room
二三〇	一六	練達	練達
二三一	一	その頃、	これより先、
二三一	二	教員としてペンシルヴァニア州	教員として六月三日、ペンシルヴァニア州
二三一		prescribed	prescribed
二三一	一二	At tho close	At the close
二三一	一四	pertaining to	pertaining to
二三二	一七	the broad	the bread
二三二	六		

頁	行	誤	正
二三二	一八	Boards of trustees	Boards of Trustees
二三二	二一	an intollerable	an intolerable
二三六	一六	已に	已に
二三六	一八	わざゝ	わざ〳〵
二三七	二	少しその真相を	少しくその真相を
二三七	一四	已に	已に
二三八	二	取りなしして	取りなして
二三九	一三	敬處な	敬虔な
二四〇	二	オメ〳〵居残られ	オメ〳〵と居残られ
二四三	七	the boy' school	the boys' school
二四三	一三	expulision	expulsion
二四三	一四	ambitions	ambitious
二四三	一六	examination the	examination of the
二四七	一三	高給で転職し	高給で就職し
二五三	七	事であり、	年であり、
二五四	一	bedges	hedges
二六六	一六	"I am goiug	"I am going
二七〇	一七	languagewith	language with
二七〇	一八	the know ledge	the knowledge
二七〇	最終行	東京露月町教会「芝」	東京露月町教会（芝）
二七一	二三	「列名伝」	「列名簿」
二七三	四	フランクリン・アンドそ	フランクリン・アンド・
		マーシャル大学	マーシャル大学
	一九	of school	of the school
二八〇	最終行	Suzuki Saku san	Suzuki Saku San
二九三	一二	迷ったかも知れません。	迷ったか知れません。
三〇二			

頁	行	誤	正
三〇三	一一	寄宿生一同の此の	寄宿生一同此の
三〇三	二一	頂きながら	戴きながら
三〇四	一五	セニアに上がり	セニアに上り
三〇四	一六	心は一ぱいでした。	心は一っぱいでした。
三一五	七	訓戒され	訓誡され
三二五	一六	許可を取消されて	認可を取消されて
三三五	最終行	応援室	応接室
三四四	最終行	少なく済むこと、	少なくて済むこと、
三四六	一二	the best of circum-stances	the best of our circum-stances
三五二	一一	外国伝道局長	外国伝道局総幹事
三五五	最終行	十二名各位の	十二名位の
三五八	二	大勢ではありましたが、	大勢ではありませんでしたが、
三六〇	一四	永沼織之充	永沼織之允
三六四	二	神の御光栄	神の御栄光
三八六	一一	コッコッ〳〵	コツ〳〵
三八八	一八	頂いたか頂かないとかゞ	頂いたとか頂かないとかゞ
四〇二	三	「コーリア」号	「コリーア」号
四〇八	二	「コーリア」号	「コリーア」号
四一七	上八	勅語奉読	勅語捧読
四一九	上一	此度も基一例	此度も其一例
四二〇	一三	ここで校章や	ここで紹介するが、校章や
四二一	八	なりますます事でムいます。	なります事でムいます。

頁	行	誤	正
四二九	表	修身	修身教科書 一、
四三〇	表	理科	渥美鏡太郎
四三一	最終行	宮公立	宮公立
四三八	六	式次第	勅語奉讀
四四二	表	圖書	及川器書
四四五		地理	地理教授研実會
四四六		理科	渥美鏡太郎
四四六	最終行	定價金五錢会上	定價金五錢以上
四五〇	上一六	第一條	第十條
四五〇	下一三	本校職員卒業生ハ	本校職員及卒業生ハ
四五五	一	專攻科設置	專攻科設置
四五五	四	專攻科ヲ設置シ	專攻科ヲ設置シ
四五六	下四	外出平日ニアリテハ	外出ハ平日ニアリテハ
四五八	表	教育	一 教育ノ原理
四六四	一一	Book' for	Book for
四六四	一三	"The Nessenger	"The Messenger
四六四	一四	Church Nessenger	Church Messenger
四六六	三	宮城学學校	宮城女學校
四七三	一六	一九二〇（大正九年）	一九二〇（大正九）年
四七八	一三	諸方野にわたり	諸分野にわたり
五四四	七	援与された。	授与された。
五四五	四	教会の全員	教会の会員
五四五	五	経経的援助	経済的援助
五四九	上七	せん本日の	せん本日の
五四九	上一九	對す感謝と	對する感謝と
五五一	上一三	與へるものはと二人の	與へるものはお二人の

頁	行	誤	正
五五一	下一四	役等に	彼等に
五五二	下一五	生徒垂び	生徒及び
六一六	二	関係条約	関係条項
六二四	最終行	よるものであった、	よるものであった。
六二七	上九	東京神学大学学長	東京女子大学学長
六三四	一	食品加工建学について	食品加工見学について
六三四	一八	聖書研究会をも指導して、	聖書研究会をも励まして、
六四一	写真説明	さよなら二番丁校舎	さよなら三番丁校舎
六五一	一二	国有林野審議会	国有林野管理審議会
六五三	一六	人文学科	文化学科
六五六	三	地下公示制度	地価公示制度
六五八	一	七北田川広域下水計画	七北田川広域下水道計画
六五九	上一一	国有林管理審議会	国有林野管理審議会
六七〇	七	ことになる（図四）	ことになる。（図四）
六七五	三	起状にとんだ	起伏にとんだ
六七八	一四	ANGIOSPERMAE	ANGIOSPERMAE
		被子植物	被子植物
六八〇	四	カマツリグサ科	カヤツリグサ科
六八二	一三	DICOTYLEDONEAE	DICOTYLEDONEAE
		双子葉植物	双子葉植物
六八三	九	(Mig.)	(Miq.)
六九九	一四	spaphulata	spathulata
七〇一	一	vulgalis	vulgaris
七〇三	一	波をつったような	波をうったような
七〇五	一〇	県花に選がれている。	県花に選ばれている。

頁	行	誤	正
七一三	一一	結氷すると	結氷すると
七二八	一七	日本文学コース。	日本文学コース
七四六	写真説明	2年 昭二年十 昭43.3	2年 昭二年十 昭43.3
		～7.2	～7.2
七九一	一二	行行われたことは	行われたことは
八一九	図	⑭	⑮
八二九	図	⑮	⑭
八三七	中段	島 史也 中高	島 史也 中高・事
八五二	中段	斎藤珠江 事	斎藤珠江 大
八五六	一六	・江戸を東京と称す	・江戸を東京と称す
	九	・東北本線上野塩釜間開通	↓一八八七（明治二十）年へ移動
八六三	二三	・『死戦をこえて』	・『死線をこえて』
八六五	一八	・ヒットラー、ドイツ総統となる	↓一九三三（昭和八）年へ移動
八六七	一	・大日本帝国民服令公布	・大日本帝国国民服令公布
八七七	二四	・靖国神社国営法案採決	・衆議院内閣委靖国神社国営法案議決
八八〇	二四	・ロッキード事件	↓削除

『天にみ栄え　―宮城学院の百年―』正誤表（追記）

頁	行	誤	正
五〇〇	七	感	観
五六三	上一五	六十六才	六十六歳
五六三	八	もちました。（	もちました（
五六三	四	む）	む）。